イルファーラン物語

冬木洋子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イルファーラン物語

【Ｎコード】
Ｎ９９２５Ｉ

【作者名】
冬木洋子

【あらすじ】
羊飼いの若者アルファードは、ある日、少女を拾った。気を失って倒れていたその少女は異世界からの客人＜マレビト＞だった。牧歌的な山の村で、ふたりは兄妹のように共に暮らし始めるが――？
異世界に飛ばされた女子高生・里菜と、彼女を拾った若者との不器用でためらいがちな恋、そして里菜を花嫁にと望む黒衣の＜魔王＞との世界の存亡を賭した戦いを描く、王道志向の女子高生異世界召喚恋愛ファンタジー。【本編完結済】

序章

（――引用――）

劫初（ごうしょ）に、母なる『混沌』があった。

母なる『混沌』は、父なる『時』の精を受け、二柱の兄妹神を産み落した。

すなわち、昼と光、生命と成長とを司る女神エレオドリーナと、夜と闇、死と安息とを司る男神タナートである。

光と闇、昼と夜が生じた時、母なる『混沌』は死んだ。

そのなきがらは、三つに分かれ、天と地と、そして黄泉とになった。

女神と男神は、その地をイルファーランと名づけ、そこに生命を住まわせることにし、一日目には草や木を、二日目には虫を、三日目には魚、四日目には鳥、五日目には獣、六日目には人間、そして最後の七日目には妖精族を創造した。

すべての生命が、その内に死への定めを内包しているのは、それらが、ひとり生命の女神だけでなく、死の神と生命の女神の両者によって創りだされたものだからである。

生命の創造を終えると、神々は地上を離れ、女神エレオドリーナは天に、男神タナートは黄泉に住いを定めたが、同時に、それぞれの住いと地上とを結ぶ場として、地上に聖地を定めた。

女神エレオドリーナは、イルファーラン南部のエレオドラ山を聖地と定め、山頂に神殿を建てさせ、そこに降り立つときは、天とのあいだに虹の橋を架けた。

男神タナートは、北部のシルドーリン丘陵地帯を聖地と定めた。

シルドーリン丘陵では、最後に創造された種族である妖精たちが、山中を縦横に走る坑道のなかで、神代（かみよ）の宝玉シルドライトを採掘し、金属を鍛えて暮らしていた。

男神タナートは坑道の奥に黄泉との通路を開き、妖精たちを自ら

の眷属として選んだ。そして、彼らに＜魂の癒しの力＞を与え、神の＜御使い＞として、死せる魂を迎え、その魂が地上で受けたあらゆる傷を癒し、永遠の安息の地である黄泉に導く役割を課した。

こうして、女神と男神は、天と黄泉にあって協力しあい、地上を正しく治めた。

女神は一日に千の命が生まれるように計らい、男神は、各々の命の定めに従って、公平に一日九百九十九の魂を黄泉に導いたという。

やがて神代の終焉が訪れ、神々は地上との往来を絶ち、それから何千年の時が流れた。　妖精族は滅び、人間との混血によって細々とその血が受け継がれるのみとなり、＜魂の癒しの力＞もまた、地上から失われた。

いまや、エレオドラ山の頂きは、古い結界によって閉ざされ、死すべき人間には神殿を見ることすらかなわない。シルドーリンは荒れ果てた廃坑となって久しく、鉱脈は枯れ、黄泉への通路は見失われた。

神代の物語は、あるものは半ば忘れ去られて徽くさい書物の中に埋もれ、あるものは単なる炉辺の昔語りとして語られるのみとなった。

だが、神話は、決して、古臭いだけのものでも、役に立たない作り話でもない。

神話は、この国の文化をかたち創ってきたものであり、この国の人々の精神をかたち創ってきたものである。神話を学ぶということは、この国の精神のありかたを知ることであり、ひいては、自らの精神のなりたちを探ることである。

これから神話を学ぶ君達よ。

神話学は、決して、過去を振り返るだけの無益な学問ではない。

これは、未来への学問なのである。

なぜなら、これは、この国の未来である君達が、自分自身について考えるための学問なのだから。

――『イルファーラン国立上級学校神話学教科書』（＜賢人会議＞長老・イルファーラン国立研究所名誉研究員　ユーリオン著，　統一暦百六十六年発行）序文より。

＊

里菜（りな）は、水の中にいた。

自分を包んで脈打つようにゆらめく水を、確かに感じていた。

不思議と、冷たくはなかった。

水は、里菜の回りで渦巻き、たゆたい、顔の回りに広がる長い髪を弄び、裸足のくるぶしをやさしく愛撫しては、ゆるやかに流れていく。

流れに揺られてさわさわと素脚に纏わりついてくるものは、きっと制服のスカートだ。ごわごわした布地が膝の裏のやわらかいところに戯れかかって、ちょっとくすぐったい。

（あたし、水の中にいるのかしら……。でも、どうして？）

ぼんやりと目覚め始めた里菜の意識が、そろそろと状況を探りだす。

どうやら自分は、服を着たまま仰向けに水に浮かんでいるらしい。全身が水に包まれているように感じたけれど、きっと、それは錯覚で、顔は水面に出ているのだろう。

ここは、どこだろう――？

あたりを見回そうと思ったが、目を開けることは、まだ、できない。ちょうど、深い眠りからあまりに急に浮かび上がった時のように、意識は目覚めているはずなのに、身体を動かす方法が思い出せないのだ。

目を閉じたまま、里菜は記憶をたどる。

今は九月。高校二年の二学期の、ありふれた放課後。

退屈な授業と退屈なホームルームが終わり、教室の後ろに群がっ

てにぎやかにおしゃべりしているクラスメイトたちの横を、里菜は、じゃあね、と呟きながら、ひっそりとすり抜けた。何人かがそれに気づいて顔を上げ、お義理の笑顔で軽く手を振って、それからすぐに里菜のことなど忘れて、おしゃべりの輪に戻っていった。そうして里菜は、いつものようにただひとり、文庫本片手に電車に乗って帰ってきた。

そう、ここまでは、いつもと同じ。

いつものように駅に降り、いつものように家に帰って……。

そこから先は、思い出せない。きっとまだ、目が覚め切っていないからだ。

だが、すぐに、そんなことはどうでもよくなってしまう。

何もかもが、別の世界で起こった、自分とは関係のないことのように感じられる。

心が、心地よいまどろみの中に引き戻されようとする。

さっきまで、身体のどこかが激しく痛んでいたような気もする。

が、それも今は、ぼんやりとした記憶に過ぎない。

目を閉じて、全ての痛みが静かに癒されていくのを感じながら、里菜は水に抱かれている。おさな子に還って、母の胸に抱かれるように。

里菜を包んで、水が揺れる。

さわさわと、ゆらゆらと、ゆらめき、たゆたう、水のゆりかご。

（いい気持ち……。もしかしたら、ここは天国なのかなあ。だとしたら、あたしはもう、死んでいるのかしら）

そう思っても、悲しくはない。

生まれ出る前のまどろみにも似た穏やかな安らぎが、さざ波のように心を満たす。

そしてそのまま、里菜の意識は、再び遠のいていった――。

第一章＜エレオドラの虹＞　序

（――引用――）

古代の聖地エレオドラ山の麓の村々の中でも、特にこのイルゼール村には、古いエレオドリーナ女神信仰が色濃く残されている。

たとえば、この村では、家畜の出産に際してその家の女性――主に未婚の少女――が女神の祠に花輪などの供物を捧げる風習がある。また、妊婦や妊娠を望む女性が女神の祠に参拝して、妊婦の姿を連想させる瓢箪（ひょうたん）を奉納するという、都市部ではすでにほとんど見られなくなった古風な風俗も未だ廃（すた）れてはいない。

この村には、上古から連綿（れんめん）と続く女神の司祭の家系があり、さまざまな宗教行事を守り伝えている。司祭の家は、村の他の家と何ら変わるところのない農家であるが、代々、その家の最年長の女性が女神の祠を祀り、秋の村祭りには、祠の前で儀式を執り行ってきたのである。

……中略……

また、このイルゼール村は、よく知られているように、すべての＜マレビト＞の出身地である。

＜マレビト＞という呼称も、もともとは、この村の古い方言で、すなわち、『珍しい客人』と言うような意味だという。

世界中でただ一か所、この村にだけ、ごくまれに現われる異世界からの客人を、村の人々は、伝統的に、村に恵みをもたらす幸運の使者として尊び、手厚くもてなしてきた。そして＜マレビト＞たちは、彼らのみが異世界からこの世にもたらすことのできる＜本物の魔法＞の力を以てその歓待に応え、ある時は村を日照りや水害から救い、またある時は、＜統一＞前の戦乱の世にあって、歴史の表舞台にもいくたりか足跡を残してきた。この国の＜統一＞に大きな役

割を果たした伝説的な名軍師ユーディードもまたこの村出身の＜魔法使い＞であったという歴史的事実は、あまりにも有名である。

……中略……

村では、＜マレビト＞のことを、また、＜女神のおさな子＞とも呼び習わしている。

女神の司祭をつとめる老婦人の話によれば、＜マレビト＞は、エレオドラ山に源をもつエレオドラ川を、小舟に乗った赤子の姿で流れてくるという。そして、必ず、村はずれの＜女神の淵＞（前述の祠のある場所である）の淀みで岸に流れ着き、そこで赤子は、大人または少年の姿に変わり、小舟はそのまま流れ去る。

彼らは、女神が村のために遣わした、女神の御子であるという。最後の＜マレビト＞であるユーディードの訪れからすでに百六十年以上の時が流れた現代にあっても、村人たちは、＜マレビト＞の出現への期待を忘れてはいない。上古の伝統がひっそりと生きるこの村で、女神の御子の再びの訪れを、今も彼らは、静かに待ち続けているのである。

――『エレオドラ地方の神話と民俗に関する調査報告書』（イルファーラン国立研究所主任研究員ユーリオン著　統一暦百五十三年発行）より。

第一章＜エレオドラの虹＞　第一場（1）

エレオドラ山の上に、虹が出ている。まもなく薄れて消えそうな、夕方の虹である。

こんなふうに山の上にかかる虹を、村では、『女神の橋』と呼んでいる。

羊飼いの若者アルファードは、坂の途中でふと足を止め、陽に灼けた顔を上げて虹を仰いだ。

エレオドラ山の頂きの石灰質の岩肌を、秋の夕方の光が、淡いバラ色に輝かせている。その、同じ弱々しい秋の陽が、彼の逞しい肩や広い背中にも纏わり付き、質素な生成りの羊毛の上衣に、オレンジと灰色のほのかな陰影を与えている。

普段なら、小枝の鞭を手に羊の群れを追って歩くこの道だが、今、彼につき従うのは、彼の忠実な牧羊犬、ミュシカだけだ。

ミュシカは、ふさふさした毛並みの、大きな茶色の雌犬である。彼が仔犬のころから大切に育てたこの牧羊犬は、彼の、仕事上の有能な相棒であるとともに、この上なく誠実な親友でもある。

アルファードは、自分の後ろでおとなしく立ち止まったミュシカを、やさしいまなざしで振り返る。その、瞳の色は、暖かな暗褐色。夏の陽光を奥深く蓄えた、揺るぎなく力強い大地の色だ。

主人の視線に、ミュシカは軽く尾を振って応えた。

ザワザワと草を鳴らして、風が吹き抜ける。

風に吹かれて額にかかる茶色がかった黒髪を無造作に手で払い除け、アルファードは、ふたたび歩きはじめた。ミュシカも、とことことついて来る。

ゆるやかな山道を大股に登るアルファードの行く先は、村はずれの＜女神の淵＞だ。

（なぜ俺は、虹が出るたびに、引き寄せられるようにあの場所へ行くのだろう。なんのために……。あそこに、何があると言うのだろ

う。俺の失われた過去の手掛かりを探しにいくのだろうか。自分がこの世界に生まれ出た場所、自分の原点ともいえる、あの場所に。……そうだ、俺があそこで倒れていたあの日にも、虹が出ていたのだ。目をあけて、最初に見たのは、虹だった……）

アルファードは、思い出す。

彼はこの村で生まれたのではない。十二年前、＜女神の淵＞で気を失って倒れていた彼を、村の老人が連れ帰って育てたのだ。

その時、彼は、一切の記憶を失っていた。言葉は話せたが、記憶にあるのは、老人が現われる前、半ば川の水につかったままうつろに目を開けて虹を見たこと、そして、それからまた気を失ったらしいことだけだ。

自分の名も、年令も、わからなかった。彼は、今、二十二才ということになっているのだが、老人に拾われた時の年格好が十才位と判断されたからに過ぎない。名前は、老人がつけてくれた。

彼は自分がどこから来たのか知らなかったが、老人や村人たちは、彼が異世界からやってきたのだと信じた。彼の着ていた服は、この世界のものではない不思議な生地で出来ていたという。その服は、老人がどこかへ仕舞ったまま、みつからなくなったそうだ。もしかすると老人は、わざとその服を隠していたのかもしれないが、何年も前に老人が死んだ今となっては、確かめるすべもない。

そう、この村で、彼は、異世界からの来訪者、＜マレビト＞なのである。

それは、子供の頃から十年以上をここで過ごし、成長してきた今も変わらない。彼は、ここでは、永遠に客人であり、年配の村人たちが彼を見る目には、親しみや慈しみと同時に、今も微かな畏怖が宿っている。

親愛と崇拝、期待と賞賛、そして若干の畏怖を込めて、村人たちは、彼を呼ぶ。

＜女神のおさな子＞と。

すでに立派な成人であり、しかも、人一倍大きく逞しい堂々たる

体躯と年齢に似合わぬほどの落ち着きを兼ね備えたアルファードが＜おさな子＞などと呼ばれているのは、いかにも奇妙だが、村の人々にとって、＜マレビト＞は、女神に愛でられしもの、女神の御子（みこ）であり、村に恵みをもたらす聖なる＜おさな子＞なのだから、しかたがない。この村にいる限り、彼はたぶん、いくつになっても＜おさな子＞と呼ばれ続けるだろう。

けれど、そんなふうに呼ばれる時、アルファードのその、常は穏やかな、大地の色の瞳が暗い自嘲にふと翳り、薄い唇が皮肉な笑みの形にそっとゆがむことがあるのに、気づいているものは誰もいない。

（もしも俺が女神の息子だというのなら――）

アルファードは、苦い気持ちで考えるのだ。

（どうやら俺は、母親に愛されなかった息子であるらしい。皆が言うように女神が俺を愛してくれていたのなら、どうして女神が、他のすべての人間に魔法の力を与えながら、息子である俺にだけ、それを与えてくれないなどということがあるだろうか。誰でも持っているはずの魔法の力さえ与えられぬまま、俺は、捨て犬のように、この世に放り出されたのだ……）

＊

アルファードの養い親は、名をレグルといい、妻も子もなく、隣り近所や親類からの援助も一切拒んで世捨人同然に一人暮しをしていた頑固で偏屈な老人だった。若い頃に突然、理由も告げずに村を飛び出し、二十年ほどして皆が彼のことを忘れかけたころ、平然とした顔でひょっこり帰ってきたが、その間、どこで何をしてきたのかを誰にも一切語らぬまま、集落から少し外れた丘の上の、長く空き家になっていた古いあばら屋に勝手に閉じこもって、それ以来、そのあばら屋を気長に修繕しながら、ほとんど誰ともまともに口もきかない変人として、人を寄せつけない隠遁生活を続けてきた。

だから、彼がある日、＜女神の淵＞で拾ってきた幼い＜マレビト＞を自分で引き取って育てると言い出した時には、誰もが耳を疑い、もっと子供を育てるにふさわしい家庭に養育を委ねてはどうかと、村を挙げて説得を試みたものだ。

が、村人たちの懸念をよそに、レグル老は彼なりのやり方でアルファードを深く愛し、アルファードもまた、その愛情に応えて、年老いた養い親をよく慕い、敬った。

レグル老は、司祭でも占術師でもなんでもないただの変り者の老人だったが、なにかしら不思議な力を持っていたらしく、時折、奇妙な予言をすることがあった。それはたいてい、謎めいた、どうにでも取れるような言葉で、その時は全く意味が分からないが過ぎた後にそれと知れるたぐいのものだった。そういう予言は、たぶんレグル自身にも意味はわかっていなかったのだろう。

だが、近い未来については比較的わかりやすい予言がされることもあって、彼がアルファードを見付けたのも、何かそうした不思議な力に導かれてのことだったらしい。

それはやはり、秋祭りが済んだばかりの、ちょうど今頃の季節のことだったという。虹の下で拾った子供にアルファードという名をつけたのはそのためだと、いつかアルファードは、レグル老から聞かされたことがある。秋祭りのころは、また、銀のアルファード星が一番よく見える時期でもあるのだ。

アルファード星は、全天で一番明るい星である。この星の回りには、ほかにあまり明るい星がないので、よけいこの星が目立つ。それでこの星は、古い言葉で『ひとつ星』あるいは『孤独な星』を意味する”アルファード”と呼ばれている。

この星は、この辺りの村からは、ちょうど女神の祭りの季節である秋の宵に、まるでエレオドラ山に寄り添っているかのように山頂付近の東の空にかかって見える。この星が神話の中で女神の恋人として語られるようになったのは、このためだろう。

神話によると、この、神代の終焉をもたらす原因となった女神の

恋人”アルファード”は、エレオドラ山の羊飼いの若者だったが、空で一番明るい星のようなその美貌を女神に愛でられ、短い人間の一生が終るまで、山頂の神殿で女神とともに暮らしたという。

彼の口の悪い友人であるローイは、この神話のことで、

「あんたの場合、いくら女神の恋人と同じ”エレオドラ山の羊飼いのアルファード”だといっても、その程度の顔じゃ、女神様に見初められる心配はないよな」などとアルファードをからかう。

たしかに、こちらのアルファードは、まあ、地味ながらそこそこ無難に整った顔立ちではあるが、高原の強い陽射しと尾根を吹き下ろす乾いた風に長い年月晒(さら)され続けたその肌は武骨に日焼けして、真面目一方の彼の性格そのままに思慮深げに引き締まった禁欲的な風貌にはおよそ華やいだところがなく、凛々しく精悍であると褒められることはあっても、『美しい』などという形容には、どう見ても縁遠い。

が、アルファードがこの名を自分に不似合いなものに思う理由は、それではない。

銀のアルファード星はまた、＜魔法使いの星＞とも呼ばれているのだ。それは、この星の名を持つ女神の恋人が女神に魔法の力を与えられた最初の人間で、＜本物の魔法使い＞であり、人間界に魔法をもたらした恩人であるという伝説のためである。

アルファードの知る限り、レグル老の予言は、一度も外れたことがない。その彼がなぜ自分の養い子に、よりによってこんな不似合いな名をつけてしまったのかと、アルファードは時々、そのことの皮肉を思って、なにか笑いたいような気分になる。

アルファードは、＜マレビト＞でありながら、魔法が使えないのだ。それも、＜マレビト＞であるからには当然期待される＜本物の魔法＞の力がないだけでなく、この国の人なら誰でも使えるような＜普通の魔法＞さえ、彼には使えないのである。竈(かまど)に火を呼び起こしたり、鍋の中に水を呼び出したりといった、ごく日常的な、それこそ子供にでもできるような基本的な魔法でさえ。

＜普通の魔法＞の基礎は、誰もが幼児期に、特に教えられなくても自然に身につけるものだ。赤ん坊がよちよち歩きを始め、カタコトを話し出せば、その次にはいつのまにか初歩的な魔法を見よう見まねで試みて見せるようになるのがあたりまえであり、自分が赤ん坊だった時にどうやって言葉や歩きかたを学んだか覚えているものがいないように、自分や自分の子供が最初の魔法をいつどうやって身につけたのか、あらためて考えてみるものなどいない。

もちろん、ある程度高度な魔法や、あるいは特定の職業に必要な特殊な魔法は学習の結果として習得するものだが、それもあくまで、すでに基礎的な魔法の素地があってこそ学ぶことができるのであって、そもそも魔法を使うというのがどういう感覚なのかハナから知らなかったアルファードには、魔法の習得のためにどんな努力をすればいいのかさえ、全く見当がつかなかったのだ。

誰もが魔法を使えるこの国では、魔法に替わる文明の利器が発達していない。あらゆる産業も魔法の上に成り立っている。そんな世界でただ一人魔法の使えない彼は、日常生活でもずっと不便な思いをしてきたし、なんとか就く事が出来る職も、ごく限られる。

早い話が、この村で彼にできる仕事は、羊飼いだけだった。そして、その羊飼いの仕事も、誰も口には出さないが、魔法の力がなくてほかに出来る仕事がない彼のために村人たちがひねりだしてくれたものなのだ。

羊飼いとはいっても、アルファードは、自分の羊を持たない。夏には山の小屋に住み込み冬には低地に降りて何千頭もの羊を通年放牧する本格的な牧羊業者とは違い、彼の仕事はただ、夏の間の毎朝、村の家々を回って集めた羊たちを山の牧場に連れていき、夕方には村の広場まで連れ戻るというだけのものだ。農地の豊かなこの村では、牧羊は主要な産業ではないが、主に自家用の乳や毛を取るためにほとんどの家で数頭づつの羊を飼っていて、アルファードは、そうした羊たちをまとめて託されているのである。

そうして、各家が羊の数に応じて出し合ったささやかな報酬を供(もっ)(く)

物のように受け取って、彼は生計（たつき）を立ててきた。

それは、彼のプライドを傷つけることなく彼に食いぶちを与え、同時に彼に一人前の村の成員としての地位を確保してやろうという、村人たちの周到な配慮なのだ。

聖なる〈おさな子〉である彼は、女神に連なる貴い客人であると同時に一種のハンディを負った人間として、病人やみなし子といった弱者と同様に村の共同体の中で庇い養ってゆくべき存在と見なされているのである。

もちろんアルファードは、そのことを知っている。知ってはいるが　村人が誰もそれを口には出さないのと同じように、彼もまた、口に出さない。それが村人たちの思いやりに応える最良の道であると、彼は理解しているのだ。人々の素朴な思いやりに黙って感謝しつつ、十二の時から、彼は羊飼いをしている。

第一章＜エレオドラの虹＞　第一場（2）

羊飼いの仕事は、嫌いではない。無口な彼は、物言わぬ獣たちを愛する。一日中、犬と羊だけを相手に山のまきばで過ごすこの仕事は、村の誰からも温厚な人格者と見なされ、もう何年も村の自警団長を勤めて村中の若者たちから頼れる兄貴分として慕われていながら本心では人付き合いをあまり好まない彼にうってつけだ。羊を見張りながら、唯一本当に心を許す友であるミュシカと無言で並んで座り、時にはミュシカに羊を任せて身体の鍛錬や剣術の稽古に励むこともできる。

アルファードは、一時期、身体を鍛え剣の腕を磨くことに、憑かれたように熱中してきた。それはたぶん、彼に魔法が使えないからだったのだろう。魔法の力がない代わりにせめて埋め合わせとして別の種類の力が欲しいと、心のどこかで、たぶん思っていたのだ。一時期の彼が見せていた一種強迫的なまでの『力』への執着は、二年前のある日を境に憑き物が落ちたように影をひそめたが、それからも彼は、身体が鈍らない程度の――と、本人は称しているが、他人から見れば充分激しい――鍛錬を欠かすことはない。

村に現れた当時、アルファードは、色白で、どちらかというと線の細い印象のある少年だった。が、今、彼の均整の取れた長身は一分の隙もなく見事な筋肉に鎧われて無駄なく引き締まり、あのころの、育ち良さげだがどこかひ弱そうな少年の面影はどこにもない。肩幅の広い、がっしりしたその体躯は、ただ黙って立っていてさえ静かながらも圧倒的な力の気配を全身から発散して、それが彼を、実際の身長以上にさらに大きく見せている。

そんなアルファードの力強い姿を頼もしげに見上げて、村人たちは、目を細める。それは、立派に成長した自慢の息子を見る目だ。村の大人たちの考えでは、彼は女神から村への贈り物であり、だから、誰の家に引き取られようと、村全体の養い子も同然なのだ。そ

して、その、女神から授かった彼らの愛息子は、期待に違わず、こんなにも強く逞しく、礼儀正しく孝心厚く育って、冬至の火祭りに演じられる古い聖劇の中の少年英雄そのままに、恐ろしいドラゴンから村を守ってくれている――。

イルシエル山脈を越えて、世界の果てのその向こうから時おり人里に飛来する巨大なドラゴンは、このあたりの村では最も警戒される危険な害獣である。そのドラゴンを、これまでに何頭もその手で斃(たお)してきたアルファードは、＜ドラゴン退治のアルファード＞として近隣に名をとどろかす、村の英雄だ。

理由は知られていないが、他の動物と同様、ドラゴンには魔法による攻撃が効かない。だからドラゴン退治は、魔法を使えない彼にとって、それがハンディにならない数少ない仕事であり、彼は、ひたすらその鍛え上げた肉体と磨き抜いた剣の技にものを言わせて、村を荒らすドラゴンを、かたっぱしから退け続けてきたのだ。

こうして彼は、この古い村で、来る日も来る日も羊を見張り、たまさか現れるドラゴンを斃しながら、＜マレビト＞として生きてきた。

決して、不幸な境遇ではなかったと思う。

どこから来たのかもわからない天涯孤独のみなし子を、村人たちは、女神に遣わされた聖なる御子として貴重な贈り物のように受け入れ、その成長をつかず離れずやさしく見守り、過去を持たずどこにも属していなかった彼に、暖かい居場所を与えてくれた。貧しくはあるが、時の止まったかのような村の暮らしは穏やかで、誰もが肉親のように彼を気づかい、彼を誇り、信じ切って頼ってくれる。心優しい村人たちに対する、彼の、感謝の念は深い。

けれど、祭りの季節が廻りくるたびに、彼はふと、考えずにはいられないのだ。

（俺は、どこから来て、なぜ、なんのために、このような存在として、ここに、この場所にいるのだろう。俺はいったい、何者なのだろう……）

魔法の使えない、はんぱものの自分。半人前の、出来損ないの男。女神のおさな子よ、ドラゴン退治の英雄よと祭り上げられながら、まともな仕事もできず、夏には羊を見張り冬にはドラゴンを殺す。単調な日常の繰り返し。

村の、女神の司祭のばあさまは、常々、彼のことを、祭りの聖劇の中の童形の英雄になぞらえて、ドラゴンから村を守るために女神が遣わした聖なる御子なのだと言っていたが、そんな言葉を、彼は信じてはいなかった。もしもドラゴン退治が彼の天命であり存在理由であるならば、彼は、ドラゴンと戦うことにもっと喜びを感じ、＜ドラゴン退治のアルファ―ド＞と呼ばれることに誇りを感じてもよいはずだ。けれど彼は、たとえドラゴンといえども生き物を殺すことは好きではなかったし、また、そうして誰からも自分の名をドラゴンと結びつけて呼ばれることに、むしろ、微妙な抵抗と屈託を感じている。

が、それでも、ドラゴンの害から村を守るためには誰かがドラゴンを斃さねばならないことは分かっていたし、彼に＜本物の魔法の力＞がない以上、村の食客（しょっかく）、養われものである彼が村人たちの育ての恩に報いるためにできることは、身体を鍛えてドラゴンを退治することだけなのだ。

（俺は、これからもずっと、ここでこうして、ドラゴンを殺しながら生きていくのだろうか。そのことに、いったいどんな意味があるというのだろうか……）

思いに沈みながら歩くアルファ―ドの陽に晒（さら）された髪を、冷え始めた山の夕風がなぶっていく。

いつのまにか、虹は消えている。短い秋の日が、暮れようとしている。空はまだ儚い青をとどめ、山頂には夕日の最後のひとかけらが宿っているが、すじ雲は桃色に染まり、谷あいのイルドの村のあたりは、もう、夕闇の底に沈んでいる。

女神の淵へと下る脇道に入ってしばらく行くと、女神を祀（まつ）る古い祠（ほこら）がある。祠の前で、彼は半ば無意識の内に足を止め、軽くこうべ

を垂れて、幅広の銀の腕輪をはめた左手首を胸にあて、村の習慣どおり、女神に敬意を表した。

そうしてから、苦笑した。

養い親のレグル老は、信心深い人間だった。祠の前を過ぎるとき、礼拝のしぐさを忘れると、厳しくたしなめられた。そのころの習慣が、いまだに身体にしみついている。養い親の形見と思いなして肌身離さず身につけている、装飾品というには少々武骨な銀の腕輪が、すでに自分の身体の一部となってしまった気がするのと同じように。

祠を過ぎると、草に埋もれかけた小道は急に下りの勾配がきつくなって、ほどなく、木立のすき間から、眼下に淵が見えてくる。淵と言っても、手前のほうは浅い淀みになっていて、上流から流れてきた木の葉などが溜って静かに渦を巻いている。その淀みに、かつて、彼は、倒れていたのだ。

ふいにミュシカが、ひと声ふた声吠えて、何か訴えるようにアルファードの顔を見上げると、淵に向かって駆け出した。

しつけのよいミュシカは、普段、理由もなく吠えたり、勝手に主人の前に飛び出したりはしない。彼女がこういうことをするのは、その不思議な知覚で何か異変を感じ取った時だけだ。アルファードの心が、波立った。アルファードも、ミュシカの後を追って、心のざわめきに駆り立てられるように走り出した。

狭い切り通しを駆け下りて淵のほとりにたどりついたアルファードの目に最初に飛び込んで来たものは、なにか、青色のものだった。

アルファードは、はっと立ち止った。

それは、彼が発見されたあの淀みに仰向けに倒れている、一人の少女だった。

少女は、見慣れぬ意匠の濃紺の衣服を身につけており、その、細かくひだを取った奇妙なスカートが、青い花が開くようにふわりと広がって、水の流れに揺れていたのだ。

ミュシカが、岸に座って、もの問いたげにアルファードを見上げている。

たぶん、かつての彼がそうだったように気を失っているのだろう、少女は目を閉じて、か細い手足をぐったりと投げ出し、布きれのように頼りなく、浅い水に浮かんでいる。

アルファードは呆然と立ち尽くし、夢を見ているような思いで少女を見つめた。

ほっそりとした、華奢な少女だ。たぶん、まだ幼い。漆黒の長い髪と濃紺の衣服が、水の中で揺らいでいる。スカートが揺れるたびに白い素脚が膝小僧まであらわになって、アルファードの目を思わず背けさせる。

透き通るように薄い青い花びらを持つ不思議な形の花がいくつも、少女を取り巻くように水面に浮かんでいるのに気づいたアルファードは、さらに目を見張った。

（＜女神の花＞だ……）

大人の掌ほども大きさのあるその花は、山頂の結界の中だけに人知れず咲くと言う神秘の花だった。ごくまれにその花びらだけが川を流れて来ることはあっても、花が咲いているところはこれまで誰も見たことがないはずの、その、幻の花が、今、彼の目の前で、暮れ行く水のおもてにゆらゆらと漂っている。

夕映えの名残りも木立に遮られて届かない緑の薄暗がりの底で、儚げな青い花弁にそっと包み込まれた真珠色の蕊（しべ）は幽（かす）かな燐光を湛えて、そこだけぼうっと川面を明るませ、まるで、女神の祭壇に飾られる、花をかたどった燈明（とうみょう）立てを川に浮かべたかに見えるのだった。

花芯に淡い光を抱く青い花に囲まれて、少女は、何か、触れてはならない神聖なものに見えた。女神の祭壇の花の形の燈明立てに似つかわしい、この世のものならぬ、幻めいた何かに。

まぶたを閉じたその顔は、決して死者のようにではなく、ただ安らかに眠っているように見えたが、一方で、生あるものの持つ生々しさを一切感じさず、やはり、この世のものとは思われなかったのだ。

瞳の中に眠る秘密の夢を守るように、ひっそりと閉ざされた白いまぶた。細かな水滴を真珠のように飾って伏せられた漆黒の睫毛。精巧に刻み込んだ薔薇水晶のような、さくら色に透き通る耳たぶ。おとぎ話の王子のくちづけを待ち受けるかのように微かにほころんだ、あどけない唇――。

華奢な肢体はいかにも脆そうで、武骨な手で不用意に触れたらたちまち砕け散ってしまいそうだったし、薄闇に浮かび上がる白い肌は半ば透き通っているようにさえ見え、さっき見た虹のように、今にも薄れて消えてしまいそうだった。

あえかに儚げなその姿は、生身の少女というには、あまりにも、清らかすぎた。

アルファードは、人が思っているほど信心深い人間ではない。人並みの魔法さえ使えぬただの人間の男が十数年間も＜女神のおさな子＞などと言われ続けてきて、その本人が、どうして信心深くなどなれるだろう。彼が村人たちから『女神の御子だけあって模範的な信心者だ』と信じられているのは、ただ、自分に良くしてくれる村人たちに対する礼儀として、村の信仰やしきたりに常に敬意を払ってみせているからだ。他の若者たちがよくやるように、これといった理由もなく単なる幼稚な反抗心から古いしきたりをわざとないがしろにしてみせて善良な老人たちを嘆かせるような無意味なことを、彼はしなかったというだけの話なのだ。

もしも女神を礼拝することが自らの信条に反し、自らを貶めることになると思えば、彼は、力づくで強制されても礼拝を拒むだろう。が、彼には、女神への礼拝を拒まねばならぬ内的な必然性など、別に無い。だったら、無意味に礼拝を拒んで人の気持ちを傷つけ、よけいな摩擦を生むのは、単なる無駄であり、愚行である。彼は、無駄や不合理、非効率を嫌う。無益なこと、無意味なことは、なるべくしない主義だ。彼が礼拝を拒むことで悲しむ人や、彼がしきたりを尊重して見せることで心が慰められる人がおり、かつ、彼らの信仰を傷つけないように振る舞うことが自分の信条に反しないなら、

そのように振る舞っておけばよいのである。
　そんなふうに、彼は、ただ、自分の信念に反しない範囲で村人たちの心情を尊重し、他人の心を無意味に傷つけぬために礼儀正しく振る舞ってきただけなのだ。――少なくとも、自分では、そのつもりでいた。
　けれどもこの時、アルファードは、ふいに、敬虔な想いに捕らわれた。
（奇跡は、本当にあるのだ。たぶん俺は、人の言うような女神の御子などではないが、それでもやはり、女神は、俺に、特別な運命を用意していたのだ。女神の愛し児（いとしご）は、今、こうして、他の誰でもない、この俺の前に現われた……）
　天啓のように訪れた運命の予感に、彼の胸は我知らず打ち震えた。
（そうだ、俺が今、ここにいること――俺が今までここで生きてきたことには、ちゃんと意味があったのだ。この村での俺のこれまでの日々は、きっと、今日、この日のためにあったのだ。今、ここで、女神の愛し児を水の中から抱き上げ、地上に連れ出すために。女神の愛し児の、この世への誕生に立ち会うために……）
　アルファードは、水の中に足を踏み入れた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第二場（1）

昨夜（ゆうべ）、村の、女神の司祭が死んだ。

司祭の死は、村人たちにとってかなり衝撃的な出来事だった。彼女はすでに老齢だったが、昨日の夕方まではいたって元気そうだったし、なんといっても彼女の死は、よりにもよって彼女が司るべき祭りの真っ最中のできごとだったのだ。

そのために、秋分の日の今日行なわれる予定だった祭りの儀式は中止された。

秋の村祭りは、秋分の前夜とその当日の二日間に渡って行なわれる。一日目は村の広場にかがり火を焚いての夜宴だ。＜女神のお迎え＞と称して、一年の労働を慰労するべく陽気などんちゃん騒ぎが繰り広げられ、元気のよい若者たちなどは夜を徹して酒を呑み、歌い、踊り、笑いさざめき、あるいは恋をする。そうして、例年ならその翌朝、気持ちも新たに女神の淵の祠（ほこら）の前で女神を讃える厳（おごそ）かな儀式を執り行ない、その後は、＜女神の見送り＞と称して、もう一度宴を催す。今度は山のまきばに酒やごちそうを運び上げ、村中総出で秋の一日を野に遊ぶのだ。

司祭が死んだのは、その、祭りの一日目、＜女神のお迎え＞の宴会のさ中であったらしい。らしい、というのは、誰もその死に立ち会ったものがいないからだ。

その夜、司祭は、夜更けに宴席から立ち去った。高齢の彼女が徹夜の宴会に最後までつきあわないのは別に不思議なことではないから、誰もそれを気にしなかった。そして、翌朝、彼女を起こしに家人が部屋を訪れた時には、司祭は、自室に設けた祭壇の前で、祈りの姿勢のまま、すでに冷たくなっていたという。

司祭の後継ぎは彼女の幼い孫娘だったが、本当にまだ、ほんの子供で、正式な祭りの儀式を取り仕切れるとはとても思えなかった。儀式は中止され、司祭の野辺送りの葬列が、祭りの行列に取って代

わった。

祭りは中止になったが、昼からの宴会のために用意されたごちそうは、無駄にはならなかった。村では、葬式の時も、祭りや結婚式と同様に、賑やかな宴会を催すのだ。祭りのごちそうは、そのまま、送別の宴のごちそうになった。

その宴会で、祭りでも葬式でも酒さえ呑めればそれでいいとばかりにご機嫌で騒いでいた不信心で考えなしの若者の一人が、

「祭りが葬式に化けた、か……。こりゃ、まるで、何だか女神様その人の葬式みたいだなあ！」と大声で言って、周囲の大人たちから、いっせいに、どこかうろたえたような低い叱声を浴びた。

調子に乗った若者が不用意に口にしたその言葉は、しかし、それから後、宴会を続ける村人たちの心に、不吉な陰を落し続けた。彼は、深い考えもないまま、村人たちが漠然と抱いていた恐れを的確に言葉にしてしまったのだ。

（――世界に実りをもたらす豊穣の女神の御魂が衰えている――）

それは、誰もが口に出さずにいた、秘かな不安だった。

気候がよく地味も肥えたこのエレオドラ地方は、古くからこの国で最も豊かな地方であり、ここ数年続く全国的な不作にもかかわらず、収穫も、普段よりは減っているがまだ十分にあって、村人たちが飢えることもなく、宴の卓には食べ切れないほどの料理が並んでいる。それでも、いつの頃からか国全体を覆い始めた暗い影は、時の流れに取り残されたようなこの村にもじわじわと忍び寄りつつあり、そのことに、誰もが本当は、気づいていた。そんな時、女神を祀（まつ）る祭りのさなかに女神の司祭が原因不明の急死を遂げ、祭りが葬式に成り変った。村人たちは皆、口には出さなくとも、そこにまごうかたなき凶兆を感じ取っていたのだ。

胸の底に淀む、そんな不安を追い払おうとするように、村人たちは、ますます大声で歌い、ひっきりなしに冗談を言っては笑い合い、浴びるように酒を飲み、宴は、いつにもまして賑やかに盛り上がった。

アルファードは、酒はあまり飲まない。無口で、気の利いた冗談も言えなければ、歌や踊りを楽しむような遊び心もなく、入れ替わり立ち替わりしなだれかかってくる娘たちにも、とりたてて関心はない。ひととおり腹を満たした後は、ただ黙然と座って、飲むでもなく飲まぬでもなく手にした酒杯を、時々思い出したように口元に運ぶふりをするばかりだ。

けれど、いつも、そんな彼の回りに、いつのまにか、若者たちは集まってくる。

無口で、どこか打ち解けない一面もあるが、道理をわきまえた温厚誠実な好青年。謙虚で思慮深く公明正大、常に理性的でどんな時にも合理的な判断を下し、滅多なことでは腹を立てない人格者。年齢に似合わぬほどの落ち着きと統率力を備えて自警団の若者たちの尊敬と信頼を一身に集める大人物。それが、村でのアルファードの評判だ。

若者たちは、母犬の回りで遊ぶ子犬のように、寡黙なアルファードの回りで互いにじゃれあい、彼の堅物ぶり、朴念仁ぶりを親しみを込めてネタにした軽口を飛ばし合っては、彼を肴に勝手に盛り上がる。

そんな様子を眺めて、年寄りたちは満足気に頷き合う。

――アルファードは、実に感心な若者だ。不平も言わず贅沢も求めず、血のつながらぬ育ての親を孝養を尽くして看取った後は自警団長として命を賭して村のために尽力し、『イルゼールに勇者アルファードあり』と近隣中に名を轟かせながら、その働きを誇ることもなく、剣術の全国チャンピオンにまでなっても、驕りたかぶることもない――

アルファードは、こうしてただの羊飼いをしてはいるが、実は、イルベッザの都で四年に一度開かれる武術大会の一昨年の大会での、剣技の部の全国チャンピオンなのだ。

今は廃れた冬至の火祭りの奉納試合の流れをくむイルベッザの武術大会は、戦乱の世から遠く隔たったこの時代、その起源にふさわ

しく国を挙げての一種の祭りとなっており、各地で開かれる予選も含めて、退屈な冬ごもりの季節を彩る国民的な娯楽として親しまれていた。その武術大会の、それも花形である剣技の部の優勝者といえば、少なくとも次の大会が開かれる四年後までは国民的英雄であり、その出身地であるということは、村にとって非常な栄誉だ。アルファードの優勝に、村は沸いた。凱旋してきたアルファードは熱狂的に迎えられ、村を上げての祝賀会では村の誇りと讃えられ、少年たちの尊敬のまなざしや娘たちの熱い視線を一身に集めたものだ。

けれど、当のアルファードはとりたてて嬉しそうな顔もせずに、威張るでもなく浮かれるでもなく、次々かけられる祝福の言葉に辛抱強く淡々と応え続けただけで、翌日からまた、何事もなかったように黙々と日々の勤めに戻った。人々は彼のそうした振る舞いに謙虚、地道、平常心と言った美徳を見いだして、自分たちの英雄はただ強いだけでなくこんなにも立派な人物なのだとますます満足しただけで、あの日のアルファードの静かな瞳の奥に、何か諦念めいたものが注意深く隠されていたことに気づいたものはいなかった。

彼は、あの日、気づいてしまったのだ。自分が、ただの『魔法の使えない羊飼い』から、『剣のチャンピオンで魔法の使えない羊飼い』になっただけなのだということに。

過ぎ去った戦乱の時代ならともかく、今の時代に、この平和な村で、剣の腕が立つからといってそれが何になるというのだろう。彼にできることは、せいぜい、それまでと同じように自警団長として村を襲う山賊を追い返し、ドラゴンを退治することだけだ。

自分がそれまで何のために強くなろうとしていたのか、その時、彼には、わからなくなってしまった。彼は、賞賛や名声を求めていたわけではなかったのだ。

彼はただ、ひたすらに、力そのものを求め続けてきた。強くなりさえすれば、何かが変わるような気がしていた。あるいは、自分を励ますためにそう信じ込もうとしてきただけかもしれないが、それにしても、その漠然とした思いこみがそれなりに彼を支えてきたこ

とは事実だった。けれど、もはや力の時代ではなかったのだ。いくら強くなっても、結局は、なにも変わらない。彼は相変わらず、彼のままだ。

その後彼が以前ほど武芸に精を出さなくなったことに薄々気づいているものもいないではないが、それを怠慢だの慢心だのと責めるものはない。それで彼の剣の腕や体力が少しでも衰えたとは誰にも思えないし、彼の場合、それまでの熱心さが人並みはずれていただけで、今が人並みに劣るというわけではないのは誰が見ても明らかなのだ。以前のような異様なほどの精進ぶりがいつまでも続いたとしたらそのほうがよほど問題で、むしろ彼はそろそろ武芸以外の他のことにももっと関心を向けるべきではないかなどと、わけ知り顔で主張する者も多い。

彼らの言う『他のこと』というのは、つまり、例えば娘たち――ひいては家庭を築くことを指している。二十二歳といえば、この村では、そろそろ身を固めているか、少なくとも婚約くらいはしていてしかるべき年頃なのである。それなのに、いまだに恋人の一人も作らず、娘たちに興味を示すそぶりさえまったく見せないアルファードは、そういう点では、そろそろ少々困り者と見なされ始めているのだ。

公正だが厳格な死者の王タナートを主に崇めてきた北部の村々と比べ、出産と豊饒を司る生命の女神エレオドリーナのお膝元である南部の村は、日頃から若者たちの恋愛に対しては比較的寛容であり、少々の戯れは見て見ぬふりで黙認される。そんなおおらかな気風の村で、決まった恋人もいないのに適当に遊ぶということもないアルファードの堅物ぶりはむしろ不自然に思われているほどで、若者たちの間では格好の笑い話の種になっているほどだ。

アルファードは、別に、モテないわけではない。何と言っても彼は、村の誇るチャンピオンであり、ドラゴン退治の英雄だ。貧しくはあるが、逞しく頑健な働き者の若者だし、見目麗しいとは言えないまでも、凛々しく引き締まったなかなかの男ぶりで、姿も悪くな

い。そして何よりも、その、誠実で落ち着いた頼もしい人柄は、誰知らぬものもない。魔法が使えないという決定的なハンディがあってさえ彼と一緒になってもいいと本気で考えている娘はいくらもいるし、もっと軽い気持ちで彼の気を引いてみようと試みたことのある娘なら、更に多い。

けれども彼は、これまで、どんな娘にも、ほんのかりそめにさえ靡(なび)いたためしがない。村の娘たちはみな、青年たちがそうであるのと同じように彼にとっては幼なじみだから、彼とてそんな娘たちを冷たくあしらうということはしないが、ただそれだけで、幼なじみとして以上の特別な関心は、誰に対しても見せたことがないのだ。

今日も娘たちの何人かは、祭りに事寄せて、他の若者たちと一緒に彼の回りで騒ぎながら抜け目なく機会を伺い、何かにつけて、ものは試しとばかりにアルファードにすり寄って見るのだが、アルファードのほうは、祭りだろうと何だろうと普段より気安く振る舞うこともなく、いつも通りの堅物ぶりで、知らんぷりを決めこむばかりだ。

「そういえばこの前、インマ婆さんが、また、彼のところへ縁談を持っていったが、やっぱり見向きもされなかったそうだよ」

「婆さんも懲りないなあ。これでもう何回目だろうかね」

「しかし、アルファードにも困ったものだな。浮いたうわさひとつ立てないまじめな若者だと感心していられたうちはいいが、いつのまにやらあの歳だ。身持ちの堅いのは良いことだが、だからといってどんな娘にもまるで興味を示さないというのも、それはそれで考えものだ。だいたい彼には、いつかはちゃんと家庭を持とうという気はあるのかね」

「まあ、いいじゃないか、あれには、あれが身を固めないからといって嘆く親もないんだから」

「そもそも、アルファードは、ほれ、あれだ……。日頃ああして我々と同じように振る舞ってはいても、なにしろ、＜女神のおさな子＞だからな。普通の男とは違う。女神の御子ともなれば、そこらの

ありふれた若者たちのようにそこらの娘を娶って普通に家庭を築き子孫を残すなどということはしないものなのかもしれん……」

そんなうわさ話が宴席を駆けめぐり、言い古された冗談やおなじみの笑い話が飽きもせず大声で繰り返される一方、そこここで、ひそやかな、あるいはこれ見よがしな恋のさや当てがいくつも繰り広げられ、宴に華を添えるちょっとした喧嘩も始まって、それににぎやかな声援が飛んでいるうちはいいが、しまいにはつかみ合いになって仲裁がはいり、そのうちに、そんな騒ぎもよそに昼間から酔いつぶれていびきをかくものもあらわれる。最後のころにはもう、これが葬式だということなど、誰もがほとんど忘れている。どっちみち、これは祭りだ。司祭はその人生の最後に、やはりみんなに祭りをプレゼントしてくれたのだ。日頃は質素で堅実な働き者の村人たちが、このときとばかりハメをはずして、年に一度の乱痴気騒ぎが延々と繰り広げられる。

やがて太陽が西に傾き、長い喧騒の宴もついに果てようとする頃、一瞬の通り雨が山並みを駆け抜け、水滴で清められた東の空に、アルファードは、虹を見たのだ。

そして、今。

アルファードは、女神の淵の浅い澱みに立ちつくし、横たわる少女を魅入られたように見つめていた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第二場（2）

鳥の声も途絶え、木々の間に静まり返る窪地の底の翠（みどり）の淵に、黄昏の薄闇がわだかまり始めている。夕映えの幽かな名残りを映す水の中、夢のようにひっそりと、少女は眠る。

アルファードの脳裏に、さっき聞いたばかりの、『女神の葬式』という言葉が、ふいに蘇った。

その昔、北方の漁り人、＜風使い＞たちの間には、水葬という神秘な奇習があったという。彼が少年だった頃、北部から来た旅芸人に聞いた、見知らぬ土地の謎めいた風俗のひとつだ。

イリューニンの北、ビューランの浜辺には、沖へ向かう海流が断崖を抉（えぐ）るように流れてゆく場所があり、その断崖の裂け目の下に、＜風使い＞たちだけが秘密の隘路（あいろ）を通って降りて行くことができる、隠された小さな砂浜がある。弔いの夜、花で飾られた海人のなきがらは、形ばかりの筏（いかだ）のような死出の小舟に乗せられて、仲間たちの手でその秘密の入江に運び込まれ、しめやかな哀悼の調べとともに静かに海に押し出される。この葬送の浜辺から、夜の引き潮に乗って世界の果ての西の大洋へと旅立ったものはすべて、いかなる力の働きによってか、二度と此岸（しがん）に戻ることはないという――。

花に囲まれて水の中に横たわる少女の姿は、遠い異郷のそんな神秘な伝説を、彼に思い出させたのだ。

眠っているだけのような外見にもかかわらず、少女が弔いの場面を連想させたのは、弔花めいてその身を飾る青い花のためばかりではなく、たぶんその、痛ましいほどに清らかで、どこか生命感の希薄な、透き通るような気配のせいだろう。

水葬に付された女神のようだと、アルファードは思った。稚（おさな）い女神が殺害されて水葬に付されているこの光景は、なんと美しく魅惑的なのだろう、と。

思ってから、その考えの、あまりに不吉で冒涜的なことに驚いて、

アルファードは呆然とした。

いつのまにか隣にやって来て、少女に鼻面を寄せて匂いを嗅いでいたミュシカが、その時、アルファードを見上げ、促すように、くぅん、と鼻を鳴らした。

我にかえったアルファードは、浅い川床に片膝をついておそるおそる身を屈め、少女をのぞき込んだ。

よく見れば、少女の青い服の胸のあたりは、微かにではあるが、規則正しく上下している。ためらいながら顔の上にかざした掌には、弱々しい呼吸が、確かに感じられた。

アルファードが思いきって少女のほうに腕を伸ばしかけた、その、伸ばした手の指先が水面に触れたとたん、それで生じた波紋のためだろうか、少女を守るように周囲を漂っていた青い花たちが、まるで、これで役目を果たした、というかのように、いっせいに、ついっとその場を離れて、ゆらゆらと流れ去っていった。

川面を流れて行く花たちを唖然(あぜん)として見送ってから、アルファードは、壊れ物を扱うようにそっと、少女を抱き上げた。その衣服から、ざっとばかりに水がしたたり、アルファードを濡らした。

少女は、ひどく軽かった。掌の上で死んだ小鳥のように儚く脆い感触が、痛々しい。

けれどその、さっきまで熱を持たない水晶細工のように見えていた小さな身体からは、すっかり水を吸った布地を通して、やはりほのかな温もりが伝わってきた。

川の中にいたのは、そう長い時間ではなかったのだろうか。冷たい水に浸っていたわりに、身体が冷えていないようだ。あるいはそれは、この少女が何か常ならぬ力で守られていた証拠なのかもしれないと、アルファードは、ふと思った。

普通なら濡れた服はすぐに脱がせて自分の上着ででもくるんでやったほうがいいのだろうとは思ったが、そうすることは、かえって、今もわずかに残って彼女を守り続けているのかもしれない神秘の力の残滓(ざんし)を払い散らしてしまうことになるような、よけいなことをせ

ずにこのまま抱いて帰れば家に着くまで女神が少女を守り続けてくれそうな、そんな気がして、アルファードは、そのまま、少女を抱えて立ち上がろうとした。

その時、腕の中で、少女がわずかに身じろぎした。

アルファードは息を呑み、我知らず、呪縛されたように動きを止めた。

少女は、水滴に縁取られた清らかな睫毛をそっと震わせたかと思うと、ふいに、漆黒の瞳を見開いた。

目覚めたばかりで焦点の定まらない双眸が、ゆっくりとアルファードの顔を捕らえ、そして……。

「キャーッ！」

かん高い悲鳴とともに、小さな白い手がアルファードの頬に向かって飛んだ。

が、目を丸くしてあっけにとられるアルファードの頬に、少女の手は届かなかった。その急激な動作のためか、少女はそのまま、再び気を失ってしまったのだ。

腕の中でぐったりと力を失った少女の小造りなおさな顔を、アルファードは呆然と見下ろし、やがてくつくつと笑いだした。

（ああ、やっぱりこれは人間の女の子だ。おどかしてしまったんだな。かわいそうなことをした。でも、よかった、元気そうだ……）

さっきまで少女を包んでいたどこか現実離れした神秘的な気配は消えて、腕の中にいるのは、風変わりな服を着ていて目と髪がこの地方には珍しい色をしているというだけの、ただの人間の少女だった。清楚で愛らしくはあるが、別に人並み外れて美貌というわけでもなく、気の毒なほどに痩せこけて、まだほんの子供だ。

たぶん十才ちょっと、いってせいぜい十二、三だろうと、アルファードは考えた。額が広く鼻筋が短い顔つき、あまり高いとは言えないその鼻の、ちょっと上を向いた鼻先があどけない丸みを帯びているところなどいかにも幼く、それでも顔立ちだけならもう少し上に見えなくもないが、背丈も小さいし、胸の膨らみもまだ目立たな

い硬い身体つき、雛鳥のように頼りなく細い首や棒切れのような手足などは、どう見ても子供のものだ。さっき一瞬だけ見た黒曜石のような瞳には、思いがけず、顔立ちの幼さに似合わぬ何か強い輝きが宿っていたような気がするが、それも、年令の割に大人びた利発な子供なのだろうと思えば納得がいく――。

（じいさんが俺を拾って育ててくれたように、今度は俺が、この子を引き取って育ててやろう。いくら俺が貧乏でも、なに、こんな痩せっぽちの女の子の一人くらい、きっとなんとかなるさ。それにしても、本当に痩せっぽちだ。滋養のある物を食べさせてやらないといけないな。そうだ、戸棚にまだ、ハチミツがあったはずだ。ハチミツ入りの温かい粥なら、消化もいいから身体が弱っていても食べさせられるだろうし、それに、子供、ことに女の子ともなれば、きっと甘いものを好むだろう……）

そんなことを考えると、アルファードの胸に、思いがけず、ふんわりと温かいものが流れた。

アルファードは、どちらかというと、子供は苦手だ。別に嫌いということはないが、自身に幼い頃の記憶がないせいか、それともただ単に不器用であるせいか、子供にどう接していいのか分からないのだ。しかも、それが女の子ともなればなおさらだ。

けれど、この時、自分がこのいとけない少女を引き取って育てるのだという思いつきは、彼の心に、意外なほど甘美な温もりをもたらした。

同じこの場所で、同じ孤独な＜おさな子＞としてこの世に生まれ出たもの同士、自分とこの子は、きっと、寄り添って暮らせるだろう。そう、自分は、守り育てるべき子供を――『家族』を持つのだ。もしかすると、自分がこれまでずっと満たされることなく求め続けてきたものは、結局は、そんなささやかな、ありふれたものだったのかもしれないと思うと、なぜかおかしくなって、少し笑いたくなった。ずっと、自分は孤独が好きなのだと思っていた。家族など、欲しいと思っていないと信じていた。が、どうやら、そうでもなか

ったらしい――。

（……俺は、このいたいけな子供を、全力で守ろう。そうすることで俺は初めて、自分がこの世にあることを許してやれるような気がする。初めて自分の存在に意味を見出せるような気がする。きっとこの子は、女神が俺に与えてくれた、初めての贈り物なんだ……）

アルファードはそっと微笑み、少女を抱いて歩き出した。

＊

……あれはいつのことだっただろう。もうずいぶんと昔のことのように思える。そう、まるで、生まれる前のできごとのように。

あたしは、制服を着て、電車に乗って、毎日学校に通っていた。

電車はいつも混んでいて、夏でも冬でも、人いきれでむっとしていた。

前後左右からいやおうなしに押しつけられる見知らぬ他人の身体の不快な温もり。暑い時期には、誰かの汗ばんだ腕が直接肌に触れて、死ぬほどの嫌悪を感じることもあった。それは本当に悪寒がするほどの不快さで、ほとんど恐怖にも近い感覚だった。それであたしは、夏でもなるべく長袖を着ていた。

そして、狭い車内にこもる、汗やタバコや脂っぽい頭髪の嫌な臭い。

温くて臭い空気をうっかり深く吸い込むと、吐き気がした。できることなら、息をしたくなかった。こんなにも臭くて汚い空気を吸ったら、身体の中まで、心の中まで穢れるような気がした。自分がどんどん汚れていくような気がした。

ああ、人間はみんな、臭くて汚い。醜悪で猥雑で、気持ち悪い。なかでも男はみんな、特に臭くて汚らしいし、太った中年の女たちは、特に醜く無様（ぶざま）だ。どうしてあたしは、こんなところにいるんだろう。いつまで、ここにいなければならないんだろう。いっそ今、この瞬間に全人類が滅びてしまえば、地球の上は、よっぽどきれい

になるだろうに……。

あのころは、世界のすべてがあたしを脅かした。周り中から汚いものが襲いかかってくるような気がした。なにもかもが、汚らわしく厭わしかった。

でも、あれはみんな、過ぎたこと。今はもう、あんな思いをする必要はない。

そう、あれはきっと、生まれる前の、悲しい前世のできごと。今、あたしは、無垢な赤んぼうとして、新しい世界に新しい生を受けた。きっとこれから、暖かい家族の愛に包まれて健やかに育まれ、もう一度、幸せな子供時代を迎えるのだ。

ああ、なんて気持ち良く揺れるんだろう。ゆるやかな川を、小舟に乗って下っているみたい。せっかく目が覚めたのに、また、眠くなりそう……。

そうだ、あたしは赤ん坊だから、きっと今、小舟じゃなくて、揺りかごに揺られているんだ。ううん、揺りかごじゃなくて、お母さんの腕の中にいるのかしら。

違う。お母さんの腕じゃない。お母さんのよりももっと太くて逞しい、この腕は……？

うっとりとそこまで考えた里菜は、ふいに我に返って、ぎょっとした。

（何、これ？　どういうこと？　あたしは赤ん坊じゃないし、夢を見ているわけでもないわ。じゃあ、今、あたしは、何がどうして誰に抱かれているの？）

混乱した里菜は、あわてて記憶をたどった。

しだいに頭がはっきりしてくると、少し前の記憶が蘇った。

どうやら自分は、さっき誰かを――たぶん、今、自分を抱いて運んでいるこの人を――ひっぱたいたらしい……。

その時にちらりと見た見知らぬ若者の、あっけにとられた顔を思い出して、里菜は申し訳なさと恥ずかしさに、目を閉じたまま赤面した。

（いやだ、あたし、なんであんなことしたんだろう。きっとあの人、倒れてたあたしを助けてくれようとしてたに違いないのに……。あの人、とてもやさしい目をしていた……）

あの時、若者の顔を見たのはほんの一瞬で、顔立ちなどはそんなにはっきりと見たわけではなかったのに、そのまなざしが暖かく真摯で害意を感じさせないものだったことだけは、不思議と一瞬で見てとれたのだ。里菜は薄目を開けて、自分を抱いているのがさっきの若者であるらしいことを確かめると、ほっとして再び目を閉じた。意識を取り戻したとはいえ、まだ中ばもうろうとした状態で、とても歩けそうにはなかったのだ。

（どうせ歩けないなら、この人には重くて悪いけど、まだ気を失ったままのふりしてよう……。そうでもしなきゃ、とてもじゃないけど、恥ずかしくていられないもの……。一度この人と口きいちゃったら、その後ずっと、どんな顔してこんなふうに抱かれていればいいか分からないじゃない）

若者からは、いきものの匂いがした。

たぶん衣服の素材なのだろう濡れた羊毛と革の匂い、衣服にしみついた何か獣くさい匂い、その中でもはっきりと嗅ぎ分けられる懐かしい犬の匂い、それから、若者自身の汗の匂い。

どれも決していい匂いとは言えないが、不思議と不快には感じられなかった。

それは、大地に生きるいのちの匂いだった。

若者のぬくもりが、里菜を包んでいる。

もう、何も不安は感じなかった。この、見知らぬ若者の腕の中が、世界で一番安心な場所のように思えた。小さな子供の時代を過ぎて以来、人の身体のぬくもりがこんなにも心をくつろがせるものだということを、そういえばもう長いこと忘れていた気がする。胸いっぱいに広がる甘やかな安堵感に、なぜだか涙ぐみたいような気分になった。

（あったかい……。さっきまで、あたし、もしかしたら自分は天国

にいるんじゃないかと思ってたけど、そうじゃなかったんだ。だって、この人はこんなに温かくて、ちゃんと手で触ることができて、たしかに生きている人だもの。……そう、ここは天国じゃなくて、きっと、別の世界――どこか素晴らしい、まるで物語のような別世界に違いないわ。そしてここでなら、生きるのは、きっとそんなに辛くない。だって、ここでなら、あたしはこうして、『向こう』ではあんなに厭わしく感じていたひとの身体のぬくもりを、生命の匂いを、こんなにもやさしく、懐かしいものに感じることができるのだから……。きっとここそがあたしの、ずっと忘れていた本当のふるさと。あたしの、本来の在るべき場所。だからあたしは『向こう』では、いつも自分が本当にはその場所に属していないような違和感を抱いて生きてきたんだ。でも、もう大丈夫。あたしは今、遠いふるさとに、やっと帰り着いた……）

若者の腕の中で、夢うつつにそんなことを思いながら、里菜はいつしか、ふたたび眠りの淵に引き込まれていった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第二場（3）

アルファードは、かつてレグル老のものだった小さな家に、今は一人で住んでいる。灰色の石積みの、質素な家である。歴史の古いこの村で、そっけないたたずまいのその家は特別古いわけではないのだが、村の他の家々と違って魔法による手入れが行き届いていないので、ひときわ古びて、少しばかりみすぼらしく見える。部屋は二部屋。台所と居間と食堂を兼ねた中央の広い部屋と、その横につけたしのようについている小さな寝室だが、かつてレグル老が使っていたその寝室は、今は全く使われていない。アルファードは、今でも、子供の頃にレグル老が居間の壁際に作りつけてくれた簡単な寝台で寝起きしているのだ。

独り暮らしでも、特に寂しいとは思ったことはない。調理用と暖房を兼ねた武骨な石積みの暖炉の前には、いつも、忠実なミュシカが寝そべっていて、アルファードと目が合うと、必ず軽く尾を振って応えてくれる。

男の独り暮らし、しかも魔法が使えないとあって、家事のことを心配をするものもいるが、彼は、努力と工夫と体力で、大抵のことは自分でこなしてきた。そのことには、いささかの自負がある。

魔法を使えるものたちは、魔法が日常生活に必要不可欠なものであると、あらためて考えるまでもなく無条件に信じているが、その実、たいがいのことは魔法なしでも、多少の手間ひまはかかるがそれなりになんとかなるものだというのが、彼がこれまでに探り当てた、世界の隠された真相だ。ただ、人より余計に頭を働かせ、あとは身体を惜しまずに汗を流せばいいのである。

幸い、体力は人一倍ある。だから、たとえば水なら、ただ、何回でも桶を持って坂を上り下りして川から汲んでくれば済むまでのことだ。

根気強く几帳面な性格ゆえに細かい手作業も別に苦にならないし、

魔法に代わるちょっとした工夫を思いつく才気も豊かで、数々の小発明を、ひそかに誇りにしてもいる。

とはいえ、そんな彼の生活が他の村人たちの暮らしぶりと比べてひどく不便で少々非文明的なものであることは否めなかったが、彼にとって、なるべく人手を頼らず家事をこなすことが、自分は魔法が使えなくてもちゃんと一人前にやっているのだというひそかな自負心の拠り所になっているのだ。

そんなささやかな独り住まいの、質素な住み処に帰り着いたアルファードは、暖炉の前の敷物の上に横たえた少女を見下ろして、我にもなく困惑していた。

手には、洗い上りの自分のシャツを持っている。少女に着せるつもりで、一番マシそうなものを探し出してきたのだ。

そこまではよかったのだが、その先が困った。

いくら子供とはいえ、女性は女性だ。気を失っている間に断りもなく服を脱がせたりしたら、非常な失礼にあたるのではないか……。

もちろん、この際、そんなことを言っている場合ではない。

九月とはいえ、高原の夜は冷える。このままでは確実に風邪をひく。肺炎でもおこしたら、命にかかわりかねないのだ。どう考えても、濡れた衣服は早急に脱がせるのが適切なのである。何もやましいことはない、理にかなった当然の処置だ。――それは、分かっている。

分かっては、いるのだが……。

アルファードは途方に暮れた。

＊

亜麻色のお下げ髪を背中に垂らした若い娘が一人、焼き菓子の包みと角灯を手に、宵闇に閉ざされかけた村の小道を急いでいた。

ふくらはぎまでしっかり隠す落ち着いた色合いのスカートに洗いざらしの清潔な前掛けを重ね、きちんとした未婚女性の手本のよう

に慎しみ深く装ったこの娘は、村中でしっかり者と評判の、ヴィーレことマルヴィーレ。アルファードが子供の頃から何かと世話になってきた隣人一家の、十九才になる一人娘である。

ふくよかな身体付き、豊かな胸の、母性的な雰囲気の娘だ。

同じ年ごろの娘たちの中でも、背は、わりと高い方。

落ち着いた性格の、分別のある娘で、病気がちな母親に代わってほんの子供の頃から有能な主婦の役をこなしてはきたが、長いお下げが一足ごとに背中で弾むその様には、夢見る少女の面影が隠し切れずに顔を出す。つつましいその装いに、バラ色の頬が娘らしい華やぎを添える。どんな慎みも、恋する乙女の輝きを封じ込めてはおけないのだ。彼女の足取りが軽く、頬がバラ色に輝いているのは、恋しい人に会いに行く、胸のときめきのためだから。

ヴィーレの父は、寄り合いで選ばれた村の世話役である。そのこともあってヴィーレの両親は、変り者の隣家の老人に引き取られた幼い＜マレビト＞のことをずっと心にかけ、半分は自分たちの息子のように思ってなにくれとなく援助してきたし、レグル老の死後は進んでアルファードの後見人を買って出もした。だからヴィーレは、アルファードとは名実ともに兄妹同然の仲だ。レグル老が死んでアルファードが一人暮しになった当初など、ヴィーレは、母親から託された差し入れを持って毎日のようにアルファードの家に通い、アルファードが遠慮するのも構わず、せっせと身辺の世話を焼いたものだ。

そのアルファードを、いつから兄としてではなく意識するようになったのか、ヴィーレは覚えていない。幼い胸の奥に自分でも気付かぬうちに芽ばえていた密かな思慕は、いつしか切なく胸を焦がしていたのだ。

たぶんアルファードも、ヴィーレの気持ちに気付いているだろう。けれど、気付いても応えられないから、気付かないふりをしてくれているのだと、ヴィーレは知っている。だからヴィーレは、自分の想いを決して口に出さない。口に出せば、自分が兄としてのアルフ

ァードをさえ失ってしまうことが、ヴィーレにはわかっているのだ。
それでもヴィーレは、今日もこうして、アルファードの元へ急ぐ。しっかりと胸に抱えた包みの中の焼き菓子は、秋祭りの二日目の夜に食べる伝統の行事菓子だ。今ではこの村でも自分の家でこれを焼くところは減ってしまったのだが、ヴィーレは毎年、余るほど焼く。そうして、必ずアルファードのところに持って行く。表向きは『たくさん焼きすぎたからおすそ分け』だが、本当は最初から、アルファードのために焼いているのだ。祭りに限らず、彼女は年中、焼き菓子を焼いてはアルファードのところへ持っていく。子どもの頃、アルファードは、甘い焼き菓子が好きだった。今はアルファードは、菓子などあまり食べないのだが、せっせと焼いて持ってきてくれるヴィーレにはそのことを言えずにいるので、ヴィーレはいまだに、彼はそれが好きだと信じている。
（いそがなくちゃ。あんまり暗くなってから行くと、ファードにまた叱られるわ）
瞬き始めた一番星を見上げて、ヴィーレは足を早める。アルファードの家は、村の中心部から少し離れた丘の上にぽつんと建っているので、一応は隣家であるヴィーレの家からでも、少々時間がかかるのだ。
アルファードはいつも、ヴィーレに、夜道のひとり歩きは物騒だと注意している。でもヴィーレは、しばしば、暗くなる頃アルファードを訪ねる。そうすると、帰る時はアルファードが家まで送ってくれる。
無口なアルファードと、ただ黙って肩を並べて家までの短い道のりを歩くのが、ヴィーレは好きだ。
（あたしたち、恋人どうしみたいに見えるかしら）などと思いながら、宵闇の中で頬を赤らめることもある。
けれど、ヴィーレにとっては少々さみしいことに、ふたりがそんなふうに並んで夜道を歩いていてさえ、村中の誰も、ふたりの間柄を誤解してくれないのである。それも、たぶん村中の人が、ヴィー

レの秘めた想いを知っているだろうというのに。
そもそも、ヴィーレの両親にしてからが、娘のアルファードへの想いに気付いていながら、彼女がこんな夜分にアルファードのところへ行こうとするのを、止めようともしないのだ。それは、彼らが品行方正なアルファードをそれだけ信用しているということでもあるが、つまりは彼らも、アルファードにとってヴィーレがあくまで『妹』にしか過ぎないことを、よくよく理解しているのである。
それでもヴィーレは幸せだった。
誰もが認める人格者であり、村中の若者たちから頼られ、慕われている人望厚いアルファードが、本当は孤独を好み、容易には人に心を開かない性質であることを、ヴィーレは知っている。そのことが、ヴィーレは、心の底では、ほんの少しうれしい。彼と親しく付き合うことが、自分だけの特権のように思えるからだ。
事実、彼をファードという愛称で呼ぶのはヴィーレだけだ。他の村人は皆互いを短い愛称で呼びあっており、正式名などほとんど忘れられている者も多いというのに、＜女神のおさな子＞であり、本人は別に特別扱いを求めるわけでなくともどこか常人離れした孤高の印象があるアルファードだけは、普段から正式名を呼ばれているのだ。
――そう、自分は誰よりもアルファードの近くにいるのだ。無口なアルファードの内面を、誰よりもよく知っているのだ。感情を表に出さない彼の孤独を、屈託を、誰よりも理解しているのだ。たとえ妹としてでも、こんなにアルファードの近くにいることを許される女の子は自分だけだ――。
そんなふうに、ヴィーレは、信じていた。
そう信じることで、それなりに幸せでいられた。
そう、この夜、アルファードの家の、少しぎいぎい言うお馴染みの扉を押し開けた時までは……。

「ファード、入っていい？　お祭りの焼き菓子、持って来たのよ！」
明るい声とともに扉を開けたヴィーレは、口に手を当てて、その場に立ちすくんだ。
扉の向こうにヴィーレが見たのは、彼女にとっては、かなり衝撃的な光景だった。
見慣れたアルファードの部屋の暖炉の前に、見知らぬ少女が横たわっている。しかも、いとしいアルファードは少女のかたわらに膝をつき、あろうことか、手をのばして少女の服を脱がそうとしているらしい……。
これがヴィーレでなくて、もっと感情的な娘だったら、訳の分からない叫び声を上げてこの場を飛び出してゆき、あとでアルファードが何と言い訳しても一切聞こうとしない、といった展開になるところであるが、ヴィーレは、落ち着いた、実際的な娘だった。頭の回転も悪くない。一瞬のショックの後、ヴィーレは瞬時に状況を把握した。寝ているのがまだ子供のような少女であること、その服が見たことのないような奇妙なものであること、そして、びしょ濡れであること。
では、もしかすると、この子は……？
「ああ、ヴィーレ、ちょうどいいところへ来てくれた……」
顔を上げたアルファードは、救いの神を見るような目でヴィーレを見た。そういえばヴィーレは、これまで一度も、アルファードに、こんな有難そうな顔で迎えてもらったことはない。
「ファード、その子……」
「ああ、その……。さっき、見つけたんだ。＜女神の淵＞で。気を失って、倒れていた」
ああ、やはりそうなのだ。世界でただ一人の＜マレビト＞だったアルファードが、ついに、同じ＜マレビト＞を、自分の同類を、見出したのだ――。
ヴィーレは、その時、自分が、『アルファードの一番の理解者』、『アルファードに一番近い女の子』の地位を、確実に失うだろうこ

とを知った。それは、淡い、けれど底知れず深い、喪失の予感だった。

けれど、やさしいと同時に強い心の持ち主である彼女は、その、足下の大地が揺らぐかのような絶望を、ほとんど顔には出さなかった。出さずに、済んでいたと思う。

その証拠にアルファードは、ヴィーレの一瞬の微妙な表情になど気づいた様子もなく、

「それより、ヴィーレ、頼みがあるんだが……。この子の服を、これに着替えさせてやってくれないか。それと、髪の毛や身体も、拭いてやって欲しいんだ。俺は、あっちの部屋で、この子を寝かすように寝台を整えてるから……」と、持っていたシャツをヴィーレの手に押しつけるなり、ヴィーレの気持ちを知ってか知らずか、そそくさと部屋を出ていってしまったのだ。

その、逃げるような後ろ姿を見送って、

（ファードってば、この子を着替えさせようと思って、女の子だからって困ってたんだったのね）と、小さく笑ったヴィーレは、床の上の少女に目を移した。

こうしてあらためて見ると、少女は、最初に思ったほど子供ではなかった。小柄で童顔だし、痩せすぎのために身体つきも子供のようだが、たぶん十五、六にはなっているだろうと、女同士ならではのカンでヴィーレは見当をつけた。それなのに、ドラゴンのことはよく知っていても女の子にはまるきり疎いアルファードは、たぶん、この子を、小柄さに目を欺かれてまるきりの子供だと思っているのだろう。そうでなければ、彼の性格からして、この子を自分の家に運び込んだりせず、最初からヴィーレの家にでも連れて来ただろうはずだから。

（ファードはこの子を、ここに置くつもりでしょうね。部屋も空いてるし、同じ＜マレビト＞どうしだもの、みんなもそれが当然だと思うだろうし……）

勝手知ったるアルファードの台所をきびきびと動き回ってタオル

やタライを用意しながら、ヴィーレは、内心の痛みを押し殺した。
（もう、今までのような、たとえ妹としてでもファードを独占できた日々は、終わるのかもしれない。あたしとファードとのあいだの、中途半端だけど幸せだった関係は変わってしまうのかもしれない。でも、だからって、この子を恨んじゃいけないわ。この子は何も悪くないんだもの。あたしはこの子に、きっと、親切にしてあげよう。うんとやさしくしてあげよう。突然、誰も知っている人のいない別の世界に来てしまったら、それは心細いはずだもの……）
少女の額に張り付いた髪をそっと払ってやりながら、ヴィーレは寂しい笑みを浮かべ、そしてすぐに、意識のない人を着替えさせるという、女手一つには非常に厳しい実際的な難事業に向けて頭を切り替えた。アルファードに手助けを求めることは、絶対に、したくなかったのだ——少女のためにも、自分のためにも。

＊

顔を拭かれて、里菜は目を覚ました。薄く目をあけると、自分よりいくつか年上らしい若い娘が目に入った。かたわらに置かれたタライでタオルをゆすいでいる娘は、里菜が目を開けたのに気づかないようだ。何か言おうと思ったが、口を開くのも大儀で、里菜は黙って娘を観察した。
やさしそうな人だ。どうやら、外国人らしい。一本の緩いお下げに編んで背中にたらした、亜麻色の長い髪。忘れな草のような、春の空のような、やわらかな水色の瞳。クリームのように白い肌に、ふっくらしたバラ色の頬。豊かな胸に、まろやかな肩。特に美人ではないが、人をほっとさせるような素朴な愛らしさの、ややぽっちゃりした大柄な娘だ。
娘の着ている服は、昔の西洋の田舎といった感じの、質素で古風な長めのワンピースだった。お菓子かなにかの箱に描かれたかわいい田舎娘が絵から抜け出して動き出したみたいだと、里菜は思った。

自分は、別の世界ではなく、どういうわけでか、どこか古風な外国の田舎にでも来ているのだろうか……。

けれど、娘の服には、どこか奇妙な違和感があった。デザイン自体は、たしかに、どことなく少し変わった、見慣れないものではあるが、それでも、違和感を与えるよりは、むしろ、なぜか、懐かしさを感じさせる。それなのにやっぱり、なんだか、どこかが違うのだ。どこが変なんだろう……。

だが今は、身体がだるくて、やけに眠くて、そのことについて考える気力もなかった。腕まくりした娘の白い肘に小さなエクボが出来るのがなんとも愛らしく、里菜は、それにうっとりと見とれて、（かわいい人だな……）などと思いつつ、幸福な気持で、また、まぶたを閉じて、深い眠りにおちた。

そのまえに、なんだか、その娘がなにも無い空中から水を出してタライに注ぐのを見たような気がするが、眠さにまぎれて深く考えられなかった。きっとなにかの見間違いだったのだろうと里菜は考え、それも、眠りの中で忘れてしまった。

眠りの底へと落ちていく途中で、遠い呼び声を、微かに聴いたような気がした。

夢の中へと紛れ込む、深く、昏いその声を、意識の届かぬ心の底で、里菜は昔からよく知っていた。

それは、里菜がよく見る夢の中でいつも聴くのと同じ声だったのだ。

里菜があの夢を見るようになったのはいつのころからだろう。繰り返し見る夢なのに、いつでも、目が覚めると忘れてしまう。けれど、覚めている時は忘れていても、また同じ夢を見る度に、自分がその同じ景色をもう何度も見ていること、その同じ声をもう何度も聴いていることを思い出すのだ。

里菜の夢に、いつも繰り返し訪れるのは、全ての命の死に絶えた虚しいまでの清浄の土地のイメージだった。たぶん、それは、人類の滅びたあとの風景なのだ。

里菜がいるのは、古代の神殿を思わせる白い廃墟だ。きっと、山の上なのだろう。四方には、なにもない。ただ、一面の空。

そこにあるのは、痛いほどに清らかな風と、ガラスの破片のようにキラキラと空の高みから降り注ぐ、悲しいほどに明るく澄んだ陽光だけだ。

崩れかけた円柱に身を凭せかけ、里菜は空を見ている。

『これでいいのだ。すべての穢れは払われた……』

人間ではない誰かの声が、里菜に告げる。

天上の神殿の廃墟で風と光だけを食べて、里菜の身体は透き通り、いつのまにか肉体は消えて、里菜は虹に変わっている。そして、消える。

（これがきっと、あたしの望んだこと。そうよ、みんな、消えてしまえばいい。滅びてしまえばいい。このあたしも……）

最後に残った里菜の意識が、そっと呟く。

それは、寂しく空虚な光景だった。が、なぜか抗いがたい魅力で、里菜の心に、予言のように啓示のように、繰り返し示されるのだった。

その、廃墟の夢の中で何度も聴いた人間ではないものの声が、今また、眠りに落ちる寸前の里菜の心の奥底に、遠く、幽かに届いたのだ。

声は、里菜の知らない名前を呼んでいた。

――『……リーナ、エレオドリーナ。待っている。私は、待っている……』――

第一章＜エレオドラの虹＞　第三場（1）

忘れかけていたあの頃――世界が毎朝新しく珍しかった子供の頃の、その中でも特に目新しい楽しみが待っているはずだった日曜日の朝のような、新鮮な期待に満ちた気分で、里菜は目を覚ました。

目を閉じたままベッドのぬくもりを楽しむ里菜の耳に、静かな雨音が聞こえてきた。

（なあんだ、せっかくの日曜日に雨か……。今日はどこかに遊びに行く予定だったんだっけ？　だって、あたし、こんなに何か楽しいことがありそうな気持ちで目が覚めたんだから、そうだったはずよね……）

そこまで考えてから、里菜は、自分がもう小さな子供ではないこと、そこが自分の子供部屋のベッドではないことに、やっと気がついた。

（そうだ、ここ、どこ！？）

里菜は羊毛の匂いのする灰色の掛け布をあわててはね除け、硬いベッドの上に身を起こして、あたりを見回した。

（やっぱり、夢じゃなかったんだ……。あたしは、知らない世界に来たんだわ）

そこは、薄暗い、小さな部屋だった。なんの飾りけもない、殺風景な部屋だ。

長いこと使っていない部屋に特有の、胸の奥がしんと寂しくなるような、どこか懐かしく、少し湿っぽい匂いがした。

壁は漆喰のようなもので、床は灰色のレンガのような石を平らに敷きつめてあり、今、寝ている簡素なベッドのほかには、そのかたわらに木の小卓と小さな椅子がひとつ、それに、隅の方に木の箱のような家具が置いてあるだけだ。

高いところにひとつだけある明かり取りの小窓からちらりと見える空は、雨に煙って、淡くやわらかな銀ねず色を帯びていた。

天気が悪いので薄暗いが、ぼんやり差し込む光の加減からして、今はたぶん、まだ午前中だろう。

ベッドの頭が接している壁には小さな扉があって、半開きになったその扉の隙間から、暖かにゆらめく橙色の光と一緒に、鍋がぐつぐつ煮えるような静かな音と、ほのかに甘い匂いが忍び込んでくる。

自分の姿を見下ろす。

着ているのは、男ものらしい、ゆったりした生成りの長袖シャツである。

が、里菜の知っているような、普通の、いわゆるワイシャツだのポロシャツだのとは違う。形もちょっと変わっているが、もっと風変わりなのはその生地で、片腕を目の前に持ち上げてよくよく観察すると、厚手の不織布というか薄手のフェルトというか、ざっくりした風合いなのに織り目のない、不思議な布でできているのだ。

腕を持ち上げたついでに、なんとなく袖の布地に鼻を埋めて匂いを嗅いでみると、何かのハーブのような、石鹸のような、洗いあがりらしい清潔な香りに混じって、微かに、嗅ぎ覚えのある汗の匂がした。

（あの人の匂いだ……。これ、あの人の服なんだわ。じゃあ、ここはやっぱり、あの人の家かしら。隣の部屋で料理をしているのは、昨日の女の人かな。もしかして、あの人の奥さんなのかな……）

里菜は、思い切って寝台をすべり降りようとした。

と同時に、いつものくせで、ベッドサイドテーブルのあるはずの位置に片手を伸ばそうとして、はっと気がついた。もちろん、ここに、自分の部屋のいつものベッドサイドテーブルがあるわけがないのだ。当然、寝る時はいつもそこに置いておくはずの眼鏡も。

（眼鏡を忘れてきちゃった……）

里菜は、ちょっと困惑して、何度か目を瞬いた。

それから、すぐに気を取り直した。考えてみれば、眼鏡がなくても別に困らないのだ。

里菜は、普段、外出する時には必ず眼鏡をかけているが、本当は、

日常生活で不自由するほど視力が悪いわけではない。眼鏡の度も、ごく弱い。普通なら、そんなに度の弱い眼鏡で済むくらいなら眼鏡なしで済ませてしまうだろうという程度だ。

里菜の眼鏡は、『学校で黒板の字が見えにくい』と親に言い張って連れていってもらった、街の眼鏡屋の視力検査で本当は見える文字をひとつだけ見えないフリをして、やっと手に入れたものである。黒板の文字が見えにくいというのは実は嘘で、里菜はただ、眼鏡をかけたかったのだ。たぶん、自分を世界から遮断し、隔離するために。

里菜の眼鏡は、自分と世界を隔てるガラスの壁であり、外の世界から自分を守る鎧だった。

ガラス越しにしか世界を見ないため、そして自分の素顔を不用意に他人に見られないために、里菜は眼鏡をかけてきたのだ。

でも、ここでは、この世界では、きっと、眼鏡は要らない――。

わけもなく高揚した気持ちでそう思って、里菜は果敢に床に降り立った。

きっと、ここの人たちは家の中でも靴を履いて暮らしているのだろう。石の床は冷たくざらざらして、立ち上がると、足の裏が少し痛かった。

まだ少し身体がだるく、軽い頭痛があるが、特に身体に異常はないようだ。

着ているシャツの丈はたっぷりしていて、小柄な里菜の膝のあたりまであった。

そっと半開きの扉に近寄って隣室を覗くと、その向こうは、こっちよりは大分広い部屋だった。やはり質素で、飾り気はないが、こちらの部屋よりはずっと生活感があり、居心地がよさそうだ。がっしりした木の食卓や椅子、戸棚など、いくつかの素朴な家具もあって、台所から寝室までを兼ねているらしく部屋の一隅には木製の流し台のようなものが並び、別の一方の壁際には寝棚といった方がいいような簡素な寝台が据え付けられていて、その上には里菜が掛け

ていたのと同じ灰色っぽい分厚い毛布がきちんと畳んで積まれている。里菜が、自分が毛布をはね除けたまま起きてきたのを思い出して落ち着かない気持ちになったほど、几帳面な畳み方である。

正面の壁際には武骨な石積みの暖炉があかあかと燃えていて、その、暖炉の前に、火の上に釣った鍋の上に広い背中を丸めるようにして屈み込んでいる、昨日の若者らしい後ろ姿があった。

なんだか大きな人だな、と、里菜は思った。

たしかに、身体は大きかった。今は屈み込んでいるが、それでもかなり背が高いのはわかるし、見るからに逞しい、がっしりした体格で、横幅も厚みもある。

けれど、里菜が彼を大きいと思ったのは、そうした見た目のことだけではなかった。若者の後ろ姿は、そのたたずまいの静かさにもかかわらず、ほととんど圧迫感として感じられるほどの圧倒的な存在感を、抑えようもなく周囲に漂わせていたのだ。

普段なら、そうした威圧的なまでの大きさ、力強さは、ただそれだけで里菜のような人見知りがちな少女を訳もなく威嚇し、相手を敬遠させるのに十分だっただろう。

けれど、暖炉で暖かな炎が静かに踊り、鍋がぐつぐつといい匂いをさせている、この穏やかな光景の中では、若者の大きな背中は、どっしりと落ち着いて、いかにも頼もしそうに見えた。ふいに、ちょっと後ろからおぶさって甘えてみたくなるような慕わしさが胸に沸き上がってきて、里菜は自分の感情に戸惑った。もちろん、実際には、口をきいたこともない男性を相手に、いきなりそんなことを出来るわけがない。が、それ以前に、内気な自分が見知らぬ男性に対して恐怖や警戒心のかわりにそんな甘えた感情を抱くということ自体が、里菜には信じられないことだったのだ。

里菜がそっと扉を押し開けると、若者の足元に寝そべってさっきから横目でこちらを見ていた大きな茶色い犬が、ちょっとだけ頭を上げ、里菜に向かって、挨拶するようにゆったりと尾を振ってみせた。

若者が、ゆっくりと振り返った。

たぶん彼は、足元の犬と同様、里菜が扉の陰にいることに最初から気付いていたのだろう。そしてきっと、里菜に自分や部屋の様子を観察する猶予を与えるために、わざと素知らぬ振りでじっとしていてくれたのだ。ちょうど、拾ったばかりの臆病な仔猫にするような、細やかな心遣いでもって……。

若者は、扱い慣れない子供を前にして相手を怯えさせぬよう精一杯気を遣っている不慣れな大人のような、どこかぎこちない、遠慮がちな笑みを浮かべた。

「ああ、目が覚めたね。おはよう。気分は？」

安心させてくれようとしているのがすぐわかる、慎重な、やさしい口調だった。

彼の声を聞くのは初めてだ。やや低めの、深く暖かい、穏やかな声。

初めて聞いたその声が、なんだかとても懐かしいような気がした。そういえば、ちゃんと言葉が通じる。今の今まで、言葉が通じないかもしれないとことには、なぜかまったく想い至らなかったのだ。

初めてまともに向かい合った若者は、里菜より頭二つ分近く背が高かった。と言ってもそれは里菜が人よりかなり小柄なほう――というか、はっきりいうとチビで、身長は百四十五センチしかない――だからで、彼がそれほど人並みはずれて長身だというわけではないのだろう。が、姿勢が良いので、その分よけいに背が高く見える。

部屋の印象同様に飾りけのない、質実剛健そのものといった様子の武骨な若者で、茶系を中心とした地味な色の、どこか古風で風変わりな素朴な服を着て、革の長靴を履いている。

その服装は、質素というよりむしろ粗末といった方がいいほどだったが、着こなし方がきちんとしているためか、ただむやみと逞しいだけでなく無駄なく引き締まってきれいに均整が取れた体格や、人柄の折り目正しさを暗示するかのように自然にすっと背筋が伸びた堂々たる立ち姿のためか、粗末な服を着ていてもだらしない感じ

やみすぼらしい感じはしないし、洗濯も行き届いているらしく、こざっぱりしていて、不潔な感じもない。

日に焼けた顔は、特にハンサムというほどでもないが、男らしく引き締まって意志の強さと思慮深さを感じさせ、きりっとした眉の下で、暖かな暗褐色の目がやさしい。

無造作に掻き分けた、やや固そうな髪は、茶色がかった黒だ。

そういえば、昨日の女の子は青い目をしていて外国人のようだったが、髪も目も黒に近い焦げ茶色で肌も小麦色に日焼けした彼は、顔つきもどことなく日本人っぽくて、言葉が通じることに妙に違和感がない。

全体に質素で飾り気のない服装の中で、どういうわけか、袖をまくりあげた左手首に鈍い銀色の幅広の腕輪が覗いているのが不思議だが、どう見てもおしゃれに特別気を遣うような人には見えないから、この世界では、それが普通の一般的な風俗なのか、あるいは、おしゃれのためのアクセサリーというより、何か別の意味なり用途なりがあってつけているものなのかもしれない。

そして、右手には、木製の杓子を握っている……。彼は、火の上に釣り下げた鍋の中身を杓子で掻き回していたのだ。

（このひとがお料理してたんだ。独身なのかなあ……。そういえば、昨日の女の子は？）と、思ったとたん、里菜は、質問を発していた。

「あのう……。奥さんは？」

若者は、思いっきり意表を突かれた様子で、

「えっ？」と言ったきり絶句し、質問の意図を測りかねるという風に怪訝そうに眉をひそめて里菜を見返した。

二人の間に、一瞬、まぬけな沈黙が流れた。

それから、若者は、気を取り直したように口を開き直して、ぼそりと答えた。

「……いや、そんなものはいない。俺は独身だ」

とりあえず律儀に答えてはくれたが思いっきり不審そうな若者の反応に、

（いやだ、あたしったら、何をすっとんきょうなこと尋いちゃったのかしら……。こういうときはまず『ここはどこ、あなたは誰』とか尋くものと相場は決まっているのに……）と、真っ赤になった時にはもう遅い。これが里菜の、新しい世界での第一声であった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第三場（2）

火の上の鍋の中身は、何かどろどろした穀物のお粥だった。里菜はそれを、なぜか、さっき抜け出したばかりの寝台の上で食べるはめになったのだ。

「あの……。ここは？」と、二言めでやっとまともな質問をした里菜に、若者は、あきらかにほっとした様子を見せ、

「俺の家だ。イルファーラン国のイルゼール村にある。君は、昨日、気を失って、この近くの川の中に倒れていたんだ。俺はアルファード。この村で羊飼いをしている。怖がらないでくれ。君の力になりたいと思っているんだ」と答えた。その淀みない口調といい、必要なことを無駄なく伝える簡潔にして的確な内容といい、これはたぶん、里菜が起きてくる前に彼がよく吟味して用意していた、予測される質問に対する模範解答のひとつだったのだろう。

それから若者――アルファード――は、幼児をあやすような微笑みを浮かべて、いきなり、この上なくやさしく、

「ところで、君、御不浄に行きたくはないか？」と尋ねてきた。

里菜は、とっさに意味がわからず、ぽかんとしてから、一瞬後に赤くなった。赤くなりながらも自分の身体の声に耳を傾けてみたが、別段『御不浄』に行きたい状態ではなさそうだったので、小さな声で、

「い、いいえ」と答えた。

ちょっとデリカシーに欠ける人だなと思ったが、もし本当に行きたかったら、こうしてむこうから尋ねてくれなかったらすごくもじもじしなければならないところだっただろうから、そう思うと、配慮の行き届いた、心づかいの細やかな人だと、ありがたく思うべきだったかもしれない。

アルファードは鷹揚に頷き、

「そうか、それじゃ、今、寝床に食事を運んであげるら、まだ寝て

おいで。何も心配はいらない。このとおりのあばらやだが、好きなだけここにいてくれていいから、ともかく温かいものでも食べて、ゆっくり休むといい。ああ、御不浄に行きたくなったら、遠慮しないですぐに言うんだよ」と言いながら、慎重に里菜に歩み寄ると、そっと肩にかけた手で有無を言わさず里菜をくるりと後ろ向きにした。

そうして里菜は、わけがわからないまま、さっき出てきたばかりの部屋へ押し戻され、いきなり幼児のようにひょいと持ち上げられて寝台の端に座らされた。

アルファードは、シャツの裾から覗いた里菜のひざ小僧にチラリと向けた目を困惑したようにそらし、とってつけたように難しい顔をして里菜の額に手を当てながら「熱がある」というようなことをぼそぼそ言うと、掛け布を引っぱってきて足元を厳重にくるみ込んでしまった。そうしておいて、これでやっと安心だというように破顔し、木の椀によそったお粥と、消化を助ける香草のお茶だという熱い飲み物のお盆を、寝台の脇の小卓に置いてくれたのだ。

この、病気の子供のような扱いには少々異議を述べたかったが、子供の頃からあまり身体が丈夫でなく、一人娘の上に病弱ということで少しばかり過保護に育てられた里菜は、こういう病人扱いには、実は慣れていた。

お椀の中身を見やった里菜は、最初、朝からこんなどろどろしたものを食べる気にはとてもなれないと密かに躊躇した。食が細いのは子供の頃からだが、特に最近は食べることに全く興味を持てなくなった気がして、朝などはいつも紅茶一杯で済ませていたのだ。けれど、気を励まして最初の一匙を口に運んだとたん、里菜は自分がとても空腹だったことに気がついた。ハチミツ入りの粥はほんのりと甘く、お茶は爽やかで、香ばしい匂いがして、どちらもとてもおいしかった。食べ物がこんなにおいしいなんて何年ぶりだろうと思うと、なんだかすごく幸せな気分だった。

食事の後、寝台の脇に椅子を寄せて一緒にお茶を飲みながら、ア

ルファードは、慎重に言葉を選んで、里菜にいくつかの質問をし、自分も別の世界から来た人間であるらしいこと、これまでもこの村ではそういうことが時々あって、そういう客人は＜マレビト＞と呼ばれ古来暖かく受け入れられてきたこと、自分にはこの世界に現われる前の記憶がないことなどを話してくれた。

彼が、それらのことを話すのに里菜に衝撃を与えないようにと細心の注意を払ってくれているのはあきらかで、その気遣いは嬉しかったが、里菜自身は、やはりここは別の世界で元の世界に戻る方法は全く分からないのだということがはっきりしても、自分でも不思議なほど平静だった。ただ、こうなることが唯一の正しい運命だったのだという気がした。

――そう、ここそが、本当の、自分が在るべき世界なのだ。今まで自分が『あちら』の世界にいたのは、ずっと漠然と感じていた通りやはり何かの間違いで、だから自分は、『あちら』ではいつも、自分が本当はその世界に属していないとでもいうような違和感を抱き続けて、中途半端に生きて来たのだ。だからあんなに生きるのが辛かったのだ――。そんなふうに、里菜は思った。

（『あちら』の世界では自分の存在はどうなっているのだろう、両親はどうしているだろうか）などと考えてみないでもなかったが、それらの想像は今やまるで現実味を伴わず、里菜の注意は、すぐに、目の前の新しい現実に立ち戻ってしまう。

無理にでも『あちら』の世界のことをきちんと考えようと心を集中してみても、『あちら』にまつわる事柄はみな、近付こうとすればするほど遠ざかって逃げ水のように捉えどころなく、里菜の心は、どうしてもそこに焦点を結ぶことができない。

『あちら』の世界の記憶がないわけではないが、それらすべては目が覚めてから思い出そうとする夢のようにぼんやり霞んで、里菜の心に強い感情を呼び起すことができないのだ。

何か、自分の心の中に、自分の意識が『あちら』に向くことを阻む見えない障壁があるような、そんな奇妙な感覚だった。

が、そのことすら、特に気にする必要があると思えなかった。
それよりも、今ここに、目の前にあるこの世界、目の前にいるアルファードこそが、今の里菜の『現実』だったのだ。
アルファードは、里菜（りな）のことを、リーナ、と呼んだ。耳慣れぬ別世界の名前を、自分に馴染みやすい音に――たぶんこの世界にある名前に――置き換えて聞き取ったらしい。
里菜はそれを、訂正しなかった。
この人がリーナと呼んでくれるなら、自分はリーナになろう。自分はもう、この世界の人間になるのだから、『あちら』での名前なんか、いらない。この世界の人に分かりやすい名前のほうがいい――。
アルファードが、リーナ、と、名を呼んでくれるたび、里菜はうれしくなった。何度でも呼んで欲しかった。深く暖かなその声を、いつまでも聞いていたかった。
アルファードは、里菜の質問に答えて、この世界のこと、この村のこと、自分のことなどをいろいろと話してくれた。
里菜が驚いたことに、この世界は、群立する都市国家同士の戦乱の時代を経てのち、百六十年以上も前にひとつのイルファーランという国家として統一され、＜賢人会議＞と呼ばれる合議制の組織によって治められているという。
アルファードのどこか古風な服装といい、部屋の調度から窺われるほとんど博物館モノの素朴な暮らしぶりといい、『あちら』の世界とくらべるとかなり『遅れて』いるらしいこの国を、里菜は何となく、王様やお姫様が住んでいる、おとぎ話のような昔風の世界かと思いこんでいたのだが、聞いてみればなんのことはない、ただの近代国家らしい。
が、世界がひとつに統一されて百何十年も大きな戦さを知らず、しかも専制国家ではなく、よくはわからないがそれなりに民主的であるらしい議会制度があるというこの国は、それはそれで、別の意味でおとぎ話めいた、夢のような世界かもしれない。

ただ、これは里菜が何度も聞き質してやっと理解したことなのだが、どうやら、彼のいう『この世界』というのは、四方を海や山などの天然の国境で囲われた一続きの陸地に過ぎないらしい。

アルファードを含むここの人々にとって、この国の西に広がる大洋や東に広がる太古の樹海、南に聳えるイルシエル山脈とエレオドラ山の向こうというのは、里菜にとっての宇宙の果てのその向こうにも等しい意識の外の領域であるらしく、そこに行こうとも行きたいとも思わないばかりか、里菜に問いただされなければ、その向こうになにがあるかとあらためて考えてみることさえなかったらしい。

当然、そこに人間が住んでいる可能性も考えたことがないらしいが、海の向こうはともかく、陸続きの場所に他の国があって何百年も互いの存在をまったく知らずに過ごすというのも不自然だから、たぶん、そこには人間は住んでいないだろう。

アルファードは、次から次へと浴びせかけられる里菜の質問に、ときおり自分でも考え込みながらどんなことにでも大真面目に答え、様々なことを辛抱強く丁寧に、たぶんとても正確に説明してくれた。

その語り口は生真面目でもの静かで、求めに応じて自分のことをごく簡潔に語った時にもあくまで淡々としていて、その口調にただ一度だけわずかに誇らしさが滲んだのは、愛犬ミュシカについて、「ミュシカは俺が仕込んだんだ。このあたりで最高の牧羊犬だ」と語った時だけだった。

そんなふうにしばらく会話を交わしていて気づいたのだが、どうやら彼は、あまりにも几帳面で生真面目なために、どんなにズレた質問にでも、脈絡のない意図不明の質問にでも、とりあえず額面通り、いちいち律儀に答えずにいられないようなタイプらしい。真面目も度を過ごすと、時に、とぼけて見えるが、里菜は、そういうタイプが嫌いではない。自分もどちらかといえばそのタイプなので、なんとなく親しみを感じるのだ。

元来どちらかというと無口なほうであるらしい彼が、こうして自分と向き合って話をしてくれることが、里菜はとてもうれしかった。

たぶん彼は里菜が最初に彼を見て悲鳴を上げたことを気にしているのだろう、彼の動きはすべてゆっくりと慎重で、里菜を驚かさぬようにという細心な配慮が感じられたが、同時に、その身のこなしは、ただお茶をいれたり盆を運んだりという何気ない日常の動作をしているだけなのに、妙に正確で無駄がなかった。無駄がないというより、見る目のあるものが見ればこういうのを『隙がない』と評するのではないかというような気がした。

その抑制のきいた物腰が、もの静かな口調とあいまって、体格から受ける一見猛々しそうな印象を打ち消し、彼に、どこか、禁欲的で内省的な、求道者めいた趣を与えている。

この人は武骨な見かけによらず、実はとても頭がいいのに違いないと、里菜は思った。別に難しいことを話していなくても、その正確で冷静な語り口に思慮深さが滲み出て、なんとなく知的な、思索的な印象を与えるのだ。

最初、里菜はアルファードを、なんとなく自分よりずっと年上の、全くの『大人』だと思い込んでいたのだが、それはその『老成した』と言えるほどの落ち着いた雰囲気と、自分に対する子供扱いのせいで、よく見ると、顔は全然若いのだ。どう見ても、まだ二十代だろう。

しかも、その顔も、最初はうんと年上だと思っていた上に、里菜のような少女が異性として意識するには彼は逆に男っぽすぎて、いわゆる『守備範囲外』だったためにあまり気にとめなかったのだが、よく見ると、地味だがクセのない、そこそこの顔立ちである。あまり整い過ぎていないところが素朴な暖かみを感じさせるし、何といっても凛々しく精悍で、今まで関心を持ったことのないタイプではあるが、見ているうちに、こういうのも案外かっこいいかな、などと思えてくる。

ただ、薄めの唇の端のあたりに、時々ふっと、何か微かな鬱屈、あるいは自嘲の陰のようなものが漂うように思えて気になったが、それも全体の穏やかな印象を損なうほどではなく、何よりも、太陽

に暖められた大地のような暗褐色の瞳の深さ、やさしさが、里菜を惹きつける――。

（あたし、眼鏡をかけてこなくてよかった）と、里菜は、アルファードの顔を眺めながらぼんやり考えていた。

世の中には眼鏡が本当に似合う女の子もいるのだろうが、自分は眼鏡をかけていない方が少しはかわいく見えると、里菜は思っている。

だいたい里菜は、自分でもなぜかわからないけれど、眼鏡を選ぶ時、わざと、なるべく冴えない、なるべく自分がかわいく見えないようなものを選んだのだ。

だから、今は、あのダサい眼鏡をしてなくてよかった――。

とりとめもなくそう思ってから、

（でも、あたし、なんでそんなこと考えてるんだろう）と、はっとして、なぜだか、ちょっと赤くなった。

ふいに、アルファードが、居心地悪そうに咳払いをした。いつのまにか自分がぼんやりとアルファードに見蕩れていたことに気づいた里菜は、我に返って、今度は盛大に真っ赤になった。

アルファードが、不審そうに里菜の顔を覗き込んでいる。

深いところに静かな力を秘めた大地の色の瞳に見つめられて、里菜は、思わず目を伏せた。頬が燃え、耳が熱くなるのが分かる。

アルファードはその様子に困惑したように、かすかに眉をよせた。

「……というわけなんだが、君、今の話、聞いていたか？」

「え？　あの、えっと……ごめんなさい」

「いや、別に謝らなくてもいい。まだ疲れているんだろう。話はまた今度にして、とにかくまた一眠りするといい」

「えっ、あのっ、別に、もう全然眠くないから……」

「いや、眠くなくても、横になっていたほうがいい。君、顔が赤いじゃないか。熱が上がってきたのかもしれない」

「え？　そ、そう……？」

言い訳に困る赤面ぶりを都合よく誤解してもらえたらしい。その

まま誤解してもらうことにしよう――。里菜はそらっとぼけながら急いで布団にすべり込み、掛け布団を鼻先まで引っ張りあげた。

里菜は、これまで、自分がすぐ赤面するのがとても気になって、それで、もともと苦手な人づきあいにますます臆病になっていたのだが、今は、赤くなっていても、わりと平気でいられる気がする。不思議だった。

里菜が布団に入るのを見届けたアルファードが、「おやすみ」と言い置いて出ていこうとしたので、里菜は思わず呼び止めた。

「あ、あの、アルファード!?」

「なんだ?」と振り向いてくれたアルファードに何を言っていいかわからなくなった里菜は、とっさに、さっきから考えていた疑問を口にしていた。

「えっと、アルファード、歳、いくつ?」

出ていこうとするのを慌てて呼び止めてまで尋ねるほどのことではなかったが、アルファードは、例によって、律儀に即答してくれた。

「二十二だ。もっとも、ここに来た時、自分の齢も知らなかったので、おおよその推定なんだが」

そして、思い出したようにつけ加えた。

「ところで、リーナ、君はいくつだ?」

アルファードと自分が思いのほか年が近いことを知って、五歳違いくらいなら恋人に立候補しても全然おかしくないではないかとひそかに胸を弾ませた里菜は、

(わっ、あたしったら何考えてるの!)と、ますます赤くなって、慌てて頭まで掛け布団を引き上げた。

そして、掛け布団の下から答えた。

「……あたし、十七」

「えっ……」

アルファードは口を半開きにしたまま凍りついた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第四場（1）

暖かなベッドの中で薄目を開けて、里菜は、ぼんやりとあたりを見まわした。

もう眠くなんかないと思っていたのに、昼食の後でアルファードに昼寝するように言われた里菜は、しぶしぶ目を閉じたとたんにたちまち眠ってしまい、今また、目を覚ましたところなのだ。やはりまだ完全に体調を回復していたわけではなかったらしい。

目が覚めたのは、たぶん、隣室から漏れてくる静かな話し声のせいだ。

隣室との境のドアは細く開いていて、その隙間から、穏やかなオレンジ色の光に包まれてテーブルにつく二つの人影が見えた。

一方は、そう、もちろん、この家の主、アルファードだ。もう一人は……。

（そっか、ヴィーレが来たんだわ）

里菜はそっと微笑んだ。思い出し笑いである。

さっき、里菜の年齢を聞いて凍りついたアルファードが、しばらくしてやっと口を開いた時、その口から出てきたのは、それまでの落ち着き払いぶりはどこへやら、うろたえてしどろもどろの、別にしなくてもいいような弁解だったのだ。

「その……、君の服なんだが、着替えさせたのは俺じゃない。ヴィーレという隣の家の娘がちょうど来合わせて、それで……。だから俺は断じて一切、そのう……。ああ、ヴィーレはただの幼なじみで、俺とは別に何でもない……というか、妹のようなものではあるんだがそれだけで……いや、そんなことは余計な話で、別にどうでもいいんだが……」

本当に余計なこの釈明で、アルファードとの間柄がちょっと気になっていた娘の正体がわかって嬉しくなったのと、そんな余計なことまでなぜか弁明してしまうアルファードの狼狽ぶりのおかしさに、

里菜が思わずくすりと笑うと、アルファードは急に咳払いをして、
「ああ、とにかく、その……、後でヴィーレが君にちゃんとした服を持って来てくれる約束になっているから、それまで君は、まだ寝ていろ」と一方的に言い渡して、今度こそ引き止める間も与えずに、そそくさと部屋を出ていってしまったのである。
　里菜が起き出していくと、ヴィーレが親しげな微笑みで迎えてくれた。
「あら、リーナ、起きたのね。アルファードから聞いたと思うけど、あたし、マルヴィーレよ。ヴィーレって呼んで。よろしくね。あなたに、服を持ってきたの」
　里菜が挨拶をする間もなく、ヴィーレは足元の包みの中からあれこれ取り出し始めた。
「これ、お古で悪いんだけど……」
　と、言いながら、ヴィーレは取り出した服を里菜の肩に当ててみた。それは簡素な茶色の膝下丈のワンピースだった。
「あら、やっぱりこれでちょうどよかったわ。あたしが子供のころに着てたのだから、スカートはちょっと短めだけど、これくらいなら、まあ、いいわよね。他のじゃ、きっと、ブカブカだもの。ちょっと子供っぽいかなとは思ったんだけど、あなた、かわいらしいから、きっと似合うわよ」
　向かい合って立つと、ヴィーレは、里菜よりかなり背が高い。身体つきもふくよかで、彼女のお古だと、確かに、ずいぶん前のものでないと里菜には大きすぎるだろう。
「ありがとう」と、里菜はヴィーレに笑顔を返し、ごく自然にそれができた自分に、ちょっと驚いた。『あちら』にいたころ、里菜は、内気で人見知りの強い少女だった。けれどヴィーレの笑顔はあまりにやさしく、その態度があたりまえのように親しげなので、里菜もつられて、自分と彼女がすでにとても親しいような気分になってしまったのだ。
　もしかすると、それは、里菜が、この世界ではっきりと意識を取

り戻す前の赤子のようなまどろみの中で、すでに彼女と出会っていたからかもしれない。

ヴィーレは、里菜と服をにこにこと見比べながら続けた。

「これも似合うと思うけど、どっちみち一枚じゃ足りないから、今度、あたし、あなたに新しい服を作ってあげるわ。すぐ出来るわよ。あたし、そういうの、得意なの。そう、青がいいわね。あなたには、きっと青が似合うわ。もともと着ていた服も、紺色だったし……それに、あなたは〈女神のおさな子〉だもの。青は、女神さまのお好きな色なのよ。そういえば、あなたの着ていた服、洗ってきたんだけど……」と、ヴィーレは、なにか不吉なものを見るように、テーブルに畳んで置いた里菜の制服を見やってから、続けた。

「これ、着ないで、どこかにしまっておいたら？　ここでは、少し、その……、奇妙に見えるかもしれないから。それからね、靴と寝巻と、髪を結ぶリボンも持ってきたわ。それでね、お湯を使ったらどうかしら。顔なんかは昨日あたしが一応拭いたけど、髪も洗いたいでしょ？　じゃあ、あたしとアルファードは、支度をしたらそっちの部屋にいくから。着替えはここに一式置いとくわね。あ、タオルはここね」

話しながらも、ヴィーレはテキパキと動き回り、暖炉の前に敷物を広げ、タライをとりだし、石鹸やらタオルやらを並べている。

どうやら、風呂場ではなくこの部屋で、タライで行水することになるらしい。

（うわあ、お湯、こぼしたらどうしよう）と、里菜がちょっと心配になって見ていると、ヴィーレはその気持を察したかのように、

「あ、この敷物、防水だから、少しくらい水こぼしても、平気よ」

と言った。

それにしても、この人は、なんだかこの家の中のことにすごく詳しいみたいだ。ただの隣りの娘にしては、まるで自分の家のように振る舞っている。どういうことだろうか。ただの幼なじみと言われていたが、これは、やっぱりちょっと気になるかもしれない――。

あれこれ考えながら、ヴィーレの動きを漠然と追っていた里菜の目が、ふいに、大きく見開かれた。

タライの脇に膝を付いたヴィーレが、ごく何気ないようすで上に向けたてのひらを、水を掬うように合わせてタライの上で傾けると、突然そこから水があふれて、流れ落ち出したのだ。ちょうど、合わせた手の中に、水道の蛇口が出現したかのように。

（えっ、うそ、なにこれ、なに？）

里菜は、一瞬目を疑っていたが、次の瞬間、自分が見たものをはっきりと認識し、そのとたん、思わず叫んでいた。

「うそ！　なにそれ！」

同時に、水の流れが止まった。ヴィーレが、驚いてまじまじと里菜を見た。

「リーナ、あなた……」

「ヴィーレ、今の何？　なんなの、それ！　うそでしょ？」

「何って……お湯を入れただけよ」

「だって、何もないところからお湯が出なかった？」

「そりゃあ魔法だもの……」

「なに、それ！　魔法って……、あなた魔法使いなの？　うそでしょ……。なに、それ……」

里菜は呆然と繰り返した。

＊

タライに張られたお湯にタオルを浸して身体を拭きながら、里菜は上の空でそわそわしていた。手だけは機械的に動いているけれど、心は全然違うことを考えている。

なにしろ、魔法である――。

いっそ、この世界のことを何も知らないうちに魔法を使うところ

を見せられていれば、魔法の存在を簡単に受け入れられていたかもしれない。だって、何しろ、異世界だ。そんなこともあるだろう。

だいたい、物語の中などで異世界に行ってしまった人がいれば、行った先は、過去か未来でなければ、まず例外なく、魔法が存在するおとぎ話のような世界ということになっている。当然、自分がやって来たのもそういう世界だろうと、里菜も最初は漠然と予測していた。というより、期待していた。

が、アルファードの話を聞いて、実はそうではなく、ここはただの近代社会の田舎の村なのだと納得し、拍子抜けしていた矢先に、いきなり魔法である――。それも、あんな、ごく当たり前の、慣れた様子で、何の不思議も神秘もなく、蛇口をひねるような何気なさで、日常生活の中で魔法が使われるなんて――。

（うそぉ、何、これ……）

タオルをゆすぎながら、また、ぼんやりする。なんとなく、お湯をぴちゃぴちゃやってみる。このお湯も、魔法で出したものなのだ――。

さっき、自分がお湯を出したのを見て里菜に驚かれたヴィーレは、当惑して、助けを求めるように里菜からアルファードに視線を移した。アルファードも当惑したようにヴィーレと里菜を見比べ、肩をすくめて小さくかぶりを振った。

ヴィーレは里菜に向き直って、用心深い口調になって言った。

「あたしは別に、魔法使いじゃないわ。あたしのは、ただの＜普通の魔法＞だもの。リーナ、もしかして、あなたのいた世界では、こういう＜普通の魔法＞も、珍しい――めったにないようなものなの？」

「めったにどころか、ぜんっぜん、ないわ！」

力いっぱい言う里菜を見て、ヴィーレとアルファードは顔を見合わせた。

「じゃあ、君は、魔法が使えないんだな？　そして、君のいた世界では、みんながそうだと言うんだな？」と言ったアルファードの静

かな声には、押し殺した昂ぶりのようなものが抑えがたく滲んでいたが、里菜はそんなことに気づくどころではなかった。
「あたりまえじゃない！　ねえ、どういうこと？　ここではみんな魔法が使えるの？　ヴィーレが魔法使いじゃないって、どういう意味？　＜普通の魔法＞って？　普通じゃない魔法っていうのもあるの？　アルファードも魔法が使えるの？」
　せき込むように質問を浴びせかけながら、里菜は我知らずアルファードに詰め寄っていた。そんな里菜の肩を、落ち着け、というように大きな手でそっと押し止めて、アルファードは穏やかに言った。
「いや、俺は、魔法は使えない」
　一見さらりと言われたその言葉に潜む、苦いものを噛み締めるような響きに、魔法をまのあたりにしてすっかり興奮していた里菜は、気がつかなかった。
「そうか、君は、魔法について、なにも知らないのか」と、アルファードは続けた。「とにかく、まず風呂に入ってしまうといい。あとで、ゆっくり、全部話してあげよう」
　里菜は、もうお風呂どころではない気分なのだが、アルファードの言葉に、ものやわらかな中にも有無を言わせないものを感じ、あきらめて頷いた。
　どうも、このアルファードという人は、物言いはあくまで穏やかで、別段威張っていたり偉そうにしたりはしていないのだが、それにもかかわらず、一言のもとに人を従えずにはおられないような何かを持っているらしい。その言葉は、決して命令調だったり居丈高だったりするわけでなくても、なにかしら逆らい難いものがあるのだ。
　というわけで、今、里菜は、魔法の存在する異世界で、魔法で出してもらったお湯で、それどころではないはずなのにあたりまえのように入浴中なのである。
　タオルをしぼっては身体を拭くことを、ぼんやりと繰り返す。暖炉の真ん前なので、寒くはない。小さな、ほっそりした白い身体を、

揺れる炎が橙色に照らしだす。揺れる火明かりも、そのなめらかな肌の上に、濃い陰影を生むことはない。まだ女らしい起伏に乏しい、セルロイドの人形のようにすべらかで無機的な、清潔だが子供っぽい裸身である。

こんなふうに、部屋の中でタライで行水だなんて、考えてみればそれはそれでずいぶん珍しい体験なのだが、今はそんなことを面白がっているどころではない。

タライの隣には、小さな桶に、指し湯用の熱いお湯が入っている。これもヴィーレが魔法で出してくれたものだ。

が、これを出す時は、ちょっと大変だったのだ。

里菜に魔法が使えないと知ったヴィーレは、気をきかせて、お湯が冷めた時のための熱い湯を用意しておいてくれようとしたのだが、なぜか、今度は魔法でお湯が出せなかったのである。

その時のヴィーレの当惑を思うと、魔法の存在に興奮して舞い上がっていた心が少し重くなる。

ヴィーレがお湯を出せなかったのは、里菜が見ていたからなのだ。どうやら、里菜には、どういうわけか、見ているだけで他人が魔法を使うのを妨げてしまうという特殊な性質があるらしいのである。

それに気づいたのはアルファードだった。

アルファードは、ヴィーレがお湯を出そうとしている時に、里菜に後ろを向くように命じた。すると、普通にお湯が出せた。

それから、里菜は、アルファードに言われるままに、目の前に立ったヴィーレがあれこれと不思議な動作をするのを、ただ見ていた。

ヴィーレは、里菜の見ている前では、二度と魔法を使えなかった。

アルファードは、しばらく、難しい顔で考え込んだ挙げ句、ゆっくりと噛み締めるように、こう言った。

「……俺は、君には、『魔法を消す』という特別な力があるんだと思う。これは本当に特別な、ものすごく特殊な力だ。これまで、この世界に、そういう力の持ち主は、現れたことがないはずだ――少なくとも、人間の中には。が、＜マレビト＞の力については、何も

わかっていない。この世界の基準では測れない力なのだから、今までたまたまそういう力を持つものが居なかったからといって、そういう力があり得ないとは言えないだろう」

ならば、なぜ、さっきはヴィーレは魔法を使えたのかというと、アルファードは、それは里菜が魔法を魔法と認識する前に不意打ちで行われてしまったからだろうという。あまりに予想外のことで、里菜が魔法を魔法と認識する暇がなかったからだろう――つまり、里菜の存在自体が魔法を排除するのではなく、里菜の意識が魔法を排除するのだと。

そう考えると、ヴィーレが、ゆうべは里菜のそばでも魔法が普通に使えたのも、里菜が眠っていたためということで説明がつくと言うのだ。

アルファードの言うことは、里菜には、よくわからない。ヴィーレには、もっと解っていないらしい。ヴィーレは、アルファードが突然聞いたことのない異国の言葉を話し出したとでも言うように、ぽかんとしていた。

里菜は複雑な気持だった。何の取りえも特技もないと思っていた自分が、ここでは実は何やらすごく特別な力を持っているだなんて、何かすごいことのような気もするが、そのせいで自分は、見たくてたまらない魔法を、この目で見ることはできないらしいのだ。

だとしたら、何か、とっても損なことのような気もする。

それに、さっき、里菜の目の前で魔法が使えないとわかった時、ヴィーレは、ほんの一瞬ではあったが、わずかに身を引くようにして、何か不吉なものを見るような目で里菜を見たのだ。

それは、ほんの一瞬のことで、ヴィーレはすぐに、後悔したように、やさしい笑顔を里菜にむけてくれたのだが。

ヴィーレにとって魔法はあるのが当り前の慣れ親しんだ日常的な行為なのだとすれば、それが使えなくなるということが彼女に取ってひどく不自然なことなのだというのは、里菜にも想像できた。

（これって、きっと、ヴィーレにとっては、誰かに見られたら声が

出なくなっちゃうとか金縛りみたいになって動けなくなっちゃうとか、そういうのと同じことなのよね。あたしだって、そんなふうになったら、その誰かを気味悪いと思うに違いないわ）

そんなふうに魔法のことばかり考えながら、上の空で身体を拭き清め終え、ヴィーレのお古のワンピースを手にとったとき、里菜の心に、初めて別のことが浮かんだ。たぶん子供服なのだろう、ヴィーレが今着ているものよりどことなく子供っぽいデザインのその服と、自分のちっぽけな痩せた身体を見比べて、里菜は思ったのだ。

ふくよかで女らしいヴィーレが長身で逞しいアルファードと並んだところは、背の高さも釣り合いがとれていて、いかにも似合いの恋人同士のように見える。なのに、ちびでやせっぽちの自分は、アルファードと並ぶと、遠目に見たら、たぶん、大人と子供の組み合わせにしか見えないだろう。いや、近くで見ても子供連れに見えるかもしれない。

（もっと大人になりたい！）

それは、彼女が、もう何年も前から忘れていた気持ちだった。そういえば、小さいころは里菜だって、早く大人になりたかった。大人になどなっても別にたいして良いことはなさそうだと気づいてしまったのは、いつごろのことだったろう。

でも、ここでは、きっと、大人になると良いことがあるのだ。なにしろ、アルファードと並んで立って釣り合う女性になれる、それだけで充分、すてきなことではないか――。

（よし！　いっぱい食べて大きくなるぞ、なんてね。背は、もうあんまり伸びないかもしれないけど、せめてもうちょっと肉がつけば、胸も少しは大きくなって、ヴィーレみたいに女らしくなれるかもしれない……）

そんなことを思いながら、ヴィーレのお古の服を着てみたら、子供服なのに、胸のあたりがブカブカなのである。いくらなんでも、これはあんまりだ。里菜は、余った胸元の生地をつまんで溜め息をついた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第四場（2）

里菜が、そんな呑気なことを考えている時、隣室のアルファードとヴィーレは、深刻な顔で、小声で話し合っていた。

「……そういうわけで、リーナが、あの特殊な力を、必要に応じて自分で抑制できるようにならないと、非常にまずいと思う」

「そうね。さっきのあたしみたいに、彼女が見ているだけで、みんな魔法が使えなくなるのなら、彼女、この世界では、普通に暮してはいかれないわ。まわり中の人が、とっても不便な思いをすることになるもの」

（……不便なくらいなら、まだいい。たとえば、もし彼女が、目の前で見た以外の魔法まで消そうと思えば消せるとしたら。そして自分の力の影響力をよく理解しないまま、誰かに悪い目的で利用されたりしたら。そうしたら彼女は、この世界を根本から揺るがすような危険な存在になりかねない。そもそも、魔法を消す力などというのは、人間の領域に属する力ではない。神々の領域に属するべき力だ）

その懸念を、アルファードは、口には出さなかった。生まれた時から魔法を当たり前のものとして受け入れてきたヴィーレに、聞かせるべきことではないように思えた。聞かせても理解できないだろうと、わかっていた。

自分がこういうことを考えることができるのは、魔法が使えないからだ。あたりまえとして魔法が使えるものには、これらは、理解不能な観念だろう。普段は忘れているが、自分はやはり皆とは違うのだと、アルファードはあらためて思い知った。

自分が本当に皆が言うように他の世界から来た人間なのか、それとも、ただ記憶を失っているだけで本当はこの世界の人間なのか、それはわからない。だが、いずれにしても、

自分には、魔法が使えない。その結果、他の人は空気のようなあた

りまえのものとしてほとんど意識もせずに受け入れている魔法の存在を、自分は常に意識してきたし、魔法について、たぶん他の人は考えないだろうようなことを、いろいろと考えてきた。

この世界に生まれ育って魔法の存在を当たり前だと思っている人間には多分絶対に理解できないことが、自分には理解できる――。それは、優越感ではなく、苦い感情だった。

自分以外に、この概念を理解してくれるのは、たぶん、里菜だ。

アルファードが里菜に魔法について何も話していなかったのは、ひとつには、彼にしてみれば魔法の存在自体は話すまでもない当然のことだったからだし、また、自分が魔法を使えないことや＜マレビト＞に期待される特別な力については、知らない世界に来たばかりでショックを受けているはずの里菜に対する配慮として、里菜の魔法の能力が未知数である今の段階で不用意に触れるべきではないという判断もあったからだ。

もちろん、里菜が魔法を使えるのかどうかは、彼にとって、『少なくとも自分の名前は覚えているらしい彼女がもとの世界の記憶をどこまで持っているのか』という彼自身の素姓に関わるかもしれない問題と並んで大きな関心事だったのだが、

（今はまだそういう話題を持ち出すべき時ではない、なに、俺の素姓など今まで十数年間も知れなかったのだ、あと数時間くらい知れないままでもどうということはない。まずは彼女を落ちつかせ、安心させることが先決だ）と、はやる心を抑えて、ずっと質問を我慢していたのだ。

それが彼女をあんなに驚かせる結果になろうとは思ってもみなかったし、彼女が魔法の存在自体にあれほど驚いたということは、彼にとっても驚きだった。

（では、この世の外のどこかに、魔法というものが存在しない別の世界があるのだ。だとすると、俺もそこから来た人間なのだろうか。もしかすると彼女は、俺がずっと密かに追い求め続けてきた俺の出自を明かしてくれる存在となるのかもしれない。女神はついに俺の

もとに、俺の存在の謎を解き明かして俺を本当の俺自身にしてくれる使者を遣わしてくれたのかもしれない……）

そんな思いをひそかに巡らせながら、アルファードは、注意深く付け加えた。

「いずれにせよ、あの子の扱いには十分な注意が必要だろうな。とにかく、あの子は当面俺が預かることにする。魔法を消してしまうんじゃ、それしかないだろう？」

「そうよね、それしかないわよね……」と言いながら、ヴィーレはそっと目をそらした。

＊

入浴を済ませ、身支度を整えた里菜は、約束通り、ふたりから魔法のことをいろいろと話してもらった。

魔法には＜本物の魔法＞と＜普通の魔法＞の二種類があり、＜本物の魔法＞の力の持ち主だけが＜本物の魔法使い＞、または単に＜魔法使い＞と言われること。神話によると、この世で最初の＜魔法使い＞は、女神の恋人”アルファード”だったということ。

女神の寵を受け山頂の神殿に迎えられた彼は、女神から、特別に魔法の力を授けられ、＜本物の魔法使い＞となったという。そして、心優しい若者であった彼は、自分が得たそのすばらしい力を下界の同胞たちにも分け与えたいと願い、女神は彼の仲間を思う熱意にほだされて、ついにはそれを許した。

が、女神が人類に許したのはアルファードに授けたような＜本物の魔法＞の力そのものではなかった。＜本物の魔法＞は本来神々の領域に属する超自然の力であり、いくら女神が幼い人類を我が子のようにかわいがっていようと、そのような力を不用意に人類に分け与えることは、幼児に火を与えるほどに危険なことだったのだ。

女神は、人類のために、＜本物の魔法＞のなかから小規模で危険が少なく生活に役立つようなものをいくつか選び定めて、それと同じような現象を起こすための、ごく限られた力を人類に授けた。

それが、魔法の起源に関する神話である。

そして、今、この世界で現実に＜本物の魔法＞を使えるのは、その世界からやってくる＜マレビト＞だけなのだという。

＜マレビト＞がなぜそのような力を持つのか、誰も知らない。

そもそもそれが神話に言う＜本物の魔法＞と同じ力であるのか、本当のところはわからない。

が、彼らが特別の力を行使するのは確かで、その力は神話や伝説の中の＜本物の魔法＞そのものにしか見えないから、自然、彼らの力は＜本物の魔法＞と呼ばれ、彼らは＜魔法使い＞と呼ばれることになる。そして、この村では、「＜本物の魔法＞は本来神々に属する力であり、女神だけが誰かに与えることができるものだから、その力を持つものはすなわち女神に嘉されしもの、聖なるものであるはずだ」という考えから、＜マレビト＞は、村に恵みをもたらす女神の申し子として尊ばれ、歓待されてきた。そして、これまでの＜マレビト＞たちは、その期待に違わず、その特別な力で、この村や、時にはこの世界全体に、様々な幸運をもたらしてきたという。

ところが、その出現から言って間違いなく＜マレビト＞であるはずのアルファードは、なぜか、＜本物の魔法＞どころか、逆に一切の魔法が使えないのだという――。

そこまで聞いてはじめて、さっきアルファードが『自分は魔法が使えない』と言ったときにはそれがどんなに例外的なことかを知らなかった里菜も、魔法について語る時のアルファードの口調に混じる微妙な抵抗感の意味を察した。そしてアルファードの薄い唇の端にこびりついている微かな苛立ちと焦燥の意味が分かったような気がした。

どうやらここでは別の世界からやって来た人間というものが意外と普通に受け入れられているものらしいと、里菜はちょっと安堵し

ていたのだが、どうも、＜マレビト＞であるというのは、別の意味で、やはりなかなかに大変なことらしい。

そして、よく考えてみれば、一応＜マレビト＞に相応しくある種の『特別』な力は持っているらしい里菜も、生活の役にたつ＜普通の魔法＞が使えないことではアルファードと同じだ。その上、自分の持っているらしい『特別』な力は、この国で暮していくのには、むしろ邪魔になるものらしい。この世界で、魔法が普通に生活に浸透していることを知れば知るほど、そのことがわかってくる。

自分が、そこにいるだけですべての魔法を無効にしてしまうとすれば、それは、『あちら』の世界の感覚でいえば、里菜の行く先々で電気が止まってしまうとかコンピュータがダウンしてしまうとかいうのと同じなのではないだろうか。そんな人間がそこらを歩き回ったら、そこの人々の生活は、大混乱するはずだ。

考えてみれば、とんでもないハタ迷惑である。

どうやら自分は、このままでは、村の人々の生活の中に入っては行けないらしい。ここで生きていくためには、自分のこの変な力を、なんとか抑える必要があるらしい……。

と、思っていると、アルファードも、そのことに言及して、こう続けた。

「……だから、君はなんとかして、その力を必要に応じて抑えられるように練習しなければならない。俺とヴィーレが手伝おう。きっと、できるようになるだろう。それまでは、とりあえず、ここに居ればいい。いや、もし君がそれでいいと思えばの話なんだが……。俺はもともと魔法が使えないんだから、そういう面では、君がいても生活に影響がないだろう？　ほかの、たとえばヴィーレの家では、そうはいかないんだ。わかるね？」

なぜか言い訳がましく口にされたその言葉に、里菜はちょっと驚いてアルファードを見た。

彼がここに居ろと言ったことに驚いたのではない。彼女は、最初から、当然ここにずっと置いて貰えるものと思い込んでいたので、

アルファードのほうはそれを当然とは思っていなかったらしいことに驚いたのだ。

里菜はアルファードの言葉に勢いよく頷いて、にっこりした。

どうやら、この、はた迷惑な力のおかげで、自分はここに置いてもらえることになったらしい。だったら、この力もまんざら無駄ではないのだ。

（そうか、あたしは、この世界では、アルファードとしか暮せないんだわ。こういうの、『割れ鍋にとじ蓋』って言うのよね！）

あまりロマンチックな表現とは言い難いが、里菜の貧しい語彙の中では、これ以上的確にこの状況を言い表せる言葉は他に思いつかなかったのだ。

まあ、それはそれとして、それなら自分はこのまま力を制御出来ないままでもかまわないと、里菜は思った。

村の他の人と混じって普通に暮らせなくても、アルファードのそばに置いてもらえさえすれば、里菜はそれでよかったのだ。

この世界で最初に出会って、やさしくしてくれたアルファードを、里菜は、もう、いつのまにか、幼児が親を頼るように信じ切り、頼り切っていた。

（アルファードがそばにいてくれるんなら、あたし、なんにも怖くない。アルファードさえいてくれれば、この世界で、あたしに悪いことなんて起こるはずない）

何の根拠もなく、里菜は、そんなふうに確信していた。

突然『別の世界』に来てしまって、帰る方法もわからないというのに、里菜は、自分でも意外なほど平静に、ただ、ありのままに事態を受け入れることができた。

驚きも混乱も焦りも、なぜかまったく感じなかったし、そんな自分を不思議だとも不自然だとも思わなかった。もとの世界に帰る方法が分からなくても、『帰りたい』とも『帰らなくてはならない』とも思わないのだから、何も慌てる必要はないではないか。

里菜は、元来、あまり積極的な性格ではない。内向的で、変化を

嫌い、慣れ親しんだ自分の小さな世界に固執するタイプである。
　そんな里菜が、見知らぬ別世界で、こんなに安心していられるのは、その世界も、そこに住む人々やその生活も、どうやら自分の世界とさほど違わず、なぜか言葉も通じるということのほかに、アルファードという、やさしく力強い、頼もしい保護者役を得たからなのだ。
（あたしたちは、世界でただふたりきりの＜マレビト＞で、しかも、『割れ鍋・とじ蓋』コンビなんだ！　あたしがこの世界で最初にアルファードと出会ったのも、きっと、偶然じゃない。そんな偶然があるわけないわ。これって、やっぱり、運命の出会いよね！）
　すっかりそう思いこんだ里菜が、アルファードの真面目くさった講釈を聞きながら一人でにこにこしていると、ヴィーレが、突然、ぽんと手を打って、わざとらしいほど明るい声を上げた。
「あ、そうだ！　ね、ファード、昨日あたしが持ってきたお菓子、まだあるでしょ？　お茶にしましょうよ、ね！　リーナ、お菓子、食べるわよね？」
　そして、返事も待たずに立ち上がり、勝手知ったる様子でてきぱきと茶器を並べ、戸棚から取り出してきた焼き菓子を、里菜の前に、山のように置いてくれたのだった。
　薬草のお茶と共に味わうヴィーレの焼き菓子は、ヴィーレの笑顔みたいに甘くやさしく家庭的な、手作りの味がした。おいしい、おいしいといくつも食べる里菜を、ヴィーレはにこにこと眺めて、こう言った。
「気にいってくれてうれしいわ。あたしね、自分の作ったものを誰かが喜んで食べてくれるところを見るのが、なにより好きなの。今度から、いままでの倍、持ってくるわね！」
　里菜がいくつも食べているあいだ、ひとつの菓子をゆっくりとかじっていたアルファードが、その言葉に、ぎょっとしたような顔をしたが、幸いなことに、それに気づいたのは里菜だけだった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第五場（1）

午後になって、雨はあがった。雲間から秋の薄日が差し始めた。
アルファードは、夕食の材料にと、家の裏にある小さな菜園に野菜を獲りに行った。
アルファードは、畑に虫よけの魔法をかけられないので、百姓には、なれない。虫よけの魔法は農薬と違って何の害もないから彼の畑の虫食いだらけの野菜に無農薬などという付加価値がつくこともなく、彼は、自家用の野菜だけをほそぼそと作っているのだ。
里菜は、ヴィーレとテーブルに着いて、この世界のことや魔法のことをいろいろと教わっていた。
その時、窓の向こうから、里菜がそれまでにおぼろげに築き上げていたこの世界のイメージには全くそぐわない、妙に能天気な、おちゃらけた歌声が聞こえてきた。
「おーれーはァ村中でェーいっちばーん、モボだーとー言っわれーたァおっとこォー」
声は、朗々たるテノールである。美声なだけにかえって、歌っている歌がヘンなのが際立つ。
（なに、あれ……）
この世界ではああやって大声で歌を歌って歩く習慣があるのだろうか。それは困った。里菜は少々音痴なのである。
ヴィーレが、眉をよせて言った。
「いやあねえ。ローイじゃないの。きっと、新しく、女の子が村に来たって聞いて、さっそくちょっかい出しに来たのよ。そういうことだけは、村で一番、素早いんだから」
ヴィーレは窓をあけて、外をのぞいた。
「よお、ヴィーレ、お前、また、そこにいたのか。アルファードの嫁さんでもないのによお。ずうずうしい女だな。いい年しておままごとでもあるまいに、アルファードも迷惑なこった」

「うるさいわね、あたしの勝手でしょ。あなたにとやかく言われたくないわ」

ヴィーレと窓越しに応酬しながら近づいてくる陽気な大声の主を見たくて、里菜も窓辺に駆け寄り、ヴィーレの陰から外を覗いた。なにしろ、生まれて3人目に見る、異世界の住人だ。里菜から見れば珍獣並みに興味深い存在なのである。

大股で歩いてくる、妙に背の高い若者の姿が目に入った。

第一印象は、

（うわあ、電信柱が歩いてくる！）というものだった。

とにかく背が高い。そのうえ痩せているから、なおさらひょろ長く見える。

しかも、この背高のっぽの電信柱は、極彩色だ。

やたらに大きな赤い羽のついた緑の帽子、胸元をだらしなくはだけた真っ赤なシャツにズボンは紫と赤のチェック、その上、腰に巻き付けた鮮やかな黄色の布帯の端を片側に長く垂らしてピラピラとひるがえすという、目がチカチカするような服を着ている。しかもそのズボンときたら、右足は普通の長ズボンだが左足はなぜか膝上までの丈で、左足はその分、靴下が膝下まであるのだが、これがまた真っ赤だ。それだけならまだしも、右の足首にちらりと覗くもう片方の靴下はなんと緑である。

いままで、アルファードやヴィーレが着ていた、生成りや茶系を中心とした素朴で質素な服がこの世界での標準だと思っていたが、もしかすると彼らは地味好きか、でなければ貧しいのであって、金持ちやおしゃれな人は、こういう服を着ている世界なのだろうか。

よその世界の風俗に文句を言えた義理はないが、開いた口がふさがらない。

極彩色の電信柱は、大声で言った。

「アルファードは、いるのか？」

「裏に野菜を取りに行ってるわよ。でも、どうせ、ファードに用事じゃないんでしょ」

「当ったり。村の新しい仲間に、ご挨拶したいと思ってさ。そこにいるのか？」

「いるけど、あなたには会わせたくないわね。せっかくあたしたちが、よそから来た子にこの村にいい印象を持ってもらいたいと努力してるのに、一気にぶちこわしになるもの。もう、ロ―イってば、また、そのヘンなズボンはいて……。そんなズボンをはいた人がこの村の住民だなんて、あたし、恥ずかしいわ！　このあいだ、もう一度そのズボンをはいたら絶交だって言ったでしょ！」と叫ぶヴィーレの言葉に、里菜は、あの格好はこの世界でもやっぱりヘンなのだと、少し安心した。

あとでわかったことだが、この若者の服装は、里菜から見ても十分に突飛だが、この世界の感覚ではモヒカン刈りのパンク野郎に相当するくらいキテレツな格好で、大人たちの顰蹙と若者たちの物笑いの的になっているらしい。

「お前に絶交されても、俺はちっとも困らないよ！」

電信柱は、平気で怒鳴りかえしながら帽子を取り、勝手知ったる他人の家とばかりに、ドアをあけてずかずかと入ってきた。

間近に見ると、なおでかい。百九十センチは越えているのではないだろうか。ドアをくぐるのに、頭を下げていた。アルファードもけっこう背は高いが、あのドアは、普通に通っていたはずだ。

里菜は、物珍しさのあまりに人見知りも忘れて、まじまじと彼を見た。

近くでよく見れば、なかなか整った、きれいな顔立ちの若者である。だが、なぜか美貌という印象を受けないのは、いかにもいたずらっ子めいた鼻の上のソバカスと、顔全体にみなぎる溢れんばかりの愛敬のせいだろう。

熟したトウモロコシのヒゲのような茶色いクシャクシャのくせっ毛は陽に灼けて赤みがかり、目は、明るい茶色。

痩せてはいるが、ひ弱な感じはなく、いかにも俊敏そうで、活気が感じられる。

服装を除いては、全体の印象は悪くない。性格の良さがにじみでているように見える。

相手も、一瞬、まじまじと里菜を見た。

「や、あんたが、そうか……」

それから、突如、すっとんきょうな大声で叫んだ。

「お、お、おっ！　やった！　かわいいじゃん！　超、俺好み！」

（え、え、えっ。なに、なに、この人……）

里菜はあっけにとられて、思わず一歩後ずさった。

「俺、ローイってんだ。よろしくな！」

若者は、里菜の逃げ腰など気にもせず近寄ってくる。

ガサツで声の大きい男、軽薄で調子のいい男、なれなれしくて押しの強い男、というのが、里菜の『三大ニガテなタイプ』なのだが、彼は、そのすべてにあてはまってしまうらしい。そういう人たちは、知りあってみればけっこういい人だったりすることもあるが、初対面の時は本能的に警戒してしまうのである。彼も、人柄は良さそうに見えるのだが……。

里菜が、なんとなく気おされて一瞬口が利けずにいると、横からヴィーレが言った。

「あだなは、『かかし』よ！」

そのひとことで、里菜の緊張も警戒心も一挙に解けた。

あまりにも、似合ってる。いかり肩をゆらし、長すぎる手足をぎくしゃくともてあましながら歩くさまは、たしかにかかしそのものである。派手な服装も、このあだなを聞いてしまうと、かかしの服にしか見えない。さらにいえば、派手な服装にもかかわらずどこか純朴というか、素朴さを感じさせるのも、かかしにふさわしい。

里菜は、かろうじて吹き出すのをこらえた。

「あぁーっ、それを言うなよ！　イメージが落ちるじゃないか！　こんな伊達男をつかまえて、かかしとはなんだ、かかしとは！」と、喚くローイに、

「イメージが落ちるもなにも、それ以上、落ちようがないんじゃな

いの？」と、ヴィーレは言い放って、里菜のほうをむき、
「見た目だけじゃなくてね、村の広場や道端で、女の子が通ったら口説こうと思ってぼーっと立ってるようすも、かかしみたいだからよ」と、解説した。
　里菜は笑いをこらえて名乗り返した。
「あたしリーナ。よろしく」
「うん、いい名前だ。歳、いくつ？　俺、十九」
「十七」
「へえ……。も少し、下かと思った。その服のせいだな。あれ、その服……。見たことあると思ったら、ヴィーレが昔、たしか、十二、三のころに着てたやつじゃん。でも、胸のへん、ブカブカ……」
　言い終らないうちに、彼は、飛びあがった。ヴィーレが、思いっきり、脛をけっとばしたのだ。
「いてェ！　なにすんだよ、この……」
　言わせもせず、ヴィーレが叫ぶ。
「エルドローイ！　あんた、ぶしつけよ！　いくらなんでも、失礼よ！」
　里菜は赤くなって、胸の辺りをおさえた。
（ひどい！　気にしてるのに……）
　あわててローイが謝った。
「悪い！　ごめんよ！　俺、思ったこと、ついみんな口に出しちまうんだ。いや、でも、胸は小さいほうが、かわいいよ。いや、ほんとに！　胸の大きい女は、頭が悪いっていうだろ。そら、そこにいるヴィーレが、いい例だ」
「なんですって！」と、ヴィーレ。
　ますます真っ赤になりながら、里菜はしかたなく言った。
「いいの、気にしないから」
　これ以上、この話題を続けてほしくなかったのだ。
　とたんにローイが、ズカズカとさらに近づいて、里菜の頭上に長身を乗りだすようにして言った。

「お詫びのしるしにさ、俺が村をご案内するよ！」
言いながら、いきなり里菜の腕を掴もうとしたので、里菜はギョっとして、思わずもう一歩あとずさり、両手を後ろに隠してしまった。動作が大きくて急な人は、苦手だ。もの静かで真面目な話ぶり、穏やかで慎重な身のこなしのアルファードとは、大違いである。いいひとには違いなさそうだが、強引そうだし、とにかくヘンだ。
ヴィーレが、里菜をかばうように二人のあいだに割って入った。
「だめよ、勝手に！　この子はまだ、ここに慣れてないし、水につかって倒れていて、体調もまだ本調子じゃないの！　ファードが、まだ外には出すなって……」
言いかけたヴィーレを遮り、ローイは叫んだ。
「なんだぁ？　この子を連れ出すのにはアルファードの許可がいるのかよ！　アルファードはいったい何サマなんだ？　この子はアルファードの所有物か？」
「そういうわけじゃ、ないけど……。でも、この子はファードが見つけたのよ。それに、彼も『よそ』から来たんですもの、そういう人をどうすればいいか、きっと、一番よくわかっているわ」
（なんだか、拾った猫をダンボールから出していいかどうかで揉めてるみたい……。あたしって拾い猫？）
本人そっちのけで言い合いされて、なんだか情けない気分である。

「それにね、これにはちょっと、理由があるのよ」と、ヴィーレは、ちょっと声を落して続けた。

「この子の前で、あたし、魔法が使えないの。この子、魔法を消してしまうの」

「えっ。そりゃ、どういう意味だ？」

「言ったとおりよ。これはまだ、ほかの人には言わないでほしいんだけど、どうも、この子は、魔法を消すっていう特別な力を持っているみたいなの。しかも、自分でそうしようと思ってするんじゃなくて、魔法を消さないようにしようと思ってても、自分でも知らないうちにいつのまにか消しちゃうらしいのよ。だから、この子は、ちゃんと寄り合いで話し合ってみんなに正式に紹介するまでは、うかつに外に連れ出さないほうがいいって、ファードが……。あたしもそう思うわ。だって、何の拍子にどんな騒ぎが起こらないとも限らないでしょ」

「ふうん。そりゃ、ずいぶんおおごとだなあ」

ちっともおおごとそうでない口調で、彼は言った。彼にとっては、里菜にどんな魔法の力だか反魔法の力だかがあろうと、たいしたことではないのである。彼にとって重要なのは、里菜がなかなかかわいらしい女の子だということだけだ。

「じゃあさ、村の中じゃなくて、山のほうならいいだろう。今度、俺とデートしようぜ！すっごく景色のいいとこ、知ってんだ！　あ、木の実がいっぱいなってるとこも教えてやるぜ！」

元気よく言ってから、ローイは、何か気がついたらしく付け加える。

「……そのう、デートって言っても、子連れでってことになっちまうかもしれないけど」

「えっ？　子供って、あなたの……？」

「やめてくれよ！　俺、子持ちに見える？　兄貴や姉貴の子だよ。俺さ、十二を頭に十二人の甥っこ、姪っこがいるの！　いやんなっちゃうよな。鬼の兄嫁には、しょっちゅう赤ん坊のお守りをいいつけられるし、三人の姉貴はみんなこの村のなかで嫁にいってて、村の中、五分も歩けば、必ずいつのまにか甥っこか姪っこが俺にくっついてるんだよ。なにしろ俺は、この通り、優しいもんで、ガキに好かれちまってよ。今日ここに来るのにガキが一人もついて来なかったのだって、めずらしいことなんだ」

ローイは五人姉弟の末っ子で、幼い頃に母を亡くし、年の離れた姉たちに育てられたために、今でも姉たちには「あんたを育ててやったのは誰？」などと言われて、頭があがらない。そのうえ、今、彼は、第四子で長男である兄夫婦と同居しているのだが、その兄嫁まで、ローイよりそれほど年上でもないのに彼をまるで自分の息子のように思っているらしく、子供たちとひとくくりにして良く面倒を見てくれる一方、遠慮会釈もなく用事をいいつけるのである。

「あなたが子守りをさせられるのは、畑仕事を手伝わずにブラブラしてるからでしょ！」

ヴィーレは、鬼呼ばわりされた兄嫁のために、正しい指摘をした。

「うるせえ、ヴィーレ、お前、ちょっと黙ってろ！　邪魔すんなよ」

「何の邪魔よ」

「リーナちゃんをデートに誘うのだよ。な、リーナちゃん」

なれなれしい男である。

「俺さあ、あんたに一目惚れしちゃったよ。なんたってその黒い瞳がいいや。最高だよ。それに、その……」

なにやらベラベラ言い立てようとするローイを無視して、ヴィーレが里菜に囁いた。

「リーナ、ローイに騙されちゃだめよ。女の子なら誰にだって、おんなじこと言うんだから」

ローイは、それを聞きつけて叫んだ。

「なんだと、失礼な！　おんなじことなんて言うもんか。ちゃんと、

相手やその時の状況によって、毎回、言うことは変えている！　女の子を口説くには、創意工夫ってものが必要なんだぞ！」

（ヘンなひと……。すっごく、ヘン！）

里菜は、もう、あっけにとられて二人の応酬を聞いていた。

（でも、このふたり、なんだか、楽しそう……。ヴィーレって、ただただやさしい女の子かと思ったけど、けっこうポンポン言うんだ。もしかしてこのふたりって、すごく仲がいいんじゃないかしら）

里菜がふたりの言いあいに圧倒されているうちに、里菜とローイとのデートの件については、彼らふたりのあいだで勝手に合意ができたらしい。

「じゃあさ、リーナちゃん、今日はとにかくあんたの健康に障っちゃいけないから、またあらためて誘いにくるよ。お偉いアルファード大人に、あんたを勝手に連れ出したって後で文句いわれてもつまんないしさ。今度来たときは、絶対、一緒に、山、行こうぜ！　誰にも教えたことのないキノコの穴場にも特別に案内してやるから！」

（キノコの穴場だって……。こんなハデなカッコしてて、嬉しそうにキノコ採りの話だなんて……。ヘンだけど、おもしろい人）

初対面の相手にはなかなか打ち解けない彼女だが、いつのまにか、この素っ頓狂な若者に好意をもちはじめたことに、気づいていた。

友達になりたい。そう、思った。

その気持を込めて、

「うん！」と答え、里菜は彼に笑いかけたのだった。

そうしながら、里菜は、自分で驚いていた。

（あたし、ここで、この世界でなら、こんなに自然に、あたりまえのように微笑むことができる）

それは、大きな発見だった。ここでは、自分は、こんなふうに、知らない人に笑いかけることができるのだ。友達になりたいと思えるのだ。この国にも嫌な人もいるのかもしれないけれど、少なくとも自分は、ここでは、自分の思うままに自然に微笑むことが許されるのだ――。

『あちら』では、すべてが里菜を傷つけた。息をするたびに、空気は火のように肺を焼き、歩くたびに、陸に上がった人魚姫のように、足は見えない血を流した。あらゆる人の言葉が刃物のように心を切り裂き、その痛みを隠すために、ゆがんだ薄笑いを仮面のように顔に貼りつかせて、里菜は、生きてきた。

（きっと、あたしは、醜かっただろうな）と、遠い痛みと新しい喜びを感じながら、里菜は思う。

（でも、ここでなら、あたし、きっと、ずっとほんとはなりたかったように、素直に、やさしくなれる――）

「や、はじめて、俺に笑ってくれた……」

彼は、ひどく眩しげに里菜を見て、さっきまでの軽薄な口調とは微妙に違う、はにかんだような、どこか朴訥でさえある調子で、そっと言った。

「うん、すっごく、いいよ。かわいいよ……」

それから、もとの口調にもどって、元気よく叫んだ。

「ホント、また近いうちにくるから、それまで、この、村一番の色男、ローイ様のことを忘れないでいてくれよな！　じゃ！」

そして、里菜にむかって大げさな仕草で投げキッスをして（それがこの世界では普通の習慣というわけではないのはヴィーレのあきれ顔を見れば明らかだった）、極彩色のかかしは出ていったのである。

（ヘンよ、ヘン！　やっぱり、絶対、ヘン！　信じらんない……）

呆れて見送る里菜の耳に、また、あのおかしな歌が聞こえてきた。

「おーれーはァ村中でェーいっちばーん、モボだーとー言っわれーたァおっとこォー」

それを聞いて、ヴィーレが、また、言った。

「いやあねえ、ほんと。ヘンな歌、大声で歌って歩いて。彼がいうには、彼のテーマソングなんですってよ。リーナ、この村の人がみんなあんなふうだなんて思わないでね。あれは、村で一番、ううん、たぶん、この国で一番、ヘンなやつなのよ！」

では、里菜は大声で歌う必要は無いのだ。
（ああ、よかった）と、里菜は胸を撫で下ろした。

第一章＜エレオドラの虹＞　第五場（3）

ヴィーレは、夕食を作り終わると、自分は家で食べるからと言って帰っていった。

それとほとんど入れ違いに、こつこつと小さくドアを叩くものがあった。

この日、三人目の訪問者は、小さな花束を手に持った六才位の愛らしい女の子だった。ドアの外の夕映えを背にして、少女の赤味がかった銅色の髪が、燃え立つように輝いていた。

「ティーティじゃないか。どうした？」

ドアを開けたアルファードが驚いて尋ねると、少女は、はにかんだ笑みを浮かべ、

「こんにちは、アルファード。あのね、女神様に、お供えの花を持ってきたの」と答えながら、つかつかと部屋に入ってきて、手に持っていた花束をいきなり里菜に差し出した。

「これ、お姉ちゃんに」

「え？　あたしに？　だってこれ、女神様にお供えするお花じゃないの？」

「そう、女神様にさしあげるお花。だから、お姉ちゃんに。お姉ちゃんは女神様でしょう？　おばあちゃんが、そう言っていたわ」

「あのう……。悪いけどそれって、何かの勘違いだと思うわ。ごめんなさいね」

「ううん。違わない。あたし、わかるもん」

突きつけられた花を前に里菜がためらっていると、アルファードが横から取り成した。

「リーナ、受け取ってやれ。ティーティは、きっと、君が＜女神のおさな子＞だってことを言っているのさ。ティーティは、せんだって亡くなった女神の司祭の孫なんだ。君を歓迎してくれているんだよ。な、ティーティ」

いきなり女神などと言われ、女神へのお供えの花を差し出されては、受け取るのを躊躇せざるをえないが、歓迎の花だと言われれば、拒む理由もない。なにしろ相手は、可愛らしい小さな子供なのだ。

「そっか、歓迎のお花ね？　どうもありがとう、ティ＝ティ」

里菜が屈み込んで目の高さを合わせ、花を受け取ると、少女はぱっと顔を輝かせ、誇らしそうにこう言った。

「お姉ちゃん、あたしね、さっき代替わりの儀式が全部終わって、潔斎も明けたから、新しく司祭になるの。あたしを祝福して」

里菜は困ってアルファードを見た。村の習慣で、何か特別な言葉やしぐさがあるのかと思ったのだ。だが、アルファードも分からないらしいので、里菜は少女に尋ねた。

「祝福って、どうやるの？」

「ただ、言ってくれればいいの。あたしを祝福するって」

「ふうん。分かったわ。ティーティ、あなたを、祝福します」

少女はぱっと顔を輝かせて、左手を胸に当てると、かわいらしい声でせいいっぱい厳かに、何やら意味不明の言葉を唱えた。

「ミタマノフユヲイヤマスマスニカガフラシメタマエ」

「へ？」

きょとんとした里菜の、空いているほうの手に、少女はさらに、

「これも、お姉ちゃんに。おいしいよ！」と言いながら持っていた木の実を押し込んだかと思うと、そのままきびすを返して、スキップでもしそうな足取りで、さっさと出て行ってしまった。

あっけにとられてその小さな後ろ姿を見送った里菜は、アルファードを振り返った。

「アルファード、今、あの子、何て言ったの？」

「さあ……。多分、司祭の家にだけ伝わる、古い祈りの言葉だろう。そういえば、祭りの時、司祭のばあさまが祠の前で、あんなようなことを言って祈っていたと思う」

「そのおばあさんっていうのが、亡くなって、あの子が跡を継いだわけ？」

「ああ、彼女の家は女神の司祭の家系なんだ。といっても、別に普通の家なんだが、昔から代々あの家の女性が祭りを司り、女神の祠の手入れやなんかをすることになっている。司祭のばあさまは、おととといの夜中に亡くなって、あの子の母親はあの子がまだ赤ん坊の時分に亡くなっているから、あの子が次の司祭なんだ」

「ふうん。さっき言ってたなんとかの儀式って、何？」

「さあ。俺も知らない。なんでも、ばあさまが亡くなってからこっち、なにやら、潔斎だとか儀式だとか言って、ずっと独りで部屋に籠って誰にも会わなかったそうなんだが、さっきの話によると、今、それが終わって出てきたところらしい。それにしても、あの子が君がここにいることを知っていたのは不思議だ」

「あの子、なんであたしに、あんなこと言うのかしら。女神がどうとか、祝福だとか。それに、おばあさんがあたしのことを何か言ってたって……。そのおばあさんって、おととといの夜に亡くなったんなら、あたしのこと、知らなかったはずよね。だって、あたしがここへ来たのは昨日だったんでしょ？　きっと、子供のことだから、なにか勘違いしているのよね？」

里菜は、手の中の野の花を、途方に暮れて見つめた。

「いや、リーナ、司祭のばあさまは、君が来ることをあらかじめ知っていたのかもしれない。あのばあさまには、確かに多少、特別な力があったようだ。それはたぶん、彼女自身の力というより、司祭の地位に伴う力だったんだろう。そして、あの子は、幼くても司祭だ。だから、彼女が女神について語ることは、一見訳が分からなくても、何かの真実を隠していると、俺は思う。必ずしも言葉通りの意味ではなくても、何か象徴的な意味があるんだろう」

そう言ったアルファードを見た。アルファードはその時すでに、里菜は少し驚いて、里菜に村の信仰についても簡単に解説してくれていたのだが、その時の彼の淡々とした口ぶりや、一通りの説明を聞き終った里菜が、念の為、「それで女神様って本当にいるの？」と訊ねてみた時――な

にしろ魔法が存在する世界だ、神様が実体となってそこらを歩き回るようなこともあるのかもしれないと思ったのだ――の彼の、まるで「サンタクロースって本当にいるの？」と聞かれたかのような反応から、里菜は、彼がてっきり自分と同じ現代人の宗教感覚しか持っていないと思っていたのだ。

が、里菜が驚いて自分を見ているのに気がついたアルファードは、笑って付け加えた。

「まあ、あまり大げさに考えずに、好きなように言わせておけばいい。俺は、十二年間、そうしてきた。彼女らには彼女らなりのものの見方があるんだ。他の者は、きっと、君を女神だなどとは言わないから、心配いらない。そんなことを言うのは司祭だけだから」

心配いらないと言われても、この時、里菜の頭の中には、鳥の羽だの何だので全身を飾りたてて『謎の古代文明』風に装った村人たちが里菜の前にずらりと並んでお祈りを唱えながら一斉にひれ伏したり、太鼓を叩きながら里菜の周りをぐるぐる踊り回るといった、古いＢ級ＳＦ映画にでもありそうな珍妙な光景が、思わず浮かんでしまったのだった。

（さっきまで、ここって、魔法が本当にあるっていうわりにはごく普通の近代社会のただの田舎の村で、明日からごく普通の田舎暮らしが待っているんだとばかり思ってたけど、もしかして、やっぱりちょっと違うのかもしれない……。お姫様や小人や妖精がいるようなおとぎ話みたいな世界に行ってみたいとは思ったけど、こんな一見普通のところで『謎の古代文明の女神様』にされるのは、ちょっとヤだなあ）と思ったとたん、里菜はアルファードにこう尋ねていた。

「ねえ、ここの人たちって、太鼓叩いて歌ったり踊ったりする？」

「えっ……。いや、この辺では、踊りの伴奏に太鼓を使うことは少ないな。地方によっては太鼓をメインにするらしいが。……リーナ、君は歌舞音曲に格別な関心があるのか？」

アルファードに大真面目に聞き返されて、里菜はぶんぶんと首を

横に振った。

こうして、里菜のこの世界での最初の一日は、家から一歩も出ないうちに、ゆっくりと平和に過ぎていった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第六場（1）

ひんやりとした高原の秋風が、ミュシカの毛並をそよがせてまきばを渡っていく。羊の群れが、のんびりと草をはんでいる。

里菜は、ミュシカのやわらかな毛並に顔を埋めた。犬の匂いがする。

きっと今、自分も、出会った時のアルファードと同じように犬と羊と汗の匂いがするのだろうと、里菜は思った。

そういえば、自分がこの世界に来てから今日までの半月の間に、数えるほどしか髪を洗っていない。

だが、不思議なことに、そう思っても別にさほど気にならない。

『あっち』にいたころの自分からは、信じられないことだ。あのころの彼女は、毎朝シャワーを浴び、髪を洗っていても、学校に着くころにはもう、髪に付いたタバコの臭いやほんの微かな自分の体臭が、耐えられないほど気になっていたというのに。

きっと里菜は、もう、この国の娘、リーナとして、生まれ変ったのだ。

新鮮な山の空気と、素朴だが不思議とおいしいこの国の料理、それと多分、ヴィーレがせっせと持ってきてくれる焼き菓子のお蔭で、たった半月のあいだに、里菜は早くも、少しはふっくらとして、娘らしくなってきた。青白かった顔も、もともと日に当たってもあまり焼けないたちなのであいかわらず色白ではあったが、頬はほのかなバラ色を帯び、ずっと健康そうな顔色になった。白い肌と黒い瞳、バラ色の頬には、ヴィーレが約束通り作ってきてくれた簡素なワンピースの深く鮮やかな青が、よく似合った。

（『あっち』では、なんであんなに少ししか食べられなかったのかしら）と、里菜は不思議に思う。あのころは、母親に小食と痩せ過ぎを心配されても、自分では、本当にそれでおなかがいっぱいなのだからしかたないと思ってきたが、ここでは、今までの分を取り戻

すように、アルファードが驚くほどよく食べているのだ。
（きっと、ここではあたしは、半月前に生れたばかりの『おさな子』だから、急いで育たなくちゃならないから、だから、たくさん食べられるんだわ。早く、アルファードに子供扱いされないくらい大人になれるように……）
自分が、最初、アルファードからまるっきり子供だと思われていたらしいことを、里菜は、ちょっと気にしているのである。
小柄で童顔な里菜は、あちらの世界でも実年齢より幼く見られることに慣れていたが、アルファードの勘違いぶりは、いくらなんでもショックだった。彼が最初に里菜に年齢を尋ねたのは、初級学校への転入手続きが必要なのではないかと思い当たってのことだったらしいのだ。
この国には、ちゃんと、義務教育制度があって、通常十四才までは初級学校に通うことになっているのだという。ということは、里菜は十四歳以下に見られたのである。
その件について、一度、彼を問いつめてみたところ、
「あー、そのう、たぶん十四歳よりは上だろうと思ったが、でも、まんいち十四歳以下だったら学校にやらねばと思って、念の為に……」ということだったが、その取り繕うような答え方からして、本当は、たぶん、もっと年下だと思われていたに違いない。
が、その後知り合った、この村の同じ年頃の娘たちが全体にわりと大柄で、身体つきも女らしく、何から何まですっかり大人びていたことを考えると、それも無理もないかもしれない。
どうやら彼は、もともと、年端も行かぬみなしごを養女として引き取るというつもりで里菜を家に連れてきたらしく、はっきりと口に出しては言わぬまでも、今でも半ばそう思っているらしいのが、言葉や態度の端々に伺われる。かといって、今でも本気で里菜をまったくの小児だと思っているわけではなく、里菜がまがいなりにも恋愛対象になり得る年ごろの女性であるということはそれなりに理解した上で、あえてその現実に目をつむり、『自分は子供を引き取

ったのだ』という自分の『つもり』を、頑固に押し通そうとしているらしい。

けれども、アルファードが、自分たちの年齢が五歳ほどしか違わないという事実をどんなに注意深く無視して自分たちが養父子であるかのように振る舞い続けようと、それは無駄なことだった。里菜のほうは、アルファードの養女の役になど甘んじる気はないのだ。

たぶん、水の中のまどろみから目覚めてこの世界で一番最初にアルファードの顔を見た時から、里菜は、自分でも気づかないうちに恋に落ちていたのだから。

それは、里菜にとっては、初恋だった。

里菜は、この年になるまで、恋をしたことがなかったのだ。

それがかなり『変わってる』ことなのは里菜にもわかっていが、別にわざと恋愛を避けていたわけではなく、これまで周囲に興味をもてるような男の子が全然いなかっただけなのだからしかたがない。

（きっとそれは、あたしがただ一人愛するべき運命の人、アルファードが、ここに、この別の世界にいたからなんだわ！　だから『あっち』にはあたしの注意を引くような男の子がいなかったんだ。あたしは、ただひとりアルファードだけを愛するために、これまでそのへんの男の子なんかに目もくれず、初めての恋を大事にとってあったのね！）などと、かなり恥ずかしい物思いに浸ってしまった里菜は、はっと我に返って思わず赤面し、それを見られはしなかったかと、隣に座るアルファードを盗み見た。

アルファードはいつもの通り、里菜との間に不自然でない程度の微妙な距離を保って黙然と座り、羊の群れを見ている。

里菜の本当の年齢を聞いて以来、彼は、最初の日に里菜を寝台に座らせた時のように気軽に里菜を抱え上げたりすることは絶対になくなって、こうして並んで座る時も、必ず、注意深く、ちょっと距離を置くのだ。

里菜は思いきって、少しだけアルファードのほうに身を寄せ、おそるおそる、アルファードの肩にもたれてみた。振り向いたアルフ

ァードは、その暖かな暗褐色の目を和ませて里菜を見下ろし、ミュシカにするように里菜の頭をぽん、と、軽く叩いてくれたが、そのついでのように肩に手をかけて里菜の姿勢を真っ直ぐに直させ、自分は「ちょっと水を汲んでくる」と言って、すぐに立ち上がってしまった。

この国の人は誰でも、コップひとつあればそこに魔法で水を満たせるのだが、酒やお茶を呼び出すことは出来ないから、それらをいれるための水筒や皮袋というものはある。アルファードはそれを水入れに使っており、喉が乾くと、まきばを流れるエレオドラ川の支流の小川に水を汲みにいくのである。

だが、今は、水袋には十分な水が入っているはずだ。

（水なんて、今、いらないのに。逃げたんだわ。ちょっと甘えてみたかっただけなのに、アルファードって、いつも、こう。すっとかわして、逃げてばかりで、のれんに腕押しって感じ）

ミュシカを撫でながら、里菜はちょっとふくれた。

里菜としても、別にアルファードに恋人同士のような振る舞いを期待していたわけではなく、たぶん、そんなふうにされたら逆に困って自分が逃げ出してしまうのだろうが、せっかく思い切って接近してみたのを、そ知らぬふりでかわされてしまうのも寂しいものがある。じゃあアルファードにどうして欲しいのかというと、自分でもそれはわからない。これまで、たあいのない恋愛ごっこに右往左往する級友たちを醒めた目で眺めてきた里菜が初めて知る、恋のさなかの幸福な愚かしさである。

こんなふうに、彼らは、毎日、こうして、少し離れて、まきばに座り続けてきた。

アルファードの生活は何かにつけて信じられないほど原始的だったので、里菜は最初、この世界を、昔話の中のような古めかしい不便な世界だと思っていたのだが、このころには、この国の生活水準が思いのほか高いことがわかってきた。

ただ、アルファードは、貧しいうえに魔法が使えないので、彼ひ

とりだけが不便な生活をしていたのだ。
それは本当に大変なことで、例えていえば、他の家にはみな、ガスや水道がきているのに、アルファードの家だけそれがないようなものだ。
例えば火をつけるのにしても、この国には昔から魔法でそれをしていたので、逆に、これだけの生活水準なら当然普及しているはずの、マッチなり、せめて火打ち石なりといった文明の利器が、まったく発明されていないのだ。それどころか、どうも、木をこすって火を起こすという原始的な方法さえ、知られていなかったらしい。だから、アルファードは、火の起こし方を、まったく最初からひとりで工夫したという。
彼は今――普段はもちろん炉の中に火種を絶やさず埋めておくようにしているが、どうしても火を起こす必要があるときは――自分で考案した簡単な摩擦装置を使っている。この国では、魔法を使わずに火を起こすなど、それこそ魔法のような技であり、里菜が思うに、これは、たいした大発明なのが、その発明を利用する必要のあるのは、世界でただひとり、アルファード本人だけだ。
一方、魔法が使える普通の人の生活も、なんでも魔法で出来るというわけではないらしい。里菜が魔法で家事をすると聞いてイメージするのは、杖の一振りで料理が現われ、呪文ひとつで部屋中の散らかったものが浮き上がって一瞬のうちにあるべきところに収まるといったものだが、よく聞いてみると、ここの『普通の魔法』は決してそんな便利なものではなく、『普通の魔法』に出来ることは、どうやら、だいたい『あっち』の世界で文明の利器で出来るようなことばかりなのだ。
もちろん、まったく同じというわけではなく、魔法で出来て機械で出来ないこともあるし、その逆もある。
それでも、おおざっぱに全体を比べて見れば、この世界のほうがいろいろな面で不便らしいのだが、里菜は、この村の普通の人の生活を、その目で見たわけではない。アルファードやヴィーレたちか

ら話に聞くばかりだ。

今でも里菜は、自分の特殊な力を制御出来ずにおり、村の生活の中には、入っていけないのだ。

でも、本当のことを言うと、里菜はこのままで構わないと思っている。そのおかげで、アルファードだけと、いつも一緒にいられるのだから。

第一章＜エレオドラの虹＞　第六場（2）

ここへ来て最初の数日間、里菜は、まるでこっそりかくまわれているかのように、アルファ―ドとヴィ―レ以外のほとんど誰とも会わずに過ごした。

それは、里菜の力が混乱を招くことを恐れた村の世話役たちが打ち出した慎重な方針の結果だったらしいのだが、そんなことを知らない里菜は、まるでアルファ―ドの家だけが世界のすべてであるかのように思いなして、アルファ―ドとヴィ―レに守られ、子供のように世話され、一種の囚われ人と言えなくもないその隔離された境遇を疑問に思うこともなく、ゆっくりと新しい世界に慣れていくことができた。村の世話役の長であるヴィ―レの父自身でさえ、最初に一度だけアルファ―ドの家に訪ねて来た後は、村を代表して里菜を見守るという自分の役割をすべて娘のヴィ―レに委ねて、自分はしばらく顔を出さなかったのだ。

数日後、集会が開かれ、里菜は村の人々と正式に引き合わされたが、別段、里菜がティ―ティに『女神』と呼ばれた時に密かに思い浮かべてしまったような珍妙な事態が起こる気配は、まったくなかった。年配の村人たちの中には、何やら有難そうに、あるいは畏れるように里菜を見るものもないではなかったが、せいぜいその程度で、里菜は、少なくとも表向きはただ、新しく村に仲間入りした住人としてごく普通に紹介された。

といっても、近隣の村との婚姻以外での人の出入りはほとんどないというこの村では、新しい住民というもの自体が珍しかったから、里菜の仲間入りが村にちょっとした旋風を巻き起こしたことは確かだ。

ことに、同年代の娘たち、若者たちにとっては、里菜はちょうど、ずっと同じ顔ぶればかりだった田舎の学校に遠い町から風のようにやってきた季節はずれの転校生のようなものだったらしく、世話役

からの紹介が終わったとたんにわっとばかりに里菜に群がった彼らの態度は、ほとんど、初めての休み時間を待ちかねて遠来の転校生を取り囲む小学生のそれと変わりなかった。

わけても若者たちにとっては、里菜は、＜マレビト＞であろうとなかろうと、見飽きた顔ばかりの村によそからやってきた年頃の娘という意味で非常に関心を引く存在だったらしいが、そういう意味では、里菜は彼らに少々期待外れの感を抱かせてしまったようだ。

里菜が初めてみんなの前に出ていった時、若者たちはいっせいにどよめいたが、中の一人がけっこう大きな声で、

「なんだ、全然、子供じゃん」と落胆の声を上げ、まわりの若者に、「声がでけえよ」と小突かれていたのを、里菜はしっかり見ていたのだ。

声が大きかったのは一人だけだが、おおかたは大体同じようなことを思ったらしいのは一目瞭然で、すでにアルファード一筋を心に決めていた里菜は別に彼らにモテたいとも思わなかったが、だからといってああまであからさまにがっかりされるのも面白くない気がしたし、せっかくの期待を裏切ってしまってなんだか申し訳ないような気分にもなった。

娘たちは娘たちで、みな、里菜を奪いあわんばかりに競って親切にしてくれようとしたが、里菜と同年代のはずの彼女らは、見た目も言動もやたら大人っぽくて、とても対等に仲間入りできそうな感じではなく、もともと内弁慶で引っ込み思案な里菜はすっかり圧倒され、気後れしてしまって、個人的に親しくなれそうな相手を見つけるどころではなかった。

その後も、里菜は、村人たちとは、あまり接する機会がないままでいる。里菜は、その力のせいで、やたらと村の中を歩き回ったりできないし、そもそも、昼間はずっとアルファードとまきばにいるので、人に会う機会自体が少なかったのだ。

それでも、毎朝村の家々を回って羊を集めたり、夕方、羊を連れ帰った時など、村人たちと挨拶くらいはする機会もあったし、親切

と好奇心の一石二鳥で料理や衣類を差し入れに来るものもいた。
だが、年配の村人たちの多くは、あまり里菜に近づいてこなかった。彼らは、身寄りのない里菜に温かい同情を寄せてくれてはいるが、同時に、彼女の力を少しばかり恐れてもいるらしい。彼女の前で魔法が使えないということがまるで自分の魔法の力そのものが彼女に消されてしまうように思えて、頭ではそうではないと思いながらもなんとなく近づく勇気がでないのだろうというのが、ローイの解説だ。

ローイは、初めて会った日以来、毎日のようにアルファードの家か、ふたりの仕事場である山のまきばに顔を出しては、里菜とアルファードと一緒に過していく。もともとアルファードの家には頻繁に出入りしていたらしいが、今は、ほとんど『入り浸っている』といったほうがいい状態だ。

ローイとヴィーレの他には、アルファードの家を訪れるものは、ほとんどいなかった。それでも里菜のお披露目が済んでしばらくの間は、アルファードの家の回りに、入れ替わり立ち替わり用もないのにあるふりをして里菜を偵察に来る若者たちが跡を絶たず、アルファードはそのつど苦笑しながら彼らを招じ入れ、里菜に引き合わせていたのだが、里菜にしてみれば、そろって日焼けして逞しく、気が良さそうではあるが少々粗野な印象を与える村の若者たちは誰も彼も同じように見えた上、汗臭くて身体も声も大きい彼らに群れをなして押し寄せられるのは訳もなく少し怖くて、なるべくアルファードの後ろに隠れるようにしていたから、彼らはみな、しだいに居心地悪そうな顔になって、長居はせずに帰ってゆき、その後は、それまではちょくちょく顔を出していたらしいアルファードの家にあまり寄りつかなくなった。

里菜はそれを、

（まるで、それまで気軽に家に上げてくれていた先輩が結婚してしまって、なんとなく遠慮して遊びに来づらくなったみたいだな）

などと思って、自分が勝手に連想したそんな例え話に自分でちょっと

喜んだりしたのだが、その点、ローイに遠慮はない。当然の権利のような顔をして、アルファードの家のつましい夕食のテーブルについていたりする。

が、彼になら、アルファードと二人でいるところを邪魔されても、別に迷惑だとは思わない。彼はいつも陽気で元気で上機嫌で、内気な里菜も、彼といると、なんだかのびのびした気持になれた。彼はすでに、里菜にとって、特別の、大切な友人になっていたのだ。

ローイが子供に好かれているというのはどうやら本当のことらしく、里菜はよく、まきばへの行き帰りの途中で、ローイが子供にまとわりつかれているのを見かけた。ローイのほうも、本人は否定しているが、実は子供好きらしい。だからこそ子供たちがなつくのだろうし、そのために子守として重宝されるはめになってもいるのだろう。

一度など、里菜は、彼が、なんと、赤ん坊を背負った姿で村の娘のひとりを口説いている現場を目撃したものだ。

どこかへでかける途中なのか、荷物を抱えてさっさと歩いてゆく娘の横で、ローイは長身をかがめ、彼女の顔を覗き込むようにしてなにやらしきりと話しかけながら、右に左にうろうろとつきまとっている。合間合間に背中の赤ん坊をあやしたりゆすりあげたりする様子はあまりにも堂に入りすぎていて、彼が父親でないのが信じられないくらいだった。娘は、どんな巧いことを言われているのか、満足げな笑顔を見せながら適当に受け流している様子だ。アルファードと里菜が歩いてくるのに気がついたローイは、くすくす笑っている里菜を見てバツが悪そうな顔をしてから、にやりと笑って片手を上げて挨拶したのだった。

それはたしか、里菜が来てすぐのころだったが、どうやらそれ以来、彼は、ぱったりと女の子を口説くのをやめてしまったらしい。自警団の用事でアルファードを訪ねて来た——というのは表向きで、実は里菜を偵察しに来たらしい——若者のひとりが、

「ローイのやつが、最近、妙におとなしくしてるらしいぜ。ここし

ばらく、誰もやつに口説かれてないってよ」などと、ウワサしていったのだ。

もっとも、彼は、里菜に対しては、あいかわらず、挨拶のように例の『ひとめぼれ』を繰り返している。里菜も、それを、挨拶のように受け流している。実際、その言葉がただの冗談のようなものは分かっている。アルファードもヴィーレも、それを聞いても笑っているだけだ。

だが、その、ふざけた挨拶の影にかくれて、ほんの少しづつ、言葉にならない本気の響きが忍び寄って来ているのを、里菜はうすうす感じてもいる。少なくとも彼が自分にそれなりの好意を持ってくれているのは確かだ。何しろ、彼は毎日のように自分に会いに来てくれるのだから——。

里菜がぼんやり回想にふけっているうちに、水を汲みにいったアルファードが戻ってきて、さっきまでより里菜からほんの少し離れて座り直した。

里菜は、ふと思い立って、

「ねえ、アルファード。ちょっと悩んでる事があるんだけど……」

と、他に誰もいないのにわざわざ声を落とし、ないしょ話を口実にもう一度アルファードに近づいて、わざと困ったように、こう言ってみた。

「あのね、ローイは、あたしに気があるのかしら……」

するとアルファードは、なんだそんなことかと言うようにふっと破顔して、しごくあっさりと、こう答えた。

「まあ、そんなこともあるかも知れないが、真面目にとりあうまでもないだろう。新しいおもちゃをもらった子供がしばらくはそれに夢中になるようなものだ。今まで子供の頃からの知りあいばかりだった村に十何年ぶりに現われた新しい住人だから、みんな、君が珍しいのさ」

里菜は、上目づかいにアルファードを見て口をとがらせた。

（そんなこと、言われなくたって分かってるわ。転校生がモテやすいのと一緒だもん。だからって、そんな、あっさり本当のこと言わないで、ヤキモチ焼くふりくらいしてくれたっていいのに。あたしって、アルファードの何？）

アルファードは、そんな里菜の態度をどう受け取ったのか、彼女の頭を軽くぽんぽんとたたいて、ただ、笑っていた。

（これって、まるっきり、妹扱い……っていうか、娘扱い？）

彼はいつでも、そんな調子だったのだ。彼女の初恋も、前途多難かもしれない。

それでも、彼女は、この世界で、とても幸福だった。初めての恋をして、たとえ妹のようなものとしてでも、一日中、恋しい人のそばにいられて、食べ物はなんでもおいしく、誰もが親切で、見るもの聞くものすべてが珍しい。

アルファードとふたりで山のまきばで過ごす時間も、壁をへだててアルファードの近くで眠る静かな夜も、ヴィーレやローイがやって来て賑やかに語り合う雨の日や夕べも、里菜にとって、夢のような時だった。

遊び人のローイはともかく、一家の主婦の代役を勤めるヴィーレは、実は結構忙しいらしいのだが、世話役である父の代理として里菜に気を配るという大儀名分があったので前よりもしばしばアルファードの家を訪れることができ、ローイとはちあわせすることも多く、彼らはほとんど家族のように、しょっちゅう食事や団欒を共にしていたのだ。

父のような、頼もしい長兄のようなアルファードと、母のような姉のようなヴィーレ、それに、年上であることをちっとも感じさせない、気さくな次兄のようなローイ。それは、里菜にとって、一種の擬似家族であり、里菜はそこで、愛されて育まれる子供の無邪気な幸福を、もう一度味わっていた。

そんな幸せの中で、里菜があちらの世界を思い出すことは、もう、ほとんどなかった。いや、思い出さなかったわけではない。何かに

つけて、あちらの世界とこの世界を比べて見はした。が、あちらの世界の記憶は、ただ、本の中で読んだ知識のように頭に残っているだけで、自分が本当にそこで生きていたのだという生々しい実感を欠いていた。それよりも、今、頬の産毛を撫ぜていくまきばの風が、膝に寄り添うミュシカの温もりが、ずっと確かなものだ。

里菜は、決して寄り添わせてくれないアルファードの代わりを求めるように、もう一度、ミュシカの背中に顔を埋めた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第六場（3）

そのとき、ミュシカがピンと耳を立て、鼻面を上に向けて、うれしそうに尾を振った。

「うわさをすれば、ローイだな」と、アルファードはつぶやいた。

すぐに、まず赤い羽、次に緑の帽子、そしてその下の茶色いくせっ毛と陽気な顔が、坂の上にひょい、と現われた。

「よお！　リーナちゃん！」

元気な声とともに、ローイは手を振って、ずんずんと坂道を上がってくる。相変わらずキテレツな格好だ。

「おい、ローイ。俺には挨拶なしか？」

アルファードが笑って言う。

彼が、こんなふうに気安く軽口を言うのは、ローイに対してだけだ。

「ああ？　男に挨拶なんか、するだけもったいないぜ」

言いながら近付いてふたりの前に立ち止まったローイは、ミュシカを見下ろして、おおげさに顔をしかめてみせた。

「おい、おい、ミュシカ！　俺のリーナちゃんの膝に、気安く頭乗せんなよな！　そこは俺の場所なんだよ！　な、リーナちゃん？」

そういいながらも、彼はもう、ミュシカを挟んで里菜の隣に腰を降ろしている。

「もう！　ローイってば！　誰が『俺の』なのよ！」

里菜も笑って言い返した。自分がこんなふうに気軽に彼に調子を合わせられるのが信じられない。知りあってからまだ半月しかたたないのに、まるでずっと昔からの友達のようだ。

（ローイって、ほんとにいいひと。とっても面白いし、いつも明るくて、親切で）

里菜は、となりに腰を降ろしてペラペラ冗談を言い続けるローイの顔を見上げて微笑んだ。

ローイはふいに口を閉ざして、一瞬まぶしげに目をそらしたが、それから、いきなり立ち上がって、元気に叫んだ。

「さあて！　そろそろまた、リーナちゃんのお勉強につきあおうか！」

ローイは、ただおしゃべりだけをしに来ているのではないのだ。彼は、この間から、何度も、里菜の、例の特殊な力の制御の訓練を手伝っているのだった。魔法が使えないアルファードに代わって、里菜の、いわば練習台を務めているのである。

最初のうち、何回か、ヴィーレも練習につきあってくれたのだが、彼女はどうしても里菜の力に慣れることができず、怖そうにするので、しだいに練習台はローイの役目に決まってしまったのだ。

「魔法が使えないったって、そのときだけのことで、魔法の力がなくなっちまうわけじゃないんだから、びくびくすることないよな。だいたい、＜マレビト＞だのなんだの、みんな迷信深いんだよ。どこから来たんだって、リーナちゃんはリーナちゃんだよ。な？」というのが、彼の言い分である。

里菜は、そんなおおらかでこだわらない彼の態度が、とてもうれしかった。

彼は、ほかの人とちがって、里菜やアルファードが＜マレビト＞だからといって、特に気にする様子もないのだ。彼が、あまり他人に心を開かないアルファードの一番親しい友人であり続けるのも、たぶんそのためだろう。

「さあ、いくぜ、リーナちゃん」

ひらりと上に向けられたローイのてのひらの上に、一瞬、小さな炎が浮かんだ。

里菜の瞳に炎が映った。

が、里菜はそれを見てはいなかった。心を空っぽにして、目に映るものを見ない――それが、このところしばらく里菜がしてきた『練習』だったのだ。

アルファードは、里菜の『魔法を消す力』の本質を、すぐに見抜いていた。里菜は、魔法を信じていないのだ。信じないこと、それが彼女の力の源なのだ。それは本当は、『本物の魔法』の力の一種などではないはずだ。

（おそらく、魔法は、それを信じていないものには効かないのだろう。動物に魔法が効かないのはそのために違いない）と、アルファードは思い至った。

それは、この世界に住むものにとってはほとんど理解不能な観念だった。

アルファードがこのことに気がついたのは、彼が魔法が使えず、魔法をあたりまえだと思っていないからだったのだが、魔法は使えなくても子どものころから魔法があたりまえの世界で育ち、それ以前のことを覚えていない彼自身には、意識的に魔法を信じないようにする、などということは、試みてみても、むろん出来なかった。ましてや普通の人に、そんなことが出来るわけはない。それは、自分が目で見ているものを本当はそこにないものと思え、と言うようなものだ。

とすれば、里菜の力は、あきらかにこの世界に属していない異質な力であることはたしかで、だからこそ、実は魔法からもっとも遠い力でありながら、この世界の人の目には『本物の魔法』に見えるのだ。

それならば、里菜がその異質な力を制御するためには、ただ、魔法を信じるだけでいいはずだと、アルファードは考えた。

アルファードは、最初、自分が心の底では魔法の存在を信じていないことを自覚さえしていなかった里菜にそれを自覚させ、その上で魔法を信じるように促そうとした。

だが、それは、すぐに無駄だとわかった。意識の表面のことはともかく、自分でも気づけないような心の奥底の思いなど、変えようとして簡単に変えられるものではない。

そこで方針を転換し、魔法を信じさせることは諦めて、今度は魔

法を見ない訓練を始めさせた。魔法が使われる瞬間に目をつぶったり、目をそらしたりする訓練だ。だが、そんな方法では、実用的とはいえない。はっきりいって、くだらない努力だ。

それで、次には、目には見えている魔法を意識から締出す、いわば精神制御の訓練にのりだしたわけである。

そして、それは、ある程度の成果をあげつつあった。最近、里菜は時々、ほんの一瞬だけ、今のようにローイの手の上の炎を消さずにいることができるようになったのだ。

とはいえ、あえて意識をよそへ飛ばしていても、そう長いこと、目の前のものから注意をそらし続けてもいられない。ローイの手の上の炎が、ふっと薄れかけた。

「リーナ！　だめだ」

アルファードの鋭い叱声もむなしく、ローイの手の上の炎が消えた。

「ごめん……。やっぱり見ちゃった」

うなだれた里菜に、ローイが、手を降ろしながら言う。

「でもさ、今、一瞬だけ、うまくいったよな。進歩、進歩。頑張ろうぜ、な？」

「うん」

里菜は気を取り直して、うなずいた。

その様子を見ながら、アルファードは考え込んだ。

（しかし、この方法でも、結局同じことだな。回り中で魔法が使われる村の生活の中で、いつもいつも、見れども見えずとばかりに、ぼんやりしているわけにもいくまい。どうしたものか……）

さっきのように魔法を消さずにいる時の里菜というのは、つまりは目を開けていても何も見ていない、心ここにあらずの状態にあるわけで、日常生活の中でしょっちゅうそんなふうになっていては困るのだ。

アルファードが難しい顔で考え込んでしまったので、里菜は、自分がいつまでもうまくできないことに彼が怒ってしまったのかと不

安になって、おどおどとアルファードの顔色を窺った。それで初めて自分が怖い顔になっていたらしいことに気付いたアルファードはあわてて渋面を引っ込め、里菜を安心させようと微笑みかけた。

ただそれだけのことで目にみえてほっとする里菜の姿に、アルファードは、ふいに本能的に悟った。

（この子は、魔法を信じることは永遠にないかもしれない。だが、『俺を』であれば、信じるだろう。この子が、ただひとつ、自分自身よりも信じるものがあるとすれば、それは俺だ。なぜ、俺なんかのことをそんなふうに思ってくれるのかは知らないが、これは事実だ。そして、そのことが彼女の力の制御に利用できるなら、利用するのが彼女のためだ）　アルファードは、里菜に歩みより、その目を覗き込んで言った。

「リーナ。魔法を信じなくてもいい。だが、俺を、信じてくれ」

「え……」

「君は、俺の言うことを、信じてくれるね」

「う、うん……」

静かな力を秘めたアルファードの暗褐色の瞳に見据えられ、里菜は、よくわからないまま、つりこまれるように頷いた。

「じゃあ、今から俺の言うことを、全部、無条件で、信じて欲しい。いいね？」

里菜がきょとんとしているのも、後ろで聞いていたローイが目を丸くして、

「はァ～あ、なんだ、そりゃあ？　あんたいったい何言ってんだァ？」と、あきれ声を上げるのも無視して、アルファードは静かに里菜の背後にまわり、その肩を抱くようにして立った。

「リーナ、目をつぶってごらん。ローイ、もう一度、火を頼む」

ローイは釈然としない顔で、それでもとりあえず炎を出して、それをポンポンと空中に小さく投げあげるようにしながら掌の上に浮かべた。

ちなみに、呼び出した火をすぐ何かに焚き付けるか投げつけるか

しないでこんなふうに浮かせておくのは微妙な制御力を要する高度な技で、出来る人は少ない。彼は結構、魔法の力を器用にあやつるのだ。特に、その優男の外見に似ず、火の玉の攻撃魔法にかけては村で一、二を争う使い手である。

アルファードは静かに里菜に語りかけた。

「リーナ、今、君は見ていないが、ローイの手の上に、炎がある。これは本当のことだ。現実だ。俺の言葉を信じてくれ。目を開けて、炎を見てごらん。君が見ても、それは消えないんだ。本当にあるものなんだから、消えるわけがないだろう?」

里菜が目を開けた。そのとたん、炎が薄れかけた。

アルファードが、里菜の肩をつかんだ手に、瞬間、力を込めて、鋭く囁いた。

「リーナ! 俺を信じないのか」

里菜はびくっとして、アルファードを振り向いた。

「炎は、あるんだ。俺があると言ったら、あるんだ。今は、君自身をではなく、俺の言葉を信じてくれ」

驚いて目を見張る里菜に向かって、アルファードは穏やかに説いた。

「リーナ。君は、自分では気づいていないだろうが、魔法を認めることが怖いんだ。魔法を認めたら、自分がこれまで信じてきた世界の秩序が嘘だったことになって、それを信じてきたこれまでの自分自身をも否定することになってしまいそうな気がしているんだと思う。でも、恐れることはない。俺が、そばにいるから。君には、俺がついている。恐れずに信じてほしい。リーナ、俺は魔法が存在するこの世界に生きている。君が魔法を否定することは、俺がいるこの世界を、そして俺を、この世界に生きている俺の存在を否定することになるんだ。あの炎が現実のものでないと思うことは、この俺を幻だと思うことと同じだ。君は、それでもあの炎の存在を否定するか?」

里菜はふいにアルファードの意図を理解して、はっとしてアルフ

ァードを見上げ、頷いた。見つめ合うふたりは大真面目だが、はたで聞いているローイには、何が何やら、さっぱりわからない。

（なんだァ、アルファードのやつ！　なに、ぐだぐだと、訳のわからん、無茶なこと言ってやがる。前から思っちゃァいたが、つくづくあいつは、自分を何サマだと思っていやがるんだ！）

ローイは、てのひらの上で小さな炎を弄びながらアルファードを睨みつけた。

里菜が、また、アルファードに肩を抱かれてこちらを向いた。

ローイは、アルファードの大きなシルエットの中に取り込まれてしまったかのような、里菜の小さな姿を見やった。彼の健全なバランス感覚が、警報を発する。

（この構図は、よくないぞ！　なんだか、気にくわねえ！）

そのとき、考え事のせいでうっかり忘れていた火の玉が、彼の掌に落ちてきた。火の玉を手の上に浮かべ続けておくためには、非常な集中力を必要とするのだ。

「うわッち！」と叫んで、ローイはあわてて炎を投げ捨てる。

炎は、地面につくまえに、すっと跡を曳くように消えた。

魔法の火の玉は、普通、投げてしまえばすぐに消える。それで、戦場で火の玉を投げ合っても普通は火事は起きないのだ。逆に言えば、火の玉の攻撃魔法は、飛距離が短い。結局、接近戦にしか使えないのだが、逆に、あまり接近し過ぎて敵味方入り乱れての乱戦になっても、それはそれでまた使いにくい。つまり、火の玉は、実際の戦場で使うには非常に制約の多い攻撃法で、限られた条件下でしか有効でないのだ。だから、この国では、先の統一に至るまで、剣や槍や弓を中心に、のどかといえばのどかに戦って来たのである。

「熱っちィ一。うう、驚いた。つい、ぼんやりしちまった」と、手をズボンにこすりつけながら、ローイは急に気がついて、もう一度叫んだ。

「あれェ！　リーナちゃん、あんた、そういえば、今、俺が魔法を使うとこ、見てたんじゃねえか？」

「う、うん……。あたし、今の、見た……」
里菜は呆然と答えた。
ローイはもう一度、炎を出した。炎はローイの手の上で、軽やかに踊り続けた。
「リーナ、やったじゃん！　おッ、すげえや。大成功だ！」ローイは陽気に叫んだ。アルファードのやりくちは気に入らないとしても、成果は成果だ。
里菜は大きく目を見開いて、まだ信じられない様子で呟いた。
「あたし、魔法を見た……」
（ここで、『ローイ、ありがとう、あなたのおかげよ』とかなんとか言って俺に抱きついてくれたりするのが正常な反応ってもんだが、リーナは、まあ、そんな正しい反応はしないだろうな）という、ローイの予測のとおり、次の瞬間、里菜はアルファードを振り向いて、
「よくやった。おめでとう、リーナ」と、優しく微笑むアルファードに向かって、心配そうに、こう言った。
「アルファード……。あたしが魔法を見られるようになっても、あたし、あなたの家に置いて貰えるのよね？」
「リーナ、そんなこと心配してたのか。もちろん、君がいたければ、いつまでも俺の家にいていいんだ。部屋は余ってるんだから、何の問題もない」というアルファードの言葉に、里菜はやっと微笑んで、幸せそうに頬を染めたのだった。
ローイはあきれて、そんなふたりの様子を見やった。
（あーあ、リーナちゃん。そんな心配いらねえよ。逆に、あんたが出ていくと言いでもしたら、アルファードのやつ、あんたの首に紐付けて戸棚にしまってカギかけちまうぜ。まあ、勝手にしてくんな。俺のことなんか眼中にないってか）
ここにいたって、ローイは、今まで自分が付き合ってきたものが、里菜の練習であると同時に里菜とアルファードとふたりの間に繰り広げられた微妙な心理戦であり、自分はまるきり蚊帳の外であったことに気づいて、なんだか報われないような、うんざりするような

気分になったのだ。
　里菜は、やっと、気の毒なローイのことを思い出して、彼に向かってにっこりした。
「ローイ、あなたが手伝ってくれたおかげよ。ありがとう！」
（それを言うのが、遅いんだよ）などと思いながらも、ローイは里菜の笑顔を見ると、たあいもなく、やはりうれしくなってしまうのだった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第七場（1）

里菜がこの国に来てから、およそ一カ月がたった。

この国の暦は、『あっち』の世界とあまり変わらない。季節の推移も、おおよそ、あちらの北半球と同じようなもののらしい。

この国では、一年は三百六十四日なのだというが、年の境である冬至の日は古い年にも新しい年にも数えないので、実際には『あっち』とおなじ三百六十五日というわけだ。

一年は、冬至を新年として十三の月にわけられ、一カ月はきっかり二十八日、つまり四週間。そう、この世界でも、一週間は七日なのだ。一週間は、創世神話にちなんで、『草木の日』に始まり『妖精の日』で終る。初級学校や商店の多くは『妖精の日』ごとに休業するというから、この日が日曜日に当たるらしい。

そんなこの国の暦では、今は『十一の月』の終わりだというが、里菜がやってきたのは秋分の頃だったから、『あっち』の数え方で言えば十月下旬頃に当たるはずだ。国の最南端である温暖なエレオドラ地方では、平地はまだ秋の盛りであるらしいが、高原のまきばには、早くも冬の足音が忍び寄りつつある。吹き渡る風は冷たく、霜に当たった草は茶色く枯れ始め、仰ぎ見るエレオドラ山の頂きには、新雪が白く輝いている。

里菜が初めて自分の『力』を押えることができたあの日から、さらに一週間が過ぎたが、里菜の生活には、いまのところ何の変化もない。

羊の放牧の季節も、もうすぐ終る。

ふいに吹きつけた風の冷たさに、里菜は自分の腕を抱いてちぢこまり、隣に座るアルファードとの間を少し詰めた。

「寒いか？」

「うん、ちょっと」

里菜は顔色をうかがうようにちらりとアルファードを見上げ、お

ずおずと彼に寄り添ってみた。
アルファードは、それをそっと押し戻しながら立ち上がると、黙ってそそくさと上着を脱いで、里菜をくるみ込むように掛けてくれた。
そして、こう言って背中を向けた。
「ちょっと、水を汲んでくる」
(アルファードってば、芸がない！　朴念仁もいいところ。せめて言い訳くらい、もうちょっとバリエーションをつければいいのに)
大股で遠ざかる後ろ姿を見送りながら、里菜は、かすかに残るアルファードのぬくもりを求めて、上着をかき寄せた。アルファードの匂いがする。
里菜は、毎日のように、こんなふうにしてアルファードに寄り添おうと試みる。アルファードはその度に、必ず、要りもしない水を汲みに立ち上がる。
最初は拒絶された気がして寂しく感じていた里菜も、繰り返すうちに、彼が毎回同じことを言うのが半分面白くなってしまったのである。
それに、里菜がこんなふうにそれなりに積極的に振る舞ってみせられるのも、実は、アルファードがこちらを上回るほど積極的に応じてくることは絶対にないとわかっているからなのだ。
(ドラゴン退治の英雄のくせに、いかにも勇ましそうに剣なんかを下げて歩いているくせに、たかが女の子からこんなふうに逃げまわったりして、おかしいわ)と、里菜は、こっそり一人笑いして、アルファードの置き忘れていった剣を見やった。
ただの羊飼いだとばかり思っていたアルファードが実はドラゴン退治の英雄であり全国武術大会の優勝経験者であるということを、里菜は、ローイから聞かされていた。
ローイの話によると、アルファードは、これまで、いつも、まきばで羊を見張りながら暇さえあれば剣の素振りをしていたのだという。

が、里菜は、アルファードのそんな姿を見たことがない。
アルファードは、里菜の前では、まず絶対に剣を抜かないのだ。
アルファードの剣の刀身を、里菜は、たった一度だけ、ちらっと見たことがある。ここへ来た最初の頃、夕食の後の居間で、彼が、黙って剣の手入れを始めようとしたのだ。
これといった装飾もない実用一辺倒の武骨な剣は、鞘に納めて無造作にそのへんに置かれていると、一見、ただの農具か何かと錯覚しそうな慎しさ、何気なさだが、手入れは行き届いていて、いったん抜き放てば、突如としてくすんだ日常性の仮面を脱ぎ捨て、ぎらりと光る。
それを見て里菜がぎくっとしたのに、アルファードは目聡く気づいたらしく、それ以来、里菜の前では決して剣を抜かないのである。
そんな彼が、里菜の傍らに剣を置き忘れていくなどというのは、珍しいことだ。
ローイの話では、これは、全国チャンピオンの愛剣としてはちょっと相応しくない、初心者が使うような安価な普及型の、なんの変哲もないありふれた剣なのだといい、サイズもごく標準的なものらしいのだが、堂々たる体躯のアルファードが持つと、体格との対比で、やけに細身に、少々貧弱にさえ見える。
実際、イルベッザの武術大会の一回戦で、無名のアルファードが初めて剣を構えた時、その、大きな身体に不釣り合いな小振りの剣に、観衆の間から失笑が漏れたという。
が、アルファードに言わせれば、剣は大きければ大きいほどいいというものでもなく、ドラゴンの心臓を貫くという用途にはこれくらいがちょうどよいのだそうだ。鱗の隙間をこじ開けるようにして突き入れるにはあまり肉厚だったり幅広だったりする剣は不向きだし、ドラゴンの体の下に潜り込むようにしての至近距離からの突きなので、あまり長い剣では却って動きが取りにくいのだという。
そんなふうに具体的な使い方を聞くと、たしかにこれは殺しの道具なのだと、あらためて何か冷たいものを感じるが、普段はもう、

アルファードが剣を下げていることにすっかり慣れてしまって、何とも思わない。いつも鞘に入ったままで決して抜かれることのない剣は、羊追いの鞭や水入れの革袋と同じ、アルファードの日常の持ち物のひとつに過ぎない。

最初にアルファードの部屋で剣を見た時には、たしかに里菜は、あんな、どう見ても普通のつつましい農家のような家に、あたりまえのように剣が置いてあることに驚いた。ここはそんな、普通の人も剣を持っていなければならないほど危険な世界なのかと不安になりもした。

が、何しろ別の世界なんだからそんなこともあるのだろう、この世界は、まだ剣を下げた人たちが普通に歩き回っているような、そういう野蛮な時代なんだろうと思った。それが、最初のうち里菜がここを実際以上に昔風の、時代がかった世界だと思いこんでいた原因のひとつだった。

後になって、この世界では確かにまだ剣が普通に使われており（どうやら鉄砲というものは発明されていないらしい）、都市の治安維持にあたる官憲だの、裕福な商人などに雇われる護衛の私兵などは当然のこととして剣を持ち歩くが、そういう特殊な職業でない一般市民がつね日ごろ剣をぶら下げて歩くということは、やはり、あまりないらしいのがわかった。といっても、剣の所有自体は別に珍しいことではなく、ことに田舎の旧家では、いざという時の備えや父祖から受け継いだ家財の一つとして剣を持っている家も多いが、普通はそういうものは、納屋にしまったり、先祖伝来の由緒あるものであれば居間に飾ったりして、特別な時以外は持ち歩かないものだそうだ。まあ、あたりまえといえばあたりまえのことだろう。

それなのになぜアルファードは牧場に行く時にまで剣を持ち歩くのかと里菜に尋ねられたローイは、

「まあ、要するに、ヤツは変わり者なんだよ」と、肩をすくめた。

一応、家畜泥棒や狼を寄せつけないためだの、牧場で暇があったら素振りをするためだのと理由をつけてはいるが、本当のところ、

彼は、剣を持ってないと落ち着かないのだろうと言うのだ。
「きっと、あれはさ、赤ん坊がおっぱい臭いタオルの切れっぱしを持ち歩くのと同じなんだよ。ヤツは、あれを持ってなきゃ、不安で外を歩けないんだ」と言って、ローイは、ニヤニヤした。
ローイは、このあたりではあんな無粋な長剣を普段から持ち歩いているのはアルファードくらいのもので、これが他の人だったら時代錯誤の変わり者、かっこつけのひけらかし屋と笑い物になっていただろうがアルファードだから笑われないのだと話してくれた。彼が武術大会のチャンピオンであり、また実際にみんながドラゴン退治で彼の剣の世話になっているからだと。
その時に里菜は、アルファードが武術大会のチャンピオンであることや、自警団長としてドラゴン退治をしていることを、初めて知ったのだ。
それを言うと、ローイは、信じられない、という顔をして、
「なんだ、やっこさん、あんたに、そういうこと何も話してないわけ？　それって、無口だとか謙遜だとか、そういう次元じゃねえよなあ」と呆れかえり、武術大会でのアルファードの栄光や、彼自身も加わってのドラゴン退治の様子について、身ぶり手ぶりを交え、微に入り細をうがった誇張たっぷりの熱弁を振るってくれたのだ

第一章＜エレオドラの虹＞　第七場（2）

ローイが語ったドラゴンの生態とドラゴン退治の手順は、だいたいこんなところである――。

馬より一回り以上も大きい巨体で悠然と飛来するドラゴンは、羊やヤギなどの小型の家畜を上空から襲い、時には、鱗あるそのかぎ爪で人間の赤ん坊をさらうこともある、危険な敵である。牛や馬などの大きいものは普通は襲わないし、人間の大人を餌として狙うことはないが、怒りっぽく獰猛な性質で、おどかしたり邪魔をしたりする相手には見境いなく立ち向かってくる。肉食なので農作物を食い荒らすことはないが、着地するのに開けたところを選ぶために、しばしば畑地も被害を受ける。また、ドラゴンが口から吐く炎は不浄な火であり、その火で焼かれた畑では当分は一切の作物が育たなくなるというのも、ドラゴンが恐れられる理由の一つだ。

ふつう、ドラゴン退治は、集団で、撹乱と攻撃の二手に分かれて行なわれる。撹乱役が回りを囲み、矢を射たり石を投げたりドラを叩いたりしてドラゴンの注意をそらす中、火除けの盾を持った攻撃役たちが、炎をかいくぐってドラゴンに接近する。

ドラゴンには翼があるが、体が大きいため、平地から自力で飛び上がるには助走や風待ちが必要で、あまり機敏には飛び立てない。それでも、もし飛び上がって上から襲われると危険なので、まず、槍などで翼を破るのが定石だ。そして、四方八方からの撹乱でドラゴンを混乱させ、繰り返しの攻撃で弱らせたのち、攻撃役のなかでもっとも勇敢で腕の立つものが、仲間たちの援護を受けながらドラゴンを仕留めるのである。

アルファードは、この、最も危険でかつ華々しい仕留め役を、ここ数年、一手に引き受けている。

仕留め役は、普通は長槍を持ち、ドラゴンの眉間の急所を狙うのだが、アルファードは、身体ごとドラゴンの胸元に飛び込み、鱗の

隙間から剣で心臓を刺し貫く。

これは、彼の前には誰もそんなことができるかもしれないとさえ考えてみたこともなかったような大胆で斬新な戦法で、彼は、まず、斃したドラゴンの胸を開いて身体の構造や心臓の位置を確かめるところから始めたのだという。

アルファードの言によれば、離れたところから長槍を振り回して、一番よく動く頭部の、それも極めて範囲の狭い急所を狙うより、このほうがずっと確実で合理的な、実用的な戦法だというのだが、理屈はそうでも、ドラゴンの巨体を間近に見上げる恐怖が常人にそう耐えられるものではないことは、実際にドラゴン退治を経験したものほどよく知っているし、もしその恐れを克服できたとしても、本当に首や前足をかいくぐってドラゴンの胸元に飛び込むには、それだけでも並みはずれた胆力と敏捷さ、素早い判断力が必要であり、それを実行できる勇気と実力があるのものは、やはり彼の他にはおらず、結局、彼の画期的な戦法は、誰にもまねができないままなのだそうだ。

ちなみに、ローイは撹乱役を務めているが、これが結構優秀なのだという。

彼は、弓の名手で、まず間違いなくドラゴンの目を射抜いてしまうのだそうだ。そうすれば、後の攻撃は、ずっと有利になる。ああ見えても、近隣に名の聞こえた名射手なのである。彼が、ろくに働かずにブラブラしていても、「困ったものだ」程度で済まされているのは、持ち前の愛敬だけではなく、この、自警団での活躍のおかげもあるらしい。

ついでに言うと、彼は、背が高いのでひょろひょろして見えるがそれなりに筋肉はついており、なにしろ敏捷でリーチが長いので、実は、剣もまあまあ使う。剣を振り回すしか能のない、いわば専門バカのアルファードと違って（と、これはローイの弁である）、彼は、根っから器用で要領のいい人間で、実に特技が多い。大抵のことは、ほどほどの努力で人並み以上にこなす。

アルファードの剣の修業の相手をしたのも、ローイなのだそうだ。
アルファードに最初に剣術の基礎を教えたのは育て親のレグル老である。彼が、突然、養い子に剣術を教え出すまで、村人たちのほとんどは彼が剣をたしなむことさえ知らなかったのだが、彼は実は、いつどこでどんないきさつで会得したものか、非常に高度な基礎理論を正確に身につけており、それを、何を思ってか、少年だったアルファードに徹底的に叩き込んだのだ。
が、老齢の彼に出来たのは本当に基礎的な理論と型の指導だけで、老人が病で寝ついてからアルファードの実践的な打ち合い稽古の相手をずっと務めてきたのは他でもないローイであり、それによってローイ自身も、かなり剣の腕をあげてきた。今ではアルファードのほうがずっと強くなってしまったが、今のアルファードがあるのも、もとはと言えばローイのおかげである……と、これはローイが常々あちこちで吹聴していることだが、アルファードに訊いてもその通りだと言うから、本当のことなのだろう。どうも、彼は、よほど練習台に向いた人間らしい。
こんな名射手を有し、人望厚い名団長であり最強の仕留め手であるアルファードに率いられて見事に統制がとれたイルゼールの自警団は、近隣にその名をとどろかせ、その名を唱えればドラゴンが逃げていくとまで、たたえられている。頼まれて、よその村の付近に出たドラゴンの退治に赴くことも多いという。
――と、こんなような話をする間中、ローイが、彼自身のドラゴン退治での活躍ぶりを思いっきり強調したのは言うまでもないが、彼には気の毒なことに、里菜は、その部分はどうせ吹かしと受け止めて聞き流した。
後で里菜がアルファードに、どうして武術大会やドラゴンのことを隠していたのかと問いつめると、アルファードは困惑顔で答えた。
「いや、別に、隠していたわけじゃない。ただ、武術大会なんて昔の話で、今の君のここでの生活に何の関係もないから、たまたま話さなかっただけだし、ドラゴンについては、いきなりこの村にドラ

ゴンが出るなどと打ち明けたら君が驚き、恐れると思って、君がもっとここに慣れたころ、時機を見て話そうと思っていた」

「だって、教えてくれる前にドラゴンが出たら、もっと驚くじゃない」と里菜が抗議すると、アルファードは、

「いや、そういうことは滅多にないだろう。ドラゴンが出るのは主に冬になってからなんだ」と、やっと里菜にドラゴンのことをしぶしぶ説明してくれたのだ。

彼は、普段は無口だが、根っから口下手というわけではなく、必要があると思えば、いくらでも多弁にもなれるらしい。が、特に必要だと思わないことは、あまり話さない。そして、彼が必要だと認める事柄は、どうやら、あまり多くない。質問をすれば、その質問には額面通りきちんと答えてくれるが、ローイのように一を聞けば十を教えてくれるなどということはないので、彼から知りたいことを全部聞き出すのには、いちいち根掘り葉掘り質問しなければならず、結構手間がかかるのである。

「伝説では、年経た巨大なドラゴンは邪悪な知性と魔法の力を持ち、人語を操るという。が、そうした伝説については、俺は詳しくない。俺が知っているのは、このへんに飛んでくる現実のドラゴンのことだけだ。そして、俺の知るかぎり、あれは、ただの動物だ。冬になって食べ物が不足してくると、エサを求めて村に下りてくるらしい。ここ数年、ドラゴンの飛来がやたら多いんだが、村を荒らしさえしなければ、俺は、出来れば、殺したくなどないんだが」というのが、アルファードの面白くもなさそうな説明だ。

彼にとっては、ドラゴンは、ただ、餌を求めて山から里に迷い出て来る大型の野生動物にすぎないらしい。

ドラゴン退治の話も、ローイから聞くと、はらはらどきどきの大冒険なのだが、アルファードにかかると、淡々と手順を説明するだけで何の面白みもなく、まるで日常のありふれた肉体労働のひとつであるかのように聞こえて、まるきり身も蓋も無い。

事実、彼にとっては、ドラゴン退治は村の男として当然担うべき

単なる役務のひとつであり、延々と繰り返す日常生活の一部なのだろう。

村の人たちは、彼がドラゴン退治のことで自慢話をしたり、手柄顔をしたりしないのは謙虚だからだと思っているが、里菜は、そうは思わない。

そもそも、彼は、村の人々からは非常に謙虚な人間だと思われているが、里菜が見たところ、本当は、別に、そういうわけでもないのだ。彼は、自分の力や働きを過大評価もしないかわりに、過小評価もしていない。

確かに彼は、あまり自慢話をしないが、それはたぶん、別に謙虚だからではなく、ただ、それらが自分にとって空しいこと、どうでもいいことだったり、あたりまえの義務だったりで、自慢するようなことだとは本当に思っていないから自慢しないだけではないだろうか。

その証拠に、彼は、愛犬ミュシカのことは手放しで自慢する。

彼は、単に、自分の価値観の通りにものごとを見ているだけで、ただ、その価値観が、どうやら、他の人たちとちょっと違うのである。彼の価値観によれば、自分がミュシカを近隣一有能な牧羊犬に育て上げたという成果は誇るに値するが、ドラゴン退治は、誇るようなことではないということらしい。

それどころか、どうも、彼は、ドラゴンやドラゴン退治については、あまり話したくないらしい。何か、その話題に触れられたくない訳でもあるようだ。

それを里菜は、自分なりに、村人たちの期待が重いのだろうかと想像している。

アルファードが、＜女神のおさな子＞として、ドラゴンから村を守る役割を期待され続けてきたことも、里菜はすでに知っていたのだ。

「＜女神のおさな子＞、かあ」と、里菜はつぶやいて、その時ちょうど川のほうから戻ってきたアルファードを眺めやった。

粗末な服を着て、ただ普通に歩いてくるだけで、その雄々しい姿は圧倒的な存在感を漂わせて、里菜の目には本当に神話の中の英雄のように見えた。

（大人なのに＜おさな子＞っていうのは、ちょっと変だけど、アルファードなら、なんだか神々しくて、ほんとうに女神の申し子なのかもって、思っちゃうけどな）

里菜は、近づいてくるアルファードに、うっとりと見とれた。

その時、頭上で、何か風を切るような音が聞こえ、ふいに陽がかげった。

ミュシカが、ガバっと起き上がった。

アルファードが一瞬凍りついたように足を止めて空を仰ぎ、次の瞬間、猛然と地を蹴ってこちらに走り出した。

（何？）

上を見上げた里菜は、息を呑んだ。

太陽を横切って、巨大な黒い影が頭上を飛び過ぎて行った。

長い尾と大きな翼が目に焼き付いた。

（……ドラゴン！）

一瞬遅れて、周囲で風が騒いだ。

第一章＜エレオドラの虹＞　第七場（3）

「あーあ……。もの想う秋、ってか。畜生め。なんてこったい。はぁ……」

ローイは、村はずれの道を、山に向かって大股で歩きながら、がらにもなく溜息をついた。背中には弓と矢筒を背負っている。家の仕事をさぼって里菜のところに行く日には、彼は、兄嫁には山鳥を狩りに行くと告げて出て、実際、ついでになるべく鳥や兎を射て持ち帰ることにしているのだ。彼は彼なりに、兄夫婦に気を使っているのである。

今日も、彼は、里菜の訓練につきあいに、牧場（まきば）へ行くところだ。

一週間前、里菜は初めて自分の『力』を抑えることが出来たのだが、まだ訓練は続いている。

あの時は、ローイは、彼女がすぐに、もう何の不自由もなく魔法の存在を受け入れるだろうと思った。だが、彼女は結局、魔法を信じられたわけではなかったのだ。ただ、アルファードを信じただけ、アルファードの言葉を鵜呑みにすることを覚えただけなのだ。

あの後、しばらくは、彼女は、アルファードがいちいち「これは本当のことだ」と言い聞かせなければ魔法を消してしまった。そのうち、ローイの出す火だの水だのといった、もう見慣れた魔法は消さずに済むようになったが、それも、アルファードがそばにいないとだめだ。それに、初めて見る魔法や、ローイ以外の人の使う魔法は、最初の一回は、そのつどアルファードが言い聞かせなければ消してしまうのだ。

要するに、彼女は、アルファードなしでは、その力を抑えられないのである。

たぶん彼女は、心の底では、自分の力が制御できることを望んでなどいないのだ。それが出来るようになったら、アルファードと一緒にいる大義名分がなくなる。それくらいなら、今のままのほうが

いいと思っているはずだ。
それでも彼女が頑張っているのは、ただひたすら、アルファードに誉められたい、がっかりされたくない、見捨てられたくないという一心だろう。
彼女がある程度の精神制御に成功しているのも、自分の精神を自分でコントロールできるようになったというよりは、むしろ、アルファードに制御されることを受け入れたからではないか。たぶん、里菜は、ただ、自分で判断することをやめ、自分の理性をアルファードの支配に明け渡してしまったのだ。何も考えずにアルファードを信じていれば間違いない、彼は絶対自分を悪いようにはしないから判断はみんな彼に任せておけば良い、と。里菜がその力の制御を学ぶ過程は、そのまま、アルファードが里菜の精神を支配していく過程でもあったのだ。
アルファードはもともと、たやすく人を支配する質の人間だと、ローイは、前から思っていた。他の誰もが、アルファードの見かけの謙虚さ、もの静かさに惑わされて、彼のそんな性質に、あまり気づいていないだけだ。
ローイが思うに、彼が里菜に対してしたことは、実は、彼が自警団の教練で常日ごろからやっていることと同じなのだ。ただ、今回、里菜に対してしたことの方が、普段のそれよりずっと極端なだけだ。
団員に剣を教える時、彼は、指導者として、しばしば、相手の心を無条件でまるごと自分に預けさせるようなことをする。
普段、いかにも無私無欲で実直そのものという顔をしている彼が、そうやって意図的に誰かの心を支配しようとする時に突然見せつける意外な狡猾さ、手際の良さ、ためらいのなさに、観察力の鋭いローイは、これまでに何度となく驚かされてきた。
が、別に、それを悪く言う気はない。
あれは、アルファードの、独特の指導法なのである。そして、確かにそれは、しばしば非常に有効なのだ。いったん自分の心の全てを指導者としての彼に明け渡すことで、その団員は、確かに、皆、

必ず強くなっているのだから、文句を言う筋合いはない。
それに、アルファードも、誰に対してもそれをするわけではない。彼がそれをするのは、相手の性格や相手と自分との相性を見極めた上で、特定の一時期にそういう段階を経ることがその相手の指導のために有効だと判断した時だけだ。
また、彼が私利私欲のためにそれをしているのではないことも、認めざるを得ない。彼は、あくまでも自警団の強化のために無心に尽力しているだけなのである。彼の指導者としての素質と技量は、ローイも高く買っている。おかげで、この村の自警団は、個々の団員の力量も高いし、団長のアルファードを中心に鉄の結束を誇っている。そしてそのことが、村をドラゴンから守ると同時に、ドラゴンと戦う団員たちの命をも守っているのだ。なんといっても、人の命ほど大切なものはない。アルファードは、団長として、団員たちの命を預かっているのだから、それを守るために、自分に出来る限りのあらゆるテクニックを駆使して手段を選ばず力を尽くすのは当然だ。
だが――と、ローイは考える。
彼の考えでは、アルファードが本能的に会得しているらしいあの巧みな人心掌握の手腕を、発揮していい場合とそうでない場合、そして、発揮していい相手とそうでない相手というものが、あるのである。
そして、彼の考えでは、アルファードは、里菜にだけは、あれをやってはいけなかったのだ。他の誰かならともかく、里菜に対してアルファードがあれをやるのだけは、絶対に反則なのだ。
事が事だけに普段よりずっと強引で理不尽だったアルファードのやり口を思い出すたびに、ローイは、むかむかと腹が立ってくる。
あそこまで強引な、無茶な理屈が、いとも簡単に通ったのは、相手がもともと彼を信じ切り、頼り切っていた里菜だからで、里菜がアルファードに恋をしていたからなのだ。
そして、そういう気持ちは、絶対に、何か他のことのために利用

してはならないものだと、ローイは思うのである。
結局は里菜のためだとはいえ、そんなにも信じ切られているその気持ちを何のためらいもなく利用してやすやすと相手を支配してしまう――ローイには、そうとしか見えなかった――などという、相手の信頼につけこむようなやり方は、ローイの感覚では、結果は良くても手段として汚いような気がするのだ。
たしかに、里菜は、自分のあの妙な力を、制御する必要があった。彼女がこれからこの世界で生きていくためには、それは欠かせないことだった。そして、アルファードは、例によって私利私欲のためではなく、あくまで彼女のためを思って、ひとつの方便として、ああいうせりふを言ってみせたのだろう。
けれど、この場合、私利私欲のためではないということが、かえってローイの気に障るのだ。単なる方便で、あんなふうに里菜の心をがっちり自分に繋ぎ止めるようなまねをしてしまうなんて、そして、それにあっさり成功してしまうなんて、なんだか不公平ではないか。
アルファードが、里菜に対する下心があってあれをしたなら、それはそれでしかたないだろう。アルファードにだって、女の子を口説く自由はある。口説くのがうますぎるからといって、ローイに文句を言う権利はない。
でも、アルファードは、たぶん、別に里菜を口説き落とすつもりであんなことを言ったのではないのだ。本人は、全然、そういうつもりはなかったに違いない。そういうつもりがあって照れもせずにあんなことを言えるアルファードではない。本人は色恋とは関係ない話のつもりでいるから、平然とあんなことが言えたのだ。
でも、自分に恋をしている女の子にあんなことを言うのが、相手の心にどんな影響を及ぼすか、彼は、考えてみるべきだったのだ。いくら彼でも、里菜が自分が恋していることにくらい気づいていただろうに、気づかぬふりであんなことを言っておいて、あとは、すっかり手中にした里菜の心をそのまま放ったらかして自分は相変わ

らず超然と澄ましかえっているのだろうと思うと、実に気分が悪い。あれは反則だ。どう考えても、フェアじゃない――。

（ありゃあ、まずいよなあ。アルファードのあのやりかたは、リーナに、自分の力を制御することを教えているんじゃなくて、「俺無しではお前はやっていけないんだ」ってことを教え込んでるだけだ。そんなこと、わざわざ教えこまなくても、リーナは最初から、どういうものかアルファードにすっかり頼り切って、アルファードがいなけりゃ日も暮れないって感じじゃん。俺は、どっちかっていうと、ちょっとそれを治したほうがいいと思うぞ。あの子だって、もうすっかり元気になったんだし、ここの暮らしにも慣れたんだし、見かけはちいとばかり子供っぽくても本当はもう子供じゃないんだから、そろそろ、何でもかんでもアルファードに頼ってばかりいないで、もうちょっと自立心ってものを持つべきだと思うね。アルファードも、本当にあの子のためを思うなら、そうなるようにしむけてやるべきなんだ。だいたい、アルファードは、あの子をがっちり囲い込みすぎだよ。過保護を通り越してるね。たまたま最初に見つけて家に泊めてやったからって、あの子はちゃんと一人前の人間で、捨て猫じゃないんだから、別に、最初に拾ったやつのものに決まりってわけじゃねえんだぞ）

（リーナもリーナなんだよな。あの子も、ありゃあ、アルファードに追い出されるのが怖くて、アルファードがいないと自分はだめなんだってことを見せつけ続けているんだ。そんな心配しなくたって、アルファードのやつ、ほんとはリーナを家から出す気は全然ないんだろうにさ。ふたりしていったい何をやってんだか。もう勝手にしてくれ、だよな）

（それにしても、何だってまた、リーナはアルファードなんかにいきなり惚れちまったんだ？　まったく、もったいない……。そりゃあ、助けてくれた恩人には違いないが、それだって、ただ、リーナが倒れてるとこに最初に通り掛かったのが、たまたまヤツだったってだけじゃないか。行き倒れを見つければ家に連れ帰って看病する

くらいのことは、なにもヤツじゃなくたって、この村の誰だって、するさ。もちろん、俺だってさ。あーあ、なんで俺が最初にリーナを見つけなかったんだろうなあ。そしたら、なにもかも、全然違う成り行きになってたかもしれないのに）

気の毒なエルドローイは、すっかり里菜に恋してしまっていたのである。

第一章＜エレオドラの虹＞　第七場（4）

里菜がやってきた当初、色めき立ってほかの村からまで彼女を値踏みに来た若者たちのうち、最初のもの珍しさと興奮が薄れた今でも女の子としての彼女に興味を示している者は、ローイが知るかぎり、そう何人もいない（そして、そうことに関する情報で、彼の知らないことは、まず、無い）。

彼女と同年代の若者の多くにとって、里菜は幼すぎて、恋愛の対象にはならなかったのだ。『あっち』の世界にいたころでも里菜は実年齢より子供っぽく見られがちだったが、この村の娘たちは全体にやや大柄で、顔立ちも身体つきも大人びているから、里菜はよけい、大人の女性の中に紛れ込んだ子供のように見える。しかも、この村では、若者たちが社会的に大人になるのが『あちら』より早い。十七、八ともなれば、自分の子を産み育ててくれる生涯の伴侶を選ぶべく真剣に模索しはじめているのがあたりまえだ。そんな彼らにとって、まだ子供子供した小柄な里菜は、どう見ても相手として役不足と映ったのである。

それでも里菜がいいと思った者も、全くいなかった訳ではない。何しろ、幼なじみではない女の子というだけでも希少な存在だ。しかも、よその世界から来た娘である。そこはかとない神秘性もつきまとう。髪や目の色もちょっと珍しくて人目を引くし、顔立ちもどことなく風変わりで、そのへんの見慣れた娘たちとは雰囲気が違うので、見ようによっては何やら庶民離れした高貴な顔つきのような気がしなくもない。それに、若者たちの好みもさまざまだから、中には、ことさら子供っぽい容姿の娘を好む者もいる。

が、彼らのほとんどは、すぐに里菜をあきらめてしまった。どうせ彼女はアルファードのものなのだ。

一緒に住んでいても彼らの間に『何もない』のは、誰が見てもわかったが、里菜がアルファードにすっかり夢中なのは、同じ位、誰

の目にも明らかだった。それなら、アルファードが単なる保護者としてでも里菜をしっかり囲っているうちは、もう誰にも勝ち目はないだろう。

数少ない里菜の崇拝者は、ローイを除けばなぜかみんな気弱で純情な若者で、村の英雄アルファードに対抗しようなどとは夢にも思わず、自分の片思いの儚さを嘆きながら里菜のことを忘れていったのだった。

（うん、あいつらは、ライバルの内に入んねえや。問題はアルファードだよな……）

ローイは、また溜息をついた。

彼にしても、最初に里菜を見たときには、かわいいとは思ったが、やはりほかの若者たち同様、正直言って、なんだ、まだ子供か、と、思ったのだ。ただ、持ち前の親切心と好奇心、幅広い年齢層の女性全般に対する博愛精神、そして、将来に備えて今から顔を売っておこう、くらいの軽い打算で、とりあえず挨拶代わりにコナをかけて、ちょっとしたサービスを試みただけだ。

だが、ただちょっとかわいいだけの子供だと思っていた里菜の黒い瞳にふいにまっすぐに見つめられ、微笑みかけられたあの時、そのまなざしが、魚の小骨のように彼の心に突き刺さった。そしてそれは、取れるどころか、日がたつにつれてますます深く刺さって、彼を悩ませ始めた。今では、もう、この小骨が気になって、三度の飯より好きなナンパをする気にもならないのである。

（俺も、ヤキがまわったなあ……。なんだって、あんな子供みたいな女の子に、こんなにぞっこんにイカレちまったんだ？　……そう、あの眼だよ。リーナの、あの眼が、いけないんだ）

ローイを魅了した里菜の神秘の瞳は、迷信深い一部の老人たちには、何か不吉な力があると思われているらしい。里菜が魔法を消してしまうのは、その眼に超自然的な力があるからだと言うのだ。彼らにとって魔法は、生まれながらに女神から授かっている、正しい自然な能力であるから、それを消してしまう力などというものは、

不自然な、不吉なものにほかならない。里菜のことを、「女神が使わしたものではなく、邪眼をもつ悪霊の使いだ」などとささやき、世話役や、まだ幼い司祭のティーティがいくら説得しても、その考えをかえないものすらいる。

そういうものたちは、里菜の力を恐れて彼女の前には出てこないし、誰もそんなうわさを彼女の耳に入れようとはしないから、里菜は自分をそんなふうに恐れるものがいるとは知らないのだが。

ローイはもちろん、そんな迷信深いうわさを一瞬たりとも本気で考えたことはないし、そんなことを言う奴は殴り飛ばしてやりたいと思うのだが、でも、彼女の眼に不思議な力があるのは本当かもしれないと思う。自分をこんなにも呪縛してしまうような、何か特別な力が。

そういうば、里菜を恐れる老人のひとりが、彼女に見られると魂を吸い取られると騒いでおり、それを聞いた時、ローイは、何を迷信じみた、と、笑い飛ばしたのだが、今にして思えばあんがいそれは当たっていたのかも知れない。確かに里菜の黒い瞳は、ローイの魂を吸い取ってしまったではないか。

里菜の、『魔法を消す力』を、一番身を持って体験しているのは、ほかでもない『練習台』のローイなのだが、それは確かに、慣れるまでは、彼にとっても少々ぞっとする体験だった。が、何事も慣れである。今では、そのことは、何とも思わない。

それなのにローイは今でも、里菜の黒い瞳にじっと見つめれられると、なんだか居心地悪いような、落ち着かないような気分になり、そのまなざしから逃れたくなる。そのくせ、一方で、もっともっと、いつまでも、見つめられていたいと思ってしまう。たとえそれで、そのとき魔法が使えなくなるだけでなく自分の魔法の力そのものが消されてしまうとしても、それどころか自分の存在自体が消されてしまうとしても、里菜に見つめていてほしい。その、相反する欲望に、彼は、どうしていいかわからなくなるのだ。これが不思議な力でなくて何なのだろう。

里菜の瞳に潜む、あどけない顔立ちにそぐわないほどに強い、けれどどこか醒めた輝きが、ローイの心を掴んで放さない。そのまなざしの中に、ときおり、何千年ものあいだ遥かな高みから人間の営みを見つめ続けてきたもののような、哀れみにも似た英知が宿る瞬間があるような気がするのだ。

（でも、アルファードのような男は、あの輝きを力でねじ伏せてしまうだろう。リーナをだめにしてしまうだろう。なんでリーナは、そこんとこ、わかんないんだろうな。アルファードなんかにあんなに惚れて……。リーナがやつを見上げるときの、あの様子といったら……。リーナにあんなふうに見てもらえるなら、俺は、死んだっていいね。なのに、どうせアルファードのやつは、その有難みが半分もわかっちゃいないんだ。ヤツは、リーナのあの黒い瞳の本当の値打ちだけじゃなく、あの、ピンクの薄い貝殻みたいな耳たぶや、小さな白い手や、バラのつぼみみたいな唇のかわいらしさなんかにさえ、ろくに気がついていないにちがいない。でなきゃ、あんなふうに、いかにも『何にもありません』ってな涼しい顔して一緒に住んでなんかいるもんか）

このことを思うとき、ローイは、むらむらと腹が立ってくるのだが、それはただ嫉妬というのとは少し違う、義憤に近い感情である。一言で言えば「もったいない！」のだ。

例えていえば、『神様のような巨匠の名画が芸術を解さない成金の応接間に飾られているのを知った貧乏画学生』のような気持ちである。

（女の子ってのはな、すべからく、その値打ちの分かる男が、正しく鑑賞してやらなけりゃならないんだよ！　それをあんな、風流を解さない、木の股から生まれたような朴念仁野郎が、あんなかわいい娘を、ペットの仔猫かなんぞのように、たいして有難がるでもなく無造作に独り占めして、なんの権利があるんだかしらんが偉そうに後ろに従えて大手を振って歩いているんだぜ。こりゃあ、許し難い犯罪行為だよな！　犬に千ファーリ金貨、羊に黒曜石ってなもん

だ。まさに、社会的損失ってやつだ！）

そう、彼は常に、あらゆる女の子を正しく鑑賞しているのである。彼は、里菜のような清純派も好みだが、色っぽい娘も好きだし、勝気な娘もおとなしい娘も、痩せた娘もふくよかな娘も好きである。要するに、どんな女の子でも好きなのだ。単に女好きなのだと言ってしまえばその通りなのでそれまでだが、彼はそれを、『女の子の見どころを心得ている』と称している。彼があちこちの女の子を誉めまくって口説くのは、決して心にもないお世辞を言っているのではなく、多少の誇張は交えていても、それなりに本気で誉めているのだ。

だから彼は、面と向かっては誉めまくった女の子を、後で、男同士の自慢話の中で笑い物にしたり、けなしたりは、絶対しない。彼が、村中の娘を無節操に口説いて回っても娘たちから決して憎まれないのは、そのためもあるだろう。

もっとも彼は、憎まれはしないがあまり相手にもされず、いつも「いいひとね」だの、「お友達」だのと言われるクチだ。それは、もちろん、本人がそう言われやすいタイプだからなのだが、彼が村の娘たちからあまり本気で相手にされないのには、もうひとつ、理由があった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第七場（5）

実は、彼は、もともとはヴィーレの子供のころからの許婚（いいなづけ）なのである。もと、というのは、今はそれが白紙に帰ってしまっているからなのだが、いくら当事者たちがそう言っても、村の人は、まだ、彼らを許婚同士と見なしている。

幼い頃、ふたりはとても仲が良かった。ふたごのようにいつも一緒に遊び、子供心に、大きくなったら自分たちは結婚するのだと素直に信じ、楽しみにしていた。ふたりの婚約は、結局は、ローイが次男坊でヴィーレは一人娘であるという両家の事情があっての話とはいえ、幼い二人がもとからいかにも仲が良かったからこそ出た話でもあるのだ。

ローイは知らないが、実は、ヴィーレは、いつか幼いローイがお嫁さんごっこの時に指輪にしてくれたスミレの花を押し花にして、今でも、ひそかに持っている。自分が愛しているのはアルファードただ一人だけれど、これはそういうのとは違う、ただの幼い日の思い出のかたみなのだと自分で自分に言い訳しながら、部屋の整理の度に捨てられず、小箱の底にしまい直すのだ。

あの日、風の吹き渡る丘の上で、春の日射しに包まれて白い花の冠をかぶったヴィーレに、ローイは、スミレの指輪と幼いくちづけを贈った。

「大きくなったら、僕はヴィーレに、本物の、見たこともないほど大きいシルドライトの指輪をあげる」と言ったローイの声は、今でもヴィーレの耳の奥に残っている。

だが、やがて思春期を迎えたふたりは、おたがいを恋愛の対象として見ることが出来なかった。親の決めた許婚者ということに対する反発も芽ばえていたし、幼い頃からあんまり近くにいすぎて、いまさら恋をするような相手ではなくなってしまっていたのだ。

そんなとき、ヴィーレのそばに、アルファードがいた。ヴィーレ

はアルファードを恋の対象に選んだ。

ヴィーレはその片思いを誰にも打ち明けはしなかったが、何も言わなくても、人の心の動きに聡いローイには、もちろん分かった。

それで、ローイも意地になって、ヴィーレとだけは絶対結婚しないと言い出した。

その頃にはローイの両親はすでに亡く、ヴィーレの両親は若いふたりの気持を尊重し、婚約の解消を承知した。反対すればローイがますますムキになるのは目に見えていたし、無理強いせずに本人たちに任せてそっと見守っていればいつかはもとのさやに収まるだろうと、内心期待していたのである。

なんといっても、二人はもともとあんなに仲が良かったのだし、婚約解消といっても、別に罵り合ってのけんか別れではない。母性的なヴィーレは、誰が見ても、世話を焼かれることなど必要としそうもない『大人』のアルファードより、根が甘えん坊のローイの方と相性がいいだろうし、ローイのようなだらしない極楽トンボにはヴィーレのようなしっかりものの奥さんがぜひとも必要だというのは、村人共通の見立てだ。

そんなふうにたかをくくって様子を見ているうちに、もう何年もたつが、一向に、ふたりがよりを戻す様子はない。ヴィーレはあいかわらずアルファードに片思いだし、ローイは村中の娘たちを、だれかれ構わず口説いてまわっている。たぶんローイは、ヴィーレ以外なら誰でもいいのだ。

誰もが、ローイとヴィーレは本当はまだ好きあっていると信じている。だが、人の出入りもほとんどない小さな村のなかで、アルファードも含めたこの三人の三角関係は、すっかり膠着状態に陥り、そのまま、生ぬるい友達関係に落ち着いてしまった。もともとローイとヴィーレはけんかのひとつもしたわけではないし、ふたりの婚約解消にアルファードが絡んでいることは、暗黙の了解ではあっても誰も口には出さなかったから、三人三様に口をつぐんでいれば、彼らは、何事もなかったように三人仲良く、友達でいられたのだ。

だから、その真ん中へ里菜が現れた時、ヴィーレの両親や、事情を知る回りの人達は、これはこの困った膠着状態を変えるきっかけになってくれるのでは、と、口には出さず、ひそかに期待したのだ。

実は、里菜がアルファードと一緒に住むことになった時、世話役たちの中では、「まあ＜マレビト＞どうしだから、よくはわからないが、それが当然なんだろう」という漠然とした肯定の空気の中にも、一応は、「未婚の若い男女が公然と一緒に暮らすのは問題があるのでは」という少数意見も出たのだ。とはいえ、そう言った本人も、内心は、「若い男女などといっても、一方はあのアルファードで、片方は聞くところによるとまだ幼く、彼自身も養女として引き取るという気持ちでいるらしいから、別に、変に勘ぐることもなかろうが」と思いながら年寄りの義務としてとりあえず建前を言ってみたまでなのだが、それを聞いた時に、「いや、でも、もし万一、ふたりの間に、将来、『間違い』でも起こって、そのまま＜マレビト＞どうしで一緒になってでもくれれば、それはそれで、実は四方八方に都合がいいんじゃないか……」と、ひそかに思ったものもいたのである。

里菜がアルファードの保護下に入ることが村の大人たちの公認を得たのには、そんな思惑も絡んでいたのだ。

が、若者たちの恋愛模様が大人の思惑どおりになどなるわけがなく、今度は、里菜を含めた四人の間に擬似家族的な四角関係が発生して、そのまますっかり安定してしまったわけなのだが、アルファードさえ誰かと片付いてしまえばヴィーレはいつかはローイと一緒になるだろう――そしてアルファードがヴィーレを選ぶことはいくら待ってもないだろう――と、今でも、誰もが思っているのだ。

そんな事情で、ローイは、今だに、村の娘たちからヴィーレの許婚と見なされている。

どうせ誰も彼を本当に手に入れることはできないのだと。

そのかわり彼は、遊び相手としてキープしておくには、都合のよい男だった。彼は本心ではまだヴィーレを好きなのだから本気で深

みにはまる心配はないし、かといって、彼と遊ぶのにヴィーレに遠慮する必要もないというのが、娘たちの計算である。村中の娘たち共有の、手近で安全で気軽な遊び相手、それが彼だったのだ。

彼とて、いつもいつも、いなされてばかりいるわけではなく、よその村に遠征してまでこまめに女の子を口説いている甲斐あって、たまにはそれなりにいい目を見ることもあり、祭りの夜など、顔を売っておいた女の子の中の誰かから、ちょっとした火遊びの相手に選んでもらえることもある。彼はそれを『おっ、ラッキー！』という程度に受け止めて屈託なく楽しみ、後でその娘に対して相手が望む以上の厚かましい態度をとることもない。ただ、変わらずに親切な友達であり続ける。そんなところも、彼のそれなりの人気の理由だろう。彼にとって、恋はいつも、楽しいゲームだったのだ。

それなのに今度は、勝手が違う。楽しいというより、辛いのだ。ただ片思いだからだけではない。自分の中にある、里菜への想い自体が、何か痛みを伴うようなものなのだ。

（そうか、恋ってのは、辛いものだったんだなあ）と、彼は初めて合点がいった。

彼は、あちこちで顔を売った娘たちから、どういうわけか『人生相談』を持ちかけられることが多かった。彼が、意外と口が固く、しかも人畜無害な気のいい若者として知られているためばかりでなく、娘たちは、荒野で水を求める獣のように、本能的に、彼の、距離を保ったやさしさを嗅ぎつけるのだろう。

そして、彼女たちの相談ごとは大抵恋愛に関することで、彼女たちは大抵、その恋に苦しんでいるのである。

（それなら、やめちまえばいいのに）と、彼は思うのだが、彼女たちがそんな回答を期待していないのはわかっている。いや、そもそも、答など、求めてはいないのだろう。だから彼は、「やめちまえ」とは言わない。ただ、黙って話を聴いてやる。

彼女たちがローイのところに来るのは、解決を求めてではなく、ただ、自分の苦しみを語りたいだけなのだ。ローイに悩みを打ち明

けた娘たちは、彼の、熱を持たない、水のようなやさしさに触れて、さらなる苦痛に耐える力を取り戻し、辛い恋のただなかに帰っていくのである。

けれど彼自身は、これまで、なぜ、多くの娘たちが、まるで苦しむのが好きだといわんばかりに、わざわざ辛い恋を選ぶのか、理解できなかった。それが、今、わかった。

彼女たちは、別に辛い恋を選んでいたのではなく、たぶん、本当に恋をすると、それはしばしば、辛いものになってしまうのだ。

（俺は、色恋にかけちゃ、ちょっと詳しいつもりでいたが、なんにもわかっちゃいなかったんだな。もしかして、これが、『本気』ってやつなのか……？　ああ、なんてこった。いや、こんな顔してちゃダメだ。おい、エルドローイ、こんなシケた顔でリーナの前に出ちゃいけないぞ）

彼は、里菜の前では、相変わらず、常に陽気におちゃらけ続けているのだ。それは何も、素顔を偽って演技をしているわけではなく、彼はもともと陽気なお道化者で、それが彼の素顔なのだが、最近、彼は、里菜といると、時々、ガラにもなく妙に真面目な顔をしそうになってしまうのである。

（変だよなあ。俺って、全然そんなヤツじゃなかったはずなのに。本当に好きな相手の前では、自分が自分でなくなっちまうんだろうか。それが恋ってものなのか。だから辛いんだろうか……。あーあ、俺はどうしちまったんだ。ようし、いっちょ、景気づけに、歌でも歌って行くか！　それ！）

ローイは突然大声をはりあげて歌い出した。

「おーれーはァ、村中でェーいっちばぁ……あ、ああ？」

歌声は、ふいにとぎれた。大口を開けたまま空を見上げたローイの目の中を、黒い影が通りすぎた。その後を追うように荒々しい風が地上を駆け抜けて、ローイの髪が舞った。

「う、うわあッ！　出た！　ドラゴンだ。……こりゃあ、ヤバい。あっちは牧場だ。さて、どうする？　村に戻って自警団の連中を集

めるが先か、とにかく山へ向かうが先か？　この場所からなら、やっぱ、山だろうな。よし、いくぜ！」

山腹に向けて飛んで行くドラゴンの姿を追って、ローイは、その長い足で、脱兎のように駆け出した。

第一章＜エレオドラの虹＞　第八場（1）

猛獣のように突進してきたアルファードは、里菜を押し退けるようにして、置いてあった剣をひっつかみながら、押し殺した声で言った。

「リーナ。君は、ミュシカと一緒に、羊たちを連れてあっちの木立の陰に逃げろ。あとはミュシカに羊をまかせて、薮の中に隠れているんだ。ドラゴンは、木立のあるところには降り立たない。だが、万一ドラゴンがそっちへ行って羊をさらおうとしても、君は絶対、出てくるな。俺がもういいと言うまで隠れているんだ。いいな！　行け！」

早口ではあったが、その声は、動作の素早さとはうらはらにあくまでも冷静だった。

アルファードに短く指示を与えられたミュシカは、瞬時に弾丸のように駆け出して羊の群れに向かった。里菜もその後を追うべきだとはわかっていたが、身体が動かなかった。

頭上では、一旦通りすぎたドラゴンが、羊の群れを見付けたらしく、急旋回してこちらに向かっていた。鱗が、秋の陽を受けて銀に輝く。

長い首と尾がまっすぐに伸びて、ドラゴンは、不思議な、軋むような声で、一声、高く鳴いた。

遠い過去の彼方から、あるいは心の奥底の、古い血塗られた夢の中から聞こえてくるようなその声に、里菜の血は凍り付き、全身がそそけ立った。心が悪夢の中に引き込まれ、一切の抵抗の気力が萎えるような気がして、里菜は声もなく立ちすくんだ。

「なにしてるんだ！　リーナ、逃げろ！　羊を頼む」

アルファードは、目をひたとドラゴンに据えたまま鋭く囁いて、自分が羊を追うのに使っている鞭代わりの木の枝を里菜の手に押し込んだ。

頬を打つかのようなその声と、掌に押しつけられた木の枝の感触で、一瞬沈み込みかけた悪夢の中からあやうく立ち戻った里菜は、はっとしてアルファードを見上げた。

「でも、アルファードは？」

「俺は、ドラゴンを引き付ける。心配するな。隠れていろ」

「でも……」

「バカ！　いいから行け！」

そう叫びざまに里菜を突き飛ばしたアルファードは、水袋を頭上に差し上げて中身を全部ぶちまけ、頭から水を被った。そして、着ていた皮の胴着を引き剥すように脱いで片手に掲げると、もう里菜のほうを向こうともせず、服や髪から水をしたたらせながらドラゴンの影を追って走り出した。

里菜のほうは、突き飛ばされたいきおいで、ころげるように羊の群れに向かって駆け出した。

行く手では羊たちが怯えて鳴き騒ぎ、押し合いへしあいして動きが取れなくなったり、意味もなく駆け回って群れからはみ出したりするのを、ミュシカが、なんとかきちんと一か所に集めて木立の方向に追い込もうと、稲妻のようにめまぐるしく駆け回っている。

ちらりと後ろを振り返ると、アルファードが右手に抜き身の剣を構え、左手で盾のように胴着をかざして、頭上のドラゴンを挑発しているのが見えた。

（アルファード！）

里菜の足は、また、すくんで動かなくなりそうになった。が、アルファードに羊たちを託されたのだという責任感が、駆け戻りそうになる里菜の気持ちをなんとか抑えた。里菜は、託された責任の象徴である木の枝をぐっと握り締め、羊の群れを追って木立に駆け込んだ。

＊

アルファードは、前髪からしたたり落ちる水滴を払うこともなく剣を構え、急降下してくるドラゴンを、冷静な目で見据えていた。

（なんとか、こちらに引き付けることが出来そうだ。すでに羊を目にしている飢えたドラゴンを、追い払うことはまず出来ないだろう。俺が、倒すしかない。盾も防具もないが、しかたがない。せめて、今、被った水が、いくばくかの役に立つといいが。水が乾くまえに、素早くカタをつけなければならないな）

ドラゴンは、アルファードの目の前に、激しい突風と土煙を起こしてドスンと降り立った。銀の翼が、バサリと一回、地を打って止まる。

アルファードは、まっすぐにドラゴンと対峙していた。

ドラゴンの、伸ばした首の先の頭は、見上げるような高さにあったが、これは、そう大きなドラゴンではない。これくらいのものなら、彼はもう何頭も退治している。

ただし、その時は、ひとりではなく、息のあった自警団の連中が一緒だったのだが。

ドラゴンは威嚇するように翼を広げ、ふたたびあの、錆びた機械の軋むような、奇妙に心を波立たせる不快な声をあげた。そして、ゆっくりと下げた首をかすかにひねって、トカゲに似た顔を横を向け、瞳孔の縦に細い、感情のない金色の眼の片方にアルファードの姿を映し出した。

アルファードは剣を構えて、慎重に間合いを取った。

ドラゴンは、ふいに、アルファードの存在を忘れたかのように首を上げ、空を仰いだ。だが、アルファードは、それが攻撃の準備であることを知っていた。

ドラゴンが、はるか上から長い首を振り下ろし、真下にいるアルファードに向かって、炎を吐いた！

けれど、その瞬間、アルファードの姿はドラゴンの前から消えて

いた。
水を吸った皮の胴着を盾代わりに掲げて炎を避けながら、後方へではなく、まっすぐにドラゴンに向かって跳躍し、迫り来る首の下をかい潜って、その身体の横に回り込んだのだ。
剣が一閃して、黒ずんだ銀の翼を切り裂く。
と、思うと、もうアルファードは、ドラゴンの巨体から、獣のようなしなやかさで飛びすさって離れていた。
怒りに狂ったドラゴンの首が、ヘビのようにくねりながら敵の姿を探る。
不思議な金の瞳がアルファードの姿を捕らえ、ドラゴンは、敵に向かって突進した。
アルファードはドラゴンの首をかわして胸元に飛び込もうとしたが、まだ弱っていないドラゴンの動きは素早かった。ドラゴンの前足に薙ぎ払われ、アルファードは地面に叩き付けられた。
そのまま踏み付けてこようとする足をよけて、アルファードは地面を転がり、ドラゴンの身体の下から逃れ出る。ドラゴンの爪がかすった腕から、つっと血が流れた。
拭う間もなく、彼はドラゴンに打ちかかる。
ドラゴンの首や爪による攻撃をかい潜って目まぐるしく飛び回りながら、彼は、その身体のあちこちの鱗の合せ目を正確に剣で貫いてはすぐに飛びすさることを繰り返し、また、その横腹や、下げた首などに、幾度か力まかせに剣の平を打ち降ろした。剣は弾かれ、腕がしびれる。しかし、鱗の下で、柔らかい肉が砕け、骨がきしむ手ごたえがある。固い鱗につつまれたドラゴンに、打撲は致命傷とはならないが、強い力で繰り返せば徐々にダメージが大きくなるのだ。
が、この攻撃は、大きな危険を伴っている。剣にかかる負担が大き過ぎるのだ。
彼の剣は、戦乱の時代に重装の騎兵たちが鎧の上から相手を叩いてダメージを与える目的で使っていたような重さのある剣ではなく、

農民出身の軽装の歩兵たちに支給されることが多かった、生身の相手を切るための白兵戦用の剣の流れを汲むものである。戦後、農民兵たちの帰郷に伴って各地に普及したそうした型の剣とそれに適した剣術が、現在スポーツとして行われている剣術の原型になったから、現代の剣術では、そうした比較的軽い剣の使用こそが正統であり、主流であり、そして彼はまさにその現代剣術をあくまで基本通りに正しく極めつくした、まさに正統的なチャンピオンなのだ。

今でも、ある程度の上級者になると、より自分に合った剣をと模索した結果、あえて他人と違う形状の剣を選び取ってみたり、力自慢のものであればことさら巨大な剣を選んでみたりして、それに適した剣法を極めようとするものもいないではないが、彼は、これまで終始一貫して、初心者が最初に使うような、ごく一般的な形で標準的なサイズの剣を使い続け、そしてそれをそのままドラゴン退治にも用いてきた。

しかし、剣はもともと、決してドラゴン退治に適した武器ではない。

集団でドラゴンを弱らせる時に腕力の強いものが、重さで叩き切るタイプの分厚い大剣を鈍器がわりに使うことはあっても、こんなふうに、生身の人間同士が切り合うのに使うような刃の薄い剣でドラゴンに立ち向かうものは、彼の他にはいない。そんなことができるのは、歌物語やお芝居の中の英雄たちだけのはずだった。

それでも彼がこれまでドラゴン退治にこの使い慣れた剣を用い続けてきたのは、それが集団戦におけるとどめの一撃専用だったからである。

仲間たちが、槍や戦斧やこん棒など、他の武器で弱らせたドラゴンの胸元に飛び込んで、一瞬のチャンスを捉えた渾身の一突きで素早くとどめを刺すという、彼ならではの瞬間的な速攻戦法においてこそ、この剣の手ごろなサイズや切れ味の良さという特徴を生かすことができたのだ。

だから、普段、この剣でドラゴンに何度も切りつけるなどという

ことは無いのである。うまくいけばただ一突き、失敗しても、せいぜい数回だ。そうでなければ、彼とても、他の、もっと頑丈な武器を選んでいただろう。こんな華奢な剣でドラゴンの固い鱗に幾度も切りつけるなど、正気の沙汰ではない。下手をすれば、途中で剣が折れる。そうなっては、そこで終わりだ。

とはいえ、今は、気心の知れた自警団の仲間は、ここにはいない。他に選べる武器もない。それに、一人で一度に操れる武器はどのみちひとつだ。それならば、手の中にある自分の剣でできる範囲で戦うしかない。

ドラゴンの巨体に比べるとあまりにちっぽけな愛剣と、あとは自分の素早さだけを武器に、アルファードは、ドラゴンの周囲を跳び回って、素早い一突きを繰り出し続ける。

傷ついたドラゴンは、我を忘れて、やみくもに暴れ出した。その、くすんだ銀色の身体は、あちこちが黒っぽい血でまだらに染まっている。

アルファードのほうも、無傷ではない。

ドラゴンの尾に跳ね飛ばされ、翼に打たれて、シャツは裂け、あちこちに浅い傷を負っている。

だが、彼の眼は、相変わらず冷静にドラゴンの動きを読もうとしていた。

本物のドラゴンを見たことのない都人（みやこびと）などは、ドラゴンは終始ぼうぼうと火を吹いているものだと思っているようだが、実際には、そんなことはない。一度火を吐いたら次までにはしばらく間が開くし、また、火を吐くにはそれなりの準備動作が必要で、注意深く動きを追っていれば、必ずその前兆が見てとれるのだ。

何度目かに炎を吐こうとしたドラゴンの、一瞬の準備動作を見逃さず、彼は盾代わりの胴着を掲げて横飛びに炎から逃れた。

炎に煽られて、胴着もシャツも、半ば乾きかけている。水が乾いた分、返り血を吸ってはいたが、それも、間近で熱風を受ける度に、すぐにごわごわに乾いてしまう。彼の黒い髪の一房が焦げ、服が破

れてところどころ剥き出しになった肌に火の粉がふりかかる。
（もう一度火を吐かれたら、終りだ。そろそろ一気にケリをつける時だ）
汗をしたたらせ、荒い息をついて、アルファードはふたたびドラゴンの正面に仁王立ちになった。

＊

羊の群れの後ろから木立に駆け込んだ里菜は、ミュシカが羊たちをまとめるのを横目で確認しながら、はぐれた羊が取り残されていないかと、後ろを振り返った。
そのとたん、里菜はぞっとした。
（うそっ、アルファードが！）
向こうを向いて立っているアルファードの背中は、あちこちシャツが裂け、血が付いていた。
苦しげに肩を上下させている後ろ姿のその向こうに、小山のようなドラゴンが立ちはだかっている。
平穏な日常の中に唐突に降り立った異形の怪物は、話に聞いて想像していたより、ずっと大きく見えた。
見慣れた、いつもの牧場（まきば）で、傷だらけのアルファードが物語の中の英雄のように剣を掲げてドラゴンと対峙しているその光景は、どこか現実味を欠いて、さながら神話の一場面を描いた絵画のように見えた。
やけにリアルなその絵画の題材は、これから死にゆく悲劇の英雄の、最後の勇姿――。
そう思ったとたん、里菜は、羊のことも、薮に隠れろと言われたことも、何もかも忘れた。頭の中が真っ白になった。ただひとつの言葉だけが、その中ではじけた。

（いやっ！　アルファード、死んじゃいや！）

からっぽになった里菜の頭の中に、ふいに、ドラゴン退治の手順を淡々と説明するアルファードの声がよみがえった。

――『ドラゴンにとどめを刺す時は、撹乱役やほかの攻撃役がドラゴンの注意を引いてドラゴンが横を向いた隙に、胸元に飛び込むんだ』――

（アルファード、今、行くわ！　あたしが手伝う！）

里菜は、握り締めていた羊追いの鞭を意味もなく振りかざしながら、木立から飛びだした。

＊

痛みに平静を失って、すでに殆ど何も見ていなかったドラゴンは、真正面に立ち塞がったアルファードをかすんだ眼で認めて、力をふり絞り、今一度炎を吐こうと首を上げた。

（今だ！　貰った！）

アルファードは剣を上向きに構え、全身の力を矯めて、ドラゴンの胸元に飛び込もうと地を蹴った。

そのとき。

背後で、か細い叫び声があがった。

「アルファード！　あたしが、あたしがドラゴンの……」

里菜の必死の言葉は、そこで途切れた。

すばやく振り向いたアルファードが、駆け戻りざまに、ものを言う間もなく、左腕に里菜の身体を抱いて、宙に跳んだのだ。

その瞬間、里菜はアルファードの肩ごしに、ドラゴンの凶々しい顔がこちらに巡らされるのを見た。その赤い口が、大きく開かれ……。

そこで、里菜の視界は閉ざされた。アルファードの大きな身体が里菜に覆いかぶさり、視界を遮ったのだ。

里菜の背中が、アルファードの左腕に庇われながら地面に叩き付けられた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第八場（2）

アルファードは、里菜を抱えて地面に倒れ込みながら、とっさに、自分の背中で里菜のなるべく全身を覆い隠そうとしていた。ドラゴンの炎をまともに全身に浴びたら、例えその場で死ななくても、後々の緩慢な死は免れない。

（だめだ、やられる……。たぶん、俺は死ぬ。だが、リーナだけは……！）

アルファードは、その身を盾にして、里菜のちっぽけな身体を庇いながら、背中にかかるドラゴンの炎を覚悟した。

瞬間、背中を舐めた熱さに、アルファードは声を殺して、

「うっ……」と、呻いた。

が、それは本当に、一瞬だった。

「キャーン！」という悲鳴と同時に、ドサリと音がした。

主人の危機を察したミュシカが、木立を飛び出してきて、ドラゴンが炎を吐きだした瞬間に、その首に体当たりしたのだ。炎は、最初の一陣でアルファードの背中を一瞬舐めた後、狙いを逸れ、牧場の草を焦がした。

ドラゴンは怒り狂って首を振り立て、邪魔者の姿を探った。

振り飛ばされたミュシカは、すばやく起き上がり、果敢にも再びドラゴンに挑んだ。

すでにアルファードのことを忘れ、新たな敵に注意を奪われたドラゴンは、背後に回り込んだミュシカを追って、長い首を巡らせた。

ドラゴンの牙が、ミュシカの毛並をかすめる。

「ワンワン！　ワン！」

生意気に吠えたてながら走り回る小さな獣の喉笛に狙いを定めて、ドラゴンはもう一度首を伸ばした。

その首が、ピクリと跳ねて宙を仰いた。

ドラゴンの胸のひとところに、鱗の下から生えてきたもののよう

に、アルファードの剣が深々と差し込まれていた。
赤い口から、断末魔の叫びが漏れた。
それは、聞いただけで災いに取りつかれるとでも言うような、根源的な恐怖を呼び覚ます、凶々《まがまが》しい魂の軋みだった。
里菜は、草の上にへたりこんだまま耳をふさぎ、いやいやをするように頭を激しく横に振った。
アルファードは、落ち着いた、慣れた様子で、鱗をこじ開けるように剣を素早く左右に捩じってから引き抜くと、間髪を入れずに、ドラゴンの身体の下から飛び出した。
傷口から鮮血が噴き出し、ドラゴンの巨体が、ドサリと崩れ落ちた――。

無言の死闘が終った。永遠のように感じていたそれは、実際は、被った水も乾き切らぬ間の、ほんの短い時間の出来事だった。
アルファードは、巨体をまだ痙攣させているドラゴンの頭に注意深く近寄ると、ベルトに吊っていた短刀を抜いて眉間に突き立てた。ドラゴンは、微かにぴくりと震えて、口の端から新たな血を一筋溢れさせ、それきり動かなくなった。そうやってとどめを刺しておいて、瞳孔と呼吸を調べて完全に絶命していることを確かめると、アルファードは、ふと屈み込んで、血に濡れた剣を足下の草で拭った。
忠実なミュシカがアルファードに駆け寄って、主人の手に、茶色い頭を寄せた。
「よし、よし、よくやった、ミュシカ」
そう言って、アルファードは、怪我をしていないかどうか、すばやくミュシカの全身をあらためながら、耳の後ろや首の周りをがしがしと撫でてやった。幸い、背中の毛がわずかに焦げただけで、たいした怪我はしていないようだ。興奮に逆立った首筋の毛を逆毛に撫で上げてもらったミュシカは、満足げに目を細めて身震いした。
心の込もった短いねぎらいの後、アルファードに軽く合図されたミュシカは、何事もなかったように、また、羊のところに戻ってい

った。
それからアルファードは、おもむろに里菜に目を向けた。
里菜は、まだ強く耳をふさぎ、眼を固くつむって、草の上にぺったりと座り込んで震えていた。
「リーナ。もう、大丈夫だ。ドラゴンは、死んだ」
アルファードの静かな声に、恐る恐る目を上げた里菜は、息を呑んだ。
「アルファード……。血が……」
全身に血を浴びたアルファードは、ドラゴンにまけずおとらず凶々しい匂いを漂わせる危険な魔物のように見えた。
里菜はふいに、アルファードを、怖いと思った。
けれどアルファードの声は、あいかわらず静かだった。
「心配ない。ほとんどがドラゴンの血だ。……怪我は、無いか？」
「うん……」
「なら、いい。ところで、君に聞きたいことがある。俺はさっき、君に、薮に隠れていろと言わなかったか？」
里菜に歩み寄って、上腕をつかんで助け起こしながら、アルファードは抑えた声で尋ねた。
「えっ……」
「言わなかったか？」
アルファードの声は淡々として低かったが、その底に秘められた激しい怒りに、里菜は震え上がって、蚊の鳴くような声で答えた。
「言った……」
「なら、どうして出てきた。君が出てこなければ、俺はあのとき、ドラゴンを仕留めるところだったんだ。それに、俺が君をかばうのが一瞬遅かったら、君はドラゴンの炎を正面からまともに浴びるところだったんだぞ。……ドラゴンの炎は、普通の火じゃないんだ。前に話したはずだ。あの火を大量に浴びると、火傷自体は治っても、だんだん身体が弱って、死に至ることもあるんだ。君は、死ぬつもりだったのか」

「……ごめんなさい！　あたし、ただ、アルファードが危ないと思って、あたしがドラゴンの注意を引いて、手伝おうと思って……」

それまで静かだったアルファードの声が、突然、激した。

「バカ！　自分の力を考えろ！」

アルファードの右手が、高く上がり、里菜に向かって振り下ろされかけた。が、アルファードは、自分の震える腕を押し止め、そのまま静かに身体の脇に降ろした。そのこぶしが、それでもまだ震えていた。

一瞬ビクっと目をつぶり、首をすくめた里菜は、目を開けて、そのこぶしを見つめた。アルファードの顔を見る勇気はなかった。里菜はうなだれて唇を噛んだ。

（そんなふうに、言わなくたって……。アルファードの役に立ちたかったのに。邪魔するつもりじゃなかったのに。アルファードは、なんの権利があってあたしにこんな口をきくの？　……ううん、権利なら、もちろんあるわ。あたしのせいでアルファードはよけい危険な目にあってしまったんだもの。自分の身体をはって、命を賭けてあたしを庇ってくれたんだもの。でも、だからって……）

うつむいた里菜の目から、涙がこぼれ、乾いた地面にポツリと落ちた。

（アルファードは、あんなに怪我をしているというのに、今あたしが、叱られたくらいで泣くなんて、わがままだわ）と思いながらも、涙は止まらない。

アルファードは、また静かな声に戻って言った。

「リーナ、すまない。つい、きつく言い過ぎたようだ。だが、分かってくれ。自分の能力をわきまえない行動は、死につながる。二度とああいう無茶はするな」

「うん、分かった……。ごめんなさい」

子どものように手の甲で涙を拭いながら、里菜は頷いた。

「それさえ分かってくれればいいんだ。泣かないでくれ。悪いが、頼みがある。急いで村へ行って、誰かを呼んできてくれないか。治

療を頼みたいんだ。俺は、たぶん、村まで歩けない。君が戻ってくるまで、そこの川のところで待っている」

里菜は驚いて顔を上げ、あらためてアルファードを見た。すでに背を向けて、小川のほうに歩き出している彼の背中を見て、里菜は叫んだ。

「アルファード！　その火傷……！」

そのとき里菜は初めて、振り向いた彼が、額に汗を浮かべ、かすかに顔を歪めて苦痛に耐えていたことに気がついた。左足にもズボンごとザクっと切り裂かれた傷があり、わずかに足を引きずっている。

里菜は自分のうかつさを呪った。彼は、とほうもなく辛抱強い人なのだ。普通に口をきいているからといって、安心していてはいけなかった。ちゃんと彼の様子を見ていれば、わかったはずだ。

（それなのに、自分の感情にかまけて、彼がこんなにひどい怪我をしていることにも気づかずに、泣いたり拗ねたりしていたなんて。あたしは何て自己中心的で思いやりのない人間だったんだろう。アルファードもアルファードだわ。こんな大怪我をしているなら、人のことを心配したり叱ったりするよりさきに、痛いとか何とか言えばいいのに！）

里菜は後悔と心配で胸が痛んだ。

アルファードは、肉体の苦痛など一切感じさせない平静な声で答えた。

「大丈夫、ミュシカのおかげで、この程度ですんだ。これくらいなら、死にやしない。これから川で冷やせば、大丈夫だ」

アルファードは、痛みを堪えながら片頬を歪めて軽く笑った。

「俺もバカだな。君に説教をしているヒマがあったら、先に火傷を冷やせばよかったんだが」

（あの火傷は、さっきあたしをかばったときのものなんだわ。あたしが飛び出したりしたせいで……。どうしよう、どうしよう。アルファード、ごめんなさい！）

里菜は思わずアルファードの後を追いそうになったが、思い止まって、村に向かって駆け出した。

「アルファード、待っててね、すぐに戻って来るから！」

放牧に使う牧草地は何か所かあり、彼はそこを季節によって移動して羊に草を食べさせるのであるが、今いるのは、秋も終りということもあって、＜シモの牧＞と呼ばれる一番標高の低い牧場（まきば）である。村にも近いし、途中の道も、羊が楽に歩けるくらいで、それほど険しくはない。それでも、里菜の足で村まで往復すれば、結構かかってしまうだろう。ぐずぐずしているヒマはない。今度こそ、自分のするべきことをわきまえなければならない。村の人は誰でも多かれ少なかれ癒しの魔法が使えるのにその力もなく、普通の応急手当さえろくに出来ない自分は、彼のそばにいても何もしてあげられないのだ――。

＊

駆けていく里菜の足音を背後に聞きながら、アルファードは痛む足を無理に運んで小川へ向かった。

彼の心には、ドラゴンを倒した喜びや誇らしさではなく、罪悪感と自己嫌悪が広がっていた。肉体の痛みよりも、里菜を怒鳴ってしまったことへの後悔のほうが、もっと彼を苦しめた。

（リーナは、怯えていたな。ドラゴンにだけでなく、あのとき、俺を見て怯えていた。無理もない。いきなり、ドラゴン殺しや、こんな血まみれの姿を見せては……）

里菜の怯えた目を思うと、心が痛んだ。彼は、いままで、これまでいた世界では本物の剣など見たことがないという里菜に気を遣って、里菜の前では、剣を抜くところさえ見せずにきたのだ。自分の分身とも恃む愛剣を腰に帯びることだけはやめられなかったが、稽

古をするときも、里菜に遠慮して、わざわざ彼女から見えない場所を選んでいたほどだ。

（しかも、ただでさえ怯えていた彼女を、俺は、やさしく労ってやるかわりに、いきなり怒鳴りつけたんだ。よりによって女の子に手を上げそうになるとは、最低だ。俺は、なんでまた、あんなに怒ってしまったんだろう。……リーナは、俺を許してくれるだろうか）

こんな時に、終ったばかりのドラゴンとの死闘のことでもなく、戦いで負った傷や火傷のことでもなく、あのちっぽけな少女のことばかり考えている自分に気付いて、その、慣れない感情に、彼は、理由のよくわからない戸惑いを感じた。

アルファードは服を着たまま、ちょっとした淵のようになっているところを選んで小川に入った。

淵といっても深さは腿（もも）までもなく、アルファードは、手ごろな倒木に頭と肩を預けるようにしながら、ゆっくりと背中を水に浸した。石灰分を溶かして、深いところでは青緑色を帯びるその水が、背中を洗い、火傷の痛みを癒していく。

聖地に源を持つ水の不思議な力が、ドラゴンの不浄の炎の毒まで流し去ってくれるような気がした。

アルファードは、首を仰向かせて、水の中から空を見上げた。

（こうしていると、＜女神のおさな子＞としてこの世界に生まれ出た、あの時のようだ）

アルファードは、眼を閉じて、身体の力を抜いた。

水はかなり冷たいはずなのだが、少しも寒いと思わなかった。まだ全身の筋肉の中でくすぶっていた、戦いの名残りの猛々しい熱と昂ぶりが、すっと鎮まっていく。彼の心と身体を、いっとき占領していた荒ぶる力が、水に溶けるように、穏やかになだめられて消えていく。

しだいに安らいでいく心の中に、ごく自然に、祈りの言葉が浮かんだ。

（女神よ、この小さき生命に祝福を……）

それは、本来は、こういう時に唱える祈りではなかった。これは出産の時の祈りで、実は見かけほど信心深いわけではない彼も、羊のお産に立ち会うたびに、この言葉だけは、必ず唱えていたのである。

祈りに答えるように、さざ波が光った。

第一章＜エレオドラの虹＞　第八場（3）

「キャ！」と叫んで、里菜は尻もちをついた。
息せききって駆け出した里菜は、いくらも行かないうちに、角を曲がりざま、何か、固くてまっすぐで細長いものに頭からぶつかって、はね飛ばされたのだ。
てっきり電信柱か立木に正面衝突当したのだと思いながら、痛むお尻をさすってもたもたと起き上がろうとした里菜は、自力で立ち上がるより早く、頭上から伸びてきた誰かの手で、ひょい、と持ち上げられ、すとんと地面に立たされた。
驚いて顔を上げると、聞き慣れたローイの声が頭上から降ってきた。
「おおっと、リーナちゃん！　やっと、俺の胸に飛び込んできてくれる気になったのか。それにしても、ちょっと性急すぎやしないか？　あわてなくても、俺はいつでも待ってるぜ！」
その、あまりに能天気な言葉に、緊張の糸が一気に解けた里菜は、そのままへたへたと再び地面に坐り込んだ。
ローイだって、ドラゴンを見て駆けつけてきたのだから、今が冗談をいっている時でないのは分かっているのだが、つい条件反射でおちゃらけてしまうあたりが彼である。
もっとも、彼は、今しがたのドラゴンの断末魔の声を聞いて、少なくともアルファードが生きていることは、もう、確信していた。それで、里菜の元気な姿を見たとたん、それならば最悪の事態だけはまぬがれたのだと悟り、ほっとしたとたん冗談が出てしまったのだ。
「ローイ……！　よかった、いいところに……」
安堵のあまり地面にへたりこんだまま、里菜は思わずローイのズボンの裾をつかんで、ぜいぜいいう息の下から切れ切れに言葉を絞り出した。ここしばらく体調が良かったので忘れていたが、里菜は

昔から、激しく動くと軽い喘息を起こすことがあるのだ。
「アルファードが、怪我を……。治療を、おねがい……」
ローイはたちまち、おちゃらけを引っ込め、意外と強い力で里菜を再び引っ張り上げて立たせながら、短く尋ねた。
「どこにいる？　＜シモの牧＞か？」
「う、うん」
「わかった。すぐ行く。あんたはあとからゆっくり来るといい」
ここまで走ってきた疲れも見せず、たちまち風のように消えていったローイの後を、里菜は息をきらしながら追い掛けて、牧場へ戻っていった。

＊

「うわあ、こりゃあ、すげえ。アルファードが一人でやったのかあ？　人間ワザじゃないよなあ……」
ドラゴンの死体の横を、ついつい足音を忍ばせるようにして迂回しながら、ローイはぶつぶつと呟いた。
アルファードは、その先の小川の岸で、脱いだシャツを敷いた上にうつぶせに寝ころがっていた。
「ローイか……。ありがたい。リーナに会ったのか？」
「おっと、そのまま、そのまま。動かなくていい。うん、リーナには、会ったよ。後から戻って来ると思う。待ってな、いま治療すっから」
頭を上げようとするアルファードを制して、ローイは彼の身体の横に膝をつき、背中に手をかざして顔をしかめた。
「この火傷、ドラゴンの火か……。毒の方は、このくらいなら、解毒で何とかなるだろうが、こりゃあ、跡が残るな。まあ、男はそのくらい気にすんな。これで、村の誇るドラゴン退治の勇者様に、ま

すますハクがつくってもんだ。たったひとりでドラゴンを倒した時の傷だっていやあ、孫にまで見せびらかして自慢ができらあ」

「いや、ひとりじゃない。ミュシカが助けてくれた」

「ミュシカが？　そりゃあ、すげえや。猟犬にだって、普通、ドラゴンに立ち向かうなんて出来ないのに、あいつはただの牧羊犬だぜ？」

「ミュシカは『ただの牧羊犬』じゃない。『最高の牧羊犬』だ」

「ああ、まったくだ。あんた、口のほうは無事みたいだから、治療しているあいだに、話を聞かせてくれよな。あれ、どうやってやったんだ。あんたは、団長として、ドラゴン退治の顛末を、今後の参考のために団員に報告する義務があるぜ。あんたの話はつまんねえから、俺が代わってみんなに話してやるからさ」

「お前が話すと、大袈裟になる」

「いいじゃないか、少しくらい。あんたにゃサービス精神ってものが分かってないよ。まあ、とにかく話せよ。まったく前代未聞だよな、ひとりと一匹でドラゴン退治なんてよ」

アルファードの怪我がすぐに命に関わるようなものではないとわかってほっとしたローイは、忙しくあちこちの傷を調べたり治療のために手をかざしたりしながら、アルファードから、ことの顛末をあれこれと聞き出し始めた。

里菜がドラゴンの前に飛び出したくだりになると、ローイはヒュウと口笛を吹いて、感心したように言った。

「そりゃまた、勇ましいことだなあ。ありゃあ、アルファード、あんたが思ってたような仔猫ちゃんなんかじゃなくて、きっと、ちっちゃな雌ライオンだぜ。俺の見込んでた通りだ。な、リーナ？」

ちょうどそこに、やっとたどり着いた里菜は、いきなり話を振られてきょとんとした。

「えっ、なあに？　なんの話？」

「いや、な、アルファードはあんたを、仔猫ちゃんのつもりで拾って来たんだろうが、俺は、『これは足が太いからでっかくなるぞ』

って、思ってたのさ」
「え？　……あたしの足は、太くなんか、ないわ！」
訳がわからず真顔で抗議した里菜に、ローイはケラケラと笑いだした。
その様子に、とりあえずアルファードの怪我はそうひどくないらしいと、里菜は少し安心した。
脱いであったアルファードのシャツを引き裂いて包帯にし、応急手当をすませたローイは、アルファードに向かって言った。
「あとですぐ、ヴィーレの母さんか誰か、癒しの魔法の得意な人に、もういちど診てもらえよ。包帯も薬草もないし、とりあえず、応急処置だからさ」
「ああ、ありがとう、おかげで、これなら村まで歩ける」
「じゃあ、あんたたちは、今日はもう帰れよ。羊連れてさ。肩、貸すから。ドラゴンは、誰か自警団のものを何人か寄越して処理させればいい。俺が連絡をとるから。そうそう、今晩、あんたんとこで、宴会な！　今日の勝利を祝っての祝賀会に、ほら、リーナの歓迎会をまだやってなかったから、ちょうどいい機会だから、それも兼ねて、とにかくパッとやろうや。なあに、ちっとくらい怪我してたって、酒は呑めらあ。かえって痛み止めになっていいってくらいだ。きっと、血に入ったバイ菌も消毒できるし、なにしろ女神様の祝福を受けた酒だから、ドラゴンの毒にも効くかもしれないぜ。それに、どうせ、あんた、その傷じゃ、あしたは放牧に出られないだろ？　夜通し宴会したって大丈夫だ。な、副団長の権限で招集かけるぜ！」
そう、彼は、自警団の副団長なのである。そういうと聞こえがいいが、その実態は、ようするに宴会係だ。宴会の段取りをやらせたら、彼にかなうものはいない。
宴会を開くと勝手に決めつけたとたん、もう宴会のことしか頭になくなったローイは、それでもアルファードに肩を貸して、ドラゴンのところに戻ると、持っていた小刀で、その爪を一本剥ぎ取ってアルファードに渡した。こうして、証拠となる戦利品を持ち帰るの

が、ドラゴンを殺した時の習慣である。
それから、ローイは、もう一本切り取った爪を、里菜のほうに差し出して言った。
「ほれ、リーナ、あんたも取りな」
「えっ……？」
血と泥にまみれたドラゴンの爪を差し出されて、里菜は思わず後退った。
ローイは構わず、手にした爪を里菜の目の前につきつけ続ける。
「あんただって、今日はドラゴン退治に参加したんだ。爪を取る権利があるぜ。ほれ」
「えっ、あたし、いらない……」
「だって、これは、滅多にないような、すごい名誉なんだぜ？　遠慮するなよ」
「違う、違う、ほんとに欲しくないの！」
里菜は思わず両手を後ろに回して、一生懸命首を横に振った。もしも血がついていなくても、そんなものには、手も触れたくなかった。
頑なに拒まれて、ローイも、それ以上無理に勧めようとはしなかった。
「あ、そ。もしかして怖いの？　生きたドラゴンには素手で立ち向かったって言うのに。まあ、いいや。じゃあ、これはミュシカにな。あいつも立派に今日の功労者だからな。アルファード、これ、後で紐つけて、ミュシカの首にかけてやれよ、な」
それからアルファードは、剣を抜いて足下の土の上に横たえると、頭を垂れて短い祈りを唱えた。
「黄泉の大君よ、定めにより死せる魂を、御許に安らわせ給え」
ローイも、めずらしく神妙に唱和する。
例えどんな不信心者でも、この国の人間である以上、出産や死と言った特別な儀礼に際しては、祈りのひとつも唱えるのである。特に、ドラゴンを殺した時は、きちんと礼を尽くさないと呪われると

信じられているのだ。
その間、里菜は、血溜まりに横たわるドラゴンの屍を、おそるおそる観察していた。普通なら死体など見たくもないが、生きていようと死んでいようと、何しろドラゴンだ。
生きて、翼を広げ、首をもたげている時は小山のように大きく見えたドラゴンも、こうして死んでいるのを見ると、たしかに、首の長さを除けば『馬より少し大きい』という説明通りの大きさのようだった。だらりと広がる捻じれた翼だけが、やはり思いがけず大きいだけだ。
けれど、里菜には、このドラゴンが、アルファードの言うように、ただ大きすぎるだけの罪のない野生動物だとは思えなかった。死せるドラゴンは、間違いなく何かもっと邪悪な、不吉な気配を漂わせていて、屍となってなお、凶々しく、恐ろしかった。
銀の鱗に覆われたその亡骸は、どこか、血に塗れた銀のナイフを思わせて、そう思ったとたん、里菜は、なんとなく、ふと、気が遠くなりかけた。
が、それは一瞬だった。ドラゴンの屍に近づき過ぎて何か毒気にあてられでもしたか、あるいは血の臭いで気分が悪くなったのだと思った里菜は、死体など、わざわざ見るからいけないのだと眉をひそめて目をそらした。
「アルファード、このドラゴン、どうするの？」と尋ねた里菜に、アルファードは、剣を納めながら淡々と答えた。
「後で自警団の連中に、皮を剥いでから、火葬にしてもらう」
ローイが横から解説した。
「ドラゴンは、火葬にしないと生き返って復讐にくると言われているんだ。まあ、迷信なんだけどさ」
皮を剥ぐと聞いて、里菜はぞっとして尋ねた。
「ねえ、アルファード、どうして皮を剥ぐの？」
「使うんだ」
「え？　何に？」

ローイが横から答えた。
「防具を作んだよ。ドラゴンの皮はな、鱗が固くて、しかも火に強いから、ドラゴン退治の時に使う防具にはドラゴンの皮が一番なんだ。火事の時にも使えるんだぜ」
アルファードがローイを振りかえって言った。
「今度の皮はミナトの分だ。ドラゴンの処理にはミナトをやってくれ」
「わかった。そうか、ついにあんたもミナトをドラゴン退治に出す気になったわけだ。しかし、すげえよな。ドラゴン退治に出るもの全員にドラゴンの防具が行き渡ってる自警団なんて、きっと国中さがしても、ほかには無いぜ！」
各地の自警団は、それぞれ自分たちの倒したドラゴンの皮で自分たちの防具をつくっており、強い自警団はそれだけ多くのドラゴンの防具を揃えてますます強くなるのである。
アルファードは、里菜が気味悪そうに聞いているのに気がついて、付け加えた。
「リーナ、ドラゴンは危険な生き物だが、一旦殺してしまえば、役に立つ。それならば、できるだけ役に立てるのが、殺した命への礼儀だ」
里菜は、アルファードがケガをしていて、今ここで皮を剥ぐところを見ずに済むことにほっとした。
羊たちは、すでにミュシカがひとところに集めて、草を食(は)ませていた。
（ミュシカって、ただものじゃないわ。ぜったい、人間の言葉が全部わかってるんだわ）
里菜はあらためて感心して、ミュシカを眺めた。
ふだん、アルファードは、ミュシカに口笛や短い号令で指示を与えているのだが、たぶんミュシカには、本当は、そんなものは必要ないのだ。まったく、並の犬ではない。あるいは、アルファードに、ミュシカと交信する秘密の魔法の力でもあるのかも知れないとさえ

思えてくる。まきばに座る彼らの並んだ後ろ姿はいかにもしっくり納まっていて、まるで長年連れ添った老夫婦でもあるかのような穏やかな連帯感が漂い、里菜は時々、彼らの間に、とても自分などが割り込めない強い絆を感じて、嫉妬すら覚えるのだ。

（ミュシカとアルファードって、心が通い合っちゃってるわよね…。あたしがここに来る前からずっといっしょに暮して、何年もの夏のあいだ中、ふたりきりでまきばに座り続けてきたんだものね。ああ、情けない。なんで犬にやきもちなんてやかなきゃいけないの。それって、あんまり、情けなさすぎる……）と、もとからただでさえ情けなく思っていたのに、今また、ミュシカはアルファードの命を助け、自分はそれを危険に曝したことを思うと、ますます、つくづく、自分が情けない。アルファードに謝りたい。

だが、ローイの手前もあり、なんとなく言い出せないまま、彼らは、アルファードの上着や水袋を拾い、羊を数えて、家路についた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第九場（1）

その夜。

里菜は夢を見ていた。

……夢、なのだろう。里菜は、月の光を浴びて川のほとりに立っているのだが、自分がなぜそこにいるのか、どうやってそこまで来たのか、何もわからないのだ。

里菜の寝ている部屋から外に出るには必ずアルファードの寝ている居間を通るしかないから、彼に気付かれずに家を出て来られる訳がない。だいたい、アルファードに黙って、こっそり夜中に外に出てくる理由など、無いはずだ。

自分の姿を見下ろす。着ているものは、ヴィーレのお古の、ふくらはぎまである白い寝間着一枚だけ。この季節の深夜に戸外に出るには寒すぎる服装だ。なのに寒さを感じないのも、これが夢である証拠だろう。しかも、里菜は裸足なのだ。裸足で、湿った草の上に立っている。

そこは、たぶん、村はずれを流れるエレオドラ川の岸だ。いつも近くを通る、見慣れた場所のはずである。

だが、月の下では、すべてが普段と違って見える。空気はまるで溶けた透明プラスティックで満たされているかのようにてらりとした不思議な光沢を帯びているし、青白い光が降り注ぐ川の水は、宇宙空間を満たすというエーテルの流れのようだ。黒いシルエットとなった木々も、足の下の地面も、きっと、何か昼間とは違う物質で出来ている。たぶん、月の光が、世界の全てを変質させてしまったのだ。

けれど、これが世界の本当のすがたなのかもしれない。昼間ここで見たもの、あったことは、すべてまやかしで、今のこの世界だけが真実なのかもしれない――。

太陽が映し出していたかりそめの幻影が消えて、月の光が隠され

ていた世界の真実を暴き出す、そんな、不思議な、月の夜。
白い寝間着を着た裸足の里菜もまた、昼間の、ささいなことで泣いたり笑ったりして生きてきた無力でちっぽけでありふれた十七才の少女というまやかしの現実を脱ぎ捨てて、何か、この世のものではない存在になったかのようだった。
今さっきまで自分自身だったはずの少女の姿を、里菜は突然、映画でも見るように、どこか外側から見ているのだ。
透き通るような光を纏って立つ、そのほっそりした姿は、今にも宙に浮き上がりそうに見える。それはまるで、すでに肉体を脱ぎ捨てて永遠に歳をとることもない、一切の係累を断たれた孤独な魂の姿を思わせた。
その黒髪に、白いうなじに、細い肩に、しんしんと月光が降り積もる。
寝間着の裾から覗く足首の頼りない細さと、華奢な素足の幻めいた白さに、ふと、淡い哀憐を覚えたが、その、ささやかな感情のさざ波は、すぐに、水のように心に満ちる奇妙な諦念の中に溶けて行く。
(あたしは、死んでいるのかしら)
遠いところから自分の姿を眺めながら、里菜の意識がつぶやいた。
と、何の前ぶれもなく、里菜の意識は、今まで外から見ていたその身体の中に、再び舞い戻る。けれど、いったん外から自分を見てしまった今となっては、それが本当に自分自身なのか、里菜にはもう、確信できない。
その時、川の向こうに、ありもしない霧が晴れるように、ひとつの姿が、ふいに現われた。
それは、白い馬に乗った、黒衣の騎手の姿だった。
その姿は、川の向こうにあるのに、間になんの距離もないかのようにはっきり見えた。
が、すっぽりと全身を覆う黒いフード付きのマントにつつまれて、その顔も身体も、生身の部分は一切見えなかった。

そもそも、その姿には、肉体というものが感じられない。たしかに人間の形をしてはいるが、そこに人間の肉体はないのではないか——ただ、闇が人間の形に凝り固まったものなのではないか——そんなふうに思える。そう、あれはきっと、人間の形をした虚無——あるいは、人間の形を纏った死なのだ。

それは、けれど、たよりない幻ではなく、確かな存在感を持って、そこにいた。

肉体を持たない、むきだしの力。昏く、底知れぬ、原初からの存在。

その、純白の馬は、あまりにも純粋な白さのために、月の下で、青褪めてさえ見えた。

黒衣の騎手の背には、三日月型の鋭い刃をあらわにした長柄の大鎌が、斜めに背負われていた。

それは、鎌といっても、決して生活の匂いのする農具などではなかったし、血腥い武具でもなかった。切っ先に光のしずくを集めて、きらきらかに透き通るその刃は、何か宗教的な厳かさを漂わせた祭祀の道具、一度も汚れたことがない、神聖にして至高の芸術品のように見えた。

騎手は、背から外したその大鎌を重さのないもののように高く降り上げ、威嚇とも表敬とも、祝福とも呪いとも取れる、ゆったりした儀礼的な動作で、招くように一振りした。

ゆるやかな白刃の動きにつれて、一瞬の光跡が、浮かんで消える。光のしずくが、シャリンと音を立てんばかりに、あたりに降りこぼれる。

月光を吸ったその刃物の、冷たい氷の輝きに、里菜は我を忘れた。

——あの、刃の下に、身を投げ出したい——

それは、魂を突き動かす、理不尽な衝動だった。

鎌を再び背に収めて月の下に立つのその姿は、黒い衣に包まれていることのほかは何ひとつ定かには見えないが、なぜか蠱惑的に美しく、里菜を夢心地にさせた。

その黒い姿が、自分をじっと見つめているのがわかった。黒いフードの下に、その顔は見えなかったが、あたりの空気が、暗い凝視のかたちをとっていた。

足の力が抜けるような気がした。

（あたしは、この、黒い姿を、待っていた……。ずっと、待ち焦がれていた……）

恐怖に凍りつくような、甘美なあこがれに溶けていくような、眩暈のするような陶酔に襲われて、里菜は、我知らず、川に向かって足を踏み出した。

ふわふわとおぼつかない足取りで水際まで来ると、里菜は足を止めて、魅入られたように白馬の騎手を見つめた。

ふいに、魂の奥底に、声が響いた。

それは、男の声だった。――いや、たぶん、男の声だったのだろう。少なくとも、女の声ではない。だが、もしかすると、男の声でも女の声でもなかったのかもしれない。男でもなく女でもなく、若くもないが決して年老いることもない、肉体を持たないものの声。

昏く、深々とした、なめらかで美しい響き。

幾千の星をちりばめた宇宙の常闇を越えて、はるかに渡ってきた、異界の、風の音。

声は、まるで、とろりと深い極上の黒びろうどがむき出しの素肌にいきなり触れてきたかのような、甘やかに心をたじろがせる感触で、耳にではなく、魂に直接、語りかけて来たのだ。

『待っていた……。そなたを、待っていたぞ、エレオドリーナ。何千年もの孤独な時を、私はそなたを待ち続けて、今、やっと、そなたは、そこにいる……』

その声が心の奥底から呼び覚ます奇妙な懐かしさ、慕わしさに、里菜は慄いた。

（あたしは、この声を知っている……。何年も前から、遠いところであたしを呼んでいた声。あの、『あちら』での、平凡で退屈だった生活の中で、どこからか、あたしの心に呼びかけ続け、あたしを

誘い続けていた声。生れる前から知っていたような、死んだ後で巡り逢うような、あたしの、失われた半身の声。そう、あの、廃墟の白昼夢のなかであたしに語りかけていた、人間ではないものの声）

黒衣の騎手は、こちらに向かって手を差し伸べた。

『来るが良い。そなたの定めの場所へ、私の許へ。私は、待っていた……』

里菜の全身を、ふたたび、恐怖にも似た陶酔が駆け巡る。

行きたかった。魂が焦がれるほど、その、大きな黒い姿の許へ行きたかった。

けれど、わずかに残る意識が里菜を引き止めた。

（行ってはいけない。帰れなくなる）

（でも、行きたい。帰れなくてもいい。すべてを投げ捨てて、この誘惑に身を投じたい）

（でも、これは誰？　あたし、ここを離れて、どこへ行くの？　ここがあたしの、ふるさとなのに？　エレオドリーナって、誰？　あたしのことじゃないわ――）

水際に立ち尽くし、里菜は、身体の奥底から湧き上る理不尽な憧れに、必死で抗っていた。

黒い男は、ふたたび語りかけた。その、深い、強い、魂の声で。

『エレオドリーナ。そなたをこの世界に呼んだのは、私だ。そなたはもともと私のところへ来るはずだった。そなたが今、その川のそちら側にいるのは、あの小賢しいおいぼれ司祭の妨害のせいだ。たかが定命の人間の分際で、自分のしていることが何もわからずにこのようなことに手を出し、命を落した愚かものよ！　愚かな盲信は、その愚かしさゆえにしばしば予測もつかないほどの力を発揮するということを、私は見落としていたのだ。だが、もういい。私とそなたは、定めに従い、再び巡り会ったのだから。私とともに来い。さあ、その川を越えて……』

（そうか、あたしがここにいるのは、何かの手違いなんだ。あたしは本当は、あの黒い姿のそばに行くべきなんだ。それが、正しい定

めなんだわ……）

なぜか疑うこともなくそう思うと、はかない抵抗が誘惑の前に崩れ去り、里菜は川の向こうを見つめたまま、さらに足を踏み出した。雲を踏んで歩いているような、あやふやで心もとない感覚が、心に妖しい昂(たかぶ)りを呼び覚ます。

どうやって川を渡ったのか、わからなかった。

自分の足が水に触れたのも、里菜は感じなかった。寝間着の裾も、濡れてはいない。

だが、気が付くと、里菜は川を越えていた。

見上げると、すぐ目の前に、白い馬と黒い男の姿があった。

下から見上げても、フードの中は完全な闇でしかなく、そこに人間の顔は無かった。

「……あなたは、誰？」

陶酔の中へと転落していこうとする意識を必死で繋ぎとめ、里菜は、フードの中の闇を探った。見えない闇の中で、男が、すっと眼を細めた気配があった。

『私は今、魔王、と呼ばれている。が、それは私の本当の名ではない。そなたは私の本当の名を知っているはずだ。そして私が、このように呼ばれる存在になった理由も』

闇が、ゆっくりと、冷たい薄笑いのかたちに歪んだ。

「知らない……。あたし、そんなこと……」

『ならば、話してやろう。私と、来るのだ』

魔王と名乗った黒い騎手は、馬上から里菜に片手を差し出した。

それは、初めて見た、魔王の身体の一部だった。だが、はっきりと手そのものを眼で見たわけではない気がする。ただ、そこに手があるということだけが、ぼんやりとわかった。たぶん、それは、必要に応じてかりそめに作り出された一種の幻影――たった今、里菜に差し出されるためにだけ作り出された、手のかたちをした誘惑なのだ。

里菜の手が、なにかに操られているように、のろのろと上がった。

大鎌の魔力に捕らわれた里菜の心は、『魔王』という名の持つ不吉な響きにさえ、気がつかなかった。ただ、妖しい幻惑に身を任せて、里菜は魔王にあえかな腕を差し伸べた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第九場（2）

魔王の強い指が、里菜のか細い左手首をがっちりと掴んだ。
瞬間、めくるめく歓喜にも似たおののきが里菜を捕え、里菜は、ひと声、喘ぐように息を呑んだ。
魂が凍るような冷気が、手首から里菜の全身に流れ込んだ気がした。
だが本当は、その指は、冷たくはなかった。ただ、そこに何もないかのような、虚無の感触だった。冷たい、と、思ったのは、手首から、魔王の指を通して、里菜の身体の熱が虚空のかなたへと奪われていったからだろう。
魔王の指は、決してひどく手首を締め付けたわけではなかった。ただ、軽く掴んだだけだった。だが、里菜は二度とその手から逃れられないような気がした。
魔王は、力を入れる様子もなく、ふいに里菜の手首を掴んだ腕を身体に引き寄せた。魔王に触れられたとたん質量のない物質に変わってしまったかのような里菜の身体が、すっと引き上げられて宙に浮かび、馬の背の、魔王の乗った鞍の前に、ふわりと横座りに収まった。
魔王の黒いマントが、やさしくさえ思われる、一切の抵抗感のない空気のような感触で里菜を包み込んだ。里菜の身体から、すっと力が抜けた。同時に、体温もすべて奪われていった。そのまま眠り込みたいような気がした。
こんなに間近に身を寄せても、魔王にはあいかわらず肉体の気配がなかった。だが、確かに何か力場のようなものが自分に接して存在している気配はあった。例えていえば磁石の反発力のような、物質ではないが確かに感じられる、力の存在。
その力に、呑み込まれてしまいたいと思った。
このまま、その、黒衣の中の、あやめもわかたぬ永劫の闇の中に

取り込まれて、何も見ず、何も聞かず、何も思わずに、永遠に眠り続けたい。この昏(くら)い力とひとつになりたい。

自分が消えていくことの快感。意識が闇に溶けていく、無上の悦楽――。

里菜は、眼を閉じた。馬が、ゆっくりと歩きだした。

薄れていく意識の中で、最後の気力を振り絞って、夢うつつの声で里菜は尋ねた。

「……どこへ、行くの？」

『まずは、私の版図、極光(オーロラ)舞う北の荒野の古き城へ。だが、もしそこがそなたの心にかなわなければ、我等はどこでもそなたの望むところに城を構え、そこに住むことが出来よう。そなたは、かつてのように、この世界のすべての生命の女王として、この国の全土を統べるのだから。この世界はふたたび、死の王と、その伴侶たる生命の女王が、玉座を並べてしろしめす神代(かみよ)の楽土となるのだ。……エレオドリーナよ。失われていた、私の半身よ。私とともに、この世界に再生を、新たなる神代をもたらそう』

その言葉の意味するところが、消えかけた里菜の意識に届いて、ふいに警報を発しだした。忘れていた、アルファードの暖かなまなざしが、心によみがえった。里菜の中で、眠っていた十七才の少女が目覚めた。

里菜は眼を開けて、魔王を振り仰ぎ、キッと見つめた。

そのフードの奥の闇にふたたび引きずりこまれそうになる里菜の意識を、かろうじて引き止めたのは、アルファードのぬくもりの記憶だった。

初めて出会った時、里菜を抱いて運んでくれた、やさしく強い腕。ドラゴンから里菜をかばって跳びながら覆い被さってきた身体の躍動。汗の匂い。心臓の音。――無器用であたたかい、生命のぬくもり。

いま里菜を包み込む魔王の腕――あるいは腕のかたちをしたもの――には、ただ、無限の、絶対の力だけがあって、血肉をそなえた

もののぬくもりも手ごたえもなかった。
そのとき初めて、里菜は、魔王のマントに纏わりつく、黴臭いような、淀んだ空気を嗅ぎつけた。
それは不自然に滞った長すぎる時の中で醸し出されていった死と滅びの匂い――、憎悪と絶望が歪めた邪な夢と、狂気の匂いだった。
――危険！　このひとは、危険！　何か不自然なもの、よくないもの――
里菜の心の中で、警報が狂おしく高まって、激しく鳴り響きだした。
すべての体温を奪われていた里菜の身体に、思い出の中のアルファードの腕から、ゆっくりとぬくもりが注ぎ込まれた。里菜の理性が、冬眠から覚めた小動物のように、状況を見回し始めた。
「……伴侶って、どういうこと？　なんであたしが、女王になんか、ならなきゃいけないの？　あたし、別に、女王になんか、なりたくないわ。そんな面倒なもの」
その言葉に、魔王は、くつくつと、低い笑い声をあげた。耳に聞こえる声ではないが、確かに魔王は笑っていた。
『面倒だとな！　面白いことを言う小娘だ。……女王に、なるのではない。望むと望まないとに関わらず、そなたはもともと、女王なのだ。なぜならそなたは、エレオドリーナだからだ。すぐに、思い出す。私の花嫁よ』
「花嫁？　あたしが、あなたの？　……悪いけど、あたし、あなたと結婚するつもりはないわ。あたし、他に好きな人がいるんだもの」
里菜の言葉に、魔王はますます笑い出した。あたりの空気が邪悪な哄笑となって里菜を脅かす。
『小娘だな！　まったくの、小娘だ！　なぜにそなたは、このようなちっぽけな小娘でいるのだろう！　そなたはかつて、美しかった……。だが、この小娘も、悪くはないぞ。なかなかに興がある。これはこれで、愛らしいものだ。まったくそなたは、その諸相のいずれにあっても私を魅了する。例え老婆の時にあっても、乳飲み子で

あってさえも。だが、私の花嫁となるときは乳飲み子などでは困るゆえ、もとの姿にと思っていたが――いや、この、小娘の姿と思考をもつそなたを花嫁とするのも、一興かも知れぬな』

魔王の呪縛が破れ、理性を取り戻した里菜は、自分の中の、まだ魔王に惹かれている部分を突き放すように、冷たく言った。

「一体、何をおかしなこと言っているの？　赤ちゃんと結婚するとかしないとかって……。もしかしてロリコンじゃないの？　それはあなたの勝手だけど、あたしは、自分より何千才も年上のおじいさんと結婚するなんて嫌よ！　もっと自分の年令に相応の花嫁を見つければ！」

ぽっかりあいた洞穴のような、うつろな哄笑を響かせながら、魔王は答えた。

『まったく、面白い娘だ！　私の齢（よわい）に相応の相手は、そなたしかいないものを。そなたと私は、世界の始まりの時に、ともに生まれ出たものなのだ』

「だって、それは、エレオドリーナという人でしょ？　あたしは、違うわ」

『いや、そなたはエレオドリーナだ。例えいかなる姿と思考のかたちを持っていようと、そなたの魂は、永遠のエレオドリーナなのだ』

「それは、待ちすぎたあげくの人違いっていうものじゃないの？　気の毒だけれど、よくあることだわ」

勇気を振り絞って、ことさら冷淡に言い放った里菜に、魔王はわざとらしいため息をついてみせた――もちろん、音のない、慨嘆の気配だけのため息だったが。

『愚かなことだ。そなたにはもともと愚かな一面があったが……。自分が何者かさえ、わからぬとは。好きな人がいる、だと？　小娘じみたことを……。まったくそなたは、なぜそのように、同じ愚かな行ないを繰り返すのだ。そなたはまた、取るにたらない定命（じょうみょう）のものなどを愛でているのだな。そなたの、あの犬臭い羊飼いの、何がそなたを惹き付ける？　一体、私に無いどんなものを、あの薄汚れ

た、つまらん若者が持っているというのだ？』

それまで笑っていても感情の感じられなかった魔王の口調に、初めて、かすかな侮蔑と憎悪が忍び込んだ。

里菜の口が勝手に動いて、自分でもなぜそんなことを言うのかわからない答えを口にした。

「生命を、持っているわ。あのひとは、生きている」

『ハ！　生命を、とな？　たしかに、あれは生きている。短く、くだらない、人間の一生をな！　古傷をなめながら羊の番をして終える無意味な人生が、あの負け犬には、ふさわしい』

馬の歩みが止まった。魔王の声が、憎悪に歪んだ。

『おしえてやろう。あれは、逃亡者だ。自分の戦いから逃げてきた臆病者だ。あれはどうせ、永遠に、そなたを受け入れることはないだろう。なぜなら、逃げ続けているかぎり、どこにいても、あれは逃亡者であり、逃亡者は、どこにも本当には属することができずに中途半端な客人として孤独で空しい生涯を送る定めなのだから。私は、あれを、よく知っている。そなたよりも、ずっとな』

「アルファードは臆病なんかじゃないわ！　あなたがアルファードの何を知っているというの！」

『では、聞くが、そなたはあの若者の、何を知っている？』

「その、ぬくもりを。やさしい眼を」

『バカバカしい。そんなものは、犬でも持っているわ！　……あの羊飼いのことが知りたければ私のところに来い。私の城で、あれの正体を見せてやろう』

「見たくない、そんなもの！　どうせ、なにか悪い魔法で、おかしなものを見せられるんだわ！」

里菜は、叫ぶなり、魔王の腕を抜け出そうと、もがき始めた。

手首を掴む魔王の指は、肉体を介さないゆえに限界を持たない、むき出しの力そのもので出来ていた。この力から永遠に逃れることは出来ないのではないかと思った里菜は、今度こそ、それまでの甘い陶酔とは違う正真正銘の恐慌に襲われて、悲鳴を上げた。

「あたし、降りる！　離して！　降ろしてよ！」
意外なことに、里菜がこう叫んだとたん、魔王は、あっさりと里菜の手首から指を離した。
そのとたん、里菜は、さっきの川の岸に、ふたたび立っていた。馬上の黒い姿は、何事もなかったように、初めと同じ川の向こうに立っていた。
魔王の声が魂に響いた。
『まあ、よい。この世界にいるかぎり、そなたはいずれ私の許へ来るだろう。そなたは、私のものだ。私は、待っている。北へ来い。北の涯（はて）、オーロラの荒野に、私はいる。そこは遠いが、しかし、そなたが来たいと思えば、いつでも来られるところだ。エレオドリーナ、私の妻となるべきものよ。……その、小娘の姿も、なかなか、よいぞ。なかなか、趣がある。花嫁姿が楽しみなことだ。その日まで、また、このように、そなたの眠りの中で、時折、逢うとしよう。せいぜい毎晩待ちわびて眠りに就くがいい』
そう言うと、魔王は、嗤いながら馬の首を巡らした。
その後ろ姿にむかって、里菜は、なけなしの強がりを掻き集めて叫んだ。
「誰が待ちわびたりするもんですか！　何度来たってムダよ。この、ロリコンの、人さらい！　かってにどこかの赤ん坊とでも結婚して、その子を女王様にでもなんにでもしてあげればいいじゃない。あたしは、いやよ！　あなたの妻になんか絶対ならない。それにあたし、アルファードの悪口言うひとは許さないんだから！　……あなたの本当の名前なんて、聞かなくてもわかるわ。どう見たって、死神に決まってるじゃない！」
魔王の哄笑が一層高くなったかと思うと、その後ろ姿が、ふっと掻き消えた。

高い窓から差し込む朝日の中で、里菜は目を覚ました。暖かな自分の寝台で寝ていたのに、まるで氷漬けになっていたかのように、身体が重苦しく、冷たく感じられた。

身体の隅々に潜んでいる悪夢の名残りを振り払うように、里菜は寝台の中で、強張った手足を思い切り伸ばしてみた。それから、だるい身体をそろそろと起こし、寝台の端に腰を掛けた。

朝の光が、なにか不思議なものに見えた。そこにあるのが奇跡のような、夢のようなものに。

朝日を受けた自分の身体もまた、そこにあるはずのない幻のような気がした。

まだぼんやりしたまま、ベッドに腰掛けて、里菜は悪夢を思い出していた。

あれはたしかに、死神に連れ去らそうになる夢だった。あの白馬の騎手の、黒い服に大鎌という風体は、あまり独創的とは言い難い、どこから見ても典型的な死神の姿だったではないか。どうして、夢の中では、そのことにすぐ気づかずに、なんだかうっとりとして死神なんかについていってしまったのだろう。だいたい、川の向こうから呼んでいたことからして、あまりに約束どおりだったのに。

（あれって、もしかして、すごーくよくある『臨死体験』のパターンよね。あのまま川の向こうにいったままだったら、あたし、死んでいたのかしら。アルファードの面影が、あたしを呼び戻してくれなかったら……。でも、あれは、ただの夢、よね？）

その川を、裸足で歩いて渡ったことを思い出した里菜は、ハッとして自分の足を見た。

足は、汚れていなかった。寝間着の裾も、濡れてはいない。

（よかった。やっぱりあれは、夢なんだわ）と、思いながらも、なんとなく不安な、どこかあやふやな感覚が消えなかった。

（なんであんな嫌な夢、見たのかしら。ゆうべ、ドラゴン退治の祝賀会で、騒ぎすぎて疲れたから？　それとも、ドラゴンのせい？　ドラゴンのあの不吉な叫びを聞いてしまったからとか、アルファー

ドたちはドラゴンのためにお祈りをしてあげてたけど、あたしはしなかったから呪われちゃったとか？）

（……でも、もしかして、あの夢こそが真実で、今、自分がここにいることが夢だとしたら……。ドアを開けたら、そこはアルファードのいる隣の部屋ではなくて、そこにまた、あの、暗い川辺が広がっていたりしたら……）

里菜は、のろのろと着替えながら、楽しかったきのうの祝賀会のことなどを、無理やり思い返していた。そうすることによって、自分がドアを開けるまえに、あのドアの向こうに、昨日までのこの世界での楽しい生活の続きという、自分が思うとおりの現実を用意しておくことができるような気がして。そうしないと、ドアの向こうに、永遠に明けない闇の国を見てしまうような気がして。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十場（1）

きのう、里菜たちが村にたどり着いた時、村では、上空を飛び過ぎるドラゴンを見付けた子供たちの知らせで自警団員たちが集まって、詰め所で待機しているところだった。

そこへ、傷を負い、ドラゴンの爪をもったアルファードが山から降りて来ると、蜂の巣をつついたような大騒ぎになったが、気のきくローイが村人の相手や自警団への連絡、それに羊たちを一手に引き受けて、アルファードと里菜は、ひっそりとヴィーレの家へ入っていった。ヴィーレに良く似てやさしげなヴィーレの母は、自身は病弱だが、村でも屈指の、癒しの魔法の達人だったのだ。

里菜は、治療のあいだ、となりの部屋で待っていた。彼女は、みなれた魔法は、もう消さないが、あまり見たことのない魔法を、「どうやるのだろう」などと思ってじろじろ見ると、たまに邪魔をしてしまうことがあるので、さっきローイが治療するときも、わざとそっぽを向いていたのだ。

治療を受けたアルファードは、もう、ほとんどの傷が跡かたもなく治って、ただ背中の火傷だけが、古い傷跡のように残っていた。だが、アルファードは、部屋から出てきた時にはもう、素肌に上着を羽織っていたから、里菜は、その場では、傷跡を見ることはなかった。

癒しの魔法は、何でも治せるわけではなく、どんな優秀な治療師が治療にあたっても、死ぬものは死ぬし、残る傷は残る。だが、致命傷でさえなければ治療の効果が出るのは非常に早い。特に、この魔法は、傷に対しては有効である。一方、病気の治療には、魔法よりも、それと併用される薬草などの普通の治療法の役割が大きいし、流行り病には、魔法は、ほとんど効かない。流行り病は、不慮の事故による負傷とは違い、人間の宿命として死の神タナートの司る領域だからだと言われている。

アルファードと里菜が、自分たちの家に戻ると、そこではすでに、宴会の準備が進められていた。ローイは、実に手際よく、連絡や手配を済ませたのである。

「宴会だ、宴会だ！」

「酒だ、酒だ、酒を持ってきたぞ！」

てんでに騒ぎながら、若者たちが、わがもの顔でアルファードの家に出入りして、あれこれ運び込んだり、テーブルや敷き物を動かしたりしている。自警団には、一応、詰め所があるのだが、そこはほとんど武具の倉庫程度のもので、宴会や集会には、たいてい、独り者で気兼ねのいらない団長アルファードの家が使われて来たから、みんな、慣れたものだ。

若者たちは、帰ってきたアルファードの姿を見付けるといっせいに手を止めて、いきなり拍手や口笛で陽気に出迎えてくれた。

「いよっ！　我等が勇者様のお帰りだ！」

「おう、前代未聞の奇跡の男だぜ！　いいぞ、＜ドラゴン退治のアルファード＞！」

「今、ミナトとシゼグとカーデが、ドラゴンを処理しに行ってるからよ。暗くなるころには戻るってから」

「ローイは、酒が足りないって、調達に行ってるぜ」

「傷の具合はどうだ？　準備は俺達がやるから、あんたらはそのへんに座ってな！」

訳がわからないまま庭先に椅子を出されてアルファードと並んで座らされた里菜がきょときょとしていると、ローイが、酒のつぼをいくつもぶらさげて賑やかにやってきた。

「おーい、村の皆さんから酒の寄付がきたぜ！　料理の差し入れもあるぞ！」

見ると、ローイの後ろから、料理の鍋やら包みやらを持った村人や子供たちが、ぞろぞろついてくる。みんなは、どっとアルファードを取り巻いて、あれこれさえずり始めた。

「おおっと、待った、アルファードはそんなにいっぺんにいろいろ

言われても、返事がしきれないよ！　ここはひとつ差し入れの御礼がわりに、当自警団の名広報係である、このローイ様が、アルファードに代わって皆様にドラゴン退治の模様を詳しーく話して差し上げよう！　さあ、静粛に、静粛に！」

アルファードの横に立ったローイの声に、たちまち村人は静まって、子供たちは、ローイを囲んでてんでに坐り込んだ。みんな、これを期待して集まってきたのである。おもしろい話をするのも、ローイの数多い特技のひとつで、テレビも新聞もないこの村では、それは結構重宝な情報伝達の手段であり、娯楽でもあるのだ。

里菜も、アルファードとドラゴンの戦いをほとんど見てはいなかったから、ローイの話がどこまで本当かわからなかったのだが、アルファードが時に苦笑しながらも黙って聞いているところを見ると、多少の誇張はあっても、だいたいのところは事実に即しているらしい。こうして、話にきくと、（アルファードって、すごいことをしてたのね……）と、あらためて感心してしまう。

見ぶり手ぶりもよろしく、だいたいの話を終えたローイは、

「そして、これが、そのときの火傷の跡でござい！　おい、アルファード、上着脱いで背中見せろよ」と、いきなりアルファードを振り返った。完全に見せ物である。

なぜかしぶい顔をして上着を脱がないアルファードを見て、ローイは罵った。

「何だよ！　さっさと脱げよ。男のくせに背中見せるくらいで恥ずかしいってのか？　バッカじゃないの？　でけえ図体して、ケツの穴の小さ……。おっと、いけない！　ご婦人方の前で、下品な言葉を使っちまうところだったぜ！」

聴衆がどっと笑った。

（ローイってば、ひどいわ。アルファード、見せ物になっちゃって、かわいそう）と、里菜は思ってから、はっとした。

アルファードは、里菜に、火傷の跡を見せたくないのだ。里菜のせいで負った火傷で、跡が残ったことを、里菜に気にさせたくない

のだ。
　ローイもそのことに気が付いたらしく、声を落して――本人は里菜に聞こえないようにしたつもりだろうが、彼の声はよく通るので、あいにくと聞こえてしまった――アルファードに囁いた。
「リーナに見せたくないんだな。でも、そうやって隠そうとすると、あんたが傷跡を気にしていると思って、リーナがよけい気に病むぜ。平然と見せびらかしちまえば、それまでのことなのによ」
　そして、ふたたび声を張り上げた。
「おい、アルファード、その傷、誰が応急処置してやったと思ってるんだ？」
　聴衆からふたたび笑いと野次が起こる。
「アルファード、とんでもないやつに借りをつくっちまったな」
「あんた当分、ローイにこう言われて、見せ物にされるわよ」
　その通り、これ以降、この、『アルファードのドラゴン退治』の物語はローイの新しい十八番になって、話すごとに少しずつ尾ひれがついていき、アルファードが運悪くその場に居合わせた時は、必ず背中を見せ物にされるはめになったのである。
　アルファードは、しぶしぶ上着を脱いで、背中を向けた。里菜は、初めてその傷跡を見て、胸が痛んだ。
（そういえば、あたしまだ、アルファードに、ちゃんと謝ってないわ）
　さっきのアルファードの、一瞬の逆上を思い出して、里菜は、また、思わず身をすくめた。
（でも、どう考えても、あたしが悪いから、怒られて当然だわ。あたしのせいで、アルファードは死んでたかもしれないんだもの。……そう、アルファードは、命がけで、あたしを守ってくれたんだわ。なのに、あたし、お礼も言ってない）
　さっきの戦いの状況がよくわかっていなかった里菜は、今のローイの話を聞いて、あのときの出来事の意味が、初めて正確に飲み込めたのである。

「ねえ、ねえ、もう痛くないんでしょ？　そこ、さわってみていい？」

聴衆の中から子供たちが出てきて背中にこわごわ触れるのを、アルファードは辛抱強く我慢した。が、そのうちに、

「ねえ、ねえ、あたしも触っていい？」

「あ、俺も、俺も！」と、自警団の若者や娘たちまで面白がって寄ってきたので、ローイが叫んだ。

「おいおい、子供はいいが、大人は有料だ！　いや、女の子はタダだが、野郎は十ファーリ！　俺に、払うんだぞ！」

「おっ、なんで女の子だけ、タダなんだ！　そりゃあ、差別じゃねえか？」

「うるせえ。アルファードだって、女の子に触られるのはいいが、野郎に触られるのは嫌なハズだ！　そうに決まってる！」

「そりゃあそうかもしれないが、十ファーリはふっかけすぎだぜ。だいたい、なんでお前に料金払うんだ？」

「俺が治療した傷だからだよ！　ほら、十ファーリは？」

たまりかねてアルファードは背中を隠し、憮然と言った。

「悪いが、いいかげんにしてくれないか」

「しかたない、今日の出し物はこれにておしまい！」

ローイの言葉に、聴衆は、笑いながら散っていった。これで、『イルゼールの自警団長アルファードのドラゴン退治』の物語は、数日の内にさんざん尾ひれがついて近隣中に知れ渡ることだろう。

その間に、宴会の準備はほぼ整っていた。狭い家の中には、若者や娘たちが、ぎっちりつまっている。独身の若者が中心である自警団の宴会は、独身男女の交流の場も兼ねていて、団員以外の娘たちも誘われてやってくるのである。

ローイがおもむろに酒樽を示して、声を張り上げた。

「さあて、そろそろ宴会をおっぱじめるか！　勇敢なる我等が自警団長、我が村の誇り、＜ドラゴン退治のアルファード＞の、新しい武勲を讃えて、祝賀会だ！　ドラゴン退治の顛末報告は、ドラゴン

の片付けにいった連中が帰って来てからにして、とりあえず、先に乾杯といこうや。こんな時のためにとってあった、例の、上イルドの百六十一年産の葡萄酒だぜ！」

「おおっー！」

「いよっ、副団長、いいぞお！」

陽気な歓声の中で、杯が次々と葡萄酒で満たされていく。

この葡萄酒は、以前この自警団が、頼まれて、葡萄酒の名産地イルドの村を荒らしていたドラゴンを退治した時の謝礼の一部である。イルドにも自警団はあるのだが、彼らは、救援を頼んだイルゼールの自警団が来るまで、家畜小屋を囲んで鳴り物を鳴らし、ドラゴンをそこから引き離しておくことくらいしか出来なかったのだ。

といって、彼らをバカにするのは酷というもので、普通は、どこでもその程度で精一杯なのだ。ほかの村人たちのように、家に閉じこもって、その不可抗力の天災が去っていくのを震えながら待っていなかっただけましというものだ。

このあたり一帯のドラゴン退治は、ここ、イルゼールの自警団が、ほぼ一手に引き受けているのである。

乾杯が済むと、みんなはてんでに好きなところに腰を降ろしてわいわい騒ぎながら飲み食いを始めた。今日の主役であり、ヒーローであるアルファードは、たちまち大勢の若者や娘たちに取り囲まれてしまったので、なんとなく気圧された里菜は、隅のほうで一人で料理を食べながら、その様子を眺めていた。

そうしていると、アルファードが自警団のものたちに心から慕われているのが、良く分かった。アルファードは、特に威張るでも目立とうとするでもなく、いつも通りに静かに座っているだけで、若者たちは彼を肴に言いたい放題、いいように冗談を言っているのだが、それでも、誰もが彼を自分たちのリーダーと認め、彼に心酔しているのが一目で見てとれる。里菜も前から気づいていたが、やはり彼は、根っからのリーダー気質の持ち主なのだろう。

そこへ、ドラゴンの後始末に行った団員たちも戻ってきた。

驚いたことに、今度ドラゴンの防具を貰うことになっていて、その皮を剥ぎにいっていたというミナトは、若い娘だった。アルファードが、自警団に女性がいるなどと一言も言わなかったので、里菜は、アルファードの雰囲気から、なんとなく自警団を、『オトコの世界』といったようなものだと思い込んでいたのだが、アルファードは、別にこのことを隠すつもりだったわけではなく、この国ではそれがごく普通のことなので、とりたてて話す必要があると思わなかっただけなのだ。

「アルファードも、やっとミナトをドラゴン退治に加わらせる気になったか……」

たまたま里菜の隣に来ていたローイが、感慨深げに呟いてから、教えてくれた。

「俺は、ミナトはもう、前からドラゴン退治に出る実力があると思ってたんだが、アルファードの奴が、なかなか出さなかったのさ。きっと、女の子だから、顔に火傷でもしたらとか、よけいな気をまわしてたんだろうよ。あいつは、結構、頭が古いからな」

「へえー。ねえ、ローイ、自警団にはいっぱい女の人がいるの？」

「うーん、いっぱいでもないが、ま、何人かは、な。若い男はだいたいみんな自警団に入るが、女の子は、希望者のみって感じかな。このあたりは、だいたい、どこもそうだぜ。北部のほうじゃ、まず自警団に女は入れないそうだけどよ。北部の連中は、なんにつけ、保守的なんだ。もっとも、このへんだって、自警団に女がいても、ドラゴン退治には、あんまり出ないけどな。だいたい、ほかの自警団にゃ、そんな実力のある女はいねえさ。男だって、まともにドラゴンと戦えるのは、よそにはあんまりいねえもんな。でも、ミナトはやるぜ。あれは、たしかに腕力はアルファードほどとはいかないが、それでも並の男にゃ決して劣らないし、総合的にみれば、レベルの高いウチの自警団でも、かなり上のほうだと、俺は思うね。だいたい、ドラゴン退治でケガをしないためには、腕力よりも、敏捷性と判断力がものを言うんだ。アルファードだって、奴は身体も立

派だが、それ以上に敏捷性と判断力で勝負するタイプなんだからな。奴は、もっと早くミナトを正当に評価してやるべきだったんだよ」

腕力よりも魔法の力がものをいうこの世界では、軍隊などでも昔から女性がどんどん活躍しているのだが、魔法の通じる人間相手の戦いならともかく、魔法が通じないドラゴンが相手の時は、腕力で劣る女性はやはり不利になりがちで、だから、アルファードだけがそう特別保守的というわけではなく、この時代のこの地方では彼の考えはごく標準的だったのだが。

「ふうん、ミナトって、すごいんだ……」

里菜はすっかり感心して、ドラゴンの皮を掲げて誇らしげに帰ってきたミナトを見た。しっかりした体格の背の高い娘で、なかなかの美人である。

「そうさ。ミナトはな、誰よりも努力したんだからな。俺は、自警団の訓練が終ったあと、しょっちゅうミナトが自主的に居残り練習するのに付き合ってやったんだ。腕力は俺のほうがミナトより上だが、ほかは互角だぜ。前に言ったと思うけど、実は俺だって、けっこう強いんだ。たぶん、そうは見えないだろうけどさ」

「うん、ぜんっぜん、そんなふうに見えない」

「なんか、そこまで強調されると、ガックシくるよなあ。前にさんざん俺の活躍ぶりを話したじゃん」

「うん、そういえば……。だけど、どうせフカシだと思ってた」

「あーあ、やっぱり。どうせ、そうだろうと思ってたぜ。うそだと思うなら、ここにいるみんなに聞いてみろよ。俺がどんなに強いか、みんなが証言してくれるから。いいか、アルファードみたいに、見るからに強そうなやつが強いのは、あたりまえ！　俺みたいな、スリムな色男が実は強いってのが、今、かっこいいの！　分かる？」

「う、うん。ローイも、すごいんだ」

「そ！　あんたも、ドラゴンをやっつけたければ、いきなりじゃなくて、もっと身体を鍛えて、アルファードに稽古をつけてもらってからにしなよ。ものには順序ってものがあるからな。自警団じゃ、少年少女向きの護身術や剣術の講習会もやってるから、あんたはまず、そっちだな。女の子もいっぱい来てるからさ。もっとも、あんたのその身体をなんとか人並みにまでも鍛えるには、人並はずれた努力が必要だろうな。勇敢なのはいいことだが、それだけじゃ、身体はついてこないぜ」

　里菜とミナトの体格に雲泥の差があるのは一目で明らかで、それは生まれつきのものもあるだろうが、ミナトの人一倍の努力のたまものでもあるのだろう。そういえばローイも、よく見ればたしかに、弓を引くのに必要な頑丈な胸板と強い腕を持っているようだ。

ローイは、あたしの甘さを指摘したんだ、と、里菜は赤くなってうつむいた。腹は立たなかった。ただ、自分が恥ずかしくて、里菜は小さな声で言い訳した。

「あのときは、ただ、アルファードが危ないと思って、そしたら、訳がわかんなくなっちゃって……」

「あーあ、わかった、わかった。ごちそうさん。だけどな、リーナ、あんた、あの時、その場の状況、ぜんぜん分かってなかったろ？そういう時は、すばやい状況把握がモノをいうんだぜ。あんたはさ、言っちゃ悪いが非力なんだから、せめて敏捷性とか、とっさの判断力でそれを補わないとならないのに、どうやら、それもあんまり、あるようには思えないな」

ローイの指摘に、里菜は、ますますうつむいた。

「別に、ドラゴン退治をしたいとか思ってるわけじゃないの。あんな怖いもの、二度と見たくない。あたしに無理なのは、もう十分わかったわ」

「まあ、そうしょげることはないよ。きついこと言っちまったが、いくら努力が肝心といったって、人にはそれぞれ、もともとの向き不向きってのも、たしかにあるんだし、ドラゴンを殺すだけが人間の価値ってわけじゃないからな。あんたも、この世にいるからには何かここでやるべきことがあるはずだ。何か、あんたにしか出来ないことが。そして、それはきっと、ドラゴン退治じゃないのさ」

「ローイ、あなたって、すごくいいこというのね」

ただの軽薄なお調子者かと思っていたけど、という続きの言葉を、里菜は呑み込んだ。

「おう、あったりきよ！　人生相談のローイ先生だぜ！　口先なら、まかせてくれ！」

「ローイって、面白い……」

「ところで、あんた、アルファードに叱られたんだって？　何だか随分きつく言っちまったって、さっき、あいつ、気にしてたぜ」

「うん、すごく怒られた。あたし、今、あなたに言われたようなこ

と、アルファードにも言われたの。自分の力を考えろって」
「そうだろう。やつが、この自警団のことで自慢に思っているのは、退治したドラゴンの数じゃない。今まで誰も大きなケガをしたものがいないってことなんだ。アルファードは、団員全部の力量とか特性を良く把握していて、それぞれの力に応じた役割を割り振るし、みんなも自分の力をわきまえて、やつの指示をよく守る。それが、ウチの強さの秘密なんだ。奴がなんで怒ったか、分かったろ？」
「うん。よくわかった。ねえ、アルファード、まだ怒ってると思う？」
「ああ？　まさか。だいたい、最初から、本気で怒ってたわけじゃないだろう？」
「ううん、絶対、本気で怒ってた。アルファード、怒りのあまり手が震えてたもん。ぶたれるかと思った」
「アルファードに？　まさか。あいつは、剣の稽古をつけるときは相手の力に応じた手ごころは加えても女だからって理由で手加減はしないが、それとこれとは話が別で、女の子に手をあげたりは、絶対するはずがねえよ。でも、あんたがぶたれるんじゃないかと思って恐くなるくらい怒ってたわけ？」
「うん。でも、あたしが悪いから。あたしのせいで、アルファード、死ぬかもしれないところだったんだもの。ちゃんと謝って、お礼も言いたいって思ってたんだけど、なんかタイミングが悪くて……」
「うーん、そうかあ。あのアルファードがねえ。でもな、あいつは、自分があぶない目にあったからって、それで怒るようなやつじゃない。きっとあんたのことが本気で心配だったから、そんなに怒ったんだぜ。だいたい、あいつは、誰に対しても、説教はするが、カッとなるとか本気で怒るとかいうことは、もう何年もなかったんだ。アルファードを本気で怒らせたってのは、そりゃあ、たいした快挙だよ。俺も見たかったよ、普段澄まし返って聖人づらしてるあいつが怒るとこをよ。怖かっただろう」
「うん。泣くほど恐かった。すごい迫力」

「あはは、そうだろう！　あのガタイだからなあ。怒ったら怖いよな。いや、俺は、ヤツがまさかそんなに本気で怒ったんだとは思わないで、ちょっと厳しく説教しただけだろうと思ってたよ。でも、そういえば、さっき、あんたらの雰囲気、ちょっと変だったなあと思って、もしかしてあんたが叱られた理由をちゃんとわかってないんじゃないかと思って、それでこうしてフォローしに来たわけよ。まあ、とにかく、今はもう怒ってないよ。あいつのほうも、あんたに謝らなきゃならないって気にしてたもん」

「ほんと？　アルファード、そんなこと言ってた？　謝らないといけないのは、あたしの方なのに」

里菜はかすかに微笑んだ。

「そうそう、そうやって、笑って、な？　さあ、アルファードのそばに行ってやれよ。あいつも、あんたのこと気にして、仲直りしたがってるからさ。やつがそんなに怒ったのは、それだけあんたのことが大事で、心配でしかたなかったっていう証拠だよ。ドラゴン退治の勇者様に、やつの姫君から、ご褒美のくちづけのひとつもくれてやんな！」

言いながらローイは、なんで自分がこんなふうにアルファードと里菜の仲を取り持ってやらなけりゃならないのかと思っていたのだが、長年の人生相談係で身につけてしまったクセで、ついついこうなってしまうのである。彼は本当にいいヤツなのだ。

彼のあまりの『いい人』ぶりに感じ入った里菜は、衝動的に、思ったとおりのことを口走った。

「ローイ、あなたって、いい人ね！」

「うわっ、やめてくれよ。確かに俺はいいヤツだが、あんたにそのセリフ、言われたくないんだよ」

「なんで？　だって、ほんとに、そう思ったんだもん！」

「あのさ、あんたに他意はないんだろうけど、俺、今までに何回も、そのセリフで振られてるの！　古傷がうずくから、そのセリフはやめてくんな！　俺のこの辺、古傷だらけなんだからさぁ」

ローイは芝居がかった仕草で胸に手を当て、大げさに沈痛な表情を作って天を仰いで見せた。
そのおどけた様子に、里菜は思わず吹き出した。
そこに中央のテーブルから声がかかった。
「おーい！　カカシさんよ！　いつまでそんなすみっこで女の子口説いてるんだ！　みんな揃ったぜ。顛末報告はどうした？」
「おおっ！　いま始める！　じゃ、リーナちゃん、俺の熱演、とくと聞いててくんな」
ローイは立ち上がって、人をかき分け、部屋の中央に出ていった。
立ち歩いていたものはみな、もう一度、思い思いの場所に腰を降ろした。
ふと、まわりから人垣が消えたアルファードのほうを見ると、彼の両隣には、いつのまにかそれぞれひとりずつ娘たちが陣取って、彼にしなだれかかっている。片方は淡い紫の服がよく似合う小柄な美少女で、もう一人は、丸顔が愛らしい、優しそうな娘だ。
里菜は思わずムッとしたが、アルファードのほうは、蚊がとまったほどにも感じないという顔でまるっきり娘たちを無視して、黙ってゆっくりと酒を飲んでいる。
（そうか、アルファードって、その気になればこんなふうに、女の子たちを平然と無視できるんだわ。あたしがあんなことしたら、絶対、水を汲みにいっちゃうのに……。でも、これって、あたしが嫌われているってわけじゃないのよね？　あたしにだって、そのくらい分かるわ。あたしは、無視されないだけ、脈があるってことね！）
そう思うと、優越感から、アルファードにまとわりついている娘たちに対して寛大な気分になる。
（どうぞ、ご自由に！　あたしは毎日、一日中アルファードのそばにいるんだから、今しかチャンスがないあなたたちみたいにガツガツくっつかなくてもいいんだもん！）
そういえばヴィーレはどうしただろうと見回すと、彼女は別の隅で、娘たちのひとりと静かに話をしている。彼女は、決して暗い性

格ではないのだが、こういう、人が大勢集まる席で、まんなかで目立つタイプではないのである。ましてや、ここぞとばかりアルファードにしなだれかかるなどということが出来るわけもなく、最初に簡単にお祝いを言いに来たあとは、気の合う友達とおしゃべりしながら、ただ遠くからアルファードを見てるのだった。

ドラゴン退治の物語をさっきよりさらに調子よく熱演し終えたローイに、何人かから、声がかかる。

「ねえ、ローイ、もうひとつ、何かほかの話してよ。まだ、聞き足りない！」

「怪談がいいよ、怪談！　例のあれ、ほら、『ラドジール』のやつ！」

ローイは張り切って椅子に飛び乗り――そんなことをしなくても、彼はもとから、頭半分、周囲から抜きん出ていたのだが――声を上げた。

「よーし。ご要望にお応えして、もういっちょ行くかあ！　その名を聞くだに恐ろしい、『カザベルの食人王ラドジールの物語』、始まり、始まりイ！」

「待ってました！　いいぞ！」

「シー！　静かにしなさいよ」

若者たちは、しんと静まって、ローイの怪談に聞き惚れだした。

里菜から見れば、いい年をした立派な青年男女が、修学旅行の小学生よろしくワクワクして怪談を聞いている様子はなんだかおかしかったが、この村では、ローイの『お話』は宴会に欠かせない娯楽なのである。その中でも、この話は、みんなが飽きもせずに繰り返し聞きたがるローイの十八番（おはこ）で、誰でも知っている有名な伝説にローイが彼なりの脚色を加えたものだ。ここに集まっているもので、子供のころ、母親に、「寝ない子のところにはラドジールが来ますよ！」などと脅された覚えがないものは、アルファードと里菜を除いては、多分いないだろう。

「……こうして、勇猛をもって知られた、さしもの妖精王ラドジー

ルも、自分が殺して食った十三人の女のたたりで打ち続く怪異にしだいに心を弱らせ、ついには気が狂い、城の物見の塔から身を投げて、哀れな最後を遂げたんだ。

その時、ラドジールは三十五才。一介の商人の息子から身を興し、若干二十二才で王位に就いて以来、十三年間の短い治世の間に、貧しい小国に過ぎなかったカザベルを南の大国イルベッザに比肩する北の大国にまでのし上がらせた乱世の雄の、彗星のごとき一生はここに終わりを告げ、興国の英雄の死とともに、カザベル王国の命運も尽きた。カザベル城の石畳には、ラドジールの血痕が、今も消えることなく残っているそうだ。

だが、カザベルのラドジールの物語は、これで終りという訳じゃない……。

塔から墜落したラドジールの死体は、ぐちゃぐちゃに潰れて内蔵がはみ出し、血と脳漿があたりに飛び散り、見るも無残な光景だったと言う。そして、その、美しかった顔も、目鼻も分からぬほど無残に潰れていたんだが……。その時、なんと、すでに息絶えた屍の口が、ぽっかりと開いて、女の声で、こう言ったんだと。

『ジール……、ジール……。待っていたわ。やっとまた、あなたはあたしのもの……』

それは、あの、ラドジールが殺した、最初の恋人の声だったんだ。ラドジールの魂は、恋人に導かれて、その肉体を抜け出していった……。

しかし、食人の罪を犯した狂王ラドジールに、永遠の黄泉の安息は与えられなかった。亡者となってさえ、彼は人肉の味を忘れられず、風の中を漂いながら、うまそうな若い娘を探し出し、真夜中にその血を啜る魔物となった。夜更けに風が啜り泣く時は、狂えるラドジールの魂が、若い娘の姿を求めて家々を覗き込みながら、空をさまよっているのだという……。そら、今も、窓の外で、風の叫びが聞こえないか……？」

そこでローイは、おもむろに、恐ろしげに聴衆のほうを指差して

叫ぶ。
「あ！　ミナト！　お前の後ろに、ラドジールが！」
「キャーッ！」
名指しにされたミナトを初め、娘たち全員が、悲鳴をあげて、意中の若者や、たまたま隣にいた友達に抱きつく。
ここが、ローイの脚色によるこの伝説の人気の秘訣で、若者たちは、ここで意中の娘に抱きついてもらうのを楽しみに、ローイにこの話をせがむのである。娘たちもみんな、この怪談を何度も繰り返し聞いているから、すっかりこの展開を知っているのであるが、ここでローイに名指しにされるのを、ワクワクして待っているのだ。そんなお約束を知らない里菜だけが、取り残されてキョトンとしている。
ちなみに、今日、ローイがここで、ミナトの名を言ってやったのは、彼女がドラゴン退治への参加を認められたことへの、彼なりの御祝儀がわりのつもりである。ミナトに抱きつかれているのは、いかにも大人しそうな小柄な若者で、どうみてもミナトのほうが強そうなのが笑えるが、彼はまんざらでもなさそうにしている。
アルファードの隣にいた娘たちは、もちろん両側からアルファードに、ヒシとしがみついた。アルファードは黙って、勝手にしがみつかれている。
若者たちが、その様子に気付いて叫んだ。
「おっ！　アルファードが、あんなすみっこで、いつのまにかちゃっかりモテてるぜ！」
「いいじゃないか、ナーク、アルファードは今夜の主役だ！」
「いいなー、いいなあ！　しかもユーサちゃんとレサちゃんだよ。俺たちの女神様ふたりを独り占めだよ？　ユーサちゃーん、そんなとこいないで俺のとこへ来てよ！」
「ベーだ！」
ユーサと呼ばれた紫の服の娘は、アルファードの逞しい腕にことさらギュッとしがみついて舌を出した。

ユーサに振られた若者は、懲りもせず、反対側の娘にも声をかける。
「レサぁ、あんたはこっち来てくれるよな？」
レサと呼ばれた優しげな娘はニコニコ笑って答えた。
「あとでね、あとで」
そう言いながらも、どうやら、せっかく手に入れたアルファードの隣席という幸運を手放す気は毛頭なさそうで、里菜でさえ邪魔しようという気が失せるほど、実に幸せそうにうっとりとアルファードに寄り添っている。
アルファードは、相変わらず、黙って酒を飲んでいるだけだ。
あとはもう、無礼講である。
ドラゴンの爪を紐に通して首にかけてもらったミュシカに、若者たちが我先に食べ物を差し出す。
「おい、ミュシカ、お前は偉い！　これ、食えよ！　ほら、にんじんの煮物！」
「バカ、ミュシカはそんなもん、食うか。こっちだよ、こっち。骨つき肉！」
「あら、ディード、床に肉なんか置いちゃダメよ！　汚れるじゃないの」
「いいんだよ、どうせ掃除するのはアルファードだ！」
「ひどーい！」
「なんだよ、ヴィヴィ、文句あっか！」
「お前ら、いくら仲良しだからって、こんなとこで、痴話ゲンカはよせよ！」
「ええーっ！　ディードとヴィヴィはデキてたのか！　俺、知らなかったぞ！　いつからだ？　ヴィヴィ、考え直せよ。俺、お前のこと好きだったんだぜ」
「嘘おっしゃい、ナーク！　あんたは、このあいだ、誰かさんにプロポーズしたんでしょ！」
「あーっ！　なんでお前が知ってるんだ？　それ、まだ秘密だった

のに！」
「ええー！　ほんと？　ねえ、ヴィヴィ、誰かさんって、誰？　誰？」
「言うな、ヴィヴィ！」
「なによお。どうせすぐ、婚約発表するんでしょ？　今ここで発表しちゃいなさいよ。あんたが言えなきゃ、あたしが代わりに言ってあげる！　あのね、ミナト、ナークはね……」
「わあ、ダメ、ダメ、ダメ！」
などと、騒がしいこと、この上ない。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十場（3）

彼らの賑やかさに圧倒されていた里菜も、いつまでも一人でぽつねんとしていたわけではなかった。

彼女は今日の出来事のもう一人の主役でもあることだし、もとも と、別の世界から来た娘ということで誰もが里菜に興味を持っていたのにこれまであまり言葉を交わす機会がなかったということもあって、すぐに里菜の回りにも、若者や娘たちが入れ替わり立ち替わりやってきては、話しかけはじめたのだ。

実をいうと、どこからともなく村にやってきて、『転校生効果』で一時期妙に若者たちの関心を集めてしまった里菜は、これまで、村の娘たちの多くから、嫉妬混じりに『ぶりっこ』『カマトト』などと言われて、あまり良い感情をもたれていなかった。

なにしろ、初対面の印象が悪かったのだ。みんな最初は、まだ見ぬ里菜を仲間に入れてあげよう、やさしく迎えてあげようと盛り上がっていたのに、やっと引き合わされた肝心の里菜は、アルファード以外の人間は目に入っていないらしく、自分たちのほうなどろくに見ようともせず、あんなに親切に話しかけてあげたにもかかわらず、まるで、何だか妙な動物の群れに放り込まれたとでもいうような居心地悪そうな様子で、終始、助けを求めるように、アルファードの姿を目で追ってばかりいる。回りに見えない壁を張りめぐらせて、自分たちを遮断したがっているように見える。どうも、この子は、＜女神のおさな子＞である自分がこんな卑しい村娘などと同席するのは不本意だ、とでも思っているのではないか――。

実は里菜は、ただ人見知りをしていただけなのだが、村の娘たちの目には、里菜は、なんだかお高く止まっているように映ってしまったのだ。

その上、今まで誰が誘っても一切なびかず堅物で知られてきた村の英雄アルファードをあっさりと独占してしまったことも、娘たち

のあいだでの里菜の不評の理由のひとつだ。　アルファードは、これまで、誰のものにもならないがゆえに、それなりにみんなのものだったのだ。それを、突然割り込んで来た他所ものの娘が、たまたまアルファードに拾われたからといって、野良猫みたいにその家に居ついて抜け駆けをするなんて、というわけだ。

それも、アルファードと結婚してしまったとか、おおっぴらに恋人どうしになってしまったとかいうなら、それなりに祝福してあげてもいいが、ふたりの間にはどうみても『何もない』らしいのに、妹とも養女ともつかぬ中途半端な居候の彼女をアルファードが妙に大事にしているのが、どういうものか、よけいに腹立たしいのだ。

だが、若者たちのほとんどが里菜に興味を失い、里菜のほうもどうやら、あちこちの男に色目を使う気はないと分かった今、娘たちの里菜を見る目も、だいぶ穏やかになってきた。それに、アルファードと里菜の関係も、里菜は本気でアルファードが好きなのに、アルファードのほうが、例によって妹扱いしかしてやらないらしい。それなら自分たちと立場はあまり変わらない。

いや、一緒に住んでいながら妹扱いしかされないなどというのは、自分たち以上に絶望的に見込みのない状態かもしれない。

そもそも、アルファードの気を引こうとしていた娘たちのほとんどは、確かに彼の強さや頼もしさ、誠実さといったものに惹かれてはいたが、それよりも結局、本当のところは、誰にもなびかないアルファードを、それゆえに一種のアイドルのようなものに祭り上げて楽しんでいただけで、たいてい、本命は別にいたのである。ただ、なびかないとなると構ってみたくなるのが彼女らの習性だったというだけのことなのだ。

そうなると、彼女たちも別に意地が悪いわけでもないので、そろそろ、里菜を仲間に入れてあげたい、別の世界から来た珍しい娘と友達になってみたいという気運が、反感に打ち勝って高まってくる。

そこへもってきて、今回の事件では、里菜もなかなかただの『ぶりっこ』ではない一面を見せたということで、もともと好奇心の強

い娘たちのこと、いっせいに里菜を取り囲み『あちら』の世界のことをあれこれを質問し始めた。

そこに、若者たちの一団から大声が上がった。

「おい、そういえば、今日は、ローイの歌をまだきいてないぞお！」

「そういえば、そうだ。ローイ、そろそろ、頃あいだろう。一曲やれよ！」

「おう、そろそろいくか！　酒の入り具合も、丁度だ。こうでなくちゃ声が出ねえや」というローイの声に、今まででてんでに大騒ぎしていた連中が、いっせいにローイに向かってリクエストをしはじめた。

里菜は、意外そうに、たまたま隣にいた色の白い小柄な娘に尋ねた。村の娘たちの多くは大柄で大人っぽく、里菜にとってはちょっと気後れがする存在だったが、この娘は背丈も自分とあまり変わらず、年令も同じくらいと見えるし、どうやらあまり身体が丈夫でなさそうなところにもなんとなく親しみを感じて、話しかけやすかったのだ。

「ねえ、ドリー。ローイって、歌なんか得意なんだ？」

「そうよ。あなた、知らなかった？　ローイとはけっこう親しくしてたんじゃないの？　あ、でも、そういえば、宴会は初めてだもんね。ローイはね、あれで結構テレ屋なとこ、あるから、お酒が入らないと歌わないのよ。すっごくうまいんだから。声もいいし。歌っているのがかかしのローイだと思わなければ、うっとりしちゃうわよ」

「へえ、そうなんだ。あたし、なんだかヘンな歌を歩きながら歌ってるのしか、聞いたことなかったから。でも、そういえば、いい声だったし、歌も、うまかったかもしんない。……でも今、ああいうヘンな歌、歌うんじゃないんでしょ？」

「ああ、あの歌ね」と、ドリーは声をたてて笑った。「ああいうのならシラフでも歌うわよ。あ、始まるわ。とにかく、聞いてて。ほんと、いいんだから」

どこから取り出したのか、カマボコ板大の木片に弦を数本張ったような小さな単純な楽器を指で弾きながら、テーブルの端に腰掛けて、ローイが歌い出した。みんな、しんとして聞いている。

その歌が、普段のローイのふざけたようすからは想像も出来ないような愛らしいラヴソングだったので、里菜はびっくりした。それがまた、確かにうまい。しみじみと心にしみる美しい歌声である。ローイには意外な特技が実に多いらしいのは分かっていたが、この才能はハンパじゃないかも知れないと、里菜は呆然と聞き入った。

一曲を終えたローイは、喉を湿らすためと称して、一休みして酒をあおった。

ドリーが里菜の肘をつついて言った。

「どう、言った通りでしょ？　宴会の中盤には、やっぱりこれがなくっちゃね」

「うん、あたし、びっくりした。あのローイが、あんなきれいな歌を歌うなんて」

「じゃあ、もっとびっくりするかも知れないけど、あの詞、ローイが作ったのよ」

「ええーっつ！　うそ！」

「ほんと、ほんと。ガラじゃないでしょ？　曲はこの辺の古い民謡なんだけど、それにローイが自分で詞をつけたの」

それは、里菜にとってますます信じられないことだった。そういえば、確かに拙い詞だったかも知れないが、それはとんでもなくロマンティックで、おセンチと言っていいほどの詞だった。あの、ガサツなローイが、まさか、である。

二曲目は、なんだかもの悲しい放浪の歌だった。これもまた、ローイには不似合いである。

「今のも、ローイの詞？」

「そうよ。彼が歌うのは、ほとんど、そう」

「でも、ローイって、ずっとこの村に住んでるんでしょ。それに、あんなに明るい人なのに。なんで、あんな悲しい歌をつくるの？

失われた故郷がどうたら、みたいな……」
「ああ、それはね……」
ドリーは、顔を曇らせた。
「きっと、ヴィーレのことを歌っているのよ。彼、恋の歌の時もそうだけど、あのテの歌を歌う時も、ヴィーレのほうだけは、絶対見ないもの。ヴィーレが、彼の失われた故郷なの。それに気付いてないのは、本人だけよ」
「ヴィーレ？　……何でヴィーレが出てくるの？」
「え？　あら、あなた、知らなかったの？　あたし、まずいこといっちゃったかしら？　まさか、知らないなんて思わなかったから……。でも、これは村では誰でも知っていることなのよ。……ローイとヴィーレは、もと許婚（いいなづけ）だったの」
「え！　そうだったの？　あたし、ちっとも知らなかった。『もと』っていうと、今はもう、そうじゃないってこと？」
「うん、正式にはね。ずっと小さい頃からの許婚だったんだけど、何年も前に婚約解消しちゃったのよ。たぶん、何だかつまらない意地をはって、そういうことになっちゃったんじゃない？　でも、今でもあの二人、本当は好き合っていると、あたしたちみんな思っているの。いつかきっと、あの二人、やっぱり結婚するわよ。ああ、ロマンチック！」
ドリーは祈るように両手を組み合わせ、目に星を浮かべてうっとりと中空を仰いで見せた。テレビの恋愛ドラマもロマンス小説も存在しないこの村の娘たちにとって、他人のロマンスは格好の娯楽の種である。
「へえ……。そうなんだ……」
意外な事実を知って、里菜は、初めて見るもののようにローイをまじまじと見直し、隅っこにいるヴィーレと見比べた。
（ふうん……。そうだったんだ……。たしかにローイとヴィーレって、とても仲がよさそうだとは思ってたんだけど、ただ幼馴染みだからかと思ってたわ。でも、ヴィーレって、もしかしてアルファー

ドが好きなんじゃないのかと、ちょっと思ってたんだけど……）

その後、ローイは、何曲か歌を歌ったが、合間合間に酒をあおるので、しまいにはロレツが回らなくなり、それでも歌いつづけようとするのを、さっきとは逆に、みんなによってたかってテーブルから引きずり降ろされ、楽器を取り上げられてしまった。

これもいつもの展開で、みんながまだ酔っていない宴会の序盤にはローイのお話、程々に酔いが回った中盤にはローイの歌、そのあとはすっかり座が乱れて乱痴気騒ぎというのが、ここの宴会のパターンである。ローイは、宴会の段取りも得意だが、その上、多彩な特技で座を盛り上げる、宴会には欠かせない人材なのだ。

テーブルから引きずり降ろされたローイは、しばらく、その労をねぎらわれながら酒をどんどん飲まされていたが、そのうちふらふらと里菜たちのところへやってきた。

「おお、リーナちゃん。何、そんなとこでひそひそ話してるんら？　あ、そうか、俺のファンクラブに入るにはどうすればいいかって、ドリーに聞いてたんらろう！　なんたって俺はスターらもんな。宴会の星らぜ！　イェーイ！」

すっかりロレツが回らないローイに、里菜は笑いながら応えた。

「ほんとね。ローイ、すっごく、歌、上手なんだ。びっくりしちゃった」

「おお、そうらぜ！　知らなかったかあ？　俺に、ますます惚れ直したろう！」

「もう、ローイってば。惚れ直せる訳ないじゃない。もともと、惚れてなんか、ないんだもん」

「あ、そ。惚れてなかったの。俺、知らなかったぜ。じゃあ、いまかられも、惚れてよ。そうそう、ファンクラブに入るには、入会料がいるんらぞ。今ならたったの、キス一回！　ほら、ほっぺに、チュッ、ってさ」

なにやら調子のいいことを言いながら里菜の前に突き出されたローイのほっぺたを、平手でバチンと張ったのは、ドリーのほうだっ

た。

「なあに寝惚けたこと言ってるのよ、この酔っ払い！　かかし男！」

「痛ってェ！　何すんら！　そのうえ、村の大スター様に対してかかしとはなんら！」

ぶつぶつ言いながら、ローイはそのまま、またふらふらと別の一団に加わりに行った。その千鳥足に、里菜とドリーは、顔を見合わせて吹き出した。ともに小柄で色白という共通点を持つこのふたりは、どうやら気の合う友達になれそうな気配である

第一章＜エレオドラの虹＞　第十場（４）

そのうち、宴会が進み、みなが酔っ払うにつれて、話題は、毎回お定まりの思い出話にたどりつく。

「でもよお、あんときは、面白かったよな！　イルベッザでさ！」

「そうそう！　カーデとかシゼグとかが、軍の巡回警備の連中にしょっぴかれてな。アルファードが、さんざん頭下げて、説教くらって、釈放してもらってよ」

「なんだよ、俺らのことばかり悪者にするなよ。たまたま俺らがつかまったってだけで、お前らも充分暴れて、店のもん、いろいろぶっこわしたじゃないかよ！　あとでアルファードが、賞金で弁償したんだぜ。だいたい、例の野郎の腕を折ったの、お前だろうが」

「そうともさ！　いやあ、あんときは、すっとしたよ！　あの、町の青びょうたん野郎ども、俺達を田舎者だと思って、バカにしやがってよ！」

「いやあねえ。男って、野蛮よね！　要するに、あんたたちみんなが、悪いのよ！　アルファードがどれだけ迷惑したと思ってるの？」

「ヴィヴィ、お前はいつでもうるせえんだよ！　そんなことじゃ、ディードに愛想つかされるぜ！」

「なんですって！　おおきなお世話よ！」

彼らは、この、イルベッザの思い出話を、宴会のたびにあきもせず、繰りかえすのである。

それは、アルファードが武術大会に出場したときのことで、農閑期だったこともあり、その時彼らは、なけなしの蓄えをはたいて、馬車を連ねて応援に繰り出したのだった。彼らにとって、そうでもなければ一生訪れることもなかったかもしれないイルベッザの都をアルファードのおかげで見物できたというだけで、すでにアルファードは英雄なのである。

ところが彼らは、そのイルベッザで、町の若者たちと一悶着起こ

して乱闘騒ぎをやらかしたのだ。
「とにかく、もとはと言えば、あっちが悪いんだぜ！　俺達のアルファードに難癖つけやがって！　なにが、どうせ八百長だろう、だよ。とんでもないいいがかりだよなあ」
「そうだ、そうだ！　あいつら、どうせ、あの決勝戦の相手に賭けてたんだぜ。そうに決まってる」
「そうだよなあ。あの男、岩みたいなすごい大男だったもんなあ。あれとくらべれば、アルファードなんて、まるでほっそりして、華奢に見えたもんだ。誰だって、あっちに賭けらあな。でもアルファードは、勝ったぜ！　技の正確さが段違いだったもんな」
「そうそう。アルファードは動きにも体格にも無駄が無いんだ。都のやつら、みんな、技を見る目が無いから、見てくれに騙されたのさ。筋肉なんて、あればあるほどいいってもんじゃないのに、あいつらの目は節穴だね」
「まったくだ。まあ、そのおかげで、俺達みんな、儲けさせてもらったけどな！」
　武術大会では、賭は御法度なのだが、こっそり、というより、おおっぴらに禁を犯して賭をするものは、当然ながら跡を絶たない。むろん、彼らも賭けたわけだ。
　アルファードの決勝戦の相手は、筋肉隆々の体躯をごつい防具でさらに膨れ上がらせた、身長二メートルはゆうにありそうな大男で、普通なら持ち上げることもできないだろうというほどの幅広の大剣を丸太のような腕で軽々と振り回して見せて満場の歓声を浴びており、しかも、単なる力自慢のでくのぼうなどではないことはこれまでの試合で十分披露済み、対するアルファードは身長百八十センチ台、引き締まった無駄のない体格は普段は十二分に逞しく見えるが、相手の大男と向かい合うと、まるで軽量級の小兵（こひょう）に見える。
　その上、粗末な羊毛の普段着に、いかにも借り物らしい革の胸当てという軽装、体格に不釣合いで見映えのしない小振りの剣とくれば、それまでの試合で一見貧弱なその剣をいかに巧みに扱うかが実

証されていてさえ、やはりとても勝ち目がありそうには見えなかったから、この試合でアルファードに賭けた慧眼の少数派は大儲けしている。その分、負けてくやしがっていたものも多かったのだ。

決勝戦に上がって来るまでも、アルファードの試合はあまりに簡単に勝負がついて派手な見せ場もないあっけないものが多く、実はそれは双方の力量にそれだけ圧倒的な差があったからなのだが、その無駄な動きのない剣捌きの鮮やかさを見抜けない素人にはただ相手が弱かっただけのつまらない試合に見え、彼は単にクジ運が良くてまぐれで決勝戦まで来られたのだと思われていたから、その彼が、派手な流血戦を勝ち抜いて来た迫力満点の大男をあいかわらずの一見地味な試合展開で破るのを見て、試合直後には、酒と興奮で目が曇ったままに、賭けに負けた腹いせもあって八百長だなどと喚き出す者までいたのである。

そういう愚か者たちも、多くは、後で頭が冷えてから、剣技を見る目のあるものたちの試合評を聞いて納得し、自分の浅薄な空騒ぎを恥じることになったのだが、その夜はまだ興奮も冷めやらず、あちこちの酒場で似たような小競り合いがあったらしい。

「それにさあ、あいつら結局、血を見たかったんだぜ。それで欲求不満だったんだ。なんたって我等がアルファードは、誰にも一滴も血を流させずに勝ったもんな。それだけ技が確かだってことだよな。それをあいつらは、自分らの野蛮な期待をアルファードが満足させてくれなかったってんで逆恨みしてたんだ」

「でもあいつら、結局望み通り、たっぷりと血を見られたわけだよな。自分の鼻血をよ！」

「鼻血だけじゃないぜ！　俺はもっと血を見せてやったぜ！」

「カーデったら、何、自慢してんのよ！　だから、しょっぴかれたんじゃない！　ほんとにしょうがないったら」

「なんだよ、ヴィヴィ。おまえはいちいちうるせえんだよ。このじゃじゃ馬！」

「言ったわね、なによ！　あんたなんか、こうしてやるっ」

「痛てっ、何すんだよ！」
たちまち始まった派手な掴み合いに、隣席の若者が慌てて止めに入った。
「おい、カーデ、ヴィヴィ、やめろ、やめろってば。ディード、止めろよ。お前の女だろう」
「おう、そうだぜ！　おい、カーデ、俺の女をじゃじゃ馬とはなんだ！　よくも言ったな！」
「こら、ディード、お前までいっしょにケンカしてどうすんだよ。やめろってば」
「止めるなよ、ナーク。こいつが先に俺の女を侮辱しやがったんだ。外へ出ろ！　決闘だ！」
そこへ、それまで既にほとんど忘れられて隅の寝台で無言でゆっくりと酒を飲んでいたアルファードが、彼一流の、低いが妙に逆らいがたい声で言葉をかけた。
「おい、ケンカはよせ」
たった一言だったが、それだけで酔っ払いたちは、夢から覚めたようにしゅんとおとなしくなった。
「まったく……」
アルファードはつぶやいて、また、ゆっくりと酒を飲み始める。
彼がいれば、あのときも、乱闘になどならなかったはずなのだ。
だが、イルベッザ城での表彰会を早目に抜け出したアルファードが約束の酒場に駆け付けた時には、すでに数人が市中警備の部隊に連行された後で、残った連中も、すっかり酔っ払たり怪我をして動転したりしていて、ただうろたえるだけでまるで話にならず、結局アルファードが一人で事後処理に奔走するハメになったのだった。
彼らが説教だけで釈放してもらえたのは、ひとえに、アルファードがその日の市民の話題をさらった新しいチャンピオンその人だったおかげだろう。
連行した酔っ払いを引き取りに来た若者が例の大評判の新しいヒーローだと分かると、そこに居合わせた役人たちは仕事そっちのけ

で大喜びで握手を求め、形ばかりの説教のあと彼らを引き渡してくれたのだ。特に、その場の責任者だった士官が、職業軍人の確かな目でアルファードの剣の腕を見抜き、この、田舎からぽっと出の無名のダークホースに大枚を賭けて大儲けしていたのも幸いしたのかもしれない。

この自警団は、活動中はびしっと統制がとれているのだが、ふだんは対称的に野放図な連中なのだ。地域によっては、自警団の規律が非常に厳しく、日常生活に於ても団長や先輩団員には敬語を使って絶対服従という方針を取るところにもあるが、アルファードはそういうやりかたをしないで、それでもどこよりも強い自警団を育ててきたのである。

アルファードに一喝されて一瞬おとなしくなった酔っ払いたちは、すぐに何事もなかったように思い出話の続きを始めた。

「そいで、次の日、みんなで買い物したじゃん。やっぱ、都は、モノの量も種類も、プルメールあたりとは大違いだよな」

「そうそう！　あたし、あのとき買ったリボン、宝物にしてとってあって、もったいなくてまだ一度しかつけてないのよ」

「あたしは、あのとき買ったレースを、結婚式のベールにするって決めてるの！」

「でもさ、ローイが買ったマントは、すごかったよなあ」

「ああ、あの、ド紫のやつ！　よくあんな悪趣味なもの見つけたよな。信じらんねえ！」

「おい、今、誰か、俺のマントにケチをつけなかったか？　聞こえたぞ！」

別の一団にいたローイが、振り向いて大声をあげる。

「ああ、ケチをつけたとも。あんなもの着て、よく恥ずかしくねえなあ」

「ああ、嘆かわしい！　お前らみたいなダサイ田舎者には、俺の都会的なセンスは理解出来ないんだな。ああいうシャレたもんは、このへんじゃちょっと手に入らないぜ」

「都会的ったって、俺は都でも、あんなマントを着ているやつは一人も見なかったぜ」
「そういう、誰も着ていないようなものを着るのが、いいんじゃないか！　俺はあれを探すのに、すごく苦労したんだ」
「やっぱり都でも、あんなものあれ一枚しか売ってなかったんだぜ、きっと。あんなの着るバカ、ローイしかいねえもん」
「そうなんだよ！　この村の連中もイモばっかだが、都の連中もダメだ！　この国全体がファッションにかけちゃ百年は遅れてるのさ！　あと百年たってみろよ。みんなが俺みたいな格好をするようになるぜ」
「なるもんか。そうなったら、世も末だ」
「そうよ、そうよ」
そんな思い出話には加われない里菜も、それでも楽しく話に耳を傾け、楽しい時を過ごしたのだった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十場（5）

そのうち夜が更けると、娘たちの多くは、連れ立って、あるいはそれぞれのボーイフレンドや迎えに来た父兄に伴われて、いつのまにやら帰ってしまった。残っているのはすっかり出来あがった酔っ払いばかりとなった。

ずっと娘たちの群れの中にいてアルファードのそばに行きそびれていた里菜が、やっと彼の隣にたどり着いて並んで腰を降ろすと、里菜よりさきにアルファードがいきなり話を切り出した。

「リーナ、俺は君に、謝らなくてはならない。俺は君のことを、バカと言ってしまった」

「え？　……そういえばそんなこと言ったかしら。でもしかたないわ、あたし、バカなことしたんだもん。バカっていわれて当然だから。それにアルファード、もう、あの時すぐに、すまなかったって言ってくれたじゃない」

「いや、それは二度目のことだろう。俺は、そのまえ、まだ君がなにもバカなことをしないうちに、バカといってしまったんだ」

「え？　いつ？」

「最初にドラゴンが飛んできた時。俺は君に、『バカ、早く逃げろ』と……」

「……そんなこと、言った？　そういえば、そんな気もするけど……。でもそれは、あたしがあんな非常事態にぼやぼやしてたんだから、しょうがないわ」

（アルファード、そんなとっさの一言を、ずっと気にしてたのね。あたしのほうは全然覚えてもいなかったのに）と、里菜はそのあまりの律儀さに半ば呆れた。

アルファードは、大真面目にこう言った。

「いや、君は、訓練された自警団員ではないのだから、即座に指示に従えなかったからと言って、君を責めるのは間違っている。それ

に、いくら非常事態でも、何を言ってもいいわけじゃない。すまなかった」

「アルファード、謝るのはあたしよ。本当に、ごめんなさい。それから、ありがとう。あたしを、守ってくれて。あたし、あたし……」

そこへ、いきなり大声を張り上げて、すっかり酔っ払ったローイが、酒の壷を片手に、割り込んできた。

「おーい、仲直り、したかあ？」

アルファードはむっつりと答えた。

「俺とリーナは、別に仲違いなどしていない」

「何言ってんら！　俺がリーナちゃんに言ってやったんらぞ、アルファードにキスのひとつもしてやれって。してもらったか？　アルファード、俺に感謝しろ！」

ローイはすっかり、目が据わっている。

「なあ、リーナちゃん、こんな朴念仁野郎、かまったって無駄らぜ。俺に乗り換えないかあ？」

そう言いながら、ローイが、いきなり里菜の肩に手を回したので、彼の馴々しさに悪気がないことはよく分かっているつもりの里菜も、つい、反射的に、身を固くした。ローイは、実は少々酒癖が悪いらしい。

この手の酔っ払いには逆らわないほうがよさそうだと見て取った里菜は、身を固くしたまま、気を取り直して適当に答えた。

「う、うん、考えとく……」

「考えとくとは、なんらぁ！　酔っ払いらと思って、適当にあしらってるな！　ああ、俺は酔っ払いらよ！　ろうせ、今のこと、あしたは覚えてないらろうと思ってるんらな。その通りさ！　俺は忘れるよ！　れも、俺は、自分が酔っ払いらってこと、ちゃんと分かってるんらぜ！　て、いうことは、まらまら、酔っ払いじゃないんらぁ！」

「おい、ローイ、いいから、その手を放せ。リーナがいやがってるぞ」

「なんらよ、アルファード、あんたにそんなこと言う権利あるのかよ。リーナはあんたの持ち物か？　リーナは、いやがってなんか、いるもんか。なあ、リーナちゃん？　俺のこと、キライじゃないよな！」

「う、うん、キライじゃないけど、でも……」

どうしてよいかわからずに困っている里菜から、アルファードが、ローイを、力づくでひっぺがした。

「リーナ、こいつを相手にするな。こいつは酒を飲むとしつこく絡むんだ。これさえなければ、いいやつなんだが……」

「ああ、ああ、俺はいいやつれすよ！　らから、酒飲んらときは、いいやつ、やめるの！　れなきゃやってられんらろ！」

「おい、何言ってるんだか、さっぱりわからないぞ。いいから、あっち行け。もう、酒もそのくらいにしとけ。酒に呑まれると、ロクなことはないぞ」

「あっち行けとは、なんらあ！　俺ぁ、あんたの飼い犬じゃねえ。行けと言われて、おとなしく行くもんかぁ！　あんたも、そんな一人れ真面目くさってないれ、もっと飲め。人生、もっと楽しまなくちゃあ。いつらって、一人らけ、シラフみたいな面してよ。俺あ、一度れいいからあんたが酔っ払って正体なくすとこ、見たいぞ。ほら、飲め！　固いこと言わずによお」

ローイは、アルファードにしつこく酒を勧め始め、アルファードはしかたなさそうに、一杯だけ杯を受けて飲み干した。

（そういえば、アルファードって、全然酔ってないみたい。結構飲んでるみたいなのに、もしかしてすごく強いのかしら。それとも、ずっと、飲んでるフリしてたのかしら）

里菜はあらためて、赤くもなっていないアルファードの顔を見た。そういえば、里菜はいままで、アルファードが少しでもお酒を飲むところを見たことがない。

「なあ、アルファード、あんた、なんれ、いつもそんなにマトモれいるんらぁ？　たまにはハメをはずせよ！　な？　な？　俺ぁ、今

日こそ、あんたが酔い潰れるとこ見ないれは帰らないぞぉ」
「ムダだ。俺は、絶対、酒で自分を失ったりはしない。そんなふうに、好き好んで正体をなくすやつらの気がしれない。自分が何をしでかすか、お前は怖くないのか？」
「ああ？　俺ぁ裏表のない人間らから、酔っ払ったって、なんにもわりいことなんか、しねえもん」
「なにが、悪いことしない、だ。何もしなくても、酔っ払ったお前は、それだけで充分、迷惑だ」
「そうかあ？　そりゃあ、ごめんなあ」
と、言いながら、ローイはアルファードのそばを離れず、しつこく絡み続ける。
アルファードの迷惑顔を見ながら、里菜はクスっと笑って口を挟んだ。
「アルファードは、裏表のある人間なの？　それとも、酒癖、悪いの？　泣くとか怒るとか説教するとか、服脱ぐとか暴れるとか？」
いきなり追求されたアルファードは一瞬言葉に詰まってから、もごもごと答えた。
「いや、そう聞かれても、困るが……。俺は本当に、正気をなくすほど飲んだことがないから」
「お酒、強いの？　ずっと飲んでるのに、ちっとも酔っ払ってないのね」
「ああ、実は、そんなに飲んでないんだ」
「へえ、やっぱり、そうなんだ。宴会とか、嫌いなの？」
「そんなことも、ないが……」
そこへまた、すっかり目の据わったローイが、乗り出すように言った。
「な、な、リーナちゃんも、アルファードが酔っ払うとこ、見たいらろ？　俺あ、ゼヒ見たい！　飲め！　さあ、飲め！　俺の酒が、飲めないっていうのかあ！」
アルファードは頭を抱えた。

中央のテーブルでは、最後まで残った数人の酔っ払っいたちが猥談で盛り上がり始めている。男ばかりの中に、お転婆娘のヴィヴィと、さっきまでアルファードに抱きついていたユーサが加わって、ひときわ過激な発言を飛ばして大受けしており、その会話が、声が高いために丸聞こえだ。しかも、そのうちに、本人がそばに居るのもお構いなしにアルファードをネタにして何やらとんでもないことを言いたい放題、里菜の耳には絶対入って欲しくないような露骨な冗談が飛び交い始めた。

アルファードはますます頭を抱えて、ちらりと里菜に目をやり、たまりかねたように酔っ払い集団に声をかけた。

「お前ら、もう帰れ。今日はここまでだ」

だが、こんどは鶴の一声とはいかなかった。

「やだ！　宴会のお開きは、副団長の権限だ！　副団長が終りと言うまで、帰らねえ」

その、副団長は、アルファードの寝台の上にあぐらをかき、抱え込んだ壺からじかに酒を飲んでいて、もうすっかり正体がない。

「いいから、帰れ。ここは、俺の家だ」

さすがに語調を強めたアルファードを見て、酔っ払いはますます騒ぎだした。

「あ、たいへんだ、アルファードが怒るぞお！」

「怒るもんか。アルファードは人間出来てるもん」

「そうだよな、アルファードは、最近、絶対怒らないよな。俺、アルファードが怒るとこ最後に見たの、八年前だよ。忘れもしないよ。俺、あんとき殴られたもん」

「あ、それ、俺も覚えてる。そういえばたしかに、あれが最後だよな。あんとき、お前、なんでアルファードを怒らせたんだったっけ」

「それが、いまだにわかんないんだよな。なあ、アルファード、あんた、覚えてるか？　俺が十三かなんかのときだよ。俺、あんたと喧嘩して、殴られたの」

「いや、忘れた。だが、それは悪いことをした。すまなかった」

子供時代の話だというのに、アルファードはいきなり、大真面目に頭を下げた。

「いや、いいんだよ、別にいまさら謝って貰おうと思って言ったんじゃないんだ。まあほら、子供の喧嘩だし、あんときだって、あんた、後ですぐ俺に謝ってくれたしよ。ただ、俺の、どの言葉が、あんときあんたを怒らせたのか、覚えてたら聞こうと思ったのさ。だって、ほんと、いきなりだったもん。『俺が魔法を使えないからって、バカにしたな！』とか、急にわめきだしてよ。俺、ちっともそんなこと言った覚えないのに……」

「それは、ほんとうに悪いことをした。きっと俺の勘違いだったんだろう」

それを聞いていたほかの若者も、最近すっかり忘れていたアルファードの少年時代のことを思い出して、がやがや言い出した。

「そういえば、アルファード、昔は結構危ないやつだったよな。たしかに、なんでもないことで、魔法を使えないからバカにされたって言って急に怒り出したりしてよ。俺もそういえば、怒らせたことあったよ。それが今じゃ、村で一番温厚な男だもんな」

それは里菜が初めて聞く、アルファードの過去の一面だった。

「へえ、アルファードって、子供のころは怒りっぽかったんだ……」

里菜の言葉に、アルファードはきまり悪そうにぼそぼそと答えた。

「怒りっぽいというか、確かに、少々、カッとなりやすかったのかも知れないな……。もう、自分でも、そんなこと忘れかけていたんだが……」

「ふうん。ねえ、もしかして、それであんまりお酒飲まないの？自分がカッとするタチなのを知っているから？」

「ああ、自分でも気付かなかったが、あんがいそうなのかも知れない」と、里菜の追求の厳しさに多少閉口しながら答えたアルファードは、これ以上旗色が悪くならないうちに寝てしまうことに決めた。

どのみち、酔っ払いたちの猥談がこれからますますエスカレートし始めるのは目に見えているとあって、そのまえに里菜を隣室に追

い払っておこうと思っていたところだったのだ。
「リーナ。もう遅い。君は、そろそろ寝ろ。あいつらは、まだ当分飲むつもりらしい。勝手にさせておこう。俺も、寝る。おやすみ」
アルファードは、無駄と知りつつ、酔っ払いたちにも、今いちど声をかけた。
「おい、俺は、寝るぞ。お前らも、早く帰れ。ディード、お前はヴィヴィを責任持って家まで送るんだぞ。ローイ、そこをどけ。俺の寝台だ」
「ああ？　なんらあ？」
「そこから、どけと言っているんだ」
「いやらね。俺はここれ、飲むんら！」
業を煮やしたアルファードは、力まかせに掛け布団をひっぱってローイを床に払い落した。
ローイの、ロレツの回らない抗議を背中に聞いて、クスクス笑いながら、里菜は寝室に引きあげたのだった。

そうしてすっかり楽しい気分で眠りについたのに、どうして、あんな夢を見てしまったのだろう――。

ベッドの脇に置いてあった洗面器の水でのろのろと顔を洗い終えた里菜は、昨夜の陽気な笑い声をもう一度思い出しながらドアの前に立ち、取手に手をかけながら自分に言い聞かせた。
（そう、あれが、ほんとうにあったこと。あの、暗い川辺は、昼間の恐怖や緊張と宴会の興奮の名残りが見せた、ただの悪い夢……）
一瞬のためらいの後、里菜はぱっとドアを開け――そして、そこに広がる光景に、息を飲んで呆然と立ち尽くした。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十一場（1）

（ひ、ひどい……。何、これ……）

ドアを開けて、里菜は絶句した。

そこに里菜が見たものは、宴の後の惨状だった。

あちこちに転がる、倒れた椅子や酒袋。テーブルの上には、ひっくりかえった杯、汚れた皿、食べ散らかされたままの料理のかす。

そして、究めつけは、死んだ魚のように床にごろごろ転がって眠りこけている、酔い潰れた若者たち。

（う……。臭い）

里菜は手で口元を覆った。

お酒と、料理の油と、二日酔いの人間の匂い。それでも、タバコの匂いが混じっていないだけ、まだマシだろう。そういえば、この国にはタバコを吸う習慣はないらしい。

ゆうべ、里菜は、疲れていたので、どんちゃん騒ぎを聞きながら、あっという間に眠ってしまったのだが、この様子では、彼らはそのあとも、随分遅くまで呑み続けていたのだろう。里菜が寝た時は、部屋だってこれほど悲惨な状態にはなっていなかった。

（あーあ……。これ、あたしとアルファードが、片付けるのよね……？）

思わず、溜息のひとつも、出てしまう。

だが、こんな惨状でも、昨日の続きの光景がここにあるということが、里菜はうれしかった。

（よかった。これはやっぱり現実よね。だって、夢がこんなに臭いわけないもの）

アルファードは、すでに起きていて、こちらに背を向けて流しで顔を洗っているところだった。

そういえば、里菜は、アルファードと一緒に暮していても、彼の寝顔どころか、寝間着姿さえ見たことがない。彼はいつでも里菜が

寝室に引き揚げてからでなければ寝ないし、里菜が起きた時には、必ず、もうすっかり身支度をすませているのだ。

今朝のように、まだ顔を洗っているというのさえ、初めてのことかもしれない。

もしも里菜ががんばって早起きしたとしても、彼はきっと、里菜が身支度をする微かな物音で、すぐに目を覚まし、里菜より早く身支度を済ませてしまうのだろう。

「ああ、リーナ。おはよう」

アルファードは顔を拭きながら、タオルの下から里菜に声をかけた。

「おはよう、アルファード。みんな、帰らないで、ここで寝ちゃったんだ？」

「ああ、そのようだ。困った奴らだ。いいかげん、起こしてやらなければならないだろうな。悪いが、そっちの、ローイを起こしてやってくれ。俺はこのへんの連中を起こす」

アルファードが示したほうを見ると、なぜか、アルファードの狭い寝台にローイが寝ている。

「やっだあ！　アルファードってば、ローイと一緒に寝たのォ？」

里菜の頓狂な声に、アルファードは、額に手を当てて溜息をついた。

「リーナ……。そういう妙なことを言わないでくれないか。力が抜ける。その狭い棚で、どうやって二人寝るんだ？　……夜中に、ローイに追い出されてしまったんだ。床で寝たんで、身体が痛い」

アルファードは、コキコキと首を曲げながら、ぼやいた。

ゆうべ、ローイを寝台の上から力まかせに払い落として、一人で先に寝てしまったアルファードは、やっと寝ついたところを、今度はローイに叩き起こされてしまったのだ。

「おい、アルファード、ろけ！　俺は、寝るろお！　寝台、貸せ」

「……そのへんで、勝手に寝ろ。ここは俺の寝台だ」

「いやら！　俺あ、そのへんれ寝ちまったそいつらと違って、繊細

なんら。寝台れなけりゃあ、寝られないんら。あんた、そのへんれ、寝ろ！」

そう言うなり、ローイは、酔っ払ってタガの外れたその意外なバカ力でアルファードを寝台から引きずり降ろし、自分がさっさと布団に潜り込んだと思ったら、次の瞬間には、もう大いびきをかいていたのだった。アルファードは、しかたなく、そのまま、寝台の足元のミュシカの敷き物の上で、ミュシカと並んで寝たのである。

アルファードが、そのへんの若者たちを起こしにかかり、てこずっているあいだに、里菜はローイを起こしに寝台に近寄った。

ローイは、大口を開け、掛け布団をはね除けて、大の字になって眠りこけている。長すぎる手足が寝台からハミ出しているのがおかしい。無防備な寝顔がちょっとかわいくて、なんとなくほのぼのしてしまう。

「ローイ、起きて。朝よ！」

声を掛けても、うん、とも、すん、とも言わないので、揺すぶってみる。

「う、うーん……」と、目を開けたローイは、ぼんやりと里菜を見て、それから、いきなりガバッと上体を起こして、目をしばたいた。

「うえ？　リーナちゃん？　なんであんたが、ここにいるの？　夜這いに来たのかあ？」

「もう、寝惚けちゃって。ここ、どこか分かってる？　アルファードの家でしょ？」

「うわっ！　大変だ！　もう、朝？　やべえ！　俺、鬼の兄嫁に、半殺しにされちまう！……でも、ラッキーだぜえ。リーナちゃんに、やっさしく起こして貰えるなんてよ。うーん、毎朝、あんたに、こうやって起こして貰いたいもんだなあ。ついでに、おはようのキスなんかもしてくれると、最高なんだけどなあ！」

「バカ！　調子に乗って！」

「お、いいなあ。俺、毎日あんたに、そんなふうに言われたいなあ」

「え？　ローイ、『バカ』って言われるの、好きなの？　へんなシ

ユミ！」

「……こないだから思ってたんだが、あんた、ミョーなツッコミかたするよな。あのね、俺は別に、バカにされるのが好きなんじゃなくて、さっきみたいに、あんたに、愛を込めて優しーく、バカとか言われたいわけ！」

「あたし、別に、愛なんて込めてないもん！」

「あ、そ。そりゃあ、まことに残念だ」

「ローイ、どうでもいいけど、いつまでもバカなこと言ってないで、早く帰んなきゃ。ハンゴロシにされるんでしょ？」

「おお、そうだ、そうだ、こうしちゃいられない！」

ローイはヒョイと寝台から飛び下りて、ドアのほうに突進しながらしゃべり続けた。

「じゃあな、リーナちゃん。夜遅くまで騒いでごめんな。いや、実は俺、なんにも覚えてないんだけど、どうせ大騒ぎして、うるさくしただろ？　おい、アルファード、寝台借してくれて、ありがとよ。ありがとついでに、後片付け、頼むわ！」

そう言いざま、ドアを開けて、走り出ていったと思ったら、いきなりよろめいて、頭を抱えながら悪態をついた。

「……おお、頭、痛てえ！　クラクラする！　吐き気がする！　ちっきしょうめ！」

それからまた、立ち直って、駆けていく。

アルファードがぞんざいに揺り起こしたほかの若者たちも、やはり同じように、ヤバイだの頭が痛いだのと口々にわめきながら、酒臭い空気と共にドタバタとドアからよろめき出ていった。

しょうのない二日酔いの一団を笑いながら見送ってから、里菜とアルファードは、顔を見合わせて、同時に部屋の中を振り返り、溜息をついた。

「アルファード……。これ、全部あたしたちが、片付けるのよね？」

「いや、たぶん、あとで、ヴィーレとか、ほかに多少なりとも気のつくものがいれば、誰か手伝いに来てくれると思うが……。椅子と

か、皿とか、ここのじゃないものもあるからな。だが、それまで、何もせずにほうっておくわけにもいかないだろう。とりあえず、片付けにかかろう。今日は、放牧は休むことになっているから、一日かけてゆっくり片付ければいい」

こうして、ドラゴン退治の英雄と、その姫君は、今度は山のような汚れ物を退治しにかかったのだった。

けれども里菜は、そんな仕事をすることさえ生きている証のようでうれしかった。

料理の油やこぼれた酒でベトベトする床を、アルファードが川から汲んできた貴重な水を使って雑巾がけしながら、里菜は顔を上げて、砂で皿の汚れを落しているアルファードを見やった。

この、お皿の下洗いに砂を使うというのも、アルファードの工夫のひとつで、こうすると、少しの水で皿洗いが済ませられるのである。もちろん、普通の人は、こんな原始的なことはしない。魔法が使えれば、水などいくらでもふんだんに出せるのだから。

どんなことにも手を抜かないアルファードが真剣な面持ちで皿洗いに取り組んでいる姿を確認し、里菜は安心して、また雑巾がけに戻った。

お皿の重みも、バケツの中の冷たい水の感触も、これが夢ではないことを里菜に教えてくれる、いとおしいものに思われて、ありふれた仕事にいそしみながら、不思議と充足した想いが里菜を満たしていた。

そう、これが、現実なのだ。雑巾を持つ自分の手。水の感触。日常の仕事。アルファードとのささやかな暮し。……生きていること。

「アルファード、生きているって、すてきね！」

妙にうれしそうに雑巾がけをしながら、突然そんなことを言い出した里菜に、アルファードはあっけにとられた。

「え？　あ、ああ、そうだな……」

「ね。こんなふうに、雑巾がけなんかをしたりも、死んだらできないのよ。あたし、生きててよかった！」

「……君は、そんなに雑巾がけが好きなのか？」
「やだァ。別に、雑巾がけが好きなんじゃないわ。アルファードのそばで雑巾がけができるのが、うれしいの。好きなのは、雑巾がけじゃなくて、アルファードなの！」
悪夢の反動でなんとなく浮かれた気分になって、つい勢いでそんなことを言ってしまった里菜も、言ってしまってから赤くなったが、アルファードのほうもたじろいだ。動きの止まった彼の手から、皿が一枚、床に落ち、ガチャンと割れた。
「そ、そうか、それは、その……、ありがとう……」
アルファードは、しどろもどろに間の抜けたことをつぶやきながら屈み込んで、皿のかけらを拾い始めた。それを手伝おうとして近寄りながら、里菜は言い訳した。
「あたし、夢を見たの。怖い夢。夢の中で、あたし、死んでるみたいなの。それで、起きてからも、なんだか、しばらくは、あの夢のほうが現実で、これが夢じゃないかっていうような気がしてて……。だから、今、生きててよかったなって思ったの。こうしてアルファードのそばにいられるのが、とってもうれしいって思ったの」
けれども里菜は、あの夢のくわしい内容を、アルファードに話す気にはなれなかった。話せない、話してはいけないと、思った。
夢の中で『魔王』がアルファードについて語ったことや、自分があの『魔王』を、たしかに自分の半身だと感じたこと、そして何よりも、夢の中で自分が感じた激しい陶酔、それらが、あの夢を、何かアルファードには話せない、後ろ暗いもののように思わせた。
だが、一方、口に出さずに居ることで、あの夢が自分の中でどんどんふくらんで自分を満たしてしまうような気がして、怖かった。心細かった。
だから、悪い夢を見た、ということだけを、アルファードに聞いてもらい、それはただの夢だ、何も恐れることはないと、力強く言って欲しかったのだ。
だが、アルファードは、皿の破片を注意深く拾い集めながら、妙

にゆっくりと言った。
「そうか、夢か……。俺も、時々、思うことがあるんだ……。今、俺がここにいるのは、ただの夢で、本当の俺はどこか別のところで夢を見ているのではないか、俺は本当は、この世界にいるべき人間ではないのではないか、と。そして、俺は、今ここにいる俺が誰かの見ている夢の中の人間に過ぎないかもしれないということではなく、もしそうだとしたら、どこかで夢を見ている本当の俺も、今の俺と同じように、無意味な人生を送っているのだろうということが、怖い。夢を見ている俺も、夢の中の俺も、どちらも、それぞれの世界に本当に属することなく、中途半端に生きているのではないかということが」
里菜の心に、魔王の言葉が蘇った。
――『あれは、逃亡者だ……逃亡者は、どこにも本当には属することができずに中途半端な客人として孤独で空しい生涯を送る定めなのだ……』――
ふいに自分の想いのなかに沈みこんでしまったアルファードが、なんだか遠くなって、ふっと薄れて消えてしまうような気して、里菜はぞっとして叫んだ。
「アルファード、そんなこと、言わないで！　これは夢なんかじゃないでしょ？　あたしたち、ここにいるでしょ？　ほら、ちゃんと触れるでしょ？」
里菜は、衝動にかられるままに、アルファードに手を差し伸べた。雑巾をかけるのに袖をまくっていた里菜の、細い左手首に止まったアルファードの目がふいに鋭く光った。
「リーナ！　それは、どうした……？」
言うなり、アルファードは、里菜の手首を荒々しく掴んで、自分の目の前に引寄せようとした。
里菜は、思わず小さな悲鳴を上げ、おろおろと訊ねた。
「なに？　『それ』って？」
アルファードは里菜の悲鳴にも困惑にも気づかぬふうで、食いい

るように手首を見つめたまま鋭く囁く。
「手首だ。これは、この、傷跡は……？」
「え……？　手首？　……アルファード、痛い！」
つい里菜の手を捻りあげるような形になっていたアルファードは、慌てて手を放した。
「ああ、すまない……。だが、君は、そんなところに、傷跡が、あったか？」
言われて、アルファードが放した自分の左手首を見た里菜は、息を呑んだ。
か細い手首の内側を、細長い傷跡が斜めに横切っていた。そこは、ちょうど、夢の中で魔王に掴まれたところだった。
自分の立っている地面が、ふいに揺らいで、崩れ去っていくような気がした。
（夢じゃない。あれは、夢なんかじゃない……！）

第一章＜エレオドラの虹＞　第十一場（2）

「リーナ、どうした？　大丈夫か！」
アルファードの声が遠く聞こえた。
崩れ落ちそうになった里菜の小さな身体を、アルファードがあわてて抱きとめた。その暖かく力強い腕の感触が、里菜の正気を繋ぎ止め、里菜は、アルファードの腕につかまって体勢を立て直した。
「うん、大丈夫……。ごめんね、ちょっと、立ちくらみ、みたい……。ほら、雑巾がけしてて、急に立ち上がったから……。でも、もう、平気」
言いながら、里菜は何でこんなことを言うのだろうと思っていたが、口がかってに動いて、言い訳をしていた。
（やっぱり、話せない。あのことを、アルファードには言えない）
アルファードは手を放して、心配そうに里菜を覗き込んだ。
「なら、いいが……。乱暴に手をひっぱって、すまなかった」
「ううん、別に、いいけど……。アルファード、どうしてあんなに血相変えたの？　これが、どうかしたの？」
里菜は、わざと平然と腕を上げて手首を反してみせた。
どうしてそんなふうにするのか、自分でも分からなかった。
「あ、ああ……。ちょっと気になることがあったから。その傷は、前からあったのか？」
「そうだと思うわ。気にしてなかったけど。きっと、ずっと前に何かで怪我をして、忘れていたのよ。気になることって、何？」
初めてアルファードに嘘を言っている自分の声を、見知らぬ人の声にように、里菜は聞いていた。
「……そうだな、確かに、これは、古い傷だ。昨日今日についた傷じゃない。俺が、気がつかなかっただけか。それに、＜魔王の刻印＞であれば、このような傷跡ではなく、黒いアザになるはずだ……」
魔王、という言葉を聞いて、里菜はまたギョッとしたが、そしら

ぬふりでキョトンとして見せた。
「アルファード、＜魔王の刻印＞って、何？」
アルファードは、暗い顔をして、しばらく考え込んでいたが、何か、決心をしたようすで、正面から里菜を見つめて言った。
「そうだな、君にも、話しておくべきだろう。ちょっと、長い話になる。そのへんの椅子に掛けてくれ。……リーナ、俺は、間違っていた。俺は、この世界に存在する邪悪や危険について、君に一切話してこなかった。だが、今度のドラゴンのことで、それが誤っていたと気がついた。君が、ただ守られることしか考えていないなら、君は、何も知らなくていい。知っていたって、どうしようもないんだから。でも、君は違う。君は、力及ばずとはいえ、俺と一緒に戦ってくれようという気概を持っていた。それなら君は、この世の悪や危険について、知っておく権利があるし、知っておかなければならないだろう。リーナ、俺は、命に替えても君を守るつもりだった。……いや、今でも、そのつもりでは、あるが……」
口を開こうとする里菜を手で制して、アルファードは続けた。
「でも、だからと言って、君が何を知り、何を知らずにいるべきかを、俺が勝手に決めてしまう権利はなかったんだ……」
アルファードは、里菜が、真剣そのものの顔で少し不安そうに聞いているのに気付いて付け加えた。
「ああ、リーナ、そんなに不安そうな顔をすることはない。別に、この世界は、本当はものすごく危険で邪悪に満ちたところだなどというわけではないんだ。君のいた『あちら』の世界も、きっとそうだったように、この世界も、いいこともあれば悪い面もある、普通の世界だというだけのことだ。さしあたって、君に大きな危険が迫っているとか、そういうことはない……はずだ。ただ、その傷がちょっと気になったのは、それがこの世界に来てからついたものなら、俺が思っていたよりもずっと君の近くに危険があったということかもしれないと思ったからなんだ」
「さっき言った、魔王、とか、なんとか……？」

「ああ。たぶん、そんなものは、本当は俺の生活にも君の生活にも、まったく関わることはないものなんだが。俺たちに関係のある危険と言えば、ドラゴンや狼、それに、山賊くらいのもののはずなんだが」

「え！　山賊なんて、いるの？　ここにも、来るの？」

「ああ、この近くのヴェズワルの森には、最近山賊がはびこっている。もともとは、奴らは、タナティエル教団という宗教団体だったはずなんだが、いつのまにやら、すっかり山賊になり下がってしまった連中だ。このあたり一帯の村で盗みを働いたり、エレオドラ街道を通る旅人を襲ったりして、みんな困っている。この村でも、去年の冬、食料倉庫が襲われたが、何とか追い返した。俺たち自警団は、ドラゴン退治ばかりをしているわけじゃなく、山賊から村を守ったり、盗人を捕まえたりもしているんだ」

「ええーっ！　怖い！　知らなかった。どうして、教えてくれなかったの？」

「だから、言ったろう、俺が間違っていたって。山賊に出くわすことなど、そうしょっちゅうはないんだから、それまでいつもビクビクしているより、そのとき驚くほうがマシだと思ったんだ。君を怖がらせたくなかったのさ」

「あたしは、万一山賊と出くわした時、せめて心の準備が出来ていたかったわ」

「だから、すまなかった。俺が、悪かった。でも、君は、山賊がいることを事前に知っていたからと言って、山賊に会った時に、知らなかった時よりマシな対応が、自分に出来たと思うか？」

「……思わない」

「だろう？」

「じゃあ、教えておいてよ。山賊が出た時、どうすればいいか」

「俺の指示に、迅速に従うこと。そうすれば、俺が、絶対君を守る。君がいれば、やつらの魔法は無効にしてくれるから、あとは、肉体的な力の戦いになる。それなら、やつらが何人いても、俺はやつら

を退けられる」
「……アルファードって、謙虚に見えるけど、実は結構、自信家なのよね」
「何も、根拠もなくうぬぼれているわけじゃない。俺は自分の力をよく知っているし、やつらの力もある程度知っている。なにしろやつらは、俺たち自警団の宿敵だからな。やつらはそんなに強くないんだ。やつらはもともとただの宗教団体で、本職の山賊じゃない。なかには、もともと悪党だったものや兵士だったものも混じっているが、たいがいは、ただの善良な市民だったものだ。一人一人の力もたいしたことはないし、集団としての統制も取れていない。ただ、目先の欲望の赴くままに、いきあたりばったりの略奪やこそどろをしているだけだ。だいたい、ただでさえ、魔法が使える者は、魔法に頼って肉体的な鍛錬は怠りがちだ。そのうえ、彼らはみな絶望に取りつかれているから、なおさら、技を磨く努力などするわけもないし、大半が麻薬中毒で、身も心も病み衰えている。そして、やつらは、死は恐れないが目先の苦痛は恐れる怯懦な連中だ。やつらが何人いようと、烏合の集にすぎない」
「でも……、じゃあ、もし、あなたがいない時に山賊にあったら？」
「そういう時に、君に出来ることは……。そうだな、一目散に逃げ出すか、それもどうせ無駄だから、せめて、抵抗せずにすべての持ち物を差し出すことくらいか。そうすれば、運がよければ命だけは助かるかも知れない。運が悪ければ、それでも殺されるかもしれないし、女の子だから、もっと別のひどい目にあうかもしれないが」
「アルファード。あたしを脅してない？」
「ああ、別に脅すつもりじゃないんだが。本当のことを言っているだけだ。君は肉体的にか弱いだけでなく、その上、攻撃の魔法も、何ひとつ使えない。相手の、魔法による攻撃を無効にする力はあるが、それに気が付けば、相手は当然、身体的な力で攻撃してくるだろう。そうなったら、君など仔羊同然だ。いくらやつらが俺より弱いからといって、あなどってはいけない。君よりはずっと強いんだ

から。だから君は、一人でいるときに山賊に出会ったらおしまいなんだ。夜道を歩くな、無断で俺から離れるな。それが山賊について君に事前に忠告できるすべてだな。ドラゴンについても、君にきちんと忠告しておくべきだった。ドラゴンが出たとき、君が出来ることは、隠れることだけだ！　俺が死のうが羊がさらわれようが、絶対、出て来るな。それを君に、事前にきちんと言い聞かせておかなかったのは俺の失敗だった！」

「なんだ、アルファードの言ってることって、結局黙って守られてろってことじゃない」

「違う。絶対に、違う！　心構えが違う。とにかく、山賊やドラゴンは、絶対、君の手にはおえない。そういうとき、君が俺とともに出来る最良の戦いは、俺の邪魔をしないということだ。隠れているにも、勇気がいるんだ！」

思わず語調を強めたアルファードに、里菜は口をとがらせたが、悔しいことに、たぶんアルファードの言うとおりなのだ。里菜はしぶしぶ頷いて、話題を変えた。

そんなことで言い争うより、聞きたいことがあったのだ。

「うん、わかった……。もう、あんな無茶は絶対しないから。で、ね、アルファード。魔王、って、なんのこと？」

「ああ……。俺は、山賊やドラゴンからなら君を守れると思うが、魔物だけは、俺にはどうしようもないかも知れない。だからさっき、あんなに血相を変えてしまったんだが。少なくとも、この村にいるかぎり、当分は魔物や、ましてや魔王に出くわすことは、まずないはずだ……。とにかく今まで、この村に魔物が出没したことは、まだ一度もない。あまり心配せずに聞いてくれ」

「うん……」

「魔王というのは、今、この世界を脅かしていると言われている存在だ。それ以上のことは、俺にも、ほとんどわからない。いろいろと噂はあるんだが、どれも確かなことではない。何しろ、誰も魔王を見たものは、いないんだから。伝説によれば、魔王は北の荒野の

古い城の塔に住んでいると言うが、そこへは、この世の人間は、誰も行くことができないんだ」
「どうして？」
「結界が張ってある」
「結界？」
「ああ。人間には入れないようにしてあるんだ」
「どうやって？」
「わからない。そうした事がらは神々の領分だ。普通の人間の理解の及ぶことではない。たぶん一種の魔法が働いているんだろう。その結界の近くまで行くと、その中へ入ろうとも思えなくなってしまう、そういう仕組みになっているらしい」
「ふうん……。でも、そんなところに隠れていて、いるのかいないのかも分からないようなものに、どうして世界が脅かされるの？」
「魔王そのものは、一度も人前に姿を現わさないが、魔王の手下だと言われている魔物たちが、最近特に活発に動き出して、大きな被害が出ているんだ」
「魔物って？　ラドジールみたいな？」
「いや、あれはただの物語だが、この魔物は本当にいて、目で見たり手で触れたり――というか、触れられたり――できるんだ。魔物は、俺は見たことはないが、灰色のフードつきのマントを着た、やや小柄な人間の形をしており、見えるのは手だけなんだが、その手は白骨なんだそうだ。光に当たると消えてしまうので、夜にうろつき、人を襲う。といっても、とって食うとか、殺すとかいうわけじゃなく、ただ、触れるだけなんだ――」
「触わる？」
「そうだ。人間に忍び寄って、そっとその腕や手首、時には首などを、ただ掴んで、そのまま逃げて行く。ただそれだけのことなんだが、魔物に触れられたところは黒いあざになる。それが＜魔王の刻印＞だ。それを付けられた人間は、なぜか必ず、絶望に取りつかれて、その多くは、やがては死に致る。すぐに自死してしまうものも

多いし、そうでなくても、絶望のあまり、無茶な生き方や無謀な行為をして犬死にするものも多い。そういうことが何もなくて普通の生活をしていても、次第に心も身体も弱って、廃人となって死んでいくものもいるという。俺がさっき、君の傷を見て驚いたのは、そのためだ」

「じゃあ、触られないように、長袖着て手袋をしていれば、魔物は怖くないの？」

「まさか。そんな対策で済むなら、みな、とっくにやっているだろう。実際、冬の北部では誰もが長袖を着ているはずだが、北部は特に魔物の被害がひどい。魔物は、北からこの国に侵入してきているらしいんだ。といっても、白昼堂々と軍隊を仕立てて進攻してくるわけではないから、そのへんも確かではないのだが、とにかく今、北部はひどいことになっているそうだ。村がまるまる魔物にやられたり、さらに、荒らした後の村に火が放たれることもあり、ただでさえ不作なのに加えて、畑も穀物倉も焼かれて、魔物と飢えの両方に怯える住民は続々とカザベル街道沿いの都市や、時には、はるばるイルベッザの都へ逃げのび、畑は耕す人影もなく荒れ果てているということだ」

「侵入って……。戦争なの？」

「戦争とは、違うだろう。何しろ、相手は魔物だ。別の国の人間が攻めて来たというのとは違う。だが、北部では、人々の生活が脅かされているという点では戦乱に巻き込まれたも同然だ。そして北部から大勢の難民が急に流れこんできたので、都でも食料が不足したり、治安が悪化したり、いろいろと不安が広がってきているそうだ。それに、最近では、都にも魔物が出没するそうだ……。魔物はずっと昔からこの世界にいたのだが、滅多に現われるものじゃなかった。現われるとしても、おもに北部の辺境の人里離れた街道の闇夜などに現われるだけだったから、普通の生活をしているものは、魔物など恐れる必要はなかった。ここ数年だ、特に魔物の跳梁が激しくなったのは。一昨年、俺が都へ行った時には、都はまだまだ平和だっ

たように見えた」

「あたし、ちっとも気が付かなかった。この国が、そんな大変な時だったなんて。ただ、とても平和なところだと思ってた。食べ物だっていっぱい食べさせてもらってたし、甘いお菓子も食べられたし、楽しく宴会もやってたし……。ほんとはみんな大変だったのに、あたしだけ何にも知らずに、のんきにしていたの？」

「いや、そういうわけじゃない。さっきも言ったとおり、この村は、せいぜい山賊とドラゴンが出るくらいで今のところ平和だし、食べ物にも、さほど不自由はしていない。もともとこの辺は、国中で一番豊かな地方なんだ。ここ数年、どういうわけか国中が不作で困っているが、このあたりだけはそれほどでもないし。みんな、ここは聖地だから女神の御加護があるんだと言っている。もちろん、北部への援助の食料は供出しているし、商人も買い付けに来るが、何しろ輸送が不便だから、これ以上、俺たちにできることはあまりない。特に今は、さっき言った山賊のせいで、エレオドラ街道はほとんど通るものもない。だから、逆に、それが幸いして、このへんだけが平和でいられるのかもしれない」

第一章＜エレオドラの虹＞　第十一場（3）

「魔物は、どうして人を掴んだり、村を襲ったりするの？　なんで人を殺さないで、ただ刻印っていうのをつけていくの？　そんなことして、何の得になるの？」

「わからない。やつらは、魔物だ。人間じゃない。やつらには、人間のような知性も感情もないらしい。魔物と戦ったものの話では、やつらが物を考えているとは思えなかったそうだ。ただ、決められたことをその通りにするだけ、という感じで、口もきかないんだそうだ。少なくとも、魔物が話すのを聞いたものは、誰もいないという。

ただ、伝説では、＜魔王の刻印＞について、こう言われている。魔王は、手下の魔物に命じて人間にそれをつけさせ、その人間の絶望を食べて永遠の命を繋ぐのだと。だから、魔物は人を殺さずに刻印だけつけていくという訳だ。魔王が、この国を一気に滅ぼしたり、人間を皆殺しにしたりしようとせず、何百年も、そうして少しづつ人間に刻印を与え続けてきたことを考えると、もしかするとそれは本当なのかもしれない。今だって、魔物と、魔王の灰色の幻の軍勢は、都を攻め落とそうとはしない。悲観的な考えを持つ学者たちは、この世界について、こう言っている。魔王こそ、この世界という牧場の支配者たる羊飼いで、絶望という乳を絞るために人間という羊を飼っているんだと。だから、人間の中に、贄として＜魔王の刻印＞を受けるものがあるのは、逃れられない宿命なのだそうだ」

「あたし、信じないわ、そんなこと！　この世が魔王の牧場なら、なんでこの村は、こんなに美しいの？　人間が、絶望を搾り取られるために生きているだけの家畜でしかないなら、なんで人間は、よろこんだり悲しんだり、愛し合ったりするの？」

「リーナ……。俺だってそんなことは信じないさ。ただ、中には悲観的な考え方を持つものもいるという話だ」

「そうか。話の腰を折って、ごめんね。……ね、魔物が光に弱いって、月の光は平気なの？」

「ああ、魔物は、月の光も、太陽ほどではないが、あまり好まないらしい。三日月くらいなら、月があってもたまに出てくることがあるが、満月の夜なんかは、まず出てこないそうだ。でも、月が明るい時でも、物陰に入ったり、月が雲に隠れたりすると、それまでどこにいたのか、湧いて出るように現われることがあるから、今、北部では、夜、外へ出るものは、まず、いないそうだ。さっき言ったとおり、このへんにはまだ、魔物が現われたことはないんだが……。でも、約束してくれないか。いつ、このへんにも魔物が現われるかわからないのだから、昼間もそうだが、夜は特に、絶対、一人で外へ行かないと。夜、外へ出る必要なんかないはずだが、君はどうも、月が奇麗だとか星が見たいとか、そんな理由でふらっと外に出てしまいそうで不安だ。君は、あんまり無防備すぎる。君のいた世界は、よほど安全なところだったのか、それとも君が、よほど、お姫様のように大切にされ、あらゆる危険から注意深く守られていたのか、たぶんその両方なんだろう。俺には、君がそんなふうに幼子のように無防備でいられることの幸福が、とても貴重なものに思えて、それをそのままに守りたいと思い、それでつい、君に危険な物事について何も話さずにきたのだが……。でも、この世界では、夜の戸外は、危険に満ちている。魔物が出なくても、獣や、山賊や、いろいろな危険があるんだ。だから、決して、夜、勝手に外へ出たりしてはいけない」

「うん……」

里菜はうしろめたさを隠してうなずいた。

（あれが魔物だったのかしら。じゃあ、これは、＜魔王の刻印＞なの？　でも、あのとき月は、あんなに明るかったし、＜魔王＞はとても背が高かったわ……）

「ねえ、アルファード。魔物のマントは、必ず灰色なの？　黒ってことはない？　魔物は馬に乗るの？　魔王って、どんな姿をしてい

るの？」

　里菜の矢継早な質問に少しめんくらいながら、アルファードは、考え考え答えた。

「魔物のマントが灰色なのは、今までの例では、まちがいのないことだ。ただ、風説によると、魔王は黒いマントを着ているということだ。魔王の姿については、なにしろ、誰も見たものがいないから、いろいろな説があって、身の丈三メートルはある醜い大男で、角と牙があるとか、口が耳まで裂けていて尻尾があるとか、逆に、この世のものならぬ神々しい美青年であるとか、あるいは魔物に良く似た、白骨の手を持つ黒い影であるとか、いろいろ言われている。だが、黒衣をまとっているという点では、どの説でも一致している。だから、この国では、タナティエル教団のものが黒衣を着るほかは、昔から、誰も黒や灰色のマントを着たり、作ったりはしない。灰色のマントなんか着ていたら、魔物と間違われて殺されても、文句は言えない。魔物を退治したものは、その灰色のマントを＜賢人の塔＞に持っていけば、報奨金が貰えるんだ。魔物は、死ぬと紙のように燃えて消えてしまうんだが、マントは必ず、燃えずに残るんだそうだ。魔物が馬に乗るかは、知らないな。乗っていたという話も、乗れないという話も、聞いたことがない。背丈については、全部の魔物が、ぴったり同じ背丈ということも、ないんじゃないか？　多少の高い低いは、あっても不思議はないだろう」

「ふうん……。アルファード、ちょっと、話は、変わるんだけど……。エレオドリーナって名前、聞いたことある？」

　アルファードは、意表をつかれた面持ちで、まじまじと里菜を見た。

「ああ、無論、あるが……。この辺では、ごくありふれた女の名前だ。……それじゃあ、リーナ、君の正式名は、エレオドリーナじゃなかったのか。俺はてっきり、そうだと思い込んでいたが、そういえば、君は別の世界から来たんだから、この国の女神にちなんだ名前を持っているはずがなかったな」

「あたしのもともとの名前は、ただの『リナ』よ。『あちら』の世界の名前。ただ、ここの人は『リーナ』のほうが言いやすいみたいだから、そう呼んでもらってるだけ。……ねえ、エレオドリーナって、女神の名なの？」

「ああ。ふだんは、ただ、女神、と呼び習わしているが、この、エレオドラ山の女神は、エレオドリーナという名前なんだ。だから、この辺では、女神にちなんでエレオドリーナと名付けられる女の子は、とても多い。どこの村にも、二、三人は、いるだろう。この村でも、ほら、昨日宴会に来ていたドリーという娘がいたろう。彼女の正式名は、エレオドリーナだ。エレオドリーナという名だと、リーナと呼ばれるのが一般的なんだが、数年前に亡くなった彼女の祖母が、やはりエレオドリーナで、リーナと呼ばれていたので、彼女はドリーと呼ばれるようになったんだ。でも、リーナ、なんで急にそんなことを聞くんだ？　誰かに、そう呼ばれたのか？」

「うん、まあ……」

「そうか、それじゃあ、きっと、俺と同じように、早合点して、そう思い込んでいたんだろう」

「うん、そうかも……」

里菜はあいまいに頷くと、また、急に話題を変えた。

「ねえ、アルファード。さっき、アルファードは、今の自分がただの夢かもしれないと思うことがあるって言ったでしょ。あたしも、前は、いつもそう思ってたの。もとの世界にいたころ。そして、あたしも、自分の人生を夢の中のできごとかもしれないと思っても、それは、全然、怖くなかったの。逆に、自分が今、ここに生きているということが夢じゃないとわかるのが、怖かった。いつも、心のどこかで、これは全部ただの夢なんだと思っていて、そう思うことで、なんとか生きていられたような気がするの。

だって、夢の中でだったら、私が何をして、それで何がどうなっても、どうせ夢なんだから平気だけど、現実だったら、全部のことが本当で、とりかえしがつかないんでしょ？　それって、なんだか

怖い。だから、時々、そういえばこれは本当は夢じゃなくって全部現実なんだって、我に返るみたいにふっと思い出した時には、家からほんの一歩でも外に出るのも、毎日会っている学校の友達に会って口をきくのも怖くなった。自分の外の世界のすべてと関わるのが辛くて、もし、できるなら、サナギみたいに、大人になるまで殻の中に隠れていたいって――、そうやって、自分がもっと大人になって、もう取り返しのつかない間違いなんか犯さずに、後悔なんかせずに生きられるように――、つまらないことで傷つかないくらい強く、うっかり人を傷つけてしまうことがないくらい賢くなって上手く世の中を渡っていけるようになるまで、固い殻に包まれて、誰とも関わらずに現実をやり過ごしていたいと思うこともあった。

でも、さっき、あなたが、これが夢なんじゃないかと思うって言った時、あたし、怖かったの。前とは逆に、『これが夢でなかったらどうしよう』、じゃなくて、『夢だったらどうしよう』、と思ったの。それは私が、初めて、今、この時を、ここにあるこの世界を、現実であってほしいと思うことができたからだと思う……」

里菜の唐突な長い述懐を、アルファードは黙って聞いて、ただ、「そうか」と頷いた。

そこへ、明るい声とともに、バタンとドアが開いた。

「おはよう！　後片づけ、手伝いに来たわ！」

ドアの向こうに現われたのは、春の日差しのようなヴィーレの笑顔だった。

開いたドアから明るい光と朝の風が小さな部屋に流れ込み、里菜の中に再びよみがえりかけていた悪夢の余韻を吹き払ってくれるような気がして、里菜は思わず、ヴィーレに駆け寄って手を取った。

「おはよう、ヴィーレ！　あなたが来てくれて、とてもうれしいわ！」

「あら、やだ、リーナ、そんな、大袈裟な。そんなに後片づけが心配だったの？」と、ヴィーレは笑い出だした。

「手伝いに来るの、遅くなってごめんなさいね。今日は、お母さんの具合がよくなくてなかなか出て来れなかったの」
軽やかな足取りで入ってくるなりアルファードの手もとに目を止めたヴィーレは、
「あら、お皿、割っちゃったの？　いやだわ、また、砂で磨いたりして……。あたしが来るまで待っててくれれば、いくらでも水が使えるんだから、置いといてくれればよかったのに」と、眉をひそめた。
「いや、その……」と、アルファードが何か言い訳しようとした時には、ヴィーレはもう、お皿の山をアルファードから奪い取っていて、
「やっぱり思ったとおり、ローイのおバカさんは、あなたたちにみんな押し付けていっちゃったのね。もう、しょうがないったら……」と楽しげに呟きながら、里菜には手を出す隙さえないような勢いで、春の嵐のように猛然と部屋を片付け始めたのだった

第一章＜エレオドラの虹＞　第十二場（1）

「おーれーはァ村中でェいっちばァん……。おーい、リーナちゃん！　おっはよー！」

例によって妙な歌を歌いながらやってきたローイが、いきおいよくアルファードの家のドアを開け、能天気な大声を上げた。

背中に赤ん坊を背負い幼児の手を引いているローイの後ろには、さらに数人の子供たちが並んでいる。

「リーナお姉ちゃん、おっはよー！」

まわらぬ舌でローイのまねして元気に挨拶しながらわらわらと入ってくる子供たちを、里菜は笑顔で迎えた。

「おはよう、ローイ！　おはよう、みんな！」

「さあ、今日も元気に『タクジショ』とやらを始めようぜ！」と、言いながら入ってきたローイは、そこで露骨に顔をしかめて立ち止まった。

「なんだ、アルファード、まだいたのかよ！」

「居て悪いか。ここは、俺の家だ」

アルファードはぶっきらぼうに言ったが、目は笑っている。

「別に、悪かないけどよ。今日は、仕事、無いのかよ？」

「いや、今から出かけるところだ」

「今日はどこの仕事だ？」

「ドリーの家で頼まれ仕事だ。裏の木がでかくなりすぎて家が日陰になったから、枝を切りたいんだそうだ」

「ああ、そうか、あそこは男手がないからな。まあ、がんばって働いてきてくれや！」

「ああ。じゃあ、リーナ、行ってくる。ローイ、あんまり家の中で暴れるなよ」

こう言い置いて、アルファードが出ていくなり、ローイが叫んだ。

「さあ、ガキども、家の中じゃ暴れちゃいけないってから外で暴れ

るぞお！　ガオー！」

ローイはわけのわからない吠え声をあげ、いつのまにか両腕に一人ずつブラ下げていた子供たちを、腕を振って揺らしてやりながら庭に出ていった。残りの子供たちも、ローイの奇声を真似ながら、ころげるように飛び出していった。

里菜もそのあとに続きながら、こう考えて微笑んだ。

（ローイって、保父さんが天職かもしんない……）

あのドラゴン退治からしばらくの後、例年より早めに山のまきばでの羊の放牧が打ち切られ、それまで規則正しく続いてきたアルファードと里菜の日課は、がらっと変わった。それは、一日中まきばで一緒に過ごした、あの蜜月のような日々が永遠に続くかのように感じていた里菜にとっては、少しばかりさみしいことだった。何しろ、里菜にとって一番重大な変化は、アルファードと一緒にいる時間が減ったということなのだ。

羊飼いといっても自分の羊を持たないアルファードは、毎年、冬場には、自警団の訓練や村の共同作業に出るほかに、あちこちの家で力仕事を手伝ってわずかな報酬を得て生活している。

が、放牧が終わって雪が降る前のこの時期は、彼もけっこう忙しい。

雪が深くなるとそれぞれの持ち主の家畜小屋に閉じ込められる羊たちも、まだ雪がない今のうちは、取り入れの済んだ畑の一角に作られた共同の冬用家畜囲いに放されている。そこはだいたい常に誰かしらの目が届く場所なので、山の牧場（まきば）でのようにアルファードが日がな一日羊たちを見張っている必要はなく、アルファードは、朝、囲いの餌場に飼料を補給したあとは、ミュシカをそこに残して、干し草作りや積雪対策など、雪が来る前の今ならいくらでもある村の共同作業を手伝いに行く。この時期には、アルファードも労働力として結構あてにされていて、のんびり羊の番などさせておいてはもったいないと思われているのだ。

アルファードが村人たちと一緒に野良で働くのは、一年のうちで、

春先に山の雪解けを待ちながら村で出産期の羊の世話をする短い時期と、この冬支度の時期だけだ。

ところが、アルファードは、この仕事に、里菜を連れていってくれないのだ。魔法が使えない上に家事にも不慣れで力仕事の役にも立たない里菜が手伝えることなど、どうせほとんどないし、その上、里菜には、例の、魔法を消すという変な力がある。いくら里菜が自分のその力を抑えられるようになったとはいえ、いつなんどき何かの拍子で魔法を消してしまって人の作業の邪魔をしないとも限らないというのが、アルファードの言い分だった。

里菜の魔法の訓練は、いまも続いていた。

いったん魔法を受け入れた里菜は、魔法を見慣れるにつれて、一時は逆に、魔法を消す力を失ってしまったかに見えた。里菜は、それでも別にかまわなかったのだが、アルファードは、こう主張した。

「君には、その力のほかに、身を守るものがないんだ。その力を自在に操れるようになるまで練習を続けるべきだ」

それからふたりは、また試行錯誤を繰り返した。やがて里菜は、だいたい自分の思うとおりに、魔法を消したり消さなかったりといった使い分けができるようになっていった。魔法を消したくないときは、そのまま、その魔法のことを気にしないでいればいい。魔法を消す時には、その魔法に意識を集中し、それが不自然なものであることを思い出す。

その時に、「嘘！」だの「消えろ！」だのと、まず口に出して言ってみることで自分の精神をコントロールするという、ちょっとしたコツを里菜は身につけた。

だが、里菜にそういう訓練をさせた当のアルファードは、里菜の自己制御を、まだ、完全には信用していないのだ。アルファードは、慎重にも、今だに里菜を村の中に連れていくことを出来るかぎり避けていたし、里菜にも、『家のまわりで子供たちと遊ぶのは構わないが、勝手に村へは行くな』と厳しく言いつけていた。そんなわけで、里菜は日中、家に残されることになった。

最初の何日かは、里菜はそれなりに張り切った。アルファードのそばにいられないのは悲しいが、それなら、居候なんだから、せめて家事一切を引き受けるくらいのことはしてアルファードの役に立ってみせようと思ったのである。それまでも里菜は、アルファードに教わりながら一通りの家事を手伝っていたのだが、一日中家にいるなら、もっといろいろ出来そうな気がしたのだ。

だが、その熱意は、すぐに冷めてしまった。

なにしろ、手のこんだ料理を作ろうにも、この国の料理で里菜が知っているのは、いつもアルファードと一緒に作っていた、日によって材料が少し違うだけの単純なごった煮かスープだけだし、それなら何か『あちら』の料理を、と思っても、家庭科で習った通りに作ろうと思ったら材料も道具も調味料も揃わず、何も教科書通りじゃなくても自分で工夫すればいいじゃないかと気づきはしたが、よく考えてみれば、そもそも里菜は『あちら』でだって料理なんてろくにしたことがなくて、何をどうしていいのか、さっぱり見当がつかない。それに、肝心のアルファードも、どうやら、自分が十年来、日々作り続けていたような変わり映えしないごった煮以外のものが食べたいとは、別段、思っていないらしい。食べ物は、ありあわせの材料で手早く出来て腹が膨れて栄養になりさえすればいいのであって、味など、とりあえず不味くなければそれで十分という、美食とは一切無縁の人なのだ。

掃除にしたって、家がこんなに古くて、しかも家の中で出入り自由の大型犬を飼っているとなるとそんなにピカピカにしようがないし、第一、こう薄暗くては、少しくらいきれいにしても目立たないし、逆に、多少汚れていてもあまり気にならない。それに、アルファードは最初から散らかすほどの家財も持っていないし、几帳面な性格もあって家の中はそれなりに整っていたから、今さら里菜が一人で張り切って整頓するまでもない。

独り者の上に魔法が使えないアルファードは、ずっと、パンはパン屋で買い、チーズや薫製といった保存食は他の家から分けてもら

ったりしていたので、あとは、手のかかる家事といえば洗濯くらいだが、ここでは毎日着替える訳ではないから、それも週一回で充分だ。

こうなると、里菜には、たいしてやることもない。と言うより、もともと『あちら』の世界でも家事などあまりやったことがない上にこの国の暮らしに慣れない里菜に一人で出来ることなど、たかが知れている。アルファードのほうも、里菜に、手の込んだ料理を作ることとか家をピカピカに磨き立てることなど別に期待してもいないようだし、一人暮しの長い彼は自分の今までの生活に満足していて、里菜がそれをすっかり変えようとなどしたら、かえって嫌がられそうだ。

だいたい彼は、相手が里菜であれ誰であれ、また、それがドラゴン退治であれ炊事洗濯であれ、何かを人に任せるということが、実は苦手らしい。責任感が強過ぎるのと完全主義者なのとで、ものごとを人任せにできないのだろう。しかも、もともとそういう性格である上に、更に家事については、魔法が使えないことの劣等感から、すべて自分でこなしてみせたいという頑固な意地があるようだ。

こうした、彼のプライドに関わる事がらには、とにかく何も口を出さないのが得策だということを、里菜はもう学んでいた。

里菜は、しばらくアルファードと生活を共にするうちに、彼が、最初に思ったような――そして村の人たちの多くがずっとそう思ってきているらしいような――、すっかり人間のでき上がった、超然と悟り切った聖人君子などではないことに、いやおうなしに気づいていた。彼は彼で、実はそれなりに、けっこう難しい人なのだ。

一度、里菜は、ささいなことで、魔法を使えないことへの劣等感という、彼の『竜の逆鱗』に触れてしまったことがある。重い桶を担いで水汲みに往復し、汗水たらしているアルファードに向かって、何の気なしにこう言ってしまったのだ。

「魔法を使える奥さんをもらったら、こんな苦労は、いらなくなるね」

そのとたん、アルファードは、振り返りざまに里菜をキッと見すえて、吐き捨てるように言った。

「そして、一生、赤ん坊のように女に世話されろというのか」

その、普段温和で冷静な彼にはあるまじき刺のある口調に、里菜は、兎のようにビクッっとすくみあがった。

あれはまだ、あの牧場（まきば）でのドラゴン退治より前のことで、里菜はその時、アルファードの怒った顔を初めて見たのだ。怒った顔といっても、たいして表情が変わるわけではなく、普段よりほんのちょっと目つきが険しくなるだけなのだが、もともとが精悍な顔立ちなので、それだけで印象が一変して、はっきり言って、結構怖い。

怖いといっても、別に怒鳴るわけでも暴力を振るうわけでも物に当たるわけでもなく、また、いつまでも怒っていて口もきいてくれないというわけでもないのだが、いつも、普通なら怒られて当然の失言や失敗を何でも優しく許してくれる彼がほんの一瞬垣間見せた暗い激情は、里菜にとって、ちょっとした衝撃だった。

彼は、あまり表に出さないが、実は非常にプライドが高く、しかもそれは、どうやら、魔法が使えないことへの強い劣等感の裏返しであるらしい。そのため、彼のプライドは、非常に脆く、傷つきやすいのだ。

そんなアルファードにとって、自分と同様に魔法の使えない里菜は、この世でただ一人劣等感を刺激されずに一緒にいられる相手であり、里菜が彼のそばにおいてもらえるのも、もとはといえば、たぶん、そのためだ。

里菜はそのことを、ちゃんとわきまえていた。

きっとアルファードは、この世界のことをまだよく知らない上に魔法も使えない里菜のことを、何もできなくて何も知らなくて決して自分の優位を脅かさない都合の良い相手、おとなしく従順で扱いやすいペットのように思っているのだろう。

あまり嬉しい思われようでもないが、たとえどんな理由からでもアルファードが自分をそばに置いてくれるなら、里菜はそれで良か

った。そのポジションに収まっているかぎりアルファードはいくらでも優しく寛大で、頼もしいアルファードにすべてを任せきっておんぶにだっこで暮らすのはそれは居心地が良かったから、里菜はなおさら、そのポジションに馴染んでしまった。

里菜は、アルファードのヴィーレに対する微妙な劣等感と、それゆえの敬遠も見抜いていた。

アルファードは、自分でも気が付いてはいないかも知れないが、たぶん、ヴィーレの焼き菓子が実は苦手なのと同様、ある意味でヴィーレが苦手なのだろう。

ヴィーレは、母親のように彼の世話を焼くことで、彼のものやわらかさの下にあるプライドを傷つけてしまう。彼らの関係は、一見、ヴィーレがアルファードに一方的に献身を捧げているように見えるが、実はアルファードは、ヴィーレの、ままごとの母親めいたやさしさに逆らえないのだ。彼はヴィーレを大切に思ってはいるが、一方で、彼女の献身を、どこか息苦しくも感じているのではないだろうか。

だから里菜は、ヴィーレのように、アルファードが自分の仕事だと思っている領分にむやみに手出しはするまい、しかもヴィーレのようにそれをいとも易々とアルファードより格段にうまくやって見せたりは、なおさらするまいと――といっても、里菜にはどうせ、やろうと思っても本当にできないのだが――いつのまにか心のどこかで自戒していた。

そういうわけで、家事について、アルファードが、あくまで自分が責任者で里菜はせいぜい助手として指示通りの手伝いをしてくれればいいという程度に思っているらしい以上は、里菜は、あえて出しゃばる気はなかった。

里菜としても、まあ、本当に家事が好きでぜひやりたかったというわけではなし、不慣れな別世界で、もともとろくにやったこともない家事を、ただ女だからというだけで生まれつき出来るように思われ、当然のように一任されてもそれはそれで困っただろうから、

楽といえば楽、得といえば得だが、どうせ家にいるのに何の役にも立たないのも、さすがに気が引ける。いくらなんでも、これではあんまり役立たずすぎて、子供のお留守番と変わらないではないか。

考えてみれば、自分はもともと、あちらにいた時から役立たずだったのだと、里菜は、ここへ来て初めて気づいていた。

あちらにいる時は、里菜は、親掛かりの学生であり、ただ勉強だけをしていれば良かった。たまたま勉強は嫌いではなく、わりと適性もあったようで、それほど苦労しなくてもそこそこの成績をとれ、夜遊びだの喫煙だのは別にしたいとも思わなかったので、学校では、多少引っ込み思案ではあっても真面目な優等生として評価されてきたし、そのことで親の期待にもそれなりに応えていると思っていた。そのために、自分が本当は一人では何ひとつできない子供だということに、あまり気付かずに済んでいて、何となく、自分がもう一人前であるかのように錯覚していた。

でも、よく考えてみれば、自分は、これまでも、今も、自力で生きていく術を、何ひとつ持っていないのだ。

今はアルファードに頼り切って生活しているけれど、あちらでも、里菜は、ずっと、父母に、社会に守られ、養われている子供に過ぎなかった。そして、あちらにいたころは、そのことを意識することさえ、ろくになかったのである。

でも、いくらこれまで、常に誰かに守られることを当然の権利と信じて生きてきた里菜でも、その相手が実の親ではなく、赤の他人であるアルファードとなれば、いつまでも、養ってくれて当たり前と思っているほどずうずうしくはない。

一応、やはり少しは何か恩返しをすべきなのだろうと思う。

それなのに、仕事を手伝えないだけでなく家事ひとつ満足に出来ないのでは、他に何をしていいか分からない。

だが、里菜にも、すぐに新しい仕事がころがりこんだ。それが、ローイとの『託児所』だ。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十二場（2）

このへんの農村では、学校は、主に、農閑期である冬に集中して授業をする。新学期が始まり、幼い弟妹の世話をする年かさの子供がいなくなった今、あいかわらずろくに働かずヒマそうにブラブラしているローイのところに、学令前の子供たちがまとめて押しつけられた。その子供たちを連れてローイが毎日のように里菜のもとに訪れるうちに、自然と里菜も子守りを手伝うようになったのだ。

ローイと里菜がアルファードの家で子供たちを預かって、よく面倒を見てくれるということが知れ渡ると、そこに集まる子供はますます増え、子供たちは、バターだのチーズだの、アルファードが自分で作れないような食べ物を、子守りのお礼として親からことずかってくるようになった。それは里菜に、自分が村の一員として認められ、少しは人の役に立っているのだという気持を抱かせたし、居候としてアルファードの乏しい食べ物を食い潰すだけだった自分が少しでも食いぶちを稼いだということが嬉しかった。

一人っ子の里菜は子供の世話などしたことがなかったが、そこはローイが子守りの先輩としていろいろ教えてくれ、子供たちも里菜に懐き、里菜も心から子供たちをかわいく思うようになっていた。

「ねえ、あたしたち、託児所やってるみたいね」

あるとき里菜がそう言うと、ローイはけげんな顔をした。

「なんだ、そのタクジショっていうのは？」

どういう仕組みかしらないが、どうも、ここでは、里菜の言葉は、どこかで自動的に翻訳されて相手に伝わっているらしい。その『翻訳』が伝達の過程のどこで起こっているのか――自分の口からは日本語が出ていて、それが相手の頭の中で『翻訳』されるのか、それとも、自分の口から出る段階ですでに『翻訳』されているのか――は、どうにも確認のしようがないのだが、いずれにしても、最初から、互いに別の言葉を話しているという違和感を感じることなく、

普通に会話ができている。ただ、固有名詞や、お互いの世界にない事物を指す言葉などは、『翻訳』されずに、そのまま伝わってしまうらしいのだ。

里菜が託児所について説明すると、ローイは、大喜びで叫んだ。

「なあるほど！　そういや、そういうものがありゃあ便利だよな。なあ、リーナ、俺と一緒に都へ出て、都でタクジショ始めないか？　都では、外で働いている母親はいっぱいいるんだが、ばあさんなんかが一緒に住んでないうちでは、いろいろ苦労してるらしいぜ。そういう家の子を、金とって預かる。まずは小さな家を借りて二人で始めてさ、うまくいくようなら、だんだん手を広げて、何軒も家を借り、人も雇って、大々的にやるんだ。そうなったら俺たちはもう金持ちだから、父親のいない子供とか母親が病気して困ってるうちの子なんかは、うんと安く預かってやったっていいよな。毎日ガキどもと楽しく遊んで金を儲け、人の役にも立つ。これはすばらしいぞ！」

まさか本気ではないだろうとあいまいに笑って済ませた里菜だが、確かに彼は、託児所経営に向くかどうかはともかく、保父さんには向いていると思ったのだ。

ローイが器用に作ってやったおもちゃで、子供たちがおとなしく遊んでいるときは、里菜とローイは、あれこれとおしゃべりをした。ローイは、子供たちに歌をうたったり、お話をしてやるだけでなく、里菜にも、名調子で、この国の伝説や、歴史を題材にした物語を語ってくれた。それは里菜にとって、面白いだけでなく、とても勉強になったが、もっともローイの語るのは、伝説であるから、必ずしも史実どおりでないのだろう。

一度、里菜は、ローイに聞いてみたことがある。

「ねえ、ローイ、ラドジール王って、本当にいた人なんでしょ？」

「ああ、そうだぜ。ちゃんと、学校の歴史の時間でも教えている、有名な昔の王様だ。でも、ラドジールが本当に伝説で言われているような食人王だったかどうかは、俺は知らねえよ。まあ、戦乱の世

に平民から王様にのし上がったなんて男が、人を山ほど殺してないわけはないし、そのなかには当然、女も大勢いただろうし、彼の言動に少々常軌を逸したところがあったとか、お妃が次々早死にして、十三年の在位の間に結局十二人の妃を娶ったとか、最後は城の物見の塔から落ちて死んだとかいうのは史実らしいぜ。でも、一年に一人づつお妃を迎えて、それをみんな婚礼の晩に殺して食っちまったとか、死んだ恋人が彼の腹の中で予言をし続けてたなんていうのは、いくらなんでも、作り話だろうさ。だいたい、負けた国の王様なんて、ろくなこと言われるわけねえんだ」

「ラドジールの国は、負けたの？」

「そうさ、だから今、カザベルじゃなくてイルベッザがこの国の首都なんじゃないか。でも、負けたのはラドジールが死んでからだよ。彼が生きているうちは、連戦連勝、負け知らずだったってさ。だから今でも北部、特にカザベルじゃあ、ラドジールは英雄なんだ。もしあんたが、ラドジールって名前のやつに会ったら、まずまちがいなく、そいつはカザベルの出身だぜ。北部のやつの前で、あの物語をするなよ。絶対、怒るからな」

「北部の人は、この辺にもいるの？　会ったら、わかるの？」

「この村には、いないよ。でも、プルメールあたりまで出れば、いろんなところの出身の人がいる。そうそう、ヴェズワルの山賊も、大半が北部からの流れものらしいぜ。北部のやつは、言葉がなまってるし――もっとも、あっちに言わせりゃ、俺たちのほうがなまってるんだそうだが――、なんとなく貧乏臭くて服装もダサイから、すぐ分かる。北部は気候が厳しいし、土地も痩せてるから、昔から貧しいんだ」

やっぱり、ローイの話は、ためになる。これで里菜は、南部と北部の間に歴史的ないきさつからくる微妙な反目が残っているらしいことも、知ることができたわけだ。

こうして里菜は、ほんの数日の内に、この国について、無口なアルファードが一月半のあいだに話してくれたよりも多くのことを、

ローイから教わっていった。
今日も、里菜とローイは、子供たちを見守りながら、おしゃべりに興じていた。
ローイとひとしきり乱暴な遊びに興じた子供たちは、いまはおとなしく、家の中で積み木遊びをしている。ローイの背中では、さっきまでぐずっていた赤ん坊が、いつのまにかぐっすり眠っている。
たあいないおしゃべりをしながら、夕食の材料を物色しはじめた里菜が、つぶやいた。
「あ、いけない。パンが、もう無いわ。アルファードに買ってきてくれるように頼んどけばよかった」
「なに、パンが無い？　なら、買いに行けばいいじゃないか。一緒に行こうぜ」
「ううん、だめなの。アルファードに買って来てもらうことになってるの」
「なんで？　まさか、あいつ、仕事にいく時、家に金を置いとかないで、全財産持ってっちまうわけ？」
「ううん、そうじゃないけど、アルファードが、勝手に外に出るなって……」
「なにい？　外に出るなぁ？　なんでまた、そんな無体なことを」
「ほら、あたし、変な力があるじゃない。それで、人に迷惑をかけると困るから……。家のまわりはいいんだけど、村の、ほかの人がいるようなとこへは、一人で行くなって」
「だって、あんた、もう、その力、抑えられるようになったんじゃねえの？」
「うん。でも、アルファード、慎重だから。それに、山賊が出ると怖いし」
「山賊だあ？　何も俺は、あんたを寂しい山道に引っ張り出そうってんじゃないんだぜ。パン屋は村のど真ん中だよ。そんなとこに白昼堂々と山賊が出るとしたら、それはよっぽどの大襲撃で、そんなのにまきこまれたら、その時はその時で、そりゃもう、しかたない

だろうさ。アルファードになんと言って脅かされたか知らねえが、まっ昼間っから山賊が怖くて買い物に行けないなんていったら、誰もこの村で暮していかれないじゃないか」

そう言いながら、ローイはあきれて、まじまじと里菜を眺めた。

（バカか？　そんなの、口実に決まってるじゃないか。アルファードは、ただ単に、あんたを閉じ込めておきたいんだよ。あいつはそういうやつなんだ。まったく、この仔猫ちゃんときたら、アルファードがどんな無体なこと言っても、露ほども疑問を持たないんだからな。恋は盲目というが、こりゃ、重症だな）

そのときローイは、よっぽど里菜にこう言ってやろうかと思ったのだ。

『あんた、自分の置かれてる状況ってもん、分かってる？　そういうのを、軟禁状態、もっと言っちまえば、飼い殺しっていうんだぜ』

が、さすがに、その言葉はあやういところで呑み込んだ。里菜の前でアルファードの悪口と取られるようなことを言ったら、自分がのほうが憎まれかねないのは分かっているのだ。

こうなると、ローイは意地でも里菜を連れ出したくなる。

「な、行こうぜ。アルファードは、一人で村に行くなって言ったんだろ。俺と一緒ならいいじゃないか」

「うん、でも……」

「大丈夫だって。俺だって自警団の副団長だぜ。いざとなったら、あんたの一人くらい、守れる。山賊くらい、おっぱらってやるさ」

「だって……」

「ああーッ、じれってえなあ！　その、『でも……』とか、『だって……』とかいうの、頼むから、やめてくんない？　あんた、一生ここに閉じこもって過ごしたいわけ？」

「そんな、一生だなんて。ただ、しばらくの間、あたしがもっと魔法に慣れるまでだけよ」

「バカか、あんた。アルファードが『もう大丈夫』というころには、あんた、ばあさんになってるぜ。だいたい、やつは心配症なんだ。

いいから来いよ。俺が責任持つって。もし後でアルファードのやつが何か文句言うようなら、俺んとこへ言いに来さしてくれ。おーい、ガキども、買い物に行くぜ！　ついて来い！　さあ、リーナ、あんたも、来な」

そう言うなり、ローイは本当に、子供たちを引き連れて出ていってしまった。

里菜はあわてて戸口から叫んだ。

「待ってよ、ローイ！　行くから、ちょっと待って。お金、持っていかなきゃ」

「そうだろ？　やっぱり来るんだろ？　たかがパン買いに行くぐらいで、ぐだぐだ言わずにさっさと来りゃあいいんだよ」

満足気にそう言ってゆっくりと歩き出したローイの後ろを、小銭を握った里菜が、小走りに追いかけていった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十二場（3）

アルファードの家は、村の中心部から少し離れている。
遠足にでも行くようにはしゃいでいる子どもたちを引き連れたローイと里菜は、広場へ向かって、並んで歩いていった。
里菜が広場へいくのは、別に初めてというわけではない。牧場（まきば）へ行っていたころは、夕方、ここで羊たちを持ち主に引き渡していたし、その時ついでにパンや雑貨を買ったりもしていたのだ。でも、そのときは必ずアルファードと一緒だった。アルファードと一緒にではなく村の中心部に行くのは、初めてだ。
そう思った里菜は、ほんの少し緊張しながら、あらためてあたりを見回した。
最後にこの道を通ってから、半月ほどたっている。その間に、道沿いの畑も木立も、すっかり冬めいてしまったように感じられる。冷たく澄んだ空気と、金色の午後の日差しが心地よい。子供たちの元気な声を聞きながら歩くうちに、アルファードの言いつけを破った後ろめたさで強張っていた里菜の気持ちも、のびやかにほぐれてきた。牧場《まきば》に行かなくなってから、里菜はずっと、アルファードの家とその庭を離れたことがなかったのだ。解放感が、緊張と後ろめたさに取ってかわり、里菜は大きく伸びをして、空を見上げた。
そんな里菜の様子を横目で見ながら、道中のあれこれを面白おかしく解説していたローイが、ふいに真顔になって、こう言った。
「あんた、アルファードに、惚れてんだろ。なんでまた、あんな堅物に。あんた、あいつにゃ、勿体ないよ」
突然の言葉に、里菜は真っ赤になった。
「な、なんでわかるの？」
「なんでって、あんたまさか本当に、わからないつもりだったのかよ。そんなの、誰が見たってわかるさ。今だって、そんなに真っ赤

になってさ。あんたがアルファードのあとをついて歩いてるとこは、まるでアヒルのヒナみたいだぜ。……でも、けちをつけるつもりはないけどよ、あんたのそれはさ、恋っていうより、ほら、アヒルのヒナが最初に見たものを親だと思ってくっついて歩く、あれとおんなじなんじゃねえの？　あんた、この国に来て目を開けて初めて見たのがアルファードだったろう。そんでアルファードのこと、親鳥だと思いこんじまったとかさ。いや、気に障ったら許してくれよ。俺、思ったことは、すぐみんな言っちまうからさ」

里菜は、ちょっと驚いて、それから考え込んだ。

言われてみれば、自分のアルファードへの想いは、たしかに、それに近いものかもしれないという気がしてくる。もとより里菜は、どういうのが恋でどういうのがそうでないかなど自分に区別できるとは思っていないが、それにしても、自分はただアルファードに頼り切っていて、いつも甘えていたいだけで、それは、恋愛感情というのとは、さすがにちょっと違うような気もするのだ。なるほど、親鳥を慕うヒナと変わりない。

だいたい、よく考えてみれば――よく考えてみるまでもなく――、アルファードは、もともと、里菜の好みのタイプというわけでもないのである。極端にオクテであまり恋愛に興味のなかった里菜に、それほどはっきりした異性の好みというのがあったわけでもないのだが、少なくとも彼のようなやたらと男っぽいタイプは絶対に好みでなかったことだけは確かだ。好みであるとかないとか考える以前に、そもそも、まるっきり対象外で、視野にも入って来なかっただろう。

だから、例えば、里菜がアルファードと『あちら』の世界の日常生活の中でたまたま普通に行き合っていても、彼に特別な関心を持つことは、まず無かっただろうと思う。

まあ、タイプとして好みであろうとなかろうと、人柄を知ってみたら実は良い人だったというなら好きになっても不思議はないが、あんなふうに、ほとんど一目で彼に恋に落ちてしまったというのは、

確かに、なんだか不自然だ。
いや、そう言えば里菜は、一目惚れどころか、顔もろくに見ないうちから、すでに彼に恋していたような気がする。恋をしていたというより、はっきりした根拠は何もないのに最初から彼を信じ切っていて、川から抱き上げられて運ばれて行く時も、その腕の中であんなに安心しきって、うっとりと眠りかけたりしていたのだ。
顔もよく見ず、人柄も知らないうちに、恋ができるものだろうか。だいたい、いくらまだ意識が朦朧としていたからといって、自分が見知らぬ男の腕の中であんなふうに安心して眠り込むなんて、よく考えてみれば、確かに変だ。『刷り込み現象』のなせるわざとしか考えられない。
今まで、自分では一人前に彼に恋をしているつもりでいたが、もしかすると、これは、ただ、『刷り込み現象』を恋と錯覚しているだけなのだろうか。
ローイは、一生懸命考え込んでいる里菜を覗き込んで、ふいにおどけた調子で言い出した。
「でも、もったいねえよなあ。あんた、大損してるぜ」
「え？　損って、何が？」
「だってよ、この国に、男はごまんといるのに、たまたま最初に見たのがアルファードだったからって、あんたみたいなかわい子ちゃんが、あんな朴念仁に惚れちまうなんてよ」
「別に、最初に見たから好きになったなんてわけじゃ……」
「いいや、そうだ。そうに決まってる。あんたの国には、こういう話はないのか。ほら、小箱の中に、親指くらいのきれいなお姫様が閉じ込められてて、たまたまその箱の蓋をあけた貧しい若者のお嫁さんになる、みたいな話」
「うーん、もしかするとどこかにあるかも知れないけど、あたしは聞いたことないわ。壺とか瓶とかランプとかに閉じ込められていた魔神が、蓋を開けて出してくれた人の願いをかなえてくれるって話なら知ってるけど」

「あはは、壷の魔物か。そういう話なら、この国にもあるよ。壷から出してもらった魔物は、助けてもらった恩のために、出してくれた人の言うことは何でも聞かなきゃならなくなるんだ。こりゃあ、いいや。あんた、まさに、それを地でいってるよ」と、ローイがあまり大笑いするので、里菜は思わず、むっとした。

「なによ。どういう意味？」

「まあ、怒るなよ。だってあんた、アルファードのいいなりじゃん」

「そんなことないわ！」

「まあまあ、怒るなって。でも、あんたじゃ、壷の魔物の役は、ちっと無理そうだなあ。たしかに不思議な力があるっちゃあ、あるかもしれないが、それで何が出来るってわけでもないしな。やっぱ、どっちかっつうとシルグリーデ姫だよな。あ、その、箱の中のお姫様、シルグリーデ姫っていうんだよ。

で、さ。彼女は、実は、悪い魔物に、誰でも最初に箱を開けたものに恋をしてしまうって呪いをかけられてたのさ。魔物は、その美しい姫に惚れて結婚を申し込んだんだが、ふられちまったんだ。その腹いせに妖術で姫を小さくして箱に閉じ込め、そんな呪いまでかけて、姫がどんなに愛しても決して振り向いてくれないような男に箱を開けさせようと企んだんだ。ところが魔物は、そういう男を探して世界中を飛び回っているうちに、空の上から、箱を落してしまった。きっと、ちょっとマヌケな魔物だったんだなあ。それから何百年もたって、貧しいけれど心のきれいな若者が箱を見付け、箱から出してもらった姫はもとの大きさに戻って、ふたりは結ばれ、めでたしめでたしってわけ。

それでだな、俺が言いたいのは、あんたにもシルグリーデ姫みたいに何かの呪いがかけられていたんじゃないかってことだ。それであんた、アルファードに惚れちまったわけ。そして、それが大損だっていうのさ。だって、あんたがもしも呪いから解き放たれ、目をさましてあたりを見回してみれば、あんたが恋するのにもっとふさわしい相手が、すぐそばにいることに気がつくはずだぜ。そう、今、

ここに、あんたの隣にだよ！」
そう言ってローイはケタケタと笑い出したので、からかわれたと思った里菜は、つん、と、横を向いた。
ローイは笑いを収めて、唇を尖らせた里菜の様子を眩しげに横目で見やって、言葉を続けた。
「でもよ、なんであんたがアルファードに惚れるのか、わかんないんだよな。いや、アルファードが怪物みたいに不細工だとか、ひどく意地が悪いとか、そういうことはないんだが、ただ、俺から見ると、あんたとアルファードって、相性はあんまりよくないように見えるんだ。……ていうか、まあ、割れ鍋に綴じ蓋で、それなりに相性はいいのかもしれねえが、でも、それに安住してると、あんた、ダメになると思う。あいつは、あんたをダメにする。あっちこっちへ伸びあがろうとするあんたの心を力で押えつけて、あんたの魂を矯めてしまうだろう。
……アルファードはな、普段、あんまり温厚でおとなしいから、誰も気付いていないと思うが、あれは、なんていうか、人を支配するタチの男なんだ。そして、あんたは、あんな野郎におとなしく支配されてるような女じゃないはずだ。俺、人間を見る目には、ちょっと自信があるんだぜ。あんたは、ヒナ鳥か飼犬のようにアルファードの後をついてまわっているが、もともと、あんたは、男の後を黙ってついていくってタイプじゃねえだろう。それなのに、アルファードの前では、あんたは、ついていく女になっちまう。それが恋だと言われればそれまでだが、アルファードの前では、あんたは本当のあんたじゃなくなっちまうんだ。今はそれでよくても、そのうち、ムリがでてくるぜ」
たしかに、彼の、ひとを見る目は確かだ。一見軽薄なだけに見えるローイが、繊細で鋭い感覚も持ちあわせているのを、里菜はもう、知っている。
アルファードの前で、里菜が自分を失っているというのは、たぶんそのとおりだろう。里菜はそれを、ただ、恋をしているせいだと

思っていた。恋をした女の子は、みんな変わってしまうんだと思っていた。だが、ローイにこんなふうに指摘されると、それが不自然なことにも思えてくる。里菜は、なぜだか言い訳する口調になって言った。

「でもローイ、アルファードは、そんな人じゃないわ。絶対いばったりしないし、それにやさしいし……」

里菜のよわよわしい反論を、ローイが、彼にしては強い口調で遮った。

「やさしいから支配しないってものじゃないんだ。冷酷な暴君も、思いやり深い明君も、支配者には違いないだろう。あいつは、あの、父親みたいなやさしさで、保護者づらして人を支配しようとするんだ。だから俺は、あいつとは友達だし、いいやつだと思っているが、時々あいつに我慢がならねえ時もあるんだ。俺は、たいして年上でもねえ赤の他人に父親面されるのはごめんだからな」

それからローイは、一転して、茶化すような軽い調子になって付け加えた。

「ま、色恋ってのは理不尽なもんで、どういうものか、一緒にいて幸せになれるやつを好きになるとは限らないんだよな。わざわざ、つらくなるようなやつを選んで恋をしてみたりする。そこが色恋の、奥の深いところってもんだ。だからあんたが、それでもアルファードがいいってんなら俺は止めねえよ。まあ、いつまでもつことやら、せいぜい頑張ってみな。何事も経験ってやつさ。実は俺のほうがあんたにふさわしいってことに気付くのはそれからでも遅くないぜ。いや、そのほうが、俺の有難みがよくわかろうってもんだ。そうさ、そういう遠回りが、いっそうふたりの愛を燃え上がらせるのだ！」

ローイは、芝居がかったしぐさで両手を広げて叫んだ。ただでさえ滑稽なしぐさが、赤ん坊をおぶっているので、よけいおかしい。

里菜はローイを睨んで見せたが、彼の愛敬につりこまれて、つい笑い出してしまった。

「もう、何よ、ローイってば！　何が、『ふたりの愛』よ！　ふた

りって、誰と誰？」
「わかってるくせに！　照れるなよ」
慣れ慣れしく里菜の肩を叩いて、ローイは大笑いを始めた。
ひとしきり笑いころげたローイは、また急に真摯な声音で言った。
「でも、ほんと、冗談抜きでさ、アルファードといるのがつらくなって、やめたくなったら、いつでも俺のとこへ来いよ。俺、ずっと……待ってるから」
それはまるで、突然仮面がはずれたような、素直な言葉だった。
少なくとも、そう、聞こえた。
里菜は、不意打ちをくらった思いで、少しうろたえて、目をそらした。
が、ローイは、すぐに、いつものおどけた顔に戻って、ケラケラ笑いながらつけくわえた。
「……なーんてね！」
「ふんだ、ローイのバカ！　何があったって、あなたのとこへなんかだけは、絶対行かないもん！」
里菜は、かすかに頬が赤くなってしまったのをごまかすために横を向いて、ひときわツンツンして叫んだ。一瞬でも、ドキッとしてしまった自分が悔しかったのだ。
「おお、おお、元気、元気。いいことだ！　さすが、素手でドラゴンに立ち向かった女の子だけのことはあらあ。あんた、俺の前では、随分威勢がいいよな。アルファードの前じゃ、まるでしおらしいくせしてよ。でも、俺、こういうあんたの方が好きだよ」
この、最後の一言は、里菜に聞こえないように、口の中でそっと呟かれたのだった。
後ろでは、子供たちが、ふたりの会話など気にも留めずに騒いでいる。
幾度か、道沿いの畑や庭で、急がしそうに働く人影が見えた。彼らは、一行が通り過ぎるのを、めずらしそうに手を止めてながめ、何人かは遠くから里菜に手を振り、声をかけてくれた。里菜は笑顔

で小さく手を上げて、あいさつを返した。

このあたりでは、冬はどんより曇って小雪が舞っていることが多い。だが、本格的な雪の季節の訪れを前にして、毎年必ず、今日のようなよく晴れた日がしばらく続く。その、冬の初めの短い黄金の日々を、村人は＜女神の贈り物＞と呼んで、季節に追い立てられるように忙しく冬支度に精を出すのだ。道すがら見掛ける誰もがせわしなげに働いている。働き者の村人は、いつでも忙しいのだ。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十二場（4）

「おや、リーナ、今日はローイと一緒かい？　あんたがアルファードと一緒じゃないとこを見るのは、初めてだよ。でも、そういえば最近あんたを見掛けなかったね」

広場に面したパン屋のおかみさんは、里菜とはすっかり顔馴染みだ。自分でパンを焼くことができないアルファードは、この店の上得意なのである。

広場では、何人もの老人たちが、椅子を持ちだしたり縁石に腰掛けたりして、日向ぼっこをしながら世間話をしたり、何やら細かい手作業をしたりしていた。広場の近くに住む年寄りたちは、天気がいい日はいつもこうして広場に座っているのだが、今まで里菜は、夕方、老人たちがもう家に引っ込んだあとに来ることが多く、こんな早い時間の広場の賑いを見るのは初めてだ。

里菜はおかみさんに笑顔を返して答えた。

「うん。ずっと家にいたから」

「あら、そう？　どこか悪かったの？」

「ううん、そうじゃないんだけど、出掛ける用事、無かったし。それに、うちで子守りしてたから」

「ああ、そうよねえ。今日も大勢引き連れて。みんな、有難がってるわよ、ほんと助かるって。＜女神のおさな子＞に子守りをしてもらうなんて、もったいないことだよ。だいたい、この時期、毎年、子守りに困ってたのよ。ローイだって、ぜんぜんあてにならなかったし。ローイ、あんた、今年はずいぶんと落ち着いて村にいるじゃないの。去年はすぐ、よその村の娘っ子にちょっかい出しに、子守りを放り出して、ふらふら行っちまってたのにさ」

「やだあ、ローイってば。よその村までナンパしに行ってたの？」

里菜に横目で見られて、ローイは頭を掻いた。

「おばさん、それ、言うなよ。今年の俺は、もう、去年とは違うん

だ。心を入れ替えたんだよ！　こんなに毎日毎日、真面目に子守りに精出す俺なんて、見たことないだろ」

「どうせなら、子守りだけじゃなくて、ほかの仕事もやっとくれよ。あんたの義姉さん、昨日もこぼしてたよ！　なんのために、そんなでっかい図体してるのさ。まったく、いい若い衆がぶらぶらして…」

「説教はいいから、パンくれよ、パン。アルファードがいつも買ってるやつ」

「はいよ、どうぞ。これ、おまけ。リーナの好きなお菓子だよ。じゃあリーナ、またね」

「うん、おばさん、ありがと。またね」

里菜がパンを買っているあいだに、老人たちの何人かがこそこそと立ち上がって家に入っていったことに、広場に背を向けていた里菜たちは気づかなかった。

パンを抱えた里菜とローイが広場を後にしようとした時、誰かが背後から、しわがれた声で叫んだ。

「二度と来るな！　この悪霊め」

その、悪意に満ちたざらついた声に、里菜の足はすくんだ。冷たい手で、首ねっこを掴まれたような気がした。

（悪霊って……。あたしの、こと？）

怯えた里菜を後ろにかばうようにして、ローイは振り返って仁王立ちになった。

「今の言葉、誰に向かって言ったんだ？　え？」

ローイは、すごみを効かせて広場を睨めまわした。

「聞きずてならねえなあ。来るなとは、どういうことだ。リーナは、この村の住人だぜ。村の住人が、村の共同の広場に来て、何が悪い！」

ただならぬ空気に怯えた子供たちが、不安げにローイの足元に寄り集まって、広場に目をやった。広場にいる老人たちや、回りの店の主人や客は、しん、と静まりかえって成り行きを見守っている。

「今の声は、オードのくそじじいだな。何、こそこそ隠れてやがる。言いたいことがあったら出てきて言えよ！　何でリーナがここへ来ちゃいけねえんだ！」

ローイの目が、広場に面した一軒の家のドアに止まった。

ドアが、細く開いている。その向こうに、人の気配があった。

ドアの隙間から、さっきのしわがれた大声が響いた。

「その娘は、村に災いを呼び込む不吉な悪霊だ。ローイ、お前もそんな娘にかかわりあうんじゃない！」

「なんだよ、どんな訳があってそんなひどいこと言うんだよ！　リーナが、何か、悪いことしたっていうのかよ！」

「その娘が、毎日のようにこの広場へ来てた頃、わしの家ではチーズに悪いカビが生えたし、ミルクもすぐにすっぱくなった！　言っておくが、そんなことは今までにはなかったぞ！　その悪霊めが、邪眼で保存の魔法を消しくさったに違いない」

「なんだ、そりゃあ？　オードじじい、あんた、ボケちまったんじゃねえの？　あんたんとこのミルクが腐ったのは、本当だろうさ。でもそれは、保存の魔法のかけかたがいいかげんだったか、あんたがモウロクしちまって魔法の力が弱くなっちまったからだろうよ。リーナは、保存の魔法は、消せないんだ。そんなバカげた理由で他人を中傷しないでくれよな！」

そう、確かに里菜は、保存の魔法のようにあらかじめ物にかけてある目に見えない魔法は、最初から、消すことが無かった。里菜が消すのは、目の前で使われる目に見える魔法だけなのだ。それを、ローイは、よく知っている。

が、老人は、そんな言葉には耳を貸さなかった。

「わしらが女神から授かった魔法を消してしまうなどという、世のことわりに背く力を持つものが、女神の御子でなぞあるわけがない。その娘は魔性の者だ。わしらの魔法の力を消して、ふぬけにしておいてから、魔物たちと魔王の灰色の軍勢を村に導く算段に違いない。ええ、そうだろう？　親切ぶって子守りなどしているのも、そうや

って子供たちを手なずけておいて、いつかまとめて力を奪い、村を乗っ取るために決まっておる。だからわしは、口をすっぱくして、みんなに言っておるのだ。自分の子供をかわいいと思うなら、あんな、どこから来たかもわからぬ怪しげな娘に触れさせるなと！」

その声に含まれた、激しい憎悪と恐れ、そして見知らぬ者に対する警戒の念が、ほとんど物理的な暴力のように里菜を打ちのめした。里菜は、我しらず一歩よろめいて、ローイの腕にすがった。

「おい、いいかげんにしろ、このモウロクじじい！　あんた本当にボケてるぜ。いいか、リーナはな、魔法の力そのものを消しちまうわけじゃないんだ。その時々で使われる魔法を消すだけだ。それだって、今は、消さないことだって出来るようになったんだ。もう、誰にも迷惑はかけないはずだ。それなのに、そんな訳のわからんたわごとを抜かしやがって！　いくら年寄りは敬わなけりゃならないったって、そこまで言われて黙ってなきゃいけねえって法はないぜ。リーナのことをそんなふうに言うやつは、たとえ年寄りでも許せねえ！　出て来いよ、この卑怯者！」

「誰がそんな挑発に乗って、おめおめと邪眼の前に姿をさらすものか。わしは知っておるぞ！　その娘の黒い目で睨まれると、魔法の力が吸い取られてしまうのだ！」

広場の老人たちの幾人かが、もごもごと口の中で賛同の言葉をつぶやいて里菜から目をそらしたのが、いっそうローイを逆上させた。

ローイは、ことさら大声を張り上げた。

「ははあ、じいさん、怖いんだな。こんなちっぽけな、年端もいかない女の子が。ハ！　こいつはおかしいや！」

「ふん、どうせその姿は、人を油断させるための見せかけだ。その目を見れば、その娘が見かけどおりのものではないのがわかろうに！　その悪霊めは、そんなふうに、いかにも罪のない無力な小娘を装ってわしらを油断させ、村に災いを引き込むころあいを計っておるのだ！　ローイ、お前はその小娘にたぶらかされておる。その娘

の本当の齢など、わかったものじゃないぞ！」

そこで老人は、ふいに思い出したように矛先をローイに向け、日常的な説教の口調になって続けた。

「ローイ、お前もお前だ。いい若い者がろくに仕事もせんで、そんな破廉恥なりをして子供と一緒になって遊び回っているとは、世も末だ。それだけでも嘆かわしいのに、その上、そんな得体の知れぬよそものの娘といちゃつきおって。村中の娘っ子に色目を使うだけじゃ、まだ足りんのか。まったくもって浅ましい。恥を知れ、恥を！」

ローイは気色ばんで叫んだ。

「なんだって！　誰が、リーナといちゃついてるって！　確かに俺は、村中の女の子全員に分け隔てなく色目をつかっているが、リーナにだけは、まだ、なんにもしてねえぞ！」

ローイは大真面目に自己弁護のつもりで叫んだのだが、これには、誰もが思わず失笑した。張り詰めていたその場の雰囲気が、ふっと緩んだ。

それまで息を詰めるようにしていた人々が、ざわざわと騒ぎ始めた。

「オード、いくらあんたがその子を気にくわないにしたって、そりゃあ言いすぎじゃないか？」

「そうそう。ローイの言うとおり、ここは村の共同の広場なんだから、あんたが気にくわないからって、人に来るなとは言えないわよ。かわいそうに、リーナは怯えてるじゃないの。この子が何をしたっていうのかね。あんた、最近、偏屈が過ぎるよ」

「いや、オードの言うことはもっともだ。普通の魔法が使えないばかりか魔法を消してしまう＜マレビト＞など、どう考えても正しいものじゃない」

「ジグ、およし！　どんな力があろうとなかろうと、＜マレビト＞は＜マレビト＞だよ。めったなことを言うもんじゃない。アルファードだって、魔法は使えないけど、ちゃんとドラゴンから村を守っ

て村に女神の恵みを運んでくれてるじゃないの。この子が魔法を消すのにも、ちゃんと何か女神の御意志が働いているのさ。女神の御配慮はとても深遠だから、時に、わたしら人間には推し測れないこともある。それでも必ず、女神のなさることには理由があるんだ」

ローイが、あたりをぐるりと睨みまわして言った。

「おい、みんな。女神がどうの、悪霊がどうのと言うのは、もうやめてくんな。リーナはただの女の子なんだ。ただ、よその国から来た子で、目や髪の色が人とちょっと違って、少しだけ人と違う力を持っているってだけのことなんだ！　それを、本人を前にしてああだこうだと、あんたらには、大人のくせに思い遣りってもんがないのか！　オードじいさん、いいかげん、出てこいよ！　このいたいけなリーナちゃんが、あんたに悪さをするように見えるかよ。出て来ないなら、俺が迎えに行くぜ。このままじゃ、気がすまねえんだよ！」

ローイが本当にオード老の家に向かって一歩足を踏み出したので、それまでショックのあまり黙って立ち尽くしていた里菜は、あわててローイの腕をひっぱった。

「ローイ、やめて！　もういいの、あたし、もう、ここへ来ないから。パンはアルファードに買ってきてもらえばいいんだし」

「でもよ、リーナ……」

「ね、お願い。もう止めて。パンも買ったし、もう帰ろ、ね？」

里菜は、ぶら下がるようにして必死でローイの腕を引いた。

自分を見上げて懇願する里菜の、青ざめながらも平静を取り戻したらしい表情を見て、ローイは、ふと、気を抜かれ、とりあえず矛を収めた。

「わかった。リーナ、あんた、気丈だな。さすがは素手でドラゴンに立ち向かった……」

「もう、ローイ、それ言わないでよ、恥ずかしい。あたし、無茶なことしたって反省してるんだから……。さ、行こ」

ローイは、オード老の家のドアにじろりと一瞥をくれると、里菜

に引かれるようにして広場から立ち去ろうとした。
そのとき、広場の片隅で、それまで無関心そうに座っていた一人の男が、ゆらりと立ち上がり、まっすぐに里菜を見つめて、どこか弱々しい、うつろな声で言った。
「待ってくれ……」
そのとたん、広場の雰囲気が再び一変した。みな、ギョッとしたように一瞬黙り込み、それから、どこか不自然な、取り繕うようなざわめきが起こった。
「ガイル、どうしたんだい、立ち上がったりして大丈夫かい」
「なんでもないんだよ、なんでも。その娘のことは、気にしなくていいんだ。オードじいさんが何だか言っていたが、じいさんの勘ちがいなんだから」
「魔物は来ないよ、来ない。大丈夫だから」
誰かが舌打ちして、小声で言った。
「オードのやつ、ガイルの前で魔物の話なぞ持ち出しおって！」
子供をあやすように、周囲の老人たちが彼を再び椅子に腰掛けさせようとした。だが彼は、老人たちの腕を無言で振りほどき、里菜を見つめて立ち尽くした。
里菜はまたローイの腕にしがみついた。
（何？　今度は何が起こったの？）
ローイを見上げると、彼も表情を強張らせている。
「リーナ、いいか、あんたは何も言うなよ。みんなが何とか収めてくれるから」
「収めるって？　あれは誰？」
里菜はそれ以上、ローイに質問することは出来なかった。
男が、ゆらゆらとこちらへ歩いて来たのだ。
それは、壮年と見られる男だった。だが、もっと年を取っているようにも見え、実際の年齢がまるでわからない。
おそらくかつては筋骨逞しかったろうと思わせる体格をしているが、今、その身体にはどこか病み衰えた気配が漂い、顔付きもやつ

れて表情に乏しく、生気が感じられない。それが彼を老人のようにも見せているのだ。

そういえば里菜は、彼をこの広場で幾度か見かけたことがあるのを思い出した。村の大人たちの誰もがいつも働いている中、さほどの年寄りには見えない彼がただ座っているのを見て、里菜は、病人か、一見したところ分からないがどこか身体が不自由な人かと思っていたのだ。

ガイルと呼ばれたその男は、里菜の前でぴたりと立ちどまって、うつろな目で里菜の瞳を覗き込んだ。

子供たちは、里菜とローイの後ろに寄り集まった。

男は、里菜を後ろにかばおうとするローイを無視して、無言で里菜の左手を取った。

里菜はぞっとして手を振りほどこうとしたが、病人めいた男の力は意外と強かった。

男は、里菜の腕を裏返して掌を上向かせ、手首の内側を見つめた。白く細い手首には、魔王の夢を見た朝に突然姿を現した傷跡が、今も消えずに浮かび上がっていた。

男が、ふいに目を上げて、言葉を発した。

「あんたは、俺を救ってくれるか……？」

第一章＜エレオドラの虹＞　第十二場（5）

奇妙に無感情で、まるで遠いところから聞こえて来るようなその声の響きに、里菜は慄然として思った。

（こんな響きを、どこかで聞いた……。そう、あの、悪夢の中の魔王に似ている！）

声自体が、似ているわけではない。魔王の言葉は、耳に聞こえる音を持たなかった。

似ているのは、その声の底に重く淀んだ、絶望の気配だった。

男は突然、里菜の腕を離すと、声も出せずに立っている里菜の目の前に、どこからか素早く取り出したらしい剥き出しの小刀を、柄のほうを向けて差し出した。

「これを、取ってくれ。そして、これで俺の心臓を刺してくれ。俺はもう、こんなに弱くなってしまって、自分で自分を刺すことが出来ない。あんたこそ、俺が待っていた人だ。俺を助けてくれ」

目の前の男の後ろに、夢の中の魔王の黒い姿が見えたような気がして、里菜は眩暈を覚えた。刃物の輝きが、心の底に眠る忌まわしい記憶を呼び覚ますような不吉さで、里菜を脅かした。

「いや……。いやァーッ！」

訳がわからぬまま叫んだ里菜は、気がつくと、ローイが横から手を出して小刀を取り上げるより早く、いきなりそれを目の前からはたき落していた。

小刀は、初冬の光を跳ね返しながら、くるくると舞って地に落ちた。子供たちが目を丸くして、それを眺めた。

男は、がっくりと膝をついた。

「あんたも、俺を見捨てるのか……」

ローイが黙って小刀を拾った。

そこへ、さっき、ガイルが立ち上がったとたん広場から駆け出していった雑貨屋の主人が、息を切らして駆け戻ってきた。もうひと

り、別の男が一緒だ。
新しくやってきたその男は、屈み込んでガイルの肩を抱くようにして彼を立たせながら言った。
「ガイル、そろそろ寒くなってきた。家に帰ろう」
それから里菜に向かって軽く頭を下げた。
「お嬢さん、びっくりさせてすまなかったね。弟に、あんたを傷付ける気は、なかったんだ。許してやってくれ」
「は、はい……」
里菜があっけにとられたまま頷くと、男は、こんどは広場を見渡して頭を下げた。
「みんなにも、面倒かけてすまなかった」
みんなを代表するように、一人の老婆が進み出て、男の腕の手をかけて静かに言った。
「いいんだよ、ファール。ガイルのことは、あんただけの責任じゃない。村のみんなで、気をつけてやらなきゃならないことなんだ」
広場の老人たちが、賛同を示して頷く。
ガイルはもう、あたりのことに一切の関心を失ったように、兄のファールに支えられてぼんやりと立っていた。
ローイはファールに小刀を手渡した。
「はい、これ。おじさんも大変だよな。でも、刃物だけはしっかり隠しとけよ」
「ああ、ローイ、ありがとう。いや、隠しておいたつもりだったんだがね。どうやって見付け出してしまったものだか。じゃあな。さあ、行こう、ガイル」
「さあ、俺たちも行くぜ、リーナ。今のおっさんのことは、もう心配しなくて大丈夫だ。兄貴がついてりゃ、もう心配ないから。怪我、してないよな?」
熱しやすく冷めやすいローイは、今のごたごたですっかり気勢をそがれて、里菜をつれておとなしく立ち去った。広場の老人たちも、ドアを半分開けて首を出していたオード老も、何も言わずにふたり

を見送ってから、今の出来事についてがやがやと話し始めた。
その時、里菜は再び、背後で声を聞いた。今度の声は、オードの怒鳴り声ではなく、パン屋のおかみさんの、オードに向けた叱声だった。それは、広場のざわめきに紛れそうな抑えた声だったのだが、里菜の耳には、その声だけが、はっきりと届いた。
「オードじいさん！　なんてことを……。＜マレビト＞に失礼なことを言うと、祟りがあるよ！　それこそ、村に災いが降りかかるよ！　どうしてくれるんだい」
里菜の足が止まった。ローイが怪訝そうに里菜を見下ろした。
「どうしたい、リーナちゃん」
「ううん、なんでもない」
里菜は唇を噛んでうつむいたまま、歩き出した。そんな里菜を見て、ローイはやさしく言った。
「もう、後ろの連中には見えないから、泣いたっていいんだぜ。あんた、偉かったな」
「ローイ……。ありがとう。あたしの味方してくれて。うれしかったわ」
「そんなの、あたりまえじゃん！　ほかのやつらがおかしいんだよ！　リーナ、その……ごめんな、俺があんたを無理に連れ出したから、こんなことになって」
「ローイが悪いんじゃないわ」
「リーナ、あんなクソじじいの言うことなんか、気にするなよ。あのじじいは、村中で有名な気難し屋なんだ。あいつが気に入らないのは何もあんただけじゃなくて、村の人間の半分は気に入らねえんだ。そしてやっぱり、村の人間の半分は、あいつを嫌いだ。そういう、嫌われものの偏屈じじいなんだよ。まともに相手にすることねえんだ」
「うん。気にしないことにする。あたしはよその世界の人間だし、変な力があるし、いくらこの村の人が＜マレビト＞に慣れてるからって、中にはあたしを怖がる人がいるのは仕方がないわ。でもみん

な、きっといつかは、あたしのこと、村の人間として受け入れてくれるよね？」

「今だって、みんなは受け入れているさ！　どっちかって言うと、あんたは人気者だぜ。ただ、中に何人か、わからんちんがいるだけさ。年寄りは迷信深くて困るよな。だいたい、ほら、閉鎖的っていうの？　田舎だからさ。これだから、俺は田舎はいやだね。だいたい、俺が何着ようと、誰と一緒に歩こうと、俺の勝手だろ。そんなことまで、うるさいじじいどもにとやかく言われたかねえやな。この村じゃみんな、俺の最先端ファッションについて、何にもわかってくれねえんだ。ああ、いやだ、いやだ！　な、リーナちゃんは俺のこのファッション、分かってくれるだろ？」

「え？　うーん……。ごめんね、あたしにも、ちょっと……」

「あ、冷てえなあ。嘘でもいいから、ええ、すてきだわ、くらい言ってくれよ！」

思わず笑った里菜を見て、ローイは嬉しそうに言った。

「うん、それでこそ、素手でドラゴンに立ち向かった女の子だ！」

「それ、言わないでってば！」

里菜はローイの脇腹を――背中には赤ん坊がいたので――両手で張り飛ばしてから尋ねた。

「ところで、ねえ、ローイ。あのガイルって男の人、何？　どこか悪いの？　そのう……頭がおかしいとか？」

ローイは、彼には珍しく、少し顔を曇らせて言い淀んだ。

「ああ、あれか……。びっくりしたろう。でも、あのおっさんを悪く思わないでやってくれよな。あの人は、別にどこが悪いってんでもないんだが、まあ、その、最近ちょっと身体が弱っちまって、それで働けなくなったんだ。でも、あの人は、立派な人なんだぜ。だから、あんた、他の人の前で、あの人のこと、頭がおかしいとか言わないでやってくれな。たまに、さっきみたいに変なことを口走ることもあるが、普段はいたってまともなんだからさ」

普段、一を聞けば十を教えてくれる話し好きのローイにしては、

妙に歯切れが悪い説明だった。ローイはきっと、このことをあまり話したくないのだ。

そういうことは、アルファードにはよくあることだが、おしゃべりで開けっ広げなローイからこんな拒絶の気配を感じたのは、里菜は初めてだった。

「ふうん、そうなんだ……」

うなずきながら、里菜は思った。――たぶん、あの男は、本当は少々頭がおかしいのだろう。そしてたぶん、ローイを含めた村人は、そういう彼の存在を、外部の人間にはあまり知られたくないのだ――。

(そう、あたしは結局、この村の人々にとって、マレビト――かりそめの客人なんだわ。お客は、その家の人が知られたないことを、あれこれ嗅ぎまわっちゃいけないのよ)

さっき背後に聞いたパン屋の言葉が耳によみがえる。

あのパン屋は、里菜の数少ない顔馴染みの大人の一人だった。里菜がお菓子を好きなのを知っていて、いつでも割れたお菓子をとっておいては、ニコニコしながら、おまけにつけてくれていたのだ。

そんなパン屋の、あの一言は、里菜にとって、オードの罵りより辛かったのである。

それからふたりは、なんとなく黙りがちに歩いていった。

もう夕方も近い。子供たちは、それぞれの家の近くを通りかかるごとに、一人、二人と手を振って列を離れていった。最後の赤ん坊を母親に手渡したふたりは、足を早めて家路を急いだ。時折ローイが、落ち着かなげにズボンで手をこすったりしながらポツリポツリと冗談を言い、里菜は短く笑って、また黙り込む。

「リーナ！　どこへ行っていた?」

家の前のゆるい坂道を上ってきたふたりの姿を、坂の上から見付けたアルファードが、静かだが厳しい声で尋ねながら大股で歩み寄

ってきた。
ちょうど今しがた、予定より早く仕事を終えて帰ってきたアルファードは、家に誰もいないのを不審に思い、また家の前に出てきたところだったのだ。
その頼もしい姿を見、力強い声を聞いたとたん、里菜の心をかろうじて支えていたものが崩れた。
「アルファード……！」
里菜は駆け寄って、アルファードのシャツを掴み、その胸に顔を埋めた。顔を隠したとたん、涙があふれ出した。何か言おうとするが、言葉にならない。
「な、何だ、どうしたんだ、リーナ」
アルファードはめんくらって、里菜の細い肩が震えるのを見下ろした。途中まで上がった腕が、里菜の肩のあたりで逡巡（しゅんじゅん）して、また降りた。
それからアルファードは、里菜にしがみつかれたまま、ローイをギロリと睨んだ。
「おい、ローイ……」
ちょうど里菜の後ろから追い付いてきて、バツが悪そうにアルファードと里菜を見やっていたローイは、あわてふためいて、顔の前で左右に大きく両手を振った。
「ち、違う、違う！　俺じゃねえ！　俺は、何にもしてねえよ！」
「ローイ、どういうことだ。どこへ行っていた。何があったんだ」
アルファードに、静かだが妙に迫力のある口調で問い詰められて、ローイはびびりながら、事の次第を白状した。
黙ったまま聞き終えたアルファードは、里菜の肩に手をかけてそっと脇に押しやると、威圧するようにローイの前に進み出た。
「ローイ。なんでリーナを連れ出した。リーナを良く思っていないものがいるのは、お前だって知っていたはずだ。どういうことになるか、分からなかったのか？」
こうして向かい合って立つと、ローイの方が、アルファードより

頭半分近く背が高いのだが、それにもかかわらず、アルファードのほうが大きく見える。横幅があるせいもあるが、何といっても、迫力で、断然、アルファードのほうに歩があるのだ。存在感の大きさが、まるで違う。

ローイは思わず一歩後ずさりながら、口だけは負けじと反論した。

「リーナを良く思わないやつがいるからって、それはしょうがないことだろ？　俺のことだって、良く思わないやつは大勢いるが、それでも俺はこうして大手を振って闊歩してるぜ。リーナがほんのちょっと避暑にでも来ただけだってんなら、いいんだぜ。自分のことを良く思わないようなやつらとは、顔を合せないままで済ませることもできるさ。でも、この村でこれからずっと暮していくつもりなら、いつまでもそういうやつを避けて通るわけにはいかねえだろ？

まあ、俺だって、いきなりこんなことになるとは思ってなかったけどさ、さっきのは、リーナがほんとうにこの村の住民になるためには、いつかは通らなけりゃならない道だったんだよ。リーナには気の毒だったけど、リーナはあんたが思ってるより、ずっと強いんだ。リーナはこれからもこの村で、嫌なやつとだってそれなりに付き合っていかなくちゃならねえんだ。それが人生ってもんだろうが！」

「ローイ、開き直りはよせ。お前の人生論など、聞くつもりはない。お前が人生についてどう考えていようとかまわないが、その考えをリーナに押し付けて、彼女に辛い思いをさせる権利は、お前にはないだろう」

言いながらアルファードは、さらに一歩、ローイに詰め寄った。

ローイは、後ずさりながら喚いた。

「俺は別に、リーナを辛い目に会わせようと思って連れ出したわけじゃないさ。たまたまそういう結果になっちまっただけでさ。俺はただ、リーナも家に閉じこもってないで、たまには外で気分転換したほうがいいと思ったんだ。ずっと前に、村を案内するって言っておいて、まだ、してなかったしさ。……あんた、リーナに、外に出

るななんて無体なこと言ったんだってな。リーナはそんな横暴に、おとなしく従ってること無いんだ。それこそ、あんたには、そんな権利は無いんだ！」

「外に出るなといったのには、理由がある！　リーナには例の力が……」

「『例の力』ったって、リーナはもう、それはすっかり抑えられるようになったじゃねえか。俺だってずっと訓練に付き合ってたんだから、よく知ってるんだぜ。そんなの、あんたの言い訳だろう！　あんた、リーナを、一生ここに閉じ込めておくつもりかよ！　そうしてあんたが選んだ無難な人間としか会わせないつもりか？　あんたはリーナの、何だ？　あんたにそんな権利があるのか？　リーナは子供じゃないんだぜ。むろん、あんたのペットじゃない。ちゃんとした人間だぞ。リーナがどこに行って誰と会うかは、リーナの自由だろうが。あんたが決めることじゃないだろ！　それを、あんたは……」

アルファードは、無言でローイの胸倉を掴んだ。

それまで呆然と立っていた里菜が叫んだ。

「やめて、アルファード！」

アルファードはローイを突き離して里菜の方に向き直った。里菜を見つめるその目は厳しかった。いつもの里菜なら、目を伏せてしまっただろう。

けれど里菜は、涙に濡れた目をまっすぐに上げて敢然とアルファードを見つめ返した。

瞳はまだ濡れていたが、涙は止まっていた。さっきから、本人をそっちのけで言い合うふたりを見ているうちに、里菜の心はスッと冷静になっていった。霧が晴れるように、物事がよく見えるようになった気がした。

「ローイを責めないで。あたしは、ローイにむりやり引きずっていかれたわけじゃない。自分で歩いていったのよ。何もローイのせいなんかじゃないんだから！　あたしは自分で村へ行ったの！」

不動で立っているアルファードの静かな全身から、突然、目に見える閃光であるかのように、激しい怒りが奔った。里菜は、思わず、首をすくめた。

だが、その激情の気配は、燃え盛る炉の扉を一瞬開けてまたすぐに閉めたように、すばやく影を潜めた。それはあまりにも一瞬の出来事だったので、アルファードの背後にいたローイは、気がつかなかったほどだった。

アルファードは、自分の逆上を恥じるように、あるいは自分を落ち着かせるように、静かに目を伏せ、すぐにまた目を上げた。

「リーナ……。ローイをかばっているのか。君は、辛い思いをしたのではないか？」

「そりゃあ、辛かったわ。でも、それはほんとうに、ローイのせいじゃないし。それにあたし、もう、大丈夫だから。さっきは泣いたりして、ごめんなさい。それから、約束破ってごめんなさい」

「……」

「でも、あたし、今日はこんなことがあったけど、村へ行ってよかったと思っているの。ローイの言うとおり、あたしは、ああいう人たちとも、付き合っていかなきゃならないんだもの。……あたし、今まで、あたしのこと、あんなふうに思ってる人がいるって、知らなかった。でも、知ってよかったわ。だって、知らなくちゃ、その人と仲良くなろうと努力することも出来ないじゃない。ね、アルファード。あなた、このあいだ言ったでしょ？　あたしが何を知り、何を知らずにいるべきかを、あなたが決めてはいけなかったって」

「ああ。俺はどうやら、また同じ過ちを繰り返していたようだ」

アルファードは、静かに言った。怒りの気配は消えていた。

「アルファード。あたし、いつかはオードおじいさんとも仲良くなれるように、頑張るから」

きっぱりと言う里菜を、アルファードは、初めてみるようにまじまじと見た。

「俺は、本当に考え違いをしていたらしい。……リーナ。君は、強

い」

里菜は、涙の名残りを手で拭い去り、アルファードを見上げて微笑んだ。

ローイは、複雑な表情で、一歩下がったところから黙ってふたりを見ていた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十三場（1）

空は灰色に曇り、今にも雪が降り出しそうだった。

山の村は、まもなく本格的な冬の季節を迎えようとしている。雪はすでに何度か降ってはいるが、まだ、積もったことはなかった。けれど今朝、アルファードが空を見上げて、今日は雪が積もるかもしれないと言っていた。

里菜は窓辺に立って、曇った窓越しに外を眺めていた。

窓に嵌っている厚手の硝子板は、実は、あちらの世界で言う硝子ではなく、この世界で産する方解石に似た鉱石を魔法で加工・強化したものらしい。厚みがあるせいもあって、やや透明度が低く、本来は硬度の低い鉱石を魔法で強化したものであるためか、実際の硬さのわりに見た目はどことなく柔らかい印象で、里菜はいつも、氷砂糖を連想する。楽しい気分の時には、お菓子の家の窓みたいだとか、なめてみたら甘いかもしれないなどと、つい空想したくなる、独特の表情のある硝子板である。

その、氷砂糖を板にしたような厚手の硝子を通してみる外の世界は、白っぽく霞み、少し歪んだ輪郭が二重三重にぼやけて、夢の中の景色のように曖昧だ。明かり取りの役にはたつが、はっきり言って、外の景色を見る役に立つような窓ではなく、いつまでも眺めていたからといって何が見えてくるわけでもない。

里菜は、暖炉の前に引き返し、敷き物に座って、隣に寝そべっているミュシカの背中をなでた。

しんしんと冷え始めた、灰色の冬の午後。部屋には里菜とミュシカしかいない。

（アルファード……）

里菜は溜息をついた。

（どうか、無事に帰ってきて……）

里菜の心がわかったのか、ミュシカも主人の安否を気遣うように、

くぅん、と鳴いた。
アルファードは、イルドの村に、ドラゴン退治に行っているのだ。
今朝、イルドからの救援の依頼を受け取ったアルファードは、ローイを含めて四人の自警団員を選び出し、馬で疾走していった。その中には、誇らしそうなミナトの姿もあった。
自警団の用に供される馬は村の共有財産で、乗用にするだけでなく荷車も引くがっちりした馬だ。サラブレッドのようにスマートではないが、それはそれで力強い美しさを持ち、自警団員らによって充分に手入れされている。村にはこうした乗用馬は五頭しかいないので、よその村でのドラゴン退治は、基本的に五人で行なわれるのだ。
ドラゴンの皮で作られた鈍い銀色の防具を身につけ、盾と剣を持った馬上のアルファードの姿は、雄々しかったが、なんだか少し怖くって、里菜はその時、アルファードの近くに行くことすらできなかった。
「じゃあ、行ってくる。心配はいらない。留守を頼む」と、馬上から、まるでどこかの家の薪割りでも手伝いに行くようにあっさりと言うアルファードに、里菜は、両手を固く握り合わせ、少し離れたところから黙って頷くことしか出来なかったのだ。
それが今は、悔やまれる。
本当は、アルファードに駆け寄って、無事を祈る言葉を、何度も何度も言いたかった。
もっとも、アルファードのほうは、そんな大袈裟な見送りかたをされたくはなかっただろう。急いでいたのだし、それに、たぶん、アルファードにとっては、ドラゴン退治は、ありふれた日常の肉体労働なのだ。
ドラゴンの皮で身を鎧ったアルファードの姿を思い出して、里菜は、少し身震いした。
身体だけでなく顔の半ば以上までをマスクのようなもので覆って中の人間の姿を隠してしまうその防具は、何かひどく不吉な印象を

里菜に抱かせたのだ。
銀色のドラゴンの鱗に包まれて、アルファードは、まるで彼自身が、一頭の凶々しいドラゴンに変わってしまったかのようだった。近寄ってはいけない、危険で荒々しい、異質な生き物に。
（ドラゴンを倒すには、ドラゴンの力がいるんだわ）
里菜は、漠然とそんなことを思った。
（でも、アルファードには女神様がついているから、ドラゴンの皮を着て、ドラゴンの力を身につけても、心までドラゴンになって飛んでいってしまうことはない。アルファードは、きっと、帰ってくる。ドラゴンなんかに負けない。だって、前に牧場にドラゴンが出た時は、防具もなしに、たった一人で退治したんじゃない。今日は防具も付けているし、ローイや自警団のみんなが一諸なんだから）
自警団員たちの頼もしい姿を思い浮かべて、里菜の心は、ほんの少し落ち着いた。
あの宴会の時の彼らしか知らなければ、彼らが一緒だからと言って安心することは出来なかったかも知れないが、里菜は、一度だけ、自警団の訓練の見学に連れていってもらったことがあったのだ。
その時の彼らは、あの酔っ払いと同じ連中とは思えないほど機敏で真剣で、実に頼もしそうに見えたし、アルファードが彼らをリーダーとして実によくまとめ上げているのは、素人目にも一目瞭然だった。
アルファードは、特に威張るでも怒鳴るでもなく淡々と指揮を取っているし、団員たちもアルファードに特別丁寧な口をきくわけでもないのだが、それでもアルファードがみんなから尊敬され、信頼されていることが、自然と伝わってくるのだ。あのチームワークがあれば、ドラゴンなんか、怖くないに違いない。
里菜は、『自分の』アルファードの、板についた指導者ぶりが誇らしかった。
が、二度目からは、もう、アルファードは、里菜を連れていってくれなかった。

ただ女の子が見ているというだけで、それが別に気のある娘でなくても、意味もなく妙に張り切ってしまったりするのが、若者の習性である。

「君が悪いわけじゃないんだが、女の子が見ていると、雰囲気が浮ついて、やりにくい」と言うアルファードに、里菜は口を尖らせて抗議した。

「だって、自警団には、女の子もいたじゃない」

自警団には、ミンのほかにも何人か娘たちがいて、アルファードは、彼女らに、ほかの団員に対するのと全く変わらない態度で稽古をつけてやっていたのである。

だが、アルファードは頑として譲らなかった。

「それはそうだが、彼女らは、同じ団員だ。訓練の時は、みな、いちいち彼女らを、女だからどうだなどと、思っていない。だが、見物人となると、話が違う」

というわけで、里菜はしぶしぶ、見学を諦めた。

アルファードはそれから何回も、自警団の訓練に出ている。イルゼールの自警団は、どこよりも訓練が行き届いているのだ。

それでも、いざアルファードがドラゴン退治に行ったとなると、不安が募らないわけはない。

（女神さま、あなたのおさな子を、守ってください）

目を閉じて、里菜は祈った。

それから里菜は、いきなり立ち上がった。

「おそうじ、しよう！」

ミュシカが薄目を開けて里菜を見上げ、そのまま、また目を閉じる。

里菜は、水滴のついた窓を、ごしごしと布で拭き始めた。実は、さっきも窓を拭いたばかりである。

ローイもいないし、ドラゴンがこっちへ飛んでこないとも限らないので子供たちは家に閉じ込められていて、今日は『タクジショ』もお休みだ。里菜は朝から、家事もろくに手に付かず、かといって、

落ち着いて座ってもいられず、こんなふうに意味のない動作を繰り返しているのである。

窓を拭いていたはずが、里菜はまた、もしやアルファードが帰ってはこないかと、細い指を硝子板に当てて窓の向こうを透かし見る。半透明の窓越しの景色はぼんやりと霞んでいるし、家に向かってくる道は、こちらから見ると緩い下り坂で、遠くまでは見えない。とうとうがまんできなくなった里菜は、窓拭きの布を放り出した。

「たきぎ、持ってこよう！」

里菜は、ショールを羽織ってドアを出た。ミュシカが、寝そべったまま首だけ回して里菜の後ろ姿を目で追い、軽く尾を振りながら見送った。

外に出ると、里菜はまず、坂の上から道の向こうを見渡した。やはりアルファードの姿はなかった。

里菜は溜息をついて裏庭に回り、納屋から一抱えのたきぎを持って、家の正面にもどって来た。

そこに——さっきまで誰もいなかったところに、黒いマントを纏った人影があった。

大きなフードが、顔をすっぽりと覆い隠している。

里菜は、立ちすくんだ。その目が、大きく見開かれ、抱えていたたきぎが、腕からすべり落ちた。

フードの下の暗がりの奥から、声がした。

「やっと、見つけた……。お前が、そうか」

里菜は、声も出せずに立ち尽くした。

これは自分の悪夢から出てきた影ではないか。悪夢の中の黒い影が、現実の世界に、いつのまにかするりと紛れ込んできていたのではないか。あのフードの下に、人間の顔はなく、ただ一面の闇だけがあって、その闇を入口として、この、昼間の世界に、悪夢の中から無限の闇が流れ込み、世界中を黒く塗り込めて、すべてを悪夢に変えてしまうのではないか——。

混乱した頭の中で、とっさに、そんな思いが揺らめいた。

「死ね！」
マントが翻り、短剣が閃いた。人影が、倒れ掛るように、里菜にぶつかって来た。
その瞬間、フードが飛び、顔があらわになった。
それは人間の女、おそらくは中年の女の顔だった。
相手が肉体を備えた現実の人間であると分かったとたん、それまで悪夢めいた恐怖に絡み取られてすくんでいた里菜の身体が、ふっと、動くようになった。
悲鳴を上げて飛び退いた里菜のショールの裾を、短剣が掠めた。
女の肩が里菜にぶつかり、女は短剣を構えたままよろめいて、里菜の脇を擦り抜け、地面に膝をついた。
里菜の悲鳴を聞いたミュシカが、異変を察して、激しく吠えながら、内側からドアに飛びついた。ドアがガタガタと揺れている。
だが、ドアは内開きだから、ミュシカが内側から体当たりしても開かないはずだ。
家に駆け込もうと思ったら、ドアを開ける一瞬のあいだ、黒衣の女に至近距離で背を向けることになる。かといって、反対に村への道を駆け降りても、一番近いヴィーレの家にたどり着くまで、多分、助けを求める相手はいないだろう。
（納屋に逃げ込むしかない！）
とっさにそう判断した里菜は、女がゆらりと起き上がるよりさきに、裏庭に向かって駆け出していた。
逃げながら、里菜は不思議に思っていた。なぜ、自分の方が足が早いのだろう。なぜ、自分に短剣がよけられたのだろう。自分は決して運動神経がいいほうではないのに。
肩越しに振り向いて、追い掛けてくる女を見た里菜は、女が息をきらし、よろめくように走っているのに気がついた。まるで、弱りきった病人だ。
（逃げきれるかもしれない……。納屋に逃げ込んで内側からドアを抑えれば……。それにあそこには、武器になる鋤　《すき》も入っ

ている！）

だが、その時、里菜は、女が走りながら左手を上げるのを見た。ローイが火の玉を作り出す時にいつもする、お馴染みのポーズだ。

里菜は足を止め、女に向き直った。わざわざ向き直ったのは、里菜がまだ、相手に背中を向けたままで魔法を消すことができるかどうかを試したことがなかったからだ。

女の手の中に炎が浮かびかけた瞬間、里菜は叫んだ。

「消えろ！」

足を止めた女は、信じられないように自分の手を見た。そして、もう一度手を上げた。こんどは最初から、炎が生まれなかった。

「バケモノめ！」

混乱と怒りに上ずった声で叫ぶなり、女は、狂ったように短剣を振りかざして里菜に向かってきた。

その形相に、里菜は背筋が寒くなるのを覚えた。

女は、確かに狂っていた。

病的に黄ばんだ肌、こけた頬、すべてに生気が感じられない中で、黄色く濁った白目の中の焦点の定まらない虚ろな瞳だけが、熱に浮かされたような異様な輝きを帯びている。おそらくは、その目に宿る狂気だけが、抜け殻のような肉体を支え、動かす力になっているのだ。

覚つかない足取りで迫ってくる女は、グロテスクな操り人形を思わせた。

女が纏っている絶望の気配には、どこか、あのガイルと通じるものがあったが、ガイルには、同時に、透き通るような悲しみが感じられたのに対し、この女から感じられるのは、狂った憎悪と殺意、醜い妄念だった。

おぞましさに悲鳴を上げ、くるりと女に背を向けてふたたび走りだそうとした里菜は、地面に足を取られて転倒した。起き上がる余裕もなく、身体を捻って振り向いた里菜の目に、覆い被さるように間近に迫った女の黒衣が映った。

女はマントを翻し、ひきつった笑いとともに、里菜の上に短剣を振りあげて叫んだ。

「わが王よ、あなたの僕（しもべ）の、永遠の忠誠の証（あかし）、御覧あれ！」

第一章＜エレオドラの虹＞　第十三場（2）

里菜は、目を見開いて震えながら、手でいざって下がろうとしたが、身体が動かない。

「悪魔め！　死ね！」

叫びと同時に、女は短剣を、里菜の上に振り降ろそうとした。

その瞬間。

「ビュン！」と風を切る音がして、里菜の目の前を何かが過った。

それは短剣にぶつかり、女の手から短剣を弾き飛ばしていった。

短剣とともにカランと地面に落ちたのは、一本の薪だった。

女は、手首を押えて顔を歪めながら、憎悪に満ちた視線で、薪が飛んで来たほうを振り向いた。

その視線を追った里菜は、地面にへたりこんだまま、呟いた。

「アルファード……！」

腰に剣を帯び、家の横に仁王立ちになったアルファードの頼もしい姿が、安堵の涙に滲んで見えた。

ドラゴンを退治し、詰め所に盾と防具を置いて帰ってきたアルファードは、家の前の坂の途中で、めったに吠えないミュシカの尋常ではない吠え声を聞きつけ、坂を駆け上ると、全速力で、喚き声の聞こえる裏庭に回りこんだのだ。

女が、短剣を拾って、アルファードに向けて構えながら叫んだ。

「邪魔を、するなァーッ！」

アルファードは、剣を抜きすらしなかった。

女の威嚇を無視して猛然と突っ込んできたかと思うと、左腕を前にかざしながら、ふっと身体を沈め、躊躇なく女に体当たりしたのだ。

女が構えていた短剣は、アルファードの左手首の幅広の腕輪に受け止められ、腕の一振りで弾き飛ばされた。

アルファードにあっさりと取り押えられ、両手をまとめて捻り上

げられた女は、つやのない白髪混じりの髪を振り乱しながら絶叫した。
「離せ！　離せェーッ！　わたしは使命を、使命を……！」
女が喚きながら暴れるのを、まるで気にするふうもなく一見無造作に押え込みながら、アルファードは、まだへたりこんだままの里菜に、落ち着いた声をかけた。
「リーナ、怪我はないようだな。立てるか？」
「うん……」
「それじゃあ、悪いが、納屋に縄があるから、捜して持ってきてくれないか」
「え？　う、うん……」
里菜はあわてて、ふらふらと立ち上がると、納屋に入っていった。
すぐにアルファードは、女の腕を後ろ手に捻ったまま、抑えた声で尋ねた。
「お前はタナティエル教団のものだな？　これはアムリードの命令か？」
アムリードというのは、ヴェズワルに住み着いたタナティエル教団の一派――都ではタナティエル教団ヴェズワル派と呼ばれ、このあたりではヴェズワルの山賊と呼ばれている――の指導者である。この辺では、宗教団体の指導者というより山賊の主領として、誰でもその名を知っている。
女はアルファードのほうを振り向くと、唐突に笑いだした。笑いながら、女は喚いた。
「アムリードごときの命令じゃない！　神が自ら私に使命を与えたんだ！　わたしは選ばれた！　選ばれたんだ！　あの、バケモノめ、バケモノめ、殺してやる……。あの娘は、わが王の復活を妨げるために、この世界に侵入してきたんだ！」
もし手荒な尋問をしなければならないようなら里菜が見ていないうちに素早くすませたいと思っていたアルファードは、この女を問い詰めるのに手荒なまねをする必要はないらしいと、少しばかりほ

っとしたが、同時に、何を聞いても無駄だということも理解した。
（完全に狂っている……。ジレンの麻薬だな）
ジレンは、もともとはこの国の北部特有の植物で、その葉からは、強い幻覚作用がある麻薬の一種が取れる。無論、禁制の品だが、ヴェズワルのタナティエル教徒たちが、北部から持ち込んだジレンを森の奥で密かに大量栽培しているらしいということは、この辺では子供でも知っている。標高の高いこのあたりでは、北部原産の植物も、よく育つのだろう。事実、彼らのほとんどはこの麻薬に侵されていて、アルファードは自警団長として、山賊との攻防の中でそういう連中を大勢見てきた。
もっとも、こんなにひどい状態のものが山賊行為に加わっていたことはないが、この症状は間違いようもない。精神を蝕むだけでなく、他の麻薬類と比べても肉体の消耗が特に激しいのが、ジレンの特長だ。一種独特の甘ったるいような体臭も、この麻薬に蝕まれたものに共通の特徴として、アルファードにとっては馴染み深い。
女は、口の端から泡を吹き、半ば死人を思わせるやせ衰えた顔の中で目だけを異常にぎらつかせて、うつろな笑いを響かせ続ける。
アルファードは、嫌悪と哀れみにかすかに顔を曇らせて、正視に耐えぬ女の狂態から、思わず目を反らした。
この時、アルファードは、彼らしくもなく、ほんの少しだけ油断した。相手は麻薬に蝕まれ、痩せさらばえた非力な中年女であり、すっかり狂って判断力も失っているはずだったのだ。
ところが女はアルファードのわずかな隙を見逃さず、意外な素早さで行動を起こした。アルファードが顔を背けた瞬間、女は突然、それまでのまるで手ごたえのないもがきかたが嘘のように、信じられないような力でアルファードを突き飛ばし、かたわらの地面に落ちている短剣に手を伸ばしたのだ。
それは、女の狂気が、その衰弱した肉体から絞り出した最後の力だったのだろう。
アルファードも、同時に短剣に手を伸ばしたが、女の手のほうが

一瞬早かった。
「バカなことはよせ！」
女に飛び掛かりながらアルファードが叫ぶのと、
「死者の王よ、御許に！」と叫ぶなり、女が自分の首筋を掻き切ったのが同時だった。鮮血が吹き出した。
アルファードはすばやく女を捕えると、上体を支えて地面に座らせ、首の動脈を押えて止血の処置をとった。女は、神経を病んで痛みすら既に感じないのか、ただうつろな視線を宙に徨わせながら、抵抗もやめて、ぐったりとアルファードにもたれていた。アルファードのシャツが見る間に血に染まっていく。
ちょうど納屋から出て来て、この様子に立ちすくんだ里菜に、アルファードが叫んだ。
「リーナ！　大急ぎで、誰か人を呼んできてくれ！」
「う、うん、分かった！」
里菜はおろおろと駆け出していった。
アルファードは、顔を曇らせて血まみれの女を見下ろした。
女はまだ息をしていたが、息をする度に不吉な音を立てて喉から血泡混じりの空気が漏れ、青ざめたその顔からは、すでに、一切の命の気配が消えかけていた。
――この女は、助からないだろう――
アルファードは、かすかに溜息をついて、瀕死の狂女から顔を背けた。

＊

一番近いヴィーレの家まで、誰にも出会えずに走り通した里菜は、庭先で何か作業をしていたヴィーレの父の姿を認めて、余力を振り絞って叫んだ。

「おじさん、大変！　女の人が、怪我をして……！　すぐに来て！」
そしてそのまま庭に駆け込むなり、その場に坐り込んでしまった。
ヴィーレの両親が包帯や薬草の入った袋を手に慌てて飛び出していったあと、ヴィーレが里菜を助け起こし、肩を抱くようにして家の中につれて入った。
ヴィーレは、暖炉の前に座った里菜に、気持が落ち着く薬草のお茶をいれてくれ、まだ震えている背中に後ろから肩掛を着せかけると、その肩掛ごと、里菜の肩を静かに抱いてくれた。その穏やかなぬくもりに、里菜が落ち着きを取り戻したころ、ヴィーレの母が、疲れた様子で一人で帰って来た。
「お母さん、怪我人は？」
ヴィーレの問に、彼女は黙って首を横に振り、里菜に向きなおって言った。
「リーナ、あなたは、もうしばらくここにいなさいね。あの女の人は、村の墓地に埋葬することになったわ。終ったらアルファードが迎えに来るから。それからね、あの人のことは、ただの物盗りってことにしてあるから、そのつもりで。なんだか変なことを口走ってたそうだけど、それを人に話しちゃだめよ。麻薬で頭がおかしくなってたんだから」
里菜は黙って頷いた。

＊

共同墓地は、村の北側の小高い丘の上にあった。
土を掘り返した跡も新しい狂女の墓には、仮の墓標として木切れが突き立ててある。
ただでさえショックを受けている里菜に死体を見せたくないというアルファードの配慮で、埋葬は、里菜がヴィーレの家で待ってい

るあいだに済まされていたのだ。
　埋葬を手伝った村の男たちには、ヴィーレの父が、この女はアルファードの家に忍び込もうとした物盗りで、里菜に見付かって襲い掛ったところをアルファードに捕えられ、処罰を恐れて自害したのだと説明していた。
　暮れかけた曇り空から、ひとひら、ふたひら舞い始めた雪が、盛り土の上でゆっくりと溶けて行く。その様子をぼんやりと眺めて立ち尽くす里菜に、アルファードが静かに言った。
「ここに、埋めた。あの女は、たぶん、ヴェズワルのタナティエル教団のものだが、かといって、山賊どもに遺体を引き取りに来いというわけにもいかない。――それにしても、哀れなことをした……。俺が油断をしたので死なせてしまった。どのみち、早晩死ぬところではあったろうが……。君も、祈ってやってくれ」
「うん……。黄泉（よみ）の大君よ、定めによりて死せる魂を、御許に安らわせ給え」
　里菜は、アルファードのまねをして頭を垂れ、教わったとおりの祈りの言葉を、ぎこちなく唱えた。
　さっきまで生きていた人間が、今は、死んで、この土の下にいると思うと、何か不思議な気持ちだった。
　短い祈りを捧げ終ったふたりは、足早に墓地を後にした。しばらく黙って歩いていた里菜は、ふいに思い切ったように尋ねた。
「ねえ、アルファード。あの人、どうして死んじゃったの？　ほんとうに、裁きが怖かったからかしら」
「いや、違うだろう。あの女は、たぶん最初から、死ぬつもりだったんだ。死に場所を求めていたんだと思う。女の手首を見たか？　魔王の刻印があったろう。その絶望を忘れるために麻薬に逃れ、結局は逃れきれずに、絶望の内に自らの命を絶つ――。よくあることだ」
「だって、あの人、自分が死にたいなら、何もあたしを殺そうとすることなかったのに、なんであたしを？」

「わからない。たぶん、君のうわさを聞いて、狂った頭で何か曲解し、誤った思い込みを持ってしまったんだろう。……君は、あの女に、何か言われたか？」

「うん、ええっと、たしか、やっと見つけた、とか、悪魔め、とか……。怖かったから、あんまり覚えてないけど、わけのわからないことばっかり。なぜ、あんなこと……。アルファードは、あの後、あの人から何か聞き出したの？」

「ああ、一応、尋問しようと思ったんだが、すっかり狂っていて話にならなかった。彼女の言っていたことは、どうせ狂人のたわごとだ。気にするな」

「うん、でも……。あの人、ナントカ教団の人でしょ」

「ああ、タナティエル教団だ。君は、あの女が、教団の差し向けた刺客ではないかということを恐れているんだな。だが、多分そうではないだろう。麻薬で繋ぎ止めた人間を暗殺者に仕立てることは、古来、よくあることといわれているが、それが本当だとしても、ジレンは駄目だ。ジレンに蝕まれたものは、使い物にならない。それに、君を油断させて近付いてから殺す気なら、ああいう、いかにも哀れを誘う、無力そうな女を使う意味もあるが、問答無用でいきなり切りつけるなら、教団にも、もっと腕の立つ屈強な男が、いくらでもいるはずだ。だいたい、いくらヴェズワルの連中がいいかげんで統制の取れていない集団だと言っても、教団の上層部が指示して暗殺を企むなら、せめて短剣に毒を塗るくらいのことはするだろう。特に、ああいう非力な女をあえて使う作戦なら、絶対に毒を用いたはずだ」

里菜は、アルファードの上着の裾を握りしめて、すがるようにアルファードを見た。

「でもアルファード、あたし、怖いわ。だって、やつらはもうあの家を知っているのよ」

「リーナ、怖がることはない。これからは、なるべく君を一人にしないようにする。どのみち、雪が積もるようになると、俺はあまり

仕事がなくなるんだ。たぶん、ずっと家にいられるだろう」

これを聞いて、里菜は顔を輝かせた。我ながら現金なことに、アルファードがそばにいてくれるという喜びのほうが大きくて、刺客に襲われたショックもほとんど吹き飛び、むしろ刺客に感謝したくなったほどだ。

「ほんと？　ほんとに？　アルファードがいてくれれば、何にも怖くないわ！　アルファードは世界一強いんだもの」

里菜は、うれしさのあまり、アルファードの腕にぶらさがるようにして、いきなり子どものように、ぴょん、と跳ねた。

が、アルファードのほうは、実はそれほど事態を甘く考えてはいなかった。

（あの女が教団上層部が送り込んだ刺客でないにしても、彼らがリーナの存在に、何か勝手な宗教的解釈を与えている可能性は否定できない。あの女も、何かそんなようなことを口走っていた。あるいは、教団自体がリーナの暗殺を計画していて、他のものを寄越そうとしていたのを、あの女が功をあせって勝手に突出した行動を取ったのかもしれない。ああいうやつらは、えてして思い込みが激しいから何をするかわからない。今後は本当に注意が必要だ）

難しい顔で考え込んでしまったアルファードに、里菜は困ってしまった。もののはずみでアルファードの腕を取ってしまったものの、アルファードがいつものようにすり抜けようともせず、かといって振り向いてくれるでもなく、よそを見て考え込んだまま、まったく反応がないので、どうしていいかわからなくなり、おずおずと手を離した。その時、ふと、彼がいつもつけている銀の腕輪が目に止まった。

そういえば里菜は、アルファードがこれを外しているところを見たことがない。たぶん彼も、寝るときやお湯を使う時にはこれを外すのだろうが、里菜はアルファードが寝ているところを見たことがないし、ましてや湯浴みするところなど、見たことがあろうはずもない。

里菜はずっと、彼が何のためにこんなものをしているのか不思議に思っていた。

アルファードは、どう見ても、わざわざおしゃれのために装身具を身につけるようなタイプとは思えないし、この村では、男性が装身具をつけることは特に奇異なことでもないが、かといって、つけているほうが普通というほどでもないらしい。何か宗教的な意味でもあるのかとも思ったが、別に、そういうわけでもなさそうだ。

ところが、今日、狂女を取り押さえた時に、アルファードはこれを防具がわりに使っていた。そういえば装身具というには武骨なデザインだし、もともと、そういう用途のものなのかもしれない。

そう思った里菜は、アルファードの注意を引きたくて、尋ねてみた。

「ねえ、アルファード。この腕輪、飾りじゃなくて防具だったんだ？」

無難な話題のつもりだったが、アルファードは、なぜか、ふいに顔をこわばらせた。

「いや……。そういう役にも立つが、これは、まあ、その、一種の護符なんだ」

「そうか、お守りなんだ。それでいつも肌身離さずつけているのね。でも、ほかに、こんなお守りつけてる人、いないでしょ。なにか、特別な由緒でもあるの？」

アルファードは、そっけなく答えた。

「ああ。……じいさんの、形見だ」

（そうか、死んだおじいさんのこと、思い出しちゃったんだ。悪いこと聞いちゃったかな……）と思った里菜は、ふうん、と呟いたきり、話を打ち切った。

日頃、どんなにやさしくしてくれても、どうやらアルファードには、里菜に触れられたくない話題が、けっこう多いのだ。彼と、とりあえず友好的につき合って行くには、彼が口を出されたくないことや追求されたくないことを早めに察知して、それ以上踏み込まな

いのがコツらしいということも、里菜がこれまでに学んだことのひとつだった。

そんな、どこか心を閉ざしたようなところの残る彼の態度が、里菜は少しさびしかったが、自身もそれほど開けっ広げな性格というわけではない里菜には他人に干渉されたがらない彼の気持ち分かる気がするし、なによりも、里菜は、彼の心の中に無理やり踏み込もうとして拒まれるより、とにかくおとなしくして、あえて一歩控えていることで、今まで通り妹のようにかわいがってもらい、身近に置いてもらいたかった。

里菜は、どうしても、アルファードを失うわけにはいかないのだ。彼は里菜にとって初恋の人であると同時に、この見知らぬ世界でただひとりの保護者と信じ切り、頼り切っている相手なのだから。

「リーナ、急ごう。早く帰らないと、今夜は雪が積もるぞ」というアルファードの声で、自分がいつのまにか遅れかけていたことに気づいた里菜は、あわてて足を速めてアルファードの背中に追いついた。

日没と共に、ぐんぐん気温が下がりはじめたようだった。昼間、ちょっと薪を取りに行くつもりで軽装で外に出たままの里菜は、小さく身を震わせた。

前を行くアルファードの、毛織のマントの下に潜り込み、大きな身体にそっと身を寄せれば、きっと、暖かいだろう。里菜は、そのぬくもりをぼんやりと夢想したが、もう一度、さっきのようにアルファードの腕に縋ってみる勇気は、もう、無かった。

「リーナ、寒くないか？」

まるで里菜が震えたのが見えたかのように、アルファードが振り返り、里菜が寒さに身を縮めていることを一瞥で見てとると、マントを脱いで渡してくれた。

そして、礼を言ってマントを受け取った里菜がそれを頭から被るのを見届けると、身ぶりで里菜を促して、そのまま、また歩き出した。

里菜は黙って後を追った。
暗くなり始めた空から、雪が、しだいに速度を増して降りしきり始めていた。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十四場（1）

アルファードの言葉どおり、その夜は、その年初めての本格的な雪になった。

夕刻、ふたりが家に帰りついたころにはすでに地面をうっすらと白く染め始めていた雪は、それからますます激しさを増して降りしきり、闇が地上を覆い尽くす頃には、あたりはすっかり雪景色に変わっていた。

暗い夜空から音もなく舞い落ちる雪が、ほの白く、すべてを埋めていく。裏庭に残る女の血の跡も、今は雪の下だ。

暖炉の燃える部屋の中で、里菜は、さっきから、窓にへばりついて、水滴を手で拭っては、窓から漏れる淡い光の中を通りすぎていく雪を見ていた。

雪は、あとからあとから降りしきり、いっこうに小止みになる気配もない。この分では明日の朝までに、かなり積もることだろう。この村では、この程度の雪は、珍しくもないという――なにしろ、冬の間中、雪に埋もれているのだ――が、東京でなら、何年かに一度の大雪といったところだ。

香草のお茶を前にテーブルに座っているアルファードが、里菜に声をかけた。

「リーナ、そんなに雪が珍しいか」

「うん。あたしの住んでたとこじゃ、めったに降らなかったの。ね、アルファード、あした、雪合戦しよ！」

「えっ……。いや、俺は……。子供たちを誘ってするといい」

「だって、子供が相手じゃ、思い切りぶつけられない」

「それなら、ローイを誘えばいい。あいつならきっと、大喜びで、子供と混ざって雪合戦をするだろう」

「いや。あたしは、アルファードとしたいの！」

アルファードは、困った顔で黙ってお茶を飲んでから、もう雪合

戦の話は勝手に打ち切って、こう言った。
「それはともかく、もう遅い。そろそろ寝たほうがいい」
「うん、もうちょっと、もうちょっとだけ……」
アルファードは、しかたないな、といった表情で、また、お茶を一口飲んだ。
別に特にお茶が飲みたいわけではないのだが、間が持たなくて、他にすることもないので、とりあえずお茶を飲んで時間稼ぎをしてみたという風情だ。
普段ならもう寝ている時間なのだが、今夜、里菜はこうして、夕食のあと、雪にかこつけていつまでも居間でぐずぐずしている。
実は、里菜は一人で寝室に行くのが怖いのだ。なにしろ、昼間、あんなことがあった後だ。
それで、なんだかんだと言い訳をつけて寝室に行くのを引きのばしているのだが、いくらなんでも、そろそろ寝る時間だ。アルファードだって、普段ならもう寝ている時間なのだから、里菜が彼の寝室でもある居間から出ていかないせいで、いつまでも寝られなくて迷惑しているだろう。
里菜は、溜息をつきながら、窓から離れようとした。
その時、ふいに、里菜は目を見開いて、もう一度窓を覗き込んだ。
窓の外に、揺れる灯りを見たような気がしたのだ。
確かに、それは、灯火だった。たぶん、角灯の明りだ。
降りしきる雪の中、窓の明りを横切って、角灯を手にした三つの黒い人影が静かに家に向かって来る。半透明の窓板が、ゆっくりと近づいてくる黒い行列を不規則に歪ませ、揺らめかせ、二重三重に滲ませている。
もちろん顔は見えなかったし、服装もはっきりとはわからなかったが、これが村の誰かなんかであるはずがないと、里菜は直感した。
それほど、それは、幻想的な、非日常的な光景だった。
きっと、雪と闇と灯が、すべてをそんなふうに見せるのだろう。

その、音のない行列は、まるで黄泉からの使いを思わせた。
「アルファード！　誰か、来る……」
里菜の声にアルファードが素早く立ち上り、里菜の腕を掴んで部屋の奥に引っぱり込んだ。そうしておいて、自分は、滑るように窓辺に寄った。
窓の外を一瞥するなり、彼は、里菜の背中を押して囁いた。
「リーナ、向こうの部屋に隠れろ！」
アルファードは、戸口に駆け寄り、壁に掛けてある剣を取って、内開きのドアの脇に立った。
すぐに、コツコツと、ドアを叩く音がした。
「誰だ」
アルファードは剣を抜いて構えながら、短く誰何した。
ドアの向こうで、穏やかな、年経た声が、それに応えた。
「私どもは、タナティエル教団のもの。シルドーリンから参りました」
「シルドーリンだと？　ヴェズワルじゃないのか」
「はい。最高導師ギルデジードからの使いです。あなたがたに危害を加えるつもりはございません。武器も持っておりません。お話ししたいことがあって参りました。どうか入れてくださいませ」
「タナティエル教団になど、用はない。帰れ」
「話を聞いていただけるまで帰りません。一晩中でも、明日、あさってまででも、ここにおります」
これにはアルファードも困った。
このあたりでは、ヴェズワルの山賊のせいで、タナティエル教団の評判は非常に悪い。ただでさえ里菜をうろんな目で見るものがいるというのに、こんな連中に家の前に居座られては、どんな噂が立つか分かったものではない。そのうえ、相手は、どうやら老人だ。家の前で凍死でもされては、かなわない。
アルファードは、細く開けたドアの隙間から、外にいるのが三人だけなのを確認し、用心深く抜き身の剣を手にしたまま、ドアを開

いた。

黒衣の三人は、旅行用の長い防水マントを背中に払い除け、両手を広げて、武器もなく魔法を使うつもりもないことを示しながら、ドアの内側でアルファードがつきつけている剣の前を、恐れる様子もなく一人ずつ通り過ぎて部屋に入ってきた。

そのあいだ中、アルファードは、油断なく剣を構え、彼らの動きを見守っていた。

先頭に立って入ってきたのは、今、口をきいた、彼らのリーダー格らしい老人である。腰は曲がり、小枝のように痩せ細った小柄な姿だが、その動きには、どこか威厳が感じられ、フードの下の顔にも品位と知性が宿っている。教団内でかなり高い地位にあるものかもしれないと、アルファードは思った。

後に続く二人は、対象的にがっちりした体格の若い男たちだった。おそらく、高僧の護衛をかねた従者なのだろう。

三人とも、衣装はほとんど同じだが、そういえば、死の前ではみな平等というのがそもそもの基本であるこの教団では、本来、高位の導師も一般の教団員も同じものを着るのが原則のはずだ。

最後の一人が後ろ手にドアを閉めると、先頭の小柄な老人がフードを外し、静かにアルファードの前に進み出て片膝を折り、地面にうずくまるように頭を下げた。タナティエル教団独特の礼の姿勢である。黒いマントがふわりと広がり、肩に積もっていた雪が床に落ちて水に変わる。

後ろの二人も老人にならって、うっそりと跪(ひざまず)き、三人は、

「あなたの心に平安がありますように」と、静かに唱和した。

それから老人は、跪いたまま顔を上げ、黙って油断なく目を光らせているアルファードを見上げて言った。

「私はタナティエル教団の導師、ゼルクィールと申します。このように強引にお目通り願いました無礼をお許し下さいませ。私どもはあなたがたにお会いするために、シルドーリンから遠く旅して、今夜、やっと、ここを探しあてたのでございます。どうぞ、その剣を

お収め下さい。私は御覧の通り、無力な年寄りでございます。後ろのものは当教団の若い導師で、ここまで私の護衛をしてまいりましたが、よろしければ、話が終るまで外で待たせておきます」

「いや、いい。挨拶はいいから、用があるなら、早く用件を」

あいかわらず抜き身の剣を手にしたまま、それでも構えは解いて、アルファードはぶっきらぼうに答えた。

老人は、立ち上りながらアルファードの腕輪に目を止めると、もう一度アルファードの目をじっと覗き込んで、呟いた。

「では、あなたが、＜銀のドラゴン＞なのですね……」

アルファードの目の中に、一瞬、暗い炎が燃え上がった。拳が、関節が白くなるほどぎゅっと握り締められた。

アルファードは、これまでも、＜ドラゴン退治のアルファード＞という二つ名で呼ばれるのが、実は、あまり好きではなかった。自分の名とドラゴンを結びつけて口にされるのが、何故とも知らず不快だったのだ。今、こうして容赦なく『ドラゴン』と呼ばれて、突如身の内から、自分でも意外な程の、眩暈のするような怒りが沸き上がり、彼は一瞬、茫然とした。

「どういう意味だ」

抑えた声で鋭く問うアルファードに、小柄な老人は、ひるむ気配もなく穏やかな表情を見せて、こう言った。

「あなたが今まで、我が君の花嫁たるべき幼い女王を守護してくださったことに、私どもはみな、深く感謝いたします。あなたは、ご自分の役割を正しく果たされました」

「何のことだ。誰の話をしている」

「そちらの部屋に、娘御がおられましょう。会わせていただきたい」

「会って、どうする」

「女王はいまだ幼く、その心は半ばまどろみの中にあって、御自分が何であるかを御存知ない。それをお教え申し上げた上で、シルドーリンにお連れいたします。無論、お望みなら、女王の守護者たるあなたも、ご一緒に来ていただいてもよろしゅうございます」

「そしてシルドーリンで、リーナが生贄として殺されるところを、見ていろというのか。黄泉にいる死者の王の花嫁になるというのは、そういう意味だろう。あるいは、体のよい囚われ人として、一生、シルドーリンの洞窟の奥にでも丁重に幽閉しておく気か」

「私どもは、生贄などという野蛮な行為はいたしません。ましてや、我等の女王となるべき娘御を、どうして殺めたりなどいたしましょう」

「では、お前らは、殺すつもりもなくて刺客を差し向けるのか」

「刺客、ですと？」

「とぼけるな。昼間、黒衣の女が来た。あれはお前たちの教団のものだろう」

それを聞くと、老人はうなだれて溜息をついた。

「ああ……。間に会いませなんだか……」

それからアルファードを見上げて、急くように尋ねた。

「しかし、女王は、ご無事だったのですね」

「ああ。あいにくとな」

老人は、アルファードの返答に込められたあからさまな皮肉はまったく無視して安堵の息を吐いた。

「それならば、ようございました。その刺客は、恐らく、ヴェズワルのものでしょう。ヴェズワルのものたちは、曲解した教義に＜御使い様＞の御言葉をこじつけて解釈し、女王について、誤った考えを持つに至ったらしいのです。……彼らをお許し下さい。心の弱いものは、しばしば道を誤ります。ヴェズワルのものたちが、常日頃いろいろと無法な行為を働き、周辺の方々にご迷惑をおかけしていることは存じておりますが、お恥ずかしいことに、もはや我々には彼らを抑える力がないのです。力及ばず、刺客を事前に差し止められませなんだこと、無念にございます。……して、その女は？」

「死んだ。自害だ」

老人は、再び溜息をつくと、頭を垂れて静かに祈った。

「黄泉の大君よ、定めによりて死せる魂を、御許に安らわせ給え」

祈り終った老人に、アルファードは言った。
「女は、ついさっき、村の墓地に埋葬した。ねんごろに弔ってやったが、お前たちのやりかたで埋葬し直したいというのなら、遺体を掘り出して引き渡してもいいが」
「いいえ、結構でございます。死後の平安は、弔いの形式に左右されるようなものではなく、その者の心次第でございますから。道を誤った信徒に、そのように情けをかけて下さり、かたじけなく存じます」
「お前たちの内輪揉めになど興味はないが、そのとばっちりで迷惑を被るのは、二度とごめんだ。わかったら、帰れ」
「いえ、まだ話は終っておりませぬ。娘御に、会わせていただきたい」
「だめだ。帰れ」
アルファードは、威圧するように一歩進み出て、再び剣を構えた。が、黒衣の老人は、引き下がらなかった。
「帰りませぬ。あなたには、我等と女王を隔てる権利はありませぬ」
「なぜ、リーナを女王などと言う。リーナのことを、どこで知った。彼女はただの少女にすぎない」
「女王は、まだ目覚めておられぬのです。先頃、＜御使い様＞の御言葉がございました。いまだ目覚めぬ幼き女王が、異世界より降臨し、南の聖地で銀のドラゴンに守られていると。そこにいらっしゃる娘御がその女王であることは、間違いないことでございます」
老人は、いきなり、奥の扉に向かって声を張り上げた。
「女王よ。お聞き下さい。……神代の終焉以来、女王の御帰還を待って、王は眠り続けておられます。眠れる王を目覚めさせ、悪夢の中から救い出すことができるのは、女王よ、あなたをおいて、ありません。我等の王に復活をもたらし、その花嫁となり、王と並んで新しき世を治めるために、あなたは、この世界に降臨なさったのです。どうか私どもと、ともにおいで下さい。……女王よ。聞こえておいでですね？　どうぞ、こちらへお出まし下さいませ。ここにお

られる若い方には、あなたに命令する権利はありませぬ。あなたには、我々に会うかどうかを御自分で決める権利がおありです」

バタン、とドアが開いた。

頬を紅潮させ、黒い瞳を煌めかせた里菜が、薄い胸を傲然と反らして立っていた。

その姿が、どこか、いつもより大きく見えて、アルファードは目をしばたたいた。

「女王よ……」

黒衣の三人は、再びさっと跪き、そろって深々と頭を下げた。

その頭上に、里菜はいきなり、場違いな金切り声を投げ付けた。

「何よ、何よ！　黙って聞いてれば、人のことを勝手に、誰やらの花嫁になるとか決めつけて！　あたしは、いやよ！　あんな、ロリコンの、人さらいの、ばか笑いの死神じじいのお嫁さんになるなんて！」

第一章＜エレオドラの虹＞　第十四場（2）

アルファードもあっけにとられたが、跪いていた三人も、ギョッとした。

呆然と顔を上げた老人は、言葉を失ってまじまじと里菜を見つめ、後ろの二人は、互いに顔を見合わせた。

ややあって、老人が言った。

「女王よ……。おっしゃることが、よく分かりませぬが……。その、じじい、とは？」

アルファードも、眉をひそめて問い掛けた。

「リーナ、その『ろりこん』というのは、何だ？」

里菜の言葉は、どういう仕組みでか、この世界の言葉に自動的に翻訳されて相手に伝わるらしいのだが、この世界にない物事を指す言葉などは、翻訳されずにそのまま伝わるらしい。どうやら、この言葉も、『翻訳』されずに伝わったようだ。この世界にも、それに相当する言葉はあるはずだが、きっと、代用するにはニュアンスが違うのだろう。

「え？　まあ、その、『あちら』の世界での、ののしり言葉よ。気にしないで」

困って答える里菜に、アルファードは厳しく言った。

「リーナ。俺は、君がローイなどとつきあって下品な悪態を覚えるのではないかと心配していたのだが、どうやら、そんな心配をしなくても、君は『あちら』の世界で、悪態のつき方は十分に覚えてきていたというわけだな。だいたい、じじい、などという無作法な言葉は、相手が誰であろうとも使うべきではない！」

こんな時に言葉づかいについて大真面目に説教を始めるアルファードの神経に呆れつつも、里菜は思わず赤面した。

「だって……。本当なのよ。本当に、嫌なやつなんだから！　強引だし、アタマ、おかしそうだし、ヘンな魔法使うし。それにあたし

のこと、勝手に自分のものだなんて決めつけて、ひとりで妻だとか花嫁だとか言ってて、思い込み激しいし、自信過剰っぽいし……」

やっと気を取り直した老人が、かすれた声で尋ねた。

「女王よ。あなたは、その……、黄泉の大君に、お会いになられたので？」

「オオキミだかオオカミだか知らないけど、あの死神野郎になら、会ったわよ。あなたたちが迎えにこなくても、自分からあたしに会いに出てきたわ。ずっと、ただの夢だと思ってたんだけど……」

アルファードが口を挟んだ。

「死神とは、タナート神のことか？」

「なんだか知らないけど、自分のこと、『魔王』だって言ってたわ。でも、それは、本当の名前じゃないって」

その言葉を聞いて、黒衣の三人はざわめいた。

アルファードはそんな三人のことなどおかまいなしに、里菜を厳しく問い詰めた。

「リーナ。そのことを、俺に話さなかったな」

「だって、夢だと思ってたんだもん。わざと隠してたわけじゃないの。あとで話すわ」

まだ何か里菜に言おうとするアルファードを遮るように、老人が、突然それまでの慇懃な態度を忘れたかのような性急さで、強引に話に割って入ってきた。

「そのお方は、どのようなお姿であらせられましたか？　どのようなことを仰せになられましたか？」

懇願するように、せき込むように尋ねた老人の、しわ深い顔の中の半ばまぶたに閉ざされた目には、不思議な渇望の色が浮かんでいた。

「ええっと、いろいろ、変なことを、よ。赤ちゃんと結婚したいとか。ヘンタイよ、ヘンタイ！」

若い僧が、目を丸くして、思わず口を挟んだ。

「ハァ？　赤子と結婚、ですか？」

「そう。あとね、ええと、何だか、この世界に再生を、とか、新しい神代（かみよ）の楽土、とか、そんなようなこと」

それを聞いた黒衣の三人は、

「おお……」と、どよめいたきり、黙り込んでしまった。

若い僧たちの目に、感極まったように涙が浮かんでいる。

老人はと見ると、床に頭を擦りつけるようにうずくまったきり、動かない。

心配になった里菜は、屈んで老人のフードの下を覗きこんだ。

「おじいさん？　どうしたの、大丈夫？　……あたしがあなたたちの神様のことヘンタイとか言ったからショック死しちゃった――なんてこと、ないわよね？」

老人は顔を上げた。その目から、とめどなく涙が流れている。目の前に、心配そうな里菜の顔があるのを見た老人は、再びうずくまり、嗚咽を漏らした。

「おお、女王よ、女王よ……。私などのことを、そのように気に止めて下さるとは、もったいない……」

あまりの感激ぶりに、里菜は薄気味悪くなって、後退りながら言った。

「ねえ、その、女王っていうの、やめてよ。なんか、ほら、ハイヒールはいて鞭持ったお姉さんみたいじゃない」

気味悪さと困惑の余り、とりあえず、何か茶化してみないではいられなかったのだ。

老人は、キョトンとして、涙に濡れた目をしばたたいた。

後ろの若い僧たちも、うるんだ目を見交わして、ぼそぼそと呟きあった。

「はあ……。鞭、ですと。何の象徴でしょうか」

「やはり、女神の御言葉は、我々凡夫には、理解できぬのですな……」

そしてまた、感動の面持ちで里菜を見つめて、神妙に次の言葉を待った。

里菜は、何だかうんざりして、少しばかり投げやりに言った。
「とにかくね、悪いけどあたしは、女王なんかじゃないの」
そのあとに里菜は、ものの弾みで、ついうっかりと、こんなことを言ってしまった。
「それに、あたし、あんな死神のお嫁さんになんか、死んでもなる気、ないから。あたしは、ここにいるアルファードのお嫁さんになるって、もう決めてるの！」
その場にいた全員が、一瞬、凍り付いたように沈黙した。
里菜は慌てて、赤面しながらアルファードを盗み見たが、彼は、何も聞こえなかったようにそっぽを向いて黙ってしまった。
二人の若い僧たちは、とほうもなく恐ろしいことを聞いたように、怯えた顔を見あわせた。まるで、そこに居合わせた全員にいまにも天罰が下って何か恐ろしいことが起こるのではないかという顔だ。
しばらくして、最初に気を取り直した老人が、こわごわ確認した。
「アルファードというのは、そこの若い方のことですな？」
「そ、そうよ。今、そう言ったじゃない！」
「それで、その方も、そういうつもりでいらっしゃるので？」
「し、知らないわ。あたしが勝手に、そう決めてただけだから。でも、あたしは本気よ。アルファードとでなけりゃ、一生、誰とも結婚なんかしないんだから！」
「では、別に、あなたがたがすでに結婚のお約束を交わしていなさるとか、あるいは、その……、事実上、夫婦として暮しておられるとか、そういうわけではないのですな」
「そうよ。どうせ、片思いよ。悪かったわね！」
里菜はやけになって叫んだ。
アルファードはあいかわらずむっつりと横を向いて、何も聞こえないふりをしている。
老人は、そんなふたりを、年老いた叡智の宿るまなざしで見比べてから、それまでの恭しい態度とは違う、不思議にやさしい面持ちで里菜に向き直った。

「娘御よ、あなたはおいくつですかな？」
「……十七よ。それがなんだっていうの？」
「そうですか……。それならばもう、結婚なさってもおかしくはないお年頃ですな。私の娘も、十八で嫁に行きましたが……。けれどあなたは、どういうわけか娘が七つかそこらの、ほんの幼い少女だったころ――おおきくなったらお父さまのお嫁さんになる、などと言ってくれていたころを、私に思い出させますな。その娘も、十年も経ったらそんなことはすっかり忘れて、遠方に嫁に行ってしまったわけですが……。あなたの、その方への今のお気持は、何かそんなようなものではございますまいか。十七とおっしゃいましたが、それにもかかわらず、どういうわけか、あなたは、まだ幼い。大人になればそんな気持など、きっと忘れてしまいましょう」
　里菜は、自分の真剣な想いにケチをつけられたと感じて、何か痛烈なことを言い返してやろうかと口を開いたが、自分を見つめる老人の顔に慈父のような微笑みが浮かんでいるのを見て気勢をそがれ、口を尖らせて、こう言っただけだった。
「そんなことないわ。大人になればって言ったって、あたしは今だって、もう、子供じゃないもん。アルファードとだって、歳、そんなに違わないんだから」
　老人はそんな里菜に、ますます愛しげに微笑みかけて言葉を続けた。
「ですが、今、あなたがその方を見る目は、私には、父親を見上げる幼い娘のそれのように見受けられますな。今のあなたがたを無理に引き離すことは得策ではなさそうですが、そんなことをしなくても、いずれ、時が来れば、あなたは自分から、その方のもとを旅立つでしょう。なぜなら、娘御よ、あなたの運命の相手は、ほかにいらっしゃいます……」
　それまでそっぽを向いていたアルファードが、向き直って老人を睨みつけた。それに力を得て、里菜は叫んだ。
「だから、あたしはそいつが嫌いなの！　もう、放っといてよ！」

アルファードが、おもむろに口を開いた。
「……と、いうわけだ。リーナは、シルドーリンになど、行かない。そうだな、リーナ？」
「うん」
「では、こいつらを帰していいな？」
「うん！」
アルファードは進み出て、里菜を背後に庇うように老人の前に立ちはだかり、低く言った。
「失せろ」
老人はうずくまったまま動かず、顔だけを上げて、じっと里菜を見た。
アルファードの声が、凄みを帯びた。
「失せろ！　リーナは、魔王の花嫁になど、ならない！」
剣の切先が、老人の目の前につきつけられた。それを無視して、老人は、懇願するような視線を里菜に向けた。
「女王よ。どうしても、来てはいただけないのでしょうか。この若い方も、護衛として同行していただいてもよろしいのですよ」
「行かない」
里菜は素早く、きっぱりと言い切った。
「さようですか……。ならば、しかたがありませぬ。……女王は、すでに王と巡り会っておられる。なれば、我等がお連れしなくとも、女王はいつかお目覚めになり、御自分のなすべきことをお知りになりましょう。女王よ、その日を、お待ち申し上げております。では……」
そういうと老人は、突きつけられた剣先を全く無視して立ち上がり、今度はアルファードに言った。
「お若い方。ヴェズワルのものに、くれぐれもお気をつけ下され。私はこれからヴェズワルに説得に参るつもりですが、おそらく彼らは、私のいうことなど聞かぬでしょう。どうか、目覚めの時まで、我等に代わって女王をお守り下さい」

アルファードは、老人を睨みつけて、唸るように言った。
「きさまに言われなくても、リーナは、必ず、この俺が、ずっと、守る！　とっとと、失せろ！　二度と俺の前に姿を見せるな！」
その剣幕に、里菜は少し驚いて身をすくませた。たしかに、あの老人は、アルファードに対しては少々慇懃無礼だったかもしれないが、だからと言って、そんなことで、普段温厚なアルファードがここまで怒るとは思えない。アルファードが、『俺が、ずっと』のところを、一語一語区切るようにしてやけに強調してくれたので、どういうつもりでそう言ったのか、その真意はわからないながらも嬉しかったが、一方で、ただ礼儀正しく話をしていっただけでここまで怒鳴られるようなことをしたわけでもない気がする老人が少し気の毒になって、里菜はドアの隙間から顔を出し、雪の中に出ていく小さな背中に声をかけた。
「おじいさん。雪がひどいから、気をつけてね」
老人は振り返り、かすかに微笑んで頷いた。そしてそのまま、静かに去っていった。

第一章＜エレオドラの虹＞　第十四場（3）

アルファードは、まだ、燃えるような目で、黒衣の一行を睨み続けていた。自分の中でふつふつと燃えたぎる怒りのほとんどが嫉妬からくるものだということに、彼自身も気づいてはいなかった。

自分では決して認めないだろうが、彼は、そもそもの出会いの時から――女神の淵で里菜を見出したあの時から、里菜を、発見者である自分のものと思い込み、自分は女神から彼女を託されたのだと自負し、彼女に対する自分の正当な保護者としての義務と権利を一瞬たりとも疑わずに来たのだ。

そんなふうに、これまでひそかにすっかり自分のものと信じこみ、掌中の玉として大切に守ってきたつもりの里菜が、誰か他の者の花嫁になると言われたこと、しかも、その相手が、神様だかなんだか知らないが、女神に任ぜられた正当な保護者である自分の知らないうちに里菜と会って、ずうずうしくも里菜を自分のものだなどと一方的に宣言していたらしいことが、おもしろくなかったのである。

嫉妬といっても、それは、恋敵の出現に慌てた男というよりも、まだ子供だと思っていた娘が自分に内緒でいつのまにか作った恋人に求婚されていたと知った父親のような気持ちだったのだが、いずれにしても彼がこれまで知らなかった、自分でも理解できない種類の感情で、訳がわからなかった彼は、よけいに、目の前の黒衣の老人に怒りを向けるしかなかったのだ。

しかし、ドアを閉めて振り返った時、アルファードはすでに冷静な表情を取り繕っていた。

その冷静さの中に、いくらかの厳しさが混じっていたので、里菜はビクッとした。

自分のさっきの告白について、アルファードに何か言われるのかと思ったのだ。

さっき、内緒のつもりの想いをつい口に出してしまったとき、里

菜はアルファードがそれを聞かなかったことにしてくれるらしいので、むしろほっとしていた。何も言わないということは、自分の気持に応えてくれないまでも、それを黙認はしてくれるということだと思ったのだ。

けれども、そうではなく、これからきっぱり、はねつけられるのだろうか……？　望みはないと、はっきり宣告されるのだろうか？

だが、いくぶん堅さの混じる声でアルファードが言ったのは、全然別のことだった。

「さて、リーナ。さっきの、『夢』の話を、聞かせてくれないか」

里菜が、例の夢を、魔王がアルファードに関して語った内容と自分が感じた不思議な陶酔のことは抜かして語り終えるまで、アルファードは、冷めたお茶を前に、ただ黙って聞いていた。

「ねえ、アルファード。あたし、どうすればいいの？　ずっと、これ、ただの夢だと思ってたから、忘れてしまおうとしていたんだけど……」

助けを求めるように里菜が尋ねると、アルファードは、やっと口を開いた。

「それで君は、少しでも、そいつの花嫁になろうという気があるのか」

「まさか！　さっき言ったじゃない。絶対、いや！」

「それなら、放っておけばいい。花嫁になる気がなければ、それが夢だろうと、そうでなかろうと、北の荒野へ行く必要も、シルドーリンに行く必要もないんだから」

「でも、もしまた、魔王が夢に出てきたら……」

「無視すればいい。君は、その時も、はっきり断わったんだろう？　そうしたら、そいつは、無理強いはせずに、消えたんだろう？　何回でも、断われればいい」

「でも……」と言って、里菜は黙りこんだ。

もう一度、あの誘惑に抗し切れるか、里菜は自信がなかったのだ。けれどそれをアルファードには、言えない。

その思いを見透かしたように、アルファードは淡々と言い聞かせた。

「夢の中では、俺が助けに行くことはできない。君の心がすべてなんだ。君が、本当はどうしたいのか、それをよく考えるんだ」

「うん……」

アルファードに話せば何もかも何とかしてくれるような気がしていたが、何しろ、夢だかなんだかよくわからない、あやふやな話である。いくらアルファードが強くて頼りになるといっても、そんなあいまいな夢の中の出来事まで具体的に解決出来るわけがないのは当然だろう。

これ以上、この件で指示を請おうとしても無駄だと思った里菜は、話題を変えた。

「ねえ、アルファード、さっきのおじいさんたち、何なの？　タナティエル教団って、山賊のことじゃなかったの？」

「いや、君にも話したと思うが、彼らはもともと、宗教団体だ。ただ、ヴェズワルに住みついた一派が、このへんで山賊行為を働いているというだけだ」

「あの人たち、ここの人たちと違う神様を信じているの？　さっき、ここのとおんなじお祈りの言葉を唱えていたみたいだけど」

「ああ、違う神というわけじゃない。神は同じなんだが、ただ、その神について少し考え方が違うんだ」

「どういうふうに？」

「そういえば、君は、神々のことを、よく知らないのだったな。まず、そのことから話そう。この世界には、生命の女王エレオドリーナと、死の王タナートという、二柱の神がいる。小さな神々、例えばその土地その土地の土着の土地神や、風の精霊、海の主、森の王のようなものは他にもあれこれいるのだが、大きな、主だった神は、この二柱だ。俺たちは皆、出産や結婚式の時は女神に祈りを捧げるし、葬式の時は黄泉の大君タナートに祈る。それは、国中、どこでも同じだが、ただ、女神の聖地に近いこのあたりでは女神に関係す

る行事や祈りの数が多いし、男神の聖地のある北部では、その逆なんだ。

その北部でも特にタナート神を強く信仰しているのが彼らタナティエル教団だ。タナティエル教団は、タナート神の聖地であるシルドーリンで生まれた。教団自体はずいぶん昔からあるものなんだが、ここ数年のあいだに急速に信者を増やし、同時にいろいろと変質しているらしい。『タナティエル』というのは、古い言葉で『タナートを待つもの』という意味だそうだ。彼らは、タナート神の復活の時を待っているのだという」

「復活って、タナート神は死んだの？　神様も死ぬの？」

「いや……。そのへんのことは、今まで、俺にもよくわからなかったんだが……。俺だけでなく、たいていの人が、なんで彼らが復活などと言うのか訳がわからずにいたんだ。でも、さっき彼らは、たしか、タナート神は眠っていると言っていたな。それで彼らは、その眠れる神が復活する時を待ち続けているというわけだったらしい」

「神様が復活すると、どうなるの？」

「さあ。それも、よくは知らない。なんでも、その時こそ彼らの待ち望むような世の中になるとかいうことらしい。さっき、君も言っていただろう、新しい世がどうとか。それがどういう世なのか、俺は知らないが。

ただ、ヴェズワルの連中は――、ああ、ヴェズワルの山賊というのは、この近辺のものが彼らを蔑んでいう呼び方で、彼らは一般にはタナティエル教団ヴェズワル派と呼ばれているんだが、やつらはこのことで、こんな主張をしているらしい。神が復活したとき、地上に新しい神代の王国が築かれ、そこでは自分たちが、まっさきに神の近くに座れるのだと。

なぜかというと、自分らが＜魔王の刻印＞を持っており、それが新しい世での救いのしるしだということらしい。彼らは、魔王こそ黄泉の大君、つまりタナート神のもうひとつの姿で、刻印を受けるということは神に選ばれたということなのだと言っているんだ。そ

して、刻印のないものでも、ヴェズワルに来て、信仰のあかしとして手首に刻印に似せた刺青をしてもらえば神の近くに座る権利が得られると言って信者を集めているらしい。俺もその刺青は何度か見たことがある。

だが、どうも、それはタナティエル教団の正統の主張ではなくて、ヴェズワル派独自の主張らしいんだが、その正統の主張のほうがさっぱり宣伝不足で、ヴェズワル派の主張のどこまでがシルドーリンと同じで、どこからが違うのかもよくわからない。第一、ヴェズワル派の主張のほうが分かり易い。だから最近ではそっちのほうが広く知れ渡ってきて、タナティエル教団全体を、憎むべき魔王を崇拝する邪悪な教団だと考えるものも増えている。彼らがシルドーリンでひっそりと暮しているあいだは、決してそんなふうには思われていなかったんだが。

だいたい彼らは、もともと謙虚な人たちで、死の前では誰もが平等だと唱え、自分たちが神に選ばれたものだとか、そんなことは一言も言っていなかったはずなんだ。だが、さっきの話からして、シルドーリンの連中も、魔王とタナート神を何か関係のあるものだと思っているのは間違いなさそうだな。

それに、彼らが昔から魔物や魔王の刻印を恐れていないのは確かだ。

シルドーリンでは昔から、刻印を受けたものを教団に受け入れ続けてきた。魔王の刻印はこの世の生活への過剰な執着を断ち、信仰に入る助けになるから、それを受けたことを喜び感謝しろと言って、彼らを祝福するのだそうだ。かと言って、刻印のないものに刺青をするとかいうことは、なかったはずだが。

そういうわけで昔から、刻印を受けたものは、聖地シルドーリンに巡礼に出て、そのままタナティエル教団に入ることが多かった。実際、あそこでは、刻印を持つものでも普通に長生きし、穏やかな人生を送れることが多かったと聞いている。だから、タナティエル教団が最近急に大きくなったのには、魔王の刻印を受ける者が増え

たせいもあるんだ。
　今、タナティエル教団にはいろいろと良くない評判がたっているが、昔は彼らは、普通の人にも結構尊敬されていたものなんだ。だが、ヴェズワルの連中が山賊行為をするようになって、この辺ではタナティエル教団の評判は非常に悪くなった。もっとも、しばらくして、ヴェズワルの連中はタナティエル教団内の異端分子というか、過激分子で、古くからの穏健なシルドーリン派と内輪揉めをしているらしいこともわかってきたんだが……。さっきの話では、ヴェズワルとシルドーリンの関係は、思っていた以上に悪化しているらしいな。ようするに、組織が急に大きくなりすぎて、まとまらなくなったんだろう」
「アルファード、ずいぶんくわしいのね」
「ああ、そうでもないが……。彼らは謎の多い連中で、外部のものには、詳しいことはあまりわからないんだ。ただ、ヴェズワルの奴らは俺たち自警団の宿敵だから、俺は、彼らについてはそれなりに研究しているつもりだし、彼らと接触する機会も多いから、他の人よりは情報も入る。彼らは大抵、ちょっとおかしくなっているから、捕えられた時などは、尋ねもしないことまで自分からいろいろと喚きちらすことが多いんだ」
「ねえ、捕まえた山賊は、どうするの？　そういえば、昼間の女の人とか、縄で縛ったらどうするつもりだったの？」
「どうもしないさ。ただ、一通り尋問してから、プルメールにある監獄まで護送するだけだ。護送したって、形ばかりの取り調べのあと、そのへんにほうり出されてしまうだけかもしれないし、監獄に入っても、こそ泥程度じゃ、すぐに追い出されるだろうが。最近は治安が悪くなって、監獄も満員だから、こそ泥なんかを長く入れてタダ飯を食わせる余裕はないんだ」
「なんだ、それならたいして怖くないじゃない。それが怖くて自殺したなんて、よくみんな信じるわね」
「いや、どこの自警団でも俺たちのようにするわけじゃない。よそ

では、プルメールまで連れて行くなどという手間はかけずに、罪人を私刑にしてしまうことも多い。うちも昔はそうだったらしいが、ひどい時は縛り首だ。そこまでいかなくても、かなり残虐なことをする連中もいるようだ。特に、この辺のものはヴェズワルの連中には恨みを持っているから、たとえ罪状がただのこそ泥でも、それがタナティエル教団のものとわかれば、どんな目にあわせるか分からない。あの女がそれを恐れたとしても、おかしくはない。

しかし……。あの女といい、今の連中といい、ああいうやつらに回りをうろつかれるとまったく困る……。こんなことが、今後もあるようだと、また君のことをとやかく言うやつが増えるだろう。そうでなくとも、いろいろと……」

続く言葉を呑み込んで、黙り込んだアルファードに、里菜も心配になって尋ねた。

「ねえ、アルファード、あの人たち、ここへ来る時、誰かに見られたかしら？」

「ああ、たぶんな。それに、来る時に見られていなくても、君を探し歩いていたようだから、その時に人に何か尋ねたりしただろう」

「やっぱり、それって、まずいのよね？」

「ああ、かなり、まずい。この辺じゃあ、やつらの黒衣は、魔物の灰色のマントと同じくらい忌み嫌われているからな」

アルファードは、そのまま腕を組み、宙を睨んで考え込みはじめた。

しばらくして、アルファードは、何か心を決めた様子で急に顔を上げ、まっすぐに里菜を見つめた。

「リーナ……」

「は、はい！」

アルファードの様子があまり真剣なので、里菜は思わず緊張して答えた。

「リーナ、その……。突然の話で、驚くと思うんだが……。いや、でも俺は、何も思いつきでこんなことを言うわけじゃないんだ。も

う、ずっと前から真剣に考えていたことなんだ……。そう、たぶん俺は、あの日、女神の淵で初めて君を見つけた時から、いつかこういう日が来ると知っていたんだ……」

（え、なに、なに？　アルファードは何を言い出すの？）

アルファードがふいに椅子から立ち上がり、テーブルを回って自分のほうにやってくるのを、里菜は目を丸くして見つめていた。

里菜の前に立ったアルファードは、里菜の手を取って、椅子から立ち上がらせた。

愛しいアルファードに手を取られ、いつになく熱いまなざしで瞳をじっと覗き込まれて、里菜は、夢の中で魔王の大鎌に呪縛された時のように動けなくなった。目を反らすこともできない。声も出ない。気が遠くなりそうだ。

「ああ、その……。君が嫌でなければの話なんだが……。その……」

（え、え、え……。アルファードは何を言うの？　もしかして、さっきのあたしの告白と関係あること？　ええーっ、どうしよう！）

パニックを起こしかけた里菜の耳に届いた言葉は、しかし、里菜が予想だにできなかったようなものだった。

アルファードは、里菜をひたと見つめて、力強く、こう言ったのだ。

「……リーナ。一緒に軍隊に入らないか？」

「へっ？」

里菜の頭の中が真っ白になった。

真っ白になった頭のなかに、ただひとつ浮かんだ考えは、こうだった。

（目がテンになるって、こういうことを言うのね……）

（――　第一章・完　第二章に続く　――）

第一章＜エレオドラの虹＞　第十四場（3）（後書き）

第一章完結しました。ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。
次回は、これまでのまとめとして『第一章あらすじ』をアップします。
その後で第二章に入ります。
今後も引き続きお付き合いくださると嬉しいです。

第一章あらすじ（1）（前書き）

とっても展開の遅い、このお話。
連載に初めから付き合ってくださっている人の中には、「あんまり話の進み方が遅いので、もう最初の方を忘れちゃったよ」という方も、きっといらっしゃるはず（？）
よかったら、第二章がアップされるまでの箸休めに、ざっと目を通してみてくださいませ。

第一章あらすじ（1）

＜その1　序章から第七場まで＞

異世界『イルファーラン』。そこは、この世界より少し古風な――でも中世というほど古めかしくもない――、穏やかな自然に恵まれた牧歌的な世界である。そこに住む人々は基本的に温和で争いを好まず、数十年前に世界を一つに統一して以来、長い平和を維持している。社会制度は比較的近代的で、人々の暮らしぶりや価値観等も、少しだけ昔のこの世界と、さほど変わらない。

が、大きな違いもあった。この世界の人々は、基本的に誰でも魔法が使えるのだ。

ただし、魔法と言っても、万能の強大な力などではなく、威力や範囲がごく限られたもので、日常生活をちょっと便利にする程度の、ささやかな技にすぎない。

そんなイルファーランの、美しくのどかな高原の村、イルゼールに住む羊飼いのアルファードは、自分の素性を知らない。幼い頃の記憶がないのである。

この村には、古来より、ごく稀に、異世界の人間が迷い込んでくるあって、そういう人間を、村人たちは＜マレビト＞あるいは＜女神の幼子＞と呼び、村に恵をもたらす女神の御子とみなして温かくもてなし、受け入れつづけてきた。アルファードもまた、十二年前、村はずれの川辺で村の老人に拾われた、＜マレビト＞だったのだ。

当時、十歳ほどの少年だったアルファードは、老人や村人たちに温かく育まれて、逞しい若者に成長した。育て親の老人が病没した

後は、老人が残した家で一人暮らしを続けながら、村人たちの温情で羊飼いとして生計を立てている。

その一方で、彼は、実は四年前に首都イルベッザで開かれた全国武道大会の剣技の部のチャンピオンであり、村を脅かす害獣であるドラゴンを何頭も弊して＜ドラゴン退治のアルファード＞と称えられる村の英雄でもある。

が、そんなアルファードには、ひとつの悩みがあった。彼には、一切の魔法が使えなかったのだ。

誰もが普通に魔法を使うこの世界で、通常、魔法は、ごく限られたことしか出来ない、ささやかな日常の技である。そんな中で、古来、＜マレビト＞だけは、一般に使われる＜普通の魔法＞と区別して＜本物の魔法＞と称される、常人を超えた特殊な力を持って＜本物の魔法使い＞と呼ばれるのが常だった。

ところが、アルファードは、＜マレビト＞でありながら、当然期待されていた＜本物の魔法＞どころか、誰もが使えるはずの＜普通の魔法＞さえ使えなかったのだ。

そのことに、密かな鬱屈を感じながらも、彼は、自警団長として、仲間の若者たちに慕われ、村人たちに頼られ、女神の御子として一目置かれながら、牧羊犬のミュシカとともに、おだやかな日々を送っていた。

そんなある日、村の、女神の司祭が死んだ。

生命の女神エレオドリーナの御座所といわれるエレオドラ山の麓に位置するイルゼール村は、古来から、女神を祭る聖地として、村の女性に司祭の地位を受け継がせてきたのである。

その、女神の司祭が、女神を祭る秋祭りの夜に、ひっそりと息を引き取ったのだ。

祭りは中止され、祭りの宴は、司祭の葬式の宴に成り代わった。

葬送の宴からの帰り道、アルファードは、何かの予感に導かれるままに、遠回りをして、村はずれを流れるエレオドラ川の上流、＜女神の淵＞と呼ばれる淀みに足を伸ばした。

＜女神の淵＞は、＜マレビト＞はみなそこに流れ着くと言われる伝説の場所であり、実際、十二年前、彼がこの世に現れた場所でもあった。彼は、昔、その川の浅瀬に倒れていたところを、育て親のレグル老に拾われたのである。

そこで、アルファードが見つけたのは、かつて自分が拾われた同じ浅瀬に気を失って倒れている、見慣れぬ服装の少女だった。少女が自分と同じ＜マレビト＞であることを確信したアルファードは、彼女を川から抱き上げ、自分の家に連れて帰る。

それが、彼らの物語の始まりだった。

少女は、東京都内の高校に通う十七歳の里菜。内気で奥手、やや病弱だが平凡な女子高生である。自分が普通の高校生であったということは覚えている彼女も、その自分がなぜ、突然異世界で目覚めることになったのか、その事情はわからない。何か、かすかな痛みの記憶があるだけである。

が、アルファードに抱き上げられ、家まで運ばれる間に、ぼんやりと意識を取り戻した彼女は、アルファードの腕の中で、不思議な安らぎを感じる。自分は、ふるさとに帰りついたのだ、と、理由もわからず、漠然と思う。そして、見知らぬ世界ではじめて目にした人間であるアルファードに、強い依存心と淡い恋心を抱く。

アルファードが一人暮らしの家に連れ帰った里菜を介抱したのは、アルファードの隣家の一人娘、ヴィーレだった。

十九歳のヴィーレは、家庭的な、心優しい娘である。

彼女の父は村の世話役で、レグル老亡き後はアルファードの後見

人でもある。彼ら一家は、隣家で一人暮らしをするアルファードを何かと気にかけ、世話を焼いて、家族のように接してきた。そんな、名実ともに兄同然のアルファードを、ヴィーレはいつの頃からか、心密かに慕ってきた。

里菜がアルファードと共に暮らすことに決まったとき、彼女は内心でショックを受けるが、それでも、寄るべない身の上の里菜に優しく接することを自分に誓う。

目覚めた里菜は、アルファードから、リーナという名で呼ばれる。彼女が名乗った里菜という名前を、彼は、この世界にある、発音の似た名前に置き換えて聞き取ったのだ。彼らは、どういう仕組みでか、言葉が通じるのである。里菜は、新しい世界で生きることを決意し、新しい名前を受け入れる。

里菜とアルファードの、ぎこちない同居生活が始まった。

アルファードは、無口で武骨な男である。村人たちには非の打ち所のない人格者と信じられているが、実は、あまり人に心を開かない質でもある。また、生真面目一辺倒の朴念仁で、これまで浮いた噂一つ立てたこともない極端な堅物ぶりは、村の若者たちの間では笑いの種になっているほどだ。

小柄で童顔の里菜を幼い子供と勘違いして拾ってきた彼は、里菜の実年齢を知った後も、あくまで養女として扱おうとする。が、甘えた里菜に寄り添ってこられたりすると、動揺は隠せない。

里菜は、アルファードの自分に対する子ども扱いを物足りなく思う一方で、もともと異性に対しては極端に臆病だったこともあり、そんなはがゆい関係に、生ぬるい安心感を覚えてもいる。

そんな里菜に、恋する若者がいた。アルファードの年下の友人、

十九歳のローイことエルドローイである。
村一番の色男を自認する、陽気でお調子者の彼は、奇抜な服装と軽薄な言動で大人たちの顰蹙を買っているが、非常に気のいい若者だ。彼は、羊を放牧しているアルファードと里菜の元に足しげく通っては、里菜の『魔法の訓練』に付き合ってくれる。

アルファード同様に＜本物の魔法＞どころか＜普通の魔法＞さえ使えなかった里菜には、実は、ある特別な力があった。里菜は、自分の見ている前で使われる魔法を、自動的に無効にしてしまうのである。
日常生活が魔法の助けの上に成り立っているこの世界で、それは、大変困ることだった。その力を抑えることが出来ない限り、里菜は、存在するだけで皆の暮らしを乱してしまい、村人たちの中に入っていけないのだ。
里菜は、アルファードとローイの協力で、その力を制御出来るようになったが、それをきっかけに、ますますアルファードへの精神的な依存を強める。
ローイは、そんなふたりの関係を危ぶみながらも、自らの想いを里菜に告げられずに、友達として二人に接し続ける。

アルファードと里菜、ローイとヴィーレ、四人の若者は、内心にそれぞれの想いを秘めながらも、擬似家族的な温かい関係を築き、里菜は、幼い子供のように彼らに可愛がられて、世界の暗い部分は何も知らないまま、幸せな日々を送る。

が、長く戦いを知らずにきた平和なこの世界にも、実は、暗い影が忍び寄りつつあり、時の流れに取り残されたようなこの村さえ、例外ではいられなかったのだ。
そのことを、里菜が知った、最初のきっかけは、ドラゴンの飛来だった。

いつものように牧場で放牧をしていた二人の頭上に、ドラゴンの影が落ちた――。

――（第一章あらすじ2（第八場～第十四場）に続く）――

第一章あらすじ（2）

＜第一章第八場から第十四場までのあらすじ＞

里菜がイルファーランに来て一月ほどたった、ある日。里菜とアルファードが羊を放牧していた牧場に、ドラゴンが飛来した。アルファードは、里菜に羊の群れを任せ、剣を取ってドラゴンに立ち向かった。

ところが、彼が苦戦していると見た里菜は、隠れていろというアルファードの言いつけを破って、無謀にも加勢に飛び出してしまう。

里菜をかばおうとして窮地に陥ったアルファードを助けたのは牧羊犬ミュシカだった。アルファードは、背中に軽い火傷を負ったものの、ミュシカの加勢でドラゴンを斃した。その後、アルファードは、言いつけを守らず飛び出してきたことで里菜をきつく叱ってしまい、そのことを深く後悔する。

その夕方、ローイの采配により、アルファードの家で、おくればせながらの里菜の歓迎会を兼ねて、ドラゴン退治の祝賀会が開かれた。

その日、里菜は、はじめて、これまで親しく接する機会が少なかった自警団の若者たちや村の同年代の娘たちと仲良くなり、楽しい時をすごした。牧場で叱られてからアルファードとの間にあった微妙なわだかまりも、ローイの仲立ちもあって解消された。

また、その席で、里菜は、ローイとヴィーレが元許婚どうしであったことを知った。親同士の決めた許婚とはいえ幼い頃から仲がよかった二人だが、思春期になって、親の決めた縁組への反発などから、婚約を解消してしまったらしい。

その夜、里菜は、奇妙な夢を見た。自らを『魔王』と名乗る顔の

見えない黒衣の男が、里菜を『エレオドリーナ』と呼んで、自分の花嫁であると主張し、自分の城のある北の荒野に来いと招く夢である。

夢の中で、里菜は、『魔王』の振るう大鎌の輝きにわけもわからず魅了され、夢の中を流れる川の向こうに馬で連れ去られかけるが、すんでのところで正気を取り戻し、此岸に立ち帰る。

翌朝、アルファードは、里菜の手首に、それまで無かったはずの黒い痣を見つける。それは、この世界で＜魔王の刻印＞と呼ばれているものに酷似していた。

＜魔王の刻印＞とは、この世界に出没する『魔物』に触れられた痕である。

灰色の影のような姿の『魔物』たちは、以前からこの世界に潜んでいたが、これまでは、あまり人前に姿を現すことは無かった。それが、ここ数年、突如、北部を中心にひそやかに跳梁跋扈しはじめ、都にまで出没するようになって、人々を恐慌に陥れている。

魔物たちは、人間に直接身体的危害を加えることは無い。ただ、夜の闇にまぎれて、人の手首や肩などを軽く掴んでいくだけである。が、魔物に掴まれた箇所には黒い痣が出来、その痣を得たものは、必ず絶望に取り憑かれて、その多くは、自ら命を絶ったり、廃人となったりするという――。

里菜の手首に突然現れた痣は、ちょうど、夢の中で黒衣の魔王に掴まれた箇所だった。

けれど、里菜は、夢の中で魔王と向き合ったときに自分が感じた不思議な陶酔に後ろめたさを覚えていたために、その朝の奇妙な夢を、アルファードに話すことが出来なかった。里菜は、その痣を、元からあった古い傷跡であると主張してごまかす。

里菜は、この日、初めて、これまで楽しいばかりだと信じていたこの世界の影の部分をアルファードからいろいろと聞かされる。

ドラゴンの飛来が増えていること。近在に山賊が出没すること。そして『魔王』と魔物のこと。

『魔王』は、現在この世界を脅かしている魔物たちの主人と目される、伝説の存在である。黒衣を纏っているという以外は謎に包まれた存在で、北の荒野に住んでいるといわれており、北の荒野は、昔から、人間の立ち入ることの出来ない『結界』になっている。

現在、この国の北部は、魔物の侵攻によってすっかり荒廃し、北部から大量の避難民が流入した都も混乱に陥っているらしいという。

それらの事情のほかに、里菜は、アルファードが里菜の本名を『エレオドリーナ』だと思い込んでいたことを知る。エレオドリーナというのは、同名の女神にちなんだ、ごくありふれた女性名であり、リーナというのは、その名前の一般的な愛称だという。

毎年晩秋には終わる羊の放牧は、この年、ドラゴンの襲来をきっかけに早めに打ち切りになり、里菜とアルファードは、毎日、村で過ごすようになった。

アルファードは、毎日、村の共同作業や自警団の訓練に出かけるが、里菜の特殊な力が村人の仕事の邪魔になることを懸念して、それらの仕事に里菜を連れて行ってくれなかった。

一人で留守番をする里菜のもとには、ローイが村の小さい子供たちを連れて遊びに来るようになり、里菜は、自然と、アルファードの家で託児所のような仕事をするようになった。

そんなある日、それまでアルファードの言いつけを守って家の周りを離れずにいた里菜は、ローイに強引に誘われて、村の広場にパンを買いに出かけた。

その広場で、里菜は、居合わせた老人たちから、思いがけない排

斥を受ける。変わった髪や目の色を持つよそ者であり、魔法を消すという特殊な力を持つ里菜を、一部の老人たちは、彼女は女神の幼子であるとする司祭の言葉も聞かず、不吉な存在として恐れていたのだ。

ローイは里菜を庇おうとして老人たちと口論するが、里菜はローイを制して、そのまま帰ろうとする。

が、今度は、帰ろうとする里菜を、それまで黙っていた別の男が突然呼び止めた。病人らしい男は、里菜にナイフを差し出して、自分を殺してくれと懇願する。その場は、その男、ガイルの兄のとりなしで何事も無く納まるが、家に帰った里菜は、無断で出かけたことをアルファードに責められる。実は、アルファードは、里菜が一人で外出してこの種のトラブルにあうことを密かに危惧していたのだ。

それからしばらくたったある日、近在の村にドラゴンが現れ、アルファードは、ローイを含む自警団を率いて救援に向かった。

一人で留守番していた里菜は、薪を取りに庭に出たところを、突然、黒衣の女暗殺者に襲われるが、間一髪のところで帰宅したアルファードに助けられる。

捕らえられて自刃した女は、近くのヴェズワルの森に巣くって山賊行為を働いている謎の宗教団体『タナティエル教団』のものだった。が、アルファードは、里菜の暗殺は教団の指示に拠るものではなく、麻薬に精神を侵されて狂信に取り憑かれた女の独断行動だろうと推測する。

その夜、アルファードの家に、二人の従者を従えた黒衣の老人が訪れ、タナティエル教団の導師ゼルクィールと名乗る。彼らの話によると、ヴェズワルで山賊行為を働いている一派は、教団中枢から離反した新興勢力で、昼間の女もその一味であるという。また、彼

ら自身はヴェズワルからではなく、古くからの教団本拠地であるシルドーリンから来たのだという。

彼らは、隣室に隠れた里菜の存在をなぜか知っており、里菜のことを、彼らが『王』と呼んで崇めるタナート神――死者の王にして黄泉の支配者である、死を司る男神――の花嫁となるべく異世界から降臨した『女王』であると主張して、扉の向こうの里菜に、シルドーリンへの同行を呼びかける。彼らの主張によると、里菜こそが、神代の終焉以来眠り続けている彼らの『王』を目覚めさせ、彼と共に新しい世を治めるのだという。

黙っていられなくなって隣室から出てきた里菜は、彼らに、自分が『魔王』の夢を見たこと明かし、『魔王』の花嫁になる気は一切無いと告げる。アルファードは、里菜の発言を受けて老人たちを追い返す。

老人たちはおとなしく帰っていくが、既に『王』とめぐり合っているからには里菜はやがて自ら『王』の元に赴くだろうと言い残す。

老人たちが去った後、アルファードは、これまで魔王の夢を見たことを隠していた里菜を問い詰める。里菜はアルファードに夢の内容を打ち明け、助言を請うが、さすがのアルファードも、夢の中の出来事では、どうすることもできない。ただ、夢の中の魔王の誘惑を退け続けろと助言するのみである。

アルファードは里菜に、タナティエル教団について今まで知っていたことと、今回の老人たちとの会話で知りえたことを語る。彼らは、生命の女神エレオドリーナと並び立つ死の男神タナートを崇拝する古い教団であるが、どうやら、今では、死を司る死神ではあっても公正で正当な黄泉の支配者として古くから崇められているタナート神と、世界に絶望をもたらす邪悪な『魔王』を、何らかの形で

同一視するに至っているらしい。

これらを里菜に語った後、アルファードは、突然、里菜の手を取って、思いがけない提案をする。

それは、一緒に軍隊に入らないかという、なんとも唐突な提案だった――。

第二章〈シルドーリンの宝玉〉　第一場（1）

――――――――――――――――――――
――
（――引用――）

翠（みどり）なるものよ
永遠（えいえん）に　清らなるものよ
そは　地底に眠る古きシルドーリンの宝玉
失われし　神代（かみよ）の夢の　ひと雫（しずく）

眠りよ　ぬばたまの夜の黒き娘よ
その小さき御手で我らを癒し給え
忘却よ　やさしき死のいとし子よ
鮮かな夢と慰めに彩られし闇に
しばし我らを導き給え

遠き神代の金色（こんじき）の　残映を纏いし忘却の闇
その闇の　底深く
翠の癒し　永遠（とわ）に煌く

我ら　その汚れなき輝きを守り
来るべき復活の日を　ここに待たん
復活の日を　ここに待たん

――タナティエル教団の祈祷歌集より。

――――――――――――――――――――――――――――――

里菜は、小さな背負い袋を前に床に座り込み、回りに並べたわずかばかりの荷物を袋に詰め込み始めた。

本当に、たいした荷物でもない。

着替えのワンピース一枚と下着一組、小さな櫛、タオルが二枚と羊毛のショール、お椀がひとつと木のスプーン。これが、今の里菜の、ほぼ全財産なのだ。

あの、あまりにも唐突なアルファードの提案から、今日で六日目――。

明日の朝、ふたりは村を出て、イルベッザの都に向けて旅立つ。

本当のところ、自分たちがどうしても村を出る必要があるとは、里菜には思えなかった。

たしかに、アルファードが言ったようにタナティエル教団はこれからも里菜に付きまとうだろうし、そうすれば一部の村人の間で里菜に対する反感が募るだろう。里菜がここにいることで、村の人に迷惑がかかる可能性も、全くないとは言えない。

けれど、それだけが理由ではないらしい。

アルファードは、村を出たがっている。

いつになく饒舌だったあの夜のアルファードの、あまりの饒舌さゆえにどこか言い訳の匂いのする言葉が、里菜の脳裏によみがえる。

『どのみち俺は、雪が積もると、ここでは仕事がなくなるんだ……。この辺の若い者はたいてい、冬場はルフィメルにある羊毛加工場に働きに行くんだが、そこでの仕事は、魔法が使えなければどうにもならないものだから。……この辺は、この加工場があるおかげて冬でも働き口があるし、もともと畑が豊かだから冬場の食料の蓄えも

充分できるが、気候が厳しく土地の痩せた北部では、昔から、冬だけイルベッザやその周辺へ賃仕事に出る者も多いらしい。だから俺たちも、そうしてみてもいいんじゃないか。――いや、春に帰るかどうかは、その時になってから考えよう』

『――羊か。それは大丈夫だ。もともと、俺が羊飼いになる前は、この村じゃ、羊を、夏の間中、よその羊飼いにまとめて預けて、秋に返してもらっていた。――ああ、夏になると低地から大規模な羊飼いが上がって来て、夏の間中、もっと山奥の牧場の小屋に住み込んで羊を放牧し、秋になると山を降りていくんだが、その行き帰りにうちの村によって、羊を預かっていってくれるんだ。だから、夏中預けっぱなしだったんだ。これからは、また、そのようにすればいいだけだ』

『――いや、ミュシカは村に置いていく。あっちじゃ犬は飼えないし、それに、俺は別にここにいなくてもいい人間だが、ミュシカは違う。ミュシカは、ここで、必要とされている。あんな有能な牧羊犬は、ほかにいない。……これまで、学校が休みの時に時々羊の番をかわってくれていたシャーノという少年がいるんだが、この子が将来大規模に羊を飼いたいと言っていて、この春から、見習いのためにしばらく俺と一緒に仕事をすることになっていた。俺が村を出るなら、あの子は、よその村の羊飼いについて修業することになるだろうから、あの子に、ミュシカをつけてやろうと思う。あの子なら、ミュシカをちゃんと扱えるし、ミュシカも、あの子によくなついていた。息の合った優秀な牧羊犬は羊飼いの宝だ。シャーノはミュシカを大切にしてくれるだろう』

『――ああ、それはもちろん、寂しいさ。でも、いいんだ。どこにいても、ミュシカは俺の犬だし、俺はミュシカの人間だ。ミュシカはここで、これからも、シャーノや他の羊飼いたちを助けて良く働き、感謝され、かわいがられるだろう。……あれは、実に賢い犬だ。この辺の羊飼いは、みな、ミュシカを欲しがっている。俺は以前、よその村の羊飼いたちに乞われて、ミュシカに産ませた子犬たちを

牧羊犬として訓練して譲ったことがあるが、父親もこの辺じゃ優秀な牧羊犬として名の知れた犬だったし、訓練にもミュシカと同じように力を入れたのに、どの仔もミュシカには及ばなかった。ミュシカほど頭のいい犬はいない。俺は、ミュシカを育てたことを誇りに思っている』

『――ドラゴン？　ああ、それも大丈夫だ。うちの自警団には、俺がいなくてもドラゴンを倒せるだけの実力は、十分ある。今は俺がいるからみんな俺を頼っているが、いるから頼るだけで、本当はもう、うちは俺一人の働きでもっているというわけじゃなく、俺が抜けてもちゃんと持ちこたえられるようになっているんだ。俺は、ちゃんと、みんなをそのように鍛えてきた』

『……このあいだの闘いで見極めたことだが、ミナトには、仕留め役が出来る。まだ経験は浅いが、俺が初めての時には他の団員たちが今ほど頼りにならなかったのにくらべて、今は、他の団員たちの援護が、当時とは比べ物にならないほど、あてにできる。団としての全体の技量が高いから、たとえ仕留め手が多少不慣れでも、他のものが十分支えてやれるだろう。そうするうちに、ミナトはどんどん強くなると、俺は思う。腕力は多少劣るが、身のこなしが良く、判断が的確だ。彼女をもっと早く実戦に出して経験を積ませなかったのは、俺の判断ミスだった。秘蔵の愛弟子だったんだが、秘蔵し過ぎたな。彼女は実戦に強いタイプだ。非常に勇敢な心の持ち主だ』

『……なんだ、リーナ、俺がミナトをほめたからといって、なにも、君がいじけることはないじゃないか。君とミナトは全然ちがうんだから、比較したって意味がないだろう。それに、君だって勇敢といえば勇敢だ。いくらまだドラゴンの本当の恐ろしさを現実には知らなかったにしろ、猛り狂うドラゴンの目の前に、何の力も策も持たないまま、いきなり飛び出してくるとは、浅慮、無謀ながらも、常識では考えられないほど勇敢には違いない。……リーナ、もしかして君は、やきもちを妬いてるのか？　――いや、笑ってない。笑わなかった。笑ったりなどするものか』

それからアルファードは、一連の長広舌が全部終わった後で、思い出したように、ついでのように、ぽつりと言った。

『リーナ。ここは古い村だ。そしてここの人たちはみな、多分村がここに出来た時から、先祖代々ここに住んでいるものたちばかりだ。みな、俺たちには親切にしてくれるが、ここでは俺たちは、十年住もうが一生住もうが、永遠によそものなんだ。もし俺が――そんなことができるとして――ここで結婚し、子孫を残し、平穏な一生を終えたとしても、俺は最後まで、よそからきた＜マレビト＞でありつづけるし、俺の子孫も、何代たっても、＜マレビト＞の末裔と呼ばれ続けるだろう。……俺は、君に出会うまで、自分の中に村を出たいという気持があることにさえ、気づいていなかった。だが、君を見つけた時、たぶん俺は心のどこかで知ったんだ。俺はいつか、この子を連れて村を出ることになるだろうと……』

たぶん、これがアルファードの本音だったのだろう。

彼は、村を出たがっていたのだ。

里菜が、自分のせいでアルファードが村にいられなくなったのだなどと済まなく思う必要は、どうやら、なかったらしい。里菜のことはただ、彼が村を出るためのきっかけ――もっと悪く言えばダシにしかすぎないのであって、要するにアルファードは、おおらかな気風とはいえやはり閉鎖的なこの狭い村で、＜マレビト＞でありつづけ、＜女神のおさな子＞であり続けることから、きっと、逃げ出したかったのだ。あんなにかわいがっているミュシカと別れることになってさえ。

それなら里菜は、アルファードと一緒に、どこへでも逃げようと思った。

けれど、いくらなんでも、いきなり軍隊とは、めんくらった。

里菜はそれまで、この国に軍隊があるという話さえ聞いていなかったのだ。いや、そういえば聞いたことはあったかも知れないが、自分に関係があるとは思わなかったので忘れてしまったのかもしれない。

里菜は、あの夜、初めて、軍隊について詳しく説明してもらった。
それは、こんな話だった。
軍隊には、正規軍と『特殊部隊』があり、アルファードが入ろうと思っているのは、その特殊部隊のほうだ。
正規軍は、市中の治安維持を主な仕事にしていて、この国が統一されてから出来たものだから、軍という名はついていても、内乱の鎮圧はともかく本当の戦争をしたことは未だかつてなく、里菜の感覚で言えば、つまりは、警察プラス自衛隊プラス消防署に当たるようなものらしい。泥棒も捕まえれば催し物の警備もするし、災害救助もするし、必要があれば地方にドラゴン退治にも行くし、災害後の復旧作業に派遣されたりもするそうだ。
これに対して、特殊部隊は、魔物退治を専門に行なう部隊だ。もともとは、昔から正規軍の中に目的別に存在してきた、文字どおり特殊な任務を帯びた少数精鋭の集団だったらしいが、そのうちの対魔物部門が、ここ数年でにわかにふくれあがって、今では正規軍より数が多いとさえ言われている。ここ数年の魔物の横行に、これまでの人数では対抗しきれなくなった軍が民間人を大量に臨時採用した結果である。
したがって今の特殊部隊は、名前は同じでも、かつてのそれとはまったく性質の違うものになっている。今の特殊部隊は、ようするに、組織化された賞金稼ぎの集団だ。
＜賢人の塔＞では、昔から、魔物のマントを持参したものに報奨金を出していたし、賞金稼ぎをなりわいとする人間は、いつの時代にもいた。といっても、昔は魔物の出現自体が少なかったので魔物退治で食っていくなどということはできなかったし、ほかのどんな種類の賞金を稼ぐにしろ、賞金稼ぎなどという商売は、まともな市民の仕事とは思われていなかった。
しかし、この、特殊部隊の増員政策によって、魔物退治は、危険ではあるが、それだけで食べていける堅実でまっとうな仕事のひとつとして市民権を得た。

正規軍の兵士が、厳しい試験ときちんとした審査の手続きを経て採用された正式の公務員で、安定した身分を持ち、多くは定年まで務めあげるのに対し、今の特殊部隊は、本当に臨時雇いの集団で、まず誰でも簡単な登録だけで入隊でき、いつでもやめられる。出稼ぎ者が冬だけ務めて帰ることもあるらしい。つても元手も住むあてもなくイルベッザで働こうとする地方出身者には、一番簡単にありつけて、一番都合のいい勤め口なのだ。

もちろん危険できつい仕事ではあるが、正規軍のような厳しい訓練はないし、軍律も緩く、そのうえ、雇主は『国』だ。なんといっても、無料の宿舎とただ同然の食堂があって、正規軍のように制服の支給はないが、希望者には武器、防具が貸与されるのがありがたい点で、どんな食いつめ者でも、多少経歴に後ろ暗いところのある者でも、それこそ体ひとつで軍に入ればとりあえずは食いつなげるし、業績によっては、それなりの蓄えも築けるのである。

そこでは、入隊者は、それぞれ個人、またはグループごとに登録をし、それぞれ勝手に好きな時に働く。グループで動く場合、基本給は各自が貰えるが報奨金は山分けになる。人数が多ければ多いほど一人当たりの取り分は減るわけだが、危険も減るし、倒せる魔物の数は増えるので、一匹狼は、ごく少ない。個人で入隊した場合も、本人が希望すれば、使う武器や得意とする魔法のバランスなどを考えて適当と思われるパートナーを軍のほうで紹介してくれるのだ。仕事も訓練もすべてこのグループ単位で好きなようにして、それを申請するだけでよく、軍としての集団行動は一切ない。日常生活もかなり自由だ。

『――そういうわけだから、俺と組んで登録すれば、君はそんなふうに、自分に体力がないとか、武器が扱えないとか、そんなことを心配しなくてもいいんだ。実際に剣を振るって魔物を倒すのは俺で、君は、俺の後ろで魔物の使う魔法を消しているだけでいいんだから。……だから、リーナ、俺と一緒に、軍に入ってみないか。やってみていやだったら、いつでもやめられるんだから』

そう言ったアルファードの口調は、日頃は何に対しても熱くなるところなどあまり見せない彼にしては妙に熱がこもっていて、里菜は、その熱心な勧誘を拒めなくなってしまった。

ほんとうは里菜は、同じイルベッザに行くにしても、軍隊などではなく何かほかの仕事をみつければいいのに、と思う。たとえ危険がなくても、アルファードが魔物を『消す』――魔物のことは『殺す』とは言わないのだという――ところなど、里菜は、やっぱり見たくない。いくら魔物は人間ではなく、一体二体と数えられるようなものであるとはいえ、やはり、一応は人間の形をしたものが『消される』のを見るのは、あまり気分の良いこととは思えない。

それでも里菜が軍隊入りを承知したのは、アルファードはなぜだか知らないが軍隊に入りたいのだと感じたからだった。それは別に愛国心だの『世のため人のため』などという正義感からでも、かといって功名心とか出世欲からでもないようで、里菜にはさっぱり彼の心境が理解できない。が、ただ、彼は里菜と一緒にでなければ軍に入れないらしいということはわかっていた。いくら強くても、魔法が使えないアルファードは、魔法を消すことのできる里菜と組まなくては、その力を魔物相手に役立てられないのだから。

アルファードに必要とされ、彼の役に立てる――。そして、仕事の時も家で留守番ではなく、アルファードのそばで一緒に働ける――。

それは里菜にとって、多少の不安や怖さは忘れさせるほど魅力的なことだった。

けれど今、新たな旅立ちを前にした高揚感と、新しい生活への不安と緊張や村を出る寂しさが里菜の心を交互に捕え、簡単なはずの荷造りは、なかなか進まない。

背負い袋の底に衣類を詰め込んだ里菜は、続いて、アルファードが用意してくれた携帯食料を半分に分けて油紙に包み始めた。

いざという時のための薬草や、水入れ、火を起こす道具、これまでにたくわえたわずかな現金などは、アルファードが持ってくれる

ことになっている。
　油紙に包んだ山のような堅焼きパンは、村のパン屋からの餞別がわりの差し入れだ。
　あの翌朝、アルファードは一人で、世話役であるヴィーレの父のところに、旅立ちの意志を伝えに出掛けた。その時にはすでにアルファードは、旅立ちの日を、一週間後と決めていた。
『いろいろと買い整えなければならないものもあるし、俺がいなくなった後のことで、いろいろと相談して決めておかなければならないこともある。そういった準備に、そのくらいはかかるだろう。それさえ済めば、なるべく早く出掛けたほうがいい。そうすれば、冬至前にはイルベッザにつける。イルベッザまで――そうだな、君の足に合せると、十日はかかるだろう。――そう、もちろん歩いていくんだ。だって君は、馬に乗れないだろう？　それに、どっちにしても、武術大会の時のようにすぐ帰ってくるわけじゃないから、村の共有の馬車や馬を借りていくわけにもいかないし。――いや、山を降りれば、まず雪が積もることはないから大丈夫だ。とにかく雪が深く積もる前に、この山さえ降りてしまえばいいんだ。そのために、準備を急ぐ』と、アルファードは里菜に言い渡した。
　また、冬至になると役所が冬至休みに入るために入隊受付も休止されてしまうというのも、自分たちが出発を急がねばならない理由だという。
　ふたりが村を出ることは、その日の午後、ヴィーレの父を通じて村中に知らされた。
　村はずれのアルファードの家まで、パン屋のおかみさんがわざわざ訪ねてきたのは、その数日後のことだ。
　両手いっぱいにパンの入った袋を抱えたパン屋は、ドアを開けた里菜を見るなり、まくしたてた。
『リーナ、あんた、行っちまうんだって？　寂しくなるよ。いえね、なにもあんたたちがお得意さんだからってだけじゃないのよ。あたしはあんたにお菓子のおまけをよろこんでもらうのが、ほんとうに

楽しみだったのよ。それでね、これ……。堅焼きパンだよ。持っていっておくれ。もちろん、お代はいいよ。あたしからの餞別だ。堅く焼いたし、うんと念入りに保存の魔法をかけておいたから、いつまでだってカビないからね。……あたしはね、リーナ……。ほら、以前あんたがローイとうちに来て騒ぎになった時……あん時すぐにあんたをかばってやれなかったのを、ずっと後悔していたのよ。なんだか自分が恥ずかしくてねえ。許しておくれよ。必ず帰ってきておくれ。いつでも、あんたが帰ってきてうちにパンを買いにきてくれたら、あたしは山ほどお菓子をつけてあげるからね……』

そう言うと、小太りのおかみさんは、手渡したパンの袋ごと、里菜をふわりと抱き締めてくれたのだった。

そのことを思い出すと、里菜の心がぽっと暖まる。けれど同時に、寂しくなる。

（あたしは、村を出るんだ……。明日、本当に……）

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第一場（2）

里菜は、荷物を詰め終った背負い袋を、畳んだマントと並べて置いた。道中での寝袋代わりにもなるという、フード付きの旅行用マントである。

この世界の冬用の羊毛製衣類は、見かけ以上に暖かい。冬の旅でも、防寒用下着と丈の長い厚手の旅行用マントさえ着用すれば、あとは普通の服装で充分で、夜には、火を焚けばマントにくるまって野宿が出来るのだという。

この旅行用のマントは、脱脂していない羊毛を非常に密に加工した上で防水の魔法が特に念入りにかけてあり、多少の雨なら濡れることもないし、風も防いで埃もつきにくいというすぐれものだ。なんと言っても、服作りの名人、ヴィーレが、心を込めて作ってくれた品である。特別の最上級品なのだ。

アルファードがヴィーレの父に村を出る決心を告げた時、ヴィーレは、その場にいたらしい。里菜は、ヴィーレがその時、どんな反応をしたのか知らない。アルファードは、何も話してはくれなかったのだ。

たぶん、ヴィーレは、アルファードを引き止めるようなことは言わなかったのだろう。世話役でさえ、アルファードの決意の堅さを知って、引き止めるのを諦めたくらいだから。

ヴィーレはきっと、ただ黙って悲しそうに話を聞いていたのだろうと、里菜は想像する。そしてたぶん、その夜は泣き明したのだろうと。

その証拠に、翌日会ったヴィーレの目は、赤かった。

けれど、赤い目をしたヴィーレは、けなげにも、笑顔でこう言った。

「リーナ、あたし、あなたたちに旅行用マントを作ってあげることにしたの。実はね、もう、昨日のうちに材料を用意して、ゆうべか

ら作り始めたのよ。ついつい夜中までやっちゃって、こんなに目が赤くなっちゃったんだけど、かならず間にあうように大急ぎで作るから、買わずに待っててね」

そして、ついさっき、ヴィーレは出来上がったマントを持ってきてくれた。

里菜には鮮やかな青、アルファードには、少しくすんだ赤錆色。国土の大半を覆う森や山の中を通って旅する時に、狩人に獣と見間違えられないよう、旅装にはよく目立つ色を選ぶのがこの国の習わしだという。

そのあと、ヴィーレとアルファードは、最後の打ち合わせのためにヴィーレの家に行った。アルファードは、自分はこの村にとって、いなくてもいい人間だというようなことを言っているが、実際のところ、彼は村中の羊の見張りをしてきたのだし、自警団長でもあり、いろいろと人に後を託さねばならない事もあるのだ。

ヴィーレのくれたマントをきれいに畳んだ上に、里菜は、こんどは皮製のベルトを置いた。腰に短剣を吊すために、アルファードが買ってきてくれたものだ。

里菜は、枕の下に手をいれて、短剣を取り出した。

鞘にも柄にも刀身にも様々の精緻な装飾を施された、目の眩むほど豪奢な、美しい品である。

黄金の柄には、猫の目玉ほどもある黄緑色の宝石が嵌めこまれている。こうして日中の光で見る時にはペリドットによく似た明るい黄緑色だが、夜、ランプの明りや暖炉の炎にかざして見ると、底のほうからちらちらと赫くきらめく、不思議な石だ。シルドライトと呼ばれる、神代の宝玉である。

神代の昔に妖精たちの手によって北の聖地シルドーリンで採掘されたと伝えられるシルドライトは、その神秘的な美しさと、すでに産出が絶えて久しいという稀少さで珍重されるだけでなく、聖地の地下から産出した神聖な石として古来から尊ばれてきた、大変貴重な宝石なのだという。

むろん、そんな貴重な宝石のついた豪華な短剣が、しがない羊飼いのアルファードに買えるわけがない。もし買えたとしても、質実剛健なアルファードは、こんな装飾的な華美な品物ではなく、実用一辺倒のシンプルなものを選んだだろう。

この短剣は、女神の司祭である少女ティーティが里菜にと持ってきたものなのだ。

それは、里菜とアルファードが旅立ちを決めた、その翌朝のこと。まだ、ヴィーレの家にも行く前の、誰にも旅立ちを知らせていなかった時だ。

まず、やって来たのは、ローイだった。

アルファードと里菜は、前夜のごたごたで寝るのが遅くなって、普段より遅めの朝食をとり終えたところだった。

例によって能天気な歌声とともに朝の新雪を踏んできたローイは、ドアを開けるなり、マントを取ってずかずかと暖炉の前に近寄りながら、大声でしゃべりちらした。

「よっ、リーナちゃん、おはよ！　あんた昨日、大変な目にあったんだってな。なんでもドロボーに入られたって？　よりによって、こんなあばら屋になあ。しかも、自警団長の家に入っちまうなんて、まぬけなドロボーだよな。ま、幸いこうして無事だったからには、そんなことはさっさと忘れて楽しくやるに限るぜ。

なんだあ、まだ朝飯食ってたのか？　さっさと片付けちまえよ。俺、せっかくはりきって、早く来たのに。よお、雪合戦しようぜ！

子供たち、誘ってさ。あんた、こないだ言ってたろ、雪が珍しいって。その雪がせっかく積もったんだ、パーッと遊ぼうぜ。雪だるまもいいし、ソリでビュンビュンぶっ飛ばせば、もうサイコー！」

その時、遠慮がちにノックをしてドアを開けたのが、ここしばらく姿を見せなかったティーティだった。

「ありゃ、ティーティじゃんか。なんだ、お前もリーナを雪合戦に誘いに来たのか？」と言うローイを無視して、ティーティは、まじめくさった顔で里菜の前に進み出ると、何か布にくるんだ細長い物

をマントの下から取り出して、厳かに差し出した。
「これ、お姉ちゃんに」
「あら、何？　またプレゼント？」と言いながら布を開けた里菜は、目を丸くした。
　横から覗き込んだローイが、目を丸くして、ヒュウ、と口笛を吹いた。
「おい、こいつぁ、すげえぞ！　ティーティ、お前、これいったいどうしたんだ！　なんでお前が、こんなすげえお宝持ってるんだよ」
「あのね、女神様の祠から持ってきたの」
「……ってえと、ご神体か！　へええ……。ご神体が短剣だってことは聞いてたが、見るのは初めてだ。まさかこんなすげえもんだったとはな……。いや、これはほんと、すげえぞ。リーナ、あんた、知ってるか？　この、ここに嵌ってる、キレイな石。これ、シルドライトだろ、ティーティ」
「そう」
「こりゃあ、値打ちもんどころじゃないぜ。これひとつで、村中の人間が一生遊んで暮せらあ。……あのオンボロ祠に、こんなお宝がしまってあったなんてなあ。しかし、相当古いもんだろうに、曇りひとつないな。そういう魔法もかかってるんだろうが、お前の家のもんが代々手入れしてきてたんだろうな」
「うん」
　アルファードが里菜の手からそっと短剣を取り、重みを確かめるように掌に乗せながらティーティに尋ねた。
「それで、ティーティ、これを、リーナにくれるのか？」
「そう、それ、もともとお姉ちゃんのだから。……防御の魔法がかかってるのよ」
　ローイが、また目を丸くして呟いた。
「ひえええ……。防御の魔法だって？　ほんとかよ。そんなの、あり？」
「もともとあたしのって、どういうこと？　これ、あたしのじゃな

いわ。見たこともないもん」と言う里菜に、アルファードが短剣を手渡して尋ねた。
「リーナ、これは、重いか？」
「え？　……ううん、ぜんぜん。これ、本物よね？　何で出来てるの？」
　確かに、その美しい短剣は、豪華な見かけのわりに、不思議と重くなかった。非力な里菜が、まるで重さを感じないほどだ。まるで紙で出来ているかと思うような軽さなのである。
　それを聞いたアルファードは、妙に得心が行ったような顔で、意外なことを言いだした。
「そうか……。リーナ、これは君が受け取っておけ」
「ええっ、だって……。こんな高そうなもの、貰えないわ」
「貰うのがいやなら、借りていると思えばいい。これは、たぶん、誰かがずっと昔に、君のために用意してくれていたものだ」
「えっ、どうして？」
「剣を使うものが、その時その時で自分の持っている剣に魔法の力を込めることは普通の魔法だが、剣自体に、他人が使っても効力を発揮するような防御の魔法を込めておくというのは、＜本当の魔法＞なんだ。それも、かなり特殊なもので、そういう魔法ができる魔法使いは、もう数百年のあいだ、この国には現われていないはずだ。……そして、これは、俺には結構、重く――見かけ相応の重さに感じられた。これは、おそらく、妖精の手になる神代（かみよ）の品物であり、君がこれを軽いというなら、きっと、神代から君のものになるべく定められていたものだ」
　里菜がアルファードのことを、やはり別世界の人間なのだと思うのは、こういう時だ。普段、合理主義者で現実的で、特に信心深いとも見えないアルファードが、たまに突然こういう不思議なことを真顔で言うので、里菜はとまどう。
「でも、アルファード……」
　ここでアルファードは、やっと里菜にも納得出来る現実的な理由

をつけてくれた。
「それに、リーナ、どっちみち君には短剣がいるって言っただろう。これを断わって他のを買うより、これを借りたほうが、買いに行く手間も金も節約できるじゃないか」
「そ、そうよね。じゃあ、ティーティ、これ、貸してね。……でもこれ、ご神体なんでしょ。そんなもの借り出しちゃって、いいの？」
「リーナ、ティーティは司祭だ。司祭がいいと言うんだから、いいのさ。……しかし、ティーティ、なぜ、今になって急にこんなものを持って来た？」
「おばあちゃんが亡くなる前に言ったの……。女神様が村から旅立つ時に、これを渡せって。きっと、これが必要になる時があるからって。お姉ちゃん、行ってしまうんでしょ？　どこにいても、これがお姉ちゃんを守ってくれるから」
　里菜は驚いて叫んだ。
「ティーティ、あなた、どうしてそのこと知ってるの？　まだ誰にも話してないのに！」
　里菜の手から短剣を取ってしげしげと眺めたり重さを計ったりしていたローイが、この会話を聞いて目を剥いた。
「お、おい、そりゃ、どういうことだ？　旅立つって……。リーナ、あんた、どっか行くのか」
　里菜は、話していいものかとアルファードを見た。
　アルファードが、里菜に代わって答えた。
「ああ。ゆうべ決めたばかりで、まだ誰にも話していないことなんだが、俺たちは、村を出る。イルベッザに行って軍隊に入ろうと思う」
「な、なんだ、なんだ、そりゃまたずいぶん急な話じゃないか！　俺は聞いてねえぞ！」
「だから言ったじゃないか、決めたばかりで、まだ誰にも話してないと。お前には、もちろん、まっさきに話すつもりだったんだ」
「だからさ、決める前に、話して欲しかったんだよ！　……で、帰

ってくるつもりは、あるのか？」
「それは、わからない。とりあえず冬場の出稼ぎということで、その後のことはその時に考えるつもりだ」
「……てぇことは、帰ってこないつもりだな。おい、アルファード。俺はちょっと、あんたと話したいことがある。顔、貸せよ。外で話そうぜ」
そういうとローイは、アルファードの肩にわざとらしい親しさで腕を回して、マントも羽織らずに、ふたりで雪の積もる前庭に出ていってしまった。
ふたりは外で何か言い争っているらしく、時折ローイの声が高くなって、ヴィーレとかリーナとか言っているのが聞き取れる。
気にはなるが、わざわざ里菜を残して寒い外に出て行った二人の話に聞き耳を立てるわけにもいかない。
所在なくなった里菜は、まだそこにいた小さなティーティに声を掛けた。
「ティーティ、朝ご飯は食べてきたんでしょ。お茶、飲んでかない？　焼き菓子、あるわよ」
「ううん、いい。もう帰る。お姉ちゃん、元気でね。……ミタマのフユをイヤマスマスにカガフラシメタマエ」
ティーティは厳かに胸に手を当て、まじめくさってお祈りを唱えると、さっさと帰っていってしまった。
ほどなくローイがドアをバタンと開けて、喚きながら飛び込んできた。
「ああ、分かったよ！　俺はあんたとは友達だと思ってたのに、そう思ってたのは俺だけだったんだってことが、よぉく、分かった！　じゃあな！」
そう言いながら、椅子に掛けてあった自分のマントをひっつかんだローイは、入れ違いに入って来ようとしたアルファードを睨みつけ、ぎゅっと口を結んで、再び外に飛びだしていった。
ローイの後ろ姿を振り返り、肩を落してドアを閉めたアルファー

ドに、里菜は、おそるおそる声をかけた。
「アルファード。ローイ、怒っちゃったの？」
「ああ……。どうやら、へそを曲げられてしまった。あいつはあれで、いったんへそを曲げると、なかなかやっかいなんだ」
そう言って、アルファードは、溜息をついた。
アルファードの言ったとおり、ローイは、それからずっと、へそを曲げ続けているらしい。
あれ以来、ローイはふっつりと、アルファードの家に訪ねて来ることを止め、やむを得ぬ用事でアルファードと顔を合せた時も、必要以外には口もきいてくれないと言う。
ゆうべは、ここで、自警団がアルファードのための送別会をしてくれた。
ヴィーレの父が村を挙げての壮行会を開くと言った時には固辞したアルファードも、気ごころの知れた自警団の連中が送別の宴会をしたいというのまでは断わらなかったのだ。
その時は、さすがにローイも参加したが、アルファードをまるっきり無視して、ただ、手当りしだいに手近の娘たちをからかっていた。
里菜が、ハラハラしながらローイとアルファードの様子を見ていると、アルファードが自分からローイのそばに近付いて、里菜にとっては信じられないことに、まるで機嫌を取るような様子でローイになにやら話しかけようとした。ローイは、返事もせずにプイと席を立ってしまった。
それからローイは、里菜のそばに来て、こう言った。
「よお、リーナちゃん、考え直せよ、な？　アルファードのやつが行っちまうのは、ま、しょうがないが、あんたまで行くこたあねえだろう。軍隊なんてちっとも面白くないぜ。飯はまずいし、宿舎はおんぼろでぎゅうづめだし、仕事はきつい・危険・気分悪いの三拍子揃った重労働だぞ。……いや俺が実際に見たわけじゃねえけど、どうせそうに決まってる。

だいたい、あんたさあ、本当に軍隊に入りたいわけ？　そうじゃねえだろう？　アルファードのやつが強引に誘っただけだろうが。どう考えても、あんたには軍は向かねえよ。アルファードのやつに子守りが似合わねえのと同じくらい、あんたに軍は似合わねえ。やめとけよ、な？　あんたはこのまま、この村にいればいいじゃん。ひとりでここに住んでもいいし、ヴィーレのとこでも、あんたさえよければ俺のとこでも……。

あんた、もう魔法を消さないでいられるようになったんだから、アルファードとでなくても住めるんだぜ。そのこと、わかってる？

あんたは、だから、アルファードの気まぐれに付き合うこたぁねえんだ。あんたが自分の力を制御できるようにしてやったのはアルファードかも知れねえが、だからと言って、お礼奉公なんかすることはねえぞ。アルファードは、ただ自分が軍隊で名を上げるために、あんたの力を利用しようとしているのさ」

「違う！」

里菜は思わず叫んだ。

「いくらローイだって、アルファードの悪口言わないで！」

「……そうか、そうかよ。わかったよ。もう言わねえよ！　勝手にアルファードにしっぽ振ってついていきな！」

そう言い捨てると、ローイは席を立って、主役であるはずのアルファードそっちのけで勝手に盛り上がっている真ん中のテーブルの一団に加わりに行ってしまった。

そこでローイは、浴びるように酒をあおっていたのだが、それでもその日は、誰かに肩を借りて、ちゃんと家に帰ったらしい。今朝、床に転がっていた若者たちの中にも、もちろんアルファードの寝台の中にも、ローイはいなかった。

（ローイは、結局、あたしたちのこと、最後まで許してくれないのかしら……）

里菜は短剣を手にしたまま溜息をついた。

大好きな友達と、このままで別れたくはない。明日の朝、ローイ

は見送りに来てくれるだろうか。
明日の朝、里菜たちは、村の広場でみんなに挨拶をし、村はずれで見送りを受けることになっている。
今夜はきっと、よく眠れないだろう。
里菜は短剣をマントの上に置こうとして、少し考え、また枕の下に戻した。
貴重なものは枕の下に隠すのが一番だと考えたのだが、頭の中でそう言っている声の下で、もうひとつの声が何か別の言葉を囁いていることに、里菜は気付かなかった。
これを枕の下に入れて寝た最初の晩、里菜は、また、夢を見たのだ。魔王の夢を。
夢の中で、魔王は、闇に降りしきる雪の中に、ふわりと浮かんでいた。
今度は、馬には乗っていなかった。すらりとした長身の足元で、マントがかすかに揺れていた。
彼が手にした大鎌を、里菜は見ないようにしようとした。この間はきっと、魔王がこれを振るところを見たから、変になってしまったのだ。
けれど、その輝きはあまりに魅惑的で、里菜の目はいつのまにかそこに吸い寄せられそうになる。その度に里菜は、頭を振って、視界から大鎌と魔王を追い払った。目をつぶると、そのあいだに魔王がふっと自分の目の前に近付いていそうな気がして、目をつぶるのは怖かったのだ。
けれど魔王は、その夜は、大鎌を振らなかった。魔王の声なき言葉が胸に響いた。
『エレオドリーナ。その短剣は、気にいったか？　美しかろう。それは、シルドーリンの妖精の手になる神代の宝剣だ。今では、そのような精巧な細工が出来るものは、もういない。大切に持っておるがよい。かつてそなたの手にあったものが、再びそなたと巡り合ったのだから……』

それだけ言うと、魔王の姿は消えていた。
里菜の全身から力が抜け、深い吐息が漏れた。それは安堵の溜息であると同時に、自分でも気付かぬほどの、かすかな落胆をも秘めてもいた。
里菜の胸の奥の、どこか一番奥深いところが、魔王の指が自分に触れた時の激しい陶酔を覚えている――そして、ふたたび魔王に触れられるのを、恐れながらも待ち焦がれている。
里菜はそれに気付いていなかったけれども、次の晩からも、短剣を枕の下にいれるのをやめなかった。そのたびに、頭の中で、
（別に、この短剣とあの夢を見たことと、関係があるわけじゃないわ。そりゃあ、頭の下がごつごつして落ち着かないと悪い夢を見やすいのかもしれないけど、あれはただの夢とは違うんだから、そんな単純な理由で見たり見なかったりするものじゃないはずよ）と、自分にむけて無用な言い訳をしていたのも、実は心のどこかで、この短剣とあの夢を見たことのあいだに何かつながりがありそうなのを漠然と感じていたからなのだ。
けれど、それから後は、もう、魔王の夢は見ていない――。
荷造りを終えた里菜は、夕食の支度のために立ち上がった。もうすぐアルファードも帰ってくるだろう。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第一場（3）

その夜、里菜は、三度目に魔王の夢を見た。

闇の中、黒衣を纏った全身から微かに青白い燐光を放って、魔王は中空に浮かんでいた。

『エレオドリーナ……。わが妻よ』

魂を掴み取るような、深い響きが胸を満たす。

『ついに旅立つ時が来たか。しかし、そなたは道を誤っている。そなたの行くべき道は、その、壁の向こうで眠っているつまらん男などの示すところではない。イルベッザには、そなたがなすべきことなど、何もない。そなたは今すぐにでも、この世界全土の女王となれるというのに、何を好きこのんで、下らぬ軍隊などで埃にまみれて、人間どもの下賤な食い物を食おうとするのだろう。魔物など、少々消したところで、どうなるものでもないぞ。無駄なことだ。

……その男は、ただ、逃げたがっておるのだ。村から逃げ、自分から逃げ、自分の戦いから逃げ続ける――それが、その男のしようとしていることだ。逃げ続ける限り、どこにも安住の地はないというのに、その男には、それもわかっていない。愚かな負け犬だ。単なるクズだ。そのような無用な人間にかかずらわっていても、どうにもならんぞ。エレオドリーナ。北へ、来い。北の荒野へ……』

それだけ言うと、魔王の姿は、笑いながら薄れて消えていった。

その後の暗闇に向かって、魔王があまりにあっさりと消えてしまうことへの自分でも認めたくない微かな落胆を押し隠すように、里菜は叫んだ。

「違う、違うわ！　アルファードは、逃げるんじゃない。戦いに行くのよ。新しい世界に挑むのよ！」

『いいや、あいつは逃げるのだ。逃げるのだよ……』

もう姿の見えなくなった魔王の、声無き声だけが、遠い谺のように里菜の周りを取り巻いて、ざわざわと嘲笑い、里菜を脅かした。

ふと気がつくと、里菜は、真っ暗な部屋の自分の寝台に横たわったまま、ぼんやりと目を開けていた。

夢の中でおぞましい愛撫のように弄していた嘲笑の余韻が、目覚めた今も肌に纏わりついているような気がして、里菜は寝台の上に身を起こし、我が身を掻き抱いた。とたんに袖口や襟元から忍び込む夜明け前の冷気に触れて、やわらかな夜着の下で肌が粟立った。

そのまま、何も見えない闇に目を凝らしながら、里菜は思いを巡らせた。

（違う。アルファードは、逃げるんじゃない。だって、アルファードは、ここでなら、自分を息子のように思ってくれるやさしい人たちに見守られ、魔法が使えなくても、＜女神のおさな子＞として、ドラゴン退治の英雄として、一目置かれていられるけど、都では、そうじゃない。それが分かっていて、アルファードは、今よりもっとずっと辛いかもしれない新しい生活に飛び込もうとしているのよ）

（……それを、それでも逃げてるというのなら、逃げたって、別にいいじゃない。逃げることは、負けることじゃないもの。退く勇気を持たない強さは脆いものだって、前にアルファードが自警団の人たちに訓示を垂れてたけど、それって本当だと思う。例えば敵があまりに強大で、今はまだ勝算がない時、それでもやみくもに立ち向かうだけが勇気じゃない、死ぬのがわかっていて戦うより、逃げることで生き残れるなら、その時は逃げるのが正しいんだって――生きてさえいれば、いつか、きっと、もう一度、立ち向かえるからって、アルファードは言ってたわ。逃げるのは、生きるのをあきらめないことなんだって。……だから、アルファードが逃げるなら、それはきっと、今は逃げる必要があるからなのよ）

（でも、あたしみたいに誰が見てもちっぽけで、自分でも無力で臆病なことがわかっているものには、逃げるのはあたりまえの、簡単なことだけど、アルファードのように強くて大きくて勇敢な人にとっては、逃げるのは、とても勇気がいる、難しいことなのかもしれ

ない。まわりの人も逃げることを認めてくれないし、自分の心も、逃げている自分を許さないから。……だから、あたしが、代わりに許してあげるの。ずっとそばについていて、アルファードの代わりに、アルファードを許してあげるのよ。アルファードが逃げるなら、あたしは一緒に逃げてあげる。どこへでも……）

最後は自分に言い聞かせるように胸のうちで呟かれたこの言葉が、それまで実は里菜の中にあった、逃げるように村を出ることへの釈然としない思いを、溶かしてくれた気がした。

それから、里菜は、明け方の闇の中で、こんどは夢のない眠りに落ちた。

＊

旅立ちの朝は、この季節にはめずらしい快晴だった。

青く澄み渡った冬空の下で、数日前に再び積もった雪が、朝日を浴びて白く輝いている。

黙々と朝食をとった里菜とアルファードは、なんとなく黙ったまま食器を洗い、これから持っていく食器は荷物につめた。残りは、いつものように流し台に置きっぱなしにはせずに、丁寧に水気を拭いて、扉のついた戸棚にしまいこんだ。

もう、この戸棚を開けることはないかも知れない。たった二月ちょっとしか住んでいないこの家が、なにかとてもなつかしく、幼い頃から育った家のように感じられる。

留守の間の家の管理は世話役に頼んである。もちろん実際に足を運んでくれるのは、ヴィーレだろう。

アルファードは、ミュシカの食器と敷き物を袋に詰めた。ミュシカはこれから、通りがかりにシャーノ少年の家に預けていくことになっている。里菜はゆうべから、名残惜しくて、何度もミュシカをなでたり、話しかけたりしているのだが、アルファードのほうは、あっさりしたものだ。けれど、内心ではきっと、言葉にも態度にも

表わせないほど深く寂しがっているのだろうと、里菜は想像している。

里菜はワンピースの腰にベルトをつけて短剣を吊った上から、しっかりとマントを着込んだ。足にはブーツを履く。天気はいいが、足もとは雪道だ。

身支度を終えたふたりは、ミュシカをつれて家を出た。雪の反射がまぶしくて、里菜は何度も目をしばたたいた。そうしていないと、涙が出そうだった。

ふたりはヴィーレの家に寄ってから、世話役と一緒に広場に行った。

ヴィーレは広場についてこなかった。ここで別れるから、と言って、家に残ったのだ。きっと、見送りに出てもよけい悲しくなるだけだと思ったのだろう。

広場には、大勢の村人がふたりを見送るために集まっていた。自警団のみんなもいる。宴会で会った娘たちもいる。パン屋のおかみさんもいる。里菜があまり知らない大人や老人もいる。なんであれ変わったことが大好きな子供たちは、はしゃぎながらこの集会を楽しんでいる。この村では、人の出入りは、めったにない大事件なのだ。

そこで世話役が、アルファードの活躍と無事な帰郷を祈る、短く月並みな演説をし、アルファードがそれに応えて簡単な別れの挨拶をしているあいだ、里菜はアルファードの横できょろきょろと広場を見渡していた。ローイの姿を探していたのだ。

アルファードは、ここ数日、もうローイのことをまったく口にしなかったが、彼がほんとうはローイのことをとても気にかけているのを、里菜は知っていた。

なかなか人に心を開かないアルファードにとって、ローイはきっと、一番の、そしてたぶん、唯一の友達だったのだ。ほかの、自警団の若者たちは、アルファードにとって、信頼出来る仲間であり、

かわいい部下ではあっても、腹を割って話せる本当の友達ではなかったのだろうと、里菜は思っている。

けれど人混みの中に、誰よりも背が高く、誰よりも派手な服を着たローイの、よく目立つ姿は見当たらなかった。

かわりに里菜は、広場の隅に、あいかわらず無関心そうに座っているガイルの姿を見つけた。

その時、里菜は、自分でもよくわからない衝動に突き動かされて、ガイルに駆け寄り、その手を取って言った。

「おじさん、待っててね。あたし、あなたを見捨てないから」

自分でもなぜそんなことを言ったのかわからなかった。広場の人々が一瞬、しん、となった。ガイルが、遠い目をしたまま、かすかに頷いた。

この広場は、この国の二大街道のひとつ、エレオドラ街道の起点である。この村は、今でこそありふれた田舎の小さな村だが、古代の聖地の玄関口であり女神の司祭を擁する地として、また、この国で唯一魔法使いを輩出する地として有名なところだったのだ。古い街道がこの村の広場に端を発しているのも、この村が古代に栄えていた名残である。もっとも、この辺ではまだ、街道といってもただの山道にすぎないのだが。

広場での挨拶を終えたふたりは、そのエレオドラ街道を西に向けて歩き出した。広場にいた村人の多くが後に続き、途中の家からも人が出てきて、行列に加わる。

子供たちは口々に、アルファードが魔物を何十体、いや何百体やっつけてくるだろうかと言いあって、はしゃいでいる。アルファードは、村の少年たちの憧れの的だったのだ。

子供たちは、アルファードがたくさんの魔物を退治して村の名を上げ、金持ちになって帰ってくると信じて疑わない。あのガイルが、かつておなじように子供たちの期待のまなざしに見送られて村を出たことを、彼らは知らない。彼らはその時、まだ生まれていなかっ

たか、あるいは赤ん坊だったのだ。
ガイルは、昔、アルファードとおなじように少年たちの偶像だった。誰よりも強かったガイルは、ある日、村を出て軍隊に入った。そして、数年後、魔王の刻印を受けて帰ってきた。
それ以来、ガイルは広場にぼんやりと座り続けている。
大人たちは、自分の子供らにガイルのことを語りたがらなかった。大人たちはただ、子供たちに、ガイルのことをバカにしたりからかったりしないようにと、きつく言いつけるだけだった。
その後、今まで、この村から軍隊に入ったものはいない。
アルファードやローイの年代の若者たちは、ガイルが村を出た日や、帰ってきた日のことを覚えている。里菜は、軍隊に入ると決めたあの夜、アルファードにガイルの過去を聞かされていた。

シャーノ少年の家は、村の西のはずれに近い街道ぞいにあった。そこで、ミュシカの愛用の敷き物と食器が、アルファードからシャーノに手渡された。
アルファードはミュシカに淡々と何か語りかけた。何と言ったのかは里菜には聞こえなかったが、ミュシカはそれを間違いなく理解した様子で、哀しげな瞳でじっとアルファードを見上げ、尾を足の間に巻き込みながら後退って、おとなしくシャーノの足元に座り込んだ。ミュシカは絶対にアルファードの言葉が全部分かるのだと、里菜は前から思っていたのだが、どう見ても、そのとおりに違いない。
アルファードは、ミュシカの傍らに膝を付いて、その首を抱き、何か――たぶん、短いが愛情のこもった別れの言葉を――囁くと、茶色い頭を二、三度、ぽんぽんと軽く叩いた。そしてそのまま、何も変わった事は起こっておらぬのだというように、あっさりと立ち上がった。
ミュシカは、立ち去っていくアルファードの後を追わなかった。その様子は、まるで、ほんのしばらくの『待て』を言い付けられた

かのようだった。彼らの結び付きは離れていても変わらないほど強いのかもしれないと、ふと思った里菜は、寂しさと共にかすかな羨望を覚えた。

しばらく行くと家並みがとぎれ、街道の両脇にケルンのように石が積まれたところに出る。

石積みのてっぺんに先が二又になった木の枝を突き立てたそれは、魔除を兼ねた村の境界標識だ。この地方の古い習慣である。

そこで行列は立ち止まり、アルファードは振り向いて、ついてきた世話役や村人たちと最後の挨拶を交わした。里菜はもう一度ローイの姿を探したが、やはりローイは見送りに来てはくれなかったようだ。

溜息をついた里菜は、行列の後ろから駆けてくる人影を見付けた。ローイではない。

それは、長いお下げをなびかせ、はためくショールを手で抑えたヴィーレだった。

行列に追い付いたヴィーレは、人垣をかき分けてアルファードに駆け寄り、いきなりその胸に飛び込んだ。

アルファードは、とっさにヴィーレを抱きとめたが、どうしていいかわからないという顔で、そのまま黙って突っ立っていた。

「ファード！　アルファード……」

息を切らしながらそれだけ言うと、ヴィーレは、しばらく、何も言えずにアルファードの胸に顔を埋めていた。

アルファードは困惑して目を泳がせながらも、ヴィーレの肩に、そっと手をかけた。

パン屋のおかみさんが、その様子を見て目頭を抑えている。

ヴィーレがずっとアルファードを想い続けていたことを、誰もが知っているのだ。

やがて口を開いたヴィーレの声は、かすかに震えていた。

「アルファード……。どうか、無事でいて。イルベッザにいっても、

あたしのこと、忘れないで……」
　ヴィーレは、ほんとうは、こう言いたかったのだ。
（絶対に、帰ってきて。帰ってくるって、約束して。あたし、ずっと、待ってるから）
　けれども、それは口にしてはいけない言葉だと、ヴィーレは知っている。約束を求めれば、アルファードは、約束は出来ないと言うだろう。待つと言えば、待つなと言われてしまうだろう。だから、本当の気持は、言えない。
　アルファードは、ふいに心を決めたように、うつむいたままのヴィーレをやさしく抱擁した。ちょうど、さっきヴィーレの家を出る前にヴィーレの父と母がそれぞれアルファードを抱きしめたように。
　それは、父母と息子、兄と妹が、もしかすると今生の別れになるかもしれないような特別なときにだけ交わす、家族の別れの抱擁だ。
　そして、言った。
「ヴィーレ……。もちろん、忘れやしない。俺はずっと君のことを、本当の妹のように思ってきたんだ。どこにいても、君の幸せを祈っている」
　ヴィーレは黙って身体を離した。その時彼女が唇を噛み締めていたのを、誰も見ていない。うつむいたまま涙を拭ったヴィーレが次に顔を上げた時には、彼女の顔には、もう、いつもの、少し恥ずかしそうなやさしい微笑みが浮かんでいた。
「ファード、ごめんね。びっくりしたでしょ。ここまで見送りに来るつもり、なかったんだけど……。あの、ちょっと、これを渡すのを忘れたものだから。これ、焼き菓子。そんなにかさばらないし、重くないから、持ってって。日持ちするから。……ファード、リーナ、元気でね。リーナ、ファードがあんまり無茶なことしないように見張ってちょうだい。都には悪い人もいっぱいいるっていうから、あなたも、気をつけてね。じゃあ」
　そう言ってアルファードに小さな包みを渡し、人垣の中に下がってきたヴィーレの肩を、そこにいたヴィーレの母がそっと抱いた。

人垣の後ろに、雪をいただいて白く輝く霊峰エレオドラの山頂が、子供たちを背後から抱き締める母親のように、大きくたおやかにそびえている。

女神の聖地にふさわしい、その、整った女性的な山容が、まるで生まれてこのかた眺めて過ごしてきたものであるかのように、無性に慕わしい。

イルベッザからは、エレオドラ山は見えないという。

自分は再びこの山を見ることが出来るのだろうか――。

里菜は、一度も振り返らないアルファードの横で、何度も振り返って、まだ見送ってくれている村人たちに手を振り返しながら、エレオドラ山を仰ぎ見た。

それから一時間ほど、里菜のペースに合せてゆっくりと歩を進めたふたりは、村からずっと続いていた長い下り坂の後で、ちいさな峠をひとつ黙々と上りつめた。

今日のように天気のいい日は、その坂のてっぺんから、ゆるやかな起伏を見せて蛇行しながら山を下る街道がずっと下のほうまで見渡せ、いくつかの村や町も谷あいに遠く見え隠れするのだと、上り坂に息を切らせている里菜を励ましながらアルファードが教えてくれた。

けれど、辿り着いた坂の上からふたりが見たのは、その雄大な景色だけではなかった。

そんなに遠くではなく、すぐ目の下、坂をちょっと下ったところが踊り場のように平坦な道になっていて、そこに、なにやらけばけばしい色彩が見える。これ以上ないほど派手な紫の中にこれまた鮮やかな赤や緑がちらちらまじっているそれは、どうやら、道の真ん中に坐り込んでいる人間のようだ――。

こんな色彩の人間は、絶対に、ひとりしかいない。

里菜がそう確信した瞬間、人影は、ふいに立ち上がって、大きく

両手を振って叫んだ。
「おーい、アルファード、遅かったじゃねえか！　待ちくたびれちまったぜ」
里菜はあんぐりと口を開けて叫んだ。
「ローイ！」

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第二場（1）

「……ローイ！」

叫ぶなり坂を駆け降りた里菜は、勢い余ってあやうく転びそうになり、ローイのけばけばしい紫のマントにつかまった。

「ローイ……。なんで、こんな、ところに……」

息を切らして尋ねる里菜には応えずに、ローイは、後から降りてくるアルファードに向かって、にやりとした。

「アルファード、俺も行くぜ」

ゆっくりと坂を降りてきたアルファードは、ローイの正面に立って、厳しい顔でぶっきらぼうに問い掛けた。

「……行くって、どこへ行くんだ」

「そりゃ、もちろんイルベッザへさ。俺も、都で働いてみることに決めたんだ。それで、どうせなら、あんたらと一緒に行ったほうが都合がいいと思ってさ。

俺はどうせ、こんな田舎にはもうあきあきしてたんだ。麦だの羊だのじゃがいもだのには、もう、うんざりなんだよ。もちろん、カブにもさ。

な、リーナちゃん、俺みたいな世紀の色男が、こんな田舎に埋もれて、カブだのじゃがいもだのを作って暮すなんて、もったいないと思うだろ？　やっぱ、この都会的で洗練された俺には都会が似合うよ、な？」

里菜を会話に巻き込んで話をそらそうというローイの目論見は、アルファードには全く通じなかった。アルファードは、厳しく問いつめた。

「それで、イルベッザで何をするつもりだ。ちょっとくらい顔がいいからと言って、それでどうなるものでもないだろう」

「そりゃあ、そうだけどさ。でも、俺は、ただ顔がいいだけじゃない。話もうまけりゃ歌もうまいし、腕っぷしも強くて度胸もあって

すばしこい。愛想も良くて人に好かれる。その上、魔法は何でも得意だし、手先も器用で頭も回る。俺には、何だってできるんだ。こんな俺が、都でひとかどのものになれない訳があるか？　この俺に、何か足りないものがあるかよ？」

平然とうそぶくローイに、アルファードは言い放った。

「お前に足りないものがあるとしたら、ローイ、それは『考え』だ。まったくお前は、考えなしだ！」

ローイは平気で言い返す。

「ふん、俺に言わせりゃあ、あんたにゃ、その『考え』とやらが、ありあまりすぎてるぜ。あんたはいつだって、あんまり考えすぎて、自分が本当はどうしたいのかさえ分からなくなっちまってるんだ。まあ、いいや。さ、行こうぜ。今日中にプルメールまで行くつもりなんだろ。だったら急がないと、間にあわないぞ」

「確かに俺たちはプルメールに行くつもりだが、誰もお前と一緒に行くとは言っていないぞ」

「あ、そ。なら、いいよ。俺、一人で行くから。ああ、でも、プルメールはいいが、その先はどうしようかなあ。ヴェズワルの近くを通るからなあ。いくら俺が弓の名手でも、一人じゃ、俺、山賊に殺られちまうかもなあ……。

あんたもだぜ、アルファード。いくらあんたが強くても、山賊が前と後ろから来たら、リーナはどうするんだ？　いくら防御の魔法のかかった短剣を持ってたって、短剣を抜く間もなく後ろから襲われたら、どうしようもないんじゃないか？　そんな時、俺とあんたがリーナを中にして背中合せで戦えば、怖いものなしなんだがなあ。

それに、あの辺を通るときには、夜、どうしたって寝ずの番がいるだろう。あんたのことだ、どうせリーナには黙って、一晩でも二晩でもひとりで起きてるつもりだったんだろうが、それじゃあ、いくらなんでも身がもたないぜ。寝不足でふらふらしてるとこを山賊に襲われたら、いくらあんたでも普段の力は出ないだろうなあ。まあ、あんたがどうしてもいやだってなら、しょうがない。じゃあな」

ローイはわざとらしくきびすを返して立ち去ろうとした。その肩に、アルファードが後ろから手をかけて、しかたなさそうに引き止めた。

「おい、待て、ローイ。まだ話は終っていない。お前が村を出たことを、家族は知っているのか」

ローイは、ひょいと振りかえって、にっと笑った。

「ん？　ああ、知ってるはずだぜ。もし、今頃まだ知らなかったら、俺の兄貴はよっぽどのウスラボケだ。あれだけ目立つところに置き手紙してきたんだからな。俺、あんたらの見送りのどさくさに紛れて、家に置き手紙して、東側から村を出て、ぐるっと回り道してきたんだ。それで先回りしてここにいたら、あんたら、なかなか来ないんだもんなあ。世話役の演説が長かったのかぁ？」

里菜は仰天して口を挟んだ。

「置き手紙って、ローイ、それって家出じゃない！」

「おい、リーナちゃん、やめてくれよ。家出なんてい言うと、ガキみたいじゃんか。俺のような一人前の大人が家を出るのは、家出とは言わないの。だいたい、俺が黙って家を出てきたのは、あれこれ言われるのが面倒だっただけで、俺がどうしても村を出るっていやあ、兄貴は、最初はごたごた引き止めただろうが、結局最後には許してくれたと思うぜ。兄貴も姉貴も俺には甘いし、俺はあの家では余計者だし、俺が言い出したら聞かないのは兄貴もよく知ってるからな」

アルファードがため息混じりに同意した。

「ああ、まったくだ。たしかに、お前は言い出したら聞かないやつだ。……で、どうしても行くつもりなんだな」

「ああ」

「ヴィーレは、どうするんだ」

それまで飄々とした態度を崩さなかったローイが、さっと気色ばんだ。

「……あんたにそれを言われる筋あいはねえぞ！　だいたい、俺と

ヴィーレは、もうとっくに婚約解消してるんだ。何の関係もねえんだよ。もしあんたが、このことについてもう一回俺と話し会おうという気があるんなら、今ここでじゃなく、今度、ふたりだけで話そうや。とにかく俺は行くぜ。あんたが一緒に行かないなら、一人でも都に行く」

そしてまたきびすを返して歩き出そうとする背後に、アルファードが憮然と声をかけた。

「……お前、道中の食料は持ってきたのか」

ローイは、また嬉しそうに振り向いて、背中にしょった弓と矢筒を指し示した。

「これ、これ。これ、見えない？　これで、俺、鳥でも兎でも捕るからさ。乾燥の香草と塩も持ってきたから、うまいスープができるぞ。焚火で焼いてもいいしさ。俺がいれば、火にも水にも困らないんだし、鍋も、ほら……」と、ローイは、道端に置いてあった荷物をひょいと担ぎ上げた。木の枝の先に、鍋がひとつ、くくりつけてある。その中に、荷物の包みが入れてあるらしい。

「あとは、あんたらが、堅パンや焼き菓子を山ほど持ってるだろ。三人どころか四人いてもイルベッザまで持つくらいあるって、俺、知ってるぜ。な、リーナちゃん、堅パンも兎のスープにひたして食べると、ぐんとおいしく食えるぞ。アルファードのことだから、道中ずっと堅パンと干し肉とチーズで済ますつもりだったんだろうが、どうせなら、うまいもん食おうぜ」

「それじゃあ、お前は、パンや干し肉は全然持ってこなかったのか？」

「少しは持ってきたよ。一日分くらいはさ。……だって、姉貴に、堅パンを沢山焼いてくれなんて言ったら、あやしまれるに決まってるし、パン屋で買っても、ぜったい姉貴に言いつけられちまうしさ」

「あきれたやつだ。それで、もし俺たちと合流できなかったら、どうするつもりだったんだ」

「プルメールで買うさ。金は持ってきたもん」

「じゃあ、プルメールで、堅パンを買え。たしかに俺たちはパンを沢山もらってきたが、お前は、そんなに痩せてるくせに人の二倍は飯を食うし、いざと言うときのために、保存食は余分に持っておくべきだ。兎なんか、捕れるかどうか、わからないじゃないか。毎日毎日、悠長に狩りをしているヒマがあるとは限らないんだぞ」

「大丈夫さ、兎なら、まかしといてくれよ。まあ、見てなって。そんなに時間はとらせねえから。まあ、あんたが買えと言うんなら、パンも買うけどよ。あんたは、心配症だからな。でも、それじゃ、これで決りだな。俺たちは、旅の道連れってわけだ！　そうと決まったら、楽しくやろうぜ！」

「……しょうのないやつだ」

溜息をついたアルファードは、ローイがさっさと歩きだそうとするのを止めて、唐突な提案をした。

「ローイ。わかった、一緒に行こう。そのかわり、一つ、条件がある。イルベッザについたら、俺たちと一緒に軍に入らないか？」

「へ？　軍に？　ああ、いいぜ。そういう仕事は俺の趣味じゃないが、まあ、向こうについてすぐは仕事も住みかもないから、とりあえず飯とベッドにありついておいて、あとからゆっくり他の仕事を探すのも悪くないさ。そのかわり、他にいい仕事があったら、俺はすぐに軍をやめるぜ。それでもよければ、一緒に入ってやるよ」

「そんな、お前の考えているような『いい仕事』など、あるものか。どうせ甘いことを考えているんだろうからな。都は今、北部から出稼ぎに来て帰れなくなった者たちや、避難民であふれかえっているそうだ。軍以外の仕事は、なかなか見つからないと思うぞ」

「そんなの、探してみなけりゃわからないじゃないか。力馬鹿のあんたにゃ軍しかないかも知れないが、俺のような器用な人間には、何かしら道が開けるもんさ。さ、行こうぜ。プルメールにつくまえに日が暮れちまったら、コトだ。あの辺じゃ、まだ雪があるから、野宿はきついぞ」

そう言ってさっさと歩き出したローイの後ろで、里菜はアルファ

ードのマントをひっぱりながら小声で言った。
「ねえ、アルファード、いいの？　ローイは家出人でしょ」
「ああ、よくはないが、しかたがない。ここまで来ておいて、俺に説得されて帰るようなやつじゃない。あいつはけっこう頑固だから、こうなったら意地になって、ほんとうに一人ででもイルベッザに行ってしまうだろう。そうしたら、たしかに道中が危険だし、俺たちにとっても人数が多いほうが心強いのも本当なんだ。
それに、あいつを一人で都に放りだしたら、絶対にロクなことをしない。俺が一緒に連れていかなかったばっかりに、やつが途中で野たれ死にしたり、都で道を踏み外して何か厄介なことになってしまったりしたら、そのほうがよっぽど、やつの兄さんに対して申し訳ない。それくらいだったら、俺の目の届くところに置いたほうがいい。なに、ローイは絶対、そのうちに都にあきて村へ帰る。やつは、どうしたって、根っからあの村の人間なんだ」

こうして、三人の旅が始まった。
古いエレオドラ街道は、イルゼール村と首都イルベッザを結んで、この国の南の端を東西に横切っている。イルベッザから北部のカザベルに至るカザベル街道と並んで、この国の二大街道と呼ばれる、古代からの動脈である。
エレオドラ地方は、今でこそ都の人間からは草深い田舎と思われ、実際まあ、そのとおりなのだが、もともとは、女神の聖地としてこの国で最も古くから開け、独自の文化を誇っていた豊かな地方だ。神々の物語がまだ人の心に生きていた遠い時代には、この街道を多くの巡礼が行き交かったものだ。
また、往時の都人にとって、太古の大森林に隔てられて現実的な交流は少ないものの時々古い街道の向こうから＞魔法使い＜を送ってよこす古代の聖地エレオドラは、何か浮世離れしたおとぎの国のように思われ、都会の知識人たちのあいだで復古主義や田園趣味が

流行する度に、神秘的な古い文化が息づく実り豊かな素朴な田園ユートピア、世界の果ての聖なる山々の懐深く抱かれて俗世の汚れを知らぬ夢の桃源郷として美化され、脚光を浴びたりもしていたのだ。

むろん、当の村人たちには、自分たちの村が都の詩人たちによって『光り溢れる緑のエレオドラ、麦の穂の金に輝く永遠の国よ』だの、『死ぬ時は鳥になって飛んでいってそこで死にたい』などとセンチメンタルな詩に謳い上げられいることなど、知ったことではなかったのだが。

＞魔法使い＜が都に現れる時は必ず遠いエレオドラからこの街道を通ってやってくるというので、この道が、都人たちから、憧れを込めて＞魔法使いの道＜とも呼ばれていた時代もある。

しかし、近年では、北のカザベル街道が、ほぼ全長に渡っていくつもの大都市を点在させ、ひっきりなしに行き来する荷車や旅人で賑っているのに対して、南のエレオドラ街道は通る人も少なく、昔日の面影もなくさびれつつあった。

ひとことで南部と言っても、南東のエレオドラ地方と南西のイルベッザの間は、開墾を阻む深い森に隔てられ、互いの交流は少ない。この地方は古都プルメールを中心とする独自の小さな経済圏を確立して、イルベッザとはほとんど無関係につつましい繁栄を享受していたのだ。

もちろん、イルベッザとの間に物流がなかったわけではないが、街道沿いのヴェズワルの森に住み着いた山賊のせいで、それも今はかなり間遠になり、危険を承知の少数の勇敢な商人たちが護衛の私兵を何人も雇って穀物や羊毛製品の買い付けに訪れることが、ほんのときたまあるだけになっている。

しかし、そのことは、もともと豊かなこの地方に、さほどの痛手を与えなかった。むしろ、この外界との遮断こそが、この土地の自給自足の豊かさと平和をひっそりと守り続ける役割を果たしていたのだ。

街道とほぼ並行して流れるエレオドラ川は、しばらくすると、イルシエル山脈から流れ出るリル川と合流し、シエロ川と名を変えて、やがてイルベッザを抜けて海に注ぐ。

一行の最初の宿泊地である、エレオドラ地方最大の都市プルメールは、その、エレオドラ川とリル川の合流地点にある。古びた防壁で囲われた町には、連日、市が立ち、近隣の村から訪れる人々で賑っている。

その先は、いよいよ、山賊の根城ヴェズワルだ。古い石畳の街道は、天然の国境をなして峨峨とそびえ立つイルシエル山脈を左手に見ながら、シエロ川とつかず離れず寄り添って、ヴェズワルの古く深い森の中を抜けていく。

ヴェズワルの危険地帯を抜けても、その先はもう、イルベッザ近郊まで、街道沿いにこれといった町もなく、宿屋もないので、ずっと野宿をすることになる。

この街道には、かつて多くの巡礼たちが行き来したころでさえ、宿屋はほとんどなかったのだ。

女神の巡礼たちにとって、聖地での礼拝だけでなく、夜空を屋根とし大地を寝床として母なる自然の腕の中で眠る道中そのものが、女神への帰衣を表現する、巡礼の大切な要素だったのである。

ヴェズワルを過ぎればもう平地で、雪が積もっていないので、野宿もそれほどつらくないはずだ。冬眠していない動物や、食用になる野草もあるから、ローイの弓や鍋が役にたつこともあるだろう。イルゼール村は高原なので寒いが、もともと、この国の南部はかなり温暖であり、平地では冬でも森は常緑樹の緑に覆われ、川も泉も滅多に凍らないのだ。

この全行程を、アルファードは、里菜の足に合せて十日と踏んでいたのだが、もしかするともっとかかるかもしれないと危ぶみ始めている。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第二場（2）

プルメールへと向かう山道を下りながら、ローイは、やたらとペラペラしゃべりまくったり、時々ふっと黙りこんだりを繰り返していた。彼も、生まれてこのかた住み慣れた村を出ることで、彼なりに感傷的になっていたし、それに、どういうわけか、振り払っても振り払っても、ヴィーレの顔が頭に浮かんでしまうのである。

アルファードだけでなくローイまでも行ってしまったと知ったヴィーレは、今ごろ、泣いてはいないだろうか。

そう考えてローイはそっと首を振る。

（ええい、うっとおしい。俺はこれから都に行くってのに、なんだってあんなドンくさい田舎娘の顔なんて思い浮かべなきゃならないんだ。だいたいヴィーレは、もう、俺とはなんでもないんだぞ。ヴィーレが泣いているとしたら、それは俺じゃなくてアルファードのせいなんだ。ここでヴィーレの顔を思い浮かべて、なんだか気が咎めたりしなきゃならねえのは、俺じゃなくてアルファードだろうが！）

ローイは、黙って前を行くアルファードの広い背中を睨んだ。

ふたりは、ティーティが短剣を持ってきたあの朝、ヴィーレのことでさんざん言い争ったのである。

アルファードが村を出ていくことについてひとしきり口論したあと、ローイはこう言って、ヴィーレのことを持ち出したのだ。

「アルファード。あんた、逃げるんだな。ヴィーレはどうなるんだ。あんたが、そんなふうにはっきりしないまま、この村やヴィーレから逃げ出していったりしたら、ヴィーレは何年でも、ばあさんになっても、あんたを待ち続けるぜ」

アルファードはむっつりと、こう答えた。

「俺はヴィーレに、待てと言った覚えはないし、ヴィーレにそんなふうに思わせるような態度をとったことは一切ない。だいたい、ヴ

ィーレはお前の許婚だろう」
「それはいつの話だよ。そんなの、大むかしの話だろ」
「だが、ヴィーレは今でもお前を忘れていない。それなのにお前は、いつもいつもヴィーレをほうっておいて、あちこちの娘たちを口説いて回っているから、ヴィーレだってお前のところへ帰りたくても帰れないんだ。ヴィーレがずっと俺のそばにいるのは、お前に連れ戻しに来てもらうためなんだぞ」
「……ヴィーレがそう言ったのかよ。そうじゃねえだろう」
「ああ、ヴィーレは、そんなことは口に出さない。そういう娘だ。だから、わかってやって欲しいんだ。ヴィーレは俺の大切な妹のようなものだ。これ以上、ヴィーレを泣かせるような真似はするな」
「俺は泣かしてないぞ。あんたが泣かしてるんじゃねえか。そんなにヴィーレが大切で心配なら、あんたが村に残ってヴィーレを貰ってやればいいだろう」
「俺は、村にいたって、ヴィーレとは一緒になれない。ヴィーレには、先祖代々の畑を耕してくれる婿が必要なんだ。俺に百姓ができないのは、お前だって知っているはずだ」
「そりゃあ、ひとりじゃ、できないだろう。でも、ヴィーレとふたりでなら、出来るんじゃないか？　あんたは、魔法は使えなくても立派な身体してんだから、畑を耕すのにはそれで充分だし、虫除けや水撒きが必要な時はヴィーレがやってくれるさ」
「……そうして一生、ヴィーレの助けを借りて生きるのか」
「助けって、あんた、夫婦が助け合うのはあたりまえだろうが。一人でなんでも出来るんなら、最初から結婚する必要ないだろ。あんたさ、案外、依怙地だよな。なんていうか、気位が高過ぎるんだよ。何でも自分一人で、それも、人よりうまくやろうと思うからいけないんだ。魔法が使えなくたって、ほんとうは、あんたはちゃんと何でもやっていけるんだ。必要なところで他人の手を借りる勇気さえありゃあな」
「……お前に何がわかる。お前は、なんでもできるから、そんなふ

うに言うんだ。十何年も、世界でただ一人魔法が使えない男でありつづけてみれば、お前だって意地を張りたくもなるだろう」
「そりゃ、まあ、そうかもしれないけどさ。だけど、ヴィーレも、ヴィーレの親たちも、あんたに魔法が使えなくたって気にしないと思うぜ」
「ローイ。お前は、そんなに俺とヴィーレをくっつけたいのか？」
「いや、別に、そういうわけじゃないけどよ……」
「ローイ。たとえ百姓ができても、俺は、ヴィーレと一緒になるわけにはいかない。俺はヴィーレを妹のようにしか思っていないし、ヴィーレは今でも、心の底では、お前を想っている。だから、ローイ、お前が、ヴィーレを幸せにしてやってくれ」
「……そうか、そういうことか。あんたはリーナを選ぶから、余ったヴィーレは俺への置き土産にくれてやろうってわけだな。あんた、自分がいなくなれば、都合よく俺とヴィーレがくっつくだろうと考えやがったわけだ。たしかに、俺たち、いつまでもこのまま仲良し三人組ってわけにゃあ、いかなかったもんな。いつかは決着をつけなきゃならない時がきただろう。その時あんたは、たぶんヴィーレを泣かせることになる。あんたはそれが怖くて、自分が出ていくことで、そういう修羅場を避けようと考えたんだ。そうだろ？」
黙り込んだアルファードに詰め寄るようにして、ローイは更に言い募った。
「あんた、それは卑怯だぜ。あとのことは知らねえってか。ものごとが何もかもあんたの思惑どおりにいくと思ったら、大間違いだ。少なくとも、俺は、あんたの思惑どおりになんかならないぜ。あんたが、いらないからって回してくれた余り物なんか、俺がありがたく頂くと思うか？」
「そういう言い方は、ヴィーレに失礼だ」
「あんたのほうが、よっぽど失礼だよ。ヴィーレに気が無いんなら、はっきりそう言ってやれよ。そうすれば、俺じゃなくても、あいつはあれで、けっこう隠れた人気があるんだ。ただ、みんな、あんた

が目を光らせてるのが怖くてヴィーレに近付けなかっただけでさ」
「俺は別に目を光らせてなどいない」
「あんたにそのつもりがなくても、みんなは、そう思ってたぜ」
「誤解だ」
「とにかく、あんたが出ていくことについては、あんだけ言っても無駄なら、もう言わねえが、でも、これだけは言っておくぞ。あんた、ヴィーレの幸せを願うなら、出ていく前に、はっきり言ってやんな。『俺は帰らない。お前じゃなく、リーナを選ぶ』って」
「なんでそんな嘘をつく必要がある」
「嘘って、あんた、そういうつもりじゃねえのか？」
「別に俺は、ヴィーレとリーナのどっちを選ぶとか選ばないとか、そんなつもりは、まったくない。それに、俺とリーナは、まったくそういう間柄じゃない」
「あのさあ……。あんた、もしかして、コレ、かあ？」
ローイが、この世界でホモを意味するゼスチャーをして見せたので、アルファードは思わず力が抜けて溜息まじりに答えた。
「……おい、どこからそういう突拍子もない発想が出てくるんだ」
「だってさあ……。そういうウワサ、昔からあるんだぜ。いや、俺は、信じてなかったけどな」
「なんでまた、そんな素っ頓狂な話になってるんだ……」
アルファードは、額に手を当ててうめいた。
「あんたが、いい年して、まるで女っけがなかったからさ。ヴィーレだって妹扱いしかしないしさ。特に、リーナがきてからは、ますます言われてるぞ。だって、あんたら、どう見たってヘンだもん。リーナがあんたに惚れてるのは、一目瞭然なのにさ」
「……たしかに、リーナは俺のことを慕ってくれているが、それは兄のように父のように思いなして懐いてくれているだけだろう」
「うん、その点についちゃあ、俺も同感だけどよ。でも、他のやつらは、あんたらのことを俺ほどよく知らないから、『ありゃあ、どう見てもヘンだ、今まで冗談半分で噂してきたけど、もしかしてア

ルファードは本当に噂通りのコレだったのか』って話になってるんだよ」

「興味本位の下卑た勘ぐりは迷惑だ。俺とリーナは、みんなが勘ぐるような、そういう関係じゃないんだ」

「だから、そういう関係じゃねえのがヘンだって言われてるのさ」

「そんなことは、俺たちの勝手だ。まわりにとやかく言われるようなことじゃない」

「そりゃ、そうだけどなあ……。それじゃあリーナは、あんたの何なんだ？」

「何だと言われても、困るが……。俺は、行き倒れていたリーナを見つけて、リーナには他に行くところもないから家に置くことにした。それだけのことだ。俺がじいさんに拾われて、ここに住むようになったのと同じだ。それで俺とじいさんが結婚しないから変だなどとは、誰も言わなかったぞ」

「あたりまえだ、この大バカ！　まじめな顔してすっとぼけたこと言って話をはぐらかそうったって、そうは行かないぜ。じゃあ、何か？　あんたはただ、リーナが自分の仕事の役に立つから連れてって便利に使ってやろうと思っただけか？」

「俺がリーナを使うんじゃない。俺とリーナは、対等にコンビを組むんだ」

「ああ、ああ、対等だろうよ。あんたとミュシカがそうなのと同じくらい、な。あんた、そういう下心があったから、リーナが魔法を消さずにいられるだけじゃなく、自由に消すこともできるよう、あんなにしつこく練習させてたんだな」

「いや。俺は彼女のためを思って……」

「ふん。そりゃあ、あんたの役に立つ人間になるのが、リーナがこの国で飯を食っていく早道だろうからな。でもなあ、言っとくが、いくらあんたがリーナを助けたからって、リーナを好きなように連れ回していいわけはないぜ」

「俺は一方的にリーナを引っ張り回そうとしているわけじゃない。

リーナには、対等な人間として話を持ちかけ、納得してもらったんだ」

「あんたの『対等』は、いつも口先だけさ。リーナも可哀想にな。あんたに、いいように持ち物扱いされてさ。まるでお礼奉公だよな。……あんたはさ、何だかんだと言い訳しちゃいるが、結局のところ、やさしそうなふりして、リーナもヴィーレもいいように利用してるんじゃねえか。あんた、世の中で自分だけが偉くて、あとのやつは自分の思い通りに動かせるコマかなんかで、何でも自分だけで決めていいと思っているんだろ。だいたい、そうでなきゃ、こんな大事なことを決めるのに、あんたの一番の友達のはずの俺にさえひとことの相談もないなんてこと、あるか？」

「だから、それは、悪かったと……。何しろ、リーナにもゆうべ初めて話して……」

こうして話は降り出しに戻って、結局その後、彼らはケンカ別れしたのだ。

今、そのことを思い出すと、ローイは、また、腹が立ってくる。アルファードは、今になっても、まだ、ローイに向かって、『ヴィーレはどうするんだ』などと言うのだ。

（たしかに、アルファードが春になっても戻らないとなりゃあ、村中のやつが、よってたかって俺とヴィーレをくっつけようとするだろう。ヴィーレも、そのうちに、家のことを考えて俺と一緒になろうとするだろう。でも、俺は、ごめんだぜ。内心じゃまだアルファードのことを想い続けているヴィーレと結婚するなんてさ。だいたいヴィーレなんて、他の男を想っているのを承知で、それでもありがたがって一緒になっていただかなけりゃならないってほどの、そんなたいそうな女じゃねえさ。俺、百姓はいやだしさ。あの村にいたら、俺の将来なんか、決まり切ってるもんなあ。ひそかにアルファードを想い続けているヴィーレの婿になって、少しばかりの畑だの羊だのを守って、日がな一日、土にまみれて野良仕事をして、そのうちおいぼれて死ぬんだ。なんにも面白いことなんか、ありゃあ

しない。ちくしょう、俺は行くぞ！　ヴィーレはヴィーレで、なんとかするだろうさ！）

ローイは、足元の雪を長靴の先で蹴り飛ばして、青空を見あげた。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第二場（3）

三人がプルメールにたどりついたのは、短い冬の日が暮れかかるころだった。

これまでイルゼールから出たことがなく、この世界の町というものを、ただイルゼール村を大きくしたようなものとしか想像できていなかった里菜は、プルメールの町並の意外な立派さや市場の賑いに呆然と見とれて、ローイに小声で叱られた。

「おい、リーナちゃん、そんな、口開けてキョロキョロすんなよ。いかにも田舎者みたいじゃんか。こんなんで驚いてたら、イルベッザに行ったら目を回しちまうぜ」

アルファードやローイは、日頃からしばしばこの町を訪れているのである。この町は、この地方の中心地であり、イルゼールを含めて、この地方の村々の農産物の多くはこのプルメールに運び込まれるし、村のものが何か村の雑貨屋では間にあわない特別な買い物をする時には、みんなプルメールに来るのだ。

三人は、ローイの分の堅パンや、旅に必要ないくつかの品を買い整えてから、安宿に泊まった。その宿はイルゼールの村人がよく使う常宿で、アルファードも何度か泊まったことがあり、主人とも顔見知りだった。そこでアルファードは、ローイに内緒で、主人に、近い内にここに泊まりに来るはずのイルゼール村のものに渡してくれと、書き付けを託した。それは、ローイの兄に宛てて、ローイは自分と一緒にいるから心配いらないと知らせるものだった。

翌朝早く、三人は凍り付いた地面を注意深く踏み締めて出発した。その日は、前日とは打って変わって、この地方の冬にありがちな、どんよりとした空模様だった。ときおり小雪がちらちらと宙を舞うが、新たに積もるほどでもない。

ローイは歩きながら、寒さを気にするふうもなく、気持よさそうに両手を伸ばした。

「ああ、旅はいいなあ。な、リーナちゃん。俺さあ、旅芸人の一座に入って国中を旅するのが、ガキのころの夢だったんだ。昔、国中が平和だったころは、うちの村にも、ときどき旅芸人が回ってきたもんさ。歌ったり、踊ったり、芝居をしたり。キレイな女の子もいたりしてな。一度、俺、一座の女の子に惚れて、荷物に潜り込んでその一座についていっちまったことがあるんだ。ななつの時だったかなあ。おやじが置き手紙見て、血相変えて馬飛ばして連れ戻しにきてさ。俺があのまま一座に加わってたら、今頃、すっげえ花形になってただろうなあ。見目はよいし、歌はうまいし。どこの町にいっても、女の子がキャーキャーいって大騒ぎになってたぜ。な、そう思うだろ？」

「えー。どうかなあ。でも、ローイ、置き手紙と家出は今回が初めてじゃなかったんだ」

「だから、今回のは、家出じゃねえってばよ！」

「それに、女の子のあとをおっかけるのも、ななつの時からやってたんだ」

「ああ？　それは、もっと前からだよ！　でもよ、ほんと、キレイな子だったんだぜ。北部から来た一座でさ、妖精の血を引く女の子だったんだ。茶色い肌にオレンジ色の髪してさ、大きな目は琥珀色の、そりゃもう、パッと人目につくような派手な器量よしで、村ではちょっとお目にかかれないような垢抜けた様子をしてな。その子が、大きな白いリボンを髪に飾って、まっ白い服着てかわいい声で北部の民謡を歌うところは、もう、ほんとうに夢のようだった」

「へえー。あたしも見たかったな。妖精の子孫かあ。神秘的よね」

「だろ？　あの子、いくつくらいだったのかなあ。俺はそのころ、自分よりふたつ、みっつ上だろうと思ってたんだけど、もっと上だったのかもな。妖精は人間より一回り小さい種族だったから、今でも妖精の血筋はみんな小柄なんだ。それに、妖精の血筋の人は、年より若く見える。そういえば、その子の母親が、やっぱり妖精の血筋の、すげえ美人で、同じ一座で伝説の妖精をたたえる古い詩なん

かを語ってたんだが、みんな、最初はその親子を、てっきり年の離れた姉妹だと思ってたもんな。

あのな、妖精っていうのは、もともと人間よりずっと長命な種族だったんだ。けれど、神代の終りとともに妖精たちが『魂の癒し』の力を無くしてから、身体よりも先に魂が老いて弱ってしまうようになって、だんだん寿命が短くなってきたんだと。だけど妖精は、もともと長命だったから、時々しか子供が生まれなかった。それでだんだん数が減って、しまいには滅んでいったんだ。

妖精はシルドーリンの丘の下に住んでて、めったに人間の前に姿をあらわさなかった。そのころ、シルドーリンは、結界じゃなかったけど、人間は立ち入らない聖域だった。でも、ほんとにめずらしいことだったんだけど、ときたま妖精がシルドーリンを出て人里に降り、人間と愛しあって子孫を残すことがあった。それが、今の妖精の血筋のはじまりさ。だから今でも妖精の子孫は年のわりに若く見える人が多いし、長寿の人も多いんだ。今、この国で百才以上の年寄りは、ほとんどみんな妖精の血筋だろうと言われているんだぜ。ついでに言えば、妖精は、男も女もとても美しい種族だったそうで、今でも妖精の血筋と言えば美人の代名詞みたいなもんなんだ」

「あの、お話に出てくるラドジール王も、妖精の血筋だったから、『妖精王』って言われてたんでしょ？」

「もちろん、そうさ。なんでも、黒い肌に銀の髪、青い瞳という、いかにも妖精風のすばらしい美貌の持ち主だったってことだ」

「妖精の血を引く人は、肌が黒とか茶色なの？」

「ああ。伝説の妖精は、肌は坑道の土と闇の漆黒、髪は炎と金属の色、瞳は宝石の色って言われてるが、実際は、肌は、茶色いな。人によって濃かったり薄かったりするけどな。ラドジール王の黒い肌っていうのも、まあ、言葉のアヤで、実際は濃い茶色だったんだろうと思うぜ。髪はだいたい伝説どおり、赤か金か、その中間の色のことが多くて、必ず、金属でできてるみたいにツヤツヤした巻き毛だ。目は、サファイアの青とかエメラルドの緑とか、変わったとこ

ろではアメジストの紫とか琥珀色とか、そういう、たしかに宝石みたいな明るい色のことが多い」

「肌の色は、ずっと昔に混血してそのまま何世代もたってるんだから、だんだん薄くなってきたんじゃない？　妖精が滅びたのって、いつごろ？」

「妖精は人里離れた山のなかの洞窟にすんでいて人間とほとんど交流がなかったから、いつの間に滅びたのか誰も正確には知らないんだけど、とにかく、もう何千年前だかもわからないくらい昔だよ。でも、妖精の血は人間の血より濃くて、親の片方が妖精の血筋ならその子供はまずまちがいなく妖精の特長を受け継ぐし、そのまた子供や孫も、代々、妖精の特徴を受け継ぐんだそうだ。そして、たまに、妖精と人間の間に妖精の特徴を持たない子が生まれた時も、そのまた子供や何代も後の子孫に、突然、妖精の特長を持つ子供が生まれたりして、そこからまた、妖精の特徴を持つ子孫が増えるから、妖精の血筋の特徴を継ぐ人は、何千年もたっても絶えないんだ」

「ふうん……。ねえ、都に行けば、あたしも妖精の子孫に会えるかしら」

「そりゃあ、会えるさ。昔は、妖精の血筋は、ほとんどシルドーリンの近辺にしかいなかったそうだけど、でも、国が統一されてからは、ほかの人がみんなそうしたみたいに妖精の子孫もあちこちに移り住みはじめて、今じゃ、だいぶ散らばってるんだ。俺も都で何人も見かけたが、女の子が、みんな、えらいべっぴんで、みんな小柄だけどスタイルはいいし、ちょっと声をかけて見ようか、なんて……おおっと、そんなことは、どうでもいいんだ。とにかく、都の大通りに一時間も立ってりゃ、何人でも通るよ。でも、妖精の血筋の女の子は、気位が高いぞ。日頃から、美人だといってちやほやされつけてるせいか、けっこう高飛車なコもいて、俺なんか、あやうくひっぱたかれそうに……ああ、いや、いや、何でもない、何でもない」

「ローイ……。あなた、都へ行ったときも、通りに突っ立ってナン

パしてたんだ？」
「ま、まあ、いいじゃねえか。でもよ、妖精の血筋の女の子に声かける時には、気をつけないといけないぜ。はたちをいくつかすぎたばかりと思ったのが、俺くらいの年の子供のいるおばさんだったりするからな」
「あたし、ナンパなんかしないもん」
「そりゃそうだ。そうそう、あんた、軍隊に入るんだったら、きっと、いくらでも妖精の子孫と知り合いになれるぜ。軍の宿舎や練兵場はイルベッザ城の敷地内にあるんだけど、同じ敷地内に、国立の治療院があるんだ。妖精の血を引く人がひとところにたくさん集まっているってことでは、多分、シルドーリンの麓の村以外では国中で一番だ」
「えっ、どうして？　妖精の血筋の人は、身体が弱いの？」
「ああ、違う、違う。患者じゃなくて、治療師のほうだ。妖精の血筋には、癒しの魔法が得意な人が多くて、歴史に名の残るような優秀な治療師といえば、たいていは妖精の血筋だ。妖精は、もともと癒しの種族だったからな。あと、鍛冶屋とか貴金属細工師なんかにも、妖精の血筋が多いぞ。妖精は、癒しの種族であるだけでなく、もともと、シルドーリンの鉱山で金や宝石を掘って、それを鍛えたり細工したりして暮していた鍛冶の種族でもあったからな。だから癒しの魔法だけじゃなく、火を扱う魔法も得意な人が多い。もちろん例外もいるし、妖精の血筋だから当然癒しの魔法が得意だろうとか決めつけられるのを嫌う人も多いそうだけどね」
　ローイの話を聞きながら、里菜は、黒い肌に金や赤の髪という、見たこともないような姿の人々を思い浮かべて、わくわくしていた。最初に妖精と聞いた時には、里菜は、背中に羽のある、てのひらにのるような小人を想像してびっくりしたのだが、そうでないと知った今でも、やはり妖精の末裔という存在は、里菜の心を引きつける。
　だいたい、この世界は、別世界とは言っても、魔法の存在に慣れてしまうと、ふだんはあまり変わったところがないように思えるの

だ。

ドラゴンはいるが、しょっちゅう目にするものでもないし、あとはそう変わった生き物を見かけることもない。植物なども、大半は『あちら』にも存在するようなものだ。

ただ、見かけは『あちら』の動植物のどれかに似かよっていても性質がちょっと違ったりすることはあるし――たとえば、まきばで時々見かけたヒナギクそっくりの可憐な花は毒草だそうで、アルファードは見つける度に、羊がうっかり食べないようにと引っこ抜いていた――、麦だの羊だのといった『あちら』と共通の動植物も、里菜にはまったく同じものに見えるけれど、詳しい人がつぶさに見れば、どこかしら多少違うところがあるのかもしれない。また、中にはこの世界に独特の花や作物もあるようだ。

だが、そういう独特の動植物も、ただ単に知らない種類だというだけで、それほど変わった様子はしていない。別の世界というより、ちょうど、ちょっとだけ気候の違う外国に来たような感じだ。

村の人々もまた、そういえば、里菜から見てあまり違和感がない容姿の人が多かった。

白い肌に空色の目のヴィーレを見たときには一目で外国人だと思ったが、村ではたいていの人は日焼けして小麦色になっているから元の肌の色はよくわからないことが多く、顔立ちもそれほどバタ臭くない。アルファードなどは、日本人だと言われれば納得してしまっただろうと思うような顔立ちだ。

そして、髪や目の色は、みな、わりと似通っている。

髪は、ほとんどの人が茶色の濃淡で、人によって多少赤っぽかったり黄色っぽかったり、まれにはヴィーレのように亜麻色に近いほど色が淡かったりはするが、金髪や黒髪の人はいなかった。目の色も、ほとんどが茶色の濃淡で、たまに空色がいるくらいだ。

それで里菜は、最初、この世界の人はみな、ああいう容姿なのだと思っていたが、あとで、そういうわけではないことを、ローイに教わった。

あの村は、何百年も人の出入りがほとんどないので、村人がみな、互いに似通っているのだという。

ローイの話によれば、この世界でも、昔は地域によって住民の容姿にけっこう特長があったのだが、国の統一以来、人の移動が多くなって、今では、特に都会では、みんな混じりあって住んでいるということだ。

だから、あの村のように村中の人の髪の色がほとんど同じなどというのは、『ど田舎』の証明なのだとローイは言っていた。

プルメールでは、里菜はたしかに、いろいろな容姿の人を見かけた。色の白い金髪の人も、彫りの深い異国的な顔立ちの人たちの一団も見たし、中には、日本人かと思うような小柄な黒髪の人もいて、思わず駆けよって声をかけたくなったくらいだった。だが、ローイの話によるとプルメールにもいくらかはいるはずの妖精の末裔は、運悪く見かけることができなかったのだ。

けれど、里菜は、イルベッザにつくのを待たずに、このあとすぐ、妖精の末裔と遭遇することになる。

それは、道端の空き地で、水と携行食の簡単な昼食をとっている時だった。

ローイは、堅いの不味いのパサパサするのと、さんざん文句をいいながら、アルファードの二倍、里菜の三倍は堅パンを食べた。プルメールでパンを買ったのは、まったく正解だった。

「ローイって、ほんとに、痩せの大食いね」と、里菜がからかうと、ローイは口いっぱいほおばったパンをもぐもぐ噛みながら答えた。

「ああ、兄貴の嫁さんにも、よく言われる。ろくに働きもしないで、食べるのだけは十人前、なんてね。でも、十人前ってのは、いくらなんでも大袈裟だよな。せいぜい三人前だよ」

そうして、ローイが、デザートにヴィーレの焼き菓子を食べようとして口を開けた時だ。

ふいに、すぐ耳元で、子供の声がしたのだ。

「それ、ちょうだい！」

「うわあっ！」
いきなり間近から声をかけられたローイは、菓子を手にしたまま、飛び上がった。
里菜とアルファードもぎょっとして、顔を上げた。
ローイの横に、いつのまにか、小さな女の子が、当然のような顔をして立っていた。
背格好からすると、八、九才だろうか。
その容姿に、里菜は目を見張った。
ビロードのような漆黒の肌に、光輝く黄金の巻き毛。信じられないほど大きな、明るい緑の瞳。『あちら』の世界ではアニメやマンガの中でしかお目にかかることが出来ない現実離れした色彩の、絢爛豪華を絵に描いたような、唖然とするような美少女である。
まちがいなく、妖精の血筋だ。
少女は、冬だというのに、なぜか袖なしの薄衣一枚をまとって、震えるでもなく、かわいらしく小首をかしげて、落ち着いた様子で立っている。
（か、かわいい！　お人形さんみたい！）
里菜はとっさにそう思ったのだが、そんなのんきなことを考えている場合ではない。いくら街道ぞいとはいえ、こんな山奥に、子供がひとりでいるわけがない……。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第三場（1）

「それ、ちょうだい。お菓子」
少女は、自分に集まった驚愕の視線に臆する様子もなく、もう一度こう言いながら、ローイを見上げて手をつきだした。
驚きのあまり口を閉じるのも忘れて突っ立っていたローイは、目の前に手を突き出されて、反射的に焼き菓子を少女に手渡した。
「ありがとう」というなり、少女は、その場にちょこんと腰を降ろして、すごい勢いで菓子を食べ始めた。よほどおなかがすいているにちがいない。だが、それにしては、しぐさにどこか品があって、不思議と、がつがつという感じはしない。
呆然とその様子をながめていたローイは、少女が菓子を食べ終えてしまったのをみて、何も言われないうちに、あわてて二つ目を差し出し、空になっていた自分のお椀に水を入れて、それも渡した。
やっと気を取り直した里菜は、アルファードに囁いた。
「なに、この子？」
「なにと言っても……」
アルファードも、途方に暮れて首を振った。
里菜も驚いたが、アルファードとローイは、もっと驚いていたのだ。里菜には、怖がらせないよう黙っていたが、この辺はもういつ山賊が出てもおかしくない地域で、彼らは、食べたり話したりしながらも、それなりにあたりの気配には気を配っているつもりだったのである。それが、降ってわいたように、いきなり、すぐ隣に子供が立っている。
二人は、困惑した目を見交わしながら、子供が物も言わずに二つ目の菓子を平らげるのを眺めた。
おなかをすかしているわりに、よく見ると、子供の着ている簡素な型の薄物のワンピースは、ずいぶんと上等そうなものである。この世界の衣類のことはあまり知らない里菜にさえ、その服が、何だ

かひどく高級そうな生地でできているのということはすぐわかる。ちらちらと金の光をちりばめたその美しい生地は、不思議な光沢を帯び、角度によって赤にも緑にも見えるという、村では見たことのないような、豪奢で神秘的なものだ。そのくせ、かわいい足は、なぜか裸足である。

纏っている衣装にまけず劣らず絢爛豪華なのは、その少女の、目を見張るような鮮やかな美貌だった。

純金を紡いだかのような豊かな巻き毛が、小さな愛らしい顔を後光のように縁どる。滑らかな肌は、決して濃い焦げ茶色などではなく、伝説通りの、本当の漆黒だ。差し出された小さな手の、かわいらしい掌のほうも、ちゃんと黒い。

顔は優美な卵形で、その顔立ちには、完璧でありながら個性的な独特の美しさがある。　顔立ちそのものは、現代の日本人である里菜の基準でいうところの標準的な典型的な美人顔というわけではないのだ。そして、美人の基準はこの世界でもほぼ同じらしいので、この世界でも、たぶん、これは、普通の典型的な美人顔ではないのだろう。たおやかな卵形の顔は、全体につるりと滑らかで彫りが浅く、小さな鼻は、やわらかな丸みを帯びて、とても低い。

が、それが不思議と美しいのである。信じられないほど大きな目と、小ぢんまりと整った鼻や口元との、アンバランス寸前の危うげなバランスが絶妙で、その不思議な均衡の中では、鼻の低ささえ、この美しさを実現するためには絶対に必要不可欠な要素なのだと、一目で納得せずにいられないのだ。

ローイが、『妖精の血筋の人は、みんな独特の顔つきをしていて、たいてい、とてもきれいだ』と言っていたが、確かに、その通りらしい。説明されてもよくわからないが見れば誰でも美しいと思う、そういう不思議な美貌である。

特に印象的なのが、猫を思わせる大きな目だ。少女の瞳は北国の早春の野に萌えいずる若草のような、明るくやわらかい黄緑色――里菜の持っている短剣の、シルドライトと同じ色だった。

――そして、少女の形のよい両の耳たぶには、その瞳と同じ色の宝石の耳飾りがきらめいている。里菜の短剣に嵌っているシルドライトと同じ位の大きさだから、もし、それが本当にシルドライトだとしたら、そのふたつで、ローイ流に言えばイルゼール村二つ分の人間が一生遊んで暮せる計算だ。

いったい、これは、どういう子供なのだろう。里菜はしげしげと少女を観察した。

よく見ると、少女の金の巻き毛には、ところどころ小枝や草が絡まり、黒い絹のようにつややかな肌にも、豪華な衣装にも、あちこちに乾いた泥や埃がついている。だが、それも少女の輝くばかりの美しさを損なうことはない。この子供には、たとえどんなボロを着てもみすぼらしくは見えないだろうと思わせるような、不思議な気品があるのだ。それはたぶん、顔立ちが美しく上品だからというだけではない、もっと本質的な気品のような気がする。

よほど良い家のお嬢様が、迷子にでもなったのだろうか。

だとしたらプルメールの子供だろうが、それにしても、ここはプルメールから、既に半日歩いたところだ。

こんな危険な森の中に、しかも冬のさなかに、親が娘をピクニックになぞ連れてくるはずはないし、プルメールからここまで、この一本道を、間違って歩いてきたなどとは考えられない。

もしかすると、家出少女だろうか。それにしては、マントも着ていないし、荷物も持っていないし、そのうえ裸足とはどういうことだろう。

（もしかして、人買いにさらわれて街道を運ばれる途中で逃げ出したとか、旅の途中で一家が山賊に襲われて、この子だけ運よく難を逃れたとか……。それとも、もしかして、山賊の娘とか！）

ここまで考えて、里菜はぎょっとした。ここは山賊の住みかに近い。山賊の首領の娘かなにかだったら、隊商から奪った高価な衣類を着ていても不思議はない。

「ねえ、アルファード、まさか、この子、山賊の子とか……」

里菜がひそひそと囁くと、アルファードも小声で答えた。
「ああ、この森の奥にはタナティエル教団の村があるはずだ。そこから子供が迷い出ることは考えられるが……。それにしても、着ているものが上等過ぎる」
「何かの罠ってことはないわよね……」
「ないだろう。やつらにそんな回りくどいまねをする理由はない」
そう答えながら、アルファードは、ひそかに、少女が新手の刺客である可能性について考えを巡らせていた。
その間に少女は、ローイから渡された三つ目の菓子を食べ終えてしまった。ローイは、少女に水をもう一杯渡してやると、次にチーズと堅パンを差し出した。
「お前、そんな、菓子ばっか食ってないで、こういうものも食えよ、な。菓子ばっかじゃ身体に悪いぞ。ほら」
「うん、ありがとう」
少女は素直にパンをかじり始めた。
結局、少女はその後、堅パンとチーズと干し肉をひとしきり食べ、最後にもうひとつ焼き菓子を食べた。それでやっと満足したらしく、ローイにお椀を返してにっこりと微笑んだ。
「ありがとう。おいしかった。お兄ちゃん、いい人ね」
「ああ、よく言われる。特に女の子は、みんなそう言うよ。お前、名前は？」
「キャテルニーカ」
「うひゃあ、そりゃまた、えらく古めかしい、由緒ありげな名前だなあ。おい、なんだか聞いたことがあると思ったら、そりゃあ、たしか、伝説の、妖精の女王の名前じゃねえか？　なるほどなあ。そういえば、お前のその目、シルドライトの色だしな。髪の毛も金ぴかで、ちょうど古い歌にある通りだ。『麗しき妖精の女王、永遠なるキャテルニーカ。黄金の髪、シルドライトの瞳、闇に煌くみどりの夢よ』ってな。由緒正しい立派な名前をつけてもらってよかったな。うんうん、ニーカちゃんか。まさにぴったりの名前だ。本物の

妖精の女王もかくやって感じだよな。で、ニーカちゃん、あんた、どこから来たんだ?」

アルファードは、少女の相手をローイにまかせて、ただ黙って注意深くふたりの会話を聞いている。彼は、子供――特に女の子――は、どうも苦手なのである。別に嫌いというわけではないのだが、無器用なのでどう接していいかわからないのだ。

少女は、ローイの問いかけに答えて、森の奥、北の方角を指差して言った。

「あっち」

「うえぇーっ? あっちって、もしかして、タナティエル教団の村か?」

「ううん、違う、もっと向こう、北のほう」

「北って、お前、その先はどこまで行ってもずっと森だぞ。もしかして、お前、方向音痴か? お前、本当はプルメールの子なんじゃねえの?」

「そうじゃないわ。ずっと北のほうから、この森を何日も歩いて抜けてきたの」

アルファードと里菜は顔を見合わせた。アルファードは怪訝そうな顔をしている。

里菜は知らなかったが、この北のほうは、古代からの深い森がはるかに広がっており、普通の人は誰も立ち入ったことのない森の奥にタナティエル教徒の隠れ里があることは知られているが、その先は本当に人跡未踏の樹海なのだ。たしかに方角的には、まっすぐ北に向かって森を抜けていけばいつかは北部の人里に出るはずだが、それはあくまで図面上の最短距離であって、現実には、そんなルートはないはずだ。北部からここへ来るには、いったんイルベッザまで出てエレオドラ街道をまわってこなければならないのだ。

ローイも不審げに眉を寄せて、少女を問いただした。

「歩いてきたって、そんな薄着で、靴も履かずにか? この森にゃ狼だって出るんだぜ。連れはどうした? はぐれたのか?」

「ううん、最初から、ひとり」
「まさか。本当にお前ひとりで歩いてきたのか？　狼、出なかったか？」
「出た。この近くまで、一緒に来たのよ。夜は一緒に寝たわ。あったかかった」
「一緒に寝たあ？　狼とか？　……お前、迷子になったんだろ、な？」
「ううん、迷ってないわ。ちゃんと、ここに来れたもん」
「ここにって……。どこへ行くつもりだったんだ？　プルメールにか？」
「お兄ちゃんたちはどこへ行くの？」
「俺たちはイルベッザに行くんだよ」
「じゃ、あたしもイルベッザ。一緒に行っていいでしょ？」
「ええーっ。そりゃあ困るよ。いや、俺たちは別にいいんだけど、お前の親が困るだろ。お前、家はどこだ？」
「わかんない。忘れた」
「へ？　……じゃあ、親は？」
「死んじゃった」
「そうか、それは気の毒にな……。ここへ来る途中に亡くなったのか？」
「ううん。ずっと前」
「じゃあ、誰か、親じゃなくても、親の代わりにお前を世話してくれてた人とか、いただろ？　その人はどうした？」
「わかんない」
「はあ？　じゃあ、その人と住んでた村とか町の名前は？」
「忘れた」
「忘れたって、お前……。まあ、いいや……」
嘘を言っている様子ではない。ローイは追及を諦めて、黙って首を振りながら、荷物から取り出した手布を水で湿らせて里菜に渡した。

「リーナちゃん、悪いけど、これでこの子の顔の泥、拭いてやってや」

少女がおとなしく里菜に顔を拭かれているあいだに、ローイはアルファードのそばに行って小声で話し掛けた。

「おい、こりゃあ、たぶん、北部からの避難民の子供だぜ。家を失くして着のみ着のままイルベッザへでも逃げる途中に親なり養い親なりが死んだか、でなきゃ親と家をいっぺんに失くしたかして、そのショックで一時的にココが」と、ローイは自分の頭を指さす仕草をした――「おかしくなっちまったんじゃねえか。それで、その後、道に迷ってこんなところまで迷い出てきたって、そんなとこだろう」

「ああ、どうも、そんなところらしいな」

「それにしても、よくひとりで無事にこんなとこまで来られたもんだな。よっぽどいい家の娘だったんだろうが……。あのシルドライト、見たかよ。あれじゃ、追い剥ぎに、襲ってくれと言わんばかりだ。その上、狼と一緒に寝たんだと。こんな森の中に、どっかの村から逃げ出した犬でもいたのかなあ。

……で、あのおヒイ様、どうするよ？　イルベッザに連れていくか？　俺は、それがいいと思うぜ。村に連れていけば孤児のひとりくらい引きとってくれる家はあるだろうが、俺、村に帰るのはちょっとヤバイしなあ。引き返す時間も無駄だし。

プルメールでも、捜せば引き取り手はいるだろうが、まさか道端にほうりだしてくるわけにもいかないから、結局、俺たちが里親を探してやらなきゃならない。となると、かなりの長逗留になっちまうかもしれねえだろ。いくら別に急ぎの旅じゃないっていっても、あんまりぐずぐずして、天候が崩れても嫌だしなあ。

それに、たとえ引き取り手がみつかっても、これだけきれいな子だと、かえってよけいな心配が出てくるよな。引き取ったのが実は金目当ての悪いやつで、俺たちの姿が消えたとたんに、この子をこっそりいかがわしい店に売り飛ばしちまわないとも限らない、とかさ。ほら、世の中にはそういう趣味の連中もいて、子供は子供でそ

れなりに需要があるんだって話だぜ。しかも、これだけの、とんでもないほどのべっぴんとくれば、きっと、子供でも相当高く売れるんだろう。

　引き取られた後のことまで俺たちが心配してやる義理もないんだけど、やっぱ、気になるじゃん。ここで会ったのも何かの縁だ。里親を探すにしても、後々の待遇に目の届くところで探してやったほうがいい。な、あんた、どう思う？」

　ひそひそと相談を始めたふたりを横目で見ながら、里菜は少女の顔や手足の泥を拭きとり、服の埃をはたいてやった。こんな上等の衣服には、防水防塵の魔法もよっぽど丁寧にかけてあるものらしく、ちょっとはたいただけで、服は新品同様にきれいになった。その服に犬の毛のようなものがついているのをみつけた里菜は、あとでアルファードに見せようと、それをとっておいた。

　髪に絡まった小枝を外してやっている時、少しもつれた黄金色の巻き毛の間に何か黒く尖ったものの先端が覗いているのを見つけて、里菜は思わず手を止めた。気がついてみると、それは、こめかみの横あたりに左右一対で、髪を掻き分けて突き出しているのだ。

（うそっ。この子、角がある……？）と思って一瞬ぎょっとしたが、良く見ると、それは、尖った耳の先端らしい。異形と言えば異形だが、金色の巻き毛の渦から小さな三角がちょこんと顔を出している様は、小鬼のようで愛らしい。これも妖精の血筋の特徴なのだろうか？

　里菜は自分の荷物から取り出した櫛で少女のふわふわの髪を丁寧に梳いてやった。縮れているといっていいくらい巻きが強くて、ちょっと梳かしにくかったのだが、埃を落とした髪は、ますますつやつやかに、純金のように光り輝いたので、里菜はそれが自分の手柄のように嬉しくなり、惚れ惚れとその完璧な輝きに見とれた。

　そのあいだ、少女はずっとおとなしくされるままになっていた。おとなしい、というよりは、鷹揚といったほうがいい態度だったかも知れない。まるで、いつも侍女に身支度を整えさせるのに慣れて

いるお姫さまといった風情だ。
「はい、きれいになったわ」と、里菜が微笑むと、少女も、はにかんだように微笑み返して、こう言った。
「ありがとう。……お姉ちゃんが、女神様ね。会えてよかった」
「え？　あの、あなたね……、髪の毛梳かして貰ったくらいで、そこまでお世辞言ってくれなくても……」と、当惑した里菜は、はた、と思い当って尋ねた。
「あなたって、やっぱりタナティエル教徒じゃない？」
　余り嬉しくもないことだが、里菜のことを女神だの女王だのと言うのは、タナティエル教団のものに違いない。
　だが、少女は、こう答えた。
「ううん、あたしは違う。でも、あのひとたちのことは、よく知ってるわ。……あたし、お姉ちゃんの力になりにきたの。お姉ちゃんを探して、ここへ来たのよ。お姉ちゃん、妖精の短剣、持ってるわよね？　ほら、シルドライトのついたやつ。そのシルドライトは、あたしの耳飾りになってるのと一緒に掘り出されたものなの。だからあたしは、その短剣を持ってる人と一緒に行くの。ね、一緒に、行こ」
　里菜の短剣はマントの下になっていて、外からは見えないはずだ。めんくらった里菜は、とりあえずアルファードに今の話を伝えに行った。
　里菜の話を聞いたアルファードは、ちょうど、ティーティが短剣を持ってきた時のように、妙に納得した顔をして、
「そうか」とだけ答えた。
　里菜がアルファードに見せた動物の毛は、やはり狼のものだろうということになった。どうやらこの子は、嘘をついているわけでも、完全に頭がおかしいわけでもなさそうだ。
　相談の結果、三人は、少女をイルベッザに連れていくことにした。
　こうして、旅の一行に、もうひとり、不思議な美少女が加わった。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第三場（2）

キャテルニーカは、本当に不思議な子供だった。

彼女は、イルベッザに発つ前にプルメールに戻って靴とマントを買ってやろうというアルファードの申し出を、あっさり断わった。別に、遠慮をしたり、行程の遅れを心配してのことではなく、ただ、いらないというのだ。彼女はどうやら、この薄着姿でちっとも寒くないらしく、こんなことを言って、ケロっとしている。

「裸足がいい。地面の声が聞こえるから。服も、これでいい。このほうが、たくさん風に触れるから」

そうとなれば、幸い食料は多めに買い込んであるのだから、わざわざ戻って一日を無駄にすることもなかろうと、一行は先を急いだ。子供連れでは遅くなるかと思ったら、とんでもない。この子は、里菜よりよほど足が強い。北部から歩いてきたというのも、本当かもしれない。どんなに歩いても、その足取りはまるで踊るように軽く、全く疲れる気配もなく、逆に里菜の足を気遣ってくれるのだ。

キャテルニーカは、また、ひとなつっこい少女で、会ったばかりの里菜やローイにすっかりなついてしまい、道々、里菜とローイにかわるがわる纏わりついてくる。

けれど、キャテルニーカは、アルファードのそばにはあまり寄りつかなかった。

彼女はきっと、アルファードが子供好きではないことや、自分に心を許していないことを、直感的に見抜いていたのだろう。

たしかにアルファードは、まだ、この子のことを、それとなく警戒していたのだ。

アルファードも、この子は、まずまちがいなくローイの想像どおり、親と故郷を失くしたショックで一時的に記憶が混乱した避難民の子供だろうと思っているのだが、彼の性格上、どんな時でも『万一』という言葉が頭から離れないのである。

アルファードが彼女に心を許していないのには、もうひとつ訳があって、それは本当に感情的なものだった。彼女がアルファードを見て最初に言った言葉が、アルファードにとっては、理由はよく分からないが、もっとも他人から言われたくない言葉だったのだ。

彼女を一行に加えると決めた時、アルファードは、ごく自然に、リーダーとして、自分と仲間たちを彼女に紹介した。

「俺は、イルゼールのアルファード。こっちは、同じく、ローイとリーナだ」

その時、キャテルニーカは、その、すべてを見透かすような、猫を思わせる大きな緑の瞳で、小首をかしげながらじっとアルファードを見つめて、ぽつんと、こう言ったのだ。

「……ドラゴン」

アルファードの表情が強張り、拳が握りしめられた。それは一瞬のことだったが、アルファードの拳に並々ならぬ力が入るのを見た里菜は、アルファードが少女になぐりかかりでもするのではないかと、ぎょっとなり、少女をかばうように進み出ながら、その場を取り繕った。

「そ、そうよ。よく知ってたわね！　この人が、あの、＜ドラゴン退治のアルファード＞なの。アルファードって、ほんとに有名人なのね！」

実際、ローイの話によると、例の武術大会のおかげでアルファードのこの二つ名は全国的に知れ渡っているそうだし、アルファードという名はあまりよくある名前ではないそうだから、この子も、『イルゼールのアルファード』と聞いて、彼が三年前のチャンピオンその人ではないかと思い当たったのかもしれない。

が、それ以来、アルファードは、この少女に対して、露骨に邪険な態度をとることはないまでも、ますます距離を置いて接するようになった。里菜はそれに気づいていたが、アルファードは子供が苦手だというのは知っていたから、何も言わないことにして、かわりに自分がせいぜい彼女に話しかけてやるよう心掛けた。

話しているうちに、彼女の年令は、十一才だということが分かった。里菜は最初、もっと小さいかと思ったのだが、妖精の血筋だから背が低いのだろう。

だが、年令が分かっても、それ以上のことは、いくら聞いても分からなかった。

隠し事をしているという感じではないのだが、どうにも要領をえなくて、話が通じないのだ。

それに、いったいどんな深窓の令嬢だったものか、何だか浮世離れして、年令のわりに妙に幼い感じがする。言うこと、やること、まるで幼児のようだ。天は二物を与えずというが、この、豪華絢爛、とほうもないほどの美少女は、もしかすると少々頭が弱いのではないかと、里菜は思い始めている。

里菜は、ローイの腕にしがみついて跳びはねるように歩いているキャテルニーカを眺めた。ローイは、キャテルニーカにすっかり気に入られてしまっているのだ。どうも、彼女は、ローイのことを、自分の遊び相手を務める従者かなにかのように思っているらしい。

アルファードは最初、このふたりが、じゃれあいながら飛んだり跳ねたりして歩くのを、疲れるからと言って注意していたのだが、そのうち、この少女がまるで疲れを知らないことに気がついて、何も言わなくなった。

ローイは、自分の回りを跳び回っている少女を、つくづくと眺めて言った。

「しっかし、お前、また、すげえべっぴんだよなあ。妖精の血筋は美人が多いが、それにしても、こんな器量よしは見たことないや。そういえばお前、俺の初恋の人に、ちょっと似てるぜ」

ローイがなんだかうまいことを言い始めたので、キャテルニーカに対してすでにすっかり保護者気分になっていた里菜は、がぜん、彼女を守ってやらねばという気負いが沸き起ってきて、あわててふたりの間に割って入った。

「ちょっと、ローイ！　いくらきれいだからって、こんな子供にち

ょっかい出しちゃだめよ！　だいたい、その初恋の人って、さっき言ってた旅芸人の女の子？　だったら、あなた、女の子はそれよりまえから追っかけてたっていってたじゃない！」
「ああ？　俺、初恋の人は十人くらいいるの！」
「何よっ、それ！　そんないいかげんな……」
「あれっ、リーナちゃん、あんた、もしかして妬いてんの？」
「誰が！　あたしはただ、この子の健全な成育環境というものを考えて……」
「何？　なにを考えてるんだって？　なんだか知らねえけど、心配すんなよ。俺、そういうシュミ、ねえから」
「どうだか！」
「……リーナちゃん。俺、そんなに見境いのない男に見える？」
「見える。すっごく、見える！」
「ああ、情けない。リーナちゃんは俺のこと、そんなふうに思ってたのか。俺、ショックだなあ……。俺は、ただ、この子の将来が楽しみだと思っただけさ。今からこれじゃ、あと、五、六年もしてみろよ、絶世の美女になること間違いなしだ。だから俺は、ただ、今のうちに、ちょっとツバつけとこうかな、なんて……」
「やっぱり、そうじゃない！　ね、キャテルニーカ、このお兄ちゃんに近寄っちゃ、ダメよ！　ツバつけられるわよ。バッチイんだから！」
「なんだ、なんだ、人のことをバイキンみたいに……。ようし、そんなら、ほんとにツバつけちゃうぞ！　そおら！」と、叫ぶなり、ローイは指を舐めるふりをして、その指を突き出してキャテルニーカを追いかけ始めた。
「そら、そら、ツバだぞ、バッチイぞお！」
「キャーッ！　やだあ！」
キャテルニーカが、きゃらきゃら笑いながら跳びはねるごとに、尖った耳の先がぴょこぴょこ動く。
この、尖った耳は、ローイが言うにはやはり妖精の血筋の特徴の

一つなのだが、妖精の血筋なら必ず尖っているわけではなく、尖っていない人も多いらしいということだ。また、尖っている場合も、ここまでしっかり尖っているとは限らないらしい。

とすると、これもまた、この子の、妖精の血の濃さの現れなのだろう。

ローイとキャテルニーカは、里菜とアルファードのまわりで、ぐるぐると追いかけっこをはじめた。ローイのほうが、背丈で言えばキャテルニーカの二倍近いというのに、一緒になって追いかけっこに興じる様は、まるで子供がふたりである。

「おい、ふざけてないで、ちゃんと前に進め。同じところをぐるぐる回ってちゃ、いつまでたってもイルベッザにつけないぞ。リーナ、君も、ローイのやつを調子に乗せるんじゃない」

アルファードはあきれて溜息をついた。

その夕方、一行は、まだ明るさが残っているうちに手頃な空き地を探して、焚火の用意をした。

焚火をすることで山賊に居場所を教えてしまう危険はあるが、そうでなくても、どうせ街道は一本道だ。火を焚かないくらいで隠れられるわけもない。それよりも、寒さと獣を遠ざけておくほうが優先だ。

空き地といっても、そこは、これまで数多くの旅人たちに繰り返し利用されてきた、公共の野営用地のようなところである。宿屋がないこの街道では、旅人はみな野宿をするので、こういう空き地が自然発生的にあちこちに整備されているのだ。旅人たちの中には、野営地に、椅子になるような倒木を持ち込むもの、石積みのかまどを作ってそのまま置いていくもの、馬を繋ぐ杭を打っていくものまでいて、ほとんどキャンプ場のようになっているところもある。

里菜たちの選んだ空き地も、地面は平に踏み固められて乾いており、前の旅人が置いていったたきぎの残りまで見つかって、絶好の

野営地だった。
　とはいえ、この辺は山賊の勢力圏だ。森の奥まで単独で狩りに入るのは危険ということで、お茶だけいれて、携帯食で食事をすませることにした。たきぎも、なるべく空き地の近くで、みんなで一緒に拾った。そうすると、たきぎ拾いも、結構楽しいものだ。キャンプみたいで、わくわくする。
　もっとも、呑気にわくわくしているのは里菜とキャテルニーカだけで、アルファードやローイは、実は相当、気を張り詰めていたのだ。幸い、ヴェズワルの山賊は、もともと本職の山賊ではないし、まとまりのない連中なので、行動が粗雑だ。計画的に場所を選んで待ち伏せしたり、全く気配を殺して周囲を取り囲んだりといった、高度なことはできないはずだ。気をつけていれば、完全な奇襲だけは避けられると、ふたりとも考えている。
　その夜は、まずアルファードが寝ずの番につくことになった。あとの者は、焚火の回りで、乾いた落葉を集めて敷いた上に横になる。
　落葉の上にマントを広げている里菜に、
「リーナちゃーん、そんなとこで寝ないで、もっとこっち来なよ！　ここ、ここ。俺と一緒に寝ようぜえ！」と、自分がくるまっているマントを広げて呼んでみせたローイは、里菜に背負い袋でなぐられた。
「痛ってえ！　何もなぐることないじゃん。冗談がわからねえやつだなあ。いいよ、いいよ。ニーカちゃんと一緒に寝るから。な！」と言って、キャテルニーカのほうを見ると、彼女はもう、里菜の隣に横になっていたが、なんと、落葉の上に直接寝て、地面に頬を押しつけている。里菜が彼女に、これにくるまるようにと言って貸してやった大判の羊毛製ショールは、半分にたたんで上に掛けてあった。
「おい、ニーカ、それ、くるまれよ。地面から冷えるぞ」と注意するローイに、キャテルニーカは、もう眠そうな声で答えた。
「いいの。こうすると、地面の声が聞こえるから」

やはり、変わり者である。
ローイは最後にもう一回、里菜に向かって、
「リーナちゃんさあ、今度から、こういう時、黙ってなぐらないで、何か気のきいた悪態で切り返してよ。明日の夜までに、何て言うか考えときな。言っとくけど、バカとかボケとか、そういうあたりまえのこと、言っちゃだめだぞ。創意工夫が大切なんだからな」などと、わけのわからないことを言ったと思うと、里菜が返事をする間もなく、あっという間に寝息を立て始めた。あとで不寝番を交代しなければならないのだから、当然とるべき行動である。
キャテルニーカは、里菜と間近に顔を見あわせるように向かい合って横になると、小動物のように身体を丸め、すぐにうっとりと目を閉じた。
里菜は、心が暖まる思いで、そのあどけない寝顔を眺めていた。
長い睫毛が黒いビロードのような頬にあえかな影を落とし、耳元から雫のように下がったシルドライトが、穏やかな呼吸のリズムで微かに揺れている。陽の光の下では明るい浅緑色に澄み渡るシルドライトは、今、焚き火の焔に照らされて、深い緑色の底に揺れ動く真紅の煌きを湛え、昼間とはまた違う妖しい存在感を放っている。
この耳飾りについては、彼女が一行に加わった時、ローイが一度、こう言って注意をしてあった。
「おい、ニーカ、その耳飾り外しとけよ。目立つぞ、それ。この辺は山賊が出るんだぜ」
するとキャテルニーカは、さらりと答えたのだ。
「大丈夫。悪い心を持って見る人には、これは他のものにしか見えないの」
さすがに高価で貴重なものだけあって、随分と高度な魔法がかけてあったものだ。そんな種類の魔法があるとは、ローイもアルファードも知らなかったと言っていた。よほど由緒のある、古い品物なのだろう。
里菜は、ふと手を伸ばして、揺れる火影を映してちらちらと赫く

瞬くシルドライトを、指先でそっとつついて揺らしてみた。
　するとふいに、もう眠っていると思ったキャテルニーカが眠そうに目を開けて里菜を見て、半分夢を見ているような声でひっそりと言った。
「……魔王は、かわいそうね。お姉ちゃん、魔王を救ってあげてね……」
「え？」
　里菜が驚いて聞き直そうとすると、キャテルニーカはもう、目を閉じて寝息をたてていた。寝言だったのだろうか。
　里菜だけが、なんだか眠れない。
　野宿は今日が初めてで、焚火のおかげでそれほど寒くはないが、落葉を敷いても地面は堅いし、なんだか落ち着かないし、アルファードが起きているので申し訳ないような気もするし、なんといっても山賊が出るかもしれないのだ。
　そっと起き上がってアルファードのそばに座ろうとすると、
「リーナ、明日も歩くんだから、寝ておけ。ただでさえ、君は体力がないんだ」と、振り向きもせずに叱られて、しかたなく、また、横になった。
　ローイとキャテルニーカの寝息と、焚火の燃える音だけが聞こえる。
　黙って薄く目を開け、焚火に赤く照らされたアルファードの横顔をこっそり眺めていた里菜は、やがていつのまにか眠りに落ちた。

　どれくらい眠っただろうか。里菜はふいに誰かに身体を揺すぶられて、ぼんやりと目を開けた。
　耳元で、アルファードが、切迫した声音で鋭く囁いた。
「リーナ、起きろ。どうやら、近くに山賊が来ているらしい」
　寝惚けまなこだった里菜は、たちまちはっとして飛び起きるなり、反射的に、目の前のアルファードにしがみついた。

「やだあ！　怖い！」
　一瞬、狼狽したアルファードは、
「バ、バカ！　落ち着け」と、あわてて自分の胸から里菜を引きはがすと、すぐに元通りの、緊迫した中にも落ち着いた態度を取り繕って、諭すように言った。
「いいか、リーナ、怖がっている場合じゃない。なんとかうまく、ローイの魔法を消さないで、あっちの魔法だけを消してくれ。出来るな？　俺達みんなの命は君の働きにかかっているんだ。頼む」
「う、うん。わかった！」
「それから君は、あの子が怯えたり騒いだりしないよう、守ってやっていてくれ。それも君の役目だ」
　その言葉にはっとしてアルファードの視線を追うと、となりに寝ていたキャテルニーカが、ちょうどむっくりと起き上がったところで、目をこすりながら聞いてきた。
「……どうしたの？」
　そのいたいけな姿を目にしたとたん、里菜は急に腹が据わった。
「ニーカ、こっちおいで。山賊がいるんだって。でも、怖くない。アルファードとローイはすっごく強いし、あたしは、こう見えても本物の魔法使いなのよ。心配しないで隠れてれば、あたしたちがきっと守ってあげるから！」
　さっきは自分が怯えていたくせに急に強気で宣言した里菜は、右手で短剣を握りしめ、左手でキャテルニーカを抱き寄せて、マントでくるもうとした。アルファードは、そんなふたりを後ろにかばいながら、油断なく剣を構えて仁王立ちになった。
　ローイはすでに起き上がって、アルファードの横で弓に矢をつがえている。
「よおし、リーナちゃん、俺がいっちょ、いいとこ見せてやるからな。心配すんな、俺とアルファードがいりゃあ、山賊の十人や二十人、どうってことねえ」
　ローイは唇をなめて目を細め、周囲の木立の奥の暗がりをすかし

見た。
「……いたぜ」
呟いたローイが弓を引き絞った瞬間、里菜の腕の中から鉄砲玉のような勢いで転がり出たキャテルニーカが、
「だめ！　やめて！」と叫びながら、いきなりローイの腕に飛びついた。
「ニーカ！」
里菜とアルファードが同時に叫んだ。
はずみで放たれた矢は狙いを外れ、近くの木に当たって地面に落ちた。
同時に、木立の中から、ばらばらと十人あまりの黒マントの人影が飛び出してきた。
ひとりひとりが魔法を使おうとするところをいちいち見極めていては間に合わないと思った里菜は、目を閉じて念じた。
（あいつらは全員、魔法が使えない、使えない！）
結果を確かめるために目をあけようとした瞬間、何か爆発でも起こったように、あたりが突然、青い光の洪水に満たされた。里菜は慌ててまた目をつぶった。
一瞬の爆発的な眩しさのあと、光は少し薄れて、そのまま消えずに安定した。
そろそろと目を開けた里菜が見たのは、中空に浮かぶ、丸い光の球だった。それが、空き地とその周辺の一帯を昼間のように明るく照らし出している光源で、その真下に、小さな手を天に差しのべてすっくと立つキャテルニーカがいた。
光球は、彼女が差し伸べた腕の先に浮かんでいるのだ。
はっとする間もなく、凛とした声が響いた。
「みんな、やめて！　あたしはシルドーリンのキャテルニーカ。ヴェズワルのものたち、聞きなさい。この人たちを攻撃してはいけない！」

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第四場（1）

青白い光に照らし出されて、誰もが一瞬、動きを止めた。
催眠術にでもかかったかのように、みな、頭上に光を頂いたキャテルニーカに目を吸い寄せられて立ち尽くす。
やがて、山賊の一人がキャテルニーカの前におずおずと進みでて、呆然と呟いた。
「……御使い様！」
山賊たちは、振りあげたままだった剣や槍を降ろして、ざわめき出した。
「御使い様だ……。あの、耳飾り！」
「本物だ！　本山のキャテルニーカ様だ」
「おお……。まさか……」
最初に進み出たリーダー格らしい男が、いきなりキャテルニーカの前に膝をついてひれ伏した。残りの山賊たちも我がちにキャテルニーカの前に殺到して跪く。
「おお、御使い様、癒し手様……。なぜ、このようなところに……」
キャテルニーカは、ひれ伏している最初の男の前に一歩進み出て、彼を見下ろしながら静かに言った。
「顔を上げて。……あなた、覚えているわ。イリューニンのビエルでしょ。むかし、シルドーリンで会った」
「おお……。そうです。以前、御使い様がまだお小さかったころ、私はシルドーリンにおりまして、幾度か拝謁賜ったことがございます。それを覚えていて下さったとは……」
「あたしは、誰も忘れないわ。一度でもあたしに会いに来てくれた人は、みんな、覚えてる。顔も名前も、その苦しみや絶望も。みんなも顔を上げて。……そう、あなたと、あなた。あなたも知っているわ」
キャテルニーカに指された人たちは、それぞれに驚愕と感動の声

を上げて再び頭を下げた。彼らはそれぞれ、以前シルドーリンにいたり、シルドーリンに巡礼に行ったことのあるものたちだった。

キャテルニーカは、見るからに荒くれた山賊たちを恐れる様子もなく、彼らの間に進み出た。そして、跪く人々の間をゆっくりと歩き回りながら、ひとりひとりの頭や肩に軽く手を触れていった。

その小さな姿から滲み出る威厳は、アルファードをすらたじろがせるほどで、里菜たちは唖然として、その様子をただ眺めていた。

やがてキャテルニーカは、元のところに戻って、リーダーらしい男に問いかけた。

「あなたたちがここに来たこと、アムリードは知ってるの？」

「いいえ。その……。こういう小人数の旅人を、その……、襲う時は、いちいち許可を得ないのです。私たちが勝手にしたことです。御使い様がこんなところにいらっしゃるとはつゆしらず、無礼なことをしました。お許し下さい。昼間、この一行を遠くから見かけました時は、私たちは、御使い様のお姿に気付かなかったのです。ただ、その……、ボロをきた子供がひとり、いるようにしか……」

キャテルニーカは、くすっと笑った。

「わかったわ。もう、山賊の真似は、おやめなさい。アムリードにも、そう、言っておいて。あと、この人たちに手出しをしてはいけないわ。今も、これから先も、ずっとよ。アムリードに言って、他の人たちにもそう命じさせて。でも、あたしとここで会ったことはアムリード以外には話しちゃだめ。アムリードにも、内緒だって言っておいてね。それから、これもアムリードに言って欲しいんだけど、あなたたちが捕えているゼルクィールたちを解放しなさい。そしてね、あたしが言ったことをアムリードに伝えた後は、あなたたちみんな、ここであったことを全部忘れちゃってね。わかった？それじゃみんな、元気でね。みんなに心の平安を」

キャテルニーカが軽く手を振ると、憑き物が落ちたようにおとなしくなった山賊たちは、残り惜しそうに振り返り振り返りしながら、素直に立ち去っていった。何人かは、悪い夢から覚めたばかりとで

も言うような呆然とした様子でそっと首を振ったり、自分は今まで何をしていたのだろうかというようにしきりと首をかしげているものもある。

あっけに取られてその後姿を見送っていたローイが、我に帰ってキャテルニーカに駆け寄った。

「おい、何だ何だ、今の！　御使い様って、お前、それはどういうことだ」

「あたし、あの人たちには、そう呼ばれてるの」

「いや、それはわかったけどさ。その、御使い様ってのは、あの、タナティエル教徒があがめている生き神様か」

「神なんかじゃないわ。ただの『御使い』よ。みんな、そう言ってるでしょ」

「お前が、そうなのか？」

「そうよ。そう言ったじゃない」

「どうりでいいもの着てるわけだぜ。なんで今まで隠してた」

「隠してないわ。忘れてたのよ」

「忘れてたぁ？　何だ、そりゃあ」

「あたし、時々、いろんなこと忘れるの。必要になれば思い出すから、大丈夫」

「大丈夫って、お前なあ……。そんな大事なこと、忘れてたじゃすまないぜ。なんでそんなお姫様が、ひとりでこんなとこにいたんだよ。逃げてきたのか？　シルドーリンの連中は、それ、知ってるのか？　お前を連れているために、俺たちがやつらに人さらい扱いされて追い回されるなんてこと、ないだろうな」

「平気。みんなは知らないけど、ギルデジードは知ってるから。追っては来ない約束よ。ね、だから一緒に連れていって。あたし、役に立ったでしょ？　あたしは、このお姉ちゃんのそばにいるために、お姉ちゃんを手伝うために、シルドーリンを出てきたの」

「リーナを？　……さっきの山賊、本当にもう、来ないんだろうな？」

「山賊って？」
「へ？　今の、タナティエル教団の連中だよ。ヴェズワルの」
「その人たちが、どうしたの？」
「だから、今、お前が追い払っただろ？」
「そう？」
「そうって、まさか、忘れたなんて言うんじゃないだろうな」
「うん、なんだか知らないけど、忘れたみたい」
「はああ？」
　ローイは呆れて肩をすくめてから、まだキャテルニーカに頭上にあった青い光球を指さした。この光球は、さっきから、まるで、糸に繋がれた風船か良く馴れたおとなしいペットのように、キャテルニーカが歩く上を従順について回っていたのだ。
「ニーカ、これ、なに？」
「あれ？　ああ、これはね、明りよ。あたし、これ、出したの？　しまうの、忘れてたわ。もういらないわよね。焚火があるもん」
　そう言うと、キャテルニーカは、さっと手をふって、まるで蝋燭を吹き消すような気軽さで光球をあっけなく消してしまった。
「ああーっ、もったいねえ！　そんな珍しいもん、消すなよ」
「大丈夫よ。あたし、いつでも出せるもん。あたし、前は暗いところに住んでたから、いつもこれ、使ってたのよ。あたしは暗くても目が見えるんだけど、世話をしてくれる人とかは、暗いと困るらしいから」
「暗いところって、シルドーリンの洞窟か？」
「え？　何が？」
「何がって……。今、自分で言ったこと、もう忘れたのかよ。ああ、もういい、もういいよ。お前、いくらなんでも、物忘れ、ひどいぜ。なあ、あの光の玉、出し方教えてくんねえか。俺、たいていの魔法は人より得意なんだけど、あんなの見たことも聞いたこともねえ。練習すればできるようにならねえかなあ」
　キャテルニーカはしばらく値踏みするようにローイを眺めて言っ

た。
「お兄ちゃんには、できないわ」
「ああ、やっぱ、無理か。やっぱり、そういう特別な才能の有る無しってのは、お前なんかから見れば一目でわかるわけ？」
「才能とか、そういうんじゃないの。これは、普通の人にはできないの。赤っぽい小さな明かりなら、普通の人でも、才能があればできるかも知れないけど……。あの青いのは、火じゃないから」
「それ、本物の魔法か？」
「うん、ちょっと違うけど、そんなようなもの。ローイお兄ちゃんはタダの人だから、だめだけど……」と言って、キャテルニーカは、アルファードのほうを示した。「あっちのお兄ちゃんは、できるかもしれない」
　突然話をふられたアルファードは、おもしろくもなさそうに言った。
「キャテルニーカ。俺は、魔法がまったく使えないんだ。一番簡単な魔法でさえ」
「いや、アルファード、わかんねえぞ。痩せても枯れても、あんたは＜マレビト＞だ。やっぱり、本物の魔法の素質が眠っているのかもしれねえ」というローイの言葉を小首をかしげて聞いていたキャテルニーカが、突然、一人言のように、さらりと言った。
「＜マレビト＞は、この世界の人じゃないから、この世界のものごとの法則に縛られないの。だから＜マレビト＞にだけ、＜本物の魔法＞が使えるのよ」
　みんな、驚いてキャテルニーカを見た。が、彼女は、自分が何を言ったかをもう忘れてしまったらしく、みんな何を驚いているのかという顔で、キョトンとしている。
　一瞬、しんとした後で、ローイは、やれやれというふうに首を振った。
「やっぱりなあ。なんだかわからないけど、やっぱ、あんたらは特別なんだろうな。そこいくと、俺なんか、結局は『タダの人』か。

あんたらみたいに特別な人間でいるのも辛いものらしいが、そういうあんたらと一緒にいて、一言で『タダの人』と言われちまう俺ってのも、なんか、つまんねえよな」

ローイが心なしかしょげたのを見て、キャテルニーカは慰めるつもりか、付け足した。

「あ、ローイお兄ちゃんは、『タダの人』じゃなかったわ。『いい人』よ！」

「……なんか、よけい、つまんなくなってきた。まあ、いいや、ニーカ、もう寝ろや。そんな大あくびしちゃ、せっかくのべっぴんさんがだいなしだぜ」

眦に涙が滲むほど大あくびをしていたキャテルニーカは、目をこすりながら頷いて、枯れ葉の上に、ころんと横になってしまった。

「俺たちも寝よう。山賊はもう来ない」というアルファードに、里菜はびっくりして尋ねた。

「え、いいの？　この子にもっといろいろ聞いてみなくて」

「もう寝ているんだ、聞きようがない。それに、聞いたってどうせ無駄だ。もう、今の出来事さえ忘れてしまったようだからな。なに、追手がかからないことさえわかれば、とりあえずそれでいいだろう」

「ねえ、『御使い様』って、なに？　そういえば、前にうちに来たあのおじいさんたちが『御使い様さまの御言葉』がどうとかって言ってなかった？」

「ああ、そのことは、あした歩きながら話そう。とにかく、少しでも寝ておくことだ」

そう言って、アルファードもローイも横になってしまった。

あんなことがあった直後に、みんなよく眠れるものだと思いながら、しかたなく横になった里菜も、そのうちに眠りについた。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第四場（2）

翌朝、目を覚ましたキャテルニーカは、前夜の出来事をまったく覚えていなかった。山賊のことはもとより、自分が＜御使い様＞であることも、青い光の玉のことも。

とぼけているのではなく、本当に忘れてしまうらしい。

道々、ローイが、里菜に＜御使い様＞のことを教えてくれた。

と、言っても、実はローイも、そのことについては、正確なことは、ほとんど何も知らなかった。彼が知っているのは、＜御使い様＞についての噂のあれこれだったのだ。

そもそも、＜御使い様＞の件に限らず、タナティエル教団というのは、名前や、その黒マント姿が有名なわりに、その正確な実情はあまり外部に知られていない謎の集団だ。彼らは人里離れた山の中などで閉鎖的な共同体をつくって暮しており、来るものは拒まないが、入って出てくるものはほとんどいないのだ。

タナティエル教団の起源は古い。

彼らが今のように大きな組織になったのは、その長い歴史の中でもごく最近のことで、もともと、いつとも知れぬほど遠い昔からシルドーリンの山奥でひっそりと独自の信仰を貫いてきた、ごく小さな世捨人の集団だったのだ。

その長い歴史は、聖地シルドーリンに数人の隠者たちが住み着いた時に始まった。彼らはそこで、坑道跡の洞窟に住み、ぼろを纏い野草を食べて、禁欲的な瞑想生活を送った。

今では彼らも、山中に建てた粗末な小屋に住むようになっていて、幾度か落盤事故があった坑道は、安全な場所が厳選されて礼拝所や地下墓地といった宗教的な用途に使われるだけになり、シルドーリンの丘陵地帯には彼らの掘っ建て小屋が集まった集落がそこここにある。それにもかかわらず、一般には、彼らは今だに洞穴に住んで原始的な生活をしていると思われているが、そういう誤解も、彼ら

が外部との接触を嫌うために生れたものだ。

山中の共同体の中で、畑を耕し子供を育て、禁欲清貧を旨とする質素な自給自足生活を送りながら信仰を貫いている彼らは、このように、一般の人たちからいろいろと誤解を受ながらも、最近になるまでは、決して悪くは思われていなかった。むしろ、一般の人たちからみて自分たちにはとてもまねできないような厳格で求道的な信仰生活を送る彼らは、特別信心深い、信念を持った立派な人たちとして、それなりに尊敬されていたのだ。

魔王の刻印を受けて絶望に取りつかれたものや死病に侵されたもの、身よりをなくしたものなどを、わけへだてなく無条件で受け入れ、心穏やかに死ねる時まで世話をし続けてきたということも、彼らが尊敬されてきた理由のひとつだろう。

だいたい彼らは、もともと、異教徒ではないし――地域的な差異が多少あるだけで基本的に同じひとつの神話体系を信じる人々だけから成っているこの世界には、異教という概念さえ、はなから存在しないのだ――、ある意味では異端ですらないのである。

確かに彼らはこの国の大多数の人たちとはかなり異なった思想を持ってはいるが、それでも異端と呼ばれないのは、この国に、彼らを異端と呼んで排斥するような『正統』の宗教勢力がないからだ。

この世界にも、もちろん信仰はあるのだが、それは、多くの人にとって、宗教というより単なる習慣的な生活儀礼に近いもので、それさえも今では、特に都会ではどんどん忘れられつつある。それでもたまには、思い出したように新興宗教的な集団が発生してくることもあって、中には一時的にかなりの勢力を誇って政治的な野心を抱くものが出たりもするが、たいてい、最初のカリスマ的な指導者を失ったあとは泡のように消えてしまう。また、特定の地域、血族、職能集団などに結びついた伝統的な信仰にはかなり強固なものもあるが、それらはその狭い集団の求心力に基づくものだから、そもそもが排他的で、集団の外に拡散してゆくことはない。

そんなぐあいで、ここでは、一度も、政治権力と結びついた組織

的体系的な宗教勢力というものが存在したためしがないのだ。そういう国には、異端も存在しようがない。異端は、『正統』勢力に排斥されることで、初めて異端になれるのだから。タナティエル教団は、少数派でありながら、今も昔も、この国で、永続的な全国規模のものとしてはほとんど唯一の、まとまった宗教団体なのである。

そんな彼らの評判が悪化の一途をたどりはじめたのは、ここ四、五年のことだ。

それはちょうど、この世界が天候不順や不作に襲われ始め、魔物がひそかに数を増やしはじめた時期と、ほぼ一致していた。まだはっきりと目に見える形になっていなかったそういう変化の兆しを、人々の心がおぼろげながら敏感に察し、世の中に不安がじわじわと広がってきたそのころから、タナティエル教団は入信者の急増でにわかに膨れ上り始めたのだ。

新しい信者たちは、やがてシルドーリンの小さな共同体に納まりきらなくなり、あちこちにタナティエル教団の新しい支部のようなものができ始めた。

それでも最初のうちは、そういう支部もシルドーリンの統制の下にあり、支部のものは年に一度は交代でシルドーリンに巡礼に来ていたが、やがて、最初からシルドーリンではなくもよりの支部に入信した新しい信者が支部の中枢を占めるようになると、彼らはシルドーリンから離れていった。

そういった変化は、何年もかからずに急激に起こり、古くからのシルドーリンの幹部たちはその変化に対処できず、教団は分裂していった。

今の彼らの悪評のほとんどは、この、新興の支部のものたちがばらまいたものだ。

例えば、イカサマくさい『魔物除けの護符』とやらを法外な値段で押し売りした、麓の村を略奪した、入信に際して多額の喜捨を強要したなど、きりがない。

ちなみに、この、喜捨を強要されたものというのは、魔王の刻印

を受けて軍隊をやめ、教団に身を投じようとした元兵士で、彼は家や土地を含む全財産を処分してこれに充てた。ところが彼には妻子がおり、住んでいた家を追われて路頭に迷った妻が困り果てて＜賢人の塔＞に訴え出たため、この話が有名になったのだが、こうして表沙汰になった事件は氷山の一角にすぎない。

それにしても、彼らがこうまで短期間のうちにすっかり評判を落し、忌み嫌われるようになったのは、彼らがもともと閉鎖的で、その実態が謎に包まれていたためだろう。

＜御使い様＞に関しても例外ではなく、誰もそれについて正確なことを知らないのである。

それでも、＜御使い様＞の存在自体は、古くからの口伝えで国中に知れ渡っており、その謎めいた巫女姫について、さまざまなうわさや憶測が乱れ飛んでいる。その中で、ほぼ共通して言われていることは、＜御使い様＞が黒い肌の少女であるということ程度で、あとはてんでばらばら、どれが本当か、誰にも分からない。

一説によると、＜御使い様＞は、妖精の血を引く人間の少女などではなく、タナティエル教団がシルドーリンの山奥で大切に血統を守ってきた本物の妖精の生き残りだと言われている。もっとも、これは、ほとんど信じる人のないおとぎ話のようなものだ。

また、ごく最近の一時期、巷を席巻した噂では、タナティエル教団が妖精の血を引く子供を誘拐したり、人買いから買い取って幽閉し、巫女にしたてていているというものがあったし、そうかと思うと、＜御使い様＞は、何千年もあどけない美少女の姿で生き続けているという不思議な話もある。

これについては、アルファードが、こう解説してくれた。

「俺が思うに、＜御使い様＞は、世襲なんじゃないだろうか。君も、もう知っているとおり、妖精の血筋の人はみな小柄で、たいてい、実際の年よりかなり若く見える。特に女性はその傾向が顕著で、子供のいる女性でも、まるで少女のように見えたりする。だから、代々の＜御使い様＞が比較的若いうちに子供を産み、女の子が生まれ

てある程度成長したところで引退し、娘に地位を譲るとすれば、＜御使い様＞は常に少女であるように見える――、そういうことだろう。それに、母娘なら当然顔は似ているだろうし、そうでなくても妖精の美貌は独特だから、他の人たちから見れば、みな似通って見える。同じ少女に見えるかもしれない」

「でもよ、アルファード」と、ローイが反論した。「世襲なら、子供を買う必要はないじゃないか。やつらが人買いから子供を買っているというのは、かなり確かな話だぜ。前に都に行った時に聞いた噂では、人買いに捕まってタナティエル教団に売り飛ばされかけたところを逃げ出したって女の子が、実際にいたってことだ。他にも、いくつか、そういう話があるぞ。少なくとも、ひところ、妖精の血筋の小さな女の子が攫われる事件が相次いだのは、あんたも覚えているだろう」

「だが、それがタナティエル教団に売られたのだという裏付けはないしな。やつらが子供を買うという噂を聞いた人買いが、それをあてにして勝手に子供を持ち込もうとしただけかもしれない」

「うーん、それはあるかもな。何しろ、あの噂は、けっこうパーッと広まったみたいだからな。そういえばさ、昔は、＜御使い様＞は、シルドーリンにひとりだけいるんだと誰もが思っていたが、ちょうどあの噂と同じころ、あちこちに、どんどんあたらしくやつらの村ができていて、そういう支部みたいなところにも＜御使い様＞がいるって噂も広まったらしいよな。だからいちいちシルドーリンに巡礼にいかなくてもいいんだって」

「ああ、教団のほうでは否定していたらしいがな」

「そうそう。その、あちこちの＜御使い様＞ってのが、攫われた子供かもな。もともと一人しかいなかったはずの＜御使い様＞が急に増えるってのも、変だもんな。でもまあ、要するに、みんな噂だよな。

てなわけでさ、リーナちゃん、＜御使い様＞ってのは、結局、本当のところは誰も知らない、謎の巫女姫なのさ。それが、あの子っ

てわけ。
　どうも変な子だとは思ってたんだけどな。こりゃあ、とんでもないおヒイ様を拾っちまったもんだ。しかし、こりゃあ、どう見ても、ただ、攫われて無理やり巫女に祭り上げられた普通の女の子だとは思えないな。あの不思議な力といい、威厳といい、この一風変わった様子といい。な、アルファード」
「ああ。この子は、『本山の＜御使い様＞』と言われていた。よしんば他のところにいるのかもしれない＜御使い様＞がにせものだとしても、この子は、古くから知られているシルドーリンの＜御使い様＞で、何かしらの力を持つ本物の巫女姫なんだろう。昨夜のあれを目の当たりにして、信じないわけにはいくまい」
「そんな大事なお姫様が、よくシルドーリンを出て、こんなところをひとりでうろついていられるよなあ。やつらの総大将――ギルデジードって言ったっけ――、そいつは知ってるって言ってたよな。いったいこりゃあ、どういうことだ？　リーナちゃんと何か関わりがあるらしいんだがなあ」
「まあ、いいじゃないか。そのうち、必要になれば、この子が事情を思い出して自分から話してくれるだろう。それまでは詮索しても無駄だし、とにかく本人が一緒にイルベッザに行きたいと言っているんだから、まずは連れていってやろう。とりあえず危険はないようだから」
「そうだよな。やっぱ、それしかねえよな。このとおり足も強くて、足手まといにもならねえしな」
　その、話題のキャテルニーカは、三人の話の内容など気にも止めずにまわりを跳ね回って、ローイの腕にぶらさがったり、とつぜん里菜に抱き付いてみたりしながら、相手が聞いていようといまいとおかまいなしに、「リスがいた」だの「ナントカ草を見つけた」だのと、たあいのないことを言っては、ひとりではしゃいでいる。
　アルファードとローイの会話を聞きながら、里菜は、村の幼い司祭、ティーティのことを思い出していた。

里菜は昨日から、ニーカを見て誰かに似ていると思っていたのだが、そういえばティーティと似ていたのだと気づいたのだ。

もちろん、見た目はぜんぜん似ていない。が、どこか相通じるものがあるような気がする。それは、彼女たちは、どちらも一種の巫女であるからだったらしい。

それにしても、小さなティーティが、まじめくさって、年の割にどこかませた様子だったのに比べて、キャテルニーカの、この異常な幼さはなんだろう。まるで幼稚園児なみ、とても十一才とは思えない。ゆうべの毅然とした姿を見ていなければ、どう見ても頭が弱いとしか思えなかっただろう。

けれどもキャテルニーカの無邪気な明るさは、里菜やローイの心を和ませてくれた。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第四場（3）

その夜の野営は、楽しかった。ゆうべは、山賊の気配を探るため、あまり騒がず、ずっと緊張していたが、今日はもう山賊の心配はいらない。

兎を狩りに森に入ったローイは、ほんとうに短い時間で、それこそ魔法のように兎をとってきて、器用にさばいてくれた。そのあいだにキャテルニーカが、この冬のさなかに、どこからか青々とした野生の香草や、きのこまでたくさんとってきた。里菜とアルファードが集めたたきぎで、夕食は兎ときのこのスープだ。身体の底から暖かくなる。

夕食の後は、ローイがキャテルニーカにお話をしてやると言いだし、里菜のリクエストで例のシルグリーデ姫の話を語った。短い話だったので、もう一つ、と、ローイは十八番の『カザベルの食人王ラドジール』を始めた。妖精の血を引く美貌の青年王ラドジールが自分の恋人を殺して食ったという有名な伝説を基にした怪談である。

ラドジールは、妖精の血筋でありながら癒しの力を持っていなかったため、優れた癒しの力の持ち主の肉を喰らうことで自らが力を得ようと試みたのだが果たせず、その、食人の罪によって、死後は人の血を啜る魔物となり、今も永遠の闇を彷徨っているのだと言う。

そんな陰惨な物語を、おどろおどろしく語り終えた最後に、「あ！　お前の後ろにラドジールが！」と叫んで聴衆に悲鳴を上げさせるのが、ローイのいつものお決まりの得意技なのである。

この日も、ローイは、例によって、最後のところで、

「あ、ニーカ、お前の後ろにラドジールが！」と、いかにも恐ろしげに叫んでみせ、里菜も一緒になって、キャテルニーカを怖がらせてやろうと、ことさら大きな悲鳴を上げてキャテルニーカに抱きついてみせた。

ところが、キャテルニーカは、ただきょとんとして、こう言った。

「え？　どこに？　いないよ？」
「おい、ニーカ……。お前、ノリが悪いぞ。怪談の時は、ちゃんと怖がってくれなくちゃ話しにくいじゃねえか」と、ローイが文句をいうと、
「え？　今の、怖い話だったの？」と、まるでトンチンカンである。
しかも、そのあと、あたりまえのような顔で、こんなことを言う。
「おもしろかったわ。お兄ちゃん、お話、上手ね。でも、ちょっと違うところがあった。ラドジールが食べたのは、恋人じゃなくて義理の妹よ。でも、ラドジールは、たぶん、その子が好きだったのよ。ラドジールは、そのとき、十四くらいだったわ。
ふたりはね、他の子供たちと一緒にシルドーリンに宝探しにきて、落盤で、ふたりだけ一緒に閉じ込められたの。ラドジールは、岩の下敷きになって死んだ妹の肉を食べて生き延びたのよ。お兄ちゃんが言うように、自分が持っていない癒しの魔法の力を得るために、その力を持つ人を殺して食べたわけじゃないの。
結局、子供たちの中で生き残ったのは、ラドジールだけだった。かわいそうね。そのあと、生き残ったラドジールが何をしたか、あたしは知らなかったけど、王様になってたのね」
「……おい、お前、何だ、そりゃ。ずいぶん妙ちきりんな話だなあ。お前、その話、誰に聞いたんだ？　俺、そんな話、聞いたことねえぞ」
「あたし、見てたの。ラドジールは、ほんと、きれいな子だったわ」
「ラドジールは三百年近く昔の王様だぞ。それを見たって、お前、ほんとに十一才か」
「え？　そうよ、十一よ」
「じゃあなんで、そんな昔のことを知ってるんだ？」
「おばあちゃんから聞いたの。それとも、おばあちゃんのおばあちゃんからだったっけ」
「ばあちゃんのかあちゃんなら、まだ生きてるかもしれねえが、ばあちゃんのばあちゃんってのはふつう、もう生きてないよなあ。お

前、それに、自分が見たっていったぞ」
「そう？」
「そうって、また、自分が言ったこと、忘れちゃったのか？　……話になんねえや」
「あのね、あたしのおばあちゃんも、おばあちゃんのおばあちゃんも、キャテルニーカって名前だったのよ。お兄ちゃん、あしたもお話してね。ねえ、何か、歌、うたって」
そう言ってキャテルニーカは、無邪気な様子で首をかしげてにっこりした。そのキャテルニーカの緑の瞳が、ときおり焚火の炎を映して、耳元のシルドライトと同じようにちらりと赤く輝くことに気がついた里菜は、この子はまるでシルドライトの精みたいだと思った。そういえば、ローイが、＜御使い様＞はまた、シルドライトを意味する『シルドーリンの宝玉』という名でも呼ばれることがあると教えてくれた。
キャテルニーカに歌をせがまれたローイは、しっかり持ってきていた、例の小さい楽器――ガドレという名らしい――を取り出し、静かな曲を歌い出した。
彼は酒が入らないと歌わないと言われているが、子供の前でなら歌う。村にいた時も、子供たちにはよく歌ってやっていたのだ。
ローイの歌を聞きながら、キャテルニーカはいつのまにか寝息をたてていた。

翌日も、一行は、ひたすら歩き続けた。痛み出した里菜の足を、キャテルニーカが、森からとって来た薬草と魔法で治してくれた。
妖精の血筋の常として、彼女も治療師の素質があるらしい。特に薬草については、かなり詳しいらしく、時々、「こういうところにはナントカ草があるから」と言って、みなに断わって、ひとりで森の中に入っていく。最初のうちは立ち止まって待っていたのだが、キャテルニーカはいつも、冬だというのに、ちょっとの時間で必ず

薬草を見つけて、すぐに戻ってくる。そのうちにみんな、いちいち立ち止まらずにそのまま歩いているようになって、道をそれて森の中を歩いてきたキャテルニーカは、薬草を見つけると森からひょっと街道に出てきて合流するようになった。

しばらく一緒にいてわかったことだが、キャテルニーカは、決して頭が悪くはないらしい。薬草のことなどは本当によく知っているし、やたらに物を忘れるわりに、記憶力も実は悪くない。彼女が忘れるのは、自分の生い立ちや、タナティエル教団に関わることだけらしくて、普通のことはちゃんと覚えているし、ローイが語る物語などは、一度聞けば完璧に丸暗記してしまう。ものごとの呑み込みもいいし、判断も的確らしい。ただ、どうにも子供っぽいだけである。

やはりこの子は、幼いころから巫女姫として隔離され、純粋培養されてきたのだろうと、里菜は思う。その結果が、この、一見頭が弱いようにさえ見えるほどの幼さと、浮世離れした天真爛漫さなのだろうと。彼女ほど『無垢』という言葉が似合う子供はいないだろう。時々、もしかしてこれはみんな演技なのでは、と疑わないでもないのだが、里菜には、どうしてもそうは思えない。

ヴェズワルを過ぎ、あたりはあいかわらず森ばかりだったが、やや、うっそうとした感じが減った。このへんの森は、ヴェズワルほどは古くないのだ。雪は、もう、日陰にもまったく積もっていない。木々の種類も、イルゼール村では、そういえば落葉樹と針葉樹がほとんどだった気がするが、だんだんと常緑の広葉樹も目につくようになってきた。

街道を行くのは、里菜たち一行だけ。一度も他の旅人には出会わない。

雪をかぶったイルシエル山脈を左手に仰ぎ見て歩けば、古い灰色の石畳がどこまでも森を抜けて続く。

その夜も、ローイの狩りは成功し、みんなは暖かいスープをたっ

ぷり食べ、焚火の回りでローイの物語を聞いた。
　こんな時、里菜はこの旅がいつまでもつづいて欲しいような気がする。歩き慣れず、まして野宿などしたこともなかった里菜にとって、昼間の行程も堅い地面での野宿もつらいが、キャテルニーカの治療の才能のおかげで、それほど足や身体が痛くなることもなくて済み、こんな楽しい団欒の夕べには、すべての辛さを忘れてしまう。
　物語の後、キャテルニーカは、今日はローイに歌をせがまずに、なぜか里菜にこう言った。
「お姉ちゃん、何か子守歌、歌って！」
　そして、何を考えているのやら、いきなり、里菜の膝に座ってしまった。いくらなんでも、十一才の行動とは思えない。だいたい、いくらキャテルニーカが十一才にしては小柄だとはいえ、里菜も十七才にしては相当、小柄なほうだから、この体勢には、かなり無理がある。けれどキャテルニーカの甘えた様子を見ると、里菜は、重いからどけなどとは言えなくなってしまった。
「ね、お姉ちゃん、歌！」と、キャテルニーカが催促する。
「あの、ニーカ、あたし、歌、苦手なんだけど……。あたしがだっこしててあげるから、歌はローイに歌ってもらわない？」
「だめ、お姉ちゃんが歌って！」
　命令口調のキャテルニーカに、里菜はしかたなく小さな声で子守歌を歌い始めた。

「ねんねんころりよ　おころりよ　坊やはよいこだ　ねんねしな……」

　里菜が昔、母から歌ってもらった子守歌だ。

「坊やのお守りはどこへ行った　あの山越えて里へ行った……」

　繰り返し歌ううちに、キャテルニーカは目を閉じて里菜にもたれ

かかってきた。はっきり言って、重い。寝入ってしまったらすぐにローイに頼んで、抱き上げてそのへんに寝かしてもらおうと考えながら、里菜は、くりかえし同じ子守歌を口ずさみ続けていた。

その時、ふいに、苦しげに絞り出すような叫びに、歌が遮られた。

「リーナ、やめてくれ！　その歌を、歌わないでくれ」

里菜はぎょっとして顔を上げ、声の主、アルファードを見た。

倒木に腰掛けたアルファードは、背中を丸め、両膝の上に肘をついて、その手で、うつむいた頭を抱え込むように耳を塞いでいた。

一瞬、里菜は、むっとした。

（もう少しでニーカが寝るところなのに、急に大きな声で邪魔して……。それに、何よ、たしかにあたしはちょっと音痴だけど、そんな、耳を塞いでやめろと叫ぶほどひどくはないと思うわ。失礼ね！）

そう言おうとして口を開きかけた里菜は、そのまま黙り込んだ。

うつむいたアルファードの顔から、ぽたりと地面にしたたり落ちたものがあったのだ。

（うそ……。アルファードが、泣いてる？）

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第四場（4）

（俺はいったい、どうしたんだ……）

ますます強く耳を塞いで、頭を抱え込みながら、アルファードは唇を噛み締めた。

耳を塞いでも無駄なのはわかっていた。里菜はもう、歌を止めているのに、彼の心の中に、あの歌が流れている。

それは、喪失の響き。

あの歌の最初の一節を聞いた時、雷に打たれたように、アルファードの精神は立ちすくんだ。

（俺は、この歌を知っている……）

遠い昔に聞いた歌。歌ってくれたのは誰だろう。

幼い彼が、誰よりも愛し、信じていた誰か。彼の小さな世界のすべてだった人。温かくやわらかかった――おそらくは、母親。

歌ってくれた母親は、どんな顔をして、どんな服を着ていたのだろう。自分がいたのは、どんな様子の部屋だったのだろう。自分は、どんな名前で呼ばれていたのだろう。――それは、思い出せない。

ただ、記憶の底の母の歌声が蘇る。

――『坊やのお守りはどこへ行った　あの山越えて里へ行った……』――

歌声と一緒に、幼い自分の心が聴こえる。

暗闇の中で目覚めた、幼い自分。歌をうたって自分を寝かしつけてくれていたはずの母が、そばにいない。温かい身体を求めて暗闇を探った腕が、冷たい孤独を抱き締める。その、心細さ。そして、不信。

（おかあさんが、行ってしまう。どこか遠くへ。僕を捨てて、二度と帰らない……。そう、こんなふうに何もかもが、僕から失われて

いく。離れていく。世界は僕を愛さない。すべてが僕を裏切る……）

頭が、割れるように痛い。噛み締めた唇から、血が滲む。

その瞬間、アルファードは、いつのまにか叫んでいたのだ。

――「リーナ、やめてくれ！　その歌を、歌わないでくれ」

里菜は、驚きのあまり何も言えずに、大きな身体を丸めて頭を抱えるアルファードをみつめていた。落ちた涙は一粒だけだったが、そのたくましい肩が、腕が、まだ小刻みに震えている。何だかアルファードが小さく見える。

里菜は、アルファードが泣くことがあるなどとは、想像すらしたことがなかった。

いつかローイも言っていた。

「俺、アルファードが怒るとこも、もう何年も見てなかったが、泣くとこは、ほんとに、ガキのころから一度も見たことがないな。やつは、じいさんが死んだ時でさえ、少なくとも人が見ているところでは、泣かなかったんだ」と。

ローイも、目を丸くしてアルファードを見ている。

アルファードは、黙って頭を抱え続ける。

ふいに、眠ったと思っていたキャテルニーカが、里菜の膝から立ち上がって、とことことアルファードに歩み寄った。

里菜とローイが呆然と見守る中、キャテルニーカは、アルファードの頭を静かに両手で挟み込んだ。

キャテルニーカがアルファードに触れたのは、もしかすると、これが初めてかもしれない。彼女は、ローイや里菜には、理由もなく始終ぺたぺた触っていたが、そういえばアルファードには、たぶん一度も触わっていないのだ。

キャテルニーカは、アルファードに触れた瞬間、ぴくりと身体を

強張らせ、苦痛をこらえるかのように、かすかに眉を寄せた。
が、すぐに穏やかな表情に戻り、子供をあやすような声音で、歌うように言った。
「お兄ちゃん、かわいそうね。まだ、思い出さなくていいの。まだ、いいのよ」
アルファードの肩の震えが止まり、しばらくして、あいかわらずうつむいて頭を抱えたまま、彼はぼそりと言った。
「キャテルニーカ、ありがとう。楽になった。リーナ、ローイ、驚かしてすまない。ちょっと、頭痛がしたんだ……。俺はこのまま寝るから、みんなも寝てくれ」
そう言ってアルファードは、うつむいたまま立ち上がると、こちらに背を向け、マントにくるまって横になってしまった。
里菜は、アルファードに駆け寄ろうとした。
（アルファード、何か、何か思いだしたの？　子供のころの記憶が戻りそうなの？）
喉元まで出かかったその言葉を、里菜は押し戻した。
キャテルニーカが里菜の腕を引いて引き止め、声を潜めて囁いたのだ。
「お姉ちゃん、かまわないであげて。お兄ちゃんは、まだ思い出しちゃいけないの。今はまだ、きっと耐えられないから」
「ニーカ、それ、どういうこと？　あなた、アルファードのこと、何か知ってるの？　知っているなら、あたしに教えて」
声をひそめながら思わずキャテルニーカの肩をゆさぶった里菜は、彼女の返事に、がっくり肩を落した。
「え？　なんのこと？」
緑の瞳が無邪気にまばたく。どうやら、また、例の物忘れが始まったらしい。
「ううん、なんでもないわ。寝ましょ」
そう言って里菜は、荷物を抱え、横たわるアルファードのそばに行った。

けれど里菜には、背を向けているアルファードの正面側に回り込むことはできなかった。何も言わない彼の大きな背中から、拒絶の気配がひしひしと伝わってきたからだ。自分の中へ踏み込まれることへの拒絶の気配が。

里菜は顔を曇らせながら、それでもアルファードの背中に寄り添うように、マントにくるまって横になった。

里菜がこんなにアルファードの近くで眠ろうとしたのは、初めてだった。今までふたりは、いつも、なんとなく焚き火のあっちとこっちに離れて横になっていたのだ。

アルファードは、里菜がすぐ隣に横になっても別に文句は言わなかったし、わざと離れたりもしなかった。ただ、無言の背中で、里菜を、そして世界の一切を拒絶していた。

（あたしはアルファードに、何もしてあげられない）

里菜は無力な自分が悲しかった。

アルファードは、里菜に、彼の苦悩を一緒に担うことを許してくれない。

アルファードの苦しみを取り除いたり、代わってあげたりすることはできなくても、せめてそれを一時的にでも紛らわし、慰めることができるなら、里菜はどんなことでもするだろう。けれどアルファードは心を閉ざして背を向ける。里菜にできることは何もない。

手を伸ばせば届くところにあるアルファードの背中が、とても遠く感じられた。

魔王の言葉が心によみがえる。

――『あれは永遠に、そなたを受け入れることはないだろう』――

キャテルニーカが里菜の傍らにやってきて、黙ってしゃがみこんで里菜の頬に手を触れたかと思うと、すぐにそのへんにころんと横になって、そのまま寝入ってしまった。

ローイは、その間ずっと、焚火の向こうにつったったまま、どう対処していいかわからずに頭や鼻をポリポリ掻いてみたりしていた

が、どうしようもないので恒例のおちゃらけで対処することに決め、おずおずと里菜に声をかけた。

「ええと……。リーナちゃん、そんなとこにいないで、俺と一緒に寝ようぜ……なんて」

何も変わったことは無かったふりをして場の空気を変えようと、とりあえずおちゃらけてはみたが、やはり気まずさに耐えかねて、最後は言い訳めいた呟きになってしまった。

「バカ……」と答えた里菜の声にも、力がなかった。

「バカはだめだって、いっただろ。もっと何か面白いこと言えよな……」

ぶつぶつ言いながら、ローイも、マントを敷いて横になった。

眠れないローイが寝返りを打つたびに、そのマントの下で落葉がかすかに乾いた音を立てるのを、里菜は黙って聞いていた。

アルファードも、たぶん起きているのだろうが、ぴくりとも動かずに、皆に背を向けて横たわっている。

冴えざえとした冬の月がゆっくりと傾いていくのが、木の枝の向こうに見える。

寒くて長い夜が、静かに更けていった。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第五場（1）

それから三日間、四人の旅は、何事もなく続いた。

天候は大きく崩れることなく、キャテルニーカのおかげで里菜の体力もなんとか持っているし、狼も追い剥ぎも出なければ、他の旅人に出会うこともない。

あの夜のことは、誰も口にしない。

キャテルニーカは例によって一連の出来事をすっかり忘れてしまっているし、アルファードもどうやら、ただ、頭痛がして里菜やローイに無愛想な態度を取ってしまったというふうにしか覚えていないらしい。

里菜は、それを、キャテルニーカのしわざではないかと思っている。キャテルニーカが、アルファードの記憶に何らかの操作をしたのではないかと。彼女には何か催眠術のような不思議な力があるのではないかと、山賊の一件以来、里菜はずっと思っていたのだ。

けれど、今のキャテルニーカに、そのことを確かめようとしても無駄だろう。どうせ忘れているにきまっている。

どっちみち里菜は、キャテルニーカが悪い目的でそんなことをしたとは思っていない。キャテルニーカがそれをしたなら、たぶんアルファードの過去が彼を取り返しがつかないほど傷つけるのを防ぐためにしたのだろうと思っているのだ。

キャテルニーカは謎の多い子供だが、タナティエル教団の巫女であることから考えても、タナート神――ひいては、あの『魔王』――と何か縁のあるものなのはまちがいないし、実際、『魔王はかわいそう』などと言いもした。が、それでも里菜は彼女を全く疑うことができない。

里菜も幾度か、考えてはみたのだ。自分が、キャテルニーカのかわいい顔や白痴的な無邪気さを装った態度に惑わされて、騙されているのではないかと。けれど、どうしても、そうは思えなかった。

彼女からは全く、悪意や、歪んだものは感じられないのだ。そして里菜は、その自分の勘を信じることに決めていた。

そうして四人はひたすら歩き続けた。

里菜とローイが、あいかわらずたあいのないおしゃべりをしながら歩くまわりを、キャテルニーカが跳ね回ってはしゃいでいる。その先頭を、アルファードは黙々と歩く。

夕方にはローイが狩りをし、アルファードがたきぎを拾うあいだに、キャテルニーカと里菜は、香草やきのこを集める。いくら暖かい地方とはいえ、キャテルニーカがいなければ、こんな冬のさなかに、こう簡単に食べ物やら薬草やらをみつけることはできなかっただろう。これもキャテルニーカの不思議な力のひとつらしい。

夜には焚火を囲んで狩りの獲物と堅パンを食べ、食事の後はローイが歌をうたい、それから地面にマントを敷いて眠る。ローイは毎晩里菜に「一緒に寝ようぜ！」と声をかけ、里菜に悪態のつきかたを指導してはアルファードにたしなめられる。

四日前までと、何も変わらない旅路である。ただ、まわりの景色だけが変わっていく。イルシエル山脈は背後に遠ざかり始め、ときどき街道の左手に現われるシエロ川は見るたびに川幅を増し、流れは緩やかになり、流れの左右に切り立っていた崖は狭い川原に変わる。森の木の種類が変わり、だんだん常緑の広葉樹が増え、緑が濃くなる。

けれど、目に見えないところで、もうひとつゆっくりと変わりつつあるものがあった。

それは里菜とアルファードとローイ、三人の関係だった。

それまでどうにか彼らの間に保たれていた、ひとつの危ういバランスが、狂い始めていたのだ。

それはたぶん、村から遠く離れるにつれて、里菜やローイの心の中から、ヴィーレの姿が薄れていったせいだ。今まで、彼ら四人のバランスをとり、なんとか仲良し四人組にまとめあげていたのは、実は、最年長でリーダー気質のアルファードでも、口達者で要領の

よいローイでもなく、地味でおとなしい、はにかみやのヴィーレだったのだ。

やさしいヴィーレを、誰もが好きだった。誰もがヴィーレを悲しませたくなかった。だから彼らは、ヴィーレ自身を含めて、誰も、誰かに向かって一歩を踏み出すことができずにいた。彼らは、それぞれの想いを秘めながらも、やさしい四角形を保つことを選んでいたのだ。

だが、今、要（かなめ）のヴィーレが抜けたことで、そのバランスが崩れた。ローイは里菜に、里菜はアルファードに向かって、一歩づつ、足を踏み出そうとしていた。

けれどこの時までは、里菜もローイも、まだ自分の気持ちの変化を自覚してはいなかった。ローイが自分の気持ちにはっきりと気づいたのは、その夜のことだ。

旅に出てから六日目の夜。

最初の夜はプルメールで宿屋に泊まったから、野営は五度目だ。準備もだんだん手慣れてくる。里菜も、キャテルニーカに教わって、食べられる野草をだいぶ覚えた。ローイは、いったいどうやって獲ってくるのか、今回も、ちゃんと山鳥を獲って来た。

いつもどおりの楽しい夕べである。

夕食のあと、いつものようにローイがキャテルニーカに歌をうたってやっていた時、焚き火をはさんだ向い側の倒木にアルファードと並んで――もちろん、例によって少し離れて――腰かけていた里菜が、急に身体をずらしてアルファードのすぐ隣に行くと、ぎこちなく硬い動作でアルファードに寄り添った。

それが非常に唐突で、いかにも思いきって勇気を出して決行してみたという感じがありありで、しかも、アルファードの逞しい腕にそっと小さな手を掛けて恐る恐る凭れかかってみながら彼の横顔を盗み見る里菜の、そのおどおどした上目使いが、まるで、ここまでならやっても叱られないかなと飼い主の顔色を伺いつつ少しだけ行儀の悪い振る舞いをしてみる飼い犬そっくりだったので、はたで見

ていたローイは、吹き出しそうになりながら呆れかえった。
（あーあァ、リーナちゃん、だめだよ、そんなんじゃ。何かの拍子にって感じで、もっと自然に接近しなきゃあ。自分たちは仲がいいんだからこれくらいあたりまえってつもりで、ごく普通に、堂々とさ。自分がおどおどしてると相手も気まずくなって退いちゃうんだぞ。俺もケツの青いうちは、それで女の子、何人も逃した……って、それはまあ置いといて……。
　でも、リーナちゃんって、ほんと不器用だよなあ。いかにも不慣れで、似合わなくて、無理して頑張ってるって感じがありありで、何か笑えるというか、見ている方が恥ずかくなるというか……。でも、そこが、かわいいんだよな……。健気で、いじらしくて……。
　ああっ、もう！　かわいすぎるよ！　なんでアルファードのやつは、あれ見て平然としてられるんだ？　鈍感とか堅物とか、そういう問題じゃないよな。あいつ、かわいいものをかわいいと感じる人並みの感性ってものを持ってないのか？　それとも、もしかして、ほんとにホモか？　どうせまた、逃げるんだぜ）
　歌いながらローイが横目で見ていると、案の定、アルファードは突然立ち上がり、必要もないのに焚火にたきぎを押し込んで、里菜から少し離れて座り直した。
（ほうら、やっぱり逃げたよ。なんてやつだ。つれないよなあ。リーナはなんとかあんたに近づきたくて一生懸命で、今のだって、あの子にしてみりゃずいぶん思い切ってしてみたことだろうに、あんただってそれはちゃんとわかってるんだろうに、それをあんなふうにわざとらしく無視するなんて、あんまりじゃねえか！　かわいそうに！）
　焚き火越しにアルファードを睨みつけながら、ローイは、みぞおちのあたりに何か黒い霧のようなものがもやもやと沸き上がって来るのを感じた。それを、怒りだと思った。アルファードにかわされて叱られた犬のようにしょんぼりしながら、それでもまだアルファードの姿を目で追っている里菜が、ローイの目には、迷子のおさな

子のように頼りなくいたいけなものに映り、その分だけ、その里菜をこんなふうにいじめている――ように見える――アルファードが、とんでもない冷血漢の人非人に見えてきて、ローイは、むらむらと腹が立ってきたのだ。

ここ数日、ローイは何度も、このふたりのこんな様子を見続けてきた。もちろん、ここ数日に限らず、村にいたころから二人はずっとこんなことを繰り返していたのだが、このところ里菜が少しづつアルファードに歩み寄ろうとしはじめたのはローイの目にも明らかで、その分よけいに、ローイの目には、アルファードが里菜にひどく冷たくあたっているように見えていた。

そしてそれは、あながちローイの思い過しともいえなかった。

里菜は、アルファードの背中が遠く見えたあの夜から、その距離を少しでも早く埋めようと、どこかで焦っていたのだ。

あのやさしい村を出てきてしまった今、里菜は本当によるべない身の上だ。見知らぬ異世界で天涯孤独の境遇で、この世界のことを何も知らず、魔法の力も無く、生活していく術も、何一つ持たない。そんな里菜にとって、この世界で頼るものはただひとり、アルファードしかいない。今ここで――あるいはイルベッザについてからでも――アルファードに見捨てられてしまっては、里菜はたぶん、生きてさえいけない。今の里菜にとって、アルファードにつれなくされるということは幼児が親に見捨てられるようなものであり、まさに死活問題なのだ。

だからといって里菜は別に、アルファードに養って貰おう、守って貰おうなどという打算で彼に取り入ろうとしているわけではないが、それでも、アルファードにもっと近く寄り添いたいという願いが、里菜にとって、村にいた時よりももっと切実な、せっぱつまったものになってしまうのはしかたがない。

そして、里菜をそんな心細い状況の中に連れ出したのは他ならぬアルファードなのだから、本来なら彼は里菜にこれまで以上に気を配って不安にさせぬように振る舞ってくれる責任があるのではない

か――こうして自分を信じてついてきた里菜にその見返りとしてこれまで以上に親密に接してくれるべきではないかと、里菜は、心のどこかで思っている。

　そのひそかな期待と、ここへきてかえって彼を遠く感じるようになってしまった現実との落差が里菜をますます不安にさせ、その焦りが里菜をいつになく積極的に振る舞わせるのだが、里菜が押せば押した分だけ、今までと同じ距離を保とうとしてアルファードは退く。里菜もそれはわかっていているのだが、それでも、心細さのあまり、何度でもアルファードに縋りつかずにいられなくて、そのつど身をかわされて、ますますよるべない気持ちになる。

　そんな里菜の、彼女なりのせいいっぱいの積極果敢な行動が、あまりにも不器用で、一生懸命になればなるほど不似合いなので、ローイは、おかしくなるのと同時に、その板につかなさ具合がやけに愛しくて、なんだか胸が苦しくなるのだ。

（アルファードのやつ、あんな子にあんなに一途に慕われて、なんであああやって知らんぷりできるかなあ。俺だったら、あの子にあの縋りつくような目でじっと見上げられたら、もう、どうしていいかわからないくらい可愛くて愛しくて、ただもう、いきなり、力一杯抱きすくめずにはいられないだろうに……。あんまり愛しすぎて何が何だかわからなくなって、あの子がびっくりして逃げようとしてじたばたもがいたってもう絶対放してやる事ができないくらい夢中になって力まかせに抱きしめちまうかもしれないのに……！　なのになんでアルファードは、あの子をあんなふうに、ひとり寂しくぽつねんと座らせとくんだ。ひどいじゃないか、もっとやさしくしてやれよ！）と、そこまで考えて、ローイは、

（でも……）と、思い至る。

（じゃあ、ここでアルファードがリーナをやさしく抱き寄せて、何か甘い言葉のひとつもささやいてやったとしたら？　そのほうがいいと思うか？）

　その場面をうっかり想像してしまったローイは、さっきからずっ

とみぞおちのあたりでもやもやしていた黒いものが、急に石のように固まって重くなって胃の中にどしんと落ちてきたような気がして、思わずぎりっと奥歯をかみしめた。

（それは、やっぱり腹が立つじゃないか！　もっと腹が立つじゃないか！　だいたい、なんでリーナは、俺にじゃなくてアルファードなんかに懐くんだ？　そもそもそれが間違ってるんだよ。俺だったら、絶対、もっとやさしくして、大事にしてやるのに。ひとときだって、あんなふうに心細そうになんかさせておかないのに。そうさ、俺だったら、さ。

なのに、なんで、アルファード、アルファードなんだ。アルファードに冷たくされたら世界の終わりだ、みたいな顔してさ。こんないい男がそばにいて、しかも自分に惚れてるってのに目もくれず、まるで世界には自分とアルファードしかいないみたいに、あんな朴念仁の唐変木にばかり執着して、必死で縋りつこうとして。

リーナちゃん、俺の存在、忘れてない？　世界に男はアルファードひとりってわけじゃねえんだぞ？　あんないたいけな、いじらしい子が、世間知らずの余り、たまたま目の前にいるってだけのやつを世界でただ一人の相手みたいに思い込んで、そんなつまらん勘違いのせいであんな悲しい思いをしてるなんて、これは絶対、間違ってるよな）

ローイの中に決意が生まれた。

（よおし、決めた。俺はリーナに告白するぞ。リーナがアルファードに惚れてるのはわかっているが、だからってあの子がやつにあんなふうに冷たくあしらわれ続けるのを黙って見ているのは、もう我慢の限界だ。リーナも、そろそろ目を覚ますべきだ。俺が目を覚ましてやるよ。アルファードなんかより、もっとやさしい、いい男が、こんな目の前にいるんだ。それに気がつかずに、いつまでもアルファードなんかを追いかけてるなんて、リーナにとって、世紀の大損だ！）

決心してしまうと、胃の中の石が少し軽くなったような気がした。

（だいたい、前から思ってるんだけど、リーナは、自分じゃ、やつに恋してるつもりでいるらしいが、あれはどう見ても、恋なんてもんじゃないよ。今のあの子がやつを見てるあの目は、恋する女の目じゃなくて、揺りかごの中にひとりで置かれた赤ん坊が母親の姿を片時も休まず目で追い続けている、そういう目だよ。それを、あの子は、あんまり世間知らずで、まだ恋ってのがどんなもんか知らないもんだから、恋だと思いこんでるんだ。

アルファードは、一見モテてるようで、ありゃあ、実は、リーナから全然男だと思われてないんだよ。ご愁傷さまってなもんだ。惚れられてると勘違いして、いい気になって余裕こいてんじゃねえぞ。俺がこれからリーナに本当の恋ってもんを教えてやれば、あんたのことなんか、あれはほんとは恋なんかじゃなかったんだなって気づいて、すぐに昔話に――ただのほほえましい思い出になっちまうんだからな。

うん、それじゃまず、アルファードの野郎に宣戦布告といくか。あいつはリーナにあんな態度をとってるんだから、リーナを口説くのにあいつに断わる義理もないんだが、あとで文句いわれると、つまらねえからな。さて、いつ話そうか。やつとふたりになる機会って、あるかなあ）

考え込んでしまったローイを、キャテルニーカがつっつき、口を尖らせて文句を言った。

「お兄ちゃん、今、歌、間違えた！　よそ見しないで、ちゃんと歌って」

「おっ。おお、悪い悪い。じゃ、次の歌な」

そういってローイが歌い始めたのは、熱烈な恋の歌だった。

ローイはそれを、心ひそかに、里菜に捧げるつもりで歌っていたのだが、それを知っているのはローイだけだから、はたから見ると、キャテルニーカにラブソングを捧げているようにしか見えない。ローイはまた、歌っているうちに目の前にいるのが里菜のようなつもりになって、思い入れたっぷりに甘く歌いあげながらキャテルニー

カを熱いまなざしで見つめたものだから、里菜はアルファードにひそひそと囁いた。

「ねえ、こないだから思ってたんだけど、ローイって、やっぱりちょっとアブなくない？　ほら、あれ見てよ」

「いや、別に、おかしなつもりはないと思うんだが……」というアルファードの答えも、ちょっと自信がなさそうだった。

そんなことを言われているとは露しらず、ローイは里菜への熱い思いを込めて愛の歌を歌い、キャテルニーカは、がぜん熱が入ったローイの歌に満足げに聞き惚れて、野営の夜は更けていった。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第五場（2）

「準備完了！　じゃあ、アルファード、ローイ、見張り、お願いね！」

シエロ川の川原に並んで転がるふたつの大岩の間に、自分の青いマントを張り渡すように掛け終えた里菜は、マントの向こうのふたりに声を掛けた。

両端を石ころで押えられたマントは、ふたつの岩のあいだの狭い隙間にちょうどカーテンのように垂れて、その向こうの水面を隠した。

マントの向うの水溜りは、実は、川原に湧き出る天然の温泉である。白い湯気が、水面を這うようにたゆたっては、冷たい空気の中に立ち昇っている。

旅に出て七日目の昼過ぎ。

川原のそこここから湯気が立ち昇り、かすかに硫黄の匂いが漂うこの場所は、古くからこの街道を往来する旅人たちに共同で利用されてきた天然の温泉場である。アルファードからこの場所の事を聞いていた里菜は、旅の途中でただ一度の入浴を、ずっと楽しみにしていたのだ。

幸い、今日は、ちょうど昼食時の暖かい時間帯に、この場所に差し掛かった。天気も穏やかで、風もない。石鹸はないが、湯の中で揉むと泡立って良い香りのする汚れ落としの薬草もある。キャテルニーカが森で採ってきたものだ。

里菜は、思い出したように岩の後ろからひょいと顔を出し、立ち去ろうとしていたローイに向かって叫んだ。

「ローイ、いっとくけど、覗いたりしたら絶交よ！」

ローイは振り返って叫び返した。

「何だよ、リーナちゃん、何でアルファードには言わないで、俺にだけそんなこと言うんだよ。あ、そうか、アルファードには見られ

てもいいんだな？」
「バッ、バカッ！　アルファードが覗きなんかするわけないもん！」
「じゃあ、何か、俺は覗きをするような人間に見えるってのか？」
「見える！　だってあたし、ドリーに聞いたんだから！　あなたが前にドリーのお姉さんがお風呂入ってるの、覗いたって」
「ちくしょう、ドリーのおしゃべりめ！　それは大昔、俺がまだほんのガキのころの話じゃねえか。だから俺、あの村にいるの、嫌だったんだ。ガキのころのそんなちょっとしたワルサを村中の人がしっかり全部覚えていて、今だに酒の肴にそういう話を持ち出すんだもんな。ちぇっ。今の俺はな、そんなセコイまねはしないんだよ！　裸が見たけりゃ、正面から正々堂々と口説き落として見せてもらうまでさ。だいたい、あんたの裸なんか見たって、どうせニーカちゃんのとたいして変わらないんだから、面白くもねえや！」
「い、言ったわね！　言ったわね！　何よ、何よ、いくらほんとのことだからって……」
　ローイは、岩の後ろから次々飛んでくる小石の攻撃にあわてて逃げたした。
　その後ろ姿にまだ石を投げながら、里菜は、もう見張りの位置についていたアルファードに叫んだ。
「アルファード、ローイがニーカを覗かないように、見張っててね！」
「な、なんでニーカを、なんだ？」
　頭を抱えて逃げながらローイは不思議そうに呟いた。
　やがて岩陰から、水音と一緒に里菜とキャテルニーカのはしゃぎ声が聞こえ始めた。ふたりは、物好きなことに、この寒い中、お湯のかけっこでもしてふざけているようだ。
　岩に腰かけたアルファードが、のんきに嬌声を上げているふたりに「風邪をひくし時間が無駄になるから早くしろ」と注意すべきか、このくらいのささやかな楽しみは見逃してやるべきかと思案していると、となりでローイがいたずらっぽく声を潜めて囁いた。

「な、な、アルファード、ちょっとだけ覗いてみない？」
「バカ。止めとけ。そんなことは最低の人間のすることだ」と、まるでとりあわないアルファードに、ローイは、
「ちぇっ、つまんねえの。これで話に乗ってきたら、あとでリーナちゃんに、うんと大げさに言いつけてやろうと思ったのに。あんた、ほんとに堅物だよな。からかいがいもないや」と言って、しばらく黙って膝を抱えて何か考えていたが、ふいにアルファードのほうを向き直って、今度は真面目な顔で口を開いた。
「なあ、アルファード。あんたに話があるんだけどさ……。リーナのことなんだ」
「リーナの、何だ」
アルファードは警戒するようにローイの表情を探って、用心深い口調になった。
ローイはそのまましばらく黙っていたが、意を決したように再び口を開いた。
「あのさあ……。前にも聞いたんだが、リーナはあんたの、何だ？」
「何だと言われても、困ると言っただろう。だが、とりあえず今は、旅の仲間だ。これからは仕事仲間になるはずだ」
「要するに、単なる『仲間』なんだよな。でもさ、心の中じゃ、ほんとはリーナのこと、どう思ってるわけ？　あんたは、自分にはあれができない、これができないと、つまらない言い訳ばかりしているが、そういう言い訳をとりあえず全部とっぱらっちまって、自分の気持だけを正直に考えて答えてくれよ」
「お前、何が言いたいんだ。そんなことを聞いて、どうする」
「いいから、答えろよ。あんたが、男としてリーナをどう思ってるのかを、確かめておきたいんだよ」
「どういうことだ」
なおも用心深くそらとぼけるアルファードに、さすがのローイもむっとした。
「あー、いらいらする野郎だぜ。いいかげんにしろよ。いくらあん

たが野暮天の朴念仁だからって、わかるだろうが。はっきり言って、俺はリーナに惚れてんだよ。俺はこれからリーナを口説いてみるつもりだ。そりゃあ、リーナがあんたに惚れてる……っていうか、本人はそのつもりなのは、わかってるさ。だから、あんたがはっきりと、俺はリーナを愛している、リーナは俺のもんだって言うんなら、しかたがない。俺に勝ち目はないさ。でも、あんたが、あんなふうにリーナにつれなくするんなら、俺にだって、万に一つくらいはチャンスがあるかもしれない。それで、万一でもリーナが俺になびいてくれたときに、あんたが、やっぱりリーナは渡せない、なんて言いだしたらこまるだろ。あんたと決闘なんてことになったら、俺、たぶん勝てねえからよ。だから俺は、今のうちにあんたの考えを聞いときたいんだ。で、どうなんだ、あんたの気持はよ！」

「俺がリーナをどう思っていようと、俺がお前に対して、リーナに交際を申し込むなという権利はないだろう。俺は、リーナの父親でもあるじでもなんでもないんだからな。もしお前がいいかげんな気持ちだったり、力づくでけしからん振る舞いに及んだりしたら、ただではおかないが、真剣な気持で紳士的に交際を申し込むというなら、それはお前の自由だろう」

「ただではおかないって……。あんた、それはやっぱり、父親の心境じゃねえのか？　まあ、そうすごむなよ。自分でもわかってるだろうが、あんた、すごむとマジで怖いんだからさ。俺が女の子に力づくで無理強いなんか、するわけないだろう。俺がどんなに紳士的な男かってことは、村中の女の子が知ってるぜ」

これには思わず苦笑してから、アルファードは言った。

「なら、好きにすればいい。それで、もしリーナがお前を選んだとしても、リーナが自分の意志でした選択に、俺が口を出すことは出来ない」

ローイは、しばらく黙ってアルファードを見ていたが、ややあって、再び口を開いた。

「あんたは、ずるいんだよな。そうやって逃げておいて、あんたと

リーナが結ばれなくても、それはあんたがリーナを選ばなかったからじゃなくて、リーナがあんたを選ばなかったんだって言って、自分の臆病さから目をそらすつもりだ。そうだろう？　俺は、俺がリーナを口説くのにあんたが文句をつけなければそれでいいんだから、あんたにこれ以上とやかく言う必要はないんだが、やっぱり、恋敵がそんなふうに逃げていて正々堂々と勝負できないんじゃ、勝っても負けても後味悪い。だから、言わせてもらうけどよ……」と、アルファードに、挑戦するように目を据えて言う。

「あんた、女が怖いんだろう」

「なんで俺が、女なんか恐れなきゃならないんだ」と、アルファードはあきれたように言って、大真面にこう主張した。

「俺は、これまで、ひとりでドラゴンと戦ったって、自分より縦も横もひとまわりでかい男と真剣で試合したって、怖いと思ったことなどない」

「それは、わかってるさ。たしかにあんたは勇敢だ。あんたはきっと、死ぬことだって恐れない。それはあんたが、自分の生命にも、この世界にも、執着がないからだ」

急にそんなことを言い出した彼の口調には、普段の彼のおちゃらけた様子はみじんも見られなかった。それはまるで、彼の中の詩人の直感のようなものが、普段の彼を押し退けて、彼の口を通して宣託を述べているかのようだった。

ローイは一気に、こう続けた。

「あんたは自分の命に価値を認めていない。あんたは、ありのままの自分を認め、許すことができない。自分はこの世に生きている価値があるんだと認めてやることができないんだ。だから、あんたは、死ぬことよりも、生きていくことが怖いんだ」

いつも陽気なお道化もののローイから、いきなりそんなむつかしいことを言われたアルファードは、意表をつかれて言葉に詰まってしまった。そんな彼を見て、ローイも自分の言葉が照れくさくなり、いつもの顔でニヤリと笑ってから続けた。

「いや、まあ、なんだ、つまりさ、こういうことだ。生きていくってことは、他の人間と関わっていくってことだ。回りの人間とあれこれつきあって、仲良くなったりいざこざがあったり、愛しあったり憎みあったり。それが人生ってもんだろ？　なのにあんたは、それから逃げたいと思っているんだ。羊と犬だけを相手に、一日山にこもっていたのも、なるべく他人と会いたくないからだろう？」

黙り込んだアルファードを見て、ローイは容赦なく指摘した。

「図星だな。あんたは都合が悪くなると黙っちまうんだ。あんたさ、無口なふりして、実は口達者なんだよな。おっと、とぼけても無駄だ。他のやつらは騙せても、俺の目はごまかせないぜ。あんた、普段は黙っりこくってばかりいるが、しゃべる必要があると自分で思った時は、どっちかっていうとしゃべりすぎだっていうくらいしゃべれるし、たくさんしゃべるってだけじゃなく、本当は、村で一番ってくらい、口がうまいんだよ。ただ、普段は、しゃべりたくないから黙ってるだけさ。どうせ誰にも自分のことをわかってもらえないと思いこんでるから――いや、実は、わざわざ努力してまでわかってもらいたいとも思ってないもんだから――、それで、自分の考えをいちいち人に説明するのが面倒くさくて、無口なふりに逃げ込んで楽をしてるんだ。あんたのだんまりは、逃げの方便なのさ。そうやって、人に自分の本心を見せないように、誰とも深入りしないように、気をつけてるんだ。俺は、それでも、あんたとは結構親しくさせてもらってるほうだと思うけどよ。そうだよな？」

「ああ」

「だから、友達として言わせてもらうが、あんたは、自分が逃げているってことに早いとこ自分で気が付かなくちゃ、人生、棒に振るぜ。俺だってひとに説教できるガラじゃないが、自分のことはわからなくても、他人のことは見えるもんさ」

「お前は、結局、何が言いたいんだ」

「いいかげん、逃げるのはよせってことさ。さっき俺が、あんたは女が怖いんだって言ったのはさ、正確に言えば、色恋沙汰が怖いっ

てことだな。あんたが今までずっと女っ気なしで通してきたのは、べつにモテないからじゃない。あんたはよく、魔法が使えない男のところろなんかに嫁にくる娘はいないだろうといっていたが、それは言い訳だ。あんたは、ずっと、とても注意深く、色恋沙汰を避け続けてきたんだ。ヴィーレのことだってそうだし、他の娘たちもうまくかわし続けてきた。リーナだって、あんなふうに冷たくあしらってるのは、色恋沙汰になるのが怖いからなんだろう？　あんたはずっと、他の人間と深くかかわりあうのをなるべく避けてきた。そして、色恋なんてものは、そういうもののなかでも一番深いかかわりあいだ。本気の恋ってのは、むきだしの魂と魂のぶつかりあいだ。だから、うまくいきゃあ、こんなにいいものはないってくらいいいものだが、傷つくときは、ひどく傷つくさ。だからって、それが怖くて、人間やってられっか？」

　ローイは、見透かすような眼差しをアルファードに据えたまま、さらに言葉を続けた。

「……いや、あんたが怖いのは、自分が相手に傷つけられることじゃねえのかもしれねえな。あんたが本当に恐れているのは、相手じゃなくて、あんた自身かもしれねえ。惚れたはれたのドロドロの中でさらけ出される裸の自分を、あんたはきっと、見たくねえんだろう。あんたはいつでも落ち着き払って澄ましているが、色恋沙汰のただなかでは、いくらあんただって、いつもの、その、聖人君子の仮面をつけ続けてはいられなくなるときが来る。その時、その仮面の下から、なにか、あんた自身も知らずにいた危険なもの、醜いものが現われるんじゃないか。あんたは、それが怖いんだ。自分の中から、蛇が出るか、狼が出るか、それとも、ドラゴンが出るか……。それをあんたは知りたくないから、仮面をつけ続けられるような関係しか、持とうとしないんだ」

　ドラゴン、と聞いた時、アルファードのこぶしが一瞬握りしめられたのを見て、ローイは少しばかりびびって、いそいで付け加えた。

「いや、なにも、あんたが、普段、わざと本性を隠していいやつぶ

ってるって言うわけじゃないんだが……。あんたが本当にいいやつだってことは、例えあんた自身が知らなくても、俺がちゃんと知っているよ。友達だもんな。でも、自分の心の中には自分でもわからない部分があるものだろ？　まあ、とりあえず、年は下だが色恋にかけちゃ大先輩の忠告ってことで、あんまり気にせず聞いといてくれりゃいいよ」

アルファードはいつもの平静な表情に戻って、あきれたように言った。

「何が大先輩だ。口がうまいのはお前の方だ。お前はいつだって口先だけは達者で、立派なことを言う。だが、お前だって、村中の娘を口説いてはいても、本気で恋をしているようには見えなかったぞ。そんなお前に、本気の恋とは、などと講釈を垂れられるとはな」

「どんな遊びの恋にだって、どこかしらに本気はあるもんさ。少なくとも俺が、あんたの百倍は場数を踏んでるのは確かだぜ。経験者の話は素直に聞くもんだぞ。あんた、口うまくかわして、結局、自分の気持ちを言わなかったが、やっぱりリーナが好きなんだろ？　好きなら好きと言わないと後悔するぜ。といっても、あんたが今から、じゃあそうしようなんていいだしたら、俺には望みがなくなっちまうんだけどな。それはそれで、まあしかたないさ。俺はそれでも出来るだけのことはしてみるつもりだ。とにかく俺、今度はほんとに本気なんだ。だから、フェアにいこうぜ。俺はリーナに惚れてるから、リーナを口説く。あんたも自分の気持をよく考えて、今のままなり応えてやるなりすればいい。それでリーナがどっちを選んでも、おたがい、あとで文句は言いっこなしだ。いいな」

「ローイ、お前、本当に、本気なのか？　ゲームじゃないんだぞ。ヴィーレのことはどうなるんだ」

ローイは、にわかにムッとして言い返した。

「また、ヴィーレか。ヴィーレのことを心配しなきゃなんないのは、俺じゃなくて、あんただろう。あんただって、それは分かっているだろ！」

ヴィーレのことを言われると、ローイは必ずムキになるのである。アルファードも、それはわかっているが、ヴィーレのことで彼につい説教をしてしまうのを止められない。

「ローイ、お前は今でも本当はヴィーレのことを想っているんじゃないのか。ただ、自分では、それに気が付いてないんだ。だから、俺は心配だ。お前がリーナに交際を申し込むのを止める権利は、さっきも言ったように、俺にはないが、もしお前がリーナを手に入れたら、そのときお前は、とたんに、自分の本当の気持に気がついてしまうのではないか、そしてリーナが傷つくことになるのではないか、そんなふうに思えるんだ。今のお前のリーナへの気持は、確かに真剣なものなんだろう。でも、お前が言ったように、人の心には自分でもわからない部分があるだろう？　お前は、ヴィーレへの自分の想いを、ごまかし続けているんだ。なんでそんなに意地になる必要がある？　ヴィーレだって、本当は、ずっとお前を想っているのに。お前にはわからないのか？　お前こそ、逃げているんだ。お前が自分の本当の気持から目をそらして、その結果としてリーナが傷ついたら、お前とヴィーレだって、自分たちが本当は愛しあっていることに気づくことができても、リーナをそのために傷つけたことでやっぱり不幸になるだろう。俺は、そんなふうになってほしくない。俺は、お前たち三人とも、弟や妹のように思っている。不幸になってほしくない」

ローイは少し黙ってから、ゆっくりと押出すように低く言い出した。

「……全部、俺が悪いって言うのか。リーナもヴィーレも俺が不幸にするっていうのか。そしてあんたは、ご立派な博愛主義者だってのか。ああ、ああ、あんたは立派だよ。清く正しく身を慎んでらして、俺にはとても真似できねえ。リーナやヴィーレがあんたにつきまとうのは、向こうの勝手、あんたはひとり、雲の上の聖人君子でございってわけさ！」

徐々に高まったその言葉は、最後には抑えた叫びに近くなってい

った。

「そんなことは言っていない。ローイ、大声を出すな。リーナに聞こえる」というアルファードの言葉は、興奮したローイの耳には入らなかった。

ローイはたたきつけるように言った。

「あんたが悪いんじゃねえか。全部、あんたのせいだ。あんたが、どっちかをきちんと選ばないから、ややこしいことになるんだ！あんたさえはっきりしてれば、あんたさえ逃げなければ……。だいたい、あんたは、俺がリーナを不幸にすることじゃなくて、俺にリーナを取られたら自分が不幸になることを認めて、そっちを心配するべきだぜ。偉そうなこと言って、あんたこそ、自分の気持が全然わかってないだろう！」

ローイは珍しく、本気で激昂していた。その時の彼の様子からは、いつもならどんなに怒ったときでも消えることのない独特の愛敬が、すっかり影を潜めていた。

だがそれは、一瞬の激情だった。ローイは、すぐに自分を取り戻して、声を落して言った。

「まあ、いい。あんたを、いま、責めたってしょうがない。きっと、あんたと俺と、両方が悪いんだろうよ。でも、言わせてもらうが、あんたに心配してもらうにゃ及ばない。もし、リーナが、万一でも俺と一緒になってくれたりしたら、俺は一生彼女を愛して大切にし、幸せにする自信があるんだ」

そう言ってローイは、背中をそらせて後ろに手をつき、空を仰ぎながら独り言のように言った。

「あーあ、リーナにしろヴィーレにしろ、こんな堅物の野暮天のわからず屋の化石頭の、どこがいいんだ？　アルファードばかりがモテて、こんなにみめうるわしく、限りなくやさしく紳士的で、しかもファッションセンスもサイコーの俺さまが、なぜ理解されないんだろう。世の中、間違ってるよなぁ」

その軽口が、彼なりの仲直りの提案であることを理解したアルフ

ァードは、気を取り直してまぜっかえした。
「たしかにお前の方が俺より顔がいいことは認めるが、お前のファッションとやらには、リーナもヴィーレもついていけないようだぞ」
「どいつもこいつも、村中の、いや、国中のやつらは、ファッションについちゃ十年遅れてるんだよ！」
ローイはニヤリと笑い、そのままふたりは黙って岩の上に並んで座り、街道の向こうの森を眺めていた。

「あー、さっぱりした！　次はローイ？」
やがて岩の後ろから現われた里菜のことばに、ローイは何事もなかったように答えた。
「ああ、先に入らせてもらうかな」
「ところで、ローイ、さっき何か怒鳴ってなかった？」
「あ？　ああ、あのな、アルファードがどうしても覗きをするって言って聞かないもんだから、俺が一発、叱り飛ばしてやったのさ！」
ローイはそう言って、けらけらと笑った。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第六場（1）

冬の午後の儚い薄日に照らされた古い街道の石畳を、鳥影がよぎる。

街道を行く四人の旅人の足音は、あたりの深閑とした森に吸い込まれ、乾いた灰色の石畳から、微かに埃が舞い上がる。

そういえば、旅の間、本格的な雨や雪は一度も降らなかったと、里菜はこれまでの旅路を振り返った。

このあたりは冬至を過ぎると天候が崩れがちなのだと言う。アルファードが冬至前にイルベッザに着くように旅の計画を立てたのは、役所が冬至休みに入ってしまう前に入隊を済ませたいという理由の他に、このためもあるらしい。その甲斐あって道中は天候に恵まれ続け、まもなく旅も終わろうとしている。

明日の夕方には、イルベッザに入れる見込みである。

この辺はもうイルベッザの近郊のはずなのだが、どっちを見ても、相変わらずの森が続く。

この辺までくれば、猟師やきこりが少しは住んでいるはずだとアルファードは言うのだが、彼らの小屋は森の中に点在しているそうで、街道添いには民家も畑も見当たらない。

イルベッザの北側、カザベル街道方面は防壁を越えてどこまでも都市が続いているのに対し、このエレオドラ街道添いの東側は、防壁のすぐ外まで森が迫っている。防壁から数時間以内のところまでは、たまに市民たちが、ピクニックがてらきのこや木の実を集めたり、狩りをしに来たりするが、それ以上町を離れると、そこはもう、足を踏み入れるものほとんどない、古い神秘の森なのだ。

その中をつっきって、街道は続く。

ほの白い冬至前の太陽が、既に西に傾き始めている。そろそろ今夜の野営地を定めなければならない。

一行が、古代の巡礼のように土と落葉の上で眠るのも、今夜が最

後になるはずだ。

それを考えると里菜は、堅パンや落葉の寝床にもう我慢の限界だと思っていたはずが、なんだか少し名残り惜しく、旅が終るのが寂しいような気がしてくる。

軍隊の宿舎は男女別だ。もう、この四人で雑魚寝をすることもないだろう。

キャテルニーカとも、今までのように一緒にいられるかどうかわからない。

彼女の身の振り方についてはすでに相談してあって、イルベッザ城の構内にある治療院に、治療師見習いか、それがだめなら雑用係として働かせて貰えないか当たってみることになっている。

キャテルニーカはまだ十一才だから、本来なら学校に通わせるべきなのかもしれないが、本人が、治療院で働くことを希望しているのだ。

もしキャテルニーカが治療院で働けることになったら、同じ敷地内にいるのだから、里菜はいつでも彼女と会えるはずだ。うまくすれば同じ宿舎に入れる可能性もあるらしい。

けれど、もしそうなっても、イルベッザでの日々は、もう、この旅の続きではない。何もかも、きっと、変わってしまうだろう。あさってからは、それなりに馴染み始めた旅の日々も終り、未知の都での新しい生活が始まるのだ――。

そのことを想い感傷的な気分になった里菜は、前を行くアルファードの大きな背中を、踊るような足取りで楽しげに歩くキャテルニーカを、それから、なぜかぼんやりと空を見上げて歩いているローイを見やった。

ローイは、さっきまで里菜と言葉を交わしながら歩いていたのだが、話の途切れ目にふっと黙り込んだまま、ぼんやりしてしまって、返事もしないのだ。

こんなことが、ここ二、三日、何度もあった。

ローイはあいかわらず冗談を言ったりキャテルニーカとふざけた

りしていて、一見、特に変わったところはない。
けれども、時々、こんなふうに急に考え込んでしまう。
そして、そういう時、里菜が心配して様子を窺っていると、ローイが突然ちらりとこちらを見て、ふたりの目が合ってしまったりする。そのとたん、ローイは、決まって、慌てたようについと目を逸らす。
最初のうちは、どうしたのかといぶかしみ、心配していた里菜も、そろそろ、そのぎこちない視線の意味がうすうす分かってきている。けれど、その考えを、そんなことはないと否定しようと努力している。
ローイは、村にいたころから、毎日のように、里菜に一目惚れだのなんだのと言っていたが、それは挨拶がわりの冗談だったはずだ。自分とローイは、いい友達だったはずだ。そうでなくては困るのだ。
そうは思いながらも、嫌いではない相手から、こんなぎこちない純情のまなざしを向けられれば、女の子としては、気分の悪かろうはずもない。ローイの切なげなまなざしは、里菜を、なにやら居心地の悪いような、気恥かしくも誇らしいような、微妙な心境にさせる。
けれども里菜は、ローイと目を逸らしあった直後、アルファードが見ていたかと、うしろめたいような気持で、つい、ちらりと彼のほうを窺わずにはいられない。
（あたしは、アルファードのなんでもないんだから、誰とどんなふうに目を見交わそうとアルファードのご機嫌を伺う必要なんか、ないわ）と思うのだが、やっぱり彼が気になるのである。もしかするとアルファードが里菜とローイのそんな様子に嫉妬や焦りを感じ、里菜が自分のものだということをはっきりさせる気になってくれないか、などという密かな期待もある。
もっとも、彼にそんなことを期待しても無駄なのは、里菜もよくわかっていたのだが。

この、冬の旅の終りを惜しんでいるのは、里菜だけではなかった。ローイもまた、この旅が終る時、ものごとがいままでどおりではなくなることを予想していた。

旅の中では、すべてが移り変わり続けており、ものごとは流動的だ。何かを変えるなら、今だ。旅が終って、イルベッザで落ち着いてしまったら、自分と里菜の関係も、その時点のままの友達として固定してしまうだろう。

それにローイは、都についてからの生活について、里菜に、ある提案をしたいと思っていた。

それをするのは絶対、里菜が軍隊に入ってその仕事や宿舎の暮しに馴染んでしまう前でなければならない。

里菜が変化を好む性質ではないのに、ローイはもう気がついている。そういう人間がひとつの暮しに馴染んでしまうと、そこから連れ出すのはとても難しいのだ。きっと、里菜は、たとえそれが不本意な辛い生活であろうと、いったん選んだ暮し方を変えるくらいなら、そのままの毎日に甘んじて耐え続けることのほうを選んでしまうだろう。そうなってからでは、遅いのだ。

(あーあ、このままじゃイルベッザに着いちまうぞ。その前になんとかしたいよなあ。それにしても、何て言ったらいいんだろう。いままで、口説き文句に不自由することなんてなかったのに。本気の時には、うまいことなんて何にも言えなくなっちまうんだな)

ローイは、機械的に足を運びながら、今日も道々、考え込んでいた。

彼は、三日前の、例の『戦線布告』以来、ずっと告白の機会を窺ってはいたのだが、なかなか里菜とふたりきりになるチャンスもないし、なによりも、自分では認めないだろうが、勇気がなくて思い切れなかったのである。

(俺は、村中の女の子をひとりあたり十回は口説いてきたんだぞ。それなのに、いったい俺は、どうしちまったんだ。ああ、本気だってのは辛いことなんだなあ)などと、あれこれ思案をしながら、時

々ちらっと里菜を見ずにはいられない。そのうえ、それで里菜と目が合うと、おもわず横を向いたりしてしまう。

（何やってんだ、俺は……。ガキじゃあるまいし）

自分のばかげた振る舞いに、自分であきれるローイである。

いくつもの甘い口説き文句が、ローイの頭の中に浮かんでは消える。

彼は、これまで、どんな歯の浮くようなセリフでも照れずに言うのが自分の特技だと信じていた。

だが、里菜の顔を盗み見ては、

（だめだ、リーナの前では、こんなことときっと言えなくなっちまう）

と、思う。

結局、彼の頭に最後に残った言葉は、ごくごくありきたりの、『一緒に暮らそう』というひとことだけだった。

（だめだ、だめだ、いきなりそれはないだろう。最初はもっと気軽な交際から始めるのがセオリーってもんだ。いきなりプロポーズなんかしたら、うまくいくものもいかなくなっちまう。でも、アルファードっていう強力なライバルがいるんだから、悠長なことも言ってられないな。なにしろあいつらは、いかに『なにもなかった』とはいえ、とっくに一緒に暮らしていたんだから。それにしても、いくらなんでも、あたりまえすぎるセリフじゃないか。だめだ、だめだ、ああ、どうすりゃいいんだ……）

最後の一言を思わず声に出して言いそうになって、あわてて口をおさえたローイを、キャテルニーカが、不思議そうに見上げていた。

アルファードは、もちろん、この微妙な雰囲気に気付いていないわけはないのだが、黙ってそれを目の隅に納めて、注意深く無視している。

（あいつ、俺がリーナを不幸にするのが心配だ、なんて言って、結局傍観してるのは、どうせ俺に勝ち目はないと踏んでるからだな。ちくしょうめ）と、ローイは、悔しがる。

そんな三人の様子にはまるで頓着しないように、あいかわらず里

菜とローイにかわるがわる纏わり付きながら跳びはねていたキャテルニーカが、その時、ローイにつと擦り寄ってきて、真下から顔を覗き込み、

「お兄ちゃん、がんばってね！」とにっこり笑った。

ぎょっとしたローイが、自分は声に出して考え事をしていたのかと焦って回りを見す姿を見て、キャテルニーカはおかしそうにクスクス笑いながら猫のようなしなやかさで身を翻し、今度は里菜のそばへ駆けていった。

結局、ローイが、なんというべきか考えあぐねているうちに、もう逃すわけにいかない最後のチャンスが先にやってきてしまった。

その夕方、いつものように、手分けして野営の夕食の材料を調達していたときである。

運よく、いつもより早く兎を仕留めたローイが野営地に帰る途中、やはり運よくいつもより早く香草を見つけてきたらしい里菜と、はちあわせしたのだ。しかも、普段なら里菜と一緒にいるはずの、キャテルニーカもいない。

「リーナ、もう帰るところ？　ニーカは？」

「なんか、薬草を探しに行くって、途中で別れたの。もう帰ってるんじゃない？」

「そうか……」と言って、黙って下を向いてしまったローイの様子に、なにかいつもと違うものを感じ、里菜は立ち止まってローイを見上げた。

おずおずと、ローイが言った。

「じつは、その、あんたに、話があるんだけど……。立ち話もなんだから、ちょっと、その辺に、座らないか？」

「うん……」

緊張したローイの様子につられて緊張しながら、里菜は、ローイが示した手近な倒木の脇に香草の束を置くと、ローイの隣に、少し離れて腰をおろした。

何の話かは、もちろん里菜にはだいたい見当がついた。

きっと彼は、あたしに告白するつもりだ、と、里菜は考える。どうしていいか、わからない。この場から、走って逃げてしまいたい。

ローイの気持は、うれしい。ローイはいい人だ。嫌いでない相手からなら、好意を寄せられて嬉しくないわけはない。そのうえ、今、自分が想っているアルファードは、自分のことを妹のようにしか扱ってくれない。自分には、そんなにも魅力が無いのだろうか――。

そんな自分を想ってくれるひとがいるというのは、すごく魅力的な状況だ。もし、そうなら、はっきり言葉にして告げて欲しい。

けれども、それは、自分勝手な欲望だ。自分は他の人を愛していてローイの想いに応えることはできないのだ。それなのに、自己満足のために、ローイに想いを口に出させるのは、残酷だ。それが真剣な想いであれば、なおさらだ。

ローイを友達として大切に思うのなら、絶対、今、彼に話をさせてはならない。

自分がいま大急ぎでしなければならないのは、何か、ローイがこれから言おうとしていることを言えないようにすることだ。それがお互いのためだ。そうしなければ、大切な友達を、傷つけるだけでなく、失うことさえありうるのだ。

一番いいのは、たぶん、ここで先手を打って、ローイに、自分とアルファードの恋について友達として相談に乗ってもらうことだろう。それだって残酷なことには違いないが、すくなくとも、あとでお互い何もなかったことにして、友達のままでいられる。それに、どうせローイは、里菜のアルファードへの想いは知っているのだ。

（そう、今、言わなくちゃ。大急ぎで……。『あたしも、あなたに相談に乗ってほしいことがあって、なかなか機会がなくて……。先に聞いてくれる？』って。ローイが、まだ、なんにも言わないうちに！　今なら、間に合う……）

決心して里菜が口を開こうとした刹那、ローイが、里菜の顔を、真近に覗き込んだ。

ローイの顔をこんなに近くで見ることは、あまりない。立ってい

る時は、あんまり背が高すぎて顔はずっと上のほうにあるし、座る時は、そういえば、里菜は必ずアルファードのとなりに座っていて、ローイはたいてい焚火の向う側などにいた。里菜がローイと並んで座るのは、村で子守りをしていた時以来かもしれない。

こうしてあらためて近くで見ると、ローイは、なかなか整った、綺麗な顔をしているのだ。それは、前からわかっていたのだが、あんまり背が高すぎてなんだかヘンなことと、服装がキテレツなこと、そしてなによりも、表情に愛敬がありすぎ、言動がひょうきんすぎることで、普段は、彼がハンサムだというのを忘れているのである。

そのローイに間近に見つめられ、里菜は、頬が熱くなるのを止められなかった。

（何でいまさら、ローイの顔なんか見て赤くならなきゃならないの。ローイが誤解するじゃない）と思いつつ、その茶色い瞳を見ていられなくなって、目を伏せてしまう。

（やだ、これじゃますます、誤解されちゃうじゃない……）

里菜は、決して面食いではないつもりだ。でも、こういうときのハンサムな顔というのは、なかなか強引な作用を発揮するらしい。

ローイが里菜を見つめたのは、ほんの一瞬だったのだろう。だが、その一瞬のうちに、里菜の頭のなかでは、様々な思いが吹き荒れた。

このままローイに見つめられて愛を告げられてみたいという、甘美にして身勝手な誘惑と、早くさっきのセリフをいわなければとせっつく理性の声がせめぎあう。

一方ローイのほうも、落ち着いて効果を計算しつつ里菜を見つめたわけではなく、どうしてよいかわからなくなって、それしかできることがなかったのである。が、頬を染めて目を伏せた里菜の仕草は、里菜が恐れたとおり、彼にわずかに勇気をあたえた。

「リーナ、その……」

ローイは意を決して口を開いたが、そこまで言うと目を伏せて、ひととき、ためらった。

里菜は目を上げて、おそるおそる、そんなローイを見た。

うつむいたローイは、まるで幼い少年のように頼りなげに見えた。いつもの軽薄さやガサツさ、押しの強さはすっかり影をひそめ、透きとおるような繊細さと純粋さが、その下から現われたようだった。

長い睫毛が、やわらかな茶色の瞳に影を落している。

里菜のなかで、ほんの一瞬、理性が、圧倒的な誘惑の前に屈した。

そういえばローイは、声もいいのである。やわらかなテノールが耳に響いたとき、その声で愛を告げてほしいという欲望は、抑えがたくなってしまったのだ。

その、一瞬の誘惑の勝利のあいだに、とうとうローイは、さえぎらなければならなかったはずの言葉を、口にしてしまっていた。

「……イルベッザについたら、俺と、一緒に暮らさないか」

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第六場（2）

（う、うそ！　これって、どう考えてもプロポーズじゃない！　なんでローイは、こんなに唐突にプロポーズなんてするの！　やっぱりさっき逃げ出せばよかった。もっと順序のわかった人かと思ってたのに、まさか、そんな……）

里菜の頭の中は、たちまちパニック状態になった。

まだ十七才、しかも、かなりオクテだった里菜にとって、今まで、結婚など、遠い世界の話だった。まだ、恋愛と結婚を結びつけて考えるような年令ではなかったのだ。この間は、もののはずみで、タナティエル教団の導師たちに向かって『アルファードのお嫁さんになる』などと宣言したが、それも里菜の中では、遠い未来の夢――それこそ、『大きくなったら』の話に過ぎなかった。

けれど、よく考えて見れば、この世界では、十七とか十九とかいうのは、もうそろそろ平均的な結婚適齢期に差し掛かろうという年令だったのだ。里菜にとって、恋とは、『手をつないでデートすること』だったが、ローイにとっては、そうではなかったのだ。

里菜は、そのことを忘れていた自分の迂闊さ、幼稚さを悔いながら、ものも言えずに、ただ、目を丸くしていた。

ローイは、そんな里菜から目をそらし、遮られることを恐れているような早口になって続けた。

「ああ、もちろん、その、あんたとアルファードが一緒に住んでたみたいに、ただ、同居しようっていうんじゃなくて、その、俺と夫婦にならないかって意味なんだけど……。それでさ、小さな家でも借りて、例のタクジショをやらないか。俺とふたりでさ……」

里菜の心に、激しい後悔と自己嫌悪が沸き起った。

（聞いてはいけなかった。あたしは、残酷なことをした。自分の一

時の満足のために、ローイの心を弄んでしまった）

ローイが、思い切ったように、それまで伏せたままだった目を上げた。その瞳のなかに怯えに似たものが揺れているのを、里菜は見た。

（このひとは怯えている。捨てられる子供のように、拒絶されることを恐れている……）

里菜の心に、痛みが走る。

（このひとを、傷つけたくない。手を、差しのべたい。その肩に腕をかけて、あなたは絶対、拒絶されることはないんだと、抱き寄せてあげたい）

そう思う一方で、もう一つの圧倒的な声が告げる。

（でも、出来ない。あたしはアルファードが好き。たとえ、彼があたしを妹のようにしか見てくれなくても。ローイ、ごめんなさい、ローイ……）

「ローイ、あたし……」

言いかけた里菜の唇に、ローイが、自分の人差し指を押し当てた。

「ストップ。言わなくていい。その顔を見れば答えはわかるさ。いいよ、気にするなよ。俺もどうせ、承知してもらえると思ってた訳じゃないんだ……。でも、じゃあさ、もうひとつだけ言わせてくれよ。俺と一緒になってくれなくていいから、アルファードと住んでてもいいから、俺とタクジショだけやるってのはどうかな。……俺はあんたが、いやいや魔物退治に引っ張り出されるところじゃなくて、自分に向いた仕事をしていきいきと楽しそうにしているところを見ていたいんだ。……いや、だめだよな、やっぱり……。顔に、だめって書いてある。あんた、正直者だもんな」

指先で唇を封じられていなくても、里菜は何も言えなかっただろう。

ローイはふたたび目を伏せた。その様子は、ひどく痛々しく見えて、里菜はまた胸を衝かれた。

けれども、ローイはすぐに顔を上げて言った。

「リーナちゃん、ごめんな。いきなりこんなこと言って驚かして。やっぱり、ちょっと唐突だったよなあ。うん、今の今までただの友達だったのが途中の段階全部すっ飛ばしていきなりプロポーズってのは、いくらなんでも無理があるよ。俺としたことが、どうかしてたよ。反省してる。今度誰かにプロポーズするときにゃ、これを教訓にして、もっとうまくやるよ。だからあんたは、このことはもう気にしないで、いままでどおり軽口の言いあえる仲でいてくれよな」

そういって笑ったローイは、もう、いつもの顔に戻っていた。

里菜は、ローイの指に唇を押えられたまま、口を開きかけたが、やはり何も言えなかった。

何か言いたいけれど、何と言っていいかもわからないし、ローイは里菜に何も言わないで欲しくてこうしているのだからと思うと、それを無視してはいけないとも思う。

そんな里菜の逡巡を見て取ったローイは、少しばかり名残り惜しそうに唇から指を離して言った。

「もういいよ。俺は、大丈夫だから。言いたいことがあったら、言ってくれ。ただし、ゴメンね、というのと、オトモダチでいてねっていうのだけは、やめてくれよ。あんたがあやまる必要は何ひとつないんだし、それに俺は、そのセリフはもう一生聞きたくないくらい聞き飽きてるんだ」

里菜は、ローイの、座っていても随分高いところにある顔を見上げて、口を開いた。

「ローイ、あなたって、あなたって……」

とたんに、再びローイの指が唇に押し当てられた。

「おっと、忘れてた。『いいひとね』っていうのも、やめてくれ。その他大勢の女の子にそれを言われる分には、たしかに俺はいいヤツなんだからしかたがないが、他でもない愛しのリーナちゃんには、もっと思い出に残るような独創的なセリフを言ってもらいたいね」

里菜は、おもわず、ローイの指を手で振り払って叫んでしまった。

「だって、あたし、あたし、今、本当に、本当に、あなたのことを、

いいひとだなって、心の底から思ったんだもの、しかたないじゃない！」

ローイは、普段見せることの少ない、苦笑いのような表情をうかべた。

「わかったよ。ありがとう。そうなんだよな、俺って、どうしてこんなにいいヤツなんだろうな」

里菜は、また目を伏せてしまった。涙が滲みそうで怖い。ローイが一生けんめい明るく振るまっているのに、自分が泣いたりしたら、この出来事が深刻なものだったことになってしまう。それにしても、ローイは、なんていいひとなんだろう――。

ローイの、あまりの『いい人さ』に、里菜は涙が出そうになったのである。

もう何も言えなくて、でも、何か言いたいことがたくさんあって、どうしようもなくなった里菜は、ただ、複雑な想いを込めてローイの名を呼んだ。

「ローイ……エルドローイ」

エルドローイという正式名でローイを呼ぶのは初めてだった。なんとなく、今は愛称ではない本当の名前を呼ぶべき時ではないかという気がしたのだ。

これを聞いたローイは、少しおどけて叫んだ。

「おっ、いいねえ。その名前、立派すぎて自分には似合わない名だと思っていたが、あんたにそういうふうに呼んでもらえると、なんだかすごくいい名に聞こえるなあ。よかったらもう一回言ってみてくれよ」

「……エルドローイ」

こんどは、やや、そっけなくなってしまう。

「うーん、いいね、いいねえ。できれば、あと十回ほど言って欲しいんだけどな」

そこまで言われると、からかわれているような気がして、おもわず里菜は、いつもの調子で言い返してしまった。

「バカ！」
そんな里菜に、ローイは、やさしくほほえんだ。
「その調子だ。その調子でいこうよ。な？」
ああ、ローイはなんていいひとなんだろう、と、また感動してしまった里菜に、ローイが笑っていう。
「できれば、『バカ』じゃなくて、もっとおもしろい悪態を考えて欲しいもんだけどな。いつも言ってるだろ、創意工夫が大切だって。な？　さ、戻ろう。アルファードが変に思わないうちに」

ふたりが野営地に戻ったとき、アルファードは、もう、焚火の準備を終えていた。
といっても、ふたりが話していたのは、そんなに長い時間ではなかったはずだから、特にふたりが遅れたというほどではない。
少し距離を置いて相次いで出てきたふたりを見て、アルファードは何か察した様子だったが、なにも言わなかった。そんな彼を、ローイはむくれたような顔で見やって、黙って兎を捌きはじめた。
その夜、兎と香草のスープを食べ終えて、小さくした焚火のまわりでてんでに横になって、ローイは、里菜に声をかけた。
「よお、リーナちゃん、旅の夜も、もう最後だ。今夜こそ俺と一緒に寝ようぜ！」
以前と少しも変わらない、軽い口調である。
「バカ……」
里菜も、いつもの返事を返したが、つい、多少元気のない声になってしまう。
そんな里菜に、ローイはいつもどおり、やたらに陽気に言い返した。
「おい、返事がワンパターンだぞ。いつも、もっと工夫のある悪態を考えろって指導してるだろう。何か、もうちょっとおもしろいこ

と言ってみろよ」
「……電信柱」
「何だ、そりゃ……」
里菜の苦心の切り返しに、ローイは首を捻った。この世界には電信柱はないから、この悪態は通じないのだ。この間、『ウドの大木』と言ってみた時もそうだった。この世界にはウドは生えていないらしい。
「まあ、いいや。なんだかよくわからないが、非常に個性的で、よろしい。じゃ、おやすみ」
ローイは、そう言うとマントにくるまって横になり、少しやさしい声でつけ足した。
「ぐっすり寝ろよ。よけいなこと、考えずにな」
「ありがとう。あなたもね。……おやすみ、ローイ」
そう言って、いつもどおりアルファードの近くにマントを広げている里菜に、アルファードが小声で尋ねた。
「なにか、あったのか」
「ううん、別に……」
「そうか」
ぽつりと言って、アルファードは、それ以上追及しなかった。
けれど彼は、むろん、何があったのかも、その結末も、見当はついていたのだ。ただ、ローイと里菜が一応表面上は普通に振る舞っている以上、この件に関しては非常に微妙な立場にある自分が下手に口を出して話をこじらせることはないと判断したのである。
彼は、『別に』という言葉とはうらはらに何か言いたげな里菜の視線を無視してマントにくるまると、いつものように里菜に背を向けた。
キャテルニーカは、今日はローイのとなりで寝ることにしたらしい。例によって地面に直接横になると、ローイのすぐ近くまでずり寄ってローイの顔を覗きこみ、彼にだけ聞こえるほどの声でたずねた。

「お兄ちゃん、どこか、痛い？」
「ああ、ニーカ。うん、そうだな、胸が痛むんだよ、胸が。怪我でも病気でもないから、治療はいらねえよ」
ローイは、めんどうくさそうに小声で答えると、反対側に寝返りを打ってキャテルニーカの目を避けた。
彼女に対してはいつもやさしいローイにしては、めずらしく無愛想な、拒絶的な態度だったが、キャテルニーカはそんな態度に臆したようすもなく、彼をまたぎ越えて反対側にいくと、また、真顔でローイを覗きこんだ。
「ここが、痛いのね」
そう言って、マントの上から、彼の心臓のあたりに掌を当てた。
その掌の小ささに、ローイの心が、しだいに和んでゆく。自分を心配してくれる少女の気持が、いじらしく、いとおしい。
「ありがとう、ニーカ。なんだか、少し良くなった気がするよ」
ローイは、マントの中から手を伸ばして、キャテルニーカの髪を撫でた。
「よかった」
そう言って、にっこりしたかと思うと、キャテルニーカは、その場にころっと寝そべり、次の瞬間には、健やかな寝息をたてていた。
ローイは、マントの中に引っ込めた手を胸に抱え込んだ。
人差し指の先に、里菜のやわらかな唇の感触が残っている。
そっと開いて自分の名を呼んだ、小さな、ふっくらとした、薔薇色の唇が、閉じた瞼の裏にまざまざと浮かぶ。まるで朝露を帯びてほころび始めた匂やかなつぼみのような、摘み取られるのを待つ愛らしい甘い果実のような――。
思わず手を伸ばして指先を触れた時の、夢のようなやわらかさ、ひめやかな温かさ。
（あれは俺のものじゃない――。それはわかっている。でも、たったこれだけの思い出を大切にとっておくくらい、俺にだって許されるだろう――）

ただひとつ自分に許された儚いぬくもりの記憶をひっそりと胸に抱いて、ローイは、いつか眠りに落ちた。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第七場

月の下に黒々と静もる、深い夜の森の中を、里菜は彷徨っていた。行く手には白い靄がいざなうように流れ、木々のシルエットを墨絵のようにぼかしている。

足元の枯れ草は、こそ、とも音を立てず、夜の鳥のはばたきも聞こえない。臆病な森の獣たちも、どこかでひっそりと気配を隠しているようだ。

道なき森を歩いているのに、下草も小枝も里菜を傷つけることなく、藪も倒木も何一つ里菜の行く手をさえぎらない。それが不思議なことであるとも気づかぬまま、里菜は、雲を踏むような足取りで歩き続ける。

何かに導かれるように歩き続けた里菜の目の前が、ふいに開けた。霧は、いつのまにかすっかり消えている。

そこは、森の中にぽっかりと空いた、円形の草地だった。木立がとぎれているので、その上空にだけ、遮るもののない夜空がのぞいている。そこから降り注ぐ月光が、草に降りた霜を白く輝かせている。

その草地の中央に、小さな丸い空から差し込む月光を一身に集めて、丈高くすらりとした黒衣の姿が、こちらを見つめて立っていた。見つめられているということはまちがいなく分かるのだが、その顔はフードに隠れて見えない。

よく見ると、その足もとは、地面からわずかに浮き上がっていた。

「……魔王……」

恋人の名を呼ぶように、里菜は呟いて、空き地の縁に立ち止まった。

魔王が、里菜を抱こうとするように、おごそかに両腕を広げた。広げた腕の中にも、月の光が満ちていた。

里菜は、その腕の中に吸い寄せられるように、たよりない足どり

で魔王に歩み寄った。
　自分を待ち受ける黒い腕の中に身を投げかけ、すべてを委ねて、肉体のない闇の抱擁を受け入れたかった。黒い翼のようなその黒衣に包まれて空に浮かび、仄暗い時のはざまを漂って、どこか遠い、世界の果ての荒寥の地に攫われて行きたかった。
　けれど、半ばまで歩み出たところで、里菜は、はっとに立ち止まった。
　キャテルニーカの声が、遠くで自分を呼んだような気がしたのだ。
　その瞬間、里菜の理性がよみがえった。里菜は、毅然と顔を上げ、魔王を睨みつけた。
「何しに来たの？　もう、あなたになんか騙されないわよ。このヘンタイじじい！」
　夜の森に満ちる神秘で神々しい気配にも、里菜の清楚で可憐な姿にもそぐわない、この下品な悪態に、魔王は、腕を降ろしてクツクツと笑い出した。笑い声が聞こえたわけではなかったが、不吉な笑いの気配が、清らかな森の空気を汚してあたりの空間を震わせたのだ。
　忍び笑いは、やがて哄笑に変わった。
　魔王の、声のない言葉が、里菜の頭の中に響いた。
『……なんと愛らしいことよ。そなたはまったく、いとおしい。だが、我が妻よ、そう、私を嫌うな』
　そう言って、相変わらず笑い続ける魔王に、里菜はかんしゃくをぶつけた。
「誰が妻よ！　勝手に決めないで！　そんなふうだから嫌われるって、わからないの？」
『まあ、そう言うな。私はそなたに忠告をしにきたのだから』
「いらないわ、あなたの忠告なんて！　どうせロクなことじゃないもの」
　魔王は里菜の言葉を無視して言った。
『今一度言う。そなたには、イルベッザへなど行く必要はない。イ

ルベッザでそなたを待っているのは、無意味な苦しみだけだ。明日、市門を入ったらそのまま大通りに出て、その大通りを左に行け。そこが北の門だ。北へ向かうカザベル街道に続いている。北へ来い』

「いやよ」

にべもなく言い放った里菜に、魔王はあっさりと、こう言った。

『ならば、それもよかろう。私はそなたが無用に傷つくのを見るにしのびなかったから、忠告を与えたまでだ。そなたが、忠告を無視してまで、どうしてもイルベッザで辛い思いをしたいというのなら、しかたあるまい。どのみちそなたは、私のもとへ来ることになるだろう。早いか遅いか、今のままで来るか、不必要な傷を負って来るか、それだけのことだ。たいした違いではない。いかなる傷も私が癒してやろうほどに』

「早くても遅くてもたいした違いじゃないんなら、あと七、八十年待ってよ。そうしたらあたし、あなたのところへ行くわよ。だってあなた、死神でしょ？　その時は、妻にでもなんにでもなってあげる。しわしわのおばあちゃんでもいいんならね！」

それを聞いて魔王はますます笑った。よく笑う死神である。

『おお、エレオドリーナよ、むろん私は、そなたがどんなに年老いていても構わぬとも。言ったであろう。そなたが赤子であっても老婆であっても、私はそなたを愛すると』

そこで魔王は笑いを収めて続けた。

『だが私は、あまりにも長いこと、そなたを待ちすぎた。永遠のものである私にとって時は意味を持たぬとはいえ、あまりにも長く、私は、待ちすぎた。……今度の夏が過ぎるまで、待とう。秋になったら、私の城へ来い。そなたが望むなら、私はそなたを一瞬のうちにそこへ連れていくことが出来る。しかし、そなたは、それを望まない。ならば自分で旅をしてくるがいい。旅路は遠い。夏の最後の新月の前にイルベッザを発て。その頃にはそなたも、そこでの無意味な生に飽いていることだろう』

「おおきなお世話よ。何であなたにそんなこと決められなくちゃな

らないの。だいたい、何千年も生きていたっていうわりには、夏までだなんて、ずいぶん気が短いんじゃないの？　あたしがいつどこへ行くかは、あたしが決めるわ。あなたの言いなりになんかならない。あたしは――あたしは、どこへでもアルファードが行くところへ行くの。アルファードが居るところに居るの。そうしようって、自分で決めたの。北へは、行かないわ」

アルファードの名を聞いたとたん、魔王のまわりから、笑いの気配が消えた。声なき声が、かすかな怒りのようなものを孕んだ。

『あのような負け犬に関わりあっていてもしかたがないと、言ったはずだ。しかし、そなたがどうしてもそうしたいのなら、好きにするがいい。ただし夏までだ。夏が過ぎたら、そなたは、あの羊飼いのもとに留まるわけにはいかなくなる。そなたの大切なものたちを魔物の脅威にさらさせたくなかったらな』

「ちょっと、それ、どういう意味よ！　それって、もしかして脅迫じゃない？」

顔色を変えた里菜に、魔王は平然と答えた。

『まあ、そういうことになるかもしれん』

「なに、それ！　信じらんない！　最っ低よ！」

『何とでも言うがいい。私はもう、待つことに疲れたのだ』

「だからって、女の子口説くのに、口説き文句にことかいて脅しを使っちゃうなんて、最低の能無しがすることよ！　薔薇の花束でも持って来るほうが、まだ工夫があるわよ。脅すヒマがあるなら、口説き文句の研究でもしてくれば！」

魔王に、笑いの気配が戻った。

『贈り物が、欲しいか。そういえばそなたは昔から花が好きだった。そなたが望むなら、持ち切れぬほどの花束を、今すぐにでも捧げよう。すぐに枯れてしまう、ありふれた薔薇などではなく、大地の奥深く人知れず咲く永遠の石の華たちを、地上の薔薇と見紛うほど精巧に細工して贈ってやろう。そなたは青が好きだったな。青いサファイアで花びらを、シルドライトで葉を、ダイアモンドでその上に

宿る露を作れば、さぞ美しかろう……』

とっさに、里菜の頭の中に、背中に大鎌をしょった黒衣の死神が薔薇の花束を抱えて立っているという、かなり不気味な図が浮かんでしまった。里菜は、あわてて、その光景を振り払うように頭を振って叫んだ。

「い、いらないわよ、そんなもの！　気持ち悪いこと言わないでよ。今のは例えばの話だってば。花束抱えた死神なんか見たくないわよ！」

『それは残念だ。受けとって貰えるなら、私はそなたにいくらでも美しく珍しい贈り物を捧げるのだが。それは、まあ、そなたが私の城に来てくれてからの楽しみとしておこう。そなたのために女王に相応しい居室を整えて、そなたが望むものは、何でもそこに用意しておくぞ。何が欲しい』

里菜をかからかっているのか、それとも本気で言っているのか、魔王の言葉は、あいかわらず笑いを含んでいる。

「用意したって、無駄よ！　あなたがくれるものなんか、何もいらないんだから」

ふいに魔王の言葉から笑いの気配が消えて、これもまた里菜をからかってのことか、今度は、ややわざとらしいほど悲しげな調子になった。

『エレオドリーナ、私の花嫁よ。なぜ、そうまで、私を拒む？　私は、そなたに危害を加えるつもりはまったくないのだ。そなたが花を好むなら、城の庭園を、そなたの部屋を、寝台を、永遠に枯れることない花で一面に埋めてやろう。

そうだ、そなたがいつも連れている、あの、ひょろひょろした赤っ毛の若者――そなたの気に入りの道化を、私の城に連れてきてもいいのだぞ。そうすれば、あれは永遠にそなたのものだ。あれがそなたから失われる前に、今すぐ、ここへ連れてこい。そなたが呼び出せば、あの若者は大喜びでしっぽを振ってついてくるはずだ。一足先に私の城に連れていって、そなたを待たしておいてやろう』

「冗談じゃないわ！　なんであたしが、ローイを死神に引渡したりするわけ？　ローイはあたしの友達なのよ」

『だが、むこうはそうは思っていなかったようだな？　そなたの心は、今、それで非常に痛んでおろう。あれを幸せにしてやりたいとは思わぬか？　そなたと共に、花に埋れた城で、すべての痛みを忘れて永遠に歌を歌って暮せば、そなたもあれも、幸福になれると思うのだが』

「おせっかいはよして！　ローイには、婚約者がいるの。ヴィーレからローイを取りあげることなんか、出来ないわ。それにあたしは、ローイには悪いけど、ローイがいても、アルファードがいなければ、幸せじゃない……」

『あの羊飼いがいても、そなたは幸せではないと思うぞ。まあ、よい。夏が終るまで、気の済むように人の世の汚泥の中で苦しむのだな。できることなら、私はそなたを、今のまま、人の世の穢れを知らぬままで私のもとに迎えたかったが……。だが、私は、そなたからすべての苦しみの記憶を消し去り、すべての穢れを清めてやることができるのだから、何の心配もいらない。では、行くがよい、無益な苦しみの中へ。私が時々、そなたを慰めに行ってやろう……』

そう言いながら、魔王の姿はゆっくりと薄れていった。

「なにが慰めによ！　脅しに来るんでしょ！」

薄れていくその姿にむかって里菜が叫んだ時には、もう魔王の姿は消えていて、ただ、里菜の叫びに応えるように、遠くから魔王の笑い声だけが、かすかに響いてきた。

やがてその笑い声も消えていき、森の草地に白い月の光が降り注ぐばかりとなった。

気がつくと里菜は、ただひとり、魔王が消えた後のからっぽの草地を見つめていた。魔王は空中に浮かんでいたのに、霜枯れた草の上には、なぜか、丸く踏みつけたような跡が残っていた。

＊

次に、里菜がはっと気がついた時、そこはあの、夢の中の草地ではなかった。同じく森の中の空き地ではあったが、ゆうべ眠ったままの野営地だった。

里菜は、何事もなかったように、マントにくるまって、小さくなった焚火の側に横になっているのだった。

隣にはすこし離れてアルファードの大きな背中が、焚火の反対側にはローイの姿があって、ローイの横で寝ていたはずのキャテルニーカが、いつのまにか里菜のかたわらで寝ていた。上掛けの下から伸びたキャテルニーカの小さな手が、里菜のマントの端を掴んでいる。

「ニーカ。ありがとう。あなたが、さっき、あたしを呼んでくれたのね……」

里菜が小声で呟いて、マントの中から手を伸ばし、キャテルニーカの金色の巻き毛をそっと撫でると、眠っていると思ったキャテルニーカが、ふっと目を開けて、うっすらと微笑み、頷いた。

そして、いつかと同じように、ひっそりと、こう言った。

「魔王は、かわいそうね……」

そう言ったあとは、また、いつかと同じように、すぐに目を閉じて眠ってしまった。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第八場（1）

砂埃を巻き上げて、広い大通りをひっきりなしに馬車が通り過ぎる。その、蹄の音、わだちの音をかき消すように、人々のざわめきが高く響く。

目の色も髪の色も様々な人々が、思い思いの衣装に身をつつんでせわしげに行き交う通りの端で、たった今脇道から出てきたばかりの里菜が、呆然と立ち尽くしていた。

その肩を後ろからポンと叩いて、ローイが囁く。

「おい、リーナちゃん。プルメールでも言ったと思うけど、そうやって口開けて見とれるのはよせよ。お上りさん丸出しじゃねえか。スリに狙われるぜ」

「だ、だって、だって、ローイ……。馬車が、こんなにたくさん……。それに、馬に乗った人もいる！」

「やだなあ、あたりまえじゃん。ここはイルベッザ、国の都だぜ。前から聞こうと思ってたんだけど、あんたのいたトーキョーって都は、よっぽどさびれてたわけ？」

「そ、そういうわけじゃないんだけど……。とにかく、普通、街の中で、馬とか馬車とかは見ないの」

「じゃあ、みんな歩きなのか？　まあ、とにかく、ぼんやりすんなよ。俺とアルファードが控えてなかったら、あんた、とっくに拐わかされて売り飛ばされてるぜ。でなきゃ、身ぐるみ剥がれてるか。まったく、これで軍隊入ろうってんだからなあ」

ローイは呆れて肩をすくめた。

どんなに呆れられても、里菜はキョロキョロせずにはいられない。なにしろ、初めて見る異世界の大都市なのだ。

里菜たちが、この国の首都である南の都イルベッザについたのは、昨日の夕方、そろそろ日も暮れるというころだった。エレオドラ街道に続く東の門から市内に入った四人は、人通りも絶えかけた通り

を急ぎ、一番最初に目についた宿に飛び込んだ。今のイルベッザでは、日が暮れてから街を歩くのは非常に危険なのだ。

東の門は利用が少ないから、そこに続く通りも、古い通りではあるが、今はあまり賑っていない。それで、里菜たちが泊まった宿は、由緒あるエレオドラ街道の延長線上にありながらも、どちらかと言うと今いる大通りの裏道りといった立地条件だった。

一夜明けて宿を出た一行は、今、初めて昼間のイルベッザの大通りの賑いに出会ったのだ。

今やこの都も長引く不安に疲弊し、かつての活気と繁栄は損なわれつつあったのだが、それでも、こうして大通りの賑いを見ていると、雑然とした熱気が襲い掛かってくるようで、里菜は圧倒されて立ち尽くしていたのである。

そんな里菜を、アルファードが苦笑しながら促した。

「さあ、行くぞ。見物は歩きながらでもできる」

アルファードは里菜の背中に軽く手を回して、後ろから押すように歩きだした。

彼は普段、里菜と歩く時は少し離れて歩くのだが、この時ばかりは、里菜があんまりぼんやりしているので、迷子になったり、横あいからひょっと路地に引き込まれたりしないかと、本気で心配になったのである。

アルファードと里菜の後ろから、ローイがキャテルニーカの手を引いて歩き出す。

都会の喧騒が、たちまち四人を包み込んだ。

南の都、首都イルベッザは、無秩序で雑然とした大都会だった。

同じ大都市でも、興国の英雄ラドジール王によって一代で築きあげられた北の都カザベルが計画的な放射線状の街路を持ち、きちんと区画整理されているのに対し、気候のよい海辺の土地に古くから自然発生的に発達してきたイルベッザの市街では、きちんとしてい

るのは、南北に走る、この中央の大通りだけで、あとの道路は縦横無尽、無数の細い路地が好き勝手に曲がりくねり、入り組んでいる。

市街地を囲む防壁も、最初からそれを計画に入れて街を建設したというものではなく、すでに街があったところに、ある時の王がいきあたりばったりに強引に巡らせてしまった防壁であり、四方八方にアメーバのように広がりつつあった当時の街の形に合せて、うねうねと曲がっている。

しかも今では、森が迫っている東と海が迫っている西、大河シエロ川に接している南はともかく、街道沿いの平坦な北側には防壁を越えてさらに街が広がり、もう、どこまでがイルベッザでどこからが隣町なのかもわからないような状態だ。

もちろん、市門は常に開けっ放し、門衛もいなければ検問もない。ついでに言えば、この無意味な防壁が崩れかけていても誰も修理しないので、防壁にもたれかかるように立ち並んだ小さな貧しい家々は常に瓦礫に埋れる危険にさらされているが、誰もがそんな現実は見て見ぬふりで、平気でそこに住み続けている。

この、いいかげんな楽天性、いきあたりばったりなおおらかさこそが、温暖で穏やかな気候に恵まれたイルベッザの民の市民性なのである。

そんなイルベッザであるから、町並みも、もちろん雑然としている。例えば古都の矜持高いプルメールの街では、古い石造りの家々が整然と立ち並び、新しい建物もほぼ同じ様式でまとめられて落ち着いたたたずまいを見せているのに対し、イルベッザの建物は、古いもの新しいもの、石造りのもの木造のものなどが雑然と混じりあい、その建築様式も、建てた人の気まぐれやその時々の一時的な流行にあわせて、てんでバラバラ、まるで統一感がない。

そんなゴチャゴチャとした町並を、さらにゴチャゴチャにしているのが、北部からの避難民の仮小屋である。

おどろいたことに、彼らは、そのへんの家の壁や塀を勝手に利用して、丸木や廃材をいいかげんに立てた柱の上に板切れやら皮の敷

き物やらひどいときは古マントなどを渡して屋根にしたみすぼらしい差しかけ小屋をつくり、そこに住み着いてしまっているのである。さすがに大通りにはそれはないが、すこし脇道に入ると、そういう差しかけ小屋が著しく通行を妨げていたりして、市民の苦情のもとになっている。

しかし、避難民たちに住居を斡旋してやることもできない＜賢人会議＞は、自らの無為無策を棚に上げて彼らに強く立ち退きを迫るなどということはできず、見てみぬふりで差しかけ小屋を放置しているのが現状である。

だいたい、＜賢人会議＞は、大量の避難民の流入というこの非常事態に対処できるだけの力を、権限という点でも、財力という点でも、持っていないのである。一応は国の中央政府である＜賢人会議＞も、今ではすっかり弱体化し、その実態はほとんどイルベッザの市議会にすぎないのだ。

こんなにも弱体な政府が今だに転覆もせず、百年以上も世界の統一を保ってきたというのがこの世界の不思議なところで、これはこの国の人たちにとってもやはり謎であり、『イルファーラン七不思議』の筆頭に数えられている。この、『七不思議』の内容は、地方や話す人ごとに異なっているのだが、唯一、この筆頭の謎だけは、どの地方のどんな社会階層の人にも、必ず七つのうちに数えられるのである。

そもそも、戦乱の時代に、こんないいかげんな国民性を持つイルベッザ王国がこの世界の覇者となったこと自体が不思議といえば不思議なことなのだが、それは、アルムイード王という傑出した指導者がちょうどいいタイミングで現われ、また、それに魔法使いユーディードという非凡な軍師がついたおかげである。

この、イルゼール出身の魔法使いユーディードの存在が、通常はあまり交流のないイルベッザ地方とエレオドラ地方に、戦乱の時代に共に戦ったものどうしという連帯感を残し、ひとくくりに『南部』と言えるような結び付きをもたらしたのである。

それに、もともと、やはり同じ南部どうし、このふたつの地方の人々は、交流は少なくても気質的に似ているのだ。――つまり、どちらもおおらかで楽天的、かつ、いいかげんでいきあたりばったりであるという点が、共通しているのである。

一方、この国の北部の人々は、里菜から見るとやはりいいかげんだが、それでも、よりルーズで好き勝手な南部の人々と比べると勤勉で几帳面で、概して集団主義的傾向が強い。厳しい自然を生き抜くために、そうならざるを得なかったのだ。

もし、この国を統一したのが北のカザベル王国だったら、この世界のその後の歴史はまったく違ってきただろう。まだ議会制などは生れておらず、強大な王のもと、専制国家のままでいたかもしれないし、そうでなくても、もっと中央集権的な国になり、そのかわりあらゆる組織がもっときちんとしていただろう。

とにかく、この世界では、アルムイード王が世界を統一し、その後、比較的穏やかな無血革命によって王制は廃され、＜賢人会議＞が生れ、そしてその＜賢人会議＞は、長い平和と勝手な国民性の中でどんどん弱体化し、今では統一国家とは名ばかりの、戦乱以前の状態に逆戻りしてしまったわけだ。

それでも今だに＜賢人会議＞が打倒されないのは、それがあまりに弱体で権威がなさすぎるので打倒する必要もないからだと言うものもいるが、要するに、もともと争いを好まないこの国の人々は、長い戦乱の世にすっかり懲りていたのである。形骸化した政府を倒してもういちど戦乱の世に戻るよりも、たいした役にもたたないが邪魔にもならない飾り物の政府を戴いて、あたりさわりなく暮すほうを選んでいるのだ。

この、たよりない＜賢人会議＞が政務に携わっている場所が、都の中心に聳え立つ旧イルベッザ城だ。威風堂々たる石造りの古城で、文化財としては価値のあるものだが、あまり実用的とはいえない、使いにくい建物である。

彼らが今だにこんな遺跡のような建物を庁舎に使っているのは、

単に財政難、用地難のためだ。

今では＜賢人の塔＞と通称されるその古い城は、かつては広大な広場や庭園であった敷地内にありとあらゆる公立施設を無秩序にひしめかせており、軍の事務局や宿舎も、治療院も、すべてそこにある。四人が、都に着きしだい真っ先にそこへ行くつもりで長い旅をしてきた、その目的地なのだ。

けれど今、そこは四人の共通の目的地ではなくなっていた。

ローイはもう、そこへ行く理由を失っていたのである。

そのことはみんな、今朝から知っているのだが、いよいよ別れるところまでは何もないような顔でいようと示し合わせたように、誰もそのことを口に出さずにここまで歩き続けてきた。

第二章＜シルドーリンの宝玉＞　第八場（2）

四人の行く手に、＜賢人の塔＞が見えてきた。近付くにつれてあきらかになる、その威容に――というより、異様な形に――、それまでもキョロキョロしどうしだった里菜は、またまた唖然としていた。

それは、何というか、とにかく異常な形の城だった。

城の下半分は前方の低い建物に遮られて見えないが、そこからにょきにょきと生えている無数の塔は、遠くからでもよく見える。それらの塔は高さも太さもまちまちで、ひとつひとつ好き勝手な形をしており、しかも、それぞれが、奇妙に曲がりくねった空中の渡り廊下で複雑に繋ぎあわされている。これで材質が石でなく、金属か、ガラスやプラスチックのような素材だったなら、城というより、古いＳＦに出てくる謎の巨大機械といった趣だろう。

けれども、この奇妙な空中都市が、金属製でも特殊ガラス製でもなく、すべて重たげな石造りなのがよけい不思議なところで、どうやって石であんな渡り廊下を作って空中を走らせることができるのか、里菜には見当もつかない。見当もつかないが、おそらくは何か特殊な魔法が関わっているのだろうとは思う。実際その通りで、それらは、今では失われてしまった古い時代の魔法技術の粋なのである。

イルベッザ城がこのような異様な姿をしているのは、単に、歴代城主の無計画な性格のためで、別に、この世界の城はみなこういうものだというわけでもなく、個性的な建築家の芸術的感性の現われでもない。高度な魔法技術があるのをいいことに何世代にも渡っていきあたりばったりの無理な増改築を強引に続けてきた結果、こんなことになってしまったのだ。

しかし、それはそれで、なかなかに歴史を感じさせる重厚で威圧的な趣を醸し出してもいると言えなくもない。

だから、実際には、歴代の王に代表されるイルベッザの民の場当り的な気質を象徴しているに過ぎないこの建物も、里菜のような事情を知らないよそ者には、この世界の文明の高度さと＜賢人会議＞の権威の象徴のように見えて、畏怖の念さえ呼び覚ます。

里菜が、我を忘れてその塔の目を吸い寄せられたままアルファードに誘導されて歩いているうちに、四人はいつのまにか城の入り口の跳ね橋の前までやってきていた。

そこで里菜は、ローイの声に、はっと我に帰った。

「じゃあ、俺はここで。あんたらも、せいぜいうまくやれよ。リーナちゃん、元気でな」

「……ローイ！　どうしても、行ってしまうの？　ねえ、今からでも考え直さない？　一緒に軍隊に入りましょうよ、ね？」

思わず縋りつこうとした里菜から、ローイはすっと身をかわした。

「おっと、リーナちゃん、その話はもう済んだはずだろ？　俺は俺の道を行くさ。だからと言って何も別の街に行くわけじゃねえんだ。同じイルベッザにいるんだからさ、まあ、いいじゃねえか、な。お互い落ち着いたら連絡取り合って一緒に飯でも食おうぜ。そうそう、アルファード、あとで、あんたらの連絡先を宿に言付けするの、忘れないでくれよ。俺、どういう話になっても、とにかく今夜は一度、宿に戻るからさ。じゃあな」

そう言って、ローイは、片手を上げて軽い別れの挨拶をしながら、さっときびすを返すと、たちまち人混みの中に紛れていってしまった。

その背の高い後ろ姿を、目を凝らして追い続けようとする里菜の後ろで、アルファードが言った。

「リーナ、行こう。そんなふうに見ていても、ローイは戻ってこない。やつは一度言い出したら、どんなに止めても無駄なんだ」

ただ一人の友達が、親友が、自分の前から去っていくというのに、アルファードの態度はあっさりしていて、一見冷たくさえ見えた。だが、その落ち着いた声の裏に、計りしれぬほど深い喪失感が込め

られているのだろうと、里菜は思った。
里菜には見るなと言ったくせに、アルファードのまなざしもまた、ローイの後ろ姿を求めて、彼が去っていった人混みに注がれていた。きっと、アルファードは、そんな自分に言い聞かせるために、里菜に言葉をかけたのだ。
ローイの行く先は、この近くにあるはずの民間の職業斡旋所のはずである――。

＊

それは、まさに青天の霹靂だった。
今朝、宿の食堂で朝食を食べながら、ローイは突然、宣言したのである。
軍隊に入るのはよした、今日、これから他に仕事を探しに行くつもりだ、と。
彼は、こうも言った。
軍隊なんて最初からあまり気が進まなかったのだが、他にあてもないし、とりあえず入ってみてもいいかと考えてアルファードの提案を承知したのだ。けれど旅の間によくよく考えてみたら、やっぱり自分に軍隊は向かないと気がついた、と。
無論、アルファードと里菜は、ローイを引き止めた。特にアルファードは、食事の後、里菜とキャテルニーカを残してローイをどこかへひっぱって行き、さんざん説得を試みたらしい。
が、アルファードの必死の説得も、ローイの心を変えることはできなかった。
里菜は里菜で、ローイが急にこんなことを言い出したのは自分のせいではないかと考えて胸を痛めていた。
あのプロポーズ以来、ローイは一貫して全く何もなかったように

陽気に振る舞っており、里菜もなるべくそれに調子を合せていた。けれどこの時、里菜は、ローイが想像以上に傷ついていたのではないかと、恐れにも似た思いで考えたのだ。

ローイの説得に失敗したアルファードは、諦めて、自分と里菜とキャテルニーカの宿代を精算しに行った。

ローイは、まだしばらくはこの宿に滞在することになるだろうと言っていた。金はまだ残っているから、当面はこの宿に滞在しながら職を探し、職が見つかったら、そこに住み込むなり近くに部屋を借りるなりして、宿を出るという計画だ。だから、アルファードと里菜が自分たちの連絡先とキャテルニーカの行先をすぐに宿に言付けてくれれば、ローイのほうでも、新しい住みかが決まりしだいアルファードに連絡を寄越すという約束になった。

アルファードが居なくなると、すぐに、里菜は食堂の隅にローイを引っ張っていった。

「ねえ、ローイ。もしかして、あたしのせいなの？　あたしと、そのう、あんなことがあったから……？」

恐る恐る里菜が尋ねると、ローイは、子供にするように里菜の頭を撫でた。里菜の頭はローイの胸のあたりまでしかなかったので、そんなふうにすると本当に大人が子供の頭を撫でているようだった。

ローイは、笑いながらこう言った。

「違う、違う。そりゃあ、考えすぎだ。何もあんたのせいなんかじゃねえよ。さっきも言ったろう？　やっぱり俺にゃあ、軍隊は向かないと思うんだよ。俺、そんなむさくるしい重労働は御免なんだ。何かもっとおもしろおかしい仕事でも探すからさ」

「でも、ローイ……、ローイ……」

どう言っていいかわからなくて、里菜がうつむいて言葉に詰まっていると、ふいにローイが里菜の顎に手を添えて顔を仰向かせ、真顔で里菜の目を覗き込んだ。

思わぬ行動にとまどいながら、とても高いところにあるローイの真面目な顔を見上げて、里菜はなんとなくドギマギして、また赤く

なってしまった。慌ててローイの顔から目をそらすと、今度は、顎先からすっと放れたローイの長い指が、武骨に荒れているものの思いがけず繊細な、綺麗な形をしていることをふいに意識して、またドキッとしてしまい、そんな自分にうろたえた。今は、そんな場合ではないのに――。

ローイが黙って自分と向き合ってくれていて、今なら耳を貸してもらえるだろうこの短いチャンスに、何かローイを引き止めるようなことを言わなければと思うのだが、頭が混乱して、どうしていいかわからない。

今、引き止めなければ。何か、言わなければ――。でも、自分に――ローイの想いに応えてあげられない自分に、ローイを引き止める資格があるのだろうか――。

小さく開きかけた口が言葉を捜しあぐねて、声にならない想いだけが徒に唇を震わせた。

ローイは、顎から放した指先を、今度は、慈しむように里菜の頬に沿って滑らせて、ほんのしばらく、そのままで里菜を見つめ、それからそっと手を離して言った。

「リーナ……。引き止めてくれるんだな。嬉しいよ。でも、ごめんな。俺、やっぱり、他の仕事を探す。なに、いつでも会えるさ、な？　俺は、どこか俺の場所で、あんたの幸運を祈っていてやるから、あんた、頑張れよ」

そしてそのまま、さっさと、キャテルニーカがひとりで待っている元のテーブルに戻ってしまい、里菜が慌てて追い付いたころには、ちょうどアルファードも戻ってきて、話はそれきりになってしまったのだ。

そして、今。

ローイは道を分かち、里菜の前から失われた。

とはいえ、喧嘩別れをしたわけじゃ無し、ただ同じ街で別々の仕

事に就くというだけのことで、ローイが言うとおり、会おうと思えばいつでも会えるはずだ。

それなのに里菜の胸に、どういうわけか、ここでローイを見失ったらもう会えなくなるのではないかという不安な予感が広がっていた。

（ううん、ローイはイルベッザにいるんだもの、これからもいつでも連絡が取れて、そうしたければすぐに会うことも出来るはずよ）

自分にそう言い聞かせて、里菜は、ローイが消えた人混みから、イルベッザ城へと目を移した。

（あの不思議な塔の下で、新しい生活があたしを待ち受けているんだ……）

その時、里菜は気づいた。

旅が終ったのは、昨日、市門をくぐったときではなく、今、この、下ろしっぱなしの跳ね橋を渡った時こそ、自分たちの旅の日々の本当のおしまいなのだと。

――ローイが、行ってしまった。キャテルニーカも、どうなるかわからない。頼みのアルファードとさえ、これからは、今までのように一つ屋根の下で暮すことはできなくなる――。

里菜の心に、感傷と不安が沸き起る。

実を言うと、里菜は、すこし前まで、なんとなくイルベッザでも今までどおりアルファードと暮せるような気がしていた。もちろんアルファードは、最初から軍隊では宿舎に入ること、宿舎が男女別であることを里菜に話していたし、里菜もそれは頭では分かっていたのだが、それにもかかわらず、心のどこかで、里菜はそれを信じていなかった。

イルベッザに辿り着き、新しい生活が現実味を増してきた時、里菜はあらためてその事実に思い当って、愕然とした。なんとなく、アルファードに騙されたような、裏切られていたような気さえした。

だが、もちろん、アルファードが悪いわけではないと、わかってはいるのだ。

（そう、今が本当の、旅の終り。これからは、みんな変わってしまうんだわ）

里菜はアルファードに背中を押されて、キャテルニーカを手を引き、水の枯れた掘に架かる跳ね橋に向かって足を踏み出した。

（――　第二章・完　第三章に続く　――）

第三章〈イルベッザの闇〉　第一場

（――引用――）

『さすらいの唄』　作詞者不詳

夢に浮かぶ　ふるさと
遠い春の日射しの
ぬくもりも消え失せ
ただ残った　この唄

捨て切れない想いも
胸に秘めた涙も
今は唄に託して
今日もひとり　さすらう

旅路の　その果てに
待つ人はなくても

幸薄いこの唄は
夜の街を流れて
明かり灯る窓辺に
いつかたどりつくだろう

＊

統一暦百六十七年、酒場の流行り唄。

曲は、北部の古謡をアレンジしたもの。

魔物の脅威に怯える暗い世相の中、とある場末の酒場で、若い無名の歌うたいによって初めて歌われたこの歌は、当時、酒場にあふれていた北部からの避難民たちを中心に愛唱され、またたくまに口伝えであちこちの酒場に広まり、静かな流行となった。

そのセンチメンタルな流浪の詞が、帰るべき故郷を失って都に流入し、苦しい下層生活を送っているものが多かった避難民たちの漂泊の心情に強く訴えかけ、もの悲しい北部の旋律が、彼らの望郷の念をいっそう掻き立てたであろうことは、想像に難くない。

なお、作詞者と推定される若い歌うたいについてはルディという愛称が伝わるのみで、その本名、経歴など、詳しいことは知られていない。彼は、この年、イルベッザの盛り場に彗星のごとく現われ、半年ほどの短いあいだに、この曲を含む何曲かの歌を残して、再び忽然と夜の街から姿を消したという。

――『イルベッザ風俗史』（イルファーラン国立上級学校教授フェルドリーン著　統一暦二百三年発行）より。

一

真冬のイルベッザに、雪が降る。ちょうど、春先の東京に降るような、湿った大粒のボタン雪である。

うっすらと明るみ始めた、灰色の夜明け前。
ひらひらと舞い落ちる雪は、ほの暗い路地の石畳に触れたと見る間もなく、透き通って消えていく。シャーベット状に溶けかけた雪が、すりガラスのように、まだら模様を描いて石畳を覆う。
北部の人々が憧れを込めて『常春の都』と呼ぶという南の都イルベッザは、現実には常春とまでは行かないにしても、やはり、かなり温暖な気候であるらしい。真冬でも氷はたまにしか張らず、気温は、例えば東京に比べてもだいぶ高いようだ。
ただ、冬場の降水量が多いので、暖かい割りに、雪が降る回数は多い。その雪は、べたべたと水分が多く、めったに積もることはなく、たいていはすぐに消える。みぞれまじりの雨がびしょびしょと降りしきることも多い。そんな気候が、ここでは毎年、冬至過ぎから冬の間中続くのだ。
それで、冬のイルベッザは、たいていいつもぬかるんで、どことなく薄汚れている。
路地裏のぬかるみでふと足を止めた里菜は、灰色の明け空を見上げ、落ちてくる雪のひとひらを掌で受け止めた。
儚い淡雪は、手の中で、すっと薄れて消えていく。
こうしてひとひらを眺めると美しいけれども、都会に降る雪は、やはりなんとなく汚れている。あらゆる産業が魔法で成り立っているこの世界には、『あちら』にあるような、工場とか公害とかいうものは無いのだが、一般家庭で薪を燃やして煙突から煙を出しているから、それで、雪が煤けているのだ。
手の中で、煤けた雪が溶ける時、一瞬、なつかしい暖炉の匂いを嗅いだような気がして、里菜は目を閉じてみた。
イルゼールのあの小さな家で暖かく燃える暖炉を、その前の見慣れた敷き物の上にミュシカと一緒に座っている自分を、想像したかったのだ。
けれど、夢想はすぐに破られた。
「リーナ、何してるんだ。行くぞ」

前を行くアルファードが、いつのまにか立ち止まって遅れてしまった里菜を振り返り、声をかけたのだ。

いつものように夜中の魔物狩りを終えたふたりは、まだ眠っている家々の間の路地を抜けて、急ぎ足で宿舎へ引きあげるところである。

剣を帯びたアルファードの左手には、薄汚い灰色のマントが一枚。今夜の収穫である。これを軍の事務局に持っていくと、その場で報奨金が出る。

イルベッザの役人たちは、イルベッザ市民全般の例にもれず万事ルーズでアバウトだから、その仕事ぶりも極限まで非能率的でいいかげんなのだが、そのかわり、あらゆる手続きが、本当にこれでいいのかと思うほど簡便にできている。報奨金の支払いの手続きなど、まるでスーパーのレジでおつりをもらうみたいに、待つほどもなく終ってしまうのだ。

もっとも、今はまだ事務局は開いていない。あとでアルファードが報告と手続きに行ってくれるだろう。

ふたりが『消した』魔物は、これで何体目になるだろうか。

アルファードと里菜が軍に入ってから、およそ一月が過ぎた。

そのあいだ、ふたりは、月が明るすぎる時期以外はほとんど毎晩のように、魔物を求めて夜のイルベッザをうろつき回った。

魔物退治は、危険できつい、しかも深夜の仕事である。だから普通、この仕事をするものは、自主的にたくさんの休みをとる。普通は、週に三、四日働いて、あとは休むというものが多い。中には、十日に一日くらいしか働かないものもいる。いつ休んでいつ働くかは全くの自由で、ただ、その戦果を自分で事務局のほうに報告すればいいだけだ。いくら休んでいても、基本給はもらえる。

ただし、基本給というのは、ほとんど無きに等しい金額であり、人間的な生活がしたければ、やはり魔物を倒さねばならない。それに、最近、半年の間に一枚も魔物のマントを持ってこなかったグル

ープはクビになるという新しい規則ができた。そうでないと、ただ、屋根と食事にありつくためだけに、働く気もない食い詰めものが宿舎を占領してしまうからだ。今でも、実際、せめて半年間だけでもここで寝泊りさせてもらおうという魂胆で、仕事もせずにただ宿舎に住み着いている宿無しが何人もいる。

そんな中で、このふたりの新人の真面目な働きぶりは、ほとんど異常と言っていいくらいだった。

里菜は、内心では、そんなにムキになったように毎晩働かなくても、と考えていたが、憑かれたように魔物を狩り続けるアルファードに、そう言い出すことはできずにいた。

里菜は、この新しい暮しに、すでに疲れ果てていた。肉体的な疲れよりも、むしろ精神的に参りかけていたのだ。

昼夜の逆転した生活も辛いが、それだけでなく、魔物退治は里菜の心を蝕む。

魔物退治は、本当に気の滅入る仕事だった。

夜行性の獣のように夜ごと暗がりを歩き回って、魔物の気配を探り、探し出した魔物を『消す』。

もちろん毎晩魔物に出くわすわけではなく、ただ一晩中夜の街を彷徨するだけのことも多いが、そういう夜のほうが、里菜にとっては、まだましだ。魔物が『消える』ところを見なくてすむ。

けれど、里菜たちは、他のチームに比べてかなりの高率で、魔物の存在を探り当ててしまう。里菜の短剣に込められた、不思議な力のせいだ。

短剣の柄を飾るシルドライトが魔物の接近に反応して明滅することに里菜とアルファードが気づいたのは、魔物退治を始めてすぐのことだった。おそらく、防御の魔法の一形態なのだろう。この短剣を手に入れた時、アルファードは、それはずっと昔から里菜のために用意されていたものだろうと言っていたが、それを裏付けるように、この不思議な力が働くのは、短剣が里菜の手にある時だけだ。それをかざして、里菜は魔物を探知する。

アルファードが最初に教えてくれた通り、魔物は、小柄な人間の形をした灰色の影のような存在だった。普通は実態があるように見えているが、何かの拍子に、ときおりちらりと後ろの景色が透けてみえたりすることもある。ほとんど音を立てず、声も出さない。むろん言葉もしゃべらない。

そして、これもアルファードが言ったとおり、確かに彼らは、そんなに強くない。いや、他の人間から見れば十分強いのだろうが、里菜に魔法を消された上で、剣と剣とでアルファードと戦えば、まるで赤子の手を捻るように簡単に『消され』てしまう。アルファードの剣に、心臓のあるべきところを貫かれた彼らは、血も流さないし、悲鳴も、うめき声も上げない。ただ、雪のように溶けて、石畳の上にマントだけを残す。アルファードの後ろから、里菜はそれを黙って見守る。

里菜は、今では、魔法を消すのに、それが使われる瞬間をいちいち狙う必要はなくなっていた。ヴェズワルで山賊に襲われた時に試してみた、あの方法――始めから、相手は一切魔法が使えないと決めつけてしまうという方法は、ちゃんと成功していたのだ。里菜は魔物が現われた瞬間にそれを念じて彼らの魔法を封じ、あとはアルファードの後ろで、短剣を抜いて自分の身の安全にだけ気を配りつつ、彼が剣を振るうのを眺めているだけでいいのだ。

けれども里菜は、それが嫌だった。

魔物とアルファードは、たしかに公平な条件で、剣と剣とで戦っている。が、里菜には、自分が魔物を見つけ出し、魔物から武器を取りあげて無力にしておいて、それをアルファードに獲物として投げ与えているようにも思える。魔物を『消す』たびに、里菜は、なんとも後味の悪い思いをする。

アルファードの後ろにぼんやりと立ちつくし、自分はいったい何をしているのだろう、なぜ、何のためにこんなことをしているのだろうと、ふと思ったりする。

一方、アルファードは、そういうふうには全く感じていないらし

い。どういうわけか、アルファードはこの仕事にひどく打ち込んでいる。

それはもちろん、魔物退治は、市民の生活を守る、大切な仕事だろう。多少気分が悪くても、誰かがやらねばならぬ汚れ仕事といえるかもしれない。

そうは思っても、里菜は、どうしても、この仕事に誇りややりがいを感じられない。

里菜の心の奥に、『魔物など、多少消してもどうにもならない』と言った、魔王のあの言葉が、わだかまっているのだ。

自分たちのしていることは、本当に意味のあることなのだろうか。里菜は、その確信が持てずにいる。だいたい、こんなに大勢の人が、もう、長いこと、夜ごとに魔物を消して歩いているのに、魔物が減っているとは思えないではないか。

そのことに気がついているのは、たぶん里菜だけではないだろう。けれど、たぶん、誰ひとり、それを口に出したり認めたりする勇気がないのだろうと、里菜は思う。自分たちにできる唯一の抵抗であるこの仕事を、まったく無駄な、無意味なものだと認めてしまったら、人々はすべての希望を失ってしまうだろうから。

アルファードは里菜の前に立って、迷いのない足取りで路地を抜け、人気のない大通りを歩いていく。青ざめた明け方の街に、足音だけが小さく響く。

里菜は黙ってついていく。夜が明け始めた今も、里菜の心は、真夜中のイルベッザの闇を彷徨っている。

闇の奥から、ふいにローイのやさしい声が、里菜の胸に呼びかける。

『……なあ、リーナちゃん、魔物はアルファードにまかせとけよ。あんたは俺と一緒に託児所やろうよ、な……』

（でも、ローイ。アルファードは、あたしがいないと、この仕事、できないの）

心の中で思わず答えてから、里菜は、忘れようとしていたことを思い出してしまう。

（それに、一緒に託児所をやろうにも、今、あなたがどこにいるのかさえ、わからないじゃないの……。ローイ、どこにいるの？　無事でいるの？）

そう、ローイはいないのだ。跳ね橋の前で別れたあの日から、彼は、里菜とアルファードの前から姿を消し、一切の消息を絶ってしまった。

あの日、入隊と宿舎への入居の手続きを終えたふたりがいったん宿に戻った時には、ローイはまだ戻っていなかった。宿の主人に伝言を頼んで帰ったふたりのもとに、それから何日たっても、ローイからの連絡は入らなかった。

それきり、彼の行方は知れない。

最初の一週間くらいは、里菜たちも新しい生活に慣れるのに忙しく、あわただしい日々を送っていたので、ローイのほうも、きっとまだ新しい落ち着き先が決まらないか、あわただしくて連絡どころではないのだろうと思っていた。

一週間を過ぎると、アルファードも、いくらなんでも連絡が遅い、何か事件にでも巻き込まれたのではないか、と、心配しはじめた。

そこで、いま一度、宿に行ってみると、ローイはとうに引き払った後で、宿の主人は、アルファードの伝言は確かにローイに伝えたと言うが、ローイの行き先など、もちろん知らなかった。

その足で尋ねた例の職業斡旋所でも、ローイの足取りは掴めなかった。

その後もアルファードは、仕事の合間に、それなりに手をつくして彼を探してはいるらしい。

昨日の昼間も、一人でどこかへ彼を探しに出掛けていたようだ。

けれど、里菜に何も言わないところを見ると、やはり手掛かりはなかったのだろう。

アルファードも里菜も、最近ではもう、お互い、あまりローイの

ことを口に出さなくなった。今はただ、心の中で彼の無事を祈るだけだが、無事なのに連絡がないということは故意に行方をくらましたということだから、それはそれで気懸りには違いない。

大都会では、人ひとり行方をくらますなんて、簡単なことだ。しかも、ここはイルベッザ。東京などとは違う。もともと戸籍だの住民票だのがあるわけでもなく、出るも入るもチェックなし、大量の避難民が急速に流入した今となっては、おおよその人口さえ誰にもわからない、いいかげんな国のいいかげんな街なのだ。

里菜は心の中からローイの面影を振り払い、アルファードに続いてあの日と同じ跳ね橋を渡りながら、毎日見ても見慣れない奇妙な塔の群れを仰ぎ見た。

里菜とアルファードは、まだ閉まっている軍の事務局や各種の官庁の前を過ぎ、宿舎が雑然と寄り集まる一角へ向かった。途中、治療院に出勤する早番の治療師ひとりと、仕事を終えて帰ってきた特殊部隊の仲間の一組に会って、無言で挨拶を交わす。

宿舎の前でアルファードと別れた里菜は、足音を忍ばせて自分の部屋に滑り込んだ。

宿舎の部屋は、三段ベッドの六人部屋で、左右の壁に作りつけたベッドの他には壁の厚みを利用した棚がひとり一段あてがわれているだけの、まるで寝台車のような細長いスペースだ。が、同室者それぞれの勤務時間が不規則なこともあって、ここは本当にただ寝るだけの部屋だから、持ち物の少ない生活に慣れた今の里菜にとっては、特に不自由はない。

里菜のベッドは一番上の段だ。梯子を登る前に、里菜は自分のベッドのすぐ下の段を覗き込んで、そこに猫のように丸まっている小さな愛らしい姿を確認し、そっと微笑んだ。

薄暗がりでも輝くような金の巻き毛と、あどけない寝顔。里菜の御守りの宝石、小さな黒い守護天使、キャテルニーカだ。

キャテルニーカは、子細あって＜長老＞ユーリオンの口添えを得

たことも幸いして、希望通り治療師見習として治療院に働き口を得、働きながら学校にも通えることになった。しかも、運よく、里菜と同じ宿舎の、ちょうど二人分空いていた同じ部屋を割り当ててもらえたのだ。

奇妙なことに、軍と治療院は、宿舎を共用しているのである。といっても、それは女子宿舎だけの話なのだが、どうも、宿舎の定員を無駄なく使い切るための便宜上の組みあわせで、そういうことになっているらしい。最近急に特殊部隊の人数が増えたので、これまで正規軍と同じ宿舎にいたのが入りきれなくなり、かといって女性はどうしても新しく宿舎を建てなければ入らないというほど多くはなかったので、それならどこへでも余裕があるところへ入れてしまえということになったのだ。特殊部隊と治療師はどちらも勤務時間が不規則というのも、この組みあわせの理由のひとつだという。

キャテルニーカは、里菜が仕事から戻る時間にはまだ寝ていて、里菜が起きるころにはもう学校に行っている。その後夕方遅くまで働いてくるから、そのころには今度は里菜のほうがまた仕事に出ていて、起きている彼女と顔を合せることは滅多にない。それでも彼女の存在は、里菜にとって、大きな慰めだ。

里菜はしばらく梯子に立ってキャテルニーカの無邪気な寝顔を見つめていた。眠るキャテルニーカを見ていると、今まで歩いてきたあの闇も、さっき『消して』きた魔物も、みんな幻だったように思えて、いつもほっとする。里菜は、そっと手を伸ばして、キャテルニーカの柔らかな髪に触れてみた。そうすると、あの旅の日々に彼女がいつも地面に頬を寄せて聞いていた『地面の声』が、里菜にも微かに聞こえるような気がして、不思議と心が安らぐのだった。

里菜はひっそりと自分のベッドに潜り込んで、うっかりすると目の裏に浮かんでくるさっきの闇の記憶を追い払うために、なるべく楽しいことを――けれど、村のことを思い出すとかえって辛いから、ここであった楽しいことを――思い出そうとした。

そう、今は疲れているから暗い気分だけれど、ここでの生活も悪

いことばかりじゃなかった――。あたしたちは、あの塔に登って、この国の政を司る〈賢人〉たちと会い、親しく言葉を交わしたし、彼らの長である〈長老〉ユーリオンとは、その後、一緒に食事までした。〈長老〉は、ちっとも偉そうにしない――というより、本当にたいして偉くもなさそうな――気さくな人で、その夜は、とても楽しかった。それに、同じ年頃の友達もできた……。

狭いベッドの中で、里菜は、記憶を手繰った。

第三章＜イルベッザの闇＞　第二場（1）

あの日、跳ね橋を渡った里菜とアルファードは、通りすがりの学生らしき青年に道を尋いて軍の事務局にたどりついた。城の敷地は結構広くて、あらゆる国立施設と、その職員の宿舎や食堂などが立ち並び、ちょっとした街になっている。いわば官庁街なのだが、その言葉から想像するような整然としたところではなく、城の外の街と同様、どうにもこうにも無秩序でごちゃごちゃしたところだ。

手続きは、ほんとうにこれでいいのかと思うほど簡単だった。後で知ったところによると、いくらいいかげんなイルベッザとはいえ、最近、特殊部隊の入隊手続きが特にずさんになったことは有名で、魔物が志願してきても入隊させてしまうだろうと言われているそうだ。

「あー、出身地と名前、年令。言っとくが、十六才未満は入れないよ」と、里菜を一瞥しながらぼそりと言う初老の事務官に、アルファードが短く答える。

「イルゼールのアルファード、二十二。同じくリーナ、十七」

「リーナ？　エレオドリーナでもファルリーナでもなくて、ただのリーナかね？」

「はい」

「……まったく、近頃の若い者の名前ときたら、いいかげんで困る。で、家族は、あるかね？　つまり、万一あんたらが死んだ時、連絡しなきゃならないところは。そうそう、仕事で死んだら、見舞金が出るからね。まあ、ほんの気持ち程度だけどね。その見舞金を受け取る人は？」

「ふたりとも家族はいませんが、万一の時はイルゼール村の世話役に連絡と見舞金の支給をお願いします」

「ほうほう、なるほどね。家族がないなら、結構。私はね――これはもちろん越権行為なんだが――、志願者に家族がいる時は、いつ

も、なるべく入隊をやめるようにと忠告するんだよ。個人的な老婆心でね。で、君たちは、武器や防具の貸与を希望するかね？」
「いいえ」
「仕事はこのふたりで？　なんなら、他にもチームを組む相手を紹介するが」
「結構です」
「宿舎への入居は？」
「希望します」
「じゃあ、あとで宿舎の場所を教えるから、それぞれ、この書類を持って行って、宿舎の管理人に渡しなさい。それから、仕事のやり方と報酬の仕組み、各種の規則だが……」
　こうして、ひととおり簡単な説明を受けたら、それで終りである。
　が、その後、事務官は、しばらく考えて付け加えた。
「ところで、そっちのあんた……、アルファードって言ったな。イルゼールのアルファードという名には聞き覚えがあるような気がするんだが……。もしかして、あんた、前回の武術大会のチャンピオンの、あの＜ドラゴン退治のアルファード＞じゃないのかね？」
　アルファードが、そうだと答えると、事務官は突然慌て出し、『ちょっとそこで待つように』と言い置いて、どこかへ飛び出していってしまった。アルファードと里菜は、しかたなく、外で待たせていたキャテルニーカも連れてきて面接室で座って待っていたが、そのうち事務官が息を切らせて戻ってきたかと思うと、得意満面の手柄顔で言った。
「ちょっと一緒に来てくれないか。＜賢人＞ファルシーン様が、お会いになりたいと言っている。……なんだね、その子供は？　えっ、孤児？　まあ、いい。とりあえず、一緒に連れておいで。働き口を探してる？　それじゃ、運がよければ、その子のこともファルシーン様がうまく取り計らって下さるかもしれんよ」
　こうして、里菜たちは、わけもわからぬままに事務官に連れられて、城の正面広場を横切り、門番もいなければ受付もない開けっ放

しの通用門のようなところから奇妙な城に入っていくはめになったのだ。

薄暗くひんやりとした長い廊下を、勝手知ったる様子で、事務官はすたすたと進んでいく。

天井を見あげると、ところどころに奇妙な光の玉が浮かんでいる。キャテルニーカの出した光球ほど明るくも大きくもなく、あれより温かみのある色あいだ。さすが＜賢人の塔＞、村では見たこともない高度な魔法である。

それにしても、いったい何が起こったのか、里菜は呆然とするばかりだ。

この＜賢人の塔＞というのは、日本で言えば国会議事堂、アメリカで言えばホワイトハウスか何かにあたるはずの建物ではないだろうか。それを、こんなふうに、いきなりずかずかと入り込んでいいものだろうか。いくらなんでも気軽すぎ、開けっ広げすぎるのではないだろうか。

曲がりくねった廊下を、あちらに折れ、こちらに折れして歩き回ったあげく、事務官がノックをして開けたのは、ごく簡素な小部屋のドアだった。長いらせん階段を登ったところだから、あの奇妙な塔のひとつに位置する部屋なのだろう。

中にいたのは、襟ぐりに金の模様の入った長い純白のローブに身を包んだ、三十代半ばと思われる赤毛の女性だ。何もかも見通すようなまなざしと意志の強そうな口元を持つ知的な美人で、きりりと姿勢を正したその姿は、いかにも行動力と活力を感じさせ、ちょっとただものではなさそうな威厳がある。

背丈は普通だが、女性にしては骨太の、しっかりした体格で、こちらへやってくる足取りのきびきびした無駄のなさから、アルファードは彼女を軍人上りだろうと踏んだ。

「ファルシーン様、お待たせしました。イルゼールのアルファードと、一緒に入隊したイルゼールのリーナ、それからこの子供は、途中で拾ってきた孤児で、働き口を探しているそうです」

相変わらず得意げに事務官が言うと、その女性――＜賢人＞ファルシーンは、気さくな笑顔で答えた。

「ありがとう、グード。ずっとまえに頼んだこと、ちゃんと覚えててくれてうれしいわ。そのうち何か御礼をするわね」

軽く礼をして出ていった事務官の嬉しそうな顔を見て、里菜は、このふたりの立場からして彼はこれで昇進でも約束されたのかと想像したのだが、後で知ったところによると、ファルシーンの御礼というのは手作りの焼き菓子だったそうだ。後で里菜たちとも親しくなったこの事務官は、この後何か月も、『ファルシーン様のお菓子がとてもおいしくて孫たちが大喜びした』と、会う人ごとに嬉しそうに自慢し続けたらしい。

ファルシーンは、三人の客人に、にこやかに椅子を勧めながら、自分も向かいの椅子に座って言った。

「いきなり呼び出してごめんなさいね。私は＜賢人＞ファルシーン。シーンと呼んでくれていいわ。私は軍務を担当しているから、これからはあなたたちの大親分ってことになるのね。あ、でも、堅くなることはないのよ。今日は個人的なお客として、あなたたちに来てもらったの。アルファード、あなたが軍に入ってくれてうれしいわ。実はね、ずっと前からあなたにどうしても会いたいって言ってる人がいて、もしかしたらあなたが軍に志願してくるかもしれないから網張っといてくれって頼まれてたのよ。もちろん、私も会いたかったしね。使いをやったから、たぶん、もうすぐ来るわ。楽にして待っててね。今、お茶、いれるから」

「はあ……。どうも……」

いきなり嬉しそうにまくしたてられて、完全に圧倒されたアルファードは、ぼそりと答えた。

別にファルシーンが＜賢人＞だから緊張していたわけではなく、彼は実は、子供も苦手だが女性も全般に苦手で、特に、こういう、見るからに頭がよさそうで行動力がありそうな、はきはき、きびきびした女性は、変に女っぽく色気の過剰な女性や、やたら勝ち気な、

いわゆるじゃじゃ馬タイプの女性と並んで、最も苦手とするタイプなのだ。要するに、たぶん、自分が押され気味になりそうな女性は敬遠したくなるという情けない心理なのだろうと、自分でも薄々わかってはいるのだが、わかっていても苦手なものは苦手なのだからしかたがない。

が、運がよいことに、アルファードは、この、苦手なタイプの女性と、これ以上差し向いで話をせずに済んだ。

ファルシーンがお茶を持って戻ってくるより早く、あわただしいノックとともにドアが開いて、ファルシーンと同じ、時代がかった白いローブを着た男性が入ってきたのだ。

「シーン！　アルファード君だって？　本当かい！　あ、いや、これはこれは、アルファード君、失礼。おや、なんだか、かわいらしいお嬢さんたちも一緒じゃないか。ああ、いや、立たなくていい、そのままで」

そういいながら、白服の男は、勝手に向かいの椅子に腰を降ろした。

年の頃は、やはり三十半ばというところ、海のような深い青色の瞳、首の後ろでゆるく束ねたつややかな黒髪、色の白い知的で端正な面だちの、やや小柄で華奢な感じの男性である。

華奢ではあるが貧弱な感じはなく、何か、身体つきを越えたところで大きさを感じさせる、これまた、ただものではなさそうな人物だ。ずいぶんとそこつな登場をしたにも関わらず、どういうわけか、動作の端々まで品位と落ち着きが漂っているように見える。品のある人というのは何をしていても上品なのだと、里菜はちょっと見とれてしまった。三十半ばというと里菜から見れば完全に『おじさん』だが、このおじさんは、ちょっとかっこいいかもしれない――。

そこへちょうど、部屋の奥からファルシーンが、五人分のお茶を盆に載せて出てきた。

この国では、＜賢人＞ともあろう人物が、平気で自分でお茶を出すものらしいと、里菜は感心し、それから、いや、もしかすると、

それはやっぱり普通のことではなく、この人だけが特別気さくでマメで軽々しい、型破りな人なのかもしれないと思い直した。が、この国ではどんなに偉い人でも男女を問わず平気で自分でお茶をいれるというほうが真相だと、後になってわかる。格式ばらない人たちなのだ。

「リオン、アルファードは今日から私の部下なのよ。うらやましいでしょう！　こちらの娘さんはリーナ、特殊部隊でアルファードとチームを組むのよ。で、こっちの小さいお嬢さんは孤児なんですって。ここで働き口を探しているそうよ。後で話を聞いて、うまく取り計らってあげてくれない？　……アルファード、リーナ、こちら、＜長老＞ユーリオンよ」

　里菜は、それこそのけ反った。これが――この、確かに品はあるが貫禄には欠ける、まだまだ若い男の人が、＜長老＞だとは。里菜がばくぜんと想像していた＜長老＞――いかにも老賢人然とした白髪白髭の、知恵の固まりのような超俗の老人――とは、えらい違いである。これなら、あの、不運なゼルクィールのほうが、よっぽどそれらしい。

　アルファードも、目の前にいるのが＜長老＞だというのには少々驚いたようだが、長老が意外と若いことは知っていたから、すぐに気を取り直して、とりあえず、座ったまま軽く礼をした。

「長老様……」

　とたんに＜長老＞は、顔をしかめて手を振った。

「ああ、アルファード君、＜長老＞はやめてくれたまえ。何だか自分が急に年寄りになったような気がする。リオンでいい、リオンで。『様』も、付けなくていいからね。リーナ君、君もだよ。若い綺麗な娘さんたちには、特に絶対、私のことを＜長老＞とは呼ばないで欲しいものだ。

　まあ、＜長老＞というのは、単なる役職名だからね。別に年寄りということじゃない。言っておくが、私はまだ三十五だ。＜賢人＞の中でも、このファルシーンとならんで最年少なんだ。

だから＜長老＞を押し付けられたのさ。＜長老＞は雑用が多くて、元気な若い者でないと勤まらないとか言われてね。先代までは、その名の通り、たいてい一番年長のものがやっていたのだが……。これはみんなの陰謀なんだ！　おかげで私は、自分の研究に割く時間がまったくない……。私は何と不運なのだろう。そう思わんかね」

「はあ……」

アルファードも里菜も、呆れて返答に詰まった。

「ところでアルファード君。私はずっと君に会いたくてね。実は私は、本業は神話学と民俗学なんだ。それで、以前、まだ、ただのかけだしの学者だったころ、二度ほど君の村に古老の昔話の採訪に行ってね。ああ、つまり、君のおじいさんとか、女神の司祭のおばあさんなんかの話を聞きにね。

アルファード君、君の村は、たぶん君が思ってる以上にすばらしいところなんだよ。神話、伝説の宝庫で、都ではもうほとんど忘れられている我々の古い信仰が、そのままで残っている。我々の心の故郷とでもいうべきだろうね。

君のおじいさんは気難しい人だという評判だったが、どういうわけか私のことはとても気に入ってくれて、いろいろ話をしてくれたよ。古い物語を、実によく知っていた。最初に行った時は、まだ君がこの世界に来る前だったが、二度目の時に君のことを聞いて、ぜひ会わせて欲しいと頼んだんだ。だが、おじいさんは、君が難しい年頃で、魔法が使えないことに悩んでいるからと言って会わせてくれなかった。君のことを、とても気遣っておられたんだよ。あの時、君は、どこかへお使いにやられていたんじゃないか？」

ユーリオンの言葉に、アルファードは、はた、と、思い当った。

そういえば、たしかに、彼がまだ少年だったころ、都の若い学者が村にやってきたことがある。そして、たしかにその日、アルファードは隣り村に使いにやられていたのだ。

出掛けに遠くからちらりと見かけた、その学者の端正な白い顔と黒い髪、ほっそりした品のいい姿は、言われてみればたしかに、今、

目の前にいるこの男と重なる。

（そうか、あの学者が、＜長老＞になっていたのか）と、アルファードは当時を思い出した。

その頃、彼は、まだ二十代半ばの青年学者だったが、アルファードが村に現われるしばらく前にも、当時の世話役の家で一週間ほど滞在していったことがあったそうだ。村の若者たちは誰もまともに相手にしない年寄りのたわごとを、都の年若いエリート学者が遠路はるばる、わざわざ聞きに来たというので、みんな随分驚いたらしい。

その彼が再びやってくると分かった時から、村中が彼の話題で持ち切りだった。

ただでさえ村に客人があるのはめずらしいことだが、その上、彼は、以前に村に滞在した時、村では見慣れない黒髪に青い目の繊細な美貌と、洗練された知的な雰囲気、それに気さくな人当りのよさも加わって、村の娘たちの人気を独占していったのだ。村の若者たちはだいたいみんな武骨者で、日焼けしたごつい男ばかりだったから、華奢で知的な白皙の美青年は、村の娘たちにとって、いかにも都会的で、溜息が出るほど上品で、まるで本物の王子様のように見えたらしい。

あの、あこがれの都会の貴公子が再びやってくるというので、村中の若い娘たちは、そろって色めき立っていた。アルファードの年代の少年たちにも、その姉たちや近所の年上の娘たちの浮き足立った気分が伝染し、みんながなんとなくわくわくして、まるでお祭りを待つように彼の訪れを待ちのぞんでいたのを、アルファードも覚えている。

村では今でも、あの時の若い黒髪の学者のことは、今では母となった当時の乙女たちが思い出を共有する、若き日のあこがれの王子様として、半ば伝説になっている。

その彼が後に随分偉くなったらしいということは村でも噂になっていたし、＜長老＞が神話学者上りだというのもみんな知っていた

が、まさか、あの彼が＜長老＞になったのだとは、誰も思っていなかったのだ。

第三章＜イルベッザの闇＞　第二場（2）

ユーリオンは、黙っているアルファードにかまわず、興奮気味に話を続けた。

「そして、おじいさんは、君のことを本に書いたりおおっぴらに発表したりしないようにと私に頼んだ。私は約束を守ったさ。ああ、でも、それ以来、私は何としても、君と会っていろいろ話が聞きたくてね。何しろユーディード以来百数十年ぶりに、この世界に生きた本物の＜マレビト＞が存在している、しかも、魔法が使えないという、前代未聞の＜マレビト＜だ！

ああ、いや、つい興奮してしまって、許してくれたまえ。君のことを、こんなふうに珍しい動物みたいに言っては失礼だね。だが、どうも、その、学者の悪い癖で。

それに私は、学問的な興味だけでなく、君という人間に興味があったんだ。別の世界から来た人間。記憶を失った人間。魔法が使えない人間。その君が、何を思い、何を感じて生きているのか。

だから、一昨年の武術大会に、イルゼールの出身で魔法が使えない若者が出てきたと聞いた時は、私は狂喜したね。これで君と話ができるだろうと。君は本当に立派だ。魔法が使えないなら身体を鍛えて、剣のチャンピオンになる。実に素晴らしい、不屈の精神じゃないか。武術大会の表彰式の時、私はその後の祝賀会で君を捕まえてぜひとも個人的に近付きになろうと、とても楽しみにしていたんだ。

それなのに、君、ひどいじゃないか、主役のくせに、さっさと抜け出してしまうとは。私だけじゃない。みんな、がっかりしていたんだよ。君、あれは失礼だ」

「はあ……。済みません、仲間と約束があったもので……」

「いやいや、過ぎたことをぼやいてもしかたがないね。今度、ぜひともいろいろ話を聞かせてくれたまえ。あいにくと今日はこれから、

会議があって、あまりゆっくりはできないんだ。今度一緒に飲みに行こう。よかったらそちらのお嬢さんも一緒に」と、それまでほとんどアルファードしか眼中になかった彼が、ここでやっと、里菜に目を留めた。

「ええと、リーナ君だっけ？　アルファード君の相棒として軍で働いてくれるんだったけね。そういえば君たちは、顔付きや肌の色みが似ているようだが、親戚か兄妹かね？」

「いえ、違います」

「じゃあ、同郷の友達どうしか」

「はあ、まあ……」

「まあって、ああ、そうか、年齢はちょっと離れているようだが――いや、リーナ君も軍に入るということは十六は越えているわけだし、アルファード君も、たしか、武術大会の時に、落ち着いて見えるが実はまだ二十才そこそこで史上最年少のチャンピオンだって言われて話題になってたんだから、見かけほど年は離れてないのかな――、もしかして、君たち、恋人どうしかい？」

「いっ、いえ、そういうわけでは……」

「はあ、はあ、なるほど、そーゆー関係ね。若い人はいいね。まあ、がんばりたまえ」

何が『そーゆー』なのか分からないが、ユーリオンは、ひとりで納得してしまった。

「で、こんな、小さくて可愛らしい華奢な娘さんが軍隊に入るとは、やっぱり火の玉が得意なのかね。ああいう技術は、体格とはあまり関係ないからねえ」

「いいえ、リオン様」と、里菜は小さい声で答えた。

「あたし、そういう魔法は全く使えないんです。火の玉だけじゃなくて、普通の魔法は何にも。ただ、相手の使う魔法を何でも消せるんです」

「えっ！」と叫んだのは、ユーリオンとファルシーンと同時だった。

ユーリオンは、乗り出すように尋ねた。

「じゃあ、君、一種の魔法使いじゃないかね！　普通の魔法は使えないって、アルファード君みたいに、火や水を出したりも出来ないわけか？」
「ええ……」
　里菜が気圧されてうつむいていると、横からアルファードが口を添えた。
「リオン様。リーナも、＜マレビト＞です。この秋にこの世界へ来たばかりで、もといた世界のことを覚えています」
「何ということだ！　本当かね、リーナ君。それはすごい！　なるほど、確か、あの村には、そういう黒い髪や目の人はいなかったはずだね。いや、アルファード君の髪や目は、そういえば黒に近いが、そうか、ふたりとも＜マレビト＞か……。
　これはぜひ、君からもいろいろと話を聞かなくては。もとの世界のことを、ぜひ教えてもらいたい。これは、絶対、今度、三人で一緒に飲みに行かなくてはならないぞ。ああ、もちろん、おごるよ。君のような若い娘さんが一人ででも入れるような上品な店を知ってるからね。ここの構内にあるから、帰りが暗くなっても安全だ。構内に魔物が出たことは、ないからね。
　ああ、しかし、若い娘さんといっても、君はこれから魔物退治をしようという人だった。どっちみち、私などと違って、魔物など怖くないんだろうね」
　そこへファルシーンが口を挟んだ。
「リオン、ずるいわ！　私だって、このふたりの話を聞きたいわよ。勝手に決めないで、私も混ぜてくれなくちゃ」
「ああ、シーン、君にも、今回の御礼をしなければならないしね。しかし、私たちふたりともが空いている夜というのは、当分ないだろう。実は、私はしあさっての晩が空いているんだが、その日に、私が先に彼らを誘っても怒らないでくれるかい？　君にはいつか必ず食事をごちそうするし、都合がいい日があれば、あらためて四人で食事をしよう」

「はぁー、私はいつになるか分からないわね。まあ、しかたがないわ。アルファードたちはこれからずっと軍の宿舎にいるんだから、そのうち話もできるわよね」
「と、いうわけで、アルファード君、リーナ君、しあさっての夕食を一緒にどうだい」
「はい。ありがとうございます」
「ああ、楽しみだ！　シーン、今日の会議は、君が議長だったね。私は今日、もう、わくわくしてしまって、会議に身が入らないかもしれない。どうか私に発言を求めないでくれないか。頼むよ」
「何言ってるの、リオン、あなたは＜長老＞よ。あなたが黙っていちゃあ、会議にならないわよ」
「これだから、＜長老＞になんて、なるものじゃないね。さあ、会議の時間だぞ。ああ、そうそう、すっかり忘れていたが、その前に、その小さいお嬢ちゃんのことがあったっけね。いや、実に綺麗な子だねえ。それに、妖精の血のこんなに濃い現れ方は、見たことがない。名前と年は？」
　自分のことが話題になっているのに気づく様子もなく無邪気にきょろきょろしているキャテルニーカにかわって、アルファードが答えた。
「名前はキャテルニーカ、十一才だそうです」
「おお、それはまた立派な名前だ。妖精の女王か。で、どんな仕事が希望だね。本当は、いつかは国中のすべての子供が、初級学校を出るまでは働かなくてすむようにしてあげたいんだが、今はまだ、そうもいかない……。でも、働きながら学校へ行けるよう、計らってあげるからね」
「できれば治療院で働かせてやって欲しいんですが。癒しの魔法が得意で、薬草にも詳しいので。それから、学校は、今まで実は通ったことがないらしいんです。家庭教師についていたのか、読み書きは出来ます」
　アルファードは、キャテルニーカが＜御使い様＞らしいというの

は、どうせ本人も忘れていることだから伏せておくことに決めていたのだ。

「治療院か。それはちょうどいい。あそこはいつでも人手不足だ。本当は十二才からしか雇えないんだが、十一才なら、十二になるまでは見習い期間ということで、なんとか融通を利かせられるはずだよ。まあ、見習い期間中は、給料は、ほとんど出ないけどね。でも宿舎に入れるし、食事もつくから、悪くはないだろう。そうだな、ちょうど、これからの会議でユールと会うから、話をつけてあげよう。ああ、ユールというのは＜賢人＞のひとりだが、治療院の院長を兼務しているんだよ。

じゃあ、シーン、行こうか。アルファード君、リーナ君、夕食の件、楽しみにしてるからね。待ち合わせのことなんかは、あらためて連絡するから。それじゃ、その時に、また」

そう言ってユーリオンが立ち上がろうとするのを、ファルシーンがとどめた。

「ちょっと待ってよ、リオン。あなたがお茶も飲まずにべらべらしゃべるから、お客さんたちもお茶に手をつけてないじゃないの。せっかくいれたんだから、飲んで行ってちょうだい。お嬢ちゃんには、お菓子もあるわよ。会議なんて遅れても大丈夫よ。どうせ時間通りに来るのは、いつも私たちだけなんですもの。それに、今日は私が議長だから、私が行かなきゃ始まらないしね。だいたい、リオン、このまま彼らを帰しちゃっていいの？　彼に会いたがってたのは、あなただけじゃないでしょ。自分たちだけ会って、そのまま帰したなんて知れたら、あとでみんなに恨まれるわよ。あとでみんなが、仕事中の彼らを、それぞれ勝手に呼び出し始めたら、彼らも困るでしょうし」

「それもそうだ。じゃあ、お茶を飲んでもらって、それから会議に連れていこうか？　今日はどうせたいして議題もないし、ちょうどみんな集まっているから、好都合だ」

こうして、またしてもわけがわからないうちに、里菜たちは、ふ

たりの＜賢人＞の後ろから、迷路のような廊下を歩いていくはめになったのである。

会議の場である殺風景な小部屋に集まっていたのは、これまた、里菜が思い描いていた＜賢人＞たちとは、かなりかけはなれた人たちだった。

ユーリオンとファルシーンの他に五人で＜七賢人＞なのだが、そのうち一人は褐色の肌に縮れた金髪を落ちかからせた小柄な美青年で、最年少だと言っていたユーリオンよりも若そうに見える。あんまり若くて、とてもそんな偉い人には見えない。だが、後で知ったところによると、彼は四十才で、三人の子持ちだということだ。しかも、十九才になる彼の一番上の娘はすでに嫁いでいて、まもなく初孫も生れるらしい。妖精の血筋は、男も女も若く見えるのだ。

そしてもう一人は、どうみても、その辺の商店街の肉屋のおじさんという感じの、小太り、赤ら顔、陽気で人の好さそうな中年男性である。隣にいるのは、これまた、その肉屋の奥さんのような、ごく普通の家庭的なおばさん風の中年女性。そしてもうひとり、銀髪に丸顔、水色の目にピンクの頬の、小柄で愛らしく、やさしそうな老婦人。

里菜たちが部屋に入った時、この三人はなごやかに歓談していたのだが、その一角には妙に日常的でほのぼのとした雰囲気が立ちこめていて、ここに子供の一人も混ぜれば、たちまちにして幸せな市井の一家の団欒風景が演出できそうだった。

最後の一人だけが、白い髭と眉毛を長く伸ばしたいかめしい老人という、里菜の考える＜賢人＞にふさわしい人だったので、里菜は何だかほっとした。が、この老人のいかめしい様子は見かけ倒しだということが、この後すぐに分かってしまう。彼は、結構なひょうきんじいさんなのだ。ちなみに、彼の特技は、会議中の居眠りと、都合の悪い時のボケたふりである。

ファルシーンがみんなにアルファードと里菜を紹介すると、揃いの白いローブ姿の＜賢人＞たちは、会議のことなどすっかり忘れて、

わいのわいのと大騒ぎを始めた。威厳もなにもあったものではない。

この時里菜は、自分たちがなぜここに連れて来られたのか、やっと呑み込んだ。要するに彼らはみんな、ただのミーハーなのだ。もしもこの国に、スターのサインという風習があったなら、彼らは我がちにアルファードに色紙を差し出し、親戚知人の分まで、何枚もサインをねだったに違いない。

ユーリオンが言ったとおり、祝賀会でアルファードと話せなかった＜賢人＞たちはみな、ずっと残念がっていたのだ。何しろ、彼らが一番＜賢人＞をやっていてよかったと思うのは、この武術大会の祝賀会の時で、ここでチャンピオンたちと親しく話ができることこそ＜賢人＞の一番の役得だと思われているのである。イルベッザの人々は、だいたいにおいてミーハーだから、＜賢人＞とて例外ではないのだ。

この国では、国民的行事である武術大会の各競技のチャンピオンたちは、それからしばらくは国民的スターとなるが、イルベッザの住民はあきっぽいので、普通はすぐ忘れられてしまう。

ところがアルファードは、魔法が使えないとかドラゴンを退治したという話題性に加えて、『都に残って、その名声を利用して剣術の道場を開くか何かするのだろう』という大方の予想を裏切って、祝賀会さえ途中で抜け出し、あっという間に遠い故郷に帰ってしまった。

それで、彼の名声には、神秘性、希少性という付加価値がついて、都の人々の間で伝説的な英雄として何年も記憶されることになっていたのである。

「アルファード、わしはあんたに、ぜひお礼が言いたかったんじゃ！」と、例の、ただ一人＜賢人＞にふさわしい風貌を備えた老人が、よろよろと進み出て叫んだ。

「わしは、あの時、あんたに大金を賭けて、おかげで大儲けをさせて貰ったよ！　その金で、曾孫に、ずっと前からねだられていた子馬を買ってやって、たいそうよろこばれた。それからも、こづかい

に不自由せんよ。みんなあんたのおかげじゃ。いやはや、今、こうしてあんたに会えるとは、この老いぼれも、生きていた甲斐があったわい！」

ファルシーンがそれを聞きとがめて笑いながら言う。

「あら、＜賢人＞ファドゼール、あなたがあの時、そんなに大儲けをなさったなんて、私たち知りませんでしたわ！　まあ、まあ、私、あなたを逮捕しなくちゃなりませんわ。武術大会での賭けは御法度ですからね」

「おや、シーン、君だってアルファード君に賭けてたじゃないか」

と、ユーリオンがまぜっ返すのを無視して、ファルシーンは続けた。

「それに、だいたい、そんなに儲けたんなら私たちに何か奢って下さるのが筋じゃありませんの？」

「そうですよ、ゼール！　今からでも遅くない。我々全員に食事を奢るべきです」と、他の＜賢人＞たちも口々に騒ぎ出した。

「おお、ひどい連中じゃ、この老いぼれのささやかな老後の蓄えを、そんな、みんなしてたかろうだなんて！　シーン、わしはあんたのことを娘同様に思ってきたのに、あんたが先頭に立って、老い先短いわしを脅して、なけなしのこづかいを巻きあげようというのかね。ああ、嘆かわしい！」

「娘と思って下さるなら、やっぱり何か買ってくださらなきゃ。曾孫さんには子馬を買ってあげたんでしょう？　ねえ、みんな」

「そうだ、そうだ！」

旗色が悪くなってきたファドゼールは、突然、あわれっぽく里菜にすがりついてきた。

「なあ、娘さん、このシラミどもに何とか言ってやっておくれ。みんなで寄ってたかってこの年寄りをいじめるんじゃ」

「はあ……」

「年寄りは、いたわらにゃいかん！　なあ？」

「は、はい、まあ……」

「おお、あんたはやさしい子じゃ！　よし、あんたにだけは、特別

に、何か奢ってあげよう。今度、一緒にお茶でもどうかね」
　そう言うと、老人は、里菜に向かって、茶目っけたっぷりのおおげさなウインクをして見せたので、彼だけはまともな＜賢人＞かと思っていた里菜は、ちょっと目まいがした。
（なんなの、この人たち……。この低次元な会話はなに？　こ、これが、＜賢人会議＞？　この国の将来って、いったい……）
　ミーハーな＜賢人＞たちが、ひとしきりこうしてアルファードのまわりではしゃいだ後に、ファルシーンが、里菜が第二の＜マレビト＞であることを紹介したので、彼らは今度は里菜の回りで大騒ぎを始めた。
　里菜が呆然ともみくちゃになっている間に、ユーリオンは、キャテルニーカを、例の美青年に見える四十才――彼がユールだったらしい――に紹介して、治療院で働かせてもらえるよう、頼んでくれたようだ。やっと騒ぎから解放された里菜のところにキャテルニーカが戻って来たとき、キャテルニーカは、彼からの紹介状を持たされていた。
　ユーリオンがやってきて言った。
「この子のことは、話がついたよ。ちょっと話を聞いたところでは、たしかに薬草には詳しいようだから、治療師見習いということで、給料もいくらか出せるそうだ。夕方、この書き付けを持たせて治療院に連れていって、リドリューリという治療師を訪ねなさい。この子の面倒を見るよう頼んでおくから。
　彼女は、私とはちょっとした知りあいでね、リーナ君と同じくらいの年の女の子なんだが、姐御肌で面倒見がいいし、若いけど治療院じゃ結構な顔だから、頼りになるよ。私が紹介しなくても、新入りはだいたいみんな彼女の世話になるらしい。やっぱり妖精の血筋で、すごく派手な赤毛の、とにかくパッと目立つ子だから、すぐわかるだろう。
　そうそう、住むところだが、君たちは、これから軍の宿舎へ行くんだろう？　この子も一緒に連れていって、リーナ君と同じ宿舎に

入れてもらいなさい。都合よく二人分空いている部屋があれば同じ部屋に入れるかもしれないから、管理人に頼んでごらん」

こうして、さんざん引っ張り回された三人は、うまいことキャテルニーカの勤め口を獲得してイルベッザ城を出た。

第三章＜イルベッザの闇＞　第二場（3）

イルベッザ城を出た三人は、とりあえず宿舎への入居を済ませてしまうことにした。

各種の宿舎は、だいたい構内の一角にごちゃごちゃと寄り集まっている。宿舎街には共同の食堂と浴場があり、軍の使っている男子宿舎と女子宿舎は、そこを挟んで、ほぼ向かい合うように建っている。

この男子宿舎は、急増した特殊部隊の人数に対応するため慌てて作られたもので、安普請の間に合わせの建物だが、特殊部隊専用だ。一方、女性治療師たちと共用の女子宿舎は王政時代の兵舎を改装したものなので、古色蒼然たる、一見重厚な建物である。けれどもオンボロという点ではどっちもどっち、新しくてボロか、古くてボロかの違いだけだ。

とりあえず男女二手に別れて、それぞれの宿舎で書類を提出して部屋を割り当ててもらい、管理人から宿舎の規則や施設の説明を受けた三人は、それからもう一度市街に出てローイの宿への連絡を済ませたあと、治療院を訪れた。

入り口の受付で用件を伝え、待っていた三人の前に現われたのは、炎のように赤い豊かな巻き毛を背中に垂らした、褐色の肌、シルドライトの瞳の、とにかく派手な美少女だった。

この世界でも医療関係者は白衣を着る習慣らしいが、彼女の、ほとんど黒に見える濃い褐色の肌と赤い髪には、その白衣がすばらしく映える。妖精の血筋の常で背は低いが、すらりと足が長くてスタイルは抜群、めりはりのきいた見事なプロポーションだ。

褐色の美少女は、腰に手をあてて豊かな胸を反らし、黙ってじろじろと三人を眺め渡した。小さいくせに、なんだか妙に迫力がある。

その迫力に、里菜はちょっとびびってしまったが、アルファード

も、実は結構たじろいでいたようだ。なるほど、この人に面倒を見てもらえば怖いものなしかもしれないが、逆に、この人に睨まれると治療院にいられなくなりそうな、そういう雰囲気である。

ひとしきり睨みをきかすと、少女はふいに表情を変え、華やかな微笑みを浮かべた。

「そう、この子が新入りね。うん、かわいいじゃないの。えっと、キャテルニーカだったっけ。よろしくね。ねえ、あたしたち、ちょっと似てるんじゃない？　ほら、まるで姉妹みたい！」

そう言って、彼女はキャテルニーカを自分の横に立たせ、里菜とアルファードに同意を求めた。

アルファードが、妖精の血筋はみんな似通って見えると言っていたが、たしかに彼女たちはよく似ていた。ふたりとも、猫のように大きな緑の目をして、色は違うが同じようにふわふわ揺れる巻き毛で、姉妹に見えないこともない。そしてふたりとも、とても綺麗だ。

彼女の前に立つと、里菜は、まるで、自分がすごく平凡で冴えない、魅力のない女の子のような気がして、アルファードがこのすばらしい美少女をどう思っているかと心配になり、こっそり彼を盗み見た。

里菜だって、別に、見てくれが悪いわけではない。自分でも結構かわいいほうだと思うし、人からもよく、そう言ってもらえる。だが、向こうの少女の、派手で個性的な顔立ちや、赤と黒と緑という豪華な配色と比べると、黒髪、黒い目で小造りな里菜の童顔は、いかにも地味でおとなしく、目立たない。

その上、ふたりとも背は低いのに、向こうは迫力すら感じられるほどの見事なプロポーションで、里菜はと言えば、ただただやせっぽちで小さいばかり、まるで子供のようだ。

それなりに清楚で愛らしく、大方の人にそこそこ好感を持たれる容姿ではあるが、いかんせん地味で、これといって人目を引くような美少女というわけではないのだ。

が、盗み見たアルファードには、どうやら、この華やかな美少女に特に心を動かされた様子はないので、里菜は少々ほっとした。

赤毛の美少女は、キャテルニーカの肩に手をかけて微笑みかけた。

「あたし、リドリューリ。リューリって呼んで。キャテルニーカ、今日からあたしがあなたの教育係よ。本当のお姉さんだと思って、分からないことは何でも聞いてね。どんなささいなことでも、遠慮しないでいいのよ。最初は誰だって、何もわからないんだから。そのかわり、一か月たってもまだぼやぼやしてたら、その時はブッとばすわよ！」

里菜はぎょっとして、思わずキャテルニーカをかばいながら言った。

「あの、ね、えっと、リューリ？　この子はまだ小さいから、特別やさしくしてあげてね」

リューリは、里菜をじろりと睨めつけた。

「この子が小さいのは、見りゃわかるわよ。あなた、名前は？」

「リーナ。エレオドリーナとかじゃなくて、ただのリーナよ」

「あ、そ。で、リーナ、あなた、この子の何？」

「何って、別に……。ここへ来る途中で、この子が道に迷ってたから、一緒に連れてきただけだけど……」

「それであなた、一生、この子に責任持つ気があるわけ？」

「えっ？」

「だからね、この子が将来どんな能無しの役立たずに育っても、あなたが責任を持って、この子を一生養ってやるつもり？　それとも、この子が二十になっても三十になっても、この子の後をくっついて歩いて、会う人ごとに『この子にやさしくしてやって下さい』って言って回る？」

「そ、そんな……」

「だったら、甘やかすんじゃないわよ！　本人のためにならないわよ。あなた、あたしを何だと思ってるの？　言われなくたって、この子は十分かわいがってあげるわよ。いいから、心配しないで、あ

たしに任せなさい。あたしがちゃんと、一か月以内に、この子を役に立つ見習いに育てあげて見せるから。いくら子供だからって、働く以上は、役にたってもらわなくちゃ困るのよ」

「は、はい……」

思わず恐縮した里菜に、リューリは、大輪の花が咲いたような笑顔を向けた。

「分かればいいのよ。リーナ、よろしくね。あたしたち、年、同じ位じゃない？　仲良くしましょうね！　あなた、特殊部隊ですって？　今にきっと、治療院の世話になるわよ。あたしの名前、ちゃんと覚えてといてね。第二病棟の火の玉リューリっていったら、ちょっとは名が売れてるんだから。あたしのことを知らないのは、まあ、よほどの新米か、もぐりね。名前を覚えててくれなきゃ、怪我してきても治療してあげないわよ！」

ここで彼女は、くすっと笑ってから、またちょっと挑戦的な顔付きになって、なぜか、それまで一切無視していたアルファードをじろりと睨んだ。

「でも、ほんと、軍の人は怪我が多いんだから、あたしには特に敬意を払っといたほうが身のためよ。そう、あなたに言ってるのよ、でかぶつさん。あたしが女で年下だからとか身体が小さいからとかいってなめてたら、えらい目にあうわよ。どうせ、どんな大男も、大怪我して担ぎこまれりゃ赤ん坊も同然なんだから。お母ちゃん痛いよー、なんて泣いても、痛み止めの魔法をかけてあげないわよ」

どういうわけかアルファードは、一言も口をきかないうちに、彼女から、身に覚えのない反感を持たれてしまったらしい。いきなりわけもなく喧嘩腰ですごまれて、ただでさえ少々たじろいでいたアルファードはすっかり閉口し、口篭りながら後じさった。

「いや、俺は別に君のことを軽んじる気は……。君が治療師でなくとも、ちゃんと相応の敬意は払うつもりだが……」

「あ、そ。なら、いいのよ」と、リューリはあっさり構えを解いてアルファードに笑いかけた。

「これからキャテルニーカに院内の見学をさせるけど、一緒に来る？　あなたもいつか、ここに入院するかもしれないんだから、ついでに見ておけば？」

「い、いや、俺は……。リーナ、君は見せてもらうといい。じゃあ、また後で……」

そう言うと、アルファードは、逃げるようにそそくさと立ち去ってしまった。彼はどうも、この少女が、ファルシーン以上に苦手らしい。

「あら、行っちゃった。ちょっと脅しがききすぎたかしら。まあ、いいわ。リーナ、いらっしゃいよ。時間、あるんでしょ？」

リューリは、キャテルニーカの手を引いて、さっさと歩きだした。

病院というのは、『あちら』の世界でも、往々にして意外と不潔なものだが、ここの治療院もやはり、あまり清潔とは言い難いところだった。消毒薬の匂いの代わりに、何かの薬草の薬くさいような芳香が漂っていて、見学が終るころには、その匂いがすっかり身体にしみついたような気がした。

リューリは本当にここではちょっとした顔らしく、彼女が通るとみんなが声をかける。彼女が自分で言うには、彼女の患者からの人気は抜群で、特に男の患者は老いも若きも一人残らず彼女の熱烈な崇拝者なのだということだが、彼女が通り掛った時の入院患者たちの声援からして、たしかにそれは事実らしい。

彼女の所属する第二病棟というのは『あちら』で言えば外科に当たるらしいが、キャテルニーカもまずそこに配属されるそうだ。病気に比べて怪我には特に魔法が有効だから、癒しの魔法の才能がありそうなものは、まず怪我の治療に携わるのだ。

一方、病気の治療は魔法よりも薬草などが中心だから、怪我の治療に比べて、より、知識の蓄積と豊富な経験がものを言う。それで、内科にあたる第一病棟には、ベテランの治療師が多いらしい。

ひととおりの見学を終えると、そろそろ夕食の時間だった。

短い見学の間にリューリと里菜はすっかり意気投合して、ずけずけと物をいいあうようになっていた。

リューリはもともと、誰とでもすぐに打ち解けるタイプなのだが、里菜のほうは、本来、内気で警戒心が強いタイプだ。けれどもなぜかリューリとはすぐに打ち解けたのは、リューリのほうがざっくばらんで馴々しかったからだろうが、その馴々しさ、押しの強さが裏目に出なかったのは、やはり相性の問題だろう。この、一見、背が低いこと以外には何も共通点のなさそうな二人には、どういうわけか、妙に通じるものがあったのだ。里菜が、最初、彼女に、これまであまり経験のなかった女同士のライバル意識を感じたのも、そのためだったらしい。

それに、里菜は、これまで自分が同年代の女の子とのたあいのない会話にとても飢えていたことにも気がついた。

「ねえ、リーナ、一緒に御飯食べない？　あたし、これから非番だから、食堂に案内してあげる。キャテルニーカも、もちろん一緒にね」というリューリの提案で、三人は宿舎街の共同食堂に向かった。里菜は、アルファードとも一緒に食事がしたかったのだが、食堂で彼の姿を見つけることができても、リューリと一緒では、彼はこちらに寄り付いてこないだろう。

食堂は宿舎街のほぼ中央にあって、いくつもの宿舎の人間が使うかなり大きい建物だ。あまりおいしくはないが、値段はただ同然で量もたっぷりしている。一応は、宿舎に入っている人たちのための食堂なのだが、食事をするのに身分証明がいるわけではないから、安い食堂ということで、城外から一般市民がたくさん紛れ込んで来て食事をしていたりする。イルベッザ城の構内には、誰でも自由に入っていいことになっているのだ。

「ねえ、リーナ、さっきのでかいヤツ、あなたのコレ？」と、セルフサービスの定食を食べながら、リューリが親指を立てて見せた。こういう下品なジェスチャーのいくつかは、この世界でも『あちら』と共通らしい。

里菜は赤くなって口篭った。
「う、ううん、そういうわけじゃないんだけど……」
「へえーえ。でも、好きなんだ？　図星でしょ？」
「う、うん、まあね。でも、ないしょよ」
「やだあ、趣味悪い！」
「えっ？」
「だって、あんな、筋肉だけみたいな男のどこがいいの？　あなた、結構かわいいのに、趣味悪いわよ。筋肉さえついてればそれでいいわけ？」
「そ、そんな。アルファードは、別に筋肉だけなんかじゃ……」
「そう？　どう見ても、ただの筋肉バカに見えるんだけど」
自分の想い人のあんまりな言われように、おとなしい里菜も思わず声を荒げた。
「リューリ！　あなた、何の根拠があってそんなこと言うの！　アルファードのことなんか何も知らないくせに、見かけだけで判断しないでよ。筋肉があるからって、それしかないって決めつけるのは偏見よ！　アルファードはね、とってもやさしいし、頭もすごくいいんだから！」
「へえー。どこがどう、頭いいわけ？」
そう言われて、里菜はうっと言葉に詰まったが、気を取り直して言い返した。
「えっと、えっと……、そう、アルファードは字が書けるのよ！」
里菜は、プルメールでアルファードがローイの兄宛ての手紙を書くところを見て驚いたのだ。それまで里菜は、イルゼールで誰かが字を読んだり書いたりするところを見たことがなかったし、本とか紙とかを見たこともなかった。後に里菜は、それはただ、村の生活に読み書きが特に必要なく、本や紙が高価な貴重品だから貧しい羊飼いには買えなかっただけだと知るのだが、村にいたころは、この世界の庶民は読み書きができないのだと信じ込んでいたのである。
それで、あの時初めてアルファードが字を書くところを見た里菜

は、感心して叫んだ。
「アルファード、字が書けるのね！」
アルファードは額に手を当てて溜息をつき、こう答えた。
「……リーナ。俺は、そんなに無学な男だと思われていたのか？こう見えても俺は、学校では秀才だったんだ。村に来たのが十才位の時だから入学は人より遅かったが、卒業は同い年の子と同時だった。無論、字くらい書けるさ」
ところが、里菜の返事を聞いたリューリは、感心するどころか、バンバンとテーブルを叩いて、お皿に顔を突っ込みかねない勢いで爆笑した。
「やだあ、あたりまえじゃない！　字くらい、誰だって書けるわよ。あなた、何考えてるの？　もしかして、あなた、学校さぼってて、読み書きできないの？　まあ、あたしも学校は結構さぼったし、落第もしたけど、さすがに読み書きは出来るわよ」
この国でも北部の田舎の方などにいくと学校に通うゆとりのない貧しい子供がいくらもいるのだが、イルベッザ近郊育ちのリューリは、そんな現実をろくに知らないのだ。もちろん、里菜も知らない。
「あ、あたしだって、字くらい読めるけど……」と、里菜は口篭った。
これもアルファードが手紙を書いていたとき分かったことなのだが、里菜は、どういうわけか、この世界の、みみずののたくったような文字が理解できた。だが、それはどうやら、文字が読めるというより、文章全体の意味がなんとなく解るだけのようだ。そして、試してみてわかったが、字を書くことはできなかった。
里菜は、自分に字が書けないのがバレるまえに話題を変えることにして、まだ笑っているリューリを何とかへこましてやろうと、自慢そうに付け足した。
「アルファードは、学校じゃ秀才だったのよ」
ところがリューリは、まるで感心してくれない。

「へえー、そう、田舎の村の初級学校でね。でも、田舎の学校なんて、ろくに授業もしないんじゃないの。何しろ、冬しか開かないんだから。そこいくと、あたしの好きな人なんか、そこらの人とは頭の出来が全然違うのよ。上級学校を主席で卒業して、国立研究所の主任研究員を務めて、上級学校の学長もやったのよ！」
「えっ、学長？　だって、まだ若いんでしょ？　すごいじゃない！」
「でしょ？　あなたの筋肉バカなんかとは比べ物にならないわよ。何しろ、＜賢人＞で、＜長老＞よ！　この国で一番偉いのよ！」
「うそ！　＜長老＞って、まさか、ユーリオン様のこと？」
「そ！　もちろん知ってるわよね。あなたたち、彼の紹介でこの子を連れてきたんだものね。会ったんでしょ？」
「う、うん」
「で、どう？」
「どうって？」
「だから、彼、すてきじゃない？」
「う、うん、ちょっとね」
「ちょっとじゃないでしょ！　あなた、どこに目ェつけてんの？　どこが『ちょっと』なのよ！　本当に趣味悪いんだから！」
「あ、す、すごくすてきだったわ。そう、とても知的な感じで……。でも、でも……、ちょっとキザっぽいし……、それに、おじさんじゃない？」
「おじさんじゃないわよ！　まだ三十五だし、それに独身なのよ。だけどあなた、彼にちょっかい出しちゃだめよ。リオン様はあたしのもの……。まあ、シーン様だけはしかたないけど、他の女には渡さないわよ。あたしはリオン様の親衛隊長なんだから。あたしにことわりなくリオン様に近付いたら、ただじゃすまないわよ」
「だいじょうぶよ、あたし、おじさんにちょっかい出す趣味ないもん」
「おじさんじゃないってば！」
「えー、だって、三十五でしょ。三十五のどこがおじさんじゃない

の？　あなた、十七でしょ。年が倍よ！」
「いいじゃない、愛に年令なんて関係ないわ！　だいたい、リーナ、あなた、なんでそんなに年にこだわるの？」
「だって……。親子でもおかしくないくらいじゃない」
「そういえば、あたしの母親、三十六ね。まあ、いいじゃない。とにかくまだ独身なんだから。ま、あんなボーヤに熱上げてる人には、リオン様の大人の魅力が分からないのも無理ないけどね」
「アルファードは坊やじゃないわ。もう、二十二才よ！」
「ボーヤよ、あんなの。齢には関係ないわ。ボーヤはいくつになってもボーヤよ」
「だって、アルファードは、実際の齢より、ずっと大人っぽいわ。とっても落ち着いていて、何でも知ってて何でも出来て、とっても頼りになるんだから」
「大人っぽい？　あれが？　あたしには、そうは見えないけど。そりゃまあ、一見、落ち着き払っちゃあいるみたいだから表向きは大人っぽく見えるかもしれないけど、中身は案外、子供なんじゃないかって気がするんだけど」
「えっ、どうして？　どこがどう、そういうふうに見えるの？」
「勘よ、勘。あたし、こういう仕事してるから、いろんな人の、普段は見えない一面を見ちゃったりすること、多いのよ。大の男がお母ちゃーんって泣いたりするのも、何度も見たわ。彼って、そのタイプっぽいなあと思って」
「勘だなんて、そんな。アルファードのこと、何も知らないくせに」
「知りたいとも思わないわね。まあ、いいんじゃない。あなたにはお似合いかもよ。『いーこいーこ、よしよし』って、してあげれば。でも、あたしは、そういうの、ヤなの。やっぱ、男はオトナでなくちゃ。リオン様みたいに。リオン様はあたしのものよ！　あたしは十三の時からリオン様一筋なんだから！」
「十三の時から……？　それで、まさか、両想いなの？」
「まさかって、どういう意味よ。でも、残念ながら、まだ、両想い

じゃないのよね……。リオン様ったら、あたしのこと、今だに子供だと思ってるのよ。初めて会った時に十三だったからって、いつまでも十三じゃないのに。今じゃあたしだって、結婚してもおかしくない年よ。実際、もう、二十八人からプロポーズされて、全部振ったんだから！」

「えっ、二十八人？」

「そうよ、もう、モテてモテて。毎日毎日ラブレターが山ほどきて、読むだけで、もう、大変。でもあたしは、リオン様以外の男には、少しでも心を動かしたりはしないの。なのに、なんでリオン様は、こんなに魅力的なあたしの、こんなに一途な想いに応えてくれないのかしら……。あたしのこと、いつまでも子供扱いばかりして。だけど今に見てなさいよ。今は十七でも、五年たったら、あたしだって二十二、十年たったら、二十七よ！」

「……でも、十年たったら、リオン様も四十五よ」

「いいの！　五十になっても六十になっても、リオン様はきっとすてきに決まってるわ」

「リューリ、あなたって、思い込み激しいわね……」

「一途と言って。でも、じゃあ、あなたはどうなの？　あなただって片想いなんでしょ」

「そうなの……。アルファードもね、五才しか年上じゃないのに、あたしのこと子供だと思ってるみたい」

「何だ、あたしたち、おんなじような境遇なのね。それにしてもあなた、見かけがトロそうなわりに、けっこう言うわね。気に入ったわ。あたし、ものをはっきり言わない人って、キライなの。あたしたち、いい友達になれそうね！　この際、あなたの趣味が悪いのには目をつぶってあげるから、おたがいがんばりましょ！」

こうして里菜に、同い年の友人ができた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第二場（４）

リューリはかなり口が悪いが、彼女に趣味が悪いだのと言われても、なぜかさほど嫌な気はしない。何を言われようと、アルファードのことを話題にできるだけで里菜は嬉しいのだ。ずっと、こんなふうに、女の子どうしのおしゃべりの中でアルファードを自慢してみたかったことに、里菜は気がついた。

リューリの提案で、里菜とキャテルニーカは共同浴場に案内してもらうことになった。

里菜は、イルゼールにいたころ、時々しか入浴できなかったので、最初はこの世界はそういうところなのだと思っていたのだが、実はそうでもなかったらしい。村でも、たらいで風呂に入っていたのは魔法が使えないアルファードだけで、実は、他の家にはちゃんと浴室があったのだ。他のみんなは魔法でお湯が出せるので、排水のできる浴室さえ作っておけばいつでも簡単に入浴できるのである。だから、この世界で、わりと頻繁に入浴する習慣が生れたのは、当然のことだ。特に、温暖で湿気の多いイルベッザの住民は、毎日のように入浴する習慣だったのだ。

里菜たちとリューリは、部屋は違うが同じ宿舎だった。一旦宿舎に戻って入浴の準備を整え、浴場に向かうあいだも、リューリは自分の想い人をひたすら自慢し続けた。

「ね、あなたも、見たなら分かるでしょ、あの品のよさ、滲み出る知性。何といっても、笑った時に口元にできる笑いじわがすてきなのよ、やさしそうで」

「やだ、しわなんて、じじくさい」

「そんなことないわよ、見ればわかるってば。他のところには、しわなんかひとつもないでしょ。笑った時だけ、口元にだけ、できるのよ。そこが、いいの！　うふ、うふふ……」

里菜は、とほうもなく嬉しそうなリューリを見て、さすがに呆れ

た。

（何よ、リューリってば、不気味……。語尾にハートがついちゃってる！　いくらなんでも、ちょっとおかしいんじゃない？）

けれども、そう思ってすぐに、アルファードのことを話している時の自分も、はたからはこんなふうに見えるのかもしれないと思って、赤くなった。

里菜は、どうして、『あちら』にいたころ同級生たちがあんなにバカみたいに見えたのか、ふいに思い当った。そう、世の中に、恋する乙女ほどバカみたいなものは滅多にないらしい。そして里菜はいままで恋をしたことがなかったのだ。もちろん、十七にもなって恋をしたことがないなどと言うと友達から変人扱いされることはわかりきっていたので、里菜はいつも、『好きな人はいるんだけど、それが誰かは教えてあげない』という振りをしつづけてきたのだが。

リューリは、もうすっかり自分の世界にひたりきってしまって、夢見るように続けた。

「リーナ、あたしね、うふ、うふふ……、リオン様にキスしてもらったことがあるのよ！　一度だけだけど」

「えーっ！　うそ！　キス？　なんで？　どうして？　いつ、どこで？」

「『なんで』って何よ、『なんで』って。あなた、今、何かよっぽど特殊な事情でもなくちゃそんなことありえないって思ったでしょ。こんなかわいい女の子になら、キスしたくなるくらい、あたりまえじゃない？」

「だって、両想いじゃないんでしょ？　リオン様、＜長老＞という立場にありながら、恋人でもない、しかも娘みたいな年の女の子にキスなんてするような、そういう人なわけ？　そんな人には見えなかったのに」

里菜は思わず非難がましい口調になった。里菜がこれまで見てきた限りでは、この世界には、単なる儀礼的な挨拶としてキスをする

習慣はないはずなのだ。
　リューリは上の空で答えた。
「そのころは、リオン様はまだ＜長老＞じゃなかったわよ」
「じゃあ、だいぶ前の話なの？」
「そ。実は四年前、あたしがまだ十三の時よ。おでこに、ね」
「なあんだ」と、里菜は納得した。それなら、この世界では、さほど非常識とか不道徳とかいうことはないはずだ。
　リューリはくすくす笑って付け加えた。
「でも、これ、内緒よ。あ、キスしてもらったってことは、誰に言ってもいいの。あたしもみんなに言いふらしてるから。『十三の時、おでこに』ってところは、他の人には内緒」
「えーっ、なんでそんな、一部分だけ言いふらしたりするのよ？　そんなふうに歪曲して言いふらされたら、リオン様が困らない？」
「いいの、いいの。少し困らせとかないと、あたし、リオン様に忘れられちゃうもの。嘘ついてるわけじゃないし」
「あたしだったら、そういう思い出は心の中に大切にしまって、誰にも言わないわ」
「あたしはね、リーナ、それをただの思い出で終らせる気はないのよ。これも戦略なの！　いつかリオン様を戦い取って見せるわ」
「た、戦いって……。なにも、そんなことで戦わなくても……」
「甘いわよ。恋は戦いよ！　あなたも、そんな、おっとり構えてたらだめよ。だから五才しか年上じゃない人に子供扱いされちゃったりするのよ。どうせ、向こうからアプローチしてくれるのを、ただ黙って待ってるんでしょ。ちょっと根性入れてがんばりなさいよ。あなた、彼に告白はしたの？」
「うーん、本人にきちんと告白したわけじゃないけど、本人がいる前で、他の人に、あたしは彼のお嫁さんになるんだって宣言したことがあるわ。その……、もののはずみで」
「やるじゃない。で？　彼はどうしたの？　何て言った？」
「何も言わないの。無視されちゃった。聞こえないふり」

「やだあ、サイテイ。かわいそう。ねえ、彼ってもしかして、ホモ？」

「えーっ！　な、なんで？　まさか！」

「だって、もしかして女の子に興味ないんじゃない？　ていうより、女の子、怖がってない？　あのね、あたし、さっき、なんとなく、あいつにバカにされてるような気がしたのよ。でも、あのびびり方からして勘違いだったみたい。それで、今、よく考えてみたら、何でバカにされたと思ったのか、わかったの。あのね、あたしに初めて会った男は、みんな、『ああ、なんて美しい、魅力的な女の子だろう！』って顔するのよ。顔に、はっきりそう書いてあるんだから。そりゃあもう、絶対に、一人の例外もなくよ。なのに彼は、そういう顔をしなかったのよ」

「だからって、ホモだなんて、そんな……。ただ、とても真面目な人で、綺麗な女の子さえ見ればすぐ鼻の下のばすような人たちとは違うのよ。それだけよ」

「じゃあ、あなた、がんばってちょっと強引に迫ってみれば？」

「だめよ、だめ！　水を汲みに行っちゃうもん。逃げちゃうのよ」

「でかい図体して、情けない男ね！　そこまで弱虫さんなわけ？」

「そんなことないわ！　アルファードはとっても勇敢なのよ。ドラゴンだって山賊だって魔物だって、ちっとも怖がったりしないんだから！」

「何、それ。それって、やっぱりバカなんじゃない？　アタマ悪すぎて、想像力ってものがないのよ。ちょっとでも想像力のある人間なら、山賊はともかく、ドラゴンや魔物が怖くないなんてことは絶対、ないわ。……でも、ドラゴンって……。それに、アルファード？　あんまりいない名前だけど、もしかして、彼ってあの、＜ドラゴン退治のアルファード＞じゃないわよね」

「そのアルファードよ。とっても強いんだから！」

「へー。田舎に帰っちゃったって話だったけど、また、こっちに出て来てたんだ。あ、それで、リオン様とお近付きになったわけね。

リオン様、ずっと彼に会いたがってたもの。そうかあ。そうね、筋肉バカでも、あそこまで強ければ、ちょっと考えちゃうわよね……。何しろチャンピオンだものね」

「だめよ！　手、出さないでよ」

「出さないわよ。あたし、ボーヤには興味ないもん。でも、あのチャンピオンが、あたしに睨まれたくらいであんなにびびっちゃうような男だったなんてね。ちょっとつついてみたら面白いかも。案外、ショック療法になって目が覚めるかもよ！」

「や、やめて、つつかないで！　あなたにつつかれたら、アルファード、石像になっちゃって、人間に戻れないかもしれない」

「何よ、人のこと、そんな、伝説のゴーゴンみたいに……。冗談よ、冗談。でもね、今度あらためてちょっと紹介してくれない？　もう脅さないから。

実はね、あたしの従弟が、あの武術大会以来、アルファードのこと、すっごく尊敬してるの。もう、あこがれのヒーローなんですって。それで、魔法が使えない彼に使ってもらうんだって言って、魔法なしで火を起こす道具とか水を出す道具とか発明しようとしてるの。アルファードのためだけにそういう研究をしているのよ。本業の合間にだけど。

あ、従弟のティーオは学者なの。まだ十五才なのに飛び級で上級学校出て国立研究所で働いてて、天才少年って言われてるんだから。ぜひ、アルファードに会わせてあげたいの。……あら、すっかり立ち話しちゃったわね。寒いから入りましょ」

彼女たちは、おしゃべりがはずみすぎて、いつのまにかとっくに浴場の前まで来ていたのに、そこで立ち話をしていたのだ。キャテルニーカがすっかり退屈して、浴場の入り口の段差に坐り込んで足をぶらぶらさせている。

浴場は、『あちら』の銭湯と似たような造りだった。時間が早いので、ほとんど人はいない。

リューリに案内されて脱衣所で服を脱ぎ、浴室に入った里菜は歓

声を上げた。
「うわあ、湯舟がある！」
「ちょっと、リーナ、何言ってるの？　あなたんち、まさか、お風呂なかったの？」
「うん、たらいで入ってた」
「えー、うそお。何で？　もしかして、すごく貧乏だったの？」
「うーん、そうだったのかもしれない。ずっと、それが普通だと思ってたんだけど……」
　里菜は知らなかったが、実はアルファードの家にも、もともとは外に別棟の風呂場があったのだ。だが、魔法が使えなくてお湯に不自由するアルファードは、男の一人暮しということもあって、夏は近くの小川で水浴び、冬は部屋でたらいで済ませ、風呂場が壊れても修理せずに放っておいたので使えなくなってしまっていたのである。
　浴槽を見て大喜びする里菜に、リューリは本気で哀れみのまなざしを向けた。
「かわいそう！　リーナ、あなたって見掛けによらず苦労してるのねえ。これからは、いつでもお風呂に入れるのよ。よかったわね」
「うん、すっごくうれしい！」
「そうかあ、あなた、家が貧乏だったから、それでそんなに痩せてるのね。でも、もう大丈夫よ。これからは、毎日たっぷり御飯が食べられるんだから。それだけでも、軍に入った甲斐があるわよ」
　ここで止めておけばよかったのだが、リューリは一言多かった。
「それにしても、あなた、胸、ないわね。ガリガリ。たくさん食べて少し太れば、きっと少しは胸も出るわよ。まあ、太ればいいってもんじゃないけどね！」
　そう言って、自分の見事なプロポーションをひけらかすように胸をはって見せたので、里菜は赤くなって、思わずリューリを睨んだ。
「リューリ、いくら女同志だからって、言っていいことと悪いこと

とあるでしょ！　あなたって、同性にはわりと嫌われてたりしない？　結構、敵が多いんじゃない？」

「あら、そんなことないわ。気にさわったなら、ごめんね。でも、あたしはみんなに好かれてるわよ。特に、治療院にあたしより後から入ってきた子には、みんなあたしの息がかかってるから、あたしに逆らえる子なんて誰もいないのよ。新人はみんなあたしが鍛えてるんだから」

「そういうのって、好かれてるのとは違うんじゃ……」

ずっと黙っていたキャテルニーカが、突然口を挟んだ。

「あたしは、リューリ、好きよ！」

「ほぉら、ごらんなさい。あたしはみんなに慕われてるんだから。ニーカ、あなた本当にかわいいわね！」

リューリはそう言って、キャテルニーカの髪を撫でた。キャテルニーカは、どうやら本当に、この姐御にかわいがってもらえそうだ。

安心した里菜がふたりに背を向けて、浴槽に桶をつっこんでお湯をすくおうとしたとたん、リューリの鋭い叱声が飛んできた。

「ちょっと、あなた、何してるの！」

「何って、お湯を……」

「あら、やだ。そうか、あなたんち、お風呂がなかったから、お風呂の入り方、知らないのね。田舎には共同浴場なんかないしね。あのね、お湯はそこから汲まないで、自分の桶に自分で出すのよ。桶をそんなところにつっこんだら汚いじゃないの、ここにはみんなが入るんだから」

リューリは同情のまなざしで説明してくれたが、他に水道もシャワーもついていないから、里菜にはどうしようもない。

「リューリ、あの、あたし……。お湯、出せないの」

「うそっ。水しか出せないの？　無器用ね、信じらんない！」

「そうじゃなくて、水も出せないの。魔法が、全く使えないのよ。アルファードと同じ」

「まあ！　そうなんだ……。そんな人が、この世に二人もいたのね。アルファードだけかと思ってたわ。あなたたちの村には、他にもそういう人がいるの？」
「ううん、あたしたちだけ」
「へええ。それじゃあ、いろいろ不便よねえ。ティーオが、お湯を出す道具も発明してくれるといいのにね。今日はあたしが、お湯、出してあげる。さ、目をつぶって！」
「え、ちょっと、リューリ、目をって、そんないきなり……きゃっ！」
　里菜は、いきなり頭の上から滝のような勢いでお湯を浴びせられて悲鳴を上げた。
　この後、里菜は、リューリと浴場で一緒になるたびに、無造作に頭から大量のお湯を掛けられることになる。
（きっと、この人、怪我の治療をするときもこんな具合なんだろうなあ……。『さ、歯を食いしばって！　じゃあ、足を切り落とすわよ！』とか……。あんまり治療されたくない……。怪我にだけは、よくよく気を付けよう！）と、里菜は心に誓ったのだった。

第三章＜イルベッザの闇＞　第三場（1）

里菜がその次にリューリに会ったのは、それから三日後の夕方だった。里菜とアルファードが宿舎の管理人室に届いた伝言に従ってイルベッザ城の通用門の前でユーリオンと待ち合わせし、やがて出てきたユーリオンに案内されて歩き出したところへ、後ろから、元気な声が響いたのだ。

「リオンさまぁ、待って！」

足を止めて振り向いた三人に、リューリが駆け寄ってくるなりわめいた。

「ああ、よかった、間にあって。リオン様、ひどいわ！　アルファードとリーナを食事に誘っておいて、あたしだけ誘ってくれないなんて！　ずるい、ずるい！」

息をきらしながらわめくリューリは、今日は白衣ではなくラフな私服姿で、無駄な飾りのない少年物らしい上着を無造作にはおり、この寒いのに、下は短い半ズボンだ。キャテルニーカといいリューリといい、妖精の血筋は北方出身だから寒さに強い人が多いのかもしれない。

そのボーイッシュであっさりした格好は、さばさばした気性の彼女にとても似つかわしいと、里菜は思った。童顔でやせっぽちの里菜がそんな格好をしたら、ただ子供っぽいだけだろうが、華のある美貌で抜群のプロポーションのリューリなら、そういう無造作な格好をしても、やたらと様になる。しかも彼女には、なよなよした、媚びたところがないから、思いきりよく脚を出しても変にいやらしくなることもなく、健康的で潔く、爽やかだ。……と、里菜は思ったのだが、それは『あちら』の世界でショートパンツやミニスカートを見慣れたものの感覚で、この世界の人から見ると、これは、かなり勇敢な、ぎょっとするような格好らしい。

その証拠に、リューリの半ズボン姿を見たとたん、ユーリオンは、

顔をしかめていきなり説教を始めた。
「リューリ。いいかげんに、そんな男の子みたいな格好をするのはよしたまえ。もう小さな子供じゃないんだから」
「あら、リオン様、あたしが子供じゃないって、やっと分かってくれたの？」と、リューリは涼しい顔をしている。
「そんなことは、前から言っているじゃないかね。君のような年で、そんな、脚を丸出しにして半ズボンなんか穿いている女の子は、他にいないだろう？」
そういえばたしかに、里菜はこの世界で、小さな女の子以外で膝より短いスカートを穿いた女性は見たことがないし、半ズボンに限らず、ズボンの女性も、あまり見た覚えがない。そういう文化なのだろう。
だが、リューリは、まるで気にかける様子もなく、しゃあしゃあと言う。
「いいじゃない。他の人が何を着ようと、あたしは、この格好が好きなのよ。動きやすいし。女の子はズボンを穿いちゃいけないって法律でもあるの？　シーン様に逮捕されちゃう？」
「いや、ズボンはいい、ズボンは。シーンだって、君くらいの頃は、いつもズボンを穿いていた。まあ、世の中には、女性がズボンを穿くといやがる男もいるが、私は別に構わないと思っているよ。だが、半ズボンはいけない！　それだけはだめだ。他人に迷惑だからやめたまえ。ほら、気の毒に、アルファード君が目のやり場に困ってるじゃないか！」
里菜は、リューリの脚にうろたえているらしいアルファードを睨みつけてやろうかと思ったが、半ズボンくらいで困っているならかわいいものだと思い直した。
「なによぅ、迷惑だなんて」と、リューリはふくれて、これみよがしに胸を張って顎をつんと反らし、アルファードを睨みつけた。
「あなた、あたしの服に何か文句ある？　何着ようとあたしの勝手でしょ！」

もう脅さないと言ったくせに、やはり彼女はアルファードに、かなり根強い反感を持っているらしい。

いきなり喧嘩腰でつめよられたアルファードは、

「いや、たしかに君の自由だが……」と口篭りながら、迷惑そうに目を逸らした。

ユーリオンが閉口したように言った。

「リューリ。君はどうして、そう、むやみとつっかかるんだね。今日は、アルファード君は私のお客なんだから、彼に失礼な態度を取るようなら、一緒に食事に連れていくわけにはいかないよ。だいたい、君にはこのあいだ御馳走したばかりだろう。私は、この二人とゆっくり話がしたくて食事に誘ったんだ。私が誰かと食事をするたびに、毎回毎回君も誘うわけにはいかないんだ」

「だめよ、だめ。あたしも行く！」

「やれやれ、また、たかられるのか。リーナ君、君が彼女に今日のことを話したのかね。別に内緒でもなんでもないんだが、しかし、よりによってまずい相手に話してくれたものだ」

「ち、違います、あたしが話したんじゃ……」

「キャテルニーカに聞いたのよ」と、リューリは勝ち誇ったように言った。

「あの子、本当に素直でいい子ねェ。もう、かわいくてかわいくて、あたしの一の子分よ！」

ユーリオンは、本気とも冗談ともつかない様子で大袈裟に溜息をついた。

「しかたない、見つかってしまったものは運が悪かったとあきらめて、君にも御馳走しよう。だけど、私はアルファード君たちと話がしたいんだからね。あんまり邪魔をしないでくれよ」

「やったあ！」と、叫ぶなり、リューリは、歩き出したユーリオンの片腕に飛びついてぶら下がった。

ユーリオンは頭痛でもするように、こめかみを押えてうめいた。

「……リューリ、頼むから、人前でそういうふうにベタベタくっつ

かないでくれないか」
「えっ、じゃあ、人前じゃなければくっついていい？　それなら今度、どこか二人っきりになれるところで……ねっ？」と、リューリが必要以上に大声で言ってますます甘えかかるのを、ちょうど終業時間で＜賢人の塔＞から出てきた職員たちが目にして、笑いをこらえながら通りすぎていく。このふたりのこんな様子は、構内の名物なのである。
「リューリ。みんなに笑われてるじゃないか」と、ユーリオンはますます渋い顔をして言った。
「君はそんなに私の評判を落したいのかね。だいたい、君が、『十三のとき、おでこに』というところを抜かして、私にキスされたと言いふらすから、ただでさえ私は困っているんだ。これがスキャンダルにならないのは、私が日頃、非常に品行方正だからで、そうでなければとっくに職を追われているところだよ。まったく、あんな罪のない無邪気な様子をしておいて、あれは最初から全部、私を陥れるための君の策略だったのかね」
ユーリオンは、振り向きざまに里菜に話を振った。
「リーナ君、このリューリはね、私の失脚を目論む工作員なんだよ」
「はあ？　し、失脚？　工作員？」
いきなり訳のわからないことを言われて、里菜は唖然としたが、彼らふたりの間では、これは言い古された冗談でもあるらしく、リューリは平然と笑っている。
それを見てユーリオンは、怖い顔を作って言い聞かせた。
「リューリ。私はなりたくて＜長老＞になったわけじゃないが、それでも、なった以上はやりとげたいこともいくつかはある。まだその半分にも手をつけていないんだ。それに、同じ辞めるにしても、女性関係のスキャンダルでの――それも娘のような年の女の子に手を出したと白い目で見られての失脚なんていうみっともないことだけはいやだよ。それなのに、君ときたら……。リューリ！　聞いているのかね。君のおかげで私はみんなの笑い物だ！　いいかげん離

れないと、食事に連れていかないよ！」
「はあい……」
リューリはしかたなさそうにユーリオンから離れると、一番後ろを歩いていた里菜の隣にやってきて囁いた。
「リーナ、抜け駆けしようったって、そうはいかないわよ！　見張ってるからね！」
「そんな、抜け駆けだなんて……。別にそういうんじゃ……。あたし、おじさんには興味ないって言ったでしょ。あなたこそ、アルファードにちょっかい出さないでよ」
「あたし、ボーヤには興味ないわよ。それに、あたしのリオン様はおじさんじゃないわ！」
「アルファードは坊やじゃないわ。リオン様が年上すぎるのよ。どう考えたって、おじさんよ。オヤジ！　中年！　年寄り！　だって、なにしろ＜長老＞よ、＜長老＞」
「＜長老＞は役職名だってば！　何よ、あなたのなんか、ただの筋肉バカじゃないの！　若けりゃいいってもんじゃないわよ」
ふたりは顔を突き合わせて睨みあった。
「年寄り！」
「筋肉バカ！」
「年寄り！」
「筋肉バカ！」
思わず声も高くなる。まるで猫の喧嘩である。
その時、ふいにふたりは、それぞれ後ろから襟首を掴まれて引き離された。ぎょっとして振り向くと、リューリの後ろにユーリオンが、里菜の後ろにアルファードが、怖い顔をして立っている。
「リーナ君。年寄りというのは誰のことかね」
「リューリ。筋肉バカというのはもしかして俺のことか？」
それぞれじろりと睨まれて、里菜は真っ赤になり、リューリもさすがに首をすくめて小さくなった。
「リューリ」と、ユーリオンが怖い声で言った。「喧嘩をするなら、

置いていくよ」
「やだ、やだ！　喧嘩なんかしてないわ！　ね、リーナ。あたしたち、会ったその日に意気投合しちゃって、もう大親友なのよねーっ！　仲が良すぎて、ちょっと悪ふざけしてただけよね！」と、リューリが強引に里菜の腕を取ってくっついてきたので、里菜はあわてて調子を合わせた。
「う、うん。ねーっ！」
「なら、いいがね。同じ年ごろの女の子どうし、仲良くするのはいいことだ。リューリ、君はここでは先輩なんだから、リーナ君には親切にしてやらなけりゃいけないよ」
「わかってるわ。食堂にも浴場にも案内したのよ。ね！　今日も仲良くおしゃべりしましょうね！」
「ねっ！」と、むやみに大声で相槌を打ちあうふたりを見て、ユーリオンは笑い出した。

ユーリオンが三人を連れていったのは、構内の目立たない一角にある、落ち着いた雰囲気の店だった。さすが＜長老＞いきつけの店だけあって、宿舎街の食堂とは大違いの、高そうな店だ。それもそのはず、ここに出入りするのは、お偉いさんばかりなのだ。
別に、下っ端の役人でもただの学生でも、この店に入っていけないわけではないのだが、値段が高いので偉い人しか寄りつかないのである。
まわりにいるのはなんだか偉そうな人ばかりで、里菜は自分がみすぼらしく場違いに思えて、ちょっと緊張してしまったが、リューリはいかにも慣れた様子だ。よほどしょっちゅうユーリオンにたかっているのだろう。
ユーリオンとアルファードが、村の誰彼の消息や古いしきたりなどについて話し込んでいる間、里菜はリューリに小声で尋ねてみた。
「ねえ、リューリ、あなた、よくここへ来るの？」
「うん、たまにね」

「だって、ずいぶん高そうじゃない？」
「もちろん、自分でなんか払えないわよ。治療師の給料って、こんなに大切で大変な仕事なのに、たいしたことないんだもの。リオン様にたかるの。あと、ゼールおじいちゃまなんかも、よく奢ってくれるわ。あたしのこと、『恐怖のたかり娘』なんて呼ぶの」
「おじいちゃま？」
「そ。＜賢人＞ファドゼール様のことよ」
「えっ、あの、眉毛長くて、頭のてっぺん、ちょっと禿げた……？」
「そうよ。会ったの？　あたしたち、とってもいいお友達なの！」
「お友達って……、あのおじいさんと？」
「そうよ。悪い？　愛に年の差は関係ないけど、友情にも関係ないのよ。あのおじいちゃま、かわいいでしょ！」
「か、かわいい……？　かしら……。うーん、そうね……」
「そうよ、おちゃめで」
「確かに、おちゃめよね」
「でしょ？　もう、いつもひょうきんで面白いの。何度かここで奢ってもらったのよ」
「賭けで儲けた老後のおこづかいでね？」
「そう、そう！　よく知ってるじゃない」と、リューリは笑った。
「それでね、あたしの誕生日には、女神印の砂糖菓子を山ほど買ってくれたの！　あ、あなた、田舎モノだから知らないかしら。イルベッザじゃ有名なお菓子なのよ。薄い花びらの形をした薄荷の風味の砂糖菓子でね、すっごくおしいんだけど、すっごく高いのよね。昔のお姫様たちが食べたような、王室御用達の、高級で上品なお菓子なの。自分じゃちょっと、買えないわね」
「へえ……。ねえ、リューリ、あなた、ただの治療師なんでしょ？　なんでそんな、＜賢人＞様なんかと知りあいなの？　何かコネがあるの？」
「あら、あなただって、もう＜長老＞と知りあいじゃない。ゼールおじいちゃまとも会ったんでしょ。一度でも会えば、後は、そのチ

ャンスを生かすも殺すも『押し』しだいよ。押しの強さと明るい笑顔。それさえあれば、ほんのちょっとしたツテからでも、どんどんコネができるの。あなたもそんなおどおどしてちゃだめよ！　だからってね、何も、奢ってくれそうな人とか、偉い人に取り入れって言ってるんじゃないのよ。まあ、だいたい＜賢人＞になるような人は、みんなひとくせあって、それぞれ面白いけど、もちろん＜賢人＞じゃなくても面白い人はいっぱいいるから、要は、老若男女、職業を問わず、気が合えば友達になればいいのよ。いろんなタイプの友達がいると楽しいわよ。あなたもあたしを見習って、もう少しずうずうしくいきなさいよ」

「リューリ、あなたって、すごいわね……」

そこへ、向こうの話がとぎれたユーリオンが口を挟んだ。

「リーナ君、いいんだ、いいんだ、リューリなんか見習わなくて。いくらなんでも、リューリのずうずうしさは度を過ごしてる。『たかり娘』は、一人で十分だ。リューリ、こういうスレてないおとなしいお嬢さんに、たかりのコツなんかを教えるんじゃない」

「たかりのコツじゃないわ。人脈造りのコツを伝授してたのよ」

「君の場合、どっちでも同じことだ。ところでリーナ君、今度は君の話を聞きたいね」

それから里菜は、ユーリオンから、＜マレビト＞としてこの世界に現われた時のことや里菜の魔法の力のこと、前の世界のことなどをあれこれ聞かれた。リューリは、里菜を、ただの貧乏な田舎の娘だと思っていたから、この話を聞いてびっくりしていたが、すぐに一緒になってあれこれ尋ねだしてユーリオンにうるさがられた。

ユーリオンは、職業柄、『あちら』の世界の社会や政治のしくみに特に興味を示した。里菜はほとんど質問に答えられず、もっと勉強しておけばよかったと後悔したのだが、それでもユーリオンは里菜の話をずいぶんと面白がってくれた。

「いやあ、実に啓発的な話だねえ。うむ、君の国では、政府がずいぶんいろんなことをするんだねえ。いくつかは、実にすばらしい仕

事もしているようだが……。しかし、政府がそんなに大掛かりなことをあれこれやっていては、さぞかし金がかかるんじゃないかね。税金は高いのだろうねえ」

「さあ……。あの、あたし、まだ自分で払ったことないし、よく知らないんです……」

「なるほどね。君はまだ学生だったっけね。で、君の親御さんが税を払っていたわけだね？　ふむふむ。いや、実に参考になる。ちょっと君の意見を聞いてみたいんだが――ああ、君が専門家でないのはわかってるから、君の、一民間人としての素朴な意見でいいんだよ。この国の常識に染まっていない、型に嵌らない意見が聞きたいんだ。実は今、私たちは、ある問題についてみんなで対策を考えてるんだがね……」

こうして、里菜は、この国の政府が抱えている諸問題についていきなり意見を求められるはめになり、大いに困惑したが、里菜がごくあたりまえのことを言うだけで、ユーリオンはいちいち斬新な発想だと感心してくれる。

彼と話していて里菜が驚いたのは、この国には福祉という概念がほとんどないらしいことで、それどころか、おそらくこれは宗教らしい宗教がないことと関係するのだろうが、福祉以前の、慈善という考え方さえひどく希薄であるらしい。そういえばこの国には、国立の学校や治療院はあるが、孤児院とか養老院とか、そういうものはまったくないのだ。この世界では、そういう問題は親戚縁者や地域の共同体の中で解決すべきもので、誰も、国が心配しなければいけないものだとは思っていなかったのである。そして数十年前まではたしかにそれで十分事足りていたし、古くから人の出入りが少ないエレオドラ地方では、今でもそれで何の問題もなく、うまくやっている。

が、その他の地方では、国の統一で人々が流動的あちこち移り住むようになり、都会への流入も増えるとともに、だんだんと地域の相互扶助システムが崩れ始め、特に都会ではいろいろと問題が出て

きていた。そこへもってきて、ここ数年の急激な避難民の流入で、そういうのどかなシステムは一挙に崩壊し、あらゆる社会問題が噴出してしまったのだ。

この国の政治は今、おそらく、大きな転換期を迎えようとしているのである。ユーリオンは、そのことを薄々感じてはいながらも、その発想は時代の常識の枠を大幅に越えることはできず、多少新しいことを考えても国民や役人たちの意識がついて来ずで、なかなか苦しい板挟みの立場にある。その彼にとって、里菜の言葉は、まさに、自分がばくぜんと模索していた新しい行政のありかたに形を与えてくれる天啓と聞こえた。

だが、感銘は受けても、それをそのまま実行できるというものではないらしい。

「うーん、なるほどね。国がそこまでするなんてことは、誰も考えつかなかったね。すばらしい。たしかに、それもひとつの解決だ……。特に、その、なんて言ったか、孤児院だっけね、それはぜひ作るべきだね。しかし、そのアイディアを実行に移すには、致命的な問題点があるんだ……」と、ユーリオンは溜息をついた。

「残念なことに、我々には金がない。今の財政の状況では、絶対に予算がとれない。かと言って、税金を引き上げると、暴動が起こるだろうなあ。私は火あぶりにはなりたくないからねえ……」

「えっ！　火あぶり？」

「そう。実は、昔、さっき待ちあわせをしたイルベッザ城前の広場で、王様が一人、火あぶりにしても、結局王政は終らなかった。アルファード君は、知ってるね。王政に反対する民衆の暴動だったんだが、そこで王様を一人火あぶりにしても、結局王政は終らなかった。ただ、暴動を陰で操っていた王の従兄が、新しい王になっただけだ。まだ、時が至っていなかったんだろうね。その後、幾は熟し、今度は火あぶりなしで王政が廃止され、今の＜賢人会議＞が生れたわけだ。今でも、あの広場には、毎年、王が火あぶりになったその日の夜中に、幽霊が出るという噂もあるよ。いや、しかし、火あぶりは熱いだろ

うねえ」

どうやら、この、『予算がない』というのと『暴動が起こる』『火あぶりにされる』というのは、ユーリオンの口癖らしい。この後、里菜は何度も、彼の口からこの言葉を聞くことになる。まったく情けない＜長老＞なのだ。

第三章＜イルベッザの闇＞　第三場（2）

それでも、彼は里菜の思いもよらない発想に感銘を受けたらしく、しまいには真面目な顔でこんなことを言い出した。

「君、私の相談役にならないかね。いや、なに、非常勤でいいんだ。ときどきこんなふうに意見を聞かせてくれればそれでいい。君は、他の誰も思い付かないようなことを言ってくれるから、とても参考になる。公式な役職じゃなくて個人的な相談役だから、何も堅苦しく考えることはないよ」

里菜は驚いて固辞したが、

「それなら、時々、今日みたいにアルファード君やリューリと一緒に食事を御馳走するから、その時に話を聞かせておくれ」という提案には、もちろん異存はなかった。

里菜はこの日、ふと思い当ったのだが、歴史に名高い魔法使いユーディードは、実は非凡な軍師でもなんでもなくて、もともと、軍人か役人ではあったのかもしれないが、ごく普通の人だったのではないだろうか。ただ、きっと、彼の型破りな意見に謙虚に耳を傾けて、取り入れるべき部分を柔軟に取り入れたアルムイード王が偉大だったのだ。その点、このユーリオンも、あまり貫禄はないし、里菜ごときの意見に大真面目に感心する様子は何とも頼りないが、実はすごく優秀な為政者なのかもしれない。

そういえば里菜はこの日、ユーリオンの例の魅力的な笑いじわも、さんざん見た。そして、彼に笑いじわがあるわけがよくわかった。彼は実は、とほうもない笑い上戸なのだ。特に、酒が入ると、もうだめだ。それこそ箸がころんだようなたあいのないことで、一人で笑い出し、それがいつまでも止まらないのである。

「ああ、いや、すまない、どうにも笑いが……。失礼。いや、別にたいしておかしくもないんだが、これがどうにも止まらなくて……」

と、ユーリオンは笑いの合間に苦しそうに弁解した。

「実は、私は、仲間うちでは『笑い上戸のリオン』と呼ばれていてね……」

そう言って、涙を流さんばかりに笑い続けるユーリオンを、リューリは何とも愛しそうに眺めていたが、里菜とアルファードはただ、本当にこの人がこの国で一番偉い＜長老＞なのだろうかと、あきれて顔を見合わせた。

こうして、ユーリオンはけらけら笑い、リューリは酔う気配もなくひとりでがぶがぶと酒を飲み、里菜とアルファードは少々あきれながら、四人は楽しい一時を過ごした。

アルファードは相変わらず無口だったし、例によってほとんど酒も飲まなかったが、どういうわけかユーリオンにひどく気に入られて、その後、彼に別の店に引っ張っていかれてしまった。

ユーリオンは、実は、若い人と話したり酒を飲んだりするのが何より楽しみなのだ。なにしろこの国では、三十過ぎて独身などというのは本当に特殊な存在で、同年配の仲間たちは早いものではそろそろ娘の縁談の心配をしていたりするのものだから、独身で気の若いユーリオンは、彼らと酒を飲んでも話題に取り残される悲哀を味わうことが多いのである。彼も、上級学校の学長だったころはしばしば学生たちを引き連れて飲みにいったりしたものだが、うっかり＜長老＞などになってしまった今では、あまりそういう機会もなかったので、この日、彼は上機嫌だったのだ。

だが、ふたりについていこうとしたリューリは、

「君、私の一か月分の給料を飲み潰す気かね」と、追い返されて、しかたなく里菜と宿舎に引き上げた。

もう、かなり夜遅い時間だったが、構内には、まだ、まばらに人影があった。外の街では、こんな時間に出歩くのは犯罪者と特殊部隊くらいのものなのだが、構内には今のところ魔物が出ないのだという。

並んで宿舎に向かいながら、ふたりはまだおしゃべりを続けた。

「ね、リーナ、リオン様ってすてきでしょ？　笑うとかわいいの！

親衛隊に入る？」
「入るって……。親衛隊って、あなたの他にもいるの？」
「いない、いない。この構内で働く女の人には、リオン様のファンは掃いて捨てるほどいるけど、親衛隊には入れてあげないもん。あなたは特別よ」
「あ、ありがとう、でも、いいわ」
「そうよね、あなた、アルファード一筋だもんね。ちょっと見てればすぐわかるわ」
「……そんなにすぐわかる？」
「わかるわよ。わからない人は、よっぽど鈍いのよ。でも、あなたも、かなり鈍いんじゃない？」
「どうして？」
「だって、あなた、全然片想いみたいなこと言ってたけど、どう見ても、彼、あなたにぞっこんよ」
「えっ、そうかしら！」
「嬉しそうね。にこにこしちゃって、もう。そうよ。あたしに気を引かれないくらいだもの、よっぽどよ。それに、さっき、お店に行く途中、あなたのことをちらちら見ながら通った男を、火を吹きそうな目で睨んでたわよ」
「えっ？」
「気がつかなかった？　通りすがりの男が、あなたを眺めてったのも？　ほんとに鈍感ねえ。睨まれたのは、あたしの同僚の治療師なんだけど――じゃなかったら、悪いけど、あたしとあなたが一緒にいて、あたしじゃなくてあなたのほうを見るなんて考えられないけど、彼、あたしは見慣れてるし、はっきり言って、あたしにはとっくに完璧にフられてるしね。
　で、あなたのこと、たぶん治療院に来た新しい見習いかなんかと思って、ちょっと好みのタイプかなあ、なんて思ったらしくて、すれ違った時に、ちょっとそういう目で、あなたを眺めてったのよ。で、あいつに、あの迫力でじろりと睨まれて、すくみ上がってそそ

くさと逃げてったわ。かわいそうに」
「えー。そんなことあったの？　ほんとに？」
「うん。あいつ、『俺の女に手を出したら問答無用で焼き殺す！』みたいな、すごい目つきしたわよ」
「そ、そう？」
「嬉しそうじゃない。だめよ、そんなの嬉しがっちゃ。あたしだったら、ああいうのは我慢できないわね。なんかもう、全身で『俺の女だー！』って主張してる感じじゃない。あなた、よく黙ってあんなでかい面させとくわね。あたしだったら、顔洗って出直して来いって言ってやるわよ」
「……そう？」
「そうよ。いくら好きな相手にだって、平気であんな『持ち主』みたいな顔させとくもんじゃないわよ」
「そう？　……でも、いいの。あたしは気にならないから」
「そりゃあ、気にならないでしょうよ、気がついてないんだもん」
「気がついても、気にしないわ。アルファード、やさしいし。あたしがそれでいいんだから、いいじゃない」
「あーあ……。まあ、いいけどね。でもね、あなたって世間知らずでネンネっぽいから忠告しとくけど、ああいう男って、外づらと内づらと違うこと、多いわよ。気をつけてね」
「ええっ？　アルファードは、絶対、そんなんじゃないわ！　それに、外づらって言ったって、あたし、アルファードと、ずっと一緒に暮らしてたのよ！」
「……ですってね。ですってね！　なんで黙ってたのよ、この裏切り者！」
「別に隠してたんじゃないわ。こないだは、たまたま話がそっちに行かなかっただけよ」
「そのへんの事情、きっちり説明してもらうわよ！　ねえ、一緒の部屋で寝起きしてたわけ？」
「ううん、寝る部屋は別。ちゃんと、あたしの部屋があったの」

「ふうん。で、一緒に住んでて、何もなかったわけ？」
「何もって、何がよ」
「とぼけないで白状しなさいよ。正直に言わないと、首締めるわよ！」
「だって、白状するようなこと、なにもないもん。だから片想いだっていってるでしょ」
「だから、そんなことないってば。彼もあなたが好きなのよ。それは間違いないってば」
「そうかなあ。でも、一緒に住んでても、養女か妹か、でなきゃ下宿人って感じで、それだけだったの。それは本当」
「ふうん。まあ、たしかに、他の人ならともかく、このあなたとあの彼じゃ、そういうのも、ありかもね。じゃあ、それはまあ信じるけど、でも、それだったら、一緒に住んでたからって、あなたがあいつの外づらじゃない顔を知ってることにはならないと思う」
「どうして？　『何か』ないと、一緒に住んでても外づらなの？　それじゃ、親子兄弟は外づらの関係？　男同士は、一生、外づらでしかつき合えないの？」
「屁理屈こねるんじゃないの、この子は」
「それに、あなたは知らないでしょうけど、アルファードは、外づらを取り繕うような人じゃないんだから！」
「だからね、違うのよ。わかってないわねえ。嘘や演技で外づら繕ってる人より、嘘も演技もなく、あるがままのその人でいるだけで、深入りしてみるとなぜか思ってたのとは違ってきちゃうって男の方が、かえって始末が悪いのよ。『こんなはずじゃなかった』って思った時には、もう深みにはまってて、抜け出せなくなるのよ」
「何、それ？　実話？　友達の彼氏のこととか？」
「まあね。そういう男はね、本人も変わるつもりで変わるんじゃないんだから困るのよ。男の方は、自分は変わってないつもりで、でも、相手が見込み違いに気づいて離れようとすれば、男の方にしてみれば自分は変わらないのに相手が自分を裏切ったようにしか見え

ない。本当の自分を受け入れてくれないんだとしか思えない。自分の変わらぬ真心を踏みにじられたと思う。それでもあきらめ切れずに、『変わらぬ真心』の鎖で相手を縛ろうとする。『変わらぬ真心』がある自分には、そういう権利があると思いこむ。それで、もう、後は泥沼。修羅場よ。怖いわよ～」

「ふうん、何だか良く分からないけど、お友達、大変だったんだ……。でも、そりゃあ、その人は大変だったんでしょうけど、アルファードは違うわ！」

「つき合い始めは、みんな、そう思ってるのよ。でも、ああいう、独占欲強そうな、執念深そうなタイプは、一歩間違うと特に怖いんだから、引き返せない程深みにはまる前に、よく目を開けて見極めておかなきゃだめよ。あなたって、ほんと、何もわかってなさそうだから」

「そりゃあ、わかってないのは確かだけど……。でも、アルファードって独占欲強そう？　あたし全然、そんなふうに思ったことないんだけど」

「だからあなたは鈍感なんだってば。あいつ、ああ見えて、けっこう危ない男だと思うわよ。ああいう、表面は静かだけど内側に何か火種くすぶらせてそうっていうのは、どこかで一歩踏みはずすと意外と怖いタイプなの。まあ、それでも好きだってんなら、止めないけど。『毒を食らわば皿まで』の覚悟で、思いっきり泥沼の底までふたりでハマってみるのも、本当に好きなら、それはそれで本望じゃない？

……でも、あいつもよくわからないやつよね。あんなに露骨に『俺のモノ』づらしておいて、あなたには、そういうこと、何も言わないんでしょ？　ずっと一緒に住んでて、何もないんでしょ。もしかして、あいつ、あんまりアタマ悪くて、自分があなたを好きだってことにも気がつかないんじゃないの？」

「アルファードはアタマ悪くないってば」

「うん、まあ、話してみたら、見かけほどバカじゃなさそうだった

わね。でも、こういう問題になると、誰でもバカになっちゃうのよ。国中で一番賢いリオン様や、あの知的なシーン様でさえ、そうなんだものね……」

「ねえ、このあいだもあなた、シーン様がなんとか言ってたけど、あの二人って、何かあるの？」

「そうなのよ」と、リューリは溜息をついた。

「おおあり。シーン様は強敵なの。なにしろあの二人は、あたしが生れる前からの付き合いなんだもの……。付き合いって言っても今のところ友達付き合いなんだけど、もしあの二人が何かのひょうしに結婚することになっちゃったら、あたし、あきらめて祝福してあげるつもり。他の女には絶対リオン様は渡さないけど、シーン様じゃ、しかたないもの。シーン様って、すてきでしょ。知的で行動力があってりりしくて。それに、とても綺麗よね。でもね、顔だけよく見ると、別にそれほど飛び抜けた美人ってわけでもないのよ。かといって、厚化粧して着飾ってるわけでもないし、それなのに、なぜか、すごく美人に見えるの。なんていうか、背筋がピンと伸びてて、立ち居振るまいがさっそうとしてるのよ。そういうのって、すてきよね」

「うん。かっこいい。シーン様も、あんなにすてきなのに、まだ独身なの？」

「そうよ。前に、まだうんと若い頃、一回結婚したんだけど、今は独身」

「離婚とか？」

「ううん、死別」

「そう、気の毒ね……。でも、リオン様と再婚しそうなわけ？」

「それがね、しそうもないのよ。＜長老＞ユーリオンと＜賢人＞フファルシーンはなぜ結婚しないか、っていうのは、『イルファーラン七不思議』の一つと言われているの。あの二人、いろいろと訳ありなのよ。と言っても、たいした訳じゃないんだけど」

「え、どんな訳？」

「知りたい？」
「知りたい、知りたい！」
こうして二人の恋する乙女は、真冬の路上で果てしなくおしゃべりに興じ続けた。
どうやら、リューリにとっては、里菜が＜マレビト＞であったことより、里菜とアルファードとの関係のほうがよほど重大な関心事らしい。そのことに、里菜はなんとなくほっとして、心がなごむような気がした。里菜も、リューリとは、＜マレビト＞だのなんだのということは忘れて、普通の友達同士のように、お互いの恋の打ち明け話がしたかったのだ。
里菜にとっては、魔物退治にいかなくてすむ、うれしい夜だった。こうして、ふつうの女の子らしく噂話に興じていると、いっとき、魔物退治をしている時とは違う無邪気な自分に戻れるような気がした。

第三章＜イルベッザの闇＞　第四場

イルベッザの春の闇は、ぼとりと重く湿っている。

路地にひしめく小さな貧しい家々の傾きかけた低い石塀の向こうには、それでもそれぞれ、壁と塀とに挟まれた僅かな隙間に果樹や花木が植えてあって、乏しい土になんとか根を張っているいじけた木々も、春にはやはり、この時とばかりに必死に花をつける。甘たるい花の香りが、かすかにドブ臭い裏街の臭気と混じりあって闇に満ちる。

生ぬるい夜気をかきわけて、細い三日月に照らされたアルファードの大きな背中が前を行く。その足取りは注意深く、右手には、油断なく構えられた抜き身の剣がおぼろな月影を映して鈍く輝いている。

路地の奥に重たく淀む闇の中に、影のような灰色の姿がちらりとうごめくのを、ふたりは、今しがた、確かに見たのだ。

里菜は、息を詰め、足音を忍ばせて、アルファードの背後に寄り添って進む。里菜の手にも、黄金の短剣が、抜き身で握られている。柄に嵌められた緑の石が繰り返す、呼吸にも似た明滅が、警告を発するように、しだいに激しくなる。

前を行くアルファードの足が、ピタリと止まった。

「リーナ！」

一声鋭く囁くと、アルファードは身体を低くして、あらためて剣を構えた。

直後、さっきの暗がりとつながる石塀の陰から、物言わぬ小柄な灰色の姿が、抜き身の剣を恐れる気配もなく、片手をつきだした姿勢のまま、妙にふわりとした動作で飛び出してきた。鬼ごっこをしている子供のような、素早いがどこか無器用な、無邪気にさえ見える動きである。

灰色の腕をひらりとかわし、アルファードは、すばやく魔物に切りつける。

アルファードの剣から飛びすさった魔物は、片手で、招くような奇妙なしぐさをした。魔物特有の魔法のしぐさだ。

だが、何も起こらない。

里菜は、今ではそこにいるだけで、ほとんど自動的に魔物の魔法を封じてしまうのだ。

魔物は、うろたえる様子もなく、あたりまえのように、今度はマントの下から剣を抜いた。

普通の人間は、魔法を消された瞬間、必ず、あせったりひるんだりして、一瞬の隙ができる。が、魔物には、そういう心の動揺がない。ただ、折れた剣を投げ捨てて新しい剣を取るように、ためらわず防御法を切り替えるだけだ。

それでも、魔物が剣を抜く、そのわずかな時間のロスは、アルファードにとって十分な攻撃の好機だ。魔物が剣を抜いた時には、アルファードはすでに、剣を構えて魔物の真正面に飛び出していた。

そのまま、一度、二度、切り結ぶ。魔物が後ずさる。

もうアルファードに刻印を与えることはあきらめたらしい魔物は、突然、常人では考えられないような不自然に早い動きで飛びすさり、再び塀際の暗がりに飛び込んだ。その姿が、たちまち闇に溶ける。

アルファードは剣を構え直して闇に目を凝らした。

どこから魔物が出てくるかわからない。里菜はそろそろとアルファードの後ろに移動しようとした。

そのとたん、闇が突然、人の形をとって里菜に躍りかかった。

影のようなマントをなびかせて、どこか存在感の希薄な灰色の姿が目前に迫る。

里菜の手の中で、短剣がふいに重さを失った。まるでそこにだけ、突然の無重力状態が発生したかのように。里菜の反射神経が右手に命令を出すより早く、短剣が勝手に持ち上がろうとしたのだ。

けれど、魔物が里菜に向かって片手を伸ばした瞬間、無防備にな

った魔物の正面に、アルファードが躍り出た。
かすかな月明りに、音もなく剣が閃く。
アルファードは、無表情のまま、魔物の心臓部を深々と刺し貫いていた。それはまるでごくあたりまえの日常の仕事をするように無造作で、ひたすら正確な動作だった。
そのとたん、マントの中で、魔物の形がすっと溶けるように消え失せた。一瞬、内側から不自然な燐光をちらりと漏らして、マントはふわりと地に落ちた。白い煙がかすかに立ち昇り、すぐに消えた後は、灰色の染みのように石畳に残ったマントの下に、もう人間の形はない。ただの布切れだ。かすかに、不快な刺激臭だけが漂う。
細いおぼろ月の下の短い無言劇は、里菜がその筋立てを理解する間もないほどあっけなく幕を閉じた。
「……二体目だ」
血もついていない剣を鞘に収め、アルファードは淡々と言うと、石畳の上からマントを拾い上げ、無造作に腰のベルトに挟み込んだ。そこには、すでに一枚、魔物のマントが下がっている。
灰色のそのマントは、血の染みがついているわけでもなく、別にどこが汚れているということもないのだが、何か不潔で気持ちが悪いような気がして、里菜は触る気にもなれない。が、アルファードは、そんなことは全く気にもならないらしい。
ほとんど風のない夜だったが、その時、かすかに潮と魚の臭いのする風がそよいで、魔物が消えた後の異臭を散らしていった。
イルベッザも下町のこのあたりは、海岸近い低地で、海寄りの西側に低い防風壁を持つ粗末な家々は、ほとんどが＜風使い＞と呼ばれる漁り人たちのささやかな住み処だ。彼らは、ごく局地的に風をあやつる魔法の技術を代々受け継ぎ、木の葉のような小さく頼りない帆かけ船で、つつましい沿岸漁業を営んでいるのだ。
「リーナ、今日はもう終りにしよう。……今回、魔物を君の方へ行かせてしまったのは俺のミスだ。怖かっただろう。すまなかった」
と、アルファードは里菜を振り返った。その肩の上に、東の空低く

昇った細い下弦の月が、白く潤んで浮かんでいる。
「ううん、怖くなかった。何だかよくわからないうちに終っちゃったし、それに、魔物はアルファードが絶対やっつけてくれるって思ってたから……。でも、アルファードは大丈夫？　怪我、しなかった？」
「ああ。大丈夫だ。帰ろう」
「うん。……アルファード、ごめんね。何だか、あなた一人で戦わせといて、あたしは何もしないで後ろでつっ立ってるだけみたい。それで報奨金は半分こだなんて、何だか悪いわ。もっとあたしにも、何かできること、ない？　ほら、魔物を挟み討ちにするとか、おとりになるとか……」
　里菜はずっと、万一のためにとアルファードから剣さばきの講習を受けていたが、里菜の短剣はこれまで一度も実際に振るわれたことはない。ただ、魔物の探知機がわりにお守りのように持ち歩き、アルファードが戦う間、念のために抜いて持っているだけなのだ。
　けれど、里菜のこのけなげな言葉に、アルファードは苦笑した。
「いいんだ。君は十分働いている。君は魔物の魔法を封じてくれているじゃないか。君がいるから俺は戦えるんだ。君はそこにいてくれるだけでいい。下手に動くとかえってあぶないから、なるべくじっとしていてくれ」
　アルファードは笑ったが、里菜の心は重かった。自分が役に立っていない気がするのも理由のひとつではあるが、本当は里菜は、アルファードが自分なしではこの仕事ができないこともよくわかっていた。それがよけい辛かった。
（あーあ……。君はそこにいてくれるだけでいい、君がいるから戦える、か……。もっと別の状況で言ってくれたら、けっこうジーンときちゃうかもしれないセリフなのになあ。でも、本当に、ただ文字通り、そういう意味なんだもんね……。そう、たしかに、あたしは、今、アルファードに必要とされている。だけどそれは、アルファードにとって、いいことなのかしら。アルファードはこの仕事に

すごく一生懸命だけど、ちっとも幸せそうじゃない……）

たしかに、この魔物退治の仕事で、アルファードは目覚ましい功績を上げ、今では、ちょっとした英雄だ。そしてそれは里菜も同じことである。

あの剣術のチャンピオン＜ドラゴン退治のアルファード＞が、再び都へやってきて軍に入ったという噂は、ミーハーなイルベッザ市民たちの間にあっという間に知れ渡った。市民たちはアルファードに期待を寄せ、アルファードは期待どおりの活躍を見せた。市民たちは熱狂した。その熱狂を、さらに高めたのは里菜の存在だった。

市民たちは、半ば伝説的な魔法使いユーディードを、今も忘れていない。その出身地イルゼール村から百何十年ぶりに魔法使いが現われた。しかも、魔法を消すという、今まで聞いたこともない不思議な力を持っているという。そしてその魔法使いが、なんと、まだうら若い、ほっそりとした可憐な乙女だというのだから、これはもう、アルファード以上に話題性がある。

市民たちは、里菜とアルファードが魔物退治をするところを実際に見てはいないから、里菜が実はアルファードの後ろでつっ立っているだけだ、などということは知らない。市民たちの想像の中では、里菜は、その華奢で愛らしい姿からは想像もつかないような強力な魔法を次々と繰り出して、白魚の指先一本でバシバシ魔物をやっつけている、ということになっているらしい。

今やふたりは、市民たちのスターである。時には、名もしらぬ市民から、激励の言葉を添えた贈物が宿舎に届けられていたり、ふたりを一目見ようとする市民たちが宿舎や食堂や練兵場の回りをうろついていたりする。みんな、ふたりが自分たちを魔物から守ってくれると、無邪気に信じているのだ。

けれど里菜は、この人気を、手放しで喜ぶことはできなかった。自分たちのしていることに疑問を抱いてもいたし、また、自分が、市民たちに思われているような強い魔法使いではないことも後ろめたかった。そしてなによりも、この人気にもかかわらず何か満たさ

れぬ思いを抱いているらしいアルファードの様子が、里菜は気懸りだった。

アルファードは、何だか変わってしまった。

別に、里菜に辛くあたるということはないのだが、里菜はもう、アルファードがわからない。

村にいた頃、アルファードは、里菜と歩く時はたいてい少し離れて歩いた。今は、危険に備えて、ふたりは毎晩、手の届くほど近くに寄りそって歩いている。それなのに、アルファードがどんどん遠くなっていくような気がする。

村にいたころの、あの、やさしい目をした温和で素朴な若者は、もういない。夜ごとイルベッザの闇を徘徊し、闇にひそむ魔物を狩り続けるアルファードは、まるで、満たされることのない飢えに取りつかれた不吉な夜の獣のようだ。

暖かかったその目には、今、何か憑かれたような渇望が宿り、唇の端には、消えることない焦燥がこびりついている。

彼の望んでいるものが名誉や名声なら、彼はもう、それを十分手にしている。けれど、名声は彼の心を満たしていない。得体の知れぬ衝動に突き動かされて、彼は、呪われた狩人のように魔物を追い続ける。魔物を消せば消すほど、彼の焦燥は深まるように見えるのに、それでも彼は魔物狩りを休まない。

（アルファードのこれって、ワーカホリックっていうやつかしら。もしかすると、あたしがアルファードをこんな状況に追い込んだのかもしれない。あたしさえいなければ、アルファードは今もあの美しい山の牧場（まきば）で、平和に羊を追っていたかもしれないのに……）

そう思いながらも、今の里菜は、アルファードがただの羊飼いでいることに、心の底では満足していなかったことに気づいている。

出会ったばかりの頃、里菜は、アルファードのことを、何でも知っていて何でも出来る、余裕たっぷりの大人だと思っていた。ちょうど、ごく幼い子供が、親が自分と同じように悩んだり迷ったりする存在であることに気づかず、彼らに知らないことや出来ないこと

があるなどとは想像もせずに、安心しきって親を頼りきるように。
でも、今、里菜は、傍目にはそんなふうに落ち着き払って見えるアルファードが本当はずっと何か思い悩んでいたらしいということに気づいている。
たぶん、彼は、自分が何を求めているのかを知らずに、苛立っているのだ。彼には彼の苦悩があったのだ。里菜には窺い知れない、彼だけの苦悩が。
アルファードは、この、ぬかるんだ灰色の都で、何を想っているのだろう。
都へ来ると決めた当初、里菜は、軍隊が嫌ならいつでも辞められるというアルファードの言葉を信じていた。アルファードはあんなに力持ちなんだから、他に仕事がなければ道路工事でもすればいいだろう、都でならそういう仕事がきっといくらでもあるのだろうと。
でも、今はアルファードにそれを言わなくて良かったと思っている。里菜はここへ来て、自分の認識の誤りを知った。
ここではみんなが魔法を使い、魔法の存在がすべての仕事の前提になっているから、産業機械のようなものが一切発達していない。また、細かい分業体制や流れ作業体制が発達していないから、誰もがあらゆる行程に関わる熟練工でなければいけない。その中でも特に、建設関係の仕事というのは高度で特殊な魔法の技術を必要とする仕事の代表格らしい。この世界では、魔法が使えないものに出来る仕事など無いのだ。
それを考えると、アルファードを魔物退治に駆り立てる不可解な衝動が、少しだけわかるような気もする。彼は、村で羊飼いしか出来なかったように、ここでは、魔法を消す力を持つ里菜と組んでの魔物退治しか出来ることがないのだ。
（あたしが軍を辞めたいといったら、アルファードはどうするかしら……。村に帰るしかないんじゃないかしら……。もし、今ここで、村に帰りたいって言ったら……？）
春になってから、里菜の心に何度も浮かんだ誘惑である。

冬が過ぎてもアルファードは、村に帰るかどうかについては一言も言い出さなかった。どう考えても、帰る気はないのだろう。里菜はそのことについて、問い質すことができずにいた。アルファードにはぐらかされるのはわかっていたし、それに、ふたりには、まだ村に帰れない理由もあった。ローイの行方が依然として知れないのだ。

彼がイルベッザにいて、もしかすると何らかの苦境に陥っている可能性もあるのに、それを置いて二人だけさっさと村に帰るわけにはいかない。

そのまま、春は深まり、すでに暮れてゆこうとしている。アルファードは村のことを決して口にしようとしない。

前を行くアルファードの背中が遠い闇の中に消えていこうとしているような気がして、里菜は足を早めてアルファードに追いつくと、衝動的にそのシャツの袖を掴んだ。

手を離したら、きっとアルファードは、一人で闇の中に行ってしまう。里菜を置き去りにして、自らの心の奥に潜む、自分だけの闇の中へ。

（どうしてアルファードは、何も言わずに、一人で黙って暗いところへ行ってしまうんだろう。どうしてあたしを一緒に連れて行ってくれないんだろう。ただ一言、ついて来いと言ってくれれば、どこへでも、どこまででも一緒に行くのに。アルファードの闇の中へ。そこがどんなに暗くても。それがアルファードのものであるなら、その闇の、色も匂いも感触も、全部知りたいのに。知って、理解して、愛したいのに――。

そんな風に思うのは、もしかすると、リューリが言うように、あたしが何も知らなくて、何も分かってないから――今まで、本当に辛いことなんか何も知らずにぬるま湯の中で生きてきて、本当の闇の暗さなんか何も知らないからかもしれないけど。ただの甘さなのかもしれないけど。それでも、やっぱり、アルファードのそばに行きたいのに。隣にいてあげたいのに――）

里菜は無言でシャツを掴む手に力を込めた。どうあっても放すまいと、細い指先が布地を堅く握り締める。

アルファードは少し驚いたように振り向いて里菜を見下ろしたが、何も言わずに、里菜のすがるようなまなざしを避けて夜空を見上げた。

月の細い夜だったから、星がとてもよく見えた。里菜の知らない、異世界の星座がふたりを見下ろしていた。

アルファードは、さりげなく里菜の指を振り解きながら唐突に星の一つを指差して、静かに言った。

「リーナ、あそこに黄色い星があるだろう。あれが羊星だ。それと、そのまわりにごちゃごちゃかたまっている小さな星、あれは子羊座だ。……君は、羊の赤ん坊を見たことがあるか？　それは愛らしいものだ。今ごろ、牧場（まきば）では、この春に生れた子羊たちが元気に跳ね回っているだろう……」

そう言って遠くを見たアルファードの目は、ほんの束の間、かつての、あの、暖かな大地の色を取り戻した。けれど、里菜が何か言おうとして口を開いた時には、アルファードは再び口を引き結び、ただ、闇に向かって歩き出していた。

その背中は、いつか野営の焚き火のそばで背を向けて横になった時のように、無言で里菜を拒絶していた。

ひととき、星の光を見上げた後は、行く手の闇が一層深くなったような気がした。

第三章＜イルベッザの闇＞　第五場

固いベッドの上で寝返りを打って、里菜は目覚めた。額に汗が滲んでいる。

もう、昼過ぎだろう。小さな窓からは陽が差し込んでいる。

また、魔王の夢を見た。

最近、里菜はほとんど眠るたびに魔王の夢を見る。

夜通し魔物を狩って明け方に眠りに就く時には、身体は疲れているのに精神は妙に緊張している。そんな時はいつも、自分がそれまで歩き回ってきた闇の残滓を纏っているような気がして、何だか汚れているように感じられる。闇の中、魔物を追い求めているうちに、自分も魔物の同類になってしまったような気がしてくる。夢を見るのは、そんな時だ。

眠るのはたいてい朝方、明るくなる頃なのに、夢の中は、いつでも夜だ。

いつかのように魔王が白馬に乗って現われて、あれこれと語りかけてくることもある。そしてふと見ると、その馬が白骨であることに気がついたりする。

かと思うと、魔王は何も言わずに、ただ、里菜に暗い凝視を投げかけ続けるだけのこともある。その凝視は、里菜に恐怖と陶酔を共に呼び起こす。

また、時には、魔王は、目に見える姿を持たずに夢に訪れる。里菜はただ、黒い翼に包まれて、どこまでも、ほの暗い虚空を飛んでいたりする。もう二度と地上に戻れないような気がしてさびしくなるが、一方で、こうして飛んでいるのがなんだかなつかしいような気がして、いつまでもそのまま飛び続けていたいと思う。生れる前、自分はこんなふうに虚空を漂っていたのかもしれないと思う。里菜はもう透き通って、肉体は消え失せているはずなのに、自分を抱く羽根のやわらかくひんやりした空気のような感触には不思議と現実

味があって、目覚めた後も生々しく肌に残っているような気がする。
この日、夢に現われた魔王は、初めて出会った時のように大鎌を背負った丈高い黒衣の姿をとって、夢の中にも重たく淀む湿った春の闇の底に、すっくと立ち現われた。
『エレオドリーナ、我が妻よ……』
いつものように、魂に呼びかける。
『いいかげん、魔物退治には飽きたころではないかな？　そして、そなたの薄汚い羊飼いにも……。あの男は、そなたを少しでも幸せにしてくれたか？』
「うるさい！」と、里菜は叫きつけるように叫んだが、それは、いきなり弱みをつかれた狼狽のせいだった。自分とアルファードのことに、触れられたくなかった。自分が幸せでないことを、知りたくなかった。そして、どんな形にせよ魔王が現われるたびに、どういうわけか自分が無条件で魔王に魅惑されてしまうことを、認めたくなかった。
「あなたにそんなことをとやかく言われたくないわ！　放っておいてよ。あなたに何がわかるの！」
そう言いながらも、里菜は、魔王のもとに歩み寄りたいという欲望と必死で戦い続けているのだ。
『私には、そなたのことは何でもわかる。あの男のことも、少なくともそなたよりはよく知っている……。あれは、世界のすべてを破壊しつくす夢を見ながら、それを実行することも、あるいはその欲望ごと自分を殺してしまうこともできなかった、負け犬だ……』
魔王は、声なき声で低く笑った。悪意に満ちた、侮蔑の笑いだった。
『あの男は、羊の皮を被った臆病なドラゴンだ。だから常にドラゴンを殺し続けてこなければならなかった。自分がドラゴンの仲間でないことを、他人に対しても自分に対しても証明し続けるために、自らが呼び寄せたドラゴンを自ら殺し続けてきたのだ』
「うそよ！」

『うそではない。そなたの羊臭い恋人は、そなたにたった一言の愛の言葉でも、ほんの一瞬のくちづけでも、与えてくれたか？　あの負け犬が、いつまで待ってもそなたにくちづけのひとつも与えてくれないのは、自分の吐く息に硫黄と腐肉の匂いがすることを知っているからだ……』

「……アルファードは、もう羊臭くないもん！」

言葉に詰まった末の的外れな返答だったが、それは本当だった。アルファードからは、もう、羊の匂いも犬の匂いもしなかった。夜を彷徨ううちに、その髪からは太陽と風の匂いが消え失せ、長い山暮しでほとんど地色になっていた日焼けさえいくぶん褪せたその肌からは、大地と草の匂いが消え失せた。ただ、かすかに汗の匂いだけがした。それは無明の闇の匂い――理解を拒む、不可解で理不尽な生命の深淵の闇の匂いだった。

里菜の言葉を無視して魔王は続けた。

『今ごろ、あの男は、己の昏い夢の中で、そなたの白い喉笛を食い破って甘やかなその血をすすり、か細いその腕をへし折って柔らかな骨をポリポリと噛じりながら、血まみれの銀の巨体を歓喜に打ち震わせているだろう。だが、あれは、そなたほど正直でなく、そなたよりも臆病だから、目が覚めた時には何も覚えていまい。ただ、理由もわからず後ろ暗い思いを抱き続けるのだ。愚かな男だ……』

「アルファードに、何かしたの？　あたしの夢に出てくるのはしかたないけど、アルファードには手を出さないで！」

『私は、何もしていない。あの男は、ドラゴンを呼び込む質なのだ』

と、魔王は笑った。

『そなたはそれであの男に惹かれたのだろう。それはそなたが、ドラゴンたちの主たる私に惹かれているからだ』

「やっぱりあなたが、ドラゴンを操っていたのね！　アルファードが呼び寄せたなんて嘘ついて。あなたがこの世界にドラゴンをけしかけていたんだわ！」

『私はドラゴンの主ではあるが、ドラゴンを人界にけしかけたりは

していない。人が呼ぶから、ドラゴンは行くのだ……。それでもそなたはつまらぬ人間なぞを愛し続けるのか？　薄汚れたこの俗世に、まだ留まろうと言うのか？　私と来れば、永遠に、美しいものだけに囲まれて暮せるというのに……』

「美しい、死んだ夢の結晶たちに囲まれて、ね。いやよ！　誰が、あなたに惹かれてなんか……！」

そう言いながら、里菜はまた、魔王の広げた腕に向かって足を踏み出そうとしていた。

その時、里菜の背後から、あどけない声が、ひっそりと言った。

「……魔王は、かわいそうね……」

一瞬、魔王の回りの空間が、魔王のかすかな狼狽を映したように揺れた。

はっとして振り向いた里菜の後ろに、小さなキャテルニーカが、しん、と立っていた。

「ニーカ！」

里菜はとっさにキャテルニーカに駆け寄り、その身体を抱きよせて庇いながら叫んだ。

「ニーカ、なんであなたが、ここに！　こんなとこへ来ちゃだめよ、危ないんだから！」

その時、里菜は、いつか里菜がドラゴンの前に飛び出した時のアルファードの怒りを理解した。それから、里菜を後ろにして戦う時、アルファードがどうしてあんなに強いのかも。それはきっと、里菜が相手の魔法を消すからだけではなかったのだ。

一人っ子の里菜は、これまで、守るべき、自分より小さいものを持たなかった。里菜はいつも誰かに守られてきた。けれど、今、自分より弱いものを背後に庇った時、自分が急に大きく、強くなったような気がした。

里菜の腕を擦り抜けて、恐れ気もなく魔王に歩み寄ろうとするキャテルニーカを、里菜はあわてて抱きとめた。

「だめよ、ニーカ、出ないで。下がっていて！　こいつはロリコン

なんだから。あなたなんか、何されるかわかんないわよ！」
そう言って、里菜は魔王をはったと睨みつけた。それまでものすごく大きく見えていた魔王が、何だか急に一回り小さくなって、長身ではあるが普通の人間の大きさに見え、あんなに眩く美しかった大鎌の輝きが、わずかに色褪せたような気がした。
『エレオドリーナよ……。あまりにも誤解が甚だしいようなので言っておくが、私は別にロリコンとやらではないぞ』と、弁解するように言った魔王の言葉は、今までより僅かに気弱げで、どこか人間臭くさえあった。
魔王はもう、いままでのように美しくも恐ろしくも魅惑的でもなかった。里菜は平気で魔王を見返すことが出来るようになって、強気で叫んだ。
「うそ。だって、あなた、前に、赤ん坊と結婚したいって言ったじゃない！」
『それは、そなたの勘違いだ。そなたが私の言葉尻を捕えて、勝手にそう思い込んだのだ。私はそんなことは言っていないはずだ』
「そ、そうだったかしら……？　でも、どっちにしても、危ないやつには違いないわ！　アタマのおかしい死神なんて！」
『たしかに私は狂っているかもしれないが……。エレオドリーナ、私が狂っているとしたら、それは、そなたのせいだ。そなたが私をこのように狂わせているのだ』
「ダサい！　ダサいわ！」
突然笑い出した里菜に、魔王はほんの少し、たじろいだように見えた。里菜はばかにしたように言葉を続けた。
「それって、口説き文句のつもり？　だったら、すっごくクサいわよ。最悪。でも、それを本気で言ってるんだったら、もっとひどいわ。自分の性格が悪いのを他人のせいにするなんて、性根が甘ったれてるわよ。あなたなんかにそんなふうに甘えられたくないわ！」
その時、キャテルニーカがそっと里菜の腕を押し退けて、今度は里菜が止める暇もなく魔王の方に一歩進み出て呟いた。

「魔王。……かわいそうね」
　里菜はまたキャテルニーカを引き戻そうとしながら叫んだ。
「バ、バカッ、ニーカ、止めなさい！　こんな甘ったれた死神野郎に下手に同情なんかすると、寒い寒い北の荒野の、隙間風のピューピュー入るおんぼろお城に、さらっていかれちゃうのよ！」
『私の城には、隙間風など入らん』と、魔王は里菜に侮然と言葉を返してから、自分の前に進み出たキャテルニーカを静かに見下ろした。
『そうか、そなたが、この娘のそばにいたのか……。いつか、森の中で、娘を呼び戻したのもそなただったのだな……』
「そうよ」
　キャテルニーカはあっさりと答えた。
　魔王は渇望と畏れの入り混じった奇妙なためらいを見せて、低く呟いた。
『久しいな、キャテルニーカ。まだ、生きておったのか……。シルドーリンの古き緑の宝石、我が小さき娘よ……』
　それを聞くなり、里菜はいきなりすっとんきょうな声を上げた。
「む、む、娘ですってェ！　やだ！　うそ！　ニーカ、それ、本当？　ひどいわ、この死神野郎ってば、あたしをお嫁に欲しいとか言っておいて、実は、さ、妻子持ちだったなんて。バカにしてるわ。ずうずうしいにも程があるわ！」
　あまりにズレた里菜の反応に、魔王は、妙に人間くさい困惑した様子で弁明を始めた。
『そういうわけではない……。私は、人ではない。娘と言っても、人間の言うような意味での娘ではないのだ。生物としてのこの娘の父というわけでは……』
「言い訳なんか聞きたくないわ！　この妻子持ちの女たらし！　不潔よ！」
『……少なくとも私は、妻がいるとは一言も言っておらんが。そなたはすぐそうして勝手に思い込む癖があるようだな。この子供も、

血のつながりという意味での娘ではない。ただ、眠りは小さき死、忘却は死の娘、そういう意味だ』

「何、それ。何かの呪文？　でも、要するに、本当の娘じゃなくて、娘みたいなものって意味ね。あたしを妻って言うのと同じで、あなたが勝手にそう言っているだけなのね。よかった。ニーカみたいないい子が死神の娘なんかのはずはないと思ったわ！」

ヴィーレやミュシカのいる優しい村を離れ、ローイが去り、頼みのアルファードも遠くなってしまった今、キャテルニーカは、里菜の心の支えだった。

キャテルニーカがいなければ自分はおかしくなってしまっただろうと、里菜は時々、ふと、思う。キャテルニーカは、ただ無邪気に眠っているだけで、里菜を慰め、押し寄せる心の闇から守ってくれる。あたしの守護天使、と、里菜は時々、胸の中で、そっと呟いてみる。

そのキャテルニーカが、魔王の娘だなんて、信じたくなかった。

キャテルニーカは静かに魔王に手を差し伸べた。

里菜はぎょっとしたが、魔王はその手を取ろうとはしなかった。むしろ、怯えるように、僅かに後ずさった。

キャテルニーカは悲しそうに手を降ろした。魔王は不思議な渇望の気配を纏って、ただ立っていた。

しばらく三者とも無言だった。やがて我に返った里菜があわててキャテルニーカを抱き寄せ、魔王から引き離した。

「あっち行け、この死神！　ニーカに触わらないで！　あなたはニーカを娘なんて言うけど、ニーカはあなたのこと、お父さんって呼ばないじゃないの！」

それまでずっと、力に満ちあふれ、若くはないが決して老いてもいないように見えていた魔王が、急に小さく縮んで年老いたように、疲れた、弱々しい嘆息を漏らした。

『エレオドリーナ。私を嫌うな……。私はそなたにも、その子供にも、危害を与える気はないのだ……』

けれど魔王は、すぐにまた傲然とした声音を取り戻した。
『言っておくが、エレオドリーナよ、私がすぐにそなたを手にいれようと思えば、どうにでもできるのだ。今のそなたの、その、か弱く脆い肉体や幼く不完全な精神を破壊してしまうのは、たやすいことだ。そんなかりそめの形を壊してしまっても、そなたの真の存在は損なわれることなく私のものになる。
だが、私は、そうしないことにした。これはちょっとした酔狂に過ぎぬが、私は、今のそなたが気に入ったのだ。あるいは、幼く不完全で愚かなものたちを偏愛する、そなたの下らぬ性向に、私も多少影響されたのかもしれん。そのように儚く脆いものである今のそなたを、なぜか私は損ないたくない。そのままで手にいれたいのだ。だから今は、何も手出しはすまい。
私を恐れるな……。夏が過ぎたら、北へ来い。待っている……』
かき消すように、魔王の姿が薄れた。同時に、腕の中のキャテルニーカも消えて、里菜は目覚めたのだった。

まだぼんやりしたまま、里菜はうっすらと目を開けて、天井を見上げた。
その時、ふいに、すぐ近くでキャテルニーカの声がした。
「お姉ちゃん、起きた？」
里菜が驚いて半身を起こすと、キャテルニーカが梯子につかまってベッドの横に頭を出し、首をかしげてにっこり笑っていた。
「ニーカ、どうしたの？　学校は？」
「お昼休み」
「忘れ物？」
「ううん、お姉ちゃんに会いたいと思って。お昼御飯の後、時間があったから、ちょっとだけ戻ってきたの。お姉ちゃん、怖い夢を見たのね。うなされてた。でも、もう大丈夫。ね？　じゃあ、あたし、学校行くね！」
そう言ってキャテルニーカは、手を伸ばして里菜の頬に軽く触れ

たと思うと、すぐに梯子から身軽にヒョイと飛び降りた。
「ありがとう、ニーカ」と、里菜が急いで起き上がった時には、キャテルニーカはもうぱたぱたと廊下に駆け出していた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第六場（1）

南の都イルベッザは、やわらかく湿った春を過ぎ、眩しい夏を迎えた。

海沿いの低地で細々と米が栽培されていることからもわかるように、イルベッザの気候は、梅雨はないまでも、ごく日本と近いらしい。が、『常春の都』と言われるだけあって、より四季の温度差が少ない、穏やかな気候に恵まれているようだ。冬は東京よりかなり温暖だったが、夏の暑さはだいたい東京と同じ程度だろう。

石畳に夏の光がぎらぎらと照り返すイルベッザ城構内の一角。うだるような暑さの中、昼休みを楽しむ役人や治療師たちがのんびりと行き交い、わずかな木陰では、学生たちがたむろしてだべっている。

「おっはよー、リーナ！　お寝坊さん！」

いきなりすごい勢いで背中を叩かれて、里菜は飛び上がった。

もちろん、声の主は振り返らなくてもわかる。もし、声でわからなかったとしてさえ、こんな乱暴者はリューリしかいない。

夜明が早い夏は、魔物退治も早く終りになるので、里菜は以前よりは早く寝ることが多い。それでも、起きるのはどうしても昼近くだ。闇に慣れた目に白昼の日差しが眩しい。

目を細めて振り返った里菜が光の中に見たのは、リューリだけではなかった。今日も彼女は、後ろにぞろぞろと『子分』を従えていたのだ。

ともに勤務時間が不規則な里菜とリューリは、運よく食事の時間が合えば、宿舎街の食堂で一緒に食事をする。リューリには里菜の他にも一緒に食事をする仲間が大勢いて、ここへ来てすでに半年が過ぎた今、里菜は、その日の食事時間の都合で変わるそのメンバーの大半と、リューリの紹介ですでに知りあいになっている。

今日のメンバーは彼女の他に四人。里菜にもお馴染みのメンバー

ばかりだ。
　リューリの後ろでニコニコしている小柄な少年は、彼女の従弟、天才少年の誉れ高い、若干十五才の新鋭学者エルティーオだ。前にリューリが話していた、『アルファードの大ファン』である。
　彼と初めて会ったのは、ここへ来て間もないころだった。ぜひアルファードに彼を紹介させてほしいというリューリの頼みで、四人で一緒に食堂に行ったのだ。
　彼がどんなに天才でずばぬけたエリートかをリューリからさんざん聞かされて少々身構えていた里菜は、あの日、リューリに連れられて約束の待ちあわせ場所に現われた彼を見て、どっと力が抜けた。なにしろ、彼を見た瞬間に里菜が抱いた第一印象は、「わあ、ナントカ少年合唱団！」というものだったのだ。
　何というか、清純派風である。
　十五才といえば、『あちら』での中学三年生にあたるはずだ。普通なら、髭の生えかけた薄汚いにきび面に、脳みそとアンバランスなむやみとでかい図体というのが相場だろうに、この清らかさ、かわいらしさはなんだろう。
　彼は、従姉のリューリとは似ても似つかぬ白い肌、やわらかそうな茶色の髪に空色の目の少年だった。似ているところといえば、年の割にやや背が低いことくらいか。そして、これもリューリに似ず、特別に美形というわけでもないおとなしい顔立ちなのだが、これがなんだか、ちょっと童顔で、妙にかわいいのだ。リューリに言わせれば、性格のかわいさが顔に出ているのだそうだ。
　自分の目の前でそんなことを言われた時は、彼もさすがにちょっとむっとしていたが、そんな様子もまたかわいくて、里菜は、失礼だと思いながらも、つい吹き出してしまったのだった。
　リューリが彼を紹介した時も、おかしかった。リューリは自慢そうにこう言ったのだ。
「これが従弟のエルティーオ、ティーオよ。どう、かわいいでしょ！　これで、もう、すっごい天才なんだから。あたしたち、姉弟同

然に育ったの。ねっ、ティーオ。リーナ、言っとくけど、この子をいじめたりしたら、あたしがすっとんで行くからね！」

「リューリ！　もう、いいかげん、会う人ごとにそんなこと言うの、やめてよ。今じゃ誰も僕をいじめたりはしないんだから」

ティーオは、苦りきった顔で――そんな顔まで、やっぱりかわいかった――リューリを肘でつついて言った。里菜にキャテルニーカを甘やかすなと説教したリューリも、この従弟に対しては、なかなか過保護らしい。

アルファードに引き合わされた彼は、頬をピンクに染め、目の中に星をきらめかせた感激の面持ちでアルファードを見上げて、こう言った。

「僕、以前から、あなたのことをとても尊敬してるんです。あの武術大会の時、僕は、人間は魔法なしであんなに強くなれるものなのかと感動しました。そう、あなたは人間の可能性について、僕に考えさせてくれたんです！」

この、ずいぶんと大袈裟な賛辞に、返答に困ったアルファードが、「ああ、それは、どうも……」と、あらぬかたを見ながらぼそぼそ言っていると、ティーオはなにやら小さな袋を取り出して、彼に差し出した。

「あの、これ、プレゼントです。使って下さい。そのう……、魔法なしでも火を呼び出せる道具です。僕が発明しました。ちょっと、開けてみてください。ほら、そっちの棒の先を、そっちの石でこするんです」

アルファードが言われるままに取り出した袋の中身を見て、里菜は叫んだ。

「こ、これっ……！　マッチじゃないの！」

ずいぶんと武骨な造りではあったが、たしかに原理はマッチだ。摩擦で火を起こすことさえ知られていないこの世界で、この少年は、たったひとりで、火打ち石を飛び越してマッチを発明したのだ。たしかに天才だ。

「『まっち』とはなんだ？」と言いながら、アルファードは、ティーオが手ぶりで教えるとおりにマッチを一本擦った。最初はうまくいかなかったが、何度目かで、マッチはぼっと音を立ててかなり派手に燃え上がった。アルファードはそれを目を丸くして呆然と見つめていたが、すぐに軸が短くなって炎が指先に迫ったので、あわてて地面に投げ捨てた。危うくアルファードの指先を焦がしかけたマッチは、石畳の上であっという間に燃え尽きた。

「そう、そうやるんです。これ一本一本は使い捨てで、こうして出した火を、すぐに、あらかじめ用意しておいた蝋燭などに移して使います。今はこれしか手もとにないんですけど、なくなったら、また、いくらでも作れます。次に作る時は、もっと小型化、軽量化して、あと、もっと持ちやすく、擦りやすく改良したいと思ってるんですけど……」

「す、すごいわ！　ありがとう、ティーオ！　これ、すっごく便利よ。どこででも使えるし。ね、アルファード？」

驚きのあまり黙り込んでいるアルファードに代わって、里菜が言うと、アルファードも黙って何度も頷いて、やっと言った。

「あ、ああ。……ティーオ、君はこれを、わざわざ俺のために発明してくれたのか？　この世界に、俺以外には、これを必要とするものはいない……」

「ええ」と、ティーオは、はにかんだ笑みを見せた。汚れなき天使の微笑みである。

「あなたのことを知るまで、僕は世の中に魔法を使えない人がいるなんて考えても見ませんでした。でも、たとえ一人でもそういう人がいるなら、その人がなるべく他の人と同じように不便なく日常を暮していけるよう、本人だけでなくみんなが工夫するべきだと思ったんです。今、もっと他にも研究をしているところです。これであなたの生活が少しでも便利になればうれしいです」

「ありがとう、ティーオ……。しかし、こんなふうに、使い手の魔法の力に頼らずに引き出せるように、ものに魔法の力を込めておく

なんていうのは、＜本物の魔法＞でしかできないことだと思っていたが……」

「ああ、それは、たぶん魔法じゃないんです。もちろん、加工の段階ではあれこれと魔法を使いましたが、その原理自体は魔法じゃないと思います。物に魔法を込めたんじゃなくて、物が持っているもともとの性質を研究して、それを引き出す工夫をしたんです」

「そうよ、これは……、これは、科学よ！」という里菜の呟きは、小さな声だったので、誰も気にとめなかった。

「アルファード、あなたが僕に教えてくれたんです」と、ティーオはアルファードをまっすぐ見つめて言った。

「人間には、魔法以外にも使えるものがあるってことを。あなたには力が使える。僕には――もちろん、あなたや他の人にも使えるんですけど、人より余計に、頭が使えます。実は最初、魔法を組み合わせてこういうものを作ろうと思った時は、何もできなかったんです。発想を変えて、魔法とは一切関係のないところで頭と手先だけを使ってやってみようと思った時から、最初の一歩が始まったんです」

里菜とアルファードがひたすら感心して聞き入っていると、横からリューリが口を開いた。

「これ作るのに、ティーオは苦労したのよ。忙しい本業の合間にやってたし、この方法を思いついてからも最初はなかなかうまくいかなくて。ね、ティーオ、あなた、さんざん前髪焦がしたのよね。前髪どころか睫毛も焦がしたし、一度なんか大爆発して、ドアまでふっとばしたのよね。頭はちりちりだし、顔は真っ黒だし、そこら中しっちゃかめっちゃかで。あの時は所長や管理人に怒られたわよねえ。あやうく研究所から追い出されるところだったのよね。火事が出なくてよかったわ」

ちなみに、名前からはいったい何の研究所なのかよくわからない『イルファーラン国立研究所』というのは、その実態も名前どおり何をやっているのかよくわからないところで、いろんな学者が集ま

ってそれぞれ勝手に自分の専門分野の研究をしている施設である。何人かでチームを組んでひとつの研究をしている人たちもいれば、ティーオのように一人で自分だけの研究を進めているものもいるのだ。

ティーオの『本業』は、魔法の照明器具造りだそうだ。イルベッザ城の廊下にあったあの不思議な照明こそ、ティーオの試作品で、これを全国の一般家庭にまで普及させることが彼の夢だと言う。

あれ以来、里菜は何度か、リューリと一緒にいる彼と出会っているが、その度に彼の前髪が焦げていたり、頬や服が煤けていたりするところを見ると、あの後も、彼はアルファードのために『マッチ』の改良をかさねてくれているらしい。

あれからもう二月ほどたったろうか。今日もまた、彼の前髪は焦げている。

ティーオの後ろには、さらに、キャテルニーカと、治療院の雑用係のフェルドリーン。

フェルドリーンは十四才、そばかすだらけの丸顔にいつも穏やかな微笑みを浮かべた、もの静かで大人びた少女で、無口だが、たまに口を開くと、どんな時も変わらぬ小さなやさしい声で必ず的確なことを言う。彼女の丸い顔と生真面目で考え深そうな灰色の瞳を見るたびに、里菜は、なんとなくナキウサギやヤマネといった小動物を連想する。

勉強好きで努力家の彼女は、この秋から、治療院で働きながら上級学校に通う予定で、春の終りに初級学校を卒業すると同時に、リューリの指導のもと、見習い修行に入ったのだ。

キャテルニーカは、どうやらたちまち彼女とも親しくなったらしい。

実は里菜は、最初のうち、キャテルニーカが学校や治療院でうまくやっていけるのか、とても心配だった。なにしろ彼女は、ひどく風変わりで浮世離れしていて、しかも年の割に妙に子供っぽく、一見、頭が足りないようにさえ見えるのだ。

けれど、どうやら、それは杞憂だったようだ。
キャテルニーカは、学校に行ったことがなかったので最初は年下の子供たちと一緒のクラスになったが、もともと読み書きはできたし、実はものすごく記憶力がよかったので、どんどん勉強が進み、今では同年令の子供たちと同じ学年に追いついている。そこで、彼女は、ちょっと風変わりではあるが普通の子供としてあたたかく迎え入れられ、友達もできて楽しくやっているらしい。
職場でも、治療の魔法の才能や薬草の知識が豊かな上に子供離れした判断力と落ち着きがあると重宝がられ、その屈託のない性格と愛らしい容姿もあいまって治療師や患者たちの人気を集め、治療院のマスコット的存在になっているという。
そうなると、里菜は、ほっとする反面、なぜか寂しいような気もして、複雑な心境である。子供が手を離れた母親の気分だ。

第三章＜イルベッザの闇＞　第六場（2）

四人の『子分』を引き連れたリューリは、
「リーナ、ひさしぶり。これから御飯なんでしょ。一緒に食べよ！」
と、里菜の返事も聞かず、さっさと里菜の腕をひっぱって歩き出した。

こうして、リューリやその仲間たちとたあいのないおしゃべりをする時間は、魔物退治という気持ちの荒む仕事をしている里菜にとって、とても貴重な、ほっとできる時間だった。
「ねえ、ねえ、リーナ、最近、どう？」と、リューリは、セルフサービスの列に並びながら、他の三人に聞こえないように心持ち声を潜め、里菜のほうに頭を寄せて、いつものように尋ねてきた。
里菜も、いつもと同じ答えを返す。
「どうって？」
「もう、またぁ。彼とのこと。何か、進展ないの？」
彼女は、里菜と会う度に、好奇心むき出しで挨拶がわりにこれを聞くのである。
でも、最近の里菜には、もう、これは、あまり面白い話題ではない。答えはいつも同じだ。
「別に……。あいかわらず。一緒に仕事してるだけ」
「何よぅ、だめねえ。仕事でも何でも、毎晩、一晩中一緒に歩き回っているんだから、ちょっと何とかしてみなさいよ。応援のしがいがないわ」
「そんなこと言ったって……」
噂をすれば影で、その時里菜は、遠くにちらりと、食堂から出ていくアルファードの姿を見かけたが、声はかけなかった。アルファードのほうも、こちらに気づいたのかもしれないが、そのまま人込みに紛れていった。
里菜がリューリと一緒の時は、彼は、里菜を見つけても決して近

づいてこないのだ。それは、彼自身がリューリを苦手だというせいもあるが、たぶん、自分がリューリに嫌われているのをちゃんと知っているせいもあるだろう。リューリは、里菜とすっかり親しくなった今でも、アルファードのことはどうしても気にいらないらしいのだ。

「あなたのことは応援するけど、あたしは、ああいう、何考えてるのかよくわかんないタイプって、ダメ。思っていることをはっきり言わない人って、一番嫌いなの」というのが彼女のアルファード評である。

里菜としては、リューリにアルファードをへたに気に入られてしまうよりは安心だが、それでも最初のうちはアルファードのためにあれこれ弁明をしていた。

「たぶん、彼は、ただ、ちょっと照れ屋なだけなのよ。あたしと同じで人見知りするの。普段は無口だけど、本当は根っから口下手って訳じゃなくて、何か説明する必要があったり何かの拍子にしゃべる気になった時はいくらでも長々としゃべるし、実はすごく雄弁なのよ。ただ、普段の時、普通の気軽な会話をするっていうのが苦手みたいなの。特に、女の子と話すのは苦手みたい」というように。

けれど最近では、もう、アルファードのことが、里菜にも、よくわからない。

彼はもう、光明るい山の村の、心やさしい羊飼いの若者ではない。殺し続けることでしか生きられないという生命の古い呪いに捕らわれた、非情な狩人だ。

アルファードは、何か満たされぬ思いに突き動かされるように、一種異様なほど熱心に魔物を狩り続けている。けれどその満たされぬ心の内をちらりとでも里菜に見せてくれることは、もう、なかった。

このところ、里菜とアルファードの活躍にもかかわらず、都の魔物はますます数を増しているようだ。

魔物が外部から集団で攻め込んでくるというなら、市門を閉ざす

なり、防壁にそって守りを固めるなり、こちらも集団で防衛線を張ることもできようが、魔物は町なかの闇の中に、どこからともなく、ふいに涌いて出るのである。

アルファードは、飢えた獣のように執拗に魔物を追い続ける。本当は魔物などいないほうがいいはずなのに、アルファードは、まるで、魔物の存在を求めているかのようだ。

そうして、手に馴染んだ愛用の剣を振るい、夜ごと魔物の心臓を機械のように正確無比に貫き続ける。その度に彼の瞳が暗い輝きを増す。

そしてこのまえ、ついに、里菜は、一番恐れていたものを見てしまった。

アルファードが魔物の身体を貫いた瞬間、その唇の端に、冷たい薄笑いが、かすかに浮かんだのだ。

ほとんど無表情に近いだけに、かえってぞっとするような、酷薄な笑みだった。その褐色の目の中に、一瞬、残虐な悦びに近いものが閃くのを確かに見たと、里菜は思った。

その帰り道、里菜はおそるおそるアルファードを仰ぎ見て尋ねてみた。

「アルファード、さっき、なんで笑ったの？」

「笑った？　俺が？　いつのことだ？」と、真顔で聞き返してきたアルファードに、里菜は、もう何も言えなかった。

「なんでもない。勘違いだったみたい」とだけ答えて、それきりふたりとも黙り込んだ。

けれどそれが勘違いなんかでなかったのは、わかっていた。

それからも、魔物を消すたびに、アルファードの薄い唇が、凍りつくような冷たい笑みの形に歪む。そして彼は、自分ではそのことに全く気がついていないらしい。

アルファードは、変わってしまった。それとも、これが彼の本性なのだろうか。アルファードを『ドラゴン』と呼んだ、夢の中の魔王の言葉が、ふと心をよぎる。

夢のなかにキャテルニーカが現われたあの時以来、魔王は里菜の夢に現われても、もう口をきかない。ただ、黙って里菜を見ている。アルファードの酷薄な笑みを見た夜は、近くにいながら遠くなってしまったアルファードよりも、遠くから自分を見守っている魔王のまなざしのほうがずっと親しくやさしいものに思えることさえある。里菜もまた、変わってしまったのだろうか。

何もかも、変わってしまった。ローイもいない。そして、魔王が勝手に里菜に押し付けた『夏まで』という期限も、まもなく切れようとしている。

思いに沈んでしまった里菜を見て、リューリは、心配そうに里菜の顔を覗き込んだ。

「元気ないわね。彼と喧嘩でもしたの？　それとも、もう彼はやめにしたの？　だめよ、あきらめちゃ。彼、絶対あなたのこと好きなんだから。あたしが保証する。まあ、あなたのほうが、もう彼のこと好きじゃなくなっちゃったんだったら、それはそれでいいけど。もしかして、他にいい男でもいた？」

「ち、違うわ。そういうんじゃないけど……。好きでなくなったわけじゃないし、あきらめたわけでもないんだけど……。でも、最近ほんとに、彼のことが、あたしにもよくわかんないの……」

「なに言ってんの！」と、リューリは里菜の背中を荒っぽく張り飛ばした。

「だめよ、弱気になっちゃ！　好きじゃなくなったんじゃないなら、迷っちゃだめ。彼を選んだ自分を信じるのよ！　信じれば、いつかは道は開ける！　がんばって！　ね、作戦を変えてみたら？　押してだめなら、引いてみるのよ。一歩退いて、逆にこっちに引っ張るの。それで相手には、自分のほうが押してると思わせとくのよ」

「できないわよ、そんな器用なこと……」

「そうよねえ。わかってても、できないのよねえ。わかる、わかる。あたしもよ。そういう駆け引きができるほど、あたしたち、器用じゃないのよね。あたしたちって、似てないようで似てるのよ。おた

がい、前途多難ね。でも、がんばろうね！」

「うん……」と、里菜は溜息をついたが、話す前よりはよほど心が軽くなっているのが、自分でも分かった。

五人はそれからひとしきり、ティーオの研究や治療院のできごと、構内の噂の数々について、あれこれ話の花をさかせていたが、そのうちにリューリが、最近聞き込んだ街の話題を持ち出してきた。彼女によると、これまでずっと山奥の隠れ里に潜んでいたタナティエル教団の黒衣の姿が、最近、都でもしばしば目につくようになったというのである。

もちろん里菜も、そのことは知っていた。それどころか里菜は、ここへ来てからも何度か、あの黒衣の連中が、密かに自分の回りをうろついているらしいのを目にしている。しかも、どうやらキャテルニーカは――彼女を問いつめてみてもどうせ忘れていて話にならないだろうから確認はしていないのだが――、彼らと何らかの形で接触を保っているらしい。

けれど里菜は、そのことを誰にも話していない。

最近なんとなく遠くなってしまったアルファードに相談するのも、これは全部自分の気のせいかもしれないと思うとなんだか気がひけたし、リューリには、自分が彼らと何か関係あるなどと思われたくなくて話せなかったのだ。

ただ、今、街で彼らを見かけるというのは、それとはまた別の話らしい。彼らは、人の集まる街角などに立って辻説法をしているというのだ。

何でも、彼らは、近いうちにやってくる＜運命の日＞に備えよ、というような意味不明のことを言っているらしい。彼らの言によると、その＜運命の日＞とは、この夏の最後の新月の日で、その日、昼のさなかに黒い月が太陽を隠し、闇夜が訪れ、その闇の中で人々は神の選別を受けるとか、あるいは神の恵みが与えられる、というのだ。

（日蝕のことかしら）と、里菜は考える。今まで里菜が見てきたと

ころでは、異世界であるこの国では星座の配置は『あちら』とは違うが、太陽や月の運行は、『あちら』とだいたい同じらしい。だから、日蝕があってもおかしくはないだろう。

「何だか知らないけど、いやあね。最近魔物も増えてるし、海の様子も変だって言うし、そのうえ、あの薄気味悪い連中がうろついてるなんてね。しかも、昼間に夜が来るだなんて、そんな不吉なこと言いふらして、みんなを不安にさせて。あたし、あいつら嫌いよ」

と、リューリが顔をしかめた。

ティーオが頷いてあいづちを打った。

「うん、なにしろ君は、昔、あいつらに売り飛ばされかけたんだからね。とんでもない迷惑だったよね。でもさ、昼間、太陽が隠れて暗くなるってことは、歴史上、何回もあったことなんだよ。そういうのを占星術師たちは＜女神の服喪＞って言って、凶兆と見なしているんだ。実際、ファルド地区全域が水没した二百年前の大津波の年にも、それがあったって言うよ。ただ、完全な真っ暗闇になるっていうんじゃなくて、太陽が半分だけ欠けて見えるとか、腕輪のように回りだけ光って見えるとか、全部隠れて黒く見えるけどあたりは満月の夜くらい明るいとか。まあ、目が暗さに慣れてないから実際より暗いように思えるらしいけど」

「へえ、そうなんだ。でも、それって、月と関係あるわけ？　月じゃなくて、太陽が黒くなるんでしょう？　だいたい、黒い月って何よ。昼間の月は白いわよねえ」

その時、ほとんど黙って聞き役に回っていたフェルドリーンが、その独特の、鳩のように穏やかで愛らしい小さな声で、ひっそりと口を挟んだ。

「あたし、あの人たちの話、立ち止まって聞いたんだけど、月は今、その日のために力を蓄えているって。どんどん大きくなっているんですって。それ、本当みたい。だって本当に、この春から、月はだんだん大きくなっているのよ。あたし、見たもの。あたしのおばさんで＜風使い＞のとこへお嫁にいった人がいるんだけど、やっぱり

言ってたわ。最近、海がやたらと騒ぐのは、月のせいだって。今年の春の大潮には、今まで来たこともないような高いところまで潮が上がってきて、下ファルドあたりの低地じゃ、軒先まで海が来た家もあるって。魚も、やたらと獲れたり、全然獲れなかったり、見たこともない気味の悪い魚が網にかかったりするって」

するとキャテルニーカがぽつりと言った。

「リーン、月は今、悪い夢を見ているのよ。かわいそうね」

里菜は、キャテルニーカがまたこんな奇妙なことを言って、みんなに変に思われやしないかとはらはらしたが、ここにいるものはみなキャテルニーカの風変わりな言動には慣れているから、こう言って笑っただけだった。

「ニーカはやさしいのよね。ニーカにかかっちゃ、月まで『かわいそう』なんだもの」

食事を終えて宿舎に帰る道々、里菜はこの不吉な噂について考え込んでいた。

そういえばたしかに、最近、月が大きいような気がしていたのだ。ただ、なにしろ星の配列さえ違う異世界のこと、そんなこともあるのだろうと、さほど気にしていなかったのだが、どうやらこれは、やはり異常な事態だったらしい。里菜は夜の野外を歩き回るのを仕事にしているが、今、普通の人はまず夜に外に出ることはないので、このことに気づく人が少ないのだろう。

思いに沈みながら里菜が宿舎に戻ると、宿舎の前でアルファードが待っていた。

これは非常に珍しいことだったので、どうしたのかと驚いた里菜があわてて駆け寄ると、アルファードは、挨拶抜きでいきなり言った。

「リーナ。今日は仕事は休みにしよう」

「えっ、どうして？　満月でもないのに。アルファード、具合でも悪いの？」

「いや。ちょっと、用事がある」
アルファードはいったんそこで言葉を切ったが、考え直したように、つけ加えた。
「……夕方、ローイを探しに行く。手掛かりがあったんだ」

第三章〈イルベッザの闇〉　第七場（1）

夜ごと魔物が街を徘徊する不穏なこの時代、かつては不夜城と謳われたイルベッザの盛り場がその活気と喧騒をひととき蘇らせるのは、日没前後の儚い黄昏時に限られていた。

昼間の通りは閑散として、それでもよく見るとあちこちの物陰に無気力そうな男たちがぼんやりと坐り込んでいたり、昼間の月のように悲しげな、疲れて色褪せた夜の女たちがのろのろと動き回って気だるい日常を営んでいたりするのだが、なぜか、まるで、人の死に絶えた廃墟のように見える。

その、生きているものといえば野良犬だけのように見えていた通りに、夕方近くなるとどこからともなく、灯火に集う羽虫のように群衆が湧いて出る。そして、黄昏の最後の光が消えると同時に、その幻のような賑いは、まるでこの街がかつての繁栄の夢を見ていただけだというように、ふたたび通りから忽然と掻き消えるのだ。

と言っても、彼らがみんな家に帰ってしまうというわけではない。外の人通りは途絶えても、酒場の窓やドアの隙間からは、夜を徹して明りとざわめきが漏れ続ける。市内に魔物が出没するようになった最近では、酒場の客はみな、まだ明るさの残るうちに店に入って、そのまま朝まで――あるいは翌日の夕方まで出てこないのだ。

そういう酒場から漏れてくるざわめきは、歌や笑い、話し声や嬌声といった楽しげなものばかりではない。時には、怒号、悲鳴、物の壊れる音などが混じる。それも、近頃は、かなりひんぱんにである。

朝まで店から出ないとなれば深酒をするものも増えるし、一晩中同じ客が同じ店で顔を合わせ続けることになるので、そりの合わない客同士のいがみあいも増えるのは当然で、昔から酒に喧嘩はつきものとはいえ、イルベッザの盛り場の治安の悪化と雰囲気の荒みようは最近特に著しく、今や酒場は喧嘩沙汰の温床なのだ。

イルベッザでは、盛り場は本来、地域や店によってガラのよしあしはあっても、基本的には比較的健全な息抜きの場だった。地区を選べば女性だけで歩いてもそれほど怖くなかったし、食堂を兼ねた酒場には近所の老人たちがたむろしておしゃべりやゲームに興じ、早い時間であれば子供連れで食事をしている地元住民も珍しくはなかった。

けれど、魔物が出没するようになってからは、そんな暖かな光景は見られなくなった。

今では、健全な市民はよほどの理由がないかぎり夜の街に出たりはしないから、今どきそれでも酒場にたむろしているような人々は、すでに健全な市民生活を投げうってしまったようなはぐれ者、刻印を受けて絶望に取りつかれているものなどがほとんどで、みな、暗い目をしている。

中でも目立つのが北部の出身者で、酒場では、今や、やわらかな北部訛りが声高なイルベッザ訛りにとってかわって巾をきかせている。

もともと酒場の中には宿屋をかねているものもあったし、そうでなくても二階や奥の小部屋などを客に貸しているところも多かったが、最近では、ほとんどの店が改装や増築で簡易な宿泊施設を確保するようになり、住む家も家族も失った北部の民の中には、こうした貸し部屋に半ば住み着いてその宿賃と酒代にわずかな日銭をほとんどそのままつぎ込む、無目的で荒んだ生活を送るものも少なくない。

そうした日雇い者たちの中には、春までのつもりで出稼ぎにきているあいだに故郷の村が魔物にやられ、帰るべき故郷や待っていてくれる家族を失ってしまったものも多い。そんな彼らの暮しには、もう、何の目的もない。ただ、あてもなく都市を漂うだけの根なし草である。

また、彼らの中には避難民も多く、そういう者たちは心にさらに深い傷を負っている。彼らは、愛する家族や同胞、住み慣れた家、

誇りと意地を持って励んできた百姓の仕事、もともと地力の乏しい北部で先祖代々根気強く改良し続けてきた農地といったものを、身も凍るような恐ろしい体験の末に失ってきているのである。

北部を襲った災厄のうちでもっとも恐ろしいのは、実は魔物ではなく、＜魔王の灰色の軍勢＞と呼ばれる人間の姿の軍勢だった。

魔物の軍勢の後につき従って来る彼らは、魔物と同様、半ば幻めいた灰色の影のような姿を持つが、魔物のように灰色のマントを着ているわけではなく、普通の農夫のような服装をしている。ただ、その衣服も身体も、ぼんやりとした灰色で、色彩がない。そして、時には、剣や弓矢の代わりに鋤や斧を持っていることもある。全く口をきかず、音を立てず、表情のないうつろな目をした幽鬼のような連中で、魔物が去った後、火や光に弱い魔物に代わって、畑や家々を根こそぎ焼き払っていく。

が、彼らの本当の恐ろしさはそういう行為とは別のところにあった。

逃げ遅れて彼らに遭遇してしまった村人は、しばしば、彼らの中に、かつて刻印を受けて死に至ったり、あるいは襲撃の混乱の中ではぐれたり魔物に切り殺されたりしたはずの身内や近隣の知人によく似た姿を見てしまうことがあるのだ。

それを見たものは、たとえ＜魔王の刻印＞を受けていずとも恐怖と衝撃のあまり腑抜けのようになってしまうし、半ば気がおかしくなってしまうものもいるらしい。

そういう恐怖と喪失の果てに故郷を捨てた彼らは、さらに逃避行の途中で、家族がはぐれたり野盗に襲われたりといった苦難に見舞われることも多い。避難民の多くが縁故を頼ってカザベル街道沿いの地方都市などに受け入れられる中、どこにも落ち着く場所がなく遠いイルベッザまでも逃げ伸びてきたような者は、その中でも特に辛い思いをしてきている者たちだ。

ところがそうしてやっとたどり着いた都には、住む家も、安定した職もない。しかも、郷里ではほとんどが百姓だった彼らは街の暮

しや仕事に馴染めず、ますます孤独を深め、心を荒ませていく。
こうした大量の避難民の流入と、それに対する＜賢人会議＞の無策は、当然、元からの市民たちの生活にも影響を及ぼす。都には、貧困と犯罪がはびこり、治安と風紀は乱れに乱れ、人心は荒廃する。そして、その荒廃が最も端的に現われる場所が、こういう場末の盛り場なのだ。
今は、そんな荒んだ盛り場が短い華やぎを見せる黄昏時。
この街にはいかにもそぐわない、質素だがきちんとした堅実な身なりの、見るからに健全で浮ついたところのみじんもない逞しい若者と、やはり質素で地味な服装の、まだ子供のように幼げな清純そのものの少女が、ぎこちなく寄り添って歩いていた。
その少女――里菜は、不安げに身を固くして、アルファードの上着の裾を掴んでしっかりと握りしめながらも、目だけは好奇心一杯に見開いて、きょろきょろとあたりを見回している。イルベッザにきてから半年以上たつが、里菜は仕事の他ではほとんどイルベッザ城構内を出ることもなく、名所見物も夜遊びもしたことがないから、盛り場の賑いが珍しくてしかたないのだ。
と言っても、この界隈自体は、里菜にとって、むしろ馴染み深い土地だった。それこそ石畳のどこにぬかるみができるかまで知り尽くしていると言っていい。このあたりは市内でもよく魔物が出没する危険地帯で、里菜とアルファードのお馴染みの仕事場なのだ。
ただ、仕事をするのはいつも人通りの途絶えた深夜に限られていたので、こういう賑かな光景を見るのは初めてだったのである。
魔物退治を始めてしばらくは、ふたりはもっぱらこうした繁華街を中心に仕事をしていた。そういうところには、どういうものか、まるでそこに集う人々の退廃の気配に呼び寄せられるかのように、特に多くの魔物が出没するのだ。
けれど最近は、そういう盛り場ではあまりに治安が悪化しすぎて、人通りの絶えた深夜でさえ、魔物を見つけることより、人間による犯罪の現場を偶然見てしまうことのほうが多いくらいになった。

犯罪の取り締まりは本来正規軍の仕事だから、里菜たちには何の権限もないのだが、かといって、麻薬の密売くらいは見逃すにしても、目の前で殺人だの強姦だの誘拐だのが行なわれようとしていたら、止めないわけにもいかない。それでアルファードは、いちいちそういう犯罪者を追い散らしては被害にあいそうになっていたものを助けてやったり、時にはしょうことなしに犯罪者を捕らえて正規軍に引き渡したりしていたのだ。

里菜は、実は、そういう夜警の仕事のほうが、怖いけれども、魔物退治よりはよっぽど正しいことをしているという実感があって好きだったのだが、アルファードが「こう余計な仕事ばかり多くては能率が悪いし、こういう仕事で目立ち過ぎると正規軍に睨まれる」と言って、最近では、だんだん歓楽街での魔物退治を避けるようになった。

里菜には言わなかったが、アルファードは、そういうところで里菜を魔物以外の無用な危険にまでさらしたくなかったし、また、実を言うと、里菜に、この街の、あまりガラの悪い部分を見せたくなかったのだ。

だから今日も、アルファードは最初、一人でここに来るつもりだったのである。

だが、盛り場にローイを探しに行くというアルファードの話を聞いた里菜が、どうしても一緒に行くと言い張ったのだ。

「君のような女の子が行くところじゃない」と、言い聞かせるアルファードに、里菜は、

「だって、ローイはあたしの友達でもあるのよ！　それに、アルファードと一緒なら、何も危ないことなんてないでしょ？」と言って、強引についてきてしまった。

里菜にしてみれば、アルファードがローイを連れて戻ってくるまで、いつになるかもわからないのに、おとなしく宿舎で待っていることなんて、できるわけがなかったのだ。

けれど今、里菜は、いかにもガラの悪い男たちに通りすぎざまに

じろじろ見られて、アルファードの上着の裾を握る手に力をこめながら、ついてきたことを、もう後悔しはじめていた。するとその時、里菜の怯えに気がついたアルファードが、片手で里菜の肩を抱き寄せてチンピラを睨みつけてくれたので、後悔はたちまちふっとんだ。アルファードがついていてくれれば、あんな貧相なチンピラなんか怖くもない。

アルファードがこんなふうに里菜を抱き寄せてくれるなんて、普段なら絶対にないことだ。里菜は嬉しくなって、アルファードの脇腹のあたりに——里菜の頭はちょうどそのくらいの高さだった——そっと頭をすり寄せた。するとアルファードは、困ったようにそっぽを向いてしまった。そんな無器用な様子は村にいたころの彼と少しも変わっていないと、里菜はこっそり微笑んだ。

＊

アルファードがローイの消息についての手掛かりを掴んだのは、この日の昼前だった。宿舎の部屋で、同室のラドジール——名前から想像がつくとおり、カザベル近郊の出身である——が、小声で歌を口ずさみながら身支度を整えていた。ラドジールは、ごく無粋で武骨な百姓の息子だったが、歌が好きで、起居の折節に、よく、郷里である北部の民謡などを口ずさむのだ。

ちょうど目を覚まして、寝台の中で聞くともなしにそれを聞いていたアルファードは、普段は聞こえていても気にもとめない、いささか調子はずれなラドジールの歌に、なぜかこの時、途中ではっとして聞き耳を立てた。

アルファードの注意を引いたのは、その歌のメロディーではなかった。それは、このイルベッザでもしばしば耳にする、北部の有名な古旋律にすぎなかった。

ただ、漂泊の孤独を感傷的な言葉に乗せたその歌詞の断片が、ふとアルファードの心にひっかかったのだ。

次の瞬間、アルファードは、掛布をはね除けてガバっと身を起こした。

「ジール！　その歌を、どこで聞いたんだ？」

日頃もの静かなアルファードの険幕に驚いたラドジールは、身支度の手をとめ、目を丸くしてアルファードを見た。

「どこって、おめぇ、この歌、知らねえのか？　今、街で流行ってるんだぜ。まあ、おめぇは俺らと違って遊ばねえから、無理ねえやな。酒場になんか行ったこともねえんだろう」

＊

「でもアルファード、それって今まで聞いたことのない歌詞なんでしょ。どうしてローイの作った歌詞だってわかるの？」と、アルファードからそのいきさつを聞いた里菜は、当然の疑問を発した。

するとアルファードは、当然のように答えた。

「わかるさ。俺たちは付き合いが長いんだ。間違いない。なんていうか、そう……、言葉から、ヤツの匂いがするんだ」

「うそぉ、やだ、匂いだなんて。アルファードって、警察犬みたい」

「なんだ、それは？　……まあ、匂いというのはもののたとえで、つまり、内容とか言い回し、言葉の選び方、使い方の癖みたいなものでわかるんだ。あれは、絶対、ローイの詞だ。それに、俺はジールに、その歌を歌っているという歌うたいのことを尋ねたんだが、やつは、こう言った。茶色いくせっ毛の、ちょっと綺麗な顔をした若い男で、やたらとひょろひょろ背が高く、とんでもなく派手でキテレツな服を着ていた、と。しかも、その男のズボンは、左右の長さが違っていたそうだ」

「……ローイだわ。絶対、ローイだわ。そんなの、ローイしかいない！」

「だろう？」

第三章＜イルベッザの闇＞　第七場（2）

と、いうわけで、今、里菜とアルファードは、ラドジールから聞き出した、その歌うたいがいるという酒場を目指して歩いているのである。

そろそろ暗くなり始めるころだ。通りの人影も、だんだんまばらになってきた。

人の波が引き始めるにつれて逆に目立ち始めたけばけばしい身なりの街娼たちの姿に、アルファードはかすかに顔を曇らせた。

魔物対策として最近必ず酒場に付設されるようになった貸し部屋はまた、いかがわしい目的で使われることも多く、黄昏時の通りには、これから酒場に入る客を狙って街娼たちがあふれる。男たちの多くは、暗くなる前に好みの娼婦を選んで店に連れて入り、一緒に酒を呑んで騒いだ後、夜更けに連れだって二階に消えるのである。そして、これがまた酒場の風紀の乱れを助長していて、どの店でも、自分が連れてきた女より他の客の女のほうがよく見え始めて娼婦の争奪戦を始める愚か者が必ずいるし、逆に娼婦同士で客の取りあいから喧嘩が起こることもある。するとまわりの客も便乗して騒ぎ出すのだ。かと思うと、貸し部屋に行く前に、すでに店の隅でいかがわしさの度の過ぎる行為にふけるものまでいる始末で、最近の酒場のほとんどは、まっとうな堅気の女性などはとても入れないところになりはてている。

（ローイのいる店が、あまりいかがわしくないところだといいんだが……）と、アルファードは、自分の服にしがみ付いてきょろきょろしている里菜をちらりと見下ろして、ひそかに眉間を曇らせた。

もちろんこの街にも昔から娼婦もいれば娼館もあった。この国では売春は別に違法でも犯罪でもないし、それを悪徳と非難するような厳格な宗教も存在せず、特に南部ではその種のことがらについて道徳的にもあまりうるさくないから、彼女たちはそれほど

蔑まれることもなく、その多くはそれぞれ不幸な事情を抱えながらも、比較的あっけらかんと大きい顔をしているものが多かった。イルベッザでは、そのよしあしはともかく、娼婦はさほど反社会的な存在ではなかったのである。

そして、そういう世界にはそういう世界なりに秩序もあれば良識もあって、今のように、街娼たちが所構わずおおっぴらに立ち並び、縄張りや客を取りあっていがみあうというようなことはなかった。

けれど今、もう暗くなりかけたこの時間に通りに立っている娼婦たちは必死である。ここで客をつかまえそこねたら、後から酒場に入っていっても、そのつもりのある男たちはすでにほとんど敵娼を選んで同伴しているから、一晩あぶれる確率が高いのだ。相手が女連れだろうと、かまわず声をかけてくるのも無理もない。

ふたりがローイのいるはずの店の近くまで来たころには、あたりはほとんど暗くなっていた。最後まであぶれて、あきらめかけて一か所に溜っていた数人の娼婦たちが、アルファードの姿をみつけて、われがちに声をかけてくる。ぎょっとしてアルファードにしがみついている里菜になどおかまいなしである。

アルファードがそれを無視して通り過ぎようとすると、彼女たちはわらわらと集まってきて、あれこれ勝手なことを言い出した。

「ちょっと、お兄さん、女の子を一人しか連れないでお店に入ったら、田舎者の貧乏人だってバカにされるわよ。最低二、三人は連れていてこそ、通ってもんよ。四、五人連れていけば、もう、男の中の男！　太っ腹に見えること間違いなし。ねーっ！」と、これは、アルファードをお上りさんと踏んでの無茶なでまかせである。

かと思うと、怯えている里菜をじろりと睨んで、失礼にも、

「何、この子。イモ。あなたみたいな逞しいいい男が、なんでこんなちんけなガキ連れてるの？　あたしのほうがいいじゃない、ほら」などとポーズを取ってみせるものもいる。むろん、里菜が娼婦でないくらい一目でわかった上での暴言だ。

アルファードは表情を変えずに、狭い通路を遮断機のように塞い

で目の前につきだされた娼婦の脚を――彼女たちは、里菜がこの世界で今まで一度も見たことのない短いスカートをはいていた――道にはみ出した邪魔な木の枝かなんぞのようにそっけなく払い除け、里菜の肩を抱えて娼婦たちの間を擦り抜けた。

後ろから、諦めた娼婦たちの罵倒雑言が追ってくる。

「なによ、でかい図体して、あんたなんか男じゃないわよ」

「そんな子供なんか連れて歩いて、どうする気？　このヘンタイ！」

里菜は思わず振り返って怒鳴り返した。

「子供じゃないわよ！　こう見えても、十七よ！」

娼婦たちは一瞬あっけにとられて、それからどっと笑い出した。

「うそォ！　やだあ、信じらんない。かわいそう。ちんちくりん！　ぺっちゃんこ！　それで十七だなんて……」

わなわなと怒っている里菜の肩を、アルファードがぽんと叩いた。

「リーナ、ほっとけ。構うな」

「……うん」

里菜は、まだ笑いころげている娼婦たちから目をそらして、アルファードに肩を押されて歩き出した。

里菜も、彼女たちがいかに不幸な境遇であるかを知ってはいるのだ。こんなふうに通りに立っている女たちの多くは、北部からの避難民の百姓娘のなれのはてなのである。今、こうして里菜をあざ笑っているこの瞬間にも、彼女たちは、里菜などが生半可に同情することさえ許されないような、深い悲しみの淵に立っているのだ。それに、身を守る組織も持たずにこうして治安の悪い街角に立つ彼女たちは、犯罪の犠牲になることも多い。

その時、歩き出したふたりに、どこからともなく一人の老婆がすり寄ってきて、アルファードの袖を引いて伸び上がり、その耳元にしわがれた声で囁いた。

「……子供が好きなら、もっと綺麗な子を紹介するよ」

そのとたん、里菜の頭の中で、何かがプツンと切れた。目の前が白くなった。

次の瞬間、はっと気がついた里菜は、老婆に向かって振りあげたこぶしをアルファードに掴み止められていた。
「リーナ、いいから、ほっとけ」
「でも、でもあたし、あいつだけは許せない！」
あわてて逃げ去っていく老婆を睨みつけながら、里菜はまだ、震えるこぶしを握りしめていた。
「リーナ、気持ちはわかるが、あんなばあさんを殴ったところでどうなるものでもない」
アルファードは里菜の手首を掴んだまま、里菜を引っ張るように強引に歩き出した。
こうしていくつもの関門を乗り越えてたどり着いた目的の店は、アルファードがほっとしたことに、今のこのあたりとしては、まあまあ品のよさそうな、まともな店だった。と言っても、イルベッザ城構内の＜長老＞行きつけの店などとは大違いで、里菜のような世間知らずの女の子が足を踏み入れるためには相当の勇気を奮い起こさなければならないようなところには違いない。
が、
「なんだ、このお店？」と、看板を仰ぎ見た里菜は呟いた。
里菜はその店を知っていた。中に入ったことはないが、魔物退治で、この店の前は何度も通ったのだ。もしかすると、あの時、ドアの隙間から漏れてきたざわめきの中に、なつかしいローイの声も混じっていたのだろうか。
「いつか、ここの前で、魔物を一体みつけたわよね」
「ああ」
「あの時も、中にローイがいたのかしら」
「さあ。その頃は別の店にいたのかもしれないし、全く違う仕事をしていたのかもしれない」
実はアルファードは、ずっと前に、里菜には黙って、このへんの盛り場を一通り調べたことがあったのだ。ローイが身を持ち崩してこうした盛り場で酒びたりになっているなどというのは、いかにも

ありそうなことだ。けれど、その頃は、この界隈にローイの姿は無かった。

アルファードは、これまでに、ローイの消息を求め、月の明るい夜や昼間の空き時間を利用して、盛り場どころか牢獄まで一人で調べてまわった。苦労性のアルファードが想定したローイの境遇のあれこれのなかで最悪のものといえば、短慮ゆえに何かつまらぬ厄介ごとに巻き込まれた挙句とっくの昔に簀巻きにされてシエロ川の底に沈んでいるというものだったが、その次は、うかうかとギャング団にでも鼻をつっこんで抜けるに抜けられなくなり、アルファードたちに連絡をとりたくてもできなくなってしまったか、あるいはそれで運悪くしょっぴかれて牢屋に入れられている、というものだったのだ。

それらの可能性とくらべたら、歌うたいとしてそれなりにちゃんと働いているというのは、まあ、思ったよりまともな境遇である。同じ盛り場にいるにしても、アルファードの悪いほうの想定には、かっぱらった金で娼館に入り浸っているとか、小金のありそうな女をたぶらかして巻き上げた金で酒びたっているというのもあったのだ。——もっとも、この、後のほうの想像は、まるきりの杞憂でもなかったらしいのが後でわかるのだが。

はたして今日、ここで、ローイに巡り会えるのだろうか。

ドアを開けたとたんにむっと纏わり付く熱気の中に、ふたりは足を踏みこんだ。

薄暗い店内は料理の油や酒の匂いと人いきれでむせかえるようだった。入り口近くのテーブルに座っていた数人のむさくるしい男たちが、警戒するようにいっせいにこちらを見て、ドアが閉まると大方は興味なさそうにまた目をそらす。だが、そのうちの何人かが、そのままじろじろと、あからさまに好色そうな目付きで検分するように里菜を眺めまわしたので、怖くなった里菜はアルファードの腕にぎゅっと縋りついた。が、彼らは、アルファードにじろりと一瞥されると、とぼけたようにすっと目をそらした。

アルファードは、里菜をぶしつけな視線から身体で庇うようにしてテーブルの間を擦り抜けながら、言い訳するように呟いた。
「このあたりの店も、前はこんなじゃなかったんだが……」
「前って、アルファード、来たことあるの？」
「いや、この店は初めてだが、武術大会の後、自警団の連中と、この界隈で打ち上げをやった。そのころは酒場だって、こんなにガラが悪くなくて、もっと明るい、健康的な雰囲気だった」
「そっか。でも……、ローイはほんとにこんなとこにいるのかしら……」
アルファードは、人をかき分けて進みながら、店の奥の、人の群がっている一角に目をやった。
「いるようだぞ、ほら……」
と、言われても、背の低い里菜には前に立っている男の背中しか見えなかったのだが、その時、その一角で起こっていたざわめきが水を打ったように静まり、聞き慣れた楽器の音色が流れ始めた。ローイが愛用していた、例の『カマボコ板』の音色である。
いくつかの、もの悲しい和音の後で、静かに歌声が流れ出した。

夢に浮かぶ　ふるさと
遠い春の日射しの
ぬくもりも消え失せ
ただ残った　この唄……

聞き間違いようもない、ローイのやわらかなテノールだ。
里菜とアルファードは、その場で足を止めて歌声に耳を傾けた。
哀調を帯びた旋律に聞き入るうちに、里菜の脳裏に、春の日射しのような、スミレの花のような、ヴィーレの笑顔が浮かびあがった。
それから、夕日の中で菫色にオレンジにと淡く輝くエレオドラ山の端正で優美な姿が、やさしい翡翠色を帯びたエレオドラ川の流れが、アルファードと暮したささやかな家が、草をはむ羊の群れと、それ

を見守るミュシカのやさしい目が。

恐らく、今この歌を聞いている人々のそれぞれの脳裏に浮かんでいるのは、それぞれの故郷の風景、それぞれの懐かしい人の姿なのだろう。

静まりかえった人々の間を縫って、哀しい歌は流れる。

それは、故郷を失くした孤独なさすらい人の歌だ。

鼻を啜る音に振り返ると、さっき里菜をいやな目付きでじろじろ見たガラの悪い中年男が、テーブルに肘をついて顔を覆っていた。彼にしなだれかかっていた、ケバケバしく造ってはいるがまだ十代半ばと見えるどこか垢抜けない丸ぽちゃの娼婦の瞳にも、うっすらと涙が浮かんでいるのを里菜は見た。

やがて歌声が消えると、夢から覚めたようにざわめきが戻った。前のほうでは、客たちが口々にローイに次の歌をリクエストしているらしい。

アルファードが、里菜を抱えるようにしながら強引に人の群れをかき分けて前に進んだ。アルファードの肩に押されて目の前の人込みが左右に分かれた時、初めて里菜の目に、なつかしいローイの姿が飛び込んできた。

ローイは、ちっとも変わっていなかった。――つまり、あいかわらず、これ以上ないというほどド派手でケバケバしく、キテレツだった。

が、良く見ると、いったいそんな妙なものをどこから調達してくるのか、前にはしていなかった珍奇で派手派手しい装身具をあちこちにじゃらじゃらと大量にぶら下げ、髪はところどころに色粉を振りかけてまだらに染め上げて、そのキテレツさ、珍妙さに、さらに磨きがかかっているように見える。

ローイは、向こうのほうの客とにぎやかに言葉を交わしていて、アルファードと里菜の姿には気がついていない。ローイの前には例の赤い羽根のついた緑の帽子がさかさまに置かれていて、客たちは、拍手をしたり口笛を吹いたり、口々に次の歌をリクエストしたりし

ながら、次々とそこに硬貨を投げ込んでいた。
里菜の頭上で、突然、アルファードが声を上げた。
「『エレオドラの星』を」

第三章＜イルベッザの闇＞　第八場（1）

ざわめきに紛れそうなその声に、けれどもローイは、さっと振り向いた。

振り向きざまに、ローイは、アルファードが投げた一枚の硬貨を受け止めた。

硬貨の飛んできた方角を素早く見渡したローイの視線と、人垣の頭越しにまっすぐにローイを見つめるアルファードの視線が、一瞬だけ空中でぶつかり合うのが見えたような気がした。

直後、ローイは、なんとなくばつが悪そうについと目をそらしながら、

「ああ、あんたらか……」とだけ呟くと、そのまま、里菜とアルファードの視線を避けるように楽器に上に屈み込んで、和音をひとつ鳴らした。

「よし、次は『エレオドラの星』だ。南部の歌だが、みんなちょっと聞いてみてくんな」

客たちの一部からかすかに起こった不満げなざわめきも、前奏が流れ出すとすぐに収まり、酒場はふたたび静まりかえった。

流れ出したのは、村の宴会や旅の夜の語らいに、里菜も何度か聞いたことのある懐かしい歌だった。

エレオドラ山の上に輝く銀の星を眺めている幼い恋人たち。少年は、「大きくなったらあの星を君に取ってあげる」と誓う。やがて時は流れ、少女は大人になり、村を出ていく。幼い日の約束は忘れられ、それでも秋が来れば、故郷の山のかなた、星はあの日のままに輝く――。

ローイお得意の、牧歌的でセンチメンタルな恋の歌である。エレオドラ地方の古い民謡にローイが自作の歌詞を載せたもので、村に居た頃、ローイの十八番だった歌だ。

けれどローイは、北部からの出稼ぎ者が客の中心であるこの店で、

今まで、この南部の歌をあまり歌わなかったし、歌う時も、北部の地名を盛り込んだ別の歌詞をつけていた。そして、その歌詞には、もちろん別のタイトルがついていた。

だから、『エレオドラの星』というタイトルでこの曲を所望する声を聞いた時、彼は、はっとして振り向いたのである。

曲が終ると、ローイは、

「南部の歌もなかなかいいじゃないか」などと呟いて次のリクエストをしようとする聴衆に、

「悪いが、今日、ちょっとここまでな。まあ、みんな楽しくやってくれや」と軽く手を振ってひょいと立ち上がると、硬貨が入った帽子を拾い上げた。そして、アルファードと里菜についてくるようにと目で合図をして、沸き起こった不満のざわめきをしりめに、さっさと隅の席にひっこんでしまった。

ついてきたふたりに隣の椅子を示しながら、我が物顔で席に着いたローイは、

「そこ、座れよ。酒、奢るからさ。あ、リーナちゃんは何か冷たいお茶とか果実水なんかがいいのかな。ミルクもあるぜ。ああ、何かつまむものもとろうな。ここ、けっこう美味いぞ。少なくともあんたらの宿舎の食堂よりはぜったい美味いはずだ。食ってけや。おーい、ニーニちゃん!」と、ウェイトレスらしいエプロン姿の女の子を呼びつけて、ひとりで勝手にあれこれ注文しはじめた。

ニーニと呼ばれた娘は、アルファードと里菜にちらりと目を走らせて、妙に馴々しくローイに頬を寄せるようにして尋ねた。ちょっときつめだが、なかなかかわいい顔立ちの娘である。

「知りあい?」

「ああ、まあ、同郷の古なじみなんだ」

「この女の子も?」

「ああ、まあな」

「ふーん……。こちらの彼、ちょっとすてきじゃない。逞しくて」

「ああ、こいつがあの、<ドラゴン退治のアルファード>だぞ。い

つも言ってただろ、アルファードは俺のダチだって」
「えーっ、うそっ、それって、本当だったのォ！　てっきり、ただのフカシだと思ってた。ステキ！　どうりで強そうなわけね。紹介して！」
「うん、ニーニちゃん、こういうタイプ、好みだったよな。でも、こいつに色目使っても無駄だぜ。がちがちの堅物の女嫌い」
「うそぉ、こんな逞しい、男の中の男が、どうして？　勿体ない」
「いいから、仕事、仕事。酒、持ってきてよ」
「何よぅ、自分はさぼってて……。じゃあ、おふたりさん、ごゆっくりね」
　そう言って、エプロンの後ろのリボン結びを揺らしながら腰を振って立ち去っていくニーニのなかなか色っぽい後ろ姿を、里菜は思わず横目で睨みながらローイに尋ねた。
「何、あの子？」
「何って、見ればわかるだろ。この店の従業員だよ。皿運び。俺の同僚さ。俺、ちゃんと、この店の従業員なんだ。ただの流しの歌うたいとは違うんだぜ。歌うたい兼給仕手伝い兼用心棒ってとこ。手が空いたときには掃除や皿洗いまで手伝って、真面目に働いてんだ。まあ、最近は歌うたいのほうで人気が出ちまって、皿洗ったり料理運んでるヒマなんかないけどな」
「え、じゃあ、仕事さぼって、こんなとこで座り込んでていいの？」
「いいの、いいの。客の話し相手も仕事のうち。皿運びはニーニちゃんにまかせとこ。あの子な、ちょっと蓮っ葉じゃああるけど、あれでなかなか気のいい娘なんだ。ちょっとばかし態度が悪く見えても、悪気はないんだから、まあ、許してやってや」
　そこへ、さっきの人込みからローイを追って抜け出してきたらしい女性――娼婦たちとは服装が違うから、どうやら店の客らしい――が、後ろからローイの肩に手をかけて言った。
「ルディ、忙しいの？」
「う、うん、まあな。いや、ちょっと昔のダチが来てくれたんで、

話がしたいと思って」
「そう。じゃあ、お友達とのお話が終ったらでいいんだけど、今夜、あたしと付き合わない？」
「いや、悪いなあ、何しろすっげえ久し振りに会った同郷の仲間なんだよ。今夜は語り明かそうと思ってるんだ」
「残念だわ。じゃあ、また今度、ね？」
「あ、ああ……、また、そのうちにな」
思わせ振りにローイの頬を一撫でして立ち去っていく女の後ろ姿を睨みながら、里菜はちょっと声を尖らせた。
「ローイ。あのひと、何？」
「何って、そりゃあ、この店の客だよ……。最近、もう、どこの店も女の客なんてほとんど来ないんだが、ここは最近、俺目当てに、結構、女の客も来るんで、おやじも喜んでるんだ。やっぱ、女の客がいるといないとじゃ、店の雰囲気、違うからなあ。……な、何、睨んでるんだよ。俺が人気者なのは仕方ないじゃん。なにしろ、この美貌に、この美声、おまけに時代を先取りしたこの素晴らしいフアッションとくりゃあ……」
「ローイ。あなた、ほんとにここで、歌うたったりお料理運んだりしてるだけなの？　それに、ルディって、あなたのこと？　なんで偽名なんか使ってるのよ」
「べ、別に、偽名じゃねえよ。最近、巷じゃ、こういうふうに名前の真ん中へんから愛称を取るのが流行ってるの。ほら、よく、同じ名前が身近に二人いると、区別がつくように真ん中から愛称を取るじゃん。村にも、ドリーっていたろ？　エレオドリーナの、真ん中を取って、ドリー。で、都会じゃ人が多いからそういうケースが多くて、それで、そのほうが都会的で今風だっていう風潮になったらしいわけ。ローイなんてのは田舎臭いから、このほうがいいって、みんなが……」
「あたしは、ローイのほうが絶対いいと思うわ！」
「じゃあ、あんたは、そう呼んでくれよ。そんなの、好きな方でい

いんだよ。でも、この店じゃ、俺はルディなんだ。他の名前で呼び出そうとしても俺のことだとわかってもらえねえから、そこんとこは覚えといてな」

「へえー、そんならそれはそれでいいけど、で、あの女の人は、どういうこと？」

里菜の厳しい追及に、ローイはたじろいで、

「あのさあ、リーナちゃん、せっかくひさしぶりに会えたんだ、そういうどうでもいいことは横に置いといて、楽しく語りあおうじゃねえか、な？」と、馴々しく里菜の肩に手を回そうとしたが、間髪を置かずに払い除けられた。

そこへ、ニーニが酒と料理を持ってきたので、ローイは、救われたとばかり、運ばれた料理についてあれこれペラペラと解説しながら里菜に勧め始めた。

ところが、救われたと思ったのは一時のこと、料理の皿をテーブルに置き終ったニーニが、里菜たちを横目で見ながら身を屈め、ローイに囁いたのだ。

「ルディ、今日、お店がはねたら、あたしの部屋へ来ない？」

「わ、悪いなあ、俺、今日はちょっと……。そうそう、これから、俺の部屋で、この古なじみと語り明かして、そのまま泊まってってもらおう、なんて……。な、そうしようぜ」と、ローイはアルファードを振り返って言った。

「あんたら、別にこれから仕事ってわけじゃないだろ？　どうも、ここじゃファンの女たちがうるさくて、ゆっくり話も出来ないからさあ。うん、スターは大変なんだ」

ローイは、もう完全に開き直ってへらへら笑っている。

「と、いうわけでさあ、ニーニちゃん、俺、今夜、ちょっと早引けさせて貰うから、おやじさんに話しといてくんない？」

「いいけど、もう真っ暗よ。いくら近くでも、これから外へ出るなんて危ないわ」

「平気、平気。何しろ、ここにいるのは、かの〈ドラゴン退治のア

ルファード＞だぜ。ほら、こんなとこへ来るにも、しっかり剣なんかぶら下げてさ。どこ行くにもこれだけは持ってないと落ち着かないっていう野郎なんだよ。その上、こっちのかわいこちゃんはな、なりはちっちゃいが、なんと、かの有名な＜魔法使いのリーナ＞だ。噂の最強コンビさ。何も怖くなんかあるもんか」

「へえー、あなたが、あの……？　ほんっとに、こんなちっちゃい女の子なのねえ。すっごーい！　これからもがんばってね、応援してるわ！」と、ニーニは、初めて里菜に親しみのこもった笑顔を向けた。そんな様子を見ると、確かに気のいい娘らしい。

　が、そう思ったのも束の間、ニーニは立ち去りぎわに、

「じゃ、ルディ、気をつけてね。あしたは絶対あたしのとこへ来て。約束よ。ね！」と、ローイの頬に素早いキスをしていったので、里菜はまたしてもムッとした。ローイが誰と何をしようと、里菜は文句を言える立場ではないのだが、やっぱり何だか面白くない。

（やきもちなんかじゃないわ。これはヴィーレのためよ！　ヴィーレのために怒ってるのよ！　何よ、ローイってば、へらへらしちゃって）

　里菜の冷たい視線に気づいたローイは、慌てて、いっそうへらへらとしゃべり出した。

「あ、あはは、リーナちゃん、俺、モテちゃってさあ。な、なんだよ。だってさあ、こんな美形で、話術も巧みでセンス良く、その上、心優しく気配り細やかときちゃ、モテないわけないだろ？　嫌でもモテちまうもんは、しかたないじゃん。さ、じゃあ、まあ、とにかく、このつまみだけ、軽く飲みながら食っちまおうぜ。これ、ほんと、美味いんだからさ。で、後は俺の部屋で、ゆっくり語り明かそうや。……あんたらの活躍は、いろいろと噂に聞いてるぜ。俺もここで歌だけじゃなくて話なんかもしてるが、あんたらの村での活躍をよくネタにさせてもらってるんだ。みんな、あんたらがここへ来る前のこととか、全然知らないからさ。巷に正しい情報を広めるのも、あんたらの友達である俺の役目だろ！」

その時、ずっと黙っていたアルファードがいきなり口を挟んだ。
「ローイ。お前、俺たちの噂を聞いていたなら、俺たちがまだ軍にいるのはわかってたんだろう。何で今まで連絡してこなかったんだ。俺は、最悪の場合、お前がとっくに死んでいるかもしれないとさえ考えていた」
ローイはきまり悪そうに頭を掻いた。彼はその辺の話題を持ち出されたくなくて、わざとひっきりなしにしゃべり続けていたのである。
「ああ、そりゃ、悪かったなあ。別に大した理由はなかったんだ。ただ、まあ、あれこれとあってさ。最初のうちは仕事もねぐらも転々としていたから、ちゃんと一か所に落ち着いたら連絡しようと思ってたんだ。そうこうするうち、あんまり間が開いちまったんで、なんとなく今さら連絡するのもきまりが悪いような気がしてさあ。いや、そんなに心配かけてるとは思わなかったよ。悪かった」
「心配かけたどころじゃないわよ、ローイ。アルファードはこの半年、ずうっとあなたを探し続けていたのよ！　もう、ひとりで苦労して、しらみつぶしに探したんだから。ね、アルファード」
「ああ、さすがにシエロ川の底さらいまではしなかったが……」
「……あんたが言うと冗談に聞こえないから怖いや。あんた結構執念深いとこありそうだからなあ。しかし、よく半年も、しつこく探し続けたもんだ」
「なによ、そんな、人ごとみたいに。友達だもの、あたりまえじゃない。アルファードがどんなにあなたのことを心配してたと思うの！　そりゃ、アルファードは、そういうことあまり口には出さなかったけど、あたしにはわかってたわ。それに、あたしだって……」
「俺がいなくて、寂しかったか？」
「……うん」
「おお、そうか、そうか、よしよし」
「よしよし、じゃないわよ！　もう、バカ！」
「おっ、ひさしぶりにあんたの『バカ！』を聞いたなあ。ずっと聞

きたかったんだ……」
「じゃあ、もっと早く自分から聞きにきてくれればよかったのに！　いくらでもバカって言ってあげたのに！　ローイって、ほんとにバカよ！」
「あのさ、『バカ！』も聞きたかったけど、『ローイ、会いたかったわ！』とか、『毎日あなたのことばかり考えていたの』とか、そういう、愛のこもったやさしい言葉のほうがもっと聞きたいんだけど。できればそれに熱い抱擁とくちづけもつけてさ」
「バカッ！」
そこへアルファードが、また、強い調子で口を出した。
「ローイ。お前、やっぱり、わざと名前を変えてたんじゃないか？　歌うたいのルディという名なら、俺も何度か噂に聞いた。お前がローイと名乗っていれば、俺はとっくにお前を見つけていたはずだ」
「ああ？　被害妄想、被害妄想。あんたみたいな内にこもるタイプは、そういう妄想に取りつかれ始めるときりがないぜ。とにかく悪かったよ、心配かけたことは謝るからさ、そういうことはもう水に流して、な？　じゃ、俺の部屋行こう、すぐ近くだから。まあ、狭いし汚いとこだけど、この店の二階なんかよりゃあましだぜ。俺、ちっとは稼いでるから。ここで歌いはじめて最初のころはここの二階に住んでたんだけど、それだと女どもがおしかけてきてうるさいからさ。俺だってたまにはひとりになりたいもんな」
「ローイ！　そんな、ひとりになる間もないほど女の人が出入りしてたわけ？」
「リーナちゃん……。あんた、結構おっかないな。少し性格きつくなったんじゃない？　半年前はもっとかわいかったぜ」
「な、なによ、あなただって……。そりゃあ、前から女たらしだったけど……」
そう、ローイもやっぱり、どこか変わってしまった。どんなに派手な格好をしていても彼をかかしのように見せていたあの純朴さが、失われたような気がする。それに、なんだか、へらへらしているの

に、悲しそうだ……。

第三章＜イルベッザの闇＞　第八場（2）

うらぶれた路地を辿ってローイの部屋へ向かう道々、里菜は尋ねてみた。

「ねえ、ローイ、なんであんな悲しい歌、歌うの？」

「なんでって、そりゃあ……、まあ、ウケるからさ。あんたも見たろ、客が泣いてるの。俺は歌で飯食ってんだ。あ、念の為言っとくが、何も、女で飯食ってるわけじゃないんだぜ。商売なんだから、ウケるものを歌わなくちゃ。でも、悲しい歌しか歌わないわけじゃないんだ。気分を引き立てるような楽しい歌やら、粋で色っぽい恋の歌やら、自分の作ったのも元から酒場で歌われてるのもいろいろ歌うよ。でも、ここいらじゃ、やっぱり、あの手の歌が、一番、客の心を掴むんだよな。ほら、みんな、帰るクニをなくした北部の百姓だからさ。

……俺さ、昔は北部のやつって、知りもしないのに嫌ってたんだけど、知りあってみればみんな結構、いいやつなんだ。もちろん中には嫌なやつもいるが、それはどこのやつでも同じだろ。それにみんな、さみしいんだ。みんな、放浪者なんだよ。俺もまあ、いってみりゃ出稼ぎ者だから、わりと気持ちがわかるんだよな。俺、やつらのために北部の歌を歌うの、嫌じゃない。やつらを泣かしてんのも、ただ金のためだけじゃなくて……。泣くってのは、別に、よくないこと、辛いことじゃないんだ。やつらは、泣いたほうが悲しくなくなれるのさ。ああして今夜泣いておけば、また明日から、何とか生きていけるんだ」

「……ローイも、寂しかったのね？　ローイもふるさとを失くして……」

「い、いや、俺のクニは別に失くなっちゃいないさ。帰る気になりさえすれば、いつでも帰れるんだ。根なし草のあいつらとは違う……。ただ、少しは気持がわかるってだけさ。俺、毎日、面白おかし

く過ごしてんだぜ。みんながああして俺の歌に涙してくれるってのも歌うたい冥利につきるし、女にゃモテるし、酒は飲めるし。俺ってさあ、この業界、根っから向いてるんじゃねえかなあ。昔から宴会の盛り上げって得意だったしさ。歌は歌えるし話は出来るし、顔もよければ愛想もいいし、目はしはきくし気配り細かいし、おまけに何をやっても器用で腕っ節まで強いもんで、おやじにも重宝がられてかわいがられて、客の人気も抜群！　特に女の客は、一人残らず俺がお目当て。もう、天職だね。おっと、ここ。俺の部屋、ここの二階。階段、腐ってるから気をつけてな」

　ローイの部屋は、窓際に寝台がひとつと壁際に小さなたんすがひとつ、それにテーブルと物入れを兼ねているらしい木箱が部屋の真ん中にひとつぽつんと置かれているだけの、殺風景な狭い部屋だった。結構散らかってはいるが、なんとなくそこできちんと生活が営まれているという感じのしない、あまり使われていなさそうな部屋である。

　案の定、ローイはこう言った。

「さあ、散らかってるけど、入ってや。俺、普段あんまり、ここ使わないんだ。店が終った後、わざわざ帰るの面倒くさいから、二階が空いてればたいていそこで泊まっちまうし、そうでなくても……」と、ローイはそこで気がついて後の言葉をうやむやに濁したが、里菜はごまかされなかった。

「それか、誰か女の人の部屋に行っちゃうんだ？　お店の二階で泊まる時も、女のお客さんと一緒だったりして？」

「リ、リーナちゃん……。あんた、ほんとに追求厳しくなったなあ……。なんか、あったの？　あの素直でおとなしい女の子が、こんなにおっかなくなっちゃうような？」

「あ、あたしは別に変わってないわよ！　ローイが、ローイが……」

　里菜がそんなふうにローイに詰め寄っていたのは、ローイにとっては、むしろ幸運なことだった。里菜が、部屋の様子を検分するよりローイを糾弾するのを優先しているあいだに、アルファードのほ

うは、隅のたんすの上でくしゃくしゃになった女物の靴下止めを見つけてしまい、里菜に気付かれないうちにと、それをそっと背中に隠したのだ。

しばらくして里菜が出しっぱなしの汚れた食器に気を取られた隙に、アルファードは、

「おい……」と、ローイを肘で小突いて、靴下止めをこっそり後ろ手で手渡した。

「うわっ、やっべえ！　アルファード、悪りぃ」と、ローイはあわててそれを寝台の下に足で蹴り込んで、

「え、何、何？」と振り返った里菜に、こう言って、とぼけてみせた。

「いや、床に腐った団子が落ちてたもんで、捨てた。リーナちゃんが踏まなくてよかったよ」

「やだぁ、汚い。だいたい、このお皿、なに？　いったい、いつ使ったの？」

「ああ、これ？　ええと、前にここで飯なんか食ったのは、四、五日前かなあ……」

「えーっ、やだ！　そのこびりついた食べかす、きっと腐ってるわよ！　気持ち悪くて触れない！」

「大丈夫、それはそのまま放っといていいよ。これから酒を飲むのに使うお碗は洗ったのがあるから」と、壁の飾り棚からお椀を取ったローイの正面にアルファードが進み出て、真面目な顔でまっすぐにローイを見た。

「ローイ。お前がどんな暮しをしようとお前の自由だが、これだけは言っておく。ヴィーレに言えないようなこと――いつか村に帰った時、ヴィーレの前で胸を張って、都でこんなことをしてきたと話してやれないようなことだけは、するな」

とたんに、さっとローイの顔が強張った。血相をかえたローイは、いきなり乱暴にアルファードのむなぐらを掴み、その顔を睨みつけながら低く鋭く言った。

「二度と俺の前で、ヴィーレの名を口に出すな！　ヴィーレはもう、俺とは何の関係もねえんだ。あんな田舎のイモ娘なんか、もう、どうだっていいんだよ！」

その、今までローイが見せたこともないような荒んだ気配に、里菜は怯えて立ちすくんだ。アルファードを怖いと思うことはたまにあっても、ローイを怖いと思ったのは、里菜は初めてだった。この時のローイは、一瞬まるで本物のやくざもののように見えたのだ。

だが、アルファードは全くひるまなかった。

「なぜだ。どうだっていいなら、なぜそんなにヴィーレのことを言われたくないんだ」

ローイは叩き付けるように喚いた。

「うるせえ！　あんたにヴィーレのことをとやかく言われたかねえ！　こんどその名前を口にしたら、その不細工な鼻っぱしら、ブン殴ってやるぜ。言っとくが、俺はあんたなんかちっとも怖くねえんだ。最近わかったんだが、俺のほうがあんたより強いのさ。俺には平気であんたが殴れるが、あんたにゃ俺は殴れねえからな。そうだろう、え？」

アルファードはあくまで穏やかに応えた。

「……まあ、そうかもしれない。俺はお前を殴れない。手を放せ。リーナが怯えている」

「あ、ああ、すまねえ。悪かったな、つい、かっとしちまって。座れよ。飲もうぜ」

そう言って、床の敷物の上にどすんと腰を降ろしたローイは、もう、もとの愛敬者の顔に戻っていた。それでも里菜は、まだ少しローイが怖くて、黙ったまま、なんとなくローイから少し離れて座った。

それからローイはひとりで大酒を飲みながら、何か言いたそうな里菜にその隙を与えてはならじとばかりに、どうでもいいようなことを奔流のようにしゃべりちらし、再会の夜は更けていった。

しばらくしてアルファードが、ローイの話を強引に遮ってぽつり

と言った。
「ローイ。俺たちと一緒に来ないか？　魔物退治がいやなら、手続き上だけ俺たちとチームを組んだことにして宿舎に入って、何でも好きなことをしていればいい」
「え、やだよ、俺、そんなの。それであんたらの稼ぎで食わせてもらうわけ？　俺、そんなとこで、仕事もしないで何してればいいわけ？」
「働かずに遊んでいるのは、お前の得意じゃないか」
「だって、そりゃあ、からかって遊べる女の子でもいればいいけど、軍の宿舎なんて男ばっかでむさいとこでぶらぶらしてんのは、ちょっとなあ……。あ、でも、隣にゃ女子宿舎があって、たしか談話室までは出入り自由なんだっけか。おお、それに治療院にゃ、妖精の血筋のかわい子ちゃんがわんさか……。いや、いや、だからってなあ。……いいよ、俺、ここも、今の仕事も、気にいってるから。さっきも言ったろ。この仕事、俺に合ってるんだ」
「だが、お前は、あまり幸せそうに見えない」
いきなり核心をつかれて、ローイはちょっとうろたえた。
「な、なんでだよ。なんで、そんなこと言うんだよ。俺は毎日楽しくやってるよ。村にいたころみたいにあれこれうるさく言うやつはいないし、食うにも寝るにも酒にも女にも不自由しないし、好きな歌を歌って人に喜ばれてさ。……それに、じゃあ、なにか？　あんたらと軍に入れば俺が幸せになれるってのか？　あんたらだって――特にリーナちゃんは、俺よりたいして幸せそうに見えないぜ」
今度は里菜が多少うろたえたが、アルファードはゆるがなかった。
「ローイ。少なくともここで自堕落な生活を送るよりは、俺たちと来たほうがお前のためだ」
「何だよ、俺はちゃんと真面目に働いてるんだぜ。歌うたいが悪いってのかよ。村じゃ、よく、年寄り連中に、男のくせにピーピーと歌なんか歌ってって言われたもんだが、ここじゃ誰もそんなこと言わないぜ」

「いや、歌はいいんだ。歌うたいが悪いというんじゃない。それだって立派な仕事だ。歌は人の心を慰める。ただ、俺は、お前の暮しぶりが荒れていると言っているんだ」

「何だ、そりゃあ。女のことを言ってるのか？　だったら、おおきなお世話だよ。俺が何しようと、あんたに説教されるいわれはないぜ。何だってあんたは、そんな偉そうに俺に説教なんかするんだ？　あんた、俺の、何だ？　俺はなあ、実の親父にだって女のことで説教されたことなんかないんだよ！」

アルファードは至極冷静に指摘した。

「それはそうだろう。お前の親父さんが亡くなったのは、たしかお前がここのつかそこらのころじゃないか」

「ま、まあ、そういえばそうだったな。……とにかく、俺は誰の指図も受けねえんだよ」

そう言って、ローイは、そのまま目をそらし、しばらく黙ったまま、ひとりで勝手に酒を飲んでいたが、ふいに立ち上がった。

「さぁて、と。悪いけど、俺、やっぱり店に戻るわ。せっかく俺の歌を聞きにきてくれた客に悪いからな。みんな俺の歌を楽しみにしてきたんだ。……ひさしぶりに話ができて嬉しかったぜ。また、一緒に飲もうや。何も俺があんたらと一緒に行かなくても、これからはあんたらがそっちから来てくれればいつでも会えるんだから、それでいいじゃん。ああ、この部屋に来ても、俺、滅多にいないから、会いたい時は店に来いよ。酒、奢るからさ」

「……ローイ！」と、立ち上がった里菜に、

「リーナちゃん、悪いが、今夜はあきらめてくんな。俺と一晩付き合いたいっていうお嬢さんたちは行列つくって順番待ちしてるんだ。いくら古馴染みだからって、割り込みはいけねえや、な」と、ローイはふざけたウィンクを送った。

「そ、そんな……。ローイ、ふざけないで！　ね、もう少し話し合いましょ」

「俺は、もういいよ。悪いな。また今度な。そうそう、あんたら、

どうせ今日はもう仕事はしねえんだろ？　俺、明日の朝はここへは帰らないから、朝までででも昼までででも、ここ使っててていいよ。一眠りして帰れば？　あんたらが俺の寝台で一緒に寝ても、俺はちっとも気にしないぜ」

里菜とアルファードが、その言葉にぎょっとするのを見て、ローイはあきれたように言った。

「なんだよ、なんだよ。何もそんなに思いっきりぎょっとすることないじゃん。俺が何かよっぽどとんでもないこと言ったみたいに……。あんたらって、今だにそういうふうなわけ？　まあ、いいけどさ。別に、無理に一緒にとは言わねえよ。アルファードなんか、そのへんの床の上で十分だ。じゃあな」

「おい、待て、ローイ。店まで送る」

「いいよ。俺は護衛がいるほどやわじゃねえ。汚ねえとこだけど、ゆっくりしてきなよ」

「いや、どうせ帰るから、ついでに送る。リーナ、行こう」

深夜の路上を、三人は無言で歩いていった。蒸し暑い真夏の夜、石畳に足音がくぐもって響いた。

里菜は、淋しかった。ローイに再会する前より、もっと淋しかった。ものごとは、自分が思っていたより、もっとどんどん変わってしまっていたらしい。これからも、変わっていってしまうのだろう。親しい人が、遠くなってしまうのだろう――。

＊

アルファードとふたり、宿舎の前に帰り着いた里菜は、そこで立ち止まり、おやすみを言って立ち去ろうとするアルファードのシャツを引っ張って引き止めた。アルファードはけげんそうに振り向いた。

「何だ、リーナ」
「……アルファード。ローイは、帰ってこないのね……。何だか、何もかも、変わっちゃったみたい。あなたも……」
「俺は別に変わってはいないと思うが」
「ね、アルファード。あたしたち、また、村にいたころのように一緒に住まない？　近くに小さな家を借りて……」
「何でそんな必要がある？　ここで十分じゃないか」
「だって、アルファード……。あたし、もっと……、ずっとあなたのそばにいたいの」
　ためらいがちにうつむいて言う里菜から、アルファードは目をそらした。
「今だって、ほとんど一日中、そばにいるだろう。仕事も一緒だし、食事もたいてい一緒だし、夕方の空き時間も、君に馬の乗り方なんかを教えたりして一緒に過ごすことが多かったはずだ。あとは、離れているのは寝る時くらいで、その時は寝る場所が隣の部屋だろうと隣の建物だろうとたいした違いじゃないじゃないか、どうせ寝てるんだから」
　それまでうつむいていた里菜が、突然、敢然と顔を上げ、アルファードをまっすぐ見つめた。その頬が赤く燃えているのは、最初は恥ずかしさとためらいのせいだったが、今は、里菜が自分からここまで言ってもまだそらっとぼけてはぐらかそうとするアルファードへの怒りともどかしさのためだ。怒りがためらいに打ち勝ち、里菜は開き直って、怒りに輝く瞳で挑むようにアルファードを睨みつけた。
「アルファード。隣の部屋じゃ隣の建物とたいして違わないって言うなら、あたしはあなたと一緒の部屋でいいのよ。一緒の寝台だっていいんだから！」
　普段おとなしい里菜にいきなり攻勢に回られて、アルファードはぎょっとして後ずさりながら、口の中でぼそぼそと言った。
「リーナ……。滅多なことを言うもんじゃない……。君は、俺なん

かにそんなことを言っちゃいけない。いけないんだ……」
「なぜ？　アルファード、あたしが嫌い？」
「……いや。だが、俺は……。俺は、魔法も使えない役たたずだ。俺なんかと一緒になっても、君は幸せになれない。君はいつか、君にふさわしい相手を見つけて幸せになればいい。今の話は、おたがいに忘れて、今夜から、また一緒に仕事をしよう。じゃあ、おやすみ」
　里菜の瞳にみるみる盛り上がる涙を見ないように目を背け、アルファードは、逃げるように立ち去った。
　里菜はその場に立ち尽くし、涙に潤む目で、遠ざかるアルファードの背中をじっと見つめていた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第九場（1）

どこからともなくそろそろ人が集まり始めた、午後遅い盛り場。夏も終りに近い、すべてが疲れ果てた、けだるい季節である。

暑さに生気を奪われたようにだらだらと歩く人の群れに混じって、いくら盛り場とはいえちょっと場違いに派手な身なりの若い男が、ひょろりとした長身を持て余すように、やはりだらだらと歩いていた。得体の知れない護符だの飾り金具だの、あちこちからぶら下げた妙ちくりんな装身具類をじゃらじゃらいわせて、投げやりな仕草で服の隠しから金を探り出し、道端の屋台で、冷やした甘い香草茶を一杯飲み干す。

「おっさん、これ、甘すぎねえか？」と、その男、ローイは、屋台のおやじに、わがままらしく苦情を言った。

「ああ、そうかい？　あんたにゃ甘いかもしれないが、ほら、そのへんに立ってるきれいどころは、このくらいの甘さがお好みなんだ。うちの一番のお得意さんなんだよ」と、おやじは街娼たちを顎で示す。

「なるほど。あの娘たちもこの暑いのに突っ立ってちゃ、喉も乾いて大変だよな。じゃ、ま、ごちそうさん」と、椀をおやじに返して、ローイはまた、ぶらぶらと歩きだした。

懐には、今の小銭の他にも、さっきまで一緒にいたあばずれ女に貰った金が、むき出しのまま入っている。店がはねるまでローイの側で粘っていたその女客は、待った甲斐あって、明け方、ローイを自分の部屋に伴っていくことに成功したのである。

それは初めてのことではなく、ローイはこれまでも何度か店の二階でその女と付き合ったりしているのだが、それでもローイがいつでも彼女の思い通りになるとは限らない。なにしろ、彼が目当てで店にやってくる客は彼女一人ではないし、店の女の子も、あぶれた娼婦も、競って彼に群がるのだ。競争率が高いのである。

しかも彼は、気が向かなければ、その誰にも見向きもしないで自分の部屋に帰ってしまう。

アルファードはローイの部屋でたまたま女物の靴下止めを見つけてしまったが、ローイがいつもそこに女を連れ込んでいるというわけではなく、それは滅多にないことで、基本的に、ローイは、自分の部屋は自分だけの世界にしているのだ。

今日、ローイは、激しい競争に勝ち残ってローイとの一夜――というより、一朝――を手にいれたその女の部屋で、昼過ぎまで自堕落な眠りをむさぼってだらだらと過ごし、店に出る前に着替えでもしていこうかと自分の部屋に向かっている途中なのだ。たぶん明日も、彼は、別の女と店の二階で昼まで眠るのである。

そういう女たちの多くは、別れ際に、ローイに金や贈り物を渡してくれる。が、ローイには、別に自分が売春をしているという意識はない。相手が自分から差し出すものを、遠慮なく頂くだけだ。彼にとって、女からの贈り物を断わるのは言語道断なのである。

このことを知ったアルファードは、厳しい口調でこう言った。

「お前には、プライドというものがないのか」

つい一週間程前、アルファードはもう一度、今度はひとりでローイに会いに店に来たのである。里菜と一緒では話しにくい事柄もあるかもしれないからというわけだ。

厳しい顔のアルファードに、ローイは、ほとんどきょとんとして答えた。

「ああ？　あるよ、もちろん」

だから彼は、最初からいかにも『金で買ってやる』といった態度を取る女は、絶対相手にしないのだ。ついでに言えば、男も絶対相手にしない。『男と寝るくらいなら死んだほうがマシ』なのである。そのかわり、女なら、態度の悪い女以外は、それほどうるさく選り好みしない。あらゆる女性に対してわけへだてなく親切なのが自慢の彼は、そのへん、実に寛大である。

「それじゃあ、お前、女なら誰でもいいのか」と詰問するアルファ

ードに、ローイは平然と答えたものだ。
「うん、まあ、だいたい誰でもいいな。ただ、さっき言ったような性格の悪い女と、死んだおふくろが生きてればこれくらいかなあなんてしんみりしちまうような婆さんだけはごめんだが、それ以外は、とにかく女でありさえすれば、多少年増だろうと無器量だろうと、よく見りゃどこかしらにかわいらしいところがあるもんだ。それが見つけられないのは、見つけてやれない男の方の目が悪いのさ。あんたさあ、好みが偏屈すぎるんじゃねえの？」
「……そんなことしてて、お前は平気なのか？　いやだとは思わないのか」
「何で？　俺、いやなことはしねえよ。いやだと思った相手とは寝ねえもん。まあ、俺もまだ修行が足りねえから、後で、この女は思ったより性格が悪くてつきまとわれそうだから失敗だったなとか、そういうこともたまにはあるけどよ」
「いや、そういうことじゃなくて、そんなことして金を貰うのがいやじゃないのか」
「別に。俺、そのへんに立ってる女の子たちと違って、相手も選ばず身体売らなきゃ食っていけないってわけじゃなし、置屋に前借金があるとか、そういう身分でもないし。気が向いた時に気が向いた女と遊んでやるだけだもん。女と遊んで、自分も楽しみ、相手にも喜ばれる。それで相手の女が、俺と過ごして楽しかったからどうしても俺に小遣いをくれたいとか、プレゼントを受けとって欲しいと言うんなら、受けとってやって何が悪い。こんないいことあるか？　そうだ、あんたもやってみれば？　あんた、モテるぜ。ちょっとくらい顔がまずくても愛想が悪くても身体さえ立派ならそれでいいっていう悪趣味な女は結構いるからな」
「……ローイ。俺には、お前の考えていることがわからない」
額に手を当てて空を仰いだアルファードに、ローイはしゃあしゃあと答えた。
「おお、そりゃあ奇遇だなあ。俺も今、ちょうど、あんたの考えて

ることがさっぱりわかんねえと思ってたとこだ。だいたい、前から思ってたけど、あんた、頭、古いんじゃねえの？　古くて固い化石頭ときたもんだ。まあ、じいさんっ子だから無理もねえが。あのじいさんは、また、特別古くさくて頭が固い頑固ものだったからなあ。あんたは自分の名前も知らねえでじいさんに拾われたから、じいさんの教えることをなんでも鵜呑みにして、ああいうのが普通だと信じ込んで育ったんだろうが、ところがどっこい、あのじいさんは、変人だったんだよ。だから、あんたもそんなに偏屈になっちまったんだ」

「俺は今でも、じいさんが俺に教えてくれたことで間違っていたことがひとつでもあるとは思っていない。じいさんの考えが世間一般の常識と違うというのなら、それは世間のほうが間違っているんだ」

「だめだ、こりゃ。だからそれが、あんたもじいさんと同じくらい変り者に育っちまったっていう証拠なのさ」

「そうやって、食うに困っているわけでもないのに平然と金で身体を売るのが普通なら、俺は変人で構わない」

「だから俺は、金で身体売ってるつもりはないんだってばよ！　さっきから何度もそう言ってんじゃん。あんた、言葉わかんねえの？　頭悪すぎ」

こうして話はまるっきりの平行線だったのだが、アルファードは別にローイに説教をしに来たわけではなかったのだ。ただ、アルファードが店に来たのは魔物退治の仕事を早目に切り上げた明け方で、その時、ローイはちょうど、ほとんどの客が二階に消えるかテーブルにつっぷして眠ってしまっている店内から、女客の一人と連れだって抜け出そうとしているところだったのである。そこへアルファードがやってきたものだから、女を店の中で待たせて、うっすらと明るみ始めた店の前の路上でアルファードと立ち話をするはめになり、

「お前、まさか、あの女から、後で金を受け取るんじゃないだろうな」などと、アルファードから追及されてしまったのだ。

「ああ？　くれれば貰うよ。あの女は、たぶんくれるだろうな」と、当然のように答えたローイを、アルファードは、まるで宇宙人を見るような目で見た。

さらにアルファードがあきれ返ったのは、ローイが一時期、小金持ちの女に囲われていたのを知った時だった。アルファードは、ローイの境遇について、一応そういう可能性も考えていたのだが、その、あまり考えたくもないような悪い予想は、残念ながら当たっていたのだ。

それはイルベッザに来てしばらくたったころで、ちょうどその頃、この盛り場にローイを探しにきたアルファードが彼を見つけられなかったのは、そのためだったらしい。

もっともこれも、ローイ本人には囲われていたという意識は、まったくない。

「ちょっと年増だったけど、まあ、わりと奇麗だったし、最初は性格にもそれなりにかわいいとこがありそうに思えたから寝てやったら、いつでも俺と会いたいから近くに住んでくれって部屋を用意してくれて、ちょうど住むとこがなかったんで住んでやったのさ。そしたら、何を勘違いしたもんか、俺が別の女と遊んだら文句を言うんで、面倒くさいから、出てきた。俺は別に、あの女の持ち物になったつもりはねえんだ。それからはああいう女にひっかからないように、よく気をつけている。まあ、あれはあれで、最初は結構楽しかったけどな」というわけである。これはもう完全に、アルファードの理解の範囲を越えている。

しばらく、頭痛がしそうになるのをがまんしてそんな話をしたアルファードは、そのうちに本題を切り出した。

「ローイ。もう一度言う。また、俺たちのそばに戻ってきてくれないか。何も、軍の宿舎に入らなくてもいいんだ。俺たちはもう、かなりの金を稼いだから、小さな家を借りることもできる。そこで、俺たちとニーカと、一緒に住むこともできるんだ」

「え、やだよ、そんな。俺たちって、あんたとリーナちゃんとだろ。

俺、そんな、新婚家庭に居候みたいなマヌケな立場になりたかねえや」

「新婚家庭って、俺たちは別にそんな仲じゃない。ニーカも一緒だし、四人で楽しく暮せるじゃないか。あの、旅の間のように……」

「いやだね！　俺は、やだよ！」

（そうしてリーナちゃんがあんたをじっと見上げる時のあの様子を、俺、ずっと近くで見せつけられ続けるわけ？　そりゃ、たまんねえよなあ。だいたい、リーナちゃんがずっとそんなにすぐそばにいて、それで手に入らないのがわかりきってるってだけで、俺は辛いんだぜ。それくらいなら、姿も見えない遠くにいてくれたほうがいいんだ。アルファードだって、それはわかってるだろうによ。四人で楽しくだなんて、何を無神経に、いい気なこと言ってやがる）と、ローイはアルファードを睨みつけた。

けれどもアルファードは引き下がらなかった。

「そうすれば、お前も、軍に入らないで歌うたいの仕事を続けることもできるんだ。こんな場末でなくても、例えばイルベッザ城構内の、もっとちゃんとした店――＜長老＞だの＜賢人＞だのが出入りする、品のよい店で歌うこともできるんだぞ」

「何だ、その、『ちゃんとした店』ってのは！　あんた、まさかその店で、俺を歌わせてくれるか聞いてみてくれたってわけか？」

「……ああ。主人もお前の評判は聞いていて、そんな人気のある歌うたいがもしも来てくれるならとてもうれしいと……」

「へっ、手回しがいいことだな。冗談じゃねえや！　そんな、あんたに御膳立してもらった仕事なんか、したかねえや。俺はこの店も、この界隈も、この界隈の連中も気に入ってんだ。そんなお偉いさんたちの前で歌いたくなんかねえ。ここの、帰るところを無くして呑んだくれてる北部の百姓や、そういう呑んだくれに身を売って生きる可哀想な女の子たちのために歌いてえんだ。俺は商売で歌を歌っていると言ったが、金さえ貰えればそれだけでいいってわけじゃねえんだ……」

「わかった。それなら別にあの店で歌わなくても構わない。勝手なことをして悪かった。ただ、お前に良かれと思ってのことだ。それはわかってくれ」

「何、言ってやがる。いいか、俺がどこで歌を歌い、どこに住むか、そんなことをあんたに決められるいわれはひとつもないんだぜ」

「ああ、その通りだ。悪かった。……ローイ、戻ってきてくれ」

アルファードが真剣な顔で一歩進み出たので、ローイは思わず一歩後ずさった。

「や、やめろよ、人のことを、そんな、逃げた女房とか家出した息子みたいに言うのは。俺はもともと、あんたの家族でも家来でもなんでもないんだ。別にあんたのものじゃねえんだよ。あんた、ちょっとしつこいぜ。俺は、男でも女でも、しつこいやつは大嫌いなんだ！　……そうだよな、最近気がついたんだが、俺は昔からあんたが嫌いなんだ。あんたのそばを離れてみて、初めて分かった。俺がずっとあんたのそばにいたのは、あんたが嫌いだからだったって。あんたは周りのものすべてを、あっさりと自分に従え、支配しちまう。俺はあんたのそういうところが嫌いで、自分だけはどんなにあんたのそばにいても決してあんたに支配されはしないんだと、それを証明するためだけに、あんたのそばに居続けたんだ。俺、ちょっとへそ曲りなとこ、あるからさ。俺があんたらを追って村を出てきたのも、リーナちゃんの後を追ってきたんじゃなくて、あんたを追ってのことだったらしい。それも、あんたが好きだからじゃなくて、嫌いだからだ。だって、あのままあんたに勝ち逃げされたら、俺、一生、あんたに負けたままになっちゃうじゃん。……そういうこと全部に、俺は、あんたから離れてみて初めて気づいたんだよ。いいか、あんたはちっとばかし頭が悪いようだから、よく分かるようにもう一度言ってやる。俺は、あんたが、嫌いなんだよ！」

「……だが、ローイ。俺は、お前が好きだ」

この、あまりに直線的なもの言いにローイは思わず鼻白んで、また一歩、後ずさった。別にアルファードに変な気があるわけではな

く、ただ、本人があまりに真面目過ぎるので『こんな言い方は変に取られるかもしれない』などとは想像もできなかっただけだろうと、それは解るのだが、さすがに、こうまできっぱり言い切られてしまうとちょっと怖いものもあるし、なんだか、力が抜けるというか、怒る気力も思わず萎える。

「や、やめろよ、気色悪い。あんたに変なつもりがないのはわかってるんだが、男の口からそんな言葉を聞きたかねえや。……あんたにもそういうセリフが言えるんなら、俺になんかじゃなくてリーナちゃんにそれを言ってやれよ。どうせあんた、リーナちゃんには一言もそんなこと言ってやってねえんだろう。こないだ見たとこじゃ、リーナちゃん、あんまり幸せそうじゃなかったぞ。あんたのせいじゃねえの？　あんたにあいかわらずつれなくされて、さみしがってるんじゃねえの？」

「……」

「やっぱ、そうなんだろ。あんたが黙る時は、図星なんだ。あんたら、いつまでそんなことやってんだ？　あんた、リーナちゃんを自分のいいように引っ張りまわしておいて、どうせ何の約束もしてやらず、たった一言好きだと言ってやりさえしねえんだろう。あんたら、別に俺が一緒でなくても、また、ふたりで一緒に住めばいいじゃん。リーナちゃんにやさしくしてやれよ、な。でなきゃ、いくらリーナちゃんが辛抱強くても、そのうち疲れて離れていくぜ」

こう言って、ローイは、無表情にまた一歩進み出たアルファードから逃げるように後ずさり、後ろ手に店のドアを開けた。

「と、とにかく、俺、あんたと一緒には行かねえから。今日はもう、帰ってくんな。悪いが、女、待たせてるからさ。今度、もっと早い時間に店に来てくれよ。酒も奢るし、世間話の相手ならいくらでもするぜ。その『戻ってきてくれ』っていうのさえ、言わなければさ。あんたみたいな有名人が店に来てくれれば、おやじも客も大喜びで、あんた、女にモテまくれるぜ。あんたもたまには、ちっと遊べよ、な？　じゃあな！」

それだけ言うと、アルファードの返事も待たず、ローイはばたんとドアをしめてしまったのだった。アルファードはそのまま黙って立ち去っていったらしい。

第三章〈イルベッザの闇〉　第九場（2）

その時のことを思い出しながら、ローイはなんとなく隠しに手をつっこんで、女から貰った金をわざとじゃらじゃらいわせた。

（別に、いいじゃんよ、なあ。向うがくれるっていうんだから。下手に断わったりしたら、かえって変な誤解されかねないからなあ。自分は特別なのか、とかさ……）と、誰にともなく胸の中で言い訳しながら歩いていたローイは、行く手にちょっとした人だかりを見つけた。もしや流しの辻音楽師か、それなら同業者としてそのレベルのほどをチェックせずばなるまい、と、近付いていったが、どうも雰囲気が違う。みんな、なんとなく気味悪そうに遠巻きにしている感じだ。

持ち前の好奇心で人の頭越しに覗き込んだローイが見たのは、一見してタナティエル教団のものとわかる暑苦しい黒衣姿の三人の男たちだった。

うち一人は、かなりの高齢と見られる、腰の曲がった小柄な老人である。足が悪いらしく手には杖が握られているが、その杖がまだ真新しく、持ち方もぎこちなく手に馴染んでいなさそうなところから見ると、もとから足が不自由だったというわけではなく、ごく最近、怪我をするなり高齢のために足が弱るなりして杖が必要になったのだろう。

あとの二人は生真面目な面差しの若い男で、一人は丸顔に丸い目、一人は四角い顔に細い目、ともに中背だが、がっしりした体格で、老人を両側から支えるように恭しく気遣っている様子からしてどうやら老人の従者役――体格から考えておそらくはボディーガード兼務――といったところらしい。

老人は、杖にすがって周りのやじうまをゆっくりと眺め渡しながら、前列の一人一人の前に進み出るようにして語りかけている。老人に話しかけられたものは、あいまいに頷きながら一、二歩後ずさ

って人の輪を広げ、老人が離れていくと、また、輪を縮める。気味悪さ半分、好奇心半分、といったところだろう。今までずっと聖地の山にひっそりと篭っていた彼らがこんなふうに盛り場で辻説法をしているなどというのは、ひどく奇異な光景なのだ。

老人のおだやかな声に、ローイは耳を澄ました。

「＜運命の日＞が迫った。心を安らかに整えてお待ちなさい。恐れず、拒まず、受け入れなさい。そうすれば神があなたに与えるすべては恵みとなります――」

その時、こちらを見渡した老人と、ローイの目が、一瞬、合った。ローイは思わず、わずかに顔をしかめた。

老人はそのままゆっくりと視線を巡らしながら続けた。

「抗ってはなりませぬ。武器を取ってはなりませぬ。あなたの抵抗は、あなたが恐れるものをではなく、あなた自身を傷付けます。恐れが苦しみを作るのです――」

そう言いながら老人が視線を巡らすにつれて、その方向の人の輪が順ぐりに乱れては、また元に戻る。

「恐れずに恵みの印を受け入れ、信じて時をお待ちなさい。さればまもなく、うら若き生命の女王が眠れる王を目覚めさせ、＜運命の日＞に続く＜復活の日＞が来る――それは、女王と王との間に定められし聖なる婚姻の日、新しき神代の誕生、世界の再生の日です。その時、すべての悲しみは消え、すべての痛みは癒されます。その日は、もう近い。女王は、すでにこの地上に降り立たれ、忘却のやさしき御手持つ小さき夜の娘御を伴って、あなたがたの近くにおられます。そう、生命の女王は、今、この時も、あなたのそばにいるのです。信じなさい。待ちなさい。恐れず、拒まず、全てを受け入れなさい。あなたの心に平安を……」

それだけ言うと、老人は、二人の若者に支えられながら静かに杖を脇に置き、地面にうずくまるように膝を付いて礼をした。どうやらここでの説法は、これで終りらしい。

やじうまは、みな、どことなくあやふやな、落ち着かなげな表情

で、パラパラとその場から散り始めた。
近頃、イルベッザの街には、どこか不穏な空気が漂い、あいまいな不安が膨れ上りつつある。もちろん、不穏と言えばそれは魔物が現われ始めたころからずっとそうなのだが、特にこの夏に入って、急速に不安が高まり始めたのだ。
魔物がますます増えているのもその理由だし、タナティエル教団の連中が急に町なかに姿を現わしたことも気味が悪いし、その上、彼らはこんなふうに、不安を煽るような謎めいたことを言いふらしている。
そして、＜運命の日＞がどうのという彼らの話を裏付けるように、特にここ一月ほどのあいだに月はますます急速に大きく見えるようになって、この前の満月前後には、さすがにみんなそれに気がつき始め、様々な不気味な噂が囁かれるようになってきたのだ。
人々の中には、タナティエル教団が＜運命の日＞と称している新月の日を控えた今、日中から窓を締め切って家に閉じ籠ったり、たいした根拠もなく郊外の親戚知人の家に疎開してしまうものまでいて、盛り場の人通りも、夕方でさえますます寂しくなり、それでも街角に立たねばならない娼婦の姿ばかりが目だっている。道を行く人の顔付きも、以前にも増して暗く、とげとげしい。
（なんだあ、こいつら……。もったいらしく謎めかして、何を言ってるんだか。やつらが言う＜恵みの印＞ってのは、まさか＜魔王の刻印＞のことか？　魔物が来たら、おとなしく刻印をつけられろってか？　まあ、たしかに、魔物を攻撃すれば反撃されて怪我したり殺されたりすることもあるが、黙って刻印をつけられてれば、とりあえず、痛くもなんともないらしいやなあ。でも、だからってなあ……。それに、やつら、生命の女王がなんとかって言ってたなあ。生命の女王って言やあ、俺らのお山のべっぴんさんの女神様じゃんか。やつらは死人の大王様にしか興味がないのかと思ってたんだが、なんだって急に女神のことなんか言い出したんだ？　そう言やあ、今夜あたり、新月だったっけなあ。……ってことは、＜運命の日＞

とやらは明日か？　とにかく、こいつらが変なことばかり言うもんで、みんなが怖がって人出もさっぱり、これじゃあ、どの店も商売上がったりだ。なんと言ってもあの辺に立ってる女の子たちが気の毒だよなあ……）

首を振り振り歩き出したローイは、すぐに彼らのことなど忘れてしまった。

あいかわらず散らかった部屋に入るなり、ローイは、寝台の上にどさりとあおむけに身を投げた。頭の下で腕を組み、ほう、っと溜息をついく。

（あーあ、かったるいなあ……。こう暑くっちゃ、だれてしょうがねえや……）と、胸の中で自分の溜息の言い訳をするのだが、たぶんそれは、本当は暑さのせいではないのだ。

このあいだ、この部屋に里菜とアルファードが尋ねてきたときから、彼はなんとなく気分が晴れなくて、ますますだらけた毎日を送っているのである。

（ああ、しかし、あの靴下止め、リーナちゃんに見つからなくてよかったあ。さしも無粋もののアルファードにも、武士の情けってもんがあったか）と、あれから何度も思っていることを、もういちど思い返すのだが、実際は、よく考えて見ると、別に靴下止めが見つからなくても彼の女性関係の乱れはすっかり里菜にばれている。そのうえローイはまた、あの時、どうしていいかわからずに開き直って、それを里菜にわざとひけらかすような口をきいてみたりしたのだ。

（まいったよなあ、いきなり来るんだもんな……。俺、どんな顔していいか分かんなかったじゃん。リーナちゃん、全然変わってなかったよな……。小さくて、かわいくて、そのくせ口先ばっかりきつくてさ。そういえば、俺と同じで夜働いて昼間寝てるせいか、ますます色が白くなって、また、初めて村に現われた時みたいに白くなってたが、ただ、それだけだ……。なんか、俺ばっかり変わっちま

ったのかなあ……）

あれからもローイは、あいかわらず店の女性客に身を売ったり、皿運びの女の子ともよろしくやって乱れた生活を送っているのだが、この部屋にはもう女を入れていない。

もともと彼がここへ連れてくるのは、顔馴染みの娼婦たちだけだった。と言っても、彼女たちをローイが買うわけではない。一種の友達付き合いである。彼女たちはここでローイと寝ることもあるし、ただおしゃべりをしたり、屋台で買ってきた食べ物を一緒に食べるだけで帰る時もある。ローイは、たまたま彼女たちと寝た時も、その娘に金を払いはしない。むこうもそういうつもりでローイと寝るのではない。それも彼らの間での友達付き合いのうちなのだ。

ただ、娼婦たちの中には、たまに、逆にローイに金を払いたがるものもいる。そういう時は、ローイはいつも、

「え、なに、今日は金くれるわけ？　そりゃあ、ありがとよ」などと、あっさりとそれを受け取る。それでその娘との友情が損なわれるとは別に思わない。いつも人に金で買われている彼女たちが、たまには自分が金を払うほうになってみたいなら、そして、それでどういうわけか多少はその娘の気が晴れるというのなら、それもいいだろうと思っているのである。彼女たちも、ローイがそういうことにこだわらないのをわかっているから金を払ってみたりするので、この、金のやりとりは、一種のごっこ遊びのようなものだ。

ローイはどんな女にでもやさしくするが、特に彼女たちにはわけへだてなくやさしくしてきた。彼女たちと寝るためになら別に気をつかってやさしくする必要もなく、ただ金を払えばいいのだから、それはまったく下心のない、純粋な友情のようなものである。

彼はよく娼婦たちの愚痴を聞いてやる。といっても、彼女たちは、自分の不幸な身の上について、いまさら語らない。話したところでどうなるものでもないし、彼女たちのほとんどは北部の百姓の出で、それぞれが抱える物語は、みな、果てしなく悲しいけれど、どれも似たり寄ったりなのだ。彼女たちはただ、いやな客に当たった時な

どにローイのところで客の悪口を言って憂さを晴らしたり、最近客足が悪いなどとぼやいたりするだけだ。それでも彼女たちは、自分たちをまるで幼な馴染みの村娘であるかのように、気安く親しげであると同時にそれなりの礼節を保った対等な態度で扱ってくれるローイの前で、そういうささいで表面的な愚痴をこぼすことで、その寂しい心の、もっと奥深いところまで癒されて帰っていくのだ。

けれども、里菜がここへ来たあの日以来、ローイはなんだかこの部屋に別の女の子を入れる気にならない。なんとなく、そんなことをすると、この部屋の空気の中に僅かに残っている里菜の気配が消えてしまうような気がするのだ。もちろん、そんなのはばかげた感傷だとわかっているから、自分のそんな未練な気持を、自分で認めてはいないのだが。

しばらくそうして寝台の上で天井を見上げていてから、ローイは、どっこいしょとばかり身を起こして、意味もなくその辺を片付けはじめた。また、汚れた皿が置きっぱなしになっている。なんとなく、ここに居もしない里菜にしかられるような気がして、落ち着かない。かといって、外の共同流し場まで洗いに行くのも面倒なので、とりあえず、散らかっていた衣類と一緒に寝台の下の押し込んで、もういちどあたりを見回し、どこかに女の子の忘れ物がないかとよくよくチェックしてから、自分がなぜそんなことをしているのかわからなくなって、また寝台に寝転がる。

（今日、仕事さぼっちまおうかなあ……。なんか最近、やる気がでないんだよなあ……。どうせ今夜あたり、あの変な噂のせいで、店に来る客なんかあまりいないだろうしなあ……。ようし、決めた、さぼっちまえ！）

そのまま寝台に寝転がって、つい数時間前に起きたばかりだというのに、いつの間にかまたうたたねしていたらしいローイは、それからしばらくして、はっと目を覚ました。

小さなノックの音が聞こえる。遠慮がちに、誰かがドアを叩いている。

二、三度叩いては、ためらうようにしばらく休み、あきらめきれないように、また、そっと叩く。

ローイは、はっとして寝台から飛び起き、ドアに駆け寄った。ドアを開くと、その向こうには、さっきまで彼の夢の中で微笑んでいたような気がする黒い瞳の清楚な少女が、ただひとり、青い服を着て立っていた。

どこまでも汚れなく白い肌、三つ編みにして両肩に垂らした黒い髪、透き通るような桜色の耳たぶ、今にも壊れそうな小さな手……。山の上の空にかかる遠い虹のように清らかな、彼の、夢の少女。

もしも手を触れたらたちまち儚い幻のように消えてしまいそうな、小さく華奢なその身体が、手を伸ばせば届くところに、今、立っている。

その、すべての光を吸い込む夜のように黒い瞳が、おずおずと彼を見上げ、あどけないバラ色の唇がそっと開いて、小さく彼の名を呼んだ。

「……ローイ」

「……リーナちゃん？」

ローイは目を丸くして少女を見つめた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第十場（1）

「リーナちゃん、どうした？　会いに来てくれたの？　ひとり？　あぶねえよ、あんたなんかがこんなところへひとりで来ちゃあ……。この辺、ガラ悪いんだからさ。ま、まあ、来てくれてうれしいよ、とにかく入んなよ、散らかってるけど」

ローイは、どうしていいかわからずに、とりあえずまくしたてながら少女を部屋に導き入れた。

「そこ、座って。リーナちゃん、途中で変な男に絡まれたりしなかった？　あの護りの短剣、ちゃんと持って来たか？」

「……ううん。急にどうしても会いたくなって飛び出してきたもんだから、うっかり置いてきちゃった」

ローイの言うままに部屋の中に入ってきた少女は、指し示された敷物に座ろうともせずに、突っ立ったままうつむいた。

「だめだよ、ああいうものはいつもちゃんと持ってなくちゃ。あいかわらずそんな無防備なことで、よくここまで無事に来られたよなあ……。それに、俺、ここにはあんまりいないっていっただろ？　今日はたまたまここにいたからよかったけど、いつもなら、この時間はもう店にいるんだぜ。……まあ、とにかく座んなよ」

「いなければ、帰って来るまで待つつもりだったの……。お店じゃ、話したくなかったから」

消え入るような声でそう言って、あいかわらず部屋の入口あたりに立ったままうつむいている少女の様子をいぶかしく思ったローイは、背後に回って彼女の肩に手をかけ、敷物のほうへ導こうとするついでに、そっと横顔を覗き込んだ。

「リーナちゃん。なんか、あったの？　一人でこんなとこ来て。アルファードはどうした？　今日はあんたらも、仕事、休み？」

「……アルファードのことなんか、言わないで！」

そう叫ぶなり、少女は突然、くるりと向き直ってローイの胸にぶ

つかってきた。
「リ、リーナちゃん……？」
あわてて抱き留めたローイの胸に顔を埋めるようにして、少女は小さな声で言った。
「ローイ……、あたしのこと、好き？」
「えっ？　……あ、ああ、好きだよ。もちろんさ」
「あの、ニーニっていう女の子よりも？」
「ニーニはただの同僚だよ。……まあ、ちっとは仲良くしてるけどさ」
「じゃあ、ヴィーレよりも？」
そこで初めて顔を上げてローイを見た少女の瞳がちらりと光った。
「ヴィーレぇ？　あんたまで今さら、何を言ってんだよ。俺とヴィーレは、もう何でもないんだ。もともとただの幼な馴染みだしさ。それに俺、この間、アルファードに言っただろ。俺の前でヴィーレの名を口にするなって。それはあんたでも同じだぜ。わかった？」
「……うん。それじゃあ、ローイ……、あなた、前に、あたしと一緒になりたいって言ってくれたでしょ？　今でも、そう思ってくれてる？」
不思議な輝きを帯びた黒い瞳が、ローイの茶色い瞳を、探るように覗き込む。
魂を吸い込むような底知れぬそのまなざしに少しどぎまぎしながらも、ローイは、一方で、少々うんざりして考えた。
（ははあ、そういうことか。アルファードと喧嘩でもしやがったんだな。それで俺に泣きつきにきたってわけだ……。それでもって、俺は、また、リーナちゃんをなだめすかしてアルファードのとこに送り返してやらなきゃならないってわけ。俺ってどうしていつも、こういう役回りなんだろうなあ……）
そう、これは彼にとって、いいかげんうんざりするほどよくある、面白くもなんともない状況だった。
村にいたころから、彼は何度もこういう役回りを演じてきた。彼

は近隣中の娘たちに顔を売っていたし、誰からも安全無害な男だと思われていたから、恋人と喧嘩した娘が半ば恋人への面当てのように彼のところに泣きついてくるのは、よくあることだったのだ。彼は毎回、それをやさしくなだめすかして恋人の元に送り返してやるのである。

ローイは、里菜の質問には答えずに、こう言った。

「リーナちゃん。あんた、アルファードと喧嘩でもしたんだろう」

黒い瞳がみるみる潤んで、盛り上がった涙がやわらかな白い頬を伝ってこぼれ落ちた。

少女はうつむいて、ふたたびローイの胸に顔を埋め、弱々しく呟いた。

「アルファードのことなんか、言わないでってば……」

小さな手が、彼のシャツの胸元を握りしめる。細い肩が震えて、涙に濡れた頬が彼の胸に押し付けられる。見下ろせば、細いうなじが、いたいたしいほど清らかに白い。

（やっぱりな……。ちくしょうめ……）と、ローイは胸の中で呟いた。

これまで彼は、こういう役まわりを演じるのを、それほどいやだと思ったことはない。ちょっとした役得を味わえることも多いし、彼の性分として、女の子の機嫌を取るのは全く苦にならないことだ。

けれど今、自分が叶わぬ純情を捧げてきた相手である里菜にこういう振る舞いをされてみると、いくら気のいい彼でも、彼女を幸せにしてもやらないアルファードなどのところへ、なぜ自分が彼女を送り返してやらねばならないのだろうという気持も起きるし、アルファードのためにこの子はこんなに泣いているのだと思うと、心の隅で嫉妬も疼く。

が、その一方で、泣きながら自分にすがりついてくる少女をどうしようもなくいとおしいと感じてしまう。

（あーあ、ちくしょう、かわいいなあ……。そうかあ、リーナちゃ

んはこんな、俺の胸のとこまでしか背がなかったのか。ちっちゃいのはわかってたけど、こんなふうにくっついて比べてみたことはなかったからなあ。……耳たぶが、ピンク色に透き通って、触ると砕けそうだ。手も、ちっちゃくてさ……。こんな細っこい白い指に、こんな可愛らしい桜色の爪がついてて。あーもう、どうしてこう、どこもかしこも砂糖細工のお菓子みたいに可愛らしいんだろうなあ。そう、白とかピンクとかの、花びらの形なんかをした、小さくて脆くて、口に入れると薄甘くて薄荷の香りがしてすぐ溶けちゃうやつ——女の子にプレゼントしたりする、ちょっといい値段の、村では見たこともなかったあの都会風で上品なお菓子な。この子は、ほんとに、まるで薄荷の味がしそうだ。なんか、何もかもあんまり小さく華奢にできてて、半分透き通ってるみたいで、同じ人間とは思えないくらいだ。こんな子を、いじめちゃいけないよなあ……。アルファードのやつ、こんなリーナちゃんをこんなに泣かせやがって、まったくもって許せねえ）

　ローイはためらいながら少女の背中に腕を回し、壊れ物を扱うようにそっと抱き寄せた。今の今まで、まだどこかで夢か幻ではないかという気がしていた、その華奢な身体は、けれどもほのかに温かく、思いがけないほどに柔らかかった。ローイの腕に、我しらず、わずかに力がこもり、いつのまにか少女をしっかりと抱き締めていた。

（アルファードは、いつかリーナちゃんがこんなふうにやつに縋りついた時も、肩も抱いてやらなかったよなあ。今でも、そうなんだろうなあ。でも、女の子からこうして抱き付いてくれた時にあんなふうにただ突っ立ってるなんてのは、俺の主義には反するんだ。悪いなあ、アルファード。俺はこれから、リーナちゃんをあんたのところへ送り返すなんていう、とんでもなくマヌケな、つまらない役をやらなきゃならねえんだ。その前にこれくらいの役得を味わわせてもらっても、バチは当たらないぜ）と、いつのまにか心の中で言い訳をしているローイの腕の中で、頼りない小さな身体が、小鳥の

ように震えていた。屈み込むように顔を寄せると、かすかに甘い香りがした。

「ローイ……。エルドローイ……」

小さく名を呼びながら、少女の腕がおずおずとローイの背中に回された。

ローイは柄にもなく硬直して、ひととき、なすがままに抱きつかれていた。

それから少女は、か細い腕でそっとローイの胸を押し退けて顔を上げた。

「ねえ、ローイ、まだ、答えてくれてないわ……。今でも、あたしと一緒になりたいと思ってくれてる？」

ローイには、まだ、黒い瞳から目をそらして一歩退き、こう答える理性が残っていた。

「リーナ。悪いな、俺、今、その質問には答えられねえ。だって、今、そんなことは問題じゃねえんだからさ」

少女は涙に濡れた黒い瞳を驚いたように見開いた。ローイは、揺らいでいる自分の気持を悟られまいと、彼には珍しくちょっと突き放すような口調になって続けた。

「あんたはさ、アルファードにつれなくされたんで、面当てに俺んとこ来たんだろ。アルファードに連れ戻しに来てもらいたくてさ。俺んとこだったらすぐにアルファードに見つけてもらえるし、俺はお人好しだから、上がり込んでも抱きついても安全だろうってんでさ。

俺さあ、こういう状況って、結構、慣れてんだよな。すぐわかるんだよ。みんな、そうなんだ。村の女の子たちも、みんな、彼氏と喧嘩すると、俺のとこに泣き付いてくるんだよ。俺って、よっぽど、そういう役に向いて見えるらしくてさ。実際、俺、今まで、そういうの、別に嫌じゃなかったんだ。でも、それは相手がその他大勢の、どうでもいい女の子だったからだって、今、わかった。

……俺、今、ちょっと怒ってるぜ。あんた、俺があんたにこうい

うことされたら辛いのは、わかってるだろう。だって、今、俺が何と答えようと、アルファードのやつがあんたを迎えに来たら、あんたはさっさとついていっちまうんだろ？　やつの前で俺に抱き付いてみせて、やつをちょっとばかしやきもきさせてみてからさ。違うか？　そんなふうに俺を利用するのは、すごく残酷なことなんだぜ。他の女の子になら、別に損するわけでもないから、いくらでも利用されてやるけどさ……」

「ち、違うわ、ローイ！　そんなんじゃない！　あなたを利用するつもりなんか……。もう、アルファードのことなんか、ほんとにどうでもいいの。あたしだって、何日もずっと悩んで、考えたのよ。……あたし、アルファードにふられたの。喧嘩とかじゃなくて、ほんとに……。アルファードはあたしに、こう言ったの。俺と一緒になっても君は幸せになれないから、他の相手を探せって。なんでかって言うと、アルファードは魔法が使えないからだって。そんなバカな理由ってある？　そんなの、ただの言い訳じゃない。あたしだって魔法が使えないし、あたしのいた世界じゃ誰も魔法なんて使えなかったけど、みんなちゃんと結婚してたわ。つまりアルファードは、あたしのこと別に好きじゃないのよ！」

「……なるほどね。だけど、それでも、あんたはアルファードが好きなんだろ？　ふられてもアルファードを諦めきれなくて、それでそんなに泣いてんじゃねえの？　好きでなきゃ、そんなに泣くもんか。な、そうだろ？　自分の気持を、よく考えて見なよ」

そう言って諭しながらも、再び自分に縋りついてきた少女の愛らしい耳たぶや細い肩を見下ろして、自分の胸に当てられた小さな掌のぬくもりを感じているうちに、ローイは、胸の中に不埒な考えがむくむくと頭をもたげてくるのを止められなかった。

（まてよ……。これはやっぱり、チャンスだよなあ……。たとえこの子の気持が本当はまだアルファードにあるとしても、ここで既成事実を作っちまえば、後は、なしくずしにこっちのものじゃねえか？　今、リーナが自分の気持がわからなくなっているうちに、どさ

くさにまぎれて俺のものにしちまえば……。早いもん勝ちだよなあ？）

彼がこの半年、さんざん女遊びしながらもいっときも忘れることのなかった、手の届かない遠い虹のような少女が、今、彼の胸に無防備に身を預けてすがりついている。その華奢な身体のぬくもりと柔らかさが、ほのかに伝わってくる。いくら彼が人のよい若者でも、これでまったく良くない心を起こさないほうがおかしい。とはいえ、彼は、やっぱりいいやつなので、ここでもう一度考え直す。

（いやいや、エルドローイ。お前はそんな、リーナの本当の気持を無視してどさくさまぎれに彼女を手に入れて、それでほんとうに嬉しいか？　彼女を幸せにしてやれるのか？）

（それに、そんなことして、もしリーナが、それでもアルファードのところへ逃げ帰っちまったら？　きっと俺たちは、もう、友達でいることもできなくなるだろう。だいたい、見ろよ、この子の、この様子……。こんな、ちっちゃくてか細い、頼りなげな女の子なんだぜ。こんな子を、半分無理矢理になんかしちまうなんて、それだけは絶対にしちゃいけねえことだよな。それをしちまったら、俺、人間として終わりだよ。最低のひとでなしになっちまうよ……）

（だけど、もしそうなっても、そもそもリーナがいけねえんだ。俺の気持を承知でこんなふうに俺のとこに転がり込んで、こんな態度を取るんじゃあ、いくら俺だって……）

（それにこの子は、今ならたぶん、無理矢理でなくても落ちるぞ。そうなったら俺は、もう、この子をアルファードのとこへは帰さない。なんとしても、そのまま一緒になっちまおう。多少強引にでも一緒になっちまえば、たとえ最初はリーナがまだアルファードのことを想っていても、俺がすぐにあんなやつのことは忘れさせてみせる。俺のほうと一緒になって本当によかったと思わせる自信はあるさ。そもそもアルファードなんかに惚れたのがリーナの不幸のもとなんだ。あれはなにか、おとぎ話のシルグリーデ姫にかけられた呪いみたいなもんで、俺がその呪いを解いてやるのが彼女にとっても

幸せなんだ。俺は、アルファードなんかと違って、この子に、うんとうんと、いくらでもやさしくしてやれる……。そうさ、そっとそっと、宝物のように大切に抱き締めて、一日に百回も愛の言葉を囁き、千回もキスをしてあげよう……）

そんなふうに考えるているうちに、ローイはまた、いつのまにか少女をしっかりと抱きすくめていた。葛藤に絶え切れなくなったローイは、その腕にかすかに力を込め、自分でも止める間もなく、こう呟いていた。

「あのさあ、リーナちゃん。俺、いつも、こういうふうに泣き付いてくる女の子をやさしくなだめすかして、そのまま丁重に帰してやるんだ。そんで、女の子からは『いい人ね』とか言われて、男のほうからは、俺が悪いわけじゃねえのにじろりと睨まれて、それでおしまい。でも、あんたまでが俺の気持ちを知っててこんな態度を取るんなら、俺、もう、『いいひと』やめちゃうぜ？　あんたがいつまでも自分の気持をはっきりさせられなくて、こんなことしてるんならさ……」

第三章＜イルベッザの闇＞　第十場（2）

ずっとうつむいてローイにしがみついていた少女が、かすかに頷いて顔を上げた。

「ごめんね、ローイ。いつまでも泣いてて。……あなたの言うとおりかも知れない。あたし、たぶんアルファードのこと、まだ好きなんだわ。でも、あなたがやさしくしてくれれば、あたしきっと、アルファードのことなんか忘れられる」

涙に濡れた漆黒の瞳がローイをまっすぐ見つめ、やわらかそうな唇がためらうように開かれて、おずおずと彼の名を囁く。

「ローイ……。さっきの答えは、まだ？　ねえ、ローイ。あたしと、どこか遠くに行こ？　アルファードからうんと離れたところへ……、どこか、北のほうへ。そこでふたりで一緒に暮そ、ね？」

「リーナ。あんた、それ、本気か？　本気でそこまで思うのか？　北って、北部へか？」

「うん……。だって、ここにいたら、きっとアルファードが……。別にあたしのこと好きでなくても、アルファードはあたしがいないと魔物退治ができなくて、あのひと、他には何にもできないんだもの。あたし、もう、魔物退治はいやなの。最初からそんなこと別にやりたくなくて、ただ、アルファードが好きだったから、仕事仲間でもいいからそばにいたかっただけ。でも、もう、疲れたわ。アルファードに利用されるのは、もう、いや」

「たしかに、あんたがアルファードにふられたと思ってても、アルファードは、あんたが逃げれば追って来るだろうな。俺を捜したよりもっと執念深く、草の根分けてもあんたを捜し出して連れ帰ろうとするだろう。あいつはあんたを、どういう権利があってか、自分の持ち物だと勘違いしてやがるからな。でも、だからって、北部はやばいよ」

「ううん。北部はもう大丈夫。これからは都のほうが危ないって。

北部を焼き尽くした灰色の軍勢は、今度は南に向かっているんだって。ここしばらくで、北部からは魔物の姿がすっかり消えたそうよ。明日あたり、都にいる北部の人に、帰れる人はもう帰るようにっていうお触れがでるはずだと思う。北部に駐留していた正規軍も、主力部隊は、これから急いでこちらに引き上げて来るらしいわ。今まで魔物はずっと、こっそりうろついては人に刻印をつけるだけだったけど、いよいよ都に総攻撃をかけてくるんじゃないかって、軍の上のほうじゃピリピリしてるみたい。新月の日がどうとかって言う噂もあるし……」

「ああ、その、新月の噂は、俺も聞いてるけどさ……。でも、その、北部から軍が引き上げるとか、そういうこと、あんた、どうして知ってるんだ？　酒場っていうのはさ、結構情報が早いところなんだが、俺はそんな話、まだ聞いてねえぞ。あんたがいくら軍にいるったって、どんなに業績を上げていても下っ端の臨時雇いだ。そんなに素早い情報が入るか？」

「あたしの友達で、＜賢人＞たちと個人的に親しい子がいるの。ただの治療師なんだけど顔が広くて、軍務担当のファルシーン様とも親しいのよ。だからこれは確かな情報なの」

「なるほどね。でも、都を出るにしても、なにも北でなくてもいいんじゃないか？　あんた、なんで北部にこだわるわけ？」

「北部はもう、一回目茶苦茶になって、あっちもこっちも焼け野原だったりするから、これから再建の仕事がいくらでもあるでしょ。空いた土地もきっとあるし」

ローイは、幾分あっけにとられて少女を眺めた。

たしかに彼は、里菜のことを、見かけによらず芯の強い、精神的に逞しいところのある少女だとは思っていたが、それにしても、このしたたかさはなんだろう。今まであんなに頼りなく儚げに震えて泣いていたのに、まったく、女はわからない……。

（この子はここへ来る前に、もう、しっかり情報収集して、もし俺と逃げる場合の行き先まで、ちゃんと考えてきてあったわけだ……。

もしかして、最初からそういう計算で俺を誘惑してたわけ？　てぇことは、この子は、本気で俺に乗り換えるつもりなのか？　しかしリーナちゃんも、なりはちっちゃくても女だよなあ……。したたかなもんだ。まあ、いいけどなあ……。そりゃ別に悪いことじゃねえからさ）

　まじまじと自分を見つめるローイを、少女はまた、縋るような目で見上げた。

「それに、ローイ、南部は駄目なの。プルメールなんかじゃアルファードに見つかっちゃうし……、もちろん村にも帰れないわ。アルファードのことだけじゃなくて……」

　白い手がおずおずと伸びてローイの頬に軽く触れた。ローイは思わず、その小さく華奢な手を、自分の両手で包み込むように握っていた。

（……俺、もしかして、この子に手もなく籠絡されちまってるわけ？　さんざ女の場数は踏んでるってのに、こんなちっぽけな、子供みたいな女の子に……。なんてこった。……でも、まあ、それも悪くはねえな。なんたってやっぱりかわいいもんなあ……。しかし、ほんとに本気なのか？　これもアルファードへの当てつけの一部じゃねえの？　早まるなよ、エルドローイ。うっかり本気にすると、後で辛いぞ。ああ、でも、かわいいなあ、まったく……）

　今すぐ少女をもう一度自分の胸に引き寄せて、その細い身体を折れるほどに抱き締め、薄荷の匂いのしそうな清らかなそのうなじに顔を寄せて愛を告げたいという衝動を、ローイはかろうじて押え込みながら、その一方で、覗き込んだ少女の目の中にある何かにかすかな違和感を覚え始めていた。

　ローイの心の揺れを見透かしたように、少女はローイの目を覗き込んで言った。

「村には……。村には、そのう……、ヴィーレがいるでしょ？　ねえ、ローイ、さっきの質問に、なぜ、答えてくれないの。今でもあたしと一緒になりたいと思ってるって――あたしと一緒に北へ行く

って、どうして言ってくれないの？　やっぱり、ローイ、ヴィーレのことが……」

「うるせえ！」

気がつくとローイは、突然少女を突き飛ばして叫んでいた。

「ヴィーレの名を口にするなって、言っただろ！」

突き飛ばされた勢いでバランスをくずした少女は、そのまま、背後にあったローイの寝台の端に坐り込み、うつむいて呟いた。

「やっぱり、そうなんだ……。ローイは、あたしを選んでくれないのね。やっぱり、いつか村に帰って、ヴィーレをお嫁さんにするんだ……。あたしと一緒になりたいって、前は言ってくれたのに……。みんな嘘だったのね。嘘つき……」

その、二本のお下げの間からのぞく首の頼りない細さも、涙を堪えて小鳥のように震える華奢な身体の弱々しさも、今度はもう、ローイの心に、哀れみを起こさせなかった。ただ、わけもなく彼の逆上に油を注いだだけだった。

今さっき、里菜の口から『村に帰れない』という言葉を聞いた時、ローイの心には、たしかにヴィーレの姿が浮かんだのだ。そしてそれを、彼はあわてて胸の奥に押し込めた。

今まで彼はどこの女を抱いていようとヴィーレのことなど思い出しもしなかったのに、今、ずっと憧れ続けていた里菜に一緒になろうと言われた時に、突然、忘れていたはずのヴィーレの顔が目に浮かぶ。それは里菜が他の遊びの女とは違うことの証拠であると同時に、彼がまだヴィーレを本当には忘れていなかったことの証拠でもあるような気がする。彼はそのことで、自分に腹が立っていたのだ。

その怒りが、里菜の口からヴィーレの名を聞かされたとたん、わけもなく、目の前の里菜に向かった。それが理不尽な怒りであることは、自分でもわかっている。そのことが、彼を一層カッとさせ、逆上のままに、彼は怒鳴っていた。

「俺が、あんたを選ぶかヴィーレを選ぶかじゃねえだろう！　問題は、あんたが、本当にアルファードじゃなくて俺を選ぶかどうかな

んだ！　あんたがアルファードよりも俺を選ぶというんなら、俺はあんたを選ぶさ。俺はあのとき、嘘なんかついちゃいなかった。あんただってそれは本当はわかってるんだろ？　わかっててそんなこと言ってるんだ！」

そうして理由もよくわからず逆上しながらも、その一方で、ローイは、うなだれている少女を、妙に醒めた目で見始めていた。

何かが、どこかが違うのだ。彼が知っていると思っていた里菜と。

黒い瞳も、黒い髪も、白く柔らかそうな頬も、額から鼻先にかけてのあどけない曲線も、愛らしく尖ったバラ色の唇も、作り物みたいな桜色の爪先も、あえかな薄桃色の耳たぶも、ほっそりした華奢な肢体も、この半年、ずっと心に抱いてきた面影のままだ。

儚げに見えて意外と芯が強そうなところ、小さくてかよわいくせに口先だけはやたらと勇ましいところ、兎のようにびくびくしておとなしそうなのに時折ふいに思い切った言動を見せるところ、野良猫のように警戒心が強いのに、そのくせどこか無防備で危なっかしく、守ってあげたくなるようなところ……。みんな、彼が、そんなところがかわいいと思っていた、半年前の里菜のままだ。けれど、何かが違う。

そうか、当たり前だけど、この子だって、結局は、ただの女なのか――。

ローイは、心の一部が痛みと共に奇妙に冷え固まってゆくのを感じた。冷え固まったものが静かに胸の底の暗がりに沈んでいき、同時に、その同じ淵から、昏く熱い昂ぶりが湧き上がってくるのを感じた。腹の底から湧き上がってくる塊の冷たい熱に、目眩いがしそうだった。

少女は顔を上げて弱々しく呟いた。

「だって、ローイ……。あたしは、さっき言ったじゃない。もう、アルファードのことは忘れるって……。ローイ、あなたが、好きよ」

「でも、アルファードのほうがもっと好きなんだろう？」

「今は、まだ、たぶん。でも、あなたがあたしを選んでくれるなら、

あたしはあなたを選ぶわ。そしたらあたし、もう迷わないから」
少女の視線が、縋るようにローイを捕らえた。
「……ね、ローイ。やさしくして。あたしに、アルファードを忘れさせて」
「本当だな、あんた、本当に、俺を選んでくれるんだな？」
ローイは少女の上に身を屈めるようにして、底知れぬその黒い瞳を間近に覗き込んだ。
こくりと小さく頷く少女に、ローイは低く言った。
「そんな、言葉だけじゃ信じらんねえな。あんたがどれだけアルファードにべた惚れしてたか、俺はずっと、隣で見てたんだ。しかも、俺は一度、あんたにゃ、勘違いしようもないほど完璧にふられてんだぜ。いまさら急にそんなふうに言われたって、信じられるもんか」
「じゃあ、ローイ、あたしはどうすればいいの？　どうすれば信じてもらえるの？」
ローイは少女の顎を強く掴んで仰向かせた。
「証拠を見せてくれよ！」
「……証拠？」
「あんた、今すぐ俺のものになってくれるか？　そう、今、ここでだよ！　……そうすれば、信じてやる。あんたと一緒に、どこまでも――北の荒野までででも、俺は行く」
黒い瞳が、怯えたようにいっぱいに見開かれた。
けれど、ものも言わずにそうして自分を見つめている少女の瞳の中に、ローイは確かにとまどいやためらいとは別の何かが揺れるのを見た。それは、怯えを装った誘惑――媚びを含んだ甘い挑発の影だった。
その瞬間、ローイの中にひとつの確信が生れ、まだ心の中にあった最後のためらいが消えた。
ローイは少女の上体を無造作な動きで寝台の上に押し倒した。
声もなく、ただますます目を見開いている少女に顔を寄せ、ローイは、拗ねたように言った。

「目、つむれよ」
「え……」
「目ェ、つむれよ！　こういうときは、目をつむるもんなんだよ……」
言われるままに、少女はおずおずと瞼を閉じた。
次の瞬間。
目を閉じて震えながら初めてのくちづけを待っていたはずの少女の胸に、冷たいナイフが、まっすぐに突き立っていた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第十一場（1）

少女の目が、信じられないといったように見開かれ、自分の胸に刺さったナイフの柄を見つめた。悲鳴も、うめき声もなかった。ただ、不信と驚愕のまなざしだけがあった。

そのまなざしに、ローイの胸が激しく痛んだ。

けれどそれは、一瞬だった。

少女の胸からは、血も流れ出さなかった。ふいに青白い燐光が走ったかと思うと、きな臭い異臭とともに、音もなく少女の形は消え失せていた。

ただ、鮮やかに青い服だけが、たった今脱ぎ捨てられたもののように寝台の上に残り、それもしばらくして塵のように砕け、光りながら透き通って消えた。

冷たく輝くナイフだけが、血痕も残らなかった白い敷布の上に、しんと取り残されて横たわっていた。

「やっぱりな……。人間じゃねえや」

拾い上げたナイフを、上着の裾に隠れていた腰のベルトに収め直しながら、ローイはぽつりと呟いた。

それは、少女の胸にナイフを突き立てた瞬間に、判っていたことだった。青い服の下のあえかな乳房の膨らみは呼吸につれて微かに上下し、そっと手を触れれば心臓の鼓動を感じることさえ、たぶん出来たのだろうが、それが本当の人間の心臓であれば、ローイが刺したその位置と角度なら、肋骨に阻まれていたはずなのだ。それなのに、ナイフは、何の手応えもなく、吸い込まれるように服の下に消えた。

人間と同じ形をしていても魔物の胸には肋骨がないらしいのだと、人間と似ているのは外見だけで身体の構造や身体を構成している物質はたぶん全く違うのだろうと、ローイは、店にやってくる魔物退治の経験者たちから何度も聞かされていたから、わざと、本当なら

肋骨に当たるはずの箇所にナイフを刺したのだ。
それでも、愛する少女と同じ目が彼を責めるように見開かれた時は、やはり後悔が彼を襲った。
それほど、その少女――の形をしたもの――は、里菜に似ていた。似ていたというより、何もかも同じだった。ただひとつの点を除いては……。
その時、ふいに部屋が暗くなったように思われた。
何か不自然な気配が背後に現われたような気がしたと同時に、ローイの脳裏に、どこからか、言葉が響いた。
『……道化よ。私の傑作を、たいそうあっさりと壊してくれたものだな……』
「てめえ、誰だ！　これは何の真似だ！」
ローイは、ふたたび素早くナイフを抜いて、かざしながら振り向いたが、そこには誰もいなかった。
ただ、見慣れた部屋の中に、うつろな闇がぽっかりと口を開けていた。
『私は魔王――そなたらがそう呼ぶものだ』
ローイは体勢を立て直し、油断無く闇に向き合った。
「なんだって……？　魔王だぁ？　魔物の親玉の、あの、魔王か？　まさかそんなもんがこの俺の前に現れることがあるとは思っても見なかったぜ……。さっきの『あれ』は、あんたの仕業なのか？」
『そうだ。そなたは、私のせっかくのすばらしい贈り物を駄目にしてしまったな。あの人形がそなたの想い人ではないと、なぜ、判った。あれは私が細心の細工を施した最高の芸術品、顔も身体も思考の形態も、声も仕草も話し方も、なにもかもあの娘とそっくり同じに作ってあったものを……』
ローイは闇の奥を睨みつけながら、怒りと悲しみを込めて、低く告げた。
「判るさ。あれがリーナと同じだと思っているなら、てめえはリーナのことをよく知らないんだ。リーナはなあ、『違う』んだよ。あ

の子は、もっと無器用なんだ。したたかではあっても、あんなふうに器用に男を挑発するなんてことは出来ねえんだ。俺、危なく、すっかり乗せられるところだったもんな。だけどなあ、リーナは、あんな媚びたような目で男を見るような子じゃないんだよ。あの目を見た時、俺は目が覚めた。少なくとも、この『俺を』、リーナがあんな目で見ることは、一生、金輪際、ありえないんだ！」

彼のもとに訪れた少女がただひとつ里菜と違ったのは、その言葉と瞳の奥に隠されていた媚びと、巧妙な誘惑の色だった。

それは何も、決して超自然的なものでも魔的なものでもなく、ごく普通の少女や女がしばしば見せるような種類のものに過ぎなかったが、彼は、里菜がそんな目で自分を見ることは永遠にないのを、その時、痛みと共に知ったのだ。

侮蔑の笑いを含んだ言葉が、闇の向こうから彼に答えた。

『分をわきまえたことだな、道化よ。それがわかっておるなら、最初から本物のあの娘など諦めて、私が与える人形でも抱いていればよかったものを。そなたは実に惜しいことをしたのだぞ。あれは、そなたが決して手にいれられない娘と、腕に抱いた時の抱き心地から肌の匂い、そなたのくちづけに応える仕草まで寸分違わぬものだったはずだ。ただ、そなたが気づいたように、ひとつだけ、本物と違うところがあったからこそ、あれはそなたへの贈り物だったのだ。そなたがあれと共に私のもとに来れば、私はあれを永遠にそなたに与えてやるつもりだった。持って生まれた定めによらず私のもとへ呼び寄せるものには、私は必ずそれに相応の贈り物をするのだ……。今からでもそなたが私のもとへ来ると言うなら、同じモノをもう一度作って与えてやるが？』

「いるか、そんなもの！　畜生、てめえ、俺をおちょくってんのか？　何が魔王だ。何だってそんな、魔王なんかが、俺なんかにちょっかい出してくるんだよ！　いったいどういうつもりだ。俺に、何か恨みでもあるのか」

『そなたになど、何の恨みも、興味もない。私は、ただ、あの娘が

欲しいのだ。その点だけは私はそなたと同じだな。ただし、私は必ずあの娘を手に入れるが、そなたは永遠に彼女を手にいれることはない。だから私はそなたを哀れと思い、親切から、そなたにあの人形をやろうと思ったのだ』

「親切だと！　大きなお世話だ。てめえに何がわかる。俺はてめえとは違うんだ。てめえがなんだってリーナを欲しがるのか知らないが、俺は本当は、一度だってリーナを自分のものにしたいなんて思っちゃいなかったんだ。てめえのおかげでそれがわかった。……あの子はな、あの子は……そう、『違う』んだよ。あの子は、俺にとっては、遠くの空にかかる虹みたいに、手の届くわけがない、取ろうとなんかしちゃいけないものなんだよ……」

『道化よ、そなたは、思いがけず賢い。少なくとも、あの愚かな羊飼いよりはよほど、物事をわきまえておるようだ。ならばこれから言うことも、よく理解できよう。さっき、あの人形がそなたに語ったことは、みな、本当のことだ。あの娘は今、苦しんでおる。そばに行ってやれ。そなたなら、あの娘を慰め、守ってやれよう。あの娘は、お気に入りの忠実な道化がそばにいなくて、さびしがっておるぞ』

「……あんたが、親切から、その忠告をしてくれているとは思えないんだがな。でも、なんだってまた、リーナはてめえみたいなバケモノに見込まれちまったんだ？　どこであの子を見初めた？　あの子を手にいれてどうするつもりだ。まさかいきなり頭からバリバリ食っちまうとか……。い、いや、それとも大釜で茹でてから食うのか？」

『食べたりはせん。大切な花嫁だ』

「げ、げげ……。何だ、そりゃ、本気か？　魔王なんて言ったら、バケモノで、邪悪のかたまりで、しかも、人間の絶望をすすって何千年も生き続けてるっていう、徽の生えかけたクソじじいじゃねえか！　その上、聞いた話じゃ、身の丈三メートル、太い尻尾とねじくれた角があって、牙のある口は耳まで裂けて涎を垂らし、目玉は

真っ赤で全身真っ黒の毛むくじゃら、ついでに恐ろしく臭いっていうぞ。たとえかどわかされて無理強いされようと、リーナがそんな怪物の花嫁になんか、なるもんか！」

『なるとも』

「へっ！　それくらいなら、あの子、舌噛んで死ぬぜ」

『死ぬ、だとな。面白いことを言う。死んで私から逃れられるなどとは、あの娘も思うまい。それにしても私は、自分がそのような姿だとは知らなかった。実に面白いおとぎ話を聞かせてもらった。しかし、私がどのような姿であれ、あの娘は私に惹かれておる。ただ、いまだ幼く愚かなもので自分の気持に素直になれなくて、私のもとに来るきっかけを掴めずにいるのだ。そなたも覚えておろう。初めて恋をした時のためらいと戸惑いを……』

「な、なんだあ？　何を、ふざけたことを……」

あまりの言い草にローイがぽかんとすると、魔王は堪えていた笑いを爆発させたとでも言うように、あたりの空気が震えるほどに笑い出した。どうやら冗談を言っているつもりだったらしい。

「て、てめえ、やっぱり、俺をからかってやがるな……。どこにいる、出てこい！　尋常に勝負しろ！」

すっかり頭に血が上って、誰もいない闇に向かってナイフを振りかざし小さな火の玉を投げ散らすローイの姿がおかしくてたまらぬというように、魔王の声無き哄笑はますます高くなった。

『私の花嫁は大変初心で奥ゆかしく、しかも誇り高いものでな。自分から私の胸の飛び込むのは、はしたないと思っているらしい。私のほうから迎えに来て欲しくて、待っているのだな。人間の女というのはしばしばそういうつまらぬ意地を張るものらしいからな。それで私は、近いうちに――そう、今夜か明日にでも、自分から花嫁のもとに出向くつもりだ。そなたがどうしても私と勝負したいというのなら、その時、受けて立とう。そんな小刀だの、ちっぽけな火の玉だので何が出来るかはわからんが』

「てめえ、バケモノの怪物のクソじじいの分際でリーナちゃんを嫁

にしようなんざ、ずうずうしいにも程があるぜ！　てめえなんぞにリーナは渡さねえ」

『それならば、そなたが守ってみせろ。彼女がそれを望むとは思えないが、それでもそうしたいと思うなら、やってみるがいい。あの娘は、今も泣いておるぞ。さあ、そばに行ってやれ……。早く行かねば、私が先に彼女をさらいに行くぞ』

その言葉が消えると同時に、部屋の中に口を開けていた闇が消えた。窓から入る夕方の淡い光が戻ってきた。といっても、もう、かなり遅い時間になっているらしく、それはほんとうに今にも消えそうな黄昏の薄明かりになっていた。

ローイはぐったりと坐り込み、床に手をついてうつむいていた。里菜――の姿をした作り物の少女――の、小さくやわらかな掌の感触が、まだ胸に残っているような気がして、ローイは床の上でこぶしを握りしめた。

（ちくしょう……。あのバケモノ野郎、何のつもりかしらねえが卑怯な真似しやがって。さすがに悪の権化だけあって、痛いところをついてきやがる。……リーナはなあ、俺なんかに抱かれていいような、そんな女じゃねえんだ。俺みたいなつまらない男の嫁さんになるような娘じゃねえんだよ。そんなこと、本当はずっと、分かってたんだ……）

ローイは、そのまま明りもつけずに床にうずくまり、だんだん暗くなっていく部屋の中で、ただひとり、こぶしを震わせ続けていた。

＊

人通りも絶えかけた、宵闇せまる裏通りを、息を切らして駆けている少女がいた。

どう見てもこんなところに、しかもこんな時間にひとりでいるの

は場違いな、清純で潔癖な雰囲気を漂わせた少女が、何やら思いつめた様子で、唇を噛み締めて必死で走っていく。

まだ通りに残っていた若いチンピラの一団が、少女をかまってやろうかと近づきかけたが、なんとなく声をかけそびれて、そのまま見送った。

といっても、別に、少女がその小さな手で関節が白くなるほど握りしめている黄金の短剣におじけづいたわけではない。それは見るからに女性持ちの、華奢で装飾的な護身用の短剣で、それを持っている少女の腕の細さ、持ち方のぎこちなさから見ても、せいぜい、辱められる前に自刃を試みるくらいの役にしか立ちそうもない。それだって、どうせ成功しないだろう。彼らがその短剣を見て思ったのは、やけに豪華で由緒ありげなものだから、取りあげてヤミの古美術屋にでも持ち込めばさぞやいい値がつくだろう、ということだけだ。ついでにあの貧弱な小娘も、適当に弄んだ後で売り飛ばせば、短剣ほどでなくても一応それなりの金になるだろう……。

そんなふうに思って少女に目を止めた彼らが、不覚にも彼女をやりすごしてしまったのは、ひとえに、少女の、侵し難い真剣なまなざしと、ただならぬ様子のせいだった。あまりに血相を変えて走っていたので、あっけにとられて眺めているうちに、ちょっかいをかけるタイミングを逃してしまったのだ。

（ローイ……、どうか、無事でいて……）

祈りながら急ぐ少女――里菜は、ローイに何があったかを知っていたわけではない。ただ、漠然とした胸騒ぎが鎮まらないのだ。

今日も、里菜は魔王の夢を見た。

キャテルニーカが夢に現われてからしばらく、里菜が魔王の夢を見る回数は少なくなって、夢に現われる魔王は口をきかなくなっていた。けれど、ここ数日、魔王はまた、毎日のように里菜の夢に現われるようになった。そして里菜に、自分のもとへ来るようにと、ふたたび執拗に呼びかけ始めたのだ。

まもなく約束の夏が終る、新月の前に北へ向けて都を発て、と。

その一方的な呼びかけの中でも、特に、新月という言葉が、里菜の不安を掻き立てていた。今、都では、誰もが新月を恐れている。その、新月の災いが、魔王に関わる――すなわち自分に関わるものであるのかもしれない。自分が魔王の呼びかけを無視しつづけることで、都に災いが降りかかるのかもしれない。そうは思っても、里菜にはどうしてよいかわからない。魔王の妻になる気などさらさらないし、秋には北へ行くという約束にしても魔王に一方的に押し付けられたもので、承知した覚えもない。

ここ数日、里菜はずっと、ひとりで煩悶していた。

アルファードとはあれからも一緒に仕事をしているが、ふたりは、必要最低限の事以外はほとんど口をきいていない。アルファードはもともと無口で、里菜が話しかけなければ自分から無駄口をきくことは滅多になかったし、里菜は、もう、無表情に魔物を追い続けるアルファードに、何を話しかければいいのかわからない。

里菜がアルファードに魔王の夢を打ち明けることができずにいるうちに、夏の最後の新月は徒に近付いて、夜の闇はますます深さを増し、魔物の数は増え続けている。ふたりは黙って歩き回り、一晩に何体もの魔物を消す。そのたびに、アルファードの薄い唇の端が冷たく歪み、残虐な悦びの気配がうっすらと漂う。

そして今日、煩悶のうちに眠れぬ夜明けを過ごし、浅く不安な昼の眠りに落ちた里菜の夢の中に、またも現われた魔王は、こう言ったのだ。

『明日、北へ発て。私の城では、そなたを迎える準備がすっかり整っている。そなたのための美しい庭も、柔らかな褥（しとね）も永遠の青い花で埋められ、あまたの絹や宝石も、そなたの身を飾る時を待っている。そなたの心を慰める愛らしい小鳥や小さな動物たち、そなたの身辺の世話と話し相手をする清らかで心やさしい侍女たちも用意した。

そなたは、このような薄汚い街に似つかわしくない。ここでそなたを待つのは、汚れと苦しみ、老いと後悔だけだ。そなたは私の城

の、永遠に花咲く庭で、いつまでも小さく愛らしいままの子猫と戯れ、いつまでも年老いることのない汚れをしらぬ乙女らと笑ったり話したりして、楽しく遊んで暮せばいい。

退屈の心配はいらない。そなたのために、愉快な道化を一人、用意しておこう。これから私は最後の仕上げに、そなたの道化を連れに行くつもりなのだ。そなたのために甘い声で歌い、面白い冗談でそなたを喜ばす、そなたの気に入りの、あの、若い、ひょろひょろした、赤茶けた髪の道化をな……』

昼も過ぎたころ、びっしょりと汗をかいて目覚めた里菜は、魔王のその言葉にローイを思い出して、不吉な予感に捕らわれた。いつか、魔王は、ローイのことを、やはりさっきと同じように、『そなたの気に入りの道化』と呼んでいた。そして今夜は新月だ。

悪夢を振り払うように、普段通りに遅い昼食をとったりして午後を過ごした里菜は、とうとう夕方遅くなって不吉な胸騒ぎに耐え切れなくなり、今夜の仕事を休むというアルファードへの伝言を、たまたま行きあったアルファードの同室者のラドジールに託すと、半ば衝動的に構内を飛び出し、ローイの安否を尋ねて、暮れかけた市中に駆け出したのだ。

第三章＜イルベッザの闇＞　第十一場（2）

すっかり暗くなった部屋の中で、ローイはゆらりと立ち上がり、小さな火の玉を飛ばして所在を確認したランプに灯りを点した。部屋の空気が、ほっと暖かくなる。

その、ほのかな明りの中で、ローイは、取り出した背負い袋に、僅かな身の回り品といくらかの金と小さな楽器を投げ込むと、少し考えて、部屋の隅に立てかけてあった弓と矢筒を背負った。ごちゃごちゃした狭い町中で間近な物陰からふいに飛び掛かってくる魔物や物盗りには、弓矢はあまり役にたたないだろうが、ナイフしかないよりはましだろう。

（今日は月が無いからな……。さぞや魔物がうろうろしていることだろう。俺も、ちょっとした剣くらい用意しておけばよかったかな。ま、いいか、火の玉があるさ。魔物は火に弱いんだ）

そう、胸の中で呟いて、ローイは腰のベルトに手をやり、ナイフの柄を握りしめてドアに向かった。

彼は、里菜のもとへ駆けつける決心をしたのだ。魔王に言われた通りにそうすることには、進んで罠にはまるようで不安があったが、だからと言って、魔性のものに見込まれてしまったらしい里菜を、放っておけない。

背負い袋を背負って、ローイはドアを開けた。

そのとたん、また目を丸くして素っ頓狂な声を上げた。

「あれェ、リーナちゃん！」

ドアの向こうで、突然開いたドアに驚いた里菜が、同じ様に目を丸くして突っ立っていた。

「ローイ！　よかった……。無事だったのね……」

頬を紅潮させ、息を弾ませてローイを見あげた里菜は、必死で走ってきたのと、ローイの姿を見て安堵したのとで、その場にがっくりと膝をついた。

「こりゃあ、まさしくリーナちゃんだ。……お、おい、今度は本物だよな？　ちょっと、その短剣、見せてみろ。あの悪魔野郎、さすがに御神体は畏れ多くて偽造できなかったみたいだからな」

ローイも里菜の前に膝をついて、きょとんとしている里菜から取りあげた短剣をためつすがめつ眺めた。

「うん、本物だ。念のため、ちょっと本体のほうも触らせろ。どうせなら、この辺……。俺、さっき触ってないからな」と、いきなり里菜の胸のあたりに手を伸ばしたローイは、

「な、なにすんのよっ！」と突き飛ばされて尻餅をついた。

「うん、うん、よかった、こりゃあ本物だ……」

突き飛ばされておいて、なんだか嬉しそうに頷いているローイを、里菜は怪訝な顔で眺めた。

「どうしたの、ローイ、本物って……？」

「いや、なに……。あんたのほうこそ、どうしたのさ、そんなにあわてて……。走って来たろ？　アルファードは？」

「一人で来たの。なんだか、急にあなたのことが心配になって。……悪い夢を、見たから。でも、ただの夢だったみたい。やだ、あたし、まるで寝惚けて、ただの夢を本当だと思い込んだみたいで……。バカみたい」

「……夢って、どんな夢だ？」

「魔王があなたを北の荒野に攫って行こうとする夢。夢の中に、魔王が出てきて、言うの。これからあなたを連れに行くつもりだって」

「そりゃあ、あながちただの夢でもないみたいだぜ。……さっきさあ、来たんだよ、その魔王とやら、ここへさ。最初は、あんたのニセモノが、一緒に北へ行こうって俺を誘いにきたんだ。もちろんつっぱねたけどさ。そしたら、ご老体自らがお出ましになって……て言っても声だけだったけどさ、悔し紛れにあれこれ適当なことをほざきまくって帰ってった」

「よかった、ローイはニセモノに騙されなかったのね！」

「ああ。いくら同じ顔してたって、あんたのニセモノくらい、見破れるさ。なにしろニセモノのやつ、俺を色仕掛けで誘惑しやがったからな。あんたにそんな上等な真似ができるもんか」
「い、色仕掛け？　あなたに？　や、やだ、そのニセモノ、あなたに、何言ったの？　何したの？　ローイ、そのニセモノに、何か変なことしなかったでしょうね！」
「変なことって……。あれはあんたじゃなくて、ただの作り物の、でく人形みたいなやつなんだから、俺がそれに何しようとあんたが心配することないじゃん」
「だ、だって、だって、あたしと同じ顔してたんでしょ！」
「ああ、顔だけじゃなく、声も話し方も身体つきも、みんな同じだった。胸のちっちゃさかげんも同じだったな」
「む、胸って、ローイ、まさか、見たり触ったりしたわけじゃ……」
「だから、なんであんたが、そう焦る必要あるんだよ。俺は何もしてないよ。指一本触れてない……こともないけど、とにかく別に変なことはしちゃいないぞ。それに別にあんたの胸じゃねえんだから、俺が見ようと触ろうと、あんたにゃ関係ないだろ」
「あ、あるわよ！　あたしのと同じなんでしょ！　やだ、やだ、やだ！」
「やだって言われてもなあ……。とにかく俺、何もしなかったんだよ。でも、考えて見れば、ニセモノをつっぱねる前に、胸くらい、ちょっと触ってみるんだったなあ。本物は絶対触らせてくれないもんな。あーあ、損した」
「バカ、バカ、バカ、バカ！　ローイのバカ！」
「バカって、俺、何もしてないのに……。安心しろよ、俺、色仕掛けに引っ掛かるほど、女に不自由しちゃあいねえから。だいたい、あんた、自分と同じ姿かたちのニセモノに、男を色仕掛けで誘惑できるような、そんな色気、あったと思う？」
「……へえー、そうなんだ。ローイはあたしに誘惑されても、なびかないんだ。そうよねえ、あたし、ちっとも色っぽくないし、ロー

イはあんなにモテてモテてしょうがないんだもんね！」
「な、何だよ、その冷たい目は……。じゃあ何か、あんた、俺に、あのニセモノになびいて欲しかったわけ？　俺が誘いに乗って、あんたのニセモノを抱いてやればよかったわけ？」
「だ、だっ、抱っ……！？」と、里菜は目を白黒させた。
「ローイ、何てことを……。やだ、やだ、やだ、そんなの、絶対、ダメ！　ニセモノでもダメ！」
「じゃあ、俺、どうすりゃよかったわけ？　なびくのとなびかないのと」
「どっちもイヤ！　ローイのバカっ！」
「これだもんなあ。女心は複雑だよな。……と、まあ、こんなところであんたをからかって遊んでる場合じゃねえんだよな。あんたって、からかうとほんとに面白いけどさ。実は俺、今からここを出るとこだったんだ。俺、やっぱ、軍に入るわ。女遊びもいいかげん飽きたし、最近、店の客の入りもさっぱりだし、毎日毎日一人ずつあんたのニセモノがここに訪ねてくるなんてことになっても面倒だしな。さすがに、あんたのそばにいれば、あんたのニセモノが出てくることもないだろうさ。鉢合せしたらまずいもんな」
「えっ、ほんと？　本当に、ローイ、来てくれるの！？」
「ああ。今から行くよ。この部屋をちゃんと引き払うのは、そっちに落ち着いてからでいいだろう。入隊の手続きは明日にしても、今夜泊まるところくらい、なんとかなるよな？　もう暗いけど、どうせあんたを送らなきゃならないし。あんたをここに泊めたなんて言ったら、アルファードに殺されちまうからな。そういえば、あんたがここに来たこと、アルファード、知ってんの？」
「……ううん。今日は仕事休むって伝言だけ人に頼んできたけど、どこへ行くかは言ってこなかった」
「そりゃあ、きっと、心配してるぜ。あんたも走ってきたばかりで疲れてるとこ悪いけど、すぐ行こうや。なんか俺、これ以上、ここにいたくないんだ……。さ、行こう。もし魔物が出たら、しっかり、

向こうの魔法を消してくれよ。短剣も、抜いて持ってな」
ローイは里菜を促して、すっかり暗くなった街の中へと、さっさと歩きだした。

月の無いこの夜、街は常にも増して不気味な静けさに覆われていた。油断なくあたりに目を配り、それぞれの刃物を抜き身で握りしめながら、ふたりは息を殺して街をすり抜けた。幾度か、遠くで悲鳴を聞いた。そこここの暗がりに、時折、何かが潜む気配を感じ、灰色のマントの端が視界の隅で翻るのも何度か見たような気がする。

後で知ったことだが、この夜、市内のあちこちで異常な数の魔物が暗躍し、人々を恐怖に陥れたという。
それにもかかわらず、ふたりは、なぜか魔物に出くわすことなく、イルベッザ城の跳ね橋を渡りきった。
「おかしいわ、ローイ……。なんだかずっと妙な気配がしてたのに、魔物が出ないなんて……。今夜は月が無いし、そうでなくても、最近、すごく魔物が多いの。あたしとアルファードは、毎晩、特に探さなくても、何体もの魔物に出くわすのよ」
「ああ……。何かありそうだな。嫌な感じだ」と、囁き交わしながらも、ふたりは、安全なはずの構内に入ったことでほんの少し警戒を解き、里菜はローイに問われるままに、これまでの魔王とのいきさつをかいつまんで語った。
「ねえ、ローイ、あたし、どうしたらいいの？　これまで魔王の夢を無視してきたけど、そして今までは本当に、魔王はただの夢みたいなものだったんだけど、とうとうこんなふうにローイにまで迷惑がかかるようになったんじゃ、もう、無視できないわ……」と、途方にくれて問い掛ける里菜に、ローイはあっさりと答えた。
「これまで通り、無視すりゃいいんじゃねえの？」
「だって、あなたにまで危険が……」
「いや、危険ったって、俺は別に、こうしてピンピンしてるぜ。俺

が思うに、魔王ってのは、自分から進んで来るものしか連れ去れないんじゃないかな？　だって、昔からそう言われてるし、実際、今まで、あんたにも、何も手出しはしてねえわけだろ？　俺のことも、力づくで攫わないで、あんたのニセモノで誘惑して、自分から北へ行くと言わせようとした。たぶん、やつは、俺をそうやって連れ去って人質にして、あんたを北の荒野におびき寄せようとしたんだよ。あんたが俺を取り戻しに、自分から北へ来るようにしむけたかったのさ。だから、あんたが進んでやつのところへ行こうと思わなければ、やつには何もできないんだ。リーナちゃん、あんた、魔王の嫁になんか、なりたくねえんだろ？　魔王っていやあ、バケモノだぞ。身の丈三メートル、醜くねじくれた角を生やし、真っ赤な目玉ぎょろぎょろ、耳まで裂けた大口に、人間の赤ん坊を次から次へと放り込んでは丸飲みに……」

「ちょ、ちょっと、ローイ、何、それ？　あなた、魔王を見たの？」

「い、いや、見ちゃあいねえが、ガキのころ姉貴から聞いたおとぎ話の中じゃ、そういうことに……。いや、待てよ。北部から来た旅芸人の物語の中じゃ、魔王は、まともに見たら神々しさのあまり目が潰れるような絶世の美青年って話だったなあ。案外、そっちが本当だったり……？　そういえば、あの悪魔野郎、あんたが自分に惚れてるだのって、いやに自信たっぷりだったからなあ。リーナちゃん、あんたは、魔王の顔、見たのか？」

「ううん、全身をフードつきの黒マントですっぽり覆い隠してて、どこも見えないの」

「ははあ、そりゃ、やっぱり、ふた目と見れない醜いケダモノなんだ。それに、どっちみちリーナちゃんは面食いじゃねえもんな。何しろ、この美わしい俺様よりも、あんなブサイクなアルファードがいいっていうくらいだ」

「アルファードはブサイクじゃないわ！」と、里菜は、思わず、それどころではないのも忘れて叫んだ。

「そりゃまあ確かに美男子っていうんじゃないけど、客観的に見て、

けっこういい線いってると思うわ！」
「リーナちゃん、そりゃあ、あんたの欲目だぜ。……まあ、それはともかくとしてさ、もし魔王が途方もない美形だとしても、あんたは、そんな、綺麗な顔なんかに釣られやしねえよな？」
「あたりまえよ。でも、あたしがここにいるために、あなたやアルファードや、それからもしかして大勢の罪のない人に災厄が降りかかるとしたら……」
「へっ。罪のない人間なんて、この世にいるもんか。あんたがバケモンのエジキにならなきゃいけないほど罪深い人間なんだとしたらね。あんたが何をしたっていうんだ」
「だけど、あたしひとりが犠牲になって、それで解決するんなら……、それがわかってて何もしないでこうして知らんぷりでいるって、それだけで罪なのかも知れない」
「じゃあ、あんた、生贄になろうってのか？　英雄的自己犠牲ってやつか？　俺はそういうの、嫌いだね。だいたい、それじゃ、魔王の思うつぼだぜ。魔王はこうして、まわりの人間をダシにあんたを脅して、兎みたいに穴から燻し出すつもりなんだ。そんな脅迫に屈しちゃいけない。それに、もし明日、何か災いが起こるとしても、それはあんたと何の関係もないのかもしれないし、関係あったとしても、あんたのせいじゃない。魔王のせいだ。あんたは悪くない。あんたが自分を犠牲にする必要はないんだ。あんただって、そうしたくてそんなこと言ってるんじゃねえだろ。俺があんたに、じゃあ魔王の嫁になれよって言ったら、あんた、やっぱり、嫌だって言うだろ？　俺だって嫌だね。あんたをそんな目にあわすのは。それくらいだったら、俺が先にあんたをかっさらって逃げるさ。あんたをあんなバケモンのクソジジイなんかの好きにさせるくらいならさ」
「ローイ……。でも、じゃあ、あたし、どうすればいいの？」
「うーん、要するに、魔王に嫌われればいいんだよな。わざと嫌われるようなことをしてみるってのは？」
「えっ？　それってたとえば、鼻くそほじるとか、下品な言葉を使

うとか、そういうこと？」
「だめ、だめ、リーナちゃん、そんなんじゃ全然インパクト弱いよ。例えば、一日中逆立ちしてるってのはどう？」
「ええっ？」
「手に靴履いてさ。そいで、メシも逆立ちで食べるの。俺だったら、そういう奇態な女だけは、絶対、嫁にしたくないね」
「あ、あの、あたし、逆立ちできないの……」
「そうかあ。じゃあさ、一日中よつんばいで歩くってのは？　そいで、何か食う時も、手を使わないで、皿に顔突っ込むの。あと、鼠を追っかけ回したりとかさ。とにかく、何かそういう、百年の恋も冷めるような妙なことを一日中やってるわけ。いや、でも、悪魔野郎の好みが、普通の人間の男と同じだとは限らないからなあ。案外、それで、ますます気に入られちゃったりしてな」
　どういうものか、ローイにかかると、深刻な話も、すぐにこういう、妙に緊迫感のない方向に行ってしまうのである。そこへもってきて、里菜も結構ズレたところがあるので、話はどんどんバカバカしくなっていく。
「……じゃあ、じゃあ、一か月、お風呂に入らないっていうのは、どう？」
「それじゃ駄目だよ。魔王は一ヶ月も待っててくれないぜ。明日までに汚れなきゃ。今すぐ、その辺を転げ回って、泥だらけになるとかさ。おっ、でも、それって面白そうじゃん。これからどっかの田んぼにでも行って、一緒に泥遊びしようか？」
　思わずその光景を想像してしまった二人は、顔を見合わせて吹き出した。
　その時、ローイが、ふと、里菜の短剣に目を止め、急に真顔になった。
「リーナちゃん、それ……。シルドライトが光ってない？」
「え？」
　里菜は短剣に目を落した。緑の宝石が、突然激しく脈打ちだした

里菜の心臓の鼓動に応じるかのように、せわしなく明滅した。
はっとした里菜が顔を上げたとたん、里菜の視界に、灰色の影が飛び込んだ。
「リーナ、危ない！」
声と同時にローイの手から小さな火の玉が飛んで、里菜に飛び掛かろうとしていた灰色の魔物が、不自然な青白い炎をぱっと発して紙のように燃え上がり、たちまち燃え尽きた。
けれども里菜は、魔物が燃え落ちるところを見とどけてはいなかった。
ふいに、闇の中からもう一体の魔物が里菜の目の前に飛び出したのだ。
ふうわりとマントを広げ、魔物は里菜に向かって片手を差し伸ばす。
「キャーッ！」
間近に迫った魔物の姿に、反射的に固く目をつむって立ちすくんだ里菜は、半ば麻痺した意識の中で、自分の悲鳴と、自分の名を叫ぶローイの声を同時に聞きながら、短剣を握った自分の右手だけが意志とは関係なく持ち上がろうとするのを感じた。
そのとたん、何か大きなものが横からドスンとぶつかってきて、里菜の身体は吹っ飛ばされ、石畳の上に叩きつけられた。痛みで息が詰まる。
一瞬、なにが起こったのか分からず、里菜はそのまま地面に横たわっていた。
が、次の瞬間、ふいに空気に満ちた邪悪な哄笑に、里菜ははっとして目を見開いた。
目の前に見たものは、石畳に倒れているローイの姿だった。
仰向けになったローイの、シャツの胸の辺りが赤く染まっている。
その赤い染みがみるみる広がっていくのを呆然と眺めながら、里菜は小さく呟いた。
「うそ……」

そして、我に返って飛び起きた。
「いやーッ！　ローイ、ローイ、死なないで！」
よろめくようにローイに駆け寄ろうとした里菜は、自分の右手に、まだ、短剣がしっかりと握られているのに気がついた。
そして、その短剣に、血がついていることに。
里菜の手から、短剣が落ちた。短剣は石畳に当たり、カランと音をたてて倒れた。
あたりの闇を震わせて、魔王の哄笑が響き渡った。

第三章＜イルベッザの闇＞　第一二場（1）

立ちすくむ里菜の前で、夜の闇がゆっくりと凝り固まって、丈高い人の姿をとった。

間近に向かい合ったその姿は、全身を真夜中のように黒い衣に包まれて、堂々と、力強く、美しかった。――そう感じてしまうのを、里菜は止められなかった。

その背中には、白い光を湛えた、氷のようにきららかな大鎌が、三日月のかたちに輝いていた。

それは里菜が、初めて夢の中以外で見た魔王の姿だったが、たぶん、これも実体ではなく、何か投影のようなものなのだろう。振り仰いだ、丈高いその姿の向こうに、夜空の星がいくつか、ちらちらと透けて見えていた。

『私の花嫁よ。さあ、花婿がそなたを迎えにきたぞ。共に参ろう……』

ゆっくりと魔王が差し伸べた腕から、里菜は首を振りながら後ずさった。

「い、いや……」

『我が妻よ。そう、恥ずかしがることはない』と、魔王は笑った。『そなたが恥ずかしがって自分から私のもとへ来ないので、私が自らそなたを迎えに来たのだ。……その道化も一緒に連れて来るがいい。面白い男だ。私も気に入っている。私の王国に来れば、そんな傷などたちまち癒える。何も心配はいらない。その、手首の刻印が約束の印だ』

里菜は、はっとして、ローイに駆け寄った。落ち着いて見れば、もちろんローイは死んでなどおらず、血溜まりの上で弱々しく身悶え、顔をしかめてかすかに呻いているのだった。そして確かに、その片方の手首には、＜魔王の刻印＞が黒く印されていた。

「ローイ、ローイ！」

里菜は思わずローイの身体に取りすがって、肩を揺すぶった。
たしかにローイは死んではいないが、普通、こんな怪我をした人は、こんなふうに黙っておとなしく横たわってなどいないのではないだろうか。痛みに叫ぶことも、傷口を押さえてのたうち回ることさえできず、ただ死を待つかのようにじっと横たわっているのは、すでに生命の炎の消えかけた瀕死の重傷者ではないだろうか――。
＜刻印＞を持つものが傷を負った時、しばしば、痛みに対する正常な反応も示せずに無気力に放心するということを、里菜も聞き知っていた。傷口から流れ出す血と一緒に肉体の生命力が奪われていくように、＜刻印＞からは精神の生命力が流れ出して、肉体の痛みに反応する気力さえ奪ってしまうのだという。そして、そんなふうになったものは、本来なら助かる程度の傷であっても、しばしば、そのまま死に至るのだと――。
けれど、ローイは、里菜に揺さぶられて、低く呻きながら、眉根を寄せてぎゅっとつむっていた目を薄く開いた。苦しげな息の下から、途切れ途切れに掠れ声が押し出される。
「い、痛ってェ……。リーナちゃん、揺すらないでくれよ。怪我してんだからさ。……大丈夫だ、たいしたことないよ。あんた、おおげさなんだよ。この俺が、これくらいで死ぬわけないだろ。今の話も聞いてた。ただ、ちょっと動くのが大儀で……」
「ご、ごめんなさい！」と、あわてて離れようとした里菜の腕を、ローイは、片手で掴んで、
「おっと、いいよ、いいよ、離れなくて。ただ揺すらないでいてくれれば。どうせだからこのまま、もっと近くに……」と、さらに引き寄せようとした。この状況下で、しかも、怪我をして額に脂汗を浮かべ、歯を食いしばって痛みに耐えているくせに、たいした態度である。
「この際だ、できれば、膝枕くらいしてよ……」というローイの呑気な言葉に、里菜は思わず状況も忘れて力が抜け、涙ぐんだ。
「もう、ローイってば……。本当に大丈夫なのね。よかった……」

「大丈夫さ、あんたが膝枕さえしてくれれば……。うっ、痛ってェ……」

「大丈夫じゃないじゃない！　動かないで、しゃべらないで！」

「……リーナちゃん、俺にしゃべるなと言うのは、息をするなというのと同じだぜ。で、なんだ、そこに見えてる黒い穴ぼこが、あんたの花婿候補か？」

声が苦しげなわりに、とぼけたもの言いは相変わらずだ。

「あ、穴ぼこって……、ローイには魔王が見えないんだ？　黒い服着て背中に大鎌しょってるの、見えない？」

「ああ、ただ、周りより暗い、闇の塊みたいにしか見えない。でも、声は聞こえるぜ」

『面白い男だ、実に面白い……』

じっとふたりの様子を見ていたらしい魔王は、ふつふつと低く笑って言った。

『もともと、人間の言うこと、考えることは、いちいちおもしろおかしいが、こんな面白い男も珍しい。私もこういう道化を一人召し抱えたいと、以前から思っておったのだ』

「うるせえ、このクソじじい！　……あ痛たた……」

叫んだ拍子に傷が痛んで、ローイは顔をしかめたが、そうしながらも、見えない魔王を睨みつけた。

「おい、魔王とやら。てめえ、自分の花嫁に魔物をけしかけるたあ、随分御丁寧なお迎えのしかたじゃねえか」

『愚か者め』と、魔王はまた笑った。

『私が大切な花嫁を本気で傷つけると思ったか。どのみち、そなたがその娘の短剣の前に愚かにも飛び出してさえ来なければ、短剣は勝手に魔物を倒して娘を守っただろうに、守ろうとした娘の短剣で傷を負わされるとは、まったくそなたはつまらぬ目にあったものだ』

「ローイ、本当？　やっぱり、この傷、あたしが……？」

「いや、あんたがやったわけじゃない。俺がうっかりあわててあんたの短剣の真ん前に飛び出したもんで、たまたま、ちょっと触っち

まっただけだ。ほんのかすり傷だしさ」
「ローイ、ごめんなさい！」
「だから俺が悪いんだってばさ。ただの、ちょっとした事故だよ、事故。俺の不注意だ」
『エレオドリーナ。この道化は、そなたを守ろうとして刻印を受けたのだ。もともと私にはそなたを傷つけるつもりはなかった。そしてこの男はおそらく、自分が魔物に襲われたなら、自分の身を守ることが出来ただろう。それで私は少し試してみたのだ……。まったく計算通りのことを、この男は、した。自分の危機でなら失わない判断力をそなたの危機にあってはすっかり失って、何とも愚かしい行動に出て、私を面白がらせてくれた。そなたの道化は、何もかも捨ててそなたと逃げるほどにはそなたを想っていなかったかと考えたが、そうでもなかったようだな。身を挺してそなたを庇おうとするとは、愚かではあっても、なかなか殊勝な心掛けだ。褒美として、私の城で永遠にそなたの足元に侍る権利を与えてやろうではないか』
里菜はローイの横に跪いたまま、顔をあげて魔王を睨みつけた。
「魔王！　許さない……。ローイをもとに戻して！」
『この男に傷を負わせたのは、そなただ。私ではないぞ。しかし、案じることはない。そなたと共に私の城に来れば、あらゆる苦痛とともに、その傷も癒えるのだから』
「だめよ！　ローイをそんなところへ連れていくなんて……」
『では、そなたひとりで来るか？　そうすれば、その刻印を消してやろう。刻印さえ消せば、こんな浅手はやがて自然に癒える。浅手といっても、刻印を持つものには、時に致命傷となるものだが……。絶望は、肉体をも蝕み、弱らせるのだ』
「……あたしが行かなければ、ローイは死ぬかもしれないってことね。分かったわ」
立ち上がった里菜の足首を、ローイが掴んだ。
「バカ、行くな、リーナ！」
「放して、ローイ。あたしのせいで、あなたを死なせるわけにはい

かないの」
「リーナ、だめだ！　あんたが俺のためにこんなバケモンに身を差し出すというのなら、たとえ刻印が消えても、傷が治っても、俺はシエロ川に身を投げて死ぬぞ！」
「ローイ……」
「俺を死なせたくなかったら、あんたは、行っちゃだめだ。リーナ。俺は、大丈夫だ。刻印なんかで、俺は死なない。他のやつはどうだか知らないが、俺だけは絶対、大丈夫だ。だから、行くな。あんたがいれば、俺は死なないから」
　横たわるローイの上に身を投げ出して、里菜は泣き崩れた。
「い、痛えってばよ……」と言いながら、ローイは動かせるほうの右手で――里菜は気がついていなかったが、ローイは左腕から肩にかけてにも、魔物にやられて傷を負っていたのだ――里菜をそっと抱いた。そうしながら、ローイは姿なき魔王を睨みつけた。
「てめえ、帰れよ……。人のラブシーンをじろじろ見物するなんざ、悪趣味だぜ。せっかくのチャンスなんだ、ふたりっきりにしてくんな。リーナは行かねえよ。行くって言ったって俺が行かせねえ。俺がこの手を、絶対放さねえからな。片手でだって、非力なリーナちゃんの一人くらい、押さえつけとくのはわけねえんだ。とっとと失せろ、この悪魔め！　消えやがれ！」
　その言葉に我に返って身を起こそうとした里菜を、ローイは、この怪我人のどこからそんな力が出てくるものか、本当に力づくで自分の胸の上に引き戻した。
『エレオドリーナよ。どうやら我等の婚礼に異義を唱える男は、一人ではないようだな。この男、虫けらのような道化の分際で、実になかなかだいそれたことをする。よかろう、道化よ、そなたのその殊勝な忠誠に免じて、ほんのひととき、その娘とふたりにしてやろうではないか。それはいずれ私の妻になる娘だ。そなたにとっては最初で最後のひとときだろうからな。明日、また来る。待っておれ』
　里菜は涙に濡れた目で、魔王をキッと睨んだ。

「魔王。あたし、あなたを許さないわ。あなたがたとえ神さまだろうと何だろうと！」

『おお、愛しい者よ、そなたは実に魅力的だ！』と、魔王は、天地が震える程に笑い出した。

『そんなにも小さく無力な存在としてありながら、そのように勇ましい口をきくところなど、なんとも愛らしいことだ。このように魅力的な花嫁であってみれば、結婚に異義を唱える男の一人や二人、いるのが当然と心得て、そのことでそなたを責めるなどというつまらぬ狭量は起こさぬことにしよう……』

笑いながら、黒衣の影が、ふっと薄れて消えた。うつろな笑いの残響だけが、石畳の上にしばらく漂っていた。

闇の名残を黙って睨みつけていた里菜は、我に返ってローイを見下ろした。

ローイの茶色い瞳が里菜を見上げて僅かに微笑もうとしたが、すぐに痛みに顔をしかめた。

「ローイ、ごめんなさい、ごめんなさい、あたしのせいで……」

里菜は、服が血まみれになるのも構わず、ローイにすがりついて泣きじゃくり始めた。ローイは動く方の手を上げて、里菜の髪をやさしく撫でた。しばらくそうしていたローイは、やがてその手で里菜の頭をぽん、と叩いていった。

「あのさあ、リーナちゃん。こんな時じゃなかったら、これってすごく嬉しい状況なんだけど……。実は俺、今、結構、痛てえんだ。背中とか、左の腕とか肩とか。刻印のほうは何ともねえんだけどな」

「わっ、ご、ごめんなさい、ごめんなさい、やだ、ローイは怪我してるのに、あたし、こんな……！」

あわてて飛びのいた里菜に、ローイは笑いかけようとしたが、額には汗が浮かび、顔が歪んでいる。

「いや、いいんだけどさ、大丈夫なんだけど、ちょっと、治療院にでも連れてってくんねえかなあ……。誰か、肩貸してくれそうなやつ、呼んでくんない？　アルファードでも誰でも。俺、歩けなさそ

うなんだ。言っとくけど、あんたじゃ無理だよ。俺、重いから」

第三章＜イルベッザの闇＞　第十二場（2）

ローイの傷は、いくらなんでもかすり傷とは言えなかったが、たしかに、致命傷というほどでもなかった。

「胸と背中のほうは、全然平気よ。大きいけど、浅いから。跡は残るけどね。足は、ただの捻挫。ドジね。でも、この肩のほうはちょっと深いわ。どっちみちしばらくはまともに歩けないし、悪い風が入って熱を出すといけないから、念のため、何日か入院したほうがいいわね。でも、心配しないで。この人、あたしの夜勤に当たるなんて運がいいわ。こうしてあたしがすぐに診てあげられたからには、絶対、大丈夫。必ず治してあげる」

治療院で夜勤に当たっていたリューリは、ローイの容体をてきぱきと調べ、見習いや雑用係たちにあれこれと指示を飛ばしながら、自信たっぷりに言い切った。

ローイはここまで、里菜があわてて呼んできたアルファードと、もうひとり、たまたま手近にいた特殊部隊の古参兵に担架で運ばれてきたのだ。アルファードは、ちょうどあの時、里菜を心配して訪ねてみた女子宿舎から出てきたところで、ローイを路上に残して宿舎に向かっていた里菜と鉢合せしたのである。

ローイは、担架の上で、里菜が気を失っているあいだのことを話してくれた。それはほんとうに短い間の出来事だったが、ローイはその間に、三体の魔物と戦ったのだそうだ。一体目は火の玉でやっつけたが、二体目の魔物は、ちょうど里菜の向こうに現われたので火の玉が投げられず、とっさに里菜を突き飛ばしたローイが里菜の短剣で傷を負い、体勢を崩したところを、魔物に切りつけられたという。その後、更に別の魔物が背後からローイに襲い掛り、刻印を与えて逃げていった。最初の二体は消したが、三体目は取り逃がしたという。

「魔王の野郎が言う通り、俺、あんたが危ないってんで頭に血が上

って、何が何だかわからなくなっちまったらしい。そうでなければ、魔物なんて、三体だろうと四体だろうとやっつけてやったのに……。畜生、俺としたことが、不覚をとったぜ」と、担架の上で、ローイはしきりと悔しがり、

「悔しがる元気があるというのはたいしたものだ」と、古参兵を感嘆させた。この古参兵の言葉には、『刻印を受けていながら』という前置きがあったはずだが、誰も、その言葉を口には出せなかった。

その後、アルファードは、ローイを里菜とリューリに託して、構内に魔物が出た——それも三体で波状攻撃をかけてきた——という、この一大事を正規軍の本部に報告しに行って、まだ戻っていない。

「リューリ、お願いよ。ローイはあたしの友達なの。大切な、大切な、特別の友達なの。絶対、絶対、助けてあげて！」

おろおろとローイのまわりをうろつく里菜を元気づけるように、リューリは笑いながら頼もしく請け合った。

「……リーナ、あなた、大袈裟ね。こんな捻挫やら、ちょっとした切り傷やらで、助からないわけ、ないでしょ。この人、一見ひょろひょろしてるけど、やたら頑丈にできてそうだし。まあ、あたしにまかせなさい。あたしが担当するからには、もう安心よ」

「うへえ、超ラッキー。こんなかわい子ちゃんが俺の担当のセンセイなわけ？　すっげえ美人じゃん！　まるで本物の妖精みたいだ。いや、本物の妖精の女王だって、こんなに綺麗じゃなかったかもしれないぞ。リューリっていうの？　リューリ、リューリ……、リューリュちゃんかぁ。リューリュって呼んでいい？　俺の郷里にも、リューリュって子、いたんだ。なんか、懐かしいなあ。あ、でも、あんたほうが百倍は美人だぜ」

上半身裸で診察台にうつぶせになった情けない姿で、身体をあれこれつつきまわされて時々顔をしかめながらも、女の子へのお愛想は決して忘れないローイである。怪我をしていても＜刻印＞を受けていても、自慢の口先は無傷だ。

リューリはあきれて、ローイを叱りつけた。

「何よ、馴々しい。そんな、田舎くさい呼び方しないでよ。今どき、都じゃ、赤ん坊のことだって、そんな愛称じゃ呼ばないわよ。そういう甘ったるいのは、もう流行らないの。だいたい、あなた、怪我人は怪我人らしく、ちょっとおとなしくしてなさい！」

「うん、うん、うちの村のリュリュも、おきゃんな娘でさあ……。思い出すなあ。あ、でも、あんたのほうが百倍美人だけど。ね、リュリュちゃん、歳、いくつ？」

リューリはローイを無視して、里菜を振り返った。

「ちょっと、リーナ、このハデハデの軽薄男、ほんとにあなたの友達なの？　あなたってつくづく、趣味悪いわね。ちょっと礼儀ってものを教えてやんなさいよ。でないと、こんなやつ、治してやんないわよ」

「そ、そんなこと言わないで。ローイはほんとはすごくいい人なのよ。ね、ローイ、リューリは治療師なのよ。あなたを治してくれるのよ。もっと敬意を……」

「だから俺、精一杯の心からの敬意を込めて、誠意を尽くして誉めちぎってるじゃんか。まだ、足りない？　あ、でも、ほんと、お世辞じゃないんだぜ」と、最後の一言はリューリに向けて付け足す。

リューリはそれを、

「お世辞じゃないのは分かってるわよ」と、平然と受け流したが、次の瞬間、美しい眉をキッと吊り上げた。

「……ちょっと、あんた！　今、あたしのお尻、触ったわね！」

叫びと同時に、ローイの後頭部に、いきなりリューリの平手打ちが飛んだ。

「痛ってェー！　怪我人に何すんだよ！」

「うるさい！　頭は怪我してないからいいのよ！」

「そんな無茶な。ひでえなあ……。俺、触ってないぞ。ただ、ちょっと、手が当たっただけじゃんか！」

「言い訳無用！　あたしの不興を買った患者の末路がどうなるか知りたい？」

リューリにじろりと睨まれて、ローイは震え上がった。
「し、知りたくない……です。ひえー、リーナちゃーん……。俺、このセンセイ、怖いよォ……。担当、替えてもらえない？」
「ローイ、リューリはね、まだ若いけど、第二病棟じゃ指折りの腕利きなのよ。治りたかったらおとなしくして、ちゃんと治療してもらって。ね？」
「おとなしくって……。だって、俺、ほんとにわざと触ったんじゃねえんだもん……。どうせ殴られるなら、もっとちゃんと触ればよかった。う、うわ、もう殴らないでくれよ、センセイ。冗談だよ、冗談。ほんとにわざとじゃないんだってばぁ……。リーナちゃん、このセンセイ、あんたの友達なんだろ。俺にやさしくするように、頼んでよォ」
ローイが情けない声を上げるのを、リューリはぴしゃりとさえぎった。
「うるさいわね、お黙り！　さ、治療するわよ。いつまでもペチャクチャやってるヒマはないの。今夜は急患が多くて、あたしも忙しいんだから。まず、ここ、ちょっと持ちあげるからね」
「持ちあげるって、そ、そこ、痛いんだよ。動かさないでよ」
「バカ！　それじゃ治療できないじゃないのよ！」
「じゃ、じゃあ、痛み止めの魔法を……」
「何、甘えてるのよ！　男なら、これくらい、我慢しなさい！」
「ひ、ひえェ……。リーナちゃん、助けて……。痛っ！　痛てえよお……」
実を言うと里菜も、リューリの荒っぽい治療が少々怖くなって、
「ロ、ローイ、がんばってね……」と言い残して、廊下に逃げ出してしまった。
ドアの向こうから、しばらく、ローイの悲鳴とリューリの叱声が聞こえていた。
しばらくして廊下に出てきたリューリは、駆け寄った里菜に言った。

「終ったわよ。今、痛み止めして薬草飲ませて寝かせたとこ。たいしたことないから、あとで大部屋に移させるわ。あいつ、へらへらしてるわりに、結構、頑張ったわよ。辛抱強いもんよ」
「あ、あれで辛抱強い……？　ずいぶん泣き喚いてたみたいだけど……」
「喚きはしたけど、泣きゃあしなかったわよ、あいつの名誉のために言っておくと。普段強がってるやつだって、たいていこんなもんよ。でもね、最初に傷の具合を見るときなんかは、痛み止めの魔法は、やたらに使わないほうがいいの。言っとくけど、何も、趣味で虐めてるんじゃないのよ。治療師によってはすぐに痛み止めの魔法を使う人もいるんだけど、へたに魔法で痛みを完全に消しちゃうと加減やなんかがわかりにくくなるから、あたしは、必要最低限しか使わない主義。でも、治療の後はちゃんと十分に痛み止めをしてるから、安心して。長引く痛みは体力気力を無駄に消耗させるもの」
「そうなんだ……。リューリ、ありがとう。ローイはよくなるわよね？」
「だから、怪我は大丈夫なんだけど……、でも、あなた、怪我じゃなくて刻印のこと心配してんでしょ。そっちのほうは、あたしは何もしてあげられないのよね……。だけど、ほんと、なんか、あいつは大丈夫みたい。信じらんないけど。だって、普通、刻印つけられてきて女の子のお尻触る元気あるやつなんて、いないわよ」
「あ、あのね、お尻はほんと、わざと触ったんじゃないと思うわよ、ローイのために言っとくと……。ローイは口じゃいろいろ言うけど、女の子のお尻触るなんて、そんなことする人じゃない……こともないけど、触られて本気で嫌がりそうな人は絶対触らないと思う。そういう人よ。少なくともあたしは一度も触られてないわ」
「じゃあ、あたしは嫌がらないように見えたんじゃないの？」
「そんなわけないわ。誰が見ても、うっかり触ったら殺されそうな人に見えるわよ」
「いやぁだ、いくらあたしでも、それくらいで殺しはしないわよ、

殺しは……。でも、とにかくあいつには、言い訳する元気があるじゃない。あたし、治療師やってて、刻印をつけられてきた人をいっぱい見てきたけど――ほら、魔物と戦って負傷してくる人の中には、刻印も受けてる人が多いから――、みんな、もっと自暴自棄になってるか、でなきゃ放心状態で生ける屍みたいになってるかよ。

そういう人って、ほんと、たいした怪我じゃなくても簡単に死んじゃうのよね。もう、治療師やってんのが嫌んなっちゃうくらい。こっちがいくらがんばって治療して完璧に治してあげたはずでも、その後でどんどん弱って、ころっと死んじゃったりするんだから。それって結構、辛いわよぉ。

でも、彼は、ちょっと、あのへらず口、普通じゃないわ。見上げた根性よね。なんか、彼って、もともと人間離れして能天気な人なんじゃない？　刻印がついててちょうどいいくらいじゃないの？　あいつ、身体のほうもバカみたいに頑丈にできてるようだけど、脳味噌のほうも妙に丈夫みたいだし、大丈夫よ、ほんと。彼は死なないわ。あたしが保証する」

「リューリ……。ありがとう」

「別にそれはあたしのおかげじゃないのよ。たぶん、彼がもともと人並み外れて能天気だったおかげよ。ほんと、普通じゃないわ。あれはもう、バカよ、バカ。どういうわけか、人間、バカほど強いのよ。あいつのおツム、よっぽど雑にできてるか、女の子のお尻のことなんかで一杯で、絶望なんていう高尚なものが入り込む隙がないんじゃないの？」

「何もそこまで言わなくても……。彼、あれで結構、繊細なのよ」

と抗議しながらも、里菜は、自分を元気づけてくれようとするリューリの思い遣りを感じて涙ぐんだ。

「やだ、リーナ、何もあなたが泣くことないじゃない。友達をけなされたからって……。うそ、うそ、みんな冗談よ。彼は立派よ。たいしたもんよ。ほんと、お世辞抜きで。じゃあ、あたし、行くから。今夜はほんと、怪我人が多いの。魔物が、すっごい暴れ回ってるら

しいわ。今、救援頼んでるとこなんだけど、明日はきっと、もっとごったがえすことになるんじゃないかしら。たぶん、総動員態勢になるわね。あなたも、アルファードが戻ってきたら、宿舎に帰って少し寝といたほうがいいわ。へたすると明日は戦場よ」

リューリは里菜の肩を軽く叩いて、暗い廊下を足早に立ち去った。

そしてこの、リューリの言葉は、翌日、本当になる。

第三章＜イルベッザの闇＞　第十三場（1）

魔物の跳梁に彩られた不安と恐怖の夜が明け、首都イルベッザは、運命の朝を迎えた。

その朝は、夏もそろそろ終りのその季節にしては、異常なほどに蒸し暑かった。

誰もが、正体も真偽もわからずに恐れていた、＜運命の日＞。ただ、いつもより蒸し暑く、心なしか朝焼けがやけに赤かったような気がするという、たったそれだけのことさえ人々の不安をいやがうえにも掻き立て、朝から続く不気味な地鳴りが、その不安をますます増幅する。

市民の多くは、昨夜の恐怖と今日の不安を声を潜めて窓越しに語り合いながら、昼間から戸を立てて家に引き籠り、あるいは市外に避難してゆき、イルベッザ市内は不気味に静まり返って、角々に立って警戒に当たる兵士の姿だけが目だっている。そんな人気《ひとけ》のない街を、海辺では潮が異様に沖のほうまで引いているとか、朝になっても鳥のさえずりがまったく聞かれなかったなどという不吉な噂だけがひそやかに駆け巡り、人々を余計に怯えさせている。

実際には何も起こらなくても、人心の動揺は、それだけで危険な魔物だ。正規軍の厳戒体制は、＜運命の日＞に起こる『何か』よりも、むしろ市民のパニックを警戒してのことだ。

が、長い平和に慣れたこの街に緊張した面持ちの兵士がずらりと立ち並ぶものものしい光景は、それだけでただならぬ事態を思わせ、より一層、市民たちを不安に陥れてしまう。

静まり返った街とは対照的に、イルベッザ城構内はあわただしい動きに満ちていた。

昨夜、安全なはずの構内に魔物が出たという話は、すでに構内のあらゆる施設に知らされ、厳重な注意が呼びかけられている。正規

軍は朝から総動員されて、城の前に広場に集結し、人々が不安げに見守る中、あるいは市内に、あるいは構内の警備にと、次々に出たり戻ったりしている。

この、正規軍というのは、『あちら』でいう警察にあたるわけだが、この国のあらゆる行政機構が皆そうであるように非常にいいかげんで非能率的な組織で、はっきり言って弱体である。もともと食いつめものの賞金稼ぎの寄せ集めでしかない特殊部隊よりは幾分ましとはいえ、訓練もあまり行き届いておらず、こんなふうに軍隊らしくきちんと整列して行進するのは、普通なら、各種行事のパレードの時くらいだ。

だから、お祭りでもないのに彼らが行進しているというだけで、誰もが、頼もしく思うというよりは、本当にただごとではないのだと感じてよけいに不安になる。

＜賢人の塔＞でも、＜賢人＞たちが昨夜半から徹夜で集まり、額を集めて不毛な協議を繰り返し、役人たちは、意味もなく、ただやたらとうろうろしている。何しろ、彼らにしたところで、これから何が起こるのかも、そもそも本当に何かが起こるのかも定かでないので、落ち着いてもいられないが何をしていいのかも分からないのだ。

そうした中で、構内の学校だけは、不確かな噂だけで休校にするわけにもいかず、表向きは普通に授業をしているのだが、生徒にも教師にも欠席が多く、出てきた者もとても勉強どころではなくて、みんなして息を潜めるようにして寄り集まっている。

こんな非常事態にも、軍の上層部は、普段好き勝手に自主活動させている特殊部隊のことをすっかり忘れているらしく、里菜たちには、特に招集もかからなかった。もっとも、招集しようにも、特殊部隊の中でも真面目に働く気のあるものはみな、昨夜、夜明近くまで魔物を狩りまくっていたから、それをまた朝から働かせるわけにはいかなかっただろう。昨夜の魔物の跳梁ぶりはイルベッザの歴史始まって以来のもので、明かりを消していた家の中に魔物が戸をこ

じ開けて押し入るという前代未聞の恐ろしい事件まであったのだ。

昨夜、里菜とアルファードは、あれから魔物退治をする気にもなれず、何が起こるかわからない翌日に備えて少しでも眠っておくことに決めたのだが、宿舎に帰った里菜は、当然、眠れぬ夜を過ごした。一晩中煩悶してひとつの決心を固め、明け方近くなってやっとわずかにまどろんだ里菜が、その短いまどろみから覚めると、キャテルニーカがベッドの梯子に乗って、心配そうに里菜を見ていた。

キャテルニーカの話では、宿舎にいた治療師たちは見習いにいたるまでほぼ全員が、リューリの予想どおり、昨夜遅くに治療院に招集されていったそうだ。まだ初級学校の生徒であるキャテルニーカには招集はかからなかったのだが、彼女は自主的に学校を休むことに決めていた。招集を伝えに来た治療師からの情報でローイの入院を知っていた彼女は、里菜と一緒にローイを見舞い、その後はそのまま治療院を手伝うつもりで、里菜が起きるのを待っていたという。

ふたりは、食堂でアルファードと落ちあって、食事の後、治療院にローイを見舞った。

この日、治療院は、落ち着かない構内でも特にあわただしく、ごったがえしていた。総動員された職員たちは、数多い昨夜の負傷者たちの手当に夜通し駆けずり回りながら、これから予測される更なる混乱の備えに追われている。

大部屋に移されたローイは、あちこちに包帯を巻かれてベッドに横たわっていたが、拍子抜けするほど元気だった。

病室に向かう廊下で鉢合わせした里菜の顔馴染みの雑用係の少女は、里菜を見るなり、こう言って、呆れ顔してみせた。

「ちょっと、リーナ。なによ、アレ。あの、あなたの友達だとかいう、やたらとひょろ長い軽薄男は！　なんか、朝から、女の子と見れば見境いなしに口説いてるわよ。あたしも、退院したらデートしてくれって言われちゃった。もう、信じらんない。あの刻印、ほん

とに本物なの？　自分が元気に退院できるって信じるのはいいことだけど、それにしても、刻印受けた翌朝にあんなに元気な人って、見たことない。カラ元気にしたって、たいしたものよ。すごいわねえ。あれはもう、人間じゃないわ」

言葉は悪かったが、その口調には同情と感嘆と賞賛が込められていた。

里菜たちが病室に入っていった時も、ローイは、回診の女性治療師に目一杯お愛想を振り撒いているところだった。

「やあ、リーナちゃん！　ここは天国だなあ。美人が一杯だ！　俺、もう、一生退院しないぞ！」と、里菜を見るなり叫んだローイは、治療師から、静かにするようにと冷ややかに注意を受け、病室中から漏れた失笑に、里菜は自分が笑われたように真っ赤になった。穴があったら入りたいとはこのことだ。

キャテルニーカと半年ぶりの再会をひとしきり喜びあったローイは、しげしげと彼女を眺めて言った。

「ニーカちゃん、なんか、急に綺麗になったなあ。いや、もとからべっぴんじゃああったけど、たった半年で、すごく大人びたっていうか、女らしくなったっていうか……。十一だったっけ？　あ、もう十二になったの。うん、これくらいの年ごろの女の子ってのは、ある日突然育つからなあ。もしかして、恋でもしたか？　それなら俺に相談しろよ。恋愛必勝法をあますところなく伝授してやるからな」

そこで止めておけばよかったのだが、ついでに、

「なんなら、手取り足取り、実技指導もしてやるぞ！」と、朗らかに付け加えたので、

「なんの実技よ！」と、里菜に頭をはたかれた。

けれども、ローイの、この軽薄そのものの態度は、たしかに彼の地ではあるが、今は多分に、自分を元気づけ、里菜たちを安心させるための自己演出なのだろうと、里菜は感じた。

帰り際、アルファードが先に立って病室を出たところで、里菜は

立ち止まり、もう一度ローイのベッドに駆け戻ってローイを見つめた。そうせずにはいられなかった。

　呑気そうに振る舞いながらも、里菜の目の中にある決意の色を見落としてはいなかったローイは、ふいに真面目な顔になって里菜の手をとり、囁いた。

「リーナ。そんな、今生の別れみたいな目をするなよ。あのさあ、言っとくけど、あんたに悲劇のヒロインは似合わねえぜ、悪いけど。そういう役がうっかり似合っちまうのは、もっとしおらしいコでさ、あんたは、図太くしぶとく生き残るタイプだよ。そうだろ？　だから、必ずまた、見舞いに来てくれな。俺に黙っていなくなっちまったりしたら嫌だぜ。いいか、絶対、あのバケモノ野郎のところへなんか行くなよ。ゆうべも言ったけど、そんなことしたら、俺、絶対、シエロ川に身投げするからな。ここだけの話、言っとくが、俺、泳げねえんだぞ。……それに、たとえ身投げをしなくても、刻印を持つものにとって、生きているのには努力がいるが、死ぬのは簡単だ。たぶん、生きようと思うのを止めるだけで、何もしなくても死ねるだろう」

　最後の一言を口にした時、ローイの顔からそれまでの陽気な軽薄さの仮面が剥がれて、その下に隠れていた虚無の深淵がふいに姿を垣間見せた気がした。その、思いがけない闇の深さに、里菜は慄然として思った。

　――あの、闇の淵から、ローイを助け出さなければ。あたしがローイを救い出さなければ。どうしても、どんなことをしてでも――。

「いやよ、ローイ、死なないで。絶対、生きて。約束よ。……じゃあね」

　里菜はローイの手を握り返しながら小さな声で言うと、そのままアルファードの後を追って病室を出た。

＊

「アルファード……。ローイ、普段以上に軽薄にしてたけど、あれってきっと、無理してわざとやってるのよね。あたしたちを心配させないためと、自分に、自分は元気なんだって思い込ませるために……」

　このまま仕事に入るというキャテルニーカと病室で別れて廊下を歩いていた時、里菜がアルファードに言うと、アルファードは答えた。

「リーナ、それはたしかにそうだろうが、でも、ローイは本当に大丈夫だ。そうやって、自分を鼓舞したり、人を安心させようと気遣えること自体、心の強さだ。あいつは真の勇者だ。ローイは今、ああやってへらへら笑いながら、一時も休まず、何よりも大きな敵と戦って、打ち勝ち続けているんだ」

「そうね。ローイはきっと、大丈夫よね。――あの、アルファード、あたし……」

「なんだ」

「あたし、決心したことがあるの。……アルファード、ごめんね。あたし、軍の仕事、やめる。あなたには迷惑かけちゃうけど、あたし、他にどうしてもやらなきゃならないことがあるから……。アルファード、あなた、本当は、あたしがいなくても魔物退治くらいできるんだと思うわ。魔法が使えなくたって、あなたはあんなに強くて、魔法が使える人間相手の時だって一度も負けたことなかったじゃない」

「リーナ。どういうことだ。いや、もし君が他にやりたい仕事があるというのなら、俺に君を引き止めることはできないが、しかし君は……」

　アルファードの言葉を、里菜はきっぱりと遮った。

「アルファード。この世界で、あなたに会えてよかった。最近、あ

たしたち、あんまり口もきかなかったけど、でもあたし、やっぱりあなたのそばが一番だった。今まで、ずっといろいろ親切にしてくれて、あたしをいつも守ってくれて、ありがとう」

「おい、リーナ。君は、いったい何の話をしているんだ。なぜ、そんなことを言う」

アルファードは口調を強め、里菜の肩を掴んで向き直らせた。里菜は目を反らした。

「このあいだは、そのう……変なこと言ってごめんね。ほら、ロイのとこへ行った帰りに……。あれは、忘れて。前に、タナティエル教団のおじいさんに、あたしはあなたのことを、小さな娘がお父さんを慕うように慕っているんだって言われたけど、それって本当だったのかもしれない。あたし、この世界に現れた時、この世界のことを何も知らなくて、何も持っていなくて、この世界の人にできるようなことが何もできなくて、一人では生きていけない無力な赤ん坊のようなものだったでしょう？　そんな時、あなたがそばにいて、あたしを守ってくれて、いろんなことを教えてくれた。あなたは大きくて強くてやさしくて、何でも知っていて何でも出来た。あなたがいなければ、たぶんあたしはこの世界では生きられなかった。それであたしは、親に頼る子供のように、あなたに頼ってしまったのね。でも、あたしは子供じゃないんだから、いつまでもあなたに甘えてないで、そろそろ自分の道を行かなくちゃならないと思うの」

アルファードは表情を消してまっすぐに里菜を見据え、硬い声で、低く静かに言った。

「リーナ。それは何の話だ。俺には、君の言っていることが分からない。ちゃんと、分かるように説明してくれ」

静かさの中に、微かな苛立ちと、そして間違いなく怒気のようなものを孕んだその声に、里菜は思わず身をすくませた。

けれど、今度はもう目をそらさずに、アルファードをまっすぐに見返した。アルファードの強いまなざしの奥に、一瞬、何か怯えに

似たものが、炎の中の蝶の影のようにちらりとかぎろうのが見えたような気がした。何か言おうとして少し開きかけた里菜の唇が、何も言えずに小さく震えた。

そのとき、建物の外でざわめきが沸き起った。

「見ろ、太陽が欠けていくぞ！」

「黒い月だ……。＜女神の服喪＞だ！」

第三章＜イルベッザの闇＞　第十三場（2）

話しながらいつのまにか治療院の玄関口まできていたふたりは、開け放たれたドアの向こうに、空を指さしてうろたえ騒ぐ人々の姿を見た。

「夜が来る。闇が訪れるんだ！」

誰かが叫んだ。

「魔物が出るぞ、建物に逃げ込め！」

たちまち、あたりはパニックになった。あわてて外に飛び出そうとするものと建物の奥に逃げ込もうとするもので、治療院の玄関口はごったがえし、押しあいへしあいが始まった。

その混乱の中で、里菜はふいに、

「さよなら、アルファード！」と叫ぶと、肩に置かれたアルファードの手を振り解き、人混みをかき分けて表に駆け出そうとした。

アルファードが後ろから手を伸ばして、里菜の腕を捕らえた。

「リーナ、どうしたんだ！」

「放して、アルファード！　行かせて！」

「待て、リーナ、どこへ行くんだ。表は危険だ！」

「行かなくちゃならないの。お願い、行かせて！」

里菜は腕を振り解こうとむちゃくちゃに暴れた。治療院に雪崩れこもうとする人の流れの真ん中で立ち止まって争っていたふたりは、周囲から押されて互いに押し付けらる形になった。里菜はアルファードの胸に腕を突っ張って、必死にもがきながら外を目指そうとしたが、人の流れに押し戻されて動くことができなかった。

里菜のただならぬ様子を見てとったアルファードは、とりあえず、暴れる里菜を腕の中に押え込んで動きを封じておいて、きっぱりと言った。

「わかった。それなら、俺も行く。この騒ぎじゃ、君一人では、どこに行こうにも、外に出ることさえできないだろう？」

アルファードは、里菜を庇うように抱えこんだまま、群衆を肩でかき分け、流れに逆らって表に出た。

太陽は、すでに半ばを、黒い月の影に侵食されようとしている。その下を、人々が逃げ惑っている。

アルファードは、人の流れの中で里菜を守るように抱きかかえ、奔流の中に頭を出した浅瀬の岩さながらに流れに耐えた。

里菜は、必死のあまり、自分がアルファードに抱きしめられていることにさえろくに気づかないまま、アルファードの腕の中から空を見上げて、声を限りに叫び続けた。

「魔王、魔王、あたしは、ここよ！　逃げないから、隠れないから、あたしに用あるのなら、ここに出てきて！　太陽を消すのを止めて。関係のない人たちを怯えさせないで！」

けれど、か細い声は周囲のざわめきに掻き消され、逃げ惑う群衆の頭上で太陽は刻々と黒い影に侵されていき、やがてあたりは漆黒の闇に閉ざされた。

それはまさに、白昼に訪れた闇夜だった。里菜が想像していたような、ただの日蝕などではなかった。里菜が本で知った知識によれば、日蝕なら、たとえ皆既蝕でも太陽の回りはぼんやりと光り、あたりは月夜の明るさであるはずだ。けれど今、真昼のイルベッザを包む闇は、月も無く星も見えない永遠の夜のように、限りなく深かった。

逃げ遅れた人々が恐怖に悲鳴を上げながら闇の中で互いにぶつかりあったり転んだりしているらしい騒擾の気配がふたりのまわりからふと遠ざかったと思うと、目の前の闇が、ふいに、ぞろりとうごめいた。

アルファードにも、それは見えているらしい。アルファードの体が警戒に強張り、里菜を抱く腕に力が篭った。

里菜は思わずアルファードにしがみついた。顔は見えなくても、その胸のぬくもりと、かすかな汗の匂いに、アルファードの確かな存在が感じられた。

闇は、見守るふたりの前で、ゆっくりと人の形をとった。何も見えない真っ暗闇の中で、そこはなおさら暗いのに、なぜか、人の形が識別できた。

『エレオドリーナ、我が妻よ』

暗い人影が笑いを含んで魂に呼びかけた。

『婚約者の前で、そのように別の男にしがみついて見せるなどとは、感心できんぞ。まあ、よい。どうせ取るに足らぬ人間だ。……ところで、我等はまだ、我等の国民（くにたみ）に婚約の披露をしていなかったな。それでそなたは私のもとへ来てくれないのだろう。正式な婚約の披露なくして、婚礼は挙げられないとな。だから今日は、民草に、そなたと私の婚約の祝賀の恩寵を与えにきたのだ。今日は祭りだ。魔物どもが、我等が国民にたっぷりと、振る舞い酒がわりの刻印を配ってまわるだろう』

「そんな！　それだけはやめて。あたしが間違っていたわ。こんなことになるまえに、あなたのところへ行くべきだった。あたし、これからあなたのところへ行くから、あなたの妻になるから、だからみんなを傷つけないで！」

アルファードは何も言わなかったが、里菜を抱く腕が、瞬間、ぴくっと震え、それから更に力が篭った。

『妻になるか』と、魔王は楽しむように繰り返した。

『その、そなたの羊飼いを、犬臭い恋人を捨てて、私のもとへ来るというのか』

こう言った時、魔王のいたぶるようなまなざしがアルファードに注がれたのを、里菜は確かに感じ取った。

――魔王はアルファードを憎んでいる。おそらくは、自分がアルファードを愛したために。自分が魔王の妻にならなければ、魔王は次に必ずアルファードに害をなそうとするだろう――。

そう確信した里菜は、アルファードの胸からそっと身をもぎ離し、自分の思いを断ち切るように言った。

「行くわ。あたしは、あたしのためにこの国の人たちに迷惑をかけ

たくない。それに、アルファードのことなんか関係ないわ。アルファードは……、アルファードはあたしの恋人でもなんでもないもの！」

魔王はさらにアルファードをなぶるかのように笑って言った。

『私はそなたがそのつまらん男を好いているのかと思っていたが？』

「そ、そんなこと、もう、どうだっていいの！　だって、あたしたちはほんとに全然、何でもないし、たとえあたしがアルファードのことをどう思っていようと、アルファードはあたしのことなんか別に要らないんだもの。でも、あなたは、何でかは知らないけど、あたしを求めてくれる。欲しがってくれる。だったら、あたし、良く考えてみたら、あなたのところに行ったって、別に構わないじゃない？

あたし、ゆうべから、ずっと、そのことを考えてたの。ずっと考えて、気付いたの。他の人にとっては何の価値も無いあたしが、あなたにとっては何かの価値があるのなら、あなたのところに行くのが、あたしという人間の一番有効な、正しい使い道なんじゃないかって。それが適材適所、有効利用ってもんなんじゃないかって。あたしがあなたにとって何の価値があるのかは知らないけど、少なくとも、それであなたが関係ない人たちを傷つけるのを止めてくれるなら、とりあえず、あたしは、ここの人たちの役には立つわけだから。

いても意味の無い、何の値打ちも無いあたしのままでここにいるより、あなたの許に行くことで、とりあえずみんなの役に立つ方が、得じゃない？　あなたにとっても何かの得なんだろうし、ここのみんなも得するし、あたしだって、こんなにまであたしを求めてくれる人の許に行くんだから別に損するわけじゃないはずなんだから、それって、全体の得の量の合計が多いじゃない。誰も損しないで、八方丸く収まるじゃない。

だからあたし、あなたが関係ない人たちを傷つけるのを止めてくれれば、あなたのところに行く。あなたが望むなら、あなたの妻に

なってもいい。だから、アルファードのことは放って置いて。構わないで。アルファードには何も関係無いんだもの」

「リーナ、違う……。そうじゃない。要らなくなんかない、関係無くなんかない！」

魔王の言葉が聞こえているのかいないのか、それまで黙っていたアルファードが、絞り出すように言って、里菜を引き戻そうとした。

「放して、アルファード」

里菜はアルファードの腕を振り払って一歩進み出た。

「リーナ。君は、みなを救うために犠牲になるつもりなのか。そんな必要はない！　君を、そんなやつの思いどおりにはさせない！」

こう言い切ったとたん、里菜のそばからアルファードの身体が、ふと離れた気配があった。

風を切る音がして、闇の中に、一瞬、銀の刀筋が閃いた。その光跡は、目の前の、人の形をした闇の真ん中に吸い込まれた。

闇が揺らいだ。

が、それは一瞬で、闇は再び寄りつどって人の形を再生した。

魔王のからかうような虚ろな笑いが響いた。

『エレオドリーナよ。さてもそなたは浮気者だ。婚約者としての貞節を心得てもらいたいものだ。こう何人もの男が婚礼に意義を唱えて出しゃばってくるようでは、いかに私が寛容な花婿でも、あまり気分がよくはないぞ』

闇に慣れてきた目にぼんやりと見えるアルファードが、再び剣を構えて魔王に近寄ろうとするのを、里菜は後ろから引き戻した。

「下がって、アルファード。あたしに話させて。これはあたしの問題よ」

「しかし、リーナ……」

「いいから！　大丈夫、この人は、少なくともこの場では、あたしを傷つけやしないわ。あたしに、この人と話をさせて。それに、何回切りつけても、きっと、今とおんなじよ」

里菜はアルファードを押し退けて進み出た。

「魔王。あたし、あなたの妻になる。そのかわり、ひとつお願いがあるの。あなたは、目に見える普通の人間の姿になることもできるんでしょ？　だったらあたし、お城も宝石も永遠も、なんにもいらないから、どこか北部の森の中かなんかで、人間の姿で、あたしと一緒に暮して欲しいの。もう人々に刻印を与えるのを止めて、ただ、森の中に小さなお家を建てて、麦を蒔き、羊を飼い、普通の人間として、ひっそりと暮すの。あたし、お百姓仕事もしたことないし、家事もあんまりしたことないし、魔法も使えなくてパンを焼いたりも出来ないけど、それくらい、なんとかなるわよね？　そして、あたし……あなたの、子供を産むわ。一緒に畑を耕し、子供を育てて平和に暮し、大きくなった子供たちをどこかの村に送り出したあと、森の中で、ふたりで静かに年を取って、死んでいきましょう。そうすればあなたは、死んでも、子供たちの命の中に生き続けることができるのよ。それに、あたし、そのころには、もしかすると、あなたを愛することさえできるかもしれない。ね、だから、永遠の命なんか捨てて、あたしと一緒に、普通に生きて、普通に年を取って、あたしと一緒に死んでちょうだい」

こう言った時、里菜は本気だった。話しながら、いつのまにか、里菜の頬を涙が伝っていた。

けれども魔王は、低く笑いだした。

『……おもしろい御伽話を聞いた。麦、羊、平和な暮し！　子供！　愛！　いかにもそなたの考えそうなことだ。だが、私は、そのようなものは何一つ望んでいない。私がそなたを欲するのは、そのようなつまらぬもののためではない。私は別に、あの道化が勘違いしているような人食い鬼などではないから、そなたを取って食おうなどと考えてはおらぬが、かといって、そなたに、死すべき人間の男の求めるようなことを求めているわけでもない。他の多くの人間同様、そなたは私について、ひどく勘違いをしているようだ。私はなにも、人間に刻印を与えることによって死すべき命を長らえているわけではない。人間や他の動物たちのように、子を成してのちに死

んでゆくのが自然な定めであるものではないのだ。私はもともと不死のものだ……』

「魔王。じゃあ、あなたはやっぱり、タナートとかいう神様なの？」

『かつてはそう呼ばれていた。そなたがかつてエレオドリーナと呼ばれていたように。エレオドリーナよ。今のそなたはただの人間の娘で、私も、そうしようと思えば、ただの人間の男の姿をとり、また、そのように振る舞うこともできる。だから、そなたがぜひにと望むなら、そなたがそのちっぽけな肉体を有して過ごす短い一生に、人間の男として付き合ってやれぬこともない。そう、かつてそなたが取るに足らぬ人間の男たちを愛するたびに、その愛人に付き合って懲りもせずに繰り返してきたような、愚かな人間ごっこにな。だが、私が求めているのは、そのような人間のまねごとではない。たしかに、人間の生態になぞらえれば、そなたは私の子を産むということになるのかもしれぬが、しかし、そなたと私の婚姻はそのような人間同士の結び付きとは全く違うものだ。私はそなたと共に新しい世界を産み出そうと思う……』

「……新しい世界？」

『そうだ。我等は世界に再生をもたらすのだ。そなたが産み落とした混沌の中から、新しい星が生れる。世界はあらゆる穢れから解き放たれ、より完全な、より美しい、清らかで力に満ちたものとして甦ることになろう。どうだ、すばらしいことではないか』

「ちょっと待って。それじゃ、今あるこの世界は、この星は、どうなっちゃうの？　うまいこと言って、あなたの言ってる再生って、つまりは滅びのことじゃない！」

『死無くして再生は無く、滅び無くして新しい誕生は無い。闇無くして光が在りえないように。昼と夜とが混じりあい、生と死とが溶けあう時、世界は、混沌の中から、今一度、新しく生まれ出ずるのだ』

自分でも何を言おうとしているのかわからないまま、里菜は叫んだ。

「そんな再生なんて、あたしはいらない！　星ひとつ混沌に還さなければ甦れないほど、そんなにこの世界は穢れているの？　そんなに病み衰えているの？　そんなこと、あたしは信じない。エレオドラ川には今も青い水が流れ、人の生命のぬくもりはこんなにやさしい。これが滅ぼされなければならないものだとは、あたしは思わない。このぬくもりを消し去ることでしか得られないのなら、永遠も完全も、あたしは望まない！」

それは、里菜自身の頭の中からではなく、どこか別の、自分の意識も及ばないもっと深いところから水泡のように浮かび上がってきた想いで、里菜はそれを意味も解さぬままに言葉に直して口にしているような気がしたが、いったん口に出してみれば、その言葉が、自分自身の想いと全く同じであることも分かった。自分は、この世界を、そして、今、自分の傍らにあるこの温もりを、失いたくないのだ――。

魔王に向けて話しながら、里菜はまた、アルファードに寄り添い、その胸のぬくもりを掌で確かめていた。

アルファードは里菜を静かに抱き寄せて、もう何も言わず、黙っていた。

「魔王。あなたは、この国を滅ぼすつもりなのね？　あなたが神様なら、どうして、何も知らずにあなたを崇め、あなたに素朴な祈りを捧げ続けてきたこの国の人々を、世界と一緒に葬りさってしまうことなんかができるの？　あなたは、あなたの民を、愛していないの？」

『愛しているとも』と、魔王は笑った。

『人間は常に私を楽しませ、退屈を紛らわせてくれる。実に愛おしいものたちだ。再生の暁――あるいは、そなたの考えで言えば最後の日――には、私は彼らの魂を、あてどなくさまよわせてなどおかず、黄泉の私の元へ呼び寄せてやるつもりだ』

「だって、みんなは――少なくともあなたを崇めるタナティエル教団の人たちは、あなたのいう再生とやらを、そんなふうに解釈して

はいないと思うわ。あたし、あの人たちのこと、あんまりよく知らないけど、だけどたぶん、あの人たちは、この地上にもっと素晴らしい御世が開けるって、そう思って……」

『そんなことは、私は知らぬ。私は彼らに自ら何か語ったこともないし、何かを約束したわけでもない。彼らはたしかに、この国の他の者たちよりは真実に近いことを知っているようだが、とはいえ、真実を知っているわけではない。しょせん愚かな人間だ』

「愚かって……。あのやさしいおじいさんや、その他の大勢の人たちが、ずっとあなたを慕って、きっとその人生のいろんなものを犠牲にして、少しでもあなたに近づこうと、あなたを知ろうと願い続けてきたのよ。それをそんなふうに冷たく……。あなたはあの人たちのことを、少しでも気にかけてあげてきたの？」

『気にかけてきたとも。他の人間たちと同じようにな』

魔王の冷たい答えに、里菜は戦慄とともに悟った。彼は、やはり神なのだ。彼がとっている人間臭い態度は、ほとんどすべて、人間の言動のパターンを分析し、模写したものに過ぎないのだろう。たぶん彼は、そうすることを戯れとして楽しんでいるのだ。本来の彼は、ただ冷淡に無関心に人の営みを高みから見下ろして面白がる、それだけの存在だ。きっと、人間が思うほど、神は人間のことなど気にかけてはいないのだ。

けれども里菜は、魔王の中にいくらかは本当の激しい感情のようなものがあることにも気づいていた。それは里菜に対する異常な執着と、アルファードに対する憎しみだった。

里菜の中で目覚め始めた記憶が、こう告げた。

――神代の時代には、彼も神であるなりの感情を、心の動きを持っていたのだ。だが、神代の終焉の時、彼の心は、その時の激しい感情を固定させたまま、動かなくなった。今の彼は、その古い激情を胸の内で発酵させ続けているだけで、もう、新しい感情に動かされることはない。彼を動かすのは、不自然に凝り固まった古く苦い絶望だけだ。そしてその絶望は、自分がアルファードを愛し、神で

あったころのタナートと、彼とともに治めていたこの世界を見捨てたために生れてしまったのだ――。

（これは、あたしの罪だ。あたしの行ないが、この世界に『魔王』を呼んだんだ。だから、あたしが、魔王を始末しなければならない）

里菜は決然と、魔王の丈高い影を見あげた。

「……いいわ、わかったわ。とにかく、みんなに刻印をつけるのをやめてくれるなら、あたし、あなたのものになるから、今すぐ、どこへでも連れていってちょうだい。ただ、あたしはまだ、この身体を、すぐには捨てたくないの。だって、まだ十七年しか生きていないのよ。まだ恋もしていないし、花嫁衣装も着ていない。だから、やっぱり、ひとつだけ、お願いをさせて。婚礼の日には、あたしのために、あなたも人間の姿で現われて欲しいの。人間の姿で、あたしと婚礼を挙げて欲しいの。そして、あたしの気が済むまでのほんのしばらくの間でいいから、そのまま人間の男として振る舞って、愛し合って結ばれた普通の恋人たちのように、共に過ごして欲しいの。たとえまやかしでもいいから、あたし、今のこの身体の、人間の娘としての夢をかなえたいの」

言いながら、里菜はひとつの、つたなくも悲劇的な捨て身の作戦を考えていたのだ。

――魔王が目で見て手で触れる人間の姿をとっていてくれさえすれば、婚礼の場で隙をついて魔王と刺し違えることができるかもしれない。それが駄目なら、その夜、あるいは少なくともしばらく妻として暮すうちには、寝首をかくチャンスくらいあるだろう。その場合は、もしかすると、己の身内に孕んだ混沌ごと、魔王の後を追うように自らを葬ることになるかもしれない。自分の裡から混沌が生れ出て、この世界を呑み込み、滅ぼしてしまうことがないように――。

その悲壮な覚悟を読み取りでもしたように、魔王はまた笑った。

『おお、そなたは、そのように何も知らぬ無力な小娘としてあるときでさえ、全くしたたかだ。それでこそ、そなただ。そなたは、妥

協するふりはしても、決して自分の要求をすっかり引っ込めることはしない。無垢な風情で餌をちらつかせながら、手をかえ品をかえてなにがしかの要求を突きつけ続け、決して駆け引きをあきらめないのだ。昔から、そなたはそういうふうだった。そして、そういうそなたをこそ、私は愛したのだ……。

いいとも、そなたがその肉体を失いたくないというなら、私も、かりそめの人の姿でそなたと婚礼を挙げ、しばらくは、そなたの夫として振る舞ってみせもしよう。あるいは、それもまた一興かもしれぬ。実のところ、私も、今のそなたを非常に気にいっている。我ながら酔狂なことだが、今のそなたは、それはそれで実に愛らしいからな。それに、どうせ、その身体が生きられる時間など、私にとっては、どのみち、ほんのつかのまにすぎない――。

しかし、まあ、それはすべて、婚約の披露が済んでのちの話だ。物事には順序がある。人間として婚礼を挙げるのであれば、人間のしきたりをきちんと守り、しかるべき求婚の手続きを踏むべきだろう。今はまず、とにかく、婚約披露の振る舞いだ。そなたが何と言おうとも、王たるものは何かにつけてその民に盛大な振る舞いをせねばならぬものなのだ。愛しい者よ、その後でまた会おう……』

「やめて！　やめて、魔王！　あたし、あなたのところへ行くから、そんなことしなくても行くから、お願い、やめて。今すぐ、あたしだけを連れていって！」

里菜は、後ろから引き止めようとするアルファードの腕を振り切って、必死の叫びを上げながら、薄れていく人の形をした闇の中に身を投げ出そうとしたが、その瞬間、闇は揺らめいて消えた。

同時に、ふたりのまわりに巡らされていた見えない壁が消えたかのように、四方から混乱の気配が押し寄せた。

「ギャーッ！」

どこかで悲鳴が上がった。

それを合図に、闇の中に、降って沸いたように魔物の気配が満ちた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第一三場（3）

闇の中、あちこちで戦闘や逃走が始まった。

悲鳴や剣戟の音が上がり、流れ星のように飛び交う火の玉が、一瞬、闇を照らしては消える。ときおり、その火の玉の飛んだ先で、それとは別の青白い炎――魔物が燃える炎――が、ぱっと燃え上がる。

だが、それは、戦いというより、魔物たちによる一方的な人間狩りだった。

同じ闇でも、これが夜なら、人間たちは最初から角灯などの明りを用意しているはずだが、今はそれもない。人々が投げる火の玉は、通常、一瞬で消え、照明代わりにはならない。表に残った人々がみな魔物退治を業とするものでもなく、その多くは、逃げ遅れ、武器も持たず、恐怖に混乱した一般人だ。魔物に襲われなくても転んだりして怪我をするものもいるだろうし、真っ暗闇の中で、おそらくはかなりの数の同士討ちもおこっているのだろう。

けれども里菜たちも、まわりのことをそうそう気にかけていられなかった。ふたりにもたちまち四方から魔物が襲い掛ってきたのだ。

アルファードは最初のいくつかの攻撃を、耳と勘を頼りに剣で払いのけながら、合間をぬって、手探りで里菜を自分の背中に回した。

「リーナ、俺と背中合わせになって短剣を構えていろ。俺の背中から絶対離れるな」

里菜は目を閉じた。こんな闇の中でへたに目を開けて自分の貧弱な五感に頼ろうとするより、むしろ、何も見ようとせず、何も考えずに、護りの短剣にこめられた不思議な力にすべてを委ねた方がいいと思ったのだ。

アルファードの体温を背中に感じながら立ち尽くす里菜の手を操

って、短剣が勝手に動き出した。
この、闇の中の襲撃が、いつまで続くのかは分からなかった。日蝕の闇ならほんのひとときのはずだが、すでにかなりの時間が経って、太陽が再び現われる気配は全くないのだ。
闇の中で、目をつぶり、音と気配だけを聞いている。ときおり、魔物の剣が間近で風を切る。アルファードの躍動が空気を震わせて背中に伝わってくる。閉じたまぶたの裏に、幾度か、魔物が燃える炎が映った。
どのくらい短剣を振るっていたのかわからない。たぶん、ほんの数分間のことだったのだろう。ふいに、まぶたの裏が赤くなった。魔物が燃える時の一瞬の閃光ではなく、またたきもゆらめきもしない確固とした光の気配だ。
同時に、よく響く高い声が、騒音の間を縫って耳に飛び込んできた。
「リーナお姉ちゃん！　アルファードお兄ちゃん！　こっち、こっちへ来て！」
目を開けて見たのは、治療院の玄関先に、いつかと同じ青い光を頭上に頂いてすっくりと立つキャテルニーカの小さな姿だった。その隣に、リューリと、手に手に武器を持った数人の男性職員、それになぜか、例の天才少年ティーオがいる。玄関は、魔物の侵入を防ぐため、すでに閉ざされているらしい。
キャテルニーカの青い光球に照らし出されて、治療院の前だけは昼のように明るくなっていた。同士討ちをしていたものはあわてて止め、どちらへいったらいいかわからずに逃げ惑っていたものたちも、いっせいに玄関に向かって殺到した。
「みんな、早く中へ！」
リューリが叫び、男性職員が玄関を開けて人々を中に入れてやっている。ちらりと見えたドアの向こうは、昼のように明るい。ありったけのランプや蝋燭を灯してもあれほど明るくはならないはずだから、キャテルニーカはたぶん、自分の頭上にでなくても、光球を

残して、浮かべておけるのだろう。
　里菜とアルファードは、いつのまにか治療院からだいぶ離れたところまできていた。キャテルニーカの青い明りはそれでも届いていたが、その明るさにもかかわらず、魔物たちは、消えもせず逃げ出しもしなかった。
「こっちへ来て！　あたしとティーオを連れに！」と、キャテルニーカが叫ぶ。
　アルファードは、魔物の攻撃の隙をついて振り向きざまに、
「ちょっと失礼する」と告げ、里菜の目の前でぐっと身を沈めた。
　と、思うと、里菜の体が、腹を支点に下から掬い上げられて、ふいっと宙に浮き、気がつくと里菜は、アルファードの肩の上に荷物のように担ぎ上げられていた……らしい。後で思えばそう分かったというだけで、その時はただ、頭を下に宙に浮いたワケの分からない状態としか認識できず、動転した里菜は、水から揚げられた魚のようにバタバタと暴れた。
　アルファードはそれを難なく押さえ込み、
「すまない。ちょっと我慢していてくれ」と言うなり、肩に担いだ里菜を左手で支え、右手に低く構えた剣で前に立ち塞がる魔物たちを切り伏せながら、治療院に向かって走り出した。今は魔物を消すことが目的ではなく、とにかく道を開けさせればいいので、普段の正確な突きではなく、薙ぎ払うような撫で切りである。
　里菜はもう、ものを考える余裕も無く、ただ、振り落とされないように必死でアルファードの服を掴んでいた。なんだか変なかっこうで頭が下になっているのだが、自分がどういう態勢になっているのかも、アルファードのどこにどう掴まっているのかも良く分からない。その状態で右に左に振り回されるのは、天地がひっくり返ったような、目の回る体験だ。
　そんな中、頭の上でアルファードが、
「なるほど、火事場のばか力とは、このことか……」と、妙に冷静に、ぼそっと呟いた声が聞こえて、里菜は状況も忘れて吹き出した。

アルファードは、肩に担いだ里菜の体重も立ち塞がる魔物ものとはせず、競技場を疾走する短距離走者のようにあっという間に治療院に駆け戻ると、床に膝を付き、里菜をそっと降ろした。平衡感覚が狂ってくずおれかけた里菜を、駆け寄ったティーオが支えて座らせる。

「アルファードお兄ちゃん！　あたしとティーオを、初級学校に連れていって！」

白衣姿のキャテルニーカが、アルファードに飛びつくようにして訴えた。

「魔物が、建物に侵入しようとしているわ。ティーオの明りがいるの。あたしのは、明るいけど、ただの目眩ましみたいなものだから、魔物は追い払えないの。ここはもう、ティーオが明りをつけたから、大丈夫。学校が心配。あと、できれば他にも、人が大勢集まっているような建物に、なるたけ明りを灯して回りたいの。その途中はあたしが足元を照らせば、早く走れるし、戦いやすいでしょ？　それに、あたしの明りも、外に置いておけば、魔物は追い払えなくても、みんなが逃げたり戦ったりしやすくなるし」

「わかった。ニーカ、それじゃあ、君は俺が肩車しよう。俺は片手しか使えないから、後は君が、俺の目を塞がないように気をつけて自分でつかまっていてくれ。リーナ、立てるか？」

「はいっ！？」

いきなりきびきびと声をかけられて、里菜は一気に放心状態から浮上した。

「ティーオ、リーナ、君たちは、俺の後ろにぴったりついて走るんだ。ティーオ、君は、左利きだな。それなら、君は左後ろ、リーナは右後ろだ」

小柄なティーオは自信なさそうに口ごもった。

「はい、でも、僕、その……。剣も火の玉の攻撃も、あまり得意じゃないんです」

初級学校時代、武術は、幼少のころから天才の名をほしいままにしてきた彼の唯一の苦手教科で、特に火の玉の攻撃魔法は、宙に浮く火の玉の照明という他の誰にも真似できない技を持っていながら、十一の時まで一切使えなかったのである。

「ティーオ、大丈夫だ。このリーナは、魔物が魔法を使うのを封じることが出来る。だから魔物は火の玉ではなく剣で攻撃してくる。君のほうは魔法が使えるから、絶対有利だ。剣より火の玉の射程の方が長い。それに、正面の魔物はみんな俺が受け持つ。君たちは自分を守るだけでいい」

アルファードの励ましに、ティーオは緊張の面持ちで頷いた。

リューリがティーオに、たぶん入院患者の持ち物を拝借してきたのだろう小振りの剣を手渡しながら、力強く請合った。

「じゃあ、アルファード、そっちは頼むわね。こっちのほうは、任せといて。大丈夫、あたしは魔物を、これ以上、ここに寄せ付けやしないから」

リューリは自信たっぷりに言い切ったが、どうやらそれは実力に裏付けられた自信らしい。里菜はじっくり見学する余裕もなかったが、四人が打ちあわせしている間にも玄関目がけて押し寄せてくる魔物たちを、彼女は片っ端から、素早く的確な、流れるような動作で投げた火の玉で、ほとんど一人で片付け続けていたのだ。

「さ、行って！　後はあたしにまかせて。……魔物ども！　あたしの患者には、指一本触れさせやしないわよ！」

叫びながら次々に火の玉を繰り出すリューリの勇姿に、窓に鈴なりになっていた入院患者たちが腕を振り回して声援を送った。もっとも彼らも、そこでただ高みの見物をしているわけではなく、明るくなった路上の魔物目がけて、窓から火の玉を投げたり弓を引いたりしているのである。入院患者には兵士も多く、怪我や病気の軽いものは武器を手に玄関の中で魔物の侵入に備えたり、こうして窓ぎわから援護攻撃をしているのだ。

リューリの頼もしい言葉を背に、最小の陣形を整えた小さな部隊

は、ふたたび路上に飛び出した。
　キャテルニーカを肩車した先頭のアルファードが、肩の重荷をものともせず、行く手の魔物を押し退け切り払って道を開く。後に続く小さな二人は、アルファードが切り開いた道を、ときたま横から襲って来ようとする魔物から身を守りながら駆け抜ける。
　キャテルニーカは驚異的な身の軽さとバランス感覚を発揮してアルファードの肩の上で器用にバランスをとり、時々下方の魔物に火の玉を投げつけてアルファードを援護しながら、合間合間に頭上に手を差し上げて、次から次へと青い光球を浮かべ続けた。
「みんな、もう大丈夫よ！　ほら、光が見えるでしょう。治療院へ逃げて！　あそこへ行けば、魔物を退ける明りがあるわ！」
　キャテルニーカのよく通る声に、やみくもに逃げ惑い、あるいは同士討ちをしていた人々も我に返り、視界が戻った中を治療院に向かって走り出した。
　嵐の中の船のように揺れるアルファードの肩の上で、キャテルニーカは落ち着き払って堂々と背筋を伸ばし、金色の巻き毛を後光のように顔のまわりにたなびかせている。その、光り輝く小さな白衣の姿は、イルベッザの春分の祭りで山車のてっぺんに乗って花を振りまきながらパレードの先頭を行く、幼い＜春の女王＞を思わせた。
　小さな女王を頭上に押し立てた時ならぬ光のパレードは、闇に明りを灯しながら、石畳の構内を駆け抜けた。
　初級学校では、閉ざした門の前に若い教師や守衛役の兵士たちが立ち並んで必死に魔物を食い止めようとしていたが、光球を頭上に頂いた四人の姿を見、キャテルニーカの毅然とした言葉を聞くと、とっさに門を開けて彼らを通してくれた。
　校舎の中では、教室ごとに、老教師や女教師たちが怯える子供たちを抱き寄せて暗闇の中で震えていた。
　アルファードの肩から降りたキャテルニーカは、ところどころに青い明りを投げ上げながら、ティーオと並んで教室から教室へ走り

回った。教室ではティーオが、暖かな色合いを帯びた小さな光球を慎重な手つきで灯していく。外の乱戦の中ではキャテルニーカが手っ取り早い照明を残してきたが、彼女の光球には魔物を退ける力はないので、これは、ただ、視界が利くようにすることで人々のパニックを収め、逃げ道を教える役に立つだけの、応急処置のようなものだ。一方、ティーオの光球は、キャテルニーカのものよりずっと小さく暗くて外の広い場所を十分に明るく照らし出すことができないし、キャテルニーカのように素早くいくつも浮かべることもできないが、そのかわりに、魔物を退ける力がある。一部屋に一つずつでも灯していけば、少なくともその教室から魔物を締め出すことは出来そうだ。

ほとんどの教室に明りを灯し終ったころ、門が破られ、魔物が雪崩れ込んできた。

が、廊下を進んできた魔物たちは、明かりを恐れて教室に入ることが出来ず、勢いに押されてうっかり教室に飛び込んでしまった魔物も、すぐに消えこそしなかったものの、あわてて逃げ返ろうとした。どうやら、ここはもう安全だ。

「みんな、教室から出ないで。この明りの下にいてね！」と、キャテルニーカが教室の中の人々に言葉をかけてから、四人は、次の建物に明りを灯すべくふたたび陣形を整え、魔物を蹴散らしながら学校を飛び出した。

第三章＜イルベッザの闇＞　第一四場（1）

魔王のもたらした突然の夜が過ぎた後、治療院は、廊下から階段にいたるまで、怪我人や、まだショックで動けずにいる避難者たちで埋め尽くされていた。治療師たちは、そこら中に寝かされている患者をまたぐようにして、忙しく飛び回っている。

あの混乱は、どれくらい続いたのだろう。

おそらく、闇に包まれていたのは、せいぜい一時間以内だったろう。けれども、イルベッザを襲った災厄は、闇と魔物だけではなかった。

里菜たち四人は、初級学校に続いて、構内の大勢の人が避難していそうな建物に、次々と明りを灯してまわった。遅くなった建物ほど、すでに魔物が押し入っていたりして被害が大きかったが、やがて、長かった『日蝕』は終り、魔物は姿を消した。

が、太陽が戻っても、災厄は終らなかった。いくつもの小さな地震が次から次へと街を揺るがし、不気味な地鳴りが人々を怯えさせた。地震そのものはそれほど大きくなく、物的被害としては、いくつかの古い建物や石塀、避難民のさしかけ小屋、それに、例の崩壊寸前だった防壁の一部が崩れたり傾いたりした程度で、怪我人もほとんど出なかったらしいが、すでにパニックに陥っている市民に更なる恐怖を与えるのにはそれで十分過ぎた上に、この時本当に恐ろしかったのは、やっと明るくなった地上に＜魔王の灰色の軍勢＞が涌くように現われて、揺れる大地の上を無言で行進したことだった。

この軍勢は、この時は、かつて北部でしたように街に火を放つことも、手にした鋤や鍬で人間を襲うこともしなかったが、彼らの中に死んだ身内や知人によく似た姿を見るだけで人々は正気を失い、突発的に理不尽な行動に出て余計な災難を引き起こしたものも多かった。

さらに、地震が収まった後、太陽は現われたものの異様に赤く不

吉に照り輝いていた空に、これまで都までは飛来したことのなかったドラゴンの凶々しい姿が、いくつも現われた。アルファードは、慌てふためいた＜賢人の塔＞からの依頼を受けて、とりあえず手近からかき集めた正規軍兵士の一団を引き連れて馬を駆り、ドラゴンを追っていった。

その間、里菜はキャテルニーカたちと治療院に残されて、雑用係たちを手伝っていた。

すべてが終ったらしい今、あたりはすでに夕暮れが迫って薄暗くなり始めているが、治療院の天井にはティーオとキャテルニーカの光球が明るく輝いている。

「こんなことなら、もっと早く僕の試作品をあちこちに配っておくんだった」と、ティーオはしきりと後悔していた。彼は子供のころからこうした光の球を浮かべることはできたのだが、それを誰にでも明るさを調節したり移動させたりできるものにしたいと工夫していて、その研究がまだ途上だったので、完璧を期して、実用化を伸ばしていたのだ。＜賢人の塔＞は、彼の試作品のおかげで、魔物の侵入を免れたという。

「そういえば、ティーオ、あなた、どうしてさっき治療院にいたの？」と、里菜が何の気なしにふと尋ねると、ティーオは、どういうわけか真っ赤になり、

「あの、あの、僕、今日は休めないような仕事が別になかったから、治療院が大変になるんじゃないかと思って、手伝いに……。それで、ついでにニーカを昼ごはんに誘おうかと……」と、蚊の鳴くような声で答えた。そのうろたえぶりに、研究所をずる休みでもしたのだろうかと里菜は思ったが、あわただしい時だったし、どうでもいいことだと思ったので、それ以上、追及はしなかった。

治療院は、里菜たち四人が明かりを灯して回っている間に、一時は結構大変なことになったらしい。リューリや他の治療師たちの奮闘にもかかわらず、数体の魔物が中に侵入したのだ。内部にはティーオの明りがあったとはいえ、急いでいたので数は少なく、また、

その明りも、近寄っただけで魔物が消えるというほど明るいものではなかったから、魔物は物陰を縫って紛れ込み、病室や廊下で患者を襲おうとしたらしい。

それでも、患者の中には、軽い怪我や病気で退院間近だった兵士などもいたし、リューリを含めた腕に覚えのある治療師たちもすぐに騒ぎに気づいて駆け込んだので、一時はかなりの混乱になったものの、怪我人が数人出ただけですんだという。

混乱の間中、里菜がずっと気にかけていたローイは、とりあえず無事だったようだ。治療院に戻って混雑の中でローイの姿を捜し出した時、その包帯が血だらけなのを見て、里菜は、彼が新たに瀕死の重症でも負ったかとぎょっとしたが、ローイは里菜の姿に気づくと、すぐに元気な声をかけてきた。

「おお、リーナちゃん！　あんたら、大活躍だったんだってなあ。ちきしょう、俺も、こんな身体じゃなければ、もっと華々しい大手柄をたててやったのに。手伝ってやれなくて残念だったよ」

「ローイ！　それはいいけど、あなたのその怪我……！」

「あ、これ？　大丈夫、大丈夫。ゆうべの傷が開いただけだよ。たいしたことないさ。こっちも、まあ、いろいろあったんだぜ。魔物が、俺のいた病室にも入って来てさあ。でも、心配御無用。全部このリュリュちゃんがやっつけてくれたからな！　いや、もうリュリュちゃんの強いのなんのって……！」

ちょうど巡回に来たリューリを指差して、ローイは興奮の面持ちでまくしたてた。

「俺、感動しちまったよ！　そりゃもう、すげえんだ。舞うように美しい優雅なフォームで強力な火の玉を投げまくり、ひとっつも外さねえ。かっこよかったあ！　もう、俺、惚れたよ、惚れた！　惚れちまったぜ！」

「リューリって、そんなに強かったの？」と、目を丸くする里菜に向かって、リューリは腰に手を当てて豊かな胸を反らしたお得意のポーズで、

「そうよ。『火の玉リューリ』のあだなは、だてじゃないのよ。魔物ごときに、あたしの患者に手を出させてたまるもんですか！」と、鼻息も荒く言い放った。大暴れの名残で、まだ相当、気が昂っているらしい。

「『火の玉リューリ』って、髪の毛が赤いからかと思ってた」

「それもあるけど、あたしは火の玉が昔から得意だったのよ。それで『火の玉リューリ』なの。実は喧嘩で火の玉使って停学くらったこともあるんだ。ああ、ひさびさに思いきり火の玉投げられて、すっきりしたわ！」

「へええ、そうなんだ……」と感心する里菜に、ローイが我が事のように自慢した。

「そうさあ。下手すりゃ、俺のリュリュちゃんはアルファードより強いぜ」

「ちょっと、なんでいきなり『俺の』になるのよ。ずうずうしいわね！　だいたい、そのリュリュちゃんっていうの、いいかげんやめてよね」と、リューリはローイを睨んでから、付け加えた。

「でも、アルファードといえば、あたし、彼のこと、見直したわ。ただ無駄にかさ張って偉そうに場所塞いでるわけじゃなかったのね。そりゃあ強いのは知ってたけど、いくらガタイがでかくても力が強くても、ああいう時って、役に立たないヤツは役に立たないものよ。その点、彼は立派だったわ。筋肉バカかと思ってたけど沈着冷静だったし、見かけ倒しじゃないっていうか、だてにでかい図体でのさばってたわけじゃなかったっていうか。並んで戦ってみたい、それだけの価値がある男だと思う。これって、あたしの、最大級のほめ言葉なのよ。こんなこと、滅多に言わないのよ。ありがたく思ってね。リーナ、あなたの目、思ってたほど節穴じゃなかったのね。……あら、おしゃべりしてる場合じゃなかったわ。さ、治療よ、治療。怪我、見せて」

リューリはローイの包帯を解いて傷を調べ始めた。

ローイの傷口が開いたのは、左肩に深い傷を追っているにもかか

わらず、なんと弓を引いたからだそうだ。ローイの病室は二階だったのだが、彼は同室のものに窓のそばまで連れ出してもらって、そこから魔物を矢で射まくったらしいのだ。

「俺、最低五体はやっつけたぜ！」と自慢するローイに、

「まったく、無茶するわよねえ。よりによって、肩だの背中だのに怪我してる人が弓を引くなんて。傷がすっかり開いてるじゃない」

とリューリが傷を調べながら呆れた。

「だって二階の窓からじゃ、遠すぎて火の玉はあんまり役に立たないから、弓でやるしかねえじゃん。それに、二階の窓から、下にうじゃうじゃしている魔物を狙い撃ちなんて、射手にとっちゃ、ずいぶんとおいしい状況だぜ。これを放っておけるかい」

「まったくしょうがないわね。まあ、たしかにあなたは入院患者の中ではたぶん一番役にたってくれたけど。それにしてもあなた、つくづく頑丈に出来てるわね。殺しても死なないんじゃない？　だいたい、こんな怪我してて、よく弓が引けたわね。相当痛かったでしょうに。どこからそういう力が出てくるわけ？」

「うん、自分でもよくわかんねえや。まあ、火事場のばか力ってやつだなあ」と、ローイはへらへら笑っていた。

もう一人の『火事場のばか力』は、夕方も遅くなった頃にドラゴン退治から戻ってきた。後で聞いた話によると、市内を西に東に駆け回って何頭ものドラゴンを退治したり追い散らしたりしてきたのだというが、幸い大きな怪我もせず、一見したところ、それほど疲労困憊疲の体にも、また、勝利に昂ぶっているようにも見えず、いつもどおりの平静さで、何事もなかったような顔をしていた。

キャテルニーカに傷を治療してもらうために服を脱いだアルファードの胸の辺りにいくつも痣が出来ているのを見た里菜は仰天したが、それが、さっき肩に担ぎ上げられた時に自分の膝が付けたものであると知って、盛大に赤面した。どうやら自分はアルファードの胸側に脚を、背中側に頭を垂らした無様な格好で担がれながら、動転のあまり事態を飲み込めずにさんざん脚をばたばたやって、アル

ファードの胸や腹を強かに打ち付けたらしい……。その時の自分がどんなに無様であられもない姿だったかは、考えたくもない。しかも、そういえば、その時、アルファードの左手は、自分のお尻か太股を無造作に押さえ込んでいたのではないだろうか――。

里菜は、あまりの恥ずかしさと申し訳なさとに顔から湯気が出そうな勢いで小さくなって謝ったが、アルファードのほうは全く気にしていない様子だった。あくまで非常事態の救出行動とそれに伴うちょっとした犠牲として割り切って理解しているらしい。

キャテルニーカも、傷の手当をしながらアルファードに謝っていた。

「さっき、あたし、重かったでしょ。ごめんね。首、痛くない？」

アルファードは、真面目な顔で肩を回してみてから答えた。

「ああ、初めは、小鳥が止まったみたいに軽いと思ったが、ずっと担いでいたら、どんどん重くなってきた。明日は肩凝りで首が動かなくなるかもしれない」

「もし、そうなったら、明日また、治療院へ来て。完全には治せないと思うけど、少しは首が動かせるようにしてあげるから」

キャテルニーカが言うと、となりで薬草を調合していた年配の治療師が、忙しいはずなのに妙にのんびりと口を挟んだ。

「そうだよねえ、肩凝りとか腰痛とか、そういうのには案外、魔法が効かないんだよね。そのかわり薬草の湿布とか、マッサージとか、そういうのもあるからね。君は若いんだから、そういう治療も、きっと効きめが早いよ。いや、いや、若いって、いいねえ……」

この、なんだか呑気な会話を聞いているうちに、里菜はなんとなくおかしくなって、くすくす笑い出し、笑いが止まらなくなってしまった。

「お姉ちゃん……。何、笑ってるの？　大丈夫？」と、怪訝な顔をするキャテルニーカに、里菜は、

「う、うん、ごめんね……。あのね、こうやって肩凝りの心配なんかしてられるのは、あたしたちのだれもたいした怪我をしなかった

からだって思ったら、なんだかほっとしちゃって、それで笑いが……」と答えて、しまいには涙を浮かべ、くすくす笑い続けた。

けれど、里菜も、いつまでも安堵に笑ってはいられなかった。治療院に次々と運ばれてくる噂は、良くないものばかりだった。

患者の一人がもたらした情報によると、あの闇の中で海岸沿いの低地帯を津波が襲い、下ファルド地区を中心に壊滅的な被害を与えたという。といっても、住民のほとんどは異様な引き潮を見てすでに避難しており、死者は出ていない模様だということだが、家々や係留中の船はほとんど流されたらしい。また、市街に出ていた軍隊の一部が＜魔王の灰色の軍勢＞と、もろに鉢合せして、その混乱の中で、どういうわけか同士打ちを始めてしまい、一個小隊がほとんど壊滅してしまったという噂もある。

この日の被害の全貌がある程度はっきりするのはこれから何日もたってからなのだが、どうやら、直接、魔物やドラゴンに殺されたり傷を負わされたりしたもの、地震や津波の被害者は、ごく少なかったらしい。魔物は多くの人々に刻印を与えはしたが、積極的に人間を殺したり傷つけたりする意志はなかったようだ。ひどかったのは、パニックによる二次的な人災だったのだ。

次々にもたらされる悪い噂の中で、里菜は、雑用係のフェルドリーンが、上級学校から治療院に向かおうとしていて日蝕の騒ぎにまき込まれ、刻印を受けたことを知った。

穏やかで生真面目な丸顔に丸い目、灰色の小鳩のような静かでやさしいフェルドリーン。里菜と彼女は、時々昼食を一緒にとるだけのつきあいだったのだが、この、おとなしく控え目な年下の友人が、里菜はとても好きだった。

その後で更に明らかになった魔王の所業のなかで、里菜が特に許せなかったのは、魔王が直接手を下したのではないとはいえ、多くの幼い子供たちに怪我を負わせたり刻印を与えたことだった。構内の初級学校では、里菜たちの活躍のおかげで大きな被害は出なかったのだが、市内の他の学校には魔物が乱入したところもあったし、

また、騒乱の中では、子供や老人といった弱者に被害が集中したのだ。

床に目を落して身を震わせている里菜に、キャテルニーカが静かに歩み寄った。

「お姉ちゃん。憎んじゃ駄目。自分も、他の誰かも、憎んじゃ駄目よ」

そう言ってキャテルニーカは里菜の頭にそっと両手を触れた。

第三章＜イルベッザの闇＞　第十四場（2）

打ちひしがれた里菜は、あたりが暗くなったころ、アルファードと共に治療院を出た。部屋に戻っても眠れはしないだろうと思ったが、たいした怪我はないものの疲れ果てていて、もう雑用係の手伝いもできなさそうなので、ここにいても邪魔になるだけだと思ったのだ。

人々は当然まだ魔物を警戒していて、夜の路上には人影もなかった。

と、前ぶれもなく、行く手の闇が集って、おぼろげな人の形になった。

アルファードが手にしていた角灯も、その闇を照らし出すことはなかった。光は、そこに届いたとたん、切り取られたように消え失せた。

アルファードは角灯を下に置くと、剣を抜いて身構えた。

『エレオドリーナ。どうだったかな、私の、国民（くにたみ）への盛大な施しは……』

笑いを含んだ魔王の言葉に、里菜は逆上した。

「魔王！　許さない！　絶対に許さない！」

アルファードが止める間もなく、里菜は短剣を振り上げて闇の中に飛び込んでいた。

が、闇はもう、そこになかった。最初からもっと遠くにあったかのように、里菜の少し前に黒々とわだかまっていた。

「魔王、出てきなさいよ！　ここへ出てきて！」

『エレオドリーナ。そんなに私と会いたいか。ならば、そなたが北へ来い。私はそこで待っている。……エレオドリーナよ。私の花嫁になるのは、嫌か？』

「嫌よ！　あたりまえでしょ！　ものすご～く嫌に決まってるじゃない！　それでもさっきは、あたし一人が犠牲になって、それでこ

の国の人たちが魔物や刻印に脅かされなくなるならあなたの妻になろうと思ったから、それであたしを連れていってって言ったのに、あなたはそれを無視して、あんなことをした。許せない。なんで、あんなことをしたの！」

『言ったであろう。婚約披露の振る舞いだと。そなたへの結納代わりだ。人間の娘に求婚するには、しきたりを守ってきちんとした手順を踏まねばならぬ。そなたが人間の娘として婚礼を挙げたいと望んだのだぞ』

「何をふざけているの！　冗談じゃないわ。誰があなたとなんか……」

『そうか、もう、私の妻になるとは言ってくれないか。それならばエレオドリーナよ、私と戦いに来い。戦いにな！　待っているぞ、エレオドリーナ……』

からかうような笑いを残して、闇は消え失せた。

里菜はしばらく魔王が去っていった後の闇を睨みつけていたが、やがてアルファードに向き直って、決然と顔を上げた。

「アルファード。あたし、北へ行く。魔王と戦いに行くわ。荒野の結界は、あたしを阻まないと思う。魔王があたしに来いって言うんだもの」

「リーナ。それでは魔王とやらの思うつぼだぞ。あいつは、こういうことを何もかも、君を挑発して自分のもとにおびき寄せるためにやったんだ」

「わかってる。だけど行かなくちゃならないと思うの。あたし、なんとなく何か思い出したような気がするの。遠い昔、たぶん生れる前のことを。はっきりと、どんな出来事があったか思い出したわけじゃないんだけど、魔王はあたしが始末しなければならないってことはわかった。そして、たとえ罠でもなんでも、とにかく魔王の城に行かないことには、それはできないから」

「……そうか。リーナ、それなら、俺も一緒に行こう」

アルファードの目の中に、静かな決意があった。

「ありがとう、アルファード。でも、あたし、ひとりで行く。これは、あたしの戦いだから」
「いや、俺も行く」
「駄目よ。言ったでしょ。これはあたしの戦いなの。それに、魔王はあなたを憎んでいるのよ。たぶん、あたしが、そのう……、あなたを、愛したから。あなたが行けば、魔王はきっとあなたを殺すか、もっとひどいことをしようとするわ」
「ああ、わかっている。だからこそ行かなくてはならないんだと思う。たぶん魔王は、俺のことも結界で阻みはせず、君と一緒に通してくれるだろう。いくら君が俺を庇おうとしても、魔王は俺を無関係な人間だとは思っていないし、実際、俺は本当に、決して関係なくなんかないからだ」
たぶんその通りなのだろうと、里菜は思った。ふたりの中に、遠い記憶が、未だ形にならずにおぼろげに甦り始めていて、その記憶がそれぞれに同じことを囁いているのだ。
「リーナ。さっき君は、自分はもう子供じゃないから俺に頼るのはやめるとか、なにかそんなようなことを言っていたね」
アルファードの穏やかな言葉に、里菜はちょっと赤くなった。魔王と向かい合い、アルファードと背中合わせで戦った後の今となっては、さっきの自分の気負った決意表明が、なんだかひどく幼稚なものに思えたのだ。
「ああ、あれ……。なんか、生意気なこと言って、ごめんね。何もあんな言い方しなくてもよかったのにね」
里菜は小さく笑ったが、アルファードは真面目な顔で言った。
「いや、謝ることはないが……。ただ、大人になるというのは、別に、誰にも頼らず何もかも一人で抱え込んで苦しむことじゃないんじゃないだろうか。……ああ、このことについては、俺には、君に偉そうに説教する資格はない。俺自身が、ずっとそういう愚かな生き方をしてきたような気がするからこそ言うんだ。リーナ。愚か者は俺一人で十分だ。君まで俺と同じ愚かな過ちを犯すことはない。

だから、俺に、話してくれないか。俺の知らないところでずっと続いていたらしい、君の戦いについて。村を出る前に、一度だけ、君は、魔王の夢のことを話してくれたね。あれ以来、俺は、君から、そのことについて何も聞いていない。あれから、何があったんだ？　昨夜のローイの件も、これに関係していたのだろう？　昨夜も、ちゃんと尋ねておこうと思ったが、機会がないうちに、こういうことになってしまった」

言われてみれば自分がまだアルファードに何も話していなかったのだと思い当たった里菜は、後悔とともに、アルファードにすべてを打ち明けた。

黙って里菜の説明を聞き終えたアルファードは、最後に頷くと、静かに言った。

「事情は分かった。それは君が一人で抱え込むべき問題ではないだろう。もっと早く俺に話してもらいたかったと思う」

「うん……ごめんね」

「いや、君を責めているわけじゃない。俺が君からそういうことを打ち明けてもらえるような自分で在れなかったことを悔いているだけだ。そのせいで、君を一人で苦しませてしまったから。……リーナ、君は、さっき、泣いていたね？」

「えっ、さっきって？」

「魔王に、妻になると言ったとき」

里菜は赤くなった。ローイに釘を刺されたばかりだったのに、つい、悲劇のヒロイン思考に陥ってしまっていたような気がする。自分で考えた悲しい筋書きに自分で酔っていたようで恥ずかしい。

「見えたの？　暗かったのに……」

「いや。見えなかったが、分かった」

「だって……あたしのあの計画通りになっていたら、たぶんあたしはここへはもう戻って来られなくて、あなたとも、他のみんなとも、きっと二度と会えないし、あたしには他に好きなひとがいるのにみんなのためには我慢してあんなやつのお嫁さんにならなきゃいけな

いんだって思ったら、自分で自分が可哀想になってきちゃって、自分で言ってることを聞いてるうちに自分でだんだん悲しくなっちゃって……。一人で勝手にぐるぐる考えて、勝手に泣いて、バカみたいでしょ」

里菜はうつむきながら笑って見せたが、アルファードは真顔で言った。

「いや。俺も、聞いていて辛かった。もう二度と、あんなことは言わないで欲しい。君があんなやつの花嫁になるなど――それも、自ら望んでではなく、犠牲を買って出て嫌々その身を差し出すなど、耐えられない。そんなことはさせない」

里菜は思わず顔を上げてアルファードを見た。アルファードはわずかに目をそらしたが、それが拒絶の仕草ではないのは、里菜にも分かった。アルファードは今、とても言いにくいことを、とても苦労して言おうとしているらしい。

「……リーナ、今まで俺は、君を拾った時に自分でそうありたいと思ったほどには、また、おそらく君が俺に望んでくれたほどには、君に十分にやさしくすることが出来なかったと思う。自分の内心の問題にかまけて、君の気持ちを思いやる余裕が無く、君に、辛い思いをさせていたかもしれない。すまないと思う。許してほしい」

里菜は少し驚いてアルファードを見た。こんな謝罪を聞くとは思わなかったのだ。

自分よりずっと大人だと思っていた、万能だと思っていたアルファードが、ずっと何か悩んでいたらしいことに、うすうす気づいてはいた。彼には彼の苦悩があったのだ。自分には窺い知れない、彼だけの苦悩が。

でも、それは、謝ってもらうようなことだろうか。謝るべきは、アルファードの心を思い遣ることも出来ずにこちらの要求ばかりぶつけようとしていた幼く身勝手な自分の方ではないだろうか。アルファードが自分に悩みを語ってくれないことを不満に思ったりもしたけれど、それも、アルファードのためではなく自分のための不満

だったような気がする。自分は本当にアルファードのことを理解しようとしたことがあっただろうか――。

けれど、里菜が言うべき言葉を思いつけずにいるあいだに、アルファードは、淡々と言葉を続けていた。

「でも、それでも俺は、＜女神の淵＞から君を抱き上げた時に女神に誓った、命に代えても君を護ろうをいう誓いだけは、ずっと変わらずに守ってきたつもりだ。俺は、君を自分の家に連れてくる時に、この少女が俺に護られることを必要としなくなるまで――十分に成長して、誰にも護られる必要がなくなるか、あるいは俺以外の護り手を自分で選び取るかするまでは、俺が責任もって護り通そうと、そういう覚悟を持って、君を家族として迎える決心をした。そういう覚悟があったからこそ、君を自分の家に迎え入れた。

これは、俺が、君の気持ちとは関係なく、勝手に、一方的に決めたことだ。自分のために誓ったことだ。俺の問題だ。だから、もちろん、それが君の迷惑になるのなら、俺は引き下がる。が、俺が思うに、君はまだ、護られる必要がある。君は、もしかすると、ある意味では俺より強いのかもしれないが、それでもやはり、この世界に生まれ出て一年もたたない幼子に過ぎないんだから。

だから、君が俺以外のものを護衛に望むのでないのなら、俺に、誓いを全うさせてくれ。俺から、自分で立てた誓いを守るチャンスを奪わないでくれ」

アルファードは里菜にまっすぐに向き直って、真摯な音色で告げた。

「リーナ。俺を置いて一人で行ってしまったりしないでくれ。一緒に行こう」

アルファードの目には、もう、あの、憑かれたような昏い輝きは宿っていなかった。アルファードの瞳はふたたび穏やかな大地の色を取り戻し、その底に静かな力を湛えて里菜を見つめていた。

「うん」と頷いたとたん、ふっと心が軽くなって、里菜は、ちょっと甘えて白状した。

「ありがとう。ほんというとね、アルファード、あたしさっき、ひとりで行くなんて偉そうなこと言ったけど、実は、実際にどうしていいか、全然わからなかったんだ。だって、結界まで行けば、その後は、魔王があたしに来いって言っているからにはなんとかなると思ったんだけど、そこまでどうやって行けばいいか、見当もつかないんだもん。ほら、そこまでの旅の手配なんか、しなきゃならないでしょ？　乗り物とか食料とか……。あたし、情けないけど、そういうこと、全然わかんないの。『あっち』でだって一人旅なんかしたことないし、どっちみち、ここでの旅って、『あっち』の旅と全然違うし。だいたい、途中、宿屋に泊まったり野宿したりも、一人じゃ心細いし。北の荒野にたどり着く前に、路銀を全部すられたり毒キノコ食べたりして野たれ死んだり、人買いに捕まって売り飛ばされたりしたら、すっごいバカみたいじゃない？」

「それはたしかにバカらしいな」と、アルファードは苦笑した。

「たしかに、君が一人で北の荒野まで行こうとしたら、まず間違いなく途中でその手の下らない災難にあって、そこまでたどり着けなかっただろう。なにしろ君ときたら、見るからに無力で世間知らずそうで、まるで狼の群れの前の仔羊かアリ塚の上の砂糖菓子かという風情で、悪い奴等から見たら、こんなに柔らかそうな獲物はめったにいないというふうにしか見えないんだから、君が一人で街道を歩いたりしたら、たちまちどこかの下らない小悪党に貪り食われて敢え無く終わるのがおちだ」

そこまで言われて、里菜は思わずちょっとむくれたが、本当のことだと思ったので、何も言い返せず、黙っていた。

アルファードは続けた。

「だから、俺を連れて行くといい。俺とて、別に、どんな野盗の群れもひとりで蹴散らせるなどと豪語する気は毛頭ないが、とりあえず俺が剣を下げて睨みをきかせているだけでも日和見な小悪党どもは近寄りにくいだろうから、無用な災難の多くは、剣を抜くまでもなく未然に回避できるはずだ。まあ、軒に飾る魔よけの怪物像のよ

うなものだと思ってくれ」
そう言って、アルファードは、ちょっと笑った。里菜も、軒に飾られたアルファードの怖い顔を想像して、ちょっと笑った。
アルファードと笑いあうのは、とても久しぶりのような気がした。そして、アルファードの声をこんなにたくさん聞くのも。
「ありがとう、アルファード。……あたしたち、きっと、帰ってこられるよね？」
「ああ」
アルファードは静かに頷くと、里菜の両肩にそっと手を置いた。大きな、暖かい手だった。
ただそれだけで、抱き寄せてくれるわけでもなかったけれど、肩に置かれた手から自分の中に何か静かな力が流れ込んでくるようで、里菜はいつまでもそうしていたいような気がした。揺るぎない大地のようなアルファードのまなざしと、その大きな手の温もり――それさえあれば、どこへでも、どこまででも行けそうな気がした。

――（第三章・完　第四章に続く）――

第四章＜荒野の幻影＞第一場（1）

――（引用）――

……こうして女神と男神は、それぞれ天と黄泉とにあって地上を正しく治め、世界は永らく、神代の平和の中で、幸福な赤子のようにまどろみ続けた。草木は茂り、鳥は歌い、魚は泳ぎ、獣は走り、大地に、海に、空に、生命は満ちて、無邪気に生まれ、生き、子を成し、そして無邪気に死んでいった。

そんな神代の楽園で、未だ嬰児であった人類もまた、様々なことを学びながらその数を増やしていった。

けれどもいつのころからか、タナート神は、双子の妹であるエレオドリーナ女神に、叶わぬ恋心を抱くようになっていた。失われし母なる混沌を密かに恋い慕い続けていた男神タナートは、かつて劫初の混沌の胎内でエレオドリーナとひとつであった思い出を忘れられず、いつしか彼女を妻にと望むようになったのだ。

しかし、タナートは、夜と闇を司るもの。昼と光を司るエレオドリーナとは、朝夕の一時、遠く離れて顔を見交わすことができるだけで、永遠に触れることはできない。二柱の兄妹神は、決して交わることのない運命にあった。それでもタナートはエレオドリーナに焦がれ続けた。

人類がみどり児の時を過ぎ、青年期に入ると、愛の女神でもあるエレオドリーナは、しばしば、人間の男を愛した。

そのたびに女神は、若く美しく生命の力に満ちた人間の女性の姿をとって、気に入った人間の男の前に現われ、特に気に入った恋人は山頂の神殿にいざない、そこで、人間の女がするように彼と共に暮し、ともに年老いていった。

そのたびに男神タナートは、為すすべもない嫉妬に苦しんだが、彼には永遠の時間があり、人間の命は短い。しばしの苦しみに耐え

た男神は、やがて女神の恋人に定めの時が来ると、歪んだ喜びを持って、女神の許からその魂を連れ去さるのだった。

そのために女神は、しだいにタナートを憎むようになっていった。恋人とともに年老い、老婆の姿で恋人の死を看取った女神は、その都度、長い嘆きのうちに喪に服した。女神が喪に服す時、世界は闇に包まれ、女神の心が悲しみに満たされる時、大地は冷えて、海は氷に閉ざされた。

しかしやがて幾千年の歳月が女神の悲しみを癒し、女神はまた若く美しく蘇り、地上に春が訪れる。

そんなことが幾度も繰り返されたのちに、女神はある時、また、一人の男を愛した。空で一番明るい星のように美しい若者、エレオドラ山の羊飼いのアルファードだった。

女神とアルファードは山頂の神殿で束の間の愛の日々を送り、やがてアルファードに、命の終る定めの時が来た。

けれども女神はアルファードをあまりにも深く愛していたので、それまでしてきたように年老いた恋人をタナートの手に委ねることを拒み、彼を星に変えて天に上げた。この、銀のアルファード星は、今でも、女神の肩に寄り添うようにエレオドラ山の上に輝いている。

これが原因で、女神と男神はついに決裂し、神々の間に戦さが起こった。戦さは長く続き、地上は洪水や旱魃に交互に見舞われ、山々は火を吹き、いくつもの島が海に沈んだ。

タナートの捲属であった妖精たちは、この戦いにおいてタナートに与することを拒んだために、彼から与えられた＜魂の癒しの力＞を封印された。自らを癒すことのできぬ魂にとって、神代の無垢の幸福を失った世界は、その肉体の持つ本来の長い寿命を耐え抜くには辛すぎるものだった。この時以降、妖精たちは、肉体よりも先に魂が年老いるようになり、そのことが、やがて肉体の寿命をも、しだいに縮めていった。そして、そうなった後も、彼らは、本来長命の種族ゆえに子を生むことが少なく、為に、種族自体が年老いて衰えていくのを食い止められなかった。

こうして、人類が未だ火を知らぬころから神々のために金属を鍛えていたこの古く美しい種族は、神への反逆のゆえに、種族の長い黄昏を経てのちにゆるやかに滅び去ることになる。

神々の戦さはどちらにも勝利をもたらさずに終結し、この戦さの後、神々は地上との往来と相互の接触を絶ち、神代は終焉を迎えた。

しかし、一般にはあまり知られていないタナティエル教団の神話によると、この時、男神タナートは、一般に言われるように黄泉に去ったのではなく、女神を失った絶望から長い眠りにつき、未だ目覚めることなくこの地上にあって、ふたたび女神が地上に現われる時を待ちわびながら昏い悪夢の中をさまよっているという。彼らの説によると、北の荒野に棲むという『魔王』こそ、男神タナートが失意の眠りの中で見ている悪夢の中の彼の姿なのだという。

現在、彼らがしばしば魔王を崇める邪教集団と見なされるのは、この教義のためであろう。

また、エレオドラ山の麓、女神の司祭を擁する古いイルゼール村には、女神と女神の最後の恋人アルファードの運命について、一般に知られているのとは別の神話が伝えられているが、これについては、拙著『エレオドラ地方の民俗と神話に関する研究』を参照されたい。

――『イルファーラン国立上級学校神話学教科書』（＜賢人会議＞長老・イルファーラン国立研究所名誉研究員　ユーリオン著　統一暦百六十六年発行）より

一（前）

北の太陽は、紙を切り抜いたように頼りなげに白く、空低く浮かんでいた。

その弱々しい太陽が投げかけるわずかな熱も、大地に届く前に風がどこかへさらっていってしまうようで、里菜は馬上で身をすくませ、マントをかき寄せた。

目の前には、果てしなく、冷たい風だけが吹きすぎる不毛の荒野が広がっている。

その中を、くすんだ赤錆色のマントのアルファードを乗せた大きな栗毛の馬と、鮮やかな青のマントの里菜を乗せた少し小さな灰色の馬が、とぼとぼと進んでいく。アルファードは愛用の剣を携え、それぞれの馬には、荷物の袋が左右に振り分けて括りつけられている。

一行の他に、動くものはない。草さえほとんど生えない、この荒れ果てた大地には、羽虫より大きな生き物は生息できないのだ。

そんな砂漠のような北の荒野に、ただ一本の細い流れがあり、恐らく一年の大半は凍りついているのだろうが、夏の名残の残る今はまだちょろちょろと流れていて、ふたりはその川に沿ってゆっくりと北上していた。

この川は、荒野の果て、最北の魔王の城の近くから、荒野をつっきって流れ下ってくるのだと言われているが、実際に川を遡ったものは誰もいないから、その真偽はわからない。それでも、魔法で水を出せないふたりには、この川が命の綱だ。川があるあいだは川に沿っていくしかない。それに、川の岸辺にだけは、わずかに草があって、馬に食べさせることができる。途中で川の源に来てしまったり流れの向きがそれた時は、ふたりはありったけの皮袋に水を入れて、馬は空馬で、来た道を帰らせるつもりだ。

おとなしく辛抱強く寒さに強いこの馬は、戦さ用の馬ではなく、カザベル近くの、港町というよりは漁村に近い小都市イリューニンで調達した北部の荷役馬である。ふたりは、イルベッザからそこまで船で来たのだ。

この国の西の海岸線は、南を上にした地図――この世界では地図は南が上なのだ――で言えば『く』の字型をしていて、イルベッザは、その『く』の字の上辺に接しており、カザベル街道は、『く』の字の左側を大きくなぞるように曲がっているから、はなからカザベルに寄らずにさらに北を目指すなら、カザベル街道より海路のほうがずっと近いし、本当はカザベルに行くにも、いったんイリューニンまで出て少し南東に戻るようにしたほうが早く、距離的にもずっと近い。

だが、この国では海運はあまり盛んでなく、普通は船を利用するものは少ない。里菜たちが乗ってきた船も小さな貨物船で、木の葉のように揺れ、里菜は航海の間中、ひどい船酔いに苦しんだ。それでも、イルベッザでアルファードから乗馬の手ほどきを受けていたとはいえあまり馬に乗り慣れていない里菜にとっては、陸路を馬で来るよりはましだっただろう。少なくとも日程がだいぶ早まったのはたしかだ。

里菜たちが船に乗ることができたのも、イリューニンで駐留軍から無償で馬を借り受けられ、十分な携帯食料や野営用の天幕をすみやかに提供してもらえたのも、ファルシーンの手配のおかげである。

魔王を斃しに北の荒野へ行くというふたりの話を聞いた彼女は、軍隊を好きなだけつけてあげるとも提案してくれた。正規軍の兵士の中にも、あの日蝕の騒乱で家族や友人を失ったものは多く、魔王を退治しに行くと言って志願者を募ればいくらでも集まるだろうと言うのだ。

けれど、もちろん、ふたりは、これを断わった。どうせ、いくら大軍を連れていっても、結界に阻まれて荒野に足を踏み入れることはできないだろう。入れたとしたら、それは魔王が軍隊に来られても困らないからで、その場合はいずれどこかであっさりと始末されてしまうのがおちだ。それで彼らは、ファルシーンに交通手段などの援助だけを頼んで、ただふたり、北の荒野に赴いたのである。

ふたりの出発は、ひそやかなものだった。秘密というわけでもな

いのだが、ファルシーンとユーリオンは、相談の上、このことを一般市民に広く知らせるのはやめたほがいいと判断したのだ。

ふたりは、ユーリオンだけに、すべてのいきさつを打ち明けていた。ことは国の存亡に関わるのだし、彼は＜長老＞であるだけでなく、神話学者だ。里菜とアルファードと魔王との、神話的で夢のような因縁の物語を、彼は正しく受け止めてくれるだろうと、アルファードは判断したのだ。

そしてその通り、彼は、ふたりの語る不思議ないきさつをまるごと受け入れてくれた。そして、ふたりの勝利を信じて待つを言ってくれた。

だが、たとえ彼自身は里菜たちの勝利を信じていても、＜長老＞という立場からは、慎重にならざるを得ない。

これまでも、里菜とアルファードはイルベッザの民衆の希望の星だったし、今回の騒動でのふたりの活躍も、すでに市民たちに知れ渡っていた。ふたりが魔王討伐に行くと発表すれば、市民たちは、彼らに熱狂的な期待をかけるだろう。それは、今、災難に打ちひしがれている市民たちに希望を与えるが、一方で、万一、このふたりでさえ失敗したのだとなった時は、逆に国中の人々が絶望してしまうだろう。

そういうわけで、ふたりの旅立ちは、＜賢人＞たちと軍の上層部、それにふたりのごく身近な友人たちにしか知らされなかった。と言っても、極秘扱いというわけでもなかったから、準備に関わった役人や軍の仲間たちはもちろん、イルベッザ城構内で働くものたちは皆それを知っていたが、里菜とアルファードが自分たちの決心を直接話したのは、ユーリオンとファルシーン、キャテルニーカとローイ、それに、ローイに話す時にちょうどそばにいたリューリだけだった。

ふたりは、ローイに話をした時には、ユーリオンの時と違って、魔王がタナート神だとか里菜に何かいわくがあるらしいとか、そういう神話めいたことはあまり話さなかったのだが、彼らの使命が特

別なものであることはローイにも察しがついていたから、彼は、もう、ふたりを止めなかった。

ローイは、じっと里菜を見つめて、少しさみしそうに言った。

「そうか、やっぱり行っちまうのか。俺も怪我をしてなけりゃついていって一緒に戦ってやりたいところだが……。でも、どうせそういうところには、俺の出番なんてないんだろうな。俺みたいな、ただのヒトにはさ。そう、あんたらは、やっぱり違うんだ。あんたらはやっぱり、特別な運命を持った＜マレビト＞なんだよな……」

その前にキャテルニーカに決心を打ち明けた時も、里菜は神話めいた説明はしなかったが、それは、キャテルニーカが、話さなくてもすべてをわきまえているのが分かっていたからだった。この時、キャテルニーカは、普段の、『綺麗だが無邪気すぎておつむが足りないように見える一風変わった子供』ではなくて、いつかの山賊の前やあの日蝕の中で見せたような、威厳に満ちた謎めいた巫女の顔になって、こう言ったのだ。

「あたしも一緒に行って手助けしたいけど、できないの。あたしたちは、昔、あのひとと戦って、既に一度、破れている。だから、あたしにできることは、ただ、お姉ちゃんが後のことを心配しなくていいように、ローイお兄ちゃんやリーンや、その他の、怪我をしたり刻印を受けた人たちをしっかり引き受けることだけ。あたしの手が届くところにいる人は、絶対、一人も死なせないから、安心して行ってきて。お姉ちゃんが魔王に打ち勝って帰って来たとき、みんなの刻印は消えるわ。刻印を受けてから長い人は絶望が心に染み込んでいるから、必ず元どおりになるとは限らないけど、今回の事件で刻印を受けた人たちは、ちょっとした治療で元気を取り戻すはずよ」

この、昔『あのひと』と戦った『あたしたち』というのは、恐らく彼女の祖先である妖精の一族のことだろう。

もちろん里菜は、キャテルニーカが魔王となにかしらの関わりがあるものなのは分かっていても――いや、分かっているからこそ、

彼女を魔王の元に連れて行って危険に晒すつもりはなかった。

第四章＜荒野の幻影＞第一場（2）

旅立ちの前夜には、ティーオがリューリに伴われて宿舎を尋ね、アルファードに、マッチを手渡してくれた。それは、以前のものよりもっと『あちら』のマッチに近い、使いやすく携帯しやすい改良品だった。

また、ティーオは、マッチの他にも、ふたりのために一種の固形燃料を用意してくれた。それは彼がマッチを発明する際に派生的に思い付いてひそかに研究を重ねていたものだそうで、完全主義者の彼は例によってまだ表立って発表していなかったが、もうほとんど実用段階に入っていた発明品だった。小さな火鉢のような容器に入れて使うもので、焚火と違って天幕の中でも使え、ささいな火力ではあるが薪がなくても朝までゆっくり燃え続けるので、魔法の使えないふたりにとってはもちろん、魔法で火を呼び出せるものにとっても便利なはずの大発明だ。

旅立ちの朝、ふたりは、魔物に弓を引いた無茶がたたってまだ入院していたローイをもう一度見舞った。

ローイは、入院中の身のはずが、まるで新人雑用係のような顔をして、リューリに指導されながら薬草を仕分けする手伝いをしていたが、その手を休めて、こう言った。

「頑張れよ。ほんとうに、一緒にいけなくて残念だよ。アルファード、俺の分も、しっかりリーナちゃんを守ってやれよ。もっとも、あんたがリーナちゃんを守れるのは魔王の城につくまでで、そっから先はどういうふうになるんだかわかんないけどな。あんがい、そういうところではリーナちゃんのほうが強いかもしれねえからな。……そう、リーナ、あんたは強いんだよ。あんたはチビでやせっぽちで、腕力も体力もないし、動きも鈍いし、頭は悪くないのにとっさの時のすばやい判断ってのはまるで駄目で、兎みたいに驚きやすくて、びっくりするとすぐ目をつぶってしゃがみ込んだり硬直して

立ちすくんじまったりして、まあ、何かにつけて、使えないっちゃあ使えないんだが……。

……いや、そんなにしょげないで、最後まで聞いてくれよ。それでも、あんたは強いんだ。何も、剣を振り回すだけが力じゃないってことさ。だいたい、あんたの相手は、人間じゃない。どっちみち、腕力やら剣の技やらで勝てる相手じゃねえんだ。まあ、アルファードなんかはそれしか能がねえから相手が誰でもそれで戦うしかねえわけだが、あんたは違う。そんな吹けば飛ぶようなか弱い様子をしてるくせに、あんたには、どこかに何か、しぶとさみたいなものがある。これ、誉めてるんだぜ。どこがどうって言われても困るが、俺には、分かるんだ。あんたは強い。必ず勝って帰ってくるだろう。俺のことは心配いらねえよ。シエロ川での水泳のお楽しみはあきらめて、おとなしく待ってるからさ」

「お姉ちゃん、ローイは本当に大丈夫よ。あたしがついてるから」

「そうよ、あたしもいるし」と、かたわらでキャテルニーカとリューリが口を添えると、ローイは、

「ああ、俺ってなんて幸せものなんだ！　こんなべっぴんさんがふたりがかりで面倒見てくれるとあっちゃあ、こりゃもう、元気出さないわけにはいかないね！　まったく、ここは最高だあ。こんなにまわり中に美人がうじゃうじゃしてちゃ、口説くのに忙しくて、絶望している暇なんかねえや！」と、明るく叫んで、

「この色ボケ！」と、リューリに小突かれた。

小突かれた頭をさすりながら、ローイは付け加えた。

「それにさ、ほんと、ニーカちゃんがそばにいてくれると、なんか気持ちが楽になるんだよな……。前からそうだったんだけどさ、刻印つけられてからこっち、特にそう思う。これって、なんだろうなあ。リュリュちゃんの魔法が怪我に効くみたいに、ニーカちゃんはなんだか、人の心に効くんだよなあ。いや、もちろんリュリュちゃんだって、こんだけべっぴんだと見るだけで元気が出るけどな。これでもう少しやさしくしてくれりゃあ……」

「ちょっと、どういうこと？　あたし、あなたには充分やさしくしてるつもりだけど？」
「ほ、ほら、その言い方が、もう、怖いんだよ」
「あなたみたいなやつは、甘やかすと治らないのよ！　あたしが怖けりゃ、さっさと治って退院しなさい。リーナ、あなたが帰ってくる頃までには、こいつをちゃんと社会復帰させとくし、それまでは、あたしがこいつをこき使って、落ち込む暇がないくらい忙しくさせといてあげるから、安心して行ってきてね。ついでに、こいつの軽薄と女ったらしも、少し矯正しといてやるから」
「やめてくれよ、そこを矯正されたら、もう、それ、俺じゃねえよ」
と、ローイは本気とも冗談ともつかぬ様子で首をすくめた。
　そのあと里菜たちは、城の正門前の広場でユーリオンとファルシーンから激励の言葉を受けた。これは非公式の見送りだから、ふたりとも、＜賢人＞の白いローブではなく目立たない私服姿だ。が、ふたりがこの日ここで非公式の『出陣式』を行なうのは、＜賢人の塔＞の職員たちやふたりの仲間たちはみな知っていたから、彼らのまわりにはちょっとした人垣ができていた。みんなは跳ね橋までぞろぞろと見送りについてきて、ふたりに暖かい言葉をかけてくれた。
　跳ね橋の前で立ち止まり、見送りの人々と言葉を交わした里菜とアルファードは、最後に、治療院から見送りについてきていたキャテルニーカと向き合った。
　キャテルニーカは、あの不思議な巫女のまなざしで里菜を見つめて、ゆっくりと、歌うように言った。
「お姉ちゃん。お姉ちゃんは、今、とっても魔王のところへ行きたいと思っている。魔王を憎み、魔王と戦いたいと思っている。でも、それじゃ駄目。魔王はね、嫌々生贄になりに来るものは、手に入れられないの。自ら進んで自分のもとにやって来るものだけを、手に入れることができるのよ。今のお姉ちゃんをなら、魔王は簡単に手にいれてしまう。そのために魔王は、わざとローイお兄ちゃんや、リーンや、それに小さい子供とか、そういう、傷つけたらお姉ちゃ

んが怒るような人を傷つけたのよ。でも、お姉ちゃんは本当は、戦うことなんか好きじゃないでしょ？　本当は戦いを望んでなんかいないでしょ？　そのことを、忘れないで。いつも覚えていて。お姉ちゃんは、戦う人じゃない。愛し、育み、あるがままの世界を受け入れるもの。魔王の前に立つ時、そのことを思い出して。ね？」

橋を渡ったところには、一群れの市民たちが、ふたりの出陣を一目見ようと集まっていた。華々しく触れ回すことはしなかったといっても、やはり噂は広まっていたらしい。それでも、旅立ちまでの準備期間が短かったから、まだ噂が爆発的に広まるところまでいかず、この程度の人垣ですんだのである。

期待のまなざしで自分を見つめる人々を前に、里菜の心は痛んだ。彼らは、里菜が家族や友人の仇をとってくれることを期待しているのだが、そもそも彼らに今度の不幸をもたらした遠因は自分なのだ。闇の中での里菜と魔王の会話を聞いていたものはアルファードの他にいないから、誰も里菜が自分たちの不幸の元凶だとは知らないだけなのだ。それを知ったら、ここにいる善良な人々は、里菜に石でも投げつけたかもしれない。

けれども里菜は、ユーリオンから、そういうことを他の人には話さないようにと釘をさされていた。

彼は、こう言ったのだ。

自分は今度のことは決して里菜のせいだとは思わないが、里菜が心配するように、そう考えるものもいるかもしれない。だが、それは八つ当りでしかないし、彼らに事情を告げて里菜を憎ませても、何の役にも立たない。ただ、彼らにますます絶望感を与え、余計な苦しみを負わせるだけだ。里菜は、あくまでも彼らの希望の星でいてやることで彼らの苦しみを軽くしてやるべきだ、と。

その言葉に、里菜は半ばほっとしながらも、そこでほっとしてしまう自分が偽善者のような気がしてやりきれなくなったが、たしかにユーリオンの言葉は正しいのだろう。里菜が今、自分たちの英雄に期待をかけてここに集まっている人々に真実を告げても、誰も今

より幸せにならない。
　里菜は無理をして彼らに微笑みかけ、なるべく自信たっぷりに見えるようにと気をつかって、小さいながらも堂々とした足取りで橋を渡った。
　その時、人込みがざわめきながら左右に分かれて、その中を、三人の黒衣の男が進み出てきた。その姿を見て、里菜は目を見張ってつぶやいた。
「ゼルクィールおじいさんたちだわ！　前からその辺をうろついてたのは、やっぱりあの御一行様だったんだ」
　三人は群衆を抜け出して、橋の袂で立ち止まり、そこで、橋の向こうにいるキャテルニーカに軽く会釈した。――もっとも、見物の市民たちは、彼らが見習い治療師姿のちっぽけな子供に礼を取ったのだとは夢にも思わず、その隣に立ち並ぶ賢人たちに会釈したと思っただろうが。
　それから、三人は、ふたりの前に進み出て膝をついて礼をした。
　市民たちは不審げにざわめいていたが、そのざわめきには、以前からタナティエル教団に対して向けられていたような好奇心や漠然とした警戒心といったものだけでなく、はっきりした非難と憎悪の調子が含まれていた。市民たちは、彼らが今度の魔物騒ぎについて事前にあれこれ言っていたということで、彼らに対して、今まで以上にうさん臭さを感じているのだ。
　もちろん里菜は、彼らに今度の騒ぎについて責任がないことを知っているが、市民たちの前で彼らから大声で『女王』呼ばわりされるのは、やはり避けたい。
　里菜は、ゼルクィールが大声を出さなくても聞こえるようになるべく近づいた方がいいだろうと、自ら一歩進み出て、老人の目の前に膝をついた。老人は顔を上げて囁いた。
「……女王よ。ついに、時が来たのですね。我等はずっと、この時を待ち続けてまいりました。女王が我等の王を悪夢の中から救いだし、王との婚姻によってふたたびこの地上に神の御代をもたらして

くださるその時――世界が新しく生まれ変る復活の日を。その時、何が起こるのかを、我等はつまびらかには知りませぬが、我等は我等の王と女王を信じて、女王のお帰りを、ここでお待ち申し上げます。どうぞ御無事でお帰り下さいませ。夜の娘御の忠告を、お忘れなきよう……」

「あのね……」と言いかけて、里菜は後の言葉が続かなかった。この素朴な信頼を、どうしてよいのかわからなかった。この、慈悲深いまなざしを持つ温厚でか弱い老人に、『あなたたちの神様はあなたたちのことなど少しも気にかけていないのだ、彼はあなたたちもろともこの世界を滅ぼすつもりなのだ』などとは、とても言えなかった。そのかわり、ただ、言葉にできない同情を込めて、里菜は老人にそっと尋ねた。

「おじいさん、足、どうかしたの？　前は杖なんかついてなかったじゃない？」

ゼルクィールは、静かに微笑みながら、

「私も、もう年でございますので……」としか言わなかったが、彼は、シルドーリンからの、老人にはきつい長旅と、底冷えのするヴェズワルでの脚を伸ばすこともままならなかった監禁生活、そしてその後の、湿気の多いイルベッザでの慣れない都会暮しで、すっかり身体を弱らせてしまったのである。

「ねえ、おじいさん、ここであたしの帰りを待ってなんかいないで、とりあえずシルドーリンに戻ったほうがいいんじゃない？　あたしはそんなにすぐは帰ってこれないと思うし、ここは、ほら、まだ当分は暑いだろうし、何しろ湿気が多いから、お年寄りには障るんじゃない？　やっぱり、住み慣れたところにいたほうが……」

里菜は背を屈めて老人の顔を覗き込んだ。

里菜にとって、里菜が魔王の花嫁になるなどと言う彼らの主張はとうてい同意しかねるものだが、それでも里菜は、どういうわけか、この不運な老人がとても好きだったのだ。

老人は穏やかに目元を微笑ませて答えた。

「私などのことを、そのように気遣って下さり、かたじけなく存じます。女王よ、あなたはおやさしい娘御でいらっしゃいます。こうしてあなたにおやさしいお言葉をかけていただけるだけで、私はこの役目を与えられたことを幸せに思います。では、お気をつけていってらっしゃいませ」

それだけ言うと、三人はまた、うずくまるような礼をして、彼らの会話をほとんど聞き分けられなかった不満にぶつぶつ言っている群衆を尻目に、その場を立ち去って行った。

それからふたりは、道々、市民たちの激励を受けながら港まで歩いた。

首都の港とはいえ、この世界には海外との貿易というものがないし、国内でも海運はあまり重視されていないから、ほとんどただの漁港に近い。市民たちは、津波の爪跡も生々しい、そのささやかな港まで、ふたりの後についてきて見送ってくれ、そこでふたりは、たまたま別の町の港に停泊していて津波を免れた貴重な貨物船の一隻に乗り込んだ。半年以上住み慣れた、この雑然としておおらかな都を離れるのは少しさびしくて、里菜は船の上から、遠ざかる港をいつまでも見ていた。

第四章＜荒野の幻影＞第一場（3）

そして今、ふたりは、誰も足を踏み入れたことのない、はるかな北の荒野にいる。

いつどこで結界を踏み越えたのか、ふたりは知らない。それどころか、この荒野に足を踏み入れてから何日になるのかさえ、いつのまにかわからなくなっていた。この場所には何か特別な、人間には計れない時間が流れているような気がするのだ。

それは、半ば夢の中を旅しているような日々だった。

くる日もくる日も、乾いた砂をさらさらいわせて風が吹き抜けるばかりの剥き出しの大地を、里菜とアルファードは、ただふたり、黙って馬を進めた。

この荒野に来てから、アルファードはまた、どこか変わったように見えた。

彼はますます無口になった。アルファードの大地の色の瞳は、底知れず静かだった。けれどその静かさの底に生命の力のようなものが漲り、ひたひたと満ちてゆくのを、里菜は感じていた。ただ黙って里菜のかたわらを行くアルファードは、無器用で生真面目なひとりの人間の男であると同時に、何か、余計なものをそぎ落した生命の力そのもののように見え始めていた。

たぶん、里菜もまた、変わっていたのだろう。

里菜にはもう、自分が誰なのか、よくわからなかった。『あちら』の世界にいたころの、内気で虚弱でいわゆる『頭でっかち』な、クラスメイトからはちょっと変わっていると思われていたけれどそれでもごくありふれた十七才の高校生だった自分のことが、あまり思い出せなくなっていた。制服を着て電車に乗って学校に通ったこと、テストを受けたり体操をしたり図書室で本を読んだりしたこと、表面的な付き合いではあったが今となっては懐かしい級友たちとたまには学校帰りにファーストフード店でアイスクリームを食べたりし

たこと、そんなことすべてが本当に自分の身の上に起こったことなのかにすら、もう、確信が持てなかった。父、母、友人、自分の部屋、住んでいた街、学校――そういったものすべてが、忘れかけた夢の中のもののように遠く思われた。

無口になったのはアルファードだけでなく、里菜ももう、ほとんど口をきかなかった。空気が冷たすぎたり、吹き付ける風が乾いて埃っぽかったりするために顔の下半分を布で覆っていたせいもあったが、それだけではなく、話す必要をあまり感じなかったのだ。

そんな静かな旅の中で、ただ、ときおりアルファードが、ぽつりぽつりと、この荒野にまつわる伝説などを教えてくれた。

時のないようなこの土地でも、低い空に白く浮ぶ薄っぺらな太陽はゆっくりと回って、夜になれば西に沈む。太陽が沈んだ後も、空は長いこと、ほの明るい。アルファードの話によると、この荒野の最北端では、夏至の前後は一日中太陽が沈まないと言われているそうだ。そのかわり、冬の間はほとんど日が昇らないという。とすれば、ここはかなりの高緯度地帯なのだろうが、それにしては、『あちら』の世界の常識で想像するほどは、寒くない。けれど、魔王がここに城を構える前はもっと寒い土地だったそうだと、アルファードは言った。

伝説によると、かつて、ここは、一年のほとんどを雪と氷に閉ざされた凍土の平原だったが、短い夏には花々が一斉に咲き競い、羽虫たちが飛び交い、鳥たちは囀り交わし、獣たちが駆け巡ったと言う。だが、魔王が凍土のさいはてに城を構えて以来、魔王の憎しみが邪悪な熱となって雪と氷を溶かし、雨も雪も一切降らなくなって乾いた風だけが吹き続け、それまでは寒さのためにいつまでも蒸発しなかった湿地の水でさえやがて干上がり、草も苔も枯れ、鳥も獣も死に絶えて、いつしかこんな砂漠のようなところになってしまったのだそうだ。

そんな、生命の気配のない荒野で、ある時、ふたりは、遠い地平線を、巨大な角を持つ大鹿の群れが幻のように駆け抜けていくのを

見た。その時、ほんの一瞬だけ、行く手の大地が緑の苔と小さな花々で覆われているように見えた気がしたが、その後、いくら馬を進めても、それまでと同じ乾いた荒れ地がどこまでも続いているばかりだった。

また、ある時は、明け方のまどろみの中で、何頭もの狼たちが遠吠えを交わすのを聞いたが、翌朝、念のために周囲を探してみても、狼の足跡を見つけることはなかった。

野営の準備をしている時に、ふと、かたわらの地面に目を落すと、そこに小さな灰色の兎がいて、鼻をぴくぴくさせてこちらを見上げていたこともあった。けれど、目をしばたたいてもう一度見直すと、兎は跡形もなく消え失せていた。

「大地が、過ぎた日の夢を見ているんだ」と、アルファードは言った。「君がここに足を踏み入れたことで、大地の奥深くで、遠い記憶が動き始めたんだ」

そんなアルファードの言葉に、里菜は何も問い返さず、素直に頷くことができた。

太陽が沈むと、ふたりは馬を止め、長くほの白いたそがれの中で、天幕を張り、水を汲み、ティーオがくれたマッチで火をおこして野営の準備をした。

荒野に入って最初のうちは、ふたりは簡単に枯れ木を集めることが出来た。荒野の中でも南のほうは、かつては針葉樹林帯で、いつの時代のものかも分からない古い古い枯れ木がまるで魔法で守られていたかのようにそのまま姿を留め、からからに乾いて、あちこちで白骨のような姿をさらしていたのだ。それはちょうど、太古から誰かがふたりのために用意してくれておいたものででもあるかのようだった。

そんなふうに枯れ木が手に入るあいだは、ふたりは古い苔の乾いた堆積物を地面から掻き取って焚き付けにし、天幕の外で焚火をして煮炊きをしたりしていたが、その後は、とうとう薪が手に入らなくなり、ティーオの固形燃料だけを頼りに野営をするようになった。

狭い天幕は、高度な魔法で念入りに防水性保温性を高めた布でできていて、中で夜通し固形燃料を燃やせばそれなりに暖かかったが、それでも北の夜の冷え込みは厳しく、ふたりは、幼い兄妹のように寄り添いあって眠り、眠りの中で命のぬくもりを互いに与えあった。ここへ来てからアルファードは、里菜が寄り添っても、もう以前のように身をかわしはしなかった。

不思議なことに、北へ北へと進むうちに気温はかえって上がっていくように思われた。特に夜の冷え込みは緩んでいった。

けれどもそれは決して気持ちのよい暖かさではなく、北から吹き続ける風は、やがてどこか不自然な熱気をすら帯び始めた。温度としてはそれほど高いわけではなく、やはり寒いことに変わりはないのだが、それでも、この土地の本来の気温に比して奇妙に生暖かいのである。

それは、神経がひりつくような、毒気を含んだ風だった。その熱気が強まるにつれて、それまでおとなしく柔順だった馬たちが、しだいに苛立たしげな怯えた様子を見せ、前に進むのを嫌がるようになっていった。

そしてある時、とうとう馬たちは、立ち止まったまま、宥めても叱っても言い聞かせても頑として前に進もうとしなくなってしまった。ふたりはさんざんてこずったあげく、馬を諦め、残り僅かな荷物からどうしても必要なものを取り出して背負い袋に移し、馬を放した。この川筋を離れたら水も草もないのだから、馬たちはなんとか川に添って荒野の外れまで自力でたどりつくだろう。

こうしてふたりは、とうとう徒歩で行くことになってしまった。けれど、先の道のりがもう短いことを、ふたりはなんとなく知っていた。

荷物は少なかった。ここでは雨も雪も降らず、その頃には気温もかなり上がってきていたので天幕なしでもなんとかなりそうだったし、川に添って歩けば水を持ち歩く必要もなく、食料や燃料も、どのみち、もう僅かしか残っていなかったのだ。

けれどふたりは、自分たちがこの荒野で飢えや渇きや寒さで死ぬことはないと確信していたので、食料の乏しさは、さほど気にしなかった。普段なら計画的で用意周到なはずのアルファードでさえ、この時はなぜか、帰りの食料のことなどまったく考えてもみなかったのだ。

それは彼らが、還らないつもり――戦って死ぬつもりだったからではない。ふたりの心は、そのころにはもう、半ば現実を離れてしまっていたのだ。

この旅が現実のものではなく夢の中のものであるかのような、自分たちが生身の人間ではなく肉体を遊離した魂であるかのような、そんな不思議な薄明かりの、時のはざまの境界を、彼らはさまよっていたのである。

この、時の流れに取り残されたような荒野で、最初のうちは日没や野営の回数を数えて何日たったのか知っておこうと努力していたふたりも、馬がいなくなってからは、もう、何日歩いたのか、わからなくなっていった。自分たちがなぜ歩いているのかさえ、忘れかけることもあった。

ある日、わずかに砂を削ってちょろちょろと走るひとすじの細い流れに過ぎなくなっていた川が、ついに姿を消した。

川の源は、荒野の他のところと一見どこも変わらない砂地の一か所からじわじわと滲み出る涌き水だった。その涌き水のほとりで、ふたりは、野営をした。涌き水にたどりついた時、太陽はまだ沈んでいなかったのだが、魔王の城がまだ見えてこない以上、ふたりはもう、この先どう行けばいいのか分からないから、とりあえず野営をする他はなかったのである。けれどふたりは、朝になれば行くべき道が示されることを確信していた。

翌朝、毒気を含んだ風がもたらす悪夢にそれぞれ悩まされながらの浅い眠りから目覚めたふたりは、野営地の北、さほど遠からぬところに、忽然とそそり立つ古びた石造りの塔を見た。

塔は、昨夜までは見渡す限り何もないただの荒れ果てた平地だっ

たはずのところに、一夜のうちに現われたのだ。
それは奇妙な光景だった。
どこまでも砂と石ばかりが広がる荒野のただなかに、ただ、灰色の塔だけが、ぽつりと立っている。『魔王の城』とは呼ばれていても、実際には、城があって塔があるのではなく、地面からいきなりまっすぐに塔だけが立ち上がっているのである。
灰色の曇天の下、塔はすぐ近くにあるように大きく高く聳えているが、あたりに霧が出ているわけでもないのに、ひどく遠くにあるように霞んで見えてもいる。
ふたりはしばらく黙ったまま並んで塔を見つめていたが、それから、どちらが言い出すともなく、何事もないかのように朝の仕事を始めた。ふたりは浅い川床の砂を掘り下げ、溜めた水が澄むのを待って皮袋に汲み、無言で背負い袋から携帯食を取りだすと、砂の上に腰を降ろして、塔に見下ろされながら、いつも通りにひっそりと食事をとった。
簡素な旅の食事はすぐに終り、荷物をまとめたふたりは、一度だけ顔を見あわせてそっと頷きあうと、塔に向かってゆっくりと歩き出した。

第四章＜荒野の幻影＞第二場（1）

荒野のただ中に厳然と屹立する年経た巨塔を、ふたりは真下に立って振り仰いでいた。

それは遠目に見て思っていたよりずっと大きな塔で、そのてっぺんは、見あげていると首が痛くなりそうな、この世界の建築の常識を越えた高さにあった。

野営地から塔にたどりつくまでにどれくらいの時間がかかったのか分からないが、塔は、思ったよりずっと遠かった。初めに見た時、塔がすぐ近くにあるようにも見えたのは、荒野がどこまでも平らで視線を遮るものも大きさを比べるものもないために距離感が麻痺していたのと、塔の形を見た時、その縦横の比から、ふたりが無意識にイルベッザ城の塔くらいの高さのものを思い描いてしまったための錯覚だったのだ。

間近に仰ぐ灰色の巨塔は、昨夜までたしかに無かったものにもかかわらず、明らかに非常に古い――強力な魔法によって維持されているのもまた明らかだが、そうあってすら避け難く歳月が刻み付けられてしまうほどに古いもので、その、永い歳月を経たもののみのもつ厳粛な威容に、里菜は少し打ちのめされて、そっとアルファードに身を寄せ、その顔を見上げた。

アルファードは里菜を見下ろして、励ますように小さく頷いてみせ、里菜を塔のほうに優しく押しやった。里菜には自分のなすべきことがもう分かっていた。

塔には入り口がなかった。けれども里菜は迷わず塔に歩み寄り、風化してざらついた石壁のひとところに手を当てて軽く押した。

そのとたん、世界を四角く切り取ったかのように壁の一部が消え去って、里菜の目の前に、別の次元に続く通路を思わせる暗い空洞が、いきなりぽっかりと出現した。

唐突に口を開けたその空洞は、ちょうど人ひとりが立って入れる

大きさの、塔の入口だった。

ふたりは中を覗き込んだ。そこは外壁のカーブにそってゆるやかに昇って行くらせん階段の踊り場のようなところらしく、正面は、いきなり、わずかに曲面を描く石壁に突き当たっており、左右を見ると、左には下、右には上に向かう階段があった。

塔には窓がなく、どうやら階段には明りもないようで、入り口からの光が届かない階段の先は、すぐに、目の痛むような漆黒の闇の中に消えていた。そして、左の、地下室へ続くらしい階段からは、荒野を渡る風の中に忍び込んでいた、あの、毒気を帯びた不自然な熱波が絶え間なく吹き上げてきていた。

そのあまりの熱気に、ふたりは塔に入るまえに、ヴィーレにもらったマントを脱いで、きちんと畳んで地面に置いた。――里菜は初め、勇ましくかなぐり捨てたマントを何の気なしにその辺にばさっと放ったのだが、となりでアルファードが自分のマントを几帳面に畳んでいるのを横目で認めて己の雑駁さに赤面し、あわててマントを拾って、アルファードのまねをして――彼ほどきちんとは出来なかったが――畳み直したのだった。

マントの下は、いつもの質素な普段着だ。最初はその上下に防寒着を重ね着していたのだが、ここ数日で温度が上がるにつれて一枚ずつ服を減らしていくうちに、結局、いつもと同じ格好になっていたのだ。防具は、つけていない。ふたりは、自分たちの戦いが鎧兜の重装備がものを言うようなものになるなどとは、まったく思っていなかった。

アルファードは、角灯に火を灯し、荷物の中からティーオのマッチだけを取り出すと、残りの荷物を畳んだマントの上に載せた。

角灯とマッチ、それとそれぞれの武器だけを携えて、ふたりは暗い塔の中に足を踏み入れた。

とたんに、背後で入り口が消え失せて、ただの壁に戻り、同時に、下から吹き上げる熱風が角灯の火を吹き消し、周囲は全き闇に閉ざされた。かすかな埃と黴の匂いと、むっとする不浄な熱気がふたり

を押し包む。
　里菜は手探りでアルファードを探り当て、心細さに、手に触れた服の布地を握り締めた。
　アルファードはしばらくごそごそして火を点け直そうと試みていたようだが、何度マッチを擦っても風が吹き消すばかりだった。
「明かりは諦めよう。たぶん、ここでは何回つけても無駄だろう。とりあえず、こっちの階段を昇ろう。俺が先に行くから、君は右手で外壁をずっと触りながら左手でしっかり俺につかまって、ぴったり後ろについてきてくれ」
「うん」
　ふたりは本能的に声を潜めて言葉を交わし、目を閉じているのと変わらない暗黒の中、慎重に足場を確かめながら、手探りでゆっくりと進み始めた。
　どんな闇でも、普通は、慣れるにしたがって少しは目が見えるようになるはずだが、この塔の中では、いつまでも目が慣れることがなかった。たぶん、それほどまでに完全な暗闇なのだろう。目を開けていても何も見えず、何だか目が痛くなるような気がするので、里菜は目をつぶった。そうしてみると、そのほうがかえって怖くないような気がした。
　そうやって暗闇の中を行くうちに、里菜は、自分が足を動かしていることを忘れそうになり、自分が前に進んでいるのかどうか、それどころか自分に本当に足などというものがあるのかどうか、そもそも自分の身体というものがここにあるのかすら分からなくなりはじめた。自分が意識だけの存在になって無限の闇に浮かんでいるような気がした。右手でなぞる石壁の感触と左手で掴んでいるアルファードの服の感触だけが、辛うじて、そんな里菜に肉体の存在を思い出させ、里菜の心を物質の世界に繋ぎ止めていた。
　静まり返った闇の中を歩いていると、自分たちの立てる、普段は気づきもしないような小さな物音が、やけに鮮明に聞こえてくる。
　ゆっくりと足場を探るひそやかな足音と、階段を昇り続けてしだ

いに荒くなり始めた息遣い、剣帯の金具がかちゃかちゃいう音、微かな衣擦れの音、もっと微かな、手で壁を探る乾いた摩擦音……。

視覚を断たれた埋め合わせにひたすら耳を澄ましているうちに、里菜はいつしか、その音のすべてが本当に自分たちのたてているものなのか確信が持てなくなり始めた。

前をゆく足音は、本当にアルファードの足音だろうか。自分の右手のあたりから聞こえる微かな音は、本当に自分の手が壁に触れる音なのだろうか。もしかすると、自分の隣に何か奇怪なものがいつのまにか忍び寄って、ぞわぞわと地面を這って並んで進んでいるのではないだろうか。闇の中で間近に聞こえる息遣いは、守護者と頼む優しいアルファードのものではなく、血に濡れた重たげな巨体を闇に潜めてこちらを窺う見知らぬ獣の、その太く鋭い牙の間から漏れる、殺戮の興奮を押し殺して熱く湿った腥い吐息ではないだろうか。あるいは自分の左手が掴んでいるのはアルファードの服ではなく、布の先は、何か別の、得体の知れない気持ちの悪いものに繋がっているのではないだろうか――。例えば、何かべとべとした、ぐちゃぐちゃした、形の定まらないもの――ずぶりとめり込んで手応えのない、粘つく、嫌な臭いのする、汚い――そう、例えば、腐った屍肉のような――！

それを想像したとたん、里菜は、ついに恐慌をきたした。恐怖に耐えかねて我を忘れた里菜は、突然、けたたましい悲鳴を上げた――はずだったが、実際に喉から出たのは叫び声ではなく、蚊の鳴くような、頼りなく掠れた呼びかけだった。

「……アルファード？」

「どうした？」と、アルファードの、深く静かな、暖かな声が応えた。同時に、里菜の左手と鼻先が、立ち止まったアルファードの背中にぶつかった。布地越しに、アルファードの体温が伝わってきた。その温もりはまぎれもなくアルファードのものだと、里菜は信じられた。

里菜はそのまま、アルファードの逞しい背中にそっと手を当てて、

その温もりと確かな質量を確かめた。シャツの下で盛り上がる筋肉のしっかりした手応え。微かな汗の匂い。呼吸につれて胸郭が動くのが分かる。生きて、呼吸している、まぎれもない現実の肉体。躍動の力を秘めて静かに息づいている、生命の温もり。

その、堅固な現実の感触が、里菜の、闇の中で霧散しかけていた希薄であやふやな肉体と自我をも再構成して、物質の世界に連れ戻してくれるような気がした。

本当は、さっきからずっとそうやって安心したかったのに、手を伸ばした時に何に触れるかわからないという悪夢めいた恐れから、たった今アルファードの声を聞くまで、里菜は自分の前方の何かに触れる勇気がなかったのだ。

けれど、今、里菜の掌の下に、間違いなくアルファードの背中がある。そういえば、アルファードの家で初めて目覚めたあの日に自分をまず惹きつけたのは彼の後ろ姿だったのだと、里菜はふと、思い出した。すると、あの家での幸せな日々の思い出が胸いっぱいに広がって、心の中に、暖かい灯が点ったような気がした。

そう、あれからずっと、里菜の前には、いつも、アルファードの広い背中があった。里菜の大好きな、アルファードの背中。ゆったりと大きな、力強く頼もしい、暖かな……。

「……なにしてるんだ、君は？」

アルファードの、不審げな、そして幾分気味悪そうな声に、里菜は、はっと我に返って弾かれたように手を離した。どうやら自分は、知らないうちにアルファードの背中をぺたぺたと撫で回してしまっていたらしい――。

里菜はうろたえて火が出るほど赤面したが、なにしろ真っ暗闇の中なので、赤面したところで気づかれる心配がないのは救いだった。

「ごっ、ごめん！　なんでもないの。ただ、何も見えないから、アルファードがそこにいないような気がして……、それで、ちゃんとそこにいるって、確かめたくて……」と、声に出して言ってみると、里菜は急に、自分がすごくばかげたことを言っているような気がし

てきて、何だか笑われそうで、だんだん声が小さくなり、語尾が立ち消えてしまったのだが、アルファードは、笑わなかった。

「そうか。……別に手を離さなくてもいい。そのまま、つかまっていろ。これからは、時々声をかけあって進もう」と、常に変わらぬ真面目な声で提案してくれた。

その提案通り、ふたりはときおり小声で呼びかけあいながら、慎重に歩を進めた。足も手も確かに石に触れているのだが、目が見えないというだけで、ふたりは、まるで何もない暗闇の中に浮かんで漂っているような奇妙な感覚を味わっていた。

そしてやがて、里菜は、それ以上に奇妙な感覚を覚え始めた。自分たちはたしかに上に向かう階段を昇っていたはずだし、足の動きにしても、やはりたしかに一段ずつ階段を昇る動作を繰り返しているのだが、なぜだか、自分が下に降りていっているような気がするのだ。それを裏付けるように、下から上がってきていたはずの熱風が、今は正面から顔に当たる。

しばらく逡巡したあと、里菜は思い切ってそれを口にした。

「ねえ、アルファード。なんだか、どんどん下に降りていってるような気がしない？」

「リーナ、君もか。俺も実は、さっきからそんな気がしていた。どう考えても、そんなわけはないんだが……」

アルファードが足を止めたので、里菜はまたアルファードの背中に鼻先をぶつけた。その背中に両手でしっかりつかまっておそるおそる目を開けると、いつのまにか周囲は、ごくわずかにだが薄明るくなっていて、アルファードの背中と、すぐ横の壁だけがぼんやりと見えた。

いつのまにか、風が含む熱気はますます強まり、狭い空間は、ひどく暑くなってきていた。アルファードのシャツが、ぐっしょりと湿って背中に張り付いている。里菜も、気がつくと、熱さと緊張のためにじっとりと汗をかいていて、首筋や背中を汗がつたって流れ落ちていた。吹きつける熱気に、何か、きな臭いような、かすかに

生臭いような異臭が混ざり始めたような気もする。
「アルファード、どうしよう？　引き返す？　なんか、どんどん熱くなってこない？」
　里菜が囁くと、アルファードは壁から手を離して振り返った。
「いや、このまま進もう。引き返しても、もとのところに戻るだけだろうし、まっすぐ階段を昇ろうとしてここへ来てしまったということは、魔王が俺達をこっちへ誘導したということだろう。もちろん罠かもしれないが、ここは魔王の根城だ。罠を避けて魔王のところへたどり着くことなど、どうせ出来ない。それに、少なくとも、魔王はここで君をことさら危険な目に――少なくとも身体的に危険な目には――あわせる必要はないはずだ。魔王がしかける罠は、きっと俺と君を引き離すためのものだろうから、危険があるとすれば俺のほうだが、俺なら自分でなんとかする。罠なら罠で、そこを突破するしか道はない。そうしなければ君と一緒に魔王のところへ行くことはできないだろう。このまま行こう」
「……やっぱり？　実はあたしも、そう思ってたの」
　わずかとはいえ明るさが漂い始めたので、ふたりは壁から手を離し、剣を抜いて、そろそろと進み始めた。たしかに魔王は、たぶん、里菜をあえて傷つけようとはしないだろうが、こんな気味の悪いところには、魔王の統制の及ばない、どんな危険なものが潜んでいるか知れたものではない。そして、魔王が、そういうものからまで里菜をわざわざ守ってくれようとするとは思えない。なんといっても、彼は死神で、里菜が生きていようが死んでいようが手に入れるのに支障はないと明言していたのだ。一応、里菜をなるべく今の人間の身体のまま手に入れたいとは言ってはいたものの、同時に、それはちょっとした酔狂にすぎないのだとも言っていた。それに、もし魔王に助けられたとしたら、その時はおそらく、里菜はすでに相手の手中だろう。敵である魔王の保護など、あてにするわけにはいかない。用心を怠るわけにはいかないのだ。

第四章＜荒野の幻影＞第二場（2）

階段は今や、明らかに下りになっており、しかもいつのまにか、らせんを描かなくなって、まっすぐ下に降りていた。ほどなく階段は終り、その先は平坦な通路になった。

通路の先は曲がり角になっていてその先は見えなかったが、それにしても、その曲がり角までにでもかなりの距離がある。いくら大きな塔だとはいえ、あの塔の内部に、これほど長い直線の通路があるとは思えない。ここはおそらく、塔の地下なのだろう。たぶん、『魔王の城』と呼ばれているもののほとんどの部分は地下にあって、塔だけが地上に現われているのだ。

ふたりはいくつもの角を曲がりながら通路を進んでいった。そこはまさしく、複雑な構造を持つ広大な地下の宮殿であるらしく、全体に古びて、どこかがらんとしてはいたが、通路のところどころにあるアルコーヴにはそれぞれ完璧な調和を見せて精緻な彫刻などが飾られ、そこここに、色褪せてはいるが豪華で重々しい装飾布がずっしりと垂れ下がっている。薄暗くてよく見えないながらも、隅々まで荘厳にして重厚な意匠が凝らされ、手の込んだ装飾がほどこされているらしい様は、かつて栄華を究めた王国の、時のはざまに迷い込んで打ち捨てられた王城の廃墟を思わせた。

そのころには、周囲は、そうした調度がぼんやりと見分けられる程度にまで明るくなってきていたが、それは明らかに太陽の光でも蝋燭やランプの明りでもない、青ざめた不思議な薄明かりだった。特定の光源は見当たらず、どこからともなく通路全体をぼんやりと照らし出しているそれは、キャテルニーカが、「火でも光でもなく、魔物を退ける力はない」と言っていた彼女の光球と、明るさこそずっと弱いが、よく似ていた。魔王の宮殿で使われているということは、これはたしかに魔物に害を及ぼさない照明なのだろう。事実ふたりは、幾度か、角を曲がった瞬間などに、魔物の灰色の姿をちら

りと見かけたような気がした。が、魔物がふたりに襲い掛ってくることはなかった。

ふたりは何度も別れ道にさしかかった。そのつど、ふたりは、里菜の短剣をかざしてみて、シルドライトが明滅しない方向を選んで進んだ。魔王の宮殿の中で魔物がいない方角を探しても無意味なのは分かっていたが、他に道の選びようがなかったのだ。

そうした別れ道とは別に、左右の壁のところどころに細く暗い側道の入り口らしきものが口を開けていたが、追手から身を隠す必要でもあるならともかく、ふたりとも、理由もないのにわざわざそんなところに入り込む気にはなれなかった。そこには、何やら得体のしれぬものがいろいろ潜んでいるらしく、実際、ふたりは幾度も、そこからふいに奇怪な姿をした生物――あるいは生物ですらないのかもしれないもの――が姿を現わすのに遭遇したのだ。

それらの『生物』は大さも形も様々だったが、どれも、吐き気を催すような醜悪で異様な姿をしていることは共通していて、たいていはどちらかと言えば弱々しく、嫌悪と同時に不思議と哀れを呼び起こすような、ちゃんとした生き物になろうとしてなり損なってしまったかのような、どこかまだ形の定まらぬ感じのものたちだった。それでも、それらには、それぞれどこかに、地上で見慣れた何らかの生き物を思い出させるような部分があって、それがよけいにグロテスクで、しかも妙に哀しげだった。

それらのあるものは、何も見えていないかのようにふたりの前をただずるずると横切って反対側の通路に消えていっただけだったし、あるものは、うっかり廊下にでてきてしまったもののふたりの姿に気づいて怯えたとでもいうように、あわてて元の暗がりに引っ込んでいった。が、幾度かは、やや身体付きのしっかりしたような『生物』が、うっかり間違って、という感じでふたりの前に立ち塞がり、どこか戸惑いがちに攻撃をしかけてきたこともあった。

そういうときは、アルファードが、やむをえずそれを切って捨てた。

それらの出来損ないの生き物のようなものたちは、恐らく自分に何が起こったのか理解もせずに、あっけなくくずおれていった。その血は奇妙に粘ついて、いやな臭いがし、その度に里菜もアルファードも、嫌悪と哀れみに顔を曇らせ、吐き気に耐えた。ふたりの心に勝利感はなく、ただ、苦い思いだけが込みあげてきたが、以前牧場でドラゴンを倒した時のように、その『生物』の魂のために＜黄泉の大君＞への祈りを唱えてやることはできなかった。そもそも彼らに魂があるのかどうかすら定かではないのだし、その祈るべき主は、おそらく彼らのことなど気にもとめていないだろうという気がしたのだ。

その『生物』たちは、魔王がふたりの邪魔をするために差し向けたというには、あまりにも弱すぎた。もしかしたら、魔王は、彼らの存在を知っての上で、どうせ何の役にもたたないし、たいした邪魔にもならないだろうと、彼らがふたりを襲うのを放置しているのかもしれない。

そんなふうにして進むにつれて、例の不浄な熱気はますますつのり、同時に、本能的な警戒心を呼び起こす微かな異臭も、少しづつ強まっていった。首筋を、背中を、汗が流れ落ちる。前髪が汗に濡れて、額に張り付く。

ほの暗い、入り組んだ通路を、もう、どのくらいさまよってるだろうか。ふたりはすでに、時間の感覚とともに、方向感覚も、すっかり失っていた。時々、今通っている通路のアルコーヴの彫刻を前にも見たような気がすることもあるが、同じような彫刻がいくつもあるのかもしれないし、本当のところはよくわからない。

いくつもの角を曲がり、別れ道を選び、醜怪な『生物』を切り捨て、それからまた、彫刻や置き物で飾られた長い通路を通り抜けて、やがてふたりは立ち止まった。

そこは、初めてふたりが行き当った、通路の行き止まりだった。それも、ただの突き当たりの壁ではない。通路はそこで唐突にとぎれ、その先は、壁でもドアでもなく、いきなりがらんとした薄暗い

空間になっていたのだ。その、通路の先の空間から、例の熱気が耐え難いまでに熱く押し寄せて、ふたりを包む。あの臭気も、同じところから発しているらしい。同時にそこからは、何か、規則正しく高まりを繰り返す、風のうなりにも似た単調な音が、かすかに聞こえてきていた。

ふたりは、突然とぎれている床の端近くまで注意深く進み出て、上下左右に広がる空洞を覗き込んだ。

そこは、地下の大洞窟ででもあるらしく、暗くてほとんど見えないものの、はるか前方には、つきあたりのごつごつした岩壁らしきものがぼんやりと見分けられた。上方もやはり、はるかに高いところに、岩の天井があるようだ。ふたりのいるところは、どうやら、巨大な岩洞の壁の途中に開いた横穴といった位置らしい。ここまでは、砂だらけの遺跡のようなものではあっても床も壁もそれなりにちゃんとした屋内だったはずなのに、その建物の中に、突然、ぽっかりと、建物の何階分をもぶち抜くような天然の岩窟がある――。いかにも奇妙な、不自然なことだが、どう見ても、そうとしか見えない。

おそるおそる下を覗き込むと、そこに――たぶん、三階建の学校の最上階の窓から見下ろした校庭くらい下のほうに――、ぼんやりと、地面の上にあるらしい、何か巨きなものが見えた。暗くて地面は見えなかったが、どうやら地面に横たわっているらしいそれは、薄暗い中でも金属的に鈍く輝いて見える、くすんだ銀色の物体で、自分たちがいるところが本当に三階くらいの高さだとしたらマイクロバスくらいもありそうな大きさだった。さっきから聞こえている単調な物音は、その物体が発しているらしい。

そして、よく見るとそれは、ただのひと固まりの物体ではなく、どうも、いくつもの細長いものが、ごちゃごちゃと寄り集まって丸まったようなものらしい。それは、絡まりあう何匹もの銀色の蛇たちを思わせた。

里菜が、その『物体』をもっとよく見ようと乗りだしかけた時、

『蛇』の一本が、ゆっくりとうごめいて、一固まりの中からほどけて抜け出しかけた。

里菜がぎょっとして凍りつくと同時に後ろからアルファードの片腕が伸びてきて、無言で里菜を荒々しく抱き取った。反射的に悲鳴を上げかけた口は、もう片方の手で素早く塞がれ、里菜はあっという間に通路に引きずり戻されていた。

アルファードは、そのまま里菜を胸に抱え込むようにして、静かに数歩、後退った。

おせじにも状況判断が素早い方とは言い難い里菜は、何が何だか事態が飲み込めないまま、とりあえず、自分が恋しいアルファードにこれまでになく強引に抱きすくめられているのだという事実にだけは気づいた。そう意識したとたん、全身の血がかっと頭に昇って、戸惑いのあまり、どういうわけか逃れたくなって、つい、もがき出しそうになったが、いくら周囲の状況が見えない里菜でも、幸いなことに、そこで本当に暴れ出すほど愚かしくはなかった。アルファードのただならぬ警戒の気配を感じ取った里菜は、うろたえている場合でも、ましてや呑気にときめいてなどいる場合でもないのを理解し、頭上にあるアルファードの顔を見上げ、目で疑問を投げかけた。

アルファードは、里菜が落ち着いたのを認めると、里菜の口を塞いでいた手を離して、黙って自分の口の前に指を一本立ててみせた。その真剣な表情に里菜がかたずを呑んで頷くと、アルファードは里菜の身体をそっと放して、ついてくるように手で合図し、足音を忍ばせて通路を引き返し始めた。里菜は、わけがわからないまま、息を殺して、そろそろとついていった。

しばらくして、里菜を振り向いた。

「……もう、大丈夫だろう。驚かしてすまなかった」

小声で囁くアルファードに、里菜も声をひそめて問う。

「アルファード。あれ、何だったの？」

アルファードは短く答えた。
「ドラゴンだ」
「えっ？　うそっ！　だって、今まで見たのと、大きさも形も、全然違う……」
「ああ。あれはたぶん、伝説の雌ドラゴンだ。今まで俺たちが見てきたドラゴンは、みんな雄だったんだ。……ドラゴンの生態については謎が多いんだが、昔から、人間の前に現われるドラゴンはすべて雄だと言われてきた。もちろん、ドラゴンに性別を尋ねてみたものがいるわけではないし、ドラゴンの雄雌を実際に見比べてみたものもいないから、本当に全部が雄だという証拠はないんだが、とにかく、昔から、そう言われてきたんだ。そして、その伝説によると、雌ドラゴンはどこか人間界を離れた世界の果てのその向こうに巣を営み、そこで子供を産み続けていて、ドラゴンたちはみんな、そこからこの世界に飛んでくるのだという。雌ドラゴンには翼がないから、雄だけが人間界に飛んでくるというんだ。そして、誰も見たことのない雌ドラゴンは、雄ドラゴンがただの愚かな動物なのに対して、邪悪な知性と魔法の力と永遠に近い寿命とを持ち、人語を自在に操るといわれ、また、翼がないかわりに、雄の何倍も大きくて、九つの頭を持つといわれている」
「えっ、じゃあ、さっきの、あのヘビみたいのは、あれみんな、ドラゴンの首っ！？」
　里菜がすっとんきょうな声を上げると、こういう迂闊で大雑把な物言いを捨て置けない質（たち）であるアルファードは、しごく真面目に、冷静に、几帳面な訂正を加えた。
「いや、少なくとも一本は尾だろう」
「あ、そうか、そうよね」と、里菜も大面目に納得し、アルファードはなんて冷静で細心で、言うことがいちいちもっともなんだろう、と、心中ひそかに尊敬の念を新たにした。
　そんなことは知る由もなく、アルファードは、辛抱強い教師のように、里菜に尋ねた。

「君は、あれが卵を抱いていたのに気がついたか？」
「えっ……。ううん」
「ドラゴンがどこでどうやって繁殖しているのかは謎で、巣とか卵とか赤ん坊とか、そういう、ドラゴンの繁殖の形跡をみたものは今まで誰もいなかったんだが、どうやら、ドラゴンの巣は、こんなところにあったらしい。そして、あのドラゴンが言葉をしゃべったり魔法を使ったりするかはともかく、卵を守っている母親であれば、気がたって凶暴になっていることは確実だ。それを君は、あんなふうにのんびりと見物しているんだから……。まったく、君は、なんて呑気なんだ。もしかすると、君こそ史上最強の大豪傑かもしれないな。まあ、とりあえず引き返そう」
ふたりは、なおもしばらくは足音を忍ばせて、もとの道を引き返したが、もともと道を知っていて歩いていたわけではないし、目印を残してきたわけでもないから、途中で道が分からなくなった。それでもとにかく、どうせもともと分からなかった道なのだからと、適当に歩き続けた。
けれども、しばらくして、いくつめかの角を曲がったとたん、ふたりは立ちすくんだ。
前方で、またもや唐突に通路がとぎれて、その先が、さっきと同じような洞窟になっているのだ。
ふたりは顔を見合わせて、そろそろと通路の終りまで忍び寄り、もういちど、その先を覗き込んだ。そして、息を呑んだ。
そこは洞窟の底だった。階段や下り坂を降りた覚えはないのに、そこがさっきの洞窟の底であるのはあきらかだった。そこには、今度は下のほうにではなく、真正面に、さっきのドラゴンがうずくまって眠っていたのだ。
ドラゴンのいる場所は、広い洞窟の中央あたりで、ふたりがいるところからはかなり離れていたが、それでもドラゴンは見上げるように大きかった。あの単調な音はドラゴンの寝息らしい。音のうねりにつれて、ドラゴンの腹が微かに隆起を繰り返している。九つの

頭のうちのひとつが、こちらからよく見える位置にあり、その鼻孔がふいごのように広がったり閉じたりしているのがわかる。この耐え難い熱気と不快な臭気は、そこから吐き出されているらしい。

今度は里菜も、ドラゴンの鈍い銀色の脇腹のあたりに、真珠色の淡い光沢を帯びた真円形の卵がいくつか転がっているのを見た。ドラゴンは、九本の首と一本の尾で蛇がとぐろを巻くように卵を囲んで丸くなって眠っているのだ。

ふたりは、無言で目を見交わして、また、そろそろと後退り、角を曲がると向きを変えて、今来た道を引き返し始めた。途中までは同じ道を引き返してから、どこかで別の道にそれるつもりだった。

ふたりは、今度は間違わずに、同じ道を通って戻っていたはずだった。ところが、しばらくすると、なぜかまた通路は途切れ、その先がさっきの洞窟になっていて、やはりドラゴンが眠っているのだ。

「アルファード……。もしかしてあたしたち、この洞窟を通らなきゃ先に進めないことになってるんじゃない？」

「ああ、そのようだ。魔王は俺達にどうしてもここを通らせたいらしい」

ふたりは声を押し殺して囁きあい、もう引き返そうとはせずに洞窟の奥を透かし見た。

第四章＜荒野の幻影＞第二場（3）

洞窟の中央では、ドラゴンが眠っている。その向こうの暗がりの先に、反対側の岩壁がかろうじて見えている。目を凝らしてよく見ると、その、ちょうどここの正面あたりに、反対側の通路の入口があるらしい。

「よし、ドラゴンを起こさないように気をつけながら、あの通路まで、壁に沿って回っていこう」

「うん」

「だが、その前に、いったん、ちょっと引き返す」

「えっ、なんで？」

アルファードは、里菜の質問には答えず、黙って通路を引き返し始め、里菜は慌てて後を追った。しばらく通路を引き返して、ドラゴンから十分離れたと思われる頃、アルファードは里菜を振り返って、唐突に答えた。

「念のため、武器を調達しに行く」

「え？　武器？　どこへ？　こんなとこに、そんな都合よく武器なんかあるわけが……」

「あったじゃないか。ついさっき、壁に、盾と戦斧が飾ってあった」

「……そうだった？」

「ああ。君はここへ来る途中、いったい何を見てたんだ？　あんなに、足もとが疎かになって段差にけつまずくほどきょろきょろしてたくせに、肝心のものは何も見ていないんだからな。さっきからの経過を考えると、前に通ったからといってもう一度あそこにたどり着けるという保証はない気もするが、たどり着ければ儲けものだから、とりあえず、行ってみよう」

「ねえ、盾はともかく、なんで斧なんかいるの？　剣じゃ駄目なの？」

「剣一本じゃ、途中で刃毀れする」

「えっ、魔法で保護してあるから刃毀れしないんじゃないの？」
「するさ。君は魔法のことをよく知らないから、魔法は万能だと思っているようだが、そういうわけじゃないんだ。魔法がかけてないよりは強いというだけで、固い鱗に覆われたドラゴンに繰り返し切りつければ、当然、刃毀れくらいする。今まで君が見ている時に俺の剣が刃毀れしなかったのは、相手が魔物だったからだ。だいたい、剣は、もともとあまりドラゴン退治に適した武器じゃないんだ。何しろ、ドラゴンには鱗がある。簡単に刃物で切れる相手じゃない。刃こぼれくらいならともかく、下手すると、折れる。一本しかない剣が途中で折れたら、そこで一巻の終わりだ。それでも、あの、牧場で退治したドラゴンは、首が一本だったから剣でもなんとかなったんだが、首が九本もあっては、剣一本で相手にするのは、どう考えても無理だ。よしんば互角に戦えたとしても剣がもたない。まず戦斧なり棍棒なりでなるべく相手を弱らせて、剣はとどめを刺すのに取っておくべきだ」
「とどめを刺すって……、ねえ、まさか、アルファード、あいつと戦う気？　起こさないように気をつけて通り抜けるんじゃなかったの？」
「ああ、そうだが、もしあれが目を覚ましてしまって、向こうから襲いかかってこられたら、戦わないわけにいかないだろう？」
「いくわよ！　逃げればいいじゃない！　いくらアルファードでも、あんなのと戦うなんて無茶よ。だって、相手は怪獣よ、大怪獣！」
「それは、俺だって、立ち向かってかなう相手とは思わないさ。だから、逃げられれば逃げるが、逃げられなかったら、戦うしかないじゃないか。そのための備えは、無いよりあったほうがいいだろう？　黙って貪り食われるよりは、ほんのわずかでも生き残る確率があるほうに賭けるべきだ」
「それはそうだけど……」
アルファードは、
「無茶でも何でも戦うしかない時もあるさ」と、他人言のように呟

いて、それに続く、

（例えば、俺が盾になってでも君を逃がさなければ君を守れないような時には……）という言葉は声に出さずに飲み込んで、通路を引き返し始めた。

里菜はずんずん歩いていくアルファードに追いすがって、腕をひっぱった。

「ねえ、お願い、約束して。危ない時は逃げてね。無茶はしないで。約束よ！」

「当然だ。俺だって何も好き好んで危険を冒す趣味はない。だが、他に道がない時は、しかたないだろう？……あった。ほら、これだ」

アルファードは足を止め、壁に飾られた盾と戦斧を示した。

「ほんとだ、あった……。なんか、あんまり都合が良すぎない？　魔王がわざわざ用意してくれてたみたいじゃない？　だとしたら、単なる親切とは思えないんだけど。思いっきり怪しくない？」

「それはそうだが、これは本物の、ちゃんとした品物だ。古びているし、昔からここに飾ってあったものだろう。ほら、埃も積もっているし、盾の下など壁の汚れ方が他と全然違う。ずっと前から、ここに掛けてあったんだ。もしそれも何かの目眩ましで、これが罠だというのなら、罠を仕掛けるには何か理由があるんだろうから、騙されてみるしかないだろう」と言いながら、アルファードは斧や盾を取り外してつぶさに検分し、

「うん、十分、使用に耐える」と呟いて、おもむろに戦斧を構えて振ってみた。

「ねえ、アルファード、そんな、斧なんか、使えるの？　アルファードがそういう武器を使ってるとこ、見たことないけど」と、見慣れぬ姿に里菜が心配すると、

「ああ、特にこの武器の使い方に習熟しているというわけではないが、型の審査が勝敗に影響する正式の試合だとでもいうならともかく、とりあえず振り回して叩っ切ればいいだけなら、腕力まかせでなんとでもなるだろう」と、満足げに――ほとんど惚れ惚れと――

戦斧を眺めながら答え、それから急に里菜に向き直って、厳しい声で言った。

「さて、俺は、戦わなくて済むならそれで済ますと約束したが、君にも約束してほしい。もし、俺がやむをえずあれと戦うことになったら、その時、君は、俺を置いてでも、逃げること。例え魔王自身に君を害する気がなくても、あれが魔王の統制の及ぶものだとは限らない。助太刀しようなどと思ってくれるな。下手な手出しは、かえって俺の命取りになりかねない。とにかく、君は、俺が時間を稼いでいるうちに逃げ延びろ。そのほうがかえって俺の助けになる。俺だって、君を守りながら戦うより一人の方がむしろ戦いやすいから、生き残れる可能性が少しは増えるんだ。いいか、もう一度、要点を言う。君が逃げてくれた方が、君が生き残れるだけでなく、俺が生き伸びる確率も高くなるんだぞ。君は、土壇場でこれを言っても、恐慌に陥ったり感情に惑わされたりして理(ことわり)を聞き分けられず、分別ある行動が取れないだろうから、こうして、あらかじめ言っておく。わかったね」

アルファードは、出来の悪い生徒を辛抱強く教え諭すように、念を押した。

里菜は、たしかにアルファードの言うことは理屈としてはもっともだと思ったが、かといって、そんな約束をする気は、さらさらなかった。が、今、ここで彼に逆らっても無駄だと思ったので、しかたなく、あいまいに頷いて見せた。頷きながら、もしかすると彼は自分があれと戦わざるを得なくなることを予感しているのでは、と思って、ぞっとした。

アルファードは、普段分別臭いから気がつきにくいが、実はけっこう、開き直った時は無茶な人なのだ。里菜から見れば信じられないような危険なことを、まるで自分の命などなんとも思っていないかのように平然とやってのける――アルファードには、何かそういう、いざとなると捨て鉢なところがある気がする。相手がドラゴンであれ魔物であれ、時にはまるで、むしろ進んで死にたがっている

ように見えるほど、恐れ気もなく平気で危険に身を晒すのだ。しかも、そのスリルに昂揚を覚えているというのならまだ分かる気がするが、そんな気配もなく、ただ淡々としているのが、里菜にはかえって、危うく見える。

今だって、確率がどうのこうのと理屈はいろいろ言っていたが、要するにアルファードは、あれと戦って死んでも構わないつもりでいるのではないだろうか――。

暗い廊下を引き返しながら、前を行くアルファードの背中に死地に赴く戦士の覚悟のようなものが見える気がして、何か言おうと里菜が追いすがった時には、ふたりはもうさっきの洞窟のすぐそばまで来ていた。

すごく嫌な予感がする。

と、アルファードが急に振り向いて、潜めた声で言った。

「いいか、さっきの約束を忘れるな。君はたぶん、約束する気もなしに、その場しのぎに頷いたんだろうが……」

そこで、里菜がぎくっとしたのを見てとったアルファードは、やっぱりな、という風に続けた。

「とにかく頷いたんだから、約束は約束だぞ。いいか、約束を破ったら絶交だからな！」

この、彼らしくもない子供っぽい言いぐさに、里菜は状況も忘れて小さく吹き出した。

アルファードは、

「何がおかしい」と、ちょっとむっとしたような顔をした。

そうしてから、

「たぶん、ただ危機感が足りないだけなんだろうが、やっぱり君は、天下無敵の大豪傑だ」と、呆れたような感心したような様子で首を振った。

洞窟の中では、ドラゴンが相変わらず眠っていた。あらためて見てみると、大怪獣は大げさだったかもしれないが、やはり、相当の大きさには変わりない。

ふたりは足音を忍ばせて洞窟に足を踏み入れ、周囲の岩に張り付くようにしてじりじりと横歩きで進み始めた。その間も、目はずっと中央の眠れるドラゴンに注いだままだ。熱さと緊張のために額から滲み出る汗が目にはいるが、目をこする余裕もない。ただひたすら神経を張り詰めて、音をたてないようにそろりそろりと進んでいく。それは神経をすり減らす仕事で、時間が経つのがとても遅いように、いくら進んでも向う側が近くならないように思えてくる。よく見れば、ドラゴンの周りには、白骨らしきものが散乱しているのが見える。何の骨かは、考えたくも無い。

そんな調子で、なんとか洞窟の半ばまで進んだころ、ドラゴンの抱いている卵のひとつが、ぐらりと揺れたような気がして、ふたりは足を止めて不安げな視線を交わし、卵に目を戻した。

たしかに、それは見間違いではなかった。卵はもういちど揺らいで、中からがさごそと物音が聞こえ、息を詰めて見守っているふたりの前で、殻というよりは膜のようなものであるらしい卵の表面に、ピッと小さな裂け目ができた。

そこから何かぬらぬらしたものが覗いたかと思うと、みるみるうちに裂け目が広がって、卵液に濡れた小さなドラゴンの頭が現われた。

まだ身体の半ばに卵の殻を纏ったままの、生れたばかりのドラゴンは、キュウ、と一声、呟くような産声を上げて首を伸ばし、周囲を見渡した。

その首が、こちらを向いて止まった。

赤ん坊ドラゴンは、首をかしげるようなしぐさで、鳥のように片方の目で里菜とアルファードを見据えた。瞳の細い無表情な金色の目が、あきらかにふたりの姿を捉えていた。

里菜は恐怖に凍り付いて、背後の岩にぎゅっと背中を押し付け、目を見開いて立ち尽くしていた。幼いドラゴンの金色の目の中には、既に、いつか山の牧場（まきば）で見たあのドラゴンと同じ、凶々≪まがまが≫しい飢えが宿っていたのだ。

アルファードが横からそっと里菜の肩をつついた。我に返った里菜に、アルファードは小さく頷くようにして合図を送り、ドラゴンの目を見返しながら、ふたたびそろそろと進み出した。里菜もあわてて横歩きを再開した。いくらドラゴンでも、卵の殻を付けたままいきなり襲い掛ってはこられないだろう。逃げるなら、今のうちだ。親ドラゴンが目を覚ましたり、他の卵が孵り出す前に、少しでも出口に近寄っておきたい。

赤ん坊ドラゴンは、今や、全身をふたりの前に現わしていた。真珠色の殻は光沢を失って、脱ぎ捨てられた服のようにぐしゃぐしゃに縮まり、赤ん坊ドラゴンの片方の翼の先にひっかかっている――そう、小さなドラゴンは雄だったのだ。その大きさはせいぜい中型犬くらいだったが、すでに全身から凶暴な貪欲さと攻撃性の気配を発散させている。

赤ん坊ドラゴンは、そろりそろりと壁づたいに逃げているふたりにじっと目を注いだまま、しわくちゃの濡れた翼を重そうにゆっくりと広げ、それから一度、ばさりと振った。

その音で目を覚ましたのか、母ドラゴンの首の一つが、ふいに目を開けた。その目は、血のような、濁った赤だった。

母ドラゴンは、まず、自分の腹の横で翼を乾かそうとしている小さな息子に目を止め、首を伸ばして鼻先で息子を軽くつつき、翼を伸ばすのを助けてやった。そうしながら、片方の目だけで闖入者の姿を捉えた。

気がつくと、他の卵も、揺らいだり裂け目が入ったりしはじめている。

最初の赤ん坊が翼を伸ばし終えるのを見届けた雌ドラゴンは、静かに首を上げて、片方の目で、まっすぐにアルファードを見据えた。

たしかに、『里菜とアルファードを』ではなく、『アルファードを』見据えたのだ。

ふたりはもう、反対側の通路の入り口近くまで進んでいた。アルファードは、里菜をすっと背後に庇って、ドラゴンの目をまっすぐ

に見返しながら、足を止めることなく、出口ににじり寄り続けた。
その間にも、雌ドラゴンの腹の下で、次々と卵が孵化しはじめていた。卵は五、六個もあるだろうか。雌ドラゴンの九本の首のうちの八本は、それぞれ生れたばかりの我が子に伸びて、彼らが立ち上がったり翼を伸ばしたりするのを、やさしく助けてやっている。赤ん坊ドラゴンは、どうやら、全部、雄らしい。
そうしながらも、雌ドラゴンの一本の首だけは、ずっとアルファードの動きを追って、ゆっくりと回されていた。
里菜とアルファードがまもなく出口に達しようとしたとき、ふいに、こちらを見据えている雌ドラゴンの首が、ぱかっと口を開けた。裂けるように開いた巨大な口の中は、やけに生々しく赤かった。
アルファードが、さっと全身を張り詰めさせて、盾を掲げた。その緊張が、アルファードの背中にすがりついていた里菜の掌に、シャツの布地越しに電流のように伝わって、里菜はあわてて手を離し、アルファードの脇腹の横からおそるおそるドラゴンを覗いていた首も、急いで引っ込めた。きっと、炎を吐く……！　アルファードは身構え、里菜は目をつぶって首を縮めた。
けれども、次の瞬間にドラゴンの口から出てきたのは、炎ではなかった。
それは、どこか不自然でぞっとするような、低く耳障りな音だった。
遠い雷のとどろきにも、嵐の夜の風のうなりや木々の軋みにも似て、危険な気配をはらんで人の心をおびやかすその音は、けれど、たしかに人間の言葉を構成していた。
ドラゴンは、不思議な、くぐもった発音で、まちがいなく、こう言ったのだ。
「あ・る・ふぁー・ど……」
アルファードの全身に、雷に打たれたように衝撃が走った。ドラゴンは、アルファードを舐めるように眺め回して、目を細め……。
ニッと、嗤(わら)った。

第四章＜荒野の幻影＞第三場（1）

暗い窓に、ろうそくの灯が映る。
ゆらゆらと踊るその火影を、アルファードは、見るともなしに見やっていた。
七年前の、ある冬の夜。窓の外は、雪だった。暖かな家の中では、病の床についてすでに久しかったレグル老の寝台の脇の小卓で、ろうそくが静かに燃え続け、ゆっくりと短くなって、まるで老人の命の残りを示すかのように、まもなく燃えつきようとしていた。
いつもなら、夕べごとに灯される枕辺のろうそくが夜も深まって燃えつきるころ、病める老人は、ひっそりと、浅い眠りに就くのだった。
が、その夜、老人はまだ起きていて、当時十五歳だったアルファードを、病床の枕辺に呼び寄せたのだ。
アルファードにとって、レグル老は、ただ養い親であるばかりでなく、自分が誰かも知らずにこの世に放り込まれた彼の、厳しくも正しい人生の導き手であり、絶対的な崇敬を捧げてやまない剣の師匠でもあった。
その老人の命がすでにいつ終わってもおかしくないと知っていたアルファードは、示されるままに傍らの椅子に腰を下ろし、老人の遺す言葉を一言も聞きもらすまいと、静かに姿勢を正した。
神妙に言葉を待つ年若い養い子に、老人は告げた。
「アルファード、お前の中には、ドラゴンがいる……」
唖然として言葉を失ったアルファードに、老人は、力なく震える手で銀の腕輪を差し出しながら、言葉を続けた。
「息子よ。これを、お前にやろう。ドラゴンが暴れ出さないお守り、魔除けの銀だ。時が来るまで、決して外してはならない」
それが、レグル老の遺言になった。次の夜明けを待たずに、老人は死んだ。

『時が来る』とはどういうことなのか、老人は教えてくれなかった。彼の予言の常として、たぶん自分でも知らなかったのだろう。

それ以来、七年間、アルファードは、護符のように、その腕輪を身につけ続けてきた。後に腕が太くなってサイズが合わなくなった時も、わざわざプルメールの貴金属細工店に持っていって、元の形を損なわないようにうまく調整してもらったのだ。養い親の形見となったその腕輪をつけていれば、頑固で厳格だったが自分を愛してくれたあの老人が、今もどこかで自分を律し、導いてくれるような気がしていた。

けれど、自分がその腕輪を外さないのは、本当は、おそらく、親の遺言は守るものだという常識的な義務感のせいでも、師匠の言葉は絶対であるという弟子としての忠誠のためでも、また、養い親の想い出と常に共にありたいという感傷のためでもなく、あの夜のあの言葉――、『お前の中にドラゴンがいる』と言った老人の言葉が、彼を呪縛しているからなのだと、心のどこかで、彼は知っている。今も、アルファードは、あの言葉を思い出す度に、いつのまにか指の関節が白くなるほどに拳に力を込めている自分に気付くのだ。

＜ドラゴン退治のアルファード＞という無邪気な賞賛を込めた二つ名に、彼が人知れず淡い違和感――というより、苦痛といってもいいかもしれないもの――を感じ続けてきたのも、たぶん、そのためなのだろう。

銀の腕輪が彼の腕を戒め続けてきたように、ドラゴンという言葉は、常に、彼の魂を戒め、呪縛してきた。ドラゴンという言葉、ドラゴンの存在、そして誰もが自分の名とドラゴンを結びつけて語り、自分が時にドラゴンに喩えられること――、それら、ドラゴンにまつわるすべての事がらは、ずっと、彼を心の底で脅かし、密かに責め苛んできた。ドラゴンと、今、彼は、真正面から対峙している。

その、ドラゴンは、彼の心に深く刺さった棘だったのだ。

こめかみの血管が脈打ち、身体中を血が駆け巡るのを感じる。

ドラゴンは、邪悪な知性を湛えて赤く燃え立つ目で、アルファー

ドを――ひたすらアルファードひとりを――捕らえ続けている。
ドラゴンは、もう一度、赤い口腔を開けて、その響きを味わい楽しむかのように、ゆっくりと彼の名を繰り返した。
「あるふぁーど……」
さきほどの最初の一声は、まるで長いこと錆びついていた機械をしばらくぶりで動かしたように、一音ずつ、とぎれとぎれに押し出すように発せられたが、この、二度目の言葉は、やや滑らかで、ずっと人間の発音に近かった。
ドラゴンは、アルファードにむかって、探るように首を伸ばしてくる。愛しいお前をもっとよく見せておくれ、とでも言いたげな、奇妙にやさしい仕草で。
アルファードの肌が粟だった。怖かったのだ。ドラゴンが。
その大きさや力、その攻撃によって負うであろう傷の痛みや、もしかするともたらされるかもしれない死などが怖かったのではない。アルファードは、そういうものは何ひとつ怖いと思ったことはなかった。危険に備えて心身の緊張を高めるだけで、感情的な恐れというものを感じたことはなかった。
ただ、ドラゴンに人間の言葉で自分の名を呼ばれたこと、ドラゴンが自分を見て嗤ったように見えたこと、すぐに攻撃されるのではなく、こうして舐めるように眺め回されていること、ひとつの首がそうしている間もドラゴンの別の首たちは生まれ出ようとする幼い息子たちを優しく細やかに介助していること、その、畜生ながらも母親らしい仕草――、それらが、無性に恐ろしかった。
半眼で自分を見つめるドラゴンの奇妙な眼差しが、ぽっかりと開いた口腔の淫らがましい赤さが、アルファードを慄かせた。
身体の奥底から沸き上がる、根源的な、ほとんど生理的な恐怖が、彼を満たしてゆく。
それはまるで、何もない虚空からいきなり生えて出た細く生白い不気味な腕が、あらゆる攻撃を跳ね返すはずの彼の分厚い胸板をあっけなく突き抜けて身体の内側にするりと入り込み、なよなよと嬉

しげに心臓を愛撫し始めたかのような、あやふやで得体の知れぬ、落ち着かない感覚だった。

（ああ、俺は無力だ……）

ずっしり重い盾と戦斧を軽々と構え、腕や肩に隆々たる筋肉を盛り上がらせながらも、アルファードは、不慣れな無力感に愕然としていた。

どんな時にも自分を守ってくれると信じていた堅い鎧が内側からじわじわと溶かされてゆくような――、完璧に武装していたはずの自分が実は生まれたての赤子のように丸裸だったことに戦場の只中で突然気づいたような――、そんな心もとなさが、彼の心を蝕んでゆく。

今、初めて、魂を揺るがす本当の恐怖を、彼は知った。

彼はこれまで、自分の逞しい肉体が、堅固な鎧となって傷つきやすい魂を護ってくれることを、心のどこかで信じたがっていた。がむしゃらに身体を鍛え続けてきたのは、そのためだったのかもしれない。鋼の筋肉で一分の隙なく身を鎧うことで、自分の内側にある何か弱いものを守れると思い込んだのだ。が、それは錯覚にすぎなかった。堅い鎧は剣を跳ね返しはするが、魂に忍び込む恐怖から彼を守れはしないのだ。

（そうか）と、彼は思った。

（だから俺は、どんなに身体を鍛え、剣の技を磨いても、満足することがなかったのだ）と。

今、背後で震えている、このちっぽけな少女と出会って、己の人生の中に足を踏み出す前。まるで鳥篭の中の鳥のように、狭いあの村に――そして村人たちが期待する＜おさな子＞の役割の中に――自分で自分を閉じ込めていた、あの頃。肩に、胸に、腕に、いくら分厚く筋肉を盛り上げても、まだ、足りなかった。まだ、不安だった。もっともっと強くならなければ、生きる資格がないような気がしていた。自分を認めてやれなかった。――それは、ここに、こいつがいたからだ。

いつの日か、こうして、こいつと対峙する時が来るのを知っていたから。この戦いがあるのを、あらかじめ知っていたから。そして、その時には鍛え上げた筋肉も磨き抜いた剣技も本当には役に立たないのだと、心の底では分かっていたから――、だから彼は、ずっと、どこへも足を踏み出せなかった。自分の運命に立ち向かう勇気が、まだ、なかった。

（あの頃――あの村に居た頃、俺は、みんなからそう呼ばれていたとおり、本当に、一人では歩くこともできない『おさな子』だったのかもしれない）と、アルファードは、苦く思った。

けれど、今、彼はついに、自分の恐怖の源に向き合い、自分の戦いを見出したのだ。

（そうだ、これこそが、俺が斃さねばならない相手だ。きっと、今まで俺が殺してきたドラゴンたちはみな、俺が斃すべき、ただ一頭のこのドラゴンの、影のようなものだったのだ……）

そう思ってしまうと、急に視界がはっきりしたような気がして、なせだか心が少し静かになった。

アルファードは剣と盾を構えて、ドラゴンを睨み返しながら、里菜を背中で押すようにじりじりと後退った。そうしながら、振り向きもせずに囁いた。

「リーナ。俺はこいつと戦う。君はそこの通路に逃げ込んで、少し行ったところで待っていてくれ」

「そんな、アルファード……！　一緒に逃げよ？　通路はもう、すぐ後ろよ。このまま振り向けば、ふたりとも逃げられるよ！」

「いや、無理だ。きっと、こいつは、背中を見せたとたん襲い掛ってくる。俺が食い止めているあいだに、君は逃げろ。約束だろう？」

……リーナ。俺は、たった今、知った。俺はどうしても、あいつと戦わなくてはならないんだ」

「なら、あたしも一緒に戦う」

「いや。リーナ、こいつは俺の相手だ。これは『俺の』ドラゴンだ」

その言葉に、里菜は黙った。里菜の目に浮かんだ理解の色を、ド

ラゴンから目を離さずにいたアルファードは見られなかったが、それでもアルファードは自分の言葉が里菜に通じたことを背後の沈黙から感じ取り、緊迫した中ではあったが、出来るかぎり声を和らげて付けたした。

「リーナ。大丈夫だ、俺も必ず、後から行く。君をひとりでは行かせない。……今だ、逃げろ！」

最後の一言を叫ぶと同時に、アルファードは戦斧を振り上げ、ドラゴンに向かって走り出した。同時にドラゴンの九つの首が一斉にもたげられ、アルファードに襲い掛った。

直後、赤ん坊ドラゴンたちが、耳障りなかん高い声で喚きながら、卵液に濡れた翼を一斉に広げ、母ドラゴンの首の隙間をかい潜って、バサバサと里菜に殺到した。

母ドラゴンの九つの首に取り囲まれたアルファードは、里菜の危機に気づいてもどうすることも出来ず、ただ、魅入られたように立ちすくむ里菜に向かって声を限りに叫んだ。

「リーナ、逃げろ！」

我に返った里菜は、悲鳴を上げながらくるりと向きを変え、通路に飛び込んだ。後を追って飛び掛かろうとした赤ん坊ドラゴンの翼が周囲の岩を打ち、一匹が、もんどりうって無器用に墜落した。後に続いた二匹目も、同じ様に、狭い通路に飛び込みそこねて、これは墜落はしなかったが、空中でぶざまによろめいてから、なんとか着地に成功した。

けれど、赤ん坊ドラゴンたちは、里菜をあきらめなかった。大人のドラゴンは、普通、人間の赤ん坊を空から攫うことはあっても、ある程度成長した人間はもう餌にはできないことを知っている。だが、生れたばかりで何も知らない赤ん坊ドラゴンは、ただひたすら、ドラゴンの本性である貪欲な飢えと本能的な攻撃欲だけに支配されて、目の前に動くものがあれば何でも襲おうとする。翼を広げたまま通路に飛び込むのが難しいことに気づいた小さな雄ドラゴンたちは、すぐに次々と地面に舞い降りて、先を争って通路に走り込んだ。

雄ドラゴンはただの動物だと言われているが、それでもかなり知能は高いらしい。

その様子を目の隅で捕らえながらも、今のアルファードには、なす術はなかった。ただひたすら、己の間の前に迫る九つの首を目まぐるしくかいくぐって、戦斧を振るい続けた。

第四章＜荒野の幻影＞第三場（2）

里菜は、追ってくる赤ん坊ドラゴンたちを肩越しに振り返りながら、ころがるように通路の奥に走り込んだ。狩られる獣の本能的な恐怖だけが里菜を支配していた。アルファードを気遣う余裕も失い、里菜は、猟犬に追われる兎のように、必死で逃げた。

さっき、舞い上がって襲いかかってきた彼らの、その金色の目の中にぎらつく忌まわしい欲望を見てしまった里菜は、金縛りにあったように動けなくなってしまったのだ。アルファードが叫び声で呪縛を破ってくれなければ、そのまま、抵抗も出来ずに襲われていたかもしれない。

こんなにも幼いものが、こんなにも凶暴で攻撃的で貪欲な気配を纏っていることが、里菜は、理屈抜きで無性に恐ろしかった。

それさえなければ、この小さなドラゴンたちは、不器用に首をかしげる仕草といい、親と比べて丸っぽい顔つきや大きな目といい、たぶん、どこかしら愛らしくさえ見えるはずだ。

それだからこそ、里菜は、彼らが、成長したドラゴンよりも、ずっと怖かった。彼らは、生き物の持つ本能的な飢えそのものの生々しい化身のようだった。

ドラゴンたちは、互いにぶつかりあいながら、狭い通路をひしめきあって突進し、ギャーギャーと耳障りな叫びを上げて、執拗に追いすがってくる。が、おそらくドラゴンの身体は、こんな赤ん坊でも地を走るより空を飛ぶほうが向いているのだろう、幸いなことに走るのがすごく早いというわけではないらしい。しかも、いかにも赤ん坊らしく不器用で、まだうまく制御できないらしい大きな翼を持て余して、時々もたついたり足をもつれさせたりしている上、兄弟同士でぶつかり合ったり小競り合ったりして互いの進路を邪魔し合っている。時に、群れを飛び出して突出してきた一頭の牙が里菜のスカートの裾を掠めたりすることはあっても、その一頭は次の瞬

間には後続の兄弟たちに踏みつけられて転倒してしまったりするので、里菜は何とか逃げきっていた。

が、それも、里菜の乏しい体力が続くうちだろう。

里菜は、ドラゴンたちをまこうと、角という角を曲がり、ついには、それまでは避けていた細い枝道も通り抜けた。幸い、例の妙な『生き物』にはでくわさなかったが、枝道を抜けた時、里菜は、自分のいるところがまったくわからなくなっていた。が、背後にドラゴンたちが迫っていたので、自分が方角を見失ったことになど気づく余裕さえなく、そのまま、ただあてずっぽうに走りまわり続けた。

それからまた何度も角を曲がり、いくつもの枝道を駆け抜けて、気がつくと、ドラゴンはもう追ってきていなかった。

里菜は立ち止まって壁にもたれ、荒い息をつきながら、恐怖の涙が滲んだ目をこすった。

忌まわしい凶暴さを湛えた赤ん坊ドラゴンたちの金色の目と、凶々しい真っ赤な口の中の、小さいくせにやけに鋭い牙を思い出すと、今更ながらに足が震えて、里菜はへなへなと床に座り込んだ。

しばらくそうしていてから、自分が、一人で道に迷っていることに気がついた。自力では、アルファードのところへ戻れないだろう。アルファードは無事だろうか。もし彼が親ドラゴンを斃したとして、その後、彼は里菜を見つけてくれるだろうか――。

里菜は、心細さに我が身を抱きしめて、啜り泣きはじめた。

＊

アルファードは、洞窟の中で、巨大な雌ドラゴンと向かい合っていた。

里菜を追って飛び出していった幼い雄ドラゴンたちがそのまま戻って来ないのが気にかかるが、今は自分の戦いで手一杯だ。

額を流れ、目に入る汗を、アルファードは素早く拭って、戦斧を握り直した。

恐らく、ドラゴンを倒すにはやはり心臓を貫く必要があるのだろうが、九本の首が胴体を取り巻いている間は、胴体に近づけそうもない。首を一本一本片付けていくしかない。

普通なら、ドラゴン退治をする時は、まず自警団の仲間が槍や弓矢でドラゴンの喉や目を狙い、棍棒や重さのある大剣で首や身体を叩いて相手を弱らせたところで、アルファードが剣でとどめを刺す。が、今は、気心の知れた自警団の仲間は、ここにはいない。また、喉や目を狙うには槍が、鱗の隙間を刺し貫くにはいつもの細身の剣が適しているのだが、一人で一度に操れる武器はどのみちひとつだ。まずはこの戦斧で、できるところまで戦っておこういうのが、彼の計画だ。

アルファードの服は、あちこちが鮮血に赤く染まっていた。ドラゴンの返り血も浴びていたが、彼自身も、すでにいくつもの小さな傷を負っていたのだ。

その一部はドラゴンの爪によるものだったし、一部はドラゴンの攻撃を避けて岩にぶつかったりした時のものだったが、傷の原因はそれだけではない。

雌ドラゴンは、雄のように炎を吐かなかった。そのかわり、何かよく見えない液体のようなものを一直線に吐き出した。恐らく一種の毒であるらしいその液体に触れると、刃物で切られたようにすっぱりと肌が裂けた。その傷は浅く、切口はかすかに焼け焦げたようになって、あまり血は出なかったが、苦痛は激しかった。ドラゴンの毒液には何か神経を侵すような成分が含まれてでもいるのだろうか、それはまるで、血を流さない傷口の下に毒のある炎が潜り込んで皮膚の内側で肉をぶすぶすと焦がし、腐らせてゆくかのようで、傷を受けるたびに、肉体だけでなく魂までも切りさいなむような苦痛が全身を駆け巡るのだった。

ドラゴンの九本の首がそれぞれにくねって、四方からアルファードに襲い掛る。その九本の首の先で、十八の赤い目が、毒を含んでアルファードを見据える。

ドラゴンは、アルファードを情け容赦もなく攻撃しながら、その一方で、ときおり、愛おしむかのようにアルファードの名を呼んで、彼に話しかけてきた。

それはもう、最初に聞いた時のような、ぎこちない機械的な発音ではなかった。今や、ドラゴンは、はっきりと、人間の声で、人間の言葉を操っていた。

九つの首は、それぞれ違う声を持っていた。

いや、同じ首でも、口を開くごとに違う声を出していたのかもしれない。

その声は、あるいは女、あるいは男、あるいはそのどちらとも知れず、低いもの、高いもの、美しいもの、耳障りなもの、やわらかいもの、ざらついたものと様々で、入れ替わり立ち替わり、アルファードに語りかけてくるのだった。

首の一つが、自分が吐きかけた毒液に当たって苦悶するアルファードの姿を楽しげに眺めながら、

「アルファード」と、まるで愛撫するかのように柔らかく、その名を呼んだ。

それは美しい、低く滑らかな女の声だった。

「アルファード。待っていたよ。やっと来てくれたね……」

そう言って、アルファードの顔を覗き込むように、やさしく、なまめかしくさえ見える動きで差し伸ばされた首が、突如真っ赤な口をかっと開いて、再び毒を吐きかける。

アルファードは盾を掲げながら飛び退いたが、体勢を崩して、二、三歩よろめいた。

そのアルファードに、背後から別の首が牙を剥いて襲い掛る。

さっと振り向いたアルファードは、ドラゴンの眉間を正確に狙って戦斧を叩き込んだ。

「ぐァッ」と叫んで、首がのけ反り、のたうちながら退いていく。

と、同時に、もう、別の首がアルファードの目の前に迫っている。

アルファードは素早く飛び退き、ドラゴンの顎の下をかい潜って、

低く下げられたその首の上から、力一杯振りかぶった戦斧を打ち下ろした。調達してきた戦斧はかなり大振りで刃も厚く、彼のいつもの剣と比べればずっと重量があったが、硬い鱗に覆われた首を一刀両断に断ち切るなどということは、さすがに不可能だった。相応のダメージは与えているようだが、いくら渾身の力を込めても首の骨を叩き折るところまではいかない。鱗の下の肉を押し潰す弾力を感じた後、戦斧は弾き返され、握った腕を痺れるような衝撃が駆け登る。

すばやく体勢を立て直したアルファードが、数本ずつ入れ替わり立ち替わりで襲ってくる首たちと、息を継ぐ間もなく立ち回り、汗を飛び散らせて戦い続ける間、残りの首たちは、それを眺めて面白がっているかのようにざわざわと笑いさざめき、何か甘やかなものを味わうように、繰り返し、口々に彼の名を唱え続ける。ひとつひとつの首が語りかける時には男の声のこともあるが、こうして背後でざわめいている声は、高低様々な女の声の重なりだ。

しばらく別の首の戦いを見物した首は、ひとつの首が傷を負って引っ込んでくると、入れ替わりに、嬉しげに参戦してくる。戦いながら、人間の声と言葉で、時にいたぶるように、時に慈しむように、アルファードに呼びかける。

最初は名前を呼ぶだけだったドラゴンの言葉は、次第に複雑な内容を語り始めた。

アルファードはなるべくその言葉を耳に入れないよう、心の中で耳を塞いで、ひたすら戦い続けた。たぶんこれが、雌ドラゴンの邪悪な妖術なのだ。ドラゴンの言葉にうっかり耳を傾けたりしたら、それだけでも、気が散って戦えなくなるだろう。さらに、つい返事をしてしまったりしたら、きっと、彼女の術中にはまってしまうの

だろう。何も聞いてはいけない、考えてはいけない。ただ、戦う機械と化したように、次々と目の前に現われる首と戦い続けるだけだ。

まるで誘うように目の前に差し出されたドラゴンの首に向かって、アルファードは力一杯、戦斧を振り下ろした。

と、その瞬間、戦斧を跳ね返すように、勢いよく首が振り上げられた。

狙いを外れて首に浅く突き立った戦斧が、アルファードの手を離れ、首に刺さったまま空中に持ち去られた。

ドラゴンは、苦痛に吼えながら激しく首を振った。その弾みで戦斧が抜けて弾き飛ばされ、頭上を飛んでいった。戦斧は、洞窟の奥の岩陰に落ちたらしい。が、拾いに行く余裕はない。

アルファードは、剣を抜いた。

＊

しばらく床にしゃがみこんでいた里菜は、やがて、壁に手をついて力なく立ち上がり、ほの暗い通路を、あてもなくふらふらとさまよいだした。はぐれた時は動かないほうがいいとは思ったが、怖くて、じっとしていられなかったのだ。

独りになってみると、この地下迷宮は、さっきまでより一層不気味なところに思えた。

壁掛の一枚一枚の後ろに得体の知れぬものがひそんでいるような気がしてくる。アルファードと一緒だった時はただの飾り物にしか見えなかった彫刻たちまで、何か怪しげな仕掛けがありそうに、今にも動き出して自分に襲い掛ってきそうに見えてくる。

里菜はもう、恐怖と疲労に思考が麻痺して、いつのまにか自分が階段を昇り始めていることにさえ、気がつかなかった。

見えない糸に曳かれるように、里菜は、よろよろと壁に手をついて、長いらせん階段を昇っていった。

＊

アルファードは、襲い掛る首をひらりとかわしながら、黙々と剣を振るい続けた。

彼も自覚しているとおり、剣はもともと、ドラゴン退治に適した武器ではない。しかも、彼の剣は、重装の騎兵が鎧の上から相手を叩いてダメージを与える目的で使っていたような重量のある大剣ではなく、かつて戦乱の時代に農民出身の軽装の歩兵たちに支給されることが多かった白兵戦用の剣の流れを汲む、切れ味重視の軽い剣である。そんな、生身の人間同士が斬りあうために使うような剣でドラゴンに立ち向かうなどというのは、歌物語やお芝居の中の英雄たちだけにできるはずのことだったのだ。

それでも彼がこれまでドラゴン退治に使い慣れたこの剣を用い続けてきたのは、それが集団戦におけるとどめの一撃専用だったからである。仲間たちが他の武器で弱らせたドラゴンの胸元に飛び込んで、一瞬のチャンスを捉えた渾身の一突きで素早くとどめを刺すという、彼ならではの瞬間的な速攻戦法においてこそ、この剣の手ごろなサイズやきっさきの鋭さという特徴を生かすことができたのだ。

だから、普段、この剣でドラゴンに何度も切りつけるなどということは、ないのである。うまくいけばただ一突き、失敗してもせいぜい数回だ。そうでなければ、彼とても、他の、もっと頑丈な武器を選んでいただろう。こんな華奢な剣でドラゴンの固い鱗にいくども切りつけるなど、正気の沙汰ではない。下手をすれば、途中で剣が折れる。そうなっては、そこで終わりだ。

それでも、戦斧を失った今となっては、この愛用の剣一本が頼りだ。

剣は、すでに何か所も刃毀れしている。もう、これ以上、鱗に切りつけて剣を損なうわけにはいかないだろう。あとは、目と口腔に狙いを定めるしかない。ならば、長槍を持たない以上、首をなるべく己の近くまで引きつける他はない。例え、毒液の攻撃に我が身を

晒そうとも。
　アルファードは、盾を捨てた。動きが制限されすぎる。自警団でドラゴン退治をする時も、彼は、とどめを刺すのに打ちかかる時は、盾は持たなかった。身軽さのほうが大切だったのだ。もちろん、それは、他の団員たちがドラゴンを弱らせてくれたところでとどめだけ刺しにいくという戦法だからこそ出来ていたことだとわかっているが、それでも今は、いちかばちか、捨て身で勝ちに行くしかない。それで駄目なら、どっちみち敗れるだけだ。
　アルファードは、ただ独り、戦い続けた。

＊

　長く暗いらせん階段を、里菜は昇り続けた。自分がどこにいるのか、半ば忘れかけていた。
　いつのまにか、下からの熱気は薄らいでいる。かわりに上のほうから、何か冷えびえとした気配が忍び寄り始めていた。
　ふいに里菜は、自分が長い階段を昇りつめたことを知った。
　目の前に、古びた木の扉があった。それは、特に大きくもなければ重々しくもなく、何の飾りもない、ごくありふれた質素な扉だった。
　すでにほとんどの思考を失っていた里菜は、まるで何でもない普通のことをするかのように、ためらうことなく取っ手に手をかけた。
　それは、長い旅行から帰って自分の家のドアを開ける時のような、あたりまえでありながらどこか違和感を伴う行為だったが、里菜がその違和感を感じ取った時には、すでに扉は、重さのないもののように、何の抵抗もなく、内側にすっと開いていた。
　開け放された扉の向こうには、何もなかった。いや、『無』が、『闇』が、あった。
　圧倒的な無と、まばゆいほどの闇が、里菜の前に、ただどこまでも果てしなく広がっていた。

第四章＜荒野の幻影＞第三場（3）（前書き）

！ご注意！

この回には、流血描写、及び精神的に痛い内容が含まれています。

年齢制限が必要とは思いませんが、特に苦手な方はご注意ください

m（＿）m

（飛ばして読んでもストーリーはだいたい分かると思います）

第四章＜荒野の幻影＞第三場（3）

アルファードは、剣を杖代わりにして傷ついた身体を支え、ゆらりと立ち上がった。

ドラゴンの九本の首が、それをじっと見守っている。

アルファードは、すでに満身創痍だった。血と泥で汚れた服はあちこちが裂け、破れ、その下に何か所もの傷が痛々しく口を開けている。剣はぼろぼろに刃毀れして、血脂に塗れ、すでに刃物としての用をほとんどなさなくなっている。

どれくらい戦っていただろうか。何本の首にダメージを与えただろうか。片目を潰されても、いったん退いた首は、目から血を流しながら、すぐにまた襲い掛ってくる。

けれど、こうしてアルファードが転倒すると、首は、襲ってこないのだ。ざわざわと揺らめきながら身を引き、地べたに這いつくばって立ち上がろうともがくアルファードを、例の舐めるような眼差しで見物している。まるで、これは礼節を重んじる剣術の試合なのだとでも言うように、あるいは、猫が捕らえた獲物を繰り返し弄ぶ時にそうするように、ドラゴンは、アルファードが自力で立ち上がるまで、彼の動きを、じっと見守っているのだ。そうして何度でもアルファードを立たせては、その度に嬉々としてまた襲いかかり、彼が再びくずおれるまで、執拗にいたぶる。

もしかすると、ドラゴンは、そうやって、アルファードが心身ともに疲れ果てるのを待っているのかもしれない。

けれど、そう思ったからといって、アルファードに何ができるわけでもない。

彼にできるのは、ただ、何度でも起き上がって戦い続けることだけだ。

自分とドラゴンの血で全身をまだらに赤く染めたアルファードは、傷の痛みと極度の疲労、それにおそらくはドラゴンの毒のために、

意識が半ば朦朧とし始めていた。それでも、力をふりしぼって立ち上がり、剣を構える。地面に倒れ伏している時は、もう立ち上がれないとさえ思ったはずなのに、長年の訓練の賜物で、剣を持ち上げると自動的に身体がついてきて、構えが決まる。そうすると、重心が定まって、ふらついていた足が再び地面を踏みしめる。

そのアルファードを、ドラゴンの首の一本が、なおいたぶり楽しむように追い回し始める。

首が、アルファードの正面を捕らえた。だが、その首は、牙や毒液の攻撃を覚悟して身構えたアルファードをじっと見据えて、生々しく赤い口を開き、どこか官能的な響きさえ帯びた、滑らかな女の声で呼びかけた。

「アルファード……、苦しいかい？」

アルファードはふらつきそうになる足を必死に踏ん張って剣を構え、疲労のために半ば霞んだ目をキッと上げて、無言でドラゴンの目を睨み返した。

ドラゴンの、赤く燃える邪悪な目がふっと細められ、嗤うように口の端が上がった。

――いや、嗤うように、ではない。まぎれもなく、それは、嗤っているのだった。最初にドラゴンが見せた嗤うような表情は、後になってみれば、おそらく横に大きく裂けた口を薄く開いたのが俯き加減の角度のせいでたまたま嗤ったように見えたのだろうと思い直すこともできたが、今度の表情は、その蛇のような顔の構造でどうやって作ることができるのか想像もつかないほどに、明らかに人間臭い冷笑だったのだ。

だが、あるいはそれは、すでに意識の境界を越えかけていたアルファードの幻覚だったのかもしれない。

アルファードは、血が滲むほど、ぎっと唇を噛み締めた。

幻覚は消えなかった。ドラゴンが、嗤っている。

それは、人の心に潜む醜い欲望を悪意を持って誇張した悪趣味な戯画にも似て、誰もが嫌悪のあまり目を背けたくなるような、途方

もなく厭らしい表情だった。
　ドラゴンは、醜悪に嗤いながら告げた。
「アルファード。なぜ、戦う。私と和解しようではないか。今のお前は、私に勝てない。お前には、魔法の力がない。私はお前に、それを与えてやれる。私を受け入れれば、楽になれるのだ。今のその痛みも苦しみも、そしてお前の人生の苦悩も、すべて終るのだよ」
（嘘だ！）
　喉から出かかった言葉を押し止め、アルファードは無言でドラゴンの首に向かって跳躍し、片方の目を剣で貫いた。首は、人間の女の声で悲鳴を上げて、のたうちながら退いていった。アルファードは、常は静かなその瞳に憎悪の炎を燃やして、退いて行く首を追い、鱗の隙間に剣を刺し込もうしたが、横から別の首が伸ばされてアルファードの行く手を阻んだ。
　首はアルファードを見つめ、擦り寄るように近付きながら、低く笑った。
「アルファード。力をやろう」
　牙を剥き出した赤い口が囁いた。今度は、太く力強い、男の声だった。
　アルファードはドラゴンの言葉に耳を貸さず、首に打ちかかろうとしたが、首は嘲笑うかのようにくねくねと剣をかわして逃げ回り、そうしながらも、ある時は頭上から、ある時は横から、アルファードに話し掛け続けた。
「アルファード、お前は強い。だが、まだ私を倒せない。もっと強くなりたくないか。力が欲しくはないか。お前に、力をやろう。もっともっと、だれよりも強くしてやろう。肉体の力、魔法の力、何にも動じることなく傷つくこともない精神の力、すべて与えてやろう……」
　大きく開いてそう語り続ける口の中に、アルファードは無言で、伸ばした腕ごと剣を突き入れた。剣は、ドラゴンの舌先を切り裂いた。アルファードはすぐにひらりと飛びすさった。首は、上を向い

て苦悶の叫びを上げると、口の端から血を振り溢しながら、アルファードの頭上で旋回するようにやみくもに暴れ回り始めた。

けれど、同時に横から伸びてきた別の首が、何ごともなかったように、さっきまでと同じ声で話の続きを引きとっていた。

「力をやろう……。さっきの、あの娘――、あれを、永遠にお前に縛り付けておけるほどの……。お前は、あの娘が欲しいのだろう？　いつまでも、自分のものにしておきたいだろう？　力づくで縛り付けておかねば、あの娘は逃げていくぞ」

その首の後ろに、もう一本の首が伸びてきて、ざらざらと耳障りなかん高い女の声で、アルファードをあざ笑った。

「そうさ、何もかも、お前から逃げていくのさ。誰もお前を愛しはしない。きっとお前が弱いからだ。お前はくだらない、役立たずな男さ！　この世に生きている価値もない！」

毒薬のように注がれ続けるドラゴンの言葉に反応して、アルファードの中に、激しい憎悪が生まれようとしていた。

これまで悲鳴さえ押し殺してずっと無言で戦い続けてきたアルファードの口から、我知らず、野獣のような低く荒々しい唸りが漏れた。それでもなんとか否定の言葉を叫び返したい衝動だけは抑えて、そのかわり一層激しく剣を唸らせ、ドラゴンに切りかかった。

首は、冷静さを失いかけたアルファードの攻撃を避けて、退いては近付き、くねりまわりながら、ときおり静止して彼の目を覗き込み、語りかける。

「あの娘は、逃げていく。お前を裏切って、どこかへ去っていくだろう」

その間にアルファードの背後に回り込んでいた別の首が、猫のように嬉しげに喉を鳴らして、くつくつと悪戯っぽく笑いながら、ビロードのような女の声で甘やかに囁きかけた。

「その前に、お前があの娘、食っておしまいよ。逃がしてしまう前に……。可愛らしい娘じゃないか。実にうまそうだ。お前だって、本当は、ずっと食いたかったんじゃないのかい？　おお、あの娘の

肉は、さぞや柔らかかろう。舌の上でとろける、極上の美味……。きっと骨まで、砂糖菓子のようにぽりぽりと食べられるよ。温かなその血は、この上なくかぐわしく、天上の花の蜜のようにも甘かろうよ……」

そのおぞましい言葉とともに首の後ろにドラゴンの熱く腥い息を感じたアルファードは、怯えた獣のように振り向きざまに飛び上がり、背後の首に切りつけようとした。

が、その時には首はもう、薄笑いを浮かべて退いていて、そのかわり、先程の、かん高く耳障りな女の声を持つ首が背後に忍びより、すぐ耳元で、けたたましい笑いとともに、金切り声で叫んでいた。

「お前が食わぬのなら、私におくれ！」

では、ドラゴンの巣の回りに散乱していた骨は、やはり、人骨だったのだ――。

一方で、先程の男の声の首――といっても、もう、どの首がどの声で話しているのかも、定かではないのだが――は、まだアルファードの前で揺れていて、アルファードが振り向いたとたんに、毒を吐きかけてきた。

毒液はアルファードの右頬を掠めた。斜めに長く浅い傷が頬に走り、焼けただれた傷口から、じわりと血が滲み出す。

苦痛に顔を歪めるアルファードを眺めながら、薄笑いを浮かべて、ドラゴンの首は囁いた。

「そうだ、食ってしまえ。殺してしまえ。あの娘が、お前を捨てて、どこかへ去って行く前に。どうせ、あの娘は、お前など、本当には愛しはしない。今までも、これからも、お前のことなど、決して愛さない。それは、お前が劣った人間だからだ。愛される資格もない罪人だからだ。そう、自分でもひそかに気付いているだろう通り、お前は罪人なのだ。知らないふりをしても無駄だ。お前がいくら忘れたふりをしていても、私には、お前の額に印された、永遠に消えない罪の烙印が見える。お前は、汚れた罪人だ」

（嘘だ、嘘だ！　俺には何のことかわからない！）

そう叫び返す代わりに、アルファードは歯を食いしばり、喉の奥で激しく唸りながら、狂ったように剣を振り回した。その太刀筋に、いつもの明晰さは無い。自分の中のどこから沸いてくるのだろうと思うほどの底知れぬ暗い怒りに突き動かされて、アルファードは我を忘れかけた。これもきっとドラゴンの邪悪な術なのだと自分に言い聞かせる余裕も、もう無くなりかけていた。怒りと憎しみに支配された彼は、理性を失った手負いの獣のようなものになり果てようとしていた。

そんなアルファードを落ち着き払って眺めながら、ドラゴンは、甘やかな女の声で楽しげに囁いた。

「そうさ、どうせお前は罪人だ。だったら、ついでに、あの娘、殺しておしまいよ。簡単なことだ。あの娘は、あんなにか弱く脆い。そうだ、首を締めてごらん。あの細い首を、決してどこへも逃げられないようにしっかりと、お前のその手で捕まえてごらん。きっと悲鳴を上げるだろう。仔兎のように怯えるだろう。だが、あの娘も、あらかじめ罰せられて当然じゃないか？　どうせやがては、お前を裏切り、捨てていくのだから。あの娘の悲鳴は、きっと、甘美な音楽のようだろう。あの娘が恐怖に慄き震え、空気を求めて喘ぐ様は、さぞや楽しい見ものだろう。あの、小さくてやわらかい華奢な身体が、お前の腕の中で小鳥のようにもがき、引き攣り、やがて力を失ってぐったりと息絶えていくその感触は、さぞや心地よいことだろうよ。本当は、お前も、ずっと、その瞬間の至上の快楽を夢見てきたんだろう？　そう、お前は、それほどまでに罪深い人間なのだよ！」

別の首が、悪意を滴らせた耳障りな声で横合いから嘲笑する。

「それに、そうすることでしか、お前はあの娘を繋ぎ止められないよ。お前のような、役立たずな男には！」

アルファードは、眩暈のするような怒りに囚われて、血走った目をかっと見開いた。

自分の中で、自分の知らない葛藤が、嵐のように荒れ狂っている。

爆発的に膨れ上がってゆくどす黒い怒りが、奔流となって彼を弄ぶ。
憎かった。何もかもが、ただひたすら、わけもわからぬままに憎かった。
これまで自分でも気づくことさえなく心の奥底に秘め続けてきた古く暗い怒りと悲しみと憎悪のすべてが、ドラゴンの囁きという毒薬を注がれて一気に沸騰し、溢れ出たかのようだった。
空を仰いだアルファードの喉から、意味をなさない獣じみたおめきが迸った。
喚きながら、アルファードは、ドラゴンに向かって一気に跳んだ。冷静さを欠いた無謀な攻撃は易々とかわされ、彼はたたらを踏んだが、すぐに向き直って、間合いをはかることもなく、いきなり別の首に切りつけた。
もう、止まらなかった。身裡から際限なく沸き上がる暗い怒りと破壊への衝動だけが、彼を駆り立てていた。絶え間なく身を苛む無数の浅手の痛みが、いっそう彼を狂乱させ、煽り立てた。
それはもはや、攻撃ではなく、戦いではなく、暴力ですらなく、ただの恐慌であり、錯乱であり、追いつめられて怯えた獣の絶望的な抵抗だった。獰猛に唸りながら暴れまわる手負いの獣のようなその姿は、普段の彼からはおよそ想像もつかないものだったが、彼は、もう、そんな自分に戸惑う余裕すら失っていた。
見境いもなく剣を振り回し、力まかせにあたりの空気を薙ぎ払って荒れ狂いながら、いつしか彼は、これまで経験したことのない異様な昂ぶりに捕われていた。自分が何をしているのかも、もう、ほとんどわからなくなっていた。全身を駆けめぐる目も眩むような怒りと痛みは、今や、いっそ心地よくさえあった。このままこの理不尽な激情に呑まれて何もわからなくなってしまえばかえって楽かもしれないと、ぼんやりと思った。
普段なら絶対にしないだろう隙だらけの動作で意味もなく高々と剣を振り上げ、アルファードは、喉も裂けよとばかりに咆哮した。野獣のように吼えながら、傷の痛みと血の臭いに酩酊を覚えた。

痛みと昂ぶりで血の色に霞んだ脳裏に、奇妙な幻が浮かんだ。

薄暗い岩窟の中で天を仰いで咆哮する己の肌におぞましく醜悪な鱗が生え、たちまちのうちに全身をびっしりと覆いつくしてゆく。同時に身体は膨れ上がって、巨大な異形のものへと変形してゆく。手足には醜く凶々しい危険な鉤爪が生え、鱗に覆われた背中がみしりと割れて、血に濡れた亀裂から、折りたたまれた皮翼が現れる。やがてばさりと打ち振られ、粘つく血糊を絡みつかせて高々と広げられる奇怪な皮翼の色は、汚れて黒ずんだ、鈍い銀。

その、血塗られた欲望の穢れた翼が、自分を、どこかへ連れていこうとする。どこか、見知らぬ、昏い世界へ。錆びた刃物に似た血の臭いと腐肉のような硫黄の臭気がわだかまり、生ぬるい肉があたりを満たして誘うように蠢く、底知れぬ緋色の奈落へと――。

絡みつく肉の中に溺れていきながら、ふと、口の中に、熱い生血の味を感じる。血は、もはや苦い涙と鉄錆びの味ではなく、とろりとした古い美酒のように甘いのだ。

鋭い牙が柔らかい生肉に食い込む、その感触の、気の遠くなるような素晴らしさ。鉤爪が肉を引き裂く時の、荒々しく心揺さぶる、その昂揚。温かい血が、口腔を満たし、喉を流れ落ちてゆく。血の味と肉の感触は、強い酒のように彼を酔わせる。鉤爪で押え込んだ得体の知れぬ肉塊を噛み裂き、引き千切り、溢れ出るその生命を陶然と飲み下だしながら、彼は思う。そうか、殺すことは、こんなにも心地よいことだったのか。死とは、こんなにも、甘い、甘い味がするものなのか！

鋭い愉悦が全身に広がり、彼は、忌まわしい鱗に覆われた銀の巨体をわななかせる。

ああ、俺はこのままドラゴンになってしまうのだろうか――。

それもいいかもしれない、と、心のどこかで思った。そうすれば、自分という存在は、この世からいなくなる。自分の精神は、怒りと狂気にすっかり塗り潰されて、いつのまにか消え失せ、もう、苦しむこともない――。

一方で、あまりに激しく錯乱し酩酊する心についてゆけずに遊離した理性が、そんな自分をよそ事のように外から見ている。

――きっと、ドラゴンの毒のせいだ。傷口から身裡に入り込んだドラゴンの毒が、血潮に乗って身体中を駆けめぐり、精神を侵しているのだ。心臓に入り込んで心を狂わせ、悪い夢を見せ、ジレンの麻薬のように魂を腐らせているのだ――。

いけない、と叫ぶ声なき声は、荒れ狂う心に届く前に、嵐の中のかすかな谺のように虚しく掻き消えた。

第四章＜荒野の幻影＞第三場（４）（前書き）

！ご注意！

この回には、流血描写、及び精神的に痛い内容が含まれています。

年齢制限が必要とは思いませんが、特に苦手な方はご注意ください

ｍ（＿＿）ｍ

（飛ばして読んでもストーリーはだいたい分かると思います）

第四章＜荒野の幻影＞第三場（4）

ドラゴンが、わざとらしく哀れむように首を振って告げた。

「アルファード、哀れな捨て犬よ、迷子の子羊よ……。教えてやろう。お前も薄々気付いていただろう通り、この世のすべてのものは、お前を裏切るのだよ。お前から、去って行くのだよ。その証拠に、あの娘でさえ、すでに去って行ったではないか。いや、否定しても無駄だ。現に、あの娘は、お前がこんなに傷つき苦しんでいる今、ここにいない。だいたい、本当は、もう、とっくの昔から、あの娘の心は、ずっとお前を裏切っていたのだ。あの娘は、あの従順そうな無垢そのものの顔つきの下で無能なお前を密かに蔑み、嘲笑いながら、強く美しい魔王に心を奪われていたのだ。お前も、そのことに、本当は気付いていたのだろう？　ただ、それを認めたくなくて、気付かないふりをしてきたのだろう？」

ドラゴンの毒々しい長広舌を聞きながら、アルファードの動きが、しだいに鈍くなってきた。徒（いたずら）に暴れ回って無駄な体力を消耗し、極限を越えた疲労に朦朧となった彼は、いつしか、剣を無防備にだらりと下げ、肩で息をしながら、ふらふらと立ち尽くしていた。

もう、攻撃する力は残っていなかった。涜らわしい言葉を聞かぬよう耳を塞ぐために腕を持ち上げる力すらなく、荒い息の下から切れ切れに低い唸りを漏らすことだけがドラゴンの不当な言葉に対して今の彼に出来る精一杯の抵抗だった。憔悴した顔の中で、ただ、影に沈んだ双眸だけがぎらぎらと燃え上がって、憎悪の炎を一時も絶やさずにドラゴンを睨みつけていた。

ドラゴンは、そんな視線をむしろ愉しむように、薄笑いを浮かべて得々と話し続けた。

「アルファード、下等な偽善者よ。お前は、覚えていないか？　私は、お前に、何度も忠告したのだよ。お前の夢の中に、ひそかに忠告を吹き込んでやったのだよ。早くあの娘を食ってしまえ、殺して

しまえ、あの白い喉笛を噛み切ってしまえと。
それなのに、お前は臆病すぎて、私の忠告に耳を傾ける勇気さえ持てずに現実から目をそらし、自分を謀り続けてきた。その、偽善と欺瞞と臆病の、結果が、これだ。
弱さは罪だ。臆病は罪だ。だからお前は、その罪に対して、罰を受けた。あの娘を失うという罰を受けた。お前がさっさと食ってしまっておかなかったから、あの娘は、今、とうとう、こんなにも苦しんでいるお前を見捨てて、魔王のところへ行ってしまったのだ。
今ごろは、もう、魔王の腕に抱かれて、お前を忘れておろうよ。お前がずっとひそかに怖れていた通り、あの娘は、やはりお前を裏切ったのだ。無様で薄汚い役立たずのお前などより、美しく力ある魔王を選んだのだ。
が、あの娘を責めるわけにはいくまい。お前はそんなにも愚かで弱く劣っているのだから、見限られて当然だ。誰だって同じようにするだろう。お前を、見捨てるだろう」
ドラゴンは、ここでにんまりと目を細めてアルファードの顔を覗きこみながら、満を持した最後の手札とばかりに、ひときわ毒々しく告げた。
「そう、かつて、お前の母親が、お前を棄てて見知らぬ男のもとに去ったように……」
この、思いもよらない言葉に、アルファードの中で、ついに最後の自制が崩れた。
「……何っ！？」
気がつくとアルファードは、ついにドラゴンに向かって言葉を発していた。その瞬間、あらゆる記憶が映像となって、津波のようにアルファードに襲い掛った。

＊

里菜は、果てしない無の深淵を、陶然と見つめていた。

闇は輝く程に深く、すべての光を内包していた。　里菜は、吸い寄せられるように扉の向こうに足を踏み出した。

気がつくと里菜は、床も天上も壁もない一面の空間に浮かんでいた。見えない虚無の黒い指が里菜を絡め取り、目の眩むような光と闇の渦と、ごうごうと耳を聾(ろう)せんばかりの静けさが里菜を押し包む。

海の上に仰向けに浮かぶ時のように、か細い四肢を無防備に宙に投げ出し、全身を闇に預けて、里菜は、時のない闇の海をゆるやかに漂っていた。右も左も、上も下もわからなかった。不思議な浮遊の中で永遠の虚無にその身を委ね、いつしか里菜は、自分が誰なのかも忘れかけていた。

どこからか、聞き覚えのある声が、魂の奥深くに直接語りかけてきた。

『エレオドリーナよ。どうだ、この眺めは。美しかろう。そなたへの、贈り物だ。……完全とは、全き無。すべてが在って欠けているところがないことではなく、何もないから欠けることがありえないということなのだ。ここには、何もないからこそ、無限があり、完全がある。ここに永遠の美がある……』

里菜は薄く目を開けて、あらゆる光を孕んだ完全なる闇を見渡し、うっとりと微笑んだ。穏やかに満ち足りた、幸せな気持ちだった。

その時、闇の向こうに、細い三日月がふいに現われた。どこかから昇ってきたのではなく、何もなかった虚無の空間に、ふっと現われたのだ。

とたんに、それまで『無』であり『闇』であった空間が、『夜』になり、夜空には幾千の星々が降るように瞬き始め、同時に、時が流れ始めた。

里菜はもう宙を漂ってはいず、いつのまにか石の床に足をつけて呆然と立っていた。

気がつくと、空低くかかる三日月と思ったものは、白く輝く細

いやいば――見覚えのある大鎌の刃だった。
大鎌は、丈高い黒衣の人影の背に負われていた。
それを見たとたん、里菜は、それが誰で自分が誰か、何のためにここに来たのかを思い出した。
周囲はもう、虚無の空間でも輝く夜空でもなくなって、四方を石壁に囲まれた、ほの暗く冷たくがらんとした部屋の中になっていた。
『エレオドリーナ。よく来た。待っていたぞ……』
魔王が囁いた。
里菜は、ずっと抜き身で握りしめていた短剣を無言で握り直した。
さっきまで、それを持っていることも忘れていた短剣は、気がつくと、狂ったように、激しくせわしない明滅を繰り返していた。
里菜は、まなじりをきっと上げて、まっすぐに魔王を見据えた。
掌に汗が滲む。心臓が壊れそうに震えながら脈打つ。本当はこのまま背を向けて、逃げ帰りたい。
けれどその時、里菜の脳裏に、ローイの、フェルドリーンの顔が、そして刻印を受けたり傷を負ったりした多くの子供たちのことがよみがえった。そのとたん、里菜の胸に、魔王に対する憎しみが閃光のように広がり、満ちあふれ、ただ一言の叫びとなって、喉を奔った。
「……魔王！」
ぎこちなく短剣を構え、里菜は、何の勝算もなく、ただ真っ直に、魔王に向かって駆け出した。
まるで、その、黒衣の胸に飛び込もうとするかのように。

＊

アルファードは、目の前のドラゴンの存在を忘れ、記憶の奔流に呑み込まれて翻弄されていた。顔を歪めて両手で頭を抱え込み、仁王立ちで身を反らせてはまた折り曲げ、激しく頭を振ってもがき苦

しむアルファードを、ドラゴンの九本の首がゆらゆらと伸びてきて取り囲む。片目を潰された首、舌を裂かれて口から血を流している首、鱗の継ぎ目から血を流している首――。先ほどまでは痛みに悶えていた首も、今はまるで、既に死んで痛みも感じなくなった血塗れの戦士の亡霊たちででもあるかのように、もはや苦しむそぶりも見せずに、ただアルファードを取り囲み、揺れている。

その、ゆらめく檻の真ん中で、アルファードは、ふいに、頭を抱えたまま喉をのけ反らせて天をふり仰ぐと、うつろな目を見開いて、絞り出すように絶叫した。

「……母さん！」

次の瞬間、アルファードは糸が切れた操り人形のようにすとんとくずおれて地面に膝をつき、そのまま、その場に、頭を抱え身体を丸めてうずくまった。

その頭上で、ドラゴンの九本の首が、なぶるように嘲るように、ざわざわと笑いさざめきながら、満足げにアルファードを見降ろしていた。

＊

長い時を経てやっと再び巡り合えた恋人の腕に飛び込もうとするかのように魔王の許へと駆け寄りながら、その短い間に、里菜は、魔王の周囲に、ふっと満足げな笑いの気配が漂うのを感じた。その笑みに不吉なものを感じて、里菜は一瞬、かすかに躊躇したが、もう、止まることはできなかった。魔王は逃げる様子も避ける様子もなく、すでに里菜の目の前に立ちはだかっていた。

里菜は短剣を振り上げ、思わず堅く目を閉じて、全身で魔王にぶつかっていった。

その、短剣を握ったか細い手首が、空中で捕らえられ、軽く捻り上げられた。短剣はあっけなく里菜の手を離れ、からん、と儚い音

を立てて床に落ちた。
　魔王は、里菜の手首を片手でぐいと引きながら、もう一方の腕を華奢な腰に回し、まるでこれは舞踏会で今からダンスを始めるのだとでもいわんばかりの優雅な仕草で、里菜をやすやすと間近に引き寄せた。
　里菜は、声も出せずに抱き寄せられながら、恐怖に目を見開いて魔王を見上げた。深く引き下ろした黒いフードの下の闇と、背後の大鎌の冷たい輝きが、瞳に映った。
　その輝きに魅入られた里菜は、一切の抵抗の力を失って、人形のようにぐったりと魔王の腕に抱かれていた。
　大きな黒いマントが、里菜の小さな身体をふわりと包み込む。
　魔王が、満足げな笑みを含んで、勝ち誇ったように囁いた。
『エレオドリーナ、私の花嫁よ。ついに、そなたを手に入れた……』

第四章＜荒野の幻影＞第四場

魔王は、輪郭のあいまいな影のような手を里菜の手首から離して、両腕で里菜の細い腰を抱き寄せ、くつくつと笑いながら屈み込むように里菜の顔を覗き込んだ。

里菜は、茫然と魔王を見上げた。間近に見上げるフードの下に、さっき見た虚無の深淵が、ごうごうと渦巻いている。その肩の向こうに、ふたたび、細い三日月と、星をちりばめた宇宙が生れる。さっき魔王に切りつけていった時には戻ってきていたはずの重力も、今はまた消え失せて、里菜は、魔王の腕に抱かれながら、昏く眩い宇宙を漂っているような気がした。手足の力が抜け、頭の中も、靄がかかったように霞んでいく。

両腕が自由になっても、里菜はもう、何の抵抗もできなかった。その目は、虚無を映してガラス玉のようにうつろに見開かれ、身動きはおろか、まばたきすらできない。里菜は表情を失ったまま、嵐のように身内に沸きおこる激しい陶酔に翻弄されていた。

『エレオドリーナ。この短剣は、気にいってくれていたようだな。肌身離さずここまで持ってきてくれたとは、嬉しいことだ。……これは昔、私がそなたに贈ったものなのだ』

闇の眩さに陶然となって何もかも忘れかけていた里菜は、魔王の囁きに、はっとして自分を取り戻した。

意識を闇に引き止めようとする陶酔を振り切って、里菜は叫んだ。

『嘘！』

口は開かなかったが、魔王が語りかける時のように、里菜の叫びは、魔王に直接届いていたのだ。

『嘘よ。これはティーティに――村の、女神の司祭に貰ったのよ。女神の祠の御神体よ。それがなぜ、あなたからの贈物なの？』

『嘘ではない。これは、かつて私が、私の版図で産するシルドライトと黄金を、私の眷属であった妖精たちに細工させて、そなたに贈

った品なのだ。遠い昔、私たちがまだ仲違いしておらなかったころにな……。その後、そなたはそれを人間の手に託した。きっとそなたは、私からの贈物など、身につけていたくなくなったのだろうよ。これがもともと私に属するものである証拠は、そのシルドライトの明滅だ。それは私や魔物を警戒して明滅するわけではなく、同じ力と呼びあい、再会を喜んで輝くのだよ。……美しい品だろう。これほど美しいものは、人間の手では産み出せないのだ。これは後でまた、あらためてそなたに献上するとしよう。婚礼の贈り物のひとつとしてな。エレオドリーナよ、そなたの望み通り、人間のしきたりに従って婚礼の儀式を執り行うべく、正式の祭壇をしつらえておいたぞ。そなたが祭られるべき祭壇の前で、そなたが婚礼を挙げるというのも、おかしなものだが、なかなか面白い……』

そう言って笑いながら、魔王は、里菜の背後に回って肩を抱き、黒衣の腕を上げて正面を指し示した。

すると、そこはもう宇宙ではなく、石壁に囲まれた部屋に戻っていて、里菜は、部屋の奥にしつらえられた祭壇を見ていた。さっき魔王に切りつけにいった時には気づかなかったが、たしかにそこには、暗がりにぼんやりと蛍光を放って、花にうずもれた水晶の祭壇があったのだ。祭壇を一面に覆う白と青の清楚な花々は、清らかな露を抱いて、今にもそよ風に揺れそうに、匂やかに、瑞々しく見えたが、よく見ると、それらは、どこもかしこも、サファイアやムーンストーンやエメラルド、ダイヤモンドやシルドライトで作られているのだった。

魔王は里菜の後ろから屈み込むようにして肩を抱き、声なき声で囁いた。

『美しかろう。私たちの婚礼の祭壇だ。エレオドリーナ、愛しきものよ。共同統治者にして恋人、花嫁にして妹なるものよ……』

『……い……もうと……？』

『そうだ、我等は世界の始まりの時に、同じ父母から共に生れ出た、双子の兄妹だ』

『嘘……。あなたとあたしが兄妹だなんて……そんなこと、知らない！』

『嘘ではない。そして、そなたもそれを、本当は知っていたはずだ。そなたはただ、忘れておったのだろうよ』

『じゃあ、じゃあ、もしそれが本当だとしたら、そうしてあなたがそれを知っていたんなら、どうしてそんな、あたしと結婚しようなんて言うの？　妹なのに……』

『妹なのに、ではない。妹だから、なのだ……。そなたが妹だからこそ、私はそなたが欲しいのだよ。妹よ、懐かしい妹よ、そなたも本当は知っておろう。我等の母は――母なる混沌は、我等を産み出したことで死んだ。妹よ、我等が結び付くことでのみ、いま一度、母なる混沌を、この世界に呼び戻すことができる。失われた我等の母を、ふたりで、この世界に産み出し直そうではないか。そなたには、それができる』

『そ、そんなバカな……。自分のお母さんを自分で産めるわけないじゃない！』

魔王は笑った。

『妹よ、そなたはすっかり人間になってしまったな……。人間の理屈を捨てよ。そなたが私を受け入れれば、我等はもう一度、母なる混沌の中で、母の胎内で、すべての苦しみを忘れて、永遠に溶けあい、安らぐことができるのだ。そなたは星ひとつ混沌に返すことにひどく抵抗を感じているようだが、そうすることで私たちは、永遠と完全を手にいれることができるのだぞ』

『でも、それじゃ、再生なんかじゃなくて、ただの、永遠の滅亡じゃない。この前、あなた、混沌の中から新しい世界が蘇るって……。あれも、嘘だったのね？　嘘つき……』

そう詰りながらも、里菜は自分が、魔王の語る混沌の中の永遠に、強く惹かれていくのを感じていた。

『嘘などついておらん。混沌は時を持たない。時のない場所では、いくつもの真実が並行して存在する。そうでなくても、世界には、

いくつもの相があるものだ。例えば、この城だ……』

そう言いながら、魔王の影のような手が後ろから伸びて、里菜の両目を覆い隠した。

『見せてやろう。この城の別の姿を……』

魔王の言葉とともに、里菜の閉ざされた眼に様々な光景が次々と映し出されはじめた。映像は、どうやら、里菜がここまで通ってきた道筋を、逆に辿っているらしい。

が、それは、さっき里菜が見たものとは全く違う光景だった。城は、もう、どこも古びてはいなかった。廊下や階段は荘厳な薄明かりに満ち、重々しい壁の装飾布は真新しくきらびやかで、彫刻は生きているように鮮やかだった。まさに王の住いにふさわしい、絢爛豪華な王城が、そこにあった。

映像はゆっくりと移り変わり、やがて廊下がとぎれ、不思議な薄明りに満たされた神秘的な庭園が映し出された。

それは、無数の宝石の花が淡い光を湛えて一面に咲き乱れる、広大な地下庭園だった。

サファイアの花びらとシルドライトの葉を持つ青い薔薇の茂みの上を、色とりどりの貴石で飾った透き通る翅を持つ蝶たちが、銀色の光の粉を撒き散らしながら舞っている。その花園の真ん中には、水晶を溶かしたような涼やかな小川が、ちらちらと蛍火を宿しながら流れている。

庭園の周囲は壁に囲まれているらしいが、花園を取り巻く木立に隠されて、定かには見えない。その木々は、瑪瑙や蛍石で出来ているらしい優美な幹や枝に、透かし彫りのように繊細な金や銀の葉を茂らせていて、その枝から枝へと、光沢のある薄い金属の羽毛を持つ小鳥たちが、軽やかに飛び移っている。

ドームのような天井は高く霞んで、真珠色にぼうっと照り輝いていた。庭園を満たす、月光にも似たやわらかな薄明かりは、地に敷き詰められた花々と、この天井との、両方から来るらしい。

ときおり、木立の間に、透き通るように淡く輝く絹の服の裾や、

蜘蛛の巣のように繊細なレースのリボンの端が翻るのが、ちらりと見えたような気もするし、少女たちの清らかな歌声や無邪気に笑いさざめく楽しげな声が、切れ切れに聞こえたような気もする。

その美しい光景を、里菜はうっとりと見つめていた。

『そなたの庭園と侍女たちだ』と、魔王が囁いた。

『美しいだろう。そなたのために私が用意したのだよ。婚礼が済めば、この庭園のすべてがそなたのものになる。だが、今はこの庭園の、もうひとつの姿を見せてやろう』

そのとたん、映像が変わった。そこはもはや、美しい人工庭園ではなく、ついさっき後にしてきた、ドラゴンの洞窟だった。

さっき里菜を追いかけた赤ん坊ドラゴンたちが、バサバサと旋回しつつ洞窟の中を飛び回っている。その旋回の中心に、巨大な雌ドラゴンがうずくまっている。血塗れの九本の首が、それぞれうねうねとくねりながら、地面の上の何かを取り囲み、時々鼻先を近付けたり、また離れたりしている様子だった。

里菜はアルファードの姿を探したが、見えなかった。もう、戦いは終ったのだろうか。ドラゴンが生きているということは、まさか、アルファードは負けたのだろうか。それとも、なんとかうまく逃げ出したのだろうか。

不安にかられた里菜に、魔王が話しかけた。

『あれは、世界でただ一頭の雌ドラゴン――ドラゴンたちの女王だ。私の作品だよ』

『それじゃあ、やっぱり、あなたがドラゴンを飼って、操っていたのね！』

『操ってなどはいない。ドラゴンたちは、ただ、己の性質に従って行動しているだけだ。彼女らを創り出したのは私だが、彼女らはもはや、私の思惑を越えてしまっている。……ドラゴンは、エレオドリーナよ、この世界でただ一種、生命の女王たるそなたの手の触れていない生き物だ。そなたの力を借りずに生き物を創り出すのはなかなかに難しい事で、私は随分と試行錯誤を繰り返したものだが、

私は、ぜひとも、この世で一番大きく強く美しい、完成された生き物を創ってみたかったのだ。無論、そなたも知っての通り、私一人の力では、まったくの無から生命を創り出すことは出来ぬ。私に出来たのは、そなたと共に創り出した何種類かの生き物を混ぜ合わせたり変化させたりして、別の形にすることだけだ。だから、彼らの性質のほとんどは、もともと、そなたの手の中から生まれ出た生命の中にあったものだ。だが、私はそれに、いくつかの、もっと優れた性質を付け加えることに成功した。その中でも特に、他の生物に類を見ない優れた性質、それは、永遠の寿命だ』

『嘘。生き物に永遠の寿命を与えるなんてことは、あたしにもあなたにも出来ないはずよ』

それは、里菜の中の埋もれた記憶から浮び上がってきた知識――絶対的な約束だった。

『そう、確かに、出来なかった。だから私は、最初から永遠の寿命を与えようとしたのではなく、彼らの心臓に、それを食ったものを不死にする性質を与えてみた。そしてそれを食わせたのだ』

『……心臓を？』

『最初に創ったドラゴンは、雄雌の一つがいだった。雌ドラゴンは、一度の交尾で、一生、卵を生み続けることが出来る。交尾が済んだ後、私は雌ドラゴンに教えてやったのだ。役目を終えた雄を殺して、その心臓を食えば、お前は不死になれると。雌ドラゴンは、最初から雄ドラゴンより幾分大きく、知能も高かったから、私の言葉を理解し、その通りにした』

『ひどい……』

『ひどくなどなかろう。そなたと共に作り出した虫たちの多くも、同じように、次の世代を育むために共食いをする。そなたのひいきの人間たちなどは、食うためにでもないのにしょっちゅう互いに殺しあっているではないか。

とにかくそれで、雌ドラゴンは永遠の生命を得た――はずだった。が、実際は、そううまくはいかなかった。雌ドラゴンは、雄ドラゴ

ンの心臓を食ったことで、永遠の寿命だけではなく、私が意図した以上の知性と魔力とを獲得してしまったのだ。それによって、ドラゴンは、私の思惑を越えた独自の生態を持つようになった。

ドラゴンの営巣にふさわしい土地は少ない。不死を得ると、雌ドラゴンは、成長して自分の巣を奪おうとするかも知れない雌ドラゴンは産まず、雄のドラゴンだけを産むことに決めた。ドラゴンの母親は、雄雌どちらでも好きなように産めるのだ。自分が不死であれば、雌は一匹で充分だ。こうして彼女は、女王になった。

ところが、彼女が最初に産んだ雄ドラゴンたちは、世界でただ一頭の雌である彼女を取りあって兄弟で争い、結局、全滅してしまった。息子たちの死を悲しんだ彼女は、次からは、生殖能力のない雄だけを産むようになった。彼女は不死で、一生独りで卵を産み続けられるのだから、ドラゴンの種族には、もう、交尾の必要はなかったのだ。

生殖能力のない雄は、今までそなたらが見てきたように小さく身軽で、ここから世界のあちこちに飛び散っていった。

そこまでは、まあ、よかった。だが、私の誤算は、主に、雌ドラゴンの知能が高くなりすぎたことだ。そのために、彼女はやがて悲しみを覚え、孤独を知り、永遠の生命を持ちながら、生きることに倦んでしまったのだ。どうやら、永遠の生などというのは、知性のある生き物には耐え難いものなのだな。

やがて彼女は、長い長い一生の後に、ついに自らの命を断つことに決め、その最後の産卵で、一頭の雌と、数頭の生殖能力を持つ雄の卵を産んで、死んでいった。新しい女王は、すでに本能となった知識に従って、戦いに勝ち残って夫となった雄の心臓を食い、今度は最初から生殖能力のない雄だけを産むようになった。こうして同じことが繰り返され、永遠に生きる生命を創り出すという私の望みは破れた。

だが、それはもう、かまわない。ドラゴンはやはり私の最高傑作、この世界で最も完成された生き物だ。見よ、あの力強く美しい、機

能的な姿、人間を越えた魔力と知性を宿した瞳……。実に魅力的な生き物だろう』

『でも、あたし、あんなのちっとも綺麗だと思わない。あれは、そう――なんだか、変よ。不自然な、邪悪な生き物よ。魔王、あなたは許されないことをしている』

『それは、まあ、価値観の相違というものだろうな』と、魔王は笑った。

『私は彼女を美しいと思うし、長年、いい友人として共生してきた。持て余すほどの長い時を生きるもの同士、つれづれを慰めあい、互いに利益をもたらしあってきたものだ。そら、今も彼女はこうして、私に気晴らしを提供してくれているのだよ』

魔王がこう言った時、ちょうど、手前で揺れていた何本かの首が同時に退いて左右に分かれ、首の取り巻いていた地面の上のものが、はっきりと見えた。それは、逞しい身体を胎児のように丸めて地面にうずくまるアルファードの、痛々しい傷だらけの姿だった。

『どうだ、エレオドリーナ。お前の羊飼いだ』

魔王が楽しげに囁いた。

アルファードの服は、あちこちが裂け、破けて、血染めのぼろ布のようになっていた。服を染める血潮の不吉な赤さと、服が破れてほとんど剥き出しになった素肌のあちこちに見える無残な傷に、里菜はぞっとして、聞こえるはずもないのに、狂おしく、声にならない叫びを上げた。

『アルファード！　アルファード！』

第四章＜荒野の幻影＞第五場（1）（前書き）

！ご注意！
この回には、精神的に痛い内容が含まれています。
年齢制限が必要とは思いませんが、特に苦手な方はご注意ください
m（＿＿）m

第四章＜荒野の幻影＞第五場（1）

紺色の半ズボンをはいた少年が、家の二階に続く薄暗い階段を昇っていく。階段には木の手摺りがついていて、壁には、雪を頂く山並みを描いた風景画の額がかかっている。

少年の着ている服には、見覚えがある。

（ああ、あれは俺だ……）と、どこかでその光景を遠く眺めて、アルファードは考える。それは、彼の通っていた私立の小学校の制服だったのだ。

少年が昇っていく階段も、その手摺も、壁の絵画も、彼は、よく知っている。そして、あの時、北向きの踊り場の明かり採りの小窓からぼんやりと差し込んでいた、初冬の曇り日の淡い光の寂しい色も、彼は、はっきりと覚えている。

これはきっと、彼が十才だったころの、ある日――彼の子供時代の最後の日の光景だ。

その日、彼は、熱を出して学校を早退したのだ。

彼は神経質な子供だった。特に病気というわけでもないのに、よく微熱や軽い腹痛を訴えて保健室に行った。それでも、学校を早引けすることはなかった。母親を心配させたくなかったのだ。保健室の世話になった日も、いつもの時間に家に帰り、体調を崩したことを母に伝えず、実際、過ぎてしまえばたいした不調でもなかったので、何食わぬ顔で夕方を過ごすのが常だった。

母は、美しい女性だった。授業参観の時など、厚化粧をした同級生の母親が、みな、ただの『おばさん』に見える中で、彼の母は、実際は特別に若いわけではないのに際立って若々しく、派手に装っているわけではないのに女優のように華やかで、上品に見え、母の立っているところだけ、まるで周囲と空気が違っているように見えた。

彼はそんな母を、ひそかに自慢に思っていた。そんな母に、何ひ

とつ心配をかけたくなかった。いつでも母の自慢の息子でいたかった。だから彼は、保健室の件を母に知られて、ひ弱な子供だと、がっかりされたくなかったのだ。

成績も良く、スポーツも得意で、級友たちからの信頼も厚い彼は、教師たちから非常にしっかりした危なげのない優等生と見なされていたから、たまに保健室の世話になるくらいのことはさほど気にかけられもせず、そのおかげで、彼は、望みどおり、保健室の件を母に知られずに済んでいた。

けれど、この日は、本当に風邪をひいてしまったらしく、彼は、保健医の指示で、しかたなく、昼過ぎに早退した。担任が家に電話したとき、母はいなかったが、彼は家の鍵を持っていた。母は専業主婦だったが、習い事や友達付き合いなどで何かと外出の多い人で、彼が学校から帰るころには家に戻るように努めてはいても、たまに帰りが遅れることもあった。だから、彼は、念のために鍵を持たされていたのだ。この日も、母は、午前中は出掛けるが彼が帰る時間には家にいると約束していた。彼はそのことを担任に話し、一人で帰る許可を得た。

家に帰り着いたのは、午後もまだ早い時間だった。母はまだ帰っていないらしく、玄関には鍵が掛かっていた。みんながまだ勉強をしているこんな時間に学校から帰ってきたことで何とはなしに後ろめたい気分だった彼は、黙って静かに鍵を開け、母のいない薄暗く冷たいリビングやダイニングを覗きながらひっそりと廊下を通り抜けて、二階にある自分の個室に向かった。

途中、踊り場で立ち止まって、壁の風景画を眺めたことを覚えている。

それはたしか、父が昔、どこか外国の土産に買ってきたもので、立派な額に入ってはいるが一見して薄っぺらで安っぽい、ただ奇麗なだけのどうでもいいような観光客向けの絵だった。

そんなふうに、その絵が決して芸術として深みのあるものでないのを子供心にも感じ取りながら、それでも彼は、その絵が好きだっ

た。

絵が好きだったというより、そこに描かれている景色が好きだったのだ。

それは、雪を頂く山脈を遠景に緑の高原で羊たちが草を食んでいるという構図で、手垢のついた陳腐な牧歌趣味と言ってしまえばそれまでだったのだろうが、それにもかかわらず、その光景をじっと見ていると、彼は、自分が羊たちと一緒にそこにいるような、遠い昔にそれとよく似た場所を知っていたような、そんな気がしてきて、安らかなような懐かしいような、不思議な気持ちになるのだった。

だから彼は、しばしば――特に、嫌なことがあった時や悲しい時など――、階段の途中で立ち止まって長いことその絵を眺め、自分がその中に住んでいるという空想にふけったりもしたし、そうでないときも、階段を上る時は、途中で絵の中の羊たちに挨拶がわりにちらりと目をやっていくのが半ば習慣になっていた。

そして、その日も、そうやってしばらく絵を眺めてから、彼は二階に上がったのだ。

彼の部屋は、二階のつき当たりだ。部屋に行く途中、母の寝室の前を通る。彼の父は開業医で、深夜や早朝に急に呼出しが入ることも多かったので、母は、父とは別の寝室を持っていた。

その、母の寝室の前を通り掛った時、彼はドアの向こうで母の声を聞いたような気がして、首をかしげて立ち止まった。

「お母さん、いるの？」

おずおずと声をかけて、ノックとともにドアを開けた彼が見たのは、眩しく白い、母の裸身だった。

母は、美しかった。

最初に彼を襲った感情は、激しい罪悪感だった。

彼はその時、直感的に、自分が絶対に見てはならぬものを見てしまったと悟ったのだ。

母の寝室にいたのは、母だけではなかった。母の白い裸身は、ベッドの上で、やはり裸の、見知らぬ男に組み敷かれていた。最初に

母だけが見えたのは、男の浅黒い肌が、カーテンを閉め切った部屋の、淫靡に淀んだ薄暗がりに溶け込んでいたからだ。その分よけいに、母の裸身は、部屋に漂う仄かな明かりを一身に集めて、まるで内側から発光しているかのように白く浮き上がって見えていた。

一瞬、彼は、男が母を殺そうとしているのかと思った。窓から忍び込んだ暴漢が、母の首を絞めてでもいるのかと。

が、奇妙な形に絡み合うふたりの姿態は、もっと残酷な事実を彼に告げた。彼はまだ子供だったが、その光景の意味するところがわからないほど無知ではなかった。

母は、悲鳴を上げながら男を押しのけて飛び起き、毛布で我が身を隠そうとした。見知らぬ男は、あわてる気配もなく身体を起こし、唇を微かに歪めて、冷え冷えと沈んだ目でじっとこちらを見すえた。

少年はドアの前に立ち尽くし、ただ、声も出せずに、口をぱくぱくさせた。

裸身にガウンをはおってベッドから降りてきた母が、足早に歩み寄ってきて、いきなり、彼の頬を打った。

彼は、訳もわからず、

「ごめんなさい、ごめんなさい！」と叫びながら、よろめいて、一歩、後退った。

後でよく考えてみれば、彼は何ひとつ悪いことはしていないのだが、ただ、その時、彼は、母の裸身を見た時に理由もわからずとっさに覚えた罪悪感と、これまで見たこともない母のすさまじい形相に、自分は何かとりかえしのつかない罪を犯したのだと感じたのだ。

これまで、どんなにきつく彼を叱る時にもあくまで上品だった母が、狂ったように腕を振りまわしながら、憎しみの目で彼を見て、金切り声で叫んだ。

「イヤな子！　お前はいつもいつも、わたしの邪魔ばかりする！　どうしてそんなにイヤな子なの！」

狂乱する母の後ろで、男が、平然と下着を身につけて立ち上がった。

彼は、どうしてよいかわからずに、くるりと向きを変えて自分の部屋に向かって逃げようとした。

その肩を、後ろから大股で歩み寄った男が掴み、彼を乱暴に振り向かせた。

半裸のその男は、背が高く、逞しく、少年の彼には、巨人のように大きく恐ろしく見えた。

「ぼうず。今見たことを誰にも話すな。父親に話しでもしたら、殺すぞ」

男は低く言いながら、すくみ上った少年を脅すように、その首を両手で絞めあげた。

「あ……あ……」と、恐怖と苦痛にかすれた声を上げながら、少年は、助けを求めて母親のほうに視線をさまよわせた。たぶん、実際はそれほど強く絞められたわけではなかったのだろうが、恐怖が喉を塞いで息が詰まり、自分は本当に殺されるのではないかと思ったのだ。

が、母親は、ほとんどその光景が目にも入っていない様子で、ただ、乱れた髪が顔にかかるのを払いもせずにヒステリックに喚き続けていた。

「お前はいつだって、わたしを縛りつける。束縛しようとする！お前さえいなければ、わたしはもっと自由でいられたのに。お前は、お前の父親とそっくりよ！　いつもわたしを抑えつけ、ここに閉じ込めようとする、あの人に！　……あの人は、本当は一度だってわたしを愛してくれたことがない。わたしのことを自分の持ち物くらいにしか思っていない。人に見せびらかせる上等の置き物みたいにしか思っていない。わたしが何を考え、何を感じているかなんて、考えてみたこともない！　……でも、この人は違う。わたしを、ひとりの人間として、愛し、理解してくれるのよ！」

もはや息子に向かってではなく、かといって愛人に向かってでもなく、誰にともなくうわごとのように言い放った母は、視線を宙にさまよわせて、ひとり、勝ち誇った笑い声を立てた。

母の目には、あきらかに、もう、目の前の現実は映っていなかった。自分一人だけの、ありえない夢を宙に描いて現実を拒否し、夢の中に逃げ込んでしまった――そんな、虚ろな、遠い目だった。

男は少年の首から手を離し、彼を乱暴に突き飛ばした。少年は、よろめいて背後の壁に倒れ込み、そのまま壁にもたれかかって、目に涙を浮かべてせき込みながら、込み上げる吐き気に耐えた。

男は、端正と言ってもいいその顔にうっすらと冷たい笑みを浮かべながら、ベッドの傍らに戻り、脱ぎ捨ててあった衣服を悠然と身に着け始めた。

その時、彼は、激しい衝撃と恐怖を覚えていたにもかかわらず、なぜだか心の一部が妙に冷静に澄み渡るのを感じ、母の見苦しい取り乱しようと、どこか投げ遣りな荒んだ気配を纏って悠々と身支度を整えている男を見比べて、不思議と醒めた気持ちで、こう考えていた。

（それは違う。お母さんの言っていることは間違いだ。たとえお父さんがお母さんの言うとおりの人だったとしても、お母さんがこれまでずっと本当は幸せでなかったにしても、この男の人は決してお母さんの思っているような人じゃない。この人は絶対、お母さんを今より幸せにはしない！）

自分の夢でできたガラスの塔に囚われてしまった母の目は、息子である自分をもう見ていないだけでなく、目の前にいる愛人さえ、本当には見ていないのだ。

母の愛人は、本当は、ここにいるこの男ではなく、母と一緒に彼女の夢のガラスの塔に住んでいる、夢の中の男なのだ。そいつは、この男と同じ顔を持っているが、この男ではない。どこにもいない、夢の中の男――母の夢の中に住む母自身の分身であり、母の自己愛が男の姿をとっただけの、男の姿をした夢なのだ。

だから、現実のこの男がどんな酷いことをしようと、母はそれを、見ようとしないだろう。もはやどんな現実も、脆いが硬いガラスで出来ているような彼女の夢の砦に干渉することはできない。母は、

もう、夢のプリズムを通してしか、世界を見られないのだ。自分の夢の世界にあって欲しくない出来事はすべて排斥し、何も気付かないふりで事実を抹殺し、自分だけの夢を見続けようとするだろう。

そして、ついにそれすら出来なくなった時――母の夢と現実とが、あまりに大きい齟齬（そご）を来した時、母の心の、儚いガラスの塔は砕け散り、きっと、破滅が訪れる。徹底的で残酷な、とりかえしのつかない最終の破局が――。

そんなことになったら、脆くて弱い母の心は、今度こそ完全に壊れてしまうだろう。

直感的に、彼は、母の破滅を予見した。

きっと彼は、その時、哀れむような、悲しむような目をしたのだろう。

少年の澄んだまなざしに、母はよけい逆上して、髪を振り乱して鋭く叫んだ。

「その目！　お前のその目は、なによ？　なんでお前は、そんな目をするのよ。子供のくせに、そんな、何もかもわかってるみたいな目をして！　何とか言いなさいよ！　また、そんなふうに黙りこくって……。なぜ黙ってるの！　お前は昔から、そうやって黙ってばかりで、何を考えているのかわからない子だったわ。しかも、お前は、どんどん父親に似て来る。……わたしをそんな目で見ないでちょうだい！　わたしは、お前の父親がわたしを愛したことがないのと同じように、一度だってあの人を愛したことはない。あの人にそっくりなお前も、一度だって愛したことはない。産んでこのかた、お前をかわいいと思ったことなんか、一度もないわ！　お前さえ、お前さえ、生まれてこなければ……。何で、何で、お前なんか産んだのかしら！」

そう言ってワッと泣き出した母に、いつのまにか一分の隙もなく着衣を整え終った男が歩み寄った。

男は、嗚咽する母の肩を抱き抱えながら、少年に向かって唇だけで冷たく微笑みかけ、鈍いが分厚い危険な刃物を思わせる低い声で、

念を押すようにゆっくりと言った。
「出ていけ、ぼうず。いいか、ここで見たことを、誰にも言うな。もし、人に話したら、すぐに俺が、お前を殺しに行くぞ。どこに逃げても無駄だ」
少年はふたたび、男が今この場ででも自分を絞め殺すのではないかという激しい恐怖に襲われて、もつれる足で自分の部屋に逃げ込んだ。

第四章＜荒野の幻影＞第五場（2）（前書き）

！ご注意！

この回には、精神的に痛い内容が含まれています。

年齢制限が必要とは思いませんが、特に苦手な方はご注意ください

m（＿）m

（飛ばして読んでも、ストーリーが分からなくなることはないと思います）

第四章＜荒野の幻影＞第五場（2）

夢中で部屋のドアを閉め、自分のベッドの上に身を投げた時、それまで恐怖のあまり麻痺していた彼の感情が初めて動きだし、どっと涙が溢れ出した。

声を殺し、シーツを掴んで、彼は泣いた。

彼は、自分の、少年時代の幸福が去ったのを知った。これまで自分が信じていたすべてのものが否定されたのを知った。世界が、彼の思っていたようなものではなかったことを知った。

――『お前の父親も、父親にそっくりなお前も、一度も愛したことはない』――

――『お前をかわいいと思ったことなんか一度もない』――

――『お前さえ生まれてこなければ……』――

追い詰められ、取り乱した母の言葉が、繰り返し脳裏に響く。

彼の両親は、とりたてて不仲というわけではなかった。少なくとも、彼はこれまで、両親が愛しあっていることを疑ったことがない。いや、そんなことは、特にあらためて考えてみたこともなかった。彼は両親が喧嘩をするところを見たことがなかったし、父はいつでも母を大切にしているように見えた。親しい友人を自宅に招いた時など、父は、子供にもわかるほど露骨に自慢そうに、美しい妻を見せびらかしていたものだ。

一人息子の彼は、非常に厳格にしつけられはしたが、また、非常に大切にもされていた――はずだった。少なくとも、望めばどんな高価なものでも惜し気なく与えられたし、望むと望まないとに関わらず、すべてにおいて上質のものを与えられ続けてきた。

彼は幸せだった――はずだった。まわりの大人たちも、たぶん、彼の両親をすべてに恵まれた仲のよい夫婦だと信じ、彼らを絵に描いたような幸福な家族と見なしていたに違いないし、彼もずっと、そう信じていたのだ。

その、自分がこれまであたりまえのものとして信じてきた幸福が、愛が、すべて幻だった。自分は、愛されてなどいなかったのだ。

母は、ほとんどいつでも彼に厳しかったが、それは彼の将来を思う愛情故の厳しさであったはずで、だから彼は、ずっと、常に母の期待に応えようとし、母に満足してもらえるような自分に少しでも近づくために、常にがんばり続けてきた。そして、その努力を辛いと思ったことは一度も無かった。努力の末には、母の笑顔があると信じていたから。信じようとしていたから。

お前を叱るのは、お前に厳しくするのは、それがお前のためだからだと、お前を大切に思うからなのだと、母は、いつも、言っていた。……言っていたのに。

裏切られた思いに、彼はただひとり、泣き続けた。世界が終ったような気がした。

けれども心のどこかで、泣いていればそのうちに母が入ってきて、あの言葉はすべて取り乱して口走っただけの嘘で本心ではなかったのだと言ってくれないかと、微かに甘く期待していた。

けれど、いつになっても母は彼の部屋に現われず、いつのまにか彼は泣きながら眠っていた。夕食も取らず、父がいつ帰ってきたのかも知らず、彼は眠り続けた。

そしてそのまま、高熱を出して、数日間、熱に浮かされて昏い悪夢の中をさまよった。

夢の中で、彼は、大きく恐ろしい、不気味な怪物に執拗に追い回されていた。まわりには、無表情な見知らぬ大人たちが審判のように立ち並び、助けてくれる様子もなく、ひそひそと非難の囁きを交わしながら咎めるような目で彼を見ているのだった。

そんな中、頭を抱えて逃げ惑いながら、彼はひたすら呟き続けた。

――ごめんなさい、ごめんなさい、学校を早引けしてごめんなさい、お母さんの部屋のドアを開けてごめんなさい、邪魔をしてごめんなさい、いつもお母さんの邪魔になってごめんなさい、お父さんに

似ていてごめんなさい、ぼくが居ちゃって、ごめんなさい、生まれてきちゃって、ごめんなさい……。

うなされ続ける彼を看病してくれてたのは、母ではなく、父が郷里から呼び寄せた祖母だった。数日後、熱が下がって彼が起きられるようになった時、すでに母の姿は家の中から消えていた。

まだ朦朧としていた頭の中で、彼はぼんやりと、自分が何かひどい罪を犯した罰として母を失ったのだと感じていた。夢の中の無表情な審判たちが彼を指差して『罪人』と罵っていた、その言葉が、まだ消えずに頭の中に谺(こだま)していた。

けれどもその罪が何であったか、正確には思い出せなかった。たぶん、風邪を引いて学校を早退したのがいけなかったのだと、彼は思った。早退なんかしたから、母が去ってしまった。きっと、自分がひ弱だったから、母に見捨てられたのだ。

そう、父がいつも言っていたではないか、男の子は、強くなければならないと。強くあれ、勝(まさ)ってあれ、常に一番であれ、誰よりも秀でてあれと――、滝を昇る無数の鯉の中で一番強いただ一尾だけが龍になれるという、その龍のように、お前は、選ばれた勝者たれ、と。

それなのに自分は、そうではなかったから、母に愛してもらえなかったのだ――。

しばらくして頭がはっきりし、すべてを思い出した後も、自分が弱かったために母に捨てられたのだという、この時のこの思いは、どういうわけか胸の奥にこびりついて消えなかった。

その後、母がどこへ行ったのか、彼は知らない。

彼は自分の見たことを父に話さなかったし、父も彼に、母について何も言わなかった。

ただ、それからずいぶんたったある日、突然、父は、昨日、母との離婚が正式に成ったと、母は二度と帰らないと、ぽつりと教えてくれた――。

＊

そして今、逞しい青年となったアルファードは、大きな身体を丸めてうずくまり、ドラゴンの邪悪な術の創り出す幻影の中で、ふたたび、あの日の夢の怪物たちに追い回されている。

幻影の中の彼は、剣も持たず、幼な子のように無力だった。頭を抱え、背中を丸めて、なすすべもなく逃げ惑う彼を、無表情な黒い影たちがとり囲み、罪人よ、敗け犬よ、逃亡者よと、口々に罵りながら指差して、その惨めな姿を嘲り笑っていた。

『アルファード、母に棄てられた子供よ』

『アルファード、思い出すがいい。母がお前を棄てていった、あの日のことを。永遠に消えぬ、あの日の苦しみを。癒えることない、お前の傷跡を……』

『魔法も使えない、半人前の男！　お前はできそこないだ。何の値打ちもない、劣った人間だ』

『そして、お前が魔法を使えないのは、お前が罪を犯したからだ』

『母がお前を棄てたのは、お前が弱くて愚かで罪深いからだ……』

（嘘だ！　嘘だ……）と、叫ぼうとしても声は出ず、アルファードはただ、哀れに逃げ惑い続けた。

長い触手を持つもの、巨大な角を持つもの、ぎらぎら燃える一つ目を持つもの、おとぎ話の鬼や悪魔によく似たもの、人間に似ていながら奇妙に歪んだ姿を持つもの、獣めいたもの、蛇に似たもの、いびつな馬に似たもの、象のような奇怪な耳や鼻を持つもの、巨大な蟲や蝙蝠を思わせるもの、ぬらぬらして形の定まらぬもの、あるいは、ごく普通の人間の男や女の姿をしていながらなぜか途方もなく醜怪な裸形のもの――。様々の、醜悪な、あるいはどこか淫らな異形のものたちが、彼を追い回し、厭らしく笑いながら彼の目の前に飛び出しては、彼を脅やかす。

笑いさざめく黒い影たちが、入れかわりたちかわり、彼に囁く。

『死んでおしまい……。そうすれば楽になるよ』

『いいや、殺しておしまい。お前をバカにする人間たちを、一人残らず殺しておしまい。そうすれば、お前は世界の王だ。お前に、そのための力をやるよ。そうだ、お前も、ドラゴンにおなり。そうすれば、世界を焼き滅ぼすのも、すべての人間を食い尽くすのも、お前から母を奪った男を殺すのも、お前を棄てた母を罰するのも、思いのままだ。……お前は、母が憎いのだろう？　罰してやりたいだろう？』

『いや、お前は本当はやさしい子だ。今でも母を愛しているのだろう？　許してやれるのだろう？　お前が強くなれば、お前の母も帰ってきてくれるかも知れないよ。お前の前に跪き、悪かったと、許してくれと、愛していると言ってくれるだろう』

『いいや、お前の母は帰ってなど来ない。どんなに強くなったって、どうせ誰もお前を愛しはしない。この苦しみから逃れたければ、死ぬほかはないんだ。誰もお前を救ってくれやしない。誰もお前を助けには来ないよ。お前を産んだ母でさえお前を見捨てたのは、お前が生きている価値もない人間だからさ』

『お前なんか、生まれてこないほうがよかったんだ。お前が母を不幸にした。お前の存在が母を苦しめた。だから、母に憎まれた。母に棄てられた。そうだ、お前が悪いのだ。何もかも、お前の罪なのだ。お前がこの世に生まれてしまったこと、それこそが、お前の、決して償えぬ永遠の罪なのだよ』

『そうだ、お前は罪人だ。だから、お前のことなど、誰も愛さない。誰もお前など必要としない。お前の母でさえ、お前を棄てた。お前を愛さなかった。それは、お前が愛される値打ちもない人間だからだ！　教えてやろう。お前には、生きている権利なんか無いんだよ！』

（いやだ、いやだ、あっちへ行け……）

恐さと気味悪さに幼児のようにすすり泣きながら、よろよろと悪夢の中をさまよい続ける傷ついたアルファードに、影たちが、合唱するように声を揃えて囁きはじめた。

『アルファード、死んでおしまい……。お前が、死ぬこともできぬほどの臆病ものなのなら、いっそ、殺してやろうか？　死ぬのは怖くないよ。眠るのと同じだ。母親が子守歌を歌うように、やさしく、やさしく、殺してあげよう……』

（そうだ、俺は罪深い人間なんだ。誰にも愛されない、愛される資格もない存在なんだ。生きている意味もない、無用な人間だ。いっそ、このまま、死んでしまおう……）

いつしか逃げ回る力さえ失ったアルファードは、幻影の中でも、その実体がしているのと同じように、ただ頭を抱えてうずくまりながら、涙を流し続けていた。

――ねんねんころりよ　おころりよ……――

うずくまるアルファードの回りで、ドラゴンの九本の首が、彼の幼い日に母が歌ってくれた子守歌を歌い始めた。

第四章＜荒野の幻影＞第六場（1）

魔王の腕の中で、里菜は、脳裏の闇に映るアルファードの姿を見つめていた。

全身に傷を負って、捨てられたボロきれのように地面に倒れ伏すアルファードは、まるで死んでいるかに見えたが、よく見れば、その身体は、ときおり、引き攣ったようにぴくりと動く。じっと見ていると、熟睡している獣がよくそうなるように、あちこちの筋肉がときおり小刻みに痙攣しているのもわかる。

（アルファードは、生きている……）

かすかな安堵と、新たな不安が生まれる。

アルファードは、意識を失っているのだろうか。それとも、意識があってももう身動きできないほど衰弱しきっているのだろうか。

よく見れば、服は真っ赤に染まっていても身体の下に血溜まりはなく、肌を切り裂いて縦横に走る傷も、むごたらしく痛々しくはあるが、どれもそれほど深くはないようだ。が、この角度からは見えないところに、動くこともできないほどの深手を負っているのかもしれない……。

里菜は、今にもドラゴンが傷ついたアルファードに襲い掛り、引き裂こうとするのではないかと怯えたが、ドラゴンの九本の首は、それぞれ、満足げな薄笑いとしか見えない邪な表情を浮かべて、いつまでもゆらゆらとくねりながらアルファードを取り巻いているだけだ。それはまるで、彼に何か語りかけているようにも見える。そういえばあのドラゴンは口がきけるのだから、ここからは向こうの音を聞けないだけで、もしかすると実際に何か言っているのかもしれない。

（アルファード……。アルファード、目を覚まして！）

里菜は、さっきまで自分にあんなに圧倒的な支配力を及ぼしていた魔王の存在さえ忘れかけるほど懸命に祈り、声にならない声でア

ルファードに呼びかけた。
ふいにアルファードが、かすかに身じろぎして、腕の間から、床に額を押しつけた横顔が覗いた。その、固く閉ざされたまぶたから、涙がとめどなく溢れ出して地面を濡らしていることに、里菜は気づいた。
『呼んでも無駄だ。今のあの男には、どんな叫びも届きはしない。ただ、ドラゴンが聞かせる自らの魂の昏い声の他には……』
里菜の背後で、魔王が笑いながら囁いた。
けれど里菜は、ただ、夢中でアルファードに呼びかけ続けた。
(アルファード！　アルファード！)
アルファードは起き上がらず、ただ、涙を流し続けていた。まるで、今までの人生で泣かずに過ごした分のすべての涙を、今、一度に流しているようだった。
魔王の掌の下でうつろに開いたままの里菜の目からも、涙が零れて頬を伝った。
その時、里菜の胸の奥に、アルファードの声が届いた。けれどそれは、里菜の呼びかけに応えるものではなかった。それは、彼の生命の暗い奥底から漏れてくる、苦渋に満ちた魂の呻きだった。
(そう、誰も俺を愛さない。世界は俺を必要としない。俺を受け入れはしない。俺は、罪人だ。愚かで弱い男だ。誰にも愛される価値のない、誰にも必要とされない、要らない人間だ……)
アルファードの絶望が、里菜の胸を締めつけた。
「違う、アルファード！　そんなことない！」
気がつくと里菜は、声を出して叫んでいた。魔王の呪縛が、破れかけている。
『呼んでも無駄だ』
魔王の冷たい言葉に、かすかな苛立ちとあせりが忍び込んだ。
魔王の掌の下で、里菜の瞳に輝きが戻り始めた。
里菜は魔王の腕を振り解こうともがきながら、涙を流してアルファードを呼び続けた。

「アルファード、あなたは要らなくなんか、ない！　もしも世界の他の人が誰もあなたを必要としなくても、少なくともあたしには、あなたが必要なの。あなたがいないと嫌なの。信じて、アルファード、愛してる！　あなたを、愛してる！」

けれど、魔王の呪縛が緩むと同時に、魔王が里菜に見せていたアルファードの映像が薄れ始めた。里菜は、霞んで消えていこうとするアルファードの映像に呼びかけ続けた。

魔王が里菜の目から手を離した。映像は消えた。けれど里菜は、まだ、脳裏に残るアルファードの残像に向かって叫び続けた。

『無駄だと言っておろう！』

暴れて駆け出そうとする里菜を背後から引き止めながら、魔王は、今や明らかに苛立ちを見せ始めていた。

『暴れるな。そなたに手荒なことはしたくない。なぜ、そなたは、あんな取るに足らぬ無様な男を、そうまで心にかけるのだ！』

魔王の言葉は、もう、里菜の心に届かず、里菜は魔王の腕の中で激しくもがき、涙を流して叫び続けた。

「アルファード！　聞いて！　あなたを、愛してる」

ふいに魔王が、あきらめたように、暴れる里菜から手を離した。勢い余った里菜は、つんのめるように床に倒れ込んだ。それでも、床に手をついて半身を起こすと、そのまま、叫び続けた。

「アルファード、眼を覚まして！　ここへ来て！」

魔王は何も言わず、昏い怒りの気配を纏って、里菜を見下ろしていた。

＊

子守歌を聞きながら、アルファードは、半ば夢心地で、緩慢な死を待っていた。

忍び寄る死は、もはや苦痛でも恐怖でもなかった。

幼いころ、彼が熱を出すたびに、母が食事をベッドまで持ってき

て、スプーンで一口づつ食べさせてくれた。彼は、ベッドの中で、ドアに近づいてくる足音に聞き耳をたてながら、寝たふりをして母を待った。それは、甘美な期待に満ちたひとときだった。

今にして思えば、もしかすると母はそれを、愛情からではなく、良い母というものはそうするものだと言う義務感からしていたのかもしれない。それでも、跡取り息子として常にしっかりした大人びた振る舞いを求められ続け、その期待に応え続けていた彼が、年相応の甘えた顔を母に見せられるのは、たぶん、そんな時くらいだったのだ。その時だけは、母は彼に、『しっかりした優等生』ではなく『可哀想な病気の子供』の役割を求めているのだということ、今なら甘えても許してもらえるのだということを、彼は、子供心にちゃんと理解していたから。

少し大きくなってからも、彼が、どこも悪くないのにしばしば体調を崩していたのは、もしかすると、幼い日の、そんな思い出が忘れられなかったからかもなのかもしれない。伏せっていれば、もう一度、あんな夢のような時間が訪れるのではないかと、自分でも気づかないうちに、密かに期待していたのかもしれない。彼にとって、母に甘えることができた病床の時間は、それほど甘美な思い出だったのだ。

今、近づいてくる死の足音を待っているのは、まるで、そんな幼い日の思い出の中の母の足音を待っているような気持ちだった。

（ああ、俺は、ここで死ぬのか。けれど、もしかすると、俺がずっと本当に求めていたのは、この瞬間ではなかったか――）

彼は、ぼんやりと思った。

（俺は、これまで、いつも最善を尽くしてきた。けれど、たぶん、本当はもうずっと前から、戦い続けることに疲れていたんじゃないか。けれど、全力も尽くさず、理由もなく途中で努力を放棄することを自分で許せなかったから――、だから、心のどこかで、いつも、最善を尽くしても勝てない時が来るのを待ち望んでいたんじゃなかったか。

そして、今、俺は、戦って死ぬための正当な理由を得て、その上で、ついに、死力を尽くしても勝てない強大な敵と巡り合った。今、俺は、それが誰かは思い出せないけれど大切な『誰か』を守るために、全力で戦った末に死ぬことができる。だから、そのご褒美に、こんな甘美な死が与えられることになったのではないか。こうして、母の胸に還るように死んでゆくことが出来るのではないか。これこそが、俺がずっと本当に望んでいたことではなかったか――。

そうだ、俺は、ずっと、死に場所を探していたのだ。そして、今、やっと、それが与えられた――）

その時、うずくまるアルファードの胸に、かすかな声が響いた。

『……いしてる。愛してる。アルファード、愛してる！』

（……リーナ？）

誰のことか分からないひとつの名前を、彼の心が、ぼんやりと呟いた。

アルファードの意識に、わずかな光が差し込み、その指が、かすかに動いた。

『アルファード！　あなたは悪くない！　あなたは何も悪くなんかない！　弱くたって、愚かだって、いいじゃない。弱くたって愚かだって、あたしはあなたが好きよ！』

遠くから呼びかける声が、乾いた地面に水が沁みこむようにひっそりと、彼の中に沁み込んで来る。　一滴づつ滴り落ちる雫が時間をかけてやがて虚ろな器を満たすように、彼を満たしてゆく。

そして、ついに満たされた器から、はじめて一滴の水が溢れ出した時、かすかな意識の中で、彼は、呆然と思った。

（そうか、俺は、悪くなかったんだ……）

そうだ、幼いあの日、母が彼を棄てていったのは、何一つ、彼のせいではなかった。彼が弱く、劣っていたからなどではなかった。父と母の間がうまくいっていなかったことも、母の結婚生活が不本意なものであり母が不幸だったことも、何一つ、幼かった彼の関知するところではない。ましてや、彼が父親に似ていたことなどが、

彼の咎であったはずもない。彼は、何も悪くなかったのだ。

母に棄てられたことで、自分を責める必要はなかった。それなのに、幼い彼は、自分を責め続けた。自分を責めることで、母を庇ってきた。悪いのは、自分を棄てた母ではなく、母の期待に添えなかった自分であると。だから自分は母に見限られ、棄てられたのだと。

（なぜ、そんな風に思い込んできたのだろう。俺は、悪くなかったんだ――）

そんな、彼のおぼろな思考を、どこかで、そっと、肯定してくれている気配がある。そうよ、その通りよ、と、誰かが、そっと寄り添うように、背中をさするように、やさしく囁いてくれている。

ああ、誰かが、俺を肯定してくれるのだ。醜く怒り、惨めに惑い、時に獣のように荒れ狂う、未熟で荒々しい俺を、それでも受け入れてくれる人がいるのだ。長いこと、嘆きを、憎悪を、悲しみを、自分でも気づかぬように心の奥にしまったまま生きてきたけれど、胸の奥底に見知らぬ黒い獣のようにうずくまる、その、秘めた怒りごと自分を愛してくれるだろう人を、俺は、やっと見つけたのだ。今、どこからか俺に呼びかけてくれている、その人を。

そうだ、その人は、いつも近くにいて、抱き上げてもらうのを待っている仔犬のような、わけもなく気が咎めてくるほどに信じきった、真っ直ぐな目で俺を見上げてくれていたんじゃなかったか？己の未熟さゆえに身勝手にその人を振り回してきた俺を、それでも信じ、慕って、どこまでもついてきてくれていたんじゃなかったか？　いつもそばにいてくれたはずのその人は、今、どこに……？

そもそも、ここは、どこなのだ？　俺は今、何をしているんだ？

……俺は、ドラゴンと戦っていたのではなかったか！？

急速に意識がはっきりしはじめ、自分の置かれている状況を思い出しかけたアルファードは、うずくまった姿勢のまま、かっと目を開けた。

「リーナ！　どこにいる？」

『アルファード、あたしはここよ！　立って！　顔を上げて！　こ

こまで来て！』

脳裏に響く声に導かれて顔を上げたアルファードは、自分が、少年時代の悪夢の中ではなく、ドラゴンの洞窟にいることに気がついた。子守歌を歌っているのは母ではなく、自分を取りまいているのはあの日の夢の黒い影たちではなく、ただ、ドラゴンの九本の首が彼を取り囲んで揺れていることに。

ドラゴンは、自分の術が破れたことを悟るや、まだ夢から覚め切らないあやふやな表情で顔を上げ、周囲を見渡すアルファードに、九本の首で、いっせいに襲い掛ってきた。

『アルファード、危ない！』

胸に響く里菜の声に、アルファードは我に返って、ばねのように立ち上がった。今や完全に理性を取り戻し、事態を把握したアルファードは、ドラゴンの攻撃をよけながら、足元に落ちていた剣を素早く拾いあげた。

アルファードはもう、里菜が近くで叫んでいるのではないことに、気づいていた。

里菜は、たぶん、この城のどこかで、自分がドラゴンの邪悪な罠に陥ったことを知って、悪夢の中から自分を呼び戻してくれたのだ。

（そうか、リーナは、生きていて、そして、どこかで俺を呼んでいるんだ。俺を、待っているんだ。そう、リーナは、俺を必要としてくれている。俺を――、俺を、愛してくれているんだ！）

そう思った時、アルファードの傷ついた身体の奥で、いったんは消えかけていた生命の炎が、ふたたび燃え上がった。

ついさっき、ドラゴンの毒に侵された心の中で、彼女は、良心の呵責を感じずに死に屈するための言い訳だった。でも、自分が本当に探していたのは、もう、死に場所じゃなかった。最初は、もしかすると本当にそうだったのかもしれない。けれど、いつのまにか、別のものを探していた。

探していたのは、求めていたのは、彼女と共に生きられる未来だ――。

（そうだ、俺は、リーナと約束したじゃないか！　必ず後から君のもとへ行くと……。リーナ、待っていてくれ！）

アルファードはぎりっと奥歯を噛み締め、闘気を漲らせて剣を振り上げた。

第四章＜荒野の幻影＞第六場（2）

石の床に倒れて、腕をついて上体だけを起こした姿勢のまま、里菜はアルファードに呼びかけ続けていた。その里菜の胸の奥に、ついに、アルファードの応えが届いた。それは、はっきりと言葉になったものではなかったが、里菜は、自分の思いがアルファードに通じたことを確信した。

（もう大丈夫。アルファードは生きている、戦っている……）

里菜は涙を拭いてぺたんと床に座り直し、かすかな微笑みを浮かべた。

（それなら、アルファードは、きっと、ここまで来てくれる。だって、約束したもの。必ず後から来てくれるって……）

そんな里菜を冷ややかに見下ろしていた魔王が、つかつかと歩み寄り、里菜の腕を取って立ち上がらせた。

自分の腕を掴んだ魔王のその手が、いつのまにか、はっきりと実体のあるものに変わっているのに、里菜は気づかなかった。

完璧な造形を持つ、その美しい白い手は、たしかに実在するのだが、それでもあいかわらず、不思議と肉体の気配がなかった。

「エレオドリーナよ。今のそなたに、そのような力があるとは思ってもみなかった。そしてあの羊飼いも、思ったより手強かったようだ。そなたらは、ふたりして、私のドラゴンの術を破ってしまった。あの男は、ドラゴンを斃すだろう。まさかこんなことになるとは思わなかったが、まあ、よい。どのみち彼女は、死ぬつもりだったのだ……」

こう語りかける魔王の言葉が、今や、それまでのように魂に直接響くだけではなく、耳に聞こえる音を持っていることにも、里菜は気づかなかった。うっかりと魔王の言葉を聞き、フードの下の闇に見つめられているうちに、里菜はいつのまにか、また、魔王に呪縛されてしまっていたのだ。

魔王の背中の大鎌が、氷のような輝きを増す。
耳に聞こえる魔王の声は、やはり、それまでのものと同様に、昏く、深く、美しく、里菜の心を揺さぶった。
再び里菜を手中に収めた魔王は、つと腕を伸ばして、その形の良い長い指を里菜の頬にそっと滑らせ、やさしいとさえ感じられる動作で涙の跡を拭ってやりながら語り続けた。
「彼女はすでに、長い生に飽いていた。さっき孵った卵たちは、彼女の最後の卵だったのだ」
（でも、全部、雄だったわ……）
里菜は、また声を失っていたが、そのことに気づきもせずに胸の内で呟いた。
「そうだ」と、魔王は答えた。
「だが、そなたは気づかなかっただろうが、ひとつだけ孵らなかった卵が残っていた。それが、雌ドラゴン――新しい女王の卵のはずだったのだ。しかし、新しい女王は、生まれなかった。おそらくドラゴンの種族自体が、すでにその寿命を終えようとしているのだろう。私はこの地上で最も完成された生き物を創り出そうとしたのだが、どうやら、完成などというものは、この地上では望めないものなのだな。あまりにも個体の知能が高すぎ、寿命が長すぎる生物は、種族としての生命力を長くは維持できないらしい。生命の女王たるそなたの手を煩わせずに新しい種族を創造するのは、やはり、無理だったようだ。愛しい妹よ、やはり我等は、手を携えてゆかねばならぬのだよ……」
魔王の冷たい指が、里菜の髪を撫で、耳たぶの形をそっとなぞった。
「妹よ、双子の妹よ、私の半身よ。我等は、その誕生の時から、分かち難く結び付いている。私を拒むのは間違っている。我等は、同じ母から生れた一つの存在のふたつの側面、もとは一体だったものの片割れ同士だ。だから、こうして、互いに呼びあい、求めあうのだ。……いや、否定しても無駄だ。言葉など、上面だけのもの。心

の底で、そなたは、間違いなく、私に惹かれている。私を、求めている。我等ふたりが遠く離れて存在することは、不自然なのだ……」

魔王の言葉は、しだいに昏い熱を帯びて妖しく燃え上がり、秘めやかな愛撫のように、拒み難く里菜の心に忍び込んでゆく。

「妹よ、かつて我等は、ひとつだった。母なる混沌の胎内で、我等は境い目もなく溶けあって、まどろんでいた。そなたも心の底では、私と同じように、あの至福の時を忘れられずにいるはずだ。もう一度、我等の母を呼び戻し、あの美しい永遠の眠りを取り戻そう。もう一度、ひとつになろう……」

魔王はふうわりと包み込むように里菜を抱き寄せて、静かな囁きを甘い毒のように耳朶に注ぎ込んだ。

魔王に抱き寄せられながら、かすかに残った意識の中で、里菜は思った。

今、自分を抱き寄せているこの人は、たしかに、ちゃんと人間の形をした身体を持っている。前はそうではなかった気がするのだけれど、そう思ったのは、あれは夢だったのかしら……。

力強い腕に引き寄せられ、広い胸に身をあずけながら、ふと、気づく。否応無しに頬を押し付けられるほど身を寄せているその胸が、そんなに間近にあって、確かな感触を備えていながらも、肌のぬくもりを、心臓の鼓動を、一切伝えてこないことに。

こんなに、抗うことも出来ないくらい強くしっかりと抱きしめられて、まるで大きな繭の中に閉じ込められているみたいに誰かの衣の中に全身をすっぽりと包み込まれているのに、どうして、ちっとも温かくないんだろう……。ああ、そうか、今、自分を包むこの腕には体温がなく、今、なすすべもなく顔を埋めている黒衣の下の胸には、心臓の鼓動がないんだ……。

いつだったか、誰か別の人に、こんな風に抱き寄せられたことがある。誰か、こんな風に抱きしめてくれた人がいる。その人の胸は、温かった。心臓が脈打っていた。あれは、誰だったんだろう――。

まるで、目が覚めた後の夢のよう。さっきまで覚えていたはずなの

に、思い出せない。
忘れたくないのに。ずっと繋ぎ止めておきたい大切な夢だったはずなのに……。
淡い悲しみが心を過(よぎ)った。
けれど、それは一瞬だった。次の瞬間、里菜の意識は魔王の囁きに絡め取られていた。
心が、眩い闇の底へと堕ちてゆく。
里菜のうつろな瞳に、陶酔の色が、ゆっくりと広がっていった。

第四章＜荒野の幻影＞第六場（3）

アルファードは肩で荒い息をつき、血でぬめる手をズボンでこすると、剣を握り直した。目の前に、ドラゴンの片目の首が揺れている。

今、アルファードと対峙している首は、一本だけだ。残りの首は、あるいは喉を突かれて、すでに戦う力もなくひたすらのたうち回って悶え苦しみ、あるいは両目を潰されてアルファードの姿を見失い、無意味にそこら中をくねり回っては、時に互いに噛み付きあったりしている。どうやら、ドラゴンの首たちは、それぞれある程度独立していて、思考は通じあっていても視覚や痛覚は共有していないらしい。

残る最後のこの首さえ片付けてしまえば、ドラゴンの胴体はほとんど無防備になる。アルファードは慎重に間合いを計っていた。

彼はもう、さっきのように怒りや憎しみに我を忘れてはいなかった。彼は、今、怒りや憎しみのためにではなく、ただ生きるために、生きて愛する人のもとへ辿り着くためだけに、己の全てを賭けて力の限り戦っているのだ。その心は、高揚し、張りつめ、熱い闘志を滾らせながらも、どこか奥の方では水のように静かだった。

ドラゴンの首が、正面で動きを止めた。おそらく毒を吐くつもりだろう。その瞬間を狙っていたアルファードは、身体を屈め、ドラゴンに向かって跳躍しようとした。

その時、あれからずっと言葉を話さず、獣じみた叫び声をあげるだけだったドラゴンが、ふいにまた、明瞭な人言を、女の声で発した。

「やめて、アルファード！」

アルファードは、ぎょっとして凍り付いた。

「アルファード、何をするの！　目を覚まして。わたしよ、お母さんよ！」

それは、まぎれもなく、たった今思い出したばかりの彼の母親の声だったのだ。

「アルファード、わたしが悪かったわ。お母さんを許して。帰ってきたのよ。もう、どこへも行かない。だから乱暴はよして。あなたは優しい子だったわ。そうでしょう？　そんな乱暴な子じゃなかったはずよ。実の母親に、どうしてこんなひどいことができるの！？」

その言葉に、アルファードは、思わずひるんだ。剣を降りあげた手が、一瞬止まった。

そこへ、すかさずドラゴンが毒を吐きかけた。

間一髪、横飛びに毒液を避けたアルファードは叫んだ。

「嘘だ！　どうして母さんが俺のことを、アルファードなどと、この世界の名で呼ぶわけがある！」

冷静さを失っていたさっきまでのアルファードだったら、ドラゴンの言葉に騙されたかもしれない。でも、今はもう、騙されはしない。

アルファードは跳躍した。アルファードの剣が、ドラゴンの片目を貫き、首が、悲鳴をあげてのけぞった。

アルファードは、もう、迷わなかった。すばやくドラゴンの胸元におどりこんで、上向きに構えた剣を、鱗の隙間から心臓に向けて刺し込んだ。

洞窟中にこだまする耳障りな絶叫と共に、九本の首がいっせいに天を仰いで、ドラゴンは後足で立ち上がった。

胸に刺さったまま空中に持ち去られそうになった剣をあわてて引き抜いたアルファードは、反動で、あおむけに地面に投げ出された。

剣が抜けたとたん、ドラゴンの胸からしぶきのように吹き出した赤い血が、アルファードの上に降り注ぐ。

九本の首は、それぞれ断末魔の悲鳴を上げてのたうっていたが、その時、どこからか、何重にも重なって聞こえる穏やかな声が降ってきた。

「アルファード。お前は勝ったのだ。服を脱いで、私の血を浴びな

さい……」

アルファードは、ドラゴンにまつわる数多い伝説のひとつを思い出した。ドラゴンの心臓を食べたものは不死となり、ドラゴンの心臓の血を浴びたものは、不死ではないがどんな刃物にも傷つかない不死身の肉体と、本物の魔法の力を手に入れられる……。

アルファードは降り注ぐ血の雨を浴びながら、ほとんどボロきれ同然になっていた衣服を素早く脱ぎ捨てた。彫像のように均整のとれた逞しいその裸身を、みるみるうちにドラゴンの血が深紅に染めていく。

武器も持たず、無防備な素肌をドラゴンの前に晒していても、アルファードは、もう、怖いとも危険だとも思わなかった。例えまだその力が残っていたとしても、ドラゴンが今になって彼を傷つけようとするとは思えなかった。ドラゴンは知性ある生き物で、手負いの獣ではない。彼女はすでに自らの負けを認め、勝者に贈り物を差し出しているのだ。

降り注ぐ血に洗い流されるかのように、ドラゴンに対する憎しみも、彼の中から消えていった。

ドラゴンは、おそらく、何らかの力で彼の心を読んだのだろう。そうして、心の奥底に埋もれて彼自身も忘れていた古い記憶を掘り起こし、辛い思い出と共にひっそりと眠っていた古い怒りや悲しみを無理やり揺さぶり起こして、彼を攻撃する武器として利用したのだ。彼自身にも知られずに芽を出すあてもなく眠っていた醜い感情の小さな種子たちを無理やりほじくり出して、悪意という水を注いで芽吹かせ、彼の眼前に晒して見せたのだ。

だとしたら、ドラゴンの力は、彼自身の中から出てきたものだった。ドラゴンは、自分を映す鏡であり、ドラゴンに対する怒りと憎しみは、自分に対する怒りと憎しみだった。

それなら、もう、ドラゴンを憎む必要はない。自分は、もう、自分を憎んでいないから――。

ドラゴンが、最後に一声、高く尾を曳いて啼き、どうと崩れ落ち

た。

アルファードはあやうくその巨体の下敷きになりかけたところを、転げるように飛び退いた。そして、地面に片手をついて体勢を立て直しながら、自分の身体が、信じられないほど軽やかに動くことに気づいた。

ドラゴンが地に横たわった瞬間、アルファードの全身と辺りの岩を赤く染めていたドラゴンの血が、ふいに、銀色に発光した。まるで、闇の中で星がひとつ爆発したかのように、洞窟中が、ひととき、目も眩むほど明るく照らし出された。立ち上がろうとして片膝をついた姿勢のままはっと顔を上げたアルファードの全身も、眩い銀の光に包まれた。そして、その、ひとときの輝きが、すっと薄れて消えた時、アルファードの身体には、一切の傷跡も血痕も残っていなかった。

アルファードは、おずおずと立ち上がり、あたりを見回した。傷の痛みも、戦いの疲れも、すべてが幻だったかのように癒え、アルファードは、たった今この世に生れ出たばかりの嬰児のように何も纏わぬままの姿で、洞窟の真ん中にすっくと立っていた。あらゆる痛みから解き放たれたその姿は、まさに、今、この洞窟の中で誕生した、まっさらな無垢の生命を思わせた。

アルファードの身裡に、これまで知らなかった新しい種類の力が沸き起り、静かに全身に満ち渡っていった。

（ああ、これは、魔法の力――、＜本物の魔法＞の力だ）と、アルファードは直感的に悟った。

アルファードはおのずから背筋を伸ばして、震えるような想いでそっと目を閉じ、身裡に満ちる力を敬虔に味わった。力は、祈りのように彼を満たした。

強敵だったドラゴンの、その巨大な生命と力は、今、こうして、彼のものとなった。ドラゴンの血は、ドラゴンの心臓は、彼の中に生き続ける。そう、今や、彼はドラゴンであり、ドラゴンは彼だ。だから、もう、ドラゴンを憎む必要は無いし、人からドラゴンと呼

ばることに苦痛を感じる必要もない。
彼は今、＜本物の魔法使い＞として、新しく生まれ変ったのだ。
アルファードは、ボロボロになったシャツを諦め、どんなにボロになってもさすがに穿かないわけにはいかないだろうズボンだけを拾ってなんとか足を通すと、地面に横倒しになったドラゴンの銀の巨体の横に歩み寄って、ひとつだけ、まだかすかに動いている首のかたわらに膝をついた。
その首が、うっすらと目を開けて、囁いた。
「……アルファード、わたしの息子。お前を、愛していたよ……」
それは、アルファードの母の声だった。
「母さん……」
アルファードは低く呟いて、頭を垂れた。
もちろん、これは、本当の母の言葉ではないのだ。ドラゴンは、おそらく、彼の埋もれていた記憶を読んでその過去を知っただけで、十数年前の別の世界での出来事を実際に知っているわけではないはずだ。だからこそ、彼の記憶の中にある以外の言葉を母の声でっち上げようとして、母は知らないはずの『アルファード』という名で彼を呼ぶなどという稚拙なミスを犯したのだ。ましてや、母が彼を愛していたかどうかなどという、母本人にしかわからない――もしかすると母本人にさえわからない――はずのことを、別の世界の生き物であるこのドラゴンが、知っているわけがない。たぶん、この一言は、いまわの際　《きわ》のドラゴンの、自分を斃した勇者への最後の贈り物だったのだろう。
けれど、今はもう、それでもよかった。もう、本物の母に帰ってきて欲しいとも、謝って欲しいとも思わなかった。母は、母の人生を歩んだのだ。母があの後、幸福になったとは思えないが、だとしても、それは、母が自分で選んだ、彼女の人生なのだ。
それに、おそらく、ドラゴンの言うとおり、母は自分を本当は愛してくれていたのだと、今、アルファードは信じることが出来た。
ごく幼かった頃には、たとえ気まぐれにでも母が自ら進んで彼を

慈しんでくれた瞬間が、彼を抱きあげて微笑みかけてくれた瞬間が、幾度もあったはずなのだ。父と母の関係がまだそれほど壊れておらず、自分がまだ幼くてそれほど父に似ていなかった頃の、色あせた写真に残る懐かしい思い出の中の母の温もりは、自分に向けられた笑顔の記憶は、たしかに本物だったはずだ。決して嘘や幻ではなかったはずだ。

あの日、母は、そのことを忘れて、それまでの絆のすべてを否定してみせたけれど、それは、一時の激情と錯乱が母の心を曇らせて、愛の記憶を覆い隠してしまったからに過ぎない。母が、彼を、少しでも、ひとときでも愛してくれたという事実が、それで消えてしまったわけではない。あの時の取り乱した母にも、冷たい目をしたその愛人にも、母が去ってからますます言葉少なに頑《かたく》なになってしまった父にも、出奔した嫁を孫の眼前もはばからず悪し様に言い続けた祖母にも、かつて彼が母に愛されたことがあるという事実までを彼から奪うことは、決して出来ないのだ。

母が去っていったあの頃は、自分のすべてを否定されたように感じた。すべてを奪われ、失ったような気がした。でも、今はもう、彼は知っている。誰にも――母自身にさえも、思い出の中の母の温もりを彼から奪うことは出来ないのだということを。

そう、母の愛は、ずっと、自分の中にあったのだ。

母だけではない。彼は、これまでもずっと、多くの人に愛されていた。

(そうだ、俺には、ちゃんと、愛してくれる人がいたんだ。じいさん、ミュシカ、ヴィーレとその一家、ローイや、自警団の仲間たち……。大勢の人たちが、みな、それぞれに、俺を慈しんだり慕ったりしてくれていた。ただ、自分の頑なな心が、それを受け入れられなかっただけなんだ。ドラゴンは、きっと、俺の記憶を読んで、俺への贈り物として、そのことを思い出させてくれようとしたんだな……)

ドラゴンの脇に跪いて頭を垂れたアルファードの目から、ただ一

粒、涙がこぼれ落ちた。その涙と一緒に、心の中にわだかまっていたものが、溶けて流れさっていった。これからは、もう、母のことを思い出しても泣くことはないだろう。

アルファードは手を伸ばし、さっきの一言を言い終ると同時に息絶えたドラゴンのまぶたを、掌でそっと閉じてやった。

ドラゴンは、憎むべき敵だった。そして、卑怯にも、己の弱さを乗り越えて自らを厳しく鍛え上げ成長してきた今の自分をではなく、心の迷路の奥に取り残されて泣いていた幼い自分を攻撃した。人の心の奥底の、自分でさえ足を踏み入れたことのなかったやわらかい場所を踏みにじった。

けれど、その結果、自分は、今まで見失っていた迷子の幼な子を見出して、迷路から連れ出すことができたのではなかったか。闇の中に取り残されてずっと独りで泣き続けていた幼な子に手を差し伸べて、自分の中に迎え入れることが出来たのではないか――。

ならば、もう、ドラゴンを恨むまい。

アルファードは、ドラゴンのために、死者を送る短い祈りを捧げた。

孤独な地底の女王は、あまりに長過ぎたその一生を、今、やっと終えたのだ。

その時、アルファードの腕の銀の腕輪がふいに左右に割れ、からんと床に落ちた。そこだけ日焼けしていない肌が現われた。

いくら魔法で補強してあるとはいえ、銀は、そう丈夫な金属ではない。たぶん、さっきの戦いで幾度も攻撃を受け止めているうちに留金や継ぎ目の部分に負荷がたまり、今になって耐え切れなくなって、壊れてしまったのだろう。

そういえば、さっき服を全部脱いだ時にもこれを取るのを忘れていたと、彼は思い出した。彼は、この腕輪をあまりに長いこと肌身離さず身につけ続けていたので、もう自分の身体の一部のように感じていたから、剣帯や衣類に気を取られて腕輪にまで気が回らなかったのだ。だから、ここだけは、ドラゴンの血を浴びていない。

今までは、この腕輪を、非常の時の防具代わりとして攻撃を受け流すのに役立ててきたが、それが壊れてしまって、もう防具として使えないとなると、これからの戦いで、ここは弱点になるだろう――。

しまった、という思いが、一瞬、頭を掠めたが、力が溢れ出さんばかりに全身に漲っている今の彼は、もう何も怖くないような気がして、それほど気にすることもないと思い直し、落ちた腕輪を拾い上げた。

その裏に、一つの文字が彫ってあった。

むろん彼は、そのことを知っていたが、その文字は読めなかったので何かの模様だろうと思い、外さなければ見えない内側だということもあって、そのままずっと忘れていたのだ。

けれど今、かつては奇妙な記号にしか見えなかったその文字を、彼は、読むことができた。

それは、『竜』という文字で、いかにもその文字を知らない他国の人が形だけ真似て書いたらしい、ぎこちない、いびつな字体で刻まれていた。恐らく、彼がこの世界に現われた時の衣服なり持ち物なりに記されていたこの文字を、老人が、何を思ってか、ここに彫っておいてくれたのだろう。

（……リュウ。――ああ、ドラゴンのことだ。そうか、これは、俺の、本当の名前――俺の、『向こう』での名前だ……）

――『アルファード、お前の中には、ドラゴンがいる』――

養い親の老人の言葉が、胸に蘇った。

けれども、その言葉を思い出しても、今はもう、痛みは感じなかった。

（そうか、あれは、こういうことだったのか。じいさんは、たぶん自分でも知らないうちに、俺の本当の名前を言い当てていたんだな。俺はずっと、そんなものを恐れていたのか――）と、アルファードは静かに微笑んで、持って行くわけにはいかない壊れた腕輪をそのまま地面に置き、感謝とともに、別れを告げた。

アルファードは、裸の上体に剣帯だけをつけ、着られなくなったシャツで丁寧に血を拭った愛剣を吊した。

そして、そうしながら、ふと自分の姿を見下ろし、身体に付いた血が消えてよかったと思った。

（あの血塗れのまま駆けつけたら、リーナは、どんなにか、驚き、怯えただろう。俺が大怪我をしていると思ってショックのあまり気絶でもされてしまったかもしれない。せっかく再会したリーナを思わず抱きしめようとして駆け寄っても、怖がって、そばに来ないでと悲鳴を上げて逃げられてしまったに違いない。生きて再びリーナをこの腕に抱きしめるためだけに、俺は、命がけで戦い抜いてきたんだというのに。

……いや、俺は何を考えてるんだ。俺がリーナを抱きしめたりするわけ、そんなことできるわけ、ないじゃないか。いくら俺が死地からからくも生還してきたところだとしたって、そして、俺の心の中ではそれがリーナに再び会いたい一心でのことだったからといったって、それはこっちの勝手な事情で、彼女にとってはそんなことは知ったことじゃないんだから、自分一人の勝手な思い入れでいきなり抱きついたりしたら、それこそ、リーナは、死ぬほど驚くぞ。なにしろ、よく考えてみれば、俺たちはまだ全然そんな仲じゃなかったんじゃないか！　俺が、いつのまにか、まるで恋人同士だったように錯覚してしまっていただけだ。

そうだ、思えば俺は、今まで一度も、彼女に好きだとも何とも言わずにいたんだ。なぜだろう。俺はいつだって、あの子のことを、あんなにも可愛く、愛しく思い、何よりも大切だと、誰にも渡したくないと思っていたんだったのに。そうだ、本当は、ずっと、ずっと、あんなに好きだったのに！　どうして今まで、それに気付かずにいたんだろう。

……いや、気付いてはいたんだが、それを認めるのが怖かったんだ。そういえば、前に、ローイに、俺は女を恐れていると言われたことがある。それは、恋愛をした時の自分が怖いからだろうと。た

しかに、そうだったのかもしれない。たしかに、俺は、自分の中に潜む何か暗いもの、荒々しいものを、ずっと、恐れていたんだと思う。その正体を知ることが出来ず、自分自身が解らずにいたから、それで、自分の殻を破るのが怖かったんだ。

でも、今はもう、俺は知っている。俺はあの子が好きなんだってことを。今すぐにでも、あの子のもとに駆けつけて、大声で告げたい。大好きだと、愛していると、叫びたい。でも、きっと、顔を見たら、やっぱり何も言えないんだろうな……。

それでもいい。何も言えなくても、もしもリーナが道に迷って独りで怯えているのなら、そばに行って、一緒に道を探すことができる。疲れて座り込んでいたら、背負ってあげよう。何かと戦っていたら、駆けつけて加勢しよう。怪我をしていたら、手当てをしてあげよう。もしもリーナがすでに魔王に囚われていたら――死力を尽くして救い出してみせる。自分の力で、彼女をこの手に取り戻してみせる。リーナ、俺は絶対、君の元にたどり着く。今すぐ行くから、待っていてくれ……！）

アルファードは決然と顔を上げ、振り向くことなく洞窟を駆け出していった。

第四章＜荒野の幻影＞第七場（1）

「エレオドリーナ。今、ドラゴンが死んだ。どうやら、そなたの羊飼いが、彼女に勝ったらしい。すぐに、ここまでやってくるだろう」

魔王が、里菜の耳元で囁いた。

「あやつ、ただの虫けらと思ったが、なかなかに侮れぬ男だ。むろん、そなたの助けがあってこそ勝てたのだろうが……。どうも、私は、今のそなたを、ただの無力な小娘と見くびり過ぎていたらしい。どのような姿と心を持っていようとも、そなたはエレオドリーナであることを、忘れていたわけではないのだが……。私は、あの男へのそなたの想いを軽んじて、油断しておったのだろうよ。

万一、あやつがドラゴンをうまく出し抜いてここまで登ってきてしまった時のために、ここの扉にちょっとした罠を仕掛けておいたのだが、ドラゴンが死んだとなれば、それもおそらく、無効だろう。あの罠は、あのドラゴンがあやつにかけた術を土台として利用した上に組み立ててあったから、ドラゴンの影響力が消えてしまった今となっては、私の細工だけが残っていても、剣が朽ちてしまった後に鞘だけが残っているようなもので、もはや単なる形骸に過ぎんからな。

……しかし、いずれにせよ、もはやそなたは私のもの。それに、我等の婚礼の客には、犬臭い羊飼いなどよりも、竜の血の戦士であり＜魔法使い＞である男のほうが相応しい。丁重に迎えてやろうではないか。それもまた、婚礼の祝宴に華を添える面白い余興となろう。さあ、花嫁よ、婚礼の身支度を」

そう言うと、魔王は、その美しい長い指で、里菜の三つ編みの青いリボンを解いた。緩い三つ編みはすぐに解けて、柔らかな黒髪が、はらりと背中に広がる。

魔王は、その髪を愛しげに撫で付けて整えると、今度は、里菜の青いワンピースの肩のあたりに、祝福を与えるように軽く手を触れ

た。

ヴィーレが作ってくれた質素な羊毛製のその服は、魔王の指の触れたところから、細かな真珠や宝石を一面に散りばめた、豪華な純白の花嫁衣装に変わっていった。

透けるように薄く軽やかなその生地は、幾重にも重なって微妙な陰影を見せながら、月光にも似た淡い輝きを放ち、里菜のほっそりした身体をふわりと包み込んで、さらさらと、やさしく揺れる。三つ編みを解いたばかりでゆるく波打っている黒髪には、夜空にまたたく星のように無数の細かな真珠が散りばめられ、月の光のように透き通るヴェールが、足元まで軽やかに流れ落ちる。

最後に仕上げに、魔王は、

「女王の冠だ」と囁きながら、青いサファイアを飾った華奢な銀のティアラを祭壇の上から取り上げて、厳かに里菜の頭に戴かせた。

「エレオドリーナ。実に美しいぞ……。人間どもの婚礼の衣装も、悪くない」

一歩下がって、清楚で可憐な里菜の花嫁姿を眺めながら、魔王は満足げに呟いた。

実際、この時の里菜は美しかった。

里菜はもともと、特に人目を引くような美少女というわけではなく、どちらかというと目立たない、おとなしい容姿の持ち主だが、今はその地味ささえ欠点にはならず、かえって彼女の愛らしさ、清楚さを際立たせているし、身体つきの未熟さ、貧弱さも、ふうわりとしたドレスにカバーされて目立たないばかりか、土台の細さと衣装のボリュームがうまく引き立てあって女性らしいたおやかなシルエットを作り出し、やせっぽちの彼女を、いつになく豪華に演出している。顔立ちに残る幼さも、今の彼女を、その気品や美しさが損なわれるほど子供っぽくは見せず、むしろ、年若い花嫁にふさわしい初々しさ、清純さを程よく強調していて、里菜はまるで、世界一の陶工が己の最高傑作とするべく全身全霊で命を吹き込んだ陶磁の花嫁人形のように、愛らしく、美しく、高貴に清らかに見えた。

けれど、花嫁の黒い瞳はガラス玉のようにうつろで、そのあどけない白い顔には、何の表情も浮かんでいなかった。魔王の呪縛は、さっきよりもずっと強く、里菜の魂を捕らえていたのだ。

さっきは、魔王には、まだ油断があった。アルファードへの憎しみから、里菜の思考を完全に奪わずにおいて、アルファードが傷つくところを見せつけてやろうとしていた。けれど、もう、魔王は、このちっぽけな少女の持つ思いがけない力を知っている。

魔王は今一度、里菜を抱き寄せた。魔王の冷たい指が、里菜の細いうなじを滑って、黒髪の中にそっと潜り込む。

里菜は、人形のようにうつろな表情のまま、ぴくりと身を震わせ、微かに喘いだ。その指の氷のような冷たさが、指の触れたところから、じかに頭の内側に忍び込み、脳髄が痺れていくような気がした。あらゆる意識を凍りつかせるようなその冷たさは、一種、快感に近い、不思議な感覚だった。己の思考が麻痺し、闇に引きずり込まれていく感覚を、里菜はもう抗うこともなく陶然と受け入れた。

「おお、私の花嫁よ、これからやってくる婚礼の客も、そなたのこの姿を見て、さぞや感嘆することであろうよ……」と、魔王は、かすかに意地悪い喜びを潜ませて笑った。

「私の花嫁がこんなにも愛らしいのを知ったら、あやつは、我等を祝福すべき婚礼の客としての礼儀も忘れて、嫉妬に荒れ狂うやもしれぬな。どうせ、たかが薄汚い羊飼いの分際では、そなたを手にいれようなどと考えるだけでも不遜なことだというのに、あれは、身のほどを知らぬ男だからな……」

魔王のこの言葉を聞いても、里菜はもう、羊飼いというのが誰のことかすら思い出せなくなっていた。それなのに、里菜の胸に、理由も分からない悲しみが淡く広がった。

――なぜ、自分は、今、悲しいのだろう。美しい花嫁衣装に身を包み、待ち望んだ婚礼の祭壇の前に立つ、幸福な花嫁であるはずの自分が……。

里菜のうつろな瞳から、一粒の涙が溢れた。涙は、薔薇の花びら

に零れた雨粒のように、柔らかな頬のうぶ毛の上を転がり落ちる。
頬を滑って落ちてゆく涙を、魔王の美しい指先が、まるで高貴な宝石に触れるかのような恭しげな仕草で、そっと掬い取った。
そうして、魔王は、楽しげにくつくつと笑いながら囁いた。
「花嫁よ、このめでたい時に、そなたは、なぜ泣くのだ？　そうか、あまりにも幸せだからなのだな……。さあ、まもなく、客が到着するぞ。私もそろそろ婚礼の盛装を整えて、客を迎える準備をせねばなるまい」
魔王は、そう言うと、深々と顔を隠していた黒いフードを後ろにはね除けた。
フードの下から現われたのは、この世のものとは思われぬ完璧な美貌だった。
魔王は、里菜が勝手に想像していたような老人ではなかった。といって、若いというわけでもない。あえていえば、それは青年の顔だったが、ただ若いのではなく、それは、老いも若さも全て含んで年令を超越した美貌――年令を持たないものの、人ならざる美貌だった。
その肌は月光のように白く、長い髪と憂愁を含んだ美しい瞳は星をちりばめた夜のように漆黒に輝き、形よく秀でた高雅な額には黄緑色のシルドライトをはめ込んだ黄金の円環が輝いている。優美で繊細な細面の顔は、一点の瑕疵もなく気高く整い、完璧な唇が冷たく婉然とした微笑みを湛え、そして、その、昏いまなざしには、さっきまでフードの下で渦巻いていた永遠の宇宙の闇が宿っていた。
魔王は、顎に手を添えて仰向かせた里菜の顔の上に覆い被さるように、その美しい顔を間近に寄せていきながら、笑いを含んで囁いた。
「私の、婚礼の盛装だ。約束どおり、私も人間の姿で、婚礼に臨もう」
その瞳の中の眩く深い闇が、里菜のうつろな瞳を覗き込んだ。里菜の意識が、果てしない虚無の深淵に吸い寄せられ、止めようもな

く闇の底に引き込まれていく。
　魔王は、妖しく冴えた切れ長の目を細めて、ふと微笑むと、身を屈め、人形のように無抵抗な里菜の、あどけない小さな唇にくちづけた。かすかに開いた唇から、身うちに冷たい闇がそそぎ込まれるような、そんな、ひんやりと昏い、死のくちづけだった。

第四章＜荒野の幻影＞第七場（2）

アルファードは駆けた。もはや迷うことなく全速力で地下迷宮を駆け抜け、果てしなく続くかのような暗いらせん階段を、休むことなく駆け上った。汚れたぼろ布を纏ってはいても、アルファードの身体には、今や、活力が漲り、どこまででも駆け続けられるような気がしていた。

里菜のもとに一刻も早く駆けつけたいという、その思いだけに衝き動かされ、他のすべてを忘れて長いらせん階段を登りつめたアルファードは、たどり着いた頂上の扉の前で、一瞬、立ち止まった。取っ手に伸ばされた手が、ぴくりと震えて、途中で止まった。

（扉ヲ、開ケテハ、イケナイ――）

どこかで、そんな声がしたような気がした。

（そう、扉を開けては、いけないんだ……）と、彼はふいに思った。（この扉を開けたら、何か、取り返しがつかないことがおこる。……そうだ、きっと――、知ってはならないことを知ってしまう。見てはならないものを、見てしまう！）

再び、どこかで――たぶん、頭の奥で――、呪文のように、声が囁いた。

（ソウ――扉ヲ開ケテハ、イケナイノダ。ソウシタラ、オ前ハ、禁忌ヲ侵シタ罰トシテ、何カヲ――カケガエノナイ何カヲ、失ウダロウ、永遠ニ、失ウダロウ――）

気がつくと、彼の前にあるのは、幼いあの日の、母の寝室のドアだった。絶対に開けてはいけない、禁断の扉。決して触れてはならない禁忌の領域。このドアの向こうに待つものは、喪失。取り返しのつかない、永遠の喪失。そして、痛み。終わりのない苦悩――。

が、彼が立ちすくんだのは、一瞬のことだった。

（違う！）と、彼は心の中で叫んで、古い幻影を追い払った。あの悪夢が彼を呪縛することは、もう、ないのだ。

目の前にあるのは、再び、もとの、古ぼけた木の扉だった。

（そういえば、これまでも俺は、幾度か、見知らぬ扉を開けようとする時、こんなふうに一瞬、戸惑うことがあった）と、彼は思い出した。

その時は、自分が何を恐れているのかわからなかったし、何かを恐れているとさえ気づかず、自分の理由のない一瞬の躊躇を深く意識することもなく、その都度、そのまま忘れてきた。けれど、今、彼は、その時自分が恐れていたものを知っている。

今はもう、そんな古い悪夢に怯える必要は無いのだ。なぜなら、自分はもう、自分が誰かから愛されていることを知っているのだから――。

彼は、もう、ためらうことなく扉に手をかけ、力一杯、一気に押し開いた。

「リーナ！」

叫びながら部屋に飛び込んだアルファードが見たものは、丈高い魔王に背後から肩を抱かれてひっそりと立つ、純白の花嫁衣装の里菜の姿だった。

駆け寄りかけた足を止めて、アルファードは立ちすくんだ。

今、その部屋は、里菜が足を踏み入れた時のような宇宙空間でも、その後で里菜が見たようなながらんとした石の小部屋でもなく、古代の遺跡が真新しく蘇ったかのような、荘厳にして清冽な神殿だった。

花に飾られた祭壇を背にして、たおやかな純白の花嫁が黒衣の死神の腕に抱かれているその光景は、不吉なほどに清らかで、妖しいまでに美しく、何か非常に神聖で厳かな気配を漂わせていて、その前に立ったアルファードは、自分がいかに不恰好で薄汚れた、無様な生き物であるかを、ふいに思い知らされたように感じた。

傷は治り、身体に浴びたドラゴンの血は消えていたとはいえ、長い階段を駆け上がってきた彼は、汗と埃にまみれていた。その上、半裸で、辛うじて身につけている衣服もボロ布同然、乾いた血と土がこびりつき、あちこちが裂け、破れて、ほとんど着ているともい

えないようなみすぼらしい状態だ。魔王の姿を目にしたとたん反射的に抜き放った剣も、ぼろぼろに刃毀れして、拭っても拭い切れなかったドラゴンの血脂で曇っている。

さっきまで何とも思わなかったそんな姿が、急に、眉を顰められ後ろ指を指されて当然の、野蛮で見苦しく冒涜的な、恥ずべきもののように思えた。

こんな、汗と埃と泥と血に汚れきった卑俗で粗野な人間などが、この清浄な祭祀の空間に暴力的に足を踏み入れること自体、すでに途方もない冒涜行為なのではないだろうか。この、美しく神聖な神々の抱擁を妨げようとするなど、死すべき人間の身には到底許されぬ、ひどく不遜な罪なのではないだろうか――。

そんな思いが、彼に襲い掛った。

その圧倒的な卑小感、罪悪感に打ちのめされそうになりながらも、アルファードは、もう一度、ためらいがちに里菜に呼びかけた。

「リーナ……？」

里菜はアルファードの呼びかけに応えず、縛られているわけでも押えつけられているわけでもないのに、魔王の腕を振り払ってこちらに駆け寄ってこようともしなかった。

アルファードは、里菜がすでに魔王に呪縛されて、完全に捕らわれていることを見て取った。アルファードの迷いは消え、魔王をまっすぐに睨みつけながら、再び足を踏み出した。

「よく来た、羊飼いよ……。我等の婚礼の客として歓迎しよう」

美しい死神が、優雅な弧を描く眉をわずかに上げ、端正な唇の端に蔑みの薄笑いを浮かべて言った。

死神は、本当に美しかった。人間では考えられぬ、その、完成された冷たい美貌は限りなく優美で雅やかで、けれどもどこにも脆弱さや女々しさは感じさせず、力強く誇り高い王者の威厳に満ちていた。着ているものは、何の飾りもない、ただの黒い長衣とマントだったが、その黒でさえ、星々の煌きを深く抱いた宇宙の闇のような、重厚にして絢爛たる漆黒であり、身を飾る装飾品といえば中央にシ

ルドライトを嵌めこんだ黄金の額冠だけなのに、どんなに大仰に全身を宝石で埋め尽くしても、これ以上豪華に、高貴に、蠱惑的に見えることはないだろうと思われた。

そして、魔王の黒衣に包み込まれるように立つ花嫁姿の里菜もまた、この世のものとも思われず美しかった。白い肌も黒い髪も、大きな瞳も、あどけないバラ色の唇も、あまりにも可憐で愛らしく、アルファードは胸が苦しくなったくらいだが、それはただ、里菜が愛らしすぎるからだけではなかった。この時の里菜の清らかさ美しさは、生身の人間の少女にはとうていありえないようなもので、アルファードは、里菜がもう、何か自分とは別の世界のものに——遠い存在になってしまったような気がして、胸が、締めつけられるように痛んだのだ。

里菜の瞳は、もう、こちらを向いていても、アルファードを映していなかった。その、うつろな瞳の中には、ただ、永遠の虚無の深淵だけが映し出されていた。

「死神め、リーナに何をした！」

絞り出すように、アルファードは叫んだ。

「何も危害は加えておらぬよ」と、魔王は薄く笑って応えた。

「私の大切な花嫁だ。手荒な扱いなどは、しておらん。ただ、真心を込めて、誓いのくちづけを捧げただけだ。むろん、嫌がったりはしなかったぞ。ほれ、この通り、私の花嫁は、様々な苦難を乗り越えてやっとたどり着いた花婿の腕の中で、こんなにうっとりと幸せそうにしておるのだ」

人間ならざる完璧な美貌の死神が、くつくつと笑いながら、これみよがしに少女を引き寄せ、背後から包み込むように抱き締めた。何の抵抗もなく、なすがままに抱き寄せられている里菜の無表情な瞳に、確かに陶酔の色が浮かんでいるのを、アルファードは見て取った。

アルファードは歯を食いしばって剣を構えた。

「きさま、リーナに、何かよこしまな魔法をかけたんだろう。卑劣

なやつめ。魔法の力を借りないとリーナに言うことを聞かせられないのを、きさまは自分で認めているんだ」

「何とでも言うがいい。どのような手段であれ、手に入れたものの勝ちだ。それに、羊飼いよ、私がこの娘に魔法をかけたというが、そなたはこの娘があらゆる魔法を消す力を持っているのを知っておるはずだ。この娘が魔法にかかるということは、それを望んでいるからなのだよ。この娘は、そもそもの最初から、私に強く惹かれておるのだ」

「嘘だ！　リーナはきさまのことなんか……！」

苦しげに叫ぶアルファードを眺めて、魔王は、満足げな薄笑いを浮かべていた。

魔王は、アルファードを苦しめるためだけに、こうして、戯れに、人間の目に見える完璧な美青年の姿――それは、かつて彼が神として人間たちに崇(あがめ)られていた頃の、彼自身も忘れかけていた古い姿だった――をとって見せたのだ。

里菜を誘惑するためになら、彼は別に、美しい顔を見せる必要などなかった。顔のない死神の姿であるうちに、すでに魔王は、里菜を魅惑し、呪縛していたのだから。里菜に花嫁衣装を着せたのも、こうして里菜をこれみよがしに抱き寄せて、耳たぶに唇が触れそうなほど顔を寄せて見せているのも、なにもかも、アルファードに見せつけるためなのだ。そして、この意地の悪い演出は、まさに狙ったとおりの効果を上げている。

アルファードに目に浮かんだ苦痛の色が、魔王の強い愉悦となった。思惑通りの反応に、魔王は、ほくそ笑んだ。

「リーナ！　目を覚ませ、リーナ！　君は魔王の罠に陥っているんだ。よこしまな魔法に捕らわれているんだ。リーナ、俺を見てくれ、俺の声を聞いてくれ！　君はどんな魔法でも消せるんだ。魔王の呪縛を破ることができるはずなんだ！」

アルファードは必死で里菜に呼びかけたが、反応はない。

「羊飼いよ、何をそんなに一人であらけなく喚きたてておるのだ。

そなたのその振る舞いは、婚礼の客として、かなり行儀が悪いのではないかな？　私はそなたが我等に祝いの言葉を述べにきたのかと思っていたのだが、そうではなかったのか？　もしや、この期に及んで、我等の婚礼に異義を唱えるつもりかな？」

玲瓏な白い面にうっすらと侮蔑の笑みを湛えたままで、魔王はアルファードを挑発していた。

「無論だ！」

魔王の神々しさ、美しさに圧倒され、畏縮しそうになる自分を励まして、アルファードは声高く叫んだ。

「きさまなぞに、リーナは渡さない！」

魔王は可笑しくてたまらぬという風に哄笑した。

「渡すの、渡さないのと言うが、この娘は、別にそなたの持ち物ではなかろう？」

「そ、それは、そうだが、でも、リーナはきさまの花嫁になることなど、望んでいない。そして俺は、リーナを……、リーナを、愛している。だから俺は、リーナをきさまの手から守る」

「そなたは何か勘違いをしておるのではないかな？　私は別に、この娘をたぶらかして連れてきたわけでも、力づくで攫ってきたわけでもない。この娘は、自分の意志で、自分で歩いて私の許に来たのだ。それに、そなたがこの娘を愛していようといまいと、そんなことには何の意味もない。そなたの気持ちなどには関係なく、私の花嫁は、私の妻になることを心から喜んでおるよ」

「嘘だ！　リーナは嫌がっていた。それに、リーナは、リーナは俺を……」

魔王は、ますます高く笑いだしながら、アルファードの言葉を遮った。

「好いていた、とでも？　そのような薄汚れた卑しい羊飼いの分際で、それはまた、よくよく自惚れたものだ。それでは、そなたは今まで、この娘にからかわれておったのだろうよ。人間の娘というのは、たとえ申し分のない婚約者がいても、自分の魅力を確かめるた

めに、あるいはちょっとした思い出のコレクションを嫁入り道具の引き出しに隠して持って来るために、婚礼を挙げる前に少しくらいは他の男の気も引いておいてみたがるものだからな。だから私は、そのくらいのことを咎め立てはしない。気紛れな小娘の、ほんの悪戯心だ。かわいいものだよ……。まあ、そんな戯れを真に受けて、こんなところまでのこのこついて来たそなたにしてみれば、ここでおとなしく引き下がる気にはならぬのだろうがな」

「当り前だ。引き下がってたまるか」

「では、今、私と、ここで戦うか？」

そう言うと、魔王は、あいかわらず人形のように立っている里菜を背後の祭壇の前に無造作に押しやり、大鎌を構えた。氷のようなその三日月型の刃が、透き通る光の雫を滴らせて、ぎらりと輝く。

アルファードは、身を低くして、無言で剣を構え直した。

魔王は、滴るような悪意を滲ませて低く笑った。

「愚かな羊飼いよ。負け犬のままで、おとなしく羊の番でもしておれば見逃してやったものを……。神に挑もうなどとは、よくよく思い上がった、身の程知らずだ。だが、これもまた、面白い余興ではないか？　我が麗しの花嫁も、さぞやこの余興を楽しむことだろうよ」

魔王の大鎌が、アルファードに向かって無造作に振り下ろされた。

第四章＜荒野の幻影＞第七場（3）

アルファードは、大鎌の最初の一撃をかいくぐって魔王の懐に飛び込んでいった。

アルファードの刃を、魔王は、僅かに身をずらしただけでやり過した。

アルファードは間髪を容れずに再び魔王に打ちかかり、そのアルファードの足元を、魔王の大鎌が狙う。

アルファードと魔王の、宿命の戦いが始まった。それは、竜の血を浴びた＜魔法使い＞と、絶望ゆえに変わり果て、昏い悪夢の中をさまよう堕ちた神との戦いであり、普通の人間同士の戦いとは全く違う不思議なものだった。

アルファードは力強く剣を操り続け、魔王は舞うように優雅な動きで軽々と大鎌を振り回しながら、その合間を縫って、それぞれ、空いた左手で炎や稲妻を互いに投げつける。魔法の攻撃は両者の真ん中の空中でぶつかりあって、眩い光を発して砕け散る。

魔王が手加減をしているのか、魔法の力は互角だったが、特に大振りではないアルファードの剣と、長い柄を持つ魔王の大鎌とでは、全く届く距離が違う。その点だけでもアルファードは圧倒的に不利だったが、ひるむことなく魔王に挑み続けた。が、何とか大鎌をかい潜って魔王に接近しようとするアルファードを、魔王は決して剣の届く範囲に近寄せず、彼を挑発するように余裕の笑みさえ浮かべて、ひらりひらりと身をかわし続ける。魔王が軽々と宙を舞うたびに、漆黒のマントがふわりと翻り、鎌の一振りごとに、冷たい光が、星くずのようにあたりに舞い散る。

けれども魔王の大鎌も竜の血を浴びたアルファードに傷を負わせることはなく、この戦いは、普通の人間同士の戦いのように、血にまみれた生々しいものにはならなかった。

両者はもはや、半ば宙に浮かんで戦っていた。塔の頂上の部屋で

あるはずのこの空間には、今や、壁も天井もないように感じられて、戦いはあたかも天上の雲の上で繰り広げられているかのようだった。目にも止まらぬ早さで空中を飛び交う両者の姿は、炎や稲妻、それに魔法同士の衝突の爆発に断続的に照らし出されて、影絵芝居のように見えた。それは、戦いというよりは、むしろ、様式的な神話劇の一幕か、あるいは美しい剣舞でも見ているような、幻想的な光景だった。

その、流血なき戦いを、生命の女王の祭壇の前に人形のようにたたずむ純白の花嫁が、うつろな瞳で見守っている。花嫁の瞳は、剣のひらめきや飛び交う魔法の光を映してはいるが、その情景の意味をほとんど認識していないのだ。

戦いながら、アルファードは、胸の中で里菜に呼び掛け続けていた。

（リーナ、目を覚ましてくれ。こんな呪縛は破ってしまえ。俺と一緒に、ここを出よう！　一緒に帰ろう！）

里菜のうつろな心の中に、自分でも意味のわからない言葉が浮かんだ。

（アルファード、アルファード、ごめんなさい。あなたは生きて。生き延びて、ここを出て。でも、あたしは、もういいの。ここはとても綺麗で、いい気持ち。このまま眠ってしまいたい……）

（駄目だ、リーナ！　これは君の戦いだ。魔王を倒せるのは、君だけなんだ！）

（アルファード、さようなら。ごめんなさい……）

里菜のうつろな瞳から涙がこぼれ落ちて、純白のドレスの胸元を濡らした。

（駄目だ、リーナ、俺は嫌だ！　君を失いたくない！　もしも君が本当に死にたいのだって、死なせてなんかやるものか！）

胸の内で叫びながら魔王に飛び掛かっていったアルファードの剣が、この時ついに、魔王の大鎌の柄を捕らえた。柄は半ばから折れて、下半分だけを魔王の手に残し、上半分は銀の刃をきらめかせて

弾け飛んだ。
アルファードはここぞと魔王に突っ込んでいったが、魔王はひらりと身を翻して攻撃をかわし、次の瞬間には、床に落ちた鎌を拾い上げていた。
折れて短くなった柄を握って魔王が鎌を一振りすると、大鎌は、光したたる巨大な白銀の偃月刀《えんげつとう》に姿を変えていた。
長大で威圧的な、その偃月刀の迫力に比べると、アルファードの剣は、いかにも小振りで、貧弱にさえ見えた。相対して睨み合う二人の様子も明らかに違う。汗を浮かべ、荒い呼吸に肩を大きく上下させ、切迫した形相で剣を構えるアルファードに対して、魔王は息ひとつ乱さず涼やかな視線を投げて、端然と佇んでいる。
目の前で何が起こっているのかも知らず、ただうっとりときらびやかな戦いの光景を見守っていた里菜の中に、かすかな不安が芽ばえた。
だが、何が不安なのか、今の里菜には、まだ分からなかった。
魔王は、巨大な偃月刀を重さのないもののようにすらりと振りかぶり、アルファードに襲い掛った。
剣と剣が、冷たい音を立てて切り結び、氷のような火花を散らして、また、離れる。
幾度目かに切り結んだ時、魔王とアルファードは、剣を押しあいながら間近に睨みあった。
魔王は、ふいに邪悪に目を細め、ふっと笑って囁いた。
「そなた、この顔に覚えはないか？　そなたの母親を誘惑したのは、この私だ。そなたが私の最も愛するものを奪った仕返しに、私もそなたの最愛のものを奪ってやったのだ」
「嘘だ！」
間髪を容れず、アルファードは否定した。あの男の顔なら、覚えている。確かに端正な男ではあったが、このような人間離れした凄絶な美貌の持ち主と見間違えようはない。

「そう、嘘だ。嘘だよ……。さすがに、ドラゴンを斃した今では、もう騙されぬか」
平然と言い放って、魔王は笑った。
「俺を、なぶっているのか」
アルファードは、額に汗を浮かべて魔王の偃月刀をぎりぎりと押し返しながら、低く唸るように言った。
「そうだ」
魔王はあっさりと答えて、秀麗な面に相変わらずうっすらと笑いを浮かべながら、剣を押してくる。
「俺を、愚弄するのか」
「そうだ。そうだよ！」
「なぜだ。なぜ、そうまで俺を憎む！？」
「花嫁を略奪しに神聖なる婚礼の席に乱入してきた男を、憎まない花婿はいまい？」
「だが、きさまは最初から俺を憎んでいる。俺が何をしたというんだ」
「さっき、言ったであろう。そなたは私の愛するものを奪った」
「そんなこと、俺は知らない」
「羊飼いのそなたは知らなかっただろうが、魔法使いのそなたは知っておるはずだ。思い出したはずだ。古い古い、我等の物語を……」
「……だが、あれは、俺じゃない！」
「いや、あれはそなただ。そこの娘がエレオドリーナであるのと同じようにな」
そう言い捨てた魔王が、ふいに剣を引いて飛び退ったので、アルファードは勢い余ってよろめいた。
その、一瞬の隙を、魔王は狙っていたのだ。
魔王の左手がアルファードの上腕を捕らえ、超人的な力でその腕を引いた。アルファードはもんどり打って床に倒れ込んだ。
起き上がろうとするアルファードに、魔王は悠然と歩み寄り、転

倒のはずみでアルファードの手を離れた剣を、足で遠くに蹴り飛ばした。

祭壇を背に、その光景を見ていた里菜の目が、わずかに見開かれた。うつろな瞳に、かすかな輝きが宿った。

「……アルファード？」

純白の花嫁の、つぼみのような唇から、小さな声が漏れた。

愛するものの危機を目前にして、里菜の意識が目覚め、記憶が蘇り始めた。

けれどもこの時は、魔王もアルファードも、里菜を見てはいなかった。

魔王は祭壇に背を向けていたし、アルファードは魔王を見ていた。アルファードに歩み寄った魔王は、床に膝をついて立ち上がろうとしていたアルファードの左腕を掴んで、ぐいと引き寄せた。

ずっと冷笑的で、ほとんど無感情に見えていた魔王が、この一瞬、我を忘れるほど膨れあがった邪悪な悦びに打ち震えていた。

「アルファード。薄汚い犬ころ、思い上がった愚かな虫けらよ……」

魔王は、息がかかるほど間近にアルファードに顔を寄せて囁きかけながら、悪意の滴る愉悦の薄笑いを浮かべ、アルファードの左手首の、その、ドラゴンの血を浴びていない一点に、偃月刀の刃を軽くあてがった。

（う、うそ……。アルファードが死んじゃう……）

呆然と考えた里菜は、いつのまにか、ゆっくりと口元に手をもっていった。少しずつ、身体が動くようになり始めている。

（こんなこと、おかしい。アルファードが死ぬなんて、そんなはず、ないわ。アルファードは、生きてなきゃいけない。生きて、あたしの隣にいなくちゃいけない。これは嘘よ。悪い夢よ。こんなこと、こんなこと、あたし、信じない……）

里菜の中から、ゆっくりと魔王の呪縛が消えていった。

信じないこと。それが、里菜のこの世界での特別な力――魔法を消す力の源だったのだ。

今、里菜は、魔王の力を、魔王の存在を、否定しようとしていた。
一方、アルファードは、冷たいやいばを手首に感じながら、最後に祈っていた。
（リーナ、エレオドリーナ、すべての生命の女王……。愛していた！）
「……死ね！」
一言冷たく吐き捨てて、魔王が、楽器の弓を引くように、すっと刃を動かしかけた時。
「だめーッ！」
背後で、引き裂くような叫びがあがった。
甘い死の夢から覚め、足元に落ちていた黄金の短剣を拾い上げた里菜が、白いヴェールをなびかせて走ってくる。
「だめ！　やめてーっ！」
里菜は短剣を構え、魔王にぶつかっていった。

第四章＜荒野の幻影＞第八場（1）

「魔王！　あなたなんか、信じない！　消えろ！」
絶叫とともに短剣を振りかざし、里菜は魔王に駆け寄った。
その瞬間の里菜の心に、もはや魔王への憎しみはなかった。さっき、最初にこの部屋で魔王に切りつけていった時は、怒りと憎しみが里菜を満たしていたが、今、里菜をつき動かしているのは、ただ、アルファードを死なせたくないという、その一心だった。他には何も、考えていなかった。魔王を殺すためではなく、愛する人を生かすためだけに、里菜は走った。
その時、アルファードを突き放してくるりと振り向いた魔王は、思いがけない行動に出た。魔王は、偃月刀を投げ捨て、里菜を抱き締めようとするかのように無防備に両腕を広げ、里菜の前に立ちはだかったのだ。
その、広げた腕の中に、里菜はまっすぐに飛び込んでいった。
呆然と見ているアルファードの前で、里菜の純白の花嫁衣装と、魔王の喪服のような黒衣がぶつかりあい、風を孕んでふわりと広がりながら絡みあった。
すべての動きが止まり、ひととき打ち重なってなびいた白い布と黒い布が、勢いを失って静かに垂れ下がった時、里菜は、魔王の腕の中にいた。
「エレオドリーナ。愛しい、妹よ……」
甘く、優しく、魔王が囁いた。
「長い、長い間、私はこの時を待ち続けて来たのかもしれない。たぶん私は、この日のために、その短剣をそなたに贈ったのだよ……」
言い終えると、魔王は抱擁を解き、胸に刺さった短剣ごと、ゆっくりと里菜の足元に崩れ落ちていった。
それは、魔王の、長い絶望の終りだった。
魔王は、胸に短剣を生やしたまま、床に倒れこんだ。

一瞬の後、立ち尽くす里菜の影でもあるかのようにその足元に黒々とわだかまる魔王の黒衣の下から、人の形がふっと消え失せ、代わりに、何か黒い煙のようなものが立ちのぼった。

同時に、轟音とともに床が激しく揺れ始めた。

壁が、天井が、土埃を上げて、崩れていく。

ばらばらになった石材が、頭上から振り注ぐ。

天井の崩れたところから、ぽっかりと、空が覗いた。塔の中にいるうちにいつのまにか一日が過ぎていたのか、それとも魔王の消滅が引き起こした怪異なのか、空は、夜のように黒かった。その空に、燃えるように赤いオーロラのようなものが広がっていた。巨大なオーロラは空一面を覆って、炎のように激しく揺れ惑い、荒れ狂い、天上の闇を焦がしていた。

ゆっくりと崩れ始めた塔の中、里菜は、周囲に石材が降り注ぐのも構わず、揺れる床に呆然と立ち尽くしていた。魔王のマントの下から立ち上った黒い煙が、すっ、と、里菜に寄り添い、その手首に纏わり付いてきたのだ。

里菜の手首の、最初に夢の中で魔王に会ったときに付けられた刻印のような傷跡は、あの後すぐに急速に薄れて、ほとんど人に気付かれないほどになっていたが、それでも確かに、まだ残っていた。その傷跡に、今、黒い気体が吸い込まれるように消えていくのを、里菜は声もなく見つめていた。

ちょうどその時、里菜の真上の天井に穴が開き、石材が、里菜の頭上に崩れ落ちてこようとした。

不思議な夢を見ているように魔王の最後を眺めていたアルファードが、はっと我に返った。

「リーナ！」

アルファードは、叫びと同時に跳躍し、飛び掛かるようにして里菜を床に押し倒すと、その上に覆い被さった。もうもうと上がった土煙が、二人の姿を覆い隠した。

今や、崩壊は塔全体に及んでいた。

暗黒の空に狂ったように乱れ舞う赤いオーロラの下、魔王の消滅と同時に魔法の支えを失った塔が、ゆっくりと崩れ落ちてゆく。

塔の中にいる里菜たちには、それは、轟音と危険を伴う現実的な崩壊だったが、もしもその光景を、塔の外、荒野から見ているものがあれば、それは寂しい夢の中の光景のようにしんとして、まるで音のない幻影のように見えていただろう。

けれど、この最果ての荒涼の地には、空から崩壊を見下ろす鳥も、地上から見上げる獣たちもいない。

誰ひとり見守るものもないままに、幻の城が、消えていく。ひとつの古い悪夢が解体してゆく。

ばらばらになった石材は途中でさらに砕けて砂に変わり、ずっと止まっていた砂時計が動き出したように、音もなくなかぞらを流れ落ちる。凝り固まった古い時間がさらさらと落下して、無人の荒野に降り積もる。

土煙の中で徐々に崩れてゆく塔の回りを、風が、弔うように、泣きながら吹き荒れていた。

そのほとんどが崩れ去った時、塔の残骸は、突然、魔物が消える時のように青白い炎を上げて、紙のように燃え上がった。

青い炎はすぐに消え、後には、何も残らなかった。瓦礫や砂の山はすべて消え失せ、ただ、乾いた荒野だけが、どこまでも平らに広がっていた。

時を同じくして空のオーロラも消えていった。オーロラが消えた空は、いつのまにか、北辺の地の曇った午後の、ぼんやりとした灰色の薄明かりを取り戻していた。

その、灰色の空の、ちょうど塔のてっぺんの部屋があったはずのあたりに、ぼんやりと光る、不思議な球体が浮んでいた。しゃぼん玉のようなその透明の球体は、塔が消えてもまだ収まらぬ土煙の中をゆっくりと下降し、砂の上に、ふうわりと着地した。

風が、砂塵を吹き払っていく。

土煙が晴れた時、球の中には、ぐったりとした里菜を腕に抱いたアルファードの姿があった。里菜の服はもとの質素な青いワンピースに戻っている。

地面に触れたしゃぼん玉が割れるように、ふたりを包んでいた透明な膜が消えた。

荒野に降り立ったアルファードは、地面に片膝をついて、里菜の身体を、壊れ物を扱うようにそっと砂の上に横たえた。その上半身は自分の膝にもたせかけて、両腕で肩を抱き、仰向いた顔を心配そうに覗き込む。

アルファードの動作は慎重だったが、横たえられた里菜は、白い喉をのけ反らせ、激しく身悶えていた。額には汗が浮び、その目は苦痛に見開かれ、中空をさまよっている。

「あ……あーッ！」

苦しげなあえぎと共に、手足を引きつらせて、華奢な身体が跳ね上がろうとする。アルファードは、暴れる里菜の身体を自分の上体で押え込みながら、膝に乗せた小さな頭を胸に掻き抱いて、呼び掛け続けた。

「……リーナ！　リーナ！？」

第四章＜荒野の幻影＞第八場（2）

アルファードの呼び声を遠く聞きながら、里菜はもがき苦しみ続けた。

手首の傷痕が、燃えるように熱い。身体中が、引き裂かれるように痛む。

苦しい。もう、身体のどこが痛いのか、そもそも痛いのは心なのか身体なのかさえ区別もつかないほど膨れ上がった大きな苦痛が、全身を駆け回って里菜を苦しめたあげく、吐き気となって込み上げようとする。

里菜の中に、今、魔王の――男神タナートの記憶が、想いが、奔流のように流れ込んでいた。

決して触れ合うことの叶わぬ光に焦がれて呻吟し続けた男神タナートの苦しみ。アルファードの死を受け入れることを拒んで世界の秩序を裏切った女神エレオドリーナの古い罪。エレオドリーナの裏切りゆえに心を狂わせて＜魔王＞となったタナートの絶望と憎しみ――。

遠い昔から地層のように幾層も積み重ねられて渾然と混ざり合い、タナートを苛み続けた永い痛みの記憶が、里菜の体内を、激しく吹き荒れる。

今にも、この、古い古い悲しみの嵐が、身体を突き破って解き放たれてしまいそうだった。そうすれば、里菜の身うちから溢れ出た闇が、世界を覆い尽くしてしまうだろう。

自分の中で、今、激しい戦いが起こっている。

怖かった。どこへでもいいから、逃げ出してしまいたかった。誰かが押えていてくれないと、このまま世界の果てに向かってやみくもに駆け出して、暗い宇宙の深淵に身を投げてしまいそうだった。

気がつくと、遠くで、ずっと、自分を呼ぶ声がしている。誰かの、暖かい強い腕が、自分の身体を抱き締めている。里菜は夢中で、そ

の腕に、爪を立てるほどにすがりついた。そうしていないと、自分の身体が、精神が、ばらばらに砕け散ってしまうかと思われた。

永遠に続くかに思われたその苦しみは、けれどもやがて、ゆっくりと収束に向かった。

ぶつかりあっていたふたつの力がひとつになり、自分の中に、何か新しいものが生れ出ようとしている。里菜の意識が、宙の高みに漂っているように、それを外から眺めている。

里菜は今、宇宙の始まりを、逆回しで見ていた。

すべての光が、ひとところに収斂し、劫初の混沌の底知れぬ淵に吸い込まれていく。混沌が――あらゆる光を孕んだ永遠の闇が、里菜の中心に渦巻いている。

その、混沌の渦の上に、ふたつの人影が浮び上がった。

それは、手を携えあって立つ、女神エレオドリーナと男神タナートの、神代の頃の姿だった。

タナートは、もはや、顔のない＜魔王＞ではなく、死と闇、夜と安息を司る、厳格にして公正なるもの――夜のような黒髪、黒い瞳、月光のように白い肌、端麗な面差しの、丈高く力強く美しい黒衣の男神という本来の姿に立ち返り、その黒衣には、幾千の星々がちりばめられて輝いていた。

静謐な気配を纏った男神タナートが、里菜の胸の奥で、最後に囁いた。

『エレオドリーナ。これでまた、ひとつになれた……』

それは、満ち足りた、穏やかな想いだった。

里菜は今、＜魔王＞を――タナートを、その裡（うち）に収めたのだ。

光輝く青い衣を纏ってタナートの隣に立つ生命の女神エレオドリーナは、太陽のような、麦の穂のような黄金色の、ゆるやかに波打つ髪に、やわらかく澄んだ青空の色の夢見るような瞳を持ち、やはり丈高く力に満ちた、堂々たる女人の姿をしていた。花冠を戴き、麦の穂を手にした女神は、その美しい顔に母のような慈愛に溢れる微笑みを浮べて、里菜にやさしく頷きかけた。

二柱の兄妹神は、顔を見合わせて穏やかに微笑みあい、手を取りあって、母なる混沌の中に還っていった――。

＊

アルファードの腕の中で暴れていた里菜の身体が、急に動かなくなった。それまでこわばってひきつっていた手足が、ぐったりと垂れ、宙をさまよっていた瞳が閉ざされる。

「……リーナ？」

突然の静寂に不安になったアルファードが里菜の顔を覗き込むと、里菜はぽっかりと目を開いて、穏やかに微笑んだ。

「アルファード……。ありがとう」

アルファードは、里菜の額の汗を手で拭って微笑みを返し、里菜がふらふらと立ち上がろうとするのを助けた。

アルファードの腕にすがって立ち上がった里菜は、塔が消えた後の荒野を見はるかしながら、静かに告げた。

「魔王は、あたしの中に還ってきたわ。そして、母なる混沌も、あたしの中に……」

「そうか……。リーナ。君は、勝ったんだね」

アルファードはそっと里菜の左手を取って、不器用に身をかがめ、手首の傷痕に軽く唇を触れた。

びっくりして目を丸くした里菜に向かって、アルファードは、照れたように笑んで短く説明した。

「封印だ」

「そっか、アルファード、もう、魔法が使えるのよね。さっきも魔法の結界であたしを助けてくれたでしょ。ありがとう」

「いや、礼を言うのは俺の方だ。君が、俺を救ってくれたんだ」

「アルファード、あなたも勝ったのね」

「ああ」

里菜はアルファードにほほえみかけ、それから、ふと落とした視

線をアルファードのからっぽの剣帯に留めて訊ねた。
「アルファード、剣は？」
「ああ、どうやら、魔王の城が消えた時、一緒に消えてしまったらしい。でも、別に、もう、いいんだ」
「えっ、でも……。あんなに大事にしてて、いつも持ち歩いてたのに……」
「いや、本当に、もういいんだ。もう、剣は要らない。戦いは終わったし、それに……」
アルファードはちょっと言い淀んでから続けた。
「力は、もう、自分の裡に在るから」
言ってしまってから、アルファードは、自分の言葉に照れて、ちょっと笑った。
それからアルファードは剣帯を外して、地面に膝をつき、捧げ持った剣帯を、剣の身代わりに砂に横たえると、女神に祈る時にするように胸に手を当てて頭を垂れ、これまで自分の身を守り心を支えてくれてきた愛用の剣に、声に出さずに感謝の祈りを捧げた。
無言の別れを済ませて立ち上がったアルファードがかたわらの里菜を振り返ると、里菜は、何千年分もの叡智を宿したような、奇妙に大人びたまなざしでやさしく彼を見上げ、不思議な微笑みを浮べた。
それは、すべてを受け入れ、包み込む、女神の笑みだった。目の前のちっぽけな少女の後ろに、金色の光に包まれた丈高い女神の姿を、一瞬、見たような気がして、アルファードは目をしばたたいた。
けれどもそれは、ほんとうに一瞬のことで、里菜はまた、小さなあどけない少女に戻って、はにかんだように顔を伏せた。
ふたりはしばらく、無言で並び立って、それまで塔があったはずの場所を——草一本生えていない荒れ果てたむき出しの大地を、眺めていた。
「……寒い」
しばらくして、里菜がぽつりと呟いた。

ドラゴンの息と魔王の憎しみがもたらしていた熱が消えた今、荒野は急速に冷え込み始め、気温は、この土地の本来の気候にまで下がっていこうとしていた。

ふたりが脱ぎ捨てたマントは、城が消えた時に、アルファードの剣や他の荷物と一緒に消えてしまっていた。里菜のワンピースは、赤ん坊ドラゴンから逃げ回った時に転んだりひっかけたり爪で裂かれたりして、裾がぼろぼろだったし、アルファードに至っては、上半身、裸だ。

里菜はぶるっと震えて、両腕で我が身を抱きしめた。

アルファードは、ふと微笑んで、おもむろに両手を上に向けて差し上げた。

その掌の上に、しゃぼん球のような丸い結界に包まれた小さな炎が浮んだ。暖かにゆらめく炎の球を、アルファードはそっと両手に包んで、里菜に差し出した。

両手で受け取った炎をためつすがめつ眺めながら、

「アルファード、こんなこともできるようになったんだ……。すごぉい」と、里菜が感心すると、アルファードは面映(おもはゆ)そうに、

「ああ」と、頷いた。

暖かな色合いの小さな炎は、掌の上に浮びながら静かに踊り、そのぬくもりが、すぐに里菜の全身に広がっていった。

うっとりと炎を見つめている里菜の手の上から、アルファードが、そっと炎の球を掬いとって、頭上に浮べた。思わず目で炎を追って仰向いた里菜を、アルファードが引き寄せて、里菜の唇に、そっと唇を重ねた。

軽く触れるような短いくちづけの後、里菜はうつむいて、アルファードの胸に顔を埋めた。顔を上げるのが恥ずかしかったし、何か言うのも恥ずかしかった。

けれども、アルファードが何も言わないので、そのまま黙っているのも気まずい気がして、顔を伏せたまま、照れ隠しに囁いた。

「……アルファード。これも、何かの魔法なの？」

「そうかも知れない。人を愛することが、女神の魔法であるのなら」
かすかに笑みを含んだ静かな声でアルファードは答え、里菜をふたたび仰向かせると、もう一度、静かに唇を重ねた。それは不器用で暖かい、生命のぬくもりだった。
唇を離して、ふたりは一瞬、見つめあった。
「アルファード。生命の光、生命の闇……。あなたを、愛している」
里菜が囁くと、アルファードは黙って里菜を強く抱き寄せた。ふたりの頭上で、丸い結界に包まれた小さな炎が、生命そのもののように、静かに暖かく燃え続けていた。
しばらくして、また沈黙に耐えられなくなった里菜は、アルファードの腕の中で、小さく笑って呟いた。
「アルファード。水を汲みにいかないの？」
「ああ」と、アルファードも照れくさそうに笑って答えた。
「あの時は、逃げたりして済まなかった。その……。どうしていいか、分からなかったんだ。でも、今は、水を汲みに行く必要はなさそうだ。水なら、ほら……」
そう言ってアルファードは、里菜の肩をやさしく押しやり、顔を上げた里菜に、片手を上げてかたわらを差し示した。
その指の先を、ひとひらの雪が舞い落ちてゆくところだった。

第四章＜荒野の幻影＞第八場（3）

灰色の空から、雪が、音も無く、後から後からひらひらと舞い始めた。それは、ずっと雨も雪も降らなかったこの荒野に、何千年ぶりかで降り出した雪だった。

アルファードは空を見上げて、静かに言った。

「ここは、また、かつてのように緑の野となるだろう。雪と氷に閉ざされた長い冬の穏やかな眠りの後に、短い夏が訪れ、一面に花は咲き乱れて、兎や狼の子供たちが、緑の苔の上で戯れるんだ」

里菜は、雪の一片をてのひらに受けながら、うっとりと微笑んで頷いた。とても幸福な気持ちだった。

そんな里菜に、アルファードが、穏やかに促した。

「さあ、その日のために、エレオドリーナ、生命の女王よ、大地に眠る古い種子たちに祝福を。種子たちは、君だけを待って、この大地の奥深くで何千年も眠り続けてきたんだ」

里菜は、舞い落ちる雪の中にすっくと立ち、厳かに片手を上げた。それは、やせっぽちでちっぽけな少女の、かぼそい手だったが、今、そのかよわい少女の肉体と声を通して大地を祝福しているのは、力強く威厳に満ちた堂々たる生命の女王、その人だった。

「この大地に、大地の奥の眠れる種子に、祝福を……」

歌うように夢見るように、里菜は言い終えて、手を下ろした。

アルファードがそっと里菜の肩を抱いた。

「大地は目覚めた。誰にもできない、君だけの魔法だ」

寄り添うふたりの前で、大地は喜びに震え、来るべき日の夢を荒野の上に描き始めた。

土の下で、長いこと眠っていた植物の種たちがいっせいに目覚め、小さな殻を突き破って白い根を伸ばし、芽を吹き出すのが視える。

雪解け水に濡れた土を力強く割って現われた緑の芽は、みるみるうちに天を指して伸びて行く。

草に覆われた緑の大地には、灰色の兎たちがうれしそうに飛びはねながら草を食み、戯れ、番《つが》い、走る。狼が現われて兎を殺し、大地に赤い血が流され、狼が去った後、残された兎の残骸を、その、血の跡を、たちまち草が覆い、その下で、むくろはやがて土に還る。夏が過ぎ、草が枯れ、白い雪が大地を覆う。

そしてまた夏が訪れ、大地は芽吹き、雪の下から兎の白骨が現われ、あばらのすき間から、うつろな眼窩から、新しい芽が伸びて草が茂り、その草の上を、次の世代の仔兎たちが、嬉々として飛び越えてゆく――。

早回しのフィルムを見るように、ふたりの前で、幾度も夏が巡り、生と死の連鎖の営みが繰り広げられる。

やがて幻影はかき消えて、ふたりは元どおりの荒野に立っていた。ほうっと溜息をついて、里菜は空を見上げた。灰色の空から、雪が、激しさを増して舞い落ちてくる。アルファードが、もう一度、里菜の手に、さっきの炎の球を手渡してくれた。

「ありがとう」

「ああ。……リーナ、俺の本当の名前は、『竜』というんだ。竜――つまり、ドラゴンだ。そして、やはり俺の中には、ドラゴンがいたらしい」

アルファードにしてみれば少しためらってから告げてみた言葉だったが、里菜は小首をかしげて、あっさりと言い放った。

「いたって、いいよ。暴れさせなければいいんだから。アルファード、生き物を飼いならすのは得意でしょ？」

その、賢しいような無邪気なような瞳が冗談めかしてくるめいたのにつられて、アルファードは少し笑った。

「ああ、得意だ」

「……ねえ、アルファード、あたし……」

口を開きかけて、里菜は、手の中でゆらめく炎に目を落としながらしばらくためらい、また顔を上げて言葉を続けた。

「アルファード。あなた、この後、どうする？　あたしは……、あ

たしは、『あっち』の世界に帰ろうと思うの。……って言うか……、そうしなくちゃいけないんじゃないかと思うの」

「ああ……」

「あたし、ここにいちゃいけないの。あたしは生命の女王の力と死の王の力を、共に自分の内に取り込んでしまった。それは、この世界を無造作に滅ぼすこともできるほどの力で、でもあたしはただの人間の女の子で、ただの、心弱い普通の人間がそんな力を持つのは、すごく危険なことなの。分かるでしょ？」

「ああ」

「あたしは、この力を永遠に身うちに押し込めておけるほど、強くないかも知れない。今はあたし、大丈夫。でも、もし、あたしがずっとここにいて、あたしより先にあなたが死んだら……そしてその時、あたしが、遠い昔のあの時と同じように、あなたを失うことを受け入れる強さを持てなかったら……。あたしは愚かだから、きっとまた、同じ過ちを繰り返してしまうと思うの。あなたの死を信じたくなくて、世界の秩序を否定してしまうと思う。

そうしたら、あたしは、あなたを引き止めるために、この世界を、一瞬で消し去ってしまうかもしれない。そんなことをしてもあなたは帰ってこないのだけれど、それでも、きっと、そうしてしまう。今度はあたし、それだけの力を持ってしまっているから。あたしの中にある劫初の混沌を世界に解き放てば、それで何もかも済んで――終ってしまうんだもの。だからあたしは、ここにいたら、危険な不発弾のようなものなの。いつ爆発して、世界を滅ぼしてしまうかもしれない。あ、不発弾って、分かるよね？　あなたも、同じ世界から来たんだものね？」

「ああ」

「だから、あたしは、この世界を愛するなら、ここにいちゃいけない。あたしのこの力は、この世界の生成に関わるものだから、『あっち』の世界には、たぶん、影響は及ぼさないと思う。だから、あたしは、『あっち』に帰るわ」

「ああ。俺も、帰る」
「でも、アルファード、あなたは、ここで生きていけるわ。もう魔法も使えるし、そうでなくても、あなたは、ここでは、世界を救った英雄よ。残りの生涯を、英雄として尊敬され、大切にされて、誇りを持って満ち足りて生きることができると思う」
「いや。君のいない世界で、俺の人生が満ち足りることは、決してない。君以外には世界中のあらゆるものが望むままに手に入るとしても、俺は、何も欲しくない」
淡々と、けれどきっぱりと告げられた言葉に、里菜は、はっとした。……もしかすると、自分は、今、『好きだ』でも『愛している』でもないけれど、すごく熱烈な愛の言葉を聞いたのではないだろうか――。
胸に熱いものが広がり、それから、じわりと涙が滲みかけた。
この言葉を、一生の思い出として覚えていられないだろうことが残念だ――。そう、あちらの世界に帰ったら、きっと自分たちはここでのことを忘れてしまうのだ。
「でも、アルファード、あたしたち……」
涙で潤みかけた里菜の言葉を、アルファードは静かに、けれど断固としてさえぎった。
「ああ。分かっている。『あっち』に帰ったら、俺たちは、それぞれの場所に戻って別れ別れになってしまうだろうし、ここでのことはたぶん忘れてしまうのだろう。だから、もし仮にどこかですれ違うことがあっても、互いのことに気付けないかもしれない。それは分かっている。……それでもいい。それでも俺は、君と同じ世界で――君のいる世界で生きたい。たとえ巡り会えなくても、どこかに君が生きているというだけで、その世界は、俺にとって、生きる価値がある」
「アルファード……。気付けなくても、一目だけでも、どこかで会えるといいね……」
里菜はアルファードの手を取ってうつむいた。重ねた手の上に、

涙が一粒落ちた。
「ああ……」と、短く答えてから、アルファードは、
「リーナ、泣いちゃだめだ。泣くと、睫が凍り付く」と、小さく笑った。身体を内側から暖めるアルファードの炎の暖房のおかげで寒さを忘れていたが、あたりの気温は、それほど下がってきていた。
「リーナ、行こう。暗くなる前に、イルベッザに帰ろう」
そう言って、アルファードは、里菜の目の前でふわりと宙に浮き上がり、里菜に片手を差し出した。
「うん」と、頷いて、里菜はアルファードの大きな手に自分の手を預けた。
里菜とアルファードは、手を取りあって宙に浮んだ。丸い透明な結界がふたりを包み込む。
ふたりはゆっくりと上昇し、荒野を見下ろした。降りしきる雪に静かに白く染め替えられていく最北の大地に別れを告げ、ふたりは結界ごと、南へと移動しはじめた。最初は、下の景色が見える程度にゆっくりと動きだし、それから徐々に速度を上げて。
空に浮かんでいても、少しも怖くなかった。アルファードの大きな暖かい手が、里菜をしっかりと抱き寄せてくれている。閉ざされた球の中では風も動かず、ただ浮んでいるだけのように感じられるが、足の下を見れば、世界がすごい早さで流れていく。
荒野の外れに近付くと、雪は徐々に止んだ。
アルファードは、里菜のために、時々速度を落して景色を見せてくれた。
やがて荒野は終り、まばらに草の生えた境界地帯にさしかかった。このあたりはもう、今はなくなった結界の外側で、今までも少しは降雨があったが、自然は厳しく、人も生き物もほとんど住まない辺境である。
「この辺は、今に、昔のように、深く清浄な、明るい森になるだろう。寒さのために人はあまり住まないだろうが、清らかな水が流れ、しらかばの木が育って、春にはキャテルニーカの目のような黄緑色

の若葉をそよがせる、動物たちの楽園になるだろう」

「そうね」と、里菜は微笑んで、手を差し伸べて大地を祝福した。

やがて、最北端の小さな村が見えてきた。その辺境の村は、かつて真っ先に魔物に襲われて焼き払われ、里菜たちが往路に通りかかった時には全くの廃村だったが、今、速度を落して上空から見ると、いくつかの急ごしらえの掘っ建て小屋から、炊事の煙が上がっていた。

「俺たちの姿は下の人間たちからは見えないようにしてあるから、心配ない」と言って、アルファードは、やや高度を下げて村の様子を見せてくれた。豆粒ほどの人間が、忙しく立ち働いている姿が見える。北部の復興は、もう始まっているのだ。

里菜は、焼き払われて荒れ果てた畑や、動き回っている村人たちに心からの祝福を送った。野良で働いていた村人の幾人かは、その時、ふと空を見上げたが、何も見えず、ただなんとなく、こうして故郷の村に帰れたことと、今日一日の無事を彼らの女神に感謝したくなって、それぞれの胸の中で短い祈りを捧げた。

ふたりはどんどん南下していった。北部では、そこここで、放置された畑や焼け野原となった村や街の再建が行なわれていた。ところどころの、景勝地や有名な都市、あるいは名もない寒村で、アルファードは、高度を落して、里菜に下界を見せてくれた。

やがてふたりは、懐かしいイルベッザに近付いた。

ふたりを包む球体は、速度を落して、ゆっくりと防壁を越えた。空から見るイルベッザの街並みは、やはりひどく無秩序でごちゃごちゃだった。けれども、そこに住む人々のたくましい営みが感じられ、生活のぬくもりがあたり一面に立ち込めているようで、里菜は胸が熱くなった。

前方に＜賢人の塔＞が見えてきた。ふたりはもう、かなり高度と速度を落しており、構内の各種施設や軍の宿舎、治療院なども、窓から人の姿が見えそうなほど近くに見えたし、城の前の広場に、何やら黒っぽい人だかりが出来ているのも見えたが、頭上のふたりに

気付くものはいない。
　里菜は今すぐにでも、リューリや、たぶんキャテルニーカや、もしかするとローイもまだいるかもしれない治療院の窓に飛び込みたいような気がした。
「アルファード。どこに降りるの？」
　里菜が問うと、アルファードは答えた。
「いきなりそこいらに降りるわけにはいかないから、とりあえず、そうだな……、＜賢人の塔＞の、リオン様の執務室はどうだろうか？」
「えっ、執務室って、いきなり部屋に入っちゃうの？」と里菜が驚いている間に、ユーリオンの執務室のある塔は、もう、目の前に迫っていた。
「やだ、ぶつかる！」と、里菜が思わずアルファードにしがみ付くと、アルファードは笑った。
「大丈夫だ。通り抜けるから。怖かったら目をつぶるといい」
「ええーっ！？」と叫びながら、里菜はぎゅっと目をつぶって、反射的に首をすくめて身を固くしたが、何の衝撃もなく、すぐに球体がふわりと静止する感覚があった。
「さあ、もういいよ」
　アルファードの声に目を開けると、そこはもう、以前に一度入ったことのある、ユーリオンの簡素な執務室の中だった。その、真ん中に、ふたりを包んだ球体はゆらゆらと浮んでいる。
　正面の机の向こうに、ユーリオンが座っていた。どうやら、ふたりの姿は、まだ見えていないらしい。
　ユーリオンは、古びた巻物や分厚い書物を机いっぱいにごちゃごちゃと広げ、何やら書類を前にしてペンを手にしてはいるが、どうも、ただそうして座っているだけで、全く仕事が手についていないらしい。溜息をついて端正な顔を上げ、落ちつかなげに髪をかきむしってはなんとか目の前の書類に目を戻そうとするものの、どうにも身が入らないといった風で、手にしたペンを意味もなく神経質そ

うに振ったり、机にかちかちと打ちつけたりしている様は、まるで一問も解けないテスト用紙を前にした学生のようだ。

そのやさしげな面差しが懐かしく、少し疲れてやつれたような、落ちつかない様子が気の毒で、里菜は思わず、彼に駆け寄って「いま帰りました」と声をかけたくなったが、姿の見えないものが突然声をかけたら驚かせてしまうだろうと思い直して、アルファードの顔を伺った。

意外なことに、アルファードは、どう見ても悪戯っぽい微笑を浮べて里菜を見返した。それは、里菜が初めて見る、アルファードの、少年の顔だった。

そういえば、不思議なことに、魔法の力を得て、かつて秘めていた鬱屈の気配から開放されたアルファードは、成長したというよりは、それまでよりむしろ若返ったように見えていた。思えばアルファードは、もともと、年のわりに妙に老成した若者だったのだ。その彼が、今、初めて、いたずらっ子の笑顔を里菜に見せている。どうやらアルファードは、最初からユーリオンを驚かしてやるつもりで、こういう現われ方を選んだらしい。

里菜もつられて楽しくなり、アルファードに、共犯者の笑みを返した。

アルファードは里菜に頷きかけると、ふいに結界を解いて、ユーリオンに声をかけた。

「リオン様。ただいま帰りました」

ユーリオンの目がゆっくりと、こぼれるほどにまで見開かれ、それから口がぽかんと開いて、手にしたペンが、ぽろっと落ちた。

（――　第四章完結・第五章　に続く　――）

第五章＜水底の夢＞第一場（1）（前書き）

第五章＜水底の夢＞第一場（1）

（――引用――）

一般に知られた神話では、女神エレオドリーナは、死期を迎えた恋人アルファードを星に変えて天に上げたと言われているが、この村の女神の司祭の家には、代々、別の物語が伝えられている。

それによると、アルファードに定めの時が至ったその日、女神は空に虹を架け、人間の老婆の姿から若く美しい本来の女神の姿に返って、年老いた恋人の手を引き、ともに虹を渡って、タナート神の追跡の手を振り切り、空の裏側にある別の世界へと逃れていったのだという。

また、年老いて足が弱っていた魔法使いアルファードは、この逃避行の途中で一度つまづいて転んでしまい、その拍子に、彼が女神に賜って身につけていた銀の腕輪が割れて、この時、空に落ちた腕輪が、後に『魔法使いの星』と呼ばれる銀のアルファード星になったという。

男神タナートは、女神のこの裏切りに怒り狂って荒ぶる破壊神と変じ、女神と共に創造したこの地上のすべての生き物を滅ぼさんと、地上にあらゆる大災害をもたらした。

この時、男神の眷属であった妖精たちは、男神を諫めようとしたが相手にされず、男神の注意を引くために、やむなく彼に戦いを挑み、その怒りに触れて『魂の癒しの力』を封印された。だが、妖精たちのこの捨て身の諫言は効を奏し、男神はその後、本心に立ち返って、自らの所業を悲しみ、女神に去られた傷心を抱いて永久に地上を見捨て、独り、黄泉へと去った。

その後、女神とアルファードがどうなったかは伝えられていないが、ただ、女神は、別の世界に逃がれていっても決してこの世界を見捨てたわけではなく、今も別の世界のどこかでこの世界のことを

気にかけ続けており、この世界の繁栄に、遠くから気を配っているという。『虹の向こう』の別の世界にいる女神が生命に満ちる時、この世界では、草木が茂り、麦が豊かに育ち、羊は多くの仔を産み、人間も富み栄えるという。反対に、女神の生命が衰える時、この世界は不作に見舞われ、羊は仔を産まず、人々は飢えや病いに倒れるのだという。だから、その年の収穫を寿ぐ秋の収穫祭では、毎年、遠い世界にいる女神に感謝を捧げ、女神の生命のいやさかを祈り、その加護を乞うのだという。

ちなみに、イルゼール村の収穫祭は、秋分の日に行なわれるが、それは、女神が別の世界に去っていったのが秋分の日だったという言い伝えのためである。『マレビト』が、必ず秋祭りの前後に姿を現わすのも、その季節にこそ、この世界と女神が去っていった別の世界とが最も接近し、ふたつの世界の間に通路が開くからだと言われている。

これらの物語は司祭の家に代々伝えられているものだが、特に秘密のものではなく、司祭は、毎年、秋祭りの時に、全村人の前でこの物語を語ることになっている。

しかし、この物語は、ここでは現代の言葉に置き換えて紹介したが、本来は、非常に古い言葉で口伝されているもので、今では語っている司祭にも、そのままではほとんど意味が分からないものとなっている。

それでも司祭は、代々、その言葉と同時に、その意味も、その時代の言葉で次の司祭に語り伝えているが、現在の村人たちのほとんどは、この物語をただの長い祈りの決り文句としか思っていないようである。特に若い世代において、自らの村に伝わる、この由緒ある独自の神話を知るものがほとんどないのは、憂うべきことであろう。

――『エレオドラ地方の民俗と神話に関する研究』（イルファーラン国立研究所主任研究員ユーリオン著　統一暦百五十三年

発行）より。

一

「や、やあ、おかえり……」

何もないはずの部屋の真ん中に、降ってわいたように現われたふたりを見て、ユーリオンは、目を見張ったまま反射的に答えた。悲鳴を上げたわけでもなく、飛び上がったわけでもなく、声と言葉だけ聞くとそれほど動転しているふうでもなかったが、この一言を言い終えた後も、ユーリオンの口はぽかんと開いたままで、手は、ペンが落ちたことにも気付かずに、ペンを握った形のまま、宙に静止していた。

その様子がおかしくて、里菜はついつい、くすくす笑いだしてしまった。

ユーリオンは、はっとしたように口を閉じ、手を下ろして、コホンとひとつ、取り繕うような咳払いをして、付け足した。

「あ……、ああー。……と、とにかく、元気そうでなによりだ」

付け足してから、自分の言葉がひどく間抜けに聞こえることに気付いて赤面したユーリオンに、里菜はもう、堪え切れなくなって身体を折って笑い転げ出した。

「ご、ごめんなさい、リオン様、驚かせて……。で、でも、でも……」

「リーナ君、そんなに笑わないでくれたまえよ。部屋の中に、突然人が降ってわいたら、誰だって驚くだろう？」と、ユーリオンはばつが悪そうに立ち上がって、アルファードの前に進み出た。

「では、君たちは勝ったんだね。魔王を倒したんだね」
「はい。つい、さっき。荒野の結界は解け、魔王の城は消えました。魔王は――いや、タナート神は、この、リーナの中に」
「そ、そうか……」と、ユーリオンは、まだ笑い転げている里菜に、ちらりと目をやった。
「じゃあ、魔王はやはり、タナート神だったのかね。そして、この子が……。いや、そうか、この子はやはり……。それで君、アルファード君は、魔法の力を――＜本物の魔法＞の力を手に入れたんだね。神話の、女神の恋人アルファードと同じように」
「はい。ついうれしくて、ちょっとひけらかしてみたくなってしまいまして。済みませんでした」と、アルファードは笑った。
ユーリオンは、それでまた真っ赤になった。
「い、いやいや、いいんだ、いいんだ、その……。そんな力を手に入れれば、誰だって、見せびらかしたくなるさ。いや、すごいものだ。姿を消す魔法かね。魔王を倒したのがついさっきだと言ったが、ということは、ここまで帰ってきたのも、魔法を使ってなんだろうね？」
「ええ。魔法で、姿を消して、空を飛んで」
「それはすばらしい！　そのう、姿を消さずに空を飛ぶこともできるかね？」
「ええ、できますが……。ただ、あまり一般の人を驚かせないようにと思って……」
「いや、それはぜひ、後でみんなに……。何しろ君たちは、こんなふうにいきなり帰ってきてしまって、これでは市民たちが納得しないだろうし、とにかく後でもう一度……。ああ、いや、まあ、いい、その話は後だ。まあ、とにかくそこの椅子に座ってくれたまえ、疲れただろう？　いやはや、二人とも、言っちゃ悪いが、ひどい格好だねえ。さぞかし辛い戦いをくぐり抜けてきたんだろうねえ。本当にご苦労だったね。
いや、この国を――世界を救った英雄たちに、ご苦労様だなどと

は、あんまりな言いぐさのような気もするが、私としても、こんな状況には前例がないもんで、何をどう言っていいか分からないんだよ。許してくれたまえ。さあ、リーナ君も、いつまでもそう笑っていないで……。いや、失礼、女神様を、そんなふうに気楽に呼んでいいものだろうかねえ……」

ユーリオンは、どう扱っていいやら分からないという困惑の表情で里菜を見やった。

里菜は、なんとか笑いを収めて答えた。

「どうぞ、リオン様、あたしはただのリーナですから」

「そうかねえ……。まあ、他になんて呼んでいいのか分からないし、他人の目もあるからねえ。とりあえず、畏れ多いが、そう呼ばせてもらうよ。君も、全国民の前で、私が女神です、なんて宣言する気は、ないんだろう？」

「もちろん。それに、あたしは本当に、ただの人間の女の子だし」

「はあぁ、どうもよくわからないねえ……」

「えっと、あたしの中に女神エレオドリーナがいるのは本当なんだけど、でも、それと、あたしが女神だっていうのとは、やっぱり違うと思います。……あのう、これは例え話なんですけど、女神様っていうのは、あたしにとって、一冊の本みたいなものなんです。それは前からあたしの本棚にあって、でも、前は自分でそれを知らなくて、今はあたしはそれを見つけたっていう、それだけなんです」

「本、ねえ……」

「ええ。力の源となるいのちの言葉が書かれた、『生命の女神』という本。でもそれは、それを読んだからといって、あたしが全能の女神様になれるって本じゃないんです。だって、どんな偉い人や賢い人が書いた本とか、どんな立派な素晴らしい人について書いた本とか、どんな良い内容の本を読んだからといって、あたしがいきなりそれを書いた人のように賢くなれるとか、その本に出てくる人のような立派な人になれるわけじゃないでしょ。

でも、その本が本当にあたしの心を動かすものだったなら、そこ

に書かれた言葉と真摯に向き合っていけば、あたしも、変われるかもしれない。それを書いた人や、その本の主人公と同じ人にはなれなくても、自分なりに成長していけるかもしれない。その本を読んだこと、そこに書かれた言葉を自分の中に持っていることが、あたしの、生きる力に変わるかもしれない――。

あたしの中に女神がいるってことは、そういう本を一冊、心の中に、いつも持っているようなものなんです。読んでいない時でも、その本を持っているということで心が強くなれるような、そういう本です。

本を一冊、持っているからといって、あたしはやっぱり愚かなままで、どうでもいいようなことに悩んだり迷ったりしてばかりいる取るに足らない普通の人間のままで、たぶん、一生、そのままなんだけど、でも、そうやって悩んだり迷ったりしながら生きることに耐えられる強さや、そういう取るに足らない自分とその人生を愛する力を、あたしは、『生命の女神』というその一冊の本から――そこに書かれたいのちの言葉から、得ることができると思うんです。

ただ、あたしの、この『本』って、好きな時に好きなところを開いて読むというわけにいかないんですけど……」

里菜が笑うと、それまで黙って聞いていたアルファードが、穏やかに口を挟んだ。

「でも、きっと、必要な時に必要なところが開かれるだろう」

里菜はアルファードを見上げて、ふたりはそっと微笑みあった。

そんなふたりを眺めながら、ユーリオンは困ったように首を振った。

「そういうものかねえ。でも、まあ、ここだけの話、やっぱり君はエレオドリーナの、まあ、一種の化身のようなものではあるんだろうね。ちょっと敬意を表させてくれないか」

ユーリオンは、唐突に里菜の前に跪いて、左手を胸に当てる女神への祈りのポーズをとり、短い祈りを唱えた。里菜はあわてて真面目な顔になり、ユーリオンの上に片手をかざして答えた。

「あなたの生命に、祝福を」
　ユーリオンは、一瞬、眩しげな目で里菜を見上げ、それから頭を垂れて、しばらくそのまま感慨深げに胸に手を当てていたが、
「いや、ありがとう」と呟いて、照れくさそうに立ち上がった。
　それから、急にがらっと口調を変えてせかせかと切り出した。
「ところで、君たち。実は困るんだよ、君たちにこんな気軽な帰りかたをされちゃあ。もっと、大々的に、華々しく凱旋してもらわなくちゃ困るんだ。これじゃあ、国民が納得しない。本来なら、まず、なるべく早くカザベルの市議会にでも連絡を入れてだね、そんなみすぼらしいなり――いや、失礼――でなく、美々しい鎧兜でも持ってきてもらって、それを着こんで立派な馬に乗って、カザベルの駐留軍から正装した騎兵の一個大隊でも借りてお供に付けて、堂々と行進して市門を潜って凱旋して、歓迎の式典にでも臨んで欲しかったわけだ。それから、カザベル街道を、威風堂々の大軍勢を引き連れて、沿道の民衆の歓呼に応えながら南下してだね、先々の都市で歓迎を受けて……」
　里菜が呆れてさえぎった。
「でも、リオン様、そんなことじゃ、いつまでたっても帰ってこられません……」
「ああ、まあ、ずっと陸路では時間がかかりすぎるから、途中から船に乗るなり空を飛ぶなりするのはしかたがないが、それにしても、イルベッザに入る前には、君たちの凱旋を事前に市民たちに予告して、記念式典やら宴会やらの用意を整えて、港なり市門なりで市民総出の盛大な歓迎をしたかったんだよ。そうでないと、市民は納得しないんだ。アルファード君はもう知っているだろうが、ここの住民は、とにかくお祭り騒ぎや宴会が何より好きなんだからね。
　だいたい、これじゃあ、君たちが魔王と倒してきたと言っても……、いや、私は信じるが、魔王が消えたからと言ってたちどころに何か目に見えるような変化が現われたというわけでなし――、まあ、さっき、たぶんあれは君たちが魔王を倒した時だったんだろうが、

ちょっとした天変地異はあったから、みんな何かが起こったとは思って市内が騒然となってたんだが、何があったのかは分からなかったし――、市民たちには勝利の実感が湧かないんじゃないだろうか。君たちの出発のことは、あの後、口伝えで街中に広まって、みんな君たちに期待をかけて、帰ってくるのを待っていたんだ。だから君たちがそこに華々しく凱旋してくれれば、特に証拠がなくても、みんなは、魔王の消滅を信じたと思うんだよ。人は、信じたいことを信じるものだからね。

別に、市民の機嫌を取れとということじゃないんだが、とにかく今、一番大切なのは、市民に希望と安心感を与えることなんだ。そりゃあ、食べ物や着るものや住む場所はもちろん大切だが、何と言っても、人の心に活気が戻ってこそ、初めて、街に活気が戻ってくるんだ。だから、君たちの、この帰り方は、実は、非常にまずい……。何とか、手を打たねばなるまい……。とにかく大急ぎで、宴会とパレードの準備をさせなくては。予算は、まあ、何とかなるだろうさ。何しろ、宴会は何より大切だ！

しかし、まあ、全市民を構内に招いての大盤振る舞いと華麗な大式典をやるとなると、どんなに急いでも、準備に一か月はかかるだろうなあ……。いや、だが、今回は、そんなのんきなことは言ってられないぞ！　こういうことは勢いが大切だ！　その場の勢いで、わーっと盛り上がらないと。一か月もたって、みんなが落ち着いたころにやったって意味がないんだ。よし、普通なら半年も一年もかかるところを、今回は、そう、十日で準備してみせよう！　うん、死ぬ気でやればできる！　いや、楽しみだ。昔、この城に王様たちが住んでいたころのような、何十年も語り継がれるほどの大宴会をやるぞ！　よし、すぐに連絡を取って打ち合わせを……」

勝手にしゃべりちらすユーリオンに痺れを切らした里菜が訴えた。

「あのう、リオン様……。十日後の大宴会はいいんですけど、あたしたちは、今、すっごくおなかが空いてるんですけど。朝、堅パンを少し食べて泉の水を飲んだだけで……。それに服もたしかにぼろ

になってるし、そういえば、もうずっと、お風呂にも入ってなくて、髪が砂まみれで、汗もかいてて気持ち悪いし……」

「あ、ああ、それは大変だ。もちろん、君たちは今、すごく疲れているだろう。当然のことだ。気が利かなくて済まなかったね。つい、興奮してしまって……」

「あ、いいえ。それはいいんですけど、あの、だから、とりあえず今は宿舎に帰っていいですか？　着替えもしたいし、この時間なら食堂も浴場も開いてるだろうし……」

「と、とんでもない！　ちょっと待ってくたまえよ。それはまずい！　君たちが今、そんなふうにひょこひょこと宿舎だの食堂だのに顔を出したりしたら、非常にまずいんだよ。いいかい、これから何とか君たちの凱旋の体裁を取り繕わなくてはならないんだから、それまで絶対、外に出てはいけないよ！　まったく、君たちがいきなり宿舎や食堂にぽっと出現したりしなくてよかったよ。食事や風呂のことなら、心配はいらない。ここは、もと王宮だよ。普段は使わないが、今でもいくつかは浴室つきの客室を残してあるし、立派な厨房もあるんだ。着替えだって、どうせ宿舎にあるのは、それとたいして変わらないうような服だろうから、こっちで適当に用意するよ。食事も、今すぐの分は、外から取り寄せたほうが早いだろう。例の店から、すぐに何か持ってこさせよう……」

「えっ、例の店？　やったあ！　あそこのシチューとか、すごくおいしいんだ」

「ああ、じゃあ、熱々のシチューをたっぷり持ってこさせようね」

「あと、ほら、あの、魚の空揚げみたいのも……。あ、野菜のサラダも食べたいなあ。道中、携帯食糧ばっかで野菜不足だったから。あと、木の実の入った甘い焼き菓子と……」

「ああ、よしよし、何でも取り寄せるから、好きなものを言っておくれ」

「じゃあ、あの、あそこのお店では出たことないけど、何か、薄荷味の砂糖菓子がすっごくおいしいって噂を……」

「おい、リーナ……」と、アルファードが、困った顔で里菜を横からつついた。
「なあに、アルファード？　いいじゃない、ずっとろくなもの食べてないんだから……」
「ああ、アルファード君、君も遠慮なく、何でも注文しておくれ。ええと、砂糖菓子ね。わかった、わかった。いいとも、何でも取り寄せるから、とにかく、頼むから外に出ないでおくれよ。君たちがすでにここにいることは、当面、絶対に秘密にしておきたいんだ」
「でも、友達にも早く会いたいんですけど……」
「ああ、じゃあ、内輪のものだけ内密に呼び寄せてあげるよ。誰と誰を連れてくればいいね？」
　というわけで、里菜とアルファードは、至急呼び集められた他の＜賢人＞たちに一応顔を見せた後、それぞれ客室をあてがわれて入浴をすませ、ユーリオンがあわてて市内の店で調達させたらしい新しい服に着替えて、別の一室に用意された食事を取った。

第五章＜水底の夢＞第一場（2）

ふたりがそうしている間、静かだったのはその部屋だけで、＜賢人の塔＞の他の場所では、上を下への大騒ぎが繰り広げられ、＜賢人＞から清掃係に至るまで、あたふたと走り回っていた。

ふたりが食事を終えたころ、役人が迎えにきて、ふたりは、もう一度、ユーリオンの執務室に連れていかれた。

そこでふたりは、ユーリオンから、これからもう一度イルベッザへの帰還をやり直すようにと言い渡された。ふたりが食事をしている間に＜賢人＞たちは会議をして、方針を決めていたのだ。

「いいかい、君たちは、まだここに帰ってないことにしてあるからね。市民たちには、こう言って発表しておいた。さっき、北の空が真っ赤に見えた時、君たちが魔王を倒していて、それからすぐに魔法で私にその報告をしてきて、これから魔法で空を飛んで帰ってくるところだと。

それでだね。せっかく着替えたところを、すまないが、見栄えのする衣装を用意させたから、これからもう一度、それに着替えてくれないか。魔法で飛ぶのに、着ているものの重さは関係ないんだろうね？　で、それを着て、防壁の外まで姿を消して飛んでいってもらって、それから姿を現わして、入城をやりなおして欲しいんだよ。着陸場所は、広場正面のバルコニーだ。ほら、アルファード君、武術大会の式典の時に私たちが立って挨拶した、あのバルコニーにね。ああ、リーナ君、君は知らないだろうが、あそこはもともと、王様たちが国民に手を振ったりするように作られた場所なんだ。

そうそう、アルファード君、君、派手に光ったりなんかできないかい？　そろそろ暗くなるから、ぱっと、何か照明を演出して飛び込んできたりして貰えると、ありがたいんだがねえ……」

里菜とアルファードは、予想外の要求に顔を見あわせて絶句していたが、ユーリオンはかまわず、さらに続けた。

「それから、その後は、私たちと一緒に、バルコニーで、市民に顔見せしてあげてもらいたいんだがね。なに、君たちは黙って手を振るだけでいいんだ。挨拶なんかは私たちがやるから」
「えっ……。あのう……、本当に、そんなことしなくちゃいけないんですか？」
唖然とする里菜に、ユーリオンは大真面目に懇願した。
「いや、お疲れのところ申し訳ないし、面倒だろうが、ほんのちょっとの時間でいいから、どうか、頼むよ。馬鹿馬鹿しいと思うかもしれないが、これは、ぜひ必要な手続きなんだ。ただのくだらない人気取りだとか、無意味な格好つけだとか、そんなふうには思わないでおくれ。ものごとには、形式とか演出とかも大切なんだよ。そういうきちんとした手順を踏んでアピールしてこそ、市民に魔王の消滅を納得させ、今後の安全を実感させ、働く意欲を掻き立てることができるんだからね。何しろ、今、一番大切なことは、人の心を明るくすることなんだ。だから、とにかく、できるだけ派手に、華々しく頼むよ」
「はぁ……」
「もちろん、やってくれるね。ありがとう！　明日以降の行事については、また後で詳しく打ち合わせして、いろいろお願いするから……。ところで、もうひとつ、相談があるんだが……。実は、君たちへの賞金のことなんだがね……」
「そんな、賞金なんて、あたしたち……」
「いや、ちょっと聞いておくれ。実は、それがまた、とんでもなく安いんだよ……」
「……はぁ？」
「いや、だからね、すごく低い金額なんだ。たったの五百ファーリなんだ。今は魔物一匹で五十ファーリだから、君たちが今までに魔物退治で稼いだ額のほうが、よっぽど多いよねえ」
「はぁ……。なんで、そんな額なんですか。まあ、別にいいんだけど……」

「それがね、実は、この金額は、百年程前に決まったものなんだ。当時の貨幣価値から言えば一生遊んで暮せるような額だったはずなんだよ。そのころ、一番最初に魔物退治の報奨金が定められて、その時に、一応、魔王の場合の金額も一緒に定めたらしい。あんまり昔のことなので、私たちは誰も知らなかったんだが、最年長の＜賢人＞ファドゼールが、そういえば昔、そんな話を聞いた気がすると言い出してね。古い書類を調べてみたら、たしかに記録があったんだ。そして、その条項は、少なくとも撤廃はされていないらしいんだよ……。ただ、何しろ、本当に誰かが魔王を退治するなどとは、誰も思っていなかったから、その後、時代が下るにつれて、魔物退治の報奨金の額を物価の上昇に合わせて引き上げた時も、魔王のほうはそのまま忘れられていて、改定されなかった。その間に、通貨単位の変更なんかもあったから、こういう事態になったわけだ。それで我々は協議して、いくらなんでも額面通りでは君たちに悪いだろうということになったんだが……。さて、そこで相談だ。君たちは……」

「額面通りでかまいません」と、アルファードが、素早く答えた。

「えっ、本当かね！　リーナ君、君も、それでいいのかい？　ああ、それはありがたい。本当に助かった。何しろ、魔王に賞金がかかっていることすらすっかり忘れていたんだから、当然、そのための予算なんか、とってあるわけがないだろう？　もしや君たちが――いや、そんなことは言わないだろうとは思ったんだが、この金額を現在の貨幣価値に換算して全額即金で払ってくれなんて言い出したらどうしようかと、内心びくびくしていたんだよ……。むろん、君たちがこの偉業をなしとげたのは賞金目当てでじゃないことは分かっていたんだがね……。いや、ありがたい、ありがたい……。五百ファーリなら、今年の魔物退治の報奨金の予算の残りで充分対応できる……。何しろ、これからはもう、魔物は出ないわけだろう？」

肩の荷が降りたというふうに無邪気に喜ぶユーリオンを見ながら、里菜はアルファードに小声で尋ねた。

「アルファード。五百ファーリだって、いらないんじゃない？　あたしたち、どうせ、もう、この国からいなくなるんだもの……」
「いや、貰っておこう。俺たちはいらないが、五百ファーリあれば、村の初級学校の図書室に新しい本が買えて、自警団の武具も買い足せる。それに俺たちは、ローイとヴィーレに結婚祝いを買ってやらなけりゃならない」
「えっ？　ローイとヴィーレにって……。いつのまに、あのふたりの結婚話がまとまってたわけ？　あたし、聞いてないけど……」
「いや、俺もまだ聞いてはいないが、間違いなく彼らは結婚するさ」
そこへユーリオンが、そわそわした様子で話し掛けてきた。
「それでね、着替えに行く前に、もうひとつ、リーナ君に片付けて欲しい、ちょっとした問題があるんだが……」
「はい？」
「実は、あれなんだよ……」と、ユーリオンは、窓から見える城の正面広場を指差した。そこには、黒衣の人々がうじゃうじゃとひしめきあっていた。さっき里菜が空から見た人だかりは、これだったらしい。
「リオン様、これ……。タナティエル教団の人たち？」
「そうなんだよ。いや、ここ数日、ずっとこういうふうで、私たちはみんな、すっかり参っているんだ。数日前から、タナティエル教団の信徒たちが続々と市内に集まってきて、ここに集結してしまってね……。別に何か悪いことをするというわけでもなく、ただ集まって、時々お祈りをしたり、祈祷歌を歌ったりしているだけなんだが、窓の下に、こういう黒衣の連中にうじゃうじゃ集まられると、どうにも落ち着かなくてね……。みんな、このあいだの魔物騒ぎ以来、ただでさえ落ち着かないのに、＜塔＞の職員もますます仕事が手につかないし、市民たちも気味悪がって大変なんだ。
だからと言って、君たちも知っているように、ここは国民が誰でも自由に入っていい広場だから、ただ気味が悪いからと言って強制的に武力で排除してしまうわけにもいかない。火を焚いて炊事をす

るとか、テントを張って通行のじゃまになるとか、大声で不埒なことを怒鳴り散らすとかしていれば、それを口実に追い払うこともできるんだが、食べ物は堅パンなんかを噛じっているようだし、夜はマントを被って地面で寝てるし、おとなしくお祈りをしているだけで人の迷惑になるようなことは別にしないものだから、かえって始末が悪い。

特に今朝からは何だか彼らの動きがざわざわしてきてね。今にして思えば、北の荒野で何かが起こっているのを感知していたんだろうね。彼らの中には、予言者まがいのものがいるようだからね。そして、さっき、あれは君たちが魔王を倒した時刻だったんだろうと思うんだが、しばらく空が真っ暗になって、北のほうだけ真っ赤に染まって、こんな南のほうで見えるはずのないオーロラのようなものまで見えて、また、何か恐ろしいことが起こるのではと市内が騒然となったんだが、その時など、彼らがばたばたと地面にひれ伏して大声でお祈りを唱え出し、タナート神の復活だとか、死の王と生命の女王の婚礼だとか喚いたもので、本当に怖かったよ……。

それでだね、たぶん彼らは、君が出ていって説得してくれれば、ここからどいてくれると思うんだが。いや、私は君が彼らと別に関係ないのは知っているが、彼らは君のことを自分たちの女王だと言っているようだから、君の言うことなら聞くだろう。このままじゃあ、君たちが空を飛んで入城する時に、他の市民が怖がって、ここに集まってこられないから、その前に彼らをどかしてほしいんだよ。君たちがすでにここにいることは内緒だから、リーナ君一人が、そのままの目立たない格好で通用口からそっと広場に出ていって、彼らの代表と話し合うという形で……」

「わかりました。話してみます。でも、その前に、できればキャテルニーカを連れてきて欲しいんですけど」

「キャテルニーカって、あの、妖精の血筋のお嬢ちゃんかい？　なんでまた？」

「あの子は、『妖精の血筋』じゃありません。本物の妖精の生き残

り、最後の一人で、タナティエル教団の御使い様だった子です」
「えっ！　まさか、そんな……。そうか、そうだったのか……。いや、あの子なら、もう呼びに行かせているよ。そろそろここへ来るだろう。君たちの他の友達と一緒に呼んでこさせたんだが、そういうことなら、最初にその子だけここに連れてこさせよう」
　ほどなく、役人に案内されて、キャテルニーカが執務室に入ってきた。
「お姉ちゃん……。勝ったのね」
　にっこり笑って、落ち着いた様子で里菜の前に進み出たキャテルニーカは、ひょいと跪いて胸に手を当てて敬意を表し、立ち上がって里菜を見上げた。
「かわいそうな魔王は、救われたのね」
「ええ」
「お姉ちゃんが彼を目覚めさせ、悪夢の中から救い出してあげたのね。そしてタナートが復活し、エレオドリーナと結ばれた」
「そうよ」
「ありがとう」とキャテルニーカは微笑んで、里菜の手を取り、自分の額に当てさせた。「封印を、解いて」
「うん」
　ユーリオンとアルファードが無言で見守る中、目を閉じたキャテルニーカのかわいらしい額に当てた里菜の手が、一瞬、光を発した。それはほんの一瞬だったが、目を開けたキャテルニーカの額は、数秒ほど、光の粉をまぶしたように光っていた。
　その光が消えた時、キャテルニーカは、目を開けて、晴れ晴れと言った。
「封印が解けた。魂の癒しの力は、ふたたび、この世に」

第五章＜水底の夢＞第二場（1）

「今、何かがこの上を通った」
タナティエル教団最高導師ギルデジードは、白く盲いた目で空を仰いで呟いた。
「……おそらくは、女神と、女神の魔法使いが」
そう言って、ギルデジードは頭を垂れ、胸に手を当てた。
かたわらに付き従っていた導師ゼルクィールは、あわてて空を見上げたが、何も見えなかった。
ギルデジードの、老齢のために視力をほとんど失った目は、時々、他のものたちには見えないものを見る。
最高導師ギルデジードが、今、何才なのか、彼の腹心であるゼルクィールも、正確には知らない。恐らくは本人にも分かっていないだろう。ただ、恐ろしく年を取っていることは間違いなく、すでにかなりの高齢であるゼルクィールがまだ血気盛んな青年だったころ、ギルデジードはやはり今と同じような老人だった。妖精の血を色濃く引く、黒い肌のこの老人は、恐らくこの国で一番の年寄りに違いない。
あまりの老齢のために、彼はもう歩くことが出来ず、普段は、シルドーリンの坑道跡の礼拝所にある自分の部屋から出ることはない。外に出る時は、若い信徒に担がせた輿にのるのだ。身体は枯れ木のようにやせ細り、くしゃくしゃにしぼんだ黒い肌は干物のように干からび、その目は盲い、声は掠れて、か細く、耳もやや遠いが、若き日のゼルクィールを心服させたその強靭な精神は、いまだ衰えることがない。その手首には、皺に隠れて、古い古い＜刻印＞がある。
「生命の女王が、空をお通りに……」
ゼルクィールは呟いて、ギルデジードと同じように頭を垂れた。
その胸の中に、不思議な感慨が沸き起る。
――では、やはり、待ち望んだ時が至ったのだ。けれどもたぶん、

自分たちが思っていたのとはまったく違う形で。

彼が聖地シルドーリンで信仰のうちに過ごした長い年月が胸に蘇る。かつて、教団がまだ小さかったころの、静かで敬虔な瞑想と祈りの日々、素朴で満ちたりた清貧の暮らし。魔物の跳梁に伴う信徒の急増、組織の急激な膨張に対応しきれないまま統率力を失っていった苦悩の日々、新しい信徒たちの無軌道な活動、前途有望な若き導師だったアムリードの離反、ヴェズワルとの確執……。

そして、何よりも、幼い＜死の愛し娘＞、キャテルニーカのこと。

キャテルニーカは、今朝もひっそりと、この広場にやってきて、彼らと短い会話を交わし、すぐに自分の居場所に戻っていった。彼女はもう、教団には帰ってこないだろう。

それでいいと、ゼルクィールは思う。普通の少女として普通に学校に通い、仕事をし、恋をし、愛する人と結ばれる――。彼女には、それができる。これまでの＜癒し手＞たちにはできなかったことが。

キャテルニーカそっくりに美しかった先代の＜御使い様＞のことを思い出すと、今でも心が痛む。

彼女は、やはりキャテルニーカという名前だった。歴代の＜御使い＞たちは、妖精の女王の直系であり、妖精の王位継承の伝統にしたがって、代々、古代の言葉で『癒すもの』を意味するキャテルニーカを名乗ってきた。女王の娘は、幼い時は個別の幼名で呼ばれるが、女王の位を受け継ぐと同時に、その名も受け継ぐのである。だから妖精の女王たちは、古い詩に『永遠なるキャテルニーカ』と謳われるのだ。

気の遠くなるほどの昔から、妖精族の最後の生き残りたちは、シルドーリンの丘の下にひっそりと隠れて生き続けてきた。それを、ある時、後にタナティエル教団の始祖となる世捨人が発見した。その後、タナティエル教団はずっと彼らを庇護し、聖地の山奥深くに秘め隠して、その血統をひそかに守り続けてきたのだ。

＜魂の癒しの力＞を封印された妖精たちは、その頃にはすでに普通の人間より少しは長いという程度の寿命しか持たなくなっており、

しかも、あいかわらず出生率は低く、血族結婚を繰り返していたため種族自体の生命力が衰えていた。それでも、タナティエル教団の始祖たちは、妖精の血統を絶やしてはいけないと考えた。なぜなら、やがてタナート神が復活した時に訪れる新しい神代の楽土において、彼らの中に眠る＜魂の癒しの力＞もまた復活し、傷ついた世界を癒すはずだったから。

先代のキャテルニーカが子を成せる年ごろになった時、妖精族は、すでに最後の二人となっていた。彼女と、その実の弟との。

妖精の純血を保つため、彼らは姉弟で契りを結び、子を成した。あの時は、彼女たち自身を含む誰もが、他に道はないと思っていたのだ。

その、妖精族の最後の子供が、今のキャテルニーカだ。彼女を産んだ後、彼女の父母は、ふたりそろって、自ら命を断った。彼らは、自らの犯した近親婚の罪に悩み、苦しみ抜いていた。彼らは自分たちの結婚を後悔し、もうひとり男の子を産んでしまうことで我が娘に同じ苦しみを与えてしまうことを恐れたのだ。

それはもう、十年以上も前のことだが、彼らの死を思うと、ゼルクィールは、今でも、深い罪の意識にさいなまれる。彼らの婚姻は強制されたものではなく、本人たちも納得した上でのものだったが、それも、ゼルクィールやギルデジードの説得に応じてのことだ。その結果がまさかあんなことになるとは誰も思っていなかったのだが、それでも、彼らをあのように追い込んでしまった責任の一端は自分にあるのだ。

今にしてみれば、彼らをあんなにも苦しめてまで妖精の血統を残す必要があったのだろうかと思うこともある。あのふたりはゼルクィールを本当の祖父のように慕ってくれていたし、彼もまた、ふたりを深く愛していた。本当は、彼らを苦しめたくなどなかった。

けれど、ふたりの苦しみは、無駄ではなかった。その苦しみのおかげで、今、妖精の最後の生き残りが、世界の再生に居合せることができる。＜魂の癒しの力＞が、ふたたび、この地上に解き放たれ

るのだ。
頭を垂れ、祈りながら、＜賢人の塔＞の前で、ゼルクィールは待った。
まもなく、生命の女王が、ここに現われる。今、頭上を通ったという彼女の姿を、自分は見られなかったが、ギルデジードが見たというのなら、彼女はもう、ここに帰ってきたのだ。

やがて、待ち受ける彼らの前に、生命の女王が姿を現わした。
黒い瞳のいとけない少女の姿をとった生命の女王は、広場に面した通用門から、＜癒し手＞キャテルニーカを伴って、ごく無造作に現われた。
それは、上質ではあるが簡素な青い服を着た、どこにでもいるような小柄な少女だったが、彼が以前に見た彼女とは、たしかにどこか違っていた。そして、彼女の後ろにひっそりと立つ小さなキャテルニーカも、今までの見慣れた彼女とは、やはり少し、違っていた。
キャテルニーカのどこが今までと違うのか、ゼルクィールには、はっきりとは分からなかったが、ギルデジードが、こう呟くのを聞いた。
「＜御使い様＞の額に、光が見える。封印が、解かれたのだ」
「おお……」
ゼルクィールは、涙が溢れそうになって、しばらく目を閉じた。
タナート神によって妖精たちに与えられた＜魂の癒しの力＞は、同じタナート神によって封印された。その封印を解けるのは、タナート神本人だけなのだ。封印が解けているということは、タナートの復活を意味する。
年若い生命の女王は、ギルデジードとゼルクィールの前に進み出た。
「ゼルクィールおじいさん、おひさしぶり。元気だった？　足はどう？　それから、あなたがギルデジードさんって人ね？」
「さようでございます。我が女王よ……」

両隣の信徒に身体を支えられて深々と頭を垂れたギルデジードに合わせて、ゼルクィールも背後の信徒たちもいっせいに跪いて頭を垂れた。

「あのう……。お辞儀はいいから」と、年若い女王は困惑したように言って、ギルデジードを立たせようとしたが、彼が立てないのに気付くと、自らがその前に膝を折った。

ギルデジードは顔を上げ、見えない目で少女を見つめ、震える手を差し伸べた。彼の目が見えないことに気付いた少女は、その皺だらけの手を自分の手で包み込むように取って、頬に当ててやった。ギルデジードは、少女の顔をおずおずと手でなぞりながら、答えを聞くのを恐れるかのように、ためらいがちに尋ねた。

「……女王よ。では、黄泉の大君は、復活なすったのですね？」

少女はこくりと頷いた。

「ええ。タナートは、今、私の中に」

「おお……。女神と男神の婚姻は成った……」

ギルデジードの盲いた目から、涙が流れ落ちた。

「えっと、あのう……。おじいさん、泣かないで、ね……？」

困惑する少女に、しばらく返事も出来ずに啜り泣いていたギルデジードが、やがて弱々しく尋ねた。

「女王よ、私どもは、ずっとこの日を待ち焦がれておりました。もちろん私どもは、この日に何が起こるのか、具体的には存じませんでした。けれども、死者の王の復活と、王と女王との婚礼は、我々が解釈していたのとは全く違う形で実現したように思います。我々は、間違っていたのでしょうか。間違った夢を見ながら、無意味な年月を送っていたのでしょうか……」

「ううん、間違ってなんかいない。あなたたちは間違ってなんかいないわ。まあ、そりゃあ、ヴェズワルの人たちのしたこととか、たぶんあなたの目の届かないところで一部の人たちのしたこととかで、間違っていたことはいっぱいあったでしょうけど……。でも、だからと言って、あなたたちがこれまでの信じてきたことがすべて間違

っていたとか、あなたたちのしてきたことが無意味だったとか、そういうことは絶対にないわ。あなたたちはあなたたちなりの、最良の道を選んできたんだと思う」

「ありがとうございます、女王よ……。信徒の犯した過ちの責任は、私にもございます。どうか彼らの過ちをお許し下さい。私どもはただ、安らかな生と死を、魂の平安を求めてきただけなのでございます。ですが、心の弱いものは、もっと具体的で分かり易い目先の利益や、目に見える約束のしるしを求めずにはいられないものです……」

「分かるわ」と、女王は頷いた。

「でも、もう、みんな、大丈夫よね。だって、他のたいていの人たちは、今日、何が起こったのかを本当には理解していなくても、あなたたちは、世界が新しく生まれ変ったことを知っているんだもの。少なくとも、それを知ることが出来たということで、あなたたちのこれまでは、無駄じゃなかったでしょう？」

「はい。道を外れた信徒らは私が責任を持って説得し、彼らの犯した様々の過ちも、時間をかけて、できるだけ償わせます」

「そうさせてちょうだい。それで、あなたたちのさらった妖精の血筋の女の子たちのうち、家に帰りたがる子はちゃんと家に送り届けてあげてちょうだいね。帰りたがらない子や、帰るところの無い子は、教団の中で、普通の子として、責任持って養育してね。もちろん、学校へも通わせてあげるのよ。卒業したら、本人が教団に残りたがればそれでもいいし、外で働きたければ出してやって、そのうち好きな人ができて結婚したいって言えばそうさせてやって、そういうふうに、普通の女の子として生きさせてあげて」

「間違いなく、仰せの通りに。女王よ、どうぞ我等を許し、我等の魂に平安をお与え下さい」

「魂の平安だったら、あたしが与えなくても、あなたたちは、これまでもずっと、自分でそれを選び取ってきたわ。そうでしょう？あなたたちのしてきたことは正しいのよ。これからもあなたたちは

自分で自分の魂の平安を選び取ることができる。でも、その手助けだったら、あたしじゃなくてキャテルニーカが、してあげられるわ。ね、ニーカ」

それまで黙ってニコニコと女王の後ろに立っていた＜癒し手＞が、頷きながら進み出て、ギルデジードの額に黙って手をあてた。つづいてゼルクィールの額に。

ゼルクィールは、自らの魂が穏やかに癒されていくのを感じた。それは、乾いた喉に水が染み込むような感覚だった。

（これが、＜魂の癒しの力＞……）

目を閉じて、ゼルクィールは、清らかな甘露を味わうように、その奇跡を味わった。

夢と眠りと忘却を司るもの、夜と死と闇の愛し娘なるキャテルニーカは、＜魂の癒しの力＞を封印されていたこれまでも、彼らを始めとする信徒たちの心を慰め、癒してきた。

けれども、これまでの彼女の癒しの技は、ただ、黒い覆いをしたランプから微かに漏れ出てくる淡い光のような、封印された癒しの力のわずかな漏洩のようなもので、根本的で完全な癒しをもたらすものではなく、悲しみの記憶を心の奥に沈め、苦しみを眠らせる、眠りと忘却の技でしかなかった。彼女は確かに、ある程度、自分のものを含む、人の記憶を操作することができたのだ。

そして、これまで彼らは、彼女のその、忘却を司る力に助けられて、この苦しみの世に命を繋いできた。

けれど今、本物の癒しの力が、彼の魂を静かに潤していく。

「ギルデジード、ゼルクィール。あたしのお父さんたちのことで、もう、悩まなくていいのよ」と、幼い＜癒し手＞が静かに言った。

「あたしも、今はもう、思い出しても大丈夫だから」

ふたりは、キャテルニーカに向かって静かに深く頭を下げた。

＜魂の癒しの力＞を取り戻した＜癒し手＞キャテルニーカは、自らに施した自らの記憶の封印を解いたのだ。

妖精の女王が代々受け継いできたのは、キャテルニーカという名

と、金の髪、黒い肌、緑の瞳のその美貌だけではなかった。彼女たちは、神代にまでさかのぼる歴代の女王の記憶を、れんめんと受け継いでいたのだ。

妖精の種族の運命は哀しく、神代の終焉以来のその記憶は苦痛と嘆きに満ちている。そして、それ以前の神代の幸福の記憶は、今の悲しみをさらに募らせる。長い苦難の記憶の集積は、自らを癒せぬ魂にとっては、重すぎ、辛すぎた。さらに、＜癒し手＞である彼女らは、他者を癒す時に、その癒す相手の苦しみ、痛みを、その都度自分のものとして味わってしまい、それらも決して忘れることがない。

そうした重荷から逃れるために、彼女たちは、自らの記憶を、忘却を司る自らの力で封印するしかなかったのだ。

男神が妖精たちの＜魂の癒しの力＞を封印したとき、この、忘却の力にまでは手を付けずに放置したのは、反逆したとはいえ元は自分の愛し子であった妖精たちに対する、男神の、狂気の中にも残されていた僅かな思いやりだったのかもしれない。

そして今、キャテルニーカは、妖精たちの長い苦しみの歴史を、そしてまた彼女が癒してきた人々の悲哀と絶望の深い堆積を、受け止め、乗り越える力を得たのだ。

「ギルデジード、ごめんね。あたしは、教団には戻らない。でも、あなたたちを見捨てるんじゃないのよ。あたし、これから、国中を回る旅に出るつもりなの。そうして、＜刻印＞を持つ人たちを癒して回るの。シルドーリンにも必ず行くから、待っていて。でも、とりあえず、今日、ここにいる人は、順番で癒しの技を受けていってね」

キャテルニーカはあどけなく微笑んで告げた。

（――そう、死者の王の復活は、たしかに自分たちの漠然とした解釈とはだいぶ違う形で実現したのかも知れないが、結局、待ち望んだ＜世界の再生の日＞は、訪れたのだ。……生と死が和解し、この世界は、＜魂の癒しの力＞を取り戻した）

＜御使い様＞の言葉を聞きながら、ゼルクィールはこう考えて、
静かに微笑んだ。

第五章＜水底の夢＞第二場（2）

タナティエル教団の指導者たちとの会談を終えてユーリオンの執務室に戻った里菜は、広場に面したその窓から、次々と立ち去っていく黒衣の集団を眺めていた。

キャテルニーカは、窓の下で、まだ、彼らの前に立っている。

彼らは列を作ってキャテルニーカの前に並び、癒しの技を受けた順に、静かに広場を立ち去っていくのだ。

里菜の後ろには、ローイとリューリが立って、一緒に窓の下を覗き込んでいる。ユーリオンが約束通り呼び寄せてくれた彼らは、今しがた、この執務室で、里菜たちと再会を喜びあったところである。

「しっかし、なあ……。ニーカちゃんは、本物の妖精だったってか……」と、ローイが呟いた。

「……ってえことは、あの子、もしかして、二百年くらい生きたりするの？」

「ううん、今じゃ、妖精族も、寿命は人間とたいして変わらないんだって。違うのはただ、＜魂の癒しの力＞を持っていることだけ」

「＜魂の癒しの力＞か……。それってさあ、封印が解ける前から、少しだけは効き目があったんじゃない？　俺さあ、前から、あの子のそばにいると気持ちが楽になるって思ってたんだ。だから俺、＜刻印＞つけられても、生きていられたんじゃねえかなあ……」

リューリも頷いて言った。

「絶対、効いてたわよ。治療院には、他にも＜刻印＞を受けた人がいっぱい入院してたけど、あの子が来てから、そういう人が、本当なら死なないような病気や怪我でやたらと死ぬってことがなくなったもの。でも、ローイ、あなたが死ななかったのは、別にあの子のおかげだけじゃないんじゃない？　あなたのは、それ、ほとんど自力よね」

リューリの言葉に、里菜も頷いた。

「そうよ、ローイは、見かけによらず、すごく強い人なのよ」
「そ、そうかなあ……」と、照れるローイに、リューリが言う。
「……っていうより、あなた、生きているのがすごく好きなんじゃない？」
「そりゃ、そうさあ。楽しいもん。だってさ、死んだら、もう、歌も歌えねえし、女も……ああ、いやいや、その、なんだ？　まあ、生きていればできるはずのいろいろな楽しいコトもできなくなっちまうんだぜ。俺の人生、まだまだ、これからなんだからさ」
「これだもんね。女好きも、ここまで徹底してると、なんていうかもう、偉大よね。こいつが、女の子と見れば職員だろうと患者だろうと見境なしに口説くんで、治療院じゃ、みんな、頭、抱えてんのよ。それさえなけりゃあ、申し分ない雑用係なのにねえ」と、リューリは笑った。
　そう、ローイはなんと、治療院で雑用係として働いていたのだ。
里菜は最初、ローイがいまだに治療院にいると聞いて、怪我がよほどひどくてまだ退院できなかったのかとびっくりしたのだが、そうではなくて、怪我はすぐに治り、まだ入院中から細々とした手伝い仕事を進んで買って出ては職員たちに喜ばれているうちに、そのまま雑用係に採用されてしまったらしい。
　この世界には、看護婦、看護士に相当する専門職はなく、治療院にいるのは、治療師とその見習いと雑用係で、治療師見習いになるにはある程度の医療知識や人より優れた治療の魔法の才能がいるのに対し、雑用係には、何の資格もいらない。だからローイが雑用係になっていても別におかしくはないのだが、これを聞いた時、里菜は、これまでの彼の浮いた仕事とのギャップが大きくて、一瞬、耳を疑った。
　だが、彼はどうやら、治療院でなかなか良くやっているらしい。
口の悪いリューリでさえ、
「それがね、こいつが、これで案外、役に立つのよ。ただの色ボケ野郎かと思ってたら、それだけじゃなかったみたいね。何をやらせ

ても器用にこなすし、細かいことにもよく気が付くし、飲み込みも行動も素早いし、それに、何と言っても、このばか力が重宝するのよ。治療院って、病人を動かしたりとかの力仕事が、案外多いから。もう、あたしの片腕よ。他の治療師からも便利がられてるし、愛想が良くて親切で気が利くって言われて、患者からの評判もすごくいいのよ。特に子供に人気があって、入院している子供たちが、彼が来てから明るくなったわ」とまで言う絶賛ぶりである。

「いやあ、リーナちゃん、俺さあ、歌うたいも天職だと思ってたけど、治療院の仕事ってのも、天職のような気がするなあ。ほんと、俺って、どこへ行ってもうまくやっていける人間なんだよなあ。才能がありすぎて困っちまうよ」と、ローイは笑っていたが、たしかに彼は、もともと何でも器用にこなす人間で、どこに行っても人にかわいがられるというのも、彼の特技なのだ。

ひとしきり再会を喜び合ってから、ローイたちは、また、役人に案内されて執務室を出ていった。

ユーリオンは窓を覗いて、次々と出ていく黒衣の群れを眺めてうれしそうに言った。

「いや、助かった、助かった。リーナ君、ありがとう。これでほっとしたよ。さあ、もうすぐ一般の市民も集まり始めるころだ。ふたりとも、そろそろ凱旋の用意をしなきゃいけないから、見栄えのする服に着替えに行ってくれるかね?」

「……この服じゃ、駄目なんですか? 随分上等の服みたいだし、これで充分じゃ……?」

「いや、そんなんじゃ、地味すぎる! これはまあ、とりあえずの着替えということで、君たちが普段着ていたのと同じような感じのものを大急ぎで選んでこさせたんだが、それはとにかく、普段着だよ」

「じゃあ、あたしたち、何、着るんですか?」

「さっきの部屋に用意させておいたがね、アルファード君には軍の第一礼装用のマントと王政時代の儀式用の部分鎧。なに、今時の一

般市民たちは、おおかた、鎧なんて博物館でしか見たことがないんだから、実戦用と儀式用の違いなんか、どうせ分かりはしないよ。それに、格式のある剣も持ってもらうよ。アルファード君は体格がいいし、顔立ちもりりしくてなかなかの男ぶりだから、さぞや見栄えがするだろうねえ。うん、楽しみだ。その勇姿を見れば、みんな、君たちが魔王を倒したことを心から納得するに違いない。

それで、リーナ君だがね、君に何を着せるかは、さんざん悩んだんだ。いくら見栄えよくと言っても、この場合、お姫様のような格好じゃおかしい。かといって、無理に軍装をさせても、なんだか、統一記念日の少年少女軍楽隊のようで――いや、失礼、とにかく、リーナ君は華奢でかわいらしいから、へたに強そうに見せようとするとかえって不自然になってしまうだろう？　それで考えたのが、名高い＜魔法使い＞だった軍師ユーディードのマントだ。これは演出効果抜群だよ。このマントは、毎年、統一記念日に博物館を無料解放して公開展示しているものだから、市民はみんな、あれを見ればユーディードのだって分かるんだ。君がそれを着ているのを見れば、みんな、偉大なるユーディードの再来と、熱狂するに違いない」

「そんな……。あたし、今でも普通の魔法だって使えないのに」

「いいんだよ、市民たちは皆、最初から君を＜魔法使い＞だと思ってるんだから。君は別に、何も魔法を使って見せたりしなくてもいいんだ。君は、それを着て、ただ黙って立っていればいい。それだけで市民たちは、君のことを、本当はアルファード君以上にすごいことができる大魔法使いだと、何もしなくても勝手に思いこんでくれるからね。要はハッタリだよ」

「えー、そんな……」

「嘘をつくのが心苦しければ、いっそ、正直に、私は女神様ですって公言して、女神の扮装で出て行くかい？　『今まで＜魔法使い＞と呼ばれてきたけど、それは仮の姿で、私の本当の役回りは実は＜女神＞でした』って？　それはさすがに、ちょっとまずかろう？　さすがに物議を醸すよ」

「それは、そうだけど……」
「なら、君は、『魔法使い』の役を演らなけりゃならない。今回の出し物には『普通の女の子』なんて役はないんだからね。『女神』を演らないんなら『魔法使い』だよ」
「でも……。博物館から持ち出してきた百五十年も前のマントなんて、ボロボロなんじゃ……？」
「いや、そんなことないよ。もともと非常に上質のものだし、保存の魔法も最初から丁寧にかけてあって、歴史的な偉人のものだから、その後の保存も、もちろん万全だ。問題は丈だが、普段用の膝丈のマントだし、彼は比較的小柄な男だったらしいから、君にも着られるだろう。きっと、ちょうど足元くらいまであって、かえって重々しい感じがでて、いいんじゃないかな？」
「はあ……」
里菜は開いた口がふさがらなかったが、
「人助けだと思って、どうか、頼むよ」というユーリオンの懇願に、しかたなく、マントと、その下に着るように言われた何やら古風な服を抱えて、さっきの部屋に着替えに行った。
着つけ方のさっぱりわからない古風な衣装に手間取った里菜がやっと執務室に戻ると、そこには、物語の挿絵から抜け出してきたような凛々しい騎士が立っていた。里菜は目を丸くして叫んだ。
「アルファード、カッコいい！」
アルファードはひどく照れて、困った顔をしたが、美々しい鎧に身を包み、広い肩に重厚な長いマントをかけたアルファードは、ユーリオンの予想通り、いかにも立派で、見栄えがした。
その上、彼は、これまで持ったこともないような、見るからに重そうな、ものものしい広刃の大剣まで持たされている。この、宝石を飾った大仰な剣は、城の宝物蔵から持ち出された昔の王族の持ち物だという。
感嘆する里菜に、ユーリオンは、
「そうだろう、そうだろう」と頷いて、惚々とアルファードを眺め

回した。
「うーん、いいねえ。思ったとおり、君はこういうのを着ると、実に映えるねえ。惚れ惚れするようなますらお振りだ。この剣も、すばらしく似合って、よかったよ。アルファード君は上背もあって、こういう重量感のある長い剣を持っても、体格が剣の風格に負けないからね。うん、まさしく、これは、いにしえの勇者そのものだ！　ああ、わくわくするよ！　こんな、いにしえの英雄たちの絵物語のような胸踊る姿が生で見られるとは、私はなんて運がいいんだ。どうせなら、君には、宴会でも、ずっとこれを着ていてもらおうかねえ……」
　閉口するアルファードをよそに、ユーリオンはもう、御満悦である。
「それに、リーナ君、君もなかなかいいよ。いかにも清らかで、かわいらしい中にも気品と神秘性が感じられて、なかなかそれらしい。男性ファンから花束が殺到すること間違いなしだ。うん、ふたり並んだところも、実に絵になる」
　ひとりで有頂天になっているユーリオンを横目に見て、
「ねえ、アルファード……。なんだか、あたしたち、リオン様の着せ替え人形になったみたい」と、里菜が耳打ちすると、アルファードも苦笑して頷いた。
「ああ。でも、彼の言うことには、一理ある。たしかに、長い混迷にうちひしがれた市民に希望を与えるには、こういう馬鹿らしい演出も必要だろう。ちょっと恥ずかしいが、まあ、しかたがない。つきあおう。どうせ、ここでの恥は、もう、かき捨てだ」
「そうね。どうせなら、なりきって楽しんじゃお！　あたし、一回、コスプレってやってみたかったんだ！」
　里菜はマントを広げてくるりと回って見せ、
「こらこら、リーナ君、大魔法使いはそんな軽々しい仕草をしちゃいけない」と、ユーリオンにたしなめられたのだった。

第五章＜水底の夢＞第三場（1）

ユーリオンの言うところの『何十年も語り継がれるような大宴会』は、十日を待たず、それから一週間後に催された。

通常なら考えられない実現の早さだが、実は、＜賢人＞たちは、里菜たちが帰還する前からちゃっかり祝宴を予定して、ひそかに計画を進めていたのだ。もちろん具体的な手配には入っていなかったが、ゴーサインが出しだい、いつでも動き出せるように、詳細に手筈を整えてあったらしい。

里菜たちが命がけで戦っていたというのにずいぶんと調子のいい話だが、待っている彼らにしても辛かったのだ。災厄の後始末に追われる暗く落ち着かない状況の中で、根本的な解決は自分たちの手ではどうにもならず、ただ里菜たちの首尾を待つしかないという、その辛さ、もどかしさ、いらだちを紛らわせるのには、仮想の祝宴の計画策定という現実逃避的な仕事がうってつけだった。里菜たちの勝利を祝う宴会の準備を進めることで、彼らは、実際には何も出来ずにいる自分たちが二人の戦いに陰ながら何か一役（彼らにとって宴会係というのは立派な大役なのである）買っているような気分になれたし、それに、『遠からず彼らが勝って帰ってきて自分たちは祝宴を開けるのだ』ということを前提にした仕事に、その『前提』に疑問を持たずに本気で取り組んでいれば、彼らの勝利が確実な予定であるようにも錯覚していられた。それがただの錯覚であっても、その錯覚のおかげで、彼らは、希望を捨てずに頑張ることができたのだ。

もちろん、非常事態のさなかなのだから、しなければならない仕事は他にもたくさんあり、彼らとてそれをさぼっていたわけではないのだが、そういうせっぱつまった仕事で忙しければ忙しいほど、その合間を縫っての、『来たるべき明るい明日の楽しい祝宴の打ち合わせ』という前向きな現実逃避が、彼らには、精神の緩衝剤とし

て、ぜひとも必要だったのである。
　特にタナティエル教団が窓の下に集ってしまった最後の数日は、賢人から事務補助員に至るまで、みな、気が気でなくて仕事がまともに手につかず、結局、どうしていいかわからなくなった彼らは額を集めてひたすら現実逃避に精を出していたから、おかげで祝宴の計画書は、非公式の草案ながらも、必要な食材の見積もりからその発注先の内々のリストアップまで、事細かに出来上がっていた。
　また、いつも能率の悪いイルベッザの役人たちが、いざ里菜たちが戻ってきて計画にゴーサインが出た時に見せた素早い対応とめざましい働きぶりは、普段の彼らからはとても想像もつかないもので、宴会の用意は、実にてきぱきと整えられたのだ。――要するに、この人々は、そろいもそろってお調子者なのであった。
　宴会に先だっては、華やかなパレードも行なわれた。
　ユーリオンに言われるままに、眩い光を発しながら薄暮の空を飛び、城のバルコニーに降り立って手を振るという見世物を演じて市民へのサービスに努めたふたりも、さすがに、このパレードだけは勘弁してもらいたかった。何しろ、アルファードは例の鎧に大剣、里菜はユーディードのマントで、正規軍の騎兵隊や軍楽隊を従えて市内を一周しながら、花やリボンで飾り立てた馬車の上から市民たちに手を振ってやってくれというのだから、いくらなんでも付き合いきれない。
　けれども、
「リオン様……。そんな恥ずかしいこと、ほんとにしなくちゃいけないんですか？」という里菜の言葉に、ユーリオンは断固として答えた。
「ああ、これは、どうしてもやってもらわなくちゃならないんだ。あの凱旋の時だって、市民全員が構内に入れたわけじゃないし、君たちも市内をぐるっと飛び回ったわけじゃないんだから、君たちの姿をよく見られなかったものもいるだろう？　パレードをやらないと、そういう連中の不満が爆発する」

「でも……」
「いや、君たちが少しでも、私が火あぶりになるのを哀れに思ってくれるなら、どうしてもパレードをやってくれなくちゃいけないよ」
「えっ、火あぶり？」
「そう。パレードをやらないと暴動が起こって、私は火あぶりにされるんだ。だからどうか、私を火あぶりから救うと思って……。君たちは、私が殺されても、同情してくれないのかね？　私のことを、ほんの少しでも、友達だと思ってくれてはいないのかね？」
この、強引な泣き落としにあって、ついにふたりは、派手派手しくパレードをやらされたのである。
そうして、宴会はさらに派手だった。何しろ、イルベッザ城構内は、＜賢人の塔＞の正面広場を始め、いたるところにテーブルとごちそうが並べられ、市内に居合わせた避難民や出稼ぎ者たちも含めたイルベッザの全市民――どころか、建前上は全国民に参加の権利があって、実際、近隣の町からも街道沿いにぞろぞろ人が流れ込んできた――が、この立食式のパーティーに招かれたのだ。
といっても、もちろん市民全員がいっぺんに構内に入るのはもちろん無理だから、＜賢人会議＞は市内のあちこちに屋台を出して、構内に入りきれない市民に、お菓子や軽食や飲み物を無料で振る舞った。もう、街ひとつがまるごと巨大な宴会場と化したのである。
いつも予算がないと言ってばかりの＜賢人会議＞がいったいどこからこんな費用を捻り出したのかと、里菜は、あきれつつも心配になってしまった。貴重な予算を、こんな、たった一日の飲み食いなどに浪費しないで、地震で壊れた建物を直すとか、市民に復興資金を低利で貸しつけるとか、もっと建設的で後に成果の残る、実際の役に立つことに使うべきではないかと思ったのだ。
だが、それをアルファードに言うと、彼はこう答えた。
「リーナ。君は、『明日からのパンより今夜の酒』ということわざを知っているかい？」

「なに、それ……。知らない」
「イルベッザ気質を現わすことわざだ。こういう有名な例え話もあるぞ。その日の食べ物にも事欠くような貧しい男が三人いた。ひとりは北部の農村の、ひとりはカザベルの、ひとりはイルベッザの住民だ。彼らがそれぞれ、切りつめれば一週間は食い繋げる程度の金を、偶然、手に入れた。北部の村の男は、その金で一番安い黒パンを買って、一週間食い繋いだ。カザベルの男は何も食べずに我慢して、その金で安いりんごを一山仕入れて、道端で言葉巧みに高く売りつけ、その売り上げを元手に商売をはじめて、やがて大金持ちになった。そしてイルベッザの男は、最初の晩に豪勢に飲み食いしてその金を使いきり、あとの六日間は、それまでと同じように腹を空かせていた……」
「なんか、イルベッザの人って、とんでもない言われようね……」
「ああ、だけど、そういう気質なんだから、しかたない。だいたい、この話は、当のイルベッザで自嘲的に語られているものだ」
「でも、この宴会を税金の無駄使いだとか思う人、いないの？」
「それは、たまにはいるかもしれないが、思っても、それを口に出すと、まわりの人間から、そんなヤボを言ってと白い目で見られるから、まず、口には出さないだろうな。そして、どっちみち金が使われてしまったからには、楽しまなければ余計にその金が無駄になると、宴会の時には自分が率先して力一杯楽しむだろう」
（はあ……。イルベッザ市民って、いったい……）と、里菜はあきれ返ったが、＜賢人＞たちからして、そろってこのイルベッザ気質丸出しなので、どうしようもない。
　また、＜賢人＞たちには＜賢人＞たちなりの考えもあって、同じ予算を使うなら、直接地道な復興策に使うより、人心を鼓舞することに金をかけて市民の復興への意欲を掻き立てたほうが最終的には投資効果が高くなるというのが、彼らの、一致した見解であるらしい。一見、無駄に見える金を使っても、それで市民の労働意欲が増せば、その分、経済に活気が出て、税金も、やがては使った分以上

に入ってきて、元が取れるという計算だ。また、こういう大規模な公的行事をやれば、大量の食材や物資の民間への発注がカンフル剤となって停滞していた流通経路にも活が入るだろうし、一時的に大量の人手を雇ったりもするので、そうしたことが民間に与える経済効果は計り知れないほど高いはずだという。実際にそう上手くいくものかどうかは別として、これが彼らの流儀であるなら、里菜がとやかく言ってもしかたがない。郷に入っては郷に従えというし、やっぱりここは、税金を無駄にしないためには自分も全力で宴会を楽しむべきだろう。

そういうわけで、里菜もせいぜい、ごちそうや余興を楽しんだのだった。

そして今、遅くまで賑った大宴会の夜が明けて、イルベッザの街全体が宴会の後のごみや食べかすとうらさびしい気配に埋もれ、市民たちがけだるい二日酔いの眠りをむさぼる中、里菜とアルファードの一行は、イルゼールに向けて旅立とうとしている。

それは、ひっそりとした旅立ちだった。

ふたりが村に帰るということは宴会の席で市民たちに発表されていたが、それが今朝だということは、公表されていないのだ。

彼らが別の世界へ戻っていってしまうということは、市民たちには伏せられているが、今、ここにいるものは、みんなすでに知っている。

旅の一行は、里菜とアルファードとローイにキャテルニーカ、そしてもうひとり、ユーリオンが一緒だ。

見送りは、＜賢人＞たちと、ごく少数の高位の役人たち、後はリューリやティーオなどのごく親しい友人が数人だけである。

一行のうち、キャテルニーカとユーリオンは、里菜たちを見送った後、再びここに帰ってくる予定だ。

ユーリオンがイルゼールに行くのは、＜長老＞として里菜たちを

見送るためだけではない。数週間前、村が、神話学者としての彼に、手紙で助けを求めてきたのである。

村では、先代の司祭の急死に伴い、村祭りの儀式の作法が分からなくなって困っていたのだ。何しろ新しい司祭はまだ幼くて充分な引き継ぎを受けていないし、村人は、司祭もいつかは死ぬのが当然で、しかも彼女がすでに高齢だということくらい分かってはいたのだが、その日がこんなに突然やってくるなどとは夢想だにしていなかったから、誰も彼女から祭祀の進め方を真面目に聞きとっておこうなどとは思わなかったのだ。そもそも、司祭以外の村人は、普段はもうそんな古い儀式のことなど気にも止めておらず、祭りの時の女神の祠の前での儀式を、ただ、形式的な宴会の開会宣言くらいにしか受け止めていなかったのである。

それでも、実際にまた、祭りの季節が近付いて、そういえば祭祀のしきたりを誰も詳しく知らないとなったら、やはり、それはまずいということになった。それでみんなが困っている時に、昔、ユーリオンを家に泊めた当時の世話役が、「たしか、あの時の学者先生が、ばあさんから儀式の次第を聞いて書きとっていったはずだ」と言い出した。

ユーリオンも、＜長老＞として多忙な身であるため、本当ならそのようなことのために遠いイルゼールくんだりまで出向くわけにもいかず、手紙くらいで話を済ませるつもりでいたのだが、ちょうどいいことに里菜とアルファードの見送りという口実ができたので、実はずっと前からもう一度行きたいと願っていたあの村に、自ら出向くことにしたのである。

村人は今でも、彼が長老になっていることを知らず、ただ、『あの時の若い学者先生』に手紙を出したつもりでいるから、その彼が＜長老＞として現われたら、さぞや驚くことだろう。

キャテルニーカが一緒にいるのは、里菜とアルファードを見送った後、帰り道にヴェズワルに立ち寄るためだ。彼女の、癒しの旅の、最初の地である。

アムリードを始めとするヴェズワル派の信徒たちは、タナティエル教団が＜賢人の塔＞の前に集結したあのときにも、姿を見せなかった。キャテルニーカは、今、自分を一番必要としているのは彼らだと――心をかたくなにした彼らにこそ、一刻も早い癒しが必要なのだと考えている。

その後、彼女は、いったんイルベッザに戻った後に、ふたたび、今度は、自ら彼女の護衛と身辺の世話を申し出たタナティエル教団のものたちをお共に、全国行脚の旅に出るつもりだという。全国で、＜刻印＞を持つ人を癒し終って帰ってくるには、きっと一年はかかるだろう。その間、初級学校は休学だ。　そして、キャテルニーカのその長い旅が終わる日を、イルベッザで待つ人がいる。

数少ない見送りの人の中にいる、少年学者ティーオである。

里菜は、小さなキャテルニーカとティーオが手を取りあって別れを惜しむ愛らしい光景を眺めながら、思わず溜息をついた。

「はあ……。まだ、信じらんない。ニーカが婚約だなんて……」

横でローイが笑う。

「女の子ってのは、男の子より早く育つんだよ。村でだって、つい昨日まで俺たち男の子と一緒に木登りなんかしていた女の子が、ある日突然いつもの集合場所にこなくなったと思っていたら、次に会った時は、いきなり、きれいな花嫁さんだったりしたもんさ」

「だって、だって……。ニーカは、まだ十二よ。結婚なんて、いくらなんでも、早すぎるわ！」

「そりゃあ、まだ、ちと、早いけどさ。何も、すぐ結婚するわけじゃないだろ。あの子が旅から帰ってきて、初級学校を、たぶん一年か二年遅れで卒業してからだって話じゃねえか。三年たてば、あの子も、もう、十五。ティーオの坊やは、十八か？　それなら、ちょっと早目じゃあるが、別にそうおかしくはねえさ」

「そりゃあ、この国ではそうなのかもしれないけど……。でも、ニーカだけは……。だって、あの子、年のわりに幼いし……。まだまだ子供よ！」

「親はたいてい、自分の子のことをそう思ってるんだよな。同じ年でも、自分の子だけはいつまでも子供だってな。あんたのそれも、そういうのと一緒だぜ。いいかげん、あきらめな」

「あきらめろって、別にあたし、反対してるわけじゃ……。でも……」

里菜はまた、溜息をついた。

第五章＜水底の夢＞第三場（2）

キャテルニーカとティーオの婚約が発表されたのは、里菜たちの帰還の翌々日の夕方、ユーリオンがイルベッザ城内で開いてくれた内輪の夕食会の席でのことだった。

里菜とアルファードは、結局、イルベッザへ帰還して以来、もう宿舎に帰ることを許されず、城内にそれぞれあてがわれた部屋に泊まるように言い渡されてしまった。そうすると友人たちと自由に会う事もできないと苦情を言うと、ユーリオンが、内輪のものを招いての夕食会を整えてくれたのだ。ずっと国賓扱いで、いやおうなしにほとんどの時間を公人として振る舞う他なかった里菜たちにとって、この夜は、親しいものと内輪で語り合える貴重なひとときだった。

普段、小宴会や食事付きの会議に使われる城内の小さな広間には、里菜とアルファードの他に、ユーリオンとローイとキャテルニーカ、それにティーオとフェルドリーンが集まって、なごやかに語りあった。

その時に、里菜とも顔見知りの女性治療師の結婚が決まったというリューリの報告をきっかけに女性陣一同が花嫁衣裳の話題で盛り上がっていたところ、小さなニーカもいっぱしに自分がどんなデザインの花嫁衣裳を着たいかを一生懸命主張しはじめた。

その微笑ましさ、愛らしさに、ユーリオンが、にこにこと目尻を下げて、

「しかし、君のような絶世の美少女をお嫁さんにするのは、どんな男だろうね。君の夫になる人は、きっと、国中の男たちから羨ましがられて、さぞ大変だろうね。夜道を歩く時には、背中に気を付けないといけなかったりするかもしれないぞ。まあ、そんなことはずっと先のことだろうが……」などとお愛想を言ったところ、キャテルニーカはいきなり、きっぱりと、こう宣言したのだ。

「そんなに先じゃないわ。あと、二、三年よ。あたし、初級学校を出たら、すぐ結婚するの」

ぶっ、と、ユーリオンがお茶にむせた。みんなも、ぽかんとキャテルニーカを見た。

気を取り直したユーリオンは、ハンカチで口元をぬぐいながら、取り繕うような猫なで声を出した。

「あ、ああ……、そう。そうだね、早くきれいな花嫁さんになりたいんだよね。し、しかしね、キャテルニーカ君、相手がいないと結婚式はできないんだよねえ。まあ、君ほどの美人なら、あと何年かすれば、お相手候補は、さぞかし殺到するだろうけどね……」と言いながら、ユーリオンは、はっと、それまでほとんど話さずに端っこの席でおとなしくしていたティーオに目を止めて、どういうわけか咎めるように叫んだ。

「ティーオ君。なんで君が赤くなってるんだね！」

全員の視線がいっせいに集まって、ティーオはますます真っ赤になった。

「ははあ……、そういうことか」と、ユーリオン。

「まあ、あんたたち、何よ、あたしに一言の相談もなしに！　前からあやしいとは思ってたんだけど、それにしても……」と、リューリ。

みんなが——アルファードでさえ——納得顔でふたりを見比べるのに、里菜は話の展開についていけず、

「えっ、なに、なに？　そういうことって、どういうこと？」と、助けを求めてきょろきょろとみんなを見回して、リューリに呆れられた。

「リーナ。あんたって、前から、こういうことに関しちゃ、ちょっと鈍いんじゃないかと思ってたけど、もしかして、ちょっとどころか、途方もなく鈍いんじゃない？　このふたり、ちびすけのくせに、いつのまにかデキてんのよ！」

「えっ……！　ええーっ！？　嘘っ！」

「……あなた、驚くのが人よりワンテンポ遅いわよ」
そこへ、キャテルニーカが誇らしげに発表したのだ。
「あのね、あたしとティーオは、婚約したの！　ねっ、ティーオ」
「う、うん、実は……」と、ティーオが小さくなって、消え入りそうな声で答えた。
「まだ、ふたりだけで約束したことなんだけど、ぼくの両親にも、近いうちに手紙を書いて、認めてもらうつもりで……。彼女なら絶対反対される筈ないし……」
そこでティーオは、ちょっと言葉を切って顔を上げ、小さいながらもきっぱりした声で付け加えた。
「それに、もし反対されても、ぼくは彼女をあきらめません」
「嘘ォ……。いつのまに……」
里菜がショックで呆然としている間に、ユーリオンが最初に驚きから立ち直った。
「……いや、いや、驚いた。それは素晴らしい。いや、おめでとう。ティーオ君、君は一見おとなしいが、どんな障害にも負けずに自分を貫ける強い意志の持ち主だというのを、私は知っているよ。いやぁ、結婚式が楽しみだ。本当に絵のように愛らしく初々しい新郎新婦が見られるだろうね。もちろん、結婚式には、私も呼んでくれるね？　結婚祝いは、何がいい？」
浮かれてはしゃいでいるユーリオンの隣で、リューリが笑った。
「リオン様、いくらなんでも気が早いわよ！」
里菜はもう、みんなのそんな大騒ぎなどほとんど耳に入らずに、なんだかとりのこされたような心境で、ひとりでぼうっとしていた。
（嘘よ、嘘……。信じらんない。だって、まだ、子供じゃない！）
考えてみれば、たしかに、キャテルニーカだって、小柄なのと普段の言動が幼いのとでまるっきり小さな子供のように錯覚しがちだったが、実際には、もう十二才。そろそろ恋の一つくらいしても当然かもしれない。そういえば、里菜がその位の年だった頃を思い出してみれば、オクテだった里菜自身はともかく、級友たちは、寄る

とさわると好きな男の子の噂話や恋のおまじないの話にうつつを抜かしていたものだ。

（でも、だからって……。だからって、いきなり婚約とか結婚とか、そんなこと考えるのは早過ぎるんじゃない？　あたしなんか、ついこのあいだまで、そんなの全然自分とは違う世界のお話だと思ってて……っていうか、そんなこと、まだ考えつきもしなかったのに。そりゃあ、あたしが他の人よりオクテなのはわかってたけど、でも、まさか、ニーカに先を越されるなんて……。だって、ついこのあいだ、あたしの膝の上で子守唄をせがんでいたのは誰？　ほんっとに、ついこのあいだよ！　はぁ～、子供ってすぐに大きくなっちゃうのね……）

そんなわけで、今も、里菜は、跳ね橋の前で手を取り合ってしばしの別れを惜しむふたりを眺めながら、何だか取り残されたようなさびしさを味わっていた。

「しっかし、あのティーオの坊やも、あんなおとなしそうな様子をして、なかなかやるよなあ。なんたってニーカちゃんは、今だってかわいいけど、あと数年すれば、間違いなく国一番の美女だぜ。それを、まだ引きあいの少ない今のうちに確保しておくとは、ちくしょう、うまいことやりやがって……」と、ローイが横でぶつぶつ言っている。

アルファードが笑って口を挟んだ。

「ローイ。彼らのことはともかく、お前のほうの首尾はどうなんだ。ちゃんと、ヴィーレに土産を買ったか？」

「お、おう！　買ったよ」

「なあに、なに買ったの？」と、里菜はローイの背負い袋にぶらさがるようにして、中を覗きこもうとした。

「よせよ、リーナちゃん、重いだろうが。あのさ、リボンとさ、砂糖菓子とさ……」

「えーっ、ローイってば、そんなものだけ？」

「いや、その……。あと、指輪も買ったよ」

「やったあ、ローイ、どんなの？　見せて、見せて！」
「あとでな。休憩の時に見せるよ。ほら、もう出発だ」
イルベッザの秋の早朝、馬に乗った一行は、見送りの人々に手を振って、跳ね橋を渡った。来るときは徒歩だったが、帰りは馬だ。ゆっくり行っても、秋分までには、なつかしいイルゼールに帰りつけるだろう。ローイは、そこで、ヴィーレにプロポーズする決心を固めているのだ。
ふたりがローイからその決心を聞かされたのは、あの夕食会の後だった。
皆が退出した後、ローイだけが、もうしばらく話がしたいと残って、アルファードと里菜と三人で食後のお茶を飲むことになった。みんな、今日集まった中でもローイだけが里菜たちと特別関わりが深い最初からの仲間なのを知っているし、何か訳ありなのだろうとも察していたから、「じゃあ私も、もうしばらく」などと言い出すものはなく、気を利かせて、彼らを三人きりにしてくれたのだ。
しばらく、それまでの続きの冗談を言っていたローイは、そのうちにふいに黙り込んで、ぽつりと呟いた。
「あのさあ……。あんたら、やっぱり、くっついちまったんだよな……？」
「く、くっつくって……。まあ……、そういうことかなあ……」と、里菜はあいまいに答えながら、アルファードの顔をちらりと伺った。今だに、もしかするとそう思っているのは自分だけかも知れないという気がして、ちょっと怖かったのだ。
何しろ、彼らがふたりきりで互いの気持ちを確かめあうことができたのは荒野でのあの短いひとときだけで、それからはずっとあわただしくて、ふたりでゆっくり語り合う機会などなかったし、しかもふたりは、自分たちがこの先、恋人同士として時を重ねて行くことなど出来ないのを、初めて想いを通わせあったその時から、あらかじめ知っているのである。
それでも里菜は、あの時の、たった一度のくちづけと、そして何

より、あの時、確かに通いあった心のゆえに、たとえ将来の約束は許されなくても、これからふたりの想い出を積み重ねてゆくことは出来なくても、今、自分とアルファードは恋人同士なのだと信じている。でも、アルファードのほうは、どう考えているだろうか……。

里菜の不安気な視線に気付いたアルファードは、照れくさそうに、でも、きっぱりと答えてくれた。

「ああ。まあ、そういうことだ」

「そうか、やっぱりなあ……」と、ローイは呟いた。

「うん、見れば分かるよ。よかったな。……うん、今なら、よかったなって、言えるな。あんたらが以前のあんたらのままだったら、俺、リーナちゃんに、そんなやつ止めとけよって言うところだったけどな。いや、やきもちからだけじゃなくて、本当に、アルファードとくっついてもリーナちゃんは幸せにゃなれないだろうと思ってたからさ。でも、今は違う。……あんたらさあ、なんか変わったよな。二人とも」

そう言って、ローイはしばらく考え込むようにして、また、口を開いた。

「あのさあ……。俺、あんたらと一緒に村に帰って、ヴィーレに結婚を申し込もうと思うんだ……。いや、さ、何も、あんたらがくっついちまったからリーナちゃんを諦めて二番手のヴィーレで手を打とうとか、そういうんじゃないんだぜ。俺だって、あんたらがいない間に、いろいろ考えたんだ。……リーナ、俺、あんたには、俺のところにあんたの偽物が来たってこと、話しただろ？　どういうことがあったのか、あの時、詳しくは話さなかったが、実は、あんたの偽物は、俺に、自分と一緒になろうって言ったんだよ。俺、その時、本当のことに気がついたんだ。俺のあんたへの気持ちは決して遊び半分のいいかげんなものじゃあなかったんだが、かといって、本気であんたと所帯を持ちたいとか、そういうのとは違うんだって。うまくいえないけど、リーナ、あんたは、俺にとって、空の虹みたいなものだ。とってもきれいだけど、自分のところに取ってこよう

なんて思えるはずのないものだったんだ。でも、ヴィーレは、さ……。ヴィーレは、足元に咲く花だ。踏まれないように守ってやらなきゃならない、小さな花だ。ヴィーレは、俺が幸せにしてやらなくちゃならないんだ。俺が守ってやらなくちゃならないんだよ。そして、そう出来て初めて、俺も幸せになれるんだと思う。俺さあ、前に、あんたに言ったことあるだろ？　だれでもこの世にいるからには、何か、その人にしかできないことがあるはずだって。俺にとって、それは、ヴィーレを幸せにすることなんだ。そう、俺は、ヴィーレを幸せにするために、この世にいるんだよ！」

　里菜は、恋人とふたりきりの時ならともかく、第三者の前で、よくもぬけぬけとそんな恥ずかしいセリフを口に出せるものだとあっけにとられて、

「……ローイ。あなたって……」と、言いかけ、『詩人ね』という続きの言葉を飲み込んだ。そういえばローイは本当に詩人なのだから、今さらひやかしてもしかたがない。

「ねえ、ローイ。それ……、あたしたちにじゃなくて、ヴィーレの前で、ちゃんとそう言ってあげれば？　女の子なら誰だって感激するわよ」と里菜が言うと、

「そ、それがさあ……。言えればいいけど、やっぱ、俺、たぶん、いざその時になるとさあ……」と、ローイは珍しく気弱な顔をし、アルファードが笑って思い出させた。

「ローイ、女の子にうまいことを言うのはお前の特技じゃなかったのか？　どんな甘ったるいセリフでも絶対照れずに言えるって、俺によく自慢してたじゃないか」

「いや、そうだけどさ、そりゃあ、まあ、普段なら、口説き文句なんていくらでも、湯水のように沸いて出るんだけどさ……。でも、リーナちゃん、俺、あんたにプロポーズした時も、何にもうまいことなんか言えなかっただろ？　すっげえ陳腐なセリフしかさ……」

「なんだ、ローイ、お前、やっぱりリーナにプロポーズしたんだったのか？」

「えっ、アルファード、あんた、知らなかったのか？」
「ああ、まあそんなところだろうとは思っていたが、ふたりとも俺にそのことを言わなかったからな」
「あのう、アルファード、あたし別に隠してたわけじゃないのよ……」と、里菜はあわてて言い訳したが、アルファードは笑っていた。
ローイはばつが悪そうに頭を掻いた。
「ちぇっ、何だ、俺、てっきりリーナちゃんがあんたに話したとばっかり思ってたよ。知らなかったんなら、黙ってりゃよかった……。ふたりとも、あのことは、なかったことにしてくれな。俺、あれはあれで本気だったんだけど、とにかく、これからあんたらの邪魔なんかする気はねえからさ。俺、これからはもう、ヴィーレ一筋だぜ！　……でも、俺、こっそり村を出てきちまって、ヴィーレ、怒ってないかなあ……。もう、別のやつと婚約なり結婚なりしちまってたら、どうしよう……。そしたら、俺、俺……。うわァ……」
「ローイ、そんな、今から弱気にならないで。大丈夫よ、ヴィーレは、きっと待ってるわ。もしかするとヴィーレはアルファードを待ってるつもりでいるかもしれないけど、もしヴィーレが自分で気がついていなくても、本当はアルファードをじゃなく、あなたを待ってるのよ。そういうこと、一番分からないのは本人なんだから。ねっ」
「そ、そうかなあ……。まあ、ヴィーレだって、あんたらがデキちまったのを知ったら、アルファードのことはあきらめるだろうしなあ……。あんたら、もちろん、村に帰ったら一緒になるんだろ？　うまくいけば、婚礼があいついで二組だ。そうなったらすげえ目出度いよな！」
ローイの言葉に、里菜とアルファードは顔を見合わせ、里菜はそっと言った。
「あのね、ローイ……。あたしたちふたりとも、お祭りの後で、元いた世界に帰るの。みんなにも、後で話すつもりなんだけど……」
「えっ！　帰るって……。帰れるのか？　帰り方、分かったのか？

元いた世界って、ふたりとも同じところから来たのか？　じゃあ、そっちに戻ってから、あんたら、そこで一緒になれるのか？」
「……ううん、同じ世界なんだけど、たぶん、あたしたち、別々になって、お互いのこと、忘れちゃうと思う。きっと、もう、会えないわ……」
　里菜がうつむくと、ローイは強い調子でこう言った。
「いや、大丈夫だ！　あんたらがそれぞれ違う世界に行っちまうってんならともかく、同じ世界にいれば、あんたらは絶対、また、巡り合えるさ。そして、巡り合えさえすれば、たとえその時、すべてを忘れていても、必ずもう一度、最初から愛し合えるのさ！」
「……ローイ。あなたって、やっぱり、詩人ね」
「あ、ああ、そうだよ。今さら何だよ。それは前から知ってたろ」
「うん……。ローイ、ありがとう」
　湿っぽくなりかけた空気を変えるように、アルファードがローイに言った。
「ところで、ローイ。俺たちが報奨金を貰ったことは聞いてただろう？」
「ああ。しっかし、ひでェ話だよな。あんたら、よく、あの額で納得したよな。あのいけ好かないスカシた＜長老＞のおやじ、あんたらに欲がないのをいいことに……」
「いや、俺たちは本当にいいんだ。別の世界にファーリ金貨を持っていくわけにはいかないんだから」
「ああ、そうか、それもそうだな」
「それでだな、この報奨金と、俺たちがこれまで魔物退治で稼いだ金は、村に寄付するつもりなんだが、一部はお前とヴィーレの結婚祝いにやろうと思っているんだ。お前たちが一緒になるなら、あの家は増築したほうがよさそうだからな」
「そりゃあ、ありがとうよ。でもヴィーレが俺と一緒になってくれるかは、まだ、分からないぜ」
　ちょっといじけたローイに、アルファードは当然のようにうけあ

ってみせた。
「いや、お前たちは、結婚するんだ。これは、俺の――本物の魔法使いの予言だ」
その、自信に満ちた断定口調に、拗ね気味だったローイの表情が変わった。
「……アルファード、それ、本当か？」
「ああ。だから、結婚祝いの金の一部を、今、先に渡しとくから、これでヴィーレに土産を買っていってやれ」
ローイはたちまち勢いを取り戻して、現金そのものに叫んだ。
「そ、そうか？　そりゃあ、ありがたいや！　実は俺さ、歌で稼いだ金、ほとんど使っちまって、残ってなかったんだ。助かるぜ！」
「お前のことだから、どうせそんなことだろうと思ってたんだ」
アルファードは当然のように答えたが、里菜はびっくりして問い質した。
「ローイ、結構稼いでたんじゃないの？　前にお店で歌ってるのを見た時、一曲歌っただけで、あんなにチップ貰ってたじゃない！　あれ全部、何に使っちゃったの？　別にそんな、いい部屋に住んでもいなかったし、服も、派手だけどそんなに上等じゃなさそうだし……」
「いや、その、まあ、いろいろとさ……。えっと……、ばくちをしたりとか、女の子にメシを奢ったりとか……」と、ローイはばつが悪そうに笑い、里菜は、
「これじゃ、ヴィーレは苦労するわね！」と、呆れたのだった。

一行は、市門を出て、古いエレオドラ街道に立ち込める秋の朝霧の中に馬を進めた。
古い森は静まり返り、馬のたてがみを霧が濡らしている。
里菜はアルファードのほうに馬を寄せて小声で囁いた。
「ね、アルファード。そういえばあなた、ローイに予言がどうとか

言ってたけど、予言の力なんて手に入れたの？」
「ああ、実は、予言というのはハッタリだ」と、アルファードは笑って答えた。「でも、彼らは絶対、結婚する。何を賭けてもいい」
「だめよ、アルファード。賭けにならないわ。あたしもあのふたり、絶対結婚すると思うもん」
ふたりはそっと笑いあった。
霧の向こうに朝日が昇ったらしく、行く手の森を浸す霧が、白くぼんやりと輝やきだした。

第五章＜水底の夢＞第四場（1）

祭りの晴れ着に身を包んだ村人たちの行列が、笑いさざめきながら、女神の淵に続くゆるい坂道をゆっくりと登っていく。ちょうど一年前、アルファードが、気を失っているびしょぬれの里菜を抱いて下った道だ。

麦の穂と花冠を手に行列の先頭を行くのは、銅色の髪の小さな司祭ティーティ。その後ろに里菜とアルファード、ユーリオン、キャテルニーカ、そして、女神に供える果物と野菜のカゴを捧げた世話役が続く。

その後ろには、思い思いに着飾った娘たち、若者たち、楽しげに言葉を交わしながら歩く大人たち、老人たち、そのまわりを跳び回る子供たち。みんな、手に手に、ごちそうの入った鍋やカゴ、皿や紙包み、酒の入った壷や皮袋などを持っている。

祭りの二日目の、よく晴れた秋の朝。

彼らはこれから、女神の祠での祭りの儀式に参列し、そのまま場所を移して、羊が草を食べ尽くした後で今は休ませてある山のまきばでの宴会に入る。会場は、自警団の若者たちが、すでに朝早くから出掛けてしつらえてきてある。

去年は司祭の死によって中止され、喪の宴になりかわってしまった、＜女神の見送り＞の宴会である。ただでさえ、みな、今年こそ何時にも増して賑やかに宴を催さずには置くものかと意気盛んだったところに、アルファードと里菜が祭りに間に合うように帰還する――しかも＜長老＞ユーリオンが一緒である――という知らせを受けて、これはもう今までにないほど盛大な宴会を開く他はないと、村人たちは何日も前から張り切って準備を進めていたのだ。

宴の後、里菜とアルファードは、そこからそのまま、エレオドラ山に登る。

彼らが結界を越えて、二度と戻って来ないことを、みんな、もう

知っているから、この行列には、祭りのうきうきした空気と一緒に一抹の寂しさも漂っている。今年の祭りは、いつもの収穫の祭りであるだけでなく、里菜たちの送別の宴でもあるのだ。けれども誰もそのことを口には出さず、それを忘れるように、ことさらにはしゃいでいる。

里菜たち一行が村についたのは、前日の午後のことだった。

むろん、到着のおおよそのころあいは事前に手紙で知らせてあり、村では何日も前からそわそわと、自分たちの英雄の帰還を心待ちにしていたし、到着の直前にはローイが馬を飛ばして先触れとして村に入っていたので、彼らが村にたどり着いた時には、世話役たちを始め、多くの村人たちが村の入口にずらりとならんで出迎えてくれた。

ヴィーレもいた。ティーティもいた。自警団の若者たちもいた。パン屋のおかみさんもいたし、あのオード老もいた。

その日は折しも祭りの一日目、＜女神のお迎え＞の饗宴の宵である。今年はそれにアルファードと里菜の凱旋祝賀会と、ユーリオンの歓迎会が重なったわけだ。一行は、そのまま広場に案内され、祭りの宴を兼ねた歓迎の饗応を受けることになった。村の入口で出迎えてくれた村人たちは、広場までぞろぞろと後をついてきたし、道々、付近の家から続々と村人が出てきて、行列に加わった。ちょうど、去年の冬の初めに里菜とアルファードが村を出た時と同じことが、道筋を逆にして起こっているかのようだった。

静かな村は、この日、前代未聞の興奮に沸き返っていた。一年前に見送ったふたりの、国家的な英雄となっての帰郷はもちろん大事件だったし、その上、ユーリオンが＜長老＞になったことは事前の手紙で知らされていたので、こんなひなびた村の祭りのために＜長老＞がじきじきに来て下さるとは、と、世話役たちは大感激で、下へも置かぬ恭しいもてなしぶりだ。しかも、同行の、目を見張るような美少女が、妖精の女王の直系であり＜魂の癒し手＞であると聞

いて、その有難さにみんなすっかり舞い上がり、ほんの子供を相手に、滑稽なほどのかしこまりぶりである。

それに、ユーリオンについては、＜長老＞であろうとなかろうと、どっちみち、彼が来るというだけで村は大騒ぎになっただろう。村の若い主婦たちは、今でも、かつて自分が娘だったころに村を訪れた彼の思い出を、半ば伝説のように共通して胸に抱いていて、世話役が彼に手紙を出して以来、彼女たちの井戸端会議は、ひさびさに持ち出されたユーリオンの話題で持ち切りだったのだ。

里菜は、一行の行く先々で、今では母となった当時の乙女たちが、あるいは赤ん坊を背負い、あるいは何人もの子供の手を引いて、自分たちの若き日のあこがれの王子様の再来を一目見ようと見物に立ち並んでいるのを見て、唖然とした。彼が以前にも村を訪れていたことや、その時に村の娘たちの人気を独り占めしたことはアルファードから聞いていたが、彼の来訪が村の主婦たちの間にこれほどの波紋を広げるとは想像もできなかったのだ。

「アルファード、リオン様の若いころって、そんなにカッコよかったの？」

里菜がひそひそ囁くと、アルファードは笑って答えた。

「ああ、俺は遠くからちらりと見ただけだったが、確かに、遠目に見てもぱっと目立つようなすらっとした美青年だったし、なにしろ村の男はたいがいが野暮ったい武骨者ばかりだから、彼の垢抜けぶりがなおさら目だったらしい」

「うーん、なるほどね……」

里菜も何人かは顔を見知っている、日頃はたくましく堅実な主婦たちが、すっかり夢見る少女の顔に戻って瞳を輝かせ、頬を染めてユーリオンにうっとりとしたまなざしを注ぐのを、里菜は不思議なものを見るように眺め渡した。

広場について、世話役の挨拶が終わるやいなや、里菜とアルファードの回りには自警団の若者や娘たちがわっと群がってきて、ふたりを誉めたたえると同時に、お留守番の上首尾を親にほめてもらい

たがる子供のように、アルファードがいない間の自分たちの働きぶりを口々に報告しはじめた。
「あんたがいない間、こっちも結構大変だったんだぜ。ドラゴンはやたらと飛んでくるしさあ」
「でも、俺たち、ちゃんと役目を果たしたぜ」
「ミナトがさあ、ミナトが、すごかったんだよ！」
「そうそう！　あんたがいなくなってから、ミナトが仕留め役やってさ、もう、三匹もドラゴンをやっつけたんだ」
「何しろ、女の子がドラゴンをビシバシ退治してるとあって、これはもう、アルファードよか話題性あるから、近隣じゃ大評判だ。女の子たちなんか、みんなキャーキャーいってさ、この近辺の自警団じゃ、どこも女の入団が急に増えたらしいぞ。ローイ、お前、帰って来たからには、ミナトの活躍を讃える歌でも作ってやってくれよ」
「おう、『ドラゴン退治のミナト』ってな！　まかしとけ！　俺がイルベッザにまで届くほど、その名を広めてやるぜ」と、ローイが叫ぶと、
「やだあ、そんな、恥ずかしい」と、ミナトは、頬に手を当てて羞らうそぶりをみせながらも、「でも、どうせなら、タイトルは『美わしのミナト』のほうがいいわ！」と、ちゃっかり付け加えたので、若者たちは、どっと笑った。
「おお、そりゃあ素晴らしい！　それでいこう、それで！」
「でも、ほんと、ミナトって、そういえば、よく見ると結構美人だよな」
「そうよ、ミナトは美人よ。あんた、今頃、気がついたの？」
「おい、カーデ、今から惚れても、もう遅いぞ！　ミナトはもう婚約したんだからな！」
「そうなのよ、アルファード！　ミナトとフィードは婚約したの！　嫁入り道具にドラゴンの爪を持っていく女の子なんて、他にいないわよ。ねっ、ミナト」
フィードというのは、いつか宴会でミナトに抱き付かれていた、

あのおとなしそうな若者だった。若者たちが、後ろのほうにいた彼を前に引っ張り出し、娘たちはミナトを引っ張ってきて、ふたりを並ばせ、みんなして、真っ赤になっているふたりを両側から押してむりやりくっつけながら、口々にはやしたてたのだった。

＜女神のお迎え＞の宴会は、例年通り徹夜で続いたらしいが、長旅に疲れた旅人たちは――宴会となればいつでも元気いっぱいのローイを除いて――適当な時間に席を辞した。ユーリオンとキャテルニーカは世話役の家に滞在してもてなしを受けることになっていたが、里菜たちは、もちろん、なつかしいあの家に戻った。ふたりは、元の世界に帰る前に短い時間でも自分たちの家で過ごしたかったのだ。

家に引き揚げる時、ふたりは、ヴィーレを誘った。村に帰ってくるなり、身近な人たちだけでしみじみ再開を喜び合ったりする暇もなく宴会に入り、その宴会でもふたりは賓客扱いで上座に座らされ、一方のヴィーレは接待側に回って忙しく立ち働いていて、ろくに顔も合わせられなかったのである。里菜とアルファードは、ずっと、なんとかヴィーレと語り合う機会を作りたいと思っていたのだ。幸いヴィーレも、一緒に抜け出してくることができた。

といって、彼らに、ヴィーレに何を話そうという心積もりがあったわけでもなかった。ただ、かつてのように、ヴィーレと三人で、しばらく静かな時を過ごしたかったのだ。ふたりが今はもう恋人同士だということは、すでにローイが彼女に話しているはずだった。が、そのことについて、ヴィーレに何を言っていいか、ふたりとも、見当がつかなかった。でも、きっとヴィーレは、別に何も言わなくても解ってくれるだろうと、解ってくれた上でひととき一緒に穏やかな時を過ごしてくれるだろうと、ふたりは信じていた。

アルファードの家は、ふたりが旅立った時のまま、少しも変わっていなかった。いや、むしろ、前より少しきれいになっていたかもしれない。ヴィーレは、アルファードの家をきちんと整頓して風を通し、寝具も整えて、いつでも使えるようにしてくれていたのだ。

彼らは、以前によくそうしたように、三人で食後のお茶を飲んだ。そうしていると、まるでこの一年の出来事はみんな夢で、去年に戻ったような気がした。前と違うのは、ミュシカがいないことくらいだ。ミュシカは新しい飼い主のシャーノ少年にもよくなつき、村になくてはならぬ優秀な牧羊犬として大切にされ、活躍しているということだ。

アルファードとミュシカは、昼間、村の広場で再会を果たした。ミュシカはもちろんアルファードを覚えていた。が、別の世界に帰るアルファードは、すぐにまた、ミュシカと別れなければならない。アルファードはしばらく屈み込み、ミュシカの首のあたりや耳の後ろを無言でごしごしと掻き続けていた。けれど後でアルファードは里菜にこう言った。

「俺とミュシカは、絶対、また会えると思うんだ。そんな気がする。今は別々の世界に別れても、いつか、きっと、また会える」

お茶の間中、里菜とアルファードは、旅の途中や都での、たあいのない出来事だけを話し、ヴィーレはふたりがいないあいだの村の出来事のあれこれを話した。

ヴィーレは、ふたりが思っていたとおり、里菜とアルファードの関係については何も問わなかった。彼女のほうでも、そのことについて何を言ったらいいか、わからなかったのだ。彼らが互いの気持ちを確かめ合ったことはローイから聞いていたが、ふたりが明日、別の世界に行ってしまうことも、そうするとたぶん別々になってしまって二度と巡り会えないかもしれないこともローイに聞いて知っていたから、ヴィーレは、何も言えなかった。

しばらく他愛のない話だけをして、ヴィーレは帰ってゆき、里菜とアルファードは、なつかしい思い出がつまった小さな家で、この世界での最後の夜を、祭りのざわめきを遠く聞きながら二人きりで過ごした。

そして一夜が明けた黄金色の秋の朝。

村は早くから目覚めて、祭りの熱気に包まれていた。誰もが忙しく立ち働き、あちこちの家から、前日の分と合わせて何日も前から用意を始めていた祭りのごちそうの最後の仕上げのいい匂いが漂い、実際には仕事をしていないものまで何だかあわただしげに走り回り、人々のざわめきにつられて犬たちまで興奮して吠えたてる。

そんな騒ぎの後、祭りの行列は、女神の淵へと出発したのだった。

第五章＜水底の夢＞第四場（2）

女神の祠（ほこら）の前についた一行は、前夜、ユーリオンとティーティと＜世話役＞の三人でユーリオンのノートを参考に話しあっておいた式次第にしたがい、ほぼ例年通りの儀式を執り行った。

ただ、今年は、いくつかの、例年と違う試みがあった。

そのひとつは、ティーティが女神に意味のよくわからない長い祈りを捧げた後、ユーリオンが、その祈りの内容を現代の言葉に直して村人全員に語ってきかせたことだった。

女神が年老いた魔法使いアルファードの手を引いて別の世界に逃れていったというその伝説を、若者たちの多くが、この時、初めて知って、がやがやとこんなことを言いあった。

「なるほどなあ。いつもばあさんが、何やらムニャムニャと訳の分からんことを言っていたのは、こういう意味だったのか……。それならそうと、最初から、ちゃんと分かるように話せばいいのに」

もうひとつ、例年と違うことは、ティーティが、いつもは祠に供える花冠を里菜の頭に乗せたことだった。里菜はそんな予定を知らされていなかったから、ちょっとあわててしまった。

ティーティは続いて里菜に麦の穂を渡しながら、こう言った。

「あたし、これから毎年、お祭りの時には、お姉ちゃんが元気で幸せでありますようにって思いながら、お祈りする。お姉ちゃんが耳をすましていてくれれば、きっと、あたしの声、聞こえるから。遠いところにいるお姉ちゃんの魂が生命の力に満ちれば、この世界にも実りがもたらされること、忘れないで」

ティーティの言葉は、となりにいたアルファードとユーリオンくらいにしか聞こえなかったが、村人の多くは、ティーティが里菜に花冠を捧げたことの意味を理解して、黙って頭を垂れ、胸に手を当てた。頭を垂れた村人の中には、あのオード老人もいた。

おごそかな儀式とは打って変わって、まきばでの宴会は、打ち解

けた無礼講となった。

会場は、少しばかり羊の糞の匂いがしたものの、短い草に覆われて広々としており、秋の名残りの小さな花も咲き、天気は上々だ。里菜たち主賓格のものにはテーブルと椅子が用意されているが、後のものは地面に敷物を広げて思い思いに座り、まるでピクニックのようななごやかさである。

みんな、思う存分飲み食いし、語りあい、歌を歌い、楽器が演奏され、着飾った娘たちや若者たちは草の上でダンスをした。ローイはもちろん、わざわざ自分で用意しておいた舞台がわりの椅子に飛び乗って、イルベッザでの里菜とアルファードの活躍を面白おかしく語って聞かせ、大喝采を浴びていた。

その間も、ユーリオンのファンのおかみさん連中は、子供たちを旦那に押し付けておいて、競って給仕を買って出ては、なんとか少しでもユーリオンの近くに寄り、あわよくば言葉を交わそうと浮足だっている。

驚いたことに、ユーリオンは、彼女たちのうちの幾人かの名前や顔をちゃんと覚えていたらしい。彼は終始上品な笑顔を浮べながら、何人かの名前を呼んでやって、ちっとも変わっていないからすぐに分かったなどと言って舞い上がらせたり、当時のちょっとした思い出話を持ち出して、そんなことを覚えていてくれたとは、と、感激させたりしていた。村の男たちは、その様子を苦笑して眺め、互いの妻ののぼせあがりようをからかいあっている。この時にユーリオンから名前を呼んでもらったおかみさんは、そのことをきっと一生の思い出にするのだろう。

「ねえ、アルファード……。リオン様って、若い頃、もしかして、すっごい女ったらしだったとか？」

里菜がひそひそ言うと、アルファードは、

「いや、別にそういうわけじゃなかったらしいが、とにかく、ただ、どの娘にも公平に礼儀正しく愛想よくしていたらしい。しかし、やはり偉くなる人というのは、人の顔や名前をよく覚えるし、人の心

を掴む術に長けているものらしいな。実に如才ないものだ」と、大真面目に感心していた。

そこへ、大講演を終えたローイが酒を片手にやって来た。

今日はまた、祭りとあってひときわ念入りに盛大にめかし込んでおり、髪は色粉で七色に染め分け、全身を何やらキテレツな光り物で飾り立てて、あちこちぴかぴか光っているので眩しくてどこを見ていいかわからないという、いつにもましてとんでもない装いである。

「おい、アルファード、リーナちゃん、呑んでるかあ？」

「ねえ、ローイ、それはいいけど、あなた、まだ、ヴィーレにプロポーズしないの？」

里菜が小声で囁く。彼は、里菜たちがまだ村にいる今日のうちにヴィーレにプロポーズすると、ふたりに宣言していたのだ。

「いや、するよ、今からするんだけどさあ……。その前に、少し、酒を入れとかねえとさあ……」

「だめよ、ローイ！　そんな、酔っ払ってプロポーズなんて、ヴィーレに失礼よ！」

「そんなに酔っ払いはしねえよ。ただ、ちょっと景気づけがいるんだよ……」

「もう、ローイってば、しっかりして！　こんな大事な時に、お酒なんか呑んじゃ、絶対ダメ！」

里菜に酒の椀を取りあげられて、ローイは情けない顔をした。

「だってさあ……。なあ、リーナちゃん、俺、どうしよう……。なんて言えばいいと思う？」

「だから、このあいだあたしたちに話したようなことを、本人に言ってあげれば？」

「言えねえよ、俺……」

「そんなことないわよ、ローイ、頑張って！」

アルファードが笑って口を挟んだ。

「ローイ。俺たちの前では平気であんな歯の浮くことを言っていた

くせに、今、本人の前で言わなくてどうするんだ。いいか、ヴィーレは絶対、ずっと前からお前のプロポーズを待っているんだ。だから、きっぱりと、強気でプロポーズしてこい。ヴィーレはああいう娘だから、お前のほうから積極的に働きかけないと、いつまでたっても今のままだぞ。このチャンスを逃すと、下手をすれば、この先、一生、ただの幼馴染みのままだからな」

「分かってる、それは分かってるよ。だから、そうならないために、どうすれば……」

「押しの一手。この場合、それしかない。ヴィーレは堅実で慎み深い娘だが、夢見がちな一面を持っている。たぶん、心の奥ではずっと、現実の自分には似合わない夢と知りながらでも、劇的で奔放な激しい恋にあこがれていたんだと思う。でも、ほんの子供のころから、ずっと一家の主婦代わりを勤めなくてはならなかったら、誰だって堅実であり続けるしかないだろう？　ずっとそうして、自分の中の夢見る心を抑えて堅実な主婦役をやってきて、それでその上、結婚まで、親の決めた許婚と何のドラマもなくすんなりまとまってしまうなんて、あんまりつまらない――ヴィーレは多分、心のどこかでそんなふうに思って、お前から離れてみたんだろう。相手がお前なのが気に入らなかったんじゃなくて、ただ、お前とすんなりまとまってしまう前に、生涯にたった一回くらいは、ちょっとした恋愛ドラマのヒロインを演じてみたかっただけなのさ。お前に、俺のもとから、ドラマティックに奪い返されたかったんだ。それを、お前ときたら、奪い返しに来るどころか、ふらふらと他の娘を追いかけてばかりいるから、ヴィーレは、お前のもとに帰りたくても帰れなくなってしまったんだぞ。

だが、今なら、まだ、間にあう。今が最後の、ここ一番のチャンスなんだ。精一杯情熱的な甘い言葉でプロポーズして、ヴィーレの夢を叶えてやれ。いいか、くれぐれも強気で当たれよ。ヴィーレは、たぶん、お前が一歩近づくと、一歩下がる。だからといって、そこでお前が弱気になると、せっかくのチャンスを逃がしてしまうぞ。

そうやって一歩づつ進んでは下がられたりしていたら、いつまでたっても距離が縮まらない。一歩下がられたら、二歩、近づけ。そして、それ以上、後ずさりできぬよう、そこで強引に捕まえてしまえ。大丈夫だ、ヴィーレはお前を好きなんだから」

里菜とローイは、あっけにとられて、まじまじとアルファードを見た。

「……おい、アルファード。俺、あんたの口から、『押しの一手』だの、『強引に』なんて言葉を聞くとは思わなかったぜ。まあ、他人ごとなら、なんとでも言えるよな。しかし俺、あんたは女心なんてひとつも分からん朴念仁だと思ってたが、なかなか穿(うが)ったことを言うもんだなあ」

「そうよね、アルファード、ヴィーレのこと、随分よく分かってるんじゃない。最近になって分かってきたわけ？」

「いや、前から分かってはいたさ。ただ、分かっていても、俺にはどうしてやることもできなかっただけだ。ヴィーレを恋物語のヒロインにしてあげるのは、俺じゃなくてローイの役目だからな。ローイ、俺は本当にヴィーレのことを大切に思っているんだから、お前が、ヴィーレが満足するような、目一杯ロマンティックなプロポーズをしてやらないと、俺が怒るぞ。それができるのは、お前だけなんだからな。さあ、行って来い」

「よ、よぉし、分かった！　じゃあ、行くぞ！」

「そうよ、ローイ、その意気よ！　頑張って！　……あれ？　ローイ、どこ行くの？　ヴィーレはあっちよ、ほら、あっちの隅で、ファーラやレサと立ち話してるわよ」

里菜があわててヴィーレを指差しているのに、ローイはかまわず、どういうわけか、また、さっきの会場中央の椅子に戻っていってしまった。

「……ローイ、おじけづいちゃったのかしら？」

里菜とアルファードが驚いてローイの後ろ姿を見送っていると、ローイはまた、椅子に飛び乗って、大声を張り上げた。

「おーい、宴会名物、イルゼールの大スター、ローイ様の歌だぞお！　今日は特別心を込めて、ひさびさの新作を披露するから、みんな、心して聞けよ！」

たちまちみんなの視線と耳がローイに集まり、ひとしきりの歓声や拍手の後、ざわめいていた会場は、しんと静まった。

美しい旋律が、緑のまきばに、ゆったりと流れ出した。それは、いかにもローイらしい、牧歌的で感傷的な愛らしいラブソングだった。

空の下で　好きだよって言いたい
風の中で　見つめあっていたい

遠いふるさとの
風が歌う丘で

風に抱かれ　くちづけを交わせば
木々もふたり　祝って揺れるよ

緑の野に咲く
君はスミレの花

草の海を　手を取って駆けよう
君と暮す　小さな家まで

毎朝君に　おはようって言いたい
毎晩君に　おやすみって言いたい

寒い夜は　暖めてあげたい
風の中で　寄り添う小鳥のように

『小鳥のように』の一節が二度、繰り返され、その二回目は、だんだんゆっくりになって、最後の一音が思い入れたっぷりに余韻を引いて消えたので、てっきりそこで歌が終わりかと思いかけたみなが、拍手をしようとして上げかけた手は、途中で止まった。歌はまだ、終わっていなかった。最後に、中間部の夢見るような旋律が、遠い谺のように、人が降りた後のブランコの微かな揺れ戻しのように、テンポを落として静かに回想されたのだ。

――遠いふるさとに
帰る夢を見たよ――

それは、幸せな夢から目覚めた後に、夢の名残りが消えて行くのを見つめながら茫然と呟かれた言葉のようだった。どうやら、これは、単純に、今、ここでのローイの気持ちを歌ったというのではなく、遠い都会でふるさとの恋人を想う若者という設定の、ストーリー性のある歌だったらしい。

みな、しばらく、しん、となって、それから割れるような拍手が沸き起こった。里菜も拍手をしようと手を上げかけたが、できなかった。微かに震えるような声でひっそりと歌われた、この、最後の一節を聞いたとたん、思いがけず、いきなり涙が滲んできたのだ。

そういえば、ここに来てから、里菜はこれまで、ほとんど、自分の故郷のことを――家や家族のことを思い出さなかった。別に家や親が嫌いで家出してきたというわけでもないのだから、考えてみれば、これまで家が恋しくならなかったといほうが変なのだ。たぶん、

あまりに遠く離れ過ぎていから、しかも、二度と帰れないと思いこんでいたから、もといた世界のことを考える時でも家や家族のことは思い出さないようにと、いつのまにか自分で自分の心を規制していたのかもしれない。それが、帰れるとわかった今、里菜は突然、家を、家族を――自分の故郷を思い出して、涙ぐんでいる。

里菜は前髪を払うふりでこっそり涙を拭いてから、アルファードと顔を見合わせた。

「アルファード、もしかして、この歌、ヴィーレに……」

「ああ……」

第五章＜水底の夢＞第四場（3）

歌い終ったローイは、聴衆の喝采を手で制して、声を張り上げた。
「あのなあ、みんな、聞けよ！　この歌はァ、ある女の子に捧げる歌なんだァ！　俺が、イルベッザで入院していた時、治療院のベッドでその娘のことをひそかに想いながら心の中で作って、でも一度も歌わずにいたから今日が初演の歌なんだ！」
村人たちはいっせいにどよめいて、たくさんの視線が、後ろのほうにいるヴィーレに集まった。みな、アルファードが里菜が二人揃って元の世界に帰ってしまうとなれば、ローイとヴィーレがよりを戻すのは時間の問題だと噂していたのだ。ヴィーレは、自分に集まった視線にぎょっとして、助けを求めてまわりの友達の顔を見回している。
ローイは、自分の言葉に酔うように天を仰いで、身ぶり手ぶりもよろしく思い入れたっぷりに語り続けた。
「遠い都会の治療院に怪我の身を横たえて、じっと天井を見上げながら、ある時、俺は、ふと思った。俺は何でこんなところにいるんだろう、こんなところで、いったい何してるんだろうって。そうしたら、急に、この村の景色が、天井の向こうに見えるような気がした。ガキの頃に遊んだ緑のまきばが見えるような気がした。その、まぼろしの村から、まきばを越えて来た緑の匂いの風が、病室に吹き込んできたような気がした。その時、俺は、まきばの景色と一緒に、ずっと忘れていたつもりの、一人の女の子のことを思い出したんだ。ガキの頃、俺と一緒にそのまきばで遊んだ、小さな女の子のことを。白い花の冠を頭に載せ、スミレの花束を持って、まきばの陽だまりにちょこんと座った白い前掛けのその子が、どんなに可愛く見えたかを。それを見て、俺は、なんて可愛いんだろう、まるで本物のお姫様みたいだなあって思った――そのことを。
一度、思い出したら、それからはずっと、その娘のことばかり考

えていた。小さなスミレの花みたいな、その娘のことを。その娘の、春の空みたいな水色の瞳のことを。春の日ざしみたいな、その笑顔のことを。もし今、俺の隣に、やさしいあの娘がいてくれたら、どんなにいいだろう、どんなに嬉しいだろうって、思った。そして、ああ、俺って、なんてバカだったんだろうなあって思った。どうして、あんなに可愛いあの娘を置いて、こんなとこまで来ちまったんだろうって。それから、一番きれいな花はいつも足元にあるんだっていう、古い寓話を思い出した。一番の幸せはいつも一番近くにあるんだけれど、人はいつでもそれに気がつかず、遠くまで旅して初めてそれを知るんだっていう、あの、お決まりの例え話を。

そんな説教話を聞かされる度に、そんなこと言われなくっても分かってらあって思ってバカにして聞き流してたけど、昔の人の言うことは、やっぱ、真面目に聞いとくもんだよなあ。俺は、遠く旅して、初めて自分の幸せがどこにあるのか知った。俺の一番大切なスミレの花が、ずっとどこに咲いていたのかを思い出した。昔、一緒に遊んだあの女の子を、自分が、ずっとずっとどんなに好きだったかを、もう一度、思い出したんだ。……その女の子というのはァ」

と、ローイはますます声を張り上げて、いきなりヴィーレをびしっと指さした。

「ヴィーレ、お前のことだあーッ！」

ローイの熱弁にわくわくと聴き惚れていた会場は、たちまち歓声や口笛に包まれた。

「おおーっ！」

「いいぞ、いいぞォ！」

「キャー、ステキ！　ローイ、やったあ！」

若者たち、娘たちが、てんでに声を張り上げ、真っ赤になっているヴィーレが娘たちの群れの中から無理やり押し出された。慌てて群れの中に逃げ戻ろうとするヴィーレを、ヴィヴィとファーラが両側から捕まえて再び引きずリ出す。

そのヴィーレに、あいかわらず椅子の上から、大声でローイが呼

びかけた。
「ヴィーレ、覚えているかぁ？　俺たち、ガキの頃、ちょうどこのまきばで、お嫁さんごっこをしただろ？　俺はお前に、スミレの花の指輪を贈ったよな。俺の気持ちは、今も、あの時と変わっていない。ヴィーレ、愛してるぜェ！　親が決めた許婚だからなんかじゃなく、俺は本当に、ガキのころから、ずっとお前が好きだったんだ。俺と結婚してくれえーッ！」
　会場はもう、娘たちの悲鳴に近い歓声や、若者たちの怒声に近いひやかしの声に包まれて、熱狂のるつぼと化し、ひとりヴィーレだけが、真っ赤になって、凍り付いたように、ものも言えずに立っている。
　里菜とアルファードは呆然と呟いた。
「ローイってば……。信じらんない……」
「いくら劇的にといっても、まさかここまで……」
「うん……。たしかにインパクトは強いけど、リスクも大きいっていうか、これやって失敗したら、もう修復不可能って感じ」
　ローイは、追討ちをかけるように叫んだ。
「ヴィーレぇ！　返事はどうした！　返事をくれよう！　俺、こんだけ派手に、村中の人の前でお前にプロポーズして、これで断わられた日にゃあ、もう、恥ずかしくて、この村に居られなくなっちまうぜ！　それでもいいのかあーッ！」
　それを聞いたアルファードは頭を抱えた。
「……あのバカ。いくら強引にといっても、あれじゃ脅迫だ……。俺は、あいつに与えるアドバイスの選択を間違えたらしい。さっきはあんなにおどおどしていたから、はっぱをかけてやったんだが、あいつの行動パターンを読み誤った。俺もまだまだ未熟者だ……」
　ヴィーレが返事をしないので、ローイは更に声を張り上げて喚き続けた。
「ヴィーレ、聞いてくれ！　俺は、都で、さんざ女遊びをしてきたァ！」

「へっ？」と、里菜は目を丸くし、会場からはどっと笑いが沸き起こった。

大人たちは呆れ顔で苦笑し、若者たちはげらげら笑いながら足を踏みならし、指笛を吹き、大喜びではやしたてる。

「ローイってば、一体、何を言い出すの？　たしかに本当のことだけど、だからって、何もそんなこと、ヴィーレやみんなの前で偉そうに言い触らさなくても……」

「まったく、あいつは何を考えているんだ……」

里菜とアルファードは呆れた顔を見合わせた。

ヴィーレはと見ると、やはり、これは何の話かといった顔で、きょとんとしている。

ローイは会場のざわめきを手で制して続けた。

「だから、ヴィーレ、お前が一緒になってくれたら、俺、これから先、一生、浮気はしない。なんたって、これでもう一生分遊び尽くしてきたんだからな。思い残すことはない。これから先は、お前一筋だ！　俺、絶対、お前を幸せにするぞ！　ヴィーレ、俺はお前を幸せにするために生まれてきたんだァーッ」

「よく言った、ローイ！」

「いいぞ、いいぞォ！」

「キャーッ、ヴィーレ、羨ましい！」

再び嵐のような拍手と口笛が沸き起こる。

「ローイってば、何が『言えねえ』よ。しっかり、言ってるじゃない。ねえ！」

「ああ、あのお調子者め」

里菜とアルファードは笑いあった。

「ちょっとォ！」と、ヴィーレの隣で、ファーラが怒鳴った。「みんな、静かにしなさいよ。これじゃ、ヴィーレが返事しても、聞こえないじゃないのっ！　さあ、ヴィーレ、返事は、返事っ！　もちろん、オーケーよねっ！　ね？　ね？」

「ヴィーレ！」と、ローイがまた大声を出した。「俺、都で、お前

に指輪を買ってきたんだ。もちろん、あの時約束したシルドライトの指輪なんかは買えなかったが、それでも、心を込めて選んできた。ほら、これだ。よかったら受けとってくれ！　受けとってくれるよなっ？」

ヴィーレはますます真っ赤になって、ファーラの後ろに隠れるようにして、下を向いたまま無言で小さく頷いた。

一瞬静まり返ってヴィーレの返事を待っていた人々は、どっと沸き返った。会場は、帽子は飛び交うは、パイは投げられるは、酒はぶちまけられるは、赤ん坊まで宙に投げ上げられるはの、大騒ぎになった。

その騒ぎにも負けない大声で、

「やったァーッ！」と叫びながら、ローイは、椅子の上で派手に躍り上がり、椅子を飛び降りて、ヴィーレのほうに駆け寄った。

娘たちがよってたかってヴィーレを捕まえて、ひやかしながらローイの前に押しやると、ローイはうつむくヴィーレの手を取って指輪をはめてやった。娘たちが歓声を上げて手を叩いた。

すると、その歓声に調子に乗ったローイは、決して小柄ではないヴィーレをいきなりひょいと抱え上げて、わざとよろけたり高々と持ちあげたりしておどけて見せた。ヴィーレはめんくらって、悲鳴も上げられずにただ真っ赤になり、振り落されないようにローイの首にしがみついている。

「ローイって、ほんと、お調子者……。ヴィーレも大変ね。でも、ふたり、幸せそう」

やんやの喝采を浴びてますます悪ノリするローイの得意顔を見て、里菜は笑ったが、ローイのお調子は、これにとどまらなかった。図に乗ったローイは、いきなり、今度はこう叫んだのだ。

「と、いうわけでぇ！　俺とヴィーレは結婚する！　それで、だ。今日はめでたいお祭りだ。幸いここには司祭もいるし、村中の人が晴れ着で集まってて、ごちそうもならんでいる。しかも、なんと、結婚式の守護神でありながら誰の結婚式にも実際に姿を現わしては

くれなかった女神様の名代が、そこに御顕現遊ばしてるじゃねえか！　このチャンスを逃す手はねえ。今、ここで、俺たちの婚礼を挙げ、この宴会に、俺たちの婚礼の宴会も兼ねさせてもらっちゃどうだろうか？　なにしろ、女神様と＜魔法使い＞と＜長老＞、それに本物の妖精の女王様にまで婚礼に立ち会ってもらえるチャンスなんて、もう、二度とねえぞ。な、ヴィーレ、いいだろ？　お父さん、お母さんも、もちろん、いいよな？」

ローイは、ふた親ともとっくに亡くしているから、この『お父さんお母さん』というのは、もちろん、ヴィーレの両親のことだ。この馴々しい呼びかけに、ヴィーレの両親は、笑いながら頷いてくれた。

ヴィーレはまだローイに抱き上げられたまま、ものも言えずにあっけにとられていたが、むろん、他の村人に異存があろうはずがない。みんな、これはめでたいと大喜びだ。

そこに、突然、アルファードの大声が響き渡った。

「ちょっと待て！」

会場は、しんとなった。もちろん誰もが、ヴィーレとローイとアルファードの三人の過去のいきさつを知っているから、ここへきてアルファードからものいいがついたかと、誰もが一瞬、ぎょっとしたのだ。里菜も驚いてアルファードを振り向いた。

だが、アルファードはこう言った。

「ローイ。女の子たちがみんな、子供のころから、結婚式に自分で作った花嫁衣装を着るのを楽しみにしてあれこれと意匠を思い描いているのを、お前だって知っているだろう？　ヴィーレだって、花嫁衣装が着たいはずだ。今ここで、婚礼も宴会もやってしまっては、その夢が叶わないじゃないか。とはいえ、俺も、お前らの婚礼を見届けて安心してからここを離れたい。だから、今、婚礼の式だけを挙げて、後でお祝いの宴会をしたらどうだろうか。宴会の機会は多ければ多いほどいいだろう？」

娘たちがいっせいに手を叩いてアルファードに賛同を示し、結局、

このアルファードの案が採用されて、ティーティがその場でふたりの婚礼を司ることになった。

　婚礼の儀式は、ごく簡単なものだった。ティーティが唱える祈りも、やはり意味不明ではあるが、さっき祠（ほこら）で唱えたものより、ずっと短い。ティーティの祈りの後、里菜はティーティに促されてヴィーレとローイに祝福を与え、さっきティーティからもらった花冠をヴィーレの頭に頂かせ、麦の穂を手渡した。これは、普段は司祭が、女神の代行として果たす役目らしい。次に、その麦の穂を、ヴィーレがローイに手渡し、それで儀式は完了した。

「なあ、ティーティ。さっきのほこらでのお祈りの意味は分かったが、いつも結婚式のたびに聞く、今の文句は、どういう意味だ？」

と、ローイが問うと、ティーティは答えた。

「あのね。『これから先、あなたたちの畑では麦が毎年よく実り、あなたたちの家畜小屋では羊が沢山仔を産み、同じように、ふたりの間にも沢山の子供が生まれて、ずっと仲良く楽しく暮せますように』って意味」

「なあんだ、そんな普通のことだったのか。そんなにもったいぶって、しち面倒臭い言回しをつかうほどのこともないじゃん。でも、なかなか、いい言葉だよな！　うん、沢山の子供か。そりゃあ、いいぞ。よおし、女神様の仰せの通り、たくさんガキをつくろうじゃねえか！　実は、今まで隠してたけど、俺、ガキが大好きなんだ！」

（ローイのこの叫びに、参列者のあいだから、「隠れてない、隠れてない！　どこが隠してたって？」「あんたが子供好きなくらい、みんな昔から知ってるよ！」などと、いっせいにやじが飛んだ）

　ローイは有頂天になって続けた。

「俺、ガキは最低で十人くらいは欲しいぞ！　二十人でもいい！」

（「……う～ん、前にアルファード、あの二人が一緒になるんだったらヴィーレの家は増築しないといけないって言ってたけど、その通りね」と、里菜がアルファードに耳打ちした）

「なあ、ヴィーレ。子供、たくさん欲しいよな！　にぎやかな方が

楽しいもんな。さっそく今夜にでも、一人目を作ろうぜ！」
「……バカッ！」
ヴィーレはますます真っ赤になって、手近のテーブルの上にあった空の酒壷でローイの頭をかなり本気で殴りつけるなり、娘たちの一団の中に逃げ込んでしまった。
「痛っ！　何だよ、何でぶつんだよ！　俺、何か悪いこと言ったか？　何がいけないんだよ、いいじゃねえか、もう婚礼は済んだんだし、何も問題ねえだろ！」
叩かれた頭を抑えて喚き散らすローイを、若者たちが、
「ちくしょう、この野郎！」などとげらげら笑いながら、よってたかってぽかすか殴り始めた。
幾人かの娘たちも、
「この大バカもの！」と叫びながら、楽しそうに仲間に加わって、
「何すんだよ、ごくまっとうなことを言っただけなのに、何で俺、お前らにまで殴られなくちゃならねえんだよ！」と抗議しながら逃げ回るローイを、奇声を上げて追い回しはじめた。
たちまち、その辺中のものをひっくり返しながらの荒っぽい追いかけっこが始まって、会場は目茶苦茶な騒ぎになった。
大人や年寄りたちは笑いながら脇のほうに避難し、子供たちはここぞとばかり追いかけっこに便乗して、どさくさまぎれに手当りしだいの若者を叩いたり蹴ったりしてはその若者に追い散らされ、大はしゃぎだ。
里菜たちのそばでは、追いかけっこに加わらなかった娘たちが、くすくす笑いながら噂話を始めた。
「さっきはあんなこと言ってたけど、ローイって絶対、浮気するわよね」
「絶対、そうよ。でも、村の中じゃ、ヴィーレに悪いからって誰にも相手にされなくて、野菜の出荷にかこつけてプルメールあたりまで遠征して市場で女の子に声かけまくるのよ」
「それでそこを、たまたま通り掛かった村の誰かに見られてヴィー

レに言いつけられて、俺が悪かった、ごめんなさい、もう二度としませんって、ペコペコ頭下げて、さんざん甘い言葉をべらべら並べ立てて許してもらって……」

「でも、また、するのよね」

「そうそう。それで、またバレて、許してもらって、そのたびにますますヴィーレに頭が上がらなくなるのよ」

「そうよね、ローイは絶対、ヴィーレに尻に敷かれるわよね！」

娘たちの笑い声が、空に届くほどに弾けた。

その時、すでに大騒動の極みに達していたこの陽気で賑やかな宴会に、混乱に追討ちをかけるような突然の大雨が襲い掛った。

幸い、料理はすでにほとんど食べ尽くされた後だったが、気の回るものが、料理を集めたテーブルの上に防水布を広げ、残りのものは手に手に自分の分の料理の皿や酒の壷を抱えて、わあわあキャーキャーと大騒ぎしながら陽気に逃げ惑い、あるいは少し離れた木立に逃げ込み、あるいはマントだの地面に敷いてあった敷物だのをひっかぶり、激しい驟雨が通り過ぎるのを待った。

山の天気は変わりやすい。特に、この季節の午後、この山では必ずといってよいほど、激しい俄(にわ)か雨が降るから、＜女神の見送り＞の宴会には、毎年、俄か雨がつきもので、みんな慣れっこだ。この雨がすぐに止むのは分かっている。みんなは笑いながら、これも余興のひとつとでもいうように、この、ちょっとしたハプニングを楽しんだ。

若い男女のなかには、ちゃっかり、恋人同士、あるいは、まだ恋人ではないが前から互いに気になっていたもの同士などで一緒に敷物や上着を被り、肩を寄せ合ってくすくす笑いながら顔を見合わせたりしているものもある。中には、被った布を深く引き下ろした陰でどさくさまぎれに口づけをかわし合っているらしいものまでいるが、誰も気にしない。例年、秋祭りは、村の若者たちにとって年に一度の恋の大チャンスであり、その場かぎりの戯れも数限りなく繰り返されてきたが　後に結婚するカップルの多くもこの日に誕生す

るのである。秋祭りで結ばれた夫婦には女神の特別な加護があると言われて、ことさら盛大に寿がれるのだ。どんなに口うるさい年寄りも、この日ばかりは、カップルが数多く成立すればするほど縁起がいいのだと、あらゆる組み合わせを鷹揚に見守り、祝福する習わしだ。

里菜とアルファードも、ふたりで一枚のマントを被って寄り添い合い、顔を見合わせて笑いあった。

やがて雨が上り、雲間から差す午後の日差しが雨のしずくを煌めかせた。

かすかなバラ色を帯びた東の空に、その時、大きな虹が架かった。誰もがひととき無言で虹を見つめた。それは荘厳なほどに大きな虹で、まるで本当にその上を歩けそうなほど、くっきりとして見えた。

マントをはね除けた里菜とアルファードは、並んで虹を見上げていた。

虹に目を向けたまま、里菜は小さく呟いた。

「……アルファード。あたしたち、もう、行かなくちゃ」

「ああ……」

アルファードは、やはり虹のほうを向いたまま、静かに答えた。

第五章＜水底の夢＞第五場

まきばのはずれから、一本の山道がゆるやかに上に向かっている。里菜とアルファードはその道の途中に立ち止まって、後からついてくる見送りの人々と向かい合った。

「ありがとう、もう、ここまででいいわ」と、里菜が静かに言った。

ついてきているのは、ティーティとユーリオンとキャテルニーカ、ローイとヴィーレとその両親の七人だ。他の村人たちは、まだ、まきばで宴会を続けている。ふたりの後を追いかけるようにずっと聞こえている輪踊りの伴奏の楽の音が、彼らの見送りの代わりだ。ふたりがまきばで村人たちに別れの挨拶をした時、里菜は、『みんなは、あの虹が消えるまで、ここで、なるべく賑やかに宴会を続けてくれるように』と頼んでおいたのだ。

ここまで見送ってもらった少数の人々とも、ここでお別れだ。ふたりはそれぞれに短い別れの言葉を述べて、一人一人と別れを惜しんだ。

「ローイ、ヴィーレ、お幸せにね。ローイ、本当に浮気しちゃだめよ。ヴィーレ、がんばって本当に子供を十人位産んでね」と里菜が言うと、ローイが、別れの寂しさを吹き飛ばそうとするかのように陽気に叫んだ。

「十人じゃねえぞ、俺、子供は二十人くらい欲しいぞ！」

「もう、ローイ、そんな、気楽に無茶なこと言って。そりゃ、ローイはいいわよ、自分が産むんじゃないんだから。大変なのは産むほうでしょ。ヴィーレの身にもなってごらんなさいよ。ね、ヴィーレ？」

「ううん、リーナ、あたしも本当に二十人くらい子供が欲しいわ。子供って好きだし、ほら、あたし、一人っ子でしょ。ずっと、賑やかな大家族にあこがれてたの」

ヴィーレの言葉に、世話役夫妻は、

「孫が、二十人……」と絶句し、
「おお、これは頼もしい。こういう夫婦がいるから、この国は安泰だ」と、ユーリオンが笑った。
次に里菜はキャテルニーカの髪を撫でて言った。
「ニーカも、ティーオと幸せにね。そうそう、ひとつ言っておきたいんだけど、ほら、ティーオが火を出すものをいろいろ作ってるでしょ。あれ、あたしたちはとっても有難かったけど、一歩間違うと、この世界を目茶苦茶にしてしまうかもしれないような、すごく危ない研究なのよ。彼があんまり大きい爆発が起こるようなものを作ろうとしたら、止めてあげてね。ああいう人って、夢中になるとまわりが見えなくなる人もいるらしいから」
「大丈夫。危ないことはさせないわ。彼の才能が、本当にこの世界の役に立つことに使われるよう、あたしがちゃんと見張っとく。お姉ちゃん、安心して、遠くからあたしたちを見ていてね」
キャテルニーカは自信たっぷりの輝かしい笑顔を浮べた。
最後にティーティが進み出て、里菜を見上げ、全員を代表して最後の挨拶を述べた。
「それじゃ、お姉ちゃん、元気でね。御魂のいやさかを……」
みんな胸に手を当てて、最後の祈りをティーティに和した。
里菜は微笑んで手を上げ、ティーティと後ろの人々に祝福を与え、アルファードを促して、山頂に向けて歩き出した。
東の空には、まだ、大きな虹がくっきりと浮んでいた。

ふたりはしばらく無言で坂を登り続けた。
この道は山頂へ向かう道だと言われているが、山頂付近は結界になっていて、実際に山頂に行ったことのある人間はいない。
信心深い村人たちは、あえて聖域を侵そうなどとはしなかったし、それでも長いあいだには、ごくまれに、世を拗ねたへそ曲りの老人だの反抗的で冒険心に富む若者だの、ものに憑かれて気の触れた娘

だのが、この道を登って山頂を目指したこともあったが、彼らのうちの何人かは、そのまま戻って来なかった。そして戻ってきたものは、決まって、『途中で霧に巻かれ、ずっと坂を登っていたはずが霧が晴れた時にはいつのまにか山を巻いてもとのところに戻ってしまっていた』と話したという。

だから、この道が本当に山頂まで続いているのか、また、山頂までどのくらいの時間がかかるのか、誰にもわからない。もちろん普通に歩けば、いくらエレオドラ山がそれほど高くないとはいえ、今から登り出したのでは夜までに山頂に着けるわけがないのだが、里菜とアルファードは、必ず虹が消える前に山頂に着けると信じている。

ふたりは、もう、村人が普段来ないようなところまで来ていたが、道は、草に埋もれることもなく、まだ続いていた。といって、けもの道というのでもない。こんな誰も歩かない道が道として残っているということは、ここはすでに神秘な力で守られた結界の内なのだろう。ふたりとも、あたりに漂う特別な力を肌に感じていた。今のこの、夢の中に分け入っていくかのような感覚は、ちょうど魔王の城を目指して北の荒野を歩いていた時のそれと似ていた。いくら歩いても、疲れることはなかった。虹はあいかわらず空にあって、ふたりを誘なっている。

どれくらい歩いただろうか。いつしか周囲の景色が変わっていた。それまであった木立がとぎれ、岩がごろごろする見晴らしのよい斜面を、細い道は登っていく。

まだ日が暮れていないところを見ると、そんなに長い時間はたっていないらしい。

斜面を登りつめたふたりの視界がふいに開け、巨大な白い神殿の廃墟が、茜色の夕空を背景に浮び上がった。

それは、荘厳な遺跡だった。崩れ落ちた壁、途中から折れた円柱、傾いた石段……。時に晒された廃墟は悲しいまでに清浄で、美しかった。

（あたしはこの場所を知っている……）

里菜は神殿の前に立ち尽くした。そこは、里菜が幾度も夢に見たあの廃墟だったのだ。

虹は、まだくっきりと、神殿の上にかかっていた。現実にはありえないはずのことだが、その虹の、片方の足が、神殿の中に消えている。

けれど、このありえないはずの現象を、この時ふたりは、ごく自然に受け入れた。

「行こう」

黙って神殿を見つめている里菜の肩を後ろからアルファードが抱いて、ふたりは廃墟に足を踏み入れた。

崩れかけたきざはしを登りつめたふたりは、倒れた円柱をよけながら、屋根も壁もほとんど崩れ落ちて床だけがむき出しになっている神殿の内部に歩を進めた。

周囲より高くなっている神殿の床に立つと、そこは、本当に山の頂上だった。ちょうど展望台のように、四方の景色が、ぐるりと見渡せる。

西側のすぐ目の下には、イルゼールの村やイルド、ルフィメルといった谷間の村が、そして、夕日を浴びてオレンジ色のリボンのように輝くエレオドラ川が見晴らせる。もっと遠くには、米粒をばら撒いたようなプルメールの街が、上に目をやればイルシエル山脈の薄紫色のシルエットが目に入る。

そして東側は、どこまでも、ただ深い緑の森だけが、半ば夕闇に沈んで、はるかに続いていた。

そこは、この世界の人間たちにとっての世界の果てのその向こう――人間たちが永遠に知ることのない人知の外の領域であり、人間たちが夢の中以外では永遠に出会うことのない奇妙な生き物たちの生命に満ちた、原初の楽園だった。

崩れかけた円柱の間を、山の夕風が吹き巡る。

山頂の神殿に立った里菜――生命の女王エレオドリーナは、自ら

の王国をぐるりと見はるかして微笑を浮かべ、ゆっくりと手を上げて、人間の住む小さな世界を、そして人間が永遠に訪れることのない果てしない緑の領域を、それぞれの地に住むすべての生命たちを祝福した。

「水は流れよ。大地に実りあれ。この地に生きる、すべてのいのちに祝福を……」

四方の世界への祝福を終えると、里菜とアルファードは神殿の中央に目を向けた。

床の真ん中が崩れて、大きく陥没した穴のようになっていた。その穴の中に、虹の片脚が吸い込まれるように消えている。ふたりは穴の淵によって、下を覗き込んだ。

そこは、深く巨大な洞窟の、天井に開いた穴だった。上から差し込む光を映して、はるか下方に静かな水面が碧くきらめいている。洞窟は、どうやら鐘乳洞であるらしいが、その壁は、天井から差し込むのとは別の淡い光をぼんやりと発しており、息づくかのようにゆるやかな明滅を繰り返すその光のために、洞窟の内部は、ほの明るい真珠色に輝いていた。

虹の根もとは、その、洞窟の底の、地底湖に没しているようだ。

アルファードは里菜にうなずきかけると、里菜の手をとり、ふわりと浮き上がって、穴の中にゆっくりと下降していった。

ふたりは、翡翠色の地底湖のほとりに、静かに降り立った。

そこは、秘密の花園だった。

脈打つ光の中で、ふたりの足元には青い＜女神の花＞が一面に咲き乱れて、かすかな気流にさわさわと揺れていた。その上に、ときおり天井の鍾乳石からぽたりと水が垂れて、そのたびに、不思議な残響が、水の波紋のように、洞窟中にひたひたと広がっていく。

「そうか、たぶん、ここが、エレオドラ川の水源なんだ。ほら、あっちの隅に横穴があって、そこから地底の川が流れ出している。あの流れが、どこかで地上に出るんだろう。それで時々、＜女神の花＞の花びらが、上流から流れてくるんだな」

あたりを見回してアルファードが言った。その声がくぐもった響きを帯びて反響する。

こうして地底湖のほとりに立つと、さっきまではっきり見えていた虹の根もとは見えなかったが、天井の穴から空を見上げると、やはりまだ虹が見えていた。

里菜は地面に膝をついて、底知れず澄んだ静かな地底湖を覗き込んだ。

その、鏡のような水面に、虹が映っていた。

映っていたというよりは、水の中に、逆さまに虹が架かっていたのだ。

虹は、水底深くへと分け入り、その先は、翡翠色を帯びた湖の深みに消えていた。

その時、里菜は、虹が消えていく先の水底（みなそこ）に、ひとつの風景が、夢のようにぼんやりと浮び上がってくるのを見た。

しだいに鮮明に見え始めたそれは、まるで高い山の上から、あるいは飛行機から見るような、東京の俯瞰図だった。隅のほうには、エレオドラ山によく似た富士山のシルエットがある。じっと見つめているうちに、飛行機が降りていくように、水底の東京がだんだんと近くなってきた。視界の隅に、見慣れた新宿のビル群が、その頂きに瞬き始めた赤い灯が見えてくる。

風景はさらに近付き、里菜の住む住宅街のこぢんまりした町並が、はっきりと見分けられるようになってきた。

幻のように白く、遠くに浮ぶ高速道路。ピンク色に染まりながら音もなく低空をよぎっていく飛行機。ひがな一日、白から灰青色に、バラ色からスミレ色にと微妙にその色合を変え続けるコンクリートのビルたち。遠くにきらめく多摩川。黒や赤、青やオレンジの、無数の小さな屋根。その隙間を埋める木立ちの緑。街なみに継ぎを当てたようにぽつんと残る麦畑。赤と白の縞模様の煙突。薄れかけた夕日に照り映える給水タンク――。夢のように水底に浮び上がるのは、里菜の故郷の、夕暮れの光景だった。

里菜の胸に、懐かしさと愛おしさが込みあげてきた。
今では風景はもっと近付き、里菜の通った学校が、通学路だった道路が、小さい頃によく遊んだ空き地が、そして里菜の家が、はっきりと見て取れるまでになった。小さな庭が、そこに以前里菜が苗を買ってきて植えた姫りんごの木が見える。カバーをかけて玄関の前に置かれた里菜の自転車が、勝手口の青いゴミバケツまでが、今やはっきりと見わけられる。
ふと横を見ると、アルファードも同じように水底を覗き込んでいた。けれどもたぶん、アルファードが見ているのは、里菜とは違う光景だろう。たぶんアルファードは、彼の住んでいた街を、今、見ているのだ。
その穏やかな横顔に、里菜はそっと呼びかけた。
「アルファード……」
「ああ。行こう」
ふたりは立ち上がり、水底深くに通じている虹の橋を見下ろした。
里菜がアルファードを縋るように見上げた。もう二度と見ることが出来ないだろう姿を目に焼き付けようとする必死な眼差しが、抑えきれない哀しみに揺らいだ。
アルファードは、里菜の頭を胸に抱き寄せ、頭上で囁いた。
「リーナ。そんな顔をしないでくれ。俺たちは、絶対にまた会える。俺は、そう信じている」
「……うん。アルファード、きっと、あたしを見つけてね」
「ああ、必ず」
アルファードは、その短い言葉と同じ力強さで、同じ言い尽くせない想いを込めて、里菜をひととき強く抱きしめ、それからそっと抱擁を解いた。
ふたりは同時に水の中の虹に向かって足を降ろした。
虹は、水の中に作られた階段であるかのようにしっかりと二人の足を受け止めた。冷たくはなかった。水というより、空気の中に足を踏み出したかのようだった。

ふたりは、手を取りあって、水底の夢の国へと歩み去った。
やがて、水面に広がった波紋も消え、底知れぬ地底の湖はひっそりと翡翠色の水を湛えて、何事もなかったように再び静まり返った。
湖のほとりで、青い花が揺れる。
虹は消え、神殿の上に、すみれ色の夕闇が降りた。

――第五章・完（幕間を経て終章に続く）――

第五章＜水底の夢＞第五場（後書き）

次回から数回に渡って、番外編『幕間（まくあい）・ユーリオンの手記』を連載します。
その後、終章を数回に分けて連載して完結です。
最後までごゆっくりおつきあいくださいね。

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（1）（前書き）

本編の出来事を＜長老＞ユーリオンの視点で振り返る、幕間（まくあい）的な番外編です。
直接的な描写はありませんが、非常に残酷な事柄を扱っています。
エロチックな描写は一切ありませんが、性的な単語も含みます。
苦手な方はご注意ください。
また、１２歳未満の方は読まないでください。
（番外編ですので、読まなくても、本編の理解に全く差し障りありません）

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（1）

先日――といっても、その後あわただしい日々を過ごしているうちに、気がつくともう二月以上も前の話になってしまっているが――、私、ユーリオンは、激務のあいまに何とか確保したささやかな冬至休みを利用して、かねてより見学したいと思っていたイニド湖畔エナ村の冬至の火祭りを見に行ってきた。念願かなって有名な野外聖劇も見ることができ、大変幸せな休暇であった。

生命の女神の御子である少年英雄＜ドラゴン退治のおさな子＞がドラゴンを退治するというこの聖劇は、今でも南部を中心に全国各地の冬至祭で演じられているが、この村のものは、それらの中でも最も古い姿をそのまま今に伝えるもののひとつであると思われ、私は以前から、一度は実際に見てみたいものだと思い続けてきたのである。

初級学校の子供たちが演じる素朴な舞台ではあるが、夜の広場で、ちらほらと小雪の舞う中、ずらりと灯された松明の揺れる火影に照らされて様式的なドラゴン退治が演じられる様は、何か不思議な夢の世界に迷い込んだのではないかと思わせるほど幻想的な眺めだった。

そして私は、それを見ながら、ふと、アルファード君のことを想った。

そう、アルファード君は、まさにこの、聖劇の＜おさな子＞の役割を正しく果たして去っていったのだ。

聖劇のドラゴンは、日照りや洪水、疫病や戦乱などのあらゆる災厄の象徴であり、＜おさな子＞によるドラゴン退治には、それらを退け、新しい年の平和と豊饒を約束するという意味がある。彼とリーナ君は、一年がかりで大規模に祭りの聖劇を演じて、この国に平和と豊饒の日々をもたらしてくれたのだ。

彼らの勝利によって、長らく世界を覆っていた暗い影は消え去っ

た。我々の苦悩の日々は終わり、災厄の爪痕からの復興も、各地で順調に進みつつある。今、この国は、新しい春を間近に迎えて、新しい希望に沸き立っている。

幸せな時は早く経つもので、アルファード君とリーナ君が『別の世界』へ帰っていったあの日から、まもなく半年が過ぎようとしている。私は今、古いイルゼール村での、短かったが楽しい滞在を思い出しながら、この灰色のイルベッザで、司祭の家で見つけて持ち出させてもらった膨大な古文書の整理と解読を進めている。＜長老＞としての激務をこなしながらのことで、思うように時間もとれないが、仕事を終えた夜更け、食事を取る間ももどかしく灯火のもとに資料を広げて夢中で読みふけるうちに、気がつけば空が白んでいた――、そんな夜明けは、数知れない。もう若からぬこの身に、そうした過労、不摂生がこたえないわけはないのだが、それでも私は、寸暇を惜しんで古文書に向き合わずにいられない。それほど興味深い、貴重な資料の宝庫なのだ。ああ、なんという幸せな苦行であろう。

ところで、私は、この解読の過程で、驚くべき発見をした。

実に途方もない話なのであるが、上古の司祭たちは、なんと、異世界から＜マレビト＞を召喚する秘法を代々伝えていたらしいのだ。彼らは、＜マレビト＞の訪れをただじっと待っていたわけではなく、毎年、秋分の祭りに召喚の秘儀を執り行って、自らの力でこの世に＜マレビト＞を招いていたのである。

やがてその秘法は失われたが、その後も、その名残りで、秋分の頃に二つの世界を結ぶ通路が偶然に開かれて、この世に＜マレビト＞が紛れ込んでくることが、よくあるようになったらしい。あるいは逆に、もともと秋分の頃に二つの世界が近く接するために、＜マレビト＞を招く儀式が秋分の祭りに行われるようになったのかもしれない。

彼らは、なぜ、なんのために＜マレビト＞を呼んだのか。

たいへんショッキングなことに、それは、『殺すため』だったらしい。

＜マレビト＞は、豊饒を祈る生贄として殺されるために召喚されたのだ。

現在は簡略化されて二日間となっている秋分の祭りは、かつては、七日間通して行われた。祭りの初日に召喚された＜マレビト＞は、酒宴で歓待された後、彼らのために建てられた特別な仮り小屋に軟禁され、そこで、七日間、贅沢な食事や浄められた特別の衣服を与えられて何不自由なく世話される。それは、単に必要な時まで生かして閉じ込めておくというだけではなく、生贄になる準備として神聖な小屋に隔離して心身を浄めさせておくというような、潔斎の意味を持つ軟禁だったようだ。この軟禁の間中、＜マレビト＞は、恭しくかしづかれて盛大にもてなされ続けるのだが、その一方で、逃亡のおそれがある時は片足を折るというような残酷なこともされていたらしい。

そして、七日目に、祭りのクライマックスとして、生贄の儀式が行われる。

生贄の儀式といっても、それは今の私から見ての言葉で、当時の村人たちはこれを、生贄の儀式ではなく、『大地（＝豊饒の女神エレオドリーナ）と＜マレビト＞との聖婚の儀式』として認識していたと思われる。この目的のために、＜マレビト＞として召喚されるのは必ず男性であったらしい。

＜マレビト＞は、その年の儀式の場として占いで選ばれ、特別に浄められた神聖な麦畑（この時には麦はすでに刈り取られており、畑は鋤き起こされて、種まき前のまっさらな状態に整えられている）に引き出される。この時、＜マレビト＞のそれまでの態度によっては、ひどく暴れて周囲に怪我人を出すといった事故を防ぐため、事前にある種の薬物（おそらくは、今でも薄めたものが鎮静剤として

用いられることがあるミレル草の毒）が与えられたらしい。

そして、彼らは、畑の中央に仮設された、床のない、壁と屋根だけの簡単な板囲いの小屋の中で、生命の女神の代理としての女司祭――あるいは、司祭が高齢、幼齢、既婚などでその任に適さない時は、代わりに選ばれた村の乙女――と、儀礼として性交する。

この、＜マレビト＞の相手役は、＜神の花嫁＞と呼ばれる。この呼び方から、村人たちが、＜マレビト＞を、固有の名を持つ神話の中の神々と同一視はしないながらも、漠然と、神、またはそれに準じるものとしてとらえていたことがわかる。

ちなみに、この役目に選ばれることは、村の娘にとっては非常に名誉なことであり、その経歴に特別な輝きを添えて自分の値打ちを高めるものと思われていたらしい。それは、ひとつには、＜マレビト＞の花嫁役には、＜マレビト＞がなるべく快く自発的に儀式に協力する気になってくれるよう、村で一番美しい乙女を選ぶ――（古文書でこの下りを読んだ時、私は、村人たちのこの妙に現実味のある素朴な配慮に何かそこはかとないおかしみを感じ、事柄全体の悽惨さも忘れて失笑しまったものだが）――ことになっていたからである。いわばミス・コンテストで、この選考会は祭りの一大人気イベントだったようだ。

そんなわけで、娘たちにとって、この役に選ばれるということは、即ちその年における村一番の美少女という栄冠を勝ち得ることでもあり、だからといってその後の任務を考えると現代の我々にはちょっと理解しがたいことであるが、村中の未婚で年頃の娘たちはみな、競ってこれに選ばれたがり、選考会は、候補者の親がワイロをばらまいただの応援合戦が喧嘩騒ぎに発展しただのといった事件まで起きるほどに過熱して、大変な盛り上がりを見せたものらしい。

それにしても、気の毒な＜マレビト＞のほうは、そのような異常な状況の下では、いくら相手が村一番の美少女だからといっても、そう簡単に自発的に『儀式』に協力する気になったとは思えないのだが、私が思うに、この仮小屋の中での『儀式』は、実際には、ち

ゃんと首尾を遂げられない場合もままあったのではないだろうか。ことに、その＜マレビト＞がそれまでに攻撃的な傾向を示して薬物を与えられていた場合、もしもそれが私の推測通りミレルの弱毒であったなら、それを与えられたものは心身ともに活動が低下して種々の反応が鈍った弛緩状態になっていたはずで、そのような状態では、積極的に『儀式』に臨む気になど、なろうにもなりようがなかったのではないか。そして、もし＜マレビト＞がどうしても『儀式』に協力したい気分になってくれなかった場合、そのような事態は、どう考えても、か弱い上にその種の事柄には不慣れなはずの（建前上はそのはずでも、実際にはそうでもなかったものもいるかもしれないが……）乙女たちの手には余るものだったはずである。

その場合、これは閉ざされた小屋の中での行事で誰も見てはいないのだから、時間を見計らって出てきた娘が『儀式は滞りなく済まされた』と言い張れば、それで通ってしまったのではないか。なにしろ、ここで＜マレビト＞が花嫁を拒絶して儀式が完遂できなかったなどとということは、村にとって由々しき事態であるだけでなく、花嫁役の娘にとってはいろいろな意味で非常に不名誉なことだったと思われるので、娘は、まず、それを認めなかったはずである。

そうして＜マレビト＞たちは、娘と実際に交合を遂げても遂げなくても、それを済ませたものと見なされて、どっちみち殺されたのだろう。まことに気の毒な話である。

さて、祭りで＜神の花嫁＞の役目をつつがなく果たした娘は、それから一年間は、実際には特別な役目はなく日常生活は普通に送るものの、宗教的な見地からは在家の巫女のようなものと見なされて純潔を要求され、結婚も許されない。が、次の秋分祭が来れば普通の娘に戻って、その後、多くは普通に嫁いで行く。そうした娘を妻にすることは、神聖な＜神の花嫁＞を下げ渡されることであるから、夫となる男にとって非常に名誉な、光栄なことだと思われ、娘は有利な縁談を選り取りみどり出来て、婚家ではひときわ有難がって迎

えられ、普通以上に大切にされることができたらしい。
　ましてや、祭りでの＜マレビト＞との交わりでたまたま娘が身ごもれば（これは、実際には非常に稀なことだったらしく、その為もあって、私は、仮小屋での『儀式』が現実には完遂されないことが多かったのだろうと想像したわけだが）、その娘は更に特別な栄光に包まれ、一生尊ばれることになる。
　生まれた赤子は、女神が娘の身体に宿ってその胎（はら）を借りて生んだ＜神の子＞と見なされる。＜神の花嫁＞たちの一年間の結婚禁止期間は、実は、娘が妊娠していた場合にその父親を特定し、同時に、どこかの家の『嫁』や『娘』ではない、俗世の縁から解き放たれた巫女の立場のままで子を産ませるための方策だったのだろう。実際には生家でそれまでどおりの生活を送っているその娘も、＜神の花嫁＞であるその一年間は、建前上は『その家の娘』ではなく、どこの家にも所属せず誰にも従属しない、一種の客人と見なされるのだ。
　そのような特殊な立場の母親から生まれた赤子は、娘の生家に属するものとはならず、生まれてすぐに母親のもとから引き取られて村全体の養い子となり、身軽になった母親の方は、その後、本人が希望すればやはり普通に嫁いで行くのだが、女神に胎を貸すという栄誉に浴したものであり＜神の子＞の地上の母であるということで、その身には、生涯、特別な名誉がつきまとったという。
　そんなわけで、自分の娘にもそうした栄誉に預からせ、縁談に際しての値打ちを高めさせたいと願う親たちは非常に多かったので、『女神の代理は本来司祭の役割りである』というのはしだいに単なる建前になり、少なくともある時期からは、なるべく多くの娘に名誉を与えるべく、ほぼ毎回、村の娘たちの中から花嫁役を選ぶようになっていったらしい。

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（2）（前書き）

本編の出来事を＜長老＞ユーリオンの視点で振り返る、幕間（まくあい）的な番外編です。
直接的な描写はありませんが、非常に残酷な事柄を扱っています。
エロチックな描写は一切ありませんが、性的な単語も含みます。
苦手な方はご注意ください。
また、１２歳未満の方は読まないでください。
（番外編ですので、読まなくても、本編の理解に全く差し障りありません）

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（2）

ところで、母親のもとから引き取られた＜神の子＞たちは、どうなったのか。

彼らは、村が用意した特別な神聖な家に移されて、司祭の監督のもと、村の女たちに交代で世話される。祭りの期間中の＜マレビト＞がそうされたように何不自由なく世話されて、大切に育てられるが、特定の養育係は決して置かれない。乳飲み子の間でさえ、決まった乳母ではなく、産みの母を含めてその時乳が出る状態だった女たち全員が交代で乳をやるのだ。＜神の子＞は、特定の誰かと特別に深い絆を持つことを許されないからである。彼らは、誰のものでもない、村全体への授かりものと見なされるのだ。

彼らは、そのまま、村人たちの喜捨によって他の子供たちとは一線を画した手厚い特別待遇で育てられ、恭しく祭り上げられて、村の労働に参加することもなく半ば隔離されて生き、男でも女でも一生結婚することなく、＜おさな子＞と呼ばれ続ける。彼らは、実年齢にかかわらず常に『子供』と見なされる決まりだったのだ。

（ちなみに、＜マレビト＞の子供は、当然のことながら男である場合も女の場合もあり、どちらでも等しく＜神の子＞として扱われたが、たまたま女の＜おさな子＞を擁していた時代のものはおそらく別としても、村人たちの心の中では、＜おさな子＞は一般的に少年としてイメージされるものだったようで、古文書の中でも、彼らはしばしば『女神の息子』と表現されている）

そんな彼らは、一生涯『子供』と見なされながらも実際には普通に年をとって、多くの者は、そのまま大切にされながら普通に死んでゆくのだが、しかし、その存命中にたまたま何か大きな凶事があった場合は生贄に供される運命であったらしい。実際に生贄にされる日が来るかどうかは別として、彼らはすべて、『いざという時には生贄となるもの』という役割を担って生きてゆくものだったのだ。

生贄と言えば彼らの父である＜マレビト＞もそうだったのだが、＜マレビト＞の場合と彼らの場合とでは、その意味あいは全く違った。彼らは、世界の罪穢れの蓄積をその一身に引き受けて世界の代理として殺されることで世界を清める、そういう特別な適性を持つ神聖な子供と考えられていたのである。

彼らは、人の世の日々の営為の中から少しづつ、けれど避けがたく発生し続けて徐々にこの世に蓄積してしまった罪業・汚濁・歪みのすべてを磁石のようにその身に引きつけて、死ぬ時にはそれらをすべて我が身と一緒に携えて天の向こう側へ、世界の果てのその向こうへと持ち去ってくれる――、そうすることで置き土産のように世界を浄化し、人間の罪業の蓄積と、それがもたらす世界の歪み・穢れ、そしてそれらが限界を超えた結果として村を襲った禍事（まがごと）どもを退（しりぞ）けていってくれるという、聖なる装置だった。

その聖なる機能は彼らの死によって完結するものであり、もしもその存命中に特に何事もなければ、彼らには、なるべく長生きして、なるべく長年の分の罪穢れを吸着して持ち去ってもらうのがよいとされていたが、たまたまそれまでの間に世界の汚濁が限界に達して大きな禍いが発生してしまった時は、その段階で寿命を待たずに『死による浄化』の機能を果たしてもらう必要が生じ、生贄の儀式が行われたわけだ。

彼らは、神が地上に遣わした聖なる御子であり、やがては天に帰るべき地上の客分だった。そんな彼らを村に迎え、育むことができるのは、村の誉れであり、誇りであり、地上にいる間の彼らは高貴な預かり子として村を挙げて大切にされ、恭しく厚遇されるが（彼らは、たっぷりもてなせばもてなすほど、それに報いるべく、良く機能してくれるものと思われていた）、どの家の子供でもなく、地上に家族を持つことはない。

神は、彼らを、地上の悪を清めるために下界に派遣する。そして彼らは、その尊い役割を、自らの死によって果たす。彼らは、自らの命と引き替えに世界を救うものなのだ。それが彼らの役割であり、

宿命だった。

彼らのうちで運よく生贄になる必要なく一生を終えたものたちの、おそらくは他の村人より格段に豊かで安逸なものであっただろうその人生が果たして幸せだったのか――、あるいは、生贄となったものたちがその運命をどう感じて死んでいったのか――、その心の内は、現代に生きる私たちには、とうてい計り知ることはできまい。

一方、女神の代理である娘との交合――すなわち、大地との聖婚――を終えた＜マレビト＞のほうは、畑の中央に据えられたテーブル状の祭壇の上で殺害され、その亡骸は、頭部と四肢、胴体、男根の七つの部分に切り離されて、それら、ばらばらに切り離された肉体は、それぞれ、その畑の、占いによって定められた方位に埋められる。

そうやって大地の上に流された＜マレビト＞の血と精液と、土に鋤き込まれたその骨と肉とが、翌年の豊饒の礎となるのである。

現代の我々の感覚で言えば、これはとんでもない残虐行為であるが、当時の村人たちには、残酷という意識は、おそらく、全く無かったのだろう。彼らは、招きに応じて訪れてくれた＜マレビト＞を、礼を尽くして歓待し、選りすぐりの美しい乙女を花嫁として差し出して、その、異界からのみもたらされうる強く新しい生命力を真摯に乞い願って分かち与えてもらった後は、敬虔な祈りを念入りに捧げて、深い感謝と共に彼らを異界に『送り返して』いたのだから。実際には殺された彼らがもとの世界に戻れることはなかったのだろうが、当時の人々は、『彼らは、古い肉体をこの地への贈りものとして置き遺してくれた上で、祈りの言葉に送られて元の世界に帰り、翌年にはまた、新しく甦った別の姿で、新しい恵みを携えて村を訪れてくれる』と信じていたようなのだ。

が、あの素朴で善良な村人たちにとっては、そのような古代人の思想をいくら説明しても、自分たちの先祖のこの行いは、途方もない蛮行としか思えないだろう。自分たちの先祖がこのような野蛮で

非人道的な残虐行為をなしていたと知った彼らが如何ばかりショックを受けることだろうと思うと、私は、これを、とても彼らには告げられない。

さて、その後、長い年月の間に、＜マレビト＞召喚の秘儀は、偶然に失われたのか、それとも村人たちが生贄行為の残虐さに気づいて＜マレビト＞の殺害だけでなく召喚自体を放棄したのか、その理由やきっかけは定かでないが、いつのころからか行われなくなり、祭りには、それまでも＜マレビト＞の召喚に失敗した年には行われていたように、＜マレビト＞の代わりに雄羊が屠(ほふ)られるようになった。

年代を追って資料を解読していくと、最初は、雄羊は、あきらかに生贄として屠られ、かつて＜マレビト＞がそうされていたようにばらばらに切り刻まれて畑に埋められていたが、時代が下るにつれて、屠られた羊は畑を肥やすかわりに祭りのごちそうとして村人たちの血肉となり、残った骨だけが畑に埋められるようになって、長年そうしているうちに、祭りに羊を屠ることのもともとの意味も次第に忘れられていったらしいことがわかる。

今でも祭りには羊を屠ることが恒例になっているというが、おそらく村の人々はみな、それがかつての生贄の儀式の名残りだなどとは思わず、羊はただ祭りのご馳走としてつぶされるのだとしか思っていないだろう。ただ、祭りの宴で食べた羊の骨は各自が一片づつ縁起物として持ち帰り、豊作を祈願して自分の畑の片すみに埋めるというこの村独特の風習だけが、かつて羊たちが果たしていた役割をわずかにほのめかしているが、それも、今では誰も由来を知らず、ただ『古くから伝わる豊作祈願のおまじない』という程度の認識で、深い考えもなく漫然と繰り返しているちょっとした行事のひとつに過ぎなくなっているようだ。

一方、＜マレビト＞の訪れ自体は、儀式によって召喚されること

がなくなってもすぐに完全に途絶えたわけでななく、つい数百年前まで、秋の祭りの時期になるとしばしば＜マレビト＞が現れていたというのは、史実として記録されているとおりである。

が、村人たちは、かつて自分たちが彼らを自ら召喚していたことも、彼らが殺される運命であったことも忘れ、ただ、長い年月の間に、『＜マレビト＞は村に恵みをもたらす』という信仰と、それに基づく『＜マレビト＞は必ず歓待すべし』という約束事だけが村人の心の中に残り、やがて＜マレビト＞の訪れ自体がしだいに間遠になって、現在に至っているわけだ。

ところで、なぜ、＜マレビト＞は、殺されなくてはならなかったのか。

これはまったくの想像なのだが、村人たちは＜マレビト＞に、『死んでは蘇る女神の恋人』の面影を重ねていたのではないだろうか。

この、『死んでは蘇る女神の恋人』に関する神話・伝説は、全国各地に伝わっている。これらの物語から枝葉を取り払ってしまうと、結局のところ、『土地によって女神の愛人とも息子とも伝えられるうら若い美青年たちが殺害されて蘇る』というのが、その骨子である。青年たちの名前も、女神との続柄も、彼らが死に至る理由も、土地によってそれぞれ違った風に伝えられているが、彼らが大地の上で殺されて血を流し、そののちに何らかの形で再生することは共通しているのだ。

これら、女神の恋人たちの死と再生の物語は、その中で最も有名な伝説『ユールレンの復活』にちなんで『ユールレン型物語群』と呼ばれるが、私は、以前から、この『ユールレン』伝説は、有名ではあるが実は典型的なものではなく、これらの中ではむしろ例外的な、変則的なものだと考えている。

『女神と人間の男との間に生まれた心清らかな美少年ユールレンが、いわれなき讒言（ざんげん）を発端に無実の罪で処刑されるが、それを悲しんで地上に降りてきた女神の腕に抱かれ、その涙を注がれて奇跡の

復活を遂げる』という『ユールレンの復活』伝説に非常に人気があるのは、この物語が他のこの種の伝説ほど不条理でも野蛮でも血腥くもなく、物語としての形が小奇麗に整っているので近代人にも親しみやすかったためもあろうし、また、『無垢な少年が人の心の醜さ愚かさのゆえに死に追いやられる』という悲劇性の魅力と、『罪なき少年は傷ひとつない姿で蘇り、奇跡を目の当たりにして涙ながらに改悛した迫害者たちは分け隔てなく許される』という心優しく麗しいハッピーエンドの魅力を兼ね備えていること、そしてなによりも、『母の至高の愛による奇跡』という要素が非常にわかりやすく、万人に共感されやすく、かつ美しく感動的で、人の心に強く訴える力を持つものだったためだろう。

実際、『息子の亡骸をかき抱いて涙に暮れる女神』というドラマティックな図像が理屈抜きで大衆の心を動かさずにはおかない、何かしら根源的な魅力を持っていることは、この場面が宗教的な絵画のモティーフの中で最もありふれた典型的なものとなって何百年も愛され続け、今でも無数に描かれ続けてあちこちの家に普及している現実から見て、疑いようのないことである。この物語は、おそらく、誰もが心に秘め続けている『母の愛は何よりも強く偉大で尊く神聖である（あるいは、そうあって欲しい）』という母性への憧憬と崇拝の念――いわば聖母幻想――を掻き立ててやまないのだろう。

そうした普遍性の強い魅力のために、もとは一地方の伝説だったその物語が、最初はおそらく各地を放浪する吟遊詩人たちの心を魅きつけて他の地方でも語られるようになり、さらにそれを聞いたものたちによって絵画に描かれたり芝居として演じられたり詩に歌われたりすることでますます一般的に知れ渡り、ついには全国的な人気を獲得していったのだ。

が、そうした知名度の高さにもかかわらず、私の研究によれば、この物語は、本来は、分布から見ると決して主流とはいえない、かなり稀なタイプのものだと思われる。

というのは、ここでは、女神の息子は、女神の愛の奇跡によって

人間の姿で復活を遂げているが、それが起こるのは、実は、この物語の他には、ほんの数例だけなのである。

実は、『ユールレン』型の伝説は、たいていは、何らかの植物・作物（多くの場合は麦）の起源の物語として語られており、そうした物語の中では、殺された若者たちは、ばらばらに切り刻まれ、大地に埋められたりあるいは撒かれたりした後に、人間の姿でではなく、植物として生まれ変わっているのだ。いわく、その血の流された大地に、翌年、真っ赤な芥子の花が咲いた。あるいは、そこには世界で最初の麦が生えた、それが麦の起源である、と。七つに切り刻まれた身体の一片づつから、それぞれ違う七種類の草木や作物が生じたという話もある。

さらに、ある地方では、その若者を殺した凶器は『鎌であった』と伝えられてもいる。

つまり、彼ら――女神の愛人であったり息子であったり、要するに女神に付随し、女神と対をなす存在である男性の神あるいは半神たち――は、おそらく、もともと、植物・作物の精霊なのである。永遠不変の母なる大地に対して、その上で年ごとに栄枯盛衰を繰り返す自然の生命力を象徴するのが、彼らなのだ。だからこそ、彼らは必ず、伸びゆく力に満ちあふれた若い麦のような成長期の若者の姿でこの世に現れていたのだろう。彼らは、年ごとに咲いては散る花であり、母なる大地に育まれてまっすぐに伸び、秋には鎌で刈られていったんは地に倒れ、春にはまた蘇る麦であったのだ。

イルゼールには、こうした『ユールレン』型の物語は伝わっていないが、おそらく、もっと古い時代には語られていて、その思い出が、あの村にだけ現れる＜マレビト＞に投影されたのではないか。それが、私の推測である。きっと、それで＜マレビト＞は、『麦畑で』殺されなければならず、また、『ばらばらに切り刻まれて大地に埋められ』なければならなかったのだ。＜マレビト＞の解体は、決して、気紛れに行われた残酷な見せ物などではなく、彼らの切り刻まれた肉体が麦になると信じる彼らにとっては、いたって必然的

な、欠かすべからざる、順当で適正な手続きだったのだろう。

と、ここまで書いて思ったのだが、あるいは逆に、イルゼール村に『ユールレン』型の物語が伝わっていないのは、イルゼール村こそがそうした物語たちの発祥の地であるからだという想像もできる。『女神の恋人たち』の伝説が＜マレビト＞に投影されたのではなく、逆に、この村での＜マレビト＞たちの実話が外に漏れ伝わったものが、世界各地で女神の恋人たちの死と再生の伝説に姿を変えていったのだ。

そう考えると、他のあらゆる神話や伝説がどこよりも豊かに伝わっているあの村に、他の地方ではごく一般的なものである『ユールレン』型の物語だけがぽっかり抜け落ちたように全く伝わっていないという不自然な現象が、目から鱗が落ちたようにすっきりと解明できる。『ユールレン型物語群』の、空白の中心地というわけだ。

これが本当だとすると、すごい発見である。

が、これは、もし本当だとすると、『ユールレン型物語群』を読み解く場合のみならず、神話伝説全般を研究するに当たっての根本的な発想の転換の契機となるやもしれぬ、あまりに重大な問題であり、思いつきだけで軽々しく踏み入って良い領域とは思われないので、このことについては、ここでこれ以上立ち入るのはとりあえずやめておいて、今後、もっといろいろと調べた上で、ゆっくりと良く考えていきたいと思う。

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（3）

さて、話をいったんもとに戻して、ここで、もう一度、冒頭に触れた冬至の聖劇について考えてみたい。

先に＜マレビト＞と村の娘との間に生まれた＜神の子＞たちの運命について述べたが、それを念頭に置いてあの聖劇の内容を見直してみると、あの聖劇の、別の意味が見えてくるような気がするのである。

あらかじめ断っておくが、これから私が書くことは、ほとんどが、単なる推論――というより、推論以前の憶測、想像、空想である。自分の立てた、客観的な根拠のない仮説を不動の事実のようにみなして、それを土台としてその上に更なる推論を乗せるという、勝手放題の夢想である。

が、これは論文ではなく、発表されない手記であるから、私は、この場に限って、自分のとりとめのない空想を思いつくままに自由に記すことを自分に許してみたいと思う。

実は私は、女神の御子である童形の英雄＜ドラゴン退治のおさな子＞がドラゴンを退治するというあの聖劇は、もとを正せば、『＜神の子＞に任ぜられた少年がドラゴンに対する生贄として差し出される』という物語の変形したものではないかと、以前から思っていた。ドラゴンに対する人身御供の伝説は各地に伝わっているが、その分布と、『＜おさな子＞のドラゴン退治』伝説の分布は、私のこれまでの調査では、ほぼ一致しているのである。

古代のイルゼール村で、生贄となるべき『神の子』たちは、すべて、ただ＜おさな子＞とのみ、呼ばれていた。たぶん、彼らには、固有の名は与えられなかったのだろう。そして、聖劇の主人公である少年英雄もまた、名無しの＜おさな子＞なのだ。

もしかしたら、聖劇の中で死ぬのは、本来は、ドラゴンではなく、

＜おさな子＞のほうだったのかもしれない。聖劇は、本来、『＜神の子＞が殺される物語』であったのかもしれない。

先日訪れたエナ村では、春分の祭りを『復活祭』と称していた。『復活』とは何の復活かというと＜おさな子＞の復活なのだという。

『復活』するということは、つまり、＜おさな子＞は、いったんは死ぬのである。土地の古老にその点を問うと、案の定、「＜おさな子＞は秋の収穫祭に死んで春に復活するのだ」と答えた。とすれば、ここでは＜おさな子＞は、作物、植物の象徴――つまり、『死んでは蘇る女神の恋人』たちの一人――という役回りを割り振られていると思われる。

しかし一方で、＜おさな子＞は、冬至の聖劇のヒーローである。そこで、「だが、＜おさな子＞は今も聖劇の中でドラゴンを斃していたではないか。秋に死んで春まで蘇らないのなら、なぜ冬至の祭りに出てきてドラゴン退治などしているのか」と糺したら、「俺ァ、そんなことは知らん。ただ、とにかく昔からそう言われておるのだ」と、一言の下に片付けられてしまった。

私が思うに、たぶん、エナ村の＜おさな子＞は、『ユールレン型』の伝説とドラゴンへの人身御供伝説の、二つの物語の主人公たちが共に少年であり、しかも、共に一旦は死すべき定めを負っているということで混同され、互いに互いを投影されることで一人の少年に統合されてしまった、一人二役の主人公なのだろう。

彼らは、ある時期から、『秋の収穫祭に死んで春の復活祭に蘇る植物の精』、つまり『死んでは蘇る女神の恋人』（＝＜マレビト＞）の役割と、『ドラゴンに差し出される生贄の子供』（＝＜おさな子＞）の役割を二重に担うはめになって、そのために、死んでいるはずの冬にまた出てきてドラゴン退治をする――あるいは、聖劇は本来『＜神の子＞の殺害の物語』であったという私の空想が当たっていれば、秋と冬に二重に殺されて春に一挙に蘇る――などという、一見奇妙な結果になったのだと思う。

そして、イルゼール村でも同様に、＜おさな子＞は、一人二役を担ってきた。

現在のイルゼールでは、＜マレビト＞と＜女神のおさな子＞はまったく同義語であり、＜マレビト＞であるアルファード君は、当然のこととして＜おさな子＞と呼ばれ続け、聖劇の＜おさな子＞に擬せられてきた。女神の聖婚の相手である＜マレビト＞と、その息子である神の子たち――すなわち＜女神のおさな子＞――が、昔から今まで、ずっと混同されてきているのである。

考えてみれば、＜マレビト＞と＜おさな子＞は、どちらも同じく『生贄』的な役割を持つものだったのだから、この混同は、非常に自然なことだ。彼らは、どちらも、『少なくとも一旦は死ぬ運命にある』という点で共通してしたのだ。ひとくくりにされても、なんら不思議はない。

いや、そもそも、違うふたつのものが混同されたというより、同じものがふたつに分かれていただけだったのかもしれない。

＜マレビト＞と＜おさな子＞は、たぶん、同じ『神（あるいは『神のようなもの』）』のふたつの相、ひとつの神的な存在の別々の顔であったのだ。

イルゼール村での、＜マレビト＞を迎えての秋分祭は、『招きに応じて天空の彼方の国からこの地に来訪してくれた外来の力強い男神がこの国の大地の女神と交わり、この国の大地に翌年の実りのための新しい活力、生命力を注ぎこんでいってくれる』という聖なる婚姻の祭り――大地と天空、この世と異世界との婚姻の祝祭だった。＜マレビト＞は、大地を孕ます『父』だった。

古代の人々は、『父が妻の胎内を通って息子として蘇る』というような空想を持っていたらしい。だから彼らが、女神（＝母なる大地）を孕ます＜マレビト＞と、女神によって孕まれる＜おさな子＞を同一視しても不思議はない。大地を孕ますものは、また、大地によって孕まれ、大地から生まれ出るものでもあったのだ。

女神に『母』と『処女』の二つの顔があるように、その相手役で

ある男神にも、『父』と『子』という二つの顔があり、両者の関係も、『母と息子』であったり、『花嫁と花婿』であったりと、時に応じてふたつの相があったのである。

そう考えれば、同じ一人の男が、女神の花婿である〈マレビト〉とその息子である〈おさな子〉の一人二役を勤めてきたのは、だからむしろ、実にふさわしいことであり、本来的な正しい姿だったといえよう。

実際、〈マレビト〉であるアルファード君の村での立場は――こういうと、そんなつもりはまったくなかったであろう善良な村人たちには悪いのだが――、たまたま、かつての〈神の子〉の立場を、非常に忠実に再現していたと思う。あえて悪意のある言い方をしてしまうと、彼は、村のために何度でも繰り返しドラゴンの前に生贄として差し出され続けることで村を守り続けてきたわけだから。アルファード君は、『いざという時にドラゴンに差し出すために村で飼われる生贄の子供』の役を、村人も彼自身もお互いにそのつもりもないまま、実に正しく全うしてきたのだ。

彼は、そうやって、女神の花婿であるところの〈マレビト〉と、息子であるところの〈おさな子〉の役割を二重に果たし、何年にもわたって、繰り返し繰り返し、祭りの聖劇を、現し世に再現し続けてきたのである。

そんなアルファード君が、全国武術大会のチャンピオンであるということも、実にふさわしい――偶然にしてはあまりにもふさわしすぎるほどふさわしいことであり、私は、深い感慨を覚えずにはいられない。

というのは、この武術大会の起源が、冬至の火祭りの奉納試合であるからだ。

力自慢の若者たちによる武芸の神前奉納は、かつて、多くの村で、聖劇と並んで冬至の火祭りの主な行事のひとつであった。宗教行事であると同時に、冬籠りで我が身を持て余した血気盛んな若者たち

が気晴らしに繰り広げる腕試し、力比べの娯楽行事として楽しまれてきたのである。

今でも昔のままに村ごとにひっそりと演じられることが多い聖劇と違って、この行事は、今では、宗教行事という面はほとんど忘れられ、全国武術大会の予選という形でのみ生き残っている。これは、戦乱の時代に、戦火の中で一旦はほとんど廃れかけたこの奉納試合を、時のイルベッザ王が、上からの号令で復活させた結果である。彼は、戦乱時代の尚武の気風の中で、国民全般に武術を奨励するとともに農村に埋もれた武の素質ある若者を見いだして登用を図るという実利的な意図のもとに、村ごとの伝統行事であった奉納試合を、国を挙げての武術大会という形に統合し、制度化してしまったのだ。

この奉納試合は、いったん廃れる前にもすでにほとんど娯楽行事としか思われていなかったようだが、その起源においては、『ドラゴン退治のために村一番の勇者を選出する』という意味を持っていたと、私は考えている。もちろん、古い時代においても、本当に優勝者がドラゴン退治に携わることなど、そうそうは無かっただろうが、実際にそれをするかどうかはともかく、観念上では、彼らは、その勝利によって、『もしもドラゴンが出た時は村のためにドラゴンと戦うべく選ばれた神の戦士』という、ちょうど聖劇の＜おさな子＞に相当する役割を任ぜられたのではないか。

私は、以前、かつて奉納試合の際に行われていた――そして一部の村では今でも武術大会の地区予選の表彰式で行われている――伝統的な祝勝の儀式を調べて、この行事のもともとの意味を確信している。その行事をしている当の本人たちがすっかり忘れていても、昔から伝わる祝勝の言葉や賞品などの儀式の端々には、もとの意味づけのなごりが数多く見受けられるのである。

例えば、まず、勝利を象徴する聖木の葉冠と共に優勝者に授けられる賞品であるが、これは、多くの土地で、剣、盾、槍などの武具を象った置き物、掛け飾り、装身具などである。もっと古い時代には、本物の剣や盾が使われることも多かったようだ。ある村では、

今でも、古くから村に伝わる儀式用の聖剣を、毎年繰り返し賞品に用いている。優勝者は、それを一年かぎり大切に保管し、翌年の奉納試合の前には神前に返上するのだそうだ。

そうした武具は、武勇の象徴であるだけでなく、この武具を持ってドラゴンを退治してこいという意味を持っていたのである。というのは、祝勝の言葉にも、たいてい、ドラゴン退治を示唆する言葉や、その成功を祈る言葉が含まれているからだ。

勝者に賞品と祝福の言葉を授けるのは、村の世話役だったり祭りの役員だったりすることもあるが、多くは、その役目のために特に選ばれて女神の巫女に扮した若い娘である。つまり、これは、女神がそのしもべを任命する儀式なのだ。勇者は、神のしもべとしてドラゴン退治を下命されるのである。

実際にその村にドラゴンが出るかどうか、彼らが現実にドラゴン退治をするかどうかは別として、象徴的な意味としては、奉納試合の優勝者は、神々にその身を捧げられてドラゴン退治に携わるべき選ばれた勇者なのだ。

また、勝利の証として剣が渡される場合は、いったん受け取った剣を今ひとたび相手に差し出し、ひざまずいた頭上にそれを抜き身でかざしてもらうという儀式が行われてた例も多い（これは、戦乱時代の騎士たちが主君に忠誠を誓う時に行われた誓いの儀式とほぼ同じだが、年代的に見て、おそらく、表彰式が騎士たちの儀式をまねたのではなく、逆に、戦乱時代以前から各地の奉納試合の表彰式で行われていたこの儀式の形式を騎士たちが取り入れたのだろう）。

これは、いつでも望む時に自分の命を取ってくれという、絶対の献身を表す儀式である。当然、それは、たまたま賞品授与の役になった娘なり村の世話役なりの個人に対しての献身の誓いではなく、神に対する誓いである。この誓いをしてより、彼の心と名誉は彼のものであるが、生命と身体は彼のものではなくなる。彼は、それを、神に捧げるのである。

優勝者の身体と生命は、一年間、彼自身のものではなく、神々の

ものである。神々の与えた使命のためにいつでも惜し気なく投げ出され、捧げられるべきものである。

生命と身体を、供物として神に捧げる。考えてみれば、これは、つまり、一種の生贄である。

実際、表彰式での彼らの扱いは、古代の生贄に対するそれと酷似している。なにしろ、彼らは、聖水で身を清めた上、神聖、清浄、無私、捨身を象徴する白装束で壇上に引き出され、遠い昔に生贄に冠せられたと同じ聖木の葉冠を授かるのだから。清められた白装束に聖木の葉冠。当事者たちは誰も気づいていないようだが、これは、まさしく、由緒正しい古代の生贄の、あからさまな似姿である。

ただし、二度とは生き返ることのない生贄たちと違うのは、彼らの生命が神のものであるのは次の勇者が選ばれる一年後までであるという点だ。

一年間と期限を限って神にその身を捧げられるという点で、彼らの立場は、古代イルゼールの秋分の祭りでの＜神の花嫁＞のそれと似ている。彼女たちのように結婚や性交が制限されることはないが、建前上、家の所属からは自由になり、家族との絆を一時的に断つことを求められる。

ある村では、今でも、表彰式の際、壇上で剣を授かった優勝者が、檀を降りたところでその父母と向かい合って立ち、彼らとの間に剣を横たえて跪拝の礼をとるという儀式を行っているが、これは、彼らが思っているような、『立派に成人した息子が育ててくれた親の恩を讃える感謝と表敬の儀式』などではなく、形式的な別れの宣告、縁切りの儀式である。父母に別れを告げて死地に赴く戦士の旅立ちの儀式なのだ。彼らは、一時的に世俗の縁を切り捨てることで、古代のイルゼールで＜おさな子＞たちがそうであったように、現世の誰のものでもない＜神の子＞になるのである。古代のイルゼールで、村で一番美しい娘が女神の現世での一年かぎりの『器』に任ぜられたように、彼ら、村で一番強い若者は、聖劇の中の＜おさな子＞のこの世での『器』――

に任命されるのだ。
　そう考えると、アルファード君は、おそらく全国武術大会の長い歴史の中でただ一人、本来の役割を実際に果たしてくれた優勝者なのである。優勝の後、祝賀会もそこそこに、まるで姿をくらますようにして村に帰ってしまった彼は、優勝者であることを放棄したのではなく、逆に、選ばれた勇者として辺境に旅立ち、そこで、まさに選ばれし者のなすべきこと――ドラゴン退治をしていたのだ。

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（4）

ところで、なぜ、＜おさな子＞たちの敵はいつもドラゴンなのか。

どこの村でも、聖劇の＜おさな子＞たちは、必ずドラゴンを斃す。奉納試合の優勝者の仮想の敵も、絶対に、山賊だの狼だの、あるいは他の伝説の魔物類だのであることはなく、必ずドラゴンである。

＜おさな子＞が戦わなければならぬ相手は、なぜ、いつも決まってドラゴンなのだろうか。

それはもちろん、当時のその村で現実にドラゴンが村を襲う最大の脅威であったからとか、また、そうでない村でも、おとぎ話の中のもっとも強大な悪役、敵役といえばドラゴンと相場が決まっていたからなどという通りいっぺんの理由はあるわけだが、どうも私には、それだけではないように思われるのだ。

そもそも、イルゼ－ル村などエレオドラ地方南部の山岳地帯はともかく、エナ村などでは、ドラゴンは、歴史的な記録によれば、実際に村を襲って現実的な脅威となっていたようなことはなかったはずなのだ。

それにもかかわらず、＜おさな子＞の敵が、決して何か他の魔性や怪物だったりせず、必ずドラゴンであることには、深い理由があるのではないか。

私が思うに、実は、＜おさな子＞（＝＜マレビト＞）とドラゴン、その敵対する両者は、古代の人々にとって、ある意味で非常に似通った、近しい存在と感じられていたのではないだろうか。

というのは、イルシエル山脈の向こうから飛来してくるドラゴンは、＜マレビト＞と同様に『世界の外からやってくるもの』だったからである。他の魔物はこの世のものだが、ドラゴンは違うのだ。

古代のイルゼ－ル村で、世界の外からやって来る＜マレビト＞は、殺されることによって麦に生まれ変わってこの世界に豊饒をもたらすもの、生贄として大地を富ますもの、その血と精液とで大地を潤

すものだった。血と精液とに象徴される異界由来の新しい神秘な生命力を世界の外からこの地に運んできて、いったん殺されることでそれをこの地に落として自分は再び異界へと旅立ってゆく――、そういうサイクルを何度でも繰り返してくれるもの、それが＜マレビト＞の役まわりだった。

そして、ドラゴンもまた、異界からやってきて、殺されることで大地を富ますものであったのだ。

ドラゴンは、それ自体は、イルゼ－ル村における＜マレビト＞のように生命力や生殖、豊饒を象徴するものではなく、むしろ逆に、死と禍いを体現するものであるが、にもかかわらず、彼らは、結果としては、＜マレビト＞同様に、大地に実りをもたらす。

冬至の聖劇は、ただの娯楽のための村芝居ではなく、『神の御子である＜おさな子＞が、天災を初めとする凶事の象徴であるドラゴンを殺すことによって、翌年の実りを約束する』という、豊饒祈願の宗教行事である。ドラゴンは、忌むべきもの、悪しきもの、危険なものではあるが、一方で、＜おさな子＞に斃されることによって翌年の豊饒を約するもの、その血によって大地の幸を購うものなのだ。

このように、＜マレビト＞とドラゴンは、片や待ち望まれる尊き客人であり、片や忌み嫌われる悪しき侵入者であり、聖と邪、幸と禍、生と死という正反対の性質を持つものでありながら、その一方で、どちらも異界からの客であり、人間を超えた激しく荒々しい未知なる力を秘めた超自然の存在であり、殺されることでその不思議な力をこの地に譲り渡して豊饒の礎となる生贄であり、その流した血によって大地を孕ませるもの、自らの死によって世界を祝福するものだった。

そういう、一見正反対でありながら、ある面で似通った、何かと符合し、呼応し合うものであれば、人々の心の中でドラゴンと＜マレビト＞が切り離しがたく結びつけられるのは、十分理由のあることだったのではないだろうか。

この二つの存在は、いわば、世界の枠を超える外来の強いエネルギーのうちの正の力、負の力――人間にはその来歴、源を窺い知ることのできない得体の知れぬ巨大な力の正の面、負の面であり、だからこそ、＜おさな子＞には、人身御供となってドラゴンを鎮めることも、剣を持ってドラゴンを斃すことも出来ると思われたのだろう。

＜マレビト＞とドラゴンは、どちらも、異界からの客であった。そして、異界から訪れるものは、この世に属さない、この世の理を超越したもの――すなわち『神』であったのだ。

神話の中では、斃すものと斃されるものは、実はもともと一体であったり、あるいは、その由来から言えば非常に近しいもの、縁の深いものであることが往々にしてあるというのが、私の昔からの持論である。善と悪、性質は正反対でも、もともとは何か同じグループ内に属する力、その源流を同じくする力どうしであり、その両端に離れてはいても同じ一本の座標軸の上に存在するものであってこそ、同じ舞台の上で真っ向から対立でき、対等に渡り合える場合もあるのではないか。一人の人の心の中の悪と戦えるものは、結局はその同じ人の良心であるのと同じように。

思いつくまま、書きたい放題に書いているうちに、ずいぶんと話が錯綜してしまった。

けれど、伝承というものは、もともとが、あれこれと錯綜し、混乱した、矛盾に満ちたものであり、単純には割り切れないものである。さまざまな因子が置換や転嫁、重複や脱落、混同や同一視、合体や分離を繰り返し、外形は一見ごく単純に見えていても、実は知れば知るほど計り知れない複雑な要素を内に秘めて、ある時代の人にとってはたったひとつの真実であったものが後になってから幾通りにも読み解けてしまったりする。だから、こういうことがらについては、『ああでもあり、こうでもある』というようなあいまいな

言い方が、実は一番正確で厳密なのだと思う。

そう、神話や伝説は、人の心や、あるいは世界の姿と同じだ。様々な意味が何重にも層をなしていて、どこまで内部に降りていくかによって見える姿がまったく違ったり、どの角度から見るかによってそれぞれ違う顔が見えたりする。決して数式のように明快に割り切れるものではない。時に、ものごとの一番根底は実はあっけにとられるほど単純なのだと――、世界のすべての事象はただ一つの法則によって明快に読み解けるのだと――、ふとそんなふうに思える瞬間があっても、それはたぶん、いつも錯覚であり、一つの見方で読み解けるのは、結局は物事の一面に過ぎないのだ。

人の心のありかたや人と人の関係について、『これはこうだ』と単純化して言い切ったとたん、そのこと自体に嘘はなくても、別のどこかできっと抜け落ちるものがあって、それは、虚しい、うわべだけの言葉になってしまう。真実そのものではなく、真実の『上澄み』になってしまう。例えば、『誰かが誰かを憎んでいる』と言った時、その言葉には一切嘘はないにもかかわらず、その憎しみの底にほのかに揺らいでいたかもしれない愛執の情は掬い上げられずに言葉の網から抜け落ちてゆき、結果として、その言葉は、事実ではあっても本当のことを伝えていないものとなり、その言葉が当事者たちを離れてひとり歩きはじめた時、そこでは何一つ嘘はつかれていないにも関わらず、真実は大きく歪められてしまうだろう。

ひとつの事しか語らない言葉は、事実であっても嘘を吐く。

物事には常にいろいろな面があり、真実はひとつではない。現実とは常にごたごたとした割り切れないものである、ということそのものが現実であり、人の世の真実である。私は、そう思っている。

人の世の事象に明晰を求めることは危険である。明晰を求めるものは、往々にして、自分の明快さの枠からはみ出すものを、知らず知らずに切り捨ててしまう。切り捨てられたものの中にこそあるかもしれない大切なものを見失ってしまう。そこに現実にあるものを、無いと信じて見落としてしまう。世界とは、人間とは、そもそもが

不可解で理不尽な混沌としたものであり、自分にはそれらをすべてわかることは永遠にできないという、ただそのことだけが、人間にとってのこの世でただひとつの明快な事実であり、その事実をまるごと受け入れることこそが、世界を一番よく知ること、理解することではないだろうか。

人の世の現象にはすべて様々な相があり、層があり、ものごとは、いつでも必ず多面的に見られるべきなのである。同じひとつの出来事も、分析次第、アプローチ次第で、そのつど違った色合い、様相を見せてくれる。同じひとつの行為も、常にさまざまに解釈、評価することができるのだ。

たとえば、アルファード君がこの国で果たしていった役割についても、そうだ。

アルファード君は、彼らのあの戦いについて、世界を救う戦いなどという大それたものではなく、高邁な英雄的行為などでもなかったのだと言った。あれは決して、そんなご大層なものではなく、ほんの個人的な、自分のための戦いであり、彼らはそれぞれ自分自身の個人的な問題に決着をつけてきた——彼の表現によると『落とし前をつけてきた』——だけなのだと。身もふたもない言い方をしてしまうと、何千年越しの長過ぎた三角関係の清算をしてきただけとも言える、と、彼は静かに笑っていた。それは何かたとえ話、象徴なのかと思ったが、そうではなく、単純に、ただ言葉通り、そういう意味なのだという。

事情を知らない私には良くわからないが、彼がそう言うからには、それも一面の真実なのだろう。あの戦いは、彼らにとっては、煮つまった三角関係の清算などという、ありふれた卑近な問題でもあったのだろう。

が、一方で、彼らが、自らの危険を顧みずに世界のために戦い、この世界を守ってくれたことも、疑いようもなく本当なのだ。

私が身近に接した彼は、もちろん普通の人間であり、短い間では

あったが私の良き友となってくれた気持ちの良い好青年であったが、それと同時に、正しく＜マレビト＞であり、＜女神のおさな子＞であったのだ。

彼は、古代イルゼールの＜おさな子＞たちの役割の通りに、自らの犠牲でもって世界の罪を償い、禍事を鎮めてくれた。この世界に蓄積されてきた古いゆがみ、ひずみを、自らの痛みを通して正し、浄化し、世界を再生させてくれた。我々の代わりに、この世の災いと辛苦を一身に引き受けて、我々に未来を購ってくれたのだ。

けれど彼は、ただ無力なおさな子として生贄となって死んでいくのではなく、たぶん一度は臨んだのであろう死の淵から――善悪の境界も消え去ってあらゆる軋轢が滅する世界の中心の熱き混沌の炉の中から、自らの心の強さで生還した。

あの戦いから帰ってきた彼は、確かに、何だか感じが変わっていた。きっと、世界の果ての北の荒野で、彼は生まれ変わったのだ。彼は、一面ではただ三角関係を清算してきただけなのかもしれないが、それと同時に、きっと、別の層では、神話を生きてきたのだ。神話を生きることで生まれ変わってきたのだと、私は思う。

＜マレビト＞である彼は、女神との聖婚によって地上に豊饒をもたらすべき女神の花婿であり、同時に、その婚姻によって生まれた女神のおさな子であり、祭りに屠られる生贄の雄羊であり、ドラゴン退治の英雄であると同時にドラゴンに差し出される生贄の子供であり、また、この世ならぬ力に満ちた荒ぶるドラゴンでもあった。

そして彼は、＜マレビト＞としてそれらのすべてであると同時に、別の地平では、恋もすれば人生に悩みもする一人の多感な青年であったのだ。それでいいのではないか。

リーナ君については、私は、どう考えていいのか、いまだに良くわからない。

彼女は、アルファード君と同じようにこの世に現れ、同じように＜マレビト＞と呼ばれてきたけれど、実は役割が違うものだったら

しい。

イルゼールの秋分祭で召喚されるのは、＜マレビト＞だけではない。マレビトと交わるべき女神も、地上に召喚されることになっていた。今でも祭りの初日の宴会を＜女神のお迎え＞、二日目の宴会を＜女神の見送り＞と称していることからもわかるように、あの村では古代から今まで、人々の心の中で、女神もまたマレビトと同様に、祭りの度に地上に迎えられ、また天に送られるものだったのだ。

リーナ君は、その、女神の役割を持って現れたもの――いや、それどころか、女神そのものであったらしい。が、そんなことはそう簡単に納得できるものではなく、それで私は、まだ、いささか混乱しているのだ。

リーナ君は、それはもちろん、なかなか愛らしいお嬢さんではあるし、清らかで真っ直ぐな心を持った大変良い娘さんでもあって、その若者らしい健全で潔癖な正義感と芯の強さは私も非常に好もしく頼もしく思っていたが、失礼を承知であえて言わせてもらうと、性格、容姿、能力など、どこをとっても、これといって明白に抜きん出たところ、衆に勝れたところは何もない。ごく普通の、ありふれた、小さな、か弱い少女だ。わざと思いきり失礼ないい方をしてしまえば、要するに、『ただの小娘』である。

だが、彼女がその細い腕を差し延べて私を祝福してくれたあの時、私は確かに、彼女の後ろに、一瞬、金色に光り輝く女神の姿を見たのだ。

私は学生時代以来、ずっと神話の研究に携わってきているわけだが、深く調べれば調べるほど、神々というのは本当にいたものではなく、人々の希いや畏れが生み出した幻の像であるように思えてくる。神々の存在自体が、共同体が共有する物語であるように思えるのだ。

いや、私はもちろん、神話がすべて作り話であるなどとは思っていない。が、全部が全部、本当にあったとおりのことであるとは、当然ながら、信じがたい。神話というのは、同じひとつのエピソー

ドでも、地方によってそれぞれ少しずつ違う風に語られていたりするのが普通である。語り伝えられるうちに変化するものである。そうした差異や変化の中に、人々の心が反映されているのは間違いない。だから、神話は、おそらく一部分は『物語の形で語られた古代のできごと』であるとともに、一方で、それぞれの立場でそうした言い伝えを受け取って自分たちが思う通りに受け入れてきた人々の『心の物語』――それぞれの共同体が共有する、人々の心のありかたの物語なのだ。

それは、我々神話の研究に携わるものは多かれ少なかれ共通して前提としていることである。ただ、それを誰もはっきりと口に出さないだけだ。表立って口には出せないが、みな承知している、いわば暗黙の共通理解事項である。神話を、実際にあったことではなく物語として捉え、象徴として読み解くという態度は、我々の間では、実際には皆よくやっていることであるが表向きは邪道であり、話の流れをあいまいにしたまま何気なくやってしまうのはいいが、そういう立場をおおっぴらに表明するのはいけないという（その上、そういう禁忌があるということ自体、おおっぴらに言明してはまずいという）、まことに微妙な禁忌なのであるが、これは、私一人しか読むもののない非公開の私的な手記であるのだから、今ばかりは、普段書けないことも思うさま書いてしまって差し支えあるまい。

そんなわけで、私は他のたいていの人よりずっと神話に詳しいが、それにも関わらず、いや、逆にそれだからこそ、この国で一番、神話を、そして女神の実在を信じていない人間だったかもしれない。

それなのに、そんな私の前に、女神は、現れたのだ。光り輝くその姿を現したのだ。

あの体験をどう受け止めていいのか、私はまだ途方に暮れているが、もしかすると自分は現実に女神にまみえたのかもしれないと思うと、なんだか、心が励まされるような気がする。今も別の世界のどこかで女神は実際に生きている――どこにでもいるようなありふれた少女の姿で生きていると思うと、何か不思議で、心楽しいよう

な気がする。

しかし、そのようなことは、誰もが私と同じように心楽しいことと思ってくれるとは限らない。人によっては、受け入れがたいことと感じるかもしれない。そのようなことを、為政者である私が表立って表明しては、人心に無用な混乱を招きかねない。たとえ個人的な見解として口にしたとしても、私が＜長老＞であることに変わりはない以上、私の言葉を＜長老＞の言葉、＜賢人会議＞の言葉と捉えられることは避けられない。他の人なら言って良くても、為政者には言ってはならない事柄もある。これは、そういう、為政者が口に出すべきではない微妙な問題なのである。リーナ君本人も、それを理解しており、自分が女神であることを公表する気はないと言い切っていた。だから、このことは、このまま、我々、当時の関係者のそれぞれの胸のうちに秘めておかれるだろう。

あらゆる人は、人それぞれに自分なりの女神を心の中に描いたり、あるいは描かなかったりする権利を持っている。そして、その権利はなんぴとにも――私にも、私以外の誰かにも、たぶん、当の女神自身にさえ――侵してはならないものなのだ。女神の正体は、人それぞれの心の中にあればよいのである。

番外編　『幕間　～ユーリオンの手記～』（5）

ところで、リーナ君といえば、アルファード君が私に打ち明けてくれた話には驚いた。

彼は、魔王を斃した後、北の荒野で、リーナ君にちょっとした儀式のまねごとをして見せて、『君の中にタナート神を封印した』と、ハッタリを打っておいたというのだ。

彼が、そんなハッタリが利くタイプとは思わなかった。あんな実直一辺倒のような顔をして、なかなかどうして、一筋縄では行かない男である。

が、それもまた、なかなか心楽しいことではないか。たとえハッタリでも、リーナ君がアルファード君を信じているかぎり、彼の施した封印は、彼女に対して実際に効力を持ち続けるだろう。

気づいてみると、そういえば私は、さっきから、『心楽しい』とばかり、何度も書いている。

どうやら、こうしてみると、世の中というのは、けっこう心楽しいところなのだ。

世の中には、不思議なことや知らないこと、自分には見えないことがたくさんある。そして、時々、ふと新しいことが見えてくる。それが楽しくて、私は学者をやっているし、また、それが楽しくて生きているのだと思う。

私は、これまで、酒色に溺れることもなく、金銭にもさほど執着することなく、権勢も求めず、世俗の名誉も追わず、ひたすら学究の徒として、ひっそりと地味に生きてきた。今でこそ、どういう巡り合わせか、＜長老＞などというものをやっているが、それは今現在たまたまそういう職についているというだけで、その職にあるかぎり、もちろん全力を尽くしはするが、私の本分は学者であり、任期が終われば、また、一学究に戻ることに、まったくためらいはな

い。

かつて、現世の欲望の何にもさほど拘泥せず、辛気くさい顔で（自分ではそんなつもりはなくても、人からは、そう見えていたらしい）かび臭い書物に埋もれて過ごす私は、よく、そんなふうで何が楽しくて生きているのだろうというようなことを言われたものだ。（今は、＜長老＞という要職についてもおり、酒を飲むととんでもない笑い上戸になることが友人知人を通して広く世間に知れ渡りもしたので、あまりそんなことは言われなくなったようだが）

が、実は、私は、今も昔もずっと、いろんなことをひそかに面白がって、常に心楽しく生きてきたし、これからもそうだと思う。

この一年、私は本当に不思議な経験をした。『別の世界』からやってきた二人の＜マレビト＞がこの国を救うという不思議な物語を、かたわらで見守らせてもらってきた。そのことを、私は、幸せに思う。

そう、リーナ君は、きっと、本当に女神だったのだ。なにはともあれ、たとえ彼女がどんなに平凡な、凡庸な少女であろうとも、少なくともアルファード君にとって彼女が唯一無二の聖なる女神であったということは、疑いようがない。

魔王の城で、一度は死の淵に呑まれかけた彼をこの世に立ち戻らせたのは、リーナ君だったという。母なる女神の腕の中で、その愛によって蘇った女神の息子ユールレンのように、彼は、リーナ君の呼び声に導かれて蘇り、生まれ変わったのだ。これが女神の御技でなくて何であろう。

彼らは、一年がかりで神話を演じて去っていった。この一年、この国は、実は神話の世界だったのだ。いや、アルファード君が現れた十数年前から、すでに神話は始まっていたのかもしれない。

そのことを、ほとんどの人は知らずに過ごしたが、私は、幸運な巡り合わせによって、たまたま知ることができた。私は神話に――しばし地上に復活した再びの神代に、立ち会うことを得たのだ。冥

加なことだ。

ところで、私の途方も無い発見は、生贄の儀式の存在だけではない。

信じられないような話であるが、私は、司祭の家で、方法どころかその存在すら忘れられていた召喚の秘法らしきものが文書の形で残されているのを見つけたのだ。

それは、どのような魔法の助けがあろうと形を保って残っているのが信じられないほど古い古い古文書である。司祭の家の祭壇の下の櫃に納められていた膨大な古文書の中でも、一冊だけ際立って古いものだ。が、不思議なことに、それは、何の整理もされていない古い文書の山の下の方に埋もれていたのではなく、その一冊だけがまるで最近まで使われていたとでもいうように、別の場所に取り置かれていたのである。

幼い現司祭の話によると、それは、最近まで女神の祠に古い短剣とともに箱に入れられて大切に納められていたもので、先代司祭が、二年ほど前に祠から家に持ち出してきたのだという。

ということは、亡くなった先代司祭は、この文書に何が書かれているかを知っていたのだろうか。だとしたら、実に不思議なことである。というのは、私も以前会ったことのある先代司祭は、古代エレオドラ語の祈りの言葉のいくつかは口伝で知ってはいたが、古代エレオドラ文字の読み書きは、ほとんどできなかったはずなのだ。

しかも、この文書は、実は、古代エレオドラ語より更に古いらしい、いわば原エレオドラ語とでもいうべき未知の言語で書かれていたのである。あるいは、あの言語は、古代においても実際に実用的に使われていた言語ではなく、宗教上でだけ使われた特別な神聖言語か、あるいは何らかの暗号のようなものなのかもしれない。それほど、今の言葉とも、古代エレオドラ語とも、かなりかけ離れた言葉である。

もちろん、私は、古代エレオドラ語とは文字も文法もまったく違

うこの言語を、全く読むことができない。文書に記されているのが召喚の秘法らしいとわかるのは、後年書き加えられたらしい古代エレオドラ語の表題と注釈があったためだ。それがなければ、いったい何が書かれたものかすら、見当がつかなかっただろう。

他にも、同じ言語で書かれた資料があるにはあるのだが、それらもみな何についての文書であるかさえ不明であるため、この言語の解読には、並大抵でない時間がかかることだろう。とても、＜長老＞の激務の片手間にできることではない。

というわけで、これらの文書を、学問の世界の共有財産として上級学校に預け、若き学究らの手に解読を委ねよう。

が、召喚の秘法が書かれている一冊だけは、公にせず、自分の手元に保管しておくつもりだ。学者としての独占欲などではなく、文書の内容が、この世界にとってあまりにも危険なものである可能性があるからだ。

別世界からの召喚が自由になるなどと知れたら、それをどんな風に悪用しようと考えるものがでるか、わからないではないか。

何しろ、＜マレビト＞は＜本物の魔法使い＞である。キャテルニーカ君が言うところによれば、この世のあらゆる法則に従う必要のない、この世の理を超越した力――つまり、神々と等しい力を持つ者たちである。それを何人も集めて味方につければ、あっという間に世界を制圧するほどの無敵の軍隊でも何でも出来てしまうのである。いわば神々の軍隊だ。

いや、別に何人も集めなくても、彼らはたぶん、ただ一人で世界を破壊しつくすことだってできるのだろう。

そんな、あまりにも強力な力を呼び出した挙げ句に背かれでもした場合、せっかく救われたこの世界が、今度こそは根本的に破滅することになりかねない。まさに諸刃の剣、危険過ぎて使ってはならない究極の最終兵器である。この世に存在してはならない、危険な力だ。

きっと、リーナ君は、自分がそのような危険な存在であるのこと

に気づいていて、それで、自らこの世界を立ち去ることにしたのだろう。

たぶん、＜本物の魔法＞の力を取り戻したアルファード君よりも、最後まで＜普通の魔法＞さえ使えなかったリーナ君のほうが、より危険な存在だったのだ。

彼女の力は、最後まで潜在したままで、目に見えない力、我々の理解の及ばない未知の力であり続けた。

北の荒野で、彼女は、大地に眠っていた古い種子たちを目覚めさせ、荒野に緑を甦らせたのだという。これは、まさしく、神の御技以外の何物でもない。生命を司どる力は、あきらかに神の領域に属する力なのだ。が、イルベッザに帰ってきた彼女は、別に、花壇に蒔いてある種を自由自在に芽生えさせられたり、枯れ枝を芽吹かせられたりするわけではなかった。それどころか、結局、最後まで、できることといえば魔法を消すことだけで、＜普通の魔法＞さえ使えないままだった。

彼女によると、彼女の力は、自分の望む時に自由に使えるというわけではないのだそうだ。それは、その力自身が望む時に身内から自然に浮かび上がって、用が済むと、水底から浮上してきた魚がまた水底に戻っていくように、彼女の中のどこか深いところに再び潜っていってしまうのだという。

キャテルニーカ嬢も言っていたが、＜普通の魔法＞が使えないということは、それだけ彼女の力が、この世の理から外れていたということだ。アルファード君は自分の力をこの世に適応させて解放することができたが、彼女には、最後まで、それができなかった。たぶん、その力があまりに強いので、この世界の枠の中では発動させることが不可能だったのだ。

彼女自身にも、自分の中にあることは知っているその力が、どのようなものか全く分からず、おおよその輪郭さえ見えず、ただぼんやりと、『奥の方に眠っている』のを感じるだけだという。それは、例えて言えば、『何か正体のわからない、ものすごく巨大な生き物

が、広い海原の下のどこか知らない深い海溝の底に潜んでいるらしい』というような感じで、それがどんなものなのかは一切わからず、その生き物が自分の言うことを聞くのかどうか、それどころか自分と意思の疎通ができるものかどうかさえ定かでないのだという。

無自覚な、制御できない力ほど危険なものはない。一見、何の力もなく、台風の目のように静かであり続けたリーナ君は、そういう、とてつもない力を秘めていたのだ。

そういう点で、彼女は、よく考えてみると、とんでもなく恐ろしい娘さんだったのである。そういえば、私は、そんなお嬢さんに気安く軽口をきくなどと、よく考えてみれば、我ながらずいぶん恐れ知らずなことをしていたものである。

ただ、彼女の埋もれた力は、この世界の生成に関わるものであり、この世界にあっては想像もつかないほど影響力が大きいものだが、他の世界にはほとんど影響を及ぼさないはずのものなのだそうだ。つまり、元の世界に戻れば、彼女は、何の力もない普通の少女として生ることになるだろうと言うのだ。

彼女が勇気を持って自ら選び取った普通の女性としての人生が実り多いものとなることを、私は、遠くから祈っていよう。苦難も悲しみも多々あるだろうその人生に、彼女は、きっと、力強く立ち向かって行くだろう。

彼女の、そしてアルファード君の、私の知ることのない見知らぬ世界でのそれぞれの人生に、乗り越えるべき苦難や悲しみに見合って余りある喜びと幸せがあらんことを、私はここから祈っていよう。

話は戻って、召喚の秘法の悪用の恐れについてであるが、もしかすると、私が心配しなくても、＜マレビト＞を己の野望のために利用しようなどという野心を持つものは、出ないかもしれない。というのは、たとえ古代のイルゼールで実際に召喚が行われていたことを公にしたとしても、、誰も本気にしないだろうからだ。

その場合、私がそんな怪しげな召喚の秘法などというものを本気

で研究していると知れたら、今度は私自身が頭のおかしい危険人物だと思われてしまうのがオチだろう。

そんなわけで、どう考えても、そのような危険な資料の存在を公にするわけにはいくまい。

だから、召喚の秘法が書かれたあの文書は、誰にも見せず、その解読は退官後の楽しみにとっておこうと思う。その頃には、たぶん、上級学校で、あの言語の解読も進んでおり、私は、その成果を、ちゃっかり利用させてもらえることだろう。もしそうであれば、非常に幸運だ。

そして、私は、ひとりでこっそり、召喚の秘法を研究するのだ。いつか、立派な大人になったアルファード君やリーナ君とひとときの再会を密かに果たし、あの不思議な一年の思い出を語り合うことを夢見て。そして、彼らを帰した後は、危険な召喚の秘法を、再び破棄するのだ。

誰も知らない古代の秘法を、自分だけのために人知れず復活させ、ただ一度実行した後は自らの手で再びそれを葬り去る――。誰にも言えない、私の秘密の夢だ。

そんな秘密の夢を、こっそり暖めて生きる人生は、きっと、なんとも心楽しいものだろう。何しろ、世界征服さえ出来るような究極の力を手にしながら、旧友との再会以外にはそれを使わず、誰もが欲しがるはずのその力を、誰にも知られぬまま、ひとり密かに闇に葬るのだ。こんな壮大な、贅沢な夢が、またとあろうか。

今、そのことを考えただけで、あまりの愉快さに、私は思わず含み笑いを漏らしてしまった。それどころか、危うく声を上げて笑いだしそうになった。

が、いくら誰も見ていない部屋の中とは言え、ここで私が、一人で唐突に高笑いを始めたら、相当に異様な、危ない人間に見えると思うので、そこはひとつ我慢して、含み笑いにとどめよう。が、しかし、考えれば考えるほど、何とも愉快痛快である。

私は、しみじみ思う。ああ、人生はなんと楽しいのだろう！

統一歴百六十九年青の光月、ユーリオン記す

（――『イルファーラン物語』番外編『幕間～ユーリオンの手記』・完――）

終章（1）

「それでね、里菜、披露宴は十一時から。……うん、駅からマイクロバスが出るから。招待状に地図もついてるし……」

電話の向こうの声が弾んでいる。結婚を控えた友人からの、披露宴への招待の電話である。里菜の数少ない友人の一人である彼女は、高校時代の同級生だ。

高校二年の秋、里菜が発作的に自殺を試みてから、もう十年が過ぎた。

あの時、里菜がなぜ死のうとしたのか、まわりの誰にも解らなかった。実は、今となっては、里菜自身にも、よく解らないのだ。ただ、磁石が鉄を引きつけるように『死』が里菜を引きつけていた、心の底で『死』が誘っていた――、そうとしか、思えない。

あの、九月の午後、学校から帰るなり、里菜は、まるで何かに操られるように、制服を着たまま、お湯を張った浴槽の中で手首を切ったのだ。別に、里菜が元からリストカットの常習者だったというようなこともないし、何か直接の引き金になるような事件があったわけでもなく、それは本当に唐突な、発作的な行動だった。なぜ『浴室で手首』だったのかというと、何の予備知識もなく衝動的に自死を思い立った里菜がとっさに思いついた幾つかの方法の中で、これが、たいした準備もなしにすぐその場で実行できる一番手っ取り早そうな方法だったからというだけだ。浴槽に入るのに服を脱がなかったのは、死体が発見されて警察かなにかが来た時に裸では恥ずかしいという妙な理性が残っていたためで、今、思い出すと、これから死ぬという時にそんなことを心配していた自分がおかしくて、少し笑える。

けれど、一見手軽そうなその方法にも、実は、それなりのコツと強い意志が必要だったようだ。里菜の傷は、躊躇いはなかったながらも浅かった上に急所を外しており、里菜はただ、ショックで気を

失っただけだったらしい。その後すぐに買い物から帰ってきた母に発見され、救急車で病院に担ぎ込まれた里菜は、数日間の原因不明の昏睡の後、点滴のチューブだのなんだのをいろいろ取りつけられた姿で、けろりと目を覚ました。

今となっては、我ながら間抜けな話だと思い、あんなことで大騒動を巻き起して、親や周囲に迷惑をかけまくったことが申し訳なく思える。

目が覚めた里菜は、最初、自分に何が起こったのか、思い出せなかった。あの日学校から帰ってきてからのことで思い出せたのは、自分の身体を包んでいた、ぬるい水の感触だけだった。

何だか、長い長い夢を見ていたような気がした。夢の内容はひとつも覚えていなかったが、その夢の中で、とても大切な人と永遠に別れて来たような気がして、里菜が目を開けて最初にしたことは、ものも言わずに、ぽろぽろ、ぽろぽろと、際限なく涙を流すことだった。

あの時感じた、自分はかけがえのない誰かを失ってしまったのだという漠然とした喪失感を、里菜は今でもはっきりと憶えている。『憶えている』というより、その喪失感は、今でも里菜の裡《うち》にあるのだ。普段は忘れているけれど、それは、里菜の胸の奥に、今も埋み火のように潜んでいて、時々、何かの拍子に——例えば、何か深く心を揺さぶられる出来事に不用意に出会ってしまった時などに、そうした心の揺れが微かな気流となって胸の奥底の埋み火を煽り、すると埋み火は、ふいにちりちりと苦しい熱を帯びて、理由もわからないままに、里菜を苛むのである。

けれど、訳も分からずにぽろぽろと涙を流した後で、自分が死のうとしたのだということを思い出した時には、里菜は、もう、なぜ自分が死にたがったのかを不思議に思うようになっていた。そうして、生きたいと、生きてゆきたいと、強く願った。生きていなければ、生き続けていかなければ、夢の中で別れてきてしまった誰かを探しにゆくことも、その人ともう一度めぐり合うことも出来ないの

だから――。

やがて学校に戻った里菜を、みんなは、はれものにさわるようにぎこちなく、けれどそれなりにやさしく迎えてくれた。担任の指導によるものか、里菜の自殺未遂のことを口に出すものは誰もいなかった。けれど、その時から、みんなの里菜を見る目はなんとなく変わり、たぶん里菜自身もどこか変わって、自然と里菜の友人も何人か入れ替わった。

その時、新しく親しくなって、すぐに親友といえるほどになったのが、今、電話をかけてきている美紀だ。彼女とは、そういえば一年の時から同じクラスだったのだが、活動的な彼女と引っ込み思案な里菜とは全くタイプが違っていたために、それまでは、あまり接点がなかったのだ。

その美紀が今、電話の向こうで、うれしそうに話している。

「でね、里菜。だから……。ねえ、里菜、聞いてるの？」

「う、うん、聞いてるよ」

「まったく、もう、あいかわらずボンヤリしてるんだから。だからね、里菜、ちゃんとおしゃれしてきなさいよ！　で、二次会にも出るのよ！　新郎友人は、ほとんどまだ独身で、みんな、この二次会に期待かけてるんだから。里菜、今、フリーなんでしょ？　だったら、チャンスよ、チャンス！」

「うーん……」

「何よ、気のない返事して。ねえ、里菜、前の彼氏はなんでダメだったの？」

「うーん、別に、ダメとかそういうんじゃなくて……。いい人だったんだけど……、別に喧嘩したわけじゃないし、最後まで別に嫌いじゃなかったんだけど……。でも、なんか違うと思ったの。『この人じゃない』って思ったの」

「……里菜ってさあ、理想高すぎるんじゃないの？」

「えー、そんなことはないと思うんだけど……。年収とか学歴とかこだわらないし、ぜんぜん面食いじゃないし、身長体重とか髪の毛

の量とかおでこの面積とかも、わりとどうでもいいし……」
「じゃあ、性格的に合わなかった？」
「うーん、そういうわけでもなくて……。ただ、とにかく、この人は『違う』って、思っちゃったの」
「もう、じれったいわねえ！　だったら、今度こそ『違わない』人を、自分から探すのよ！」
「うん、それはそうだけど……。でも……。なんかね、あたし、最近、思うの。もしかして、『違わない人』なんて、本当はどこにもいないんじゃないか、あたしの探してるはずの『その人』って、実はこの世のどこにもいない人なんじゃないか、同じこの世界に生きてる人の中にはいない誰かなんじゃないかって……。なんか、だんだん、そんな気がしてきて……」
「なぁに言ってんのよ！　この世界じゃなきゃ、どこにいるわけ？　どっか別の世界にでもいるわけ？　そんなはずないでしょうが！　あんた、変な本の読み過ぎ！　大丈夫よ、あんたの『その人』も、この世界のどこかに、必ずちゃんと居るわよ。二人や三人、外したくらいで、簡単にあきらめるもんじゃないわよ。あたしなんか、見なさいよ、自慢じゃないけど、今の彼、何人目か、自分でも覚えてないくらいなんだから！　でも、こうしてちゃんと、彼に巡り合えたのよ。あんただって、あきらめずに探し続ければ、きっといつか、その人を見つけられるわ！　ね？」
「うん、ありがと。でも、なんか、あたし、最近もう、ほんと、そういうの面倒くさくなっちゃって……。もうたくさんっていうか……」
「もうたくさんだなんて、偉そうに……。そういうことは、よっぽど派手な男遍歴を重ねてから言うことよ。里菜の恋愛なんかどうせ物の数にもはいらないような中学生みたいなのばっかでしょうが」
「そんなことないわよ、あたしだってそれなりにいろいろあったんだから！」
「はいはい、それなりに、ね。でも、あんたはまだまだ、これから

頑張らなきゃだめ。あんたは超がつくほどのオクテだったんだから、人よりスタート遅かった分、今から人よりいっぱいがんばらなくちゃ。でね、彼がね、友達から、新婦友人を絶対紹介してくれよって、さんざんうるさくせっつかれてるんだって。だから、とにかく、あたしの顔をたてると思って、ちゃんとおしゃれして来てよ、ね？　そうだ、話は変わるけど、披露宴には、例の、竜兄ちゃんも来てくれるのよ」

「……『例の』って、誰だっけ、それ」

「ほら、前に話したでしょ。あたしの従兄よ！　医学部を中退しちゃった従兄！　覚えてない？」

「ああ、あの……。あの人ね」

里菜は、高校生の頃、美紀から、五つほど年上の従兄の大学中退事件についてあれこれ聞かされたことを思い出した。

美紀の自慢のこの従兄は開業医の一人息子で、小さい頃から成績優秀、スポーツ万能の超優等生で、有名大学の医学部に現役合格し、一族中の期待を一身に担っていたということ。その彼が、ある日突然、自分がなりたいものは医者ではないと言い出して、親の反対を押し切って大学を中退してしまった上、今まで出してもらった学費は将来働いて返すと言い残して家も出てしまい、すったもんだのあげく一時は親に勘当までされて、親戚一同巻き込んで大騒ぎになったこと……。

「うん、うん、覚えてる。で、その人、今、どうしてるの？」

「それがね、犬の訓練士になっちゃったのよォ」

「え？　犬の……？　何、それ？」

「なんか、人のうちに呼ばれていっては、その家の犬をしつけたり、飼い主に犬の扱い方を教えて来るんだって。そういうの、出張訓練って言うんだって。最初はどっかの訓練所に勤めたんだけど、それから独立して個人で出張訓練始めたんだって。でね、千葉の山の中に、すっごいオンボロの一軒家を借りて一人で住んでるの。千葉ったっていろいろあるけど、そこはほんっとに山の中なのよ。本当は

ちょっと車で走ればすぐ市街地で、交通の便は悪くないし、実際、ほんのすぐそばには大きなニュータウンなんかもあって、そこはしっかり東京通勤圏なんだそうだけど、でも、竜兄ちゃんとこは、幹線道路からほんのちょっと奥に入っただけなのに、なんか、ほんと、人里離れた山奥〜って感じなの。もう、いきなり別世界。起伏がある地形だから周りの家とかぜんぜん見えなくて、聴こえるのは鶯の声だけ、みたいな」

「ふうん。行ったことあるんだ？」

「うん、こないだ遊びに行ったの。大人になってから、ずっと会ってなかったんだけど、最近、親戚の法事で久しぶりに会って、久しぶりだからどうしてもいろいろ話がしたくて、でも、その時はちょっとしか話せなかったから、その後で、絶対に遊びに行くって言って強引に押しかけたんだ。そしたら、もう、すごいんだから。とにかくアバラ屋だし、家の中、なぁんにも無くて。なにしろ、テレビもないのよ」

「えっ、もしかして、電気、来てないの？」

「やだあ、里菜ったら。まさかぁ。いくらなんでも、そこまで山奥じゃないわよ。ただ、要らないから買わないんだって。あってもどうせ見ないからって。新聞取ってればテレビがなくても別に全然困らないんだってさ。でも、なかったのは、テレビだけじゃないんだけどね。見事なくらいなんにもない、がら〜んとした家だったわよ。なんかけっこう貧乏してるらしくてね。開業医の跡取り息子で、現役で医学部に入ってて、入ってからもすごくいい成績とってたらしくて、前途洋々だったはずなのに、もったいない話よね。

でもね、遊びに行っていろいろ話を聞いたら、決まった休みもなしにあちこちに出張するきつい仕事だし、不安定な自営業で収入もまだ少ないし、犬だけ相手にしてればいいわけじゃない客商売の大変さもあるけど、それでも今の仕事がとっても好きだ、天職だって言って笑ってたの。ああ、いいな、すてきだなって思ったわ。

竜兄ちゃん、本当はもともと医者になんかなりたくなかったんだ

けど、ずっと自分でそれに気がついていなくて、おじさんに言われるままに勉強して医学部に入った後で、ある日、突然、気がついたんだって。そりゃあ医者は立派な仕事だけど、でも、自分がやりたいことは違うって。で、自分が本当に好きなのは何かって良く考えたら、本当は動物が好きだったんだって気がついたんだって。で、大学辞めたときは、これからあらためて獣医を目指そうってつもりだったんだって。あの中退騒ぎまで、竜兄ちゃんがそんな、獣医になりたがるほど動物好きだったなんて、誰も知らなかったのにね。でも、たしかに、それまでの竜兄ちゃんって、ちょっと変だったの。変だと思ってたのは、あたしの知ってる人の中ではあたしだけだったみたいだけど」

「変、って？」

「うーん、なんていうか……。竜兄ちゃんって、小さい頃から優等生だったけど、結構、やんちゃなとこもあったのよ。それが、小学生の時、お母さんが家出して離婚しちゃったのね。もっとも、あたし、当時はまだ小さかったからそんな事情は知らなくて、後で、大きくなってから知ったんだけど。で、これも後から聞いた話なんだけど、おばさんが出ていった後、竜兄ちゃん、一時はすっかり様子がおかしくなって、ほとんど口きかなくなっちゃったらしいの。その時期、あたしは竜兄ちゃんに会わせてもらえなかったし、竜兄ちゃんがおかしいって話も聞かされてなかったから、ずっと、そんなこと知らずにいたんだけど。でも、しばらくしたら、竜兄ちゃん、一見普通に戻ったんだって。

お母さんは、あたしにこの話してくれた時、子供は立ち直るの早いわよね、なんて言ってたけど、あたしは、そうか、そうだったのかって納得したわ。だってあたし、それまではそんな事情は何も知らなかったけど、子供心に、竜兄ちゃんが何か変だって、ずっと感じてたもの。竜兄ちゃんが一時期そんなにおかしかったってことは、ずっと後になるまで知らずにいたんだけど、でも、その後、みんなが元に戻ったっていってた竜兄ちゃんが本当は元通りじゃなかった

の、あたしは知ってた。竜兄ちゃん、変わっちゃったもの。ずっと、本当の竜兄ちゃんじゃなかったんだと思う。なんていうか、心ここにあらずっていうか、生気がないっていうか……。半分しか生きていないみたいな感じ。ここにいるのはただの抜け殻で、本物の竜兄ちゃんはどこか別の世界に行っちゃったんじゃないか、みたいな……。子供だったから、なんとなくそう感じてたってだけで、ちゃんと言葉にしてそう考えたわけじゃなかったけど、今にして思えば、そうだったんだなって思う。他の人はわからなくても、あたしには、わかってたわ。

だって、あたし、竜兄ちゃん、大好きだったんだもん。昔はほんとに家もすぐご近所どうしでね、ほんの何軒か先で、その頃は親同士の仲も良かったから、しょっちゅう行き来してて、小さかったあたしにとっては竜兄ちゃんちは自分ちの離れみたいな感覚で、幼稚園くらいの時は、よく一人で勝手に遊びに行っては家に上げてもらって、おやつもらったり、竜兄ちゃんの小さいころのおもちゃで遊ばせてもらったりしてたのよ。そんなふうだったから、竜兄ちゃんのことは、本当にお兄ちゃんみたいに思ってて。

……そういえば、あれはいくつの時だったのかな、竜兄ちゃんは、その頃、ベスって言うでっかい犬を飼っててね。でね、その犬の散歩に無理やりくっついてって、転んで膝小僧すりむいて、ほんとはたいして痛くもなかったのに、痛くて歩けないって甘えて泣いて、おんぶしてもらって帰ってきたこともあったっけ。嬉しかったなあ。竜兄ちゃんの背中で、夕焼けを見たのよ。それが、見たこともないくらい綺麗だったの。それで、竜兄ちゃんの背中が、あったかかったの。……そうね、今にして思えば、やっぱり、あれが、あたしの初恋だったのかなぁ」

「うん、うん。甘ずっぱい想い出なのね」

「そうなのよォ。で、その大好きな竜兄ちゃんに、よくは覚えてないんだけど、ある時、急に会わせてもらえなくなったわけ。当時は、たしか、『おばさんが病気になって遠くの病院に入院してる』みた

いな作り話を聞かされて、しばらくはそれを信じてたんじゃなかったかな。で、『だから、迷惑にならないように、当分、あの家へは行くな』ってきつく言われて。

で、そのうちに、二、三年もたってから何かの拍子にふと思い出して、親に、『竜兄ちゃんちのおばさんは、まだ帰ってこないのか』って聞いたら、親はあたしに作り話をしたことを忘れてたみたいで、なんか、『え？』って顔されて、『とっくに離婚してる』って聞かされて。なんか『自分は大人たちに騙されてた、蚊帳の外に置かれてた』ってことがショックだったな。

で、その後は、また、まえほどしょっちゅうじゃないけど、たまには竜兄ちゃんに遊んでもらったり出来るようになって、やっぱりあたしは竜兄ちゃんが大好きで、竜兄ちゃんはいつでもあたしに優しくしてくれてたんだけど、でも、どこか前と違うような気がしてて。それは竜兄ちゃんが前より大きくなって、もうすっかり大人になっちゃったからかなと、なんとなく思ってたんだけど。竜兄ちゃん、ちょうどその頃から背が急に伸び始めてて、しばらく会えなかった間に顔つきも急に大人びちゃって、なんか男臭くなりかけちゃってたから、あたしから見たら、もう完全に大人に見えて、なんだか遠くなっちゃったみたいな、手の届かない知らない世界にいっちゃったみたいな感じがしたのよね。でも、それでも、『それにしても、やっぱりどこか変だぞ』っていう気持ちもあって。

でね、あたしが、これは決定的に変だぞと思ったのは、竜兄ちゃんがベスを人にやっちゃった時ね。おじさんが、犬なんか勉強の邪魔になるからって、処分しようとしたらしいの。おばさんが出ていってから、おじさんも、なんかちょっと極端になっちゃってたらしくて……。幸い、何だか血統書付きの犬だったから貰い手がついたんだけど、そうじゃなきゃ保健所にやられるところだったらしいのよ。それを、竜兄ちゃんは、それまですごいかわいがってた犬なのに、抵抗もしないで、素直によそにやらせちゃったらしいの。その頃、あたし、詳しい事情は知らなかったけど、それはおかしい、あ

んなにかわいがってたのにそんなはずない、竜兄ちゃんはいったいどうしちゃったんだろうって思ったんだ。

ちょうどその後すぐ、あたし、引越しちゃったから、それからずっと、竜兄ちゃんとは、お正月とか法事とかで親戚が集まった時にたまに会うだけだったけど、会うたびに背が伸びて大人っぽくなってて、どんどんカッコよくなるし、あたしにはいつだってあいかわらず優しいし、ますます文武両道の超優等生で、本人は何も自慢なんかしないけど、おじさんが、竜が竜がって毎回うちのお父さんになにかしら自慢していくしで、自慢の従兄だったけど、だから里菜にもさんざん自慢したけど、でもやっぱり、どこか違ってたの。あたしは、会えば毎回竜兄ちゃんにまとわりついて一人占めして、いろいろおしゃべりしたんだけど、竜兄ちゃんは、あたしの話は何でも優しく聞いてくれるけど、でも、なんていうか、とりあえずは普通に話してても、何かの拍子ですっとシャッター下りちゃうみたいなとこがあって。ただ、シャッター下りるっていっても、ぴしゃって感じじゃなくてやんわりとだし、もともとがわりと無口な人だから、当時は、シャッター下ろされたことにもあまり気がつかなかったかもしれない。それでも、何か違うな、どこか変だなってことだけは、なんとなく感じてたのよ。

それから、大学中退して家を出ちゃってからはずっと会ってなかったのが、こないだ、久しぶりに会ったら、ああ、これが本当の竜兄ちゃんだって感じに戻ってて。シャッター下りてない竜兄ちゃんを見て、『そうか、これまではやっぱりシャッター下りてたんだ』って、あらためて思い知ったっていうか。ベスのことも、本当は、ずっと忘れてなかったのよ。たまたま話がそっちの近くに流れたら、むこうが自分から話題にしたの。本当は、ずっと悔しくて、気が咎めてたんだって。今、竜兄ちゃんが、人が手放そうとしてる犬を何匹も引き取って来ちゃってるのは、ベスへの罪滅ぼしみたいな気持ちもあるんじゃないかな」

「でも、借家なんでしょ？　借家で、そんなに犬飼えるの？」

「そうなの。犬を飼うために、わざわざ、まわりに人家のない山の中の、だだっ広い庭つきの一軒屋を借りたのよ。そこ、とにかく崩れかけた物置小屋みたいなボロ屋なんだけど、庭だけは広いし、大家さんに、どうせもう後の借り手はつかないだろうから好きに使っていいって言われてるんだって。好きなように改装しても家の中で動物飼ってもいいって。もし竜兄ちゃんが出てったら、後はもう取り壊すか崩れるに任せるだけだからって。うん、あれだったら、わざわざ取り壊さなくても、ほっときゃそのうち絶対崩れるわよ……。ていうか、もうほとんど朽ち果ててるもん。あれだけボロだと、普通の人は、ちょっと借りないわね。よっぽど大改装しないと。だから、高い改装費かけるより、そのまま住んでくれる人がいれば、大家さんもありがたいんじゃない？　でも、まあ、だからといって最初からそんなに何匹も犬を飼うつもりだったわけじゃないんだけど、自分が貰わないと保健所にやられちゃうかもしれない犬とか見ると放って置けなくて、ついつい引き取っちゃうんだって。で、庭中を犬の運動場にして、他の犬は庭の犬舎で飼ってるんだけど、一匹だけ、ミュシカっていう変な名前のでっかい犬は家の中で飼っててね……」

「ねえ……、その、ミュシカって名前、なんか聞いたことあるような気がする。それ、なにかの映画とか小説に出てくる犬の名前からとったとか？」

「それがね、なんでそんな名前にしたのか、竜兄ちゃん、自分でも分からないんだって。今の家に越してすぐ、ひょっこり庭に現われた野良犬なんだけど、その犬と目があったとたん、なんかピンときて、よし、この犬はうちで飼おうって決めたんだって。その時、ミュシカって名前も、ぱっと頭に浮んだんだって。竜兄ちゃんてば、『運命の出会いだ』とか言っちゃって……。そういえば、あの犬、ちょっとベスに似てるかも。

でも、そんな、犬なんかと『運命の出会い』してるから、三十過ぎてもお嫁さん来ないのよね。彼女もいないんだって。あたし、本

人に、ズバリ、『彼女いないの？』って聞いちゃったんだけど、竜兄ちゃん、何でもない顔で、『ああ、いない』って、堂々と、平然と、きっぱり言い切るの。あれは嘘じゃないわね。本当にいないのよ。それも、きっと、『これからそうなりそうな人』とか、『そうだったらいいなあと思う人』とか、『こないだまでそうだった人』とか、そういうのが一切、影も形もないのよ。答え方に、照れも迷いも、一瞬ふっと遠い目をしちゃったりとかも、全然ないんだもん。その上、彼女いなくて寂しいとか恥ずかしいとか情けないとかも、きっと、あんまり、思ってないんじゃないかな。『彼女はいないがそれがどうした』みたいな感じで、とにかく平然としてるの。それも、見栄張って気にしてないフリしてるとかって感じじゃなくて……。

　竜兄ちゃん、あんなにやさしくて、背ぇ高くて足長くて顔も別に悪くないんだから、その気になれば、いくらでもモテるはずだと思うんだけどなあ。なのに、なんで彼女出来ないかなあ。そろそろ犬じゃなく人間とも『運命の出会い』すればいいのに。でも、あんなに犬がいちゃあねえ。世話も大変だし、餌代もばかにならないらしいし、泊まりがけの旅行なんて行けないし、しかも、本人、『他人からどう見えるかは知らないが、俺は今の自分の暮らしがとっても好きで、誰が何と言ってもそれを少しでも変える気は金輪際、ない』って、きっぱり言い切ってるんだもんね。イマドキの女のコで、あんな山の中のボロ屋にお嫁に来て犬の世話を手伝おうなんて奇特な人は、ちょっと、いないわよねえ。……そうだ、ねえ、里菜、あんたなんか、どう？」

「えっ？　……どうって？」

「そうよ、そう、考えてみれば、里菜には竜兄ちゃんよ！　それしかない！　何で今まで思いつかなかったのかなあ。他の新郎友人なんか、もういいわ。目じゃないわよ。ね、ちょっとだけ、竜兄ちゃんと会ってみる気、ない？　里菜、動物、好きでしょ。あの家に一緒に住めば、あんたの好きな猫なんか、何匹でも飼えるわよ。アパ

ート暮らしじゃ飼えないって嘆いてたじゃない。そういえば里菜って、人混み苦手で、派手に遊び回りたいとかおしゃれして街歩きたいなんて全然思わない人だし、ああいう山の中が意外と性に合うかもよ。そうよ、里菜、あんたには山奥がお似合いよ！　ねえ、もし里菜が竜兄ちゃんと結婚したら、あたしたち、親戚じゃない！」

「ええっ？　ちょっと、そんな、勝手に……！　あたし、別に……」

「いいじゃない、別におおげさなことじゃなくて、披露宴の前かなんかに、ちょっと話をしてみるとか、ね？　たぶん、犬の世話があるから、帰りがあまり遅くなると困るっていって、二次会には出ないで帰っちゃうから。ねえ、紹介させてよ。あたし、なんとなく、里菜と竜兄ちゃんって、気が合いそうな気がするんだ。見た目、かなり男っぽいタイプだから、第一印象はちょっと里菜の好みじゃなさそうな気がするけど、中身はきっと好みだから。そりゃ、零細自営業で経済的には不安定そうだし大学中退だし、そういう条件はあんまりいいとは言えないけど、里菜は人物本位でしょ。学歴とか年収とか勤め先のブランドとかにこだわらなければ、絶対、お買い得よ。本人、流行とか全然気にしない人だから、服装とかあんまり今風じゃあないんだけど、とりあえず不潔とか臭いとかむさくるしいってことはないし、従姉の贔屓目抜きでも素材は絶対悪くないと思うし、もう三十二歳なんだけどぜんぜん老けてないし、とにかくまじめで、酒も呑まなきゃタバコも吸わなくて、健康そのもの。それに、なんたって人柄がいいもの。穏やかで落ち着いてて頼もしくて、気は優しくて力持ちって感じ？　ただ、ほんとは、すごく温和な優しい人なんだけど、身体でかくて、わりと無口で、黙って真面目な顔してると見ようによってはけっこうコワモテに見えなくもないから、里菜なんかから見ると最初はちょっと近寄りがたい感じかもしれないけど、別に怖い人じゃないから。よく知りあって見れば、中身は絶対、いい人だから。あたしが保障する」

「えーっ、だって……。そりゃあまあ、なにしろ美紀の従兄なんだし、美紀がそういうなら、きっと、いい人なんだろうけど、別にあ

たし、彼氏なんて、もう、いいんだってば……。それに、美紀がその人に、友達紹介してくれって頼まれたとかじゃないんでしょ」

「うん、まあ、別に頼まれたわけじゃないんだけど……。だから、別に、結婚を前提にとか、そういうのじゃなくて、とりあえず軽い気持ちで、ちょっとだけお友達になってみるとかって、どう？　あたし、あんたたち、絶対、相性いいと思うんだけどなあ」

「……そう？　どうして？」

「どうしてって、直感よ、直感。赤い糸が見えるのよぉ。里菜って、わりとさ、調子のいい軽っぽい男とか、騒々しい男とか、嫌いじゃない？　だったら、あの手の、真面目で無口でもの静かで、いかにも誠実そうっていうのがタイプかなーと思って。でしょ？　それにね、今、話してるうちに、『そういえば……』って思いついたんだけど、あんたと竜兄ちゃんって、なんか相通じるものがあるような気がするのよね。一見、どっちかっていうと正反対ってくらい印象違うから、ちょっと意外なんだけど、よく考えてみると、実は、ある意味、けっこう似てるとこがあるっていうか。騒がしいのが嫌いで、別に人間嫌いじゃないんだけど人付き合いがあんまり良くなくて独りでいるのが一番好き、みたいなところとか、あんまり物欲が無くて、流行とか全然気にしなくて、なんとなく世間一般とちょっとズレてて浮き世離れしてるところとか、動物好きなところとか。で、ふたりとも根が真面目で、ちょっと融通が利かなくて不器用で、頑固なとこあるでしょ。うん、あんたたち、絶対、似てるわよ」

「えー、そう？　でも、さっきから聞いてると、その人って、ちょっと変わってるみたいじゃない？」

「うーん、まあ、変わってるといえば確かに、いろんな点でいちいちすっごい変わってるわね。うん、いっそすがすがしいほど変わってるかも。ある意味、筋金入りの変人かもしれないけど、別にいいじゃない、変わってたって。変わってるっていっても、そんな、陰気とか電波とかアブナそうとか、そういうんじゃないわよ。一応客商売やってるだけあって、その気になればとりあえずの人当たりは

悪くないし、常識はちゃんとあるし、従妹のあたしが言うのもなんだけど、今時珍しい、まじめで礼儀正しい好青年よ。それに、あたしだったら、へなちょこで中途半端な普通の人より、一本筋の通った気骨のある変人のほうが、だんぜん、好きだな。

竜兄ちゃんって、考えてみればたしかにかなり変人だし、しかも相当頑固者だけど、それは、それだけ自分ってものをしっかり持ってるってことだと思うの。そういうのって、素敵だと思わない？だってね、今の竜兄ちゃんの『変』って、前に一時期『変』だったみたいな、その『変』とは違うのよ。あれは、ほんとに、どうかしてたの。『これは、本当の竜兄ちゃんじゃない』っていう、そういう『変』だったの。でも、今の『変』は、竜兄ちゃん本人にしてみれば、たぶんとっても自分らしい状態で、あれが竜兄ちゃんの本来の姿なんだと思うの。ちゃんと自分が本当にやりたことを見つけて、紆余曲折があって結局獣医にはならなかったけど動物関係の仕事に就いて、夢を叶えたわけだし。

竜兄ちゃんね、昔、優等生やってた頃のことを、『あの頃は、なんだかずっと、とっても暗いところにいたような気がする。闇の中で迷っていたような気がする』っていうの。竜兄ちゃんちに遊びに行った頃って、あたし、ちょうど、恋愛とか仕事とかでいろいろあって、人生について、ちょっといろいろ悩んじゃってた時で、それで、もののはずみで、竜兄ちゃんにそういう話を、ぽろっとしちゃったのよ。そしたら、すごく真剣に気にかけてくれて、親身になって相談に乗ってくれて、すごい嬉しかったんだけど、その時、自分の昔のことも少し話してくれたのね。『暗い洞窟の中で道に迷って、どっちへ行ったらいいかわからないまま、意味もなくただやみくもに歩き続け、姿の見えない敵と理由も知らずに戦い続けて、休むことも出来ずに心をすり減らしていたみたいだった』って。ずっとあのままでいたら、ある日突然、何かとんでもないことをしでかしてたかもしれないって、今となっては思うんだって。その頃は自分がそんなふうだって自分で気づいてなかったけど、今になって、怖か

った、危なかったって思うんだって。
　不思議ね。だって、その頃の竜兄ちゃんって、すごく成績優秀な、奇跡みたいな優等生で、だからってガリ勉で友達いないとかじゃなくて、学級委員なんかもやっちゃって、ああいう人柄だからクラス中みんなが頼りにして慕い寄ってくるような感じだったらしいし、その上、スポーツ万能で、ルックスもあのレベルで、当然、本人が相手にしたかどうかはともかく、キャーキャーいうような女の子だってぜったいいたはずだし、態度もまじめで礼儀正しいから誰からも褒められてて、受験も進級もすいすいで、そんなふうだから親にも先生にもすっごい期待されて自慢に思われてて、親戚中の自慢の種で、期待の星で、もう、なあ～んにも問題ない、なあ～んにも欠けたところのない、前途洋々、順風満帆の青春送ってたはずなのに。
　でも、『心は闇の中にいた』って、『闇の中で迷っていた』って、そう言って笑うの。
　で、ある時、なんか急にふっきれた気がして、長い夢から目が覚めたような気がして、ふっとまわりを見回してみたら、なんか、自分の道が見えた気がしたんだって。その道を辿って来たら、今の暮らしに辿り着いたんだって。だから、今の暮らしは、竜兄ちゃんの正しいゴールなの。ゴールったって、人生長いんだから、それでもう『上り』ってわけじゃないんだろうけど、とにかく、今のところは、きっと、今の場所が竜兄ちゃんの正しい居場所で、ああやってるのが竜兄ちゃんの、本来あるべき正しい自然な在り方なの。その、自分らしい自然な在り方が、ハタから見ると、たまたまちょっと変わって見えるってだけ。
　竜兄ちゃんは、たぶん、本当に自分らしく、心のままに振る舞っていると、世間の標準から、ちょっと外れちゃう人なのよ。それが竜兄ちゃんの、ありのままの個性なのよ。だから竜兄ちゃんは、ただ、周囲の雑音なんか気にせずに自分らしさを貫いて、自分に正直に自然体で生きてるだけなんだと思うの。その結果がアレなわけで、あたし自身はああいう生活がしたいとは絶対思わないけど、それは

竜兄ちゃんとは違うあたしの個性であって、ああやって超然とひょうひょうと自分らしさを貫いてる竜兄ちゃんの生き方そのものは、あたし、尊敬するわ。自分の『普通』が世間の『変』なら、人に迷惑をかけない限り誰に遠慮することもなく変人でい続けたっていいはずなのに、それって、現実には、なかなかできないことなんじゃないかなあ。でも、竜兄ちゃんは、それを実行してるのよ。すごいと思うな。変人の鑑　《かがみ》よね。『変』の帝王よ。どんなことでも、貫くのは立派よ。変人なら変人で、首尾一貫して正々堂々と『変』を貫くのが変人の王道よォ！！」

「ちょっと、ちょっと、美紀、何もそこまで変、変って連呼しなくても……。別にそこまで言うほど変でもないと思うわ……っていうか、あたしはその人直接知らないからほんとに変じゃないのかどうか分からないけど、家が山奥とかボロいとか貧乏とかはその人の人格とは関係ないし、とにかくちゃんと真面目に働いてるわけだし、流行りの服を着るか着ないかなんて個人の自由だし、三十二歳独身で彼女いない人だって別に珍しくないだろうし、家にテレビがない人……は、そりゃまあ確かにかなり珍しいだろうけど、別に、たまにはそういう人がいたっていい……と思うし……。

でも、でもね、そりゃあ、なかなかおもしろい人みたいだし、美紀が尊敬してるっていうんならほんとに立派な人なんだろうし、きっといい人なんだろうけど、とにかく、あたしは、今、別にもう、男の人と付き合いたくもないの。それに、向こうのほうだって、別に、彼女欲しいとかお嫁さん欲しいとか、思ってないんでしょ？だったら、あたしなんか紹介しても……」

「今、彼女が欲しいと思ってるかどうかなんて、関係ないわよ。今は別に彼女欲しいと思ってなくても、あんたを一目見たとたん、絶対に彼女にしたくなったりするかもしれないじゃないの。まあ、とにかく会うだけ会ってみなさいよ。会ってみなきゃ何もわかんないんだから。どうせ披露宴に来るんだったら、ついでに一目会ってみても損はないでしょ。それに、付き合うとか付き合わないとか、そ

ういうのは抜きにしても、そんな変人がどんな顔してるかだけでも、ちょっと見てみる価値、あると思わない？　思うでしょ？　とりあえず、きっとおもしろいから、『変人見物』してみれば？　竜兄ちゃん、いろいろと事情が事情だから、親戚が集まるところとか、本当はなるべく来たくないらしいし、犬飼ってるから滅多に遠出できないんだけど、他ならぬあたしの結婚式だからって、万障繰り合わせて来てくれるのよ。二度とないかもしれないチャンスなの！　当日はあたし、たぶんそれどころじゃないから、お姉ちゃんに、あんたと竜兄ちゃんを引き合わすように言っとくから。あたしのお姉ちゃん、顔、覚えてるでしょ？」

「やめて、やめて。そんなことするなら、行かないわよ！　あたし、とにかくもう、今はそういうこと、興味ないんだってば」

「そお？　ほんとにぃ？　どうしても？　残念ね……。絶対、いいと思うんだけどなあ。ま、いいや、とにかく、披露宴と二次会には来てよね！　あたし、里菜にブーケをあげるつもりなのよ。後で招待状、送るから。じゃ、またね」

いつものように、美紀は、言いたいことだけ言うと、唐突に電話を切ってしまった。後は受話器がツーツーと言っているばかりだ。

（もう、美紀ったら……。何でそんなおせっかいしたがるのかしら。向こうに紹介頼まれたわけじゃないのに、それじゃまるであたしがあせってるみたいで、恥ずかしいだけじゃない。あたし、本当に、あせって相手を探す気なんか、ないのに）

里菜は溜息をついて受話器を降ろした。

（だいたい、美紀ってば、本気でおススメするなら、なんていうか、もうちょっと仲人口というか、あんまり変なこと言わないで少しは条件良さそうに聞こえるように紹介してあげればいいのに、勘当だの貧乏だの山奥だの家がボロだのって……。あげくのはてに『変人の鑑』だの『変の帝王』だのって、言いたい放題言うだもんね。しかも、引き合わせようとするのに、言うに事欠いて『おもしろいから見物してみろ』だなんて、まったく美紀らしいんだから……）

そんなことを思いながらも、やはり、あまり変な人そうなので、その、山奥のアバラ屋に住む謎の元医学生、『筋金入りの変人』氏に、それなりの興味が沸いてきた里菜だった。美紀の紹介は、実は里菜の性格を上手くつかんだ、なかなかツボを押さえたものだったのである。

終章（2）

美紀の結婚式が、都内の某結婚式場で厳かに執り行われている、その当日。

慣れない礼服に身を包んだ竜は、式場に入りきらない親戚たちがうろうろしている親族控室を、そっと抜け出した。

彼にとって、親戚の輪の中というのは、もう、あまり居心地の良いところではなかったのである。ただでさえ、せっかく入った医学部を中退し、父の医院を継ぐのを拒んで家を出たこと、その後も親戚が納得するような就職をしていないことで、親戚の間では、彼に対する風当りは強い。その上、今日は従妹の結婚式ときている。三十過ぎて独身の彼に、親戚一同が口をそろえて結婚はまだかと言い出すのは、時間の問題だ。そうなると、どうも、面倒臭い。

実を言うと、彼は、生まれてからこの年になるまで、一度も女性と個人的に交際したことが無い。大学時代には、向こうからアプローチしてきた女性もいないではなかったし、友人が女友達を紹介してくれようとしたり、頭数合せのために是非にと頼み込まれて合コンとやらに出たこともないではないが、そのようにして出会った女性たちに、一度も心を動かされたことがないのだ。

別に、彼女たちのどこが嫌だったというわけでもない。そもそも、彼女たちの一人一人について、特に嫌う理由が出来るほど知りもしなかったのだから当たり前だ。ただ、彼女たちの誰もが、自分が特別に愛するべき、めぐり合うべきただ一人の女性とは違っており、彼女たちと付き合うことはそのまだ見ぬ誰かを裏切ることになるように感じただけなのだ。何か根拠があってそう思ったわけでもなければ、その、『めぐり合うべきただ一人の女性』というのがどういう人なのか特に具体的なイメージがあるわけでもなく、いいトシをした男がそんな少女趣味な思い込みに取り付かれているなど我ながらばかばかしくてとても他人には言えないとは思うし、自分でもそ

んな思い込みを本気にしているつもりはないのだが、いくらばかばかしいと思っても、自分でも信じてはいなくても、自分の心がそう感じてしまうことまでは止められない。いずれにしても、とにかく自分が彼女たちのうちの誰かと付き合ってみる気になれないということだけは確かで、それならば、なにもわざわざ多大な時間とエネルギーを無駄に費やしてまで、その女性と交際してみる必要もないだろう。別にそれほどしたくもないのに交際するなど、相手の女性に対して失礼ではないか。

そもそも彼は、実を言うと、昔から何となく女性全般が苦手なのである。医者になって父の跡を継ぐことにだって、父の医院がよりにもよって産婦人科でさえなければ、あれほど抵抗はしなかったかもしれない。もちろん、新しい命の誕生を手伝う産婦人科医の仕事が有意義な素晴らしいものであることは重々わかっているが、だからといってわざわざ自分が、そんな、毎日毎日女性とばかり顔を合わせなければならない――のみならず、普通ならまずありえないような、ある意味では非常に深い関わり方をしなければならない――仕事をするのは、まっぴらごめんだったのだ。

もちろん、別に産婦人科医でなくても、世界の人口の半分を占める女性とまったく関わらずに済むわけはなく、彼とて、産婦人科医のような特殊な関わり方でさえなければ、社会人のはしくれとしてそれを甘受する覚悟はあって、周囲の女性と良識の範囲内での友好関係を築くことや仕事先で女性の顧客に普通に礼儀正しく愛想よく接することまで嫌だと思ったことはないが、あらゆる構えを解いて何の気兼ねもなく過ごしていいはずの自分の城に帰ってきてまで、好き好んで女性と顔をつきあわせていたいとは、あまり思わない。いや、別に女性とでなくても、他人と一緒に生活すること自体、はっきり言って、わずらわしい気がする。

一人暮らしの長い彼は、生活のすべてにわたって、それこそ茶碗の置き場所ひとつにいたるまで、確固たる自分の流儀を持っている。誰かと共に暮らすということは、そういう自分の流儀を互いに少し

ずつ曲げて折り合いをつけていくということだろう。そんな面倒な作業を行ってまで誰かと一緒に暮らす必要性を、彼は、今のところ、何一つ感じていない。

それに、例え本気で結婚したいと思ったところで、住環境が特殊な上に経済的にも不安定な今の自分の生活では、来てくれる相手もいないだろう。

――ただ、そんな言い訳を親戚の前で口に出すと、だからもっとちゃんとした就職をしろとか、家に戻って父親と同居しろとか、結婚の話題以上に避けたい話題を蒸し返されるのがオチだから、今は黙って逃げておくのが一番だ。

親族控室から逃げ出した竜は、ロビーの隅で、ぼんやりと中庭の噴水を眺めていた。別の結婚式の客らしい若い女性が何人か、通りすがりに、ちらちらと竜を眺めてゆく。失礼にも、一度通り過ぎてから何かこそこそ言い合って、わざわざちらりと振り返って彼を見ていった一団までである。

実は、長身で肩幅の広い立派な体躯の持ち主である彼は礼服の着映えが非常に良く、背筋を伸ばして胸を開いた堂々たる立ち姿もいかにも様になっていて（特に意識しなくても、ついついそうやって常にきちんと姿勢を正してしまうのが彼のクセなのだ）、通りすがりの女性たちが思わず目を引かれずにはいられないほどだったというだけなのだが、本人にしてみれば、そんなことは思いも及ばないことだ。借り物の礼服など窮屈なだけで、それを着た自分の姿が見ず知らずの女性の目にどう映るかなど、知ったことではない。ただ、何をするでもなく手持ち無沙汰に突っ立っている自分が不審に見えるのだろうかと、少々居心地の悪い思いを味わうだけである。

こういう時だけは、自分にタバコを吸う習慣があれば便利だったのにと思う。タバコを吸うならロビーに佇んでいても体裁が繕えるが、タバコもなしに、ただぼんやりとしているのでは、そういつまでも、同じところに立っていられない。まあ、挙式はもう終わったようだから、まもなく披露宴会場に案内されることになるだろう。

そこへ、美紀の姉、圭子がぱたぱたとやってきて、いきなり竜の腕を引っ張った。

「竜君！　なんだぁ、探したのよ。こんなとこで何してんの？　お式、終わったから、これから披露宴よ。でも、そのまえに、ちょっと来てくれない？　紹介したい子がいるんだ。美紀の高校の同級生でね、山口さんっていうんだけど……」

「……何だよ、いきなり……。俺は別に……」

圭子は、竜のぼそぼそした抗議などハナから黙殺し、一方的に早口でまくしたてながら強引に竜を引っ立ててロビーを横切りはじめた。

「いいから、ちょっと来てってば！　ほら、こっちよ、こっち！　美紀がね、絶対あんたたちを会わせたいんだって言って、聞かないのよ。ほら、時間がないんだから！　ねっ、ひとことふたこと、挨拶するだけでいいから。高校生の頃、うちにも何度か遊びに来たことあるから、あたしも知ってるコだけど、いいコだし、結構、かわいいわよ。美紀の同級生だから齢は二十七ね。趣味は読書だって。ちょっと内気なコで、人見知りするから最初は話が弾まないかもしれないけど、よく知りあってみれば絶対気が合うはずだからって、美紀が……」

「いや、だから、俺は別に……」

「いいから、いいから。見るだけ、見るだけ。見るだけならタダなんだから！　それで、もし、ちょっとでも気になると思ったら、後でまた会えるように、美紀が陰謀巡らしてくれるっていうから。あ、ほら、あのコよ。ね、かわいいでしょ？　山口さーん！　ちょっと！」

圭子の大声に、受付の前にいた、青いドレスの小柄な娘が振り向いた。

圭子に腕を掴まれてロビーをずるずると引きずられていた竜は、その傾いだ姿勢のまま、一応は顔を上げて相手の姿を認め――、そのとたん、なぜかはっとして、弾かれたように体勢を直て立し、そ

のまま茫然と直立不動で立ち尽くした。
竜の姿を捉えた娘の目が見開かれ、パールピンクの口紅に彩られた唇から、不思議な言葉が零れ落ちた。
「……アルファード？」

その瞬間、周囲のざわめきが、ありふれた結婚式場のロビーの光景が消えて、竜の目の前に、いつか夢で見たような気がする緑の草原が現われた。
空に架かる大きな虹の下、ほっそりとした少女が、三つ編みの黒い髪と質素な青いワンピースの裾を風になびかせて一面の草の海に立ち、こちらを見ている。
誰だか分からないけれど、とてもなつかしい、とても愛おしい、かけがえのない少女。
ひんやりとした高原の風が、竜を包んだ。
――やっと、会えたね――
小川のせせらぎや木々のざわめきを運んで牧草の上を渡って来る風の中に、そんな言葉を、聴いた気がした。
その時、まるで胸の奥深くにずっと隠してあった小さな宝石箱の蓋がふいに開いて大切にしまってあった一粒の宝石がぽろりと転がり出したかのように、あるいは、忘れていた魔法の言葉が突然蘇ったかのように、ひとつの言葉が、竜の心の水面に浮かび上がった。
自分でも意味のわからない、けれどなぜか自分にとってとても大切で愛しいものに思えるその短い言葉を、気がつくと竜は、いつのまにか口にしていた。
「リーナ……」

声を出したとたん、草原の幻は消え、少女の素朴なワンピースはつややかな青いサテンの膝丈のパーティドレスに変わり、竜の目の前にいるのは、童顔ではあるがもう少女とは言えない年齢の、一人の若い女性だった。

大きく見開かれてまじまじと竜を見上げる娘の目から、ふいに、ぽろりと涙が溢れた。

娘は、何が起こったかわからないという顔であわてて涙をぬぐい、涙を拭いたその手を驚いたように眺め、それから、恥ずかしそうに再び顔を上げて、おずおずと微笑んだ。

その微笑みに、竜の心臓はいきなり喉元まで躍り上がった。

なぜ、この時、竜が里菜の名前を知っていたのだろうか、この時の里菜の涙はどういうわけだったのだろうか、里菜がとっさに呟いて、その後すぐに自分でも忘れてしまった謎の言葉はいったい何だったのだろうか、そしてその言葉が竜にも親しいものに感じられたのはなぜだろうかと、ふたりがあれこれ訝るのは、後になってからのことだ。竜は、自分が今、たぶん生まれて初めて恋に落ちたのだという思いもよらない事実を愕然と悟って、硬直した。

「山口さん、目ェ、どうしたの？　ゴミ入ったの？　もしかしてコンタクト？　大丈夫？　……ねえ、山口さん、さっき、何て言ったの？　竜君、どうして山口さんの下の名前、知ってるの？　あたし、教えたっけ？　美紀から聞いてた？　ねえってば、ふたりとも、どうしたの？　もしかして、ふたり、知りあい？」

とまどう圭子の声は、ふたりの耳に入っていなかった。

十年の時を越えて、ふたりは、見つめ合った。

初めて知る胸の高鳴りに狼狽しながら、竜は、しどろもどろに口を開いた。

「ああ、その……、はじめまして」

――同じ世界にいれば、あんたらは絶対、また巡り合える。そして、巡り合えさえすれば、例えその時、すべてを忘れていても、必

ずもう一度、最初から愛し合えるのさ――

聞き覚えのあるやさしい声が、記憶の彼方で、そっと囁いたような気がした。

――『イルファーラン物語』・完――

終章（2）（後書き）

『イルファーラン物語』、完結しました。
拙い物語に長いことお付き合いくださり、ありがとうございました。
サイトでは完結済みのものを携帯用に連載させていただきましたが、こちらでの連載中、私は、もう一度連載気分を味わって楽しい日々をすごすことができ、とても幸せでした。
私の他にもこの連載を楽しんでくださった方、お話を気に入ってくださった方がいたら、とても嬉しいです。
読了記念に何か一言でも感想いただけると、さらに飛び上がって喜びます！

この後、しばらくお休みしてから、里菜と竜のその後を描く後日譚シリーズ『里菜と竜兄ちゃん』を連載予定ですが、こちらは現代ものラブコメで、本編とジャンルも傾向も全く違うため、別作品として掲載しようと思います。
『イルファーラン物語』とのシリーズ設定はしますので、もしご興味がありましたら、『イルファーラン物語』をお気に入り登録、またはブックマークしておいてくだされば、そこから飛べるようになるはずです。
この後日譚シリーズもサイトでは既に本体完結済み（おまけ小話随時更新中）ですので、ＰＣユーザーの方ですぐ読みたい方はそちらへどうぞ。
（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｃａｎｏｐｕｓｔｕｓｉｎ／ｉｌｆ－ｒｉｎａｒｙｕ．ｈｔｍ）

また、『イルファーラン物語』には、後日譚シリーズの他にも、たくさんの番外編やお遊び企画があります。

ＰＣの方はサイト（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｃａｎｏｐｕｓｔｕｓｉｎ／ｉｌｆｍｏｋｕｊｉ．ｈｔｍ）に行けば見られますが、そのうちの一部は、後日、ぼちぼちと、こちらにも転載しようと思います。
本編は完結しましたが、これからもよろしくお願いします！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

４月１８日追記：『里菜と竜兄ちゃん』シリーズ、連載開始しましたが、『イルファーラン物語』とシリーズにしたらシリーズ名の表示に違和感があったので、シリーズ登録は取り消して、それぞれの目次ページにお互いへのリンクを張りました。興味のある方は作品目次ページからどうぞ。
作中の季節の歩みに合わせて、のんびり連載していく予定です。『イルファーラン物語』ともども、よろしくお願いします！

番外編『滅びゆく種族の歌』（前書き）

一応、第二章第四場読了後推奨ですが、ネタバレは特にないので、本編未読でも大丈夫です。

番外編『滅びゆく種族の歌』

――歌が、聴こえる。

まだ明け初めぬ初冬の朝まだき、里菜はふと目覚めた。

どこからか、歌が聴こえてくる。明け方の霧のように、木々の間を縫って、不思議なうつくしい旋律が流れてくる。

言葉は聞き取れないけれど、高く透き通る清らかな歌声は、女性の――たぶん、まだ幼い少女の声だ。

枯葉を寄せ集めた野営の床で、里菜は、横たわって目を閉じたまま、ぼんやりと歌に聞き入った。

これは何の歌だろう。知らない言葉――きっと、外国語の歌だ。流れるような、さえずるような、綺麗な響き。どこの国の言葉だろう。英語じゃないし、良くは知らないけど、たぶんフランス語でもドイツ語でもなさそうだし……。

ぼんやりと思ううちに、しだいに目が覚めてきて、ふと気づく。

ここは異世界、イルファーランだ。ここには、アメリカもイギリスも、ドイツもフランスもないのだ。

そして、ここは、古いエレオドラ街道沿いの森の中。

歌ってるのは、だれ？

里菜は目を開けて、マントを巻きつけた上体を起こし、辺りを見回す。

まだ薄暗い、森の中の野営地。消えかけた焚き火の周囲には、それぞれマントにくるまって、アルファードとローイの大きな姿が横になっている。

そして、思ったとおり、そこにもうひとつあるはずの小さな姿――昨夜、寝入った時には自分の傍らにぴったりと寄り添っていたはずの、キャテルニーカの姿が無い。

里菜は、アルファードたちを起こさぬように、そっと立ち上がった。

そして、マントをきつく身体に巻きつけ、寒さに震えながら、歌の聴こえる方角に歩き出した。

枯れた下生えを注意深く踏んで、朝霧に沈む森をゆく。

ほどなく、木々の間に、探していた姿を見つける。

いつもと同じ薄い袖なしのワンピース一枚で、寒がる様子も無く静かに佇み、無心に歌っている、小さな、あどけない童女。

キャテルニーカに声をかけようして、里菜は、ためらった。

この素晴らしい歌を中断させるのが惜しかったせいもある。

けれど、それだけではない。僅かに白み始めた暁の底、ただ独り無心に歌い続けるキャテルニーカの姿は、何か、この世の存在では無いもののように見えて、声をかけてはいけないような気がしたのだ。

鳥たちも未だ目覚めぬ、静かな冬の森の中、キャテルニーカの小さな愛らしい唇から、不思議な歌が溢れ続ける。

耳慣れぬ――けれどなぜか懐かしさと切なさを呼び覚ます独特の節回しは、どこか不安定なようでありながら、一音たりとも他の音に置き換えるわけにはいかないだろう至上の調和を湛えて、鳥のように舞い上がり、木の葉のように降りしきり、仔栗鼠のように気まぐれに駆け回り、夏の光のようにひととき煌いては、水のように辺りを満たして静かにたゆたう。

その清冽な歌声は、確かに、ニーカの可愛い幼な声なのだけれど、普通に話しているときとは発声が違うらしく、まるで、人間の声ではなく、小鳥のさえずりや風の音であるかのように聴こえる。旋律と一緒に唇から流れ出す白い息まで、何か、不思議な魔法が生んだ幻影のよう。

歌いながら、半ば伏せられていた瞼がふと上げられる。
明るい若葉色の宝石ような瞳が、かすかに漂い始めた暁の薄明かりを集めて星のように輝く。
僅かに仰のく動作につれて、耳元で、瞳と同じ色のシルドライトも小さく揺れて煌く。

シルドライトの瞳、黄金の髪、漆黒の肌、若木のようにほっそりとした、しなやかなむきだしの腕、華奢な足首、そして、枯れ草に半ば埋もれた、何か小動物のそれを思わせる小さな黒い素足。
簡素な薄衣を纏ったあどけないその姿は、透き通る蜻蛉の翅のように儚く、清らかで――

――ああ、森の妖精だ……。

そう思ってから、里菜ははたと気づく。
そう、ニーカは――ひとなつこく愛くるしいこの無邪気な少女は、本当に『妖精』なのだ。もちろん、里菜の世界の物語に出てくる『妖精』とは違うのだけれど、この世界で『妖精』と呼ばれる、古い種族の末裔だ。
背中に翅こそ無いけれど、豪奢な黄金の巻き毛の両側からは、可愛らしく尖った黒い耳の先が、小さな角のようにちょこんと覗いている。

里菜は、なんとなく息を呑んで立ち尽くした。
ああ、なんて不思議な、不思議ないきもの……。そして、なんてきれいな、なんて謎めいた……。

昨日、ニーカは、ただの可愛い子供だった。
それは、たしかに、肌と髪や瞳の色の取り合わせが非常に珍しか

ったり、人並みはずれて美しい容姿を持った豪華な美少女であったりはするけれど、無邪気にお菓子を食べ、他愛のないおしゃべりをしながら人懐こく擦り寄って甘えてみたかと思うと興味の赴くままにするりと脇をすり抜けてあちこちの藪に顔を突っ込んでみたりと、足元に纏わりつく気まぐれな仔猫よろしく前に後ろにちょろちょろ動き回りながら自分たちについて歩くさまや、夕べの焚き火の傍らで首に抱き付いてきたぬくもりは、慈しむべき、守り育むべき幼な子そのものだった。

でも、今、こうして知らない言葉で歌を歌っているニーカは、やっぱり、別の種族、別のいきものなのだ。

こうして見ると、その姿は、あまりにも異質だ。

それは、里菜の元いた世界にも、肌の黒い人や、髪が金色だったり目が緑だったりする人はいた。

でも、その人たちは、ただ単に肌や髪の色や顔立ちの特徴が違うだけの、同じ人間だ。

だけど、ニーカは違う――。

少し釣り上った猫のような目にはほとんど白目の部分がなく、宝石のように透き通ってきらめくその瞳は、昼間の光の下では若草のような黄緑色だが、夜、野営の焚き火の傍らで見る時は、揺れる火影を映すかのように底の方にちらちらと深紅の光を宿す。

滑らかな卵形の顔はあまりにもつるりとして陰影が浅く、信じられないほど大きな目に比して鼻や口が極端に小さい顔全体のバランスも、実は明らかに常軌を逸している。

はじめてニーカを見た時、里菜は、『お人形さんみたい！』と思ったが、それは決して単に可愛らしさを表す比喩ではなく、実際、彼女はまるで、人形にそのまま血を通わせて動きの自由を与えたかのような姿をしているのだ。

人形の顔というものは、多くの場合、人間の顔の中で可愛さや美しさを感じさせる要素を強調し、その逆の部分を省略し、あらゆる瑕疵や夾雑物を取り除いて作られる。だからこそ、本物の人間以上に、より純粋に、子供や少女の可愛らしさや美しさをまじりけなしに表現できるのであるが、だからといって、もし、そういう人形たちと本当に同じ顔をした人がいたら、その人は、決して、美しくも愛らしくもないだろう。むしろ、異形に違いない。

キャテルニーカの美貌は、そういう、異形一歩手前の、どこか非人間的な、作り物めいた、異質な美貌なのだ。

ただ、普段は、自然で生き生きとした表情や子供らしい活発な仕草が、彼女を『愛らしい子供』に見せているのだ。

けれど、そういう、子供らしい表情や仕草が影を潜めている今――、彼女は、『異形』だった。

美しすぎる異形。

硬質な光を湛えて限りなく透んだその瞳は、まるで、どこか人間には見えない別の世界を――人間には見ることを許されない楽園の風景を見ているよう。

里菜は、いつのまにか、魂を抜かれたような心地で、歌うキャテルニーカに呆然と見惚れ、また、その歌に聴き惚れていた。

ああ、今、あたしは、妖精の歌を――滅びゆく種族の歌を、聴いている……。

震えるような想いが胸を満たした。

きっと、この言葉は、妖精たちの種族の古い言葉なのだろう。

ローイが言っていた。妖精族は、かつて、独自の古い言葉を持っていたのだと。

その言葉は、今ではもうほとんど失われ、日常生活の中で使われ

ることはないが、古い歌や儀礼の祭文などの中には残っていて、子供の命名に使われることもあるという。

キャテルニーカという名も、その古い言葉で、『癒し手』という意味なのだそうだ。

異世界であるイルファーランの言葉が、どういう仕組みでか理解できる里菜だが、人の言葉よりも鳥のさえずりに似ているような気がするこの言葉は、全く理解できない。

言葉の意味は理解できないけれど、歌に込められた想いは、分かる。

これは、愛惜の歌、追慕の歌、想い出の歌、喪失の歌、望郷の歌――喪(うしな)ったものを悼む、哀悼の調べだ……。

脳裏に、美しい光景が広がる。

なだらかな起伏を描く光明るい緑の丘に、黒い肌の美しい人々が群れ集い、今を盛りと花々が咲き乱れる中、楽しげに笑いさざめいている。

軽やかな身のこなしで蝶のように行きかう小柄なその人々は、大人も子供も男も女も、誰もが、ほっそりとした優美な姿と、様々な色合いの豪華な巻き毛を持っている。光り輝く黄金の髪、炎のように燃えたつ緋色や朱赤の髪、光を弾くあかがね色の髪に、風の中で陽に透けるプラチナの髪――そして、つややかな黒絹の肌に映える翠の瞳、青い瞳、透き通る琥珀の瞳、神秘にけぶる紫の瞳――。その、豪華な色彩の乱舞は、緑の丘にきらきらかな宝石をばら撒いたよう。

降り注ぐ陽光、輝く雲、揺れる野の花。花を摘む幼な子、寄り添う恋人たち。美しい人々、美しい自然――絵の中にしか存在しえないような、美しい、美しい世界。平和で、豊かで、愛に満ちた、楽園の光景――。

けれども、そんなにも美しい、一点の曇りも無く満ち足りた光景を見ながら、胸に哀しみが広がるのは、その楽園が、遠い昔にすでに喪われてしまったことを知っているからだ。

里菜の頬を、我知らず、涙が伝った。

たぶん、これは、かつて妖精たちが平和な繁栄を謳歌していた神代の光景なのだ。

この歌は、喪われた楽園への挽歌なのだ。

と、いきなり、歌が止んだ。どうやら、一曲歌い終わったところらしい。

キャテルニーカが、里菜がいたことなど最初から知っていたといわんばかりの落ち着いた様子で、にっこりと笑った。

「おねえちゃん、おはよう！」

そして、元気よく木の根を飛び越えて里菜の元に駆け寄ってきた。

そんなふうにしていると、キャテルニーカは、やっぱり、ゆうべ焚き火の傍で里菜にもたれかかってきた時と同じ、可愛い子供なのだった。

「おはよう、ニーカ。今の歌、素敵な歌ね」

「うん。古い、古い歌よ。弟がね、好きだった歌なの。そして、お母さんも、お祖母ちゃんも、ひいお祖母ちゃんも好きだった歌」

「ニーカには弟がいたの？」

「ううん、あたしの弟じゃない。お母さんの、弟」

最初のうちはニーカのこういう混乱した物言いにいちいちめんくらい、この子はちょっと頭が弱いんじゃないかなどと思った里菜も、既に、だいぶ慣れてきている。

「……ってことは、あなたの叔父さんね？」

「叔父さんじゃないよ。お父さん。……でも、もう死んじゃった。

お父さんも、お母さんも、お祖母ちゃんも、お友達も、みんな、みんな、ずっと前に死んじゃった。生きているのは、あたしだけ……」

特に悲しそうでもない、歌うような口調だったけれど、だからこそ、そこに深い深い孤独が秘められているように思えて、里菜は胸をつかれた。

この子は、少々要領を得ない本人の申告を信じるなら、両親をすでに亡くしているらしい。

それが二人同時になのか、父が先立ったのか、いずれにせよ、父亡き後は母の弟である叔父に引き取られ、叔父を父と呼んで育ったのだろう。そして、どうやら、父親代わりのその叔父も、既に亡いのだ。

たぶん、その他の親戚縁者も、北部を襲った災厄の中で、みな死んだか、あるいは離散して音信不通になっているのだろう。

この子は本当にひとりぼっちなのだ――。

里菜は衝動的にキャテルニーカの小さな身体を抱きしめた。

キャテルニーカは屈託の無い笑い声を立てて、嬉しそうに里菜に身体を押し付けてきた。そんな仕草は、まるで仔猫のようだ。冷え込んだ身体に、子供の高い体温が嬉しい。

「さあ、みんなのところに戻って朝ごはんにしましょ」

「うん！　おなか減ったね！」

顔を見合わせて微笑みあうと、二人は手を繋いで野営地へと歩き出した。

寒い早朝の森の中にずっと立っていたというのに、ニーカの小さな手は温かかった。

森の朝は、いつのまにか、白々と明けはじめていた。

（『イルファーラン物語』番外編『滅びゆく種族の歌』・完）

クリスマス&ニューイヤー番外編『ヒーローになれなくても』（前書き）

クリスマスとお正月を一緒にしたようなイルファーランのお祭り『冬至の火祭り』を舞台にした、クリスマス&ニューイヤー短編です。
7歳の頃のローイとヴィーレのお話。

クリスマス&ニューイヤー番外編『ヒーローになれなくても』

「そう、残念だったわね……」
冬の初めの灰色の空を見上げて、ヴィーレは呟いた。
「うん……」
ローイは悄然と頷く。
ヴィーレとローイは共に七歳。親が決めた許婚同士だが、二人の仲がよいのは、そのせいだけではない。もともと二人の仲が良かったこともあって親同士が婚約を決めたというほどの、ほほえましい小さな恋人同士である。
「ちぇっ、ナークなんかより俺のほうが絶対うまく＜幼な子＞の役を出来るのにさ」
いまいましげに言って足元の小石をけったローイを、ヴィーレは優しく慰めた。
「そうね。でも、しょうがないわ。くじびきなんだもの」
「そうだけどさ……。あーあ。俺はもう、ぜったい、一生、＜ドラゴン退治の幼な子＞には、なれないんだよ。だって、冬至の火祭りは来年も再来年もあるけど、俺が七歳の火祭りは今年だけだもん」
「でも、シゼグは八歳のときに＜幼な子＞をやったわよ」
「だって、それは、去年、七歳になる子がカーデ一人しかいなくて、カーデが木から落ちて足を折ったからだよ。だから、前の年に選ばれなかったシゼグが代わりに選ばれたんだ。でも、来年七歳になるヤツは、三人もいるんだぜ。ぜったい、むりさ」
冬至の火祭りのハイライトの一つである聖劇で、女神の御子である＜ドラゴン退治の幼な子＞を演じることは、村の小さな男の子たちの憧れだ。
古くから村に伝わる冬至の聖劇は、＜幼な子＞と呼ばれる童形の英雄がドラゴンを退治するという単純な筋立ての、短い無言劇である。額に銀の星のついた飾り輪を嵌め、純白の衣装に身を包んだ＜

幼な子＞は、作り物の『聖剣』を振りかざしてひとしきりあどけない剣舞を演じた後に、大人たちが操る張りぼてのドラゴンを、あっけなく退治するのだ。

ドラゴンは、自然の猛威や疫病、戦乱などのあらゆる凶事の象徴であり、そのドラゴンに次代を担う少年英雄が勝利することによって新しい年の豊作と平和が約束されるとする、昔ながらの素朴な豊作祈願行事である。

この、＜幼な子＞の役は、毎年、七歳の男の子が演じることになっている。七歳の男の子が二人以上居る年は、女神の司祭が、祭壇の前で祝福した籤を引いて決める。

ローイは、その、選に漏れたのである。

「ふん、なんだい、あんなの、どうせお芝居じゃないか。ヴィーレ、俺はさ、大きくなって、本物のドラゴンを退治することにするよ。自警団に入ってさ。俺は、本物のドラゴン退治の英雄になってみせるんだ！　それで、ヴィーレにドラゴンの爪をプレゼントするよ！」

村の若者たちの間では、自分が斃したドラゴンの爪を意中の娘に贈るのは、もっとも男らしく立派な求婚の意思表示とみなされていた。ドラゴンの飛来がまだ少なかったこの頃、ドラゴン退治で功績を挙げた者が戦利品として勝ち取るドラゴンの爪は、まさに勇者の証であり、若者たちは、それを恋人に捧げることが出来るような男の中の男にこそ意中の娘の愛を得る資格があると考えていたのだ。

娘たちにとっても、恋人からドラゴンの爪を捧げられることは、ひとかどの勇者の愛を得た証として非常に誇らしいことだった。だから、小さな女の子たちはみな、いつの日かドラゴンの爪を贈ってくれるような勇者を恋人に持つことを夢見ていた。

けれどヴィーレは、優しく笑って、首を横に振った。

「ローイ、あたしは、ドラゴンの爪なんか、いらないわ。そんなものをくれなくても、ただ、ローイがあたしのお婿さんになってくれれば、それでいいの」

「それはもちろん、なるよ！　なるけどさ、でも、そんなの、あた

りまえじゃないか！　俺は、それだけじゃなく、ヴィーレに、何かもっと特別なものをあげたいんだ！」

ヴィーレはくすくす笑った。

「ローイ、去年は、あたしに、大きくなったらお星さまを取ってくれるって言ったわね。春には、大きくなったらシルドライトの指輪をくれるって言ってたし」

ローイは照れくさそうに鼻の頭をこすって笑った。

「あはは、星をあげるって言ったのは、あの時はまだ小さかったからさ。星にはぜったい手が届かないってこと、知らなかったんだ。でも、シルドライトの指輪は、いつかぜったい、本当にあげるよ。それと、ドラゴンの爪も！」

「ううん、あたしはほんとに、特別なものなんか何もいらないわ。ドラゴンの爪なんか持ってこなくても、ローイが怪我をしないで帰ってきてくれれば、それでいいの。ほんとは、ローイにドラゴン退治になんか行かないで欲しい。ドラゴン退治の英雄なんかじゃなくて、ただの、普通のローイがいてくれれば、あたしは、それでいいんだもの。ドラゴン退治なんかしなくても、＜幼な子＞になんかならなくても、ローイはいつだって一番かっこいいわ！」

その言葉に、ローイは少し機嫌を直して、顔を上げた。

「ほんとに？」

「ほんとよ。あたしは、ローイがドラゴン退治の英雄になんかならなくたって、ローイが一番好きよ」

「えへへ。そう？　やっぱり？　やっぱり、どう見たって俺が一番かっこいいもんな！」

「そうよ。それに一番優しいし。ね、元気出して」

ローイは空を見上げるふりをしながら横目でヴィーレを見て、小さな声で言った。

「……ヴィーレがキスしてくれたら、元気が出るよ」

ヴィーレは笑って、ローイの頬に小さなキスを贈った。

ローイは、現金なことに、さっきの仏頂面はどこへやら、たちま

ち満面の笑顔に変わった。
「うん、ヴィーレがいてくれるなら、俺、＜幼な子＞になんか、なれなくてもいいや！　聖劇に出るより、ヴィーレと一緒にお祭りに行く方が、きっと楽しいもん。ヴィーレ、お祭りには、いっしょに行こうね。俺、＜幼な子＞に選ばれなくて良かったよ。選ばれてたら、ヴィーレといっしょに聖劇を見られないところだった！」
「そうね。おかげで、あたしたち、今年もいっしょに聖劇が見られるのね」
「そうさ！　大焚き火にドラゴンを投げ込むところも一緒に見られるよ！」
「去年は面白かったわね！　ばあっと火の粉が上がって……。びっくりしちゃった」
「うん、あれはすごかったよね！　だから今年は豊作だったんだね。火の粉がたくさん上がった年は、麦が良く実るんだってさ」
「ねえ、ローイ、知ってる？　夜中の十二時、新しい年が始まる瞬間に、恋人同士で手をつないで大焚き火の燃え跡を跳び越えると、その二人は、必ず結ばれるって」
「ふうん……。ヴィーレ、お祭りには最後まで居られるの？」
「ううん。お父さんとお母さんが、まだ駄目だって。子供はドラゴンを火にくべるところまでだって」
「そっか。俺も、まだ、最後まではいられないんだ。でも、もっと大きくなったら、真夜中に燃え尽きるまで焚き火を見ていられるよね。そのときは、ヴィーレ、きっといっしょに焚き火を跳び越えようね！」
「うん！」
ヴィーレが、ふと、空を見上げて小さく声をあげた。
「あ、見て。ローイ、雪よ！」
ひらひらと舞い始めた雪が、ヴィーレが差し出した手のひらにとまっては消える。
「ほんとだ！　どうりで寒いと思った！」

「ねえ、ローイ、うちに寄っていかない？　あったかいお茶を飲みましょうよ。お母さんが林檎を焼いてくれるって言ってたわ」
「やった！　行く、行く！　ヴィーレのお母さんの焼き林檎は世界一うまいもんな！」
「焼き菓子もあるわよ。あたしが焼いたの」
昨日、ヴィーレは、粉だらけになってがんばって、はじめて一人で焼き菓子を焼いたのだ。本当は、ローイが＜幼な子＞に選ばれた時のお祝いのために焼いたのだったが、お祝いでなくなったって、ローイが喜んで食べてくれれば、それでいい。
「えっ。ヴィーレが一人で焼いたの？」
「うん！　はじめて自分だけで焼いたのよ」
「へええ。すごいや！」
蜂蜜入りの香草茶から立ち上る香ばしい湯気と、これも蜂蜜をかけた熱々の焼き林檎、それからヴィーレの笑顔のように優しい焼き菓子の甘さを想像しただけで、ローイは、体が内側から暖かくなるような気がした。
きっと、ヴィーレの家の炉辺は、もう、冬至のお祭りのために、緑の冬蔦やいい香りのする針葉樹の小枝で美しく飾りつけてあるだろう。暖炉では、暖かな炎が踊っているだろう……。
想像すると、もう、いてもたってもいられない。
「楽しみだなあ！　早く行こう！」
「うん！」
ローイはヴィーレの手を取って足を速めた。
同い年の二人だが、ローイの方が既に少し背が高く、足も長い。一生懸命の早足でローイと肩を並べながら、ローイの横顔を見上げてヴィーレが話しかける。
「ねえ、ローイ、聖劇を見るときは、大きな声でナークを応援してあげましょうね！」
「うん、そうだね！」
「ねえ、ローイ、ほんとに、大きくなったらいっしょに焚き火を跳

び越えてくれる？」
「もちろんさ！　ねえ、ちょっと、ふたりで手を繋いで跳ぶ練習をしてみようよ！　大きくなったときに、うまく焚き火を跳べるようにさ。それ！」
「えっ、ちょっと待って！　きゃ！」
いきなり跳躍したローイに引っ張られて、体制を崩したヴィーレが小さな悲鳴を上げる。
「駄目だよ、ほら、今度こそ跳ぶよ。ほら！　いち、にの、さん、それ！」
「えいっ！」
今度はヴィーレもうまく跳んだ。
「もう一度跳ぶよ！　いいか、それ、いち、にの、さん！」
「えいっ！」
着地するたびに、ふたりは、顔を見合わせて笑う。頬が赤く染まり、白い息が弾む。
笑いながら繰り返し跳ぶうちに、冷え始めていた身体も温まってきた。
でも、一番暖かいのは、繋いだ手だ。
「ほら、もう一度！」
「えー、まだ跳ぶの？」
「うん、ヴィーレの家まで、跳びながら行くぞ！　だって、そのほうがあったかいもん。そうれ！」
「きゃあ！」
しだいに数を増して舞い落ち始めた雪の中、小さな二人の笑い声が響き渡る。
雪の小道で、ふたりは幾度も跳躍した。繋いだ手を離さずに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9925i/

イルファーラン物語

2011年12月17日10時26分発行